
黒の魔王

菱影代理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の魔王

【Nコード】

N2627T

【作者名】

菱影代理

【あらすじ】

黒乃真央は悪い目つきを気にする男子高校生。彼女はいないがそれなりに友人にも恵まれ平和な高校生活を謳歌していた。しかしある日突然、何の前触れも無く黒乃は所属する文芸部の部室で謎の頭痛に襲われ気絶。次に目覚めた時には……。剣と魔法、モンスターの闊歩するオーソドックスな異世界召喚モノ！

キャラクター紹介（前書き）

最新話までのキャラクターを紹介しています。ただの紹介ページですので、『黒の魔王』を初めて読む方は飛ばしてプロローグからお読み下さい。

基本的にキャラの容姿と登場話、各キャラとの関係などを簡潔に紹介します。また、キャラはそれぞれの大まかな所属ごとに分けております。

多数のキャラが登場する作品なので、話やキャラを整理する一助となれと思います。

キャラクター紹介

黒乃真央

主人公、通称クロノ。日本人。黒髪黒目、鋭い目つきの強面。身長183センチだったが、最近は少し背が伸びた。ライトノベルを書くのが趣味の文芸部員。

黒ローブを纏った全身黒尽くめの黒魔法使い。

妖精リリイと魔女フィオナと、冒険者パーティ『エレメントマスター』を結成。

アルザス防衛戦を生き残り、スパーダへ逃げ延びた。

リリイ

半人半魔の妖精族。白金のロングヘアとエメラルドグリーン瞳の七色に輝く二対の羽を持つ。体全体が白く発光しているので、全裸でも恥かしく無い。

エンシェントビロードの黒いワンピースを装備し、ついに全裸状態ではなくなった。

普段は4，5歳ほどの美少女だが、満月の晩にだけ真の姿である美少女の姿へ戻れる。

『紅水晶球』^{クイーン・ベリル}を使うことで、1日に30分ほど真の姿へ変身する事ができる。意識だけを戻す場合なら、より長時間の維持が可能。

ランク1冒険者パーティ『エレメントマスター』のNO2。

第11話『妖精さんが見える』で登場。

フィオナ・ソレイユ

水色のショートヘアと金色の目を持つ少女。三角帽子とローブと長杖の魔女三点セットを装備。

美味しいものを求めてパンドラの地に行き、ついにアイスキャンデイーと出会う。

魔法の威力を制御できない暴走魔女だが、その火力を買われてリイに引き抜かれる。

ランク1冒険者パーティ『エレメントマスター』のNO3。

第38話『とある魔女の話』で登場。名前は第49話『腹ペコ魔女』で登場。

シモン・フリードリヒ・バルディエル

ランク1の冒険者。ソロで活動する錬金術師。男の娘。スパイダ貴族バルディエル家の養子、末っ子。

灰色の髪と緑の瞳をもつエルフ。まるで成長しない自分の体にコンプレックスを持っている。魔法も武技も使えないが、単独で銃の開発に成功するなど天才的な発明をする。射撃の才能もアルザス防衛戦で発揮された。

第十一使徒ミサの襲撃からただ一人生き残った。

冒険者同盟…スパイダ避難の緊急クエストを遂行するべく結成された冒険者の集団。

第十一使徒ミサの襲撃により全滅した。

ヴァルカン

ランク4の冒険者。『ヴァルカン・パワー』のリーダーを務める戦士。

灰色の毛並みを持つ2メートルを越える大柄な狼獣人。^{ワーウルフ}

『孤狼・ヴォルフガンド』の加護を持つ。

第76話『リーダーの座を賭けて』で登場。

モズルン

ランク4の冒険者。ソロで活動する闇魔術士通称モっさん。^{ダークウィザード}
黒衣を纏った骸骨の風貌を持つ、典型的なスケルトン族。

スース

ランク4の冒険者。ソロで活動する盗賊^{シーフ}通称スーさん。

完全な人間の姿になれる擬態能力を持つスライム。見た目は特徴の無い平凡な顔つきの女性、だが、シモンのために爆乳になった。

『影渡・ハンゾーマ』の加護を持つ。

ミサ襲撃の際には、命を賭してシモンを守りきった。

イリーナ

ランク3の冒険者。『三獵姫』のリーダーを務める射手。

金髪碧眼に線の細い美人と典型的なエルフ族の特徴を持つ。後ろに縛った長い三つ編みヘア。三姉妹の長女。

十字軍…パンドラ大陸を征服すべく結成されたシンクレア共和国の遠征軍。

ジユダス司教

『白の秘蹟』第三研究所の最高責任者。通称、爺^{ジジイ}。推定60歳越え、白髪碧眼で偉そうな白髭。老齡の研究者とは思えない逞しい肉体を誇る。クロノを召喚し改造実験を施した責任者。

第四研究所設立のため、ついにパンドラ大陸へとやって来た。

プロローグで登場。名前は第10話『パンドラ大陸』にて登場。

グレゴリウス司教

『予言者』を名乗る、狡賢い狐のような細目の胡散臭い男。メルセデス枢機卿の命を受け、パンドラ大陸に派遣された増援部隊の指揮官を務める。ノールズの上司にあたる。

加護の一つであるらしい『予言』に従い、第十一使徒ミサを動かしたり、十字軍内部で暗躍していたりする。

リュクロム・ユグノーシス大司教

ロングウェーブの金髪と碧眼の超絶イケメン。アルスの腹心。第十二使徒マリアベルの兄。

十字軍副司令官としてサリエルと共にパンドラ大陸へと渡る。

第36話『十字軍結成』で登場。

マクスウェル司祭長

ヴァージニアにおける教会の代表者。パンドラ大陸の最初の上陸者の一人。初老の男性

で鍛え上げられた巨軀を誇る。サリエルに心酔。

第37話『使徒のカリスマ』で登場。

ノールズ司祭長

ダイダロス西部方面の占領を任務とする軍団の指揮官。

大柄な中年男性、メイスを装備している僧兵^{モンク}。

第74話『イヤな女(1)』で登場。

シスター・シルビア

ノールズの副官。だが、その正体は第八使徒アイ直属の部下。アイには心も体も許している。

赤い髪と抜群のプロポーションを誇る美女。敬語だが口が悪い。

第74話『イヤな女(1)』で登場。

キプロス

キプロス傭兵団の団長。だが、その正体は『白の秘蹟』の研究者。^{ハインドレッドナンバース}実験部隊を率いて魔族の捕獲任務を遂行。

それなりに体格も顔も良い優男だが、だらしない着こなしをしたヤンキー男。跳ねたブラウンのロン気。自称、神サマに愛された男。クロノに喉を食い破られ敗北、その後、リリィに拷問され悲惨な最期を迎える。

エステル

天馬騎士、武技特化。所属する部隊の隊長、副隊長亡き後、その場の勢いで隊長に就任。ブラウンのセミロングに高めの身長とパッと見では凛々しい女騎士に見える。リリイのお陰でロストバージンできました。

フラン

天馬騎士、魔法特化。所属する部隊の隊長、副隊長亡き後、エステルに続き副隊長に就任。部隊最年長のババ——お姉さん。

マティ

天馬騎士、魔法特化。赤毛のサイドテールな部隊最年少の騎士、ロリ。

キャミー・キャシー

天馬騎士、武技特化。日に焼けた肌を持つ双子のギャル姉妹。馬鹿な分をパワーで補うタイプ、ヤル気の無い脳筋。

キルヴァン司祭

イルズ村制圧部隊を率いる青年司祭。金髪碧眼の共和国でよく見られる白人種系の顔立ち。白魔術士。クロノに斬られて死亡。

第58話『欲望の行進』で登場。

コルウス助祭

キルヴァンの副官。武技を習得している剣士。
メテオストライク
リリイの『星墮』によって爆死。

第58話『欲望の行進』で登場。

使徒…白き神より加護を受けた教会が誇る最強の12人。

第一使徒…不明

第二使徒アベル

使徒のまとめ役。男性であるということ以外、詳しい容姿や能力は不明。

第三使徒ミカエル

『聖女』と称される美貌の女性。

スパイロングヘアの金髪に紫色の瞳。純白の修道服を纏うナイスバディなお姉さん。

第四使徒ユダ

性別、年齢、容姿、能力、一切不明の使徒。

第五使徒ヨハネス

テンブルナイツ

『聖堂騎士団』の団長を務める白銀の騎士。

全身を覆う鎧のため、詳しい容姿は不明。

第六使徒…不明

第七使徒サリエル

白髪紅眼のアルビノ少女。施設を脱走するクロノを圧倒的な戦闘力で追い詰めた、クロノにとってのトラウマガール。

クロノと同様の過去をもつらしい。第10話にて、拘束具^{リング}から解放される。

現在は十字軍総司令官を勤め、パンドラ大陸へとやって来た。

第6話『白の秘蹟』で登場。

第八使徒アイ

金髪ツインテールに青い目を持つ美少女。防具は簡素な革の胸当てにグローブとブーツのみ、後は薄手のシャツとミニスカートと町娘同然の貧弱装備。武器はボロい木の長弓^{ロングボウ}。必ずツミキと名づける使い魔をペットとしていつも連れ歩いている。

冒険者に身分を隠して、モンスター退治や悪人を誅して回る放浪の使徒。気まぐれで奔放な性格のままにパンドラ大陸へと渡ってきた。

第九使徒…不明

第十使徒…不明

第十一使徒ミサ

淡い桃色の髪に露出過多な改造法衣を着る17歳の美少女。ティアラなど様々な装飾品で着飾っている。

グレゴリウス司教に依頼され、単身ガラハド山脈へ乗り込み、街道を通る魔族を殺戮した。

第十二使徒マリアベル

リュクロム大司教の弟。ストレートの金髪と碧眼の美少年。

サリエルに密かな思いを寄せているらしい。

シンクレア共和国…アーク大陸の西半分を支配する巨大国家。十字教を国教と定める。

アルス枢機卿

金髪碧眼の30代男性。古代の英雄を象った彫像のような整った

顔立ち。

過去にサリエルと面識があり、かなりの信頼を彼女へ寄せているらしい。

第6話『白の秘蹟』でサリエルと共に登場。

メルセデス枢機卿

ゴルドランの戦いの後、パンドラ大陸へ大々的に増援を送った人物。

ノールズ司祭長、グレゴリウス司教の上司にあたる。

ダイダロス…パンドラ大陸の北東地域を支配する国。

遠雷の月の10日、十字軍により首都陥落。

竜王ガーヴィナル

ダイダロスの王。黒竜の一族。パンドラ大陸の統一を目指す野心家。

ゴルドランの戦いで、サリエルに破れ戦死。

ナハド村長

クウアル村の村長。人間の老人。ミサ襲撃により死亡したとみられる。

ナキム自警団長

クウアル村自警団の団長。村長の息子。メタボ気味。ミサ襲撃を奇跡的に生き延びた。

第6章『避難開始(2)』で登場。

ビーン

アルザス村のギルドマスター。ドワーフの老人。ミサ襲撃により

死亡したとみられる。

イルズ村…ダイダロスの西端に位置する長閑な農村。

十字軍の襲撃により壊滅。以下のキャラもその際に全員死亡。

シオネ村長

イルズ村の村長。エルフの老婆。

グリント

イルズ村の自警団団長。青い鱗のリザードマン。クレイドルの父親。

ヴァーツ

クロノがイルズで出会った第一村人。ゴブリンの農夫。妻と数人の子供に恵まれる。

ニヤレコ

イルズ村冒険者ギルドの自称看板娘。三毛猫柄の猫獣人。ワーキャット

ピーネ

イルズ村冒険者ギルドの職員。ハーピィの女性、ハリーの姉。ニヤレコの先輩でもある。

イルズ・ブレイダー…イルズ村専属の冒険者パーティ。ランク2。

十字軍襲来の際に戦闘し、全員死亡。

ニーノ

イルズ・ブレイダーのリーダー。剣士として前衛を勤める。
ニャレコに熱い思いを寄せる猫獣人の少年。

アテン

イルズ・ブレイダーの紅一点。ラミアの少女。氷属性の魔法を得意とする魔術士。

ハリー

イルズ・ブレイダーのメンバー。頭脳労働と射手を勤める。ハーピイの少年。ピーネの弟。

クレイドル

イルズ・ブレイダーのメンバー。リザードマン。槍を使う戦士としてニーノと共に前衛を勤める。イルズ自警団長のグリントの息子。

日本…クロノの故郷、プロローグのみで登場。

黒乃一家…両親と姉弟の4人家族。

黒乃（母）…黒髪ロングでスーパーモデル体型と若作りなママさん。クロノは母親似である。

黒乃（父）…母と比べて尚、驚きの若さを保つ。短身痩躯で中性的な美少年フェイス。

黒乃真奈（姉）…大学生にも関わらず黒髪ツインテールの無表情系美少女。父親似である。

雑賀陽太

クロノのクラスメイトで友人。フツメンのそこそこオタク。サツ

カー部に所属。

白崎百合子

クロノと同じ文芸部に所属する女子高生。亜麻色の髪の美少女。

キャラクター紹介（後書き）

新しく追加した名前以外にも、すでに書かれているキャラの設定も随時更新していきます。

プロローグ

第一章…白の研究所

プロローグ

そこは純白の空間だった。

四方の壁は継ぎ目の無い白塗り、中央に鎮座する祭壇も雪を固めたように真っ白で、この部屋を満たす光もまた白く輝いていた。

「供物を捧げよ」

どこからとも無く部屋中に響き渡る声。

開け放たれた両開きの扉、その暗い通路の向こうから人の列がやってくる。

白い部屋と同じように、その人々もまた白尽くめであった。

染み一つ無い清潔な白いローブで全身を覆い、顔には白いマスクを被り、素肌を露出している部分が一切無い。

彼らの手には大小の白い箱があり、合計6つの箱が部屋へと運ばれた。

その箱が‘供物’なのか、彼らは手早く箱を所定の位置へと設置し、そのまま部屋を出て行った。

大きな両開きの扉が閉じられると同時に、施錠の音が無音の白い部屋に木霊した。

「準備は整った」

その一連の様子を別室から‘見て’いた男は、満足気に呟いた。彼もまた、箱を設置した者と同じような白いローブを纏っていたが、その顔にマスクは無く、年齢を感じさせる深い皺を刻んだ素顔を晒している。

「始めるぞ」

そう言い放った老人の声に、背後に控えていた白尽くめの男が了承の意を伝える。

The diagram consists of four horizontal rows of curly braces ($\{$ and $\}$). Above each row is a vertical bracket indicating its scope:

- Row 1:** A large left square bracket $[$ spans the first two groups of braces.
- Row 2:** A large right square bracket $]$ spans the last two groups of braces.
- Row 3:** A small left square bracket $[$ spans the first group of braces.
- Row 4:** A small right square bracket $]$ spans the last group of braces.

Each group contains three pairs of curly braces, totaling 12 pairs across all groups.

なのか、白い祭壇に一人の人間が裸で横たわっていた。

黒髪の男、その外見は、老人が語った人物の情報と一致していた。そして、老人は再び、この男の名を告げる。

「彼の名は、黒の魔王」

柔らかい光を瞼の裏から感じ、頭の中にぼんやりとした意識が灯る。

頭は深い眠りの淵に陥っていたことを思い出し、体は温かい布団に包まれていることに気づく。

起きようかなと思いはするものの、魔性の温もりを宿すベッドから抜け出すには中々踏ん切りがつかない。

も、もう少しこのままでも……あと5分くらいは……

「起きろお！」

怒声と同時に俺の体は残酷な寒気に容赦なく晒される。

あまりに突然の刺激、たまらず飛び起きた。

「うおおお！　なんだ敵襲かつ!?」

「アンタは何と戦ってたんだ」

冷ややかな声を聞くと共に、視界に入ってくるのは世界で最も見慣れているであろう顔。それを認識した時には、脳内に煙るぼんやりとした睡魔は瞬間的に駆逐。

さらば夢の世界、おはよう現実。

少しばかり散らかった自室、布団が剥ぎ取られたベッドへ体を横たえる俺の前に立つのは一人の女性。

艶やかな長い黒髪、染み一つ無い白い肌、整った輪郭に高い鼻、一文字に引き結んだ瑞々しい唇とキリリとつり上がった細い眉が少々お怒りの様子を感じさせる。

その凛々しくも鋭い目つきを見て、恐ろしいと思うか美しいと思うかは好みの分かれるところだろうが、どちらにせよ十二分に整っ

た顔立ちであることは肯定されるに違い無い。

その美貌に加え、体は180センチに届かんばかりの長身。

すらりと伸びた長い足にくびれた腰のライン、だが胸はその身に纏うエプロンを下から大きく押し上げ圧倒的な存在感を主張している。そんなモデルとグラビアアイドルのいいところ取りみたいな抜群のスタイルは、重度のロリコンかホモか不能でもない限り必ず男の目を惹く。

だがどれだけ綺麗でイイ体をしていようが俺の心の琴線エロスに触れることは無い、なぜなら、

「おはよう、母さん」

彼女は俺の実際の母親なのだから。

「おはよう、さっさと起きな、もうみんなテーブルについてんだから」

それだけ言って、母さんは部屋から出て行った、扉開けっ放しで。

「ドアは閉めてってくれよ……寒い」

手元の時計を見ると、時間は6時50分。

朝練があるわけでもない高校生としては、起床するには十分早い時間と言えるのではないだろうか。

兎も角一度起こされてしまった手前、二度寝をするにはいかない。

「んー、起きて準備でもすっかあ」

こうして今日も俺、黒乃真央の代わり映えの無い平和な1日が始まる。

高校生の証たる学ランに着替え、二階の自室を後にする。

一階の洗面所で洗顔、歯磨きと一通り朝の身だしなみを整えた後、リビングで朝食をとる。

母の言っていた通り、食卓テーブルにはすでに二つの小さな影が席へと着いていた。

「おはよう」

声をかけると、二人は俺の存在に気づき振り返る。

「おはよう」

一人は父親。

今でも30代で通じる若さを保ち、十分美人の部類に入る母を見ると友人知人は驚くが、この父の容姿はそれのさらに上を行く。

恐らく20代と言っても全く疑われることは無いだろう若々しさ、それに加えて160センチに満たない小柄な身長と童顔のお陰で、最早中年というより少年だ。

この父の体は一体どうなっているのだろうか、体が衰えを知らないどころか時間が止まっているんじゃないかと思えるほど。

恐らく高校を卒業する頃には、この父親と並べば確実に俺の方が年上に見えるようになるだろう。

ちなみに俺はこの中性的で短身痩躯の父親とは全くかけ離れた、母親似の容姿だ。

母の長身と鋭い目は見事俺へと受け継がれ、身長183センチにして凶悪な目つきを持つ鬼のような恐ろしい形相となっている。

背が高いのは良いが、顔は父親似の中性的な美少年フェイスにならないかったことが悔やまれてならない。

この凶悪面のお陰で何もしてないのにどれだけ周囲の人に怖がられてきたことか……

「おはよう、真央」

食卓テーブルに座るもう一人は俺の姉貴、真奈。

姉貴は俺とは真逆に父親似でそれはもう可愛らしい、小さく、可憐で、儂げな、守ってあげたくなるタイプの美少女である。

もう大学生なのに黒髪ツインテールという乙女なヘアスタイルが似合う素敵な姉貴だ。

「今日も弁当作ったの？」

「ん……うん」

仄かに頬を赤く染めて小さく応える姿は、我が姉ながらグっとくるものがあるね。

ただその小さな胸のうちに秘めた好意が向けられているのは俺では無く、最近出来た彼氏へのものだ。

父と同じくほとんど無表情のポーカークフェイスな姉貴が分かりやすく表情を変化させるのは、この初めて出来た彼氏に関わることにくらしい。

まあそれだけ幸せなんだろう、もっとも恋人関係なんてのは俺には未だ無縁な話。

いいさ、これから俺にも彼女が出来る日が来るだろう、たぶん、きっと、恐らく、出来たら良いな。

一抹の不安が胸をよぎりつつ、用意されていたご飯と味噌汁＋αのおかずをさっさ片付けて席を立つ。

「もう行くの？」

姉貴の問いかけに、俺はコートを羽織ながら応える。

「雨降ってるから、今日はバスで行く」

「そう、バス亭遠いもんね」

去年まで同じ高校に通っていた姉は、家からバス通学するにはそれなりの時間がかかることをよくよく知っている。

自転車に乗ればもう少し遅く出ても十分間に合うんだが、ここまで勢い良く雨に降られてしまっただけで諦めざるを得ない。

「ほら弁当、忘れるなよ」

「ん、ありがと」

母から弁当を受け取り、鞆に引っくり返らないよう入れてから玄関に向かう。

「いってきます」

家族3人の声に送られて、俺は未だ肌寒さの残る外へと一步を踏み出した。

高校前のバス亭で降りるが、そこから一つ信号を渡らなければ校舎へはたどり着かない。

開いた傘に大きな雨粒を受けながら、俺と同じくバスで降りた何人もの通学生徒達と肩を並べて十字路の信号が青に変わるのを待つ。他にも徒歩で通学する生徒達が中々変わらない赤信号に足止めされ、どんどん人口密度が上がってゆく。

そんな中で、俺は一人の女子生徒の存在に気がついた。小柄で華奢な体の所為か、手にする濃紺の傘がやけに大きく感じる。

多くの生徒達の中で小さな彼女は埋もれてしまいそうにも見えるが、その特徴的な亜麻色の長髪が一際目立ち、確かな存在感を主張している。

隣には恐らくクラスメイトだろうと思しき女子生徒が一人、仲良く会話をしている彼女達を遮ってまで声をかけるのは戸惑われたのだが、

「あ」

「ん」

ふとした瞬間に目があう。

長い睫毛で縁取られた愛らしい円らかな瞳は、それだけで男の庇護欲を殊更に掻き立てる魔性の目だ。

シャープな輪郭に染み一つ無い真白の肌、すっと通った鼻梁と小さくも瑞々しい唇、顔のパーツはどこにも美を損なう欠点が見つけられない。

サラサラと流れるような亜麻色のロングヘアに、細身ながらしつかりと女性らしいボディラインを描く体、それを包むセーラー服は清楚の一言を感じさせる。

およそ人が思い描く理想の美少女、その一つを体現したといえるほど文句のつけようが無い美貌を持つ女子生徒。

視線が合いそのまま知らないふりは出来ないと思ったのは、彼女がそんなパーフェクト美少女だからでは無い、もっと単純に知り合いだからである。

「おはよう白崎さん」

俺は意を決して、同学年の文芸部仲間である白崎百合子へ挨拶をすることにした。

「あっ、お、おはよう黒乃くん……」

人数の少ない文芸部、勿論俺と彼女は面識もあるし何度も会話したこともある、だが関係としては知人以上友達未満といったところか。

だから挨拶する以上に彼女とこの場で話すことはもう無い、礼儀は十分通したし、後はこのまま隣で俺へ訝しげな視線を向けるお友達との談笑に戻ってくればそれで良い。

だが、

「……」

何かあるのか、白崎さんは俺の正面に立ったまま動かない。

しかしながら何か言うわけでもなく、無言の緊張感が俺と彼女の間を流れる。

結果、30センチ近い身長差によって俺が自然と白崎さんを見下ろすような格好となってしまうている。

もしかすれば、俺が白崎さんを詰問しているように周りからは見えてないだろうか。

「あ、あの、今日――」

「行こっ、百合子！」

白崎さんが何か言いかけたような気がしたが、彼女の友人が腕を引いていつの間にか青に変わっていた信号を渡って、歩き始める生徒達の流れに消えていった。

「……何だ、今日の部活で何かあるのか？」

プライベートな話題を白崎さんがわざわざ俺へ話す可能性は無い、あるとすれば部活関係、実は今日活動休止だとか？

「まあいいか、行けば分かるだろう」

しかし、白崎さんの友達に物凄い敵意の籠った視線を投げかけられて、俺のガラスのハートにちょっとばかりヒビがはいったぞ。

いや、それ以前に白崎さん本人がほとんど俺と目を合わせること

もなく、ぎこちない挨拶しかなかった時点で薄々感づいてはいたことなのだが、

「やっぱ俺、嫌われてんのかな……」

授業は退屈、と言い切れるほどつまらないわけではないと俺は思う。

勉強もそれなりに理解が追いつけば、授業内容が頭に入ってこないこともないし、あるいは何かしらその学問に楽しみすら見出すことができるかもしれない。

それでも疲れが溜まっている時などは、教師の口から発する音声 が全て催眠音波にしか聞こえなくなるようなこともあるが。

「なー黒乃、ノート貸してくれよ」

ただ、今回の場合は俺では無く友人が居眠り担当だった。

「いいけど、4時間目まで連続で寝るのは流石にどうかと思うぞ」
半ば呆れた口調で古文の板書が正確に写し書きされたノートを手渡す。

「サンキューな！ でも昨日うっかり徹夜しちゃったから寝るのは仕方無いっつーか、当然っつーか」

悪びれもせずにあははと笑うこの男子生徒は、俺の数少ない友人の一人、雑賀陽太。

4時間目が終了し今は昼休み、俺は机を後ろの雑賀の席とくっつけてランチタイムに入る。

「で、昨日の晩で終わったのか？」

「いやーこれが中々個別ルートに入るのが難しくてさあ、ただ好感度上げればいいだけかと思いきや、一旦他のヒロインの好感度を上げて嫉妬させないといけないらしくてな——」

雑賀の会話の一端を聞いて、彼が何を言っているのか分かる人には分かるだろう。

要するに、18歳未満はプレイしてはいけない建前の恋愛シミュ

レーションゲームの攻略の話をしているのだ。

「——うん、まあそんなこんなで時間がかかったワケよ、中断して深夜アニメをリアルタイムで見た所為もあるけど、あれで一時間は消費したからな」

雑賀は中肉中背で眼鏡もかけていないので如何にもオタクという風貌はしていないが、中身は話を聞いての通りだ。

オタクレベルは重度と呼べるほどではないが、にわかともライトとも言えない、それなりに嗜んではいるといった感じ。

かく言う俺も雑賀ほどではないが十分オタクの範疇に分類されるが。

俺が文芸部で執筆活動しているジャンルは純文学でもミステリーでもなく、所謂ライトノベルだし。

「深夜アニメは録画で十分なんじゃないか？」

「いや、アニメはやっぱりリアルタイムで見なきゃダメだね、実況も盛り上がる！」

そーかい、と適当に相槌しながら弁当を取り出す。

「あつ、つーかよ、朝聞きそびれたんだが、お前今日白崎さんと一緒に登校してたよな？」

「いや、別にそういうんじゃない」

「いって黒乃、そういう鈍感キャラの演出は」

何が演出か、俺は日々キャラ作りに勤しんでるようなセコい男ではないぞ。

「俺は二人が信号の前で見つめ合ってるシーンをしっかり目撃しちまったからな、あーあー羨ましいね、エロゲならイベントCG出るレベル、俺もああいうイベントシーンをリアル体験したいぜー！」

「落착けよ、俺と白崎さんは部活が同じなだけで、エロゲのシナリオが成立するような間柄ではないぞ」

「そおーかあ？」

何だその心の底から信じてない疑惑の目線は、お前の背後に黒い渦巻きのエフェクトが幻視できるほどのオーバリアクションだ。

「主人公ってヤツはなあ、みんなそう言うんだよ！俺は普通の高校生、モテない、あの娘とはそんな関係じゃない——どう見てもヒロイン好意100%じゃねえか！」

「だから落ち着けて、現実と空想を一緒にすんな。

一応言っておくが、白崎さんとは子供の頃仲が良かった幼馴染だったとか、大事な約束をしたとか、付き合ってるわけでもないのに律儀に朝起こしにしてくれるとか、クラス違うのに一緒に屋上で昼食とか、そういうソレらしいイベントは皆無だからな」

「黙らっしゃい、白崎さんレベルの美少女と朝の登校シーンで2ショットになること事態がそもそも美味しすぎるシチュエーションだろうが！

それで何も思わないって、お前それは男としてどうなのよ？普通の男子高校生は女の子と接点なんか1つもありはしません！」

「そ、それは……」

言われて見ればそうなのかもしれない。

例えばビビられようが嫌われようが、誰もが認めるところの美少女高校生である白崎さんと朝に挨拶ができるというだけで、すでに恵まれているのかもしれない。

俺だって文芸部に所属していなければ、他に女子との接点など皆無、クラスメイトの名前なんてうろ覚えもいいとこだし、挨拶の一つも満足にした覚えも無い。

「いや待てよ、そういう雑賀だって別に一切女子と話せないわけじゃないだろ。

お前サッカー部なんだし、あの可愛らしい女子マネージャーと雑談くらいするんじゃないのか？」

「馬鹿ヤロウ！彼女はすでにキャプテンと交際中だ！しかも高校に入っただけで三人目の彼氏い！いやあー女子のリアルな恋愛話なんて聞きたく無いいい！！」

「なんだよワガママなヤツだな、可愛ければいいんじゃないのかよ？」

「バーロー！ 寝取り寝取られするような女なんてヒロインじゃないのお！ そーいうのは鬼畜な方のエロゲと昼ドラだけでしか存在が許されないのお！！」

「分かった分かった、お前の言わんとしているところは十分分かってるから落ち着け、とりあえず大人しく椅子に座るところから始めよう、な？」

ふうー仕方ねえ、といった表情でどっかりと自分の椅子へ腰をおろす雑賀。

あのままヒートアップを続けていたらイヤな意味でクラスメイトの注目の的になっていたことだろう。

「ん、というか彼氏のいる女の子がNGだってんなら白崎さんも除外だろう」

「あれ、そうなのか？」

俺は頬杖をついてやや遠い目をしながら、窓の外を見つめながら雑賀に語ってやる。

「白崎さんはな、俺みたいな男相手でもイヤな顔せず接してくれる良い娘だぞ」

まあ目は合わせてくれないが、露骨に避けられていないだけマシということだ。

「お前顔は怖いもんな、デカいし」

「その通りだ、でもちょっと気にしてることだからそれ以上は言わないでくれ」

「OK、それで？」

「それでだ、そんな白崎さんの周囲に男の影が無いと思うか？」

当たり前の事だ、俺にだけ優しくしてくれるなんて都合の良い展開ある分けない、いや、そもそも彼女が真に優しい良い娘だと言うのであれば、その善意を特定の個人のみに送るわけが無い。

「んー、確かに白崎さんと何かいろんなタイプのイケメンが話してるの見たことあるな」

「そう、俺なんて声をかけてもらえる知人の中の一人でしかないっ

てことだ、もつと仲良さそうなヤツなんて両手で数え切れんほどのぞ」

「あーあ、そーだよなー所詮リアルなんてこんなもんですよねえー、美少女だったって人間なんだし、周りに良い男がいればデキんのが当然だよなー」

「そういうことだ、白崎さんならとつくに彼氏の一人や二人いるのが自然――」

「いないよ」

俺の台詞を遮ったのは、雑賀ではない、というかコイツがこんな可愛い声でいきなり出すような友達やっていける自信が無い。いやいやそうじゃない、この声って、もしかなくても……

「私、彼氏なんていないよ」

「し、白崎さん……」

何故ここに、よりによってこんなタイミングで出てくるんだ？

俺さっき言ったよな、昼休みに一緒に屋上で昼食とるような間柄じゃないって、隣のクラスからわざわざ俺んとこまでやって来たのなんて初めてだぞ。

つか、何で俺は今こんなに後ろめたい気持ちになってんだ、心臓バクバクいってるし、ああ、顔からじんわりと冷や汗が流れるのはつきり感じられる。

待て、落ち着け俺、別に白崎さんをデイスるようなコトは何一つ言っていないはずだ！

「いや、なんか……ごめん、勝手な事言っただが俺は謝ってしまっていた。」

うん、まあそうだな、他人の男女関係を勝手な憶測で話すのは決して上品な話ではないしな、本人に聞かれたとなっちゃ謝るより他はないだろこれは。

「あ、別に怒ってるわけじゃないの、ごめんなさい」

「あ、うん、そっか、ならいいんだけど……」

いやいや良くは無いだろこの雰囲気は絶対、雑賀などすでに石像

となって完全に我関せずの体勢を貫いている。

どうやら激怒、とまではいつてないようだが、快く思っていないだろうことは何となく感じ取れる。

ただ、本人がああ言った以上はここで話を打ち切るより他は無い。

「えーと、それで、何か用あった？」

「うん、その、朝に言いそびれちゃったから」

とりあえず、登場の時から変わらず俯き加減で表情の良く見えな
い白崎さんの心中を推し量ることは止めて、会話の内容にだけ集中
しよう。

彼女の言葉を聞けば、やはり朝に何かしら連絡事項があったとい
うことだ。

「今日の部活、大事なミーティングがあるから……絶対、来てね」

「ミーティング？ そうなんだ、分かった」

昨日は解散の時にそんな話は全然聞かなかったが……まあ、こう
してわざわざ連絡してくれるってことは急遽やらなきゃならん事情
があるのだろう。

結局のところ今日部活に出るという予定になんら変更は無い。

「うん、それじゃあ……待ってるから」

「ああ、態々ありがと」

こうして短い上に事務的な会話を終え、白崎さんは足早に教室か
ら去っていった。

会話が短いのも事務的な話なのもいつものことだが。

「いやー美少女って妙に迫力あるよね！」

さっきまでだんまりを決め込んでいた薄情な友人が息を吹き返す。
「雑賀、お前もうちょっとこう、何かフォローしてくれても良かった
んじゃないの？」

「いやいや無理でしょ、そもそも俺面識ねーし。

でも八方丸く治まったみたいで良かったな！」

治まったっていうのかアレ？ 絶対に俺の好感度だだ下がりにな
っただけだぞ。

「つーか、白崎さん彼氏いないってさ、良かったな黒乃！ チャンスあるぜ！！」

「あ、またその話に戻るのね」

「やっぱ高校生活といえど恋愛イベントでしょ！」

「リアルはイヤなんじゃなかったのかよ」

「よし、何か俺もヤル気出てきたわ、おい黒乃、今度白崎さんを紹介しろよ！」

「お前は俺を応援してんのか、自分が付き合いたいのか、どっちなんだよ」

ただこれだけは言える、今の顔見知りレベルの関係で、友人を紹介できるほど俺のコミュニケーションレベルは高くない、つまり白崎さんに雑賀を紹介するのは俺のステータス上不可能ということだ。

「それより弁当、早く食べようぜ」

「それもそうだな、昼休み時間短けーし、あーあ、もっと休み時間2時間くらいになんねーかなー」

俺が白崎さんと緊迫感溢れる会話中も机の上に放置だった弁当箱へ手をかける。

蓋を外せば、そこにはオカン特製のあまり手間の掛からない類の料理達が待っているはずなのだが、

「なんだ、コレ……」

白いご飯の上に謎の桃色フレークによって描かれている大きなハートマークが目飛び込んでくる。

「え、あれ、なに黒乃の弁当！？ こんなあからさまな愛情弁当ゲームでしか見たことねーぞ！？」

「あ、そうか――」

弁当を食する相手への一途な愛しか感じられないこの一品、これは断じて母が俺に向けたものでは無い。

「母さん、俺の弁当間違えたな……」

これは間違いなく、姉貴が彼氏へ作った手作り弁当だ。

なんと不幸な行き違いか、きっと今頃姉貴の彼氏さんは母の作っ

たそっけない弁当をつつくことになっていることだろう。

「うおーすげー！ ハートだよハート、あはは！ すっげー！！」

俺は無駄にテンション上がってる友人を気にしない事にして、複雑な心境で姉貴の手作り弁当を食べることにした。

しかし姉貴よ、これはちよつと、愛が重いんじゃないだろうか。

気合の入った弁当を完食し、残された2時間分の授業を乗り越え放課後。

つつがなく掃除当番を終えた俺は教室を出て、真っ直ぐ文芸部の部室へと向かう。

教室と同じつくりの引き戸をガラガラ開けて、すでに見慣れた部室へと足を踏み入れる。

「あれ」

思わず間拔けな声をあげてしまう、なぜなら部室にはたったの一人しかいないからだ。

文芸部は人数の少ない部だし、幽霊部員もいるが、ミーティングがあると連絡までしてあるのにも関わらず、掃除当番でやや遅れた俺が到着した時点で一人しか集まっていないというのはおかしい。すでに部長はじめ先輩方が何人かいつものように雑談しつつダラダラ待っている光景を想像したのがあっさりと裏切られる。

さらに言うなら、その唯一集まっている部員が白崎さんだということも予想していなかった。

扉から背中向きに座っていても、その特徴的な亜麻色の髪ですぐ判別がつく。

「あ、黒乃くん」

「白崎さん一人なんだ」

「ん、うん……」

はい、会話終了。

俺には可愛らしくも能面のように変化の無い彼女に対してそれ以

上続ける言葉を持てなかった。

何かもつと話を続けるべきなのかどうなのか、悩みつつ適当な席に腰を下ろす。

頭では色々考えるものの、実際に口から出る言葉は一つも無く、また彼女からも声は無い。

白崎さんの手には可愛らしいカバーのかかった文庫本、俺もそれにならって読書で時間を潰そうと鞆から自作のライトノベルを取り出す。

A4のコピー用紙を束ねた手作り感丸出しの冊子には『勇者アベルの伝説』というイマドキRPGでもお目にかかれないストレータなタイトルが表記されている。

これは俺が中学生の頃に初めて書いた物語で、まあ内容はタイトル通り勇者のアベル君が魔王を倒しにいくという、なんの捻りもオリジナリティも無い、その上文章力も拙いと、素人作品もいいところだが、それでもちゃんと完結させた思い出の一作である。

今日は久しぶりに読み返してみようかな、とか、続編でも書いてみようかな、とか色々な思惑があって持ってきたのだが……

ほぼ無音、部屋にはグラウンドから響いてくる運動系の部活の掛け声と、俺と白崎さんのそれぞれ持つ本がページを擦る音のみ。

ちよっと気まずい雰囲気、俺はさきほど開いたばかりのラノベの文章がほとんど頭に入ってこない。

なんだ、なんで誰も来ないんだ？ ミーティングがあるんじゃないのか？ 誰でも良いから早く来ないものか、昼休みの件もあったのか？ だって正直白崎さんと二人きりは気まずいし間が持たない。

ああ、そもそも白崎さんと二人だけになったことなんて一度も無かったつけ、いつも誰かしらを間に挟んでの会話だったからな。

いやしかし、このまま無言でい続けるのは何だか苦しいな、ここは多少無茶でも何か話をふるべきじゃないだろうか。

そうさ、俺と白崎さんは同じ文芸部同士、多少ジャンルは違えど本という共通の話題がある、やってやれないことはない。

それにどうせもうすぐ部長以下文芸部メンバーが喧しく部室に飛び込んでくるに違い無い、それまでの僅かな時間を会話で繋げばいいだけ、よし、やるぞ――

「あの」

ぐっ、声が被った！

「あっ、ごめん」

「ん……」

気まずい、さっきまでお互い無言だったのに声を挙げれば同時とは。

「先に言って――」

「あ、いいの、黒乃くんから、話して」

と、促されるものの、こっちとしては大した話題があるわけじゃない。

「いや、えーと、みんな遅いなー、と思って」

途轍もなく当たり障りの無い内容、かえって自分が酷くつまらない人間に思えてならない。

「あ、うん、そうだね、私も……」

が、まあ白崎さんも同じような事を言おうとしていたようだし――
「……ううん、違う、違うの」

「ん？」

「本当はね、そんなことを言いたかったんじゃないの」

何やら先ほどの物静かな態度に変化が見える。

違う、っことは別に何か言いたいことが俺にあるってことか？

「あの、あのね――」

意を決したように白崎さんは勢い良く席を立つ。

立ち上がった白崎さんは、いつも俯き決して俺と合わそうとしな
い目を、今ははっきりと両目で見据える。

その愛らしい円らかな瞳には、覚悟と形容できるような力強い色彩
が宿っている。

彼女の突然の豹変ぶりに若干驚くが、勤めて平静を装う。

「嘘、なの……」

「え、なにが？」

「ミーティングある、って言ったの、あれね、嘘なの」

何を言っているのか、意味は分かるが意図がまるで分からない、頭の中はハテナマークで溢れんばかりだ。

「あ、そうなんだ」

そうとしか言えない、別に怒るような嘘じゃないワケだし、そもそも理由がまるで見当がつかないのだ、今は話を先に進めるより他は無い。

「うん、それでね、その……」

「……」

思ったよりも長い沈黙、話が進まない。

だが、今の白崎さんに声をかけてはいけない気がする、ここは黙って待ちの一手。

「その、わ、私——」

そして、ついに彼女は言った、

「黒乃くんのこと——!!」

そう、確かに白崎さんは言ったはずだった。

「……?」

だが、聞こえない、白崎さんの声も、外から聞こえてくるはずの音も、何も聞こえはしない。

なんで、どうして何も聞こえないんだ？　いきなり鼓膜でも破れたってのか？

「——っ!?!」

音の無い世界で、突如として俺の頭に鋭い痛みが走る。

これまで頭痛に襲われた経験など風邪と共に何度かあるが、これほど酷いのは初めて、いや、そもそも痛みの質そのものが異なる。

これは、ただの頭痛なんかじゃない、もっと、命を脅かすほど、致命的な——

「!?!」

視界が反転する、体に走る衝撃と痛み。

何秒かした後、自分が椅子から転げ落ちたのだと理解する。

変わらぬどころか1秒ごとにどんどん酷くなってくる頭痛の所為で、床に伏せったまま起き上がることが出来ない。

俺に許されるのは、ただ頭を抱えてもがくことだけ。

あまりの苦痛に声をあげているのかもしれないが、それは自分の耳で聞くことは出来ない。

「—————！」

目の端に涙を浮かべ、見たことの無い必死な形相で俺へすがりつく白崎さんの姿が目に入る。

痛みを訴えるより、救急車を望むより、俺の所為で彼女にこんな悲痛な顔をさせてしまっていることの方が気になってしまった。

視界に映る彼女の泣き顔、その光景に少しずつ黒い砂のような何かがちらつくようになる。

ヤバいな、とうとう視覚までおかしくなってきた様だ。

その黒いものはすぐに砂嵐のように視界を覆い、目の前にあるはずの涙を流しても尚美しい彼女の顔を掻き消してゆく。

何も聞こえない、何も見えない、気づけば床に寝転がる感触も感じない、すでに呼吸さえできているかどうか判別がつかない。

確かなのは、頭の中を徹底的に蹂躪する痛みだけ。

死ぬのか、俺——

五感を閉ざされた完全なる闇の中、俺はついに自分の意識さえ認識できなくなる。

死ぬのは、イヤだ——

それが、最後の思考だった。

プロローグ（後書き）

初めまして、菱影代理です。異世界召喚モノとしては、特に突飛な展開もないプロローグとなっておりますね。地味な始まりですが、これからも読んでいただければ幸いです。ご感想、ご意見、誤字脱字報告、お待ちしております。

2011年 10月11日

話の一部を加筆修正しました。

第1話 最初の目覚め

ふと、目が覚めると部屋の中は暗かった。

何だ、まだ夜中なのか？

別に悪夢を見たとか、そんなんじゃないんだが。

まあいい、まだ夜だって言うならもう一度眠ろう、明日も学校だ。
と、そこまで思い至った時点で、自身の身に違和感を覚えた。

何だか、やけに体が痛い。

違うな、俺の寝ているベッドが固くて、それで随所に痛みを感じているのだ。

こんな所で眠れるわけが無い、何なんだ俺は、ヤバい寝相をとってベッドから落ちたって言うのかよ、そんな経験生まれてこの方一度もねーぞ……

兎も角、ベッドに戻ろうと思い、体を起こ——動かなかった。

気づけば、俺の体は指先がピクリとも動かないほど完全に麻痺しているのだ。

これが俗に言う金縛りってヤツか？

初めての経験だが、せめてベッドで寝ている状態で引き起こって欲しかった。

体は動かないくせに、硬い床の感触だけは変わらず伝わってくるのだから。

どうしたものか、と軽く途方にくれていると、この暗闇に目が慣れてきたのか、少しずつ周囲が明らかになった。

……何処だ、ここ？

そこで初めて気がついた、俺は自分の部屋で寝ていたのではなかったということに。

未だ金縛り状態で、首も動かないが、目だけは動くので、その範囲内で周囲を見渡す。

そこは何も無い無機質な部屋だった。

多分、俺が寝ているのは部屋の中心にある台のようなもので、これ以外に6畳ほどの広さのこの部屋には、一切の物が存在していなかった。

そして見える範囲に扉は確認できない。

もしかしたら、俺は一切隙間の無いこの空間に閉じ込められているのかも、なんて空恐ろしい想像が脳裏をよぎる。

何だよ、マジで何処なんだよここは、どうして俺がこんな状況に陥ってるんだよ。

悪い夢だ、と思おうにも、すでに意識もはつきりし、未だに動かないが体の感覚もあり、これが現実での出来事であることを疑えない。

そ、そうだ少し思い出してきたぞ——俺は、自分の部屋で寝ていたんじゃないくて、確か学校、そう、放課後で部室にいたはずだ。

俺はこのデカイ体と目つきの悪い顔に似合わず文芸部に所属している。

そんなに部員数も多くない文芸部室で、今日も大好きな中二要素全開のライトなノベルでも執筆しようかと意気込んで、いや違うな、あん時は白崎さんと二人きりで気まずい雰囲気だったはず。

そんな中、いきなり頭痛がして……そのまま気絶した、んだと思う。

何となく、突然の頭痛に頭を抑えて、思わず椅子から転げ落ちた時の記憶がおぼろげに蘇る。

あんなオーバーリアクションで苦しんだんだ、目の前にいた白崎さんにいらん心配かけてしまったな、つーか、この事は家に連絡とかちゃんと言ってんのか。

それよりも、俺が部室で気絶をしたというのなら、ここは病院か？いや、病人をこんな硬い台座に乗せるなんて、野戦病院だってそんな処置はしないだろう。

なら死んだと思われて霊安室送り？

死体でもマットの上に寝かせるもんだろ、つーか、発想が飛躍し

すぎたな、そんなことあるわけ無い。

いや、でもあるわけ無い、なんてのは正に今の俺の状況そのものであって、一体どういう経緯があればこんな所に寝かせられてるってんだ？

もしかして、何者かに誘拐されたとか？

勿論、俺の家族は何処にでもある一般家庭で、親父は公務員だし母親は専業主婦、実は財閥の御曹司だとか、一国の王子様だったとか、そんな出生の秘密など全く無い、非凡なのは両親の容姿だけだ。でも、何かの手違いで――なんて、取り留めの無い思考は突然停止する。

うおっ、眩しっ！！

いきなり部屋に光が満ちた。

急激な明暗の変化に、俺の目は一時的にその機能を止める。

しかし、数十秒もすれば明るさにも慣れてくるのだが、この部屋に起こった変化はそれだけでは無かった。

人の気配を感じる。

気配なんて曖昧なものだけで無く、固い床を靴底が叩いて響かせる足音が耳に届く。

誰か来た、という事実は、俺が完全に密閉された空間に閉じ込められていたわけではないことを示していた。

しかし、そんな安堵も一瞬で吹き飛ぶ。

俺の視界に飛び込んできた人物、その格好があまりに突飛だったからだ。

白いマントのようなものを纏い、頭もフードで覆われている。

それだけなら、まだマシだった。

白いマスクを被っている、これを見ただけで、俺の警戒心は途端にMAXまで跳ね上がる。

ガスマスクでは無く、オペラ座の怪人がつけているようなシンプルながら顔全面を覆う変態的なデザインのマスクである。

なんだ、コイツラ、絶対ヤバイ連中だ。

そのリングの内側から、突然細い針が飛び出した。

その数7本、カシュン、と音を立てて一瞬で出るのを俺は確かに見た。

危ねえな、と思うが、同時にイヤな予感しかなかった。

出たときと同じように、一瞬で針を収納し、再びただのリングに戻る。

そして、リングを持つマスクは、それを、そのまま俺の頭の方へ

――
お、おい、待て、待てよ、そんな針が飛び出る危ないもんを人の頭に載せるんじゃないやね、やめろ、やめろおお!!!

体も動かず、声も出ない俺には、忙しなく目を動かし、全身から汗を噴出す以外の反応は一切出来なかった。

マスクは、何のためらいもなく、慣れた手つきでリングを俺の頭へと嵌める。

やめろ、やめろよマジで。

今あの針が飛び出したら、俺の頭はどうなんだよ。

あの長さだったら、間違いなく脳に達する、それも7本も。

死ぬ、絶対に死ぬ。

突然降りかかった死の恐怖、けれど、俺には一切抵抗することも出来ず、無様に泣き叫んで震えることも許されなかった。

時間にすればものの数秒で、リングは俺の頭に設置された。

やめろ、やめてくれ――

言葉は出ず、無慈悲にも俺の頭の上でカシュン、という音が響いたのを聞いた。

それを最後に、俺は意識を失った。

第2話 服従

「……生きてる」

ぼんやりした意識の中で、そう呟いた。

目覚めると、またしても俺は固いところに身を横たえていた。すぐに、意識を失う前の記憶がフラッシュバックする。

「ぐっ……」

吐きそうになるが、堪える。

どうやら、金縛りはとけ、こうして苦しげに声を漏らすことが出来るし、どうにか体を起こすことも出来る。

頭に手をやると、硬質な感触が指に触れる。

間違いない、あの針の飛び出す凶悪なリングは、今も俺の頭部にしっかりと装着されたままだ。

「くそう……最悪の気分だ……」

痛みは感じないだけマシだが、あんな拷問まがいの事を突然受けたのだ、恨み言の一つも出るといふものだ。

けれど、今はこうして体の自由も戻ってきたのだ、まずは状況を確認しなければならぬ。

今の俺は、さっき寝かされていたのと同じような広さの何も無い部屋に居る。

中央に台座も無い、本当に壁しかない、四方も天井も真っ白い部屋だ。

正面には、壁と同じように白塗りの扉があるが、果たして開くのかどうか、多分施錠されているだろう。

全く、窓の一つも無いと気分が滅入る、ん、窓が無いってことは地下室なのか？

俺を閉じ込めておく牢屋だと考えたら、まあ妥当な配置だろう。そして、俺の服装は、あのマスク共と同じような白い服装だ。

マントとマスクはないが、随分と質素な上下一体の服、貫頭衣と

かいうヤツか、ソレを着ている。

一応下着も穿いている。

囚人服、なんだろうか、いや別に刑務所に入ったってワケじゃないんだが。

しかし、コレだけ見ても、どうにも俺の居る場所が日本だとは思えない。

謎の外国語をマスク共は喋っていたし、この服だっておかしい、イマドキ発展途上国の国民だって洋服を着ているのだ、こんな手作り感丸出しの衣服は逆に珍しい。

いや、待てよ、あいつらが超ヤバイ教義を持つ邪悪な宗教団体の一員なのだとすれば、あの謎の言語は、中二病患者も裸足で逃げ出すオリジナル言語なのかも知れないし、この服も何か深い意味の手作りコスプレなのかもしれない。

そう思えば、遙か遠くの外国に來たというのは決定事項ではない、日本のどっか山奥にでもイカれた宗教施設を持っているのだとすれば、まあ筋は通る。

しかし、なんだって俺がこんな事に巻き込まれなきゃならないんだ……

とりあえず、五体満足で生きていることを思えば、即座に殺されるようなことはないのだろうが。

いや、死ななくとも、これからこのリングのように様々な拷問にかけられる、とか？

それは最悪だ、だとするなら舌を噛み切って死ぬ方がよほど安らかな死に様だ。

命乞いするようなシチュエーションでの死亡は御免。

兎に角、ここが外国だろうが日本だろうが、この場所からの脱出は考えた方が良い。

こんな拷問器具を平気で人の頭に乗っけるような連中とは一刻も早く距離を置くべきであり、今後一切係わり合いになるべきではない。

と言っても、今の俺に出来ることは、目の前にある扉に鍵がかかっているのかどうか確かめることくらいしか出来ないのだが。

俺は立ち上がり、扉に向かって一歩踏み出すのと同時、ガチャリ、と音を立てて扉が開かれていった。

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

自動ドア？ なワケが無い、向こうから誰かが開けたから、扉が開いたに決まっている。

そして、扉を開けたのは、予想を裏切らず、例のマスクだった。

$\left[\begin{array}{cccc} \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \end{array} \right]$

~~~~~

?

マスクは相変わらず何と言っているのか一切分からないオリジナ  
ル言語を口に出している。

こうして再び聞いてみると、若干英語っぽい気もするが……いや、それよりも今はヤツラの動きに注意するべきだろう。

俺は身構えるが、マスクは俺などよりも自分達の背後を気にしているように見えた。

どうやら後ろにも他にマスク共がいるらしい。

部屋の中にマスクが二人入り、俺は距離を取るように壁際へ。

そして、新たに三人目が入ってきた、と思えば、俺はソイツの顔に釘付けになった。

なぜなら、ソイツは格好こそ似たような白マントだが、マスクをつけておらず、素顔を晒していたからだ。

ソイツは一目で日本人ではないと分かる、白人種系の彫りの深い顔立ちをした老人だった。

髪は、フードに隠れて全ては見えないが恐らく全部白髪だろう、瞳の色は青、歳は少なくとも60は越えている爺さんだ。

これ見よがしに、偉そうな白髭をたくわえている。

まさか、コイツがマスク共の教祖様、とか現人神、とか言い出すんじゃないだろうな？



俺にはどうともリアクションをとることも出来ず、無反応のまま。爺は、俺に思念を送り出せるようだが、漠然としたイメージで言葉にできるような明確な形では無い。

意思の疎通は出来そうも無い。

もつとも、言葉が通じたところで円滑なコミュニケーションがこいつらと図れるとは、俺には到底思えないが。

――歩

その思念が送られると同時に、爺は背を向けて歩き出す。

抵抗など不可能な俺は、ふらついた足取りで、十字のエンブレムが描かれたその背中を追うことしかできなかった。

扉をくぐると、向こう側の見えない暗い通路が続いているのが見える。

まるで俺の未来を暗示しているかのような不吉さを覚えたが、この先待ち構えるのは、今この瞬間に自殺をした方が遥かにマシなほどの地獄なのかもしれない。

## 第2話 服従（後書き）

あれ、異世界に召喚されたら巫女さんかお姫様が勇者様扱いで出迎えてくれるか、可愛い村娘か通りすがりの女騎士が助けてくれたりしてくれるものなのでは……残念ながら黒乃は爺とマスクメンによって手厚い歓迎を受けるようです。

### 第3話 地獄

朝は7時に目を覚まし、8時には家を出て学校へ、居眠りすることも私語することも無くマジメに授業を受けて、放課後は部活に打ち込む、そして、夜7時には帰って日が変わる前には眠りに着く。そんな、健康で文化的な高校生活を、俺、黒乃真央くろのまおは毎日送っている。

いや、送っていた、というのが今は正しい表現だ。

俺はある日、部室で突然の頭痛に襲われ意識を失い、次に気がついた時には、なんだかよくわからない部屋にいた。

そこで、俺の頭に針の飛び出る恐怖のリングが被せられた時から、想像を絶する地獄の日々は始まっていたんだろう。

俺がこの謎の施設で目覚めてから、どれだけ時間が過ぎたのか全く分からない。

少なくとも、一ヶ月は過ぎてないとは思うのだが、日数単位では把握できていない。

それでも、その間に分かった事は幾つかあった。

まず俺は、例の爺を筆頭に、キリスト教みたいな十字マークがシンボルの集団によって、人体実験を受けているという事。

今も頭にあるこの白いリングは、針によって俺の脳と物理的に直接繋がっており、これを通して俺の行動を支配している。

爺やマスク共はただ念じるだけで、俺に死んだほうがマシな激痛を与えることが出来るのだ。

さらに、俺の身体を完全に麻痺させて一切の行動を取れなくさせることも可能とする。

外部から俺の精神を勝手に操作、制御できるのだらう。

これがあるお陰で、俺は囚われの身でありながら、リング以外に手錠などの拘束具を用いられたことは一度として無い。

激痛を伴う人体実験においても、俺の体を抑えておく必要性も無



いのだ、抵抗はもとより、痛みでのた打ち回ることすらヤツラの意思一つで抑えることが出来るのだから。

そして、俺に課せられた様々な人体実験というのは、単純に新薬の副作用の確認をするための治験みたいな生易しいモノではない。

俺の肉体を頭の天辺から足先に至るまで、全てを改造するという、どこぞの悪の秘密結社と全く同じ事をやっているのだ。

何よりも一番問題なのが、この改造実験は、オーバーテクノロジーな科学技術では無く、『魔法』によって成り立っているという点だ。

まず、最初に俺の体に施された実験は、魔法の原動力となる魔力を宿らせることであった。

引き出す、と言ったほうが正しいのか、詳しいことは分からないが、この実験の結果、今では自分の内と外に、はつきりと魔力、としか呼ぶことの出来ないエネルギーを明確に感じ取るようになった。

これだけ言えば、新たな力に目覚めたみたいで良いように聞こえるかもしれないが、この実験がこれまでである中で最も苦痛を伴うものであった。

体中の血管に、溶けた鉄でも流し込まれたような感覚で、しかもリングによって意識は強制的に保たれ気絶することは許されなかった。

よく痛みでショック死しなかったものだと思し、その後も体内に残存する熱のような感覚が収まるまで、えらく時間がかかった。

この経験によって、俺はなによりもまず、魔力を行使して発現する『魔法』という技術の存在を、我が身を持って理解させられた。

しかし、理解できることと実際に使えることは別問題で、俺が一体どのような魔法を使えるのかは分からない、なぜなら使ったことがないからだ。

けど、俺の頭にある支配のリングも魔法技術で作られているのだが、これと同じ効果、もしくは防ぐような効果は発揮できないだろ

う事は確かではある。

こうして、晴れて魔法を使える身となった俺は、その後も様々な実験を受けることになった。

その一つ一つの実験に、どんな意味と結果をもたらすものだったのかは分らない。

ドぎつい原色の薬品を幾つも注射されたし、ドブや肥溜めの方がマシに思えるほど悪臭漂うドス黒い薬液に頭まで浸かったこともあるし、宇宙人でもあるまいに、謎の金属片や石みたいのを体内に埋め込まれたりもした。

そして、どの実験もめれなく激痛を伴う副作用の連続で、頭痛、腹痛、吐き気、高熱、眩暈といった症状に始まり、失明、全身麻痺、幻覚幻聴、壊死、呼吸停止など、最早生命維持活動に致命的な打撃を与えるような症状を同時多発的に発症することもあった。

しかし、どんな死亡確実なほどの症状が出ても、最終的に俺は健康的な肉体を取り戻していた。

肉体の破壊と再生が延々と繰り返されている錯覚に陥る、もしかしたら、俺はもう何度も死んでいて、そのたびに蘇らされているのかもしれないな。

なんといっても魔法なんてものがあるんだ、何が出来ても不思議じゃない。

一体、この実験によって俺の体がどう改造されていたのかはほとんど分からないまま。

ただ、魔力を実感できるようになったのと、爺やマスク共が話す謎の言語が気づいたら日本語に聞こえてきたというのは、間違いの無い結果だ。

それと、今のようになこうして俺の自意識がはっきりとしていられる時間が少しずつだが短くなっている、ということ。

睡眠時間が長くなったというコトでは無く、これは半ば夢見心地で俺の意思を離れて勝手に体が動くような感覚を憶える時間のことだ。

睡眠時間だけで言うなら日に2時間もないだろう、そもそも不規則すぎて朝に起きてるのか夜に起きてるのかも分からない。

ここへ着てから、白塗りの壁以外の風景を見ていない、もしかすれば、この世界には陽の光る天空も、緑豊かな大地も存在すらしていないのかもしれない。

そうそう、俺は最近になって、漸くここが元居た世界では無く、魔法といった別次元の理が支配する『異世界』なんだと気がついた。一体、何度目の絶望だろう。

今の俺には、もう家族の顔も、学校の友人達の顔も、霞がかったようにぼんやりとしか思い出せない。

それでも、俺は何も無い自分の牢にいる時は、遥か昔に思える平和な高校生活を憶えている限り、この針の突き刺さった脳裏に蘇らせているのだった。

今日は、体調が良いな。

頭も体のどこも痛くない、頬を流れる涙の感触が、はつきりと感じられる。

ああ、帰りたい、家に帰り――

「49番、出ろ」

扉を開け放ち、マスクが俺を呼ぶ。

49番、それがここでの俺の名前だ。

それが一体何を意味するのか、考える意味はあまり無いだろう。

「早く出ろ」

立――出――歩――

頭痛が酷くなる前に、さっさと立ち上がり、俺は今日も暗い通路の向こうへ歩みをすすめる。

## 第4話 黒魔法

初めて歩く通路の先にあったのは、当然だが、初めて来た場所だった。

そこは円形のホールで、これまで牢と通路と実験室、どれも狭苦しい印象を与える場所しかなかったので、やけに広々とした開放的な印象を与える。

見回せば、先導してきたマスクはいつの間にか退室したようである。

さて、今日は一体どんな苦痛が待ち受けているのやら、この広いホールでダンスパーティーでも催してくれれば良いんだが。

全く、ツマンナイ冗談でも考えなきゃイカれてしまいそうだ。

いや、いつそ発狂しちまった方が楽になれるのか？

そんなことを考えていると、俺が入ってきたのとは別なホールの入り口が開き、ガチャガチャと音を立てながら通路の向こうから何者かがこっちへ向かってくるのに気がついた。

現れたのは、すでに見慣れた白いマスクを被った男。

だが、格好が今までのヤツとは違う、その全身を覆うのは、白マントではなく、鈍く輝くプロテクターだった。

鎧、と言ったほうがより適切か。

「これより49番の機動実験を開始する。

49番、目の前に現れる人形を、黒魔法を用いて破壊せよ」

初めて実験の説明をされたな、それだけ俺の行動に実験結果が左右されるってことか。

その実験ってのは、この短い台詞だけでも分かる、様は、俺に魔法を使えってことだ。

わざわざ改造実験まで施して、俺なんか魔法を使わせようってのに、どういう意味があるのかなんて分からんが、少なくとも、俺がゆっくり魔法の使い方に悩んでいる暇を与えてくれるほど、連中

は優しくないってのは分かる。

目の前に現れた鎧の男、ここは説明通り人形と呼ぶべきか、どういう原理なのは知らないがヤツラが不可思議な魔法を使って人間のように動かしているんだろう。

そして、その不思議な動く人形は現在、歩いてきた時と同じようにガチャガチャと喧しい音を立てながら、俺へと向かってきている。これはつまり、さっさと魔法でぶっ壊さないと、俺がああ鋼鉄のガントレットを嵌めた両腕でたこ殴りにされるってことだ！

「うおっ、危ねっ!？」

人形は拳を振り上げて真正面から殴りにかかってきた。

俺は、小学校低学年の時、苦勞して作り上げた夏休みの工作をクラスメイトにおふざけで破壊された腹いせに顔面パンチくらわせた経験以降、殴り合いの喧嘩をしたコトは無い。

勿論、格闘技に打ち込んだことも、秘めた戦いの才能なんてものも持ち合わせていない、体がデカいだけのただの素人だ。

それでも、フェイント無しで真っ直ぐ放たれたパンチを、どうにか回避することくらいは出来た。

当然だが、一回パンチを避けた位で攻撃が終わるはずも無く、人形は大振りだが連続でパンチを繰り出してくる。

「くっ、くそ——」

へっぴり腰で後ろへと逃げ続けるが、このままいけばあと数秒で壁際に追い詰められる。

魔法を使え、とか言ってたが、使おうと思っていきなり使えるわけが無い。

確かに、自分の体に魔力の存在ははっきり認識できるが、それをどうこうするには、もうちょっと意識の集中が——

「ぐあっ、痛っ!」

肩口に人形の鉄の拳がヒットする。

拳の硬さと衝撃で、一発で骨が折れるんじゃないかと思ったが、いざ一撃くらってみれば、思ったほどのものではない。

勿論、痛いものは痛いのだが、もしかすると、俺が思っているより人形にパワーはないのか？　それとも謎の改造によって変身ヒーローのように俺自身が頑丈になったか？

ええい、どっちでもいい。

「おらあ！！」

お返しとばかりに、渾身の右ストレートを人形へとお見舞いする。人形は避けるそぶりも見せず、その白いマスクへと吸い込まれるように俺の拳は命中した。

拳に伝わるインパクトの感触、鈍い衝撃音をあげ、人形は真後ろへと吹っ飛んだ。

「ど、どうだあ……」

かなり手ごたえのある感触だったが、人を殴った経験がほぼゼロの俺に、今の一撃がどの程度のダメージになるのかなんて見当はつかない。

それでも、人形がぶっ飛ぶほどだ、このまま仰向けに倒れたまま、起き上がってこなければ――

「ちくしょう、そう簡単に倒れちゃくれねえか」

人形は苦も無く立ち上がる。

が、マスクは俺のパンチを受けて大きなひびがクモの巣状に入っている。

あの硬そうなマスクにひびが入るほどの威力だったにも関わらず、人形は平然としているところを見ると、破壊するには、やっぱり魔法でも使わなきゃダメってことか。

人形とこのまま正面きって殴りあいをして、埒が明かないのは確実だ。

なら、ここはもっと本気になって魔法に挑戦してみるべき。

ヤツラは俺が黒魔法ってのを使える前提で説明していやがった、ってことは、やってできないことはないはずだ。

黒魔法ってのがどんなものなのか、全然わからねえが、兎に角、この体内に感じる魔力を、俺の意思で動かす。

そのためには、結構な集中力が必要で……

「――ぐはっ！」

攻撃を再開して連続パンチを浴びせてくる人形を前に、そうそう落ち着いて集中などできるはずもない。

しばらく大人しくさせようにも、俺がパンチやキックで吹っ飛ばしたところで、どうせまたすぐ起き上がってくるのは間違いない。

現に、もう何度か打撃を与えているが、身にまとう鎧が凹むだけで、人形には一向に効いた様子が見られない。

だが、集中するためにはパンチを受けるわけにはいかない、今、この隠れる場所も逃げる場所も無いホールの中で、攻撃を受けずにいられる状態を作り出すには――

「組み付くしかねえか」

相手に密着すれば、少なくともパンチはされない。

完全な素人考えで上手くいくかどうかとも分らないが、今の俺には兎に角やってみるより他は無。

運よく、この人形は今の今まで大振りのパンチでしか攻撃してこない、ということは、格闘技経験者のように多彩な技を身につけている可能性は低いはずだ。

なら、背後から組み付けば、その体勢を華麗にひっくり返すような技なんてものは使わず、せいぜい俺を力づくで引き剥がそうとものがくくらしいの抵抗しかないだろう。

「でやああああ！」

微妙に反応の鈍い人形の背後に回りこむのに、それほど苦労は無く、人形が振り返る前にその背中にヤクザキックを決める。

そのまま前のめりに倒れた人形が、起き上がる前に俺はその背中へと飛び掛る。

果たして、俺の目論見は成功だった。

柔道の寝技のように綺麗に押さえ込むことは出来ていないが、ひたすら人形を上から押さえつけて起き上がらせないようにする。

予想通り、人形は力づくで起き上がってこようとするだけだ。

俺と人形の力はほぼ拮抗している、このまま、あと10秒でもいい、この状態を維持できれば……

「ぐ、う、おおお……」

体中に魔力が循環していく、そして、その流れは加速度的に増大し、また量も増加する。

いつかの実験で、体内に埋め込まれた物体が、流れる魔力に反応しているのを感じる。

分かる、この魔力ってのは力そのもの、この勢いのまま外へと解放すれば、この人形を破壊できる程度の威力を確実にもたらす。

気づけば、俺の体中から汗の変わりに黒い煙のようなものが吹き上がっている。

それに不快感を覚えることは無い、なぜならソレは、俺の魔力が抑えきれずに体外へと迸っているものなのだから。

ギギギギ、と人形が軋む音が聞こえ、抵抗の力が増す、そろそろ押さえ込んでいられるのも限界だ。

けど、これで終わり、

「だあああああ!!」

人形がついに俺を押し退けようとした瞬間、俺の右腕から圧縮した魔力が解き放たれる。

右手の拳は、人形の背中を打つと同時に、真っ黒い魔力の奔流がドリルのようにその硬い鎧を貫き、材質不明の人形の体も貫通せしめる。

恐らく、人形の腹側にある床も、この一撃によって抉れているハズ、それだけの感触はあった。

「……」

もう人形から一切の力は感じず、俺は立ち上がらずにそのまま床へと寝転がる。

「や、やったぞ……」

今のが魔法、なんだろうか。

良く分からんが、流れる魔力ごとパンチを放った、というだけだ



ったが。

まあいいや、人形は完全に機能停止しているようだし、今は一安心だ。

——カシャン

「へ？」

硬い金属の鎧が奏でる、人形の駆動音が耳に届く。

人形は俺がこの手で確かに倒した、今も地面にうつ伏せのままでピクリとも動いていない。

——カシャン、カシャン、カシャン

けれど、確かに聞こえるその音。

そうだ、なにも不思議な事はない。

なぜならその音は、この人形が入ってきた扉の向こう側から聞こえてくるのだから。

簡単な話だ、人形は一体だけじゃない、それだけのこと。

「……はは」

ついに扉は開かれる。

そうして、ホールへと雪崩れ込んで来る人形の列、その数合わせで10体、横一列に並んで俺へと向き直る。

俺が倒した人形と同じ姿形だが、唯一違うところがあった。

10体全員、片手に両刃の剣を携えている点である。

「冗談だろ」

これまで、数々の実験とその後遺症によって、何度も死を覚悟したもののだが、今ほど実感したことは無い。

ゆったりとした動作で剣を構える人形達。

そうして、全員一斉に、寸分狂わず同じタイミングで、俺へと凶刃を向けて踊りかかってきた。

「……ちくしょう」

## 第4話 黒魔法（後書き）

デッドエンド！ セーブポイントからやり直しますか？ っていう話ではありません、ちゃんと続きます。黒乃はドリルパンチを習得した！

## 第5話 49番

俺が初めて黒魔法を使った機動実験から、また幾許かの時が流れていた。

改造された体をもってしても瀕死の重傷になりつつ、10体の人形を退けた‘あの日’から、それまでの生活に変化があった。  
勿論悪い方向で。

それでいて、短い上に不規則な睡眠時間や、唯一の食事が糞不味いゲロみたいな粥だかスープだか分からん謎の液状物質だとか、そういう最悪な部分は変わらない。

そして、拷問まがいの改造手術・魔法を受けるのがこれまで主な俺の役目だったのが、機動実験という名の化物退治が日々の生活のメインになったのだった。

今にして分かったことなのだが、俺が始めて相手をした‘人形’はゴーレムの一種である。

岩石と土くれでできた巨人だけがゴーレムではないらしい、まあ、この間そういうタイプのゴーレムも倒したが。

兎も角、様々なモンスター、としか呼び様の無い者との戦いを、俺は毎日強いられることになった。

種々の武装をした人形改めライトゴーレム、ゴブリンの群れ、一つ目巨人、狼男、二頭をもつキマイラ、恐竜みてえなドラゴン、火を噴くマジモノのドラゴンなど……

喰われ掛けたことは一度や二度じゃすまない、腹に大穴が空いたこともあったし、手足が千切れたこともあった。

それでも、相手を倒しさえすれば、マスク共は最低限の治癒を俺に施し、何とか死にはせずに今までやってこれた。

けれど、目の前のモンスターになす術無く敗れ去った時には、救助されることなく、ただ死体が打ち捨てられるだけだと思えてなら

ない。

所詮俺は49番、名前を番号で呼ばれ、人間扱いなど一切されな  
いたただの実験体だ、結果を出せなければ生かしておく意味などない  
のだ。

だとしても、俺に死ぬ気は無い。

毎日死んだほうがマシな目にあってるはいるが、本当に死ぬのだ  
けは御免だ。

いつか、いつかきつと俺はここを出て、元の平和な生活に戻る――  
最早夢物語だが、俺にはこの幸せな妄想をあとどれくらい続けら  
れるか定かではない。

今日にでも死ぬ可能性がある、というだけでは無い。

あの日から俺に起こったもう一つの変化は、俺がこうして自意識  
をはっきり保ってられる時間が激減したことだ。

今では、目が覚めている状態で、俺の自意識が無い時間の方が長  
い。

その時に自分が何をしたのか、何をしているのか、憶えてはいる  
が、実際に行動したという実感が全く湧かない。

まるでゲームのキャラクターを自分で操作しているかのような体  
感の無さ、お陰で痛くも無いし、苦しくも無い、楽なものだ。

でも、その状態が永遠に続くようになってしまったら、それはも  
う自分が自分ではなくなるのだと確信が持てる。

黒乃真央では無く、ただの49番に成り果ててしまう。

俺には、そう遠くない未来訪れるだろうその事実が、恐ろしくて堪  
らない――

「49番、出ろ」

聞きなれたマスクの台詞。

さつさと身を起こして、俺は扉へと向かう。

さて、今日は一体どんなモンスターと殺し合いをすることになる  
んだか……

この円形ホールも見慣れたものだった、俺は勝手に闘技場と呼んでいる。

だってやっている事はほとんど同じだろう。

そして、今日の対戦相手は

「ライトゴーレムが一体だけ？」

まるで初日の再現だといわんばかりに、マスクを被ったヤツが一体だけ、その身に鋼鉄の鎧を纏い、無手で登場する。

「違うな……新型、なのか？」

ライトゴーレムは、剣や槍といった近接武器を主に扱う。

魔法を使ってくるタイプは今までいなかったのだが、目の前に立つコイツからは、はっきりと魔力の迸りを感じる。

しかも、この魔力の質は酷く馴染み深い、俺と同じ黒色の魔力を持っている。

だとすれば、同じ黒魔法使い同士ということか。

「……」

今回はマスクからの説明など特に無いようだ、ということは、いつでも始めてOKって意味。

「いくぞ」

相手に向かって言ったワケではない、小さな呟き一つ、今日も自分を奮い立たせる。

まずは先手必勝――

「散弾っ！」

魔力を単純に押し固めて物質化し弾丸を成形、高速で射出する。散弾、とは言うが、ひたすら大量の弾丸を作って同時に撃っているだけで、実際の散弾銃のような構造とは異なっているのだが。

なので、銃身など無く、傍からみれば何も無い中空からいきなり弾丸が飛んで行ったように見えるのだが、これこそが魔法だ、銃なんか無くても弾を撃てる。

それと、魔法ってのはイメージが重要だ、だからこうして技名（

?)を叫ぶのはイメージを明確にする為の技術だ。

もつとも、魔法を使ってくるモンスターが魔法名を叫んでいるところなど一度も見たことは無いが。

そんなことよりも、今は発射した『散弾』の行方の方が重要だ。

兎に角、素早く広範囲にバラ撒くことに重点を置いた攻撃魔法、威力はそれほど期待出来ないが生身で受けるには結構痛い。

ゴ布林みたいな小物相手なら、コレだけで楽に片付くのだが……  
相手には、一発も着弾せず。

「やっぱシールド持ちか……」

しかも俺より壁を作るのが上手いぞコイツ。

魔力で相手の攻撃を推し止める盾や壁、それをシールドと俺は勝手に呼んでいる。

魔法を使う人型じゃないモンスターでも、このシールドを使うヤツがいるところを見ると、魔法の基本的な技の一つなのだろうと思う。

もちろん俺も自分の魔力で形作る黒いシールドを展開できるが、目の前のコイツは、あの一瞬で結構な強度のシールドを見事に作り上げている。

『散弾』でも当たればヒビの一つでも入ると思ったんだが、全くの無傷じゃねーか。

「……ん」

俺が次の攻撃に移ろうとするが、相手の方が先に動いた。

無言で繰り出された魔法は、黒い火炎放射だった。

「うおっ、こんなことも出来んのかよ」

俺はまだやったことのない攻撃方法だ。

黒く揺らめく炎があつという間に俺の周囲を取り巻く。

けれど、向こうが黒魔法使いなら俺も黒魔法使いだ、黒色魔力への耐性は他の属性の比じゃない。

「温いっ！」

身に降りかかる黒炎をものともせず、前進。

言うほど温いもんじゃないが、それでも致命的な火傷を負うほどじゃない。

なにやより、相手を倒せばそれで終わりだ、消化するまでも無く魔力で制御された炎は勝手に消え――

「っっ!?!」

炎の向こうから、漆黒の塊が飛んでくる。

同じ黒色な所為で、視認するのが遅れるが、それでも何とか回避は間に合った。

「危ない、ただの目くらましだったってことか――」

黒い塊の正体は、この炎を凝縮したファイアーボールの黒魔法バ―ジョン。

流石に当たれば痛いや熱だけじゃ済まされない魔力密度を誇っていることを、鼻先をかすって飛んでいくのを目の当たりにして即座に理解する。

けど、今の俺を倒すには文字通り火力不足だ。

「アンチマテリアルっ!!」

魔法はイメージ、『散弾』よりも強力な威力を秘めた弾丸、それが『アンチマテリアルライフル』（対物ライフル）。

人に向けて撃ってはいけません公式設定の大口徑ライフルだ。その一発で人間をミンチにしかねない威力を想像し、魔法として実現させる。

イメージは出来る限り詳細に、明確に。

脳内には、ミリタリーオタクの友達がいつだったか見せびらかしてきたフルメタルジャケット弾の映像を思い浮かべる。

そして、ライフリングを通して放たれたイメージでもって、形成した黒い弾丸を高速回転させて撃ち出す。

ドンっ!

火薬の代わりに黒色魔力が炸裂し、黒いマズルフラッシュと衝撃

音が発生する。

俺の反撃を予測したのか、相手はすでに堅固なシールドを展開している。

しかし、今回は威力重視の弾丸、果たして、俺の対物ライフル弾はシールドを大きく穿つ、だが、貫通するには至らない。

すぐさま割れたシールドの再生が始まる、が――

「もう一発だっ！」

初めから一発で抜けるとは俺も思っていない。

再び衝撃音を発しながら、着弾点と全く同じ箇所へと吸い込まれるように飛んでゆく。

バギン、とシールドが碎け散る。

一度弾丸をくらって脆くなった箇所へ、寸分狂わずに撃ち込んだのだ、これで壊れないわけが無い。

この程度のコントロールは、ドラゴンの鱗を貫くには必要不可欠なスキル、とづくに身につけている。

そして、ある程度以上のシールドを展開して、それが破壊された直後には必ず隙が発生するものだ。

現に、シールドブレイクの衝撃によって相手はたたらを踏んでいる。

ここでもう一発アンチマテリアルをぶち込めばケリが突いたのだが、この距離ならもう一度弾丸を形成するよりも、直接刺しに行っただ方が早い。

そして、迅速な攻撃手段は戦闘においてなによりも重要、相手が何かする前に倒す、これが一番だっ！

「パイルっバンカああー！！」

俺が始めて使った黒魔法、人形を背中から貫いた一撃、それが『パイルバンカー』

あんな未熟な時でも使えたのだ、その魔法発動は至ってシンプル、故に、発動速度も最速。

相手が体勢を整えるよりも早く、その胸を真正面から狙う。



『アンチマテリアル』以上に高密度に圧縮され、右腕に装填された必殺の黒杭を前に、耐魔力を持たない鋼鉄のプレート一枚など紙同然。

そうして、ほとんど無抵抗のまま、鎧を貫き、その下の体を穿つ。その瞬間、血しぶきが舞った。

「えっ……」

赤い血が視界一杯に広がる。

相手はライトゴーレム、これまで何度も倒してきたから分かる、その身に人間の如く赤い血液など流れてはいない。

衝撃を与えれば、陶器を割るのと同じように碎けて壊れるだけの体。

じゃあ、この血は誰のものだ？

「……」

俺は一切負傷していない、自分の体だ、自分が一番よく分かる。けど、現に血は吹き出ている。

そう、俺がパイルバンカーで貫いた、ライトゴーレムの胸からだった。

「ま、まさか……」

嫌な予感がする。

落ち着け、そんなハズは無い、コイツがライトゴーレムで無いとするなら、その正体は別の人型モンスターに決まっている。

そうさ、血の色が赤いモンスターなんてこれまで何度もいたじゃないか。

俺が貫いたコイツも、その内の一体に過ぎない。

「……」

そう思い込み、何時ものようにそのまま自分の牢へと帰れば良かったんだ。

けれど、気がついたら、俺は未だに胸から血を流し続けるコイツへと近づき、その素顔を覆うマスクへ手をかけていた。

「……そんな、嘘だ」

マスクを剥ぎ取り、露わになったソイツの顔は、俺と同じ、黒髪黒目、日本人の少年のもだった。

「嘘だっ!!」

俺が殺したのか？ 人を？ 同じ故郷を持つ少年を？

そんな、違う、俺はそんなつもりじゃなかった。

だってコイツはモンスターで、殺さなきゃ俺が殺されていた、知らなかった、人間が相手だなんて知らなかった。

……けど、ちょっと考えれば予想できたことじゃないか？

俺の名前が49番と呼ばれるなら、俺と同じヤツがあと48人いるんじゃないかと。

そうだ、この少年は俺と同じように、いきなりここへ連れてこられて、体を改造され、そして、俺と同じように黒魔法を扱うように創られた、

「ごめん……」

どれだけ痛い思いをしても、もう流れなくなつて久しい涙が溢れてきた。

涙を流しながら、俺はその場で蹲る。

ひたすら謝罪の言葉を口にしながら、いつしか、俺の意識は完全に消え去っていった。

その日、俺の自意識が戻ることは一度も無かった。

俺は、完全に実験体49番となり、‘人殺し’の黒乃真央へ戻ることを拒絶したのだった。

## 第5話 49番（後書き）

黒乃が前回習得したドリルパンチはパイルバンカーという技名に落ち着きましたとさ。パイルバンカーは男の浪漫技ですよね。

それと『殺人』は異世界召喚モノの主人公にとっても作者にとっても直面する大きな問題の一つですよね。

## 第6話 白の秘蹟

「ようこそ、白の秘蹟・第三研究所へ、アルス枢機卿猊下、第七使徒サリエル卿——」

恭しく頭を下げる壮年の男へ、挨拶もそこに彼らは研究所の正門をくぐった。

「ジュダス司教はいないのかね？」

相変わらず薄暗い通路を歩く途上で、アルスは先導する白マントの男へと訪ねた。

「申し訳ございません、つい昨日に聖都への召集命令が下りましたので、半年はこちらへ戻られることはないかと」

「行き違いになっていたか、こちらも突然の訪問である、仕方が無いとはいえ、少々残念であるな」

特に機嫌を損ねたわけでは無いアルスの様子に、男は安堵する。

2人を案内している男は、ジュダスの代理として、現在この研究所の最高責任者である。

代理とはいえ、百人規模の研究者を抱える大施設の責任者の上、大司祭の肩書きを持つこの男であっても、教皇に告ぐ地位である枢機卿と使徒、二人も前にすれば緊張で萎縮してしまうのも無理からぬ話であった。

そんな男の様子を、慣れているのか特別咎めるでもなく、落ち着いた雰囲気では二人は歩みをすすめている。

道中、施設に関することをアルスがぼつぼつと司祭へ訪ねつつ、目的地である会議室へと三人は辿り着いていた。

「ようこそ、アルス枢機卿猊下、第七使徒サリエル卿——」

会議室の中では、司祭と同じ白マント姿の研究者達が複数人出迎えた。

司祭をはじめ白マントの男達は皆、枢機卿と使徒の両名よりも年上であったが、誰もが敬意を込めて頭を垂れている。

彼らが年上になってしまいうのも、二人の若さを思えば当然とも言えた。

「どうぞ、こちらへお掛け下さい」

肘掛つきの白い椅子へと腰掛けるアルス枢機卿は、未だ30代であるが、すでにその肩書きに劣らない貫禄を、この精悍な男は纏っていた。

ミスリルの特別製法衣に身を包み、豊かなブロンドの髪に青い瞳が鋭く前方を見据える。まるで古代の英雄を象った彫刻のように整った顔立ちをしたアルス、大きな肘掛け椅子に腰掛けるその姿は実に様になったものであった。

30代にして枢機卿であるアルスも十分驚嘆に値する若さであるが、第七使徒サリエルと呼ばれた彼女は、さらにその上を行く。

白銀の長髪に紅い光を湛える瞳、純白の法衣と同化しているように見えるほど、透き通った白い柔肌を持つ乙女、それがサリエルである。

その人形じみた容貌は、若い、というより幼いという形容が合うほど。

現に、アルスと同じ形の椅子に腰掛けた彼女の両足は床についていない。

それほど小さく、華奢な体つきであった。

この場において全く場違な姿であるサリエルだが、使徒、という特別な地位の意味を知る彼らは、緊張こそするものの、動揺や困惑といった様子は見られなかった。

「それでは、プロジェクトについてご説明させていただきます」

二人が着席し、資料も渡ったところで、大司祭は語り始めた。

「――この神兵計画は、共和国に住まう神民を犠牲にすること無く聖戦を遂行できる、非常に人道的な理念に基づいたプロジェクトであります。

ご存知の通り、アーク大陸の東側とパンドラ大陸においては邪教が跋扈しており、邪神の支配領域も非常に広範に渡っております。

これに対抗する最も有効な手段が、我々教会の誇る神聖魔法、いわゆる白魔法なのですが、この奇跡の御業を行使する司祭、白魔術士の数は絶対的に不足しているのが現状です。

共和国、ひいては現在の十字教圏を維持するのに白魔法の使い手は割かれ、東側は勿論、辺境のパンドラ大陸などは送り込める人員はおりません。

それでも、使命に燃える幾人かの聖職者達はパンドラ大陸へ渡り、その征服事業に力を尽くしておりますが、十分な人数に達しているとは言えない状況です

そこで、彼奴らの邪悪な黒魔法への対抗策として、こちらと同じ黒魔法を行使するのです。

勿論、神民に対して邪悪な術である黒魔法を教え込むなど言うのは、白き神の信仰に逆らう重罪となります。

よって、異教徒、魔族、異邦人といった者を利用することによって、黒魔法の使い手を確保するのです。

人外の者同士、同じ邪悪な力で潰しあう、毒を持って毒を制す、とも言えますが、そういった方法論でもって、神兵計画は実行されるに至ったのです。

現在、プロジェクトの進行状況としましては、非常に順調と言えるでしょう。

特に、三ヶ月前に呼び出した異邦人、実験番号49番は、これまでの研究の集大成といえるほど高い能力を有しております。

その性能は、必ずや猊下におかれましてもご満足のゆくものであると自負しております。

今後は、49番を筆頭に、多少能力は落ちますが、黒魔術士の量産化に向けて調整を行う方針で研究が進むこととなっております。

本日、49番には最後の洗礼処置を施す予定でして、本年度、いえ、今月中には、聖都において性能のお披露目が――」

熱い語り口の司祭の言葉を不意に遮ったのは、これまで一言も発せず無反応を貫いていた、サリエルであった。

「枢機卿猊下」

消えそうなか細い呼びかけだったが、アルスの耳にははっきりと届いていた。

「何かね、サリエル卿？」

まさか質問というわけではあるまい、とサリエルの無口ぶりを知るアルスは疑問に思う。

「伏せて」

続けたその一言に、アルスの疑問はより一層深まる。

そんな様子を気にする風でも無く、サリエルはさらなる行動へと移る。

「伏せて」

サリエルは椅子から下りると、そのまま巨大なテーブルの下へと潜り込む。

その不可解な様子に、周囲からも流石に困惑の声が上がり始めるのだが、

「……分かった」

「えっ、枢機卿猊下!？」

謎のサリエルの言動に、アルスは従うことを選択した。

最高位に次ぐ地位を持つ二人が、突如としてテーブルの下へと潜り込んだのだ、その意味を即座に理解できる者などいなかった。

一瞬、咄然とした空気が室内に流れる。

しかしそんな場の雰囲気を言いだしっぺのサリエルは勿論、アルスもまた気にはいなかった。

なぜなら、使徒と呼ばれるサリエルの言葉は、常に信頼に値するものであるとアルスは信じていたからである。

そしてその信頼の結果、自身が正しい選択をしたという事をアルスはこの瞬間に理解した。

ズズン――

地の底から轟くような響き、建物が軋む不吉な音、そして、全身を揺さぶる強烈な振動。

「じ、地震だっ!？」

誰かの叫びは、この状況を実に的確に表していた。

今この時、震度6強に及ぶ地震がこの地を襲ったのだった。

「う、うわあああ!」

そこかしこで上がる悲鳴に、椅子は勿論、会議室内に設置された書架がひっくり返る音が響き渡る。

そんな阿鼻叫喚の中でアルスは、なるほどこういう事だったのか、と納得した心境でサリエルを見た。

共和国においては珍しい天災である地震に遭遇しながらも、瞬きする以外の変化をこの状況下においても見せないサリエルを前にしていると、神に身の安全を祈る必要性すらアルスは感じなかった。

そうして、研究所を激震させた揺れは数十秒の後に治まった。

二人が揃ってテーブルの下から這い出ると、床には研究者達が漏れなく倒れ伏していた。

「皆、無事か？」

幸いにも、書架に押しつぶされたり、頭部を強く打って気絶した者はいないようで、うめき声を上げながら次々とよろよろした動作で立ち上がっていった。

「は、早く外へ逃げねば……」

「落ち着きたまえ、この研究所は古代の遺跡をそのまま利用して作られたそうではないか。」

で、あるならば、この程度の地震で崩れるものではないはずだが？」

「は、はい……その通りでございます」

「しかし、緊急事態ではある、念のために避難はするべきだろう、司祭殿、くれぐれもパニックなど起きないよう的確な避難誘導をお願いする」

アルスの言葉に落ち着きを取り戻した司祭以下研究者達は、それ



ぞれ行動に移る。

組織のトップが落ち着いて指示を出せるなら、負傷者がいたとしてもこの場は上手く解決するだろう。

突然の地震に、それほどショックを受けることも無く、研究者の一人に促されるまま、アルスとサリエルは会議室を出ようとする。

「た、大変です司祭様っ！」

すると、慌てた様子で一人の白マントの男、恐らく研究者の一人と思われる人物が駆け込んできた。

視界にアルスとサリエルの姿が入っているだろうが、気づいた様子も見えないのを思えば、相当に焦っているだろうことが窺えた。

「落ち着きたまえ、枢機卿猊下とサリエル卿の御前であるぞ、それに地震の揺れも治まっただろう」

礼の一つも無い、駆け込み研究者に司祭が諭すような口調で言う。

「違うんです、今の地震で――」

言いかけた直後、階下から轟音と振動が響き渡った。

「な、なんだ、また地震か!？」

冷や汗をかく司祭に向かって、研究者が遮られた台詞の続きを叫んだ。

「――49番が、脱走しましたっ!!」

## 第6話 白の秘蹟（後書き）

何か偉い人登場、あと異世界で初の女の子が登場しました。第七使徒、とか書くとエヴァンゲリオンを思い出しますね、勿論エヴァと本作品は一切関係ありません、名前（肩書き）だけです。

あと、東北関東大震災が起こる前にはこのシーンが出来ていました。地震に救われた主人公というのは、もしかすれば今のご時勢不謹慎と思われるかもしれませんが、平にご容赦を。

## 第7話 自由

地獄のような魔法世界へやってきてから、これほどまで深く眠ったのは初めての経験だった。

機動実験で同じ実験体の少年を殺して以来、ずっと自意識が戻らず淡々と身に起こる実験の日々を眺めるだけの生活が続いた。

だから、また同じように実験体の少年少女をこの手にかけても、特に何とも思わなかった。

けれど、このボンヤリした俯瞰意識も、このまま深い眠りの中で、ついには消え去り、俺が黒乃真央という個人だったという記憶も完全に無くなってしまおうのだろうと思った。

それでも、もう痛いのも苦しいのも、同じ人間を殺すのも我慢の限界で、このままゆるやかに自分が消えてしまおうのは寧ろ望む所であつた。

もういい、俺は元いた場所には帰れない、いよいよ両親の顔すら満足に思い出せず、脳裏に蘇るのは、あの十字を背負った爺と白いマスク、それと、俺が殺したモンスターと実験体達の姿だけだ。

だから、もういいんだ、ここで俺が消えてしまえば楽になる、これ以上生にしがみつく必要性は全く無い――

そうして、薄れ行く意識の中で全てを諦めかけた直後だった。

ズズン――

そんな轟音と共に、天地が引っくり返ったような衝撃で、俺の意識は急速に覚醒していった。

「――はっ!？」

飛び起きると、何時もの如く固い床の上。

けれど、これまでにないほど俺の頭ははっきりとっていて、今まで脳内と意識を覆っていたモヤモヤみたいなのは綺麗サッパリ消え

去っていた。

気分爽快、とは今みたいな状況を言うんだろな。

自意識は久方ぶりに戻り、俺の頭は冴え、体中を血液と魔力が滞りなく循環し、力が全身に漲っている。

「ここは……実験室か」

中央の台座から俺は床へと転がり落ちたのだろう。

どういう経緯でそうなったのかは分からないが、他に二名のマスクが、さっきまでの俺と同じように地面へ転がっている。

何かの実験中に事故ったんだろうか？

俺としてはこの白マスクを助け起こす義理なんぞ無いし、その気もさらさらない。

どうしたものか、と考えつつ部屋を見渡すと、とある物が目に入った。

一度だけしか見たことの無いモノだったが、それが何なのかすぐに理解できた。

「白い、リング……」

七つの針で俺に絶対服従を強いる恐怖のアイテム。

装着されて以来、絶対に外れることのないソレが、俺の目の前にある。

自分の手でゆっくりと頭部を探る。

どれほど注意深く触っても、指先に感じるのは髪の毛と頭皮以外に無い。

「無い……リングが、無いぞ」

当然だった、目の前に置いてあるリングこそ、これまで俺の頭部に装着されたリングなのだから。

「は、はははは——」

頭からリングが外れた。

俺を束縛するモノは、最早存在しない。

気がつけば、リングは俺の手の中で粉々に砕け散っていた。

「あははははは！ 俺は自由だっ！！」

そうさ、自由の身になれば、もう大人しく死んでやる必要性など無い！

俺の絶叫が気付く変わりにでもなったのか、床に倒れていたマスクが二人、壁に手を突きながら起き上がってきた。

俺は、近い方にいるマスクへと接近する。

「なに、49番——」

今がどういう状況にあるのか判っているのかいないのか、俺を見て驚きの声を上げる。

「その名前で俺を呼ぶんじゃない」

左手でマスクの胸倉を掴みあげる。

「ぐはっ、や、やめるんだ……49番……」

「俺の名は——」

右腕をゆっくりと振りかぶる。

体調は万全、漲るほどの黒色魔力が瞬間的に右腕へ凝集する。

「黒乃真央だっ！！」

忌々しい白マスクへ、渾身のパイルバンカーが炸裂した。

断末魔の声すら上げる間も無く、頭部を粉々に粉碎、首無し死体が出来上がる。

「なにをしている49番っ！」

もう一人のマスクが、背後から俺へ飛び掛ってくる。

例えその叫び声が無くとも、その気配は察知していたので、その対処には何の苦労も無い。

マスクが俺へ突き刺そうとしたガラス製の注射器を、左腕一本で受け止める。

「危ねえな」

そのまま注射器を奪い取り、右手で逆手に持って構える。

「やめ——」

首元まで覆う白いマントの上から、首筋目掛けて注射器を打ち込む。

上手く血管に刺さったのかどうかは知らないが、注射器を満たす

毒々しい色の薬液をそのまま注入する。

「ぐつつ、おおおお……」

首を押さえて、苦しみ始めたマントは、再び床へと倒れ伏す。

「ライフル」

指の先ですでに形成を完了した黒い弾丸を、額へ向けて撃つ。

血と脳漿を派手に床へぶちまけて、マスクは絶命する。

あの薬液がどんな効果があるのか知らないので、一応念のためだ、俺みたく変に強くなって復活されたら困るしな。

「さて——どういうワケか分からんが、チャンスだ」

すでにリングの絶対的な拘束は存在しない。

その上、コイツラが好き勝手に散々肉体改造を施したお陰で、ドラゴンだって殺せるほどの力を持っている。

さらに、人殺しの禁忌も、知らずとは言え既に犯してしまった俺だ、憎悪する理由に事欠かないこの白いマスク共を殺すのに一切の躊躇も無い。

ここで二人のマスクをあっさり殺害できたのだ、研究者程度が束でかかってきても俺を抑えることは不可能だろう。

自業自得、俺をそこまでの化物に仕立て上げたのは、他でもないコイツラ自身だ。

自由の身となった俺に、この場を脱するのを妨げるモノは、最早存在しない。

「行くぞっ！」

自分を奮い立たせるいつもの台詞を叫んで、俺は扉をぶち破った

――

「――あれほど最終洗礼処置は注意して行えと言っただろうがっ！」  
会議室に怒号が響く。

「し、しかし、拘束処置は規定の通り行い、完全に無力化できていたはずです」

「薬物耐性か回復力が予想以上のものであったというのか……」

「地震の影響で、洗礼処置の途中で強制的に中断されたことにより、意識を取り戻してしまったのでしょうか」

「ならば警備兵の全てを動員してさっさと取り押さえんかった!!」  
そう叫んだ司祭だったが、膨大な黒色魔力を扱う49番を、それほど数の多くない警備兵だけで捕獲することは不可能だろうと薄々感づいていた。

「申し訳ございません狛下、事態は一刻を争います、速やかに避難を――」

「落ち着きたまえ司祭殿、枢機卿である私が何ゆえ護衛の一人も連れずに来たのか、分からないのかね？」

アルス自身、49番と呼ばれる実験体が制御不能となり、数々のモンスターを単独で屠るほど危険な力をもって暴れているのは理解できている。

しかしながら、‘その程度’の力では、全く動ずるに値はしない。  
「し、しかし……」

大司祭はアルスの隣に佇むサリエルへ視線を向ける。

アルスがどういう意図を持つての発言か、すでに理解は出来ている。

「これは全て我々の不手際、サリエル卿のお手を煩わせるわけには――」

「いらぬ氣を回すな、サリエル卿、この場を任せてよいかな？」

コクンと小さくサリエルは頷く。

「どうやら危険な相手らしい、生け捕りにする必要は無いだろう」  
もう一度小さく頷いて、軽い足取りでサリエルは会議室を出て行く。

「では行こうか、慌てる必要は無い、十分もすれば49番とやらの首を持ってサリエル卿は戻ってくるだろうからな」

## 第7話 自由（後書き）

黒乃、念願のプリズンブレイク！ 果たして脱走は成功するのか？  
それともサリエルに首をお持ち帰りされるのか？



## 第8話 白の戦慄

「くそ、出口はどっちなんだよ……」

薄々分かつてはいたのだが、この施設はやたらに広い。

その上、どこも似たような作りときたまんだ、迷わないわけが無い。

先ほど、白い軽鎧姿の初めてみる格好の一人を蹴散らしてきたのだが、一人くらい生け捕って出口を聞くべきだったと今更ながら後悔する。

けど仕方なかったよな、いきなり剣を抜いて襲い掛かってきたのだから。

咄嗟に反撃して全員の息の根を止めてしまったのは、油断が即死に繋がる機動実験でついた癖みたいなもんだろう。

ついでに、そいつらが持っていた両刃の剣を二本貰っておいた。

俺に剣術の心得などないが、剣の使い道は他にある。

次に誰か見つけたら出口を聞きだす脅し様アイテムとして活用するのもし使い道の一つだ。

なんて思いながら通路を走っていると、やや広い空間に出た。

「階段だ！」

上へ続く階段が、立派な円柱が左右に立ち並ぶ空間の向こうに見えた。

漸く見えた外への糸口に喜び勇んで駆け寄っていくが、何者かが階段を下りてやって来る気配を察知して足を止めた。

改造実験によって五感に加えて第六感とも呼ぶべき勘のようなものも強化されているので、全く気のせいというのは無いだろう。

臨戦態勢を取りながら構えていると、コツコツと足音が響いてくる。

間も無くして、暗い階段の向こうから足音の主がその姿を現す。

「女の子？」

てつきりマスクか軽鎧だろうと思った予想は大きく裏切られた。  
現れたのは、燃えるような紅い瞳以外に、髪も肌も服も真っ白な女の子。

幼くも美しい顔立ちと、あまりに白い肌、一瞬ライトゴーレムのように創られた動く人形か、と思ったが、目の前の少女からははっきりと生氣を感じ取れる。

人形では無く、本物のアルビノってやつか。

「止まれ！」

こんな場所に不釣り合いな美少女だが、白い衣装を纏い、胸元に十字のエンブレムをつけている時点でマスク共の関係者であることは確定だ。

油断せず、まずは静止の言葉をかけてみた。

「……」

彼女の歩みは止まった。

「何者だ？」

いきなり戦闘になる想定しかしていなかったもので、何て言おうか一瞬迷った結果、咄嗟に口からでたのは誰何を問うことだった。

言ってから、俺に味方などいるはずないのだから正直に答えるわけ無いだろう、と思ったが、

「第七使徒・サリエル」

意外にも、彼女は応えた。

第七使徒なる肩書きが如何なるもののかは全く分からないが、少女の名前はサリエルというのだけは分かる。

「俺は黒乃真央だ、ここから外に出たいんだが、出口を教えてくださいませんか？」

「それはできない」

「そうかい——」

ま、あっさり教えてくれるとは思ってなかったけどな。

このサリエルという少女が一体何者なのか、正直気になるが詮索する暇も無いし、構っている暇も無い。

マスク相手なら足にでも一発ぶち込んで無理矢理聞きだせるのだが、何の恨みも無い少女相手に乱暴するつもりは無い。

すでに人外の俺ではあるが、そこまで狂っちゃいない。

そういうワケで、俺は彼女を無視して先へ進むことを選択する。

魔力で瞬間的に脚力を強化し、階段へ向かってロケットスタートをきる。

常人や弱いモンスターなら目で追うのは困難な速度、あんな女の子ならば突然俺の姿が消えたように見えたはず――

「うがっ!？」

急加速した三步目を踏み出した瞬間、左足に衝撃が走る。

左足の制御が一瞬寸断され、バランスを崩した俺は固い床を高速で転倒する。

「な、に……」

見れば、俺の左腿に、白い杭が深々と突き刺さっていた。

「貴方をここで止める」

呟くようなサリエルの声が聞こえたと同時に、俺の背筋に悪寒が走る。

「嘘だろ……」

彼女から、どんなモンスターとも比べ物にならないほど、強烈な魔力の迸りを感じた。

その身に纏う白銀に輝くオーラは、気体状態であるにも関わらず、俺のパイルバンカーよりも遥かに魔力密度の濃いものだった。

強化された第六感が無くとも即座に理解できた、彼女はとんでもない化物だ。

「散弾っ!」

刺さった白杭を引き抜くと同時、サリエルに向けて散弾を撃ち出す。

瞬時にばら撒かれた黒い弾丸は、無防備に立ち尽くす彼女へ殺到する。

サリエルは僅かほども反応せず、そのまま降り注ぐ弾雨をその身

で受け止める。

「ちくしょう、シールドすら無しかよ」

弾丸は、彼女から噴出すオーラに触れた先から消滅した。

俺や、他の実験体が使うシールドよりも、あのオーラは強力だが、彼女からすればあのオーラはただ魔力を垂れ流しているだけのモノで、魔法ですらない。

俺にだって代謝の一部として自然に体外へ放出される魔力はあるが、黒色魔力で形成した弾丸を防ぐ力など全く持たない。

何もせずとも攻撃を止められるってんなら、散弾に本来期待する牽制の効果も全く無駄だ、魔力の無駄遣い。

にしても、あのオーラの元となる純白の魔力は、俺の知る魔力とは明らかに異質なものだ。

黒い魔力を使うのが黒魔法なら、アレは白魔法ってところか。

正直あんなヤバそうなのを相手にしたくは無い、が、俺の体はすでに戦う方向で動き始めてしまった。

「黒化」

俺の両手には、先ほど奪った二本の剣がある。

シンプルな作りのロングソードは、黒色魔力に包まれ、柄から鈍まで黒一色となっている。

この状態にするのを見たままに俺は『黒化』と名づけた。

そして、黒化状態になった武器は威力が一段階増すだけでなく、全く手を触れずに操れるようになるのだ。

「自動剣術」

俺の手を離れた二本の黒化剣は、宙に浮き、その剣先はひとりのに相手へと向けられる。

自分の手で武器を振らずに直接剣を操って戦う、それが自動剣術。さらに、元々物質として存在し、武器として形作られたモノをベースにした場合、魔力だけで作った弾丸より威力は上、これならあのオーラも抜けるはずだ。

「貫けっ!!」

声と同時に、矢のように剣が飛ぶ。

サリエルは変わらず直立不動のまま、だが、その前方に白い魔力が急激に圧縮されて行く。

そうして現れたのは、逆三角形の白い盾、やはりシールドであった。

「ライフル！」

俺が擬似フルメタルジャケット弾を撃ち出したと同時に、先に飛んで行った二本の剣がサリエルのシールドへ当たる。

二本ともあっさり弾かれてあらぬ方向へととんで行く、シールドには傷一つついていない。

だが、構わずに俺はライフルを撃ち続けた。

アンチマテリアルより威力は劣るが、その分多少の連射が利く。が、黒化剣で無傷だったシールドだ、ライフルなど何発撃ち込んでも効果は無い。

着弾点に重ねて当てても結果は同じ、ゼロは幾つ積み重ねても合計はゼロのままなのだから。

が、俺はそれで良かった。

ライフルはシールドへ注意を引きつけるだけの陽動、本命はさつき弾かれた黒化剣だ。

サリエルは黒化剣の投擲に対して、シールドを張った、ということとは、張らなければ危ないと思ったからに他ならない。

散弾はオーラだけで防げるが、剣は防げないのだ。

後方へ飛んでいった二本の剣を再び操作する。

目標は勿論、未だ無防備に棒立ちしているサリエルの背中だ。

突き刺されば即死級の威力だが、彼女も魔法使いだ、命だけは助かるだろう。

内心で謝りつつ、黒化剣を最高速度で飛ばす。

サリエルは振り向かない——確実にやった。

「——は？」

剣がその小さな背中を貫く瞬間ですら、サリエルは動かなかった。

だが、今のサリエルは、何故か二本の黒い剣を右手の指に挟んで持っていた。

まさか、素手で止めたのか？

一体何時？

「……」

サリエルの白魚のような細い指に挟まれた漆黒の刀身は、瞬く間に燃え尽きた灰の如く白くなってゆき、消滅した。

「う、あ……」

勝てない。

本能、直感、理性、思考、どれをとっても、絶対に勝てない、と結論を出す。

俺は選択を誤った、戦いなど挑むべきではなかった。

あの膨大な魔力量を感じた瞬間、踵を返して一目散に逃げ出すべきだったのだ。

だってそうだろう、本当はシールドなんか使わなくても良かったんだ、俺がどれだけ必至に魔法を行使しても、彼女はその身一つで苦も無くその全てを退けられる。

彼女の視界に入った時点で、俺なんて何時でも殺せたに違い無い。俺はただ彼女の気まぐれで生かされただけに過ぎない。

俺の脳裏に、黒化剣と同じように消滅してゆく姿が瞬時に再生される。

「……」

サリエルがシールドを消す。

——逃げろ、と本能が呼びかける。

——逃げろ、まだ間に合う、理性が自分を励ます。

諦めるな、まだ、生き残る可能性はあるはず。

ここは兎に角逃げの一手、あのとんでもない化物から何としても逃げ延びなければ、俺に自由な明日は無いっ！

「黒煙——ぐあっ！」

実験体の少年が使っていた黒い火炎放射の応用で、完全に眼くら

ましのみの効果を追求して編み出した魔法。

黒色魔力を霧状に噴射するだけで、ほとんど隙無く発動できる魔法だが、その僅かな隙を正確につかれ、俺の右肩と腹部に白い杭が突き刺さった。

それでも、魔法自体の発動は成功、視界を閉ざすべく黒煙が一気に空間全体に広がってゆく。

真っ黒な煙が充満する中で、俺は元来た道を引き返す、残念だが、階段までは遠すぎる。

最初に足へくらった杭の傷跡に、ゼリー状にした魔力を流し込んで塞ぐ。

とりあえず出血は抑えられるし、この程度の痛みが気になるほどヤワな肉体でもない。

再び脚力を強化し、兎に角彼女から離れることを思ってひた走る。肩と腹に刺さった杭は後回しだ。

「アンチマテリアル」

振り向かずに、彼女が未だ立っているであろう場所へ向けて大口径の弾丸を三連発。

効かないことは百も承知、少しでも足止めになればと思うが、三発目を打った直後、5本の杭が俺の背中を穿つ。

一応シールドを張っていたはずだが、全くの素通り状態で杭は飛んできたのだった。

「ぐおおお!？」

思わず倒れそうになるが、どうにか踏ん張って通路を走り続ける。背中に刺さったやつは足、肩、腹にくらったものと比べて細かったので、衝撃になんとか耐えられたのだ。

そうして、一度も振り返らず無我夢中で走り、直感的に選んだ部屋へと転がり込んだ。

「はぁ：はぁ：」

とりあえず彼女の視界からは逃れられたか？

気配や足音は聞こえてこない。

完全に逃げ切れたとは思えないが、今の内に傷の手当はしておかなければ。

「ぐっ、う、痛え……」

痛みには慣れた、とはいえ痛いもの痛いのだ、ただ我慢強くなったというだけ。

肩と腹の杭を引き抜き、手が届きにくく四苦八苦しながら背中の中の本も抜き去った。

「内蔵に傷ついてなけりゃいいんだが」

傷口を塞ぐゼリー状の魔力は、時間が経てば肉体と同化し完全に再生する。

消毒とかどうなんだ？　　と思いはしたが、完治するんだから大丈夫なのだろう。

この魔法のお陰で、大方の負傷は自前で回復できるようになった。しかし内蔵のように複雑な機能を持つ器官は、その能力を再現できないのか、完全に治すことが出来ない。

以前、腹を恐竜みたいなヤツに食い破られた時、自分では腸の再生が不完全で、結局マスク達の魔法によって完治したのだ。

魔法ってヤツは一体どれほどの事ができるというのか、疑問に思うが確かめる術は無い。

今はそれよりもこれから先どうするかを考えなければならない。

あのサリエルとかいう超ヤバイ魔法使いの少女が、このまま簡単に見逃してくれるとは到底思えない。

俺よりもサリエルの五感は優れている可能性が高い、ならば、匂いで追跡されることもあるだろうし、最悪、第六感で、なんとなく見つけてしまうことも無いとは言切れない。

なので、隠れてやり過ぎすという選択肢はとれない、リスクが高すぎる。

——コッソ

足音がかすかに聞こえた。

余裕ぶっているのか、登場時と同じようにゆっくりと歩いてきて



いる。

それでも、潰け込めるほどの油断がない事は先の一戦で証明済みだ。

段々と足音が大きくなってきているのを思えば、真っ直ぐこの部屋へと向かってきているのだろう。

「く、くそう、どうすれば……」

これまでのモンスターのように、頑張れば何とか勝てるレベルの相手ではない。

絶対的な實力差のある相手を前に、今の俺はお世辞にも冷静な思考が出来ているとは言いがたい。

そんな俺でも、この部屋に入ってきたのとは別な扉があることに気がつけた。

策など何も無いが、このまま部屋の外へ出るより、その扉に入っ  
て少しでも奥へ行く方がかなりマシに思えた。

もっとも、この扉の向こうがただの部屋だったなら、完全に積んだことになるが。

「――これはっ！」

今日の俺は完全にツイてる、扉を開けてそう思った。

扉の向こうはこと同じような白い部屋では無く、下へ向かって長く続く螺旋階段であった。

覗きこんでみると、底が見えないくらいに深かった。

どこに繋がっているのかは知らないが、今はサリエルと少しでも距離を稼げると思えば、この長い螺旋階段は酷く魅力的に思えた。

俺は迷わず一步を踏み出し、全速力で階段を下っていった。

サリエルは変わらぬ速度で通路を歩き続けていた。

魔法使いとしては圧倒的に格下である49番――否、クロノ・マオという『魔王』と同じ響きを持つ名前の異邦人に対して、より一

層の恐怖を与える為に歩いているわけではない。

黒色魔力を感知して、正確に追跡するためにはこの速度が適當だから、というのがサリエルを走らせない理由であった。

そしてもう一つ、彼女はクロノに対して明らかに情けをかけていたのだった。

本気で殺しにかかっていれば、クロノを貫いた合計8本の白杭は、全て頭部に命中させることができた、勿論、クロノが先に攻撃してくる前にだ。

アルスが言った「十分もすれば」というのは、寧ろ最長の戦闘時間を想定したものであったことが分かる。

しかし、彼女は視界に入れて刹那の間に命を奪える相手を、はっきりと見逃したのだった。

この先、彼を完全に追い詰めたら投降の呼びかけすら、サリエルはするつもりであった。

本心としては、このまま自分から上手く逃げ切って欲しい、というものであるのだが。

「……」

それにしても、とサリエルは考える。

クロノの黒魔法は、全く想定した通りのレベルでしかなかった。

数々の実験によって、その身に膨大な黒色魔力を宿し、身体能力も強化無しで常人を上回るほどだが、肝心の魔法については基礎中の基礎と呼べるスキルしか身につけていない。

計画の現段階として、高い基本能力を持つ肉体を作ることが主目的であり、戦闘や魔法の技術的な面はこれから習得させる予定だったのだから、当然と言えば当然である。

魔力量こそ多いが、循環、圧縮、放出、などの魔力操作はどれも大雑把なもので、圧縮した魔力を発射するだけの、シングルアクションの魔法を一発打つだけで相当の魔力を浪費している。

武器に対する付加はエンチャントむらがありすぎるし、遠隔操作の精度や気配の隠蔽も甘い、視界にいれずとも認識することは造作も無い。

ただ、最低限の基礎スキルのみで一般の魔術士並みの攻撃力を実現させているのは、やはり改造強化の恩恵だろう。

しかし、サリエルを驚かせたのは、そんな改造の結果得た力では無く、放った魔法に施した‘工夫’であった。

「サンダン」・「ライフル」・「アンチマテリアル」と唱えて撃ってきた黒色魔力の物質は全て、綺麗な流線型の円錐状で、高速回転しながら飛んできた。

魔法とはイメージで形作るモノで、ほとんどの魔法使いはシングルのアクションを行えば、球体か、矢、剣、投槍、といった形をとる、サリエルの場合は杭である。

しかし、貫通能力を高めるという点において、彼の放った螺旋回転する円錐ほど、その機能美に優れた形状をサリエルはこれまで見たことが無かった。

一度知ってしまった、再現することは誰にでも出来る、しかし、その形状の発想は一体どこから来たものなのか。

自分で編み出した、と言うのなら、ただの天才という一言で片付けられる。

しかし、彼は魔法の存在しない世界から呼び出された‘異邦人’と呼ばれる種だ。

魔法の使えない彼らを、教会は人間以下の魔物と同等の扱いとしている。

だが、異邦人には異邦人の世界の知識があり、技術があるのでは無いか、いや、確実に存在するはずだ。

そして、あの円錐が異邦人の生み出した技術の一つだったとすれば、クロノが最初から貫通能力に優れていると知っていて魔法に応用したと考えられる。

サリエルは、こちらの説の方が可能性は高いと思っている、そして、それが正しいなら、彼は我々の知らない知識が他にもあるという事にもなる。

それが、一体どれほどのものなのか多少の興味はあるが、再び囚

われの身となれば、それが生かされることは無いし、最悪この場で殺さなければならぬので、多少惜しくはある。

「……」

サリエルは唐突に足を止めた。

目の前にある扉、これをクロノが通ったことには疑いが無い。

一瞬、この部屋に入るべきかどうか、サリエルは逡巡する。

けれど、ここまで来た以上は、一応確認はしなければならないと思ひ、全く無防備に扉を開いた。

待ち伏せや罠の類は無し。

仕掛ける暇もないのだからそれも当然だと思いつつ、部屋の奥にある、入り口とは別な扉へ向かう。

そこも開け放つと、サリエルの視界に入るのは、真っ直ぐ下へと続いてゆく薄暗い螺旋階段。

サリエルは階段を下りることはせず、螺旋階段の中央部に出来る空間へとその身を投げ出して、底の見えない奈落に向かって真っ直ぐ自由落下してゆく。

ドズンッ！！

特に身体を強化する魔法を使うこと無く、サリエルはそのまま着地した。

彼女自身に、落下の衝撃などまるで無かったかのように佇んでいるが、足元にある石のタイルは粉々に砕け散っていた。

「……逃げた」

彼がここにいないことは一目で確認できた。

なぜなら、この螺旋階段の底にあたるこの場所には、地下水脈を直接汲み上げる小さな井戸があるだけで、黒色魔力の残滓は、その井戸に続いていったのだ。

この場所は、聖職者が身を清めるために使用する場所であり、地下施設であるこの研究所から、正門以外で外に続く唯一の空間であ

る。

彼がここへ繋がる上の部屋に入ったのは、恐らく偶然だろう、だが、そのお陰で無事に脱走することが出来たのだった。

「……良かったね」

井戸へ向かって、サリエルはそう呟いた。

人に対して全く無口、無表情な彼女にしてみれば、珍しくも感情の籠った台詞だった。

何故これほどまでに彼女がクロノに対して情けをかけたのか。

それは彼の境遇が、昔の自分とよく似ていたからだった。

## 第8話 白の戦慄（後書き）

異世界で初めて女の子と出会えたと思ったらフルボッコにされたでゴザル。

ともあれ、晴れてクロノ脱走成功です。やはり外を自由に歩いてこそ異世界です。

漢字を知らないサリエルは「黒乃」では無く「クロノ」という音のみで名前を認識しているので、地の文でもクロノと表記されています。変換が楽で良いですね。

## 第9話 港町

コツンコツン

遠くから足音が響いてくる。

紅く輝く双眸を持った、小さな白い影がやってくる――

「……うおっ!？」

やべえ、今一瞬気を失ってなかったか!？

素早く立ち上がり周囲を見渡す。

誰の気配も感じない。

この耳に聞こえてくるのは、白い少女が奏でる足音では無く、すぐ横を流れる河の音だ。

「ど、どうなったんだっけ……」

俺は螺旋階段の下った底にあった井戸へ迷わず飛び込んだ。

井戸の底から、水が流れる音が聞こえてきたから、地下を流れる水脈があるのだと思い、どこか外へ通じていると思ったからだ。

そしてその目論見は見事成功、俺はこうして地面へ立っている。

ただし、あの地下水脈が俺を閉じ込める深い地の底へ続いていたのかもしれないし、実際飛び込めば真っ暗だし、水はめっちゃ冷たいしで、流されながら恐怖と不安で挫けそうにもなった。

運よく、暗い地下（洞窟というべきか）そこから日の当たる外へ水脈は続いていたようで、どうにか川岸に上がったところでちょっと気絶してしまったみたいだ。

「ああ、外だ」

天を仰げば真上に照る太陽、横には俺が流れてきた河があり、周囲は木々が生い茂り、そのさらに向こうには聳え立つ山々が見える。そんな、完璧大自然な緑の中に、俺はいる。

「やった、俺はついに自由――」

ガサリ、と近くの茂みが音を立てた。

一瞬で俺の心臓の鼓動が高鳴り、嫌な汗が全身から噴出す。

脳裏に浮かび上がるのは、無表情な白いサリエルの顔。

「……」

現れたのは、鹿によく似た動物だった。

河へ水を飲みに来たのだろうか、よく見れば、奥のほうにも何体かいるようだ。

ところで‘鹿によく似た’とわざわざ言うのは、鹿ではない確信が俺にはあるからだ。

その鹿モドキは立派な角が三本も生えている上に緑色、あんなフアンタジックな角を生やした鹿は、俺の世界にはいない。

いや、この世界で進化したらああいふ鹿も生まれるのかもしれない、なんてったって火を噴くドラゴンが実在する魔法の世界だからなここは。

そもそもダーウィンの進化論はこの世界で通用するのだろうか？

「いやいや、そんなことより、今はもっと遠くへ逃げた方が良さそうだ」

多少の疲労感はあるが、サリエルに受けた傷は治りつつあり、行動するのに問題は無い。

今はこの改造されてやたら頑丈になった体ありがたい。

しかし、そんな体を持つ俺でも手も足もでない、モンスター以上の化物が存在するのだ。

もしかすれば、この世界にはあんなヤツラがごろごろいるのかもしれない、だとすれば、自分の力を過信するのは危険。

あんなのが束で脱走した俺の搜索に来られれば、完全にお終いだ。どこが安全で、どこまで逃げればいいのか分からないが、兎に角あの施設からはひたすら遠くへ行くべきだ。

「行くか」

取り立てて道しるべの無い俺は、とりあえずこの河を下流へ向かっていくことに決めた。



今もサリエルに追われているかもしれない、という恐怖心が、体力の続く限り俺の足を進ませる。

俺は三日三晩一睡もせずひたすら山やら森やらを歩き続けた。足を止めるのは、便所と河の水を飲む時だけだ。

腹を壊すかもしれない、と思ったが、河は底が透けて見えるほど綺麗なものであり、なにより、これまで糞不味いゲロスープしか口にしなかった俺にとって、自然の清流はあまりに美味すぎた。

結局、腹は壊さなかったが、飲みすぎて胃袋がタプタプになるという弊害があった。

そして、時たま遭遇する犬だか狼だかみたいなモンスターは散弾とライフルで追返し、深追いはしなかった。

そして四日目の晩ついに、

「……灯りだ」

前方に、人が住んでいると思しき灯りを見た。

その灯をみながら、喜び勇んで真っ直ぐ走っていく。

が、その途中で俺は思った。

「待て、あのマスク共に通じるヤツラがいるかもしれないな」

若しくは研究者が、最悪サリエル本人がいる可能性も否定できない。

俺はこの世界については、モンスターがいることと魔法があることくらいしか知らない。

世間の常識を知らない上に、このボロボロの貫頭衣姿は確実に怪しまれる。

怪しまれるってことは目立つってことだ、逃亡する身としてはそれだけは絶対に避けたい。

そしてさらに悪い想像だが、俺が指名手配されている可能性もありうる。

実験体としての俺の存在は、マスク共の中でどういう位置づけにあるのかは分からないが、国を挙げての大規模プロジェクトとかそういうのだった場合、広範囲に渡って俺を搜索してくるだろう。

つまりこの世界の人間に、不用意に接触するのは危険だということだ。

そこまで思い至った時、街は目前に迫っていたが、人恋しさを我慢しつつ、俺は息を潜めて街へ潜入することにした。

ここは、灰色の石壁に囲まれた、潮風漂う港町だ。

門に立って街へ出入りする人々を監視する兵士に見つからないよう、注意深くぐるっと一周見て回って分かったことだ。

それと、どうやらこの世界の文明は中世レベルだというのも判明した。

石壁だけなら文化財として残しているだけなのかもしれない、しかし、ここの石壁は現役で使用されている。

他にも、アスファルトで舗装されていない道、槍を携えた鎧姿の兵士、夜の明かりは篝火とランプ、などなど、俺の知る現代的な物は何一つ見つからない。

あの実験施設にいたところから、電気設備も無く、銃ではなく剣や弓で武装したモンスターを見て、現代では無さそうとは思っていたが、こうして一般的（と思われる）街を見れば、その時の予想が正しかったのだと思い知らされる。

「本当に異世界だな、ここは……」

軽く絶望してしまいうだが、心に大きな不安を抱いて思い悩めるほど今の俺は暇では無い。

元の世界に帰る方法を模索するのは、もっと遠くへ逃げて落ち着いてからにしよう。

再び考えを目の前の街へと戻す。

ここが港町というのは、俺にとっては好都合かもしれない。

陸路に行くより、船で海路を行った方が、遥かに速く、より遠くへ行くことが出来るのだ。

少なくとも、飛行機は無いだろうと予想されるこの世界において、

船が最長最速の移動手段だろう。

もつとも、ワープやテレポートの魔法装置が無ければの話だ。

兎に角ここから遠くへ行きたいという目的しか無い俺にとって、船というのは魅力的な存在だ。

ここは是が非でも、できるだけ遠くへ行く船に乗りたいものだ。

勿論、人と会うわけにも行かない上に、無一文な俺は正規の手段で乗船する気はさらさら無い。

要するに、密航だ。

「よし、目的は決まった、そんじゃ街へ行くとするか」

周囲に人の目がない事を確認して、俺は石壁へと手をかける。

垂直に、かつ精密に組み上げられた石壁に、手をかけ、足をかけるほどの凹凸は無い。

なので、ここは頼りになる黒魔法の定番だ。

手足の先に、黒色魔力を鋭く物質化させる。

頑張れば竜の鱗だって貫く硬さを再現できるのだ、石壁にさっくり切り込める刃を作ることも十分可能だ。

そうして初めての壁登りにチャレンジ。

指先と一体化した鋭い爪は、ダンボールにカッターを突き刺すくらいの感覚で、石壁に食い込む。

垂直の壁を直接指を刺すことで、手をかけるところを作っていくのだ。

足先も同じ要領で、壁に突き刺し、しっかりと固定する。

壁の高さはおよそ5メートルといったところか、命綱の無いウォールクライミングだが、俺の体なら天辺から落下してもなんとも無いだろう、下は柔らかい土の地面だしな。

そして、段々と壁登りの要領を掴んでいった俺は順調に壁を登っていく。

「おお、今の俺って忍者みたいじゃね？」

そして、すっかり夜の闇に溶け込む忍の者気分になった俺は、あつという間に壁を登りきる。

壁の上で仁王立ちしたら、流石に誰かに見られそうな気がしたので、這い蹲ったまま街の内部を眺める。

「おお、予想はしてたが、やっぱすげえな……」

そこでは、映画やアニメでしか見たことが無い、ヨーロッパ風の町並みが再現されていた。

視力と共に、夜目も効くようになっていたので、この闇夜においても街の様子がはっきり見て取れる。

白塗りの民家が立ち並び、街の一番大きい通りは石畳で、灯りをつけた夜店が見える。

昼にはきつと荷を満載にした馬車が行き交っていることだろう。

そして、中央部に街で一番の高さを誇る尖塔を備えた教会が建つ。そこからさらに大通りを進むと、沢山の船が停泊している港へ至る。

流石に夜だけあって、人の姿が多く見えるのは大通りだけで、住宅地などは灯りを消して静まり返っている。

「港には、壁沿いを進んだ方が良さそうだな」

おおよその街の全景を頭に入れ、ここから港までの大雑把なルートを決定すると、俺は石壁から飛び降りた。

井戸に続く螺旋階段くらいの高さならヤバイが、（目測）5メートルくらいは問題ない。

ドッと鈍い音を響かせて土の上に着地し、すぐさまその場を離れる。

最大限注意を払いながら、暗い住宅街の路地を駆け抜けていった。

## 第9話 港町（後書き）

やっぱり異世界に来たからには中世ヨーロッパ風の町並みじゃないとね！あとクロノはサリエルちゃんのこと立派なトラウマになったようです。

## 第10話 パンドラ大陸

寝静まった住宅街を通ったお陰で、特に誰にも見られることも無く、無事に港まで辿り着いた。

いきなり適当な船に忍び込むのは博打すぎるので、船に積み込む、又は降ろした荷を保管していると思しき倉庫郡に身を潜め、周囲の様子を探る。

倉庫郡、と言っても、現代のように大型コンテナほどの貨物は存在しないようで、大きくても二階建て程度の倉庫がぽつぽつと見えるだけだった。

夜間だけあって、倉庫に出入りする者はいなかったが、この辺りで一番大きな倉庫にだけは煌々と灯りが灯り、人々が作業をしているのが目に入った。

俺は細心の注意を払って、その倉庫へと近づき、様子を窺う。

どうやら、この倉庫にある荷物を、急いでとある船へと積み込んでいるようだった。

聞き耳を立てて、作業をする男達の声へ耳を傾けると、どうにかその話し声が聞き取れた。

「なんだってこんな遅くに――」

「全くだ、こりゃ帰って一杯やる時間もねえな」

いかにも船乗り、というような浅黒い肌の大柄な男達が愚痴りながらも倉庫内の荷物を運び出している。

特に大きな貨物は、入り口に停めてある馬車へ積み込んでいる。

「――けど、こんな夜中にわざわざ出航することもねえだろうに」

「急ぎの補給物資だ、とかなんとか言ってたぞ」

「何が急ぎなんだか、戦争やってるわけじゃねえってのにな」

補給物資、とわざわざ呼ぶって事はこの世界、いや、この国の軍隊の船なんだろうか。

この国は戦争中ではないらしいが、モンスターがいるような世界

だ、平時でも戦う相手がいる。

「いや、開拓だか殖民だか知らんが、現地は結構大変らしいぞ」

「だからいっつも傭兵を募集してんのかい、やっぱ行かなくて正解だったぜ」

『開拓』と『殖民』、ってことは何か、今この世界は大航海時代なのか？

しかし、さらっと『傭兵』とか言ってるあたりファンタジーな感じだなあ。

そんなことより、これはかなりのチャンスかも知れない。

俺が世界史で知るような、西洋列強の植民地支配、みたいなことが現在進行形で行われているというなら、その『植民地』ってのは本国から海を隔てて遠く離れた別天地だ。

「何が、パンドラ大陸は富の溢れる楽園、だ、魔族とモンスターが溢れる地獄じゃねえかよ」

『パンドラ大陸』ね。

最後に希望が残るあのパンドラの箱と関係あるのかどうかは知らないが、あの言い様では、こことは地続きではない、全く別な大陸なようだ。

そんな遙か遠くのパンドラ大陸、なんて、逃げるにはうってつけじゃないか。

しかも、話を聞く限り植民地経営は上手く行っていないようだし、それならばパンドラ大陸全域をカバーする大規模な捜査は難しいだろう。

開拓場所を離れて人跡未踏の奥地へ行って、終戦を知らない旧日本兵のようにサバイバル生活するのも、今の俺なら出来なくは無い。快適ではないだろうが、実験施設の生活に比べれば天国にも等しい。

若しくは『魔族』というヤツラに匿ってもらうか、だ。

『魔族』が、文字通り悪魔的な種族なのか、単なる原住民に対する蔑称なのかは分からないが、モンスターと同列に語られる存在で

ある以上、マスク共との関わりは皆無とを考えても良さそうだ。

少なくとも、爺をはじめ、何度か見た事のあるマスク共の顔立ち  
は、今も荷物運びに汗を流す男達と同じように見える。

ならば彼らは同一の種族、すなわち人間、パンドラ大陸の魔族と  
同一種族ということは有り得ないだろう。

マスク共から逃れるのが俺の最優先目的、なら、パンドラ大陸行  
きの船はこれ以上ないほど目的に沿ったものである。

決めたぞ、俺はパンドラ大陸へ渡るぜ！

「さて、どうやって乗り込むかな——」

白い光の神を崇拝する十字教を掲げ、アーク大陸の西側半分を治  
めるシンクレア共和国。

その聖都エリシオンは、光の加護を受けた都、として、共和国の首  
都であると同時に十字教の聖地でもあった。

数多くの教会が建つこのエリシオン、その内の一つに、白の秘蹟・  
第三研究所所長ジュダス司教と第七使徒サリエルの二人は会してい  
た。

「——では封印状態のまま戦闘を行ったと？」

「はい」

二人は長椅子に一人分距離を開けて隣り合って座っている。

会話をする時も、特に相手を見てはいなかったが、ジュダスはふ  
とサリエルへと視線を向ける。

「……出でよ」

一言呟くと、サリエルの頭に、淡い白光を放つリングが現れる。

実験番号49番とは違う型ではあったが、そのリングは紛れも無  
く、実験体には必ず装着される思考制御装置だった。

ジュダスはリングに手を伸ばし、軽く指先を触れる。

「魔力制限80%、術式連鎖凍結、武装不可——最大封印状態か」



リングには装着者の健康状態や行動などが記録されており、管理者は全ての情報を閲覧できる。

ジュダスは、49番との戦闘記録を読み取っている。

「はい、解放許可を得る時間はありませんでした」

「枢機卿がすぐ隣にいたと言うのか……やはり、アレは使徒の力を少々過信しておる節があるな」

脳裏に、アルスの精悍な顔つきが浮かび上がると同時に、彼が妙にサリエルを気に入っていることもジュダスは思い出す。

伶俐冷徹な枢機卿で通っている癖に、過去に命を救われた程度の事で恩義を感じているとは、妙に律儀なところがあるのだと思った。

「実験番号49番の対応に不足はありませんでした、アルス枢機卿の判断は誤りであるとはいえません」

「正しいとも言えんだろう」

「……」

万が一を思えば、解放許可を即時発行すべきではあった。

使徒とはいえ、最大封印下においては、一流の魔術士程度の力しか発揮できないからである。

「ここには儂しかおらん、何を言おうと誰の耳にも入らぬぞ」

「いえ、解放状態であっても、49番の逃亡を防げませんでした」

「そうであろう、自ら見逃したのだから、どれだけ力があつたとて無駄なこと」

ジュダスは気がつかなかったが、サリエルはほんの僅かに眉をしかめた。

「今更それを咎めたりはせんよ、制御下を離れた時点で全て我々の責任だ」

『クロノ・マオ』という名の異邦人をこの世界に呼び出し、黒魔法を行使する実験体49番を創り上げたのは他ならぬジュダス司教とその部下である研究者達である。

あくまでサリエルは偶々その場に居合わせ、善意で追跡を行つた協力者でしかない、失敗したとしてそもそも責められるような立

場には無い。

もつとも、シンクレア共和国において使徒を叱責できるのは教会のトップである教皇だけであるが。

「そんなことよりも、儂にとっては、お主が感情的な行動をとった事の方が驚きである。」

お主が人の身であったということなど久しく忘れておったわ」

サリエルは今度こそ一切の反応をすることは無かった。

ジュダスの言葉に皮肉や蔑みといった含みがもしあったとしても、彼女にはそれを気にするだけの感情はすでに存在していない。

「まあ良い、では予定通り事を済ませるとしよう、聖都暮らしは退屈だが暇ではないのでな」

サリエルの頭で未だ発光を続けるリングへ、再びジュダスの指先が触れる。

「……消えよ」

唱えた直後、リングは粉々に砕け散り、光の粒となって中空に霧散していった。

「これでお主を縛るものは何も無い、この場で儂を殺す事だって出来る」

「ありがとうございます、しかし、冗談が過ぎます司教」

「封印から逃れた者は皆この老いぼれの命を真っ先に狙うのだがな、もつとも、完全に解放されたのはお主が二人目であるが」

封印を逃れた最初の一人である49番は、自分を前にすれば他の例に漏れず殺しに来るとジュダスは確信していた。

ただ、行方知れずの49番が危険を冒してまで自分へ復讐しにくるとは考えにくい。

なぜなら、死んだ方が遥かにマシな目に毎日あわされたのだ、捕まればまた地獄の日々に逆戻りするというリスクを思えば、折角の自由を捨ててわざわざ復讐を選ぶ事はしない。

そこまで理性的に考えられない愚か者であったとしても、愚か者なりに恐怖は骨身に染みているので本能的に復讐を選択しないのは

確実だ。

それほどの行為を行ってきたという自覚をジュダスは持っている、持っているだけで、後悔や罪悪感などという感情は皆無であったが。「さて、これで用は済んだ、お主にも仕事があるのだろう、次は誰を何人殺す？」

「魔族とモンスターです、大陸全土の開拓を終えるまで、必要ならいくらでも」

「開拓、ほう、では次に遣られる場所というのは」

「はい、パンドラ大陸です」

## 第10話 パンドラ大陸（後書き）

これで第1章終了となります。主人公が召喚されてから脱出までのお話でしたが、人によっては展開が遅いと感じるかもしれませんね。私としては急ぎすぎず丁寧に描写していきたいと考えているので、次の章も進行はゆったりしたものになります。

それと、少しずつお気に入り登録してくれる方が増えて嬉しい限りです、ありがとうございます！ 今後とも「黒の魔王」をお楽しみ下さい。

## 第11話 妖精さんが見える

体を揺する振動に、深い眠りに落ちていた意識が少しずつ目覚めてゆく。

「ん……うーん……あと5分待ってよ母さん……」

言うものの、未だ惰眠を貪る息子など決して許してくれない我が母はそろそろ布団ごと俺を蹴っ飛ばして強制目覚ましをかけてくるだろう。

でも、なんだか久しぶりに気持ちよく眠れてるんだ、例えこのへブン状態が続くのがあと十秒もないとしても、最後の瞬間まで俺は

バシヤン！

「うおっ！ 冷たっ！？」

突然俺の顔面を襲った冷水によって、俺の意識は瞬時に夢と現の狭間から残酷な現実世界へと完全に引き戻される。

「いくら起きないからって水ぶっかけるなんて酷くないか母さ——」  
気がつけば、とんでもない暴挙に及んだ母の姿は何処にも無く、そもそも、ここは自分の部屋ですらない。

澄み渡る青空、緑溢れる木々、周囲に散らばる木片と赤い林檎、それと、足元で頭を抱えて蹲って震える白い物体。

「な、何だ……」

何だ、ってのはどれに対する疑問だよ。

いや待て落ち着け、そうだ、俺はパンドラ大陸へ渡るべく貨物に紛れて船へと忍び込んだ。

で、その紛れ込んだ貨物ってのが林檎みたいな赤い果実の詰まった木箱の中で、俺の周囲に散らばっている木片と果実は、その残骸だろう。

それと、この周囲に広がる森に見覚えなどないが、俺の睡眠中、何かがあって木箱ごとこの森にきて、砕け散った。

具体的に何が起こったのかは分からないが、輸送中に何か事故が起きたとかそんなところだろう、とりあえず不測の事態が起こったんだろうことは予想できる。

ただし、この状況下において、俺がどう頭を捻っても納得の行く解答が得られそうにないのが、目の前の白い物体である。

「本当に、何なんだこれは……」

最初は、人型のぬいぐるみか何かかと思った。

大きな頭部に短い手足は、3つか4つくらいの幼児の姿を彷彿とさせる。

しかし、不思議なことにこの（推定）幼児はぼんやりと体全体が光っており、小さな背中からは2対、合計4枚の光の羽が生えていた。

光と羽の所為でそれほど違和感がないが、この幼児は糸纏わぬ全裸である。

「……よ、妖精なのか？」

そう、この姿を見ると、そうとしか思えないのだ。

しかし、妖精さんが見えるなんて俺も大概疲れてんのかな。

そりゃ唐突に拷問まがいの実験の日々を強制的に送らされちゃあ絶望レベルの疲労感さ。

いやいや、落ち着け、思い出せ、ここは魔法もモンスターも存在する異世界、ならば、妖精の一人や二人いてもおかしく無い。

おかしくないが、何ゆえ俺の目の前で丸くなってぶるぶる震えているんだろう。

このまま見ているのも何だか可哀想な感じがするので、声をかけてみることにする。

「おい、大丈夫か？」

「!？」

お、今ピクンって反応したぞ。

「どうしたんだ、どこか痛いのか？」

「……」

たっぷり30秒くらいの沈黙の後、妖精さんは恐る恐る、伏せていた顔を俺の方へと向けた。

文字通り輝くプラチナブロンドの長髪に、透き通ったエメラルドグリーン of 光を宿す大きな瞳。

その円らかな瞳の端に、涙が浮かんでいる。

な、なんだこのカワイイ生き物は……

俺は断じてロリコンなどでは無いが、一目惚れ級のドキドキを感じてしまったのは否定できない。

「……」

俺の熱視線を受けつつ、妖精さんは恐る恐る立ち上がるなり、そのまま走り出して木の陰へ姿を隠すように移動する。

ヤバい、あまりの可愛さにガン見しすぎて警戒されたか？

「……う」

逃げたのか、と思ったが、木陰に身を隠しつつ顔だけ覗き込むように出すと、小さな声で呟いた。

「だいじょうぶ？」

「へ？」

鈴の音のような声で紡がれた台詞の意味を即座に理解できない。

大丈夫、とはこちらの台詞であり、妖精さんに俺を心配される要素は無いはずだ。

「おちてきた」

落ちてきた？ 一体何のことだか分からなかったが、その視線が俺の背後へ注がれているのに気がついた。

ちらりと振り返ってみると、切り立った崖がある。

落ちてきたとは、この崖から？

「あ」

再び目に付く、散らばった木片と林檎。

きっと俺が隠れていた林檎の入った木箱は、この遥か上にある崖

の上から落下してきたんだ。

そして俺諸共この森へと真っ逆さま、という事か。

なら、俺に水をぶっ掛けて起こしてくれたのは、あの妖精さんなのか。

「もしかして、俺を助けてくれようとしたのか？」

コクン、と首を振って頷く。

「そうか、ありがとう。」

俺は大丈夫だ、怪我一つしてない」

あの崖から木箱に入ったまま転がり落ちてきて無傷な体は改造強化の恩恵だ、可愛い妖精さんにいらぬ心配をかけずに済んだ事を嬉しく思える。

「よかった」

優しく微笑む妖精さんの笑顔を見て、俺はこの世界で初めて親切を受けたことに気づいた。

そうか、俺を心配してくれる人が、この世界にもいるんだ。

「ああ、本当にありがとう——」

喜びに浸っていると、もう一つ重大な事実に気がついた。

俺、妖精さんと話が通じてるぞ。

なんだか当たり前のように言葉を交わしたが、これって凄いことなんじゃないのか？

「あーえっと、俺の言葉、分かるよね？」

「？」

小鳥のように首をかしげる姿に和みながら、いきなり妙な事を聞いてしまったかと若干後悔する。

今までの反応を見るに、この妖精さんは恐らくほぼ見た目通りの知能だと思われる。

なら、相手を子供だと思って接するのが正解ではないだろうか。

まあ子供の相手なんて親戚の生意気なガキ共を相手にした経験しかないんだけどな。

「俺の名前は黒乃真央、君は？」



なるべく優しく言ってるつもりだが、普通の子供なら俺の凶悪面にビビって逃げ出しているタイミングだ。

しかし、妖精さんはやはり妖精さんで、見事に返事をくれた。

「……り、りりい」

「リリィ？」

「うん」

また小さく頷くと、恥ずかしげに覗かせている顔の半分を木陰に隠す。

仕草が一々可愛いな。

「それで、リリィはここが何処か分かる？」

「ここは妖精の森 フェアリーガーデン 妖精が住んでるの」

妖精が住む森、ね。

リリィが俺を助けてくれたことを思えば、人間に強い敵対心を持っているわけじゃなさそう――

「あああー！！」

「誰だ！」

「！？」

俺とリリィ以外の第三者の声が背後から響く。

何事かと振り向くと、空中に浮く光の玉が目に入る。

気がつけば、木々からいくつも同じような光の玉が現れ、周囲を飛び交っている。

「どーしてこんな所に人間がいるのよっ！」

叫び声を上げたのと同じ光の玉が、俺の顔へ近づいて言い放った。よく見れば、15センチほどの人型で、リリィと同じように羽が生えている。

「もしかして、これが妖精か？」

「妖精に決まってるでしょ、見てわかんないのっ！」  
分かるわけないだろう、初めて見たんだぞ。

だが、反論するよりも、ここは妖精と話して少しでも情報を得るべきだろう。

「俺は――」

「ここは私達妖精が住む聖なる森なの、人間はさっさと出て行っちゃおうだい！」

「はっ!？」

俺が名乗りすら上げる前に、いきなり追放宣言をされてしまう。何だよ、妖精ってもっと人間に対して友好的な種族なんじゃないのかよ？ いや、俺の勝手なイメージかもしれんけど。

少なくともリリイは俺を助けようとしてくれたし、もじもじと可愛らしいリアクションをしてくれたぞ。

「なによりリイ、アンタもいたの？」

俺のことなどすでに目に入っていないかのように、妖精はリリイの方へ飛んでゆく。

「ダメじゃないこんな奥まで勝手に入ってきちゃ」

「う……ごめんなさい」

「そこの人間は勿論、アンタみたいな妖精モドキもここにいちやダメなんだから、分かっているわよね？」

俺にはフェアリーガーデンの妖精事情なんか全く知らないが、リリイが小さい妖精共から明確に扱いの差があることは分かる。

事情を知らない俺が口出しする権利などないだろうが、この世界で初めて優しさを貰ったリリイに悲しい顔をさせられちゃ、黙っていられねえ。

「おい、そんな言い方しなくてもいいだろ、リリイは俺を助ける為に来てくれたんだぞ」

「なあにアンタ、本当に何も知らないのね。」

フェアリーガーデンの奥にある光の泉には妖精以外近寄っちゃ絶対にダメなの。

だから、人間であるアンタも、妖精モドキのリリイも、こんな奥まで来たらダメなのよっ!」

「俺は確かに人間だが、リリィが妖精モドキって何だよ、どう見ても妖精じゃねえか」

「バカなコト言わないでよ、どこにこんなデカイ妖精がいるのよ。ソイツはね、妖精の魔力と肉体を持つ、半人半魔なの、人間でも妖精でも無い半端者。」

全く、一目見ればそれくらい分かるじゃない」

だから見ても分からねーって、つーかこの世界の生物分類がどうなっているのかがそもそも分からない。

だが、機動実験で戦ったモンスターの中には、魔力は感じるが生物特有の生气と呼ぶべき気配を感じない、幽霊とか悪霊としか呼べないようなヤツがいた。

この小さい方の妖精は、質こそ異なるが、そのモンスターと同じように魔力のみを感じられる。

恐らく、妖精という種族は魔力だけで形成された生命体なんだろう。

対して、リリィからは妖精と同質の魔力を感じるが、同時に生氣も感じられる。

この妖精が言っていることを、感覚的には理解できる。

「分かったらさっさと出て行ってちょうだい、見逃してあげるんだから、ありがたくなさいよね人間」

「くっ……」

妖精の物言いに腹立たしくはあるが、‘光の泉’とかいう場所を荒らすつもりはさらさら無い。

それに、この世界に住む他の者との揉め事は出来る限り避けたい。俺自身の怒りはいくらでも矛を治めよう、妖精の言う通り、大人しくこの森から去ってやろうじゃないか。

ただ、妖精モドキと言われて悲しげに顔を俯かせるリリィの姿には、酷く心が痛む。

「あ、そうそう、西の洞窟にゴブリンが住み着き始めたみたいだから、早めに片付けておいてねリリィ」

「うん わかった」

「お、おいっ、リリイにモンスター退治させるつもりか!？」

当然のようにゴ布林退治を命じる妖精の言葉は信じ難いが、リリイがあっさり了承したことも信じられない。

「うっさわねえ、余所者な上に馬鹿な人間には関係ないことでしょ」

「馬鹿は余計だ! ってか危ないだろうが!！」

「モンスター退治なんていつものことよ、妖精モドキでも魔法も使えない低級なモンスター如きに負けるわけないでしょ」

「そ、そうなのか？」

不安げな表情のリリイを見ると、モンスターと戦っている姿が全く想像できない。

出来ないが、あの言いようだと魔法が使えるんだろうな。

魔法で攻撃できるなら、体の大きさは強さに直結しない、俺にだってドラゴンが倒せるくらいなのだ。

「分かったら二人ともさっさと行きなさいよ、いつまでも居座るつもりなら、力づくで叩き出すわよっ!！」

チカチカと光の玉が強く明滅する、威嚇してるんだろうか？

「分かった分かった、もう出て行くから後ろから魔法撃ったりするなよ」

そうして、俺とリリイはこの場を後にする。

妖精達が散らばった林檎っぽい果実を騒ぎながら森の奥へと運んでいくのを、リリイが羨ましそうに見ている。

「あれが食べたかったのか？」

「うん」

「大丈夫だ、何個か持ってるから」

「!？」

「後でやるよ、一緒に食おうぜ」

「あ、ありがとう!」

満面の笑顔を浮かべるリリイを見ると、何とも言えず癒されたのだった。



## 第11話 妖精さんが見える（後書き）

第2章始まりました、ヒロインとの出会いというベタなスタートですが、やはりこういう展開は外せませんよね。その肝心のヒロインであるところのリリイは全裸の幼女ですが、私もクロノも変態ではありません。仮に変態だとしても変態という名の紳士です。実際のところ、リリイのイメージはベルセルクのパックです、裸で妖精だし。そこに性的な意味合いは一切含んでありません、信じてください、本当です。

## 第12話 妖精

妖精とは、肉体を持たない魔力生命体である。

信じ難いが、妖精という存在は最初から確固たる自我と知識をもつて生まれてくる。

しかも、母親から生まれてくるのではなく、大地の魔力と妖精女王の加護によって、花の蕾が開くと同時に誕生するのだという。

赤ちゃんはコウノトリが運んでくるとか、キャベツ畑でとれるとかいう話を地で行く設定。

この目で誕生の瞬間を見なければ、ちょっと信じられないようなファンタジー生命体だ。

で、そんな妖精達は、物質に干渉することは出来るが、肉体を持たないので、動物のような生命維持活動をほとんど必要としない。

魔力で構成される生命体は基本的に、睡眠欲、食欲、性欲、の三大欲求が存在しない。

妖精の場合でいけば、精神の休息のため眠ることはあっても、食事は必ずしも必要ではないし、それに伴って排泄することもない、オマケに男の影も無いと、正に理想のアイドルみたいな生命体だ。

また、生まれてくるのは全て少女の姿で、消滅するまで姿は変わらないのだという。

全個体が雌でも種が減びないのは、生殖によって増える生物ではないからだろうし、老いが無いのも肉体が無いから外見の劣化が起きないからだろう。

そんな彼女らが生きていくのに必要なのは、この妖精の森のような魔力が濃い環境だ。

魔力さえ補充できれば、妖精は生きていける。

人間並みの知能を持ちながらも、本能的な欲求が無いので、互いが争うことも無く、また文明が誕生することも無い、古よりその姿と在り方に一切変化の無い種族の一つだ。

生存に必要なモノが無いので、仕事という概念は無く、24時間フルタイムを遊んだりお喋りしたりで過ごすのだと言う。

そもそも妖精というのは、自由気ままで、お喋りとイラズラが大好きな種族らしい。

それと、人間など他の種のマネをするのも本能的に好きなようで、なんだか小さな子供みたいな存在だ。

彼女らには生理的欲求は無いが、暖かい日の光の下で眠ったり、美味しいものを食べたりするのは好きと、娯楽としてそれらを楽しむことが出来る。

林檎を喜んで運んでいったのはその為だ。

そうして、彼女らは食べる、寝る、遊ぶのローテーションで毎日を過ごしている。

これだけ聞けば、何とも平和で楽しげな、自分も今すぐ妖精人生を始めたいくらいだが、妖精は酷く排他的な種族でもあるのだ。

ヒステリックに叫んで俺を追い出そうとしたのは、そういう面の表れである。

そして、半人半魔であるリリイもその影響を多分に受け、妖精として生まれながらも、村八分の憂き目にあっているのだった。

「――なるほどねえ苦労してるんだ、やべっ、なんか泣けてきた」

「泣かないで、クロノ」

林檎（に似た果実だけでもう林檎でいいや）を二人で齧りながら、リリイの身の上話を聞いていると、こう胸にグッとこみ上げて来るものがあった。

俺はもうリリイに対して強い思い入れができてるし、リリイも俺を呼び捨てで呼んでいるように、最早赤の他人レベルでは無い。

そう、俺達はすでに友達だ！ 友達のはず、友達だったらいいな。

友達かどうかは兎も角、リリイの話である。

「生まれてからずっと一人暮らしだなんて、悲しすぎるぜ……」

肉体を持つリリイは、妖精には無い生存本能を持つ、食べなければ餓えて死ぬし、眠らなければ疲労を回復できない。



つまり、食料を得る為の活動や寝床の確保など、人間が生きていくに必要なものを、リリイも同じく必要とするのである。

しかもこんな森の中、たったの一人でだ。

「だいじょうぶ、おうちもちゃんとあるの」

彼女の言う自宅とは、丁度俺達の前に立つ小さな小屋だ。

恐ろしく年季の入ったログハウス風の造りをしたこの小屋は、何十年も昔にとある魔法使いが住んでいたのだと言う。

その魔法使いはとくにこの世を去り、最寄の村人によって墓地へと埋葬されたが、彼の住居だけはほとんどそのまま残されていた。そしてリリイが誕生すると、すぐに光の泉から追い出され、森の浅い場所に立つ小屋に住むようになったのだ。

「食べ物はどうしているんだ？」

「木の実とかキノコをとってるの。」

あと、村でパンを買って食べるの」

「え、買い物してるのか！？ お金は？」

「薬草をとって、お薬を作るの」

「それを村で売って稼いでいるのか？」

「うん、たまにだけど」

「凄い、なんて立派なんだ！」

こんな小さいのに一人で生計を立てているとは。

学校に行くだけで衣食住に困らない現代っ子の俺とは比べ物にならないほどの苦労人（苦労妖精）だ。

「えへへ……」

褒められて恥ずかしいのか、下を向いてもじもじするリリイ。

君はもっと胸を張って誇っても良い！

「一人で生きていけるなら、この森から出て村で暮らせばいいんじゃないのか？」

「ダメ……妖精は女王様の加護があるところで暮らさなきゃダメなの」

それが決まりなのかどうなのかは分からないが、それでも完全な

妖精では無いリリイも、この森から離れる気はないようだ。

それに、特別な事情が無かったとしても、ここは彼女の故郷でもある、それだけで離れるに惜しいという気持ちは理解できる。

「けど、モンスター退治とか、危ないことをあの妖精共から押し付けられてるんじゃないか？」

「いいの、ずっと前からリリイの仕事。」

リリイがみんなのためにできることは、これしかないの」

「リリイは光の泉を追い出されても、そこを守りたいのか？」

「うん」

辛い、なんてことは無いだろうに、それでもリリイの返答は力強い、これ以上余計な口を差し挟めないほどに。

「そうか、なら止めたりしない。」

けど、今回のゴ布林退治は俺が変わりにやる！」

「え！？　ダメだよ、危ないよ！？」

リリイも人間が低級とはいえモンスターを相手にすることの危険性を理解しているようだ。

が、残念ながら、いや、ここは幸いと言ったほうが正しいか、俺はすでにただの人間では無い。

「大丈夫だ、俺はこう見えて魔法使いだからな！」

「まほうつかい？」

ぽかんとした表情のリリイ。

その大きな瞳に移りこむ自分の姿を見て気がついたのだが、「悪いんだけどリリイ、何でもいいから着るもの無いかな？　あと体が洗える川があれば教えて欲しい」

俺の格好は実験施設で着ていた簡素な白の貫頭衣（一応パンツだけはあある）、しかもサリエルとの死闘によって8ヶ所も大穴が空いており、さらに脱走後三日三晩山の中を歩き続けたりで、ボロボロな上に汚れが酷い。

服装もそうだが、体の方だってその日数分だけ洗っていないのだ、自分じゃ気づかないが絶対臭い……

「俺はこう見えても」なんて言っただけ、どう見ても性質の悪い浮浪者にしか見えない、間違っても魔法使いになど見えるわけがない。

「えっと、川は向こう、服は……」

「いや、無いならいいんだ、とりあえず、体洗って――いや、先にゴブリン退治に行った方がいいかな、汚れそうだし」

「今からいくの？」

「ああ、洗濯は帰ってからにするよ。」

「そんじゃリリィ、ゴブリンが根城にしてる西の洞窟とやらに案内してくれ」

「う、うーん」

未だに心配なのか、困り顔のリリィ。

「大丈夫だって、俺に任せてくれ。」

「ヤバかったらちゃんと逃げるからさ、俺は逃げ足には自信があるんだ」

何と言っても悪の実験施設から、化物クラスのアルビノ少女を吹っ切って大脱走してきたのだ、ゴブリンの包囲なんてどうという事は無い。

「うん、ついてきて！」

俺の熱意(?)に押され、リリィが案内を始めてくれた。

よーし、初めて親切を受けた異世界の住人に、いいところを見せてやるぜっ！

勢い込んで、俺はリリィの後を追った。

## 第12話 妖精（後書き）

クロノは幼女の前で張り切っているようです。果たして、クロノはリリイにいいところをみせることができるのか！？ 次回、ファンタジーでは外せないゴブリン退治のクエスト（？）です。

前回の後書きに続きリリイについて。ベルセルクのパックを知らない人はキューピー人形をイメージしてくれば良いと思いました。あれも裸がデフォルト状態ですよ。そんな感じで妖精が裸なのは異世界においてごく自然なことなのです。そういうことにしておいてください。

## 第13話 ゴ布林退治(1)

「――あそこ」

木陰に身を潜めながら、リリィが岩場にそそり立つ崖の一角を指し示す。

「おお、確かにゴ布林がいるな」

入り口が3メートルはある大きめの洞窟が1つと、その周辺に入り口が1メートル弱ほどの小さめの洞窟が3つ見える。

どの洞窟もそれほど大きくは無いようだが、体長が1メートルそこそこのゴ布林にとっては住むのに十分なようだ。

ここに住むゴ布林は、俺がいつか機動実験で相手をさせられたゴ布林と同一の種族と思われる。

あの時は統一された鋼の鎧に切れ味鋭い両刃剣を装備していたが、ここにいるのは襤褸切れと薄汚れた毛皮を纏い、手作り感溢れる槍を手をしている。

装備のレベルは比べるべくも無いほど低いが、毎日使っているだろう生活感は溢れていた。

「一応確認しておくけど、全部殺していいんだな？」

人間を含む生き物を殺すことに、俺にはもう特に抵抗は無いが、今更ながらリリィに血を吹いて倒れる凄惨な場面を見せたいとは思わない。

モンスター退治を以前からリリィはしている以上、殺生に対する抵抗感はないのだろうが、念のため聞いておく。

派手にゴ布林を殺して怖がられたら、なんか悲しいしな。

「うん、ゴ布林は一匹みたら30匹はいるから、ちゃんと駆除しないとダメなの！」

「そ、そうか、分かったよ」

ゴキブリ扱いで平然と『駆除』とか言っちゃああたりに物凄いギヤップを感じる。

これは子供特有の純粋な残酷さってやつなんだろうか？

まあいい、兎も角これで一切後ろめたいことは無くなった、言われた通り、一匹たりとも逃さずに殺しきればよいのだ。

「よし、それじゃちょっと行ってくる」

俺は特に身を潜めることもせず、真っ直ぐに洞窟へ向かって歩きだした。

「――装填」

戦う前から、あらかじめ弾丸を作っておいて連発できるようにしておく技術は、パンドラ大陸に渡る途中、身動きの取れない貨物の中で編み出した、何分暇だったもので。

ストックしておける弾の数はそれほど多くは無いが、最初のターンで三倍近い火力を集中できるといいう効果だけで今は十分である。

「黒化」

ここに来る途中、森で拾い集めた1メートルほどの木の枝を4本、黒化させる。

それまで小脇に抱えて持っていたが、黒化すれば手放しで操作できるので、黒い棒と化した4本を背後に控えさせる。

「――よっと」

大きめの岩に登って立つと、洞窟の前がよく見渡せる、ここなら逃げるゴブリンを見落とすことはないだろう。

ざっと見た限り、20前後のゴブリンがおり、その内武装しているのは13、恐らく洞窟内にもまだ控えていることだろう。

そうして俺がゴブリンの姿を認識すると同時に、洞窟周辺に群れているゴブリン共からも、俺の姿はよく見え、即座に捕捉される。

突然表れた人間を歓迎するつもりは無いようで、大きな鼻に蛙と猿を足して潰したような醜い顔を歪ませて、一斉に俺へと敵意の視線を向ける。

「ギョオアアァー！」

仲間への合図なのか、ただの鳴き声なのか分からないが、奇声を上げながらゴブリンが戦闘の姿勢へ移る。

「そうだ、かかってこ——って、リリイ!? なんてここにいる!?」

「?」

俺が魔法をぶっ放そうとした瞬間、足元にチカチカ光る白い影に気がついた。

てっきり森の中で大人しく待っているのかと思っていたのだが、なんでこんな最前線にのこのこやって来てるんだ!?

しかし、今更リリイを抱えて遁走するわけにはいかない。

リリイだってモンスター退治の実績があるんだ、多分俺が心配しなくても大丈夫だろう。

ああ、でも物凄く心配だ!

「リリイ、俺の傍から離れるなよ、危ないからな!」

「うん」

分かっているのかいないのか、キョトンとした表情で俺を見上げるリリイ。

やはり心配だが、悩んでいる時間などない、ここは大丈夫ということにしておこう。

「よし、行くぞっ!」

再び気合を入れなおし、ゴブリン共と向き合う。

武装した13体の内、2体が弓に矢を番えている、さらに、声を聞きつけたのか、洞窟から弓を手にした4体を先頭に十数体のゴブリンが飛び出してくる。

残りは全て、槍や剣を抜いてこちらへ突撃を仕掛けてくる。

「ライフル」

まずは飛び道具使いを始末、合計6体の弓持ちのゴブリンは一本の矢も放つ前に、擬似フルメタルジャケット弾に脳天を貫かれる。

あらかじめ装填しておいたので、連射では無く同時発射で仕留める事が出来たのだ。

「散弾」

次の狙いはこちらへ真っ直ぐ向かってくるヤツラだ。

一発撃つだけの時間で、6体の弓持ちを倒したので、突撃組みは未だ俺に刃が届く距離に達していない。

その距離およそ10メートル、散弾で片付けるには丁度良い距離だ。

装填された4発分を同時発射された散弾は、前方の空間へ瞬時に広がる弾幕と化し、盾も持たず、回避する隙間も無いゴブリンの体中を穿つ。

最前列を走っていたゴ布林は完全に絶命、着弾した弾丸のどれが致命傷となったか分からないほどの有様で、中には細い手足が千切れ飛んでいる者もいた。

「ギっ、ギェアー！」

仲間の体が盾となり、致命傷とならなかったゴ布林は、怒りと苦悶の声を上げつつも武器を掲げて突進を続ける。

彼らの背後には、未だ無傷の後続集団も続いている、さらに、再び洞窟から湧き出る増援も現れつつある。

この程度で引くつもりは無いのか、そもそも引き際を見極める知能も無いのか、どちらにせよ、向かってきてくれるなら追う手間が省けるので楽なだけだが。

「ガトリング」

右腕を前に突き出し、ライフル掃射の効果を持つガトリングを撃ち始める。

ガトリングは、弾丸を発射する工程の自動化に成功、俺はひたすらに弾丸を作る工程に意識を集中できるので、ライフル以上の速射を可能とする。

その代わり、右腕を銃身として、その方向に真っ直ぐにしか飛ばすことができないので、おおまかな照準しかつけられないのだが、こうして群れを成して真正面から突撃をしてくる相手には有効だ。

向こうがこちらの射程に勝手に入ってくれるのだから。



かくして、ガトリングで撃ち出されるライフルと同等の弾丸を、防ぐ術も避ける術も無いゴブリンは、近づいてくる順番に挽肉と化すだけである。

最早、戦闘では無く一方的な虐殺に近い構図だ。

それにも関わらず、未だゴブリン共は正面から黒い弾丸の飛び交うキルゾーンへ突撃をしかけるのみである。

倒れた仲間の死体が邪魔になり突進速度は鈍るが、弾丸は死体を軽く貫通するので、俺とゴブリンの距離は開く一方であり、そろそろこちらでも前進して洞窟へ追い詰めようか、と思った頃だった。

「ウォオオオー!!!」

一際大きな咆哮が当たり一面に響く。

ガトリングを撃ちつつ、その声を上げた方へ目を向ける。

またしても洞窟から現れた増援の内の一体なのだろう、その格好に特別他のゴブリンと差は無い。

しかし、ソイツの手にある大きな鉈が、一際異様を放っていた。ここにいるゴブリンが手にする武器は、弓や槍は手作りだろうし、武器としては実にお粗末なものである。

たまに剣を持っている者もいるが、どこかで拾ってきたのか、どれも刃こぼれしたり、錆びたりしていて、ロクに手入れがされていないのが分かる。

しかしその大鉈だけは見ただけで切れ味鋭いと、素人目にも分かるほどに輝きを放っている。

放つのは磨かれた輝きだけでなく、俺の黒色魔力に近い、どす黒いオーラも目に見えて吹き出ている。

なんだかヤバそうなのが登場したな、と思った矢先、大鉈を持ったゴブリンは、隣にいる仲間を突然その手にする凶器で襲った。

短い断末魔を上げて、仲間のゴブリンの首が落ちる、バターを熱したナイフで切るかのように、実にあっさりと。

「おいおい、本当にヤバイ奴だぞ」

ゴブリン共も大鉈持ちの異変に気づいたのか、突進を止めて、ソ

イツの方へ注目する。

その僅かな間にも、近くにいるゴブリンは次々と大鉈によって首を撥ねられるか、三枚に卸されるかの憂き目にあっている。

「クロノ、あれ、呪いの武器だよ！ 危ないの！」

「呪いの武器？」

そういえば、機動実験の時に、手にするだけで腕力が上がった、習得していないはずの魔法が使えたりする不思議な武器があった。

俺が武器を黒化するのと同じように、武器にも様々な効果を魔法によって与えることができるのだろう、という程度の認識しか無かった。

が、付与される魔法が必ずしも使い手のメリットになるばかりのものでない場合もあるんだろう。

それが、所謂『呪いの武器』と呼ばれているんだろうな。

敵味方の区別なく攻撃を仕掛けるようになるとは、随分と分かりやすい呪いの効果だな。

と、やや呑気に考えながら、未だ大鉈を振るい凶行を続けるゴブリンに目掛けて、ライフルを撃つ。

ガトリングを撃ちやめているので、狙いは正確、見事頭部を貫くはずだった弾丸は、

「グアウっ！」

軽く一振りされた大鉈によって弾かれる。

「マジかよ、何て反応だ!？」

白目を向き、ただでさえ醜い顔がさらに禍々しく歪んでいる大鉈ゴブリンは、ライフルを放った俺へと向く。

あ、これは、完全に狙われたな。

しかも登場時よりも確実に息が荒くなっている、涎やら鼻水やら流れ放題だし、白目も何だか血走ってきているぞ。

俺の一発がそこまで癪に障ったのか、呪いにイカれたゴブリンは確実にその怒りをヒートアップさせている。

コイツはちょっとばかり厄介な相手になるな……

### 第13話 ゴブリン退治（1）（後書き）

初めての主人公無双、クロノも楽しそうですね。リリィが足元をウロチョロしているようですが戦闘に支障はないようです、撃つてるだけだし。

ところでヤンデレの武器といえば斧か鉈と相場が決まっていますが、このバーサーカーゴブリンはヤンデレではありません、ただ呪いでラリってるだけなのでご安心を。

## 第14話 ゴブリン退治（2）

「クロノ！」

「リリイ、危ないからちよつと後ろに下がってな」

ゴブリンという種族自体猿のように身軽だが、それを越える脅威の跳躍力でその場から飛び上がる。

「ライフルっ！」

宙に舞うゴブリンへ向けてライフルの連射を浴びせるが、不自然なほどの動きで、ほとんどの弾丸を大鉈で叩き落とす。

何発か身を掠めるように当たるも、まるで痛みは感じておらず、変わらぬ速度で大鉈を振るい続ける。

これは完全に息の根を止めないと、いつまでも襲い掛かってくるタイプだぞ。

着地したゴブリンと俺の距離は3メートルほど。

目前にまで迫り、大鉈から発せられる『呪い』としか言い様の無い禍々しい力を肌で感じる。

「自動剣術」

接近した敵の足止め用にと背後に控えていた黒化した木の枝を操る。

もし、相手が並程度の武器であったなら、木の枝でも防げただろうが

「ギョアッ！！」

呪われた大鉈の前ではあっさりと両断される。

前後左右、合わせて4本の黒化棒は、何度かゴブリンの体を打ったり突いたりするが、ダメージが通っている様子はまるで無い。

棒と斬り合っている隙についてライフルを撃つが、超反応で弾かれるか回避される結果に終わる。

10秒もすれば、4本全て斬り捨てられ、ゴブリンは一直線に俺へ飛び掛ってくる。

「くっ、シールド！」

展開された黒色のシールドは俺の脳天を唐竹に割るはずだった一撃をなんとか防いでくれた。

自分のアンチマテリアルを重ね当てしてもひび一つ入らない今の俺が誇る最高硬度のシールドだったが、大鉈の凶刃はその半ばまで切り裂いている、もう一発受け止めたら割れるなこれは。

「散弾」

が、もう一発受け止めるつもりなど無い。

至近距離で散弾を喰らったゴブリンは軽々と宙を飛んで吹っ飛ばされる。

相当数の弾丸がその身を穿ったはずだが、呪いの効果である程度肉体も強化されているのか、未だ五体満足であった。

吹っ飛んでいる最中に、空中で猫のように体勢を立て直し、軽やかに着地する血まみれのゴブリン。

再び俺へ斬りかかると、一步を踏み出した瞬間、その足に黒い棒の切れ端が纏わりつく。

「ギッ!？」

黒化棒を斬り捨てて無力化できたと思っただろうが、二つや三つに分割されたくらいじゃ自動剣術は解けない。

サリエルには全く効果が無かった虚の突き方だが、呪いの武器で頭がイカれたゴブリン相手には有効だった。

足をとられ、顔面から思いつきり転倒するゴブリン、しかし、大鉈はしっかり握られその手からは離れない。

「アンチマテリアル」

それまで高速で飛び跳ねていたゴブリンだが、転んでくれたお陰で正確な狙いがつけられる。

さらに転倒状態ではろくに大鉈を振ることは出来ない、腕の構造を無視してまで一閃することは、いくら呪いの武器でも不可能だ。

放たれた弾丸は、強化された腕をもともせず撃ち貫き、完全に吹き飛ばす。

大鉈が握られたまま、ゴブリンの右腕が地に落ちる。

「ライフル」

腕が落ちるのと同じ時、放ったライフルはゴブリンの眉間へ吸い込まれるように命中し、血と脳漿をぶちまける。

「ふう、やっぱり接近戦は怖いな……」

使い手を失えば、如何に呪いの武器とはいえその威力を発揮する事は叶わない。

いや、独りでに動いて斬りかかったりしてこないよな？　と考えるが、大鉈が発す黒いオーラは治まっている。

「一応回収しておくか」

拾われたりして、またあの凶暴化ゴブリンの相手をするのは御免だ。

「クロノ、だめ！　危ない！」

言いつけどおり、ちゃんと後ろで大人しくしていたリリイだったが、俺が大鉈へ近づくのを見て静止の声を上げる。

まあ、呪いの武器を手にしうってんだ、普通は止めるよな。

「ああ、多分大丈夫だからリリイ」

俺は全く躊躇せず、大鉈の柄に手をかけると、その瞬間、

——憎——殺——愛——死——

「おおっ、これはちょっと懐かしい感覚だぜ……」

拘束のリングによって、頭の中に強制的に思念を流し込まれるのと同じ感覚だった。

身の毛もよだつ愛憎の思念が脳内に溢れる。

「五月蠅いぞ、大人しくしてろ——黒化っ！」

ゴブリンが手にした時と同じように、黒いオーラを噴出し始める大鉈に、さらに暗い俺の黒色魔力を上書きする。

思った通り、この大鉈に宿るのは俺と同じく黒色魔力、だが、その魔力量は圧倒的に俺の方が上。

どれだけの怨念を込めたか知らないが、絶対的な魔力量の差によって、俺をゴブリンのように狂わせ支配することは出来ない。

要するに、俺と大鉈の相性が良かったってことだ。

「ク、クロノ？」

「な、大丈夫だったろ」

はっはっはっは、と笑いながら大鉈をペン回しのように片手でくるくる回して遊ぶ。

俺にそんな器用さは持ち合わせて無いが、呪いの武器の追加効果である、その武器を使う技術が上がる効果によって、大鉈は自分の体の一部であるかのように扱うことができるのだ。

「呪いは？」

「ん、もう恨めしい声は聞こえ無いぞ。

でもリリイは触ったらダメだぞ、俺がコレを扱えるのは相性が良いってだけだからな」

「そうなの？」

「そうなんだ」

「そうなんだあ」

呪いの大鉈を手にしても、一向に変わる気配の無い俺に、漸くリリイが安堵の笑みを見せる。

しかし、ゴブリンの屍が散らかる所で二人笑いあっている場面ってちょっとシュールじゃなからうか。

「おっと、忘れるところだった、まだゴブリンは残ってるんだよな」  
気がつけば、未だ戦意の衰えないゴブリン共が、囲むように俺へと迫ってくる。

流石に警戒しているのか、四方に散ってじりじりと距離を詰める作戦に切り替えたようだった。

俺としてはそれでも問題無く戦えるが、リリイも包围の内側に入ってしまったら危険だ。

「リリイ、今の内に――」

下がれ、と言おうとした瞬間、飛来する風切り音を耳にする。

しまった、弓矢を撃たれたか。

見上げれば、前方の上空から降り注ぐように何十という数の矢が目に入る。

散弾で全て迎撃しきれんだろうか、ダメでも、手にする大鉈で俺の体に命中する軌道の矢は弾けるだろう。

どちらにせよ、先にシールドを半壊させられた所為で即座に再構築が出来ない。

今は、リリィを脇に抱えて迎撃した方が確実に安全――

「んんー！」

「あれっ!？」

地面に立つリリィを抱き上げようとしたが、気づけばいつの間にかリリィは俺の肩へと乗っていた。

短い両腕を前方に突き出し「んー」と目を瞑って唸るリリィ。

「ええーい!!」

気合一闪、リリィの可愛い雄たけびと同時に、その淡く光る白い体がより一層の強い輝きを発する。

「うおっ、眩しっ!？」

次の瞬間には、紅葉のようなリリィの掌から、光の帯が何本も放たれた。

「なんだ、ビームか!？ ビームなのかっ!？」

リリィによって上空へ撃ち出された幾本もの光は尾を引きながら、縦横に不規則な軌道を描いて迫り来る矢の群れへ飛び込む。

飛来する矢の何倍も速く軌道するリリィの光は、一本で複数本の矢を消滅させる。

「まさか、自動追尾してるのか」

しかも、高速で飛翔する矢をターゲットにしてだ。

そう呟いた時には、俺達へと迫っていた矢の雨は上空で残らず消滅し、迎撃の役目を終えた光も霧散して消えていた。

「……すげえ」

俺のライフルや散弾が玩具に思えるほどの高性能魔法だ。



すごいぞ、妖精ってな皆このレベルの魔法を使えるのか、そりゃゴブリン相手なんて余裕だろうよ。

「えへへ」

俺の尊敬の眼差しを受け、リリイが肩に座りながら照れ照れする。顔が近い、可愛さも三倍だ。

「はっ！」

いつまでも和んでいる場合では無い、未だ戦闘中、一息で斬りかかるほどに距離をつめつつあるゴブリンの包囲の中だ。

「俺もカッコイイとこ見せないとな」

リリイを優しく抱いて地面へ降ろすと、右手に大鉈を握り、左腕には装填を始める。

「リリイ、槍持ちは俺が絶対に近づけさせない、けどその間にまた弓を撃たれるだろうから、そっちの相手を任せてもいいか？」

リリイの戦闘能力は最早疑うべくもない、この状況下では協力した方が断然有利だ。

「まかせてっ！」

細い眉をきりりと上げ、自信に溢れる顔のリリイ。

「よし、任せたぜっ!!!」

言うと同時に、正面のゴブリンへ向かって俺は駆け出す。

銃を元にした黒魔法での中・遠距離での戦いが俺にとっての基本戦術だが、接近戦は全くできないワケじゃない。

常に距離をとって戦えるほど、あの機動実験は生易しく無かったさ。

ま、返り血を浴びるほど相手に肉薄するのは怖いことに変わりはないのだが。

「――散弾！」

前方に固まる三体のゴブリンを散弾で始末する。

それぞれ手にしているのは、槍とナイフと錆びた剣。

まずは錆びた剣を手にとる。

「黒化――自動剣術」

瞬時に黒化で錆びた剣を操作し、投げ捨てる。

再び空いた左手が、同じ要領でナイフを掴み黒化、さらに投げ捨て今度は槍を手にする。

「貫け」

瞬く間に黒化した3つの武器は、俺の背後に回って斬りかかって来るゴブリンへ向けて投擲する。

その間、後ろは振り返らず、さらに正面から同時に飛び掛って来る二体のゴブリンを、呪いの大鉈で纏めて両断。

「おおおっ、すげえ切れ味だ！」

ゴブリンが手にする武器も、革の鎧も、肉も骨も、一切の抵抗無く刃は滑り込む。

これなら鉄板でも紙の様に切れそうだ。

黒化武器は威力も上昇するが、これほどまでの切れ味を実現した刃は今まで見たことが無い、すげえ呪いの武器！！

「でやあっ！」

更に襲い来るゴブリンを、大鉈で次々と一刀両断していく。

俺に剣術の心得など全く無いが、身体強化の上に大鉈の扱い技術上昇効果によって、時代劇に見る侍のように華麗な剣舞を可能とする。

「どどーん！！」

俺の後ろで、この壮絶な斬り合いの修羅場に不自然極まりない愛らしい叫び声が聞こえた。

多分、リリィが魔法を撃ったんだろうなあ。

大鉈の一閃を防ぐ刃ごとゴブリンの首を斬り飛ばした時、洞窟の入り口に展開していた弓持ちのゴブリンが纏めて光の柱に飲み込まれていくのが視界の端に映った。

本当にリリィの妖精魔法は凄いな、俺もいつかビームとか撃てるようになるんだろうか？

「――お前で最後だっ！」

脳天から股下まで綺麗に真っ二つにして、取り囲むゴブリンは全

滅となった。

周囲には、最早数え切れないほどゴブリンの死体が転がる。どの死体も胴、頭、手足の何れか又は全てが欠損した、酷い有様である。

お陰で出血も凄まじいもので、あたり一面血の池地獄と化している、ついでに俺の浴びた返り血も結構なもんだ。

元々白かった服は汚れによって黒くなってはいたが、今は返り血によって赤黒い、より最悪なカラーリングへと成り果ててしまっている。

こんな殺戮現場にあって、そんな感想しか出ない俺は相当感覚がイカれたようだが、血塗れの俺を見てもにこにこ笑顔で出迎えるリイを見れば、まあ悪くは無いかなと思えてくる。

「弓を片付けてくれてありがとな」

「頑張ったの！」

「ああ、一撃だったもんな！ リイは凄いぜ」

「えへへー」

テレながらも誇らしげなリイであった。

「さて、大体は片付いたけど、まだ洞窟の中に残ってる奴らがいるんじゃないか？」

「どうする、入って始末してくるか？」

「んーん、もういいの」

「そうか？」

「うん——」

そうして、本日三度目のリイの大発光。

弓持ちの群れを一掃したと思われる光の柱が、洞窟の入り口近くに突如として出現し、そのまま崖を撃つ。

あの光の柱が如何なる攻撃力を秘めているのか、見た目ではよく分からなかったが、崖の斜面は大爆発を起こして、洞窟の入り口を埋める崩落が発生する。

洞窟内に隠れていたゴブリンが、何体か慌てて外へ飛び出してく

るが、降り注ぐ岩によって残らず押しつぶされてゆき、砂礫で埋められていく。

「……あーあ」

崖崩れが治まると、洞窟の入り口は塞がれ、まだ中に残っているだろうゴブリン諸共、完全に生き埋めにしてしまった。

一発の魔法で、さっさと殲滅を完了したリリイであった。

「かえろ、クロノ」

ちよつと呆然としていたが、リリイに裾を引っ張られて我に返る。

「あ、ああ、そうだな、帰るか」

「うん」

よちよち歩きながら上機嫌に森へ歩いていく小さな後姿を眺めながら、俺はリリイを絶対に怒らせないようにしよう、と堅く心に誓ったのだった。

## 第14話 ゴブリン退治(2) (後書き)

クロノは『ヤンデレの鉈』を手に入れた！ クロノにとって初めてのパーティ戦ですが、妖精達からハブられてたりリイも誰かと一緒に戦うのは初めてのはずです。ところで二人共遠距離攻撃が強い魔術士タイプなのでバランスが良いとは言い難いですね。

あとついさっき気がついたのですが、第2章からタイトルに話数をつけるのを忘れていました……修正しておきます。

## 第15話 心と体の洗濯

リリーの小屋の近くには、光の泉から流れてきているのか、異常に綺麗なせせらぎが流れていた。

ゴブリン退治を終え、返り血でドロドロに汚れた俺は、真っ直ぐここへとやって来た。

当然石鹸などとは無く冷たい水だけで体と衣服を洗うが、これまでに無いほどさっぱりとして、心身共に洗われたような気になる。

もつとも、血に浸したように赤黒くなった貫頭衣は、元の白さに戻るのは最早不可能なレベルであった。

「あん時はいつも丸洗いだったからなあ」

実験施設にいた頃でも、一応は体を洗うことは出来た。

出来たのだが、公衆トイレの個室くらいの大きさの密室に入れられて、どこからとも無く吹き出るジェット水流によって衣服ごと洗浄されるのだ。

綺麗にはなるものの、そのまま洗濯機に放り込まれたような感覚になる、実際何度か溺れかけたこともある。

今はこうして綺麗な水と、自分のペースで洗える時間があるというだけで満足だ。

しかし今の俺は森の中で全裸だぞ、ちょっとした変態気分だが……いいじゃないか、妖精のリリーだって素っ裸じゃないか。

いや、愛らしい少女の姿をした妖精と身長180越えの男子高校生では、同じ裸でも全然違うだろ。

そんなコトは置いといて、そういえば、この世界には風呂はあるんだろうか？　なんて思いながら、手ごろな岩に腰掛け、本日二個目の林檎を食べる。

「うん、美味い」

俺が施設を抜け出した後、初めて食べたのがこの通称・林檎だ。

川で飲んだ水も美味かったが、爽やかな酸味と甘味の赤い果実は、

全く別次元の旨みである。

あまりの美味しさに、この果実と本物の林檎の味の微妙な違いについて冷静に認識できるようになったのは5個目以降のことであった。

俺が忍び込んだ貨物は、幸運にもこの林檎が一杯に詰まった木箱だったので、一人で食う分には困らなかった。

航海中は、寝るか林檎を食うか、頭の中だけで魔法の開発をするかだけであった。

そうして生まれた魔法の一つが『ガトリング』であるが、まあその話は置いておこう。

それで俺はうっかり深く寝入ってしまったようで、パンドラ大陸の港についてから荷揚げ、それから陸路で輸送、の間の記憶が全く無い。

あの崖の上を馬車なんかで運んでいる最中に、運悪く荷物が崩れて落ちたんだろうな。

本当のところ、林檎を運んでいた馬車がゴブリンに襲われたりしていたとしてもだ、今の俺には何の関係も無いので、これ以上は考えても無駄だろう。

「しかし、『影空間』だけは覚えておいて正解だったな」

食べ終えて、芯だけになった林檎を投げ捨てる。

残骸は、俺から延びる影へ吸い込まれるようにして消えた。

『影空間』は、自分の影に空間を作り出す魔法である、勿論これは俺の勝手なネーミングで正式名称は知らん。

俺と同じ実験体との戦闘で、この影空間を使ってくるヤツが何人かいた。

最初は「何も無い空間からいきなり剣を出した!？」としか思わなかったが、何度か見える内に、その魔法の正体が判明したのだ。

自身の影を出入り口にして、武器やアイテムを収納している。

まるで四次元ポケットみたいなのその能力に、原理のイメージが持てず、習得するのにえらい苦労した。

結果、『影の中に黒色魔力の固まりを出現させるイメージ』で、ある程度の空間を影の中に作り出すのに成功した。

およそ2メートル四方の空間を存在させることが出来るようになったが、明らかにその容積以上の武器を収納していた者もいたので、今の俺は初級レベルといったところだろう。

この魔法を極めたら、もしかしたら本当に四次元空間を作り出せるのかもしれない。

それは兎も角、全く重さを感じずいつでもどこでも持ち運びが出来る、一度空間を作れば（その時は結構魔力を食う）その持続に魔力は必要としない、開閉時に僅かな魔力を消費するだけ、と、この影空間は非常に便利である。

今のところ、俺が木箱からくすねてきた林檎24個は、今も陰の中で黒色魔力に包まれて保管してある。

リリイに半分上げたとしても、あと12個は食えるな。

それと、ゴブリン退治で一番の戦利品である呪いの大鉈も仕舞いこんである。

あれほどの威力を発揮する一品は、この異世界でもそうそう無いだろう、あの切れ味にすっかり惚れ込んでしまったぜ。

あ、これはもしかして呪いの効果で魅了されてるわけじゃないかな？

まあいい、他にも、ゴブリンの持ってた剣とナイフで、比較的マシなモノを黒化して収納してある。

こちらはゴミ以上の価値は無いだろうが、錆び付いていてもそこは本物の武器だけあって、木の枝よりはマシな攻撃力と耐久力を発揮してくれる。

持ち弾は大いに越したことは無いしな。

ついでに、さっき捨てた林檎の残骸は影の中で魔力に分解・吸収される。

これも他の実験体が使用していた影空間と併用して使っていたものをパクったものだ。



戦闘において、俺の投擲した黒化剣を影で受け止め、魔力に分解・吸収して自分の攻撃に上乘せするというような事を一瞬でやった。

今の俺のレベルでは、低速な上に分解・吸収するだけで吸収分の魔力量を上回る消費と言う赤字経営な性能となっている。

あの実験体のようにロスなく魔力を吸収するなんてことはしばらくできそうにない、できていれば、飛来する矢を吸収して黒化、そのまま撃ち帰すなんて芸当も可能だったろう。

どちらにせよ、今の俺には土台無理な技である。

しかし実戦で活用できなくとも、こうしてゴミを捨てるのには便利なものだ。

彼もこの魔法にこんなエコな使い方があったとは思うまい。

「……悪いな、俺だけ逃げ出しちゃって」

やめよう、今の俺は他人の安否を気にかけられるほど強くはないし、余裕も無い。

ゴブリンを何体倒せたところで、自慢できるほどの強さじゃない。俺より強い奴は、あのサリエルのように他にいくらでもいるのだろう。

結局のところ、自分一人がヤツラから逃れるのに精一杯で、他の実験体を助けに行こうなどとは思わなかった。

「そろそろリリィのところに戻るか」

無為な思考を打ち切った俺は、体と洗濯物を乾かせる魔法が出来ないかな、と考えながら小川を後にした。

## 第15話 心と体の洗濯（後書き）

イメージさえ上手くいけば望む効果を発動できるとは便利ですね  
黒魔法は。四次元ポケットは憧れの能力の一つですが、影空間だけで無限に収納とはいかないようです、地道に容量を拡大していきます。

## 第16話 最初の友人

「おじゃましまーす」

「どうぞ!」

小屋の扉を開けると、リリイが笑顔で迎えてくれる、ただそれだけで、俺は癒される。

しかしながら、今の俺の格好は濡れたパンツ一丁、感慨に耽っている場合では無い。

「クロノ、これ」

「ん?」

リリイが差し出してくれたのは、ふかふかした長方形の白い布地、タオルなのか?

「使っていいのか?」

「うん」

「ありがとな」

とりあえず、これで濡れたパンツを乾くまで穿いている必要性は無くなった。

タオルを腰に巻きつけて、脱いだパンツは外の枝に干しておいた貫頭衣の横にかけておくことにしよう。

タオルで頭を拭きながら、俺は考える。

「さて、とりあえず何処で服を手に入れるかな」

リリイはそもそも服を着ていないので、詳しいことは知らないだろう。

薬草を売りに行くという村まで行けば、一着くらい服は手に入るだろう、最悪布だけでも良い。

「なあリリイ、近くにある村に服を売ってる店はある? あつたとしたらいくらくらい?」

「?」

あ、ぽかんとした顔をしているぞ、二つ同時に質問したのは不味

かったか？

「んーとね、道具屋さんに売ってると思う」

「道具屋さんって何を売ってる店？」

「んー、何でも！」

服は分かんないけど、ヨロイは売ってるの！」

「鎧が売ってんのか、それは確かに何でも売ってるな」

日用雑貨だけかと思ったが、モンスターが出没する世界である以上、武具ってのは俺の世界よりも需要が高いのだろうな、村でも取り扱っているなんて。

「クロノ、あがって！」

「ん、玄関で立ち話もなんだからってか、お言葉に甘えて上がらせてもらおう」

玄関、とは言うが小屋の作りは西洋風なのか靴を脱ぐような場は無く、そのまま床が地続きなだけだ。

海外旅行をしたことが無い俺だったが、まさか異世界でこの靴を脱がずに家に上がる不思議な感覚を味わうことになるとは。

一応、軽く足についた汚れを払って一步を踏み出す。

リリイは俺と同じく裸足で木の床をペタペタと歩いている。

身長が俺の膝くらいまでしか無いリリイを見ると、この小屋でも大きく見えるが、俺は無駄に育ったこのデカイ体のお陰で少々狭く感じてしまう。

小屋としてはそこそこの広さはあるのだろうが、大きな書架や棚が並んでいるのをはじめ、木箱や謎の袋も積み上げられ、かなり圧迫感を憶える。

備え付けられているベッドと小さなテーブルだけが唯一生活感を醸し出している。

リリイが住むのに必要無いものが多そうだが、この小さな体で巨大な書架や棚を片付けろってのは無理な話か。

「すわって！」

キヨロキヨロと部屋を見回していた俺にリリイが呼びかける。

見れば、ベッドの上に飛び乗ったリリィが、白いマットを両手でぽんぽんと叩いている。

椅子は無いので、座るとしたら確かにそこしかない。

返事をしながらベッドに腰掛けると、マットのふんわりした感触に思わずうっとりする。

これまで固い床の上でしか寝てこなかったのだ、この柔らかさは贅沢すぎる。

と、浸っていると、

「お茶入れるから!」

いえお構いなく、と遠慮して言おうと思ったが、目をキラキラさせてやる気に溢れるリリィの姿を見ると、

「ありがとう」

としか言えなくなる。

すでにタオルを借りてしまったし、このまま居座ると加速度的にリリィへの借りが増えていってしまいそうである、お茶はその第一歩な気がしてならない。

ごめんよりリリィ、今は体と黒魔法以外に何も持たない俺だけど、いつかこの恩は十倍返しにするから!

堅く心に誓いながら、お茶を入れているリリィへと目を向ける。

「ふうー!!」

リリィは火を噴いていた。

ドラゴンかよ! と立ち上がって突っ込みそうになったが、落ち着け、あれはただの魔法だ。

言葉の通り、リリィはその小さな口から高熱の火炎放射を小型の釜(?)へと吹き付けている。

炎を発する魔法を使うヤツは結構多かったが、人型なのに口から火を噴くのは始めて見たぞ、あれも妖精魔法なのか?

色々と疑問が湧いて来るが、あまりに一生懸命にお茶を入れる準備をしているリリィの姿に、声をかけることができない。

ここは大人しく待っているでしょう――

「できたよー！」

その声で、思索という名の浅い眠りについていた俺の意識が現実世界へと戻る。

テーブルの上に仁王立ちするリリイと、その前に置かれる湯気を上げて芳しい香りを放つカップがティーポットと並んで置いてある。「おお、ありがとな」

小さな子供のようにしか見えないリリイが果たしてちゃんとお茶をいれられるのかどうか若干心配だったが、見事に用意できている。カップに入っているのは紅茶だろうか？ その色と香りからかなり近いように思われる。

「飲んで、クロノ！」

期待に満ちたリリイの眼差しを一身に受ける俺。

「おう、いただきます——」

と、カップに手をかけたのと同時に気がついてしまった。

「あれ、リリイの分は？」

テーブルには、俺が手をかけているカップの他には、ティーポットがあるのみである。

家主である彼女の分が無いのは、うっかり忘れてしまったのだろうか？

「一つしかないの」

「え、何が？」

「カップ」

「そうなの？ どうして——」

言うてから、もしかしてお金が無いのか？ だとしたら拙いことをうっかり聞いてしまったぞ、と後悔したが、

「誰も、来ないから。」

でも、クロノが来てくれた、はじめて来てくれた、リリイとっても嬉しいの」

俺はもっと後悔した。

そうか、光の泉を追放されるってのはこういう事か。

もし村に暮らしていればこんなことも無かったんだろうが、妖精である以上リリイは森を離れられない。

だからこそ、最初から光の泉を追放されることさえ無ければ、普通の妖精と同じように、仲間達と毎日楽しく過ごしていたのだろう、辛いことも、悲しいことも無く、幸せなまま一生を送れた――

けど、こんなことは今俺が言うべきことではないな。

追放されたことを受け入れたのも、村に住まないのもリリイ自身が決めたことだ、それを否定するべきではない。

「俺がここへ招かれた友達第一号って事か、光栄だぜ」

「トモダチ？」

「ああ、なんと言っても俺達はゴブリンの大軍を相手に背中を預けて共に戦った仲だ、すでに単なる友達以上である事は間違いない！だから俺は、これまで頼れる人がいなかったリリイに、力を貸してあげられる最初の一人となる。」

この異世界では無知もいいところで大した力にはなれないだろうが、それでもモンスターの相手くらいはできる。

「うん、リリイ、クロノとトモダチ！」

この日一番の笑顔を見せてくれるリリイ。

けれど、この敵しかいなかった異世界で、心の許せる最初の友人が出来た俺の方が嬉しいのだと思う。

そう、彼女と出会えただけで、ここへ来て良かったと思えるほどのからだから。

## 第16話 最初の友人（後書き）

今更ですが、リリィは立派なヒロインです、決して魔法少女に行する喋る小動物的なポジシヨンのマスコットキャラではありません。リリィは一人ぼっち、友達0、と見事に依存型ヤンデレに成長する要素が揃っております。ヤンデレタグに恥じないようなリリィの今後の成長に乞うご期待！



## 第17話 黒魔法使いクロノ

翌日、俺は日の出と共に目を覚ました。

異世界に来てから、初めて清々しい目覚めを経験したと思う、やはりベッドは偉大だな。

フカフカのベッドの上には、腰にタオルを巻いただけのほぼ全裸な俺と、最初から全裸なリリイが横たわっている。

アレ、これだけ聞くと途端にいかがわしいシチュエーションじゃないか？

大丈夫、俺は何もやましいことなどしていない、何故なら俺は紳士だから、YESロリータNOタッチ、いやロリコンじゃないよ、本当だよ。

ええい、兎に角一緒に寝たというだけのことだ。

俺としては野宿でも構わなかったが、リリイが是非にと小屋へ宿泊する事を勧めてくれたので、お言葉に甘えることにしたのだ。

あまり損得勘定が出来ないのか、超絶お人よしなのか、リリイには世話になりっぱなしにも関わらずソレを全く気にする素振りは見せない。

当然、俺だって一方的に施されまくったりリリイへの借りを踏み倒すつもりは毛頭ない、受けた恩は絶対に返す覚悟がある。

しかし、こうあまりに何も持たざる男である俺なんかこんな施ししまくって大丈夫なのだろうか、もしも俺がただのパラサイト野郎だったりしたら……

いかん、俺がこの天使、じゃないや、妖精を守ってあげなくては、という気になってくるのはただの思い上がりの勘違いだろうか？

いいさ、どうであれ俺はリリイに対しては礼と義を尽くして付き合っていくつもりだ。

「さて、とりあえず服に着替えるかな」

未だ小さな寝息を立てるリリィを起こさないようにベッドを抜け出し、小屋を出た。

「うーん、ちよつとは綺麗になっちゃいるが……」

着たいとは思えないな。

洗った時から分かってはいたが、血と汚れで赤黒くなった貫頭衣は、その色合いが若干薄まっただけで、元の白地はほとんど見受けることが出来ない。

ぶっちゃけ汚い、穴もあいてるし、こんなもん元の世界で来て歩いてたら一発で通報される。

「でもこれしかないしな」

今日は近くの村に行く予定なのだが、人里に下りる以上服を着ていることは必須条件だ。

リリィは俺がパンツ一丁だろうがタオル一丁だろうが全く気にしないが、そういうのは例外中の例外だろう。

この異世界の住人が普通に衣服を着て生活していることは、あの港町で証明済みだ。

なので、俺も一応は服を着なければいけないのだが、正直なところこんなもん着るくらいなら裸の方がマシな気さえしてくる、少なくとも、昨日駆除したゴブリンのほうがまだ上等な格好だった。

だがどんなに文句を重ねたところで服が綺麗になるわけでもない。しぶしぶ袖を通して、すでに着慣れたオンボロ貫頭衣を着る。

「さて、どうやって服を手に入れたもんかな――」

爽やかな朝の微風に吹かれながら、小屋の裏手に雑然と置いてある木箱の一つに腰をかけてロダンよろしく考える。

芸術的なポーズで思考していると、

「あ、クロノ、おはよう」

リリィがやってきた。

「おう、おはよう」

思わず「おはようじよ」とか言ってしまうそうになったのは秘密だ。

「宝箱に座ってなにしてるの？」

「宝箱？」

ただの木箱じゃ無かったのか。

降りて、座っていた箱をよくよく観察してみると、なるほど、確かに鍵穴がある。

「宝箱か、中には何が入ってるんだ？」

「さあ？」

小首をかしげるリリイを見ながら、俺は内心ちよつとワクワクしてきた。

「開かずの宝箱なんて面白そうじゃないか、しかもこの持ち主は魔法使いときたもんだ、リアルでこんなのに出会えるとは、魔法世界さままだぜ」

この小屋にあるものは、数少ないリリイの私物以外は全て以前住んでいた魔法使いのモノだ。

「宝箱開けるの！？」

「おう、気になるだろ。」

あ、開けちゃマズかったか？」

「開けてっ！」

期待に満ちたキラキラ瞳が向けられる、そんなリリイに見つめられちゃあ俄然やる気が出てくる。

「よし、俺に任せろ！」

俺はヤル気と魔力を漲らせて木箱、改め謎の宝箱に向かい合う。

どう見ても木製の宝箱、破壊しようと思えば簡単だが、それはあまりにスマートさに欠けるってものだ。

こういう時に壊していいのは鍵部分だけだと俺は思う。

「ふんっ！」

なので、とりあえず腕力のみで開閉に挑戦する。

この木箱はゲームのRPGに登場するような、上開きのタイプと

なっている、手をかけるような部分はないが、今の俺の力なら――  
「つつ!？」

ある程度に力をこめると、触れた先から電流のようなモノが走った。

反射的に手を引っ込めるが、ダメージ自体は大したモノではなさそうだ。

「トラップ、いや、魔法でプロテクトがかけられているみたいだ」

「クロノ、だいじょうぶ？」

「ああ、怪我するほどの威力じゃない。

けど、流石は魔法使いの宝箱ってところか」

ここまでして嚴重に保管してあるってことは、俺が思う以上のお宝が入っているに違い無い。

第一希望・金銀財宝、第二希望・スゴい魔法アイテム、第三希望・服（男性用XLサイズ）。

「まさかミミックだったたりして――」

何気なく呟いた一言で、途端に嫌な予感がした。

「なあリリイ、まさかモンスターが入っていたり、封印された手のつけられないヤバイ存在が入っていたりしないよな？」

「モンスターは入ってないよ？」

「もう一度聞くけど、開けていいんだな？」

「開けてっ!」

再び期待に満ちたキラキラお目目、これはもう絶対に後には引けない。

ま、俺としてもここでビビって放置なんて選択肢は無いのだが。

「魔法でガードしてるってんなら、こっちも魔法で対抗だ――黒化!」

両手で宝箱に触れ、全力で黒色魔力を流し込む。

これまでは武器か棒状のモノかボールのようなモノにしか使ったことないが、黒化が成功すれば、電撃みたいに俺へ危害を加える効果を無効化できるのは間違いない。

手を触れずに持ち上げたり、ぶん投げたりは出来るだろうが、鍵を開けさせるような操作が出来るかどうかは分からない、なぜなら鍵のような‘機構’を備えた物を操ったことはないからだ。

「よし、黒化は出来た——けど、鍵は操作できないな」

俺自身が鍵の構造を理解できていないからか、正確ではないにしてもイメージが不足しているからか、鍵を操作して開けさせることは出来ないと理解した。

「なら、直接弄らせてもらおうか」

電流トラップは無いので、ここで再び力づくで開けるという事も可能だろうが、どうやら並以上には強化されているようで、力押しはあまり有効では無さそうだと分かったので無しだ。

そこで利用するのが、俺のもつ唯一の回復(?)魔法である肉体補填だ、黒色魔力をゼリー状にして傷口を塞ぐアレな。

同じ要領で、鍵穴に魔力を流して固める、で、それを回す。

錠の構造など詳しくないが、流石に鍵穴の空間全てを固めれば空くという事はないだろうから、上手く仕掛けに反応する部分を、手探りならぬ魔法探りで——

「どう？」

しばらくガチャガチャやってるので、不安になったのかリリイが聞いてくる。

「うーん、もうちょっとで——おっ！」

反応アリ!　と思うと同時に、カチリ、と音を立ててついに開錠が成功する。

「「開いたっ!」」

完璧に声がハモる、いや、こういう時はこの台詞しか出ないだろう。

「よし、開けるぞリリイ!」

「うん!」

二人とも最高潮のワクワクを感じつつ、宝箱を開ける。

「こ、これは!？」

とは言ってみるが、パツと見では良くわからなかった。

何故なら目に入ったものは、何かを包んでいる黒い布だけだったからだ。

まあ、ミミックじゃなかったただけ良かったとしよう。

「これなにー？」

「何だろうな」

とりあえず、布を掴んで引きずり出す。

厚手でしつかりとした作りの布地、結構な大きさと、何より、触れた先から僅かに魔力を感じる。

「これは……もしかして魔法使いのローブじゃないか!？」

広げてみれば、これは確かに衣服であり、その装いに黒一色というのは、事前知識無しでも魔法使いのローブを連想させただろう。

「クロノ、着てみて!」

「おっ、いいのか、それじゃあ着ちゃうよ俺!」

待望の衣服だ、しかも本物の魔法使いのローブとなればテンションも鰻登ってしまうというものだ。

いざ着てみれば、大きさは測ったかのようにぴったりで、着心地は抜群だった。

厚手だが、不思議と暑苦しく感じないし、なにより全身を包む魔力が心地よい、恐らく、同じ黒色魔力だからだろうか。

「どうよ、似合ってる？」

「うん、カッコいいよクロノ!」

「はっはっは、照れるなあ、でもこれで俺も本物の魔法使いって名乗れるんじゃないか？」

箒で空は飛べないが、魔法が使えるのは事実だ。

「うん! クロノは魔法使いなの!」

「そうか、リリィがそう言ってくれるなら、今日から俺は魔法使い、いや、黒魔法使いだっ!」

その場の勢いで調子に乗っただけな気がしなくも無いが、ともあれ、俺はこれ以降黒魔法使いと名乗ることに決めたのだった。

## 第17話 黒魔法使いクロノ（後書き）

クロノは魔法のローブを手に入れた！ 順調にクロノの装備が整ってきましたね。この黒いローブにヤンデレの鉈を装備すれば立派な不審者に見えることでしょう。

## 第18話 イルズ村へ(1)

宝箱の中に入っていたのはローブだけで無く、他にはタクトとナイフが一本ずつ入っていた。

きっと魔法使いが愛用していたのだろう、どちらも中々上等な一品だと思う。

俺は機動実験の際に、ローブを纏いタクトを振るうオーソドックスな魔法使いタイプのヤツも相手にしたことがある。

魔法を防ぐ効果のローブや、魔法の強化もしくは魔法そのものが秘められたタクトを、戦闘中に鹵獲して使ったことがあるから、なんとなく比較対象ができるのだ。

当然の事ながら、戦闘終了後には例のマスク共に奪った装備一式全て没収となる。

そんな苦い思い出はさておき、このローブは着て見て触った感じでは、あれらよりも僅かに上質だと思えるし、タクトの方は黒色魔力の使用を前提に作られたもののようで、俺でも上手く扱えそうだな。ナイフの方は多分魔法の武器なのだろうが、コツがいるのか呪文がいるのか、ちょっと使い方は分からなかった、もっとよく調べる必要有り。

タクトに関して言えば、そもそも魔法使いが使用する杖や本は誰でも扱えるわけでも無く、同じ魔法使いでも火が得意、水が得意、といったような相性もある。

ついでに俺が黒色魔力にサリエルが白色魔力だが、火、水、風、雷といったのを扱う魔力は、赤青など見た目通りの色付きで、全部合わせて原色魔力と呼ばれる。

呼ばれる、と言い切りなのは、魔法に対してある程度の知識がボンヤリと頭の中にあるからだ、恐らく改造実験の一つの効果なんだろう。



これのお陰で、魔法の存在に対して理解や適応が早かったのだ。少々話がそれたが、このタクトはどうやら黒色魔力専用で作られたようで、触った瞬間これをどう使えばいいのか理解できた。

まるで俺専用装備、誰かが意図的に用意したんじゃないかとすら疑えるが、以前住んでいた魔法使いが、俺と同じタイプ、つまり黒魔法使いだったと考えるのが一番妥当だろう。

ともあれ、村へ行くのに恥ずかしい格好が出来たという点ではこの上なく幸いなのである、何だか最近の俺はえらい運気が上昇してきたように思えるな。

しかしながらこの上質な黒ローブの下はトランクス型のパンツ一枚、万が一にも脱げたりめくれたりしないよう油断は禁物。

折角の村デビューだというのに猥褻な容疑でお縄につくのは絶対に御免だ、衣服の入手は依然として最優先事項だ。

「よし、それじゃあ行くか！ 道案内よろしくなりリィ！」

「うん！」

期待に胸を膨らませて、俺とリィは二人並んで歩き始めた。

これから向かうのはイルズ村というのだとリィから聞いている。勝手に超絶下田舎の山村をイメージしていたが、そこその大きさを持つ街道に面しているため、それなりに規模のある村なのだそうだ。

というのも、森を抜けこうして街道までやってくると納得できる。しかしながら、パンドラ大陸でも中世レベルの文明なようで、街道といってもアスファルトで舗装されているわけでもなく、石畳も敷いていない、土向き出しの道路である。

それでも、見たところ馬車二台は並んで通れるくらいは道幅があるので、小道というほどでもない、いや、これで幹線道路なのかもしれないな。

「あっちに行くとクウアル村なの」

「なるほど、村と村がこの道で繋がっているのか」

フェアリーガーデンの外れにある、リリィの住む小屋からはイルズ村が最も近く、クワアル村は次点、リリィが飛んで行っても一日はかかるらしい。

実際どんなものなのかは歩いてみないと分からないが。

「イルズ村には、このまま歩いて行けば昼前には着きそうか？」

「うん」

特別急ぐわけでもないので、のんびり行こう。

そうして、リリィと手を繋いで歩いたり、肩車で歩いたりしながら、晴れ渡った空の下ひたすら道を歩いていく。

「そういえば、通る人が誰もいないな」

この道を歩き始めて2時間は経過したが、未だに人影は見えない。あまり村々の行き来は盛んではないのか？ いや、現代だから車なり電車なりあるが、中世レベルでは馬車を持つ商人か旅人でもなければ村を離れないのだろうか。

その辺は暮らしているうちに、段々分かってくることだし、今考えても正しい解答は得られないのは間違い無い。

そんなことを考えていると、前方について建物の影を発見する。

「お、ついに村か！？」

喜び勇んで駆け寄ってみる、ちなみにリリィは俺の肩の上だ。

その建物は木造の小さな家屋で、明らかに人が生活している形跡が見受けられる。

が、どうにもこの家、縮尺がおかしい。

「なんか、やけに小さいな」

ドアなど俺の首元くらいの大きさしか無く、平屋だがその屋根には手を伸ばせば簡単に届くくらいに低い。

有名な大作ファンタジー映画三部作に登場したホビットの家を彷彿とさせる。

「クロノ、ここはね——」

リリィが言いかけた時、すぐ傍に気配を感じた俺は、即座にそち

らへ注意を払う。

小屋の影から、手に鎌を持ったゴブリンが現れた。

「昨日の生き残りか？」

それにしては、少々格好が異なる、粗末なボロや革を纏ったのは違い、上下揃いの布の服を着ている、まあ緑の肌のゴブリンであることに変わりはないのだが。

それよりも、こんな所にモンスターが出現するなんて、もしかしてこの家の住人は襲われたのかも、と最悪の予想をする。

すでに臨戦態勢となった俺は、いつでも『散弾』を撃ち出せるように構えた瞬間――

「なんだい兄ちゃん、リリイさんの知り合いかい？」

「は？」

と、このゴブリンはいきなり流暢な日本語で話しかけてきた。

いや、正確にはこの世界のオリジナル言語を喋っているだけで、改造によって俺の頭が勝手に理解できるようになったただけなのだが、そんなことは今の問題では無い。

「こんにちは！」

「あい、こんにちは、今日は葉売りに来たワケじゃあなさそうだねえ」

「うん、今日はね――」

ゴブリン相手に突然始まる世間話、一体なんなんだこれは、昨日あんなにジェノサイドった相手にどうしてこうもフレンドリーな接し方なんだ？

「あ、あのう」

とりあえず戦闘という雰囲気ではないので、意を決し俺も話しかけてみる。

「おお、そういえば兄ちゃんが誰か聞いてなかったな。

まあリリイさんの連れってんなら悪いヤツじゃなさそうだが」

「黒野真央と言います、よろしく願います」

一体何をこのゴブリンによりしくするのは分からないが、敬語

で自己紹介をしてしまう。

「おうおう、こりゃご丁寧にどうも、オレはヴァーツってんだあんで兄ちゃん、姓なんてあるってこたあひよっとして貴族なんかかい？」

「貴族？」

「クロノはね、魔法使いなの！」

「魔法使い？　おお、言われて見ればそれらしい格好してんなあ」

「昨日ね、ゴ布林退治と一緒にしてくれたの」

「そりゃ本当かい、最近また出るようになってたから山狩りでもしようかねって話だったんだが、いやあ助かったよ、いつもスマンねえ」

ゴ布林がゴ布林退治されたことを喜んでるってどういうアレなの？

「なあリリィ、この人(?)はゴ布林じゃないのかよ？」

本人に直接聞くには躊躇われる為、リリィに小声で聞いてみる。

「ゴ布林だよ？」

何故そんなことを聞くのか分からないといった顔のリリィがしれつと答える。

「あー兄ちゃんや、ひよっとしてモンスターに詳しくないね？」

「は、はあ、出来れば教えて頂けると嬉しいですが」

「おうおう、まあオレらから見りゃ同じゴ布林たって全然違うんだけどよ、他の種族のヤツらから見りゃ違いがイマイチ分からんようだしなあ」

「ゴ布林ではあるけど、退治したゴ布林とヴァーツさんみたいなのは別モノってことですか？」

「さっすが魔法使い、一発で分かってくれるたあな」

ケタケタと笑うゴ布林のヴァーツさんは、俺が殺しまくったのとやっぱり同じに見える、が、こうしてマトモに話していると雰囲気は全然違う。

姿こそ同じだが、中身は俺と同じようにまるっきり人間だと思え

る。

「それじゃあイルズ村の村人ってことですか」

「おう、オレは外れんとこで野菜と葉草作ってんだあ」

だから鎌を持ってるのか、その外見で刃物を持ってたら凶器以外の何物にも見えないが、うーん、俺もその内慣れるんだろうか？

「イルズ村ってゴブリンの村なんですか？」

「いんや、人間やら獣人やら色々いるぞ、兄ちゃんはこういうトコは初めてかい？」

「そうですね、この辺に来るのは初めてで、分からないことだらけです」

うん、嘘は言って無いぞ。

「そうかい、この辺は種族バラバラでごちゃ混ぜに住んでる村が多いんだ。」

オレは行ったことあねえが種族ごとに住んでるところもあるってえし、そういうトコから来たヤツは大抵驚くな」

なるほど、多民族な村と単一民族な村があるんだな、俺はてっきり人間だけで構成された世界だと思っていたが、ヴァーツさんみたいに知性のある喋るモンスターみたいな種族も、ここでは人間と同等扱いなんだろう。

単一種族のとは排他的っぽいけど、このように多民族が基本なら、余所者の俺でも受け入れてくれる余地はありそうだ。

現にヴァーツさんは友好的に接してくれている、リリーの連れだと思われている点も大きいと思うが。

「ま、みんな気のいいヤツらだしすぐ慣れるさ、兄ちゃんみたく人間族もいるしなあ。」

こん先行ったらすぐ村の中心だ、リリーのさんの連れならあっさり入れてくれるだろうよ」

「そうですか、色々ありがとうございます」

あまり引き止めるのも悪いだろう、もう少し色々聞いておきたいが、それは別な人と話すことにしよう。

「おう、そんじやリリィさんも、薬が出来たらよろしくなあ」

「うん、バイバーイ！」

そうして、第一村人であるゴブリンのヴァーツさんと別れ、村の中心部へと向かう。

## 第18話 イルズ村へ(1) (後書き)

第一村人発見！ というだけで一話つかってしまいましたね。パツと見て野生のゴブリンと村人のゴブリンを見分けるのは難しいようです。間違って駆除しないよう要注意。

## 第19話 イルズ村へ(2)

程なくして、左右に広がる2メートル程度の高さの柵が見えてきた。

俺が最初に訪れた港町と同じように、村の四方を囲っているが、この木の柵も村の建物も、あの港町に比べれば随分と小さなものだ。ただ村の建物全てが柵の中にあるわけではない、先ほど出会ったヴァーツさんはじめ、点々と農家と思われる家が建っていたので、この柵の内側はあくまで村の中心地的な意味合いを持っているに過ぎないそうだ。

最初は柵に囲まれた範囲にしか村は無かったが、人口の増加に伴って村の面積は拡大、しかし新たな柵を拵えるのは未だ出来ていないというのが、ここへやって来るまでにリリイと長いやり取りを経て分かった事実である。

「あれが正門だな」

「うん」

道の前には木製の簡素な門があり、今は開け放たれている。

その横に、門番であろう槍を持った大きな人影が見えた。

「おんや、リリイさんでねえか」

軽鎧姿で長槍を抱える姿は港町の門番と同じように見えるが、その身は鮮やかな青色の鱗に覆われた蜥蜴頭の大男だ。

リザードマンというやつだろうか？

「こんにちは！」

やはり顔見知りなのか、リリイと挨拶し合っている。

「リリイさんの連れたあ初めて見るなあ」

「どうも初めまして、黒魔法使いのクロノといいます」

どうやら苗字があるのは一般的では無さそうなので、名前だけ名乗ることにした。

それと魔法使いと名乗るのも、この世界ではそこまで不自然では



無いという事も分かっている。

「どうもどうも、ワシはグリントっつーしがない門番さ。」

魔法使いとはリリイさんも珍しい知り合いがいるもんだなあ」

「リリイとは出会ったばかりですけど、もう友達です」

「えへへー」

リリイが肩の上で照れ照れするのは良いのだが、至近距離でピカピカ光るため若干眩しい。

「そうかい、妖精のリリイさんと友達になれるたあ悪人じゃあねえな。」

ほれ、中に入るんだろう、通ってええぞ」

「いいんですか、そんな簡単に通してもらって？」

「妖精と仲良くなれんのは善人の証拠さ、性質の悪いヤロウにゃ妖精ってのは絶対に懐かないのよ、なんたって心が読めるのよ妖精は」

「え、リリイ心が読めるのか!？」

「?」

何が? と言わんばかりによく分かっていない表情のリリイ。

「リリイ、ちょっと俺が今考えていることを当ててみてくれよ」

「うん」

実は俺、元居た世界で相当痛い内容のラノベを書くのが大好きな文芸部員だったんだ!

「んーわかんない」

「……そうか」

どうやら正確に心の台詞を一言一句変わらず認識できるわけでは無さそうだな。

いや、そもそも心なんて読めてないんじゃないのか?

「あっはっは、仲が良いのは本当だなあ、ほれ、こんなところにいつまでも突っ立ってないで入りな」

「ありがとうございます」

かくして、俺はイルズ村へと立ち入ったのだった。

イルズ村は港町に比べれば小規模ではあるが、平和で長閑な村なのだと入ってすぐに分かった。

村の中心に位置する広場には、丁度昼時なのか多くの人々が集って思い思いに昼食をとっているのが見える。

ゴブリンのヴァーツさんが言っていたように、この村は多くの種族が入り混じって暮らしている。

この広場から見えるだけでも、人間や先ほど会ったゴブリンやリザードマンをはじめ、長い耳が特徴的なエルフ、立派な髭のドワーフ、犬や猫の頭をした獣人など、実に様々だ。

これまで人間からかけ離れた姿をした者は皆モンスターで敵という認識しか無かったが、この光景を見ると、姿の違いなど些細なものではないと言う事がよく分かる。

ちなみに、エルフやドワーフなどが種族の正式名称だというのはリリィに教えてもらった。

ただ、俺が聞き、話す言葉は改造によって自動翻訳されているような効果によるものの理解なので、本当の発音は全く別なものなのかもしれない。

俺が呼称する分には、相手方には正確に伝わるので問題ないから、気にしてもあまり意味は無いのだけど。

「さて、村長の家は――」

「あっち！」

俺はこの村に来るにあたって最初に村長へ挨拶しに行くことに決めていた。

リリィの話を聞く限り、外部から初めて村に訪れる者が村長に挨拶するのは特に珍しいことではなく、俺みたいな怪しい魔法使いでもアポ無しで会ってくれるのだと言う。

日本だったらそこを治める長に会うなんてことは無いのだが、こうして村長に会いに行くなんてRPGみたいだと思う、いや昔の村社会だったら一般的な事なのかもしれないが。

だが流石に王様とか国を治めるような権力者には会えないだろう、日本で言う総理大臣に会いに行くのと同じ程度には難しいはず。

兎も角、俺はこれから会うであろう村長には、この世界の事を色々聞いてみようと思う。

小さな子供のようなリイでは、理路整然とした説明が難しいので、突き詰めた話をするなら大人に限る、それに村長なら色々知識があるだろう。

ただ、変に怪しまれなければいいのだが……

「気にしても仕方ないか」

ぶっつけ本番、当たって砕けろの精神で、俺はリイに連れられて村長宅へと向かった。

## 第19話 イルズ村へ(2) (後書き)

さりげなく言葉が通じる説明とか入ってますね、こういうのはどつかでまとめてやった方が良いでしょうが、中々上手くいきませんでした……とりあえずクロノは翻訳コンニャクを食べたと思ってくれればOKです。

## 第20話 イルズ村の村長

イルズ村の村長であるシオネさんというエルフのお婆さんとはあつさりと面会が叶った。

椅子を勧められ、テーブルを挟んで村長と向かい合う。

「ようこそイルズ村へクロノさん、リリィさんの友人というなら我々は皆歓迎しますよ」

「ありがとうございます」

ここでもリリィのネームバリューの凄さを思い知らされる、みんな「さん」付けだぜ、マジパネえぜリリィさん。

リリィがこの村で名の通った存在であり、皆から信頼を受けているというのが分かる。

自宅へ呼べる友達が居なくとも、リリィが村人達に快く受け入れられているのが分かり嬉しい。

「実は村長さんに相談があるので、お時間宜しいでしょうか？」

「ええ、日が暮れるまでゆっくりしても構いませんよ」

村長の仕事は大丈夫なのだろうか、と思うが、笑顔で快く話を聞いてくれると言うのだ、お言葉に甘えさせてもらおう。

しかし、村人に会ってからというものの、ずっと堅苦しい敬語で話すので疲れる。

そもそも敬語なんてのはバイトの面接を受けた以来だ。

それでも大人の相手をする以上、礼儀正しく接しなければ、上手くいくものもダメになってしまう、円滑なコミュニケーションの為には必要だ。

頑張るので、多少敬語の使い方が怪しくても見逃してほしいものである。

「私はちょっと事情がありまして遠く故郷を離れてこの地へやって来ました。

半ば事故のようなもので、いきなり異郷の地へ放り出されたので

す」

「あら、旅の魔法使いかと思いました。が、何やら複雑な事情があるようですね」

「はい、私は何故ここへ来たのか、そういった事情は私自身よく分からないので詳しく説明することはできません、気にはなるかと思いますが、今は聞かないでもらえるとありがたいです」

「そうですか、それではその辺りの詮索はしませんよ、どうぞ話を進めてくださいな」

「ありがとうございます」

一番気になるところを説明できないなど勝手な言い分だが、シオネ村長は中々に度量の深いお人だ、実にありがたい。

「この辺りについて全く知識が無く困っていたのですが、偶然リリイと出会い、色々とお世話になりました」

「クロノはねー森の中で倒れてたのー」

「フェアリーガーデンで行き倒れていたのですか、それは大変でしたわねえ」

「いえ、すぐにリリイと会うことができたので迷うこともありませんでしたよ。」

ただ、光の泉に近づくなど妖精に威嚇されましたけど」

「泉の妖精にも出会っていましたが、何か悪戯でもされませんでしたか？」

何でも、森の中で光の泉に住まう妖精達に出会って、持っている食料や小道具がパクられたりするらしい。

とんでもねえヤツらだ。

俺は体一つで何にも持っていなかったし、周囲には林檎が転がっていたからそっちに夢中で俺には見向きもしなかったな、あの威嚇してきた妖精以外に。

「――リリイの家で世話になり一晩明かしましたが、このまま何もせずに世話になり続けることは出来ません。」

それに、私は金銭など一切持たずにここへ来てしまいました、何

かお代を払うといったこともできません。

そこで、まずは一人で生活できるようにしたいのですが、この周辺や村のことが常識的なことまで全く判りません。

仕事や住居、この村でのルールなど、村長さんに色々と教えていただきたいのです」

「勿論良いですよ、その若さで寄る辺なき身であるのは大変でしょう、人間族の男性一人を受け入れるくらいこの村では問題ないですよ」

「ク、クロノ……イルズ村に住むの？」

「出来ればそのつもりだけど、いつまでもリリイの家に泊まらせてもらうワケにはいかないからな」

「なんでっ!？ リリイのお家にいてよ、寂しいよう!」

「り、リリイ……」

こんなに泣きつかれるとは予想外!

なんだ、俺はそんなにマズいコト言ったか!?

「クロノさん、妖精は建前で物を言ったりはしませんよ、リリイさんが是非に言うならお言葉に甘えると良いのではないかしら」

「いいのかリリイ、俺と一緒に住んでも？」

俺デカいから小屋ん中狭くなっちゃうぞ、それにどんな迷惑かけるか分からんし」

「狭くないよ、メイワクでもいいよ!

リリイ、クロノと一緒にいたい!」

「お、おお、リリイ……そこまで言ってくれるとは……

俺もリリイと一緒にいたいぞっ!」

「ホント!? 一緒にお家に住む?」

「ああ、リリイが望むなら何処へでも住んでやるさ!」

「クロノ!」

「リリイ!」

リリイが胸に飛び込んでくるのを俺はしっかりと抱きとめる、くそう、可愛いヤツめ!

「良かったわねクロノさん、住まいは決まったようですね」

「はい、私は以前住んでいたという魔法使いと同じく、リリィと一緒にあの小屋へ住みます」

思わぬところで住宅問題が解決だ。

あの小屋に住むことを全く考えないわけではないが、それを俺から図々しくもお願いすることなどできなかった……けど、今はひたすらリリィの厚意に感謝だ。

「おや、森の魔法使いの事はご存知でしたか」

「はい、このローブは小屋にあったもので、恐らく魔法使いが使っていたものだと思います」

「そういえば、どこかで見たと思ったけれど、そうねえ、確かに彼も同じローブを着ていたわ」

おお、やはりこのローブは魔法使いのモノだったか。

というか、流石はエルフのご老人、生前の魔法使いと会ったことがあるのか。

「森の魔法使いは、この村にとっても良くして貰ったわ。」

クロノさんも魔法使いなら、彼のように魔法を役立ててくれると嬉しいですね」

「その魔法使いは、例えばどんなことをしたんですか？」

「そうねえ、村に魔除けの結界をかけてくれたり、霊薬を調合して重い病を治してくれたり、そういえば、雨乞いをして雨を降らせてくれたこともあったわ」

「スミマセンが、私ではどれも出来ません……」

チクシヨウ、あのマスク共め、戦闘以外にもっと人の役に立つ魔法を授けやがれてんだ、本当に最低なヤツラだぜ！

「恥ずかしながら、私にはモンスターを退治することくらいしかできません」

「クロノとっても強いよ！」

ゴ布林退治してくれたの！」

ありがとう、リリィが抜群なフォローをしてくれる。



「あら、そうなのですか？

結構な数が住み着いていたから、山狩りしてもしばらくかかるか  
思っていました。が、クロノさんが退治してくれたのですね」

「リリイにかなり助けられました。が、洞窟にいるゴブリンは全滅さ  
せました」

「それを一日で？」

「はい、昨日」

「それは凄いですね、そこまで強力な魔法の使い手なら、冒険者と  
していくらでも稼げるでしょう」

「冒険者？」

「存じませんか？ どの国でも必ずあるものかと思っていました  
が」

「モンスターを退治する仕事ですか？」

「ええ、それに加えて村の警備や商人の護衛、危険な場所にある希  
少素材の採取、そうそう、冒険者と言えばやはりダンジョンで財宝  
を探すのが一番の仕事ですね」

だ、ダンジョンだって！？

あの実験施設も大概ダンジョンっぽかったけど、この世界には宝  
の眠る本物のダンジョンが存在するのか！

うおーなんかテンションあがるぜ！

「ダンジョンなんてあるんですね、詳しく教えてもらえませんか？」

内心のワクワクを抑え、勤めて冷静を装う。

「この辺りで一番近いのはフェアリーガーデンですね」

え、あの森ってダンジョン扱いなの！？

「ですが、光の泉には冒険者でも近づきませんよ、危険だからとい  
うより、妖精族と関係を悪くしたくないからです」

冒険者が探索するようなダンジョンは、クウアル村の洞窟、メデ  
ィア遺跡、といったところがこの辺では有名ですよ」

クウアル村ってここには洞窟のダンジョンがあるのか……それに  
遺跡のダンジョン、ヤバイ何だかワクワクしてきたぞ。

「あの、冒険者は誰でもなれるものなんですか？」

「ええ、身元の確認なんて必要ないわ、依頼を果たしてくれさえすれば誰でもいいもの。」

ウチにも冒険者ギルドがあるから、興味があれば覗いてみるというでしょう」

冒険者に依頼を斡旋する組合組織がギルドと呼ばれる。

冒険者ギルドはかなりの広範囲に渡って存在する大きな組織なので、冒険者ならどこの町でもお世話になるそうだ。

また、ギルドを通じた依頼なら報酬も確実だし、他にも色々サポートしてくれるらしいので、冒険者としてギルドへ登録すれば間違い無いという。

「ありがとうございます、冒険者ならモンスター退治しかできない私でも稼げそうです」

「そう、私もギルドへはよく依頼を出すから、その時はお願いするわね」

「はい、よろしく願います」

さて、冒険者なる職業の存在によって、一気にこれからのビジョンが開けたぞ。

後は村の事をいくつか聞いて、早速ギルドへ行ってみよう。

## 第20話 イルズ村の村長（後書き）

リリィの家に住まわせてもらうクロノ、ってよく考えたらただのヒモですよ。男を飼うとは流石リリィさん！

ところで、村を訪問するだけでいったい何話かかるんでしょうね。

## 第21話 冒険者ギルドへようこそ！（1）

早速ギルドに冒険者として登録だぜっ！

と、意気込んだ方がいいが、冒険者ギルドのロビーに広がる美味そうな食事の香りに、俺とリリィのお腹の虫がデュエットを奏でる。

「飯にするかっ！」

「うんっ！」

こうして、冒険者登録は後回しになり、初めての外食で昼を食べることになった。

もつとも、場所が場所なだけに、ロビーに座るのは客兼冒険者な面々で、鎧や武器を装備したままの物騒な格好のヤツもちらほら見える。

そんな完全武装客で一杯じゃないだけ今はマシだろうけど。

「うーん、どれがいいかな」

「どれかなー」

改造のお陰で言葉だけで無く、文字も読めるようになっていたため、メニューを読むに苦労はないが、ちらほらと知らん食材名や料理名があるのですんなり決まらない。

リリィもこういうところは初めてらしく、あまり料理に詳しく無いので、二人一緒になって頭を悩ませる。

ただ、注文などのシステムは特別変なものはないようで、メニューが決まれば店員さんに注文するだけとなるが、あ、そういえばチップはどうなんだろうか？

「すいませーん、注文いいですか？」

「はいはい、どうぞー」

と言ってパタパタ駆けてくるのはネコミミのウエイトレスだ、というか、ネコそのものなウエイトレスだ。

頭の前からつま先まで三毛猫柄の毛皮で覆われ、顔も猫そのものに近い造形だが、二足歩行で頭身もほぼ人間と同じ、所謂獣人と呼

ばれる種族である。

しかし人間のように髪の毛があると、顔は猫でも一気に人っぽく見える、淡いブラウンをしたセミロングの髪型を見てそんな感想を抱く。

「えーとー」

とりあえずじろじろ見るのも失礼なので、さっさと注文。

そうして滞りなく注文済ませると、

「合計で520シルバーになりまーす」

ここは前払いシステムなようで、料金を請求される。

俺は懷から、おもむろに一枚の輝く黄金のコインを取り出す。

「すみません、今持ち合わせが金貨しかないのですが構いませんか？」

「んにゃ！ 1ゴールド金貨ですねっ！ いいですよ」

「ではこれで」

俺は500円玉サイズの金貨を、ネコさんの肉球がある掌へと渡す。

「まいどー、お釣りの9480シルバーです」

ジャラジャラとポケットをまさぐって、俺へと返してくれたのは9枚の大きい銀貨と4枚の小さい銀貨、それと10円玉そっくりな銅貨が8枚だ。

「少々お待ちくださいーい」

来た時と同じように耳と尻尾を振りながらカウンターの奥へとネコウエイトレスは去っていった。

ふう、注文と支払は問題無くやれたぞ、良かった。

「それにしても、凄い金額貰っちゃったな、まあ無一文の俺には助かったけど」

俺がどうして金貨なんて上等なモノを持っているのかと言うと、昨日やったゴ布林退治の報酬という名目でシオネ村長から頂いたのだ。

合わせて金貨20枚、日本円に換算して20万円に相当する。

財布など当然持ち合わせない俺とリリィは、金貨20枚全部影の中に放り込んである、まあ保管方法としては絶対確実だ。

村長からは、この国のお金についても教えてもらった。

もしかして物々交換の現物経済かも、とは思ったが、しっかりと貨幣は流通しているのに安心した、貨幣が無いと買い物するのも一苦労、なにより俺は慣れていない。

そして、ここの貨幣は全て秤量貨幣であり、金銀銅の3種で作られている。

厳密には貨幣単位では無いが、大きな額ではゴールドが使われ、1ゴールド以下の小額には先ほどのようにシルバーを使う。

俺の持つ金貨は1ゴールド、要するに一万円の価値がある。

お釣りで貰った大銀貨は千円、小銀貨は百円、銅貨は十円だ。

1ゴールド＝10000シルバーの交換比率なので、シルバーが日本円に相当する単位となる。

十円以下の単位では銅貨か、小銀という江戸時代の豆板銀のようなモノの二種類がある、どちらも等価値、ギルドでは銅貨が使われているようだ。

物価に関してもある程度教えてもらったが、相場がどんなものかはやはり実際に買い物しないと分からない感覚である。

ギルドの食事の値段は基本的に全ギルド共通らしいので、食事の値段の目安にはなると聞いた。

ランチの値段が二人合わせて520円、じゃない、520シルバーだというなら、日本と比べ物価はかなり安い、少なくとも食事に關しては半分程度といったところか。

ついでに、20万円もとい20ゴールドは、イルズ村に暮らす農家の一か月分を上回る金額である。

いきなり一月も遊んで暮らせるほどの大金を貰うことになり若干しり込みしてしまったが、あの規模のゴブリン退治をギルドに依頼、若しくは村人だけで行くと、20ゴールドではとても済まない額になるという。

ここは俺達も先方も両方得したということで、話は纏まったのだ。ついでに、ゴ布林退治達成の証拠はリリーの証言のみだ、妖精は悪い嘘はつかない性質らしいので、妖精の証言は凄い信憑性を持つのだとか、勿論リリーが信頼されている部分もある。

そんなコトを考えているウチに、注文した料理が届く。

小難しいお金の話など湯気を上げる熱々の料理の前ではこれ以上考える気など失せる。

俺とリリーは「いただきます」と同時に目の前の料理に齧り付いた。

そうそう、「いただきます」「ごちそうさま」の文化は日本とパンドラで共通だ。

「美味いっ！ このドルトスとか言う謎の肉美味いぞっ！」

「美味しい！」

食材不明の料理を躊躇せずに平らげる。

料理を完食し、これまた茶葉不明のお茶を飲みながら、一息つく。

「ふう、美味かった——」

リリーのお茶は紅茶っぽかったけど、こっちは麦茶っぽいから全然別物だなあ。

感想もそこそこにもう少し落ち着いたら冒険者登録をしよう、危うく忘れかけそうだったが。

「そうだリリー、今日帰ったら、俺の話を聞いてくれよ」

「クロノの話？」

「村長には遠い故郷から事故で来たって誤魔化したけど、リリーにだけは本当の事を聞いてもらいたくてな」

「そっかあ、うん、いいよっ！」

「ありがとな、リリーとはこれから長い付き合いになりそうだしな。さて、それじゃあちよつと冒険者登録とやらに行ってくるよ」

「うん！ 行ってらっしゃい！」

笑顔のリリーに見送られて、俺は席を立った。

## 第21話 冒険者ギルドへようこそ！ (1) (後書き)

ついにやってきました冒険者ギルド！ これは壮絶な説明回が続く予感！

猫のウェイトレスはモンスターハンターのアイルーと違ってちゃんと髪が有ります、まあアイルーの方が可愛いと思うんですけどね。



## 第22話 冒険者ギルドへようこそ！（2）

ギルドの受付カウンターにやってくると、そこに居たのは、

「あ、さっきのウエイトレスさん」

「ああ、さっきのお客さん！」

三毛猫柄の猫獣人<sup>ワッキー</sup>ウエイトレスが受付している、人手が無いせいで兼任しているのだろうか。

「何か依頼をお探ですかー？」

「いえ、冒険者に登録しようと思ひまして」

「なるほど、新人さんでしたか！」

「はい、右も左も分からない未熟者ですがよろしく願ひします」

「……随分と礼儀正しい人ですね」

「そうですか？」

「そうですね、ワタシみたいな下っ端職員に敬語を使ってくれる人なんて村長さんくらいしかいませんよ。

ただでさえ荒っぽい人が多い冒険者なら尚更ですー」

そういえば村長は俺みたいな得体の知れない若造にも懇切丁寧に接してくれていたな、アレは誰にでもそうなのか。

あと冒険者が荒っぽいのは見た目通りってことか、とりあえずロビーに座って何やら話している冒険者グループは揃って皆ガタイが良い。

高校じゃあ高身長の高面で通っていた俺もあの中じゃ普通にみえるだろう。

「それでー、あ、そういえばお名前をまだ聞いていませんでしたね。ワタシはニヤレコって言います」

「ニヤンコ？」

「ニヤレコです！ やっぱりアナタ失礼ですねっ！」

「えっ、スイマセン、えーと、ニヤン……じゃない、ニヤレコさん。私はクロノと言います」

どうやら猫獣人に猫扱いは失礼らしい、また一つ常識を覚えたぞ。

「はいはい、クロノさんね、あ、ワタシには敬語じゃなくても良いですよ、疲れるでしょ？」

「あ、やっぱり分かる？」

「分かりますよー。」

でも相手によってキチンと敬語を使い分けられるなんて、それなりの教育を受けていますねクロノさん、どこの学校に通ってたんですかあ？」

「あはは、あんまり俺の事情については聞かないでくれると助かるんだけど。」

身元不明でも冒険者になれるというからここに来たんだ」

「なるほど、ワケアリなのですね」

「そうなのです」

「分かりました、そういうコトならワタシ個人も当ギルドも追及いたしません。」

それでは、こちらの入会書に書けるところだけ記入して下さい」俺の前に一枚の紙とペンが差し出される。

「あ、字が書けなければ200シルバーで代筆できますよ」

なるほど、学校教育が普及していない以上、当然識字率も低い、よって代筆サービスなんてのが普通にあるんだな。

幸運にも、今の俺には必要無いが。

「いや、大丈夫」

このアルファベットみたいな不思議な異世界文字などこれまで一度も書いたことは無いが、すでに知識として俺の頭の中に存在しているのです、書くことは可能だ。

もっとも、スラスラと早くは書けず、思い出しながらゆっくりとしたペースになる。

これは練習が必要だな、なんて思いながら書類の記入を進める。まあ俺に書けるところなんて名前と年齢と性別くらいのものだが

「このクラスってのはなに？」

「それはですねえ、剣士だとか魔術士だとか、自分の戦うスタイルみたいなですね、これがハッキリしているとパーティーを組む時の目安になりますし、モンスターとの相性だとか、色々な判断要素になる大事な情報です。」

「と言っても、冒険者は軍隊ではないので、正確にクラス分けされていませんし、皆それぞれ勝手に名乗っていますよ。」

「クラス名はなるべくその人の戦い方が判るようなのがいいですね、特に思いつかなければ得意な武器の種類だけでもいいですよ」

「なるほど、自称でも構わないわけか、なら——」

俺は脳内で文字の意味と書き方を思い起こしながら、書類にペンを走らせる。

「黒魔法使い、ですか？」

「ああ、しつくり来るのがコレしか無くて。」

黒色魔力を扱うヤツって珍しいの？」

「珍しいですねえ、黒魔法は古い秘伝が多いらしいので、冒険者になるような使い手はいないですよ」

「魔法使いというか、魔術士はやっぱり原色魔力で火とか氷とか使うのが多い？」

「多い、というより魔法を使う人はほとんど皆がそうですよ。」

召喚魔法を使う人や回復専門ヒールの人でも一つくらいは原色魔法持っていますよ」

「なるほど、俺は原色魔力扱えないし、そもそも魔法自体あんまり詳しくないから」

「うーん、都市の方まで行けば魔法講座とかやってくれるところもありますけど、ウチは冒険者の基本説明しかやってないんですよ」魔法講座か、機会があれば出てみようかな。

「やっぱり自分が使うモノのことは理解しておくに限る。」

「冒険者の基本説明って今受けるの？」

「はい、簡単なルールだけは必ず説明します。」

それ以外に聞きたいことがあれば初級講座を申請すればすぐに来ますよ」

「そっか、あ、ちょっと連れを待たせてるんで、時間かかりそうなら一緒に受けてもいいかな？」

「連れてってリリイさんですよね？」

「知ってるのか、ホントにリリイは有名だな」

「知らない人はいませんよ、妖精の霊薬なんて貴重品を超格安で30年も売り続けてくれてるんですから」

「おお、リリイの薬ってそんなにスゴ——って、ちょっと待て、今30年とか言わなかったか？」

「そうですね、リリイさんは今年で32歳になるはずですよ」

「え……えええええ！？」

思わず絶叫してしまう。

何事かと周囲の人達の視線が突き刺さるが、衝撃の事実を聞いた俺にとっては正直それどころではない。

「32歳！？ マジでっ！？」

「マジですよ」

俺は今までリリイは5、6歳くらいだと信じて疑わなかった、いや、普通そう思うだろう。

何だよ32って、ソレって、つまり、どういうことだってばよ……

「そんなに驚かなくても、妖精族ってとても長生きですし、姿も変わりませんから。」

年齢なんてワタシ達と同じような意味はもたないみたいです」

「な、なるほど……つまり生まれた時からずっと同じ精神年齢ってコトか」

「そうですね、でも記憶力はいいいから色んなこと知ってたりしますよ。」

特にリリイさんなんかは泉の妖精と違って人里まで下りてきてくれますから、この辺一帯のことは大体知っているといます、クウアル村の村長さんとも知り合いですし」

「そ、そうなんだ……」

恐る恐る振り返ると、ロビーで椅子に座っているリリイが目に入る。

俺に気づいたらしく、手を振ってくれる。

あ、あの愛らしい生き物が32歳だと……俄かには信じ難いが……いや、ここは魔法のファンタジー世界、そういうこともあるんだろう。

「まあいいさ、何歳だろうとリリイであることには変わり無い」

「あ、それでリリイさんと一緒に初級講座受けます？　ちなみにお値段は一人1000シルバーです、リリイさんの分はまけておきますよ」

「お願いします」

大銀貨一枚を懐から（正確には影の中から）取り出してニヤレコさんに支払う。

「はい、それじゃ準備するので、クロノさんはリリイさんと一緒にロビーで待っててくださいね」

「分かった」

そして、実年齢32歳のリリイが待つ席へと戻る。

いや、歳のコト気にしすぎかな俺……

## 第22話 冒険者ギルドへようこそ! (2) (後書き)

リリイまさかのアラサー、ということでロリババアもとい合法ロリだったのです。しかし子供の姿で500歳とかはよくある設定ですけど32歳は恐ろしく中途半端と思うかもしれませんね。でもリリイが500歳だとこの作品が破綻するくらい強くなってしまいうので32歳で良いのです、逆に見た目通りの子供でもまた困るのです。ところで、リリイ32歳にしてついに17歳の男の子と同棲クロソを始め——こう書くと全然別の話みたいに聞こえますね。この作品はファンタジーです、お忘れなく。

## 第23話 クエストとランク(1)

「はい、それでは新米冒険者のクロノさん&リリィさんに、ギルドと冒険者のイロハについてご教授しますよー！」

「あ、ニヤレコさんが講義してくれるのね」

「へへー実はコレやるのは初めてなんですよう」

「ニヤレコさんはギルドで新人なの？」

「そうです、勤めてまだ一年目ですけど、イルズ村冒険者ギルドの看板娘張ってます！」

「看板娘って自称クラス？」

「名実共に看板娘です！クロノさんはやはり失礼な方なのでは！？」

「いやスマン、分かったよ、ニヤレコさんはギルドの看板猫娘ね」

「分かっていただければ良いのです、では挨拶もほどほどに講座を始めましょうか」

よろしく願います、と俺とリリィが言うが、リリィは何が始まるのかイマイチ分かっていないような表情だ。

まあ冒険者になるのは俺だけだし、リリィには関係ない事ではあるが。

「えーと、それではまず……えーと……ギルドを利用するに当たってのルールと注意事項から！」

今ちよつと忘れてたな。

「あ、クロノさん、メモとります？」

「ありがと、助かるよ」

白紙と先ほど使ったのと同じペンが差し出される。

文明レベル的に羊皮紙でも使っているのかと思いきや、日本で使っていたのと比べても遜色ないほど綺麗なものだ。

パルプの生産が確立されているのだろうか、それとも謎の魔法で紙を作っているんだろうか。

「それでは、冒険者にとって一番の基本となる依頼クエストについてです。

クロノさんはギルドが冒険者へ様々な依頼を斡旋する組織であるという事は知っていますか？」

「ああ、その辺は村長から聞いてるよ」

「それなら話は早いですね。」

当ギルドでは街や村など大きな団体から個人まで幅広くクエストを請け負っています。

ギルドが紹介するクエストは、内容や報酬など基本的に信頼して良いです、たまに調査が不足したり不能だったりする場合もありますが、依頼書にその旨は書かれていますので、それでも受注するかどうかは冒険者個人の判断になります。

また、緊急の際にはギルド側が冒険者へ強制的に受注させる事もあります」

「強制クエストってどんなの？」

「災害が発生した際の救助活動が一般的ですね、それと天災級のドラゴンが現れた時も召集がかかりますね、なので緊急クエストが正しい呼び方です。

どちらも滅多にない事なのであまり気にしないで大丈夫ですよ。

ちなみに緊急クエストを断る場合にはキャンセル料を頂くことになります、これに応じない場合は最悪ギルドから除籍という事もありますので注意してください」

「ギルドから除籍になるとどうなる？」

「勿論ギルドの利用が出来なくなります、こちらは依頼の話にも関わってきますが、ギルドを通さず個人的に依頼を受ける場合には、報酬の踏み倒しや依頼内容の相違などトラブルが発生する可能性が格段にあがります。

ギルドを利用できないというだけで、冒険者稼業の続行は難しくなりますので、続ける限りは除籍されないようルールを守って活動してください」

「なるほど、他に抵触すれば除籍になるかもしれないほどの重要なルールは？」



「まずは報酬に関してですね。

当ギルドでは依頼主の報酬から一律10%を仲介料としていただいております、依頼書に提示される金額は、この料金をあらかじめ差し引いたものであることをご理解ください。

紹介した依頼にはギルドが責任を持つているので、依頼主が突然居なくなったり報酬を踏み倒したなどのトラブルが発生した場合でも、冒険者には報酬が支払われないという事は無いので、その点はお安心ください。

ただ、クエストを失敗、続行不能などの場合には、状況を鑑みてキャンセル料、若しくは別な冒険者へのクエスト引継ぎ料などが発生するので、あらかじめご了承ください」

「冒険者は依頼を果たしさえすれば報酬は確実に貰える、ただ出来なかった場合には料金が発生することもあるから、その時に文句を言うなってことね」

「その通りです、ごく基本的な事です、どこのギルドでもクレームをつける困った冒険者がいるのです。

クロノさんは頭が良さそうなので、そういう心配はなさそうですね」

「褒めても何もでないぞ」

「いえいえ、これだけの事を中々ご理解いただけない方も少なくないですし、損得勘定が全くできずに感情的な人もいます。

クロノさんはその辺ちゃんと考えられる人だと思いますよ」

「まあ、除籍って罰則がある以上ギルドにクレームはつけない程度には考えられるさ」

俺の話しぶりだけで高度な教育を受けていると思われたほどだ、この世界では日本人の一般的な人でも十分に教養があることになるのだろう。

俺が凄いのではなく、周りの教育水準が低いつてことだが、誰でも学校に通える制度がないので仕方無いことか。

「それと、クエストに関してもう一つ、ランクについて説明します

ね」

「難しいとか簡単とか、そういうの？」

「はい、自身の冒険者ランクとクエストランク、またはモンスターランクを照らし合わせれば最適なクエストが選べます。

ギルドとしても、無謀なクエストに挑戦する冒険者が多発してクエスト失敗率の上昇は避けたいため、冒険者ランク以上のクエストランクは受注できないようになっていきます」

「ランクはどうやって分けられてるんだ？」

「全てのランクは1〜5の五段階評価となっています、1が最低で5が最高です。

クエストランクはモンスターの強さや難しいダンジョンなど、クエストに伴う危険度を総合してランク分けされます。

冒険者ランクは、1から始め、クエストをこなすことによって実績が認められ、ランクが上がります。

新米冒険者は最初の3年間は1か早くても2の前半といったくらいですね。

これは特別な場合ですが、軍で活躍していた騎士や戦士などすでに一定以上の強さを持つ人が冒険者に転向する場合には、ギルドの試験を受けてランク3から始めるというようなことも出来ますよ。

まあコレはイルズ村ギルドでは実施できませんけど」

「それじゃあ俺はランク1から始めるワケだ」

5段階とはシンプルな分け方ではあるが、同じランクでも難易度の上下はかなりあるようだ。

なので、ランクの前半とか後半とか、そういう呼び方もするらしい。

無数にあるクエストを細々と分類するのも大変だろうし、仕方ないことだと思う、正確なクエストの難易度を依頼書の情報で推し量るのも冒険者としての経験次第ということだ。

「はい、クエストについてはこれくらいでしょうか。」

後は、一般の方に被害が及んだり、私有地の立ち入り、私物の破

壊などは注意して下さい、クエスト中だからといって個人の犯罪行為までギルドは責任を持ちません。

また、出先での他の冒険者パーティーとの争いなどもギルドは関与しませんので、行動は全て自分の責任となります」

「なるほど、後はもう常識の範囲内で行動しろってことね」

「そうですね、ギルドは冒険者の行動を極力拘束するようなことは無いので、クエストをどのように達成するかは冒険者の自由です」

「了解だ、それじゃ早速俺が受けられるランク1のクエストを見てみたいんだけど」

「どうぞー。」

「と言っても今の時期は受けられるのは少ないですけどね」

「ニャレコさんがテーブルに置かれた依頼書の束を進める。」

「とりあえず見てみるか――」

## 第23話 クエストとランク（1）（後書き）

説明回が続きます、まあ妙に奇抜なギルドのルールなどはないので、話半分にニヤレコの台詞を聞いてくれればよいのではないかと思います。

## 第24話 クエストとランク(2)

クエスト・リキセイ草の採取

報酬・一袋5000シルバー

期限・遠雷の月第一週まで

依頼主・イルズ村道具屋店主・キツシュ

依頼内容・妖精の森の奥地フェアリーガーデンに生えるリキセイ草を所定の袋一杯にと  
ってきて欲しい。3袋以上持ち帰ったパーティーにはリキセイ草で  
調合したポーション1セットを進呈。

クエスト・商隊の護衛募集(クウアル発着ダイダロス着)

報酬・日給7500シルバー+戦闘手当

期限・緑風の月20日まで、22日出発

依頼主・行商人代表・モウティ

依頼内容・クウアル村からダイダロスまで商隊の護衛を募集中。三  
食支給。一月近い長旅となりますが、ルートは西北街道のみで難所  
などはありません。

クエスト・『イルズ・ブレイダー』荷物持ち募集

報酬・一日3000シルバー

期限・緑風の月いっぱいまで予定

依頼主・『イルズ・ブレイダー』リーダー・ニーノ

依頼内容・パーティーの荷物持ちを頼む。同行クエストはランク2  
のモンスター退治がメインだが、オレ達がいっしょに守ってやるから  
安心しな！

クエスト・イルズ村の夜間歩哨

報酬・一日4000シルバー

期限・新陽の月まで募集予定

依頼主・イルズ村自警団団長グリント

依頼内容・近頃ゴブリンやラプター系のモンスターが増えてきている。その為イルズ村の夜間の警備を強化したいので、夜間の歩哨を臨時募集する。都合の良い日のみ、一日単位でも受注可能。

「うーん、所々意味がわからん単語があるな……」

10ページほどの書類をめくりながら、様々な依頼を読んでいく。凡その内容は、字が読める以上理解できるのだが、暦や地名、モンスター名など知らないところが多い。

受注するのに即断は出来ないな。

「よく分からなくても、ここで紹介するランク1のクエストは問題なくこなせると思いますよ、ほとんど戦闘が起きないようなモノばかりですし」

「いや、それ以前に暦とか地名が分からなくて、地図とかカレンダーとかって売ってる？」

「むむ、クロノさんほど教養ありそうな人が暦をしらないとは、これはかなりのワケアリですね、実は遠い国の王子様だとか!？」

「それは夢見すぎじゃないか？」

「おっとスミマセン、詮索は無しでしたね。」

えーと、地図もカレンダー暦表も道具屋で売っていますよ」

「依頼主にある道具屋店主の店？」

「そうですよ、この村で唯一の道具店ですから、ここの冒険者は皆そこでポーションなどのアイテム類を補充しますね」

「なるほど、リリィが鎧も売ってるって言ってたけど、冒険者向けの店なのか」

「村人も利用しますが、やっぱり冒険者の方がメインですね。」

クロノさんもイルズ村で冒険者するなら必ずお世話になりますよ、場所はここを出たら右手に看板が見えるのですぐ分かります」

「ああ、この後行ってみるよ」

「それとクロノさん、これは冒険者稼業とは関係ないですけど、暦や地理歴史、この辺の動植物やモンスターのは、村長さんの家にある蔵書を見せてもらえば良いと思いますよ。」

クロノさんは字も読めますし、理解力も記憶力もありそうなので、問題なく本は読めますよね」

「ああ、本は読むのも書くのも好きだぞ」

「えっ、クロノさんって作家なのですかっ!？」

「あ、いや……趣味で……」

ヤバい、どんなの書いてるんですか、とか聞かれたら困る。

「おっと、これも余計な詮索になりますね、聞かないでおきますよ」  
「助かる、ありがとう」

言い淀んだ俺の台詞に何やら秘密有りだと勝手に勘違いしてくれたようだが、ここはそう思わせておくことにしよう。

異世界の人相手に現代日本を舞台にした超能力バトルストーリーとか話してもワケ分からんだろうし、何より痛い人扱いされる危険性もある。

「ともあれ、村長宅には図書室があって自由に閲覧できると？」

「図書室なんて立派なものじゃないですけど、村で本がある場所と言ったらそこかウチ（冒険者ギルド）くらいですね」

なるほど、現代ほど一般家庭にも本が普及しているわけじゃないんだな。

「そうか、明日にでも行ってみるよ」

とりあえず、村長宅の蔵書を読めばこの世界の事については色々と知れそうだな。

「それでクロノさん、何かクエストを受注しますか？」

「いや、情報収集と準備をしなきゃいけないから、今日のところは無しで」

「そうですか、クエスト以外にも、フリーで採取した素材や討伐したモンスターに対して報酬をお支払しますので、そちらを利用しても良いですよ。」

それらの一覧表は向こうの掲示板に張って有ります、素材の買取や討伐報酬は季節などによって変動しますので随時チェックして下さいね。

ちなみに、今のオススメはゴ布林討伐ですよ！

結構大きな集団が住み着いたみたいで討伐価格が上がっています、近いうちには一斉駆除のクエストが出るかもです」

「それって、フェアリーガーデンの西にある崖の洞窟に住み着いたヤツらのこと？」

「よく知っていますね、リリィさん情報ですか？」

でもいくらリリィさんがいると言っても気をつけて下さいね、住処の近くだと凄手数多くのゴ布林が集団で襲ってきますから。

ゴ布林退治は分裂したチームを別個に叩くのが基本戦法ですからね！」

「悪いけどソコのゴ布林は全滅したぞ」

「え？」

「昨日、俺とリリィが駆除してきた」

「ええっ！？　そうなんですか！？」

「本当だ、さっき村長から報酬も貰った、昼食の代金に払った1ゴールド金貨がソレだ。」

まあ泉の妖精にリリィが退治を押し付けられたから、俺がやろうと思っただけのことなんだけど」

「昨日？　たった一日で？」

「ああ、洞窟を直接襲ってまとめて片付けた」

「ク、クロノさんが？」

「大体は、でもリリィが最後に洞窟ごと破壊したから、倒した数じや劣るかもしれないなそういえば」

「そ、そんな……クロノさんって何者なんですか？」



「それは聞かない約束だろ、まあ黒魔法使いなのは確かだ」

「そうですね……そうですね、いえ、クロノさんが何者でも良いのです、多くのクエストをこなして村とギルドに貢献してくれれば。

一人でゴブリンの大集団を相手にできるほど有能なら尚更です、これから宜しくお願いしますね！」

「こちらこそ」

「あの、そんなに実力があるなら初級講座する意味ってあったんですか？ あとランクも1ですけどいいんですか？」

「そこはほら、知識に偏りがあるから、ルールは聞いておかないと。ただゴブリンの倒し方はレクチャーされなくても大丈夫だと思う」

「了解です、それでは村やギルドについて分からないことがあったらいつでもワタシに聞いてくださいね」

「ありがとな、アテにするよ」

「あの、それと」

「ん？」

「リリイさんって、本当に強いんですか？」

ニヤレコさんが問いかけるが、リリイに返答は無い、なぜなら、

「あ、寝てる」

俺の膝の上で安らかな顔で小さな寝息を立てていたのだった。

お腹一杯の上に退屈な話だったから寝ちゃったんだろうか。

とりあえず、これを起こすのには結構な抵抗を感じるので、このまま寝かせてあげよう。

「というか、村の人にはリリイは強いって認識なのか？ 村長もリ

リイがいつもモンスター退治していることを知っているような口ぶりだったし」

「光の泉を守るために、昔からフェアリーガーデンのモンスターを退治しているのは有名な話ですよ。

でも、どうにもこの姿を見ると、ちょっと信じ難いというかなんというか……」

あまりにあどけない寝顔、これはどうみても戦う者ではなく守ら

れるべき幼子のものだ。

「いや、それはそうだろう、俺も最初はそう思ってた。

けどな、リリィは強いぞ、少なくとも俺よりかはずっと高度な魔法が使える」

矢の雨を迎撃した高速追尾光線に、洞窟を崩した光の柱、どちらも今の俺では防ぐことすらできないだろう。

「そ、そうですか、凄いですね」

「まあ実際に見てみないことには信じられないかもしれないけどな」  
「何だか、凄いコンビですね。」

やはりこれは冒険者として期待が持てますよ！ 一流冒険者も夢じゃないですねっ！」

「ん、俺はそんなに成り上がるつもりはないんだけど、生活の為に冒険者やるわけだし」

そもそもリリィは冒険者にはならないし。

「いいいえ、クエストをこなしていく内に、きっと上を目指していきたくなりますよ」

「そうか？」

「そうですよ、冒険者というのはそういうものなのです！」

根拠は無いが、自信満々に素晴らしい放つニヤレコさん。

今は想像つかないが、いつか俺も夢とロマンを追い求める正統派冒険者になるのだろうか？

少なくとも、今はリリィと二人で暮らしていけるなら、それだけで未来は明るいと思えるのは確かだった。

この世界にも身分を証明するものは存在する。

冒険者であるならば、ギルドが発行する所属証明書、通称ギルドカードがそれである。

これを出せば、どこのギルドでもすぐに所属が証明でき、クエストの受注や報酬の受け取りなどがスムーズに行える。

鈍色に光る金属製の小さなプレートは、クロノが見れば「ドッグタグみたいだな」という感想を漏らすことだろう。

「あ、ニヤレコ、それってさっき来た黒マントの人のやつ？ 新人なの？」

「はい、そうですよー」

鳥人族の先輩職員ピーネが興味深そうな顔で、ニヤレコの手にするギルドカードを覗き込む。

「黒魔法使い？ また随分変わったヤツがきたもんだねえ」

ギルドカードには、名前とランク、そしてクラスが書かれているので、一目見ればすぐに分かるのだ。

「そうなんですよ、身元不明の謎の人物なんです！」

「身元不明なんてのは珍しくないけど、リリイさんの連れみたいだし、ただのゴロツキってわけじゃなさそうね」

素性のハッキリしない者でも簡単になれる冒険者は、自然と後ろぐらい事情を抱える犯罪者まがいな者も多く集まってくる。

特に、頭は悪いが腕自慢のチンピラやゴロツキみたいなのが良い例である。

勿論、冒険者はそんな者ばかりでは無いが、そういった者が少なく無いのもまた事実である。

「クロノさん顔は怖いですけど、ちゃんと教養があるようですし、魔法の腕もかなりのものようです。」

もしかしたらどこぞの貴族か高名な魔法使いの弟子かもしれないねんね」

「ふーん、魔法の腕って？ 黒魔法見たの？」

「いえ、でも最近住み着いたゴブリンをリリイさんと全滅させたらしいですよ、村長から報酬も貰ったと言っていましたので、嘘ではないと思いますよ」

「そりゃまた凄いのが来たわね……これは結構期待のルーキーじゃない？」

「はい！ これからが楽しみなんですよっ！」

「でも、この辺じゃ大したランクのクエストは無いんだけどねえ」

「そーなんですよね」

しかしながら、腕の良い冒険者が村にいるという事は素直に喜ぶべきことである。

金にかかるが、モンスターの襲来など有事の際には即座に対応できるし、普段から周辺モンスターの駆除もクエストとして行う、冒険者は村の安全を保障する貴重な戦力なのである。

それ以外にも、種々のクエストを順当にこなしてくれれば、依頼主をはじめスムーズなビジネスができるようになるのだ。

「それじゃ、ギルドカード渡してきますね」

かくして、クロノの手にギルドカードが渡り、ギルド所属の正式な冒険者となったのである。

## 第24話 クエストとランク（2）（後書き）

クロノはギルドカードを手に入れた！ 冒険者ギルドにやってきて実に4話もかけて漸くクロノは冒険者になりましたね。クエストは明日から頑張る、と姿勢がやけに後ろ向きな気がしないでもないですが……

## 第25話 イルズ村道具屋

「いらっしゃい」

年季の入った木製の扉を開くと、雑然とした店内の奥から男の声が聞こえた。

カウンターに腰掛けている恰幅の良い中年男が、このイルズ村道具屋店主のキッシュという人だろう。

「こんにちは、私は先ほどギルドで登録を済ませた新人の冒険者なんです、必要なものをまとめてそろえようと思ひまして」

「ああはいはい、そういう事でしたらウチで全部揃いますよ。」

私は店主のキッシュと申します、今後とも是非ご贔屓に」

「はい、私はクロノといいます、よろしく願ひします」

人の良い笑顔を浮かべる店主、異世界でも営業スマイルってのは商売人の基本スキルなようだ。

「ところでクロノさん、その背負っているのはもしかして……」

「リリイは今ちよっとお昼寝中なので、なるべく静かに願ひします」

冒険者講座を睡眠学習でこなしたリリイだが、ギルドを出た今でも夢の世界に旅立ったままだ。

仕方無いので俺がおんぶして店までやって来たのだ。

「よかったら、こちらの椅子にでも寝かせておきましようか？」

「すみません、助かります」

店主の厚意に甘えて、リリイを長椅子におろす。

妖精だからなのか、見た目以上に軽いリリイだが、背負ったまま店内をウロウロするのは不便だし、あんまり動かしたらリリイも悪い夢を見てしまいそうだ。

「いや、驚きました、クロノさんはリリイさんのお知り合いですか？」

流石リリイ、ここでもさん付けだぜ。

「はい、友人です、これからはリリィの住んでいる小屋にお世話になります」

「そうですか、そりゃまた一体どうして――」

「色々と事情がありまして、あまり追求しないでもらえると助かります。」

ですが、私はこれからイルズ村で冒険者をやってしばらく生活していこうと考えているので、この先は必ずお世話になります」

「それはこちらとしても有り難い話ですよ、冒険者をサポートするのはギルドだけの仕事ではありませんからね、私も力になります。」

えーと、それで冒険者として活動する準備をしたいと、そういうことですか？」

「はい、ですがこういった事は初めてなもので、何を揃えればいいのか分かりません。」

適当に見繕ってもらって良いですか？」

見栄をはっても仕方ないので、素直に言う。

これで多少余計な物を買わされても、まあ仕方ない、まさか20ギルドをオーバーすることは無いだろうし。

「勿論良いですよ、と言っても、新人冒険者用のセットというものがあるんですけどね」

「それは……随分と都合の良いモノがありますね」

「新人は何かとアイテムの不備が多いですからね、なのでこちらとしても最初に必要なものを揃えて販売しようと、そういうことなんですわ」

「ああ、なるほどちゃんと需要があるんですね」

「ん、クロノさん、必要な言葉を知っているなんて、商人の生まれですか？ 言葉遣いも随分と丁寧なようですし――おっと、余計な詮索はしない方が良いでしょうね。」

こちらとしてはクロノさんが冒険者で、ウチで買い物してくれる、それだけで十分ですからねえ」

「ありがとうございます」

「では、新人セットをご用意しますので、少々お待ち下さい」  
新人セットって言うのか、またストレートな商品名だな。

けど、今の俺にとって一番必要なモノであるのは確かだ、正直助かるね。

どうやら買い物もスムーズに出来そうだ。

「――はい、確かに2ゴールド、お買い上げありがとうございます」  
俺が買った新人セットは一番高いやつになった。

別に騙されたわけでは無く、野宿するのに必要なテントなども纏めて含まれているからである。

ただでさえ持たざる者なのだ、色々追加していったらこの値段になっちゃった。

今回の買い物で一番感動したポイントはポーションなる回復薬があるところだ。

クエストの説明文にポーションの材料を集めてくというのがあったが、実物を前にすると中々感心する。

細い小瓶に入るポーションは、正しくRPGのイメージ通りではあるが、ポーション本体である液体は緑や赤といった原色ではなく、灰白色とスポーツドリンクみたいな色合いだ。

ポーションは飲み薬だが、他にも傷薬と称すべきか、軟膏のような塗り薬もある。

出血を伴う外傷はこちらを使うのだとか、でも戦闘中なら『肉体補填』で傷口をふさいだ方が早いのは間違いないだろう。

兎も角、そうした諸々含めて2ゴールドの新人セットを購入したのである。

なんだか自分の物があると嬉しいな、これが今の俺の財産だぜ！  
「クロノさん、結構な大荷物ですが、持ち帰りは大丈夫ですか？」  
そういえば、俺は鞆の類もないし、まして馬車など持ち合わせていない。



一抱えでは済まない荷物の量、体一つではどうにもならない、が、今の俺は黒魔法使いだ！

「大丈夫です、全部入りますから——」

足元から延びる自分の影、そこから泥沼に沈んでいくように新人セツトが取り込まれてゆく。

「これは……いやあ、驚きました、空間魔法まで習得しているとは！」

ギルドカードは見せているので、俺が黒魔法使いというのは知っていただろうが、新人なので大したレベルではないだろうと思われるのは当然か。

というか、空間魔法っていうのかコレ。

とりあえず、ランク1の魔法使いが習得するのは珍しいような魔法というのは分かったぞ。

「クロノさんは結構な魔法の腕をお持ちのようですね。

そういえば、武器の方は用意されていますか？」

「武器、ですか、まあそれは一応」

呪いの大鉈とかあるしな。

「そうですか、武器は村はずれに工房があるので、そちらでお買い求めになるといいでしょう、魔法関係の武器以外は全て手入れしてくれます。

杖や魔道書は、専門ではないですが多少はウチで見ますよ。

あと、ウチは武器の鑑定もしているので、ダンジョンで手に入れた際には是非お見せ下さい」

「鑑定って、どういうことですか？」

「クロノさんは魔法の武器があるのはご存知ですか？」

「はい、何度か見たことも、使ったこともありますよ」

「それなら話は早い、ウチの鑑定はそういった魔法の武器が、どういう力を秘めているのか、使うにはどうすればいいのか、などを解明することですね。

刃の切れ味だとか、業物がどうか、そういう魔法以外のことは

専門外でして、そちらは工房で尋ねるといいでしょう」

「なるほど……鑑定って呪いの武器も出来ますか？」

「の、呪いの武器ですか？ 危険ですが、どんな呪いか分からないと対処できませんからね、一応出来ますよ」

「そうですか、なら——」

俺は内心ワクワクしながら、影より呪いの大鉈を取り出す。

「コレの鑑定をお願いできますか？」

カウンターのの上に、刀身から柄の先まで真っ黒な大鉈を置く。

俺の魔力なのか、鉈の怨念なのか、湯気のように刀身から幽かに黒いオーラが迸っている。

「こ、これは……またとんでもないモノをお持ちですね……」

店主の顔が若干引き気味になっている、やっぱり普通の人が呪いの武器を前にしたらこうなるよな。

いや、彼は商売人だからこそ、この程度で済んでいるのだろうか。  
「……クロノさん、もしかして、解呪、いや、黒魔法で呪いを上書きしました？」

「上書きって言うんですか？ 自分が使うために、黒色魔力で包んではありますよ」

「そうですか、大したものですが、呪鉈の怨念をほとんど押さえ込んでいる……見事なものだ、上書きはやり方こそ単純ですが、その分魔力量を消費する、クロノさんは凄い才能をお持ちのようですね」  
「そうなんですか、自分ではよく分からないもので。」

ただ、呪いの武器と私の黒色魔力は相性が良い様に思えるので、この鉈くらいならどうとでもできますね」

「素晴らしい！ クロノさん、貴方は呪いの武器をそのまま扱える大変珍しいタイプですよ。」

もし良ければ、ウチにある呪いの武器を格安でお譲りしますよ」  
「はあ、いいんですか？」

「呪いの武器というのは、使い手は勿論保管するだけでも面倒なんですよ。」

モノによっては完全に封印までしないといけないし、そうでなくとも定期的に処置しなければ、どんな災いがふりかかるか分かったものじゃない、なにより縁起が悪い。

私も商売だから大体のものは買取りますが、どこの店でも安値でいいから売り払ってしまいたいのが本音ですよ」

「そうなんですか、普通に使えたら凄いい威力なんですよけどね」

「命には変えられませんから、どんなに強くても本末転倒なんですよ。」

それで、どうですか？」

「凄いい気になりますけど、今日はそろそろ帰ります」

日はまだ照っているが、夕方頃に村を出るとなると、文字通り真っ暗な夜道を歩かねばならない。

「そうですか、なら鑑定結果も明日ということでしょうか？」

「はい、また明日来ます、呪いの武器もその時に見せてもらえれば。あ、それと別な武器も見てもらいたいんですけど」

「ええ、どうぞ」

懐から取り出したのは、一振りの小ぶりなナイフと黒いタクト。

ローブと一緒に宝箱に入っていて、ナイフは使い方がよく分からない、タクトは何となく分かるが、一応鑑定してもらうに越したことは無い。

「鑑定のお値段は一つあたり2000シルバーとなりますが、よろしいですか？」

結構するなと思うが、鑑定するのは専門技術的な魔法が必要だし、『触媒』と呼ばれる魔法の発動に必要な材料もあるようで、ここがぼったり価格なのでは無く、どこでもこれくらいの値段らしい。

「はい、お願いします」

「かしこまりました、それではまた明日」

俺は武器を店主に預け、店を出——ようとして、足を止めた。

すっかり忘れていたが、今の俺の格好は黒のローブにパンツ一丁と通学路に出没する変質者と同程度の装備しかしていないのだ。

俺に今すぐ必要だったのは、魔法の武器でもアイテムでもなく、普通の服だ。

「すみませんが、服や下着はどこで買えますか？」

ローブの下パン一なんですよ、と余計なことは言わず、勤めて平静を装って店主へと聞いた。

「ああ、それでしたら――」

最も重要なお買い物情報を入手した俺は、今度こそクールに店を出る。

ちなみに、リリィはまだ寝ていた。

## 第25話 イルズ村道具屋（後書き）

クロノは新人セットを手に入れた！ 漸く冒険者としての準備が整いました、レッツ冒険者ライフ！！

結局クロノってローブにパンーじゃない？ というご指摘を頂いたので、ちゃんと服を買いに行くような描写を追加しました。

## 第26話 普通の高校生の話

姓は黒乃、名は真央、17歳の男子高校生。

髪を染めたり、煙草を吸ったり、喧嘩したり、そんなコトはしないし、しようとするヤツも周りにはいなかった、実に平和な学生生活。

家庭環境も特別何かがあるわけでもない、両親は揃い、兄弟は姉が一人いるだけ。

悩みと言えば、来年に控える受験勉強と、文芸部で発行する部誌の締め切りくらいのもの。

規則正しく進む平穏な日常、それが俺の全てだった。

「けど、何だか分からんうちに、気がつけば知らない所にいたんだ」

この世界で最初に目を覚ましたのは、実験室でリングを装着される時だ。

くそ、思い出すだけでも最悪な気分になる、これからの人生アレ以上に最低な目覚めを経験することは無いだろう。

「体の自由を奪われて、俺は白い部屋ばかりの施設で、実験を受けた。

その結果、俺は黒魔法が使えるようになったし、体もやたら頑丈になった、この世界の言葉も分かるし、字も読み書きできるようになった」

俺は望みもしないのに一方的に力を与えられた。

今の俺が持つ力は、この世界においては、それなりに修行でもないと思えないと身につかないものだろう。

それを一年に満たない期間でこの強さを得たのだ、その対価と言わんばかりに、肉体・精神両方とも苦痛続きだったがな。

「俺にある程度能力が備わったら、機動実験と呼ばれる戦いを強いられる」

無手のライトゴーレムから始まり、徐々に相手が強くなっていつ

た。

そして、それに伴って俺も確かに強くなった。

「ある時の相手が……俺と同じ故郷の人間だった。

そうだと気がついたのは、殺してしまった後だったけどな」

あれ以来、自分の意思を完全に手放すようになった。

だからと言って、実験が終わるはずも無い、ただ、俺の気持ち  
が逃避するようになっただけのこと。

自分の意識が離れていても、体が行う経験は確実に俺のものには  
なっていた。

「それ以後も、同郷の実験体と戦わされた、何人殺したのか、もう  
数は覚えちゃいないが、それでも確かに俺が殺した。

殺すたびに、また俺は強くなった——そうだな、火を噴くドラゴ  
ンを倒せるくらいの力は身につけた」

その頃には、もう自分の意識がはっきりする時間は無くなって来  
ていた。

俺の意識が、自我が、消え去ってしまいうさな、その瞬間だった。  
「事情は分からないが、気がついた時、俺を拘束するリングが外れ  
ていて、実験室の床に転がっていた。

今にして思えば、俺の意識が少しずつ消えかけていったのも、あ  
のリングの所為だったんだろう。

兎も角、俺を縛る元凶であるリングが外れたのは確かな事実だっ  
た。

俺は実験室にいるマスク共を殺して、迷わず逃げることを決めた」  
結果として、ヤツラが実験によって与えたこの力のお陰で俺は施  
設を脱出できたし、その後もほとんど飲まず食わずでここまで辿り  
着くことが出来た。

サリエルさえいなければ、施設の脱出も何ら危険は無かったくら  
いだ。

「施設を逃げた俺は、兎に角ヤツラの目の届かないところへ行こう  
と思って、パンドラ大陸行きの船に乗り込んだ。

で、次に目を覚ましたら、リリイがいたんだ」

膝の上に座るリリイに、俺が抱える事情を語って聞かせた。

俺自身、何故、どうやってこの世界に連れて来られたのか、あのマスク共の正体は何なのか、肝心な部分は何も分からないのだが。

「クロノ……」

「いいんだリリイ、確かに辛かったけど、もう過ぎたことだ」

リリイにも詳しいことは分からないだろうが、それでも俺が実験施設でどれほどの思いで過ごしていたのか、理解できている。

今更慰めの言葉が欲しいわけじゃない、ただリリイには知っておいて欲しかっただけだ。

もっとも、リリイが傍にいてくれるだけで、十分以上の慰めになっているのだが。

「なあ、リリイは別の世界から人を召喚する魔法みたいなのを知ってるか？」

「別の世界？」

わかんない、でも召喚魔法サモンはあるよ」

「モンスターを呼び出すヤツ？」

「うん」

「召喚魔法ってほとんどがソレなのか？」

「うん、モンスターとか使い魔とか呼ぶよ。」

他のはわかんない」

「そうか……」

モンスターや使い魔を召喚する魔法は、機動実験の際に何度か見たことがある。

俺もあんな風に光り輝く魔方陣の中から召喚されたんだろうか？  
しかしながら、俺やリリイが知る召喚魔法は、別の世界から呼び出すのでは無く、この世界の別な場所から呼び出すという効果ではない。

「クロノ、故郷に帰りたいの？　いつか帰っちゃうの？」

「ああ、帰りたい。」



俺がこれまで生きてきた全てを、丸々残してここに来ちゃったからな——」

今更だが、俺が消えた元の世界では一体どうなっているんだろうか。

行方不明扱いになっているんだろうか、どちらにせよ、家族にはあまりに大きすぎる心配と迷惑をかけてしまったことに間違いは無い。せめて、手紙の一つでも出せばマシなんだが。

「けど、俺も魔法について全く知らないわけじゃない、別の世界を行き来できるなんていうとんでもない効果の魔法がそうそう簡単に見つかるとは思わない。

だから、俺はしばらく、もしかすれば一生、この世界で生きていくことになる。

そんな時は、まあ末永くお付き合いを頼むよ、リリィ。

なんだってリリィは、俺がこの世界で出来た最初の友達だからな」

「うん！ リリィ、クロノとずっと一緒にいるよ！」

「ありがとう、リリィ」

リリィがいてくれるなら、俺はきつとこの異世界でも楽しく生きていける、そう思えた。

## 第26話 普通の高校生の話（後書き）

不思議とクロノはホームシックになっていないようです。実験施設暮らしが辛すぎて、今が天国状態に思えて幸せをかみ締めているのではないのでしょうか。

1日のアクセス数が何故か倍増しました、一体何がきっかけでこんなに……兎も角、ありがたいことです。この場を借りてお礼申し上げます！

## 第27話 初クエ!

受注クエスト・リキセイ草の採取

報酬・一袋5000シルバー

期限・遠雷の月第一週まで

依頼主・イルズ村道具店店主・キツシュ

依頼内容・妖精の森の奥に生えるリキセイ草を所定の袋一杯にとつてきて欲しい。3袋以上持ち帰ったパーティーにはリキセイ草で調合したポーション1セットを進呈。

「といワケで、やってきましたフェアリーガーデン!」

昨日の内に服もアイテムもぼっち準備した俺は今、ギルドで受ける初めてのクエストを行うべく、現地へと来ている。

現在位置は、リリイ宅の前。

「全然冒険する感じがしないなあ」

仕方ないだろう、だって取りに来た薬草の採取場所が妖精の森なのだから。  
フェアリーガーデン

朝方に家を出て村に行き、クエストを受注して、再び戻ってくる、見事に二度手間だ。

「ま、こうなると分かってて受けたしな。

よし、そんじやりキセイ草とかいうのを根こそぎ獲りに行くぞー  
!」

「おー!」

俺の声に伝えてくれるのは勿論、頼れる相棒リリイ。

わざわざ俺のクエストに同行するため、この度冒険者登録もしてある。

ちゃんと話して昨日の内にやっておけよ、と思うが、まあそれは置いておこう。

かくして、人間と妖精の新人冒険者コンビは、フェアリーガーデ

ンの奥地へと分け入っていったのである！

数時間前、俺はクエストを受注するために片道2時間かけてイルズ村までやって来ていた。

俺が『リキセイ草の採取』なんていう山菜取りみたいな内容のクエストを受注することを決めたのには理由がある。

それはリリィが『妖精の霊薬』を作るのにリキセイ草が必要だからで、このクエストを受ければ、報酬も貰えるし、薬の原料も調達できるし、と一石二鳥だったからだ。

それに他のクエストと違って俺とリリィの二人でも出来るし、場所もフェアリーガーデンと気楽に行けるからだ。

この機会に俺のホームグラウンドとなるフェアリーガーデンの地理にも明るくなっておきたいという思惑もある、薬草採取ならじつくりと散策が出来る。

「リキセイ草ってどこに生えてるんだ？」

「んーとね……あっち！」

完全にリリィに道案内を任せてしまっている。

いや、知っている人がいるんだから、教えてもらうのが良いだろう、ただ俺はついていくだけで何もすることが無いのがアレだが……モンスターが出たら俺が相手をしよう、そうしよう。

木々の間から木漏れ日が差し込む美しい緑の森を、妖精の後を追って歩く、何だか酷く幻想的なシチュエーションだな。

森林浴みないなリラックス効果でもあるのか、気分も安らかになっっている気がする。

この調子で行けばハイキング気分でさぞ楽しい薬草採取が出来ただろう。

「何かいるな……」

不穏な気配を察してしまった所為で、鼻歌でも歌いだすような気分が一気に吹き飛ぶ。

リリイもすでに気づいているようで、息を潜める。

しかし、あの輝く体じゃあどう足掻いても目立ってしまったって簡単に発見されると思うのだが、どうだろう。

周囲に複数の気配を探りながら、茂みを覗き込むと、果たしてそこにモンスターはいた。

「あの恐竜、見たことあるぞ」

視線の先いるのは、鋭い鉤爪を持った、二足歩行の小型恐竜に似たモンスターだ。

小型、と言っても人の背丈を越える程度には大きく、凶悪な牙が並ぶ頭を丸齧りできそうなデカイ口を見れば、肉食であることは明白。

子供の頃に恐竜図鑑で見たディノニクスというやつに形がそっくりだ。

「ダガーラプターなの」

「そんな名前なのか？」

「うん」

ギルドの討伐対象モンスター一覧表にその名前があったことを憶えている、なるほど、コイツがそうなのね。

確か強さのランクは1、ゴブリンと同ランクだが、個体としての強さは圧倒的にこちらの方が上だろう。

同じランクといっても強さの幅は結構なモノだ。

しかしラプター、とは異世界でも恐竜ちっくな名前なこと、確かに爪も牙もダガーナイフのように鋭いし、見たまんま恐竜だし、イメージ通りではあるな。

そのダガーラプターが一匹だけ、こちらに気づいていないような素振り、右に左にキョロキョロしている。

一見すると隙だらけに見えるが……

「誘ってるな」

「うん」

俺も機動実験で数々のモンスターと死闘を繰り広げてきた身だ、

モンスターに言葉など通じないが、それなりに相手の思惑が読めるようになった、あの地獄の経験は伊達じゃないぜ。

リリイも気づいているが、この隙だらけのラプターは囷だ。

俺たちの注意が完全にヤツへ引き付けられた瞬間を狙って、周囲に感じる複数の気配、仲間のラプターが攻撃を仕掛けるのだろう。が、そこまで分かっているのなら対処は簡単、このまま睨み合いを続ける選択肢など勿論無い。

「リリイ、あいつに一発撃ってくれ、後は俺がやる」

「分かったよ」

茂みから、リリイを前に、俺も同時に飛び出す。

囷のラプターは、即座に俺たちの方へ向き直り、攻撃姿勢をとる、が――

「ええーいっ！」

可愛らしい掛け声とは裏腹に、一撃必殺の威力を秘めるリリイのレーザービームが寸分違わず囷ラプターの眉間を貫く。

牙も爪も振るう事無く、一筋の閃光によって刹那の間に絶命する。リリイの仕事はここまで、後は――

「俺の役目だっ！」

俺たちが攻勢に出た瞬間、周囲に潜んでいたラプターが同時に姿を現し、一斉に飛び掛ってくる。

左右から二匹ずつ、背面から一匹、俺の背後をついたつもりだろうが、出方が分かれば対処は早い、素早く振り向き、手にする黒いタクトを一振りする。

「散弾」

魔力をタクトに通すと、注いだ以上に増幅され、仕込まれた魔法によって散弾が通常以上の密度で形成されていくのが分かる。

散弾の発動は一瞬で済む、左右合わせて四匹のラプターを、弾丸の黒カーテンが迎撃する。

タクトを使用せず、無手で散弾を放った場合であれば、致命傷を一発の発砲で与えることはできなかっただろう。

小型とはいえ恐竜の外観を持つダガーラプターは、鱗と堅い皮膚によってその身は守られており、ゴブリンとは比べ物にならない防御力を発揮する。

しかし、この魔法使いの宝箱から得た黒いタクト、正式名称『ブラックバリスタ・レプリカ』を使うことによって、その威力は通常の倍となる。

威力が上昇した弾丸は、鱗を砕き、皮膚を貫き、その肉体を容赦なく穿つ。

左右に一発ずつ同時発射された散弾は、ラプターを死亡か瀕死のどちらかに追い込み、その動きを完全に止めた。

残りは、俺の真後ろから飛び掛った一匹、今は振り返ったので、俺の真正面に位置する。

散弾を放った隙に真っ直ぐ最短距離を詰めたラプターの爪は、今にも俺に届かんばかりの距離まで迫っている。

「出ろ『呪鉈「辻斬」』」

足元の影より瞬時に出でる、呪いの大鉈。

その柄を手に取り、真っ直ぐ上へ切り上げる。

堅い鱗と皮膚を持つはずのラプターだが、この呪鉈の前ではゴブリンと変わらずに、骨ごと一刀両断されるだけ。

飛び掛ってきた勢いのまま一息に両断されたラプターの体が、ドサリと音を立てて地面へ落ちた。

「ん、残りは退いたか」

一瞬で六匹もの仲間がやられたのを見て敵わないと察したか、周囲の気配が急速に遠ざかっていくのを感じた。

戦闘になっても困りはしないが、率先してやりたいワケでもないので、追撃するようなことはしない。

そもその目的は薬草採取だ、モンスターの相手を全部していたらキリが無い。

「さーて、撃退に成功したし先を急ぐか。

あ、待てよ、一応倒した証を持って帰るか」

ダガーラプターは、一匹あたりいくらかまでは憶えていないが、間違いなく金にはなるのだ。

討伐の報告は、そのモンスターの識別が別個に可能な部位を持ち帰ることで証明される。

ゴブリンなどの人型なら耳がポピュラーで、ラプターなら爪や牙だ。

左右対称の形状をとる、一対の大きな爪と牙は、どれか一つ持ち帰れば一匹倒した証明になる。

俺は呪鉈で切り落としやすい爪を選んで、サクサクと切り取り作業を行った。



## 第27話 初クエ！（後書き）

完全にヌルゲーと化してますね。実験施設で死闘を繰り広げていた緊張感はどこへやら……何か2章から見ると安全で平和な異世界召喚モノに見えますね。

今日気がついたら日間ランキング3位になってました！ そろそろ100位くらいにはなれるんじゃないかと期待していたのですが、いきなり3位とはとんでもないサプライズでした。1日のアクセスがもう何倍したか分からないほど、驚くことしきりです。兎も角、それだけこの作品を評価してくれる方がいるということ、本当にありがとうございます！

## 第28話 呪いとレプリカと十徳ナイフ

むかし、昔、とある辺境の小さな村に、美しい少女がいた。

彼女はその美貌もさることながら、頭も良く、医学の知識を修め、さらに剣術の才能すら持つほどに多才であった。

それでいて、穏やかで心優しい性格であり、村長の一人娘という立場もあって、常に皆の中心で誰からも好かれる、絵に描いたような理想的な少女であった。

彼女自身、これまでの生活に満足していただろうし、村で一番強い戦士の男と婚約が決まった事に対しても、特に不満は抱かなかったはずである。

しかし、ある日この村に少年の魔術士が訪れた時から、彼女の運命は狂い始める。

少年は、最近この村に強力なモンスターが出没するようになった為、その退治の依頼を受けて村へやって来たのだ。

魔術の師より皆伝を受けたばかりの、魔術士としては新人であったが、若い熱意と正義感に燃える少年魔術士は、他の誰も危険度と報酬の見合わないこの依頼を自分の使命と感じて受けたのだった。

そして少年は村の戦士達と共に山へ分け入り、モンスター退治へ向かった。

しかし、このモンスターは自身が強力だけでなく、悪知恵まで働くタイプであり、自身が率いる小型モンスターの群れを使って、少年と戦士達を奇襲した。

奇襲によって、戦士達は散り散りに壊走、少年は小型モンスターに詠唱を邪魔され、一度も攻撃できず、命からがら村へ逃げ帰ってきた。

重傷を負って帰った彼を、医学の知識を持つ彼女が治したが、その時の少女の心情は、このあまりにも無様な結果に、村人全員が落胆したのとはほぼ同一のものであった。

傷は癒えたが、すでに少年は村で完全に信用を失っていた。

だが、少年は諦めなかった。

この少年は力こそ未熟であったが、その心に抱く正義感は、正しく御伽噺に登場する正義の魔術士と同じ、一度の敗北でその心が折れることは無かった。

村人の協力を一切得られない状況にも関わらず、少年は再びモンスターを退治すべく、一人で山へ入った。

無論、多くの群れを率いる強力なモンスターを退治することは出来ず、また傷を負って帰った。

彼女はまた少年の傷を治したし、村人は再び無様な姿を晒す少年を蔑んだ。

それでも、モンスターを倒し、村を救うことを決して諦めない少年は、傷が癒えるとまた一人で山へ入った。

また負ける、少女に傷を治してもらう、またモンスターへ挑む、何度もそれが繰り返された。

少年はモンスターとの戦いで徐々に力をつけ、小型モンスターの群れの数を着実に削っていった。

それでも、肝心のボスモンスターは健在であり、村人から見れば何も成果など上がって無いように見えたし、信頼の回復にも繋がらなかった。

だが、傷ついて帰ってくるたび、彼を癒し続けた彼女だけは、この諦めの悪い少年魔術士を見直すようになった。

いつも真剣で、ひたむきな彼の姿を見続ける少女が、それからさらなる思いを深めるのに、そう時間はかからなかった。

「いつもありがとう」

少年が傷を治してくれた彼女に礼を言い、何度目かのモンスター退治へ挑もうかという時だった。

「私も、連れて行ってくれませんか？」

一振りの大鉈を携えて、彼女が少年へ言った。

当然、少年は断った。

しかし、少女は頑なに同行することを願い出た。

曰く、村の為に一人でも戦い続ける貴方を助けたい、曰く、私も村を救うための戦いをしたい、曰く、剣の腕には自信がある、曰く、剣は持ち出さず鉈を持ってきたので村長にバレることもない——など、少女はよく回る頭をフルに使って、少年が断る言葉を片端から反論で潰していった。

「私も、連れて行ってくれますよね？」

ついに少年は折れた、少女のあまりの熱意によって。

が、この時点で少女はすでに、少年に強く惹かれており、本当はただ彼の助けになりたい一心で同行を願い出たのだった。

それは、翻って村の事など二の次ということ。

あるいは、すでにこの時から少女はおかしくなっていたのかもしれない、初めての恋によって。

「やった！ 今日は大戦果だ！」

彼女が加わったことによって、戦力は飛躍的に増大した。

威力の高い魔法を放つためには詠唱が必要で、その時間を稼ぐにはどうしても自分を守ってくれる剣士や戦士が必要となってくる。

モンスターと戦闘で十分以上力をつけた少年に、たった一人の剣士が加わるだけで、普段の倍以上もの力を発揮したのは、半ば当然ともいえた。

さらに、少女も、詠唱中の少年を見事に守りきっていた。

大きいとはいえ、所詮は鉈であるにも関わらず、少年を狙う小型モンスターを彼女は全で一刀両断、その腕前は村の戦士達より格段に上であった。

少年と少女の二人は、その後は常に一緒に山へ入り、確実にモンスターを追い込んでいった。

「今日こそ、決着をつけよう——」

前回の戦闘では群れを壊滅状態にまで追い込み、最終目標であるボスモンスターにも手傷を追わせたほど。

少年は台詞の通りに決心を固め、少女と共に最終決戦へ向かう。

「や、やった——」

丸一日に及ぶ激闘の末、少年と少女はついにモンスターを打ち倒した。

少年は、長い苦難の果てに、漸く村を救うことができたのを喜んだ。

しかし少女は、村が救われたことでは無く、少年が喜んでくれたことに対してのみ喜びを覚えていたのであった。

この時、少女はすでに少年の事以外に何も考えることが出来ない、他の一切が無価値だと思うほど、狂った恋心を抱いてしまっていた。村人には内緒で、少年と二人きりで戦い続ける日々は、少女の人生の中で最も満ち足りたものであったのだった。

二人は村へ戻り、少年がついにモンスターを討ち果たしたことを知らせる。

村長や戦士達をはじめ、多くの村人が集った広場で、討ち取ったモンスターの首を掲げて、少女は少年と共に戦った事を英雄譚の如く語った。

拍手喝采、村人は少年へこれまでの非礼を心から詫び、これほどの偉業を成し遂げた少年は、村長の娘である自分の新しい婚約者として迎えられる——迂闊にも、少女はこの瞬間までそうなる一切疑わなかった。

「そうか、モンスターを倒したなら、一応依頼料は払う。」

だが、娘を危険なことに巻き込んだ事は許しがたい、すぐに村を出て行ってもらおう」

少女は、村長である自分の父が語った言葉の意味を即座に理解できなかった。

村からすれば、少年はすでに見直すことなど出来ないほど蔑まれており、漸くモンスターを退治して、村に完全な平和を彼がもたらしたとしても「今更遅すぎる」と文句をつけられるだけであった。

村長としても、依頼した報酬を払う、というだけでも破格の待遇だと思っている。

何より、皆から愛される彼女を、少年が危険な戦いに巻き込んだことを、村長だけでなく村人全員が憤っていた。

「そんな――」

なぜ、と口にこそですが、頭の良い彼女が村人の心中をすぐに理解できないはずは無く、結局、少女はただ、理解したくなかっただけであつた。

だが、少年が深く頭を下げて謝罪する姿を見て

「今までありがとう、さようなら」

と、悲しげな顔で言った少年の言葉が耳に届いた瞬間、少女の世界は反転した。

自分と彼を祝福する、これまで育った愛すべき村は、少年の心を傷つける、モンスターよりも許しがたい敵となった。

「許さない――」

最初に、父である村長の首を断つた。

次に、婚約者だとかワケの分からないことを名乗る男の腹を裂いた。

後は、村人の姿をした‘モンスター’を視界に入るだけ辻斬った。

「絶対に許さない!!」

少年の魔法によって強化された大鉈は、これまで多くのモンスターを斬り、ついにはそのボスまでも屠ったことにより、僅かながらも魔力を帯び、並みの剣を超える威力を発揮する。

魔剣と化した大鉈を使いこなし、激情に駆られて人を斬ることに一切躊躇しない彼女を止められるものなど、この村には存在しなかった。

少女は目に付く限りの人を悉く惨殺した。

後に残ったのは、あまりに突然の惨劇に腰を抜かして動けない少年、凄惨な笑みを浮かべる血塗れの少女だけとなった。

「ど、どうして、こんな……」

地べたに座り込んだまま愛用の杖を握り締め、少女へと震えるような声をかける。

「どうして？ 決まっているでしょう——」

少女は、皆を魅了した愛らしい笑顔で答えた。

「貴方を愛しているからよ」

かくして、愛と憎しみの念が籠る呪いの大鉈は誕生した。

少女にとって、守るべき世界は自分と少年の二人きり、それ以外は全て敵対者であり、人もモンスターも区別は無いが故に、無差別攻撃の呪いが宿るのだ。

「——っていう超ヤバイ経緯がある鉈なんだって、コレ」

ゴブリンから鹵獲した呪いの武器である大鉈。

道具店での鑑定結果が出たので、こんなあんまり知りたくなかった血なまぐさい異世界昔話を知ることとなったのだ。

というか、鑑定ってそんな呪いが生まれる経緯まで判明するものだとは……いや、魔法って凄いね。

ちなみに、正式名称は『呪鉈「辻斬」』、刃に血を吸わせてさらに強化されると、名前も形状も変わるのだとか。

まったく恐ろしいレベルアップ機能だ、せめて経験値とかもう少しソフトな言い方をして欲しかった、刃が血を吸うって……

「で、こっちの黒いタクトは、ブラックバリスタっていう魔法を秘めた伝説の武器があるらしいんだけど、ソレのレプリカバージョンなんだって」

オリジナルのブラックバリスタとかいう魔法は、どんな城壁も貫通する黒い魔法の弩弓を撃ち出す、と伝えられている。

実際どんなもんなのかは分からないが、少なくともレプリカでは、俺が魔法で弾丸を発射するのとはほぼ同一のモノで、タクトを通して散弾やライフルを行使するだけで通常以上の威力が出せるという、俺と拔群の相性を誇る一品だ。

「ナイフの方は『イフリーストの親指』って、一部の炎魔法が使えらるようになるらしい」

タクトと一緒に宝箱に入っていたナイフの正体が、炎の魔法が宿るナイフだった、と言えは聞こえはいいが、俺が使える、一部の炎魔法、ってのがアレで……

「えーと、小さい火を出すのと、虫が焼ける程度の威力の炎の結界が張れる、という二つしか使えないみたいなんだ」

炎魔法と言っても、実際はライター代わりと虫除け代わりにしかならんのだ。

実用的といえば実用的だが、あまりの低威力になんだかちよつと物悲しい。

「あと、道具屋から買った呪いの武器があるけど、うーん、これも実戦では使いどころが難しいモノでなあ」

ストレートに剣とかなら良かったのだが、モノとしては『針』だからな、そもそも武器と呼べるのかどうかすら怪しいじゃねえか。

まあ、安かったからつい買っちゃったんだけどね……

「ねえねえクロノ」

「ん？」

「少年と少女はその後どうなったの？」

あんな残酷昔話でも、それなりに面白かったのか、リリーの興味を引いたようだった。

「あーそうだな――」

二人仲良く、末永く幸せに暮らしましたとき、めでたしめでたし」

それから、ダガーラプターを始め、他のモンスターに襲われる事無く、無事にリキセイ草が自生している場所に辿り着いた。

「おお、結構沢山生えてるな、これなら袋一杯に持ち帰れそうだ」

リキセイ草は、ソレと知らなければ見落としてしまうような地味な草だ。

強いて特徴を挙げるなら、タンポポのようなギザギザした葉であるが、それでも花を咲かせるわけでもないので、他の雑草と大差な



いように見えてしまう。

ただ、このフェアリーガーデンの奥地に生えているように、ある程度魔力の濃い環境でなければ育たないのだという。

人やモンスターだけでなく、草花にも魔力というのは影響を与えている、現代人の俺には中々理解しづらい感覚ではある。

「本当にこんなんが薬になんのかねえ」

「この薬草はそのまま使ってもダメだよ？」

「そういえばニヤレコさんもそんなコト言ってたなあ。

薬草なんていえばHP10くらい回復してくれてもいいような気もするけど」

「えっちぴー？」

俺はリリイにHPの概念を説明しつつ、一口に薬草と言っても、ちゃんと煎じたり加工したりして薬にしなければ効果が出ないモノが多い、というニヤレコさんの話を思い出していた。

リリイの言うとおり、リキセイ草はそれ単体では人体に使用しても何の治癒効果も無い。

薬学を専門的に修めて無くとも、こういった薬草そのままでも効果が有るか無いかということは、どこの農村部でも暮らしていれば自然と教えられるようで、知っている人は多い。

しかし都市の出身者ではポーションや傷薬の原料となる薬草はどれでも効果があると勘違いする人もいるのだという。

俺は完全に後者の無知なタイプであった、恥ずかしい。

「いいんだ、これから憶えていくから」

俺はイフリートの親指でリキセイ草を根元から刈っていく、勿論火は出さない、火事になったらどうする。

「ナイフとライターと虫除けが合わさったなんて、十徳ナイフみたいな多機能だな」

まるで炎の魔法のありがたみが感じられない、が、役には立っているのでイイコトにしよう。

「そういえば、リリイはどうやって草刈ってるんだ？」

魔法が無くとも常人以上の力を発揮する肉体を持つ俺でも、採取するにはナイフの方が断然早い。

リリイが素手でとるってのは明らかに効率悪そうだが、服すら着てないリリイがナイフや鎌なんて持つてゐるはずも無い。

ふとした疑問を持つて、俺の背後で芋掘り体験をする幼稚園児の如く一生懸命採取に励むリリイの姿を観察してみる。

リリイが草の根元をその小さな掌で掴むと、パチパチと光が手の中に瞬く。

次には、もう草は根元から完全に分離しており、リリイが小脇に抱える袋へ放り込むだけ。

「レーザーで焼き切ってるのか……恐ろしい子」

リリイが素手でも問題なく葉草採取ができるのは、やはり魔法の力であった。

うーん、俺ももっと色々と応用利かせられるように学ばねば、魔法使いとして！

リリイのさり気無い魔法の使用法を垣間見て、俺は魔法使いとしてのスキルアップを決意したのだった。

ちなみに、リリイが自分で採取した葉草の袋は、自分の空間魔法で収納していたのを見て、またちょっと俺は凹むのだった。空間魔法は『影空間』を操る俺の専売特許だと思ってたのに……

あ、この後は特にトラブルも無く、クエストは無事に達成した。

きっちり三袋分とってきたので、リキセイ草エキス1000ミリグラム配合のポーションを1セット、依頼主である道具屋店主から進呈された。

しかし、ランク1のクエストではどうあっても怪我などしなさそうなので、ポーションを使うタイミングが思いつかない、とっておくのはいいけど、これ賞味期限とか大丈夫なんだろうか？

## 第28話 呪いとレプリカと十徳ナイフ（後書き）

日間ランキング1位になりました！ まだ全然ストーリーが進んでないのにも関わらず、こんなに評価をしていただき、皆さんありがとうございます！

ところで皆さんは『ドラッグオンドラグーン』というゲームをご存知でしょうか。鬱ゲーと名高いこのDODですが、主人公の装備する武器のレベルが上がると、その武器に纏わる逸話が読めるようになるのです。私はこのシステムにいたく感激しまして、自分が呪いの武器を登場させる場合には、呪いが宿る経緯を設定しようと思います、『呪鉈「辻斬」』のストーリーが出来ました。ちなみに読み方は『じゅなた「つじきり」』です。

## 第29話 戻る日常

リリイと出会ってから、早いもので一ヶ月がたとうとしている。

この世界においても、一日、一週間、一ヶ月、一年、の数え方は正しい、なぜなら呼び名こそ違うが、ここで採用されているのは地球と同じく太陽暦だからだ。

俺がリリイと出会ったのは『緑風の月』と呼ばれる4月に相当する月、その最初の週である。

今は5月『遠雷の月』、明日で二週目に入ろうという頃だ。

この異世界太陽暦は、2月『氷晶の月』は28日までで、4年に一度29日を数える閏年も存在するなど、全く一緒である。

お陰ですぐに憶えることが出来た、一日の時間も大体24時間となっている。

如何せん時計が無いので、ハッキリとは分からないが。

それと、この村や周辺についてもそれなりに分かってきた。

イルズ村や付近の村は、小麦を基本作物とした農村である。

ただ、この異世界にはモンスターという危険な存在がいるので、人の住まう村は、どんな田舎でもそれなりに人数も集い、イルズ村のように木の柵など最低限の防衛設備を持っている。

なので、数戸しか無いような極小の村々が無数に点在しているようなことは無く、中世の文明レベルであるにも関わらず人里はかなり正確に把握できているようだった。

また、大雑把だが周辺の地理を記した地図も、村長の家で見せてもらい、イルズ村に隣村のクウアル村、ダンジョン指定されている妖精の森、クウアル洞窟、メディア遺跡、その他の森林や山岳地帯に川など、大体の位置関係は覚えた。

イルズ村周辺は、ガーヴィナルという竜族が最近興した国の領土の一部であるらしく、その首都であるダイダロスをそのまま国名代わりに使われ、また、竜王の領地とも呼ばれる。

ガーヴィナルは、竜族の中でも若いのだそうだが、それでも強力な力と野心を持って、自ら王となり国を建てたのだ。

ああ、それとすっかり忘れていたが、このパンドラ大陸は人間による征服活動が展開中なのである。

開拓だとか植民地だとか、そんな台詞を港町で聞いたが、それは事実であった。

ちなみに、ここがパンドラ大陸であるのに対し、俺が元々いた実験施設のあったところは、アーク大陸と呼ばれている。

そして俺の世界では海の向こうを渡ってやってきた人間が、新大陸をどう征服したのかは、すでに歴史が教えるところとなっている。

アフリカやインドにおいては、原住民を奴隷扱いで支配し、本国との一方的な交易を結ばされた。

南アメリカ大陸では、当時栄えていた二大帝国であるインカとアステカは、両方とも滅び、民族絶滅という最悪の結末を迎えている。では、このパンドラ大陸も、隷属か絶滅、どちらかの道を歩むことになるのか？ といえば、どうやらそうでもないらしい。

植民地が征服されたのは、突き詰めて言えば圧倒的に武力の差があったから、子供でも分かる簡単な理屈、強い方が弱い方を好きに出来るのだ。

このパンドラ大陸に住まう、エルフ、ドワーフ、ゴブリン、獣人などの亜人種は、鉄と火薬で武装した人間が現れたとしても、対抗できるだけの力を持っている。

この魔法の世界においては、銃は絶対的な力を持つ武器にはなりえない、小型のダガラプターすら満足に仕留められないようなものだ。

もっとも施設にいたヤツらの装備からいって、銃は開発されていないのは明らかであったが。

ついでに、俺はここ一ヶ月の生活で、異世界における人間という種族の持つ力がどんなものかも改めて知ることが出来た。

脱走する際、マスク共や剣を携えた軽鎧の集団は俺でも一息に殺

せる程度の力だった、あれは偶々弱かったのではなく、人間の基本的な強さがあの程度のものだからだ。

あのサリエルほどの力を持ったヤツで、1万や10万の軍団が作れるとは思えない。

やはりサリエルは完全に別格で、この世界での人間は、俺の世界にいた人間と、基本的な性能は同一であるのだ。

魔法の力はあるだろうが、人間の軍団は、モンスターの力を持つ集団に絶対的な優位性は無い、寧ろ個々の能力は劣る。

そして、人間側にサリエルのような強力な者がいるのなら、こちらと同じく、他のモンスターを圧倒するほどの力を持つ者がいる。

その代表がドラゴンであり、ダイダロスを治める竜王ガーヴィナルもその一人なのである。

アーク大陸から渡ってきた人間の、パンドラ大陸における上陸地点は不幸にも、いやここは幸運と呼ぶべきか、ダイダロスの目と鼻の先であった。

よってアーク大陸の人間は、竜王率いる強力なダイダロス軍を正面に相手取る形となっており、ダイダロスから先のパンドラ大陸に侵攻することは出来きないでいる。

ダイダロス軍は現在、上陸した人間をほぼ完全に封じ込めることに成功しており、アーク大陸の人間の全軍撤退を交渉という名の脅迫中であるという。

以上は全て村長から聞いた話であるが、港町で聞いた会話で、パンドラ征服がうまくいっていない、というのと内容が一致するので、恐らくほとんど事実だろう。

どうやら、戦乱に巻き込まれるような心配は杞憂に終わりそうで、俺はこのまましばらく冒険者生活が続けられそうだと思った。

そして、今日も異世界の平和な日常が始まる。

「あ、ヴァーツさんおはようございます」

「おう、おはようさん

お、今日はリリイさんがいないねえ、どうしたんだい珍しい」

「霊薬作りに今日は一日家で作業なんですよ、俺に手伝えることはもうないし」

「そうかい、ここ最近ほとんどアンタと一緒に毎日リリイさん見かけたけど、いないとやっぱり寂しいねえ。

けど、そうかあ、そろそろ薬売りの日だったかあ」

「今回はいつもより沢山作れるみたいですから、良かったらどうぞ、お代は勿論いただきますけど」

「あっはっは、商人だなあ」

「生活がかかってますからねー」

「そんなこと言って、冒険者で結構稼いでるんだろ？　かなり腕が立っって聞いたぞう」

「いやいや、黒魔法が珍しいだけですよ」

「モンスターを退治してくれりゃ何でもいいさ。

今日もギルドに行くんだろ、頑張ってるな！」

「はい、それじゃまた」

早朝、村へ行く途中で畑仕事中のヴァーツさんと挨拶するのも、最早習慣となっている。

初めて見たときはゴブリンが出現したと驚いたものだったが……うーん、慣れっすすごいな。

ヴァーツさんと奥さん、その子供達が畑仕事に勤しむ姿は、服装以外はやはりゴブリンの群れにしか見えないが、彼らは立派にイルズ村の一員なのである。

「グリントさん、おはようございます」

「おはよう、あんれ、リリイさんが――」

さっきから出会う人みんなに言われるな、まあ確かにいつもリリイと一緒にあったけど。

事情説明もそこそこに、村の門を顔パスで入る。

最初に来た時もリリイが居たからあっさり通してくれたけど。

「そういやあ、ウィンドルを見たってヤツが多くてよう、デカイ群れができつつあるみてえなんだわ」

ウィンドルは風狼とも呼ばれるモンスターで、ようは風の魔法を使う狼だ。

ダガラプターと同じように群れを組んで狩りを行い、危険度はランク1と最低レベルだが、村人からすれば十分脅威に値する。

「そうですか、じゃあ見かけたら退治しておきますね」

「おう、よろしく頼むわあ」

日々のモンスターの動向を聞くのも、いつもの事だ。

グリントさんは、自警団の団長らしいが、肉体派のリザードマンらしくこうして門番しているのが性にあっているのだとか。

それでも、村人や他の自警団員から村周辺の情報はしっかり聞いているらしく、特にモンスター事情には詳しい。

人間が侵略しに来ているとは言え、イルズ村にとって直接的な危険は、今も昔もモンスターだけなのである。

「おはよう、今日はどんな本をお探しかしら？」

村長の家を訪れて、異世界に関する本を読むのが、俺の午前の日課だ。

毎日図書室に入り浸る学生（現役で高校生だが）状態の俺を、シオネ村長は快く迎えてくれる、いや、いつもお茶とか出してもらってホントすみません……

「転移・召喚魔法か、その儀式設備がある遺跡について書かれているのってありますか？」

「魔道書はないけれど、そうねえ、遺跡系ダンジョンに挑んだ冒険者の記録くらいしか、それらしいものはないわね」

「それではお願いします」



俺は元の世界に帰ることを諦めたわけでは勿論無い。

ただ、どうすれば良いのか全くわからないので、こうして本などで召喚魔法について調べるくらいのことしかできない。

「魔法やダンジョンについて詳しい本となると、ダイダロスにある図書館でもないとありませんね」

「やっぱりそうですか、その内行くことも考えておきます」

まあいいさ、焦っても仕方ないし、この問題はゆっくり考えることにしよう。

## 第29話 戻る日常（後書き）

クロノもようやく異世界での生活が、日常、と言えるほど安定してきました。人間によるパンドラ大陸の侵略は進んでいないようですが、果たして……

### 第30話 冒険者パーティ

午前は村長宅で読書、昼はギルドで食事を摂り、そのままクエストを探す、というのがクエストを受けていない日の流れである。

「そしたら先輩が「後はアンタがやれ」とか言って！ 私に全部丸投げですよ！ 酷くないですかあ！？」

「そうだな、酷いな。」

だからニアレコ、もう少し静かに飯を食わせてくれよ」

「ちゃんと聞いてくださいよクロノさーん！！」

ギルドの新人職員ニャンコ、ではなくニアレコとも随分仲良くなっただと思う。

俺なんかもう呼び捨てだし、ニアレコは職員だけあって敬語がデフォだが、最近では仕事の話より雑談の方が多いくらいだ、ちなみに愚痴は雑談に含まれる。

相当お喋りな性格で、俺はいつも聞き役、今日もマシンガントークで俺の昼食を妨害してくる。

「というか、仕事はどうした？」

「コレ貰いますね、んー美味しっ！」

「あっ、おい！？ そんな沢山食うんじゃない！」

俺の皿から二切れの肉が消失する、消えた先は勿論ニアレコの口内だ。

「いいじゃないですか一口くらい」

「お前の一口は多すぎるんだよ！ 見ろ、パンとオカズの配分が完全に崩れてしまったじゃねーか」

「失礼ですねーそれじゃあ私が大口みたいじゃー」

「こらっ、サボってんじゃないよニアレコ！」

と、怒声と共にニアレコの頭上へ拳骨を降らせるのは、彼女がいつも愚痴を言う先輩職員であるハーピィのピーネさんだ。

「痛っ！？ 先輩、酷っ——私はただ、食事中でも仕事の話を聞き

たいという熱心な冒険者であるクロノさんのために、こうして席についているのであって――」

「いや、一方的に絡まれてただけだぞ」

「ちよっとクロノさん！？ 裏切りましたねっ！」

「そもそも組んだ憶えは無い」

「それじゃクロノさん、このコには面倒な書類整理を帰るまでさせておくから、クエスト受けるなら私を呼んでくださいな」

「分かりました。」

じゃあなニヤレコ、お仕事頑張って」

「グロノざあー！ーん！ 酷いでずうー！ー！！」

哀れな泣き声をロビーに響かせながら、ピーネさんに弱点の尻尾を捕まれて強制連行されて行くニヤレコ。

これで俺の平和なランチタイムが戻ってきた。

静かになったロビーで、心安らかにお茶を飲――

「おい、お前がクロノだな」

突然、さきほどまでニヤレコが座っていた俺の正面の席へ、何者かがどっかりと座り込んできた。

漸く落ち着いて飯が食えると思ったんだが……

「はい、私がクロノですが――」

俺の前に座った男は、ニヤレコと同じように猫獣人。ワーカーキャット

剣を背負った軽鎧姿、と一目で冒険者と分かる格好、彼の背後にはパーティーのメンバーであろう三人組みが立つ。

俺の正面に座る猫の獣人剣士、槍を携えたりザードマン、弓を背負うハーピー、長杖を手にするラミア。

すぐに各々の種族が判別できるのは、それだけ特徴的だからだ。ワーカーキャット

猫獣人はニヤレコと同じように、人型で髪もあるが、基本は猫が二足歩行したよう造形。

リザードマンは、獣人と同じように元となる動物が蜥蜴というだけ、だがこちらは髪も無いのでよりモンスター然とした雰囲気だ。

ハーピーは顔と上半身は人間で、下半身は鳥、そして何より特徴

的なのが、両腕が翼になっている、が、手はちゃんとある。

ラミアは、上半身が人間、下半身が蛇になっていて、下さえ見なければほとんど人間に見える。

ただ、縦に細長い瞳孔や、先の割れた長い舌など、蛇の特徴が所々に現れている。

この種族バラバラな四人組は、話をしたことは無いが、これまでギルドで何度も見かけたことのあるパーティーだ、確か名前は……「ランク2の冒険者パーティー『イルズ・ブレイダー』が私に何の用ですか？」

「ほう、俺達の事を知ってるのか、俺らも随分と有名になったな」

「ウチらの他に村専属のパーティーなんていないからじゃない？」

「バカっ、余計なコト言うなよアテン！」

耳をピーンと立ててオス猫剣士が、ラミアの魔術士に向かって吼える。

「それで、一体私に何のようですか？」

黙っていたら勝手にメンバーでワイワイ始めそうだったので、さっさと要件を聞く。

「お前な、ニヤレコの仕事の邪魔して口説いてんじゃねーぞ！ 迷惑してんじゃねーか！」

「……？」

何のことだ、一瞬ワケが分からなくなったが、コイツが言ってるのは、さっきまで俺がニヤレコに絡まれてた事を言っているのだと思いついた。

「あれはニヤレコさんが――」

「言い訳するにゃー！」

怒られた、つつーか今「にゃ」って言った。

「言い訳も何も、私が彼女を口説いたというのは事実無根で――」

「あー面倒くせえ、その回りくどい喋り方をやめやがれ！ 冒険者ってなそんな上品なもんじゃねえだろ！」

また凄い文句のつけ方をするな。

けど、敬語を使わなくて良いって言うなら

「いいだろう、俺もこの方が楽だ。」

アンタは俺の名を知ってるが、俺はアンタらの名前を知らない、だから、まずは自己紹介でもしてくれないか？」

何か無駄に格好つけた上に失礼な物言いだが、冒険者を一般人と考えてはいけない、舐められないようにそれなりの態度で接しなければならぬのだ。

という建前で格好つけたいだけなのは秘密な。

「……」

「ウチはアテン、同じ魔術士同士よろしくな」

猫剣士の意味ありげな沈黙を無視して、ラミアの少女がさっさと名乗りを上げる。

「アテン！？ またお前は勝手に――」

「いいじゃんリーダー、名前くらい名乗ってやったら、礼儀知らずはモテないぞっ」

「ぐっ……」

「ボクはハリーって言います」

「俺はクレイドル」

続けて、ハーピーがハリーと、リザードマンがクレイドルと名乗る。

「……俺はニーノ、イルズ・ブレイダーのリーダーだ」

「よろしく。」

知ってるみたいだけど、俺はクロノ、黒魔法使いの新人冒険者だ」絡まれたんだか、友好的なんだか、よく分からない微妙な雰囲気」が漂う。

名前は分かったが、結局俺に何用なのかは未だ分からない。

「それで、ニアレコがどうか言ってたけど？」

「そうだっ！ お前ニアレコに対して馴れ馴れしすぎるだろ！ つか呼び捨てにすんなっ！」

「どっちかって言うとな馴れ馴れしいのはニアレコの方じゃないのか

？  
」

「だからそんな言い訳は――」

「何なんだよ、ニヤレコの事が好きなのかお前？」

「なっ……なんでお前が知ってる！？」

あ、ヤベえ、適当に言ったら大当たりだったのか。

こんなにニヤレコがニヤレコがって難癖つけるのも、そうか……  
そういう事だったのか、納得。

というか、他のメンバーも「あーあ、やっぱりバレたか」みたいな空気を醸している。

「あー、なんだ、その……スマンな」

「五月蠅いっ！」

とは言うものの、机に突っ伏してしまうニーノ。

「とりあえず、俺の好みは人間の女の子だから、ニヤレコにちょっかい出そうなんて気は無いから安心してくれ」

「だよねーやっぱそうだってウチらが散々聞かせたのにさあ、このバカったら」

「やめろーそれ以上言うんじゃねえー」

意地悪い笑みを浮かべるアテンに、突っ伏したまま元気の無い反論をするニーノ。

「ニーノは放っておいて、クロノさん、ちょっとボクらに協力してもらえませんか？」

「というと？」

ああ、立ち話もなんだ、座ったらどうだ」

ちょっとマジメな顔のハリー、こっちが本題だったのかな。

兎も角、俺は初めて他の冒険者パーティーと同じ卓を囲むことになった。

「ボクらが荷物持ちの依頼を出しているのは知ってます？」

「ああ、そういえばそんなクエストもあったな。

それを俺に受けて欲しいってことか？」

「端的に言って、そういうコトですね」

「なー頼むよクロノ〜ウチらの荷物持って〜」

「アテン、ボクが折角マジメに交渉しようっていうのにその頼み方は――」

「いいぞ」

「え？」

「俺としても、そろそろ他のパーティーと交流を持ちたいと思っていたところだったんだ。」

それに、パーティーが実際にどう動くのかとか、色々見てみたかったし」

「なるほど、それなら話は早くて助かります、是非お願いします」  
「こちらこそ」

俺はハリーと固い握手を交わす、契約成立だ。

「待てよ、クロノは人間だろ、重いモノ持たせるなら獣人とかオークとかのがいいんじゃないのかー」

復活したニーノが今更ながら口を挟む。

が、彼のいう事は一理ある。

いくら俺がガタイの良い男と言っても人間である以上、獣人やオーク、リザードマンなどの種族の方が単純な筋力というなら圧倒的に上だ。

もっとも、俺には肉体の強化改造によって、獣人並みのパワーを魔法無しで発揮できるのだが、そんなことはリリィ以外には知らない。

「その心配はないよリーダー、クロノさんは空間魔法を使える」

「よく知ってるな、キッシュのオッサンにでも聞いたか？」

「はい」

やはりか、俺が頻繁に『影空間』でモノを出し入れしているのは道具屋くらいものだ。

すでにオッサン呼ばわりと、こちらも大分打ち解けた、というか、あのオッサンはやはり商売人らしく結構なタヌキ爺だ。

何かにつけて怪しい由来の品物を売りつけようとしやがる。



「ホントか？」

疑わしげな目つきのニーノ、なんだか俺嫌われて無いか？

恋敵かもしれないと思えば、そういう態度になるのかな、獣人はよくも悪くも裏表が無い性格の人が多いようだし。

「俺の足元を見てくれ――」

こういう時は実際を見せるに限る。

俺は足元から伸びる影から、影空間を開き、適当にポジションを呼び出す。

「「おおっ！」」

影が水面のように揺らめき、ポジションの瓶がプカプカと浮かび上がる。

「ウチ空間魔法始めて見たわ」

魔術士だけあって、興味があるのかアテンの目は輝いている。

「どれくらい入るものなんですか？」

ハリーが冷静に質問をする。

「重さはほとんど関係無しに、大きさは、そうだな――ここに居る五人全員が納まるくらいの空間が作れるぞ」

「それは凄い！」

「だろ、便利なんだコレ」

ふふん、とちよっと自慢する俺。

リリイは自分も使えるからなのか、あんまり驚いてくれなかったしな、こういう反応をしてくれると嬉しくなるね。

「こんならリーダーも文句つけられないね」

「別に文句つけたワケじゃねーよ、出来るんなら問題無い」

「そんじゃ、さっさとクエスト受けてくるよ」

「お願いします、ここで待っているの、詳しいことは後ほど話しましょう」

「分かった」

影空間も閉じた俺は、席を立ち、ピーネさんの待つ受付へと向かった。

### 第30話 冒険者パーティ（後書き）

初めて他の冒険者パーティが登場しました。なんだか学生のようなノリですが、彼らも立派な冒険者です。

種族がバラバラだと、特徴が掴み易くて書きやすいですね。

### 第31話 イルズ・ブレイダーと荷物持ち（1）

クエストランク2・ドルトスの狩猟。

報酬・1頭あたり3〜5ゴールド

期限・受注から一ヶ月

依頼主・ダイダロス商人ギルド

依頼内容・毛皮と食肉に利用できる大型の猛獣種ドルトスの狩猟をお願いします。当ギルドでは年中一律で素材の買取を行っているので、フリーの狩猟もご利用下さい。

「おお、あの謎肉の正体がコイツなのか……」

思わずそんな感想が漏れる、今回の受注クエスト。

と言っても、俺の正式な受注クエストはイルズ・ブレイダーの荷物持ちであり、ドルトスとかいう謎肉モンスターの狩猟はイルズ・ブレイダーの仕事だ。

ちなみに、毛皮や食肉の利用目的でモンスターを狙う場合は狩猟という扱いになるらしい。

倒すだけでなく、最低限は利用可能な素材をモンスターから剥ぎ取らねばならないし、時には生け捕りや傷一つ無い状態など、厳しい成功条件が貸される場合もある。

条件次第では楽に倒せるモンスターが対象でも、クエストの難易度は大きく変化するのが狩猟クエストといえるだろう。

ちなみに討伐は、倒すことそのものが目的のクエスト区分だ。当然、対象モンスターを殺すことが唯一にして絶対の条件となる。

「いいかクロノ、ドルトスの狩猟が目的だけど、俺達はフリーで小型モンスターの討伐も行う、最近増え始めてるウィンドルとかな。

俺達はモンスター討伐のクエストを中心に受注するパーティーだ、元々村の安全確保が結成目的の一つだからな。

けど、冒険者として活動する以上金は必要だ、フリーで倒したモ

ンスター含めて素材は持ち帰らなきゃいかん。

そこで、大量の素材を全部持ち帰る為に、お前を雇ったってワケだ」

そんな説明をニーノから聞いたのが、昨日の昼の話。

「いいか、明日は夜明けと共に村を出るぞ！ だから今日は村に泊まれ！」

と、いきなり言われたのもその時だ。

リリイには悪いが、これも仕事だと思い一週間ほど帰らない旨を手紙に書いて送ることにした。

異世界でも郵便制度があって助かったぜ、もつとも全国一律料金で確実にお届け、とはいかないが、隣の村にいくよりも近いリリイ宅ならば問題なく届けられるはずだ。

ああ、一週間もリリイに会えないなんて寂しいな、なんてちよつと感傷的になったりする辺り、俺も相当リリイに入れ込んでしまっていたのだろう。

リリイはどうなんだろう、俺が居なくてもそんなに寂しくはないのだろうか。

考えても仕方無い、クエストを終えたときには沢山お土産を買って帰ろう、そう決めて、その日の晩は宿泊施設も兼ねる冒険者ギルドの一室で眠りに着いた。

ドルトスが生息する場所は、ガラハド山脈という山岳地帯だ。

フェアリーガーデンを西側に抜け、ゴブリンが住み着いていた洞窟があった崖を越えた先がガラハド山脈である。

目的地へ到着するだけでも、丸一日かかってしまう距離、俺が全員分の荷物を影空間に収めているので、多少は早くなるだろうけど。フェアリーガーデンや村近辺の小型モンスターもフリーで倒すのは目的の内だが、まずはクエストの成功条件を満たす為、真っ直ぐ目的地へと向かっている。

なので、わざわざフェアリーガーデンを越えることはせず、歩きやすくモンスターもほとんど出遇しない安全な街道を通る。

ちよつとしたハイキング気分で、呑気にお互いの事を話して歩いた。

例えば、ハリーはピーネさんの弟で、クレイドルはグリントさんの息子だとか。

ハーピーのギルド職員ピーネさん、確かにハリーは似た顔つきである。

リザードマンの顔の区別はイマイチつかないが、クレイドルはグリントさんと同じ青い鱗だ。

槍術は自警団団長を務める親父さん仕込みらしい。

色々と話を聞きつつ、メンバー4人の性格なども大体分かってきた。

リーダーのニーノは、勢いで俺に突っかかってきたことで分かるように直情的なタイプだ、ニヤレコに対する思いも一直線である。

だが、メンバーの中では一番腕が立つようで、「武技」もいくつか習得している。

「武技」とは、魔法を使えない剣士や戦士が、自分の魔力を源にして発動させることができる特別な効果を持つ技だ、必殺技といえはしっくりくるかもしれない。

かつては俺も機動実験で、細剣でありえない重さの斬撃をくらったり、炎を纏った剣で切り付けられたり、雷を纏った槍で突かれたり、と色々な武技を経験した。

魔法と同じように魔力を使うことに変わりはないのだが、魔法と武技は別々の理を用いているので明確に区別されるのだとか。

理論はどうあれ、結果的には魔法を使うのと同じだけの攻撃力や防御力が実現される凄スキルなのだ。

それを複数習得しているという事は、すでにベテランと言えるほど剣の扱いに精通しており、初心者域をとくに脱していることを現している。

だが、アテンにからかわれたり、ハリーに諫められたりしている姿をしょっちゅう見ていると、あんまり凄いと……まあちゃんと仲間からは信頼されているようなのでOKということにしておう。ハリーは、その口調と雰囲気で何となく察していたが、メンバーで一番頭の良いインテリ少年だ、メンバー以外は基本さん付けで呼ぶ。

戦闘以外に関しては彼が担当している、俺に荷物持ちの交渉をしたように。

武器は弓で後衛だが、魔術士であるアテンを守る最後の壁役でもある為、短剣での近接戦闘もできる。

クレイドルは、寡黙な男で普段はあまり会話に参加せず、最低限の事しか発言しない。うーん、異世界でもこういうタイプの人がいるってことだ、友人にこういう性格のヤツがいたからよく分かる。

戦闘では、ニーノと並んで前衛を務める。

堅い皮膚と鱗に守られ高い防御力を発揮するリザードマンだが、彼もその例に漏れず、緊急の際には身を挺して仲間を庇う。

アテンはメンバーで唯一の女性、紅一点ってヤツだ。

ただ、異性の好みは基本的に種族ごとに固定なので、割合美人に見えるアテンでも、それに惹かれるのは同じラミアだけなのである。なので、色恋沙汰で内部分裂の危険性は無いようだ。

魔術士である彼女は単独では一番弱い、前衛がサポートすれば広範囲の中級攻撃魔法を放つことが出来る、パーティーの攻撃の要である。

一応回復魔法も使えるが、戦闘中で隙無く使えるほど得意ではないので、回復はアイテム類に頼る、完全に攻撃型の魔術士である。大体こんな感じで、それぞれのパーソナルデータは得られた。

後は実際に戦闘している所を見れば、実力がはつきり分かるだろう。

「ねークロノはどうなの？」

「どう、というと？」

アテンから唐突に話を振られる。

「どんな魔法が使えるとか、戦い方とか、色々あるでしょ？  
ウチらの事は話したけど、クロノの事は聞いて無いし」

「そうだな、お前も冒険者やってるってんなら腕には自信あるんだろ？」

「うーん、他の冒険者と比較したことが無いから何とも言えないな、ただリリィよりは魔法が上手く無いのは確かだ。

詠唱とか出来無いし、せいぜいシングルアクションと防<sup>シールド</sup>御魔法が使えるくらいだ」

シングルアクションとは、『ライフル』や『散弾』のような魔法のことだ。

自身の魔力を固めて外に撃ち出す、他の術式などを用いず、一つの工程で発動させるからシングルアクションと言う。

そういえば、俺のシールドもただ魔力を固めただけだから、シングルアクションでの発動となるな。

兎も角、魔術士としては、基礎中の基礎である、これが出来なければ魔法の才能が無いということになるのだ。

「ええー空間魔法使えるくらいだし、すごい魔法覚えてるかと思ったのに。」

っていうかシングルアクションとシールドだけでよく冒険者になろうと思ったねえ」

何かちよつと哀れみの視線を向けられてないか俺？

確かに、詠唱とかで複雑な追加効果は発動できないけど、無限に銃弾を撃てるようなもんだし、小型モンスター程度の戦闘で困ることは無いんだぞ。

「クロノさんはまだランク1だし、今回は戦闘に参加するワケでも無いので大丈夫ですよ。

これから色々魔法を覚えていくだろうし、アテンも何か教えてあげればいいんじゃないですか？」

あれ、もしかして俺スーパ<sup>ー</sup>初心者だと思われてる？

まあいいや、今回戦闘は俺の役目じゃないし、変に出しゃばらなくてもいいか。

「ウチ黒魔法のコト何にも分かんけどー？」

「いや、俺はマトモに魔術士から魔法を教わったことが無いから、魔法の基本みたいなことから教えてくれると助かる」

これはマジだ。

リリィの魔法は確かに凄いが、アレは種族が最初から行使できる  
固有魔法と呼ばれるタイプだ。  
エクストラ

言うなれば、ドラゴンが火を噴くのも同じで、別な種族が習得しようと思っても構造的に不可能なのだ。

よって、この世界で魔術士と呼ばれる者が使う魔法がどういうモノなのか俺は全く知らないのだ。

詠唱とか儀式とか、完全に未知の領域である。

「そうかくけどウチの指導は厳しいぞ！」

「お前弟子とれるほど高位の魔術士じゃねーだろ」

「うっさいわ！ 噛むぞコラっ！」

「バカっ！？ やめろ、お前の牙毒あんだろが！？」

ニーノに猛然と襲い掛かるアテンを、俺含めてメンバーが生暖かい目で見守る。

こういうバカなノリで騒ぐ光景を目の当たりにして、少しだけ元の世界にいた頃を思い出すのだった。



### 第31話 イルズ・ブレイダーと荷物持ち（1）（後書き）

狩猟クエストとか正にモンハン……でも仕方無かったことなんです、本当です。

モンハンだと尻尾を切ったり、角を折ったりと部位破壊すると、その部分の報酬が（物欲センサーが感知しなければ）もらえたりするのですが、リアル狩猟だと逆ですよ。ロシアではクロテンの綺麗な毛皮をとるために、外傷が残らない圧殺するような仕掛けの罠で捕まえるなど、そういう無傷で捕らえる配慮があります。

この異世界でもそれにならって、モンスターの素材利用を目指す場合はそうした条件が課される場合も少なくないです。

今回は食肉利用が大きいので、ドルトスが少々傷を負ってもOK、ただし毒殺を除く、という感じの緩い条件ですね、ランクも2ですし。

### 第32話 イルズ・プレイヤーと荷物持ち(2)

冒険者生活を始めて一ヶ月、野宿にも慣れたものだ。

と言っても、俺の体は三日間不眠不休で動き続けてもほとんど疲労しないし、腹も減らないと言う頑丈さなので、地面に直接寝そべったって休息が取れるほどだ。

が、それは可能というだけで快適というわけではない、人間はやはり健康で文化的な最低限度の生活を送るべきなのだ。

なので、テントの設営や焚き火の起こし方など、普通の人が野宿するに必要なキャンプスキルを最低限習得した。

もっとも、魔法的万能十徳ナイフ・イフリートの親指があるので、火関係は随分と楽できるのだが。

「何してるんですかクロノさん？」

野営の中心近くの地面にナイフを差し込む俺へハリーが声をかける。

「ああ、コレは虫除け」

「虫除け？——って、もしかしてこのナイフ、魔法の武器ですか！？」

「ああ、そうだけど……そんなに驚くようなもん？」

ハリーの魔法の武器発言を耳ざとく聞きつけたアテンがやってくる。

「いいなーウチも魔法の武器欲しい！」

今にも地面からナイフを抜き差ってお持ち帰りしそうな雰囲気。

「あげないぞ」

一応釘は刺しとかないと。

「どういうモノなんですか？ 鑑定はしてありますよね？」

「ああ、これはイフリートの親指つって——」

ナイフの説明を大まかに語る。

攻撃が見込めるほどの能力は無いし、虫除け程度の効果しか無い

結果が張れる程度だと聞かせるが、それでも尚魔法の武器は魅力的らしい。

「――けど、そんなに珍しいモノなのか？」

「珍しくはないですけど、やはり魔法の武器ならどんなに安くても10ゴールドはする高価なものですからね」

「ウチらにやもう少しせんとテが出んのよ。」

あ、んでも10ゴールドよか安けりやニセモノか呪いの武器ね。

都市に行ったらそんなのばっか売ってるから気をつけなよ」

「そうだったのか」

そんなに高価なものだったとは、もっと大事にした方がいいだろうか？

いつも便利アイテム扱いしかしてなくてゴメンなイフリート。

「にしても、何処のダンジョンで手に入れたん？」

「これはリリーの家にある宝箱を開けて手に入れたんだ」

「というと、森の魔術士の小屋ですか？」

森の魔術士はイルズ村に大きな貢献をしたし、なにより結構な魔法の使い手だったらしいので、今でも有名だ。

「ああ」

「魔術士の宝箱なら、何か封印かプロテクトかかってたんじゃないのん？」

「強化と電撃トラップ魔法がかけられてた、でも頑張って開けたぞ」

「頑張って開くんかい」

「クロノさんは魔法使いより盗賊の方が向いてるかもしれませんね？」

「盗賊って……」

「ダンジョン探索する冒険者じゃ、トラップ解除したり、扉や宝箱開けたり、盗賊クラスは必須だよ」

「そういうスキルを持った人の事を昔から盗賊って呼んでるので、別に泥棒してなくても盗賊を名乗るんですよ」

「あーなるほど、立派な一つのクラスなのね」

また一つ冒険者の常識を学べたぞ。

あと、アテンがいつまでも羨ましそうにナイフを見てるんだが、まさか泥棒するほうの盗賊にクラスチェンジしたりしないだろうな？

俺達が野営する場所は、街道から少し外れたガラハド山脈の麓である。

街道から近く、それなりに開けた場所でもあるので、モンスターがここまで出ることはあまり無く、ガラハド山脈へ登る冒険者達は、基本的にこの辺りを拠点にする。

姿こそ確認してないが、近くには俺達と同じように野営中の冒険者パーティーがいるはずだ。

そんな割と安全な場所ではあるが、だからと言って油断するのは冒険者失格、最低でも夜間の見張りは必要である。

「ん、クロノか」

現在見張りをしているのは寡黙なりザードマン、クレイドルである。

首からドッグタグのように下げられた、ランク2を示す銅のギルドカードが焚き火に照らされキラリと光った。

俺がランク1の鋼<sup>アイアン</sup>プレートから、銅<sup>ブロンズ</sup>プレートに変わるのは何時頃になるのだろうか、とそんなことをふと思った。

「いいのか、まだ起きていて」

この後は、ニーノ、ハリーが交替で見張りを行う。

アテンが見張りをしないのは、女の子だから、なんて甘えた理由では無く、精神の集中力が重要な魔術士なので、出来る限り疲労させたくないというのが理由だ。

多少疲れていても剣は振るえるが、魔法が発すれば何も起きないのだ、その差はあまりに大きい。

そんなワケで、イルズ・ブレイダーでは夜の見張りは男の仕事となっている。

「俺も一緒に見張りしようかと思って、もしかして邪魔だったか？」  
「いや、お前の方こそ、依頼には無い仕事だがいいのか？」

「好きでやってることだから気にしないでくれ、冒険者らしい経験をしときたいと、まあそんだけの理由さ」

「退屈なだけだぞ」

「二人なら少しはマシだろ」

「そうだな」

二人ならちゃんと言葉のキャッチボールをしてくれるようで安心した、少なくとも嫌われてはいないようだ。

リザードマンは蜥蜴の頭なので、表情変化に乏しい、あるのかもしれないが、今の俺には読み取れるレベルでは無い。

若干不安もあったが、クレイドルの言葉を聞けば、俺のことをちゃんと受け入れてくれてるというのが分かる、普通にいいヤツそうだ。

これから多少なりとも命の危険のある仕事を共にするのだ、メンバー全員と円滑な人間関係を築いておくに越したことは無い、あ、人間なのは俺だけか、まあいい。

「――クレイドルは、何で冒険者になったんだ？」

焚き火を囲んで、静かな夜空の下、種族は違えど男二人で語り合う。

「俺は、親父のように自警団で村を守る仕事をしたい。

だが、モンスターとの戦いを多く経験できるのは冒険者だからな」

「なるほど、今は出来るだけ強くなっておきたいと」

「ああ、親父も若い頃は冒険者をしていたと言う、俺もそれに倣っただけの事だ」

「いや、十分立派だよ。

俺には一攫千金を夢見て冒険者になるよりは、マシな動機に思えるぞ」

「そうか？ 冒険者としては不純だと思っていたが」

「ここと俺の故郷とじゃ微妙に価値観が違うからかな。」

デカイ夢より、地に足の着いた将来像に向かって努力を重ねるヤツの方が評価できる」

「そうか……そういう考え方もあるのか」

「ああ、クレイドルは立派だよ、自信もっていいぜ——」

比べて俺は、生活の為、か……ちよつと情け無いな、いや見知らぬ土地で生きるために必死なんだから仕方ないか。

「クロノはどうして冒険者に？ 事情があるなら語らなくてもよいが」

「俺は生活の——……じゃなくて、探してる魔法があるんだ。

特別な召喚魔法で、どうにも古代の遺跡か神殿にある儀式設備でも無いと出来ないようなヤツ」

「クロノの魔法は召喚が専門なのか？」

「いや、魔法を極めたくて探してるんじゃないんだ、俺が故郷に帰る為には、どうしても必要でね」

「とても遠い国から来た、とだけ聞いたが……それほど場所だったとは」

「そういうコトだ、ま、ここでの生活も気に入ってるし、ゆっくりやるよ」

「そうか——む」

何か気配を察したのか、クレイドルが槍を手に立ち上がる。

「どうした？ モンスターの気配は感じないけど」

「モンスターではない、これは——猿だ」

草むらへ槍を軽く振るうと、ガサガサと物音を立てて小さな影が飛び出る。

「おお……ホントに猿だ」

リリイより少し小さいくらいの猿が二匹、焚き火の光で照らし出される。

黄色く光る目の、灰色カラーリングのニホンザルみたいな姿であった。

「カアッ!!」

クレイドルが一声吼えたと、猿は慌てるように、闇の中へと消えていった。

「あの猿は、襲ってくることは無いが、食料などを盗んでいく。放っておけば仲間を呼んで根こそぎ持ち去ってゆくが、こうして一度でも威嚇しておけば、危険だと判断して近寄らなくなる」

「そうなのか……」

俺は、魔力と殺気を持つモンスターや人の気配はそれなり感じ取れるのだが、ああいった動物は察知しにくい。

なるほどな、敵は何も攻撃してくるモンスターだけでは無いという事か。

クレイドルはすぐに猿の接近に気づいていたし、経験の差を見せ付けられた感じだ。

「やれやれ、一流冒険者の道は遠そうだな——」

### 第32話 イルズ・ブレイダーと荷物持ち（2）（後書き）

ところで、魔法の武器と魔法使いの杖は別物です。どっちも魔法を利用した武器であることに変わりはありませんが、杖は魔術士しか使用できないので、クラスにあまり囚われず使用できる魔法の武器の方が、自然と価値が高いものになります。





なので本来の目的通り、冒険者パーティーが戦闘においてどう立ち回るのかをじっくり観察中なのである。

俺も自慢では無いがモンスターとの戦闘は素人では無いと自負している。

が、それはあくまでも単独での場合、彼らのように、流れるような連携をとることは出来ないだろう。

モンスターでも、群れのように徒党を組んで襲ってくるタイプは多いが、やはり知性のある人型種族が編み出すチームプレイには敵わない。

イルズ・ブレイダーの個々人の力量が、それぞれランク2相当のものだとしても、こうしてチームとして戦えば、それ以上の強さを発揮しているというのが、この一戦だけでよく分かる。

「よし、逃げたな」

あんなナリでも危険を察知する本能はあるのか、スライム達が四方に逃げ去ってゆく。

「大した金にはならんけど、荷物もいることだし、核を回収しとくか——」

と、ニーノがスライム討伐の証となる部位‘スライムの核’を手にとろうとした時だった。

ズズン——

「地震、じゃないよな……」

何なんだ？　と思うが、どうやら疑問を感じているのは俺だけの様で、他の面々は真剣な顔で音と振動が起こった方向へ目を向けた。「向こうから来てくれるとは、探す手間が省けたな」

ニーノが再び剣を抜き、すでに槍を構えるクレイドルの隣に並ぶ。

「クロノ、ちょっと離れててな」

アテンがそれだけ俺に言うのと、杖を振り上げ詠唱を始める。

その前では、矢を3本纏めて弓に番えているハリー。

全員、完全な臨戦態勢。

音と振動がどんどん接近してくるのを感じる。

この状況は、間違いなくアレだな――

「バアオオーン!!!」

甲高い鳴き声を上げながら、並んだ木々をものともせず、ぶち破って、灰色の巨体が飛び出てきた。

一見すると象、大きさも動物園で見たことあるソレと同じ程度だが、こちらへ向かって一直線に猛進してくる姿は猪のようである。

最も象らしく見えるのが、特徴的な長い鼻、ついでに、マンモスのように毛で覆われ、牙も生えている。

だがその牙の形状はトナカイの大きく広がる角に似た独特な形状だ。

長い鼻、灰色の毛、牙、そして真っ直ぐ突進してくる行動、どれをとっても、事前に聞いていたものと一致する。

このモンスターこそ正しく、今回のクエストのターゲット、美味しい謎肉の正体、暴走獣ドルトスだ。

ヒュツ——ドスツ！

猛進するドルトスに最初の一撃を与えたのは、ハリーが放った矢であつた。

三本束ねて同時に放たれた矢は、全てドルトスの頭部に突き刺さるが、その突進の勢いは全く衰えない。

すでに、前衛組みであるニーノとクレイドルのすぐ前まで、10  
トントラックのような巨体が迫る。

「アテン！」

[.....]

アイズ・アルマシルド  
「氷結大盾！」

先ほどから詠唱を続けていたお陰で、アテンの魔法が即座に発動、ドルトスとニーノ達が衝突する直前、両者の間に氷の壁が出現する。

突如目前に現れた氷の防御壁、ドルトスにはそれを避ける術も無ければ、避ける気も無かった。

そのまま猛スピードで氷壁に正面衝突。

ドルトスの十二分に加速された突進の威力によって、氷壁は割れるような音と共に砕け散った。

しかし、氷壁を砕きはしたものの、ドルトスの突進は完全に止められ、また衝突したショックによって倒れこんだ。

「今だっ！」

砕け散った氷の壁を踏み越えて、ニーノとクレイドルがダウンしたドルトスへと襲い掛かる。

頭部を狙って、二人は二度三度と切りつけるが、その硬質な毛皮と分厚い頭蓋骨によって、致命傷を与えきれない。

ドルトスは唸り声を上げ、すぐさま復活する。

長大な牙を振り乱し、自身の頭部へ攻撃を加える二人を追い払う。その牙には魔力を宿しているのか、風を纏い、旋風を巻き起こす。

「うおっ——」

突き上げられる牙が掠る、風を纏っているため、それだけで軽がるとニーノの体が吹き飛ばされる。

中空に投げ出されたニーノへ追撃をかけようとするが、クレイドルの刺突と、ハリーの援護射撃によって、ドルトスの動きを封じる。

「——っ」と

空中で、正しく猫のように体勢を立て直し、軽やかに着地したニーノ。

再び剣を振り上げて、暴れまわるドルトスへと斬りかかって行く。

「コイツは久しぶりに大物だぜ、絶対に仕留めるぞっ！」

「「おおっ——」」

威勢よく声を上げてドルトスへ向かってゆくイルズ・ブレイダーのメンバー、激闘を繰り広げるも、どこか楽しそうな彼らを、俺は少しだけ羨ましく思ったのだった。

「お疲れ様」

長い戦いが終わり、流石にぐったりと疲れた様子を見せるメンバーに、一人だけ元気な俺は声をかける。

「おう、疲れたあー後は頼んだクロノー」

と、投げやりに言って、そのまま寝転がるニーノ。

そのすぐ傍には、地に臥せったドルトスの巨体、ニーノが武技を使って眉間を貫いたのが致命傷となり、絶命している。

それ以外にも、メンバーが各々の攻撃で与えた傷が、ドルトスの体に無数に残る。

モンスターは、ただの動物よりも生命力が強く、無惨にも思えるほど外傷を与えなければ殺しきることが出来ない、体が大きければ、尚更タフにもなる。

狩猟としては、外傷が多いのはあまりよくない倒し方かもしれないが、メインがあくまで肉なのでOKなようだ。

「頼んだつつつても、俺は解体の方法知らんぞ」

「そんなら空間魔法で持ち帰ったらいいじゃんねー」

「簡単に言うなよアテン、ここまでデカいと、容量ギリギリだぞ」

「え、ギリギリってことは全部入るん!？」

「多分な」

おおーとメンバー全員から感嘆の声が上がる。

おい、多分出来ると言っただけで、もしかしたら足の一本くらいは置いていかなきゃならないかもしれないのだぞ。

「いーからいーから、出来るんなら早くやっちゃって♪」

「お願いしますクロノさん、本来ならこの場で解体するんですけど、それだとやはり血の匂いに惹かれて他のモンスターが来る可能性もあるのだ」

「なるほど、移動できるんならそうするべきなのか」

「はい、よろしく願います、何なら報酬加算しましょうか?」

「そこまで言うなら、頑張ろうかな——影空間」

加算しなくても、これくらいはやるつもりだったけどな、くれると言うなら貰っておくぜ！

俺から延びる影が、ドルトスの体へ落ちる。

それから、限界まで影空間を構築し、少しずつドルトスを引き入れてゆく。

「くっ、重くてデカイと入れるのも一苦労だ……」

それでも、何とか納まりそう、一度入れてしまえば重さや大きさは関係無い、もう少しの辛抱だ。

「完了だ」

「おおークロノすごい！」

ニヨロニヨロと俺の体にアテンの尻尾が絡んでくる、本人はスキップのつもりなのかもしれないが、大きな蛇に絡まれるというのは中々にゾットする。

「ぐっ、離せアテン……」

「照れるな照れるな」

「いや、本気で怖い」

「なんやとおー！！」

兎も角、どうにかドルトスを仕留め、クエストの目的を達成することができたのだ。

「それでは、クエストの成功を祝って――」

「乾杯！」

イルズ村冒険者ギルドに、イルズ・ブレイダー十荷物持ちの声が響く。

イルズ村を経ってから5日目の今日、無事目的を果たして帰還した。

帰ったのは昼過ぎだが、報酬の受け取りやその他諸々の後始末に時間をとられ、夕暮れの今となって漸く、こうして酒瓶片手に卓をみんなで囲めるのだ。

勿論俺も飲む、なぜならこの世界に20歳未満にお酒を禁止する法律など存在しないからだ。

しかしながら、これも改造強化の恩恵(?)なのか、どれだけ飲んでもほろ酔い以上にならないことがすでに判明している。

「おー、飲んでるかぁクロノ」

すでに顔が赤いアテンがニヨロニヨロと俺に絡んでくる。

「今回はクロノのお陰で色々捗ったし、クエストも大成功だったし、感謝してんだぞう」

「そうですね、またお願いしたいですよ」

「ああ、助かったぞ」

「まあ、報酬分はきっちり働いてくれたな」

メンバー全員から賛辞が送られちよっと照れくさい。

「みんな、ありがとなっ!!」

けど、嬉しいのも事実だ。

例え異世界だろうと、どこだろうと、自分の働きが認められれば嬉しいに決まってる。

また少し、俺がこの世界に受け入れられたような気になる。

きっと、これから先もつと彼らのような人達と、知り合い、仲を深めていくことだろう。

けれど、この時頭に浮かんだのは、やはり異世界で最初の友人であり、相棒である、小さな彼女の顔だった。

「ああ、リリィに会いたいな――」

### 第33話 暴走獣ドルトス（後書き）

タイトルがモロにモンハンのクエストっぽいですね、分かっ  
てつけたんですけどね。

さて、イレギュラーな事も無く無事にクエストも終わりました。  
なんと、次回でこの長い2章の最終回となります。これまで長閑  
で平和な異世界の日常を描いてきましたが、ようやく物語が動き始  
めますね。



### 第34話 満月の夜に

メンバー達との酒宴もそこそこで抜け出し、俺は帰路へとついた。本当は、朝まで飲み明かして、帰るのは明日でも良かった（事実、そうしろと言われた）のだが、どうしても今日中に、リリイの顔が見たくなってしまったのだから仕方が無い。

手紙一つで5日も空けてしまったからな、寂しかったかな、俺は寂しかったぞ。

けど、今回の報酬で得た金の半分近くを使って、リリイへのお土産である果物や砂糖菓子を山ほど買っての帰還だ。

喜ぶリリイの顔を思い浮かべ、久しぶりの再開に若干浮つきながら、俺はリリイが住まう小屋の扉を開けた。

「ただいまー」

扉を開けると目に入るのは、すでに見慣れた部屋の中。

俺が住むことになったので、色々と整理して、現在はかなりさっぱりとしている。

そんな感想を遮るように、

「クロノっ！」

と、鈴の音のような美しい少女の声が俺の名を呼ぶ。

そう、この聞きなれた声の主こそリリイ——いや待て、リリイの声ってもっとこう、幼い感じじゃなかったっけ？

違和感について考える間も無く、俺の視界は白い輝きで塞がれる。

「うおっ眩しっ!？」

「クロノおおー!」

同時に、体に強い衝撃、人型の何かに突進をくらったよう。

どうにか踏ん張り、転倒は免れるが、何者かが抱きついているのか俺の胴体に柔らかな感触がある。

なんだ、リリイにしては随分大きくないか、コレ？

しかし、俺の名を呼んで、この家にいるのは彼女以外に考えられない。

「リ、リリイ、なのか？」

白いフラッシュでチカチカした視界が、徐々に正常に戻ってくる。そして、リリイと思しき、抱きつく者の正体をこの眼でしかと見る。

「……リリイなのか？」

もう一度、同じ言葉が出てきた。

「うん、私はリリイだよ？」

抱きついたまま、そう答える彼女の姿は、白く発光する裸体、流れるような白金の長髪、プリズムのように七色の輝きを宿す二対の羽——間違いなく妖精リリイとしての特徴を全て兼ね備えている。だがしかし、その姿は根本的に違っている、これらの特徴を持つ幼女は、同じ特徴を持つ少女へと、その姿を変えていた。

「リリイが大きくなってる！？」

つまり、そういうコトなのだ。

元の小さいリリイの姿を人間の子供だとすれば、俺の目の前にいる彼女は、そのまま10年成長させ、中学生くらいの年頃となったリリイである。

なんだ、一体これはどういうことなんだ？

リリイの年齢は32歳、その間ずっとあの幼女姿だったはずだが、どうしていきなりここまで大きく成長してしまったんだ？

俺が家を離れていた5日の間に、リリイの身に一体何が起こったというんだっ！

「寂しかったよクロノ、もう一人で何処かに行っちゃイヤだよ」

「あ、ああ、ゴメン……」

そんな寂しがる少女リリイよりも、はっきりとした口調で話すその成長ぶりに驚きを隠せない。

「……とりあえず、離れてくれないか？」

「イヤ」

ぬぐつ、あんなに素直だったリリイが俺の頼みを断るとは……反抗期なのかつ!?

「離れてくれないと、家に入れないんだが」

「じゃあ、このままベッドまで連れて行って」

色々と拙い意味にとってしまいそうな台詞をさらっと言いつつ少女リリイ。

潤んだ瞳で上目遣い、俺はこの時初めて少女リリイの顔を直視する。

「うっ——」

背筋が凍るほど美しい造形だった。

エメラルドの輝きすら霞むほど透き通った緑の瞳に、吸い込まれそうになる。

その瞳を長い睫毛が飾り、淡く光る髪と肌が、輝きをより一層引き立てる。

「……」

一旦目を瞑り、心を落ち着かせた。

危うい、本気で魅了されるところだった。

この世界において、美しいものは、ただそれだけで心を魅了する魔力を宿す。

神を模した偶像に力が宿るのと同じように、美しい容貌は、目を合わせるだけで、微笑むだけで、言葉を交わすだけで、相手を心から魅了し、屈服させる力を持つという。

それは魅了チャームと呼ばれ、状態異常バッド・ステータスの一種にまで数え上げられる。

この魔法がある異世界において尚、眉唾モノの話だと聞いた時は思ったが、まさか、自分で経験することになるとは思わなかったぜ……

「リリイ——」

「お願い」

仕方無い、リリイには全く譲る気は無いようだ。

今は兎に角リリイの身に何が起こったのか聞くほうが先決。

渋谷、リリイをお姫様抱っこして、そのままベッドへ向かう。

少女の姿になっても、相変わらずフワフワと重さを感じさせない不思議な感触だった。

「うふふ、ありがとうクロノ」

ベッドに裸で横たわる美少女の図は、これまで当然女性経験など皆無な元男子高校生で現役童貞の俺にとっては刺激的に過ぎる。

白く光っているように、裸は裸、リリイが小さい時はそれほど抵抗無かったが、こうして少女の姿だと色々な部分が気になることしきりである。

この光景が一枚の絵画であるのなら、人目も気にせずガン見するレベルだが、目の前にいる相手は、姿こそ変わっても、俺がこの世界で最も心を許す相棒だ、不埒な感情を持つのはどうにも許すことは出来ない。

「布団被っててくれないか？」

「イヤ」

やはり反抗期なのか！？

寝そべった状態から上半身だけ起こして、緊張のため背筋を伸ばしてベッドに座る俺の腕をとる。

子供の姿で甘えられるなら、余裕を持って受け入れられるが、裸の美少女にベタベタされて平常でいられるほどストイックな大人では無い。

「ならこれでも着てくれ」

俺はすでに愛用となった魔法使いの黒いローブ、正式名称『パフォメット・エンプレス悪魔の抱擁』というストレートに悪魔的な名前のローブを脱ぎ、そのままりリイへ羽織らせる。

「んふふ、クロノの匂いがする」

「あ、スマン、ずっと着てたから汚れて——」

「これでいいの、落ち着くから」

瞳を閉じて、どこかウットリした表情の少女リリイ、何時までも黙って見続けてしまいそうになるのを堪え、俺は本題を切り出すこ

とにした。

「リリイ、お前は一体どうなってんだ？」

前はあんなに小さかったのに、今でもちよっと本人だとは信じられないぞ」

「酷いよクロノ、ずっと一緒に居たのに、私分からないの？」

一層強く腕を抱き、体を押し付けるその反応に、鼓動がまた一つ高鳴る。

落ち着け俺、落ち着いて会話にだけ集中するんだ。

「分からないわけないだろ、でもあまりに姿が違うと、こう、戸惑うだろ」

「ふふ、そうだよね。」

だから、クロノにだけ教えてあげる、私の秘密」

リリイの細い指先が俺の頬を撫でると、そのまま掴んで自分の方へ向かせる。

やや強引だが、俺は逆らえず、そのままリリイの瞳を見つめる格好となる。

冷や汗が頬を伝う、この緊張感は一切何なんだ、小さいリリイよカムバック！

「妖精族はね、今日みたいな満月の夜には力が増すの。」

なんでも、妖精女王が満月の光を通して、この世界に遊びに来ているからなんだって」

な、なんだそのメルヘンな設定は、それじゃあ妖精女王とやらはあのクレーターでボコボコな月面が現住所だというのか？

「うふふ、それが本当かどうかは知らないけど、ただ、事実だったら、ひよっとすると満月の晩には妖精女王と出会えるかもね」

「なるほど、寓意的な言い伝えて感じか」

「うん、でもなんであれ満月の晩に妖精族の力が増すというのは事実、そしてそれは半人半魔の私も同じ、というより、私の方にこそ影響が強いみたいね。」

だから、今日みたいに満月の夜だけは、本当の姿に戻れるの」

「……本当の姿だと？」

なら、いつも見ていたあの小さいリリイの姿は――

「アレは仮の姿、光の泉から離れると、私は魔力も知性も大幅に減退する子供の姿になってしまうの」

「そう、なのか……」

「うん、そうなの。」

今の私は、ちゃんと小さい時の記憶はあるし、また小さくなっても、今の記憶も残る。

けど、あの子供の頭じゃ大した思考は出来ないから、色んなことがよく分からなくなっちゃう」

俄かには信じ難いが、リリイの雰囲気語り口は、明確な知性を感じさせる。

普段の子供状態とは違う、実際に生きた年月分に相当していると  
思える。

「クロノが今夜帰ってきて嬉しい。」

私、ちゃんとクロノとお話したいって、ずっと思っていたの。

今日を逃したら、また一ヶ月も待たなきゃいけないし」

微笑むリリイに、俺は見とれるばかりで、マトモな返答や相槌が出来ない。

「ねえクロノ、私、ちゃんと分かってるから。」

クロノがたった一人でこの世界へやって来た事、アークの人間に酷い仕打ちをされた事、それでも頑張って生きていこうとしてる事、そして、私を凄く大切にしてくれてる事」

「リリイ――」

その瞬間、俺は目の前の少女が、本当にリリイなのだと、心の底から納得できた。

そしてリリイが、俺が話したこと、抱えていることを、ちゃんと分かってくれていた事も理解出来た。

異世界で得た初めての理解者、彼女こそ、紛れも無く妖精リリイである。

「――ありがとう」

「ううん、クロノの方こそ、私と一緒にいてくれてありがとう。  
これからも、ずっと一緒にいるからね」

「ああ、リリィが居てくれれば、俺はこの世界で生きていける、寂しくも無い」

「うん、私も、クロノが居れば寂しくないよ。」

でも、私は今の状態でクロノとお話したい、言いたいこと、伝えたいこと、沢山あるんだから」

「ああ、何でも聞くぞ」

「うふふ、今日は寝かせないからね♪」

そうして、俺とリリィは肩を並べてベッドで語り合う、これまでの事、そして、これからの事を――

### 第34話 満月の夜に（後書き）

そういうワケで、リリィが大きくなりました。これでもうペドの汚名は返上ですね！

2章はこれで終了、次回、新章突入です！



### 第35話 七番目のプロローグ

「ようこそ、『白の秘蹟』第一研究所へ、アルス司祭長、いや、今は大司祭となったのだったかな、昇進おめでとう」

「……皮肉はやめていただきたい、ジュダス司教」

私は、どうしてここにいるのだろう。

「大司祭となったのは事実であろう、それが、またしても上司の死によってもたらされたものであってもな」

「分かっているでしょう、私のような若造が大司祭になるしかないこの酷い現状が」

二人の男の人が、何か話している。

一人は知っている、ジュダス司教様、とても、偉い人。

もう一人は知らない、でも、たぶん偉い人。

「この教区にはもう、次の侵攻を止められるだけの兵力は残ってありません。」

早急に教会からの支援が必要——」

「よい、それ以上は言うな。」

お主の担当する教区はすでに教会から見捨てられたと、分からぬほど愚かではあるまい？」

何の話をしているんだろう。

偉い人の話は、私には分からない。

「……我々に死ねと、あの忌まわしい異教徒の軍勢に、むざむざ殺されろと言うのですかっ！」

「分かっているではないか。」

それで、今更この儂に何の用で会いに来たか、聞かせてもらおうか？」

なんだか怖い。

死ぬとか殺すとか、よく分からないけれど、それはとても怖いことだと、私は思う。

「ジュダス司教、貴方は他の司祭達が逃げ出すこの状況下において、未だこの場所に留まり続けている。」

こんな何時異教徒が雪崩れ込んで来るか分からない危険な場所に、ただ研究の為だけに残っているわけではないのでしょうか？」

「ふむ、ふむ、それで？」

異教徒……神様を信じない人、見たこと無い。いったい、どんな恐ろしい人達なんだろう。

「貴方は司教という、今の私よりも上の階級、それに、この施設にはかつて教皇聖下までおいでになられたことがある。」

貴方にはエリシオンにかなりのコネが、いえ、もっと率直に言うのなら、この辺一帯の安全を確保できるだけの、戦力のアテがあるのではないのですか？」

教皇様がここへ来たなんて、初めて聞いた。

なんだか凄い、でも、何が凄いのか、よく分からない。

「なるほど、儂を通せば教会から援軍が引き出せるのではないか、そういう期待かね」

「無理を承知で、お願いいたします。」

もしあの異教徒を撃ち払い、この教区に再び平和と神の祝福が得られた暁には、如何なる報酬であっても、貴方に支払うことを、神に誓ってお約束しましょう」

男の人が、頭を下げている。

大きな背の男の人、でもその姿は、とても可哀想に見えた。

「……うむ、まあよからう」

「お、おお、真ですかっ——」

沢山ありがとうと言う男の人は、とても嬉しそう、ちょっと違う、こういうのはきつと、‘救われる’って言うんだ。

「サリエル」

「はい」

突然、ジュダス司教様に呼ばれて驚く。

でも、きつと誰も私が驚いたことは分からない、だって、私の顔

は人形のようにだと口をそろえてみんなが言う。

笑うことより、泣くことより、黙っている方が私は得意だから、そう、昔から。

「ジュダス司教、その女の子は、一体？」

「お主が望む‘援軍’よ、さあ、連れて行くが良い」

男の人が、とても驚いた顔で私を見つめる。

私は、その人の青い瞳をじっと見つめ返した。

「……笑えない冗談ですね、ジュダス司教」

「サリエル、彼はアルス大司祭、自己紹介でもしたらどうだ？」

「はい、私は――」

少しだけ、考えた。

私の名前はもう――では無く、サリエル。

神様から加護を得た、特別な12人の内の一人。

「第七使徒サリエル」

私はそう、初めてこの名を自己紹介した。

「馬鹿なっ！？」 第七使徒は『銀断』のアリエル卿ではありませんか、勝手に使徒の名を騙るなど許され――」

「ああ、アレ’はもう死んだ、これからは、このサリエルが新たな第七使徒だ。」

まだ正式に任命されたわけではないがね、故に爵位の授与もまだだ、‘卿’などつけず呼び捨てにすると良い」

「使徒が、死んだ……しかも、こんな幼い子供に加護が……」

「さて、もう用は済んだだろう、儂にはまだ研究することが山ほど残っているのではな」

ジュダス司教様が立ち上がると、私に向かって言います。

「サリエル、お主の役目はなんだ？」

「はい、神の敵を殺すことです」

「うむ、それだけ分かっているれば良い、後の事はアルス大司祭の命に従え」

「はい、ジュダス司教様」

「ふっ、お主に、様、付けで呼ばれるのもこれで最後だな」

第七使徒になると、ジュダス司教様よりも偉くなるそうです。偉くなるとどうなるのか、それも分かりません。

「では、僕はこれで戻らせてもらおう。

アルス大司教、お主に神のご加護があらんことを」

そうして、私の初めての、役目、が始まります。

私に出来るでしょうか、神の敵とは誰なんでしょうか、どうして、私はここにいて、私だけが生きているのでしょうか。

分かりません、私には、もう、何も分かりません。

でも、これだけは知っています。

神様は、私を助けてくれません――

### 第35話 七番目のプロローグ（後書き）

ついに新章スタートです！

今日は連続投稿します、引き続き黒の魔王をお楽しみ下さい！

サリエルちゃん、神様のコト嫌いなノ？ そんな感じのプロローグでした。

### 第36話 十字軍結成

アーク大陸の西側半分を治めるシンクレア共和国、その他国を圧倒する巨大な領土の中でも5本の指に入る大きさの港町に、新造の魔動戦艦『ガルガンチュア』は停泊していた。

最新の魔法技術の粋を集めて造られたこの戦艦は、ここで初のお披露目となった時に詰め寄せた見物客の度肝を抜いた、そのあまりの巨大さに。

大きさはほぼイコールで強さに結びつく、特に凶暴なモンスターの闊歩する異世界において、‘巨大さ’というのは最も分かりやすい力の象徴である。

しかし、とある部屋の窓から『ガルガンチュア』を見つめるサリエルの瞳には、一切の感情は宿っていない。

使徒の力を持つてすれば、この最新鋭の巨大な魔動戦艦を自分一人で沈めることも不可能ではないためか。

いいや、あの赤いルビーのような輝きを持つ瞳は、如何なるものを目にしても揺らぐ事無く、ただ在るがままに直視するのだろう。

そう、リュクロムという名の若き大司教は心の内で呟いた。

「サリエル卿、如何でしょうか海軍ご自慢の魔動戦艦『ガルガンチュア』は」

サリエルは窓から視線を外し、ゆっくりとリュクロムへと向いた。その紅い瞳に移るのは、線は細いが長身の美青年の姿。

白い肌に金髪碧眼と典型的な共和国人の特徴を持つが、彼を形作る全てのパーツは他者と比較にならない完成度である

緩いウェーブのかかった長いブロンドヘアは豊かに波打ち、マリンブルーの輝きを宿す瞳に鼻筋の通った美貌は女性と見紛う程。

大司教という位の高さを象徴する煌びやかな装飾の施された純白の衣を身に纏えば、十字教徒の誰もが彼を主の御使いと信じて疑わ

ないほどの神々しさを持つ。

彼の美しさは正に魅了<sup>チャーム</sup>を宿すほど。

市井の女であれば、彼に声をかけられ目が合えばその美しさの虜となる運命を辿るが、

「とても、大きい」

サリエルの口から出たのは驚くほど簡潔な感想がただ一言。

彼自身が思ったように、確かにサリエルはリュクロムの美貌を直視しても、その目が僅かほども感情に揺らぐことは無かった。

そもそもサリエルにとって人の容姿など個人の判別をするためだけの要素に過ぎない。美醜の判断はついても、それに対して何らかの感情を抱くことは彼女には無い。

それは果たして十字教の謳う『平等』であるのか、それとも致命的に感情を欠如しているだけなのか、リュクロムには分からなかった。

「左様ですか、サリエル卿が大層お褒めになられたと将校達に伝えておきましょう」

サリエルは再び窓の外へ視線を戻す。

その目が戦艦を見ているのか、港を見ているのか、それとも波打つ海を、いや、もしかすれば水平線の彼方まで見通しているのかもしれない。

（変わりませんね、このお方は、姿だけはまるで時が止まっているかのようだ。

しかし、拘束具<sup>リング</sup>を外した為に、強い加護の力を感じる……逆に私の方が、魅了<sup>チャーム</sup>、されてしまいうすですよ）

過去に面識があるこの二人が、今こうしてこの場にいる理由は、『第七使徒』と『大司教』というそれぞれの肩書きに新たな名が加わったからである。

それは『十字軍総司令官』と『十字軍副司令官』というものであった。

『十字軍』とは、教会の危機または神の意思を実現させる為に組

織される軍隊であり、国が保有する常備軍とは異なる。

200年前、異教徒の大軍勢に聖都エリシオンが侵攻された以来の十字軍立ち上げであった。

（嫌な役目を押し付けられた、と誰もが思っているのでしょうか）  
今回の設立目的である‘パンドラ大陸の征服’は、現在の共和国内にあっては反対意見が大勢を占めている。

それは決して他者の土地を収奪することに反対する人道的な理由では無く、もっと単純に経済的な理由からである。

パンドラ大陸を人間のものとするためには、そこに住む魔族を駆逐せねばならない、それには一体どれだけの人命と金銭を費やせば果たされるのか、少なくとも海を渡って遠征にゆくのに莫大な費用がかかるというのは庶民ですら分かることだ。

（しかし、アルス枢機卿殿下はこの十字軍設立をチャンスと見た、私としても酷く分が悪い賭けのようにも思えるのですが――）

リュクロムの脳裏に浮かび上がるのは、この世で最も信頼を寄せる男、主であるアルス枢機卿が放った言葉。

「十字軍総司令官に第七使徒サリエル卿を推薦した、承認されればパンドラ大陸の征服は成ったも同然だ」

そして教皇はこれを許可し、共和国議会においても承認され、サリエルは正式に十字軍総司令官に任命されたのである。

（ああまで言われてしまったのは、私に否やありません）

アルスの意向を受け、副司令にリュクロムが立候補、対立候補は無く即座に決定した。

最終的に結成された十字軍の総数は1万5千、歴史的にみれば最少兵力の十字軍であった。

それがどういう意味合いを持つのか、あえてリュクロムは考えずに、思考を切り替えるべくサリエルへ言葉をかけた。

「ここからヴァージニアまでは、一週間ほどかかるようですね」



サリエルが振り返り、リュクロムの視線を追うと、その先にあるのはテーブルに広げられた一枚の地図。

魔法によって現代の地球に匹敵するほど正確な地図の作成技術はあるが、今ここにある地図は大まかなラインで描かれているだけの簡素なものだ。

それは精密な測量が出来なかった場所であることを意味し、そんな場所は人跡未踏の大地が広がるパンドラ大陸に他ならない。

そのパンドラ大陸において唯一、共和国が侵略の橋頭堡として造り上げた港町が『ヴァージニア』である。

大陸の東端は発達したリアス式海岸が広がる天然の良港となっており、海を隔ててパンドラとアークの両大陸間を行き来する拠点として実に理想的な地形だった。

「1万5千の兵と物資を全て輸送し、準備を整えるには一ヶ月近くかかることでしょう」

ヴァージニアの建設が始まった頃はまだパンドラ大陸侵略は推進されており、‘パンドラ大陸は富の溢れる楽園’、というキャッチフレーズの下で多くの者が夢を求めて開拓者となり海を渡った。

また国と教会からも潤沢な資金援助が成され、ヴァージニアの建設は順調に進んでいた。

港や居住区が整備され、建設から半年を過ぎた頃には漁村より港町とはつきり呼べるほどに発展を遂げたヴァージニア。

こうしてある程度の規模の拠点が完成したことで、ついに武力による侵略行動を開始した。

聞く所によると、その時ヴァージニアから出陣していった兵の数は2千、その侵略の矛先は『ダイダロス』と呼ばれる城塞都市。

なぜ堅牢な守備を誇るダイダロスに僅か2千の兵で挑もうと思ったのか、今となっては分からない。

なぜなら出陣を決定した指揮官であるところの、とある爵位を持つ高位の騎士は、最初の戦いにおいて勇んで先陣を切り、その部隊ごとあえなく全滅したからである。

「こちらの準備が整うまで、いえ、せめてサリエル卿と私がガルガンチュアで到着する1週間後までは、ヴァージニアがダイダロス軍に滅ぼされていなければ良いのですが」

そうして2千の騎士達によるダイダロス攻略戦は、共和国が厭戦ムードに包まれる現在の状況に繋がってくるのだ。

要するに舐めてかかったダイダロスという‘魔族の軍団’に、軍隊で全滅と定義される40%の損害を遥かに超える1200名に及ぶ死傷者を出すという共和国の戦史上稀に見る大敗を喫したのである。

生き残った兵達の報告によれば、ダイダロス軍は王の黒竜を筆頭に、オーク、ワーウルフ、ゴーレム、サイクロプス、などの人間を遥かに越えるパワーを誇る強力な種族で構成され、さらに数においても10倍近く上回り、その圧倒的な力と数の前に成すすべなく敗れ去ったといわれている。

その後、ダイダロス軍はヴァージニアを包囲するまで迫ったのだが、彼らは街へ踏み込んでくること無く数日の内にあっさりと撤退していた。

ヴァージニアにはまだ多大な資金援助が成されたところに造り上げた堅固な要塞があり、無理に攻めるのは危険とダイダロス軍が判断したと予想されている。

それから今日に至るまでは、ダイダロスからヴァージニアへ国外退去を求める使者が時折訪問し、近辺を斥候が行き交い監視を強めているという状況。

すでに半年も沈黙という形で押し通してきたヴァージニア、最早ダイダロスが強攻策に出るのも時間の問題と言われる、それこそサリエルとリュクロムが到着する1週間を待たずして、ダイダロス軍がヴァージニアへ踏み込んで来るかも知れないのだ。

「ヴァージニアが陥落することは、ありません」

サリエルは独り言のように小さく呟いたが、明確な断定の意が籠っていた。

「パンドラ大陸の征服は、白き神が望まれたこと、必ず成されます」  
「はい、仰るとおりですサリエル卿」

それは決して冗談でも建前でも無く、本心から言っていた、パンドラ大陸の征服は神が望んだことだと。

何故そう言い切れるのか、疑いも無くそう言えるからこそ使徒なのか、信仰心を捧げればその境地にたどり着けるのか。

そんな信仰の問題では無い、もっと単純、サリエルの言葉は十字教徒なら誰もが理解できる。

なぜなら、本当に‘神が自分の望みを言った’のだから。

そして、それを『神託』と呼ぶ。

一年前に教会に下された神託は、

「パンドラ大陸を征服し、捧げよ」

そして共和国は、海を越えパンドラ大陸へ渡り、ヴァージニアを造った。

十字教を国教とするシンクレア共和国において神託は決して無碍にすることは出来ない、たとえそれがどんな不利益を被るものであろうと、出来うる限り力を尽くして実行する。

十字教はどんな困難を伴う神託でも、達成の正否を問わず常に最善を尽くしてきた、そうして現在、アーク大陸の西側半分を席卷するほど巨大な信仰圏を獲得するに至ったのだ。

今回の場合では、強大なダイダロス軍が立ちはだかったことで、パンドラ征服は一旦中止、もしくは無期限凍結となろうかという時に、再び神は神託を賜った。

「パンドラ大陸を征服し、捧げよ」

前と一言一句違わない、全く同じ言葉を。

二度も同じ神託がくだった以上は、このまま諦めるわけにはいか

ない、さらなる努力を尽くさなければならなかった。

本当に国力の全てを注ぎ込めば、パンドラ大陸の征服は果たせるだろう。

しかしシンクレア共和国と教会にとって重要なのは未開の大陸より、古来より自分達が住まうアーク大陸だ。

今その半分まで拡大し大陸の覇権を握る共和国は、これを手放すわけにはいかない、それは国の衰退を意味すると同時に、神の威光の失墜に繋がるからである。

こうした考え方の結果、パンドラ大陸の征服は、アーク大陸での覇権維持に影響が出ない程度の力を尽くす、というのが教会の『神託』に対する公式見解となっている。

（我々が神への生贄となるか、奇跡的な勝利を治め英雄となるか――）

誰もが予測する、今回の神託は決して成されることはない。

この1万5千の十字軍はあくまでも神の意思を実行したことの証明とする、いわばご機嫌とりの生贄、共和国が最大限失うに足る兵力なのである。

だがしかし、もしもサリエル率いる十字軍がダイダロス軍を打ち破ったならば、状況は逆転する。

リュクロムを筆頭に1万5千のほぼ全てがアルスの息のかかった兵達である、そんな彼らがダイダロスを制覇し、パンドラ大陸征服の大きな一步を踏み出せば、十字軍の事実上のトップであるアルスが得られる利益は計り知れない。

十字軍にはほとんど勝機が無い代わりに、万が一勝利した場合のリターンはあまりに莫大なものとなる。

アルスにとって己の人生を賭けた大博打、だがそう見るのはリュクロムを含めた周囲の者であり、当の本人は望みどおりサリエルを大将に据えた事で、絶対の勝利を信じて疑わない。

（――すでに賽は投げられた、私は十字軍を勝利へ導く為に、全力を尽くすのみです）

リュクロムに後悔の念は無い、これまでどんな過酷な状況下にあるうとアルスの下で命を守り、勤め上げてきた、その結果の大司教という位である。

今までと変わり無い、ただアルスの命を実行する、そして、  
(サリエル卿、アルス枢機卿下が信じた貴女を、私は信じましょう)

全幅の信頼をサリエルへ捧げることをリュクロムは誓った。

かくして、一万五千の十字軍を率い、第七使徒サリエルはパンドラ大陸を征すべく、海を渡ったのである。

この日は、緑風の月の4日、クロノがリリィと運命の出会いを果たした日でもあった。

### 第36話 十字軍結成（後書き）

これまでで一番密度の濃い説明回でした、申し訳ないです。これでもこの話を丸々一話書き直したりと、試行錯誤をした難しい話でした。

とりあえず、この世界では『神様』は実在するものようです。神様に言われちゃあ戦わざるを得ない、というのが話の流れですね。そして、神様の無茶振りが廻り廻ってサリエルに押し付けられる形となりました。

さあ、ダイダロス軍とガチンコ勝負を仕掛けることになった、サリエルちゃんの明日はどっちだ！

### 第37話 使徒のカリスマ

ヴァージニア港に来航した、最新鋭の魔動戦艦『ガルガンチュア』を前に、マクスウェル司祭長は溜息を吐いた。

「使徒、か……」

彼は一年前、パンドラ大陸に初上陸したメンバーの一人である。敬虔な十字教徒である彼は、司祭長という位でありながら、『パンドラ大陸を征服せよ』という神の御意思を実行すべく、この征服事業に参加したのであった。

未知の大陸へ渡り、野生のモンスターに襲われながらも、苦難の末にこのヴァージニアを建設し、半年前のダイダロス侵攻へも参加した。

彼は現在ヴァージニアに居る者の中で、街の発展に最も貢献してきた人物である。

半年前に指揮官だった騎士が死に、その他彼より高位にある者達が軒並み共和国へ逃げ帰った後、マクスウェルの立場はヴァージニアにおける教会関係者において繰り上がりで最高位となってしまうのだ。

そして教会の代表者であるというのは、国民全て十字教徒のシンクレア共和国出身者で構成されるヴァージニア住民の頂点に立つことを意味する。

故に彼はヴァージニアの代表として、十字軍の総司令官である使徒を出迎えるべく、こうして待っているのである。

両脇には、まだ歳若い自身の弟子でもある二人の司祭が控え、さらにその後ろでは教会関係者は勿論、多くの住民達が、救世主たる使徒を一目見ようと賑やかに押しかけている。

今も巨大な魔動戦艦へ向かって歓声を上げ、しきりに手を振っているのだ。

彼らの気持ちが分からないマクスウェルでは無い。

こうして恐ろしき魔族の軍勢を前に、いつ襲われるとも知れない中でやってきた一万五千という大援軍である。

その総司令官ともなれば、自分達の危機を救う救世主であるに違い無い。

だが、マクスウェルは大きな疑念を抱えていた。

使徒とは、一体どれほどの人物であるのか？ というものだ。

今回やってくるサリエルという使徒は、その名前と第七番目であること、そして歳が若い女性ということしか聞いていない。

どれほど若くとも使徒である以上は、神に愛され、凄まじい力を持つのは違う。

だが、それが直接人を統べる能力になるとは限らない。

確実に彼らが持ちえると言い切れるのは、戦闘能力のみであるからだ。

恐らく若い使徒はただの旗印であり、実際は副官など、彼女に次いで位の高い者が指揮を執るのだろう。

そしてマクスウェルは、‘高位の司祭’、というものを信用していなかった。

そもそもヴァージニアを捨てて逃げ帰ったのが高位の司祭達である、その一事を見ても教会の上層部に対し不信を抱くには十分ではあるが、マクスウェルはそれ以前から信用などしていなかった。

彼も司祭長という位まで登り詰めた人物である、大司祭や司教、とりわけエリシオンに勤める者が、どういうものかというのを若い頃から嫌というほど見てきたのだ。

彼に言わせれば、教会組織は腐っている。

誰も彼もが、出世と金に目がくらみ、他人を蹴落とすことしか考えられない愚物ばかり。

教会組織そのものに賄賂は横行し、司祭という厳しい修行と信仰を捧げた者のみが得られる位を、金で買うことすら出来るのだ。

そんな世界に、マクスウェルは司祭長の称号を得た頃になるとつ



いに耐えられなくなった。

自ら出世の道を閉ざし、ひたすら神への信仰を捧げる為に数々の戦場に身を投じてきた。

そして、明確な意味を持つ『神託』が下ったことを受け、彼は迷わずパンドラ征服事業への参加を決意したのである。

その選択に後悔などあるはずも無い。

ここでは他の戦場と同じく辛い経験ばかりだが、これこそ神が与えた試練であり、神の御意思を遂行する正しき信徒の働き、これ以上遣り甲斐のある仕事は無い、とマクスウェルは心から思っている。

だからこそ、この‘正しき信仰’が行われるヴァージニアにおいて、私欲に塗れた司祭が再びやって来ることに嫌悪感を示さざるを得ない。

まだ見ぬ十字軍の司祭達が、どういった者であるかは勿論分らない、だがもしこのヴァージニアを神が望まれた土地であることを忘れ、自身の欲望を満たす為に扱おうものならば、消すも止む無しと真剣に考える。

この遠い異郷の地では本国の監視の目など無い、事故を装えばいくらでも殺せるのだ。

マクスウェルはそれほどの覚悟を持って、十字軍総司令官を出迎えるこの場にあった。

（ワシが、この地に相応しき者かどうか見極める――）

すでに中年を過ぎ、深い皺を刻んだ顔が険しく歪む。

だが鍛え上げられた巨軀には歳による衰えを全く感じさせず、強く意気込むマクスウェルの様子に左右に控える弟子がより一層の緊張にその身を震わせた。

その時、ついに戦艦の扉が開かる。

そこから出てきたのは、長身痩軀の青年であった。

ウェーブのかかった淡い金の長髪に、女性と見紛う美しい容貌、とんだ優男だと思うところだが、彼が身に纏う白い法衣に目が奪わ

れる。

（大司教だと……あの若さで……）

マクスウェルにはその位が一目で理解できた。

大司教は枢機卿の候補になれるほどの高位である、複数人の司祭を纏める司祭長と比べて尚、格の違う位である。

（だとすれば、彼が十字軍の総司令——いや待て、総司令官は間違いないく使徒のはず……）

教会最強の称号である使徒と、使徒を除き上から三番目の位にある大司教、片方ならまだしも両方来るとは、マクスウェルは驚きを隠せない。

副官は恐らく大司祭、どう高く見積もっても司教までが限度だろうとの予測が簡単に覆された。

そんな天上人にも近い位を持つ青年の登場に、額に一筋の汗が流れるマクスウェル、大司教だとまだ分からない弟子が羨ましいと思えるほど緊張感に包まれた。

大司教の青年は優雅な動作で、扉の内にいる何者かの手を取り、タラップを下りて来る。

その手を引かれるのは、そう、他でも無い、第七使徒サリエルであつた。

純白の威容が、ついに光の下へ晒される。

「ああ——」

その瞬間、歓声に包まれていた港がしんと静まり返った。

白い服、白い肌、白い髪、そして紅玉すら霞む輝きを宿す双眸。

その容姿は、どんな画家も描く事叶わず、どんな彫刻家も彫る事叶わない、正しく、神のみが生み出せる、白く輝くその美貌。

「——なんと、美しい」

目から、知らずに涙が溢れていた。

ただただ、その神々しいまでの美に目を奪われる。

大司教に先導され、ゆっくりと、自分に向かって一歩ずつ近づいてくる。

最高位の教皇を見た時でも得られなかった、大きな感動に打ち震えると同時に、本物の神に祝福されたかのような、安心感とも、充足感ともいえる満ち足りた感情が止め処なく胸のうちにわきあがってくる。

マクスウェルは、自然と膝を付き、両手を胸元で組み、祈りの姿勢をとっていた。

「マクスウェル司祭長、ですね」

目の前までやって来たサリエルが声をかける。

未だ経験など無いが、マクスウェルは神のお告げを聞いた気分であつた。

「はい」

「これまで、よくヴァージニアを守ってくれました。

これよりは、十字軍と共に、神の御意思を遂行するべく尽くしましょう」

サリエルの白く小さな掌が、頭を垂れるマクスウェルを撫でる。

「はいっ！ このマクスウェル、第七使徒サリエル閣下に我が身全てを捧げ、尽力いたしますっ！！」

溢れる涙を抑えきれず、それでも力強くマクスウェルは応える。

彼はこの時、言葉通りにサリエルへ我が身を捧げることを誓つたのだつた。

「――」

サリエルは、無表情、無言のまま、未だ静まり返る群集へ小さく手を振った。

その瞬間、割れんばかりの歓声が上がリ、狂信の域にまで達するほどの熱狂がヴァージニアを包んだ。

その様子を見つめるサリエルの瞳には、何ら感情の揺らぎは無い。拘束のリングが外れ、一切の能力制限から解放された今のサリエルは、他の使徒と同じように、その身に宿す加護の力が溢れ、常時、神性を宿す。

神を模したモノに力が宿るのと同じように、正しく神に愛された

彼女の美は、十字教の信徒を一目で魅了する力を発揮したのだった。  
信仰心の厚いものならば尚更、マクスウェルはサリエルを通して、  
今この時本物の神の力に触れたのだから。

### 第37話 使徒のカリスマ（後書き）

サリエルちゃんのカリスマYABEE！ というお話でした。  
ところでジジイをナデポするお話なんて誰得なんでしょうね。

それと、今回から登場人物紹介を掲載しようかと思っています。それ  
なりの数のキャラがいたり、こうして視点が切り替わる話が多いと、  
「あれ、コイツって誰だっけ？」となりがちなので、読み返す際な  
どにご利用下さい。ネタバレや設定などは含まれないので、読まな  
くてもOKですのでご安心を。

### 第38話 とある魔女の話

ヴァージニア要塞の正門に、一人の少女の姿があった。

清水が流れるような淡い水色のショートヘアに、黄金の輝きを宿す瞳、十二分に魅力的な容姿をした美しい少女であるが、その表情はどこかぼうつとして酷く眠そうに見えた。

そんなぼんやり少女の格好は、大きな黒い三角帽子に、同じく羽毛で飾られた黒い服を纏い、身長ほどもある長杖<sup>スタッフ</sup>を手にしている。

アーク大陸の住人でも、パンドラ大陸の住人でも、彼女を見かければ誰でもこう応えるだろう『魔女』だと。

クラスとして魔術士と特別に違いがあるわけではないが、黒い三角帽子にローブと長杖の特徴的な三点セットを装備する女性は『魔女』と呼ばれるのが一般的である。

魔女に纏わる話はあまりにも有名、誰もが一つくらいは魔女の登場する御伽噺を知っているだろう。

そんな魔女の少女は今、砦に用があるので無く、逆に砦から去って行くところだった。

正門の門番が、出て行く少女へ声をかける。

「お嬢ちゃん、折角十字軍が来たのにここで降りるってのか？」

少女は立ち止まり、門番へ向かって小さく頷く。

「使徒っていえば教会が誇る最強の兵士、その上一万五千の精鋭部隊、大司教様も指揮をとるっていうじゃないか。」

今回の戦は勝てるぞ、傭兵は勝ち馬に乗るものなんだろう？」

彼は前回のダイダロス侵攻に参加しておらず、魔族の軍の恐ろしさを知らない。

が、それをわざわざ指摘するつもりも、少女には無かった。

なぜなら彼の言う事も十分に頷けるからだ。

前回の侵攻は、確実にこちらが舐めてかかった結果によるもの、

酷い有様だったと少女は思い返す、自身はカスリ傷一つ負わなかったが。

しかし今回は門番が言うように、十分な戦力を整えての反撃作戦だ。

一月近くも時間がかかったが、漸く今、援軍の一万五千名の兵士達と装備、糧食、その他諸々が全てヴァージニアに揃ったのだ。

勝敗の予想は正直なところ少女にはつかなかったが、それでも前回とは比べ物にならないほどマトモに戦えるだろうことは断言できた。

そして彼女のように傭兵としてパンドラ大陸へ渡ってきた者は、この機会にこそ己の力を振るって多額の褒賞を得ようと躍起になるものだ。

前回の敗戦時に逃げるならまだしも、これから稼ぎ時、という今になって逃げ出すとは傭兵の性質から考えづらい。

少なくとも、この少女が戦いに対する恐怖からこの場を逃れるのだとは、門番は思っていない。

なぜなら、逃げるのなら半年前に司祭達がそうしたように、港で船に乗って本国へ行くのであり、ヴァージニアを出てまだ見ぬパンドラの地を行こうというのは逃亡者の発想ではないからだ。

「本当に出て行くのか？」

再び少女は頷く。

ぼんやりと眠そうな目をした少女だが、その決意は固そうだと門番は思った。

「そうかい、で、何処に行こうってんだ？　どっかアテはあんのか？」

少女は、変わらぬ表情で応えた。

「もっと、ご飯が美味しいところに行きます」

やはり魔女というのは普通とは違う人なんだな、と門番は思いながら去り行く少女を見送った。

この翌日、サリエル率いる十字軍一万五千が、ダイダロス目指し

て出陣していったのである。



### 第38話 とある魔女の話（後書き）

申し訳ない、今まで一番短い話でした！  
とりあえず新キャラの  
顔見せ回ですね。

### 第39話 竜王

ヴァージニアより一万五千の兵が出陣し、真っ直ぐダイダロスへ向かっているという報告を受け、王は玉座から立ち上がった。

王の名はガーヴィナル、身の丈2メートルに届くほどの大柄な人間の壮年男性に見えるが、彼は真正銘ドラゴンである。

体力魔力、共に他の種族とは一線を画すドラゴン、その中にあって尚、強い力をもつと言われる黒竜がガーヴィナルの種族だ。

基本的に徹底した個人主義のドラゴンの中でも、かつてパンドラ大陸全土を治める大帝国を一代で築き上げた古の皇帝のように、全てを支配したいという野心をガーヴィナルは抱いていた。

そして現在はその野望を実現している真っ最中にある、ガーヴィナルが今最も関心を寄せているのはガラハド山脈を越えた先に控える都市国家スパード、自身と同等の力を持つ剣王レオンハルトが治める強力な国である。

遙々海の方こうからやって来た人間の軍団の事など歯牙にもかけていなかった。

しかし、

「あれほど忠告をしておいたにも関わらず兵を出すとは……アレは思っていた以上に愚かであったか。

面倒だが、一人残らずパンドラより叩出してやらねばならぬか、人間共の故郷では無く、地獄へとな」

再びダイダロスへ刃向かったとなれば話は変わる、ガーヴィナルは国外退去で済ませるつもりは最早無く、ヴァージニアの殲滅を決意していた。

だが近いうちにこうなることは、ガーヴィナル以外にもダイダロスの上層部では予想がついていた。

一ヶ月ほど前より、ヴァージニアへ頻繁に大型の船舶が出入りし

ており、大量の人間や物資が運ばれつつあるという情報が入っていたからだ。

人間共が退去要請を受け入れず、近いうちに反攻作戦に出るだろうことは誰の目にも明らかであった。

ヴァージニアへ来航する船へ妨害をしなかったのは、ダイダロスが未だ海軍を持たない事が第一だが、そうでなくとも、人間がどれだけ人数を集めて打って出てしようと、向こうから攻めてくると言うのなら蹴散らすのは簡単な事だとガーヴィナルは考えていた。

ドラゴンを始め、獣人などのよりモンスターに近い姿の種族が中心となってダイダロス軍は編成されている。

突撃による攻撃力と機動力こそがダイダロス軍の強みであり、人間が数万の兵を率いても、平地での野戦においてこれを破ることは叶わない。

故にヴァージニアにどれだけ戦力が集められていても、向こうが攻めに出る限り、こちらはいくらでも防ぐことが出来る。

本来ならその拠点であるヴァージニアも潰しておくべきだが、堅牢な守備を誇る砦が築かれており、これを落とすにはある程度の損害を覚悟しなければならない。

野戦で無類の強さを発揮するダイダロス軍だが、その機動力を十分に生かしきれず、短期決戦に持ち込みづらい攻城戦は不得手であった。

結果としてヴァージニアは、攻撃力はないが防御力はある拠点であり、封鎖しておくに止めるのが現状において最も損害を少なくする方法であった。

ガーヴィナルにとってダイダロス軍の相手は、ヴァージニアの間では無く、スパイダを始めとした大陸中部にひしめく都市国家郡である。

近くスパイダ攻めを考えるガーヴィナルにとって、戦力の消耗は避けたいのだ。

後顧の憂いを残す形にはなるが、ダイダロスの防衛部隊だけでも

十分人間共の相手は可能であるとガーヴィナルは考えた。

だが結果としては、自身が軍を率いてスパードへ出陣する前に、人間は打って出た。

自分がいなければ、まだ少しはマシに戦えただろうと、このタイミングで攻撃を仕掛ける人間の不運を笑う。

どちらにせよ、人間如きがダイダロス軍を破ることは不可能であることに変わりはない。

「では、行くとするか」

ガーヴィナルはダイダロス王城の正門まで向かう。

彼の眼下には、黒い甲冑に身を固めたダイダロス兵二万人がすでに集い、出陣の号令を今かと待ちわびていた。

「これより、愚かなる人間の軍勢を討ちに行く、一人も生きて帰すな――」

ガーヴィナルは、仮初めの人型から、本来の姿であるドラゴンへと変化しつつあった。

「――出陣！」

咆哮と共に下される出陣の号令、ダイダロス兵二万が雪崩をうつように進軍を始める。

漆黒の鱗を持つ巨大なドラゴンへ姿を変えたガーヴィナルは、双翼を力強く羽ばたき、突風を巻き起こしながら天空へ舞い上がる。

上空にはすでに配下の飛竜が待ち構え、ガーヴィナルに付き従って飛んでゆく。

目指す先はダイダロスとヴァージニアの中間地点にあたる、ゴルドラン丘陵地帯。

必勝を誓うドラゴンの猛々しい咆哮がダイダロスの街に木霊し、兵達は決戦の地へと向かった。

### 第39話 竜王（後書き）

戦いを急がせるとほとんど説明回になってしまい申し訳ないです。  
大した話じゃないのに情報量はそれなりに入ってる回です。

あと、主人公と関わりの無いところでどんどん話が進みますね。

## 第40話 決戦・ゴルドランの丘

遠雷の月の7日、二度目の進撃作戦の準備を完了した十字軍は、ついにヴァージニアを出立した。

アルス枢機卿が選抜した精鋭軍団一万五千名を、純白の天馬ベガサスに跨ったサリエルが率いる。

十字軍はゴルドランの丘と呼ばれる、見晴らしの良い丘陵地帯に陣を敷いた。

前回の侵攻において、この丘でダイダロス軍と遭遇し、大敗北を喫した曰く付きの場所ではあるが、一万五千という大軍団をフルに生かして展開するにはここ以上の場所は無い。

対するダイダロス軍も同じ考えであり、機動力に富んだ自軍の戦力を最大限発揮するこの丘陵地帯を前回同様、決戦場と定めた。

かくして、お互いに示しあう事無く十字軍とダイダロス軍は、ゴルドランの丘で対することとなった。

両者陣容を整え、一触即発の睨み合いとなる。

「――貴方へ指揮権を委ねます、リュクロム大司教」

跨った純白のペガサスの馬上より、サリエルから命が下る。

「はい、承りました」

恭しく頭を下げたリュクロム、その美貌には一万五千の大軍を率いる緊張も無く、またこれから始まる戦いへの恐怖も見えず、ただ穏やかな表情を浮かべている。

「後を、頼みます」

「はい、どうぞ私にお任せ下さい」

それだけのやり取りを終えて、サリエルはペガサスの歩を進ませ、兵の最前列へと向かった。

長大な槍が林のように立ち並ぶ中を、悠然とサリエルを乗せたペガサスが進む。

兵達はおよそ戦場に似つかわしくない可憐な少女の姿に、息を呑んで見守る。

程なくして最前列へと出るが、さらにそのまま歩みを進めた。

その一歩後ろを、戦闘用の法衣に身を包み、巨大なメイスで武装したマクスウェルがついていった。

その背には、大柄な彼の背よりも尚大きいサイズの白い棺がある。だが背負った棺の重量を感じさせないほど、マクスウェルは背筋を伸ばし堂々とサリエルの背後を歩んだ。

兵の最前列より数十歩ほど前に進みでたサリエルとマクスウェル、目の前には黒き魔族の軍団が城壁のように並び立つ光景を見る。

その様子にサリエルは臆した様子も無く、いつもと同じく呟くように小さな口を開いた。

「魔の軍勢よ――」

か細いサリエルの言葉はしかし、この場にいる両軍あわせて三万五千超の者達全てに一言一句漏らさず聞こえた。

「我らが白き神は寛大である。」

しかし、魔を率いる邪悪な竜の王は死を持って断罪されねばならない。

この場で邪竜の首を討ち、神に従うことを誓えば、例え魔のものであっても神は許しを賜るだろう」

言い終えると同時、ゴルドランの丘に強い突風が吹きぬけた。

「我こそ、ダイダロスの竜王・ガーヴィナルである」

天空より、数多の飛竜を率い漆黒のドラゴンが舞い降りる。

ドラゴンの中でも一際大きい全高40メートルはあろうかという巨大な体躯は、強靱な二本の足で堂々と大地に降り立った。

背には新月の夜空を思わせる暗黒の双翼が広がり、大蛇のような太く長い尻尾が地を打つ。

その圧倒的な威容に、十字軍の兵達は息を呑み、前回の戦闘に参加した生き残りは、忌まわしい惨敗の記憶が蘇り、その場で卒倒せんばかりに慄いた。

「白き神を崇める愚かで哀れな人間よ、我らを愚弄するその物言い実に許しがたい」

大氣が振るえるほどの咆哮を伴い、ガーヴィナルの口腔に莫大な魔力が収束されてゆく。

「滅びよ、人間」

絶大な破壊力を秘めた、竜族が誇る固有魔法『ドラゴンブレス』<sup>エクストラ</sup>。赤黒い禍々しい輝きを放つ光の奔流は、真っ直ぐサリエルへ向かう。

<sup>アーラルクス・アイギス</sup>  
「――光翼神盾」

凶悪に輝く光に飲まれる瞬間、マクスウェルは絵画に描かれる天使の如く白い翼に包まれるサリエルを見た。

ズズン――

轟音と共に、濛々と立ち昇る黒煙が周囲一帯を閉ざす。

すぐに一陣の風が吹きぬけ、煙を散らしてゆく。

その向こう、白い輝きを身に纏い、先と変わらずに佇むサリエルの姿があった。

「……行きます」

相変わらず眩くような小さな声で発した台詞、だが、サリエルの防御魔法に守られ無傷でいるマクスウェルは、力強く返答し、背負った巨大な棺を地に下ろした。

「閣下、御武運を！」

サリエルは頷き、その棺へ手をかざす。

「『武装聖典』解放――」

その瞬間、棺は光に包まれながら四散。

内より出でるのは、神のシンボルである十字を模した白き長槍。<sup>グランドクロス</sup>

「――『聖十字槍』」

使徒のみが扱える二つと無き魔法武器、それが『武装聖典』。

そして、その武装聖典が槍であるということは、サリエルは魔術



士では無く、真のクラスが槍を扱う聖騎士パラディンであることを示していた。  
第七使徒サリエルは、純白の長槍・聖十字槍を手に、竜王ガーヴィナルへ向けて、ペガサスを飛翔させた。

「オオオオオ!!」

天地を揺るがすガーヴィナルの咆哮が、開戦の合図となる。

先陣を切るサリエルに続き、十字軍一万五千が前進する。

対して、黒き竜王ガーヴィナルの咆哮に呼応したダイダロス軍二万が突撃を開始する。

ここに、十字軍とダイダロス軍が正面衝突する大会戦の幕が切つて落とされた。

## 第40話 決戦・ゴルドランの丘（後書き）

第七使徒、武装聖典、グランドクロス……サリエルの中二レベルが半端ないことになってきましたね。

## 第41話 人間と魔族

パンドラ大陸において、エルフやドワーフ以外にもゴブリンやオーク、ゴーレムなどのよりモンスターに近い姿の種族も人間に混じって共存共栄が可能だ。

ただし彼らと同じような姿をもつが、本能のままに生きる凶暴な野良ゴブリンなどは、モンスターという分類になる。

パンドラの住人にとって重要なのは姿形ではなく、互いに理解しあえる知性と理性なのだ。

しかし人間が支配するアーク大陸、特に十字教の教えが広まる範囲においては、重要なのは‘人間か否か’である。

そもそも同じ人間と種族であっても、信じる神の違いから互いに異教徒と呼び合い殺し合いをするのだ、宗教の違いどころか姿形がまるで違う他種族を許容することは、少なくとも現在の十字教においては不可能だった。

そうして生まれたのが『魔族』という呼び名、野生のモンスターと違い知性はあるが人間以外の種族を一まとめにくくる蔑称。

十字教を信じる人にとって『魔族』はモンスターと同列に語れる存在であり、殺害することに忌避感など無く、むしろ‘神の敵’を排除したという喜びを覚えるだろう。

そうした強い差別意識を持って、半年前のダイダロス侵攻は実行された。

シンクレア共和国の人間とダイダロスの魔族が公式に争ったのは、その戦いが初めてである。

だが騎士団二千とダイダロス防衛部隊は、実質的には‘戦い’といえるものでは無かった。

騎士団とは名ばかり、その心根はダイダロスの城壁の向こうにある金銀財宝を我が物とする、野盗と同じようなものであり、魔族と

悔り考えなしに突撃したその戦い方もまた賊と同じであった。

しかし、今回は違う。

本国より派遣された使徒と大司教を筆頭に、厳格な指揮系統が整えられ、その下で動く兵士も、富を求めてパンドラへ渡った者では無く、この地を神に捧げることを使命と心得た熱狂的な信徒である。ここにおいて、アーク大陸の半分を支配するに至った、シンクレア共和国の軍が、真の力を発揮して魔族の軍と戦うのである。

天空では第七使徒サリエルと竜王ガーヴィナルが一騎打ち、大地では一万五千の十字軍と二万のダイダロス軍が正面からぶつかりあった。

「――陣形を崩すな！」

閣下が邪竜を討ち取られるまで、何としても持ち堪えるのだ!!」武装聖典を渡し、サリエルを見送ったマクスウェルは、そのまま最前列の兵達に加わり奮戦する。

彼の言う『陣形』こそ、人間が編み出した魔族よりも優れる戦闘技術である。

人間と魔族は、同じように言葉を話し、剣を手に、鎧を纏って戦う。

しかし両者には明確な戦い方の違いがあった。

それが最も顕著に現れるのが、今回のような大人数、つまり集団戦闘である。

基本的な身体能力、または魔力に優れる魔族は、個人の力こそ最も重要視する。

チームや群れと呼べるような少人数の場合であれば、ある程度の連携も可能だが、百人を超えるような集団を、手足のように操って統率する能力は無い。

いや、そもそもそのような大集団で戦うという発想が無い。

だからこそ、一代で国を築き上げた竜王ガーヴィナルであっても、

二万の配下を指揮することも無く、サリエルとの一騎打ちに臨んでいるのである。

パンドラ大陸に住む以外の人間を知らないガーヴィナルは、大将が敵の大将へ一騎打ちを仕掛けるこの状況を、人間からすれば異常な事態だとは考えていない。

それは魔族において最も強い者が王となるのは実に良くあることであり、戦場において、各々の大将が一騎打ちをするという事はそれほど珍しくも無いからである。

故にサリエルがたった一人で自分に向かってくるのを、何の疑問もガーヴィナルは持たなかった。

しかし、必ずしも力の強い者が王になるとは限らない人間の世界にあっては、一騎打ちなど余興以外の何物でも無い。

まして兵を統べる指揮官が単身で敵大将とやりあうなど、正気の沙汰では無い。

なぜなら、人間の軍において兵を率いるのは、強い者では無く、指揮能力に優れる者だからである。

無論、将軍などと呼ばれる軍の幹部には、単独での戦闘能力が高い者はいる、が、それは同時に指揮能力も持ち合わせているというだけのことだ。

よって、今回サリエルが十字軍総司令官でありながら、全指揮権を副指令であるリュクロムに預け、敵大将との一騎打ちを挑むというのは、兵法から言えば奇策中の奇策であった。

兎も角、魔族にとっては個人の戦闘能力こそ求められ、また、王となれるほどに最大限尊重されるものなのである。

故に二万にも及ぶ大軍であっても、その運用方法は、突撃か守備か撤退か、のほぼ三択である。

今回のように、王が突撃の号令さえ下せば、後は突撃するだけであり、突撃するにしても、その兵達は個々人が勢い込んで攻め込むのみなのだ。

彼らが退くのは、王が討たれるか、明らかな劣勢になるか、敵が

つまり魔族とは、戦う機は考えるが、戦闘そのものについては、個人の力量に任せた勢いだけで行っているのだ。

この異世界においては、魔法の存在もあり、サリエルのように圧倒的な戦闘能力を誇る者も存在する。

未だ中世の文明レベルではあるが、異世界の人間もクロノの世界同様、戦略・戦術・兵法、様々な戦闘の技術を編み出していた。

そして、その一つが効率的に集団で戦う術、つまり『陣形』である。

今回の戦いにおいて、魔族が個々の力量差を上回り、かつ、五千もの兵数差があるという劣勢において、十字軍がその恐るべき攻撃を耐え忍んでいられるのは、厳しい訓練と的確な指揮によって展開される『陣形』を保っていられるからだ。

~~~~~

「……詠唱完了、撃てます！」

イグニス・クリスサギタ

「よし、今だ！ 火炎槍！！」

横一列に整然と立ち並び、杖を振りかざして魔法を放つ魔術士の部隊。

彼らの詠唱時間を稼ぎ、その身を守るのが、長槍を携えた歩兵達である。

炎の壁となつて噴出す火炎槍の一斉掃射に火達磨となつたダイダロス兵、さらなる追い討ちに矢の雨が降る。

「くそつ、まだ生きてやがる化物めつ！」

火に焼かれ、矢を受け、それでも尚剣を振り上げ切りかかつてくるが、長槍の槍衾に貫かれ、ついに絶命する。

強靱な生命力をまざまざと見せ付けられるが、それでも強力な結

束力の十字軍の陣形は堅固な守りを崩さない。

この前線でダイダロス兵の突撃を抑えている陣形は『方陣』である。

縦と横、ほぼ同じ長さに兵の列が並び、真上から見れば正方形に見える。

どの面から攻撃を仕掛けられても対応可能で、機動力には欠けるが非常に防御力の高い陣形である。

この方陣を構成するのは、槍兵、弓兵、魔術士の3つ。

槍は、パイクと呼ばれる6メートルほどの長大な竿状武器ポールウエポンを使用し、アーク大陸においては対騎兵武器として威力を発揮した。

今は歩兵でありながら重騎兵並みの突撃力を見せる大柄なダイダロス兵を迎撃するのに、大いに役立っている。

この槍兵を正方形に密集させ、その周囲にロングボウやクロスボウで武装した弓兵と、遠距離攻撃の魔法を習得した魔術士が配置される。

現在展開中の方陣をもしもクロノが見ていれば、スペイン方陣とほぼ同じだと思ったことだろう。

この魔術士を、マスケツト銃を扱う銃兵に置き換えれば、そのまま現実世界のスペイン方陣となる。

もっとも、魔法の存在する異世界において、魔術士はマスケツト銃の代わりだけでなく、能力を上昇させる強化ブーストや回復ヒールと言った支援効果も発揮する万能な兵でもある。

しかし歩兵と魔術士双方の力を最大限発揮し、奮戦する十字軍であるが、強兵揃いのダイダロス軍相手には、防戦一方とならざるを得ない。

いくら魔族が陣形概念が無くとも、その個体能力の高さと数に、方陣の防御力を持ってしても、その突撃を一時的に押し止めるまでの効果が限界であった。

「サリエル卿、どうか我らに奇跡を……」

大司教であり、十字軍副司令官を勤めるリュクロムは、雲上でサ

リエルが竜王と死闘を繰り広げる天を見上げて呟いた。

アルスとリュクロムは、かつて異教徒が蔓延るシンクレア共和国の西側国境沿いの地域を解放した経歴を持つ。

その働きが評価され、アルスは枢機卿へ、リュクロムは大司教へと、若くして就任するに至った。

まだ10代にも関わらず、異教徒と戦争し勝ち抜いたリュクロムの経験は、この魔族との争いの場であっても十二分に発揮されていた。

だが確かな経験と優秀な指揮能力を持つリュクロムに加え、敬虔な十字教徒で編成された一万五千の精鋭兵を持ってしても、強力なダイダロス兵へ打ち勝つには未だ力が足りない。

十字軍を勝利に導くには、ダイダロス軍の総大将である竜王ガーヴィナルを討ち果たすより他は無い。

拮抗する、いや、僅かに劣勢になりつつある十字軍、その形勢を覆すことができるのが、総司令官であるサリエルであり、また、万の軍勢に匹敵する力を持つ竜王を単身で討ち果たせるのも、第七使徒であるサリエルしか有り得なかった。

十字軍が栄光の勝利を掴むか、無惨な敗北を晒すか、どちらの運命を辿るかは、今、サリエルという名の白い小さな少女一人に託されているのだった。

第41話 人間と魔族（後書き）

主人公不在の話は苦しい、と感想をいただきました。私もその通りだと思います。

こういった主人公の視点を通して語ることでできない話は非常に難しいですね。

それほど長く引っ張るつもりは無いので、話半分に読みつつ、主人公の元に話に戻る4章までお付き合い願いたいです。

第42話 使徒VS竜王

ゴルドランの丘は現在、地上では十字軍が方陣を敷きダイダロス軍の猛攻を辛くも凌ぎ、上空では天馬騎士団が飛竜を抑える。

天馬と竜が争う空から、雲を突き抜けたさらに上にて第七使徒と竜王の一騎打ちは行われていた。

陽光の下、澄み渡る一面の青空だが、ここゴルドランの丘上空だけは、白と黒に燃えていた。

「オオオオオオ！！」

赤黒い禍々しい破壊の閃光、ガーヴィナルのドラゴンブレスが中空を風ぐ。

「『光翼神盾』
アールクス・アイギス」

天使の翼を模した白い輝きがサリエルを包み、幾度目かのブレスを防ぐ。

魔法のランク分けである上級を越える天上級の奥義『神盾』アイギスは、およそ人間が行使できるどんな魔術を受けても欠けること無く防ぎきる。

だが竜王を名乗る強大な黒竜のブレスを受けては、粉々に粉碎され、一度だけ相殺するのがやっとであった。

「『千里疾駆』
ソニック・ウオーカー」

ブレスの追撃が来る前に、サリエルは操るペガサスの背から空へ身を投げ出す。

自由落下するはずの体はしかし、何も無い虚空を確かに踏みしめた。

天駆けるサリエル、全力全開で白銀のオーラを発しつつ竜王へ迫るその姿は、まるで一筋の流星。

この常人には目にも映らぬ移動速度と脅威の空中疾走が、仙人級の強化系武技である『千里疾駆』の効果。

しかしガーヴィナルの燃えるような紅い瞳は、槍を構えて猛然と肉薄する彼女の姿を確かに捉えていた。

長大な尻尾をサリエルへ向けて振るう、ただそれだけの単純な動作だが、戦塔のように聳える黒い竜の巨体は、尻尾だけで正しく城壁が動いたかの如し。

生物が持ちうる最高硬度を誇る黒竜の鱗によって守られた尻尾は、実在するどんな城壁よりも堅かった。

それが鞭のように音速を超えるほどの速度で振るわれれば、一体何人の魔術士が防御魔法を重ねれば止めることが出来るだろうか。

空中での高速移動と、次の攻撃に全ての魔力と集中力を回すサリエルには、再び『神盾』^{アイギス}による防御は不可能、よって今の速度を生かして回避行動の選択をとった。

迫り来る鋼鉄よりも堅い尾の一撃を、人体の限界を突破してまで強化された動体視力と、数秒後の未来予知に匹敵する性能を誇る第六感を駆使して、見切る。

半身を逸らしたサリエルのすぐ脇を、暴風を伴って黒き破壊の尾が通過する。

長い白銀の髪と法衣を大きく靡かせながら尻尾の一撃を回避し、さらに距離を縮める。対するガーヴィナルは、すでに次の迎撃行動に入っていた。

両手持ちの大剣と比べて尚巨大な竜の爪がサリエルを襲う。

指先が触れただけでその身全てがバラバラに切り裂かれるほど出鱈目な切れ味を持つガーヴィナルの爪には、ただ堅く鋭いだけでなく、明らかに斬裂効果の威力上昇と攻撃範囲拡大の固有魔法^{エクストラ}も秘められている。

しかし、これもサリエルは紙一重で回避する。

完全に懐への侵入を許したガーヴィナル、ついにサリエルは聖十字^{ドクロス}槍が届く距離にまで到達した。

「『月光』——」
^{ルナルクス}

腕力、魔力、集中力、全ての能力を最大狂化状態よりもさらに上^{フアオスト・バサーク}

昇させる強化魔法『月光』^{ルナルクス}。

発動時間は僅か1秒、しかし並みの魔術士十人の魔力をつぎ込んで
もまだ足りないほど莫大な量を消費する。

そして、それほどの魔力量を費やして得る刹那の間に放つのは、
サリエルが持つ最大最強、文字通り必殺の一撃にして、‘神’の一
字を使うことを許された、究極の武技。

「――『神槍』^{ブリューナク}」

^{グランドクロス}聖十字槍の切先から、眩い白い光が溢れる。

神々しくも美しいその光はしかし、ドラゴンブレスが秘める破壊
の光と全く同質のものである。

サリエルが全身全霊で放った『神槍』^{ブリューナク}、その白光煌く刃が貫かん
とする先は、この世で最も死と無縁な、生命力溢れる竜の心臓。

これまで、どんな盾も、どんなシールドも、どんな城壁さえ貫き
通した神の槍、しかし、今この時を持って、‘必殺’の効力を失った。

（堅い――これ以上貫けない――）

最高硬度を誇る竜鱗に、鋼のような筋肉、さらに竜王の身を守る
種々の加護、その全てを『神槍』^{ブリューナク}は穿ち貫いたが、最後の最後で心
臓へ届かせることが出来なかった。

槍を引き抜き、その胸元から血が噴出すよりも前、

「ゴォアアアア！！」

「んっ――」

ガーヴィナルの衝撃波を伴う大咆哮によって、サリエルの小さな
体が木の葉のように吹き飛んだ。

空中で二転三転、サリエルは素早く体勢を立て直すと、そこへ見
計らったようにペガサスが飛来し、その背に着地する。

ペガサスに乗ったサリエルと、胸から血を噴出すガーヴィナル、
両者は再び距離をとって相対した。

「我に手傷を負わせるとは……人間の娘よ、名を名乗れ」

ガーヴィナルが口を開く、ただ喋るだけで大気が震えるその声は、
力ない者ならその場で気絶するほどのものだ。

サリエルはそんな圧力の中にあっても、変わらぬ無表情で竜王の言葉に応えた。

「第七使徒サリエル」

いつかクロノに対して名乗ったのと、同じように。

「ほう、神代の天使と同じ名を名乗るか。

しかし、その名に違わず強き光を放つ――」

一つ大きく息を吐いた竜王、同時に、胸から出血が治まり、見る間にその傷口が塞がっていった。

「サリエルよ、そなたは我に相応しい久方ぶりの相手である。

これよりは、我も全力でもって相手をしよう――」

サリエルを、自身が命をかけて相手をするに相応しい強敵であると認めたガーヴィナル、その双眸が見開かれ、天地を揺るがす咆哮が放たれた。

すると、夜闇のように黒一色の竜鱗に、次々と赤い光が線となって浮かび上がる。

暗黒の巨体に禍々しい紅のラインで彩られたガーヴィナル、その身から放たれる魔力、生氣、闘気、殺気――肌で感じられる力の全てが、先よりも倍するほど濃密なものになっていた。

さしものサリエルも、あまりに強大な気配にその秀麗な細い眉を思わずしかめた。

（死ぬかも、しれない……）

実に何年ぶりに、サリエルは心の底から思った。

自身が使徒と、成る、為の実験を受け始めた頃は、常に死を実感していた。

しかし、数々の改造、強化、実験の果て、ついに使徒に相応しい白き神の加護を獲得した時から、龍、に並ぶほど死には縁遠い存在となった。

第七使徒として、サリエルはこれまでアーク大陸における戦争、紛争、内乱、様々な戦いに参加した。

だが教会が誇る最強の存在である『使徒』に名を連ねるサリエル

にとって、どの戦場でも自身の命を脅かすほどの相手は存在しなかった。

奇襲を受けたとき、退路を立たれた時、挟撃された時、味方に裏切られた時、四方全てを敵軍に囲まれた時、およそ兵なら死を覚悟する様々な場面においても尚、サリエルは自分が死ぬとは思えなかった。

使徒とはそれほど超越した存在。

だが、今この時にあってサリエルは死を実感した。

目の前にいる黒紅の竜王は、これまで戦ったどの相手よりも強い。勝てたとして、どれだけの重傷を負うか分からない、二度と戦えない体になるかもしれない。

それでも、サリエルは僅かほどの恐れも抱かず、槍を構えた。

彼女にとって、死は絶対の恐怖では無い。

なぜなら、生存本能などは当の昔に捨て去ったし、この世にはもう未練も何も無い、サリエルにあるのは、使徒としての役割を果たすという‘義務’だけ。

ただそれだけが彼女にとっての生きている理由であり、存在の証明でもある。

故にこの場で竜王に屠られようと、力が及ばなかったというだけで、後の事など全く構わない。

それでも、生きている限りは、全身全霊で使徒の責務を果たす。

サリエルとはそういう人形のような存在であった。

「……行きます」

決死の覚悟を決めたサリエルと、真の姿を現したガーヴィナル――

「来い、天使の名を持つ人間よ！」

この世の最強に限りなく近い存在である両者の戦いが始まった。

第42話 使徒VS竜王（後書き）

使徒でもドラゴン相手には楽勝といかないようです。とりあえず、この世界における最強クラスがこんな戦いをする、というのが分かっていただければ良いです。

第43話 竜殺しの天使

——最早、これまで。

戦闘指揮をとるリュクロムはそう直感した。

戦線は未だ崩壊していないものの、リュクロムの元にはいくつかの方陣が壊滅したとの報告がすでに飛び込んできていた。

これまで、兵が損耗し方陣の維持が困難となる前に、リュクロムは随時後方の予備兵力を適切に投入し続けた。

しかし、その予備兵力もすでに底をつき、手元に残った無傷の戦力は、最後の「一押し」に必要な重騎兵の部隊のみである。

ここで場当たり的に騎兵を投入するほどリュクロムは愚かでは無い、突撃ならまだしも、防衛、撤退に騎兵を使用するというのは、その強みを全く生かせない運用法だ。

全身フルプレートテンブルナイトの甲冑を纏った重騎兵は非常に強力な兵であり、さらに自身が率いるのは聖堂騎士団から抜擢した精鋭の第一重騎兵部隊、その力量は疑うべくも無い。

だがしかし、騎兵最大の長所はその機動力と攻撃力にある。

例えば、相手方が僅か劣勢になった時、側面から騎兵の突撃を食チャージらわせば、それだけで決着がつくほどの威力を発揮する。

つまり適切なタイミングで騎兵を投入すれば、一撃で勝利に導くほど強力な兵種である。

しかし、その一方でタイミングを誤れば大した効果は見込めない上に、敵が方陣の展開など対抗策を打っていれば、いたずらに損耗が増えてしまう。

さらに、一度壊滅してしまえばその補充は容易では無い。

馬とそれを操る騎士に重装甲、ただの歩兵とは比べ物にならないほど高価で育成にも時間のかかる兵である。

使いどころが限られる上に、その貴重さから運用が難しい兵種で

もあるのだ。

故に、アーク大陸において歴史上で名将と呼ばれる者は皆、戦いの流れを読み、この騎兵の攻撃力を最大限引き出したのであった。

リュクロムは、そんな歴史上の英雄達に並ぶほど天賦の才があるわけでは無かったが、騎兵の運用法は心得え、劣勢にあっても冷静沈着でいられるほどには有能であった。

その優美な外見こそ非凡ではあったが、その内実は合理的で、堅実な用兵を行う秀才、であるからこそ、アルスが数ある配下の中で確実に成果を出すだろうと強い信頼を受け、この場に居るのであった。

そうして、リュクロムは現在の戦況を冷静に鑑みて、このまま戦い続ければ十字軍が全滅の運命を辿ることを、戦場にいる誰よりも早く察知した。

よって、ここは最悪の状況を迎える前に、撤退するべきだ、という判断を下す。

神と共和国の期待を一身に背負った十字軍、それに易々と撤退の命令を下すのは凡将では無理である。

退くに退けない、策などないが、神に奇跡を祈るばかりで兵にはただ犠牲を強いるのみ、大きな責任を負うが故に、そのような行動しか凡将では出来ない。

そして、そんな愚かな者には、神は決して都合よく奇跡を起こしたり、慈悲を賜ることなどないという事を、リュクロムは経験則からよくよく理解していた。

奇跡とは、起こりえないから奇跡と呼ばれるのであり、そんなモノに頼るなど、最初から敗北を認めていることと同義である、リュクロムは心底そう思うし、だからこそ兵を勝利に導くのは、他でも無いそこで戦う人間のみであると現実的に考える。

そして、今のような敗北の局面にあって、少しでも多くの兵を救うのは、指揮を執る自分以外に他は無い。

リュクロムはついに撤退を伝えようとした、その時であった。

グウオオオオオオオ――

天地を揺るがす咆哮とともに、天空より黒い巨大な塊が降ってきた。

両軍が激突する、その最前線のだ真ん中に向かって、ソレはゆっくりと落下してくる。

この時ばかりは、死闘を繰り広げた両軍はその手を止め、ただただ空を見上げていた。

動く者は、ソレが落下してくるだろう場所にいた兵達のみ、彼らだけは死に物狂いで四方へ散ってゆく。

真っ直ぐに落下してきたソレは、ついに血に濡れたゴルドランの丘へと降臨した。

ソレの正体など、この場にいる者なら一目見ればすぐに解るうものであるが、誰もが、地面へと降り立ったこの瞬間まで、理解することは出来なかった。

ソレは、巨大な黒いドラゴンであった。

羽ばたくだけで竜巻を起こす双翼はボロボロに破れ去り、歩けば大地を揺らす足と触れるものを悉く切り裂く爪を持つ腕は、それぞれ片方ずつ切断され、無惨な傷口を晒す。

城壁と見紛う長大な尻尾も、手足と同じく斬り飛ばされて欠損しており、黒い砦そのもののような胴体は、何箇所も厚い竜鱗ごと穿たれ、全身血塗れとなっている。

そして、燃え盛る火焰のような光を湛えた双眸は、今やくすんだルビーよりも輝きを失い、内に滾る筈の強靱な生命の火が消えていることを、見る者全てに知らしめていた。

そう、天より落ちたのは、黒き竜王ガーヴィナルの亡骸であった。変わり果てた姿となった竜王、その額に、一つの影がある事に誰もが気づいた。

眉間に深々と突き刺さる十字の槍、それを手にするのは、血染め

の法衣を纏う少女。

返り血なのか、自身の血なのか、分からないほどに全身が赤黒く塗れ、美しい白銀の長髪も血に濡らし本来ある輝きを失っている。

少女に右腕は無く、また、右目も潰れているのか、血の涙を流しながら瞼が閉じられていた。

だが、少女は竜王の亡骸に槍を突き立て、その上に己の足で確りと立っている。

開かれている左目には、紅い輝きが宿り、彼女が未だ生きていることを明確に示していた。

少女の名はサリエル。

今この場に集った者達は、人間がたった一人で強大な竜を討ち果たした、伝説を目の当たりにしたのだった。

「――天使だ」

誰とも無く呟いた。

「天使が竜を倒した」

天使、その正体の解釈は様々であるが、この場上がった声には全て共通の認識があった。

「ああ、なんて美しい」

赤黒く血と臓腑に塗れ、右腕と右目を失う重傷を負っても尚、槍を手に毅然と立つ小さな少女の姿は、全ての十字軍兵士達にとって、この世のものとは思えぬほど美しいものとして映った。

彼ら一人一人が生涯に渡って決して忘れえぬ鮮烈な光景。

しかし、ダイダロス軍には彼女の姿がどう見えるのか、少なくとも、十字軍兵士が抱く印象とは、大きくかけ離れたものであるには違いなかった。

サリエルがガーヴィナルを倒した、その揺ぎ無い事実をゴルドランの丘に集った全ての兵は認識した。

しかし彼らの胸に去来する思いは、美しき伝説を目の当たりにした感動か、絶対的な力を持つ竜王の死の衝撃か、どちらにせよ、動くことを忘れるほど大きなものであった。

そしてその中で、誰よりも早く立ち直ったのはリュクロムであった。

傍らに呆然と立ち尽くす部下達に向かい、自ら声を挙げて号令を発した。

「見よ！ 偉大なる第七使徒サリエル閣下は、ここに邪竜の王を討ち果たした！

今こそ、我らがここに集いし悪しき魔の軍勢を討ち滅ぼすのだ！

全軍突撃！！」

朗々と響き渡るリュクロムの突撃指令、勝利を確信した十字軍は息を吹き返したように各々武器を掲げ、声を張り上げ、走り出す。

向かう先には、負けるはずの無い竜の王が討たれた事で、今や完全に戦意を喪失したダイダロス軍。

「急ぎ、サリエル閣下を救出。

それと、第一重騎兵部隊に攻撃命令を――」

ついに訪れた逆転の勝機、兵力の劣る自軍が強力なダイダロス軍を壊滅させるには、今を持って他に無い、リュクロムはそう心得、次々と指示を飛ばす。

現在、ゴルドランの丘で戦う両者の兵数の差は、戦闘開始時に比べて、その比率にそれほど変化は無い、むしろ数が減ったために陣形の維持が難しくなる分十字軍が劣勢となる。

敵は総大将を失ったとはいえ、ここで即座に全軍決死の反撃に打って出られれば、泥沼の消耗戦となり、結果的に十字軍は敗北を迎えることだろう。

だが、今この時において、士気の差が勝敗を決定付けるほどの状況となった。

戦線崩壊の危機に陥った十字軍は、サリエルの活躍によって勝利を確信し、一転反撃に出る。

そして、リュクロムがここで狙うのは、戦国時代の戦術でいうなら『乗り切り』と呼ばれる騎兵戦術の実行である。

浮き足立った敵に向かって騎兵を突撃させ、一気に壊走させる戦

術であり、最も使いやすく、確実な騎兵戦術と言える。

そして待ちに待ったこの『乗り切り』を実行させるタイミングは、今この時をおいて他に無い。

これに対するダイダロス軍は、未だ喪失した戦意を回復できず、右往左往するのみである。

王を失い、戦うか、逃げるか、降伏するか、いずれの選択肢もとれないダイダロス軍に、限界を突破するほど士気が上昇した十字軍が猛然と突撃をしかける。

そして、ついに整然と横一列に隊列を整えた白銀の重騎兵が、魔術士チャージの能力強化支援を受けた上で、勝敗を決定付ける威力を誇る突撃を仕掛ける。

迫り来る白き軍勢を前に、散発的に個々人が応戦する程度の対応しか出来ないダイダロス軍の命運は決した。

後にゴルドランの戦いと呼ばれるこの決戦は、十字軍の華々しい勝利という形で終結した。

この三日後、遠雷の月の10日、十字軍は首都ダイダロスを完全に占領したのであった。

第43話 竜殺しの天使（後書き）

これで行くや十字軍が本格的にパンドラ大陸の侵略をしてくれ
そうです。

主人公がいないシーンなかりを長く引っ張ってしまい申し訳あり
ませんでした、次回で3章最終回となります。

第44話 使徒の集い

聖都エリシオンにある教会の総本山、その名も『聖エリシオン大聖堂』、その深部にある高位聖職者専用の会議室に、全12人の内半分である6人の使徒が集結していた。

同じ使徒でも、エリシオンに勤める者もいれば、サリエルのように遙か遠い戦線へ向かう者もいる、12人全員が一堂に会することは滅多に無い。

それは同時に、アーク大陸の歴史が現在でも戦乱が終わらないことも暗に示していた。

今日ここに集った6人の使徒は、エリシオン在住の第二・第五それと現在帰還した第三・第四・第十一・第十二、という構成である。「――パンドラ大陸征服事業には、引き続き第七使徒サリエル卿に一任する」

この場にあつて、最高位であり議長役を務める第二使徒アベルが宣言する。

ゴルドランの戦いで十字軍が輝かしい勝利を治めたことによって、貴族からも教会からも続々と援軍を送り込むことが決まる現在の風潮にありながらも、使徒のまとめ役となっているアベルは、新たな使徒の派遣はしないことを示した。

「不服のようだな、第十一使徒ミサ卿」

各人の反応を察し、その中であからさまに不満気な表情をとった第十一使徒ミサへとアベルは声をかけた。

「サリエルはガーヴィナルとかいうドラゴンとの戦いで重傷を負ったんでしょ、欠損箇所を完全再生するには時間がかかるし、『棺』で寝れば一ヶ月は身動きとれないじゃない」

この場に列席する使徒の内、第二使徒アベルをはじめ半分を占める三人が顔を隠すような装いであるが、顔どころか肩や生足すら露わにするような改造を施された法衣をミサは纏っている。

ミサの未だ幼さの残る可愛らしくも美しい顔立ちは、17という歳相応に、美少女という表現が似合い、厳格な聖職者が見れば激高するような露出の多い改造法衣も、女性らしい曲線を描く発育の良いつきのため実に上手く着こなしていた。

淡い桃色の髪に輝く白金のティアラを始め、全身に煌びやかな装飾品を身につけているが、それらは全て着飾るというよりも、ミサの美貌を引き立てるだけに留まり、宝石の輝きも彼女の前ではどこか霞んで見えるほどだ。

「その通り、一ヶ月もの間行動不能であるのはサリエル卿にとっても十字軍にとっても危険なのではありませんか」

ミサの言葉に続き、第十二使徒マリアベルが発言する。

彼もミサ同様に顔を隠す装いでは無く、兄であるリュクロム大司教とよく似た金髪碧眼にして少女と見紛う美貌を晒している。

ただ艶やかなストレートロングのヘアスタイルは、兄のナチュラルウェーブとはかなり異なる印象を見る者に与えた。

「確かに、今再びガーヴィナルに匹敵する力を擁した魔族の軍に襲われれば十字軍は壊滅するだろう。

しかし、それほどの敵対勢力は確認されていない、まして慎重なリュクロム大司教の事だ、占領したダイダロスから無策にも打って出るような真似はしない。

そしてなにより、今も続々と増援がパンドラへ送られつつあるのだ、戦力の回復はすぐに成される」

「増援ね、餓えたハイエナの群れの間違いでしょ」

「口が過ぎるのではないか、第十一使徒ミサ卿」

アベルが嗜める、が、ミサには反省の色は見られない。

「アンタもアレが欲に目が眩んだ盗賊集団でしかないってのは分かっているでしょ、どうせ略奪と虐殺に興じるだけの下衆で、マトモな戦力になんかならないっての」

十字軍として新たな名乗りを上げた教会と貴族の増援部隊を貶めるミサだったが、アベルも彼女の言い分が理解できる為、あえて反

論をすることは無かった。

「ミサ卿の意見に全面的に賛成するわけではありませんが、僕も増援が大人しく指揮下に入るとは思えません。

兄は聖職者としても指揮官としても優秀だと思いますが、所属も思惑もバラバラな大集団を抑えられるのは、絶大な力を持つ使徒以外にはありません」

二人の使徒に明確な反対意見が出されているにも関わらず、アベルは意見を翻すことはしなかった。

「二人の言い分にも一理あるだろうが、それでも使徒の派遣は許可できない。

現時点でパンドラ大陸全土を征服するに足る戦力が確保できる見通しが立った。

確かにこれよりパンドラに赴くのは貴族の、あるいは教会の私兵ばかり、現地である程度の略奪行為が起こることは明らかであるし、領土や財産を巡って仲間内で争いが起こることも少なく無いだろう。だがしかし、パンドラを征服するには十分すぎる人数が集う、これより問題にされるのはあくまで‘ケーキの分け方’だけであり、そのような下らぬ争いは我ら使徒の与り知るところでは無い」

使徒とは、神に逆らう敵を滅ぼす為に力を授かっているのである。故に、戦功を上げ富と名声を得ることに意味は無く、ただただ敵を屠ることがその存在意義、倒す敵がいないのであれば、そこに使徒がいる意味も無い。

そういった意味で、パンドラ大陸はすでに他の使徒が介入するほどの敵勢力は残っていない地域でしかない。

例え盗賊紛いの連中でも、数で圧倒し大陸全土の征服は可能という見通しが、議会でも教会でも立っている。

寧ろアーク大陸に残る兵力の方が足りなくなるのではと思えるほど、出兵に名乗りを上げる者が多い。

欲に駆られて兵が不足するというのならば、共和国の平和を守る力は使徒が補わなければならない。

「負傷したサリエル卿は、確かに身動きがとれない期間が一ヶ月はかかるだろうが、脅威となる敵はいないため、態々愚かな味方を苦勞して御する必要も無い。

彼女にはパンドラの征服を終えるまで、十字軍総司令官として、ただその場に在るだけで十分だ、自身が動けずとも何ら問題は無い」

「でも――」

尚も反論を口にしようとするミサの言葉を、軽くパンと鳴らされた手の音が遮った。

「うふふ、そんなにサリエルちゃんのこと心配なら、今度会いにいきましようか」

と、友人の見舞いを提案するかの様に和やかな台詞を言い放ったのは、第三使徒ミカエル。

波打つようなプラチナブロンドのスーパーロングヘアに、見るものに安堵と慈悲を与える優しい眼差しの目元は紫水晶アメジストを嵌め込んだ様な輝きを宿す。

圧倒的に巨大な胸のふくらみ、緩やかなくびれ、大きく広がるヒップに肉付きの良い長い足。

ゆったりした純白の修道服の上からでもはっきり分かるほど、女性らしい豊満なボディラインが浮かぶ。

色香に溢れるその姿はしかし、古代に信仰されていた豊穡の女神や地母神といった神々しさを見る者全てに感じさせる。

そんなミカエルは、自分の意見が物凄い名案であると信じているかの様に、にこやかな笑顔を『聖女』と称される清楚な美貌に浮かべた。

「ちよつと、アタシは別にサリエルが心配だとかそういうんじゃないよ――」

「僕は賛成です、別に心配してはいないと言うのならミサ卿は来ないという事で。」

その方が喧しくなくて僕としては嬉しい限りですが」

「だ、誰も行かないなんて言っていないでしょ！

アタシは永遠のライバルとしてアイツの腕が落ちてないかどうか気になってるだけ、それだけなの！」

使徒同士の私闘や決闘は禁止されているが、ミサの様子を見る限りどうにも子供の喧嘩レベルとしか思えず、アベルは口を挟むことはしなかった。

「大体、マリアベルはサリエルと大した仲じゃないでしょ」

「勝手に僕の名を呼び捨てにするな、というか大した仲じゃないってどういう意味だ！」

「アタシはライバル、アンタはただの使徒仲間」

「ふざけるな、そんなコト——」

無い、と言い切れないところがマリベアベル少年の悩ましいところであった。

自身はサリエルに対して並々ならぬ感情を抱いてはいる、が、だから彼女と特別な仲になったという事は全く無い。

かつてアルスが枢機卿となる前、彼が率いる軍に兄のリュクロムと共に加わり、異教徒との戦いに身を投じたマリアベル。

その戦いに、教会の派遣した使徒がサリエルであった。

どう頑張っても戦友以上の仲では無い、そもそも共に戦っただけで戦友と呼べるのなら、常に戦場にあるサリエルの戦友は、今回の十字軍一万五千を加えれば総数10万に届くほどだろう。

「そんな……僕は……」

「ふふん」

思いの一方通行に悩むマリアベルと、何故か勝ち誇った表情のミサ。「私、パンドラ大陸へ行くのは始めてなんですよ、どんなところなんでしょうねえ」

ミカエルはミカエルで、旅行気分となり顔を綻ばせている。

そんな三者三様の様子を、アベルは半ば呆れた表情で見る、もっとも深く被ったフードによってその顔が見えることはない。

「——兎も角、サリエル卿と個人的に面会するのを禁止はしない、各人の判断に任せる。」

以上を持って議論は終わりだ、解散」

アベルは自身が解散宣言をすると同時に席を立った。

伝えるべきことは伝えたので、これ以上この場に留まりサリエルとの面会についてどうこう言う必要性は無い、ミカエル、ミサ、マリアベルが好きにすれば良いことだ。

この場にあつて終始無言を貫いた第四と第五の使徒も、アベルに続き席を立つ。

頭から足先まで重厚な甲冑を纏った白銀の騎士が、第五使徒ヨハネスである。

彼はゴルドランの戦いでダイダロス軍を壊走させた第一重騎兵部隊が所属する『^{テンブルナイツ}聖堂騎士団』の団長を務めている。

身の丈2メートルを越える甲冑姿で微動だにせず席につく姿は、美術品が置かれているようにしか見えなかった。

一方、アベルと似たような白いローブに身を包み、より深くフードを被って一切の表情が見えないのが、第四使徒ユダ。

彼に関しては、どのような活動をしているのか全く不明で、第五以下の数字を持つ使徒は、能力は勿論その素顔すら知らない謎多き人物である。

顔の見えない第二、第四、第五使徒はすでに退室し、後に残ったのはサリエルとの面会を望む三人組。

言い争うミサとマリアベル、二人に聖女の微笑みを向けるミカエルの図は、まるで出来の悪い生徒と教師のようであった。

堅牢なヴァージニア要塞と比べても、なお巨大なダイダロス王城、その一角にとある特別な部屋が設けてあった。

元々は地下倉庫だった広い空間、冷たい石の床には巨大な魔方陣が描かれ、四隅には白いローブを纏った司祭、そして中心には大きな純白の棺が置かれていた。

ダイダロス占領後この部屋が急造されてより約一ヶ月の間、室内を照らすランプの火が時折揺らめくのと、交替で魔法を行使し続ける4人の聖職者が疲れた吐息をかすかに漏らす他に、一切の変化は無かった。

しかし今この時、彼らが待ち望んだ変化がついに訪れた。

――バシヤリ

棺より水音が響く。

バシヤバシヤと、軽く水面を叩くような音が二度三度、4人の司祭はそれが精神力と魔力を消耗した自分達が聞いた幻聴では無いことを確認する。

司祭達が即座に部屋を出ると、彼らと入れ替わるように二人のシスターが現れる。

片方がタオルを、もう片方が法衣、どちらも染み一つ無い純白のものを持って。

二人が棺へ近づくと同時に、その内より棺の扉が開かれる。

扉を開き、中空に突き出された二本の白い細腕は、棺の淵へ手をかけて、ゆっくりとその身を起こした。

棺の中に満ちていた聖水に全身を濡らした、真っ白い少女の裸体が露わになる。

白銀の長髪から雫を滴らせつつ、開かれた紅い両目が、自身の目の前に立つ二人のシスターを捉える。

棺より出でる彼女へ、先に声をかけるべきだったのはシスターの方であったが、二人は彼女を直接目にしたのは今が始めてであり、思わず己の職分を忘れ、その神に愛された美しき姿に息を呑んで佇むことしか出来ずにいた。

二人の目に映るのは、傷一つ無い白い少女の裸身。

竜王ガーヴィナルとの激闘の末、全身に無数の傷を負い、さらに右の手と目を失ったはずの第七使徒サリエル、だが今の彼女にはそこ

にあったはずの傷跡はどこにも見られない。

この一ヶ月近い間、聖水に満ちた棺の中で、サリエルの傷は完全に回復したのだった。

「……どれくらい、経ちましたか？」

サリエルが口を開く。

以前と変わらずに小さな声音だったが、彼女に見蕩れる二人を正気に戻すには十分であった。

「今日は新陽の月12日、お眠りになられてから、36日が経過しております」

「そう」

法衣を持ったシスターより近況報告を聞きながら、タオルを持ったシスターに成されるがまま体を拭く。

「少し、騒がしいようですね」

「はい、先ほどダイダロスの宰相が玉座の間で自害を――」

シスターの話を聞きながら、サリエルは法衣を纏い、いつものように後ろで長髪を結った姿となった。

「それでは、リュクロム大司教がお待ちです、どうぞこちらへ」

シスターが先導して歩き始める。

それに続くサリエルの足取りは、一ヶ月寝たきりだったとは思えないほどしっかりとした足取りだったが、

（体が硬い……右腕も一週間は戦闘での使用は不可能）

自身の体の不具合を感じつつ、話を終えた後はリハビリと視察を兼ねて城の外へ出ようと思うのだった。

第44話 使徒の集い（後書き）

3章不評のため、連続更新でさっさと終わることにしました。私の構成本力不足により、苦しい展開となり申し訳ありませんでした。

使徒6人も一気に出してしまったので、名前と特徴を人物紹介にまとめてあります。

これで3章は終了、明日から主人公の下へ話が戻る4章となります。これからも楽しんでいただければ幸いです。

第45話 月夜のプロローグ（前書き）

更新順序を間違えてしまいました、申し訳ありません。

第45話 月夜のプロローグ

清水の月15日、今日も私は一人で満月の浮かぶ空を眺める。
今までも一人、そして、これからも一人。

それでいい、子供のままでいられれば、苦しくても、辛くても、
寂しくても、誰も恨まず、全てを忘れて生きていけるのだから。
けれど、一人で満月を見るのは、その日で最後になった。
忘れもしない、緑風の月4日、私は運命と出会ったのだから。

「俺の名前はクロノ・マオ、君は？」

もう、私は一人じゃなくなった。

子供のままでいられれば、苦しくない？ 辛くない？ 寂しくな
い？

全て嘘だった。

そんなものは、ただの欺瞞、自分を騙して、欺いて、気がつか
ないフリをして……

でも、そんなことはもうどうでもいい。

昔のことなどうでもいい、何もかもがどうでもいい。

何故ならば――

「ああ、リリィが居てくれれば、俺はこの世界で生きていける、寂
しくも無い」

私も同じ気持ちだから。

貴方が、貴方だけが居てくれれば、私はこの世界で生きていける、
寂しくなんか無い。

私はもう昔に戻れない、一人に戻れない、貴方がいるから。

そう、だから、世界にはただ、私と貴方だけいれればいい。
他のモノなんて、もう、いらない。

第46話 林檎箱の謎

俺は、イルズ村で冒険者生活を始めてから疑問に思っていたことがある。

その疑問は、俺がリリィと始めて出会ったあの時まで遡る。

リリィが水をかけてくれたお陰で、俺は目を覚まし、森の中にいるのだと気がついた。

その後は知っての通り、経験の通り、なのだが、肝心なのはその前、俺がどうやってフェアリーガーデンまでやって来たか、だ。

俺がアーク大陸の港町で密航した際に潜り込んだのは林檎（みたいな果実）の木箱だ。

潜入した木箱は、他の貨物と共に船倉に押し込められ、一週間ほどの航海へ出ることとなる。

狭い木箱に籠る俺は、寝るか、箱の中の林檎を食べるか、黒魔法を開発するかしかやることが無かった。

この開発期間で『装填』や『影空間』などの便利魔法を編み出したというワケだ。

しかしながら、あの揺れに揺れる船内で、狭い箱の中に入り、一週間身動きとらずにいるというのでは、快適な船旅となるワケが無い。

それでも平気だったのは、勿論この改造によって飲まず食わずで一ヶ月以上元気に過ごせるスーパーボディのお陰。

空腹（大丈夫なだけで腹は減る）の上、暇ではあるが、施設に居たころよりは痛い思いをしないだけ、格段にマシな環境であった。

そうして、林檎箱の中で過ごした最後の記憶、アレは出航してから7日目のことだ。

眠くなった俺は、すでに完成した影空間に自分の体を顔だけ出して入っていた。

影空間内は、魔力があっても空気は無い、故に頭から全部入ると

窒息するので顔は出しておかねばならないのだ。

傍から見れば顔の表面だけ浮かんでいるというひたすらに不気味な光景だが、狭い箱の中で足を伸ばして眠るには、こうして影空間を利用するのが一番だった。

事実、暑くも無く寒くも無い、その上船の揺れも感じなくなる影の中は眠るには快適で、さらに耳まで浸かれれば防音もされるので、雑音も気にならないというスグレモノだ。

今にして思えば、影空間の外界からの隔絶振りが、俺の身に何が起こったのか気づかなかった直接的な原因だったのだろう。

影空間を寢床に安眠していた俺、気がつけば森の中だったというワケ。

そう、俺が抱いた疑問、あの時、箱の中で最後に眠った後、一体何が起こって森までやって来たのかという点だ。

俺は最初、普通に船が港に到着、荷揚げ、陸路で輸送、その途中で、崖から落ちて森に、という流れだと考えた。

しかし、あの船はアーク大陸の、いや、より正確に言うならシンクレア共和国という人間の国家の船舶であった。

船の向かう先は、共和国の人間がパンドラ大陸に作り上げた侵略の橋頭堡、ヴァージニアである。

ここまではいい、だが、ダイダロス軍によってヴァージニアに押し込められた超劣勢の人間が、果たして林檎の箱をこんな内陸部まで運んでくるだろうかという事だ。

あの林檎はヴァージニアへの支援助物資だったはず、ならば、ヴァージニアで消費されるべきであり、そこ以外へ行く理由はない。

そもそも、人間が他所へ運ぼうと思っても、ヴァージニアから外には出られないはずである。

ここに矛盾が発生する、ヴァージニアにあるはずの箱は、現実には、そこから遠く西へ離れたフェアリーガーデンにある。

箱の持ち主である人間は、ここまで運ぶことは出来ない、ならば、一体誰がここまで運んだのであろうか？

一時は夜も眠れぬほど気になる疑問であったが、その正解、謎の輸送者の正体が、今ここに判明したのであった。

「怪鳥ガルダ、コイツの所為だったのか」

ガラハド山脈を形勢する山の一つ、その山頂付近にガルダの巣はある。

俺は現在、リリィと共にある特別なクエストを果たす為に、この巣に潜入している真っ最中なのだ。

断崖絶壁のど真ん中に、不自然なほど巨大な横穴があれば、それがガルダの巣だ。

自然に出来たのか、ガルダが掘ったのかは知らないが、立派に洞窟と呼べるほどの横穴は、縦横およそ10メートルはある。

その大きな洞窟の中、ガルダがカラスのように収拾した光物と餌の中に、俺は自身が入っていた林檎箱と同じモノを発見したのだ。見える範囲で、林檎箱が2つ、周囲には似たような木箱が砕け散っている。

この状況下を鑑みて俺は推理した。

凄まじい長距離を飛行するガルダは、ある時海上に共和国の輸送船を発見する。

気まぐれなのか明確な意思があったのか、ガルダは輸送船を襲う、そして大量の林檎が詰まった木箱を巣に持ち帰ろうとした。

何度も輸送船を襲ったのか、それとも一度で複数個運べるのかは不明だが、兎も角、ガルダが持ち去った林檎箱の一つに、俺が入っていたのがあった。

怪鳥と呼ばれるほど巨大な鳥モンスターに船が襲われたというのに、気がつかないとは恐るべき影空間の遮断能力である。

俺は深い眠りについたまま、ガルダと共にパンドラ大陸の空を飛ぶ。

そして、何かの拍子に俺の入った箱だけ落下、その先がフェアリーガーデン、リリィとの出会いの場所だったというコトだ。

「ああ、なんかちょっとスッキリしたぜ——」

おっと、今は疑問が解けた事の開放感に浸っている場合では無い。俺達には明確な目的があってここに来ているのだ、お仕事ですよお仕事。

「リリイはそっちを探してくれ、俺はこっちだ」

「はい」

俺とリリイはコンビで冒険者をやっている。

もともと薬草採取のクエストなどは一緒に行ってはいたが、実のところリリイはこれまで通り、薬の販売でのんびり生活していけば良いと思っていた。

だが、今はどんなクエストでも俺に付き合い、立派に冒険者稼業で生計を立てるようになっていく。

俺としては危険のある冒険者生活をリリイにはさせたく無かったのだが、あの満月の晩、少女リリイがどうしても俺と一緒に冒険者をやると言って聞かなかったので、こうして正式にコンビを組んで活動することと相成った。

少女リリイと夜を徹して話した事で決まったのは、冒険者コンビを組むことだけでは無い。

もう一つ、重要な決定があったのだが、それは――

「クロノ〜あったよ〜」

「おお、でかしたリリイ！」

色とりどりの宝石をあしらった、光り輝く一本の剣をリリイが手にする。

しかしそんな宝剣も、衣服を纏い着飾った妖精リリイの前では、その輝きも霞むというもの。

そう、もう一つの重要な決定とは、リリイに服を着せることであつた。

全裸でいたのは決して俺の所為ではないし、妖精として自然なことなのだが、少女リリイが是非にと言うので、こうして着る事となったのだ。

その身に纏う黒のワンピースは、全身が淡く発光するほど白いリ

リイには、実に良く似合っていた。

いや、もうリイイならTシャツGパンでもカワイイとは思うけどね。

ところで、冒険者をやっている以上、衣服というのは自分の身を守る重要な防具だ。

しかし、今リイの着ている服は、本当にただ可愛いだけの服なのである。

そもそも全裸がデフォだったし、リイには強力な常時発動型のシールドである妖精結界を、固有魔法として持っている為、よほどのもので無ければ防具などかえって邪魔にしかない。

ちなみに、俺がリイと出会った時に見た、小さい本物の妖精が纏っていた光の球体、アレが妖精結界である。

だがしかし、駆け出しの冒険者とはいえ、自身が身につける防具は拘りたいモノである。

そこで、リイが着るに相応しい一品を俺は探し求めた。

そうして俺が目をつけたのが、ある商人が取り扱っていた『エンシントビロード』という布地である。

手触り、光沢、どれも見事なものであり、さらに、強力な防御の魔法が籠められているという、高級な上に魔法の相乗効果で超高級品となっている。

そのお値段たるや、コツコツ溜めた俺の全財産を軽々と越える超絶価格。

まあ新人冒険者でしかない俺の手が届かないのは当然のことでもある。

本来なら諦めるところだったのが、この商人にはある事情があった。

「代々伝わる家宝の宝剣がガルーダに持ち去られてしまった」というのである。

奪還の依頼をギルドに出すが、受注する者はおらず、個人的に契約しようにも、モンスターの危険度ランク4に分類されるガルーダ

を相手にできるほどの冒険者は見つからない。

一刻も早く取り戻したいが、これ以上はどうにも出来ない状況であった。

不幸な商人には悪いが、俺にとってはチャンスだ、この依頼を成功させれば、手の届かない高級品のエンシェントビロードを報酬に出させることができる。

結果的に、前金無し、失敗・損害の保証無し、依頼の完遂時のみ報酬を受け渡し、という条件で依頼を受けることになった。

未だランク1の新人冒険者でしかない俺を、当然だが商人は信用していないが、前金や保証など一切のフォローは無いので、依頼主からすればやらせるだけならタダである、依頼を受けさせない理由はない。

かくして、俺は初めてギルドを通さず個人的にクエストを受注したのである。

「兎も角、これで依頼は達成だな」

まあ、道中それなりにモンスターの襲撃があったが、こうしてリイが宝剣をさっさと見つけてくれたお陰で、ガルーダの相手もせずに済みそうである。

俺がこれまで相手した中で、サリエルを除き最も強かったのが、機動実験で最後に戦った『火竜』^{サラマンダー}である。

全身火傷に左腕と腹を食い破られるという瀕死の重傷を負ったが、どうにか殺しきることに成功した、ランク4のモンスターである。

あの時より多少は黒魔法の扱いが上手くなり、装備も整った今なら、重傷は負うが瀕死にはならず倒せる。

なので、同じランク4であるガルーダも、最悪相手にしてもリイと二人ならばどうにか倒すことは可能だろう。

だが、それは出来るというだけの事、ガルーダの討伐は依頼の達成に必要な無いので戦闘を避けるに越した事は無い。

何より、リイには怪我させたくないしな。

「それじゃ、ここの家主が帰ってくる前に――」

帰ろうか、と続けようとしたその時、鳶に似た甲高い鳴き声が響き渡る。

洞窟の外、そこから広がる大空に、一つの黒い点が見えた。

その点はこちらに近づくにつれ、明確に鳥の形をとる。

全身が黒く、頭と尻尾に長い飾り羽がついているが、鷲のような猛禽類を思わせる体。

が、ただの鷲にしては縮尺がおかしい、明らかに大きすぎる。

「ヤバいな……」

当然、その巨大な影こそ、怪鳥ガルダ。

そして、ここはガルダの巣であり、リリィほどもある巨大な卵もあるのだ。

ガルダから見れば、俺達は卵泥棒以外の何物でも無いだろう。

「キョオエエエエエ！」

凄まじい怒気を放ちながら、超高速で迫るガルダ。

ちくしょう、上手く鉢合わせずに済んだと思ったのに！

「逃げるぞ！」

「うん！」

目的の宝剣はさっさと影空間に放り込んだ、失くしたり落としたりすることは無い。

ガルダがこちらへ達する前に、俺はリリィを抱えて洞窟から跳び、宙へ身を投げ出す。

「頼んだぞリリィ！」

俺とリリィの両手は繋がれており、空中で俺がぶら下がるような体勢。

「ええーいっ！」

リリィが相変わらず可愛らしい掛け声と同時に、体に僅かな浮遊感が発生する。

「んっ！」

リリィの輝く羽が、通常よりも大きく広がっている。

俺を持ったまま、賢明に飛ぼうとしているのだ。

リリーの羽は伊達では無い、ああ見えて一応は飛ぶことが出来るのだ。

しかし、完全な妖精では無いリリーは、四六時中飛行できるような能力は無く、高速での飛行も出来ない。

「リリー、あと少しだけ頑張ってくれ！」

「うーん！」

そんな不完全な飛行能力だが、リリーは俺を支えながら必死に飛ぶ。

いや、飛ぶ、というよりゆっくり落下しているだけだが、それでもリリーの健気な頑張りは分かる。

眼下に広がる緑豊かな森が、徐々に近づいてくる。

飛び降りたガルーダの巣は、もう遥か上空、かなりの距離を落下してきた。

今の高さなら、なんとかなるか――

「ありがとうリリー、もう大丈夫だ」

「クロノ――」

俺はリリーの手を離し、自由落下を始める。

落ちる俺を、リリーが心配そうな顔で見送ったが、俺としてはリリーの方が心配だ。

最悪、着地に失敗して両足が折れても、この体ならどうにかなる。

「けど、ちょっと高すぎたか……」

数秒の間に若干後悔しつつ、俺は緑の木々へと突っ込んだ。

「痛っ――」

枝をバキバキ折りながら、地面へ向けて落下してゆく。

少しは落下の勢いが木々で吸収されるかと思ったが、本当に効果あんのか。

グルグルと瞬間的に無為な思考が流れてゆく、それも地面へつく一秒にも満たない間の事。

「ぐっ！」

どうにか体勢を立て直し、両足から着地、衝撃が瞬時に脳天まで

駆け上がる。

「な、何とかなったな……」

足先が軽く地面にめり込んでいる、が、それだけで、両足に異常は感じられない。

俺は頑丈な体に何度目になるか分からない感謝をしつつ、その場で寝転んだ。

「クロノ」

上空から天使の、じゃなかった、リリイの声が聞こえる。

二対の羽を輝かせながら、寝転がった俺の胸へと飛び込んできた。
「だいじょうぶ？」

「大丈夫だ、問題ない。」

それより、ガルードは追って来てないか？」

「うん、来てないよ」

良かった、卵に手出しはしてないし、さっさと逃げ出したから執拗に追撃されるほどでは無いと思っていたが、予想通り、見逃してくれたようだ。

「よし、依頼も達成したし、さっさと帰ってお茶にするか」

「うん！」

俺はリリイを抱えたまま、勢いよく起き上がり、ガラハド山脈の麓を後にする。

上空にはガルードの鳴き声、遠くからはウィンドルの遠吠え、ドルトスが今日もどこかで暴走しているのか、地面のかすかな揺れ。

そんな環境も当たり前に思えてくるほど、5月に相当する遠雷の月はすでに過ぎ去り、冒険者生活も慣れた今日この頃。初夏を感じさせる6月に当たる時期、今日は新陽の月の4日、リリイと出会って実に二ヶ月が経過していた。

第46話 林檎箱の謎（後書き）

クロノはリリィの服を手に入れた！

そんなワケで、第4章スタートです。相変わらず平和な冒険者生活
をクロノは送っているようです。

第47話 夏の始まり

イルズ村含む、パンドラ大陸東部の地方には、新陽の月の30日に『夏越しの祭』というお祭りが行われる。

‘夏越し’という単語は聞きなれないかもしれないが、‘年越し’ならば日本人なら誰でも聞いた事はあるだろう。

年越しは、大掃除をして一年の汚れを払い、新年を迎える事だ。

この夏越しも、年越しとほぼ同じ意味合いを持ち、大掃除をして、夏を迎えるのだ。

元々は、この初夏と年末に大掃除することで、衛生環境を保つために行われた。

医学や薬学もそこそ発達し、回復や治癒の魔法もある異世界ではあるが、現代日本ほど医療が進んでいるわけではない、こういった日々の暮らしの中で、あるいは行事で、衛生環境を改善し、疫病の発生を予防するのは非常に重要なことである。

そんな大事な一面もあるのだが、お祭りはお祭り、元の世界でも異世界でも人々がお祭りで盛り上がるのは共通。

30日までに大掃除を終え、当日は村の総力を挙げたお祭りを開催するのだ。

という話を、ギルドのロビーでいつものように昼食中、ニヤレコから聞いた。

「祭りと聞いちゃ黙ってられねえな！」

「私も毎年楽しみなんですよー」

異世界で初のお祭りイベント、俺は勿論だが、ニヤレコも楽しみにしているようだ。

娯楽の少ない異世界だ、やっぱりお祭りは一大イベントなのだな。「リリイさんも毎年来ていますよ、怪我人が出たら回復してくれるんですよ」

「そうなのか、以外と大人な対応なんだな……」

てつきり歳相応、じゃない、外見相応にはしゃぎまわっているのかと思いきや、どちらかといえば運営側だったとは。

そんな大人なリリイは、ロビーの隅っこで丸まっている妙に太った猫の相手に夢中であつた。

あんまりじゃれ合うと折角のエンシェントビロードのお高いワンピースが毛まみれになっちゃうぞ。

「今年はクロノさんも居ますし、リリイさんも屋台を回ったりしてのんびり過ごすんじゃないですかねえ」

「そうだな、二人でゆっくりーっと、そーいや屋台とか出るのか？」

「何言ってるんですかクロノさん、お祭りといえど数々の出店じゃあないですか！

あ、ひよつとしてクロノさんの故郷ではそんな感じじゃなかったりします？」

「いや、俺の故郷でもお祭りに屋台の出店はつき物だったぞ。

やっぱり歩きながら手軽に食えるようなモノを売ってるのか？」

「はい、串焼きとか、お酒を売るところが多いですね」

お祭りだと、皆さんお財布の紐が緩くなるので、結構な稼ぎ時なんだそうですよ。

私も分かっていながらつい使っちゃうんですよー、道具屋のアタリが混ざってるか怪しい籤引きとか！」

「ああ、キッシュのオッサンならすげえやりそうだな……」

「でも、やっぱり出店巡りはいくつになっても楽しいんですよ」
「今年は私もついに大人買い解禁です！」

「子供の限られたお小遣いで如何に多くのモノを買うかってのも楽しかったよな」

まあ、元いた世界では現役で子供だったんだけどな。

文芸部やってたし、バイトもしてなかった俺が、まさか始めて経験する労働が異世界で冒険者とは、人生ってな何があるか分からん

ものだな。

「いいですよ、私も子供の頃は出店で売る魅惑のお菓子を全種類制覇するのを夢見ていました、今年は実現できそうです〜ふふ〜」

「やってみたら以外とあっけないモノだったりするかもな」

「んも〜そういう現実っぽいコト言わないで下さいよっ」

和やかにニヤレコとの談笑が続く、多分今日も先輩職員のピーネさんが現れるまで雑談し続けることだろう。

やめないニヤレコもニヤレコだが、止めない俺も俺か、最初にニノがケチをつけてきた「ニヤレコの仕事の邪魔すんな」というのは案外当たっているかもしれない。

「それにしても、夏越しの祭が始まる前には、もうすでに夏って感じじゃないか、最近急に暑くなってきたぞ」

恐らく日本よりは低緯度に位置するだろうイルズ村、夏には猛暑日が続くだろうことは今からでも予想できる。

果たして炎天下の中、愛用の『悪魔の抱擁』を着続けて大丈夫なんだろうか？

「そうですね、冷たいモノが飲みたくなっちゃいますよね」

魔法が普及する異世界において、氷はそれほど高価なものではない。

ランク1の魔術士でも、氷だけなら相当量作り出すことができる、アイス・アルマシルドアテンの氷結大盾を削ってカキ氷にすれば一体何人分できるだろうか。

「あーカキ氷食いたいな、アイスも捨てがたい——」

魅惑の氷菓に思いを馳せていると

「カキゴリーとかアイスって何ですか？」

「え、知らないのか？」

「聞いた事ないですね、クロノさんの故郷の食べ物ですか？」

食べ物に関しては、ジャンクフード以外は大体揃っている豊かなイルズ村だったので、アイスクらいあるだろうと思っていたが、そうか、この世界で、少なくともイルズ村周辺ではカキ氷もアイスも

開発されてないのか。

「ああ、暑い夏には定番の氷のお菓子なんだけど、そうか、無いなら自分で作るのかなさそうだな」

「おお、クロノさんの郷土料理ですね！ これは気になりますねえ」
果たしてカキ氷とアイスを郷土料理と呼んでいいものか……

「よし、明日も暑くなりそうだし、今日はクエスト受けるのやめてアイスでも作ってみるかな」

第47話 夏の始まり（後書き）

4章のプロローグをすっ飛ばして掲載してしまいました、昨日の更新で読んでしまった方は話が前後して申し訳ありませんが、45話『月夜のプロローグ』をご覧ください。

第48話　アイスクャンデー

アイス、特に簡単に作れるアイスクャンデーを作ろうと思い立った俺は、早速材料集めを始める。

「いらっしやい、ついにポーションが尽きたのかクロノ？」

「残念だけどまだ一個しか使ってない」

やって来たのは冒険者御用達、イルズ村道具屋である。

イルズ村で活動する冒険者達の例に漏れず、俺もすでに常連と化しているので、店主とは煩わしい敬語は無しで会話をする。

「木の棒を探してるんだけどー」

俺がこの店に求めているのはアイスの原材料となる食材では勿論無い、探しているのはアイスの持ち手となる平べったい棒だ、あのアタリとかハズレとか書いてある部分な。

「木の棒ね、うーん、この白木の杭なんかどうだ？　これで心臓を刺せば不死の能力を誇る吸血鬼族ヴァンパイアも一撃だぞ」

「スマン言い方が悪かった、今回は武器を買いにきたワケじゃないんだ」

美味しく食べてヴァンパイアも殺せるアイスクャンデーランズなんて下らない想像は置いといて、そこそこに事情を説明し、俺が何を求めているのかを伝える。

「うーん、一番それらしいのは焼き鳥用の串くらいしかないねえ」

「じゃあそれでいいや」

それに加えて、アイスを固める型代わりに使う容器を購入、上手くアイスが出来たらキッシュのおっさんにも分けてやることを約束して、道具屋を後にする。

それからアイスの原材料となる食材を村で買い集め、その日はイ

ルズ村を出て自宅へ帰った。

帰宅後、リリイと一緒に調理を開始する、というか、リリイがいなければアイスクャンディー作りは成り立たないのだ。

「そんなワケで、これからアイスクャンディーを作るぞ」

「あいすきやんでー？」

キョトンとした顔で小首をかしげる不思議そうなリリイ、アイス
の存在を知らないなら当たり前の反応だ。

「冷たくて甘くて美味しい俺の故郷のデザートだ、まあ、上手く出
来ればの話だが……」

イチからアイスクャンディー作りなど、小さい子供の頃以来だ。

しかも今回は材料が現代日本とは異なる、まあ最悪でも氷ったジ
ュースになるだけだし、大失敗ということは無いだろう。

自分でもやや不安になりながら調理を始める、と言っても大した
作業は無い。

買ってきたオレンジとブドウ（この二つは林檎モドキと違い本物
だ）を潰して果汁を取り出し、それぞれに水と砂糖を混ぜて原液（
ジュースとも言える）を作る。

白砂糖が異世界でもすでに流通していたのは僥倖と言える、歴史
的に見ても砂糖が一般家庭にまで普及するのは現代に近くなってか
らのはず、なんたって甘いお菓子は贅沢品だからな。

しかしながら、ここでは塩や胡椒といった他の香辛料同様、砂糖は
割と簡単に手に入るので、アイス以外にも色々お菓子作りをするに
不便はなさそうだ。

それは兎も角、後は金属製の容器に原液を流し込み、串を刺して
冷やすだけ。

で、この冷やすという最も重要な作業を、リリイに頼むのだ。

「よしリリイ、これをちよっと氷の魔法で凍らせてくれ」

「うん！」

何が出来るのか分からないだろうが、言われるがままに氷魔法を
発動させるリリイ。

こればかりは俺の黒魔法じゃどうにもならないからな。

俺の黒色魔力は物質化、付加、空間拡張といった効果しか今のところ得られず、異世界では一般的な火や氷といった元素を発生・操作させる原色魔法を使えない、というか、俺には原色魔力が体に無いので習得不可能だ。

そんなわけで、ある程度の原色魔力も固有魔法とは別個に扱えるリリィに頼んだのだ。

リリィがお茶を沸かす時に、口から火を噴くのと同じように冷気を噴出す。

「ふうー！ ふうー！」

魔法の効果は絶大、リリィの頑張りによって瞬く間に原液は凍りつく。

アイスキャンディーを市販のようにシャリシャリにするには、ただ冷凍庫に入れて凍らせるのでは無く、寒剤（氷とその重量の三分の一程度の塩を混ぜたもの）を使って急速に凍らせる必要がある。が、魔法を使えばそんなこと気にせず当たり前のように一瞬で氷結させることが出来る。

「よし、もういいぞリリィ」

「ふー？」

リリィの氷魔法を止め、容器の一つに手を伸ばす。

そのまま無理に引っ張れば、串はすぐ引っこ抜けてしまうだろうことを考慮して、容器の辺に合わせて黒色魔力で刃を形作り、差し込む。

岩壁にすら突き刺す刃の前に、アイスキャンディーの堅さなど無いに等しい、さっくりアイスと容器の接触面を切り離す。

そうして、すんなりと小さな四角柱のアイスキャンディーは容器より引き抜かれる。

「どうかな——」

興味津々なリリィの視線を受けながら、俺は未だかつて無いほど真剣にアイスキャンディーと向き合う。

やはり現代の市販品と違って、香料や着色料が入って無いので、色合いはあまりよろしくなく、香りもあまり感じない。

だが味は悪くないはず、と信じてアイスクャンディーを口にする。シャリシャリという氷菓独特の感触、オレンジと砂糖が合わさった酸味のある爽やかな味が口中に広がる。

うん、これは間違いなくオレンジ味のアイスクャンディーだ！

「やった、上手くできたぞ！ ほら、リリイも食べてみるよ」

俺はさっきと同じ要領で容器からアイスクャンディーを引き抜き、リリイへと手渡す。

期待に満ちた瞳でアイスクャンディーを受け取り、躊躇無く小さな口で齧り付いた。

「しゃくしゃく――!?」

「どうだ、美味いか？」

「美味しい!?」

リリイが夢中で食べる様子を見ると、嘘偽り無く美味しいと思っていることが分かる。

やっぱり、異世界でも子供ならアイスは美味しいと感じるよな。

「よし、グレープ味も食べてみるか」

「うん!」

こうして、俺はどこか懐かしい日本の夏を思い出しながら、リリイは初めて味わう冷たい氷菓を堪能し、アイスクャンディー作りは成功した。

翌日、俺は昨日と同じようにギルドへ昼食をとりに行って来た。た。

「おーニヤレコ、昨日言ったアイスを作ってみたんだ、味見するか？」

これまたいつものように俺の元へやって来たニヤレコに、自信作

のアイスクャンディーを差し出す。

俺の隣には、すっかりアイスクャンディーの虜となったリリイがグレープ味に舌鼓を打っている最中である。

「本当に作ったんですね！ このリリイさんが食べてるのがそんなんですか？」

あまりに美味そうに食べるリリイの様子に、ニヤレコも期待に目を輝かせる。

「ああ、アイスクャンディーっていう果汁を凍らせた——まあ御託はいいや、とりあえず食べてみ。」

あ、オレンジと葡萄のどっちがいい？」

じゃあオレンジで、と応えるニヤレコに影空間の中に保存した容器を取り出し、アイスクャンディーを手渡す。

昨日のリリイと同じような動きで、ニヤレコはアイスクャンディーへ齧り付いた。

「しゃくしゃく——！？」

「どうだ？」

「こ、これは——」

驚愕に目が見開かれたニヤレコ、その背景に雷のエフェクトが見えそうなほどの驚きぶり。

「にゃんですかコレは——！ ペロペロ」

一心不乱にアイスクャンディーを舐めるニヤレコ、まるでソフトクリームでも舐めているかのようにアイスクャンディーは見る見る削れて行く。

そういえば猫の舌は骨についた肉をこそぎ落とす為にザラついている、猫獣人のニヤレコも同じ舌を持ち、それでもって舐めるだけでアイスクャンディーをどんどん削って食えるのか。

なんて感想を抱きつつも、ニヤレコの食べるアイスクャンディーはあっという間に消滅する。

「どう、美味かった？」

「葡萄味もお願いします！」

獲物を狙う肉食獣の瞳をしたニヤレコに、俺は黙って葡萄味の方も渡した。

「ありがとうございます——ペロペロ」

しかし、この様子だと感想は聞かなくても良さそうだな。

「このアイスクャンデーは凄いですね！　こんな美味しいもの初めてです！」

「そうだろ、暑い日に食うと最高なんだ」

「そうですね！　これは凄い発明ですよクロノさん！」

「開発したのは俺じゃないけどな」

「いえいえ、これはイルズ村の食品業界に革命をもたらす一品ですよ、売り出せば大ヒット間違いなしですね」

「おお、そうか、これから暑い夏だしな——」

なんか、危険な冒険者稼業よりリリイと二人でアイスクャンデー売りの屋台でもやった方が平和で良いような気もする。

いやいや、俺はダンジョンで元の世界に戻るほどの召喚魔法が行える魔法陣なり祭壇なり謎の装置なりを見つけなければならぬのだ。

いつまでも呑気にアイス売りなどやっている場合じゃない。

「作り方は簡単だし、教えれば販売してくれるところはあるだろう」

もっとも、タダで教えるほどお人よしでもなければ金勘定が出来ないわけでもないからな、特許では無いが、それなりの値段で商人ギルドに売り込んでやろう。

「あ、クロノさん今ちよつと悪い顔になってますよ」

「はっはっは、一儲けできたらニヤレコには好きなだけアイスクャンディーを驕ってやる」

「本当ですかあ！　約束ですよ！」

「ああ、でも食べ過ぎると腹壊すからほどほどにしとけよ」

イルズ村においてアイスクャンディーが革新的なお菓子であることを確かめるため、俺は他の人にも試食してもらおうと思った。

まずは、丁度良いところにギルドへのこのこやってきたイルズ・ブレイダーの面々だ、さあお前らもアイスクャンディーの虜になるが良い。

「おいクロノ！ お前さっきニヤレコになんかあげてただろ！ プレゼント作戦かコノヤロウ！！」

俺が声をかける前に、相変わらずニヤレコ一直線の猫剣士ニーノが迫ってくる。

「落ち着け、ちゃんとお前にもやるから」

「そういう問題じゃねえ！ 大体よ、お前結局毎日ニヤレコと昼飯食ってるじゃねーか、なんなんだよ！」

「なんなんだよって言われても、だったらニーノが昼食でも夕食でも誘えばいいだろう」

「ば、ば、バカヤロウ、そんな大胆なコトできるわけ——」

ニーノは純情なんだかヘタレなんだか分からんな、そんなに好きならガンガンアプローチをかければいいのに。

まあ俺には気になる女性にアプローチをかけた経験など無いから偉そうなことは言えないのだが。

「そ、それに、もし断られたら……俺立ち直れないかもしれん……」
ダメだ、コイツはヘタレ確定だ。

「それで、何をくれるっていうのんクロノ？」

「凹んだリーダーを放っておいて、アテンが俺の前へ出る。」

「ああ、俺の故郷のアイスクャンディーというお菓子を作ったから、是非みんなに食べてもらおうと思って」

「アイスクャンデー？ 聞いた事無いけど、お菓子作りだなんて、クロノ意外と少女趣味？」

「暑いと食いたくなるんだ、まあみんなも食ってみれば分かると思う」

「ほほう、自信満々ね？」

「リリイ、村長、ニヤレコはみんな美味いと絶賛してくれたぞ」
村長にはギルドに来る前、日課の読書をしに行ったときに献上したのだ。

「とりあえず食べてみてくれよ、味は——」

イルズ・ブレイダーのメンバーに、お望みの味のアイスクャンデイーを配る。

全員揃って食べる、反応は、まあ今までと同じ——

「「美味い!!」」

そして、これも予想通りだがニヤレコと同じくもう片方の味をアテンだけはしっかり要求してきたのだった。

第48話 アイスキャンデー（後書き）

リアルでもアイスが食べなくなる今日この頃です。

第49話 腹ペコ魔女

その日は、色んな村人にアイスクャンディーを配り終わると帰路に着いた、勿論昨日に引き続きクエストは受けてない。

まあそんなに毎日クエストをこなさなくても、生活するだけならどうとでもなる。

俺はリリイを肩車して、商人ギルドにアイスクャンディーのレシピをどうやって売り込もうか考えながら街道を進む。

この真っ直ぐ続く街道に暮れなずむ夕陽を背景にした帰り道も、随分と見慣れたものとなった。

普段なら、徒歩や馬車を引く行商人とたまにすれ違うくらいのものだが、この日に限っては、今まで見たことの無い姿の人物を発見した。

その人物は、街道脇に生える木を背に座り込み、ピクリとも動かない――魔女だった。

「どう見ても魔女だよなこの人……」
絵本でしか見たこと無いような大きな黒の三角帽子で顔を覆っている。

その身に纏うのは、俺と同じように漆黒のローブ、しかし、首元などには羽毛で飾られており、遠目でも上等な品だというのが分かる。

彼女の武器であろう長杖もすぐ脇に立てかけてある。
スタッフ

見れば見るほどパーフェクトに魔女ルックな人物、なんだか自分がいきなり童話の世界に紛れ込んでしまったような感覚を憶える。

まあ、ここは異世界なのだからそう不思議な出来事ではないのかもしれないが、そんなことよりも、

「……こういう場合はどうすべきなんだ？」

「？」

正しい対処が俺には分からないし、リリイも首をかしげている。どうやら眠ってはいるようだが、まさかこんな場所で昼寝（もう夕方だが）をしているなんてことは無いだろう。

だが、もしも急病だったりすると、助けられる人物は恐らく俺だけだろう、夜の街道など人通りは皆無だ。

しかしだからと言って、病と断ずるほどの様子では無い。

それじゃあ何か、俺が知らないだけで異世界では夕暮れの街道で魔女が眠っているなんてのは時折見られる自然な事なのか？

いくら考えたところで、当然この魔女がどうしてこんなところで寝ているのかは皆目見当などつかない。

声をかけるべきか、スルーすべきか。

もしもの事を考えて、俺は魔女に一応声をかけようと思ったその時、

「――そこのお人、何か美味しいモノを持っていますね？」

魔女が突如声を発した、それも、初対面にしては割と失礼な内容の台詞を。

「何だ、起きてたのか？」

あまりに唐突な魔女の発言に、機先を制された俺は思わず敬語を忘れて素で返答してしまった。

「私は今とてもおなかが空いています、美味しいモノが食べたいのです」

魔女はのっそりと、顔にかかっていた三角帽子を頭へと被りなおります。

そうして、隠されていた素顔が露わになる。

ひどく眠そうなボンヤリとした表情だが、それでも端正な少女の顔立ちだと即断できるほど綺麗なものだった。

肌は白いが、淡い水色のショートヘアに金色の瞳と少々変わったカラーリング、だが種族は恐らく人間だろう。

魔力は物の形質にも影響を与えるので、髪や肌、瞳といった部位に、元の世界では有り得ないような色を自然に持つ者は、この異世

界にあつては別段珍しい存在ではない。

そういえば「美味しいモノが食べたい」と言った口調がハッキリしていたことを思えば、こうして半目なのは眠いのでは無く素なのだろう。

「美味しいモノが食べたいです。

美味しいモノ食べたいな」

「分かったよ、食い物はやるから俺の話を聞いてくれ」

「本当ですか？　ありがとうございます」

表情にほとんど変化は無いが、俺は彼女が確かに喜びの感情を浮かべたのを見逃さなかった。

俺の姉貴はとことん無表情な人だったので、表情変化が乏しい人間の顔色を読み取るスキルには多少自信がある。

同じ無表情でも、顔に表れないだけで感情が豊かなタイプもいるし、姉貴のように感情もフラットなタイプもいる。

どうやらこの魔女は前者のタイプのようだと、俺は直感的に思った。

「あ、できれば甘いものでお願いします」

「……分かったよ」

ついでに、酷くマイペースな性格のようだ。

俺は結構面倒そうな人と関わってしまったな、と内心思いながら、影空間よりアイスクャンディーを取り出す。

「あいすきやんでー！」

「今日はもう3本食べたから、また明日な」

甘やかしすぎるのは良くない、と心を鬼にして、リリィにはアイスは一日3本までと決めた。

だからそんな物欲しそうな顔をしてもあげないぞ。

「何ですか、これは？」

「アイスクャンディーという、フルーツジュースを凍らせたようなモノだ」

「初めてみます、珍しいモノをありがとうございます」

すでに魔女の視線はアイスクャンディーに釘付けとなっている、相変わらず無表情のままだが、その瞳は獲物を前にした猛禽類の如き輝きを宿している。

そのままスイスイとアイスクャンディーを左右に振ると、動きに合わせて魔女が顔ごと追いかける。

「……イジワルですか？」

「スマン、つい」

あまりに真剣にアイスクャンディーを見つめる様に、思わず遊んでしまった。

俺は笑い出しそうな気持ちを必死に堪えながら、魔女へアイスクャンディーを手渡した。

「しゃくしゃく——っ!？」

「美味いか？」

「——とても美味しいです」

アイスクャンディーはあっという間に魔女の口へと消えた、今日アイスを食べた村人達の中でも最速の完食タイムだ。

「やはり私の見立て通り、甘くて美味しいモノを持っていましたね」

「何だよソレ、魔女の勘か？」

アイスクャンディーの入った容器は影空間の中、外から見えないのは勿論、匂いも一切漏れないはずだ。

「いえ、拡張空間内でも美味しいモノを隠し持っているのは、私には分かります」

「……本当か？」

「分かる、というだけですけどね」

魔女はそんなことも分かるものなのか？ 俺はこれまで影空間の秘匿性を絶対だと思っていたが、見破る術かスキルが存在しているのか。

もしかしてコイツ、実は凄い魔女なんだろうか？ それとも凄まじい才能を秘めた食いしん坊なんだろうか？

まあいい、気になることは色々あるが、まずは、

「それで、何てこんなところで寝てたんだ？」

これを聞かないことには始まらない。

「お腹が空いたので」

「行き倒れてたのか？」

「そんな感じです」

軽く命の危険があるシチュエーションにも関わらず、しれっとそんなコトを言う。

「ならアイスじゃなくて、もっと腹の膨れるものを食べなきゃダメだろ」

「私、甘いものには目がないもので」

「好き嫌い言ってる場合じゃないだろ、少し歩けばイルズって村があるから、そこで何か買え。」

「というかちゃんとお金は持ってるか？」

ゴールド
「金なら持ってますよ——ほら」

と言って、帽子の中に手をつっ込むと、そこから見たことの無い大判の金貨を取り出した。

片面には横向きの女性の肖像画が、もう片面には月桂冠のような縁取りに、見たことの無い円形の魔法陣と思われる文様が描かれている。

貨幣としてかなり長い間使用され続けたものなのだろう、僅かに表面がこすれたり、欠けたりした面がある。

だがそうした細かな傷のついた部分も変わらず黄金の輝きを放っているところを見れば、どうやら金メッキでは無く、相当量の金をちゃんと含んでいることが分かる。

正確な価値は金の含有量を測ってみないことには分からないが、少なくとも1ゴールド金貨を軽く超えるだろうことは予想がつく。
いや待て、デカイ金貨も驚きだが、そもそもあの金貨は帽子から出した、恐らく影空間と同じように空間を拡張する魔法を使っている。

俺と違い、真っ当に空間魔法を習得したというのなら、冒険者の

ランクでいけば最低でも3に匹敵するぞ。

やはり、格好だけの魔女では無さそうだ。

「そんな立派な金貨を持ってるなら、何でも買えるだろ」

「そうですか？ それではこの金貨で、先ほどのアイスクャンデーを買えるだけ下さい」

「悪いけどさっきので売り切れた、というか、アイスじゃなくて腹の膨れるモノを買えって言ったよな？」

「甘いモノには目がないもので」

それはさっき聞いた。

「つかコイツ、普通に元気じゃないのか？」

「とりあえず、イルズ村まで歩けるか？ ここからなら一時間くらいで着く筈だ」

「それくらいなら大丈夫です」

「そうか、まあ旅の魔女なら余計なお世話だったかもな」

異世界において旅をする人は珍しい存在では無い、冒険者や商人や吟遊詩人など、実に様々だ。

「美味しいモノをくれたので、別にいいですよ。

貴方も旅人なのですか？」

「いや、俺は――ああ、まだ名乗ってなかったな、俺はクロノ、でこっちは」

「リリィなのー」

「二人で冒険者をやってる」

分かりやすく身分を提示するために、俺のギルドカードを見せる。

「これはなんですか？」

「ギルドカードだけど、知らないのか？」

「このギルドカードは初めて見ました」

‘ここの’ってコトは、もしかして別の国出身なのか？

いや待てよ、確かこのギルドカードはパンドラ大陸でかなりの広範囲に渡って共通のはずだ。

とすれば、西部の大砂漠の向こうとか、よほどの辺境からやって

きたのかもしれないな。

「魔法に自信があるなら冒険者の登録はしておいた方がいいんじゃないか？ 路銀が尽きた時でもすぐ稼げるぞ」

もつとも、あのデカイ金貨を何枚も持っているとすれば、所持金が底をつくのは年単位で先の話となるが。

「はい、私も近々冒険者になるつもりでしたので。

スパードという街にいたら、そこで登録しようと思っています」
スパードは、確かイルズ村からガラハド山脈を越えたところにある、ダイダロス領と隣接する大陸中部の都市国家だ。

行ったことは無いが、パンドラ大陸に数ある都市国家の中でも特に有名らしく、田舎の冒険者でしかない俺でもその名前だけは知っている。

「それでは、私はそのギルドカードは持っていないので、こちらをお見せしましょうー」

そう言って、再び帽子をごそごそやって、一枚のカードを取り出した。

それは、俺が持つドッグタグのような金属プレートのようなギルドカードとは違い、トレーディングカードのような厚紙で出来た、正しくカードであった。

そこに書かれている文字は、異世界特有のアルファベットモドキだ。

『フィオナ・ソレイユ』

どうやらそれが彼女の名前らしい。

苗字があるってことは、かつて俺が疑われたように貴族など良いトコの出でワケアリなのかもしれないな。

まあその辺を詮索しないのが冒険者の礼儀だから、ここはスルーしておくべきだろう。

クラスは見た目通り魔術士、冒険者ランクは書いてあるようだが、こちらのギルドと分け方が異なるようで、どれほどのモノなのかは分からない。

「冒険者やってるならどこでも生きていけるだろうけど、なるべく行き倒れたりはするなよ」

「はい、私もいつもお腹が一杯なら幸せだと思います」

いや、そういう気分的な事を言っているのではなくてだな……まあいいや。

「それじゃ、俺達はもう行くぞ、フィオナさんも暗くなる前に行くんだぞ」

「はい、それではまた」

「ああ、縁があればな」

そうして、俺はフィオナさんというちよつと変わった魔女と別れ、再び帰路へついたのであった。

しかし、何故フィオナさんも村人も、アイスクャン、デ、ーと発音するんだろうか？

第49話 腹ペコ魔女（後書き）

クロノはアイスで魔女を餌付けした！

やっと第38話『とある魔女の話』に登場した魔女の名前を出しました。

それと、実はクロノ以外で異世界で苗字付きのフルネームが出たキャラは彼女が始めてなのですよ。

第50話 メディア遺跡

俺は現在ギルドのロビーに座って、とある依頼書とにらめっこをしている。

うーん、と考え込む俺を他所に、今日も隅のほうで太ったネコと戯れるリリイは実に楽しそうだ。

「随分とお悩みのようですね、クロノさん」

振り向けばハーピイの少年、イルズ・ブレイダーの頭脳労働担当であるハリーが立っている。

弓を背負ってないところを見ると、今日はクエストだけ見に来たか、飯を食いにきたかのどちらかってとこかな。

他のメンバーは、道具屋なり鍛冶屋なりへ赴き、それぞれ新たな仕事の準備をしているのだろう。

「ああ、このクエストが気になってな、受けようかどうか悩んでいたところだったんだ」

「――メディア遺跡新区画の調査、ですか」

俺の対面に座り、依頼書を読むハリー。

「先月あたりに新しい区画が発見されたって話は聞きましたね」

メディア遺跡は、地上に古代の岩壁くらいしか残ってはいないが、その真価は地面の下にある広大な地下街だ。

地下街は洞窟や空洞を利用したものではなく、すべて人の手によって作られたジオフロントであるらしい。

この異世界では、現代において眉唾モノでしかないオーバーテクノロジーを持つ古代文明が実在している。

今ではジオフロントを建造する技術などパンドラ大陸には無いが、古代にはそれが存在したのだ。

ちなみに、この古代文明は空飛ぶ車があるような科学の発展した文明では無く、異世界らしく魔法の発展した文明らしい。

そこで、現代の異世界よりも魔法技術の進展していた古代文明の

遺跡にこそ、俺が元の世界へ帰れるほどの大魔法を使用できるモノが存在する可能性があるのだ。

「そういえば、クロノさんは転移や召喚の古代魔法エンシエントを探しているんじゃないね」

「ああ、もしかすれば目当てのモノが発見できるんじゃないかと思っただけ」

現在、メディア遺跡には転移や召喚を行う施設は発見されていない、だが、人跡未踏の新区画には、何があるのかは誰にも分からない、可能性はゼロでは無いのだ。

「それなら、受けてみればいいんじゃないんですか？」

「それはそうなんだが、募集人員がランク1でもOKってのが妙に引くかかるんだよね」

メディア遺跡の危険度ランクは4、俺がこれまで立ち入ったことのあるダンジョンは高くても精々が3だ。

もっとも、俺とリリーの冒険者ランクこそ1ではあるが、二人でならサラマンダーも倒せるので、危険度的にはそれほど問題は無い、しかし……

「まあ、確かに怪しいですね」

「だろ」

そう、ランク4のダンジョン、しかも探索されつくしていない（新区画の発見は先月なので、この依頼が一番乗りでは無いのだが）となれば、より一層危険度も増すというものだ。

普通に考えるなら、荷物持ちでもランク2以上の経験者で編成するべきだろう。

にも関わらず、ランク1、つまり誰でもOKというのは、些かな自然に思える。

「面倒事に巻き込まれるのはゴメンだしな」

「あはは、クロノさんは意外と慎重なんですな」

「意外ってなんだよ、そんなに俺は脳筋に見えるってのか？」

それでも俺は魔法使いだぞ、それなら当然知的なイメージで見ら

れるべきではないのか？

「少なくとも生粋の魔術士って感じはしないですね、だってクロノさん、人間の中じゃ結構大柄じゃないですか、やっぱりそういう体つきの人は剣士や戦士が多いですからね」

横に目線をやれば、縦にも横にも大きい体の戦士が仲間の冒険者とワイルドにお茶を飲んでいる姿が目に入る。

「俺は特別体を鍛えてるわけじゃないんだけどな」
むしろ魔法の研究に勤しんでいる方だ。

「けど、やっぱり見た目か、あーあ」

「そんなに嘆かなくてもいいじゃないですか、ほら、強面だと舐められませんし」

「いーや、俺もハリーみたく細身の方がいいね」

「僕はハーピーだからこれで標準体型なんですけど」

空を飛ぶのが前提の種族だからか、ハーピーには細身の体型が多い。

人間と比べると筋肉や脂肪がつきににくいのは確かだ、種族の違いは見た目意外にもそうした性質にも現れている。

ついでに風属性の魔法が得意だ、ハリーの弓は風魔法のアシストによって威力や連射、同時撃ちを可能としている。

「話を戻すけど、ハリーはどう思う、このクエスト」

「うーん、僕はクロノさんなら大丈夫だと思いますよ。」

それにリリィさんもついているなら、騙される心配も無いですし」
妖精は決して悪人には懐かないとされているが、それはただの伝

説では無く、相手の心や感情がある程度読む、精神感應能力テレパシーが備わ

っているから、妖精は本当に初対面でも人を選ぶことが出来るのだ。

「そうだな、最悪依頼主がトンスラしても、一応ギルドは通してあるから報酬は払われるし」

ヤバイモンスターが出て、何とか逃げるくらいのことは出来るだろう、もっとも落盤事故などの場合はどうしようもないが、そこまで気にしては危険な冒険者稼業なんてやっていない。

俺は僅かな望みを託して、メディア遺跡探索のクエストを受けることに決めた。

「あ、でもクロノさん、気をつけなきゃいけないのはクエストだけじゃないですよ」

「ん？」

「メディア遺跡のある場所は知っていますか？」

「ああ、行くのは初めてだが、たしか――」

確か地図によれば、首都ダイダロスの近辺にメディア遺跡は位置していた。

「そのダイダロスなんですが、最近出入りが制限されているみたいです」

「どういう事だ？」

「詳しい事は分かりませんが、アーク大陸からやってきた人間の軍隊と揉めているらしいですよ」

「何だ、ヴァージニアって街に封鎖して出て来れないようにしてるんじゃないかったのか？」

「そのはずなんですけど、どうしたんでしょうか」

「まさか、形勢が変わったとか？」

「それこそまさかですよ、ダイダロスには遠征に向けて精鋭の軍隊が訓練中、それに竜王様がいるとなれば、これを破るにはそれこそ同じドラゴンを連れてこなきゃ太刀打ちできませんよ」

「ドラゴン……」

俺の実力はランク4のサランダーを僅かに上回る程度、国王になれるほど凄いドラゴンとなれば、そこからさらに1つ上のランク5、しかもその頂点に近い強さを持っていることだろう。

それがどれほどのものか分からないが、少なくとも俺と同等の力を持つヤツが100人集まってもどうにもならないくらいには強いんじゃないだろうか。

「恐らく、何かの交渉をしているのだと専らの噂ですけど」
交渉するのは対等な者同士じゃないと成り立たないものだ。

ダイダロスに人間を立ち入らせてまで交渉をする、噂が事実だとすれば、それは人間がダイダロス軍に匹敵する力を持っているってことなんじゃないかだろうか？

本国の武力を後ろ盾にしたか、いや、それだけでビビって交渉するっていうなら、攻撃してきた半年前にケリがついているだろう。

だとすれば、その半年前と現在では、ヴァージニアの、あるいはダイダロスの状況が変わったとは思えない。

その変化がどういうものかは、そもそもここへ来て日の浅い俺が分かりうるはずもないが。

「兎に角、今のダイダロス周辺はあまり良い雰囲気ではないようです。」

一体何が起きているのかは分かりませんが、気をつけるべきなのはクエストよりも寧ろこっちでしょうね」

「なるほどな、忠告ありがとう。」

俺も出先で何か状況が分かれば教えるよ」

メディア遺跡調査のクエストを受けることに決めた俺は、その日の内に準備を整え、翌日にイルズ村を出発する。

「――はい、それでは頑張ってくださいねクロノさん」

ギルドのカウンターで正式にクエストを受注し、ニャレコから証書を受け取る。

遠隔地からメンバーを募集するクエストなどはこうして証書が発行される。

俺はこのテのものは初めてだ、証書は大事に保管しようと思うが、どうせ影空間に放り込んでおくだけなので、他の物品と扱いは結局変わらない。

「でもメディア遺跡は遠いですよね、しばらく村に帰って来れませ

んね」

「ああ、下手したら帰るのは月が替わってからになるかもしれないな」

「それはダメですよ、夏越しの祭までには帰ってきてくださいね？」

「ん、そうだな、俺も祭には参加したいな」

「そーですよ！一緒に屋台の全メニュー制覇を目指しましょう！」

「俺にたかる気か？」

「失礼ですねっ！私は割り勘の出来る女ですよ！」

でもここぞという時に驕ってくれると好感度を荒稼ぎすることが出来ますのでお忘れなく」

俺にニヤレコの好感度を上げてどうしろと言うんだろうか、懐き度が上がるとお手をするようになるのか？

「このクエストが上手く行ったら、一杯くらいは驕るよ」

「流石クロノさん、話が分かる！約束ですよっ！」

「上手く行ったら、な」

「大丈夫ですよ、クロノさんなら調査クエくらい余裕です！」

「だいいけどな。」

それじゃ、リリイも待ってるしそろそろ行くか」

「はい、いってらっしゃーいクロノさーん」

今日も元気なニヤレコの声を背中に受けながら、俺はギルドを出て行く。

扉を開けると、これからクエストを受けるのかイルズ・ブレイダーの面々と鉢合わせた。

「これからクエストかクロノ？」

「ああ、メディア遺跡までな」

「今回は珍しく遠出だな、何かあんのか？」

美味しいクエストがあるなら教えろよ、とニーノの目は暗に語っている。

「個人的な探し物だ、しかもクエスト自体ちょっと怪しい、俺も事情が無ければ見向きもしなかったさ」

「そうかい、んじゃ精々気をつけるこった。

祭までには帰ってこれんのか？」

「そのつもりだ、祭でニヤレコに一杯驕らなきゃいけない約束もしてしまったしな」

「そうか——って待てよオマエ、それじゃあ祭でニヤレコと一緒になれるってコトなんじゃねーのかっ!？」

「あ……スマン」

言われてから気がついた、いかん、これじゃあ俺がニーノを出し抜いてニヤレコを誘ったみたいじゃないか。

「バカヤロー!」

悔し涙の男泣きをするニーノのネコパンチを、俺は甘んじて顔面で受け止めた。

「済まない、ニヤレコのこととは、まあ自分で上手く誘ってくれ」

「先約あったら誘いづらいわ!」

「もし断られたら、当日俺が協力して上手く引き合わせてやるから……本当か？」

「任せろ」

俺達は握手を交わす、これでもお前の恋を応援してるんだぞ。

「はー、相変わらずニヤレコの事になると情けないわあ。

まっ、そんなヘタレなんかよりクロノ、ウチにも何か驕って」

「ヘタレとか言うなやアテン」

「クロノお願いっい」

「無視すんなっ!」

突っかかってくるニーノを長杖で押しのけつつ、俺へ上目遣いに視線を向けるアテン、その目は結構マジだ。

「……一杯だけだからな」

「やったー♪ 約束だかんねー!」

満面の笑顔、だが騙されてはいけない、アテンは今この村で一番高い酒の銘柄を脳内検索中に違い無い。

早まったかな……

「クロノさん、あのクエストに行くんですね」

「ん、ああ、そうだ」

ヘタレなリーダーと現金な紅一点と違い、割とマジメな顔のハリ
ィ。

「メディア遺跡はこの辺にはいない、高ランクのモンスターがいる、
気をつけろ」

と、忠告してくれるクレイドルもマジメな顔。

ハリィとクレイドルの二人が良識派な所為か、ニーノとアテンは
戦闘以外でマジンなることがあまり無い。

これはこれでバランスが取れてる……と言えるのか、いや、言え
るということにしておこう。

「それじゃまたな」

「おう、頑張ってこい」

「クロノー約束忘れんなやー!」

「はいはい」

振り返らずにヒラヒラ手を振って、俺はリリィが待っているであ
ろう村の門へ向けて歩き出した。

第50話 メディア遺跡（後書き）

クロノはついに首都ダイダロスへ向けて出発！ 果たしてその先に待ち受けるものとは！？

ようやく話が動きそうな気配です、ここまでで随分と長い話になってしまいましたね。

第51話 通行止め

ダイダロスの領土は大陸の中ほどにある東端の海岸線から、西へ向かって伸び、丁度ガラハド山脈までとなっている。

パンドラ大陸の地図を広げると、中央よりもやや東側にガラハド山脈が南北に弧を描くように伸び、その中心から少し東へ行くと我がイルズ村がある。

イルズ村は領土の中では西の端に位置するということ、かなり東に位置するダイダロスへ行くには、俺の足でも一週間近くはかかってしまうくらい遠い。

そして今回の目的地であるメディア遺跡は、そのダイダロスが近くにあるくらい、離れているのだ。

遠い距離を移動するのは確かに大変だが、これも冒険者なら避けでは通れない問題なので甘んじて受け入れる、俺には三日三晩歩き続けてもほとんど疲労しない肉体があるだけマシなのだ。

メディア遺跡を探索する冒険者は、リオールという村を拠点にして活動するので、俺が目指す先はひとまずそこということになる。

リオールは、ダイダロスの西隣に位置する村の一つだ。

ダイダロスは五本の主要街道の起点となっており、中でも特に大きいのは東南の港町（問題のヴァージニアは東北に位置する）へ続く街道と、西北へ伸び、ガラハド山脈を抜けて中部へ続き、都市国家スパーダまで至る街道の二つである。

前者は、ダイダロスと海上交易で栄える港町を繋げる交易路として、後者は、大人数の軍隊が通れるように広げられた。

いずれガラハド山脈を越え、都市国家がひしめく大陸中央部にまで遠征するためのルートとして、西北の街道は拡張工事を行ったが、現在はまだ遠征は行われていないので、大型の馬車も楽に通れる街道として村々の行き来がより盛んになっているだけである。

しかし今回俺が通ってきたのは、広い西北の街道では無く、より細い西南の街道だ。

イルズ村のお隣であるクウアル村は、この西北街道と西南街道が合流するダイダロス西部の交通の要衝となっている。

イルズ・クウアル間は西北街道となっているが、リオール村へ直接繋がるのは西南街道だ。

イルズ村から西南街道へ入るには、一端西側に隣り合うクウアル村を経由する必要がある、その分だけ遠回りとなるが、西北と西南の両街道の距離を総合的に見れば、リオールへは西南街道の方が短い。

デカイ馬車や大荷物を運ぶというなら西北街道を行くが、荷物は全て影の中、手荷物は眠ったリリイくらいの身軽な俺は最短経路を選択するのが当然。

そうして、特に道中問題なく街道を進んでいった俺は、もう目の前の峠を越えればリオールへ到着、という一步手前の地点へ位置する村まで来ていた。

村の名前はエンクル、イルズ村と大差ない長閑で平和な小さい村だが、ここで俺は思わぬ事態に直面した。

「通行止め、ってどういうことですか？」

エンクル村へ入ることこそ問題無かったが、リオールへ続く側の門は堅く閉ざされていた。

ハリーからダイダロス周辺の出入りが制限されている、とは聞いていたが、まさか全面的に通行止めをされているとは思わなかった。「ダイダロスへ向かう街道を封鎖しろって命令が先月から出ていないな。」

こっちもいつ解除命令が下るのか全く分からんのだ」と、エンクル村の門番が言う。

黒い鎧冑を纏ったオークの男性、夜道で出合ったら卒倒するほどの凶悪フェイスだが、割と丁寧な事情を教えてくれた。

ちなみに俺が敬語なのはビビっているからでは無く、初対面の太

人には必ずそう対応しているからだ。

言葉の使い分けは円滑なコミュニケーションの基本だろう。

「今ダイダロスではアーク大陸からやってきた人間と交渉中だって言うが、それがどういう内容なのかまでは伝わってこない」

「それじゃあ、ダイダロスで人間と交渉してるってのは事実なんですかね？」

「ああ、それは間違い無い。

封鎖命令のでるちょっと前に、ゴルドランの丘で両軍が戦ったから、その戦後処理について話し合われているんだろう」

「戦後処理を話し合わなきゃいけないほど、大規模な戦いだったんですか？」

「人間がどんなもんかは分からないけど、ダイダロス軍は竜王様を筆頭に二万の精鋭軍団を率いていったからな。

これと勝敗が曖昧な状態って事は、人間は10万の大軍団かもしれないな」

「勝敗が曖昧って……ダイダロス軍が勝ったわけじゃない？」

「ああ、負けたとも聞いて無いが、きっと相打ちに近かったから、こう色々と面倒な事になってるんじゃないのか？」

だとすれば、戦果が華々しくないから、人間との取り決めが確定するまで情報を公開しないことをダイダロスの上層部は選択したってことか。

ありえなくは無い、ダイダロスのいわば一軍のような軍隊が、今まで舐めてかかっていた人間の軍と相打ちに持ち込まれたのだ、積極的に吹聴したい内容では無い。

少なくとも、オークの門番を始め、村人達はそうのように思っている。

だが、俺にはもっと最悪の予想が瞬時に頭をよぎった。

もしかすれば、相打ちどころか、ダイダロス軍は敗北したんじゃないか？ と。

「メディア遺跡へ行くんだろ、まあ残念だったな、こっちも仕事で、

今すぐ通すわけにもいかないからな。

さっさとクエスト放棄して、村へ帰った方がいいんじゃないか？」

「……そうですね、残念ですけど帰ることにします」

俺はエンクル村の冒険者ギルドの場所を尋ねてから、門を離れる。今はクエストどころでは無くなった、とりあえず門番の言うとおりギルドでクエスト放棄の手続きへ向かうことにする。

「クロノ……」

俺の胸中に渦巻く不安を感じ取ったのか、あるいはそうするまでも無く顔に出ていたのか、リリィが心配そうに言う。

「大丈夫、と言いたい所だけど、俺には嫌な予感がしてならない――」

ダイダロス軍が人間の軍と引き分けたという情報を公開していない、とエンクル村をはじめダイダロス周辺の村々は思っていた。

それは現時点で情報公開しない事をダイダロス政府が選択したという点では正しいが、秘匿されたと予想した情報の内容は誤ったものであった。

ダイダロス軍は引き分けどころか大敗、竜王ガーヴィナルも戦死という結果が事実である。

また、人間と交渉中と噂されているが、実際のダイダロスはゴルドランの丘で勝利した十字軍によって、そのまま占領下に置かれている。

それでは何故、人間の軍は竜王を討ち、ダイダロス占領というところまで進んでおきながら、街道を封鎖し情報を秘匿したのか？

その理由は幾つかある。

まずは、勝利者である人間の軍、つまり十字軍、その代表であるリュクロム大司教がそうするようダイダロス側に求めたことによる。ゴルドランの戦い直後の十字軍には、ダイダロスを占領するのが

やっとの数しか残っていなかったため、この戦力低下を外へ知られ
たくなかったからである。

もしもダイダロス占領を大々的に宣言すれば、各地に点在するダ
イダロス軍の部隊が、もしくは他の都市国家が、即座にダイダロス
へ侵攻する可能性があった。

ダイダロス兵なら竜王の敵討ちとばかりに玉砕覚悟で突撃してく
るかもしれないし、他の都市国家であれば竜王が死に混乱の只中に
あるダイダロスを領地拡大のチャンスと見て思い切って攻勢に出る
かもしれない。

この上さらに十字軍の戦力が大幅に低下した状態であると知れ渡
れば、両者が行動に移す可能性はより一層高まる。

リュクロムは、情報を秘匿し『ダイダロスが十字軍と交渉中』と
いう曖昧な状態を作り出すことによって、本国から増援が送られて
くる時間を稼ごうとしたのである。

これがダイダロス封鎖要請の裏であるが、表向きの理由としては、
領民に無用な混乱を避けるため、というのである。

また、ダイダロス側としてもこの表向きの理由には賛同できてい
たし、竜王の戦死を今すぐ領民に告げる事に上層部の者は皆大いに
抵抗を感じていた。

いわば、ダイダロス側もこの処置を望んでいたと言える為、結果
としてすぐさまリュクロムの要請は受け入れられ、即時封鎖が成さ
れたのだった。

現在は、ダイダロスが占領されてよりおよそ一ヶ月が経過してい
た。

街道封鎖による情報の遮断は目論見通りに功を奏し、今のところ
ダイダロスへ攻め入る軍は無く、一方でヴァージニアには続々と本
国からの援軍が到着していた。

それだけで無く、この一月の間、リュクロムは完全に支配権を握
り、情報の操作に加え十字軍も上手く抑えつつ、ほとんど混乱や反
発も無くダイダロスを治めていた。

十字教徒は、魔族は全て排すべき敵であるという見方が強いのだが、アルスに似て冷静で合理的な判断が下せるリュクロムは、人間以外の種族が多く住まうダイダロスにおいて彼らを露骨に弾圧するようなことはしなかったし、配下の兵にもさせなかった。

彼自身、敵とはいえ虐殺を好むところでは無いし、ここで暴虐の限りを尽くしたところで、満たされるのは下衆な欲望だけで、後には領民に無用な反抗を促すだけであり、統治する上でメリットなど何一つない事をよくよく理解していた。

敗戦国を治める者として、リュクロムは実に人道的で慈悲深く、理想的な統治者であった。

しかしながら、教会の、あるいは共和国の人間が、必ずしも彼のような者ばかりではない、いや、寧ろ彼のような人格者は実に稀な存在であることを、ダイダロスに住む者達は、まだ知らない。

ここにいる彼もまた、そうである。

「ああ……我が主、我が王よ……何故……」

彼の声は虚しく玉座の間に木霊した。

一ヶ月前、彼の目の前にある壮麗な装飾の施された玉座には、圧倒的な存在感と絶大な力を秘めた、正に王者と呼べる男が座していた。

王者の名はガーヴィナル、魔力・体力・知力、全てを兼ね備えた若き黒竜。

そして、ここにいる彼はその竜王に、ダイダロスを建国する前より仕えていた人間の男である。

ガーヴィナルの右腕として尽力し、現在はダイダロスの宰相を務めるに至っている。

「何故……何故こんなことに……」

国を治める宰相として、決して人前で感情を露わにしない男であったが、今はその鉄面皮も完全に剥がれ落ち、大粒の涙を零している。

その涙は、彼が手にするガーヴィナルの遺物である一枚の黒い竜

鱗へ点々と落ちていた。

「ううっ……」

今日この日まで、彼は竜王亡き後のダイダロスの代表者として、リュクロムと直接交渉を行ってきた。

交渉、とは名ばかりだと彼自身分かっている、敗者であるダイダロスは、勝者である十字軍にこの国の全てを差し出すより他は無いのだ。

彼に出来るのは、ただ敬愛してやまない偉大な竜王が作り上げたダイダロスとその領民に、寛大な処置を懇願するのみである。

「もう……私に出来る事は何も無い……」

明日にでも、街道の封鎖は解かれ、ついに十字軍による本格的な支配が始まる。

竜王の死が全領民へ告げられ、ダイダロスという国は滅亡し、シンクレア共和国へと併合されるのだ。

彼はこの後、敵国の宰相として何らかの責任を被せられ処刑されるかもしれないし、あるいは生きて、共和国の統治へ協力させられるかもしれない。

どちらにせよ、彼には果たすべき責務が残っている。

だがしかし、ダイダロス最後の日となる今日、ついに彼は限界を迎えた。

「王よ……」

そもそも、彼はガーヴィナルに対して生死を共にする事を誓っていた。

誓約の形式上では無く、本心からそう思っていた。

彼にとってガーヴィナルとはそれほど絶対的存在であり、本来ならば王の死を知ったその時に後を追うべきであったと今でも考えている。

結果として、今日まで宰相としての責務を果たし続けたが、ガーヴィナルの作り上げた国が滅ぶ今この時を持って、彼はもう生きる意味を完全に失っていた。

「今、御許へ……」

人払いは済ませてある、彼以外に存在しない玉座の間に、彼を止める者は一人としていない。

彼は左腕でガーヴィナルの竜鱗を抱きしめ、右手に小さな瓶を持つ。

異常に鮮やかな赤色をした液体が、その瓶には満ちている。

そうして、彼は躊躇することなく、その赤い毒薬を一息に飲み干した。

「がっ——」

即座に膝を屈し、前のめりに倒れこむ。

毒はすぐさま体中に回り、僅か数十秒の間で人間を死に至らしめる。

「竜王様……万ざ……」

毒を呷り自害したこの姿を見れば、彼を知るものは皆哀れに思うだろう。

しかし、これから始まる、十字軍によるダイダロス領の凄惨な蹂躪の様子を見る事無く逝った、彼の方こそ幸せであったかもしれない。

第51話 通行止め（後書き）

もしかしたら、街道の位置関係が分かりづらかったかもしれないので捕捉します。

方位を抜きに説明すると、左にクウル村、右にダイダロスがあり、その両端を上にある太い道と下にある細い道の二つで繋がっています。

今回クロノが通ったのは下の細い道、というワケですね。

第52話 蘇る恐怖

新陽の月12日、すでに空は茜色に染まっており、すぐに夜がやって来て明日へと日を変えるだろう。

そんな沈み行く夕陽を背景に、俺は街道を突き進む。

目的地はイルズ村、では無く、ダイダロスである。

「日が沈む前には着くと思ったんだが、まだ少しあるみたいだな」
フードに入って俺の首元へしがみついているリリイには悪いが、俺はどうしてもダイダロスの様子が気になってしまった。

公に通行止めされているのを無視して行くのだから、もし今の俺がダイダロス兵に見つかれば最悪牢屋送りにされても仕方が無い。

それほどのリスクを犯してまでダイダロスへ行こうという最大の理由は、この胸中に渦巻く不安感である。

確信があるわけでもない、杞憂にすぎない、それでも俺はこの不安感を無視できずにいた。

もし、ダイダロスが本当に人間の軍に敗北したとあれば、パンドラ大陸全土は戦火に包まれる。

きっと、多くの人は俺の考えを妄想に過ぎないと一笑に付すだろう。

だがしかし、俺は元の世界で、侵略者、がどういった行動をとったか知っているし、なによりシンクレア共和国、とりわけ十字のシンボルを掲げた者の残虐さを、この身を持って理解している。

この異世界は魔法こそあるが心優しい御伽噺の世界では無い、俺を一方的に召喚し、拷問のような改造実験を施し、さらに実験体同士で殺し合いさせることを平然と行う、そんな残酷さを人間は持っているのだ。

あんなヤツラが大挙して来れば、このパンドラ大陸も、俺の知る歴史とそう変わらない道を歩むことになるだろう。

つまるところ、俺が異世界で築き上げたイルズ村での平和な生活が脅かされているのだ。

そもそも、十字のヤツラから逃れるのが目的でパンドラ大陸へやって来たのだ、俺を追ってではないにしろ、その活動圏が広がるのは考えうる中で最悪のケースとなる。

故に、俺は自身の生活と身の危険、それにパンドラ大陸の危機、大小様々な不安要素が混ぜ合わさって、こんな行動を起こさせるに至っているのである。

半分以上保身の行動にリリイをつき合わせてしまっているのは、本当に申し訳ないと思っではいる。

もちろん、エンクル村から出るときに、先にイルズ村へ帰そうとしたが、リリイは頑として首を縦に振らなかった。

今のリリイでも、俺が危ない橋を渡ろうとしているのを薄々感づいて心配してくれているのだろう、だからこそ俺を見捨てずに付いてきてくれることを選んだ。

もし誰かに見つかってヤバくなれば、リリイだけは逃がそうと決めている、それくらいのケジメはつけるさ。

「――あれがダイダロスか」

辺りはすでに薄暗くなっているが、俺の視力が強化された瞳には、噂に聞くダイダロスの大城壁が黒々と、遙か遠くへ聳え立つのを捉える。

そこで俺は街道を外れて森へと入った。

このまま街道をバカ正直に歩いて行けば発見されるのは確実、ここから先は身を隠しながらダイダロスまで接近する。

何時間か前に通過したりオール村は、完全に門を閉ざして静かなものだった。

だが、ダイダロスはどうかだろうか。

遠目に見る限り、城壁が崩れている様子も無い。

大規模な攻城戦は無かったのだろうか、それとも見えない反対側は崩れているのか。

俺は雑然と考えながら、息を潜めて森の中を進む。

「凄い、デカいな――」

ついにダイダロスの城壁近くまでやってきた。

目の前には断崖絶壁を思わせる、精密に組まれた石の壁が厳然と聳え立っている。

俺が今立っているところで森の木々は途切れており、城壁までの約500メートルの間には身を隠せるような遮蔽物は一切無い。

近くに高い木があればそれを伝って侵入できるし、森や高い草むらがあれば気がつかれずに接近できる、故に城壁の近くには何も無い状態にしておくのは基本である。

問題は、どうやって監視の目を掻い潜って城壁まで辿り着くかだ。そういえば、俺の始めての潜入であったあの港町は警備が緩かったお陰で楽に事が運んだ。

今回はそうもいかないだろうと予想していたのだが、

「人の気配がしないな」

ここから様子を見る限り、監視する兵はいないように見える。

30メートルはある城壁の上は通路になっているようだが、そこを巡回する兵の姿は無く、また城壁の外周も同様である。

もしかすれば巡回しているかもしれないが、全ての外周を常時監視しているわけでは無さそうである。

これなら城壁までは難なく到達できそうであるし、30メートルウォールクライミングするのもこの体と黒魔法があればクリアできる。

後は問題なのは、

「結果ってヤツか、ここまで本格的なのは始めて見るな」

結果とはシールドと異なり、対象を完全に覆い、かつ常時効果を発揮する防御魔法の一種である。

ある一定の範囲を、外部からの攻撃を無効化したり、侵入者を感じしたり、とその効果は様々。

俺が持つ唯一の結界はイフリートの親指によって展開する炎の結界、通称『虫除け』だ。

そして現在、俺の前にはこの城壁を基点にダイダロス全てを覆っていると思われる大規模な結界が、ここには存在している。

煌々と光り輝いていたりするでも無く、見た目的には無色透明、しかし行く手を阻む強固な魔力の流れは、500メートル離れたここからでも分かる。

俺の『虫除け』とは天と地の差ほどもある防御性能である。

恐らく、この強力な結界があるからこそ、門以外に兵を配置していないのだろう。

この結界に利用されている魔力は白色、俺の黒色魔力とはすこぶる相性が悪い、力技で突破は無理そうである。

だがしかし、今の俺は一人では無く、頼れる相棒がいるのだ。

「リリイ、あの結界に穴は開けられそうか？」

「うーん——だいじょうぶっ！」

サリエルが使用していた白魔法と、リリイが使う光の固有魔法エクストラは正確には別物の魔力が源である。

白魔法は俺の黒色魔力と対極にあたる白色魔力であり、光の魔法は原色魔力に分類される。

だがしかし、両者の性質が近いことは確か、俺よりも魔力の扱いに長け、尚且つ相性も良いリリイなら、この強力な結界にも干渉して穴を開けることが可能なのだ。

「よし、それじゃ行くぞ——」

俺はリリイを小脇に抱えて森から飛び出し、500メートルの距離を全速力で走り抜ける。

この黒い格好も相俟って、恐らく遠目に俺の姿を見つけることは出来ないだろう、多分、きっと、見つかりませんように！

俺の願いが届いたのか、それとも必然なのかは分からないが、誰

の目にも止まる事無く城壁のすぐ前まで辿り着いた。

そして、目には見えないが、ここに結界が立ちはだかっている。恐らく物理的に侵入を拒む効果なんだろうが、宝箱を開けた時の電気ショックのような攻性防壁タイプかもしれない。

正体がしれない以上、不用意に手を触れるのは拙い。

まあ、そんな危ないモノをリリィに接触させようというのだから、何とも罪深い、しかしここはどうしてもリリィの力が必要だ。

「頼むぞ」

「うんっ！」

リリィが両手を突き出して、見えない結界へと触れる。

触れた先から、水面に石を投げ込んだように、白い光の波紋が広がってゆく。

「んっ——」

リリィの七色の光を宿す二対の羽が時折パタパタと揺れ、白く発光する素肌が何度も瞬く。

真剣に結界へ干渉しているリリィには悪いのだが、今現在の状況はピカピカ光りまくりで無茶苦茶目立つ。

いくら監視がザルだからと言って、この闇夜の中で蛍光灯のように眩しく輝くリリィなら100メートル先からでも発見できる。

危機感を覚えるも、今の俺に出来る事はローブを広げて光をなるべく漏らさないようにすることしか出来ない。

かなりドキドキだが、俺はリリィを信じて無言でその時を待つ。

どれだけの時間が経過したのだろうか、多分3分も経っていないのだろうが、体感時間が倍以上に感じられる中、リリィが言葉を発した。

「あいたっ！」

「あっ痛い」では無く「開いた」の意味合い。

見れば、遣り切った顔のリリィの前には、薄ボンヤリと輝く光の輪が中空に描かれている。

俺でも余裕で通れる大きさの輪、その中に手を入れてみるが、掌

は虚空を掴むばかりで何の感触も感じられない。

どうやら結界の干渉は成功したようだ。

「よくやった、後は俺に任せてくれ」

よしよしと頭を撫でると、子犬のように喜ぶリリイ。

もう何もかも忘れてこのままじゃれ付いていたい気になる反応だが、今はそんな快楽に身を委ねている時間は無い。

俺はリリイをすでに移動時の定位置と化したフードへとスタンバイさせ、結界を通りぬけ城壁へと挑む。

「一気に行くか」

港町の壁をえっちらおっちら登っていたあの頃と比べ、魔法のスキルも進化しているのだ。

何と言っても俺は、ガルーダの巢へ潜入するため100メートル級の断崖絶壁を制覇したのだ、その時に身につけた魔法をフル活用した壁登りスキルを使えば、こんな30メートルそこそこの石壁など数秒で上りきってみせる。

俺は結界に穴を開けるため頑張ってくれたリリイを前に、格好つけたいが為になぞなぞポーズをとって魔法を発動させる。

「アンカー射出！」

掲げた両の掌から、黒色魔力で編み上げた黒いワイヤーが壁沿いに飛んでゆく。

ワイヤーの先端には返しの付いた鉤のような刃となっており、城壁の天辺に深く突き刺さった手ごたえを感じた。

その時には、ワイヤーは手から始まり、腰、腿、足の裏にかけて巻きつくように固定されている。

両手だけでも大丈夫なのだが、下半身まで固定した方が昇る時に体勢が安定するのだ。

「行くぞ」

リリイが小さく返事したのを聞き、俺はワイヤーを一気に収縮させる。

ワイヤーに引っ張られ、俺は垂直な壁の上をそのまま走る形で、

一気に駆け上がってゆく。

この『アンカー』は、アクションゲームに度々登場するワイヤーアクション、有名などころではフックショットとかグラップリングビームとか、要はロープ状のモノを引っ掛けてターザンのように移動したり、こうして垂直に昇ったりするアクションを、魔法で実現させたモノだ。

俺の黒色魔力は、弾丸を作ったりするなど物質化^{マテリアライズ}して、尚且つそれを操るのに優れているようで、イメージさえ上手いけば、こうして伸縮自在のワイヤーを作り出すことも可能だ。

この『アンカー』を使えば、30メートルの壁を登るなど、平坦な地面を走るのに等しい。

ものの数秒で走破し、アンカーを消失させると同時、俺は城壁の通路へと降り立った。

「誰もいない……か」

やはり通路上に人影は見当たらない。

細心の注意を払いつつ、この高い城壁から眼下に広がるダイダロスの街を展望した。

圧倒されるほど広大な街並み、俺が異世界で目にした中では最大の広さを誇っている、イルズ村が何個入るか分からないほど。

そんな広さを城壁がぐるりと一周囲んでいる、とんでもない大きさの城塞都市だ。

一般人ならすでに床についていてもおかしく無い時間帯、住宅地と思われる一角は点々としか灯りが見えないが、大きな通りの歓楽街には煌々と光が灯っている。

そんな中でも、一際光り輝いているのが、都市の最奥に建つダイダロス王城。

王城周辺はさらに城壁で囲われ、ここからでは地面と一階部分は見えない。

それでも、城壁の下からは光が漏れており、天高く伸びる尖塔を持つ王城の姿を闇夜に照らし出している。

それだけなら、巨大な首都ダイダロスの威容に感嘆の息が漏れるのみだったろう。

しかし、輝く王城に掲げられたとある‘旗’を見た瞬間、漏れるはずだった息を飲み込んだ。

「あれは……十字のシンボル……」

王城の正門、国家の顔と言えるその場に翻るのは、竜王ガーヴィナルを模した黒い竜のエンブレムを象ったダイダロス国旗では無く、俺にとって見るも忌々しい狂気の象徴、十字のシンボルが大きく描かれた旗であった。

「嘘だろ……それじゃあ人間の軍つてのは、アイツらの事だったつてのかよ」

よく見れば、街中のそこかしこに、大きさは様々だが、同じデザインの旗が掲げられている。

この光景は、ダイダロスが十字の軍団によって占領されたという事実を端的に現していた。

「ち、ちくしょう——」

最悪だ、正に悪夢、俺が最も恐れていた事態が現実になってしまった。

十字のシンボルを掲げるのは、ごく一部の人間で構成されるカルトな集団では無く、シンクレア共和国という一国家だという事が確定した。

じわりと、心の中に絶望が広がってゆく。

アイツらが、あんな非道なヤツらが、本当に大挙してパンドラ大陸に来てしまった。

ダイダロスを占領したという事は、もう領内にはヤツラに対抗できる勢力が存在しないことに他ならない。

大きな国家であるダイダロス、それがこうしてあっさりと占領されてしまった。

ヤツらはきつと、パンドラ大陸全土を征服するまで止まる事は無いし、その実行も、そう遠い未来では無いだろう。

ならどうする？ 戦うのか？ 逃げるのか？

「くそお……」

俺なんかよりもずっと強い竜王が軍隊まで率いて破れたんだ、俺なんかがどうこう出来る相手じゃない、個人が国家に勝つなんてのは、魔法の世界でも無理だ。

なら逃げるか、だが、何処に逃げればいい、ヤツラが来ない場所なんて、この世界に存在するのか？

ダメだ、ダメだ、考えているつもりだが、ロクに頭が回らない。何をどうしても、十字を背負ったヤツラが押し寄せてくる想像し出来ない。

俺は、どうすれば――

「クロノっ！！」

「――！？」

リリイが、俺の胸に飛び込み、思い切り抱きついてくる。

「だいじょうぶ、リリイ、クロノのこと助ける。

悪いヤツがきても、リリイが守るから！」

突拍子も無い台詞に思えるが、人の心が分かる妖精であるリリイは、言葉にせずとも俺の不安を感じ取ってくれた。

「……」

俺は、胸にしがみ付くリリイを、両腕で抱きしめる。

この胸と腕に、感じる小さな温もりが、俺を正気に戻してくれる、不安を癒してくれる。

ああ、ちくしょう、リリイにカッコ悪いトコ見せちまったな。

「ありがとうリリイ、俺は大丈夫だ」

そうだ、俺はもう一人では無いし、自分だけの事を考えるわけにもいかないのだ。

リリイが俺を守ると言った様に、俺もまたリリイを守らなければならぬ。

俺はヤツラによって元の生活を全て奪われた、ここでまた再び、俺が異世界で築き上げた、リリイにイルズ村のみんなとの生活を奪

われるのは絶対に御免だ。

「とりあえずここは危険だ、早く離れよう」

「うん」

ダイダロス占領は情報封鎖によって何処の村にも届いていない。

このままでは、何の備えも出来ずにヤツラがダイダロス領内の各村にやって来る。

徹底抗戦、つてのは多分無理だろうが、逃げるくらいは出来るだろう。

ダイダロス国内がダメなら、逃げ場は外国しかない。

果たして仮想敵国であるスパードを始めとした中央の都市国家群がすんなり受け入れてくれるかどうかは分からない、それでも不法入国でも何でもするしかない。

まずはこの情報を最寄の村に、いや、ランク1の冒険者でしかない俺の話を素直に聞いてくれるかどうか分からない、ここは唯一顔見知りであるイルズ村の村長に話すのが、各村に働きかける最短のルートだろう。

俺は再び回り始めた頭の中でこれからの行動について思案しつつ、城壁を降りる為に再びアンカーを発動しようとした、その時、

「――ここで、何をしていますのですか？」

声が聞こえた。

小さいながらも涼やかで美しい、少女の声。

その声に、聞き覚えがある、と思う前に、俺の脳内には一人の人物像が瞬時に浮かび上がっていた。

振り返り見れば、そこには想像した姿と寸分違わぬ小さな少女が立っている。

白銀の長髪に、紅く輝く双眸、十字のエンブレムのついた法衣と、そこから覗く素肌は純白、儂げで美しい少女。

彼女こそ、俺に絶対的な力を見せ付け圧倒した恐怖の象徴、決して忘れることなど出来ない、その名は、

「……サリエル」

第七使徒サリエル、知る限り最強の存在が、ここに立ちほだかつた。

第53話 十字軍総司令官

満天の星空の下、ダイダロス城壁の上でクロノとサリエルは対峙している。

クロノは流れ出る冷や汗の感触すら忘れ、フードに納まっているリリィを庇うように、サリエルと正面から向き合う。

「クロノ・マオ」

久しく呼ばれることの無い、いや、この異世界において初めてフルネームをクロノは呼ばれた。

十字教信者なら皆ウツトリ聞き入ること確実なサリエルの美声でその名を紡がれても、クロノにとっては死神の囁きにしか聞こえない。

十字軍によってダイダロスが占領された事に対する漠然とした不安感のリリィによって治まったが、すぐ目の前に迫る具体的危機によって再びクロノの心を恐怖が苛む。

それでも、首下にいるリリィの存在によって、現状の把握と打開に努める思考回路が働いた。

クロノは考える、態々名前を呼んだということは、問答無用で殺されるシチュエーションでは無さそうだと。

「貴方は、ここで何をしていたのですか？」

再び問われる。

ここで答えなければ即死なのか、答えても即死なのか、兎に角最悪な結末しか考えられないクロノは、すでに半ば自棄となっていた。

「観光だ、ダイダロスの大城壁は有名なんだろう」

「そうですか、しかし今はやめておいた方が良いでしょう」

クロノの冗談を信じたとは思えない答えが返ってきたことで驚くが、シールドを易々と貫通する白杭で返されなかっただけ僥倖だったと思い、深く考えることはしなかった。

「そりゃ悪かった、このまま大人しく帰してくれると嬉しいんだけど？」

「どうぞ」

さらに信じられない答えが返ってきたことで、これまで表情を何とか崩さずにいたクロノも流石に目を見開いた。

「本当にいいのか？」

「どうぞ」

クロノはサリエルの表情を窺うが、初対面の時と同じく全くの無表情である。

恐らく、このまま逃げ去って後ろからズドン！　　とされることは無さそうだとクロノは思う。

という事は、サリエルはこの場で俺達を殺すつもりは無いのだとも思い至る。

「……聞いてもいいか？」

今すぐこの場を逃げ出したかったが、サリエルに殺意が無いならば、これは何か情報を聞きだすチャンスだとクロノは考えた。

クロノは、十字軍について何も知らない、そもそも、サリエル率いる軍勢が『十字軍』と名乗っていることすらも知らない。

「何ですか？」

果たして、サリエルは答えた。

「何故、パンドラ大陸へ来た？」

「主である『白き神』はこの地を欲しました、故に、私たち『十字軍』がこれを捧げるためにやって来たのです」

「その十字を掲げた宗教の布教活動ってことか」

「はい、結果的にパンドラ大陸に住まう全ての人を十字教へ改宗させることになるでしょう」

十字軍に十字教、いよいよもってキリスト教らしい集団、恐らくシンクレア共和国という国家と十字教はほぼイコールで結ばれた関係、要するに宗教国家なのだとクロノは察した。

そして、キリスト教の布教活動から始める植民地化のパターンと

同じだとも思った。

「あんたらの行動が、どういう結果を起こすか分かっているのか？」

「はい、すでに多くの血が流れました、それはこれからも続くでしょう」

「退く気はないのか？」

「主がそれを望むまでは」

クロノは一つ息を吐いた。

サリエルの解答は、聞かずとも予想はついていた。

要するに退く気は無く、抵抗する者は容赦なく殺すということだ。

「ダイダロスの王は、死んだのか？」

「はい、私が討ちました」

クロノにとってショックだったのは、顔の知らない竜王の死では無く、「負けるはずが無い」と誰もが口を揃えて言うほどのドラゴンを殺すだけの力をサリエルが持っているということである。

「なら、ダイダロスはこれからどうなる」

「ダイダロスの領土は全て私が与ることになります」

「お前が？」

サリエルは「私たち」では無く確かに「私」と言った。

クロノは、サリエルは偉くはあるだろうが一兵士だろうと思いつ込んでいた。

しかし、この口ぶりから察すると、それは誤りだと答えは出る。

そして、サリエルがそれを肯定する言葉を放つ。

「私は十字軍の総司令官ですから」

クロノは理解した、彼女こそ十字軍を率いる総大将、トップなのだ。

「そうか……」

クロノは踵を返してサリエルに背を向けると同時に、フードで微動だにしなかったリリィを両手で抱えて降ろした。

背中にサリエルの視線を感じつつ、クロノはしゃがみこんでリリィを抱きしめる。

「ふぁ!？」

突然の抱擁に、リリイが思わず驚きの声をあげるが、クロノは構わずにその小さな耳元で囁いた。

「リリイ、今聞いたことを全てシオネ村長に伝えてくれ」

「え？」

リリイは、クロノの言葉を聞くと同時に、その胸中に渦巻く大きな恐怖と悲しみ、そして、それを強引に覆いつくす‘覚悟’を感じた。

「クロノ――」

リリイに心中を見抜かれたことを察したクロノは、再びリリイを抱えあげる。

「――ダメえ!!」

「今まででありがとなりリリイ、さよならだ」

クロノは、左手でリリイの背中を抱え、そのまま城壁の上から森へむかって全力で投げた。

「クロノお――」

凄まじい速度で投げられたリリイは、身の危険を自動で察知し妖精特有の光の球体シールドで全身を覆われ、白く輝く尾を引きながら夜空を飛んでゆく。

「ごめんなリリイ」

そう呟いたクロノの右手には『ブラックバリスト・レプリカ』がすでに握られている。

未だ視線を感じるサリエルへ向かって、クロノは漆黒のタクトを振るった。

第53話 十字軍総司令官（後書き）

力の差を分かっているながら戦いを挑むクロノ、果たして勝算はあるのか？

リリィをぶん投げたけど虐待じゃないです、仕方なかったんです。

第54話 暗殺作戦

「……なんのつもりですか？」

俺の放った擬似完全被鋼弾は、前にも見た逆三角形の白いシールドによって止められていた。

前と違うのは、シールドに僅かながらヒビが入っていること。

いける、と俺は確信する。

バレットアーツ
「魔弾」

指揮者のようにタクトを軽く一振りすると、体を取り囲む螺旋状に漆黒の弾丸が現出する。

ここにある数千発の弾丸は、どれも黒色魔力を現在の最高硬度で構成されており、さらにタクトの力を使って撃ち出せば、通常の『アンチマテリアル』を遥かに超える威力を誇る。

フルバースト
「全弾発射」

それを、サリエルへ向けて一息に撃ち出す。

黒いマズルフラッシュと同時に発射音、そしてサリエルが立つ城壁の床を穿つ破碎音が、静かな夜に響き渡る。

一挙に粉塵が立ち上り視界は塞がる、だが見なくともすでにサリエルがその場にいない事は分かっている。

発射の直前、その身を城壁の外へ投げ出すのを確かに見た。

「絶対に逃がさない——」

アンカーを足元に射出し、俺もサリエルを追ってすぐに城壁から飛び降りる。

「——逃がすわけにはいかない！」

宙に身を投げ出すと、眼下に広がるのはついさっき走った500メートル四方何も無い草地。

身を隠す物は無く、また身を隠す必要すら無いのか、サリエルはその白い格好も相俟って幽霊のようにその場に立ち尽くしている。

ソードアーツ
「魔剣」

左手でワイヤーを掴み、右手はタクトを握ったまま振り上げる。

空中で靡くローブの中を影空間の開け口として、その中から黒化した長剣ロングソードを3本呼び出す。

イルズ村の鍛冶工房で購入した、全て同一規格の剣を黒化したものだ。

「貫けっ！」

俺の体が地面へ辿り着く前に、三本の黒い剣をサリエルへ向けて投擲。

一本は左に弧を描き、一本は右へ、最後の一本は真っ直ぐ最短距離、三本はそれぞれ別々の軌道を描きつつも、左右と正面からサリエルへと襲い掛かる。

「――」

声は聞こえなかったが、サリエルの口が何か呟いたのを目にすると同時、ついに両足が地面へと辿り着き、軽い衝撃が全身を駆け抜ける。

ワイヤーである程度減速したため、隙無く着地に成功――

バギンッ！！

「っ!？」

すぐ足元で響いた音、それは、あの時にも見たサリエルの白杭が、俺のローブの裾を貫き城壁へと縫い付けたものだった。

合計4本の白杭が刺さっている、どれも体に当たっていないことを思えば俺の動きを止める為に放ったのだろう。

しかし一体何時この白杭は飛んできたんだ、全然見えなかったぞ。目だけ動かしてそれを確認し、再びサリエルに視線を戻すと、彼女の左手には白杭と同じ色と質感の細槍が握られていた。

その穂先には、まるで川魚を銚で捕ったかのように俺の黒化剣が三本とも刀身の真ん中を貫かれて並んでいる。

そして、これも前に見たのと同じように、黒化剣は瞬く間にサリ

エルの白色魔力に侵されてゆき、粉々に碎けて灰のように消えていった。

「化物め……」

いつ刺さったか分からん白杭といい、あっさり破壊された黒化剣といい、つくづく力の差を実感させられる。

少しずつ、後悔と恐怖が心の中に広がり、今にも泣き叫んで命乞いを始めたい衝動に駆られる。

サリエルは磔にされた俺へ向かって、ゆっくりと近づきながら口を開いた。

「抵抗するのをやめてくれませんか？」

思わず肯定の言葉を吐きそうになるのを、奥歯をかみ締めて押し止める。

「私は貴方に危害を加えるつもりはありません」

そんな言葉で、反射的に安堵感を憶える自分に酷く嫌悪する。

「大人しく、退いてもらえませんか？」

リリイと一緒に遠くまで逃げる、あまりに魅力的な提案だが、それを受け入れるのを全力で拒否する。

「はは……」

情けなくも、少し震えるような声で笑う。

「誰が、こんなチャンス逃すかよ——」

声を荒げ、自分を奮い立たせる。

白杭に穿たれた箇所をローブごと強引に裂きながら磔を脱する。

タクトを振るい、再び弾丸を形成すると同時、足元から伸びる影空間から、先と同じロングソードを十本呼び出す。

さらに、呪いの大鉈『呪鉈「辻斬」』を左手で握る。

「サリエル、お前をここで殺して、十字軍を止めるっ！」

「そうですか……」

俺の全力全開の魔力と殺気を真正面から受けて尚、その綺麗な顔は彫像のように変化することは無く、さらに左手に持つ細槍を構えようもしない。

いいさ、その余裕こそが俺にとっての勝機だ――
「行くぞっ！」

「私は十字軍の総司令ですから」
サリエルは確かにそう言った。

その一言さえ無ければ、今頃俺はリリィを抱えて街道をひた走っていたことだろう。

だが、俺は無謀にもサリエルへ喧嘩を売った、いや違うな、命がかかっているし、こっちも命を狙っている以上、これは暗殺だ。

『暗殺』とは隙を狙って殺すこと、その辞書に書かれている通りの意味でいうなら、今この時がサリエルの‘隙’。

十字軍のトップでありながら、護衛もつれず単身現れたのだ、もし彼女を狙う暗殺者がいるならば、これ以上無いほど絶好のシチュエーションだ。

事実、今でも兵達がサリエルの応援に駆けつけることは無く、一対一のまま。

さらに都合が良いことに、サリエルはどういうワケか俺を殺そうとはしない。

彼女がその気になれば、すぐにでも心臓を貫いて即死させることができるのは間違いない、何の抵抗もできずに磔にされたのが証拠である。

このローブだって鋼鉄のプレートメイルよりも防御力に優れる高級品なのだが、あの白杭はあっさりと貫いた、ローブが魔力を失いただの布になったんじゃないかと一瞬疑ってしまったほど。

要するに、命の危険はあるが、この先二度と訪れるかどうかというサリエルを倒すチャンスが、今なのだ。

しかしどうして命をかけてそのチャンスに挑むのが俺なのだろうか？

二ヶ月も前の俺ならば、自分の命より大切なモノなど無かった、それを危険に晒すなどもっての他。

けれど、今の俺には命をかけて守りたいと思えるものが出来てしまった。

リリイとイルズ村、短い付き合いといえば全くその通りだが、それでも十字軍と名乗る人間共の好きにさせるというのは、どうにも許せそうに無い。

俺はこの十字を背負うヤツラを異世界で一番信用していない、神が望んだかなんだか知らないが、それはもう神の名の下に殺し、奪い、滅ぼしますよと言っているようなものだ。

結局、十字軍はダイダロスを占領するまで大規模なものになってしまっている。

ダイダロス軍が戦って敗れた以上、十字軍の強さは相当なもの、他国の軍でも勝てるかどうかは分からない。

だが、ここで十字軍のトップを殺せばどうなる？

十字軍の指揮系統がどうなっているのか詳しくは知らないが、大将が死ねばどんな組織も混乱するだろう。

サリエル個人がどれほどの権限を持つかは分からないが、戦闘において彼女が大きな戦力の一端を担っているのは間違いない。

トップが倒れれば、恐らく十字軍の侵略計画には大きな狂いが生じるはず、あるいは、侵略そのものが中止になるかもしれない。

少なくとも、俺が十字軍と正面から戦って得られる戦果とは比べ物にならないほど大きな効果を発揮するだろう。

だが、それもこの暗殺が成功すればの話。

サリエルが恐ろしく強いのは百も承知、レベルでいうなら10と100くらいの開きが最低でもあるはずだ。

だが、いくら魔法のある世界といってもここはゲームの世界じゃない、力も魔力も及ばずとも、殺すだけ、なら方法はある。

ここで俺はどんな無理を押し通してでも、サリエルを殺す、相打ちになっても構わない。

それでリリィと村を守れるなら、いくらでも命をかけてやるぜ！

第54話 暗殺作戦（後書き）

久しぶりにクロノの戦闘シーンですね。黒魔法の名前が変わってますが、ちよつとずつ改良されたようです。

第55話 黒魔法使いVS使徒

「行くぞっ！」

タクトを振るい、サリエルへ再び黒い弾丸の嵐を見舞う。

「盾」
シールド

サリエルが呟くと、白い逆三角形のシールドが前面に展開される。

『盾』は最も基礎的な防御魔法の名だ、並みの魔術士であるならば、盾だけでは俺の弾雨を防ぐことは出来ない。

が、サリエルのシールドは無数の弾痕が残るだけで、全ての弾丸を受け止めきる。

同じ魔法でも、使用者が違えば効果は雲泥の差だ、なんて関心している場合では無い。

「まだだっ！」

弾幕の背後に隠れるように飛ばした黒剣が一本、弾痕でひび割れだらけとなったシールドのど真ん中に突き刺さる。

ついにシールドは貫通し、ガラスの割れるような音と共に砕け散る。

「これで――」

さらに黒剣の追撃、シールドを砕いたのと同じ軌道を描いて一本、サリエルの頭上に三本。

砕けたシールドが霧散し消え去る一瞬の内に、黒剣はそれぞれサリエルへ向けて飛来する。

だが、すでに彼女はその場を飛び退き回避行動へ移っていた。

飛び去る瞬間こそ見えなかったが、回避をすることは予測できていた。

残り5本の黒剣は、サリエルの元の立ち位置を大きく後ろに回りこむような軌跡で、すでに飛ばしてある。

真後ろに飛んだサリエルの、さらに後ろから5本の黒化剣が瞬時

に襲い掛かる。

「――どうだ！」

「杭」
サギタ

今度は、最も基礎的な攻撃魔法の名をサリエルは唱える。

その声が俺の耳に届くと同時に、操作していた黒剣が10本全ての感覚が消えた。

なぜか？ 考えるまでも無く、その答えは俺の視界に映る。

地面に刺さった、あるいは飛んでいる途中の黒化剣は全て、サリエルが撃ったと思われる白杭、否、白い弾丸によって破碎されたのだ。

「攻撃を止めてくれませんか？」

「はっ、人の魔法パクって言う事はそれだけかよ」

「……」

サリエルはこちらへ指をさすように右手の人差し指を立てると、その先に俺のアンチマテリアルと同じ形状の白い弾丸を形成する。もっとも、その大きさは白杭と同じく30センチほどで、弾丸というより砲弾と呼ぶべき巨大さである。

「貴方の原初魔法^{オリジナル}はとてもユニークで強力ですが――」

指先の白い砲弾が回転を始める。

先端に向かって白色魔力が螺旋を描いて収束して様が見える、コレは拙い。

「――私を殺す事は出来ません」

「黒盾^{シールド}っ!？」

俺が目の前にシールドを構築するのと、サリエルが砲弾を撃つのはほぼ同時だった。

俺の弾丸よりも速く飛ぶその砲弾は、以前よりも強度を増したはずのシールドを、やはり前と同じく、ほとんど抵抗無くあっさりと貫通する。

「くっ――」

咄嗟に左手が反応、呪鉈の刃が砲弾と交差する。

ガギイン！

甲高い金属音と共に、どうにか砲弾の軌道は逸れた。

防いだ衝撃によって体勢が大きく崩れ、後ろへ二三步たたらを踏むが、どうにか転倒せずに踏ん張る。

視線を再び前へ戻すと、サリエルの姿が消えていた。

「どこに――」

目で探すよりも前に、直感的にサリエルの位置を感知――上だ。

見上げれば、夜空に浮かぶ大きな三日月を背景に、左手一本で細槍を振り上げこちらへ飛んで来るサリエルの姿。

シールドを再構築する時間は無いし、あったとしてもあっさり貫かれるに違い無い。

「おおお!!」

空中から突き出される槍の一撃を呪鉈で迎え撃つ。

交差する白刃と黒刃が火花を散らす。

「……硬い」

一撃で呪鉈を破壊するつもりだったのか、そんな台詞を吐きながらサリエルは着地する。

お互い手にする武器で斬り合う距離だというのに、相変わらずの棒立ち。

「こっちの台詞だ」

これまでどんなものでもあっさりと切り裂いて見せた呪鉈だが、初めてその刃は止められた。

「呪いの武器だぞ、そんな魔力の塊だけで破壊されちゃかなわない」
サリエルの細槍は、言うなれば白杭サギタと同じモノ、ただ自分の魔力を押し固めて物質化しただけのものだ。

サリエルが手刀なのに対して俺はナイフを使っているくらいの違いがある。

「ソレが壊れたら、この場を退いてくれますか？」

少しだけ、サリエルの視線が鋭くなった気がした。

この期に及んでまだ、俺を逃がすつもりでいるようだ。

「俺を止めたければ――」

左手で呪鉈を構え、右手のタクトに弾丸を数発装填。

さらに影から新たな黒化剣を10本呼び出し、刃を外向きに円を描くよう体の周囲に固定する。

「殺すつもりでかかってこい！」

「残念です」

言うと同時に、サリエルの体から白銀のオーラが迸った。

前にも見たそのオーラは、ある程度魔法の知識を治めた今でも、それが強化の魔法では無く単に魔力が溢れているだけだと確信できる。

要は、気分的に少しだけ本気を出す、程度のものではしかない。

強さの底は依然として知れないが、少なくとも俺を殺すには十分過ぎる力が出ているのだと直感的にも理性的にも分かる。

オーラを纏うサリエル相手に長くは持たない、いや、恐らく一度切り結ぶだけで限界だろう。

この5メートルほどの間合いから、サリエルが踏み込み、その槍がこの身を貫くまでの時間が俺に与えられた最後のチャンスだ。

「行きますよ――」

サリエルが言うと同時に、タクトから弾丸を放つ。

真っ直ぐ踏み込んでくるサリエルの眉間へ、弾丸は吸い込まれるように飛んでゆく。

命中、しかし白銀のオーラを貫くことは出来ず、額へかすり傷一つ負わせる事無く弾丸は雲散霧消する。

もしかしたら黒化剣でも貫けないかもしれない、思いながらも、俺には10本全てをサリエルの迎撃に使うことに変わりはない。

正面から額、喉、胸、腹、股間を狙う縦一列に並んだ5本と、脳天と四肢を狙う5本がそれぞれの軌跡で飛ぶ。

「杭^{サギタ}」

先と同じく、白い弾丸が頭上と左右から襲い掛かる5本の黒剣を正確にぶち抜く。

正面から迫る5本は、左手一本で軽く槍を一振りするだけで綺麗に消滅した。

だが、この時すでに俺とサリエルの距離約3メートル。

俺が一步踏み込めば斬りこめる、これを受けるにはたった今黒化剣の迎撃に振るった槍を引き戻す必要がある。

だが、この近距離でそれは致命的な隙となる。

「はあっ!!」

タクトはすでに手放し、俺は両手で呪鉈を握り、力強く一步踏み込み斬りこむ。

俺に剣道は勿論こちらの世界でも剣術を学んだことは無い、だが、強化された体に呪鉈の威力が加われば、このオーラごとサリエルを叩き斬れるだけの威力は出せる。

横薙ぎに振るった呪鉈、その刃は確かにオーラを切り裂き、そのままサリエルのか細い胴体へ到達しようとした瞬間、

ガキーン!

いつの間にか引き戻した槍によって防がれる。

「――っ」

サリエルと視線が交差する。

無表情ながら、その瞳が戦いの終わりを訴えかける。

明らかに武器を振り切った後の隙を突いた一撃が止められたってことは、俺が鉈を一振りする間に、サリエルは槍を二振りできる攻撃速度をもっているってことだ。

それだけ速けりゃ、次の攻撃に移る前に、サリエルは俺の体をどこでも好きなところを貫くことが出来る。

呪鉈でもう一度攻撃は出来ない、弾丸はそもそも効かない、黒化剣はさっきの10本で打ち止め、槍が飛んで来るまでの一瞬の時間

と密着状態の立ち位置で可能な反撃手段は無い。

きつと、サリエルもそう思うはずだ。

そして、それが俺の唯一の勝機となる。

「――今だ」

あらかじめ開いておいた足元の影空間、その暗闇から一本の黒い針を撃つ。

針の正体は『バジリスクの骨針』という、イルズ村で購入して以来、実戦では一度も使ったことの無かった、呪いの武器だ。

刺すものを瞬時に腐食させる、単純だが恐ろしい効果を持つ毒針。使い手自身にも直接触れれば毒が及ぶが故に、呪い、扱いされている。

だが、この毒針ならばサリエルのオーラを貫通し、さらに一刺しすれば致命的なダメージを与えることが出来る。

そして実際に毒針は、注射針のように先端から強力な酸性の腐食液を噴出し、白銀のオーラを侵蝕しながら、そのまま心臓目掛けて一直線に飛ぶ。

「これが貴方の奥の手、ですか」

果たして、毒針がサリエルの心臓に届くことは無かった。

「くっ……」

弾丸と同じ速度で撃たれた毒針だったが、それ以上にサリエルは速く動いた、言ってしまうえばそれだけのこと。

これまでピクリとも動かさなかった右腕は、気がつけば左胸を庇うように掌で毒針を受け止めていた。

掌を貫いて突き刺さった毒針の先端は、僅かに胸元の法衣に届いているのみ。

素手で受け止めたサリエルは、突き刺さった針から猛毒の侵蝕が始まる。

それでもサリエルは何ら動じることなく、一步下がると同時に、左手の細槍で毒針ごと自らの掌を穿った。

毒針を碎き、腐食した肉を丸ごと削り取り毒の浸食を止める。

血を噴出しながらサリエルの紅葉のような白い掌にぽっかりと痛々しい風穴が空く。

その一秒にも満たない一連の動作を、俺は半ば呆然としつつ見ていることしか出来なかった。

ドッ

不意に、左手に衝撃が走る。

サリエルの槍で腕を強打されたのだと、呪鉈が地面に転がり落ちた時に気がついた。

「ぐっ……」

恐らく左手首が折れている。

勝手に治るが、今すぐ元通りとはいかないし、落とした呪鉈を拾う隙もあるはずが無い。

策は破られ、武器も手元に無い。

魔力はまだあるが、サリエルが槍を振るうより早く発動する魔法など持ち合わせていない。

万事休す、絶体絶命、勝つための術が存在しないこの状況下において、押し殺したはずの後悔と恐怖が途端に心中に広がっていく。

逃げれば良かった、命乞いしようか、誰か助けて——碌に頭が回らない。

きつと今の俺は、これ以上ないほど無様に冷や汗を流して顔を青ざめさせているのだろう。

哀れに思ってたか、サリエルの槍は未だ俺を貫かない。

「……待てよ」

混乱しかける頭の中で、一つだけ思い至る。

オーラをぶち抜き、かつ槍よりも速く撃てるだろう魔法が。

実行するのに僅かほども躊躇は無かった、すでに俺の右拳は硬く握り締められている。

「パイル——」

拳を振り上げ、一步踏み込む。

魔法発動の工程は単純そのもの、ただひたすらに右腕に魔力を集め、解き放つだけ。

すでに、初めて魔法を成功させたあの時とは比べ物にならない密度で魔力は腕に集約し、黒い魔力が目に見えて渦を巻く。

イメージはドリル、高速回転し、先端の一点に破壊力を収束させる。

喰らえ、俺の最後の悪足掻き。

「バンカああああああ!!」

黒く渦巻く破壊の拳撃を、白色魔力が遮った。

先を感じたのはその魔力の感覚、直後に視界を脳が認識する、この目に映っているのは、サリエルがパイルバンカーを血の滴る右手一本で受け止めている光景だった。

受け止めた掌から、白色魔力が俺とは逆回転で渦巻いている。

それぞれ高速で回転する黒と白の魔力は、触れた先から即座に相殺されてゆき、一瞬の後には、俺のパイルバンカーを形作る破壊の魔力渦は跡形も無く消滅した。

「……やっぱ、ダメだったか」

完全な敗北感を憶える間も無く、頭部へ強烈な衝撃が叩き込まれる。

最後に見たのは、変わらぬ無表情のまま、槍を横薙ぎに振り切ったサリエルの姿。

ごめんなリイ、俺はお前も村も守ることは出来なさそうだ——
それだけ思っ、俺の意識はぶつとりと途切れた。

第55話 黒魔法使いVS使徒（後書き）

クロノは目の前が真っ暗になった……勿論デッドエンドではありません、セーブポイントに戻らずこのまま話は続きます。

第56話 妖精VS使徒

気絶したクロノがうつ伏せに倒れる。

「……」

サリエルはクロノを見下ろしたまま、少しだけ頭を悩ませた。

気絶させたクロノをどうしたものか、というのが一つ目の悩み、

二つ目は復活した早々に右手をお釈迦にしまったこと。

二つ目の悩みは、時間はかかるものの回復はするので放っておけば問題解決なのだが、クロノの処遇については即座に答えは出なかった。

そもそも、サリエルにはどれほどクロノが殺意をもって抵抗しようが、殺すつもりは無かった。

サリエルは、クロノがどこか遠くで幸せに生きてくれればそれでよかったのだ。

クロノだけが自由になったことを知れば、それを恨む実験体もあるかもしれない。

だがサリエルは、自分を含め実験体の誰もが成し得なかった自由を掴んだクロノという存在に、どこか救いに似た感情を憶えた。

これまで死んだ数多くの実験体、彼らの分まで生きて欲しいという思いである。

だからこそ、第三研究所で初めて出会った時も彼を見逃したし、今回も逃げてくれればそれで良かった。

出来る限り戦いとは無縁な‘普通’の生活。

その望みはきつと半ばは達成していた、しかし、

「貴方にも、守るものができたのですね」

クロノが攻撃を仕掛ける前に逃がした、恐らく妖精だと思われる女の子は、彼がこの世界で出会い、大切な人となった、それこそ命をかけて守ろうと思えるほどに。

サリエルは、大切な人を守るために命をかけて戦いを挑む人間をこれまで何度も戦場で目にしてきたし、また、そんな彼らを一人として生きて帰すこともしなかった。

クロノの姿は、これまで手にかけてきた勇敢でありながら悲惨な死の運命を辿る彼らと全く一致する。

「それでも、貴方に死んで欲しくは無い」

言うなればエゴを押し通す為、この場からクロノを逃す方法を思案し始める。

「……」

十字軍のトップという立場を考えれば、敵対者を意図的に見逃すのは問題である。

クロノの正体としては改造された『異邦人』であり、ダイダロスの将軍でも無ければ貴族でも無い、無名の一般人に過ぎず重要性は低いので、逃げたとしても地の果てまで追いかねばならないという事は無い。

だが、十字軍があっさりと捕縛したとすれば、総司令官に刃を向けた暗殺者として即座に処刑されるし、例え公平に裁判を開いたとしても死刑以外の判決が出ることは絶対に無い。

よって、すぐに兵を呼ぶのは却下。

だからといってこのまま放置するのも拙い。

この後目覚めた時に、彼が敵わないと思って逃げてくれればそれで良いが、また攻撃してくることも十分有りうる、そもそも目覚める前に巡回する警備兵に発見される可能性が一番高い。

どちらに転んでもあまり望ましい結果にはならない。

ならば、誰かにクロノを遠くの町まで運ばせるか。

しかし、サリエルにはそんな個人的なコトを頼める人物に心当たりは無いし、総司令官としてもそんな不審な命令を出すわけにもいかない。

「……どうしよう」

使徒となつてから、目の前の敵を倒すだけの生活を送ってきたサ

リエルは、久しぶりに人間らしく頭を悩ませるのだった。

幸いにも、配下の者にはしばらく外に出ると言っており、人払いも済ませてあるため、この場で考える時間はある。

元々、結界が破れたことに気がついてここに来たのだが、その結界も別段侵入者を感じするタイプではないし、サリエル以外にこの異変を察知したものはいない。

サリエルは、左手の槍を消すことも忘れたまま、倒れたクロノを見つめながら立ち尽くす。

ゆるゆると思考を巡らせているサリエルは、不意に視線を森の方へ向けた。

（何か……来る）

最初は、何とも形容しがたい雰囲気のようなものを察知しただけだが、それはすぐに明確な‘異変’となって現れた。

暗い森の奥に、緑色の光点が見えた。

その光はこちらへ向かって接近しているのか、徐々に強く、大きくなってゆく。

そして、光を認識すると同時、森を構成する木々が、少しずつ色を失っていくのにサリエルは気がついた。

光が接近してくるにつれ、目に見える木々はどんどん新緑の葉を枯らし、人の胴ほどもある太い幹は白くやせ細ってゆく、そんな光景が次々と広がってゆく。

「これは……生命吸収^{ライフドレイン}」

サリエルは確信する、緑の光は森の木々から根こそぎ生命力を奪い集めているのだと。

生命力とは、生きるのに必要な分まで含めた魔力の事である。

魔術士は自爆魔法^{アポトーシス}でも使わない限り決して生命力に手を出さないし、まして相手の生命力を強制的に奪う術など禁術の代表格といえるほど危険な代物だ。

サリエルは一般兵士がこの場にいない事を幸運に思った。

これほどの規模と吸収力を持つドレインが発動すれば、魔法の素

養が無く、魔力抵抗も低い一般人は成す統べなく生命の危機が危ぶまれるほど魔力を持っていかれる可能性がある。

緑の光へ向かって、目には見えないが嵐のように強烈な生命の吸引力が発生しているのをサリエルは肌で感じた。

森の木々はついに見える限り全て枯れ木と化し、生命の息吹を感じさせない死の森といった様相となる。

そうして、その白く枯れた死の森より、この異変を発生させた主であるエメラルドの光がサリエルの前へ躍り出た。

「クロノから離れろ」

それは、サリエルとどこか似た雰囲気の美しい少女だった。

文字通り光り輝くプラチナブロンドの長い髪と白い肌。

自身が球状に纏うエメラルドグリーンの光と同じ色彩を放つ双眸。フリルをあしらった可愛い黒のワンピースを纏い、その背には虹色に輝く二対の羽。

サリエルは、いつか読んだ絵本に登場した、妖精のお姫様の姿を想起した。

「貴女は誰ですか？」

しかしそんな幻想的な姿の少女は、憤怒の形相でその美貌を歪ませ、その身から目に見えるほど濃密な殺意を放っている。

「離れろって――」

誰何を問うサリエルの台詞に、少女は、

「言ってるでしょっ！」

膨大な魔力を圧縮した光線で答えた。

ルクス・フォルティスサギタ

（無詠唱の『閃光白矢』――いや、『固有魔法』エクストラか『原初魔法』オリジナルの

類）

考えつつサリエルは瞬時に回避行動に移る、が、光線の発射速度はその名の通りに光の速さ。

完全に避け切れず、光線の先端が翻った法衣の裾を焼き切った。

ドドンっ！！

サリエルを通過して直進する光線は、ダイダロスを覆う結界に触れると僅かに阻まれるが、ほとんど威力を削がれる事無く貫通し、そのまま城壁へと命中。

轟音と砕けた石壁の粉塵が俄かに巻き上がり、倒れたクロノの辺りまで煙が立ち込める。

「クロノっ！」

大きく飛び退いたサリエルは、煙で塞がった向こう側から少女の声を聞いた。

風でも操作したのか、煙は瞬時に霧散し、クロノを抱き起こす少女の姿をサリエルは視認した。

「クロノ――」

しきりにクロノの名を呼ぶ少女の顔は、サリエルへ向けた表情が嘘だったかのように、目の端に涙を浮かべて悲しみにくれる儚くも可憐なものであった。

クロノは上半身を起こした状態で、そのまま少女によって抱きしめられる。

少女が何事かを呟く、サリエルの耳には聞こえなかったがクロノが気絶しているだけということは彼女も理解したのだろう。

少女は、クロノの背と膝の裏に腕を回し、自分より頭二つ分近く大きな彼の体を軽々と持ち上げた。

「貴女は、クロノが先ほど逃がした女の子ですか？」

「その名を馴れ馴れしく呼ぶな」

再び殺意の視線がサリエルを貫く。

他人の感情に疎いサリエルでも、彼女が怒っていることは分かるし、何故怒っているのかも凡そ見当はついた。

クロノが彼女を守ったように、彼女もまたクロノを守ろうとしている、それほど大切な者を傷つけられたなら、悲しむか怒るかのどちらかしかないのだから。

「彼を連れて行くのなら、追いません」

「そう」

そっけなく言って、少女はクロノを抱いたままサリエルへと背を向ける。

「じゃあね、アンタはそこで死んでちょうだい」

少女の背中から生える二対の羽が明滅する。

サリエルが魔力の迸りを敏感に察知した、直後、虹色に輝く羽から十数発もの光の玉が撃ち出された。

光線では無いので光の速さはないが、クロノの弾丸の倍以上はある高速で飛んで来る。

サリエルはその高速をも見切り、身を翻して回避しようとした瞬間、飛来する光弾の軌道が僅かに変化したのを見た。

（自動追尾能力）

地を蹴ってその場から大きく横へ跳ぶが、それでも光弾はサリエルをしつかりと捕捉し、中空で直角に近い角度で曲がり軌道修正をする。

（かなりの高性能、撃ち落すしか無い）

地に足のついたサリエルは、未だ血に濡れる右手で槍の柄を握る。ただでさえ回復したばかりで本調子とは程遠い、さらに右手はクロノに毒針で貫かれ致命的なダメージを負っている。

これ以上の負担は手首から先を丸々再生しなければいけないほどとなるため、使いたくはなかったが、この光弾を迎撃するには流石のサリエルも両手で槍を振るわざるを得ない。

「疾っ——」

小さく声を発し、すでに目前まで迫る光弾の高速をさらに越える速度で白い穂先を突き出した。

穂先が光弾を貫くと同時、圧縮された光の魔力が純粋な破壊力となって炸裂する。

失明せんばかりの眩い閃光と、四肢が千切れ飛ぶほどの衝撃がサリエルを襲うが、その小さな体を僅かほども揺らがせること無く、次々と光弾を槍で撃ち落していく。

「ん……」

最後の一発を防ぎきると同時、手にする細槍は粉々に砕けて消え去った。

閃光と爆風の嵐が過ぎ去った後には、緑の芝生が広がっていたはずの地面は挟れて土が向き出しとなってしまうている。

唯一芝生が残っているのは、サリエルが一步も動かず踏みしめ続けた足の裏のみである。

「……逃げた」

見渡せば、すでに少女の姿はどこにも無かった。

本気の殺意をサリエルへ向けていたが、それでもクロノの安全を優先してこの場を離れたのだろう。

そう考えた次の瞬間、サリエルの背筋に竜王と相対した時以来の悪寒が走った。

「っ!?!」

彼女の頭上に、白い光の線で描かれた直系10メートルはある魔方陣が突如浮かび上がった。

恐らく神代か古代のものと思われる字に、見たことの無い複雑な図形が円の中に描かれているが、今のサリエルにその陣の構成を冷静に分析する暇などなかった。

アールクス・アイギス

「――光翼神盾」

サリエルが自身の持つ最大の防御力を持つ、白い翼を展開させて全身を覆う。

同時、魔方陣と同じ直径を持つ巨大な光の塊が、頭上から降り注ぐ。

竜王のブレスに匹敵する破壊力を秘めた、七色に煌く光の奔流がサリエルを呑み込んだ。

第56話 妖精VS使徒（後書き）

リリィがマジギレしてくれたお陰で、ようやく全力での戦闘をさせることができました。

やはりクロノと比べて少女リリィはかなり強いようですね。

第57話 最後の帰路

俺が冒険者となってからおよそ三ヶ月、受けるクエストはランク1のみで危険などないものばかりだったが、それでも日夜黒魔法の研究はしてきた。

俺にとって黒魔法はこの世界で生きていく上で最も頼りになる力であるし、それに魔法の研究開発は半ば趣味のようになっている。魔法を発動させるのに重要なのはイメージだ。

魔法には様々な分類があり、例えば、俺が使う本人のみが行使できる^{オリジナル}原初魔法、リリイが使う種族のみが行使できる^{エクストラ}固有魔法、アテンなど多くの魔術士が行使する現代魔法^{モデル}などがあるのだが、どれをとっても明確なイメージ無くして扱うことは出来ない。

新米冒険者で田舎暮らしの俺が可能な魔法の研究・修行としては、精々がこの魔法に対するイメージを深めることくらいのものである。ちなみに現代魔法^{モデル}は、魔力があれば誰でも扱えるというタイプの魔法であるが、数学や化学のように厳密な理論に基づいたものであり、一朝一夕で習得できるものではない。

俺は現代魔法の習得を早々に諦めることにした、なぜなら『アンチマテリアル』の威力にすら劣るシングルアクションの現代魔法を習得するのでも最低で2年の修行期間は必要とするからだ。

そもそも俺には現代魔法^{モデル}の詠唱である、この世界本来の発音の、

「????? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ????
???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ????」

という言葉が全く分からない。

恐らく、俺が改造されて異世界の言語を理解できるようにはなかったが、その脳内で自動翻訳される何等かの‘ルール’から外れてい

るために、詠唱に限ってはその意味が日本語に翻訳されずそのままの音として認識してしまうのだろう。

逆に、通常の会話は24時間年中無休で自動翻訳され続けるので、言葉を学ぶことがそもそも不可能だ。

もしも、原色魔法の才能があれば、詠唱が分からずとも現代魔法を自然に習得できるらしいが、どうやら俺には黒魔法以外に一切の魔法的才能は無いようだった。

故に、俺は現代魔法についてはどんな効果の魔法があるのか、といった知識を憶えるに留め、自分が使う武器としての魔法は、すでに使える原初魔法である黒魔法に限ることにした。

そうして開発したのが『魔弾』と『魔剣』である。

この2つは俺が戦闘で使用頻度の高い魔法を整理・系統化したただけであり、新しい効果は無いし、劇的に威力が向上したわけでもが、発動速度・操作精度・必要魔力・圧縮率などが向上し「より使いやすくなった」と感じる程度の効果はある。

『魔弾』はこれまでの『散弾』や『アンチマテリアル』のシングルアクションを中心とした攻撃魔法の総称、『魔剣』は手を触れずに黒化した武器を自在に操る魔法『自動剣術』の改良型だ。

さらに、『魔弾』なら『ブラックバリスト・レプリカ』を、『魔剣』なら呪いの武器をそれぞれ装備して使えば、当たり前だが攻撃力は飛躍的に上がる。

他にも、以前よりも改良された防御魔法の『黒盾』に、魔法の防具である『悪魔の抱擁』を着込むことで防御力も上がっている。

施設を脱走する時にサリエルとやりあった時に比べ、今回は俺の装備が整い、総合的な戦力は格段に向上していたのだった。

しかし、その程度ではやはり到底サリエルには敵わなかった。

俺は一縷の望みを抱え、命を賭けて戦いに臨んだにも関わらず、それでも尚サリエルは俺を殺さないよう手加減していた。

現代魔法の基本攻撃魔法であるサギタ系に基本防御魔法であるシルド系、この二つは本来ならば『火矢』『氷盾』のように魔力の属

性と組み合わせで発動させる。

だが、サリエルは『サギタ』と『シルド』それぞれ単体で発動させていたことを思えば、単純に魔法の効果は半減していたと考えられる。

基本魔法のさらに半分の威力、武装した俺を相手にするには、その程度で十分だとサリエルは判断したのだ。

そんなヤツに勝てるわけが無い、俺がどれほど決死の思いで挑もうが、そんな弱者をあしらうなど児戯に等しい。

弱者、そう、俺は弱かった。

自分の身を守るだけなら今のままで十分かもしれない、けど、パンドラ大陸を狙うサリエルと十字軍が現れた時、リリイとイルズ村を守る為に戦うにはあまりに力が足りない。

自分だけでなく他のものまで守りたいなら、より強い力が必要なのは、当然と言えば当然だ。

しかし、その当然の事に俺は今更気がついたのだった。

もっと強くなりたい、もっと力が欲しい、そんな風に思い、後悔し、渴望するのは、思えば生まれて初めての事だった。

「――クロノ！」

俺の名を呼ぶ可愛らしい声で夢から覚め、瞼を開ければリリイの顔がアップで迫っている。

「リリイ……おはよう」

「おはよう、もう夜だけだね」

辺りを見渡せば、どこか森の中、頭上には地球よりも大きく見える月が煌々と輝いている。

同時に、自分がリリイに膝枕された状態で横たわっていたのだとも気づく。

もっとも、リリイは幼女姿のため、膝枕というよりかは頭を丸ご

と抱きかかえているような体勢となっていたのだが。

「俺、生きてるのか」

起き上がって、しみじみと呟く。

気絶するその瞬間まで、今でも克明に思い出せる。

「私がここまで連れて逃げてきたんだよ」

「そうか、ありがとな」

「武器もちゃんと回収してきたんだからね」

見れば、目の前の木に暗黒の大鉈『呪鉈「辻斬」』が立てかけてある。

よくサリエル相手に武器まで回収する余裕があったものだ、と思うが今考えるべきことはそんなことではない。

「助けるつもりが、逆に助けられるとは、ザマあないな」

「私を助けようとしてくれた事は嬉しいけど、絶対勝てない相手に一人で挑むのはもう止めてね。」

命の危険がある時は、必ず私も一緒にいるから。

だって、私はパートナーでしょ？」

「そうだったな、悪い、もうあんな無茶はしない——」

そうだ、リリィは一方的に守られる者では無く、背中を預けるに相応しい相棒だ。

守るつもりで勝手に遠ざけておきながら、結局は俺の方がこうして助けられているのだ、全くもって情けないことこの上無い。

そしてリリィには感謝の言葉が尽きないな。

「——ところで、何かリリィの口調おかしく無いか？」

改めてリリィをまじまじと見つめるが、いつも通りの小さい幼女姿、しかしその口から発せられる台詞はやけに流暢なものだ。

まるで、満月の晩に本来の姿である少女となったリリィが話しているようだ。

「うん、今は意識だけ満月の時と同じように、‘元通り’になっ
てから」

「意識だけ？」

「そう、クロノが目覚めた時、すぐ話しておかなきゃいけない事があったから。」

子供の頭じゃロクに状況説明もできないでしょ？」

「そ、そうなのか……」

とは言うものの、すらすらと話す幼女リリイの姿にとてつもない違和感を覚える。

下手すると、普段のあの感じは演技なのでは？ と疑ってしまうほど。

「むう、あんまり納得してない感じ？」

「いや、気にせず話してくれ」

「そう、じゃああんまり時間も無いし先に進めるね。」

まず、クロノが気絶してから丁度一日が経過しているわ」

魔力を限界まで使い切ったわけでもないのに、丸1日も気絶しているとは、そんなに強く頭をぶっ叩かれたってことか。

「それと、ここはリオール峠の麓に広がる森の中。」

私達を追っているのかどうかは分からないけど、リオール村の周辺に白い格好した人間の兵士が沢山ウロついてたから、しばらく村は勿論、街道に出るのもやめた方がいいわ」

「そうか、帰り道は少しばかり遠回りになっちゃうな」

サリエルは俺達を逃がすつもりでいるようだが、あの場で戦闘があったことが知れれば、追手の兵を出さないわけにはいかないだろう。

「しかし、よくここまで俺を運んで来れたな」

「クロノをアイツの前から助ける時は、元の姿になってたからね」

「アイツって、サリエルのことか？」

「うん、あの化物女」

リリイ、顔がちよっと怖いぞ、子供の姿でそんな怒りを露わにしないでくれ。

「竜王を殺したっていうのも嘘じゃなさそう。」

兎に角、とんでもなく強いのは本当、だからクロノ、もう二度と

あんなのとは戦わないで、私も係わり合いになりたくない」

「ああ、分かったよ、それに、次、もなさそうだしな」

もうサリエルとサシで戦えるような機会は巡ってこないだろう。

結果的に俺の暗殺作戦が失敗した以上、次の行動を決めなければいけない。

「まずは、早いとこイルズ村に帰るか」

竜王の死とダイダロス占領を伝えて、すぐさま国外に逃げる準備をしなければいけない。

この首都周辺の村は、今からではどうにもできないだろうが、西の端にあるイルズ周辺ならば、まだ多少の余裕があるはずだ。

「ねえクロノ」

「ん？」

「今回私が元の姿に戻れたのは、とある魔法、を使ったから、一応非常時の手段として用意してあったものだけど、その魔法を使うのは子供の私だし、成功したのは偶然みたいなもの、時間もかかるし、こうして上手くいったのはほとんど運が良かったからに過ぎない、だから、本当にもうこんな危ないことは止めてね」

「ああ、分かった、ごめ——」

リリイが俺の胸へ飛び込んでくる。

「ホントに、心配したんだから……」

「——ごめんな、リリイ」

俺はそのまましばらく、リリイを抱きしめ、頭を撫で続けた。

リリイを定位置のフードにいれて、俺はひたすら街道を走る。

首都圏には十字軍兵士が警戒しているようなので、そこから脱するに森の中を通り大きな遠回りとなってしまう、かなり日数をかけてしまった。

ダイダロス領の中部に差し掛かる頃には、流石に兵士の姿は見え

なくなったので、そこからは来た時と同じ西南街道を利用している。食事以外で休憩はとらず、街道ルートに戻ってから途中にある村に立ち寄ることをせず、さらに寝る時間も削って走り続ける。

流石にリリィは睡眠時間を削るわけにはいかず、俺の揺れる背中ですいさっきまで眠りについていてた。

それでも快適な睡眠がとれるとはいえず、早くベッドで寝かせてあげたいのだが、一刻も早くイルズ村へ帰って報告しなければならぬ今の事情はリリィも理解してくれている。

そして、俺達は漸くクウアル村へ辿り着いた。

当然この村も休憩することなく素通りのはずだったのだが、なにやら騒がしい様子。

「なんかあったのか？」

「？」

俺と一緒にハテナマークを浮かべるリリィを背負いつつ、騒ぎの中心地である村の広場へ足を向けることにした。

広場には人が溢れかえっていた。

それだけなら、夏越しの祭の準備でもして賑わっているのだろうと納得するところなのだが、この広場に集まっているのは、大小の荷物を抱え憔悴した表情をした人々だった。

彼らは、クウアル村の自警団員に水を貰ったり、怪我の応急処置をしてもらったりしている。

「すみません、なにかあったんですか？」

俺は広場の周りに集まっているクウアルの村人の一人に問いかけた。

「何があったのかは分かんが、どうやらイルズから逃げてきたらしい」

「え？」

「次々とやってきて、朝からえらい騒ぎになってる。

自警団も完全武装であちこち警戒してるようだし、なんだか不穏な様子だねえ」

言われて見れば、広場に座り込んでいる人々の顔にはどこか見覚えがある。

それを確認した瞬間、俺は広場へ飛び込んで、彼らに向かって叫んだ。

「俺はイルズ村の冒険者クロノだ、村で何があったか教えてくれっ！」

「クロノ……ああ、見たことあるぞ」

「おお、リリィさんもいるぞ」

そんな反応が返ってきた後、壮年の猫獣人ワーキャットが俺の前へ立つ。

「イルズ村が人間の軍隊に襲われた」

その獣人の台詞を聞いた瞬間、信じたくは無いが、事情を理解してしまった。

「詳しいことは私たちも分からないが、昨日の夜に、人間の軍隊が攻めてきたからと避難命令が出て、みんな急いでクウアルへきたんだ。

西北街道の門のあたりで火の手が上がっていたし、爆発音も聞こえた、恐らく自警団が戦っていたんだろう」

「昨日の夜……」

「ここにいるのは西南の門の近くに住んでいた者達だけで、まだほとんどの村人が来ていないんだ。

なあ、アンタ冒険者だろ、村のみんなを助けに、いや様子を見にくるだけでもいいんだ、クウアルの自警団が動くのはもう少し時間がかかりそうだし——」

周りにいる者達も彼と同じように、懇願するような目を俺達へ向けてくる。

「ああ、俺達に任せろ、必ず村のみんなを助けてくる！」
頼む、まだみんな無事でいてくれ！

切に願いながら、イルズ村へ続く西北街道の門へ向かって力の限り走り始めた。

第57話 最後の帰路（後書き）

第4章は今回で最終回となります。果たしてイルズ村はどうなってしまうのか？ 次回もお楽しみに！

第58話 欲望の行進

クロノがダイダロスの城壁でサリエルとの再会を果たしていた時から遡ること数日、十字軍は村々の占領へ向けて大軍を進発させていた。

その占領軍の中核を成すのは、本国から新たに派遣された教会の、あるいは貴族の私兵であった。

すでに完全な降伏状態のダイダロスは、その領内にある村を占領するにあたって、各々の村長にダイダロスがシンクレア共和国に降った旨を伝えれば、それだけで完了である。

そして十字軍がある程度の人数を駐留させれば、名目的にも実質的にも支配は成され、村人や敗残兵が暴動を起こさえしなければ、一滴の血も流さずに済む。

しかし現実ではそう上手くはいかない、まして様々な欲望によって膨れ上がった十字軍は、正しくクロノが危惧した通りの行動を始めた。

奪い、壊し、殺し尽くす、その残酷な行動理念を神によって正当化された十字軍は、一切の躊躇も、後悔も無く、忠実にそれを実行する。

これより先、ダイダロス領内のいくつもの村が凄惨な虐殺と略奪の末に滅び去る。

そしてその残酷な運命を辿る村の一つが、クロノの愛するイルズ村であった。

ガラハド山脈の長大な稜線へ沈み行く夕陽を背景に、白い装束を纏った軍団が西北街道を行進する。

胸元に大きな十字をあしらった、膝元まで覆う白いサーコートの下には鎖帷子チェインメイルを着込み、腰に帯びるブロードソードと手にする長槍は、十字軍の基本的な歩兵装備だ。

列を成して歩く彼らを率いるのは、一際大きな体躯の黒馬に跨った青年司祭キルヴァン。

その白い肌に金髪碧眼の彫りの深い白人種系の容姿は、シンクレア共和国ではごく一般的に見られるものである。

彼は白魔術士でもあるため、通常の法服をベースに数々の魔法具マジックアイテムで装飾されており、その見た目は一際目立つ。

「大分、暗くなってきましたね」

キルヴァンの騎馬と並走しながら、彼の副官であるコルウスが言葉を発する。

「なんだ、夜間行軍は不安か？」

「いえ、予想より街道も広く整備されているようですし、問題は無いでしょう」

「ああ、魔族にしては良くできているな」

キルヴァンの台詞には明らかな侮蔑の意が含まれている。

パンドラ大陸には様々な国があるが、どこも例外なく人間とその他の種族を特別分けずに‘人’と呼んでいる。

しかし、シンクレア共和国において人間と他の種族は明確に分け隔てられているのが一般的であり、特に敬虔な十字教徒であるほど人間を至上の生物とする差別意識が強くなる。

十字教の原理主義者でもあるキルヴァンであるならば、パンドラに住まう全ての存在に対して敵意と悪意しか持っていないのは当然ともいえた。

「予定では、もうすぐイルズ村へ着くはずですが」

「焦ることは無い、田舎の小村を制圧するのに、一晩という時間はあまりに余裕がある」

キルヴァンの部隊に課せられた任務はイルズ村の占領、だが、今すぐに実行しなければならぬほどのものではない。

というのも、パンドラに来てより十字軍が西北街道沿いの村々を占領する際に、特にこれといって目立った成果も重要な仕事も無かったキルヴァンが「是非この私にお役目を！」と言って半ば無理矢理に成立させた任務なのだ。

ただの司祭であるならばこういった余計な仕事を率先して背負い込もうとはしないのだが、若くして司祭の地位まで登り詰めた、いわばエリートとも呼べるキルヴァンは、ただ黙って自分の活躍する機を待っているのは我慢がならなかった。

要するに、彼は功を焦っていた。

広大なダイダロス領を次々と占領していつているのが十字軍の現状としてあり、早く自分も何らかの成果を上げなければ、他の騎士や聖職者に美味しいところは全て持っていかれる、そう思えば功を焦るのも仕方のないことである。

「これで、他の司祭共に先立って手柄が一つ立てられる。

より多く手柄を立てれば、メルセデス枢機卿殿下の覚えも当然良くなる、分かっているな？」

「はい」

「この遠征が終わる頃、私は低く見ても大司祭にはなっているだろう。

当然、私の右腕たるお前も相応の地位を与える。

さらにその後、本国での働き如何によって大司教、いや、枢機卿の座も夢では無い。

これはそれを叶える為の偉大な一步となるのだ――」

不敵な笑みを浮かべるキルヴァンの視線の先には、街道の先にボンヤリと浮かぶイルズ村の灯りがあった。

新陽の月17日、深夜。

「うーえ、飲み過ぎたかあ……」

テーブルに赤い顔を突っ伏すニーノを、イルズ・ブレイダーのメンバーは当然のように心配の言葉をかけることなどない。

「ニャレコさんが見てるぞニーノ」

「嘘言うなやアテン、今日は非番の日だからギルドには来てねーんだぞ」

「なんでそんなことまで知ってんの？」

「この前話した時に聞いたからに決まってるだろーが！」

「ああ、デートに誘おうとしたけど結局ビビって切り出せなかったあの時――」

「思い出させんっ！」

「まあ良かったわ、ウチはてっきりついに最近都市で噂のストーカーなるクラスにニーノがジョブチェンジしたんかと思ったわ」

「んだよストーカーって」

「女に気づかれずに後を追っかけまわしたり一日中監視したりするキモい性癖の男のことを言うらしいぞ」

「それ別にクラスでもジョブでもねーだろ」

「その女の出したゴミまで漁るとかいうし、ホントにキモ怖いわあ」

「えっ、それは本当に気持ち悪いですね」

「やや心配そうな視線をニーノへ向けるアテンとハリー。」

「そんな目でみてんじゃねえ！俺はまだやってねえぞ！」

「まだ、ってどういうことよ！？」

「あ、いや、今のはなんつーか、ほら、アレだよ――」

完全にドン引きした様子のアテンとハリー、いつもクールなクレイドルも心なしかニーノから席を離れている。

「ギルドの受付嬢に変態行為したらパーティも解散になるんだろか」
「最悪、連帯責任でメンバー全員ギルドから除籍も有りうるかもしれないねえ」

「それは、困るな」

「テメーらなんて心配してやがるっ！俺はんなことしねえっての
！！」

バン！　つとテーブルを叩いて憤然と立ち上がるニーノ。

「落ち着けてニーノ、ニャレコさんに注意されるとヤバい凹むぞ」
「だからニャレコはいないってんだろ！」

「私がどうかしましたか？」

その声がニーノの耳に届いた瞬間、彼の耳と尻尾が一瞬でピーンと立ち上がる。

フリーキャット
猫獣人が驚いた時に起こる反射であった。

「あ、あれ、なんでニャレコがいるの？」

「なんで、っってお仕事だからに決まってるじゃないですかあ」
そんなことは分かってる、とはここで返せないニーノ。

「あ、そういえば姉さんが今日体調悪いからニャレコさんが変わってもらおうって――」

「ハリー！　そういうコトは先に言っとけ！」

「先輩にお大事になって言っておいてくださいね」

「はい、伝えておきますよ」

「で、ニーノさん」

「は、はいっ！？　なんでしようかつ！」

声が裏返ってる、わざわざ指摘するのも可哀想かなと思ってアテンは口をつぐんで二人を見守る。

「クエスト達成祝いで騒ぐのはいいですけど、エキサイトしすぎて剣を抜いたり、なんてことにはならないようにして下さいね」

「は、はひ……」

耳と尻尾を垂れさせ、悲しみに暮れる表情のニーノに、流石にメンバーはフォローすることにした。

「いやあーゴメンねニャレコさん、お互いちょっと飲みすぎちゃったみたいでさあ、ニーノが悪いわけじゃないし、許してあげてー」

「あ、スミマセン、私こそ水を刺すようなまねを――」

その場を適当に繕って、ニャレコはカウンターの方へと戻っていた。

だが、どうにもカツコの悪い姿をニャレコに見せてしまったこと

で、ニーノのテンションは下がりっぱなしである。

「ダメだ、今日はもう帰るぜ」

酒をカップ一杯飲み干してからニーノが言い出す。

気分も顔色もあまり良さそうでは無い。

「んー、そっか、まああんま気にすんなや」

「大丈夫だ、どうせ明日の朝には忘れてんだろ」

ふらつく足取りでニーノが席を立つ。

「送って行こう」

ニーノとは対照的にしっかりと立ち上がるクレイドル。

「おお、いつもスマンな」

「気にするな」

二人は何枚かの銀貨をテーブルに残してギルドを後にした。

「おおー夜風が気持ちいなあ」

ぼんやりとそんなことを言いながら、ニーノとクレイドルが歩く。ギルドで飲んだ後に、こうして二人で帰路につくことはそう珍しいことでもない、いつもの日常の1ページ。

そのはずだったが、最初に普段と違う様子を感じ取ったのは、ほとんど酔いの回っていないクレイドルであった。

「何か、騒がしくないか？」

「あん？」

言われて見れば、確かに人々の声が聞こえてくる。

一度それを感じ取ってしまえばその発信源を辿るのは容易、興味半分で、騒ぎの起こっている方向へ二人は歩みを進める。

そこは今日もクエストから帰ってくる時にも通った村の門である。

「なんだってんだ？ モンスターでも現れたか？」

門の周辺では、自警団の面々が松明を片手に慌しく行き来していた。

この時点で、何かよからぬ事態が起きつつあると危機を意識したニーノは、酔いが醒め、ダンジョンに向かう時と同じ戦士の心持となる。

ニーノと同じく不穏な気配を感じ取ったクレイドルは、自警団員の中に団長である父親の姿を見つけ、声をかけた。

「親父、何かあったのか？」

「おお、クレイドル、それにニーノも」

「オジさん、なんかヤバそうな雰囲気だけど」

もしも二人が未だ幼い子供であれば、迷わず家へ帰るよう怒鳴るところであったが、今やニーノとクレイドルはモンスター退治で村の平和に貢献する立派な大人の一人である。

自警団の団長としても、父親としても、グリントは息子とその親友を認めており、今起こった問題に対して一切誤魔化す事無く説明をした。

「所属不明の軍団が西北街道を通って村へ接近してきている」

「なんだって！？」

「盗賊か？」

「まだ分からん、足の速い者を偵察に向かわせたのだが、未だ帰らない」

二人の背筋に冷たいものが走る。

ランク2とはいえ、すでに初心者域をとくに脱した冒険者である二人の危険に対する直感は、一般人のソレとは比べるべくも無い。

「アテンとハリーに知らせてくる、クレイドルはオジさんと一緒に門の警備につけ」

「分かった」

「頼むニーノ、ギルドへ正式に依頼を回している時間は無さそうだが、出来る限り冒険者から緊急の場合の協力を要請しておいてくれ」

「任せてくれ！」

ニーノは疾風の如く、さっきまでのんびり歩いてきた道を引き返

す。

「クソっ、イヤな予感しかしねえぞチクシヨウめ！」

第58話 欲望の行進（後書き）

第5章スタートです。

章タイトルからして、嫌でも先が読めるエピソードとなりますが、この辺をしっかり描写しなければならぬと私は思っています。

第59話 イルズ炎上(1)

シオネ村長はすでに床についていたが、自警団員が家の門を叩いた瞬間、すぐに飛び起きた。

村はここ何十年も事件事故とは無縁だったが、彼女自身これまでの長い人生で何度か緊急を要する事態に遭遇した経験は何度もある。村長は普段と変わらず落ち着いた様子で自警団員を招きいれ、事情を聞くことにした。

「……そうですか、今すぐ門へ向かいます」

謎の軍団が接近という衝撃的な報告を受けた村長は、それでも驚きや戸惑いといった感情を表情へ表すことはしなかった。

伊達に歳をとっているわけではない、非常時こそ長である自分がまず冷静であらねばならないことを、よく理解しているし、実行できるだけの人物であった。

しかしながら感情が表に出ないというだけで、その心中に大きな不安がとぐろを巻いていることに変わりはない。

彼女は、村人に血が流れることだけはないようにと祈りながら、年季の入った深緑のローブに袖を通し、先端にエメラルドのような淡い緑色の石がはめ込まれた長い杖を手にして家を出た。

そのローブと杖は、普段使用することはない戦闘用の装備であった。

「え……それって、どういうことですか？」

先ほどクレイドルと共にギルドを出て行ったはずのニーノが血相を変えて戻ってきたことに、ニヤレコ達は驚きの表情を浮かべるが、そんな様子に構わずニーノは簡潔に事情を説明、というよりギルド全体に聞こえるよう叫んだのだった。

ニヤレコは啞然とした様子だが、アテンとハリー、それに別の席にぽつぽつと座り飲んでいる冒険者達は即座に動き始めた。

「ニヤレコは早くギルド長に連絡を、それとイルズ村ギルド（ここ）にいる冒険者全員をすぐ駆り出してくれ！」

「わ、わかりましたあ！！」

ニーノの言葉に慌てた様子でカウンターのほうへと駆けて行くニヤレコ。

「あー、逃げろって言った方が良かったかな」

「何言ってるんの、ニヤレコさんだってギルド職員でしょ、避難の時は最後から二番目」

一番最後は自分達、だとは言わずともニーノには理解できている。「けど、今回はあまりにヤバすぎる気が――」

ドドンッ！！

その時、轟音がギルドを、いや、イルズ村全体へと響き渡った。

「確かに、ヤバい感じね」

「音は門の方からでしょうか」

「くそっ、急いで行くぞ、アテン、ハリー！」

各々武器を手にギルドを飛び出し、村の門へ向かって走り始めた。

デストルク・ハンマー
「破門鉄槌」

10人の魔術士が協力して発動させる複合魔法は、その名の通りイルズ村の門を木っ端微塵に打ち破った。
ユニオン

門のすぐ傍にいた自警団員は、その衝撃でバラバラに吹き飛び即死。

謎の軍団と接触するために、門の近くまで歩いてきた村長は、付き添いの自警団長がその身を盾に爆風から守ったため負傷を免れた。

驚きの悲鳴と怪我を負った苦痛の呻き声が合唱となって夜の闇に響き渡る。

未だに爆発の粉塵が治まらず、濛々と土煙が立ちこめる中、騎馬に跨った青年を先頭に、白装束の十字軍が堂々とイルズ村へと踏み込んだ。

「ふむ、相当数の魔族がいるな」

馬上から、周囲に集った自警団の姿を見て、キルヴァンは眉をしかめつつそう言い捨てる。

その中で、長い杖を手にした小柄なエルフの老婆が、一際大柄なリザードマンを伴って自分に向かってくるのを認識した。

背後に控えている兵士が手にする弩を彼らに向けて放とうとするのを、キルヴァンは軽く手を振って静止する。

副官であるコルウスだけを伴って、キルヴァンは一歩進み出る。

周囲は未だ騒然としているが、イルズ村代表であるシオネ村長とグリント自警団長、十字軍代表であるキルヴァン司祭とコルウス助祭、両者が対峙するこの場には沈黙が漂う。

ただし、片方は不安と驚愕、片方は侮蔑と嘲笑、両者の心境には明確な差異がある。

「貴様がこの村の長か？」

先に口を開いたのはキルヴァン、馬上よりシオネを見下しながら不躰に言う。

「はい、私がイルズ村の――」

「それ以上は話すな、魔族と言葉を交わすなどこの身が穢れる思いだ。」

これより語るは神の言葉と同義、一度しか言わん、よく聞くがい。

我らが聖なる十字軍は邪竜ガーヴィナルを討ち滅ぼし、このダイダロスの地を解放した。

偉大なる主の御意思に従いこの地全てを捧げる」

その言葉に、シオネ村長は目を見開いて硬直した。

要するに、竜王ガーヴィナルは十字軍を名乗る人間の軍団に討たれ、ダイダロスを占領したというのだ。

人間と戦っていたことは知っていたが、まさかガーヴィナルが直接率いる精強なダイダロス軍が敗れることなど信じ難い。

「やれやれ、己が何をすべきか分かっていないようだな、仕方あるまい、低脳な魔族にも分かりやすく言ってやろう。

今すぐ村中の金銀財貨、武器、糧食、その全てを我が十字軍に供出しろ。

ああ、それと人間がいれば全員連れて来い、特別に奴隷として生かしておいてやる」

キルヴァンの無表情にシオネはその曲がった背筋に悪寒が走った。盗賊の類なら、これから宝が手に入ると思えば必ず笑う、その目に欲望の色が映る。

だが、彼女を見下ろすその目には、心の底から湧き上がる侮蔑以外の感情を一切感じられない。

この男には、一辺の罪悪感は勿論、他人から‘奪う’という意識そのものすらない、このイルズ村を住民含めすでに自分の所有物であると確信している。

直感的にシオネは思う、そして、不幸にもその直感は正しかった。つまり、交渉の余地など一切無いということ。

シオネは決断した、これより滅び行くイルズ村と、死に行く多くの村人達に詫びながら。

「……グリント、鐘を鳴らしてちょうだい」

呟いたその一言を、グリントは確かに聞き取った。

同時に、シオネの前に先ほど爆風から守ったのと同じようにその青い鱗に覆われた巨躯を投げ出し、夜空に向かって叫んだ。

「鐘を鳴らせえっ!!」

ゴォーーン！　ゴォーーン！！

村中に響き渡る鐘の音、その意味はイルズ村に住む全ての人が知っている。

緊急事態の発生と避難、それが、この鐘が知らせる意味だった。

「ちっ、手間をかけさせるなよ」

キルヴァンが振るった腕を下ろして言い捨てる。

鐘が鳴った瞬間、抵抗の意を見せたと判断を下したキルヴァンが即座に攻撃を命じた結果によるものだ。

背後ではすでに、歩兵が槍を構え、射手が矢を番え、魔術士が詠唱を始め、戦いの火蓋が下りる。

そして、キルヴァンの立つここでも戦闘は始まっていた。

目の前には、彼が攻撃を命じた瞬間に石弓より放たれた矢によって体を貫かれたグリントが立つ。

「フンっ！」

体に突きたった矢を、グリントは強引に腕で払いのける。

鱗の隙間は矢によって貫かれたが、分厚く硬質な鱗に鋼のような筋肉がほとんどの矢を防ぎきっていた。

種族的にも物理攻撃に強いリザードマンの上、鍛え抜かれた戦士であるグリントにとって、数本の矢が突き刺さった程度では彼の命を奪うには到底足りない。

「やはり魔族は頑丈にできている、まったくおぞましい」

うんざりしたように言い放つキルヴァンに向かって、唸りを上げてグリントが飛び掛る。

人間と比べて驚異的なパワーを誇るリザードマンであれば、騎兵の突撃に匹敵するほどの威力をその身一つで発揮することも可能、そして、今のグリントは正しくその攻撃力を実現していた。

「オオオオオ——突撃^{チャージ}！」

武技の発動によって、ただでさえ鉄板でも貫く一撃が、さらに倍する威力を持つ。

そしてそのまま一直線にキルヴァンの長身瘦躯を貫くはずの槍はしかし、

スラッシュ
「一閃」

横から振るわれた長剣によって弾かれる。

キルヴァンを庇うように、副官であるコルウスが割って入ったのだ。

フォルス・ブースト
「腕力強化は必要か？」

「いえ、この程度なら私の武技だけで十分対処できます」

屈強なりザードマンの戦士であるグリントの武技を受け止めて尚、平然とコルウスは応える。

「そうか、

?????? ???? ???? ????——白盾」
ルクス・シルド

キルヴァンが防御魔法を展開すると同時、その光の盾は直進する風の刃を散らした。

「あんなババアまで戦えるとは、本当に厄介だな魔族というヤツは」
視線の先には、エール・サギタ風刃を放ったシオネ村長の姿。

「あまりに危険すぎる、決めたぞコルウス、この村の魔族は——」
キルヴァンは笑う、金銀財宝を我が物とする、あるいは女を奴隷にするよりも、魔族という邪悪な存在を殺す方が、敬虔な十字教徒である彼の喜びに繋がった。

「——殲滅する」

「くそっ、くそおお!!」

血と脂に塗れ、切れ味の落ち始めた刃を、白い装束を纏った人間の兵士の喉へ向けてヤケクソ気味に突き立てる。

ニーノはすでに10人近く切り伏せてきたが、現れる敵の数は減るどころかどんどん増えてゆき、さらにそこから火の手が上がっている。

敵の多くは武技の一つも使えない雑兵でしかないが、あまりに数の差がありすぎる。

このままでは敵と炎に囲まれるのも時間の問題だと、激高する感情とは別に冒険者としての意識が冷静に考える。

ニーノは、避難を知らせる鐘の音が響き渡ってから、続々と現れ始めた白い人間の兵士を倒しつつ西北街道の門へと向かっていた。が、つい先ほどきこえた衝撃音で門が破られたのか、暗い夜道の向こうから兵士達が押し寄せてくる。

「ニーノ、これ以上進むのは無理だって！ ギルドへもどろう！」
そんなことは言われなくても分かっている、だが、

「バカヤロウ！ クレイドルはまだ門のどこにいるんだぞ！」
「落ち着いてくださいニーノ、門の方は自警団もいるのでしよう、なら僕たちだけが無理に増援に行かなくても――」

それも分かっている、元々この村の最大戦力である自警団は全て門へ集結済み、自分達が加勢した所で戦局が一気に覆ると思えない。

いや、それどころか、すでに自警団はこの圧倒的な数の兵士に押されてすでに全滅したかもしれない。

「……ギルドへ戻るぞ」

門まで行けないならば、次に自分達がすべきなのはギルドで他の冒険者と協力し、住民の避難する時間を稼ぐことだ。

そうすることでニアレコや他の人を1人でも多く救うことができるはず。

「スマン、クレイドル……」

炎色に彩られる門の方を、一度だけ振り返り見て、ニーノ達もと来た道を引き返し始めた。

第60話 イルズ炎上(2)

西北街道の門前は、イルズ村の設立以来一度も無いほど人が溢れかえっていた。

その圧倒的な十字軍の人数を前に、50にも満たない数の自警団が稼げる時間などたかが知れている。

門を破られてからそれほど時間が経っていないにも関わらず、未だ地に立つ自警団員は両手で数えるに足る程度しか残っていない。

まだ生きながらえているシオネ村長、グリント自警団長、その息子クレイドル、以下数名の自警団員は互いの死角をカバーしながら武器を振るい戦い続けている。

しかし、その程度で村へ侵入してくる十字軍を留めることなど到底出来ず、多くの兵士が奮戦する彼らを尻目に続々と村の中心へ向かって進んでゆく。

すでに、村のあちこちで火の手が上がり始めているが、ここで戦い続ける彼らには、それに気づく余裕すら有りはしなかった。

「おい、その魔族共を片付けるのに何時まで時間をかけるつもりだ？」

「――はっ、申し訳ございません」

振り向かず答えたコルウスの前で、肩口から革鎧ごと斬られたゴブリンの自警団員が倒れる。

コルウスは自身が前線で戦いつつも、部下の歩兵達に死傷者が出ないよう指示を出しつつ立ち回っていた。

兵士達は負傷、あるいは疲労すれば即座に後ろに控える別の兵士と交替して戦っていたため、人間を上回る身体能力を持つ魔族相手にも関わらず、数えるほどしか死者を出してはいない。

もっとも、少数で戦い続ける自警団員にとってすれば、常に無傷の敵兵に襲われ続け、自身の攻撃が一切通じていないかのような錯

現代魔法において上級の位置づけがされる、光の原色魔力を利用した範囲攻撃魔法。

それ単体でもランク3のモンスターを殺しきるほどの威力を持つそれは、強化魔法のサポートを受け、より強力な破壊力を秘めた白い光の奔流となって自警団達へ襲い掛かる。

[illegible]

村長はこれまでの戦いですでに枯れかけた魔力を総動員し、必殺の威力を誇る光の魔法から皆を守る為に全員を覆う範囲のシールドを展開させる。

しかし術者の当人たる村長も理解していた、中級である大風防壁で上級の攻撃魔法を防ぎきることは不可能であり、そもそも風のシールドでは光の攻撃魔法を防ぎづらいという属性上の相性もある。

結果、村長のシールドも、自警団の各人がとった反射的な防御行動も、キルヴァンの放つ魔法の威力を半減させることも叶わなかった。

「ぎゃああああああアアアアアアアア——」

断末魔の声を、すでに彼らから背を向けたキルヴァンは一切感情を揺らすことなく聞いた。

「おい、他にもまだ抵抗を続けている場所があるようだが？」

光線によつて無惨にも消し炭となつた自警団、すでに彼らのことなど忘れたかのように一瞥すらせず、次の問題へとキルヴァンは興味を移す。

周囲の兵士も、粘り強く抵抗を続ける魔族が、漸く息絶えたことに安堵を憶えるか、興奮するか、どちらかの反応しか見せない。

「コルウス、冒険者共がギルドに立て籠もっているらしい、さっさと潰しに行くぞ」

「はっ」

キルヴァンの呼びかけに、コルウスはつい先ほどまで剣を交えていたリザードマンの戦士の遺骸から目を逸らした。

コルウスはこの場にあって唯一人、魔族の死について考えをめぐらせていた。

（何故、あのリザードマンの戦士は、別のリザードマンの戦士を庇うような体勢で死んでいるのだろうか？

魔族如きが、身を挺して他者を守る意思を持っているというのか？）

脳裏に焼きついた、折り重なるように倒れ伏している黒焦げの死体、その二人が父親と息子の関係であることなど、コルウスは知らない。

「ふざけんなっ！ 降伏なんて認められるか！」

ニーノの怒声がギルドに響き渡る。

「ふざけてるのはお前の方だ、外を見てみるよ——」

現在、冒険者ギルドの建物は十字軍によって十重二十重に包囲されてしまっている。

「——素っ裸でゴブリンの巣に放り込まれたほうがマシな有様じゃねえか。」

ええ、あんなヤツらと戦ってどう生き残ってんだよ！」

そう叫び声をあげるのはこのギルドに滞在している別の冒険者だ。ギルドでは、ニーノ達イルズ村出身の冒険者と、偶々イルズ村に滞在中だった流れの冒険者の間で意見が割れていた。

前者は徹底抗戦を、後者は降伏を主張している。

先ほど、ニーノ達が十字軍の先鋒と小競り合いを演じた後、数に押されてギルドまで撤退し、その後は包囲されて小康状態となっている。

故に、僅かながらこうして議論している時間が生まれている。

「テメーらはここが故郷だから命張って戦えるんだろが、俺らは違うんだぞ、こんな村を守って死ぬ義理なんざねえよ！」

「なんだとテメえ！」

「や、やめて下さいっ！」

人間の冒険者に掴みかかるニーノを、ニアレコが声をあげて止めに入る。

すぐさま各々の冒険者の仲間が二人を抑えて引き離す。

人間の冒険者が仲間に両腕を掴まれたまま、ニアレコを見て言う。
「おい、このギルド長はもう死んでるんだろ、なら強制クエストの受注も無し、俺らが戦う義務は無えってこった。

まあ、例え発注されてもこんな戦いするくらいなら1000ゴールドでも1000ゴールドでもキャンセル料払ってやるけどな」

「う……は、はい……」

ニアレコはニーノの知らせによって緊急避難の鐘が鳴る前にはすでにギルドを飛び出してイルズ村ギルド長の家まで呼びに行っていた。

しかし、ギルド長を連れてギルドへと戻る道中、すでに村のあちこちに姿を見せ始めた十字軍の兵士に運悪く見つかり、獣人で足の速いニアレコだけがどうにか無事にギルドまで帰り着くことができたのだ。

状況的には仕方の無いことだったが、ニアレコは半ばギルド長を見捨てて自分だけ逃げてきてしまったと気を病んでいる。

「分かるか、俺らに戦う理由はねえんだ、止めるんじゃないよ」

「……くそっ」

ニーノも冒険者である以上、彼の言い分も納得せざるを得ない。

「行けよ、俺は残って戦う」

「ああ、お前に言われなくても出ていくさ」

人間の冒険者は携えていた剣をテーブルに投げ出す、武装解除は降伏する以上当然の事だ。

彼の仲間を始め、ギルドにいる冒険者のおよそ半分ほどが彼と同じように武装解除し、ギルドの正面玄関へ向かう。

「待て」

「なんだ、まだ文句があるってのか？」

「……ニアレコも連れて行ってやってくれ」

瞬間、ニアレコがビクンと反応し、何かを言おうとしたがニーノはそれを視線で止めた。

「戦って死ぬのは俺達だけで十分だ」

「ニーノさん……」

「大丈夫だ、大人しく降伏すれば殺されることはないだろ。」

それに、捕まってもクロノが助けに来てくれるかもしれないぞ」

そこで他の男の名前を出すとか無いわー、とニーノの隣でアテンは思ったが口を挟むのは止めた。

けど、クロノなら恐らく自分達と一緒に戦うと言い出すんじゃないかとも思った。

「や、やっぱり、皆で降伏した方が――」

ニアレコの訴えに、ニーノは苦笑いで答える。

「あー、俺はもう10人は斬っちまったからな、許しちゃくれねーだろ」

ニーノは左右に立つアテンとハリーへ視線を向けると、二人もまた苦笑した。

「で、でも――」

「ほら、早く行けて、次の瞬間には敵が雪崩れ込んで来るかもしれないねーからな！」

今の状態がいつまでも続くとは到底思えない、もしも外の集団が一斉に突撃を敢行すれば、最早降伏を宣言する余地も無くなってしまう。

「じゃあな、ニアレコ」

「……はい、ニーノさん、皆さんも……ご武運を」

その大きな瞳一杯に涙を浮かべて、ニアレコは冒険者の一団と共に去る。

そして、これが最悪の決断を下してしまったとニーノが後悔するのは、このすぐ後であった。

立ち並ぶ十字軍兵士の間を、白い波を掻き分けて進むかのように騎乗したキルヴァンが進む。

目の前には、この村で一番大きい建物である冒険者ギルドがあった。

「どうした、何故さっさと攻撃をしない？」

キルヴァンは正面玄関に陣取っている部隊の隊長へ、若干のいらいだちを含ませつつ問いかける。

「はっ、敵方には中級魔法を使いこなす魔術士が複数おり、また戦士の方も手練れが多く、歩兵のみで無闇に手を出すのは危険かと――」

「要するに、恐れをなしたということか？」

頭上から睨みつけられた部隊長は深く頭を垂れて「申し訳ございません」と涙ながらに訴えるより他は無かった。

「まあいい、魔族の冒険者というのは少数でモンスターを狩る凶悪な力を持つと聞いている――」

先ほど光魔法で葬った老エルフやリザードマンの姿を思い起こせば、なるほど、確かにあの魔族特有の高い生命力に魔法の支援があれば、人間を優に越える戦闘能力を発揮することは理解できる。

「私として徒に兵を損なうのは避けたい、魔術士の援護を待った貴様の対応を評価しよう」

ありがとうございます、と若き司祭の怒りを買うことを免れた部隊長がほっと胸を撫で下ろすのも束の間、あるものを目にしたキルヴァンの瞳に並々ならぬ怒りの色が宿るのを彼は見た。

「あれは、なんだ？」

その視線の先には、軽鎧姿だが武器は持たずに、両手を挙げて何事かを叫んでいる十数人の一団がいた。

彼らが居る場所は、ギルドを包囲する十字軍と、ギルドの玄関の

丁度中間地点。

キルヴァンは問いかけたが、答えなど聞かずとも、この状況を見れば彼らが何者なのか理解できていた。

「はっ、あれはつい今しがた降伏を訴えてギルドから出てきたのでして――」

「馬鹿めがっ！ そんなことは見れば分かる。

何故殺さない？」

「そ、そ、それは……あの一団の中に、人間と思われる者がいたので」

「殺せ」

「し、しかし、人間は捕虜にしろと司令部から」

「黙れ、あれは魔族だ！　そして、魔族に混じって暮らす人間は須く異教徒であり、存在そのものが神への冒瀆、早急に排除しなければならん」

キルヴァンにとって、当然のように魔族の一団に人間が混じっている事がそもそも許しがたい。

パンドラ大陸に住まう人間とアーク大陸の人間が、クロノの世界にいる東洋人と西洋人ほど顔立ちや体型など造形の差があれば、完全に別種の‘人間によく似た’魔族であると見たかもしれない。

しかしながら、現実には両者の間に種族として容姿の差はほとんど無いに等しく、少々格好が違うだけで、一目で同種の人間だと分かってしまう。

故に、神によって創造された至高の生物である人間が、魔族と共にあるということに対してキルヴァンは並々ならぬ不快感を抱いてしまう。

厳密に司令部の命令に乗っ取るならば、部隊長の言うように投降してきた人間は、せめて捕虜にするべきなのだろう。

しかし、キルヴァンにとっては司令部の命令を厳守するよりも、神の教えを守ることの方が優先されるのだ、それは一切の迷いや躊躇などなく、反射的に、本能的に判断を下す。

「撃ち方用意——」

キルヴァンは兵を掻き分けさらに前へ進みつつ、命令を下す。

この現場にいる最高位の指揮官直々の命令に対し、兵達は即座に行動を開始する。

弓を持つ者は矢を番え、魔術士は攻撃魔法の詠唱を始める。

そうした、明らかな攻撃の意思を見せる十字軍を前に、投降するためにギルドより出でた一団の表情は驚愕の色に染まる。

「お、おいっ！？ 待ってくれっ——」

悲鳴に近い静止の言葉を叫ぶ冒険者だが、目の前にいる無防備な彼らを直ちに殺すことのみを望むキルヴァンに、その願いが聞き届けられることは決して無い。

それこそ、彼の信じる神が停止を呼びかけるといふ奇跡でも起きない限り。

「放て」

第60話 イルズ炎上(2) (後書き)

名前を持つキャラが最も多く死んだ回となりましたね。

特にドラマチックな死の演出はしておりません、死ぬときは死ぬ、そんなイメージで書きました。

第61話 イルズ炎上(3)

目の前で起きた光景をニーノは、いや、戦う覚悟を決めてギルドに残ったイルズ村出身の冒険者の全てが、何が起こったのか即座に理解できなかった。

敵の大将だろうと思しき、他の兵より豪華な装いの青年が馬にのって前へ出てきたと思ったら、兵達が一斉に武器を構えた。

投降に出た彼らが何事かを訴える間も無く、兵から魔法の火と矢の雨が降り注いだ。

矢が彼らの体を貫き、膝を屈して地面へ倒れ伏す次の瞬間には、無数の火矢が殺到し、欠片も残さず爆散した。

それは、つい先ほどまで言葉を交わしたニーノの思い人であるニヤレコとて例外では無い。

いつも元氣一杯に愛嬌を振りまくギルドの看板娘、愛くるしい彼女の姿は最早どこにも有りはしない。

「ああ――」

驚き、悲しみ、怒り、様々な感情がごちゃ混ぜになって脳内を渦巻き、誰もがまともに言葉が出ない。

「うああああああああああ!!!!」

口から出るのは、激情の発露たる叫び声だけだった。

ここにいる冒険者達は悟った、外にいるヤツラは慈悲も無く、また交渉の余地も無く、ただ自分達を塵にするだけの悪魔だと。

自分達もそう時を待たずして、あの悪魔たちに殺される、だが、
(アイツは)

投降を宣言し、無抵抗な彼らに攻撃を命じた敵の大将、

(あの男だけは)

「「殺してやるっ!」」

怒りに狂う冒険者達は皆、各々武器をとって外へと躍り出る。

先のこと、自分の死の事など一切顧みず、ただこの悪魔の軍勢の大将を殺すことのみを固く心に誓って。

夜が明ける。

陽の光がイルズ村を照らし出すが、村を覆う黒煙は未だ晴れない。その煙の下には、たった一晩で作り上げられた、死臭のたち込める凄惨な地獄絵図が広がっている。

この焼け落ちた家々に、うず高く積み上げられた死体の山がある。この現状はしかし、数時間前の真夜中に比べれば幾分かマシといえる。

死体が山となっているということは、すなわち彼らの断末魔の悲鳴が響くことは無いのだから。

今は村にある財産の押収と、未だ隠れ潜んでいる魔族の搜索、戦闘の後始末などで兵達が慌しく行き来している。

その様子を、ギルド最上階にある会議室の窓から、部隊の指揮官たるキルヴァン司祭はどこか満足そうな顔で見下ろしていた。

「それで、話とは？」

キルヴァンは己の後ろに直立不動で立つ副官のコルウスへと視線を移す。

「はい、この村のすぐ近くに妖精の森フェアリーガーデンと呼ばれる場所があるそうです」

「妖精、か……ならば」

「お祭しの通り、恐らく『聖水』の湧き出る泉があるかと」

聖水とは、十字教信徒なら知らぬものはないほど有名なアイテムである。

神の力が宿る聖なる水、より厳密に言うならば多量の白色魔力が溶け込んだ真水だ。

本来なら、司祭など一定以上に白魔法に精通した魔術士が作り出

マジックアイテム
す魔法具なのだが、稀に聖水が自然と湧き出る場所が存在する。

アーク大陸においてそうした‘天然’の聖水が湧き出る場所は特別重要に扱われる。

神の力とイコールで結ばれる白色魔力が、自然に聖水を作り出すほど濃密だということは、神の力が他よりも強く働いている、つまり聖域。

だがそうした宗教的な意味合い以上に、大量の聖水を継続的に入手できるメリットが大きい。

聖水は儀式的な用途は勿論、白魔法の行使に利用すれば様々な効果を発揮する優れた魔法具でもある。
マジックアイテム

魔法とはあまり縁の無い一般信徒から熟練の魔術士まで、その需要は幅広い。

故に、聖水の湧き出る場所というのは、金鉱脈を掘り当てるに等しいほどの価値が十字教ではあるのだ。

このパンドラ征服において功を求めるキルヴァンがこれを放置する理由は何処にも無い。

「この辺り一帯では光の泉と呼ばれ、森の最奥に位置し、妖精以外の種族の立ち入りを拒んでいるようです」

「ふむ、間違いなさそうだな」

アーク大陸において聖水の湧き出る場所、聖域は妖精が住み着くというのは子供でも知っている有名な伝承だ。

そして、それがただの伝承ではなく事実であることを示す記録を、かつてキルヴァンは閲覧した記憶が確かにある。

「一刻も早く確保に向かうべきかと」

「コルウス、この件はお前に任せる。」

搜索隊はお前が必要だと思う者を部隊から好きなだけ連れて行け
「ありがとうございます、しかし、ほとんどの魔術士を連れてゆくことになりましたが、よろしいですか？」

「無論だ、妖精相手に剣はあまり役に立たん。」

兵の治癒も大方済んだ、私と二人の弟子がここに残れば十分だろ

う、他は全て連れて行っても構わん、事が事だからな」

「了解いたしました、必ずやかの場所を制圧してご覧に入れます」

キルヴァンもコルウスも、聖域に住まう妖精と争いが起こることをすでに理解していた。

共和国では他の魔族に比べて妖精に対する嫌悪感はその愛らしい外観からあまりもたれていないのが一般的だが、本物の妖精は人間よりも遥かに魔力の扱いに優れた魔法生物である。

なめてかかれれば各属性の下級攻撃魔法が無数に降り注ぎ、手足がバラバラになる無惨な死に様を晒すのだ。

しかしこちらがしっかりと魔法対策をし、数を揃えれば、元来戦闘向きでは無い妖精を相手に人間の軍が負けることは無い。

そして、それだけの用意は現在の手持ちの兵力だけで事足りていとキルヴァンは判断した。

「そうだ、この情報を聞きだした男――」

「キッシュという名の、村の道具屋を営む者です」

「ああ、ちゃんと処分しておけよ？」

「……彼は人間ですが、よろしいのですか？」

「中年の男など奴隷にしても買い手がつかんだろう、生かしておくだけ無駄だ。」

なにより、土人^{ドワーフ}と子を成すような外道など生かしておけん、汚らわしい」

「はい、仰るとおりです」

「まあいい、男も妻子の方も、私が処分の指示を出すでしょう。」

「お前はすぐさま聖域の確保へ行け」

了承の言葉を残してコルウスが退室する。

キルヴァンは再び窓の外へ目をやると、わずかに微笑んだ。

彼の眼下、ギルドの正面にある村の中央広場に、木組みの十字架が一行に突き立っている。

十字架には、神に叛いた愚かな‘魔族’、すなわちニーノ達イルズ村の冒険者が磔刑に処され、見せしめとしてその凄惨な遺骸を晒し

ている。

死体の山を成す者達も十分に悲惨だが、即座に火で焼かれ、骨は土に埋められる。

十字架に貼り付けられたままいつまでも晒し者となる彼らに比べれば、埋葬されるだけ上等であった。

この死に溢れる地獄絵図はしかし、キルヴァンにとっては自身の輝かしい未来に繋がる栄光の第一歩なのだ。

イルズ村の制圧は、僅かばかり犠牲はでたが任務は完遂、その上に聖域の発見というあまりに大きすぎるオマケ付き。

正しく神が祝福してくれているとしか思えないほど順調に事は進んでいる。

故に笑う、自然と笑みがこぼれる。

キルヴァンは満ち足りた心持で、胸の前で十字を切り、祈りを捧げた。

「我が信仰、天上よりご照覧あれ――」

第62話 狂化

イルズ村へ至る街道の半ばという辺りで、前方から立ち上る黒い煙が目に入ってきた。

「くそっ、アイツら村に火を放ったのか！」

本当に村が燃えているのかどうかは勿論見えない、だが、それ以外にあの黒煙が発生した理由は考えられない。

村の異常の片鱗を直接目にしたことで、街道を走る足により一層の力が入る。

その時、左手に広がる森から俄かに鳥の群れが飛び立つ音を聞いた。

森には多くの鳥が住んでいるし、群れが一斉に飛び立つこと事は当たり前にあることなのだが、今この空を舞う鳥の数はあまりに多い気がした。

「クロノ！」

フードに入っているリリイが、俺のローブを引っ張る。

「なんだ、どうしたリリイ？」

「たいへん、泉が――」

足を止め、あわあわと焦った様子のリリイの台詞に耳を傾ける。

リリイが何を訴えかけているのか、言葉で理解する前に、森の方から俄かに上がった煙を見て事情を察した。

「まさか、光の泉にも十字軍が迫っているのか？」

なぜそんな所に、何か財宝があるとでも思っているというのだろうか。

リリイがフードから飛び降り、今にも森に向かって駆け出そうとする。

「あっ、待て！」

リリイは例え自分が光の泉から追い出されても、その場所を大切

に思っているということは知っている。

女王の加護が無くなる、とはその土地が濃い魔力に満ちるという以外にどんな効果、意味合いを持つのかまでは正確に分からないが、妖精達が決して人の立ち入りを許さない態度を見れば大方の予想はつく。

光の泉は、恐らく妖精以外の種族が立ち入る、または荒らされたりすれば、女王の加護、と称されるその土地にある何らかの魔法効果が消失してしまうのだろう。

どうであれ、リリイ含め妖精達が何者かの侵入をなんとかしてでも防ぎたいと考え、行動するのは事実だ。

十字軍が何かの目的の為に光の泉へ侵攻したため、妖精との間で争いが起きた、それがあの森から立ち上る煙の正体ってわけだ。

リリイに静止の言葉をかけたものの、俺には彼女を引き止める理由は無、寧ろ俺も加勢に行きたいくらいだ。

だが、争いの煙が上がっているのは光の泉だけでなく、イルズ村もそう、ここで簡単に放っておくことなどできない。

「リリイ、光の泉に行くね。」

クロノは村に行つて」

「……大丈夫なのか？」

そうだ、つまるところ最優先で重要なのはリリイの身の安全だ。

今更ながら気づく、俺はイルズ村が襲撃にあったことに対する怒りと焦りでひたすら突き進んできたが、自分を、ひいてはリリイ自身をとんでもない危険に晒すことになるに違いは無い。

勿論、だからと言って退く気はないし、リリイは必ず守る。

しかし、リリイを一人で十字軍に向かわせるというのは――

「だいじょうぶ！ リリイのこと、信じて！」

リリイは、俺のパートナーだ、一方的に俺が守る存在じゃない。

信じると言われれば、信じるしか無いじゃないか！

「分かった、けど無茶はするなよ」

「うん、クロノも」

「ん……そうだな、分かってる」

そうだ、もうサリエルに挑んだように無茶はしないとリリィに約束したんだ、そうそう軽はずみな行動はできない。

「十字軍が何人いるか分からんが、軍で行動している以上一人でどうにかなる数じゃないのは間違い無い。」

お互い事が済んだらすぐに退く、必ず今日中にはクウアル村へ帰る、そしてギルドで落ち合おう」

「うん！」

それ以上言葉は交わさず、俺とリリィはそれぞれ目的の方向へ走り出す。

果たして、その先にどんな地獄が待っているのか、今の俺に考える余裕などは無かった。

イルズ村の外れにある家々は、轟々と真っ赤な火炎に飲み込まれているか、すでに原型を留めないほど焼け落ちているかのどちらか。街道にはそこかしこに大量の血の跡が見えるが、そこに倒れているはずの誰かの姿は見えない。

この夥しい出血をした者は、別の場所に運ばれ治療しているに違いない、そう僅かな希望的観測にも縋りたい。

しかし、辺りに立ちこめる濃密な死臭が、そんな希望を粉々に打ち砕く。

死臭は、門を抜けた先、村の中心部から漂ってくる。

信じられない数の命を奪われたのだという現実が、村を囲う壁の向こうに待ち構えているのだと俺に示す。

「はっ……はっ……」

すでに、俺の足は全力で駆けることを止め、まるで夢遊病患者のようにふらふらと街道を歩き続けるのみ。

今まで、それなりに人の死には接した、それどころか、人を殺め

た事だって俺にはある。

ドラゴンを前にしても、あのサリエルを前にしても、精々が足の震えが止まらない程度だったというのに、血と炎で彩られた光景を前にして感じるこの恐怖はなんだ。

「なん、だよ……」

この村は、イルズ村は、戦いとは一切無縁の、俺がこの世界で漸く得られた安息の場所だ。

それが、どうしてこんなに血生臭い廃墟に変わっているんだ。

あつてはならない、こんな現実、認められない、信じたくない――そんな風に呆然としながら、どれだけの時間歩いたのだろうか。

不意に、目に入ったある光景を見て、俺は足を止めた。

それは、未だ奇跡的に火のついていないある一軒の小さな民家から、白い服を着た人間の兵士が出てくる所だった。

その兵士は、左手にキラキラ光る何か、恐らく銀貨だと思われるコインを幾つか握り締め、何事か嬉しそうに声を挙げていた。

それから、家の扉から別な兵士二人が物を満載した木箱を抱えながら出てくる、その二人も顔には笑顔が浮かんでいる。

兵士達は家の前に置いてある台車のようなものに箱を載せる、その時のドスン、という音が妙に大きく響いたように感じた。

首を下げなければ潜れない様な小さな扉に対して兵士達がなにやら言い合いながら、三人は再び民家へ入る。

そして、次に彼らが出てきたその瞬間、呆然としか現実を認識できていなかった頭の中で、何かが切れるような、弾けるような感覚を憶えた。

目に映る光景をはっきりと認識する。

三人の兵士は、平服を纏ったゴブリンの死体を、それぞれ引き摺っていた。

耳が、彼らが口にする言葉を断片的に聞き取った。

「とんだハズレ――薄汚ねえゴブリンのガキしかいねえ」

「――せめてエルフの女だったら楽しめたのに」

「金はあったからまあ良かった——」

そして、三人は先ほどの木箱よりも乱暴に、引き摺ってきた死体を荷車へ放るように乗せた。

その死体は、いつも朝にこの道を通る俺に挨拶をしてくれたゴブリンの農夫ヴァーツさん、彼の子供達に違いなかった。

「ああ……」

俺が守りたかったイルズ村、そこに住む見知った人の死を目の当たりにして、

「うおおああああああ!!」

怒り狂った。

そう、文字通り狂っている。

なぜなら、もう何もかもが手遅れであったことを理解してしまったのだから。

俺の左手には、いつの間に取り出したのか『呪鉈「辻斬」』がしっかりと握り締められていた。

黒化で完全に押さえ込んでいるはずの憎悪の念が、怒濤の如く頭と魂に流れ込んでくる。

普段ならそのおぞましい感情の奔流には反射的に抵抗するが、今はそれが不思議と心地よく感じた。

最早この感情が俺の怒りなのか、鉈の呪いなのか、区別はつかない。

ただその心は、俺の体に動けと命令する。

この目に映る全ての‘敵’を殺せと。

フェアリーガーデン

妖精の森の最奥に位置する、光の泉へ向かってリリィは疾走する。疾走、という表現にはやや誤りがあるかもしれない、そもそも幼児体型で短いリリィの足は、クロノのように脚力を強化しても、地面を蹴って直接走るのにあまり大きな効果は得られない。

現在のリリィは全身を球状に覆う光の球に見える、妖精結界を纏った状態で、ピヨンピヨンとバツタのように飛び跳ねて高速移動を実現している。

倒木や岩などの障害物を危なげなく軽々飛び越えていくリリィの姿は、白く光る大きなボールが弾んでいるようにも見える。

そうして人間が走るよりも圧倒的に速く移動しつつ、リリィは光の泉が近づくに連れてどんどん周囲に満ちる魔力が濃くなつてゆくのを肌ではっきりと感じた。

本来ならこの辺りにまでリリィが来れば、その接近を敏感に察知して妖精達が止めに来るのだが、今はその小さく輝く彼女達の姿はどこにも見えない。

先ほどから遠雷のように森の奥から木霊してくる攻撃魔法の炸裂音、それこそ彼女達が現れない理由。

光の泉へ向けて押し寄せてきている十字軍を、妖精達が総出で迎え撃っているのだ。

もし、人間に光の泉の‘中心’にまで侵入を許せば、クロノが予想したとおり、この地を満たす『妖精女王の加護』は消失したただの森となってしまう。

そうなれば、もうここで妖精が生まれることは無く、妖精にとってみれば故郷を失うのと全く同じ意味を持つのだ。

故郷を守らなければ、自分が生まれた大切な場所、妖精女王の加護が満ちる尊い土地。

故にリリィは走る、跳ぶ、急ぐ。

早く自分が仲間達の下へ駆けつけ、普通の妖精よりも強力な固有魔法^{エクス}を宿すこの力を使って、人間達からこの場所を守り通さなければ――リリィはひたすらそれだけを考えて前進していた。

しかし、周囲に満ちる魔力が一定量を超える濃度、つまり妖精女王の加護が強く働く範囲内にリリィが踏み込んだその瞬間、彼女に変化が訪れた。

「守る……」

弾丸のように突き進んでいたリリィが急激に減速する。

「……こんな場所を？」

ゆっくりと歩くようになったリリィ、その身はすでに球状に展開する妖精結界は消失し、代わりに彼女の全身そのものが強く発光を始める。

「ふふっ……バカじゃないの」

そう呟いたリリィが一步踏み出す度に、彼女は文字通り、大きく、なっていく。

見る見るうちに手足は伸び、胸は膨らみ、幼児特有の丸みを帯びた体から、女性らしい柔らかな曲線を伴う体へ。

‘可愛い’ 子供から、‘美しい’ 少女へとその身を変化、いや、成長させた。

しかし、この一瞬で変わったのはこの外観よりも、寧ろその心中であつた。

さらにリリィは一步進む、すでに体の成長は止まっていたが、先ほどから起こる脳内の変化は未だ続く。

思考はどんどんクリアに、だがより複雑に、同時に、感情を、現状を、損得を、何が出来て、何が出来ないのか、どうするべきか、しないべきか――

リリィがその歩みを止めた時、漸くその身に起こる変化は全て止まった。

それは、完全無欠の美を体言する少女の身体と、膨大な固有魔法エクストラの知識を宿す、妖精リリィの真の姿がそこにあつた。

リリィを元の姿に戻すほど濃密に満ちる魔力の環境、これこそが光の泉が持つ『妖精女王の加護』その力の一端である。

この‘加護’の及ぶ範囲内に居る限り、リリィは常時この姿でいることが出来るのだ。

「ふふふ――」

外であれば月に一度、満月の夜にのみ戻れるこの姿、男ならば誰もが息を呑むその美貌、クロノにも成長して尚愛らしい表情しか見

せたことは無かったが、

「あはははっ！」

今のリリイは凄絶な笑みを浮かべていた。

「誰がっ、こんな場所、あんなヤツらを守るっていうの!？」

幼く、知能が著しく減退した普段のリリイでは到底考えられない残酷な思考を、今の彼女はする。

幼児状態のリリイは、その見た目通りに純粋な心しか持たない、しかし、元の姿に戻り、本来あるべき心と感情と思考能力が復活した彼女は、妖精らしい心とは別に、人間らしい残忍で狡猾な知能と貪欲な欲望も同時に併せ持っていた。

「あはは、最高のチャンスだわ、この機会に光の泉なんて――」

クロノは未だ気づかないが、リリイが元の姿に戻るにあたって最も恐ろしいのは、強力な魔法が行使できることでは無く、この清濁併せ持つ半人半魔の心である。

「滅ぼしてしまえばいいのよ」

第62話 狂化（後書き）

おや、リリイの様子が……

第63話 光の泉（1）

その時、突如として侵攻してきた白い服装の人間達との戦闘を一時切り上げて、妖精達は急ぎ光の泉の中心地点へと引き返していた。

「リリィ……あの妖精モドキ、一体なにしてるのよっ！」

この光の泉に住まう妖精達のリーダーが彼女達の先頭を切って飛ぶ。

リリィと違い本物の妖精族である彼女達は背にある二対の羽で常時飛行能力を得る。

森の木々や草花をすり抜けながら高速で飛翔する幾つもの小さな光の球体は、この魔法の存在する世界であっても尚、人が目にすれば幻想的な感動を抱く美しいものであった。

しかし、当の本人である彼女達の本心は驚愕と不安で一杯、その小さな胸がはち切れんばかりに、この緊急事態によって思い悩まされていた。

「あと少し、間に合って――」

木々が途切れて森を抜けると、そこにある小さな泉へ妖精達は勢いのまま飛び出す。

この小さな泉こそ、正しく『光の泉』である。

名前に‘光の’とついているが、実際に魔法的な効果によって発光しているということは無い。

天から降り注ぐ陽の光によって水面がキラキラと輝く、ごく自然な光しか発していない。

だが、この泉周辺に満ちる魔力の濃度は、通常とは比べるべくもないほど濃密なものであり、魔術の素養が無い一般人であっても、魔力の存在をはっきりと認識できるほどである。

そのお陰でこの場所は、森の奥にある小さな泉、というだけでなく、神秘的な雰囲気がか身ともにはっきりと感じられる、まさに聖

域に相応しい場所となっている。

そして、そのほぼ円形をした泉の中心に、彼女、は居た。
「リリィ！」

憎憎しげに、妖精のリーダーが彼女の名を叫ぶ。

ただでさえ妖精にあるまじき体の大きさに加え、人のように服、クロノが与えたエンシェントビロードのワンピースを纏うリリィの姿は、それだけで怒りを覚える。

「アンタは、こんなところで何してんのよっ！」

今がどういう状況か分かってんでしょ!？」

本来ならすぐさま侵攻してくる人間との戦いに加わっているべき、と妖精達は全員認識しており、優雅に泉の中心に浮かぶりリィに対して、紛れも無く敵意を向けている。

それは決して共に戦う仲間にもけるものではない感情だ。

感情をある程度読み取る精神感応能力テレパシーを持つ妖精、半魔とはいえ勿論その能力をリリィは所持しており、そういった自分を取り囲む妖精達から放たれる悪感情に気づいていないはずは無い。

だが、リリィは何も知らないというような涼しい顔で応える。

「そう、大変ね、人間共が群れをなしていきなりここに向かって来たんだもの。」

ふふ、もしもここまでアイツらが来たら、どうなっちゃ——」

「それ以上は止めなさい! 言っていることと悪いことがあるですよ!」

この地の加護が失われる、その最悪の予想を口にすることすら、妖精である彼女達には許しがたかった。

「そう、まあいいわ。」

それで、貴女達だけであの人間共を追い返せるの?」

「そ、そんなの——」

「魔術士の数もちゃんと揃えているようだし、向こうも多少は戦いなれしている感じじゃない。」

一発撃ち込んだくらいじゃ怖がって帰ってくれないわよ、いつも

みたいに」

「分かってるわよそんなことは！」

「うん、分かってるよね、私がいないと、負ける、って」
現状の核心を付くりリイの台詞。

遊んでばかりでそれほど頭が良いとは言えない妖精族ではあるが、その程度の判断ができるほどの頭脳は持っている。

「そ、その通りよ——リリイ、アンタがいないとあの数の人間は追いつけない、認めるわ」

「うん、それで？」

リリイがにこやかに微笑む、そこにとっても邪気などは見えないが、この妖精のリーダーを激高させるには十分な態度だった。

「それで、ってなによっ！？」

光の泉が危ないのよ、さっさとあの忌々しい人間共と戦いなさいよっ！」

「ええ、何その言い方、人にモノを頼む態度じゃないんじゃないの？
そんなんじゃないや村社会でやっていけないわよ、うふふ」

「なっ——」

妖精達は絶句する。

「何言ってるんのよ！？」 バカじゃないのこんな時に、冗談言ってる場合じゃないでしょうが！

早く戦いなさいよ、ここを守りなさいっ！」

「五月蠅いわね、ちよっとは落ち着きなさい。」

冷静になって考えてみてよ、私は生まれてからさっさと貴女達にここを追い出されたの、妖精にとってここは故郷で聖域かもしれないけど、私にとってはそこまで大切には思えないのよ」

「何をバカな、妖精にとって聖域は絶対でしょ、本気でそんなこと思ってるっていうの！？」

「妖精にとって、でしょ。」

私を、妖精じゃない、と言って追い出したのはそっちのほうでしょ」

「それは――」

「ああ、そんなコトは別にいいのよ、私が純粋な妖精じゃないことにコンプレックスなんて無いし、本当の妖精になりたいとも思わないし。」

半人半魔の私は、妖精族と価値観が違うの、それで……」

リリイはまた微笑む。

「そういう相手にモノを頼む時って、人は誠心誠意、お願いするべきだと思わない？」

「な、なにを……お願い、ですって？」

「そう、大事でしょそういうの、私も当たり前みたいに戦わされるのはイヤだしね。」

ほら、文句を言う前に、早いところ頭を下げたほうが良いと思うけど、もう、すぐそこまで迫ってきてるでしょ？」

今のリリイは、地の利もあって十字軍の魔力をかなりの範囲で感知できる。

目には見えないが、森の向こうで、警戒しつつも確実に泉へ向かって距離を詰めてくる様子がリリイには分かる。

妖精達は、リリイほどの感覚を持つてはいないが、状況を考えるだけで彼女の言葉を嘘と断じることなど到底出来ない。

普段、あまりモノを考えない妖精達が、この余裕のない時間を使って精一杯思考する。

それは、妖精モドキと蔑んだ相手に頭を下げることを拒む自尊心と、頭を下げるだけで光の泉の安全は保障されるという実利。

どちらが大事かなど、考えるまでも無く重要かは分かるが、こういう状況で即座に判断が下せないというのは、人間も妖精も大差の無い存在であった。

そして、しばらくの沈黙の後、ついに妖精達は口を開いた。

「……します」

「えっ、なあに？」

リリイは先ほどから変わらず微笑みを浮かべ続け、弾むような声

で言う。

「お願いします」

「よく聞こえない」

「「お願いします！ 光の泉を守ってください！」」

妖精達の悲痛な懇願の声が光の泉に響き渡る。

それを聞いたリリィが、微笑みではなく、満面の笑みでもってその声に応える。

「うふふ、イ・ヤ♪」

瞬間、まるで時間が凍りついたかのように静寂が訪れた。

妖精のリーダーは、俯き、肩を震わせながら声を発する。

「な、な、なんて……」

「さっき言ったでしょ、私にとってここは大切な場所じゃ無いって」

「だ、だから、頼んだでしょ、ちゃんと」

「うん、でもお願いされたら私が戦うなんて一言も言って無いよね」

リリィは未だ微笑みの表情を崩さないが、その目には最早感情が抜け落ちていた。

「私は絶対にここを守る為に戦わない、だから、みんな諦めてちょうだい」

冷たく言い放つリリィの言葉に、事ここに至って妖精達はようやく、彼女の本心を理解した。

「ま、待って、そんな……」

「全滅しても構わないから戦う、っていうなら止めたりしないから、どうぞご自由に」

「待って！？ お願い、謝るから！ 戦って、お願い、お願いしますう！」

恥も外聞も無く、泣きついて来る妖精を小うるさい羽虫を払うかのように手で叩く。

ここに集った、光の泉に住まう全ての妖精達は、それでも尚、リ

リイに助けを求める声をあげるか、絶望に泣き崩れるかのどちらからかとなる。

そんな様子をひとしきり見て満足したリイは口を開く。

「あ、そうそう、どうせ滅びるし、ここにある『紅水晶球』クイーン・ベリルは私が貰っていくから」

その言葉を聞いた瞬間、再び妖精達の時間は凍った。

なぜなら、リイが貰うと宣言した『紅水晶球』クイーン・ベリルこそ、この泉に魔力が満ちる‘妖精女王の加護’を展開させる源となる魔法具^{マジックアイテム}、いや、大魔法具^{アーティファクト}と称される物だからである。

『紅水晶球』は泉の中心、その水底にある小さな祭壇の中に安置されている。

そのため、そこから同心円状に‘加護’が広がり、周囲一帯が濃い魔力に満ちているのだ。

しかしながら、この『紅水晶球』クイーン・ベリルを置けば、どこでも妖精の生まれる聖域が発生するかと言われれば、そうでは無い。

大地の地下を走る魔力の通り道である『地脈』^{レイライン}を代表とする、様々な魔力的な条件が一致しなければ聖域は生まれなし、そういった特殊な場所ですらに複雑な魔法、それこそ『神』が施す術式がなければ聖域の効果は発揮しない。

要するに、妖精だろうが人間だろうが、『紅水晶球』クイーン・ベリルを安置してある祭壇から無闇に動かせば、構成術式の発動が停止し、聖域は消滅するのだ。

そうなれば、徐々に周囲に満ちる魔力は減少してゆき、いずれ他の場所と変わらぬ自然の泉に戻るのみとなる。

つまり、ここでリイが『紅水晶球』クイーン・ベリルを自分のものにすると言ったことは、聖域を守るどころか、自らの手で滅ぼすということ在意味していた。

「リイ！ アンタっ、気が触れたわねっ!？」

「嫌な言い方しないで欲しいわ、『紅水晶球』クイーン・ベリルは私が魔力を引き出すには丁度いい大魔法具^{アーティファクト}、持っていれば、この先、必ず役に立つ、欲

しいと思うのは当然でしょう？」

『クイーン・ベリル紅水晶球』は本来、妖精を生み出す聖域を発生させるための道具では無く、正確にはキーアイテムに過ぎない。

妖精女王が聖域の創生に利用しなければ、膨大な魔力を宿す美しい宝石以上の価値は無い。

もつとも、ただそれだけで大魔法具と名づけられるほど、この世界においては大変価値のある物となるが。

「そんなことはさせないっ！」

周囲の妖精達は一斉に妖精結界を展開し、オラクル・シールドリリイへ殺気を向ける。リーダーの合図があれば、数百発の初級攻撃魔法がリリイの細身へ向かって殺到する。

当然、それも分かっていたいながら、リリイは全く焦った様子も見せずにゆっくりと妖精達へ言い聞かせる。

「私に、勝てると思っているの？」

リリイが背から生える二対の羽を明滅させ、自身の妖精結界を展開させる。オラクル・シールド

他の妖精達が発するどの光よりも強く、大きく結界は輝き、そこに籠められている魔力量が桁違いであることを暗に知らしめる。

「止められると、本気で思っているの？」

バレットアーツクロノが魔弾を使う時のように、小さな白い光球をリリイは周囲にいくつも浮かべる。

この光球が一つ弾ければ、妖精の小さな体など、その身を守る結界ごとバラバラに吹き飛ばすほど凶悪な威力を持つ。

光球はここにいる妖精達と同じ数だけリリイは作り出している。

「私はね、この場所が大嫌い、貴女達も大嫌い、だから、この機会に全部潰してやることに決めたの。」

でも、ここで背を向けて、妖精としての誇りも矜持も全て捨てて逃げ出すというのなら、私は追わないし、後ろから撃つたりもしない。

だって私がここを出て行った後は、貴女達も手出しはしなかった

からね、それくらいの情けはかけてあげる」

周囲に浮かぶ妖精達に明らかな動揺が広がる。

リリイは本気だ、この場で彼女を説得することは出来ず、また、すぐに迫り来る人間を止める手立ても無い。

最早、聖域の崩壊は避けられない。

後は自分達の命が有るか無いか、その選択のみ。

「私がこれまで、律儀にこの場所をモンスターから守り、貴方達を生かしておいたのは、私がそれを望んでいたからよ」

光の泉を離れて幼児リリイになってしまうと、元の状態で考えたような恨みは気にならなくなるし、本心がそう望んでいたとしても、幼児状態では思考が止まる、あるいはその残虐な結末に恐れ、復讐を実行へ移すことは絶対に無い。

しかしながら、真の姿に戻る満月の晩、その時に今回のように光の泉へ行けば、そこにいる妖精を皆殺し、聖域を崩壊させることも出来た、だが、結局それをするのはこれまで一度も無かったし、しようとしたことも無かった。

「あ、変な勘違いはしないで、私はただここを追い出された恨みを晴らす、その行為自体に特別思い入れは無かったし、このまま一生係わり合いになる気が無かっただけ。

本気でここを守りたいだの仲間を守りたいだの思っちゃうのは子供の時だけよ。

要は、貴方達と面倒を起こすよりも、泉を守って波風立てない方が楽だったってだけのこと。

でもね——」

と、言葉が続けた瞬間、妖精達にこれまで高度な精神防壁マインド・プロテクトがかかっていて一度も読み取ることの出来なかったリリイの感情が、急に流れ込んできた。

「私、好きな人が出来たの」

その感情は、熱く、どこか粘着質で纏わり付くようなイメージを持っていた。

まるでマグマのように高熱を発しながらドロドロした感情の波が、妖精達の心へ流れ込む。

果たして、この感情を妖精族が好ましく思う、純情可憐な恋心と言えるのか、肯定できる妖精達は一人も居なかった。

「その人が現れてから、全ての価値観が変わった、優先順位が変わった、世界が変わったの。」

毎日がね、とても楽しくなった――」

「……あの人間」

リリーの真正面に浮かぶ妖精達のリーダーがぽつりと漏らす。

思い起こすのは、三ヶ月ほど前、突然空から赤い果物の詰まった木箱と一緒に森へ落下してきた薄汚い格好をした男の姿。

「あつ、そういうえば、貴女はクロノと始めて出会ったあの時に居たんだっけ。」

うふふつ、やだ、私の好きな人バレちゃった、恥かしいなあ」

両手を赤らめた頬に添えて、首をふるふると振るわせるその姿は、恋の話題に浮かれる年頃の少女のものにしか見えない。

だが、この場にいる者達全員の命と故郷を奪おうかという状況で見せる姿では無い。

あまりに場違いな反応に、不気味な印象しか妖精達は抱けない。

「私とクロノは、このままずっと、ずうっつと、二人で一緒に暮らすの。」

そのつもりだったんだけど、邪魔が入っちゃったみたい。

世相に疎い妖精族は知らないと思うけど、今ここに迫ってくる人間共はね、十字軍って名乗る、別の大陸からやってきた侵略者よ。

アイツらに住むところを追われる、っていうのは、私も貴女達も同じ。

それに、クロノはアイツらを物凄く憎んでる、きつと、あの白い格好の人間共を沢山殺すよ、ふふふつ、格好いいなあ――」

「リリー……何が、言いたいなのよ」

深刻な話と、好きな男の話をごちゃ混ぜにされると、リリーの話

の趣旨が脱線する。

少女の姿となったリリイは理路整然と会話ができる明晰な頭脳は持っている、だが、彼女にしてみればそんな簡単なことすらおかしくなるほど、リリイはクロノと呼ぶ男にイカれているのだと、妖精達はイヤでも理解してしまう。

「ああ、うん、要するに、私が『クイーン・ベリル紅水晶球』が欲しい、役に立つ、って思ったのはね、クロノとの今後を考えた結果によるものなのよ。まず、十字軍によってイルズ村、いいえ、ダイダロス領内全土は制圧される。

そして十字軍はそれで満足する事無く、このパンドラ大陸全土を征服するまで止まらない。

ヤツらは確か『白き神』とかいうのを信仰してて、ソイツが望んだから、パンドラ大陸を捧げる為に十字軍が来たの。

この先、どこへ逃げても遅かれ早かれヤツらと戦うことになる、その時、自分の力っていうのは何よりも重要でしょ。

私はね、この力でクロノを守る、十字軍をクロノが皆殺しにするまで、私が守ってあげるの！」

「……」

妖精達から、最早言葉は出なかった。

「力が必要になったから、私は『クイーン・ベリル紅水晶球』を求めた。

その所為で、加護は消えちゃうけど、どうせ十字軍の手に落ちるんだし、構わないわよね、寧ろ元々キライだったモノが消えて清々するわ。

さ、もう私の話はお終い、それで、貴女達はどうするの？」

妖精達に、すでに行動は決まっているだろうとばかりに言い放つ。

「これだけ言い聞かせたんだから、みんな大人しく退いてくれるよね？」

言い聞かせたのは、あくまでリリイ自身の感情であり、妖精達を誠心誠意説得したわけではない。

だが、リリイが不転の決意、といえるほど立派ではないが、一

切譲る気の無い歪んだ愛を抱いてしまっていて、妖精側から説得の余地など全くない事は明白となった。

元より、本気のリリィに戦って勝てるわけが無いという事を、本能的に悟っている妖精達にとっては、そもそも選択肢にも成り得ない。

逃げ延びるか、‘無駄’に命を散らしてリリィと戦うか。
すでに判断は決している。

妖精達は、再び嘆き悲しみ、嗚咽を漏らしながら、一人、また一人とこの場を飛び去っていった。

「それでいいのよ、どうせ聖域に居なくなつて死ぬわけじゃないんだし。」

妖精はその辺の野山で遊びまわってればいいのよ、馬鹿なガキみたいだね、あははっ」

「――リリィ」

「ん、貴女まだいたの？」

すでにほとんど全ての妖精達が彼方へ飛び去っていったのをリリィは見送ったが、最初から彼女の真正面に立ち続ける妖精のリーダーは、未だその場に留まっていた。

見れば、リーダーの周りには、9人の妖精達が集まっている。

「死にたいの？」

リリィの声のトーンが一つ下がる、同時に、この場に留まる妖精達に、初めてリリィから殺氣が送られた。

妖精達は身をすくませるが、それでも尚動こうとはしなかった。

「アンタは、絶対に許さないっ！ 死ねええええ！」

妖精達が、一斉にリリィへ向かって攻撃魔法を放った。

「光矢！」
ルクス・サギタ

無詠唱で発射可能な光属性の下級攻撃魔法が、妖精族の基本的な固有魔法だ。
エクストラ

下級魔法といえども、一人当たり5本前後、10人が同時に放ち、合わせて50近い光の矢がリリィ目掛けて飛来する。

ドドドッ！

鋭い閃光と、爆発音。

ルクス・サギタ

光矢は爆発でダメージを与えるものでは無く、光が持つ高熱で対象を溶かし、穿つのがその攻撃力となる。

オラクル・シールド

それでも爆発音が響くのは、リリイの妖精結界と接触し、魔力がぶつかり合って衝撃が発せられるからだ。

これでリリイを倒せるとは妖精達は思っていない、予想される反撃を見越して、リーダーの指示の元、妖精達は一気に散開する。

しかし、その行動は全く無駄となる。

妖精達は、リリイが強いというのは知っているが、それはどんな威力と性能を秘めた魔法を扱えるか、そういった具体的なことは一切知らない。

なぜなら、リリイと実際に戦ったことなど一度としてないからだ。

ルクス・サギタ

故に、リリイが無詠唱は勿論、同時に10発の光矢を放つことなど造作も無いだろうとは分かってても、それがサリエルですら回避不能を判断するほどの恐ろしい自動追尾能力を持つことまでは分からない。

「きゃあっ!？」

ルクス・サギタ

リリイから放たれた10発の光矢は、散開して飛ぶ妖精全員を難なく捉え、命中した。

サリエルへ撃った時とは比べ物にならないほどに一発の威力は抑え、当たっても妖精のシールドだけを綺麗に破碎する程度でしかなかった。

妖精達は衝撃に吹き飛ばされて、次々と泉へと落下してゆく。

水面に叩きつけられ、蛙が飛び込んだような小さな水しぶきがあるのをリリイは宙に浮いたまま見下ろしていた。

「ううっ……」

妖精達は、全身が水に濡れただけで、とくに負傷は無い。

すぐに水面から飛び上がり、再びリリィに挑もうとした矢先、

「ぎゃあああああ！」

悲痛な叫びが轟いた。

リリィが、極々小さく引き絞った光で、リーダーである妖精の右掌をピンポイントで撃ちぬいたのだった。

まるでアンティークドールのように小さな姿の妖精、その掌といえは大きさは僅か数センチ。

放った光は真っ直ぐ直進して命中した、つまり、追尾能力は付加されていない。

「ああああ、痛いっ！痛いよおお！！」

復帰した妖精達が、痛みへのうち浮かぶ水面をバシャバシャと叩くリーダーの下へ一目散に飛んでゆく。

目的は勿論、治癒魔法による回復だ。

幸い、腕が吹き飛んでいるほどの大怪我では無いので、すぐに治癒できる、そう妖精達は思った。

「ダメじゃない、全員が敵から目を逸らしちゃ」

リリィの第二射は、リーダーへ治癒魔法をかけようと接近してきた妖精達の先頭を行く一人に命中した。

撃たれた箇所は、リーダーと同じ右掌であった。

水面をもがきながら痛みを訴えて泣き叫ぶ人数が二人に増える。

妖精達は、新たに増えた負傷者の為に、さらに二手に分かれて飛ぶ。

「全然ダメ、ランク1の冒険者でもっとマシな動きをするわ」

二度とも同じ箇所をリリィは撃ち抜いてみせたのだ、自動追尾能力などなくとも、妖精が飛行する程度の速度なら、どこでも自由に命中させられるという意味を持つ。

呆れた表情のリリィは、二人に接近する各々の妖精を、順番に右掌だけをぶち抜いて撃墜していった。

気づけば、水面には10人の痛みに苦しむ無惨な姿の妖精達が浮かぶ。

「まるで子供の遊びね、そんなんで私と戦おうなんて、本気で思ったの？」

ねえ、本気で私を殺せると思ったの？」

リリイは、未だ出血の止まらぬ右手を涙目で押さえるリーダーの下へ近寄り、宙に浮いたままその場でしゃがみこむような体勢を取る。

「次は左掌を撃つわ、その次は右足、その次は左足」

「ううつ、ぐうううつ」

「まだ戦う？ やるって言うなら、すぐに撃ってあげる」

「ぐうう……こ、殺して、やるううつ！」

「そう、じゃあ撃つね」

小さな閃光が瞬く。

刹那の間に、リリイの宣言通り、左掌に穴が空いた。

「ああああああああ！！」

「まだ戦う？」

「うああああ、ま、待つ——」

「撃つね」

再び瞬く閃光。

右足の甲に穴が空く。

「ああ——」

「もうやめてえっ！！」

周囲に浮かぶ他の妖精達が一斉に叫んだ。

「楽に死ねると、思った？」

が、リリイからはすでに光が放たれていた。

「——」

両手両足の甲を撃ち抜かれ、最早声にもならない苦悶の声を漏らす。

妖精達がもう止めるよう泣き叫ぶ声を聞きながらリリイはつまらなそうな口調で言う。

「撃たれた痛みで治癒魔法も使えなくなるような低い程度で、戦う

とか言わないでよね、余計な手間がかかったじゃない」

リリィは立ち上がるように、空中で膝を伸ばす。

そして、妖精達に背を向ける。

「飛ぶくらいはできるでしょ、さっさと失せなさい。」

それとも、この地の‘加護’が失われる瞬間が見たいのかしら？
痛みに苦しみつつも、自分達よりもさらなる苦しみを味わっている
無惨な姿となったリーダーをどうにか運び、弱弱しい光を発しながら
泉から遠ざかっていった。

「始めから大人しく言う事を聞いていれば痛い思いをしなくて済んだのに。」

でも、これで追い出された恨みは、無しに置いてあげる」

誰に言うでもなくそう呟いたリリィは、妖精結界に包まれた、眩
い光の球体となって、泉へとゆっくり沈み始める。

この透き通った泉の底に鎮座する、『紅水晶球』クイーン・ペリルを手にするべく。

第63話 光の泉（1）（後書き）

一人も妖精を殺さないとは、リリィはとても優しい良い娘ですよ
ね。

第64話 光の泉（2）

森に、一時の静寂が戻った。

「攻撃がやみましたね」

「……そのようだな」

自身の傍らに控える魔術士の言葉に、コウルスが応える。

光の泉の発見と制圧に向けて妖精の森へと分け入った、コウルス率いる搜索部隊は、予想通り妖精達との戦闘に入った。

つい先ほどもで、お互いに攻撃魔法を撃ち合い、森は爆発の閃光と轟音で震えていた。

しかし、一体どうしたことか、突如として妖精達は一目散に森の奥へと引き返していった。

背中を向けて真っ直ぐ逃げる妖精達であったが、その飛行スピードは人間である彼らが走って追いつけるものではない、特に足場の悪い深い森の中では尚更である。

「罨でしょうか？」

「妖精族が罨を仕掛けてくるとは考えがたい、単に、戦線を引いて戦力の建て直しを図っただけかもしれん」

コウルス自身に妖精族との戦闘経験は無いが、ある程度の知識はある。

頭にある知識とこの場の状況を照らし合わせ、彼女達の行動を推察する。

「奥に行くほど、この周囲に満ちる魔力が妖精族に力を与えるのだ、最奥で我らを待ち伏せしていると考えるのが妥当だろう。」

罨や奇襲に出るとは考えづらい、このまま前進する、ただし周囲の警戒は怠るな」

「了解！」

左右に展開する兵士達にコウルスの命令が伝わる。

ここに多くの魔術士と少数の歩兵は、キルヴァンが率いたイルズ村制圧部隊の中でも選りすぐりの者達である。

視界と足場が悪い森の中にあっても、コルウスの指示の元、一糸乱れぬ動きで隊列を組み、動き出す。

その実力は、先ほどまで続いていた妖精達との戦闘においても、軽傷者を出すのみで戦いを乗り切ったことでも窺い知れる。

もっとも、この先に待ち受ける妖精達が決死の抵抗に出ることは予想済みであり、先よりもさらに激しく攻撃魔法が雨となって降り注ぎ、流石の彼らも一人や二人の死者では済まない打撃を被ることになるだろう。

しかし、そうした恐れを表に出す者はおらず、彼らはただ静かに命令どおり、周囲を警戒しつつゆっくりと光の泉の中心へ向かって前進していった。

そうして進む途中、何度か奥のほうで光が瞬き、爆発音が聞こえ、俄かに緊張感が漂う。

だが結局、彼らに向かってはどこからも攻撃は無かった。

不審に思いつつも、彼らはついに森を抜け、光の泉へと辿り着いた。

「おお、ここが光の泉！」

「ああ、間違いなさそうだ」

眼前に広がる神秘的な光景に、兵士達の誰もが息を呑んだ。

泉は円形で、小さいながらも水底が透き通って見えるほど澄んでいる。

そして、泉の周辺には不思議と木々は無く、色とりどりの花々が咲き誇っているのみ。

正しく、童話の絵本に登場するような、妖精達の住処に相応しい景色であった。

だがそんな幻想的な景色よりも、あの泉に満ちる全てが聖水なのだと思えば、十字教徒なら黄金そのものが溢れているように見えるのだ。

一兵卒や一介の魔術士では計り知れない価値がここにはある。

「……妙だな」

聖域発見の感動よりも、コルウスは大きな違和感を覚えていた。妙だ、と呟いた時、隣にいる魔術士も何がおかしいのか察す。

「攻撃が、ありませんね」

まさか、知らず知らずの内に囲まれているのでは？ と疑うが、どうにも周囲からは何の気配も感じられない。

あの妖精達は一体どこへ消えたと言うのだろうか？

「如何でしょうか？」

「そうだな、周囲を調べて――」

コウルスがそう言い掛けたその瞬間、泉の中央が突如赤く光り輝いた。

突然の変化に、即座に臨戦態勢をとり、泉へ全力で注意を傾ける。赤い光は、どうやら泉の底から徐々に水面へ向かって上昇してくるように見えた。

一秒毎に肌で感じる魔力量が増大してきている感覚を覚える、それは魔術士ではないコルウスでもそうはっきりと感じられるほどであり、膨大な魔力を持った何かが、水面より出でようとしているのが分かった。

水面を波立たせ、眩い輝きを発しながら、ついにその‘何か’が姿を現す。

その瞬間、十字軍の兵士達は全てを忘れて、目の前に現れた人物にただただ目を奪われた。

「「美しい……」」

誰かが、いや、誰もがそう呟いた。

そう、泉から現れたその人物は、美しかった。

光り輝くプラチナブロンドに、エメラルドグリーンの瞳をした絶世の美少女。

その背より生える二対の羽は虹色に煌き、光が瞬く度に濃密な魔力が波となって広がる。

淡く光る白い乙女の柔肌を包むのは、夜闇のように深い暗黒の衣装、光の白と闇の黒の対比が、その存在を、美しさを、より一層引き立てている。

そして、彼女の胸元には真紅の輝きを煌々と放つ宝玉が抱かれていた。

「女神だ」

この少女を現すに、これほど相応しい言葉は無かった。

泉から現れる女神という存在は、アーク大陸における人間の文化圏でよく登場する。

道に迷った旅人が、魔を滅ぼす聖剣を求める勇者が、親に捨てられた幼い兄妹が、その伝説や童話の中で、彼女と出会うのだ。

そしてどんな物語にも登場する女神には必ず、この世のものとは思えないほど美しいという共通点がある。

今この瞬間、泉より出でる美しい少女の存在を、彼らがよく知る物語に当てはめ、連想するのは半ば必然と言えた。

「貴方達が、十字軍——」

呆然と見蕩れる十字軍兵士に向かって、少女が口を開く。

透き通った、心の奥深いところまで染みこんで来るような美しい声はしかし、

「欲に塗れた薄汚い人間共、うふふ、試し撃ち、には丁度良さそうね」

創作の女神と違い、人に慈悲を与えて助けることは無く、

「欠片も残さず、死んでちょうだい」

ただ、残酷に彼ら全員の死を宣告した。

「総員、防御体勢っ！！」

コルウスが剣を振り上げ叫ぶ。

少女から発せられる圧倒的な魔力と殺気を認識し、戦闘行動に入る。

「ふふ、遅おい」

少女が漆黒のワンピースドレスの裾を優雅な動作で翻した瞬間、

二つの白い光が明滅する。

ドッ

閃光がコルウスの左右を過ぎ去ったかと思えば、その背後に血飛沫が舞った。

「なっ——」

振り返り見れば、コルウスの命令を聞き入れすぐさま防御魔法を行使しようとした魔術士が二人、その頭部が綺麗サッパリ消え去っており、白い法衣を真っ赤に染めていた。

驚く間も無く、さらに三人目、四人目、と次々に光弾が魔術士の頭部に突き刺さり、跡形も無く粉碎して首なし死体を作り出してゆく。

気がつけば、全体のおよそ三分の一の数の魔術士が屍となっていた。

戦慄する、ほとんど反応する間も無く、即死させるだけの威力を持つ攻撃魔法を、一切の詠唱や予備動作無く連続で繰り出す者など、彼はこれまで見たことが無かった。

歳若く有りながら、すでに熟練と呼ぶに十分な鍛錬と実戦経験を持つコルウスだが、この少女が行使した攻撃は、そんな彼の戦いに関する常識を逸脱していた。

彼の常識とは、魔法はある程度の詠唱や儀式などを経て発動させるものであり、人間を即死させるだけの威力を即座に発動するなど、精々一発か二発といったところだ。

魔術士の全てが、即死級の魔法を連発できるというのなら、そもそも剣士や戦士といった者達は存在する余地など無い。

「脆い、やっぱり人間なんてこの程度ね」

少女がそう呟くのと同時、漸く防御魔法が発動し、何重にも展開された結界が生き残ったコルウス隊を覆う。

白魔術士達が全範囲の聖心防壁をかけ、さらに別の魔術士が水流ルクス・ウォルデファン
オルデファン アクア・ウ

防壁や砂礫防壁も発動し、3つの魔法を組み合わせた三重防護を形成。テラ・ウォルデファン トライシールド

複数の属性で防御魔法を張ることで、弱点となる属性での攻撃をカバーし、総合的な防御力を上げる事を可能とし、また重ね掛けによって単純に防御力も三倍に換算する事が出来る。

さらに、トライシールド三重防護の発動とほぼ同時に、コルウスを始めとした歩兵達には防御強化がかり、個人の肉体的な防御力も上昇している。相手が即死級の魔法を行使する以上、防御力の強化は何よりも優先されるべきことである。

すぐに、と普通ならばいえるほどの速度でコルウス隊の防御陣形は完成したが、相手はその僅かな隙だけで三分の一もの魔術士を葬ったのだ。

即時撤退も考慮に入れて、コルウスは次の手を思考する。

(これだけの防御力があれば、一撃でやられることは無い、問題はあの少女、いや、少女の姿をした化物を倒しきれるだけの攻撃力を得られるかどうか……魔術士を失いすぎてしまったのがあまりに手痛いな)

あれほどの攻撃力を実現するのだ、当然、防御魔法も使ってくるだろうと予想するのは当然と言える。

そして、その強固な防御魔法を破壊しうるには、やはり剣では無く魔法による攻撃が必要となる。

故に、ここで最初に失ってしまった魔術士が、攻撃力の欠如という問題となって現れる。

「あれ、もしかして私を倒せる気でのいるの？」

しかし、それは全くズレた考えであることに、コルウスはまだ気づかない。

あるいは、気づきたくなかっただけなのかもしれない。

「力の差も理解できないなんて、動物以下の存在ね――」

少女が、まるで詩を誦んじるかのように流麗に詠唱を始める。

「????? ???? ???? ????」

無詠唱で即死級の攻撃魔法を発動した相手だ、真っ当に詠唱をこなせば、それがどれほどの破壊力を秘めるのか、攻撃を受ける側としては想像もしたくない。

「詠唱を止めろ！」

叫ぶようなコルウスの攻撃命令に、魔術士と石弓を構えた兵士が一斉に攻撃を開始する。

「――ふふ、だから、遅いって」

矢が、魔法が、届く前にすでに詠唱を終えた少女は、即座に攻撃には移らず、自身に殺到する攻撃を、先に片付けることにした。

と言っても、すでに体の周囲に展開している妖精結界のみで、全ての攻撃を防ぎきることが出来る。
オラクル・シールド

彼女は、ただ目の前で炎や光の矢が消滅してゆくのを眺めるだけである。

一頻り攻撃が終わると、少女は、この戦いともいえない戦いに幕を下ろすべく、口を開いた。

「じゃあね人間共、私達、の邪魔をした事、後悔しながら死んでいってね」

少女は右手を振り上げる、同時、兵士達が防御魔法の多重結界で固める真上に光で描かれた魔法陣が現れる。

下にいる魔術士の誰も見たことが無い、円を基本とした複雑で巨大な図形が見る間に組みあがってゆく。

彼らはソレが、サリエルをして本気で防御をさせるに至る、ドラゴンブレスに匹敵する威力を誇る一撃であることを知らない。

「――星墜」
メテオ・ストライク

少女の右手が振り下ろされる。

魔法陣より、七色に輝く巨大な塊が解き放たれ、眼下に蠢く人間達を踏み潰すべく落下してゆく。

固めに固めた防御魔法、破れる訳が無い――そう、誰もが思っていたが、今この時に至ってその考えを固持できる者など一人も居ない。

「ああ、神よ……」

彼らは、ただ祈ることしか出来なかった、決して、自分達の命を救うことは無い、神へ向かって。

そして、人の欲も祈りも叫びも苦しみも、全て七色の光が飲み込み――

ドドンっ!!

消滅する、跡形も無く、何もかも。

「うん、いい調子♪」

満面の笑みを浮かべる少女、そこに人を殺すことへの後悔も罪悪感も一切無い。

実に妖精らしい、愛くるしい笑顔だった。

「さ、クロノも心配だし、助けにいいことと、イルズ村はもう手遅れみたいだけど、まあしょうがないっか」

そして彼女は、直径50メートルにも及ぶ破壊の跡をその場に残し、愛する男の元へ向かって、光の泉を飛び去った。

第64話 光の泉（2）（後書き）

結局、十字軍部隊も全滅させたりリィ、妖精達の恨みをばっちり晴らしてくれましたね。

第65話 悪魔

クロノはまず、一番村の外れで活動していた十字軍兵士三名を殺害した。

手にする呪いの武器『呪鉈「辻斬」』で、二人並んでいる兵士を背後から一閃、纏めて首を飛ばす。

突然の襲撃者、全身黒尽くめのクロノの姿を、残った一人がその視界に捉えた瞬間、脳天から股下まで一息に両断され、即死した。

クロノは、兵士が家を燃やす為に用意していた鍊^{オイル}金油をそのまま使い、すでに息を引き取っているゴブリンの子供達の死体を、彼らの自宅ごと焼いた。

そうする以外に、マシな弔い方は思いつかなかった。

当然のように三人分の兵士の死体は処分せず、クロノは村の中心へ向かって進み始めた、姿を隠すことも無く、真っ直ぐと。

それから門に辿り着くまでの間に見つけた、いや、不審者のクロノを発見し襲い掛かってきた十字軍兵士を、クロノは片端から殺していった。

迫り来る者は大鉈で胴を薙ぎ払い、逃げる者は『魔弾』^{バレットアーツ}で頭を撃ち抜く。

兵士達が纏うチェインメール程度ではどちらの攻撃も防ぐには全く足りず、自身に何が起こったのかよく分からないまま、皆一撃で絶命していった。

そうして、クロノが門へ辿り着いた頃に、村の中央に駐留する本隊が、何者かに攻撃を受けていることに漸く気がついた。

キルヴァンの元へ伝令が走ると同時、彼の命令が下るまでも無く、部隊長が即座に襲撃者の迎撃に動き始める。

しかし、魔術士の支援も無い、ただの歩兵でしか無い彼らの相手として、クロノはあまりに相性が悪かった。

何故なら、クロノの使う原初魔法、特に『魔弾』は、素の状態の人間を即死させるだけの威力を持つ弾丸を、凄まじい速度で連発することが可能だからだ。

それは正に機関銃の掃射と同じ威力を実現する。

クロノの真正面から、十字軍兵士が鎗袈を成して迫ったその瞬間に、『魔弾』の真価は発揮した。

バレットアーツフルバースト
「『魔弾、全弾発射』」

クロノが発した千に及ぶ黒い弾丸が一斉に十字軍兵士へ襲い掛かる。

彼らがこの黒装束の魔法使いとの圧倒的な実力差と相性の悪さに気がつくころには、数多の死体が通りに転がるのだった。

「な、な、なんなんだよアイツは!?!」

突如として村の門より姿を現した黒衣の魔術士により、自分の指揮する兵士達が一方的に殺戮されてゆく様を見た部隊長は、枯れかけた声で思わずそんな泣き言を口にしていた。

「くそっ、聞いてないぞ、あ、あんな化物がいるなんて――ひいつ!」

己の部下を撃ち殺した謎の黒い攻撃魔法が、自分のすぐ傍を通り過ぎていく。

「た、隊長! 指示を!」

悲鳴のように命令を求める部下の声に、ほんの僅かな冷静さが部隊長に戻ってくる。

そう、鎗袈を形成した歩兵部隊が、一人も敵に到達するまえにあっけなく撃ち殺される光景を見せ付けられ、恐怖と衝撃を覚えたのは自分だけでなく、この場に集う全員がそうだ。

「ゆ、弓だ! 弓を構えろ!」

再び鎗を構えて正面から仕掛けることに反射的な恐怖を抱いた部

隊長は、こちらにも相手に接近せず攻撃できる手段を必然的に選択する。

相手は未だ道のと真ん中に立っている、遮蔽物は無し、撃ち殺すには格好の的である。

それに、こちらには未だ何十人もの兵が残っている、人数の差は圧倒的。

「そうだ、落ち着け、ヤツはどう見ても魔術士だ、前衛がいなければ魔法の行使に集中できん！」

魔術士が基本的に後ろに控えて攻撃を行うのは、冒険者も兵士も同じである。

そのセオリーに習えば、壁役となる戦士の一人も無しに単身で魔術士が現れたとなれば、最初の一撃くらいは与えられるだろうが、こちらの攻撃が始まれば満足に反撃はできないはずである。

防御魔法で防げるといっても、それは時間稼ぎに過ぎない。

「よし、放てえ！」

号令の下、弦を引き絞って放たれた矢が黒衣の魔術士目掛けて飛ぶ。

空を切って飛ぶ鏃が敵へと届く前に、黒々とした、夜の闇をそのまま固めたかのような長方形の物体が射線を遮った。

だがその行動は予想通り、魔術士なら当然行使するだろう防御魔法によるガード。

矢は硬質な四角の闇に悉く弾かれるものの、

「怯むな！ 撃ち続けろ！」

兵達は動揺することなく、必死に矢を連射する。

この黒い防御魔法は、矢の直撃を受けても傷一つつかないところを見ると、かなりの硬度をもっていることが分かる。

だが防御魔法の効果は永遠ではない、それどころかごく短いものであるのは兵士にとって周知の事実。

魔法の効果は現れたその瞬間から、魔力が空气中に霧散してゆく。
『永続』^{エタニティ}などに代表される魔力を保存する効果の魔法が施されない

限り、魔法で作られた現象は長時間持続することが無い。

故に、どれほどの硬度を誇る防御魔法であっても、遅くとも数分の内に形状を保っていられず自壊を始める。

それを待たずとも、魔力が減少し硬度が低下すれば、矢を防ぐことはできなくなる、そしてそれはそう遠い未来の話では無い。

（そうだ、何を恐れることがある、魔術士がたった一人で出来る事などたかが知れている。トチ狂って我々に突撃してきたことを後悔しながら死ね！）

恐ろしい敵を前に、自身の勝利を確信した部隊長は、緊張と興奮でいびつに口を歪ませて笑う。

「よし、よし、いいぞ！ このまま——」

と、言いかけた瞬間、敵が、黒衣の魔術士が動いた。

「と、突撃だとお！？」

そう、敵は何を思ったか、黒い盾を展開シールドさせたまま、そのまま真っ直ぐ走り始めた。

しかも、その速度は一般人のソレではない。

『速度強化』スピードブーストの支援魔法か『疾駆』エア・ウオーカーの強化系武技を使っているかのように、人間の走る速度の限界を超えている。

「魔術士が単身で突撃など、馬鹿なことを——」

思わぬ相手の行動に動揺した部隊長は、凄まじい速度で距離を詰めてくる敵に対して、何らかの対処を命じることができない。

結果、そのまま兵達は矢を射掛け続けるのみ。

だが未だ矢を防ぐ硬度を持続させているシールドによって、一本たりともその身に届くことが無い。

「おおあああああ！！」

もう十メートルほどまでに迫った魔術士は吼える、その声は鼓膜にビリビリ響くほどの大声量。

その声、迫力、迸る殺気に対して、兵達は一瞬だが確かに怯んだ。直後、身を守るシールドを消した敵は、左手に持つタクトを軽く一振りした。

ドドンッ！

連続的に弾けるような音と黒い閃光を伴って、超高速で飛来する何か。

それは黒色魔力に形作られた弾丸、その数は数えることなど無意味だと一目で分かるほどに膨大。

「「ぎゃあああ！」」

弾丸の嵐は最前列で弓を引いていた兵達に襲い掛かり、身に纏うサーコートとチェインメールなど無いが如く着弾点を食い破る。

「け、剣を抜けええ！」

その命令を発した声は恐怖に慄き情けない事この上ない響きであったが、すでに弓が無意味になるほど距離を詰められたこの状況においては、的確な指示ではあった。

兵達が弓を投げ捨て、腰に差すブロードソードを引き抜く。

すでに敵は、あと一歩踏み込んで剣を振るえば届く距離。

恐怖を押し殺し、闘争本能を全開にした兵は決死の覚悟で斬りかかる。

だが、その振るわれた刃は届かない。

「跳んだっ!？」

地を駆けていたはずの敵は、間合いに入る直前に跳躍。

土の地面が凹むほど強い踏み込みと共に、黒のローブを翻して、軽々と兵達の頭上を跳び越してゆく。

「あ、ああ——」

部隊長は気づいた、宙を舞う敵、その着地点は、自分の立つこの場所であると。

「?????? ???? ????——アイズ・シルド氷盾っ!」

彼の生涯においても最も早くスムーズに展開した氷の防御魔法は、

ドドンッ！

再び響いた黒い弾丸の攻撃から、見事にその身を守った。

「ぐはああ！」

しかし、自分の周囲に立つ兵達は、頭上から降らされた弾丸の雨によって、残らず地面に膝を屈する。

半分は即死、もう半分は重傷、とても剣を振るって応戦できる状態にない。

今この瞬間、部隊長の周囲半径3メートルには、彼の身を守る兵が一人もいなくなった。

「破あああああああああ！！！」

透き通った氷の盾越しに、鬼のような形相の男が目映る。

黒く禍々しい形状の鉈を振り上げ、全身から仄かに赤いオーラが立ち昇っている。

真っ直ぐ自分を射抜くその鋭い両目は燃える炎のように紅く輝き、とても正気にいるとは思えなかった。

「あ、あ、うあああああ！！？」

上空より振り下ろされる、大きな鉈の一閃は、綺麗に氷の盾を両断。

重量感のある氷の塊が地に落ちると同時にバラバラと碎け散った。その様を絶望と共に見ていた部隊長は、衝撃で腰を抜かし仰向けに地面へとへたり込んだ。

そして、目の前には『氷盾』アイズ・シールドを一刀の下に斬った、黒衣の魔術士。

「ひ……あ……た、助けてくれっ、お、同じ人間だろうっ!？」

「死ね」

一息に振り下ろされた鉈の刃は、右腕をあっさり斬り飛ばした。吹き出る鮮血と共に苦痛と恐怖の絶叫が木霊する。

「死ねっ」

返す刀で、左腕を斬る。

チェインメイルの上に、腕には手甲を装備しているが、その防御力を上回る斬撃をうけ、あっさりと切断される。

「死ねっ！」

横薙ぎに振るわれる切り払い、その一撃で両の足を膝から斬りおとした。

無惨に四肢を切断され、シヨツクに白目を向き、口から血の泡を吹き出す死に体の部隊長に向けて、最後の一撃が振るわれる。

「死ねえええええええ！」

硬いヘルムで守られた頭部、その脳天から真つ直ぐ振り下ろされた凶刃は、鋼鉄の装甲を断ち切り、頭蓋骨を割り、脳を蹂躪し、鼻を、口を、喉を過ぎて、胸元にいたるまで一直線に切り裂いた。

無造作に、ただ力任せに振り下ろされた一撃は、確実に、そして凄惨に一人の人間の息の根を止める。

「あ、悪魔だ……」

兵の誰かが呟いた。

未だ残る何十人もの兵士に囲まれた中心で、黒衣の男が無慈悲に自分達の隊長を惨殺したその姿は、‘悪魔’の形容を大げさと笑い飛ばせる者は一人もいなかった。

「に、逃げろっ！」

「悪魔だ！
逃げろおお！」

口々に泣き言を叫び、隊列も何も無く、我先にと一目散に兵が逃げ出す。

部隊長は死に、その死後に指揮を引き継ぐべき副官もすでに背中を向けて走り出したこの状況にあつて、逃げる兵を引き止める者は誰もいない。

「……待てよ」

否、ここに彼らを引き止めるものがただ一人。

「待て、逃げるなよ、お前ら」

呪いの鉈を手に、怒りに狂う黒衣の魔術士。

「お前から全員殺さないで、仇にならねえだろ」

狂化を象徴する、燃え盛る炎のように真赤な瞳が、逃げ出す兵の背中を睨む。

一人も逃すまいと、悪魔は、クロノは血の香るイルズの中心部へ向けて再び歩き始めた。

第66話 悪魔VS司祭(1)

血相を変えた伝令兵がギルドに飛び込むや、キルヴァンはすぐに愛用の長杖スタッフを手に部屋を飛び出した。

黒尽くめの魔術士1名が村へ侵入、その報告に対して「村へ侵入を許すとは警備がなっていない」と部下を叱責するよりも、舌打ち一つで済ませて即座に現場へ向かう行動をとる辺り、キルヴァンはまだ冷静に状況判断と対処ができる部類だと言える。

「たった一人で乗り込んでくるとは、よほど自信があるか、よほど頭が狂っているかのどちらかな」

両脇に弟子である白魔術士2名を従え、ギルドの正面扉を開く。ギルドのすぐ前はイルズ村の中央に位置する広場、休日はいくくの村人で賑わうこの場所も、今は哀れな冒険者達が磔となる処刑場へ成り果てている。

現在十字軍兵士達はそのに集合し、防衛線を敷いていた。

槍を掲げて整列する歩兵部隊の背後、腕や足を怪我、あるいは丸々吹き飛んでしまった負傷兵が応急手当をしており、辺り一体は新しい血の匂いで満ちている。

「もうここまで迫ってきているというのか？」

そうキルヴァンの前で頭を垂れる伝令の兵に向かって問う。

その声音には、たった一人によくもここまで圧されたものだ、という怒りがにじみ出ている。

「はっ、敵の魔術士が使う見たことのない魔法が、非常に強力です、こちら魔術士の支援無しではとても――」

「ちっ、魔術士が出払っている時に限って」

思わず不満が口をついてでるが、キルヴァンはその一言以上は悪態をつく事はせず、現状での対処を考える。

「見たことのない魔法、と言ったな？ それはどういうものだ？」

「はつきりとは見えませんでした、黒い、小さな玉のようなもの」

に立つことに、些かの迷いも恐れも無かった。

寧ろこういった死地こそ、神が与えた試練であり、己の信仰を試されているのだと思い、戦意はより一層高揚する。

「ああっ、来たぞっ!!」

兵の誰かが悲鳴のように叫んだ。

見れば、村の大通りのど真ん中を人影が一つこちらへ向かって、まるで無人の荒野を行くが如く悠然と歩いてくる。

「悪魔だ」

「悪魔が来た……」

兵士達がざわめく。

百に近い同胞が、あっさりと命を散らしていく様を先ほど見せられたのだ、恐怖を感じないほうがおかしい。

「静まれ」

キルヴァンはこの道の先で起こった惨劇を直接目にしたわけではない、恐怖の言葉を吐く兵士達を心中で「臆病者め」と蔑む思いしか持たない。

「貴様らは結界の中から、弓だけ撃っていればよい。

アレを直接相手にするのは、この私だ」

兵士達は、司祭の心強い言葉に静まり、ただ黙って石弓に矢を装填する。

「そして、私は必ずやあの悪しき魔術士を葬る」

キルヴァンが、未だ遠くにいる敵を睨む。

その時、まるで彼の視線に気がついたかのように、相手が面を上げた。

目が合った。

この距離でも、その双眸が赤い輝きを放っているのが見えた。
「狂化状態だと……」

そう呟くと、キルヴァンの頬を一筋の冷や汗が伝った。

(まさか、本当に、狂ったヤツが相手だとはな)
バサーク
バッドステータス
狂化とは、魔法による状態異常の一つである。

そもそも状態異常とは、徐々に体力を削る毒、四肢の自由を奪う麻痺、意識が昏倒する睡眠など、直接的な攻撃力は無いが人の体に異常をきたす効果の総称である。

その一つが狂化であり、その効果は、敵味方の区別がつかなくなるほど凶暴化させるというものだ。

さらに、身体能力の上昇、痛覚遮断、と恐ろしくも強力な追加効果もある。

一人が狂化状態に陥れば、周囲の味方を攻撃してしまう上に、その体自体が強化されるので、止めることも難しい。

しかし、今のように味方の居ない、たった一人で敵と戦う場合においては、味方に被害を出すというデメリットは消え、その強力な肉体強化の恩恵のみを受けるということになる。

キルヴァンは、かつて狂化状態に陥った者を相手にしたことがある。

ただの歩兵が、恐ろしい力強さとタフネスを発揮し、殺して止めるのに酷く梃子摺った覚えが彼にはあった。

（厄介な相手だ、しかし――）

キルヴァンは白一色の長杖を手に、兵士達の前へ躍り出た。

「神に逆らう悪しき魔術士よ、貴様もこの魔族共と同じよう、磔にしてその屍を晒してくれる！」

叫んだ彼の戦意は最高に達していた。

（狂化状態など、所詮は肉体の力を高めるだけの効果しかない、言葉も忘れるほど思考能力を無くした獣以下の相手に、この私が負けるはず無いっ！！）

狂化最大の弱点をよく知るキルヴァンは、この相手に対する勝利を確信した。

だが、

「そうか、お前がやったのか……」

静かに呟いたクロノの声は、彼の耳には届かなかった。

第67話 悪魔VS司祭(2)

「神に逆らう悪しき魔術士よ、貴様もこの魔族共と同じよう、磔にしてその屍を晒してくれる!」

そう叫んだ十字軍部隊の大將だと思われる青年の背後に、十字架が立ち並んでいる。

無数の矢に貫かれ、手が、あるいは足が欠損し、血みどろの無惨な遺骸がそこに磔となっていた。

あまりに酷い死体の損壊、しかし、俺は視線を逸らさない、いや、逸らせない。

なぜなら、その死体の身元が俺にははっきりと分かってしまうのだから。

ニーノ、ハリー、アテン……クレイドルがないのは、そもそも死体すら残らなかったのかもしれない。

他にも、ギルドで見かけたことのある格好をした冒険者達が、さらに、非戦闘員であるはずのニヤレコまで、その、骸を――

「そうか、お前がやったのか……」

鉈の柄を握る手が震える。

手からは俺の魔力が流れ込み、逆に鉈からは殺意と憎悪の思念が流れ込んでくる。

「お前が……ああ……嗚呼あああああああああああああああ
あ!」

吼える、口からは意味の無い叫び声しか出ない。

泣く、両の瞳から止め処なく涙が零れ落ちる。

「あああああああああ――」

許せない、許せない、こんなことは許せない。

よくも、こんな酷い事を。

お前が殺して磔にしたヤツは、俺の大切な友人達だ。

みんな良いヤツだった、どこの誰とも知れない俺を、この村は、みんなは受け入れてくれたんだぞ。

分かっているのか、俺がどれだけ大切に思っているのか。

ここを守る為なら、命を賭けて戦える、そうさ、あのサリエルにだって喧嘩を売ってきたんだぞ。

なのに、それなのに……これじゃあ、みんなが死んでしまったら、もう、俺は、戦って守ることすら出来ないじゃないか。

俺は、俺は――

「ああ……ああああ……」

あまりに無惨な友人達の死に様を前に、悲しみに揺らいだ感情、それが、さらに勢いを増した鈍の思念が飲み込んでゆく。

悲しいのなら、苦しいのなら、辛いのなら、憎いのなら――殺せ。

「ああ……」

殺せ、敵を殺せ、容赦も躊躇も慈悲も無く、無惨に悲痛に凄惨に、敵を殺しつくせ。

「ああ、そうだな――」

よく見ろ、俺の敵は、すぐ目の前にいる。

ならばやることは決まっている、絶対、確実に、決めてやる。

「――今、みんなの仇をとってやる」

「――ああああああああああ――」

咆哮、としかいえない凄まじい声量で、黒い魔術士が絶叫した。

その腹の底から震える響きに、十字軍兵士達は結界の内にながら本能的な恐怖に身をすくめた。

だが、そんな怒り狂う相手を前に、キルヴァンは僅かほどもひるむことは無い。

何故なら敵は狂化状態に陥っているのだ、喉が潰れるほどの声を挙げるのは十分有り得る、彼にとっては想定内の反応、驚く理由な

ど無い。

「行くぞ、合わせろ」

キルヴァンの言葉に二人の弟子が詠唱を始める、発動に時間はそれほどかからない。

コンセス・プリースト

「集中強化」

エレメント・プリースト

「属性強化」

この自警団を殲滅する時にも使用した、強化魔法の重ね掛けは、彼らの得意とする戦法だ。

（広範囲の攻撃魔法ならば、例えば狂化状態であろうとも、一足飛びに攻撃範囲から逃れることは出来ん）

バサーク
キルヴァンは一撃で殺すことよりも、命中を重視した。

狂化状態に陥った者は、腕が飛ぼうが、腹に穴が空こうが、即死するダメージを受けさえしなければ倒れることはない。

が、死なないというだけであって、足が無くなれば動くことはできないし、腕が無ければ武器を振るうことは出来ない、要するに無力化になるまで追い込めればそれで良いのである。

二重の強化を受けたキルヴァンの上級範囲攻撃魔法『大閃光砲（ルクス・フォースブラスト）』は、自警団達を一撃で殺しきったように、凄まじい威力を誇る。

さらに、狂化は腕力を上昇させるが、防御力まで上昇するわけではないため、回避が不可能である以上、キルヴァンの攻撃を防ぐ手立ては存在しない。

（ふん、正気の魔術士なら冷静に防御魔法の一つでも張れるだろうが、狂った頭ではそんな判断も出来まい）

勝利を確信するキルヴァン、故に、援護射撃と指示は出したものの、構えさせただけで発射の命を下すつもりは無かった。

彼が数秒程度の短い詠唱を終える——その前に、敵である黒い魔術士、クロノが先に動いた。

「——！」

声は耳に届かなかったが、クロノが大きく右腕を屈んだ、と思っ

たその瞬間、黒い煙が突如として広がる。

「目くらましなど、無駄なことだっ！」

その時には完全に詠唱を終えたキルヴァンは、台詞の通り、敵がどう足掻こうが無駄としか思わなかった。

しかし、狂化状態バサークに陥っているにも関わらず、攻撃以外の行動をとったことに對し、キルヴァンは疑問に思うべきだった。

つまり、敵は未だ冷静な思考能力を失っていない、と想定するべきだったのだ。

「大閃光砲（ルクス・フォースブラスト）！」

だが、例え彼がそこまで思い至ったとしても、今更攻撃を取りやめることは無かっただろう。

すでに一寸先も見通せないほど濃く、視界一杯に広がった黒煙へ向かって、見えない標的目掛けてキルヴァンは渾身の攻撃魔法を放った。

闇を照らすが如く黒煙を突き抜け、広範囲に高熱の光が照射される。

そのあまりに眩い光を前に、兵士達は顔を背け、キルヴァンも一瞬瞼を閉じて視界を閉ざす。

（決まった）

そう心中で呟き、再び目を開けたキルヴァンの目に、信じ難い光景が映りこんだ。

「はあああああああ！」

黒衣を翻し、両目だけでなく全身から狂化バサークの赤い魔力のオーラを纏った怒れる魔術士の姿が、そこにあった。

（何、無傷だっつ、そんなバカな——）

科学の発達していない異世界では、『光』の性質は知られていない。

光はそもそも空気中にあるだけで、大幅にその力は減少している、空間に一切‘障害物’の存在しない真空こそ光が本来持つエネルギー全てを通して出来るのだ。

よって、水の中や、霧、水蒸気などは空気以上に光の威力を減衰させる効果を持つ。

クロノは、濃密な水蒸気よりもさらに光を吸収する『闇』の属性を持つ粒子を大量に散布させる『黒煙』を放つことで『大閃光砲（ルクス・フォースブラスト）』つまりレーザー光線の威力を半減させることに成功した。

そして、いくら上級とはいえ威力が半分に落ちた攻撃では、クロノのシールドを貫くには足りない。

こうしてクロノは見事に攻撃を防ぎきったのだが、その原理などキルヴァンは知る由もない。

だが、そうして動揺するもののキルヴァンとて若くとも新兵では無く歴戦の白魔術士であった。

気を引き締め、即座に防御体制に入る。

「――白光巨盾！」
ルクス・アルガレアシールド

クロノの周囲に展開する黒色魔力の塊を目にしたキルヴァンは、それが兵士をチェインメールごと貫く攻撃魔法の源であると察した。彼我の距離はすでに数十メートル、どう考えても敵の攻撃魔法の射程範囲内、しかも攻撃を行ったばかりのキルヴァンは即座に反撃行動には移れない。

一旦敵の攻撃を防ぐより他に手は無かった。

ルクス・アルマシールド
「『白光大盾』」

その判断は、両脇に控える二人の魔術士も同じであった。

「破あああっ！！」

クロノはキルヴァンへ向かって跳躍すると同時に魔弾を撃った。その狙いは、キルヴァンをサポートする二人の白魔術士。

バギンっ！

フルメタルジャケット
漆黒の完全被甲弾が光の結界に突き刺さる、が、貫通しきっていない。

防いだ、そう白魔術士が同時に安堵した瞬間、二人の脳天が炸裂した。

境界を張るため前へ突き出した両腕は力なく垂れ、そのまま仰向けに倒れていった。

彼らには、何故防いだはずの弾丸が、貫通したのか分からなかっただろう。

いや、そもそも自分達が死んだことも気がつかぬまま、意識を失った。

どうして二人の魔術士が死んだのか、それを知るのは、クロノと、キルヴァンだけである。

（撃った同じ場所に、重ねて命中させただと……狂化に陥っているにも関わらず、何故そんな命中精度が……）

キルヴァンは確かに見た、結界に刺さった黒い弾丸へ向けて、クロノが寸分違わず新たな弾丸を重ね当てて、結界を貫いたところを。一人だけなら偶然、と思えたかもしれないが、二人同時に同様の方法で頭部を撃ち抜いて見せられると、信じ難い命中精度を、この黒衣の魔術士が狂っていても保持し続けていると判断せざるを得ない。

キルヴァンは益々動揺する、一連の事態は信じられないことの連続だ。

だが、今更退くわけにはいかない。

「死いいねええええええええええ！」

呪詛の言葉を叫び、巨大な鉈を振り上げる敵を目の前に、退く事などできるわけが無い。

（そうだ、私は退くわけにはいかない、こんな、こんな悪魔の化身のような邪悪な魔術士を相手に、神の代行たる司祭の私が、負けるわけにはいかない、負けるはずが無い！）

迫る鉦の暗黒の刃を前に、キルヴァンは防御魔法により一層の魔力を籠めながら、一心に祈った。

「神よ、この私に、邪悪を払う力を与え給えっ！」

白く輝く聖なる結界へ、暗く淀んだ呪いの刃が、ついに振り下ろされる。

「死いいねええええええええええ！」

両手で握った呪鉈を胴体目掛けて、剣術の型も何も無い、ただ力任せのフルスイング。

「神よ――」

青年の司祭が何か叫ぶ声は、

ガギイイイインっ！！！！

刃が白い結界にぶつかり合う衝撃音によつて掻き消される。

（クソっ、硬いっ！）

司祭を守る光の盾は、僅かに黒い刃を食い込ませただけで、それ以上切り裂く手がたえが感じられない。

この司祭は、サリエルほどではないが強力な白魔法の使い手だ、流石は大將なだけあるといったところか。

だがどんなに強かろうが、この男だけはどうしても今この場で殺さなければならぬ。

[illegible]

果たして、その願いに『呪鉦「辻斬」』は応えた。

『オオオオオオ』

黒い刃は確かに、声を挙げる。

同時に、両掌からこれまでと比べ物にならないほど強烈に魔力が吸い取られる。

指の先から徐々に一切の感覚が無くなってゆくが、実際に鉋を振るう力は弱まるどころかむしろどんどん強くなってゆく。

それは血なのか魔力なのか、赤いモヤのかかり始めた視界の隅で、黒い刃の形が変わるのを、確かに捉えた。

（そうか、これが――）

数多の十字軍兵士の血を吸い、さらに俺の黒色魔力と憎悪を喰らい、『呪鉈「辻斬」』は、

（進化っ！）

『呪怨鉈「腹裂」』へ進化を遂げた。

「破ああああああああああっ！！」

より大きく禍々しい形状へと姿を変えた漆黒の刃が、結界を切り裂き始める。

「馬鹿なっ！？　こんな――」

武器の形状変化に、威力が倍化したことで、司祭が驚愕に目を見開く。

進化した鉈は、その切れ味が増大するだけでなく、肉体強化の面でもさらに大きな上昇効果を与えてくれる。

それだけじゃない、これまでは鉈の扱いが自然と身につく程度だったものが、進化によって『武技』の発動までも可能とした。

「黒風いいいいいい！」

黒い軌跡を残して横一文字に一閃。

凄まじい斬撃力の上昇をもたらす武技『黒風』は、実にあっさりと、光の盾ごと司祭の体を断ち切った。

腹を裂き、真っ二つになった司祭の上半身が飛ぶ。

返り血を避けもせずに浴びながら、死の間際に放った司祭の声が聞こえた。

「神よ……何故私を……お見捨てになるのですか……」

第68話 解呪

十字軍兵士達は、息を吞んで凍りついた。

「ああっ……司祭様が……」

誰かがそう呟くと、兵士達は混乱しつつも確かに目の前で起こった現実を認識した。

目くらましに黒々とした煙が発生した次の瞬間、キルヴァンが光の上級攻撃魔法を放ったのは皆が見ていた。

それで決着、その思いは術者本人であるキルヴァンも、その配下の兵も全く同じであった。

しかし勝利の歓声を上げる間も無く、あの悪魔は背筋が凍るような恐ろしい雄叫びを上げながら、黒煙の中から飛び出した。

本当の決着は、僅か数十秒の間で決した。

悪魔は、あの数多の仲間を屠った恐怖の黒き弾丸で、二人の白魔術士の頭部を撃ち抜いた、強固な防御魔法を難なく貫いて。

白魔術士が眉間から血飛沫を上げて地へと倒れる時には、すでに悪魔は司祭へ向かって、その禍々しい形状をした黒い刃を振るっていた。

悪魔の咆哮、司祭の祈り、凶刃が光の結界を切り裂く音、どれも同じ瞬間に響く。

そして気がつけば、司祭の胴は真つ二つに切断され、上半身が赤い血を撒き散らしながら宙を舞っていた。

「司祭様が死んだ……」

「悪魔に殺された……」

兵士達に動揺が俄かに広がる。

キルヴァンは歳若くありながらも、指揮官としてはそれなりに優秀であり、何より、高位の白魔術士としての実力と自ら前線で戦う事を恐れない姿勢によって、配下の兵からは大きな信頼を得ていた。

そして原理主義に傾倒するほど神への強い信仰心を持ち、やや自信家な面も、その実力と相俟って一種のカリスマ性さえ発揮していた。

そんな信頼できる上官が、実にあっさりと殺害されたのだ。

戦意を喪失し、兵士達があと一分も絶たずに壊走を始めるだろうこの流れは当然といえた。

「落ち着けっ！」

しかし、ある部隊長の一喝によって、踵を返しかけた兵士の足が止まる。

「見ろっ、司祭様との戦いで、あの悪魔はかなり消耗しているっ！」
確かに、片膝を屈してうな垂れている黒装束の姿がそこにあった。
「今ならヤツを殺せるっ！ 司祭様の仇をっ！！」

兵士達に戦意が戻る、武器を握る手に再び力が入り始めた。

「結界の効果はまだ消えない、ここから悪魔を射殺すんだ！」

術者が死んでも、魔法の効果は例外なく即座に消え去る、という分けではない。

ルクス・ウォルデファン

今、彼らを守るこの聖心防壁も、そこに籠められた魔力が無くならない限り、その効力を発揮し続ける。

「「悪魔を殺せ！」」

恐怖を振り払うかのように、兵士達が一斉に唱和する。

「「悪魔を殺せ！ 悪魔を殺せっ！！」」

矢を装填し、弦がギリギリと限界まで引き絞られる。

「撃ち方用意っ！」

ロングボウウガン

弓と石弓が膝を屈する標的へと向けられる。

悪魔は、未だ動かない。

「はあ…はあ…」

『黒風』で司祭をぶった斬った後、急激な疲労感に襲われた。

これは武技を放った反動、というよりは鈍の進化に大量の魔力を一気に消費したことによるものだろう。

思えば、機動実験の際に魔力が尽きるほどの激戦は何度かあったから、お陰でこの今すぐぶっ倒れそうになる疲労感を経験済み、だが今そうなっちまうとはマズい状況だ。

いや、上級魔法を使いこなす司祭を相手に戦えば魔力の消耗どころか深手を負う可能性も有った、進化のお陰であっさりケリをつけられたと考えるべきか。

しかし状況が悪化していることに変わりはないな。

あの兵士達は頭である司祭がやられたにも関わらず、まだ戦う気でいる。

「悪魔を殺せ」と威勢よく叫びながら、クソったれが、悪魔はテメえらの方だろうが。

どう悪態をついたところで、もう何秒もしない内に一斉に矢の雨が降り注ぐ未来は変わらない。

「はあ……くそっ」

リリイにはお互い無茶しないように、何て言ったが、全くザマあない。

魔力が底を尽きかけている、まあ体にかすり傷一つ負ってないのがせめてもの救いだが。

「悪いなリリイ、約束、破っちまいそうだ……」

サリエルと戦った後、もう無茶な事はしない、と約束したが、こうも早く破ってしまうことになるとは、本当に、俺は情けないヤツだな。

「けどな、コイツらは――」

感覚の戻り始めた指先で、再び柄を握る力を籠める。

「コイツらだけは、生かしくわけにはいかねえんだ」

この魔力の尽きかけた体で、あと何人兵士共を殺せるか分からない。

いくらこの体が頑丈だといっても、大量に血を流せば死ぬし、首

が飛んでも勿論死ぬ。

だが俺は退かない。

殺し続ける。

一人でも多く、地獄へ道連れにしてやる！

「うおおおおおおおっ！！」

進化した呪怨鉈より、再び憎悪と殺意の奔流が俺へと流れ込む。

休息を求める肉体にムリヤリ活を入れて、飛び起きる。

すでに、目の前には放たれた大量の矢が殺到してくる。

『黒盾』シールドを瞬時に展開させるほどの魔力は残ってない、防ぐ手段は精々が鉈を振るうくらいものだ。

何本か喰らうのを覚悟しながら、少しでも多く矢を落とそうと鉈を大きく振り上げた、その時、

ドドドオッ！！

目の前から、真っ赤な炎が吹き上がる。

何だコレ、敵の攻撃魔法か？ 何か爆発したのか？

視界全てを覆う紅蓮に、瞬間的に即死した、と思うが、

「……これは、防御魔法か？」

俺は一切この炎からダメージを受けていない、しかもよく見れば、ただ炎が地面から吹き上がっているだけでなく、壁のように広がっているのが分かる。

ここまで巨大な火の壁が発生するのは、恐らく上級範囲防御魔法
イグニス・ランバートデフアン
『火焰城壁』だろう。

兎も角この魔法が何であれ、すぐ目の前まで飛来しかけた矢の雨は、炎の壁に悉く飲み込まれて完全に焼失し、俺を守ってくれた。

しかし、こんな高度な魔法を一体誰が――

すぐに思い至るのは、考えうる唯一の味方にして相棒であるリリイ。

「危ないところでしたね」

背後から聞こえてきたその声は、透き通った少女の声音、だがそれはリリイとは別人のものだとすぐに分かった。

「だ、誰だ……」

振り返り見れば、軽い足取りで近づいてくる真っ黒い人影。

いや、それは影ではなく、頭の天辺から足の先まで、俺と同じように完全に黒尽くめというだけのこと。

童話の魔女が被っているような三角帽子、柔らかな羽毛をあしらった漆黒のローブ、見るからに不思議な形状の長杖、そして、淡い水色の髪と煌く金色の双眸。

たった一度出会っただけだが、忘れられそうに無い特徴的な姿をした彼女の名は、

「フィオナ・ソレイユ!？」

「会いたかったですよ、アイスクャンデーの人」

「ア、アイスって……」

あまりに突然すぎる登場に、相変わらずの半目の無表情にボケた発言、今この状況全てを忘れそうになるほどだ。

「あ、忘れる前に解呪しておきますね」

「は？」

いろんな意味でコイツは何を言っているんだ? と疑問に思う間も無く、フィオナの小さな唇から短い詠唱の旋律が聞こえた。

「???? ???? ???? ???? ???? ????——」
『ディスベル解呪』

「っ!？」

解呪の言葉が耳に届いた瞬間、腕と一体化したかと思えるほど自然に握っていた鉈を、弾かれるように手放してしまった。

鉈が手から解き放たれ、音を立てて地へと落ちると同時に、俺は糸が切れた操り人形のように、膝を屈した。

今の今まで鉈から与えられる肉体強化の恩恵で、魔力が空でも立っていられたのだ、それが無くなれば、体が動かなくなるのは当然の帰結。

そのまま倒れこむか、と思ったが、俺の体は硬い地面では無く、

柔らかく暖かな人の腕で抱きとめられた。

魔女の胸に抱きしめられ、視界を覆うのはローブの暗黒ばかりで彼女の顔は見えない、そもそも俺には頭を動かす力すら残っていなかった。

「随分と危ないモノを使うのですね、軽い狂化状態バサークでした」

「……お陰で司祭は殺せた」

体は動かないが、何とか声は出せる。

「俺を、助けてくれたのか？」

「はい」

「ありがとな、けど、ここは危ないからフィオナさんは早く逃げな、俺を置いていっても恨んだりしないぞ」

「それでは私達がここに来た意味がありません」

私、達、？ 他に誰が――

「ほら、村を救う為に冒険者の皆さんが来てくれましたよ」

フィオナさんが俺を抱き起こしてくれると、そこには先ほどまで轟々と唸りをあげていた炎の壁は無く、

「あ、ああ……」

それぞれ武器を手にし立ち並ぶ、多様な種族で構成された屈強な冒険者の一団がそこに立っていた。

「一人殺せば1ゴルドの報酬だ！」

「ひゃあっはー、残らず狩ってやるぜえ！！」

冒険者達が唸りを挙げて十字軍に向かって突撃して行く。

すでに指揮官を失い、魔術士が一人もない人間の部隊では、いくら数に勝るとはいえ、この冒険者達に勝つことは不可能だ。

俺一人を相手にここまで押されたのだ、援軍が来ればとても敵わないと直感的に理解できるだろう、兵士達はすでに背中を見せて一斉に壊走し始める。

「……フィオナさん」

「何ですか？」

「後は、頼んだ……」

勝利の光景を目に、安堵した俺は、もうこれ以上意識を保つことも出来ずに、そのまま眠りに落ちた。

「後は、頼んだ……」

その言葉を残して、フィオナの腕の中でクロノは意識を手放した。ぐったりと全ての体重を預けるクロノの大柄な体を、フィオナはその細腕でしっかりと支えた。

周囲では叫び声を挙げながら逃げ出す十字軍兵士達の声に、彼らを追いつ立てる冒険者達の怒声が響き渡る。

そんな修羅場の中で、クロノを優しく抱きとめるフィオナの姿は、まるで一枚の名画のように美しい場面となっていた。

だが、それを良しとしない者が、ここに一人いる。

「クロノから離れて」

綺麗だが、どこか冷たい印象を抱かせる少女の声がフィオナの耳に届けられる。

顔を上げれば、いつの間にそこへ現れたのか、七色に煌く羽を瞬かせた美少女がそこにいた。

光の泉を後にしたリリイが、今この瞬間にイルズ村へ、正確にはクロノの元へと到着したのだ。

「……貴女は誰ですか？」

「いいから、早く、離れて」

明確に殺意こそ向けられていないが、リリイの台詞に棘棘しいニュアンスが含まれていることに、流石に天然全開のフィオナでも分かった。

ただ、クロノの体を自分以外の女が抱きとめている事が許せない、なんていう個人的な理由までは、フィオナじゃなかったとしても分からないだろう。

「どうぞ」

どうあれ、目の前に降り立ったリリィへ、フィオナは大人しくクロノを差し出た。

リリィは、サリエル戦の時と同じように、クロノを軽々と抱きかかえる。

そうしてクロノの身柄が完全に引き渡されると、リリィは漸く妖精らしい笑顔をフィオナへ向けた。

「思ったよりも早く来てくれたのね、助かったわ、ありがとう」

「いえ、仕事ですので」

「クウアルの自警団と冒険者はそうでしょうね、けど、アークから来た人間である貴女もそうだと言うの？」

「……ご存知でしたか」

「大して隠すつもりも無かったでしょ、クロノに見せたギルドカードはこの大陸のものじゃ無かった」

「あっ、もしかして、あの時クロノさんと一緒にいた妖精ですか？」

「今頃気づいたの？」

「とても可愛らしかったですね」

リリィは一つ息を吐いた、そういえば、この女はクロノと話していた時も妙にズレた事ばかり言っていた、と思い出す。

「私のことなんかどうでもいいわ、それより貴女は敵なの？ 味方なの？」

僅かに殺気を滲ませるリリィに対し、変わらぬ無表情でフィオナは涼やかに応える。

「今は、ランク1の冒険者です」

そしていつぞやと同じように、帽子の中から一枚のプレートを取り出し、リリィへ差し出す。

それは紛れも無くパンドラ大陸でのギルドカードである。

「貴女、人間の裏切り者なの？」

「私はただの傭兵としてパンドラ大陸にやってきました。

でも、ご飯が美味しくなかったので、辞めました」

「……あっそう」

リリイは、この寝ぼけた顔の魔女相手に警戒していた自分が何だかバカらしく思えてきた。

このふざけた反応は演技などではない、妖精であるリリイには彼女の本心が分かるのだから。

今この瞬間にもフィオナがただひたすらにアイスキャンデーの事を考えている、というのをリリイは心を読む妖精の精神感應能力テレパシーによってイヤでも分かってしまったのだ。

「まあいいわ、アイスキャンデーなら好きなだけ食べさせてあげるから、裏切らないでね」

「本当ですか？ 約束ですよ」

身乗り出してくるフィオナの凄まじい食いつきぶりに、「早まったこと言ったかな」とリリイは若干後悔する。

（けど、この女を敵に回すのは厄介、冒険者としていてくれるなら、それにこした事は無い）

リリイは見ていた、クロノを救ったあの炎の壁を。

そしてその魔法の正体を、クロノは勿論、彼女に同行していた他の冒険者達も気づかず、上空からリリイただ一人だけが気づいていた。

アレはクロノが思ったような『イグニス・ランバートデファン火焰城壁』ではない、そもそも範囲魔法でもなければ上級魔法ですらない。

ただの下級防御魔法・火盾「イグニス・シルド」だったのだ。

（同じ魔法でも使い手で効果が異なるのは当然、けど、ただの下級魔法であれほどの高威力を叩出すのは、もう才能がどうかいいうレベルじゃない）

人知が及ばないほど天賦の才を持つのか、特殊な術式を用いているのか、それとも生まれ持った体質・特性なのか、どちらにせよ、フィオナという魔女が恐ろしい魔法の力を秘めていることにリリイだけが気がついた。

ただ幸運なのは、フィオナが‘魔女’らしく腹黒い考えを抱えている人物ではなく、その本性が単なる食いしん坊に過ぎないという

ことだ。

「こんな変な魔女がいるなんて、世界は広いわ」

リリィは脱力気味に溜息をつく、クロノを休ませるために、ひとまずすぐ近くにあるギルドへ向かった。

後ろに、アイスキャンデイーの爽やかな甘味に思いを馳せる黒い魔女を引き連れて。

第68話 解呪（後書き）

第5章は、これで完結です。

これまでで最も波乱のある章で、ようやく戦いの物語が動き始めたかと思えます。

怒り狂うクロノ、ヤンデレの片鱗を見せ始めたリリィ、バ火力魔女のフィオナ、彼らの戦いはこれからです！

それでは、第6章もお楽しみに。

第69話 4人の使徒（1）

ダイダロス王城の謁見室は、職人ドワーフ謹製の瀟洒な造りはそのままで、黒き竜王のエンブレムだけは残らず神の十字架に差し替えられていた。

そんな新たな支配者の存在を主張する謁見室に、重厚な肘掛椅子に座り卓を囲む4人の姿。

「ようこそダイダロスへ」

呟くような小声で歓迎の言葉を発すのは、パンドラ遠征十字軍の総司令官、そして竜王ガーヴィナルを単身で屠り『竜殺』の二つ名を得た、第七使徒サリエル。

「わざわざ様子見に来てやったんだから、感謝しなさいよねっ、サリエルう！」

少女特有の甲高い声でサリエルを呼び捨てるのは、第十一使徒ミサ。

相変わらず個人的な好みによる露出の高い改造法衣を纏い、曝け出された艶かしい足を組んで椅子にふんぞり返っている。

「お、お久しぶりです、サリエル卿……」

信者が見れば鼻血を噴いて卒倒するほど、頬を赤らめてそわそわと実に可愛らしい緊張の様子を見せる美貌の少年、第十二使徒マリABEL。

色々と気の聞いた台詞を必死に考えていたが、いざ本人を前にすると無難な挨拶の言葉しか出てこない様子。

「お元気そうでなによりですサリエルちゃん、けれど――」

そうして、正しく『聖女』に相応しい柔らかな微笑みを浮かべたまま、第三使徒ミカエルは席を立ち、サリエルの元へと歩み寄る。

華奢で儚げな雰囲気のスリエル、豊満な肉体と大人の色香漂うミカエル、対極の美しさを持つ二人が並ぶ姿はどこか親娘のようにも見えた。

「お怪我はまだ、治ってはいないようですね」

サリエルの紅葉のような小さな手、その包帯が巻かれている右掌を、ミカエルは両手で優しく包み込む。

「あらあら大変、こんなに大きな穴が空いてしまつて」

どうやってか、包帯の上から軽く撫でるだけで怪我の状態を察するミカエル。

クロノに呪いの毒針を撃ち込まれた掌を、腐食部位ごと自ら槍で貫いた傷は、未だ完治していなかった。

「『痛い痛い飛んでいけえ♪』」

のんびりしたミカエルの言葉、しかし、この場にいる誰もが彼女がふざけているのだとは思わない。

「……ありがとうございます」

「いいええ、これが私の役目ですから」

ミカエルが手を離すと、掌に巻かれていた包帯が一人でに解けてゆく。

曝け出されたサリエルの手には、そこにあるはずの痛々しい傷跡はどこにも見当たらず、最初から怪我など無かったかのように、すべすべした白い掌があるのみ。

治療を受け尚完治するまでには今しばらく時間のかかるサリエルの傷を瞬時に癒す、これこそ『聖女』の二つ名を持つ第三使徒ミカエルの力の一端である。

ミカエルは満足そうな笑顔を浮かべ、席へと戻った。

「さっきの傷、誰にやられたの？ またドラゴンでも出た？」

ミサの鋭い声が、ミカエルが席に着くと同時に発せられた。

「そうですね、竜王との戦いで負ったものとは別なようですし」

二人は単純にサリエルの事を心配して、というよりも、使徒であるサリエルを負傷させるだけの存在が、ダイダロス軍が壊滅した今になつてもいるという事実が気にかかった。

「……」

サリエルは黙秘で応えた。

彼女でなければどうとでも嘘を言えただろうが、極端に不器用なサリエルは嘘を吐くことが不可能なのである、故に黙秘。

「ふうーん、答えられないんだあ」

押し黙るサリエルの様子に、ミサの瞳がキラリと光る。

自ら敵を逃したことを勘付かれたか、とサリエルは一瞬思うが、

「ふふん、アンタ、間抜けにも事故って怪我したんでしょ!」

「……」

『コイツがバカで良かった』と、誰もが思うほど見事に勝手な勘違いをしてくれたミサ。

「どうせ、不用意に武装聖典の刃に触れてブシュっといっちゃったんでしょ」

「それは前に君がやった失敗だろ」

溜息交じりのマリABELは、かつてミサが「武装聖典って使徒も切れんの?」と思い立ち、その鋭いなんてレベルじゃない刃を素手で鷲掴み、あわや手首切断か! という大怪我を負った、非常に恥かしい失敗談を思い起こす。

「っさいわねっ! アタシでもミスるんならサリエルだってミスるでしょっ!」

「君以外に誰があんな馬鹿馬鹿しいミスするか」

「隠してもサリエルがミスったことは分かってたんだからねっ!」

都合の悪い事は聞こえない便利な耳栓スキルを発揮して、マリABELの発言をスルーしながらサリエルへ詰め寄るミサ。

そんなミサに対してサリエルは、

「……ん」

コクン、と小さく一つ頷いた。

嘘はつけないが、向こうが勝手に勘違いしてくれた事をわざわざ訂正する事も無い。

ここは一つ頷いておけば、クロノに関して余計な追求されることは無いだろうと流石にサリエルでも判断できる。

「ほらあ! やっぱり事故ったんじゃない!!」

「誰にでもミスってありますよね」

僅か数秒で意見を180°。翻すマリABEL少年の発言。

「マリABEL、アンタねえ……」

さっきと言ってること違うだろ、と視線で語るミサ。

だが彼は些かもブレてなどいない、なぜなら、

「僕はサリエル卿の味方なのです」

「ふんっ、イエスマンはモテないんだから」

「っ!？」

ミサの一言が少年の心を抉った。

「当然サリエルも主体性の無い男なんて絶対ゴメンよねえ？」

「私は……」

「ほら見なさい！ サリエルもアンタみたいなのはイヤだって言ってたわ!!」

まだ何も言っていない、とは思うが、サリエルは最早口を挟むタイミングを失っていた。

「うう……サリエル卿、僕は……僕はあ……」

目に見えてガックリ肩を落とすマリABEL。

それを勝ち誇ったドヤ顔で見下すミサ。

無表情だが内心は何か言わなければと頭を悩ませるサリエル。

とても十字教信者や率いる兵士達には見せられないような、間の抜けた構図が謁見室に展開されていた。

「うふふ、やっぱりお見舞いにきて正解でした、みんなこんなに楽しそう♪」

遥かに年下である若き三人の使徒を、ミカエルが優しい眼差しで見守る。

だがここでそんな懐の深い対応をするのではなく、ミカエルには率先してこの場の收拾を図るべきだと、一般的な感性では判断できるが、残念ながらこの場にそれを指摘する者は誰一人としていない。パンドラ大陸初の使徒4人による会談は、こうした‘楽しげな’雰囲気のまま、政治的・宗教的に重要な話題は一切出る事無く、グ

ダグダと緩やかな時間だけが過ぎていったのだった。

第69話 4人の使徒（1）（後書き）

そんなわけで、第6章スタートです！

1章ぶりにサリエルが登場しました、そういえば右手怪我してたな、とか思い出していただければ幸いです。

見舞いに来た使徒3人組の容姿をお忘れの方はキャラ紹介をご覧ください。

第70話 4人の使徒（2）

深夜、ダイダロス王城のバルコニーに二つの影があった。

「昼間の会談は随分と盛り上がったようですね、心なしかサリエル閣下の表情も普段より明るく見えましたよ」

眼下に広がるダイダロスの夜景を見つめながら、リュクロム大司教が言葉を発する。

彼の隣に立つ、自身と同じように女性と見紛う中性的な美しい顔立ちを持った、弟のマリアベルへ向けて。

二人は同じユグノーシスの姓を持つ、実の兄弟である。

「ふふ、そうだと嬉しいんだけどね」

瞳を閉じて思い人の姿を浮かべるマリアベル、今は兄であるリュクロムしかいないので、堅苦しい敬語はやめて歳相応の少年らしい口調へ戻っている。

「ミサ卿がいなければもっと嬉しかったんだけど」

「彼女もサリエル閣下の事が心配で堪らなかったのでしょうか、流石は、永遠のライバル」を自称するだけあるというものです、ふふふ、何とも微笑ましいですね」

歳の近い同性である所為か、ミサの一方的なサリエルへのライバル視は、エリシオンでは知らぬ者はいないほど有名な話である。

実際に使徒と接触の機会もあるリュクロムは、「ちよっとお、待ちなさいよサリエルう！」

と全力で絡んでいくミサの姿を実際に目にした事もあり、ただの噂話ではない事を知っている。

「はあ、あんな子供染みたヤツの後輩だなんて本当にイヤになるよ、使徒に目覚めるのがもう少し早ければ――」

使徒は基本的に、‘覚醒’した順番に数字が与えられ、それがそのまま序列となっている。

ミサの方がマリABELより年上ということもあり、彼女が先に使徒として覚醒したのはごく自然なことである。

しかし「それでも!」と、ミサから何か言われる度に悔やまずにはいられないのだった。

「彼女もきつと歴代の使徒のように立派になりますよ、私から見れば、ミサ卿は歳相応で実に少女らしい感性を持った常識的な方です」
「……そっかなあ」

「そうなのです」

意味ありげに微笑むリュクロムに、納得のいかない表情のマリエル。

二人の兄弟は、そのまま星空の下で和やかに会話を続けた。

「——ところで、アルス枢機卿殿下はなんと?」

リュクロムがそう問いかけた瞬間、マリABELの表情が引き締まる。

「メルセデスの手の者とは事を構えるな、と」

「そうですか」

リュクロムの視線が、黒々と聳え立つダイダロス城壁の向こうへと向けられる。

‘メルセデスの手の者’、即ち、現在ダイダロス領内の村を占領するために展開している、ゴルドランの戦い以後に増援としてやってきた軍団である。

「始まりの地ヴァージニア、首都ダイダロス、そして海上交易の要エイドン、この重要拠点が3つともすでに手の内にあるから、今は争ってまで領地を拡大する必要は無い、ってことだと思うけど」

ゴルドランの戦いで勝利しダイダロスを制圧した十字軍だが、さらに詳しくその内部事情を見るならば、その軍は共和国の中でもアルス枢機卿の派閥である。

アルスの右腕であるリュクロムを副指令に据えた事を始め、1万5千の十字軍はほとんどが彼自ら声をかけて集めた者達であり、明確に誰の派閥にも属していないと言えるのは使徒たるサリエルただ

一人だけであった。

そのサリエルですら、アルスとは浅からぬ縁が有り、共和国にある議会、教皇、枢機卿、貴族、といった面々からすれば、全ての十字軍はアルスの息がかかっていると言い切れる構成であった。

元々敗北必至の軍である、負け戦に己の手勢を加えることを誰もが忌避した。

だが、現実には十字軍が勝利した以上、その軍の実質的な‘所有者’、ともいえるアルス枢機卿が、占領した土地の支配権を握るのは、自他共に認めざるを得ないことである。

故に、最初の上陸地点であるヴァージニア、首都である巨大な城塞都市ダイダロス、そしてダイダロスと他のパンドラ大陸にある国々と海上交易を結ぶ港町エイドン、これら重要な地点は全てアルスの支配地となっているのである。

しかしながらゴルドランの戦い以後新たに派遣された増援は、表向きは同じ十字軍の所属だが、その内実は様々な派閥による思惑が入り混じった、いわば教会と貴族の‘連合軍’なのである。

そんな中で特に影響力を持つのが、三人いる枢機卿の内の一人メルセデスという男なのだ。

「ある程度は‘彼ら’にも土地を与えなければ、面倒が起きますからね」

メルセデスを始めとした、パンドラの利権に食いつこうとする数多の者達を全て抑え、ダイダロス領の全てをアルス一人で独占しようものなら、反発が起きるのは必至。

現在のパンドラ大陸は彼らにとってあまりに魅力的、それこそ暗殺や濡れ衣による異端審問が横行し、十字軍が内部分裂を起こしかねないほどに。

だが逆に考えれば、リュクロムの言うように彼らにもそれなりに‘分配’をしてやれば、それほど表立って反発は起きない。

アルス側がダイダロス領の支配権は‘早い者勝ち’であると表明すれば、新たに上陸した増援部隊同士での競争となるのだ。

自分達に手出しされなければ、すでに他の派閥が如何に潰しあいをするかが一向に構わない、すでに十分な土地を確保しているアルス側は、パンドラ利権に関してはすでに勝ち抜け状態なのである。

「けれど、それはダイダロス領の支配権が確定するまでの話」

「ええ、我々は未だ大陸東部の一地域を制圧したに過ぎません」

パンドラ大陸は広大である、いくらダイダロスにおける重要拠点を手に入れたからと言って、その他全ての土地の支配権が手に入らなければ、今ある優位性は相対的にゼロどころかマイナスになってしまう。

「しかし、ガラハド山脈を越えて中部にひしめく都市国家群へ攻め入るのは、まだしばらく先の事となるでしょう」

「だから、今の内に‘兄さん達’の軍備を増強するんでしょ」

「ゴルドランの戦いで多くの仲間を失いましたからね、再び信頼出来る兵を集めるには今この時を利用する他ありません」

「逆に言えば、貴族連中が先走って中央へ攻撃を仕掛けたとしても」「今は見逃すしかありませんね。」

例えそうなったとしても、彼らが山を越える可能性は万に一つもありませんが」

不敵な笑みを浮かべるリュクロムには、そう言い切るには幾つかの理由があった。

まずは、竜を殺す絶対的な力を持つ究極の戦力である使徒サリエルが、基本的に以後の戦闘には参加しないという点。

出陣すれば勝利確実な使徒は、新たな領地を欲す者からすればこれほど邪魔な存在は無い。

領地を手に入れる（支配権を主張する）には自分でその土地を最初に占領しなければならないので、使徒の登場は自分達の力ではどうにもならない強敵が立ち塞がった場合のみに限定したいのだ。

故に、どの派閥も『自分達だけではとても勝てないor勝てるが損害が大きすぎる』と判断するような敵が現れるまで、サリエル自らの出陣は要請されない。

いくら総司令官とはいえ、皆からの意向をあからさまに無視してまで動けば、利益分配のルールが崩れ、十字軍分裂の危機を招く。

よって最初にして最大の難関と思われるダイダロス攻略後は、もうサリエルの出番は無いとの見方が強く、また使徒全員の総意としてサリエルはパンドラ征服の完了を‘見守る’と表明してある。

そしてサリエル自身も、求められる役目を十二分に理解し、様々な思惑が絡み合う十字軍を極力刺激しないよう大人しく立ち回るようにしており、余計な事は絶対にしない。

「そもそも、教会や貴族の私兵なんて実力はたかが知れてるし、所属が違えば協力もろくに出来ないからね」

「その通り、ですが彼らが山を越えられない最大の理由は『スパード』です」

「スパード？」

「ダイダロス領と隣接する都市国家の名前です、そのスパードがガラハド山脈沿いにある国境線を守っているのですよ」

「じゃあ、強いんだ？」

「元々魔族の軍は強力です。」

しかし‘剣闘都市’と呼ばれるスパードは、数ある都市国家の中でも抜きん出て精兵揃いなのですよ」

「‘剣闘’ね、やっぱり魔族だけあって野蛮な風習が残ってるんだ」
「ですが、その風習のお陰でスパードにはパンドラ中から腕に覚えのある手練れが集まっているのです。」

ダイダロスの侵攻に備えて、スパードの防衛軍に加えそうした者達を傭兵として雇う即応体制が整っています。

その上、スパードはガラハド山脈に守られた天然の要塞と言えるほど、守りに適した地形です。

真っ当に攻め落とすならば、ゴルドランの戦い以上に兵力を必要とするでしょう」

ダイダロス陥落よりおよそ一ヶ月、十字軍の次の標的であるスパードを始めとした大陸中央部の都市国家群や、さらにその周辺国に

関する情報をリュクロムはすでに集め始めている。

そしてその集まりつつある情報を、十字軍全軍で共有するつもりは彼には無かった。

「そうなんだ、でも多分そのスパードへ攻め込むよ、アイツらは」

「ふふふ、山を越えられないとサリエル閣下へ泣きついてくるまで、私達はダイダロスでゆっくり過ごさせてもらいますよ」

‘低脳な魔族’と侮り必ずや手痛い敗北を‘彼ら’が経験するだろうことを期待して、リュクロムは正確なスパードの戦力を伝えない、というより寧ろ隠蔽といえるほど情報を封鎖している。

同じ十字軍とはいえ、派閥間の争いがある以上、他の勢力の兵が損なわれることは、リュクロム、ひいてはアルスからすれば望むところである。

「相変わらず、意地が悪いや兄さんは……」

楽しげに微笑む兄の端正な顔を見て、マリアベルはそう呟いたのだった。

ユグノーシス兄弟が家族水入らずの時間を過ごしている一方、第十一使徒ミサは、城内に用意された寝室、その天蓋付きの豪華なベッドに下着姿のままだらしなく寝そべっていた。

貞淑さのカケラも無い態度に加え、その身に纏う下着も共和国貴婦人界で流行の最先端を行く華美なものである。

サリエルも愛用する十字教のシスターに支給される白色無地の下着など、彼女は一度も身につけたことは無かった。

本人としては己のファッションセンスを貫いているに過ぎないが、周囲から見ればただのワガママにしか見えない。

しかしながら、そんな彼女も使徒に名を連ねる存在であり、その力に頼ろうとする者も少なくない。

「ふふふ……サリエルじゃなくて、この私を頼ってくるなんて、十

字軍の中にも見る目のあるヤツがいるじゃない」

ミサの手には一枚の書類、それが入っていた封書は乱雑に破られそこらに投げ捨てられている。

「折角パンドラ大陸まで来たんだから、サリエルの顔だけ見てはいサヨナラじゃ、あまりにツマンナイもんねえ」

ミサは悪戯を思いついた子供のような笑みを浮かべると、手にする書類を丸めて放った。

虚空を描いて飛んでゆく紙は、床へと落下する直前に淡い光を発する。

直後に光はおさまり、後には僅かばかりの灰が残るのみだった。

「魔族だろうが異教徒だろうが、神に逆らう者は全て、この第十一使徒ミサ様が天罰下してやるんだからっ！」

あっはっは、と高笑いをあげるミサ。

その声は隣の部屋にいる第三使徒ミカエルにまで聞こえていたが、母性と慈愛の塊のような彼女は、元気の良い隣人に頬を緩ませることはしなかった。

第70話 4人の使徒（2）（後書き）

十字軍サイドの説明回でした。

ところで、異世界でフルネームの名前が登場したのは、大司教と第十二使徒のイケメン兄弟「ユグノーシス」が二人目です。

まだ出ていないだけで、他にもちゃんと姓があるキャラはいます。ちなみに記念すべき一人目の姓はフィオナの「ソレイユ」でした。

それでは、次回から主人公サイドに話が戻ります。お楽しみに。

第71話 後始末

目が覚めると、そこは何度か見覚えのある部屋だった。

俺の寝ている簡素な木のベッド以外にはこれといって家具の見当たらない実に寂しい部屋。

どうやらここは、イルズ村の冒険者ギルドにある宿泊用の客室みたいだ。

「おはようございますクロノさん」

自分の居場所を認識したと同時に、あまり聞きなれない少女の声、視線を動かせば金色に煌く大きな瞳と目があった。

「……フィオナ、さん？」

「はい、私はフィオナさんですよ」

それが何か？ とでも言わんばかりの顔、と言っても変わらずジト目の無表情なのだが、何となく、雰囲気的にそう思った。

ベッドのすぐ横にある椅子に座り俺を見下ろすフィオナさんの間に数秒の沈黙。

「俺は、どれくらい寝てた？」

「二時間といったところでしょいか」

状況を何となく把握する。

フィオナさんを始めとした冒険者の一団が、残りの十字軍部隊を追い払ったのだろう。

魔力が底をつき意識を失った俺は、とりあえず寝かせられるギルドへ運び込んだってことか。

しかし、二度目にサリエルと戦った時のようにまる一日眠っていた、なんてことにはならなくて良かった。

これからやるべきこと、考えることは沢山ある。

「今、どうなっている？」

「私はお腹が空いてきました」

「いや、フィオナさんの事じゃなくて、村がどうなってるかってこと」

何故このタイミングで俺がフィオナさん個人の状態を気になさなきゃならないんだよ。

やはりこの人はちよつとズレた感覚を持っているようだ。

「自警団の方々が囚われていた村人を解放して、クウアル村への避難誘導を始めています」

「囚われていた？　じゃあ、みんな無事なのか？」

「無事とは言い難いですね、ここへ来た十字軍はかなりの村人を殺害したようです。」

奴隷として連行された後だったら、この村には誰も生き残りはいなかったでしょう」

「奴隷？　はっ、奴隷ときたか、歴史の教科書に書けそうなほど見事な征服者っぷりだぜクソっ！」

ヤツラがダイダロスを占領している光景を目にした時から、こういう事、つまり労働力などある程度価値のある若者は奴隷に、それ以外に老人や病人など役立たずな者、反抗的な者は全て殺される、そんな最低最悪の支配が成されるだろうことは、予測していたさ。

けど、その予測はすでに現実として起こってしまっていて、

「クソお——ちくしょう……」

そして、俺はこの村を、友人達を守ることが出来なかった。

今更、ああ、本当に今更だな、どうしようもない後悔と悲しみが俺の心を飲み込んでゆく。

手元には、怒りで全てを忘れさせてくれる呪いの武器は無く、そして、その怒りをぶつける敵も今は目の前にはいない。

大切な人達を殺されるという最悪の悲劇に直面し、喚き、叫び、泣き出したい衝動に駆られる。

「……けど、泣くのは後だ」

瞳を閉じて、魔法を行使する時のように集中し、理性を総動員して揺れ動く全ての感情を抑える。

俺にはやらなければならないことがある。

生き残った村人がいるなら、彼らが無事に避難させなければなら
ない。

そして、確実にまた襲い来る十字軍を、俺は迎え撃つ。

「それに、またカッコ悪いところは見せられないしな」

全身を覆う白いシーツを跳ね除けて、体を起こす。

傍らには、俺へ寄り添うように身を横たえる小さな妖精の姿。

「なあ、リリイ」

すうすうと可愛らしい寝息を立てるリリイ、その金糸のような滑
らかな長髪を撫ぜる。

俺はリリイを起こさないようにベッドから降りると、すぐ傍に畳
んで置いてあった黒いローブを纏った。

体に異常は無い、ついでに言えば魔法のローブである『悪魔の抱
擁』エンブレスにも傷一つ無い。バフォメット

サリエルに穿たれた穴も、司祭の光魔法を受け止めたときに少し
だけ焦げた表面も、全て再生したのだ、まるで今も悪魔の命が宿っ
た生物のように。

「けど、何でリリイもここで寝てるんだ？」

「クロノさんが倒れた後、すぐに、飛んで、来たんですよ。」

クロノさんをここに寝かせた後は、怪我を負った村人達を凄い勢
いで治癒して回っていました。

そして粗方治療が終わったら「クロノおおお！」って叫びながら
ベッドに裸でダイブして、そのまま眠ってしまったました、連続で治
癒魔法を行使して疲れてしまったのでしょう」

「とっくに治癒を終わらせてるなんて流石だなリリイは、本当に頭
が上がらない。」

ところで、ベッドにダイブする件の説明は必要だったのか？」

「とても興奮した様子だったので」

「そうか、でもリリイは小さいからそれぐらいはしゃぐのは気にし
ないでやってくれ」

ベッドの端にリリイが着ているエンシェントビロードのワンピースドレスが脱ぎ捨ててあるのが目に入った。

「そうですか、私の目の前で何が始まるのかとドキドキでしたが、今度からはお二人がベッドでどうなろうと気にしない事にします」「ん？ うん、まあ分かってくれたならいいさ」

イマイチ要領の得ない返答だが、フィオナさんは納得した様子なので良しとしよう。

「じゃあ、俺はちょっと出てくるよ」

「お手伝いですか？」

「ああ、それと、友達を吊ってやらないといけないから」

「……そうですか」

「フィオナさんはどうするんだ？」

「リリイさんと大切な約束があるので、ここで起きるまで待っています」

「約束？」

「ええ、とても大切な約束なのです。

それが果たされるのは、一分一秒たりとも遅れがあってはならないのですよ」

「何だかよく分からんが、とりあえずリリイを頼む」

「はい」

「ああ、それとお腹空いてるって言ってたな、戻った時には何か食事を持ってくるよ」

「そうですか、それはとてもありがたいです、出来るだけ早く、美味しいものを、沢山、よろしく願います」

随分と欲深いお願いの仕方をされて、俺は部屋を後にした。

イルズ村の十字軍は、表向きはクゥアル村から派遣された自警団と冒険者から構成される救援部隊によって退けられたという事にな

っていた。

だが、クロノとリリイの二人が居なければ、こうも一方的に十字軍部隊が撤退することは有り得なかった。

クロノは百人近くの十字軍兵士と、部隊を率いるキルヴァン司祭を殺し、その兵数も士気も大いに低下させた。

十字軍にとってさらに不幸であったことは、光の泉制圧へ向けて副官コルウスとほとんど全ての魔術士を派遣したことであった。

もしこの制圧部隊が異変を察知してイルズ村へ引き返していたなら、クロノは返り討ちにあったであろうことは間違いない。

だがその制圧部隊は、リリイの手によって誰の目にも止まる事無くこの地上から完全に消滅したのだ。

指揮官を失い、戦力を失った残りの歩兵達は、それ以上戦うことを即座に諦め、逃げの一手を打ったのである。

兎も角、今はイルズ村を恐怖のどん底に陥れた十字軍は去り、村人達はこの機会にクワアル村への避難を始めた。

避難は驚くほどスムーズに行われた。

イルズのような小さな村は、強力なドラゴン、あるいは大きなモンスターの群れが襲来した場合、それを防ぎきるだけの戦力は無い。故に緊急の場合には即座に避難できるよう、イルズに関わらずどの村でも備えがあるのだ。

ドラゴンに喰われるのも、十字軍に斬られるのも、どちらも大切な人が死んでしまう悲劇ではあるが、生き残った村人達は現実に向き合いすぐに行動できる程度には強かであった。

そこかしこから泣き声は聞こえ、沈痛な面持ちや、目が虚ろな者もいる、それでも、彼らは確かに生きる為に体を動かしていた。

クロノは溢れそうになる感情を必死に抑え、ひたすら無心であるよう努めながら村人達の避難の手伝いと、すでに死体となった者たちの‘後始末’を行った。

このイルズ村にも伝統に則った正しい葬儀の手順は存在するが、いつまた十字軍が戻ってくるか分からない状況、あまり時間をかけ

てはいられない。

それだけでなく、あまりに死者の数が多すぎる為、結果的に多数の遺体を同時に焼いて処分する事となった。

満足に棺も無く、墓も無く、誰ともなしにまとめて埋葬される。

こうするより他に全員分の死体を処分する方法は無く、誰もがこの大雑把に過ぎる埋葬に表立って反対する者は居なかった。

まともに弔ってやれない事を死者に詫びつつ、涙を流すより他は無い。

そうした悲しみにくれる人々と、死体を灰に変えるべく燃え盛る炎を見つめながらクロノは考える。

（俺があと1日でも早く戻っていられば、十字軍を撃退できたかもしれない。

少なくとも、今よりは死者を抑えることが出来たはずだ）

起こってしまった事に対して、‘IF’の話は無意味かもしれない。だが、それを思い描くことによって、そうすることが出来なかったことの反省とし、次に生かすこともできる。

今度こそは自分が望む結末を目指して。

（十字軍は必ずまたやって来る、イルズの次はクウアル、そしてさらにその先も。

ダイダロスが陥落し竜王が死んだ以上、この領土は完全に十字軍の手に落ちたと考えていい、こんな田舎にまで部隊が派遣されたことからみて間違いない。

十字軍に対抗する戦力が無い以上、領内の全てを治めるのは時間の問題、ダイダロスの何処へ逃げても安全な場所はどこにもない）
クロノは村長の家で何度か見た、ダイダロスを含むパンドラ大陸東部全域の地図を思い起こす。

（距離、地形、どちらから見てもスパイダしか逃げ道は無さそうだ）
ダイダロス領のかなり西端に位置するイルズ村から、さらに西へと進み、ガラハド山脈を越えたところに都市国家スパイダがある。
（スパイダにはダイダロスの侵攻に備えてしっかりと防衛軍が整え

られている、それがどんなもんなのかは分からないが、今のところ十字軍を抑えられそうな戦力を近くで持つのはこしき無い。

ただ問題なのは、避難したとして、仮想敵国であるダイダロスの住民をスパード側がすなりと受け入れてくれるかどうかってところだ……いや、こんな現代世界でも解決しない難民問題なんか俺が考えてどうなるものじゃないな

敵国から逃げてきた民を受け入れるかどうか、あるいは敵国ではないにしても外国からの避難民を受け入れるかどうか、そういった高度に政治的な難民問題の解決方法など、一般的な高校生であり、冒険者生活三ヶ月のクロノに解答できるわけがない。

故に、もうその時になってから考えればいい、とクロノは判断する。

（それより問題なのは、逃げたとしても、易々と俺達を十字軍が逃がしてくれるかどうか、ってとこだ。

占領部隊が来る前に避難が終わればいいが、もし間に合わなかったら？ もし避難民を狙う追撃部隊が出されたら？

果たして、俺達はスパードまで無事に逃げ切ることができるのか？）

クロノはその場で大きく息を吐いてから、小さく呟いた。

「できるか、じゃねえ、ヤルんだ」

クロノは今自分がやるべき事を改めて認識する。

（十字軍が追いかけてくるなら俺が止めてやる、今度こそ守る、守りきってみせる！）

第71話 後始末（後書き）

気がついたら8000ポイント突破！ このままいけば累計ラン
ク100位以内に入れそうです。応援してくれている全ての読者に
感謝！

ありがとうございます！

第72話 避難開始(1)

「おお、ウチは無事で良かったな」

約一週間ぶりに妖精の森に建つ我が家へと帰宅する。

もしかしたら光の泉を目指して侵攻した十字軍部隊に小屋が発見され、焼き払われているんじゃないかと思いはしたが、杞憂で済んだようだなによりだ。

イルズ村での避難準備は粗方終わり、今頃は住民達が荷を引いてクウアル村へと移動している頃。

ここまでくれば俺が手伝えそうなことは無いので、今度は俺達が自宅を引き払う準備に帰ってきたわけだ。

「ただいま」

「ただいまー！」

俺の声と、元気の良いリリィの声が小さな室内に響く。

「お邪魔します」

そして、後続く少女の声、その正体は謎の魔女フィオナ・ソレイユである。

何故彼女がウチに？　と思うが、何となく流れについて来てしまったのである、逆に断る理由も無かったのだが。

「そういえば、ここを訪ねた客人第二号ってことになるのか」

その客人第二号は、リリィがゴロゴロ転がっているベッドにいつの間にか腰を下ろし、真剣な目で俺を見つめた。

「クロノさん、とても大切なお話があります」

「俺に話？」

「はい、リリィさんが子供状態に戻ってしまったので、約束を果たせるのがクロノさんしかいません」

ああ、そういえばフィオナさんはリリィと約束がどうか言っていたな。

手伝いからギルドに戻った後は、持ってきたパンとスープを無心で食べていただけだったので、詳しい事情はまだ何も聞いていない。それよりも気になるのは、リリイが‘子供状態’と言ったことに對してだ。

「もしかして、大きい姿のリリイと会ったのか？」

「はい、まさかあの娘がこんなに純真無垢な幼子になるとは思いませんでした」

何だ、別に少女リリイだって無茶苦茶カワイイじゃないか、正しく今のリリイがそのまま美しく成長しましたって感じの容姿、どこに驚く要素があるんだろうか。

まあいい、重要なのは少女リリイとフィオナさんが一体どんな約束をしたかということだ。

「それで、リリイとの約束ってのは？」

「はい、それは――」

もしかして、助けてもらった謝礼として俺が破産するレベルの代金請求とかされるんじゃないか、と若干不安になる。

一体どんな約束をフィオナさんとしたって言うんだリリイ！？

ちなみにそのリリイ本人は俺の心配など他所にベッドの上で大きな枕にフランケンシュタイナーを仕掛けて遊んでいる。

「それは？」

「それは、私にアイスクャンデーを好きなだけ食べさせてくる、と」

「……なんだって？」

「私にアイスクャンデーを‘好きなだけ’食べさせてくる、と」

好きなだけ、という部分を強調して、大事な事だから二回言いましたとばかりに念を押すフィオナさん。

「食べさせてくれますよね？」

何だよそのノーと言ったらこの小屋燃やしますよと言わんばかりの鋭い視線は。

まあ俺のことを助けてくれたわけだし、アイスクャンディーを作っ
てやるくらい全く構わないから良いのだが。

「今はそんなに材料無いから沢山は作れないぞ？」

「そうですか、ではお願いします」

そんなワケで俺は、荷造りの前にアイスクャンディー作りをしなければならなかった。

緑風の月4日から新陽の月20日まで暮らした、僅か三ヶ月ばかりの住居であったが忘れられない思い出がいっぱいの小屋を引き払い、クウアル村へ到着したのは日も沈みきった時刻であった。

あらん限りの材料を使って作ったアイスクャンディーをフィオナさんにくれてやった後、彼女は寢床としているクウアル村冒険者ギルドへと帰っていった。

同じく冒険者である俺とリリィも宿泊場所はギルドになるのだが、俺達には先にやらなければならぬ事があった。

「うーん、話をマトモに聞いてくれればいいんだけどな」

俺は出来るだけ多くの人にダイダロスで知りえた、『竜王の死』と『ダイダロス陥落』という二つの情報を、村長を始め村人達に伝えなければならぬ。

その為にクウアル村長の自宅前へやって来たのだが、村の意思を決定する集会所としての役割を持つ村長宅は、多数の避難民が発生した緊急事態に際し、その対応を協議する為に多くの人がごった返している。

彼らも詳しい状況が分からず対応に苦慮していることだろう。

だが十字軍の存在を知る俺からすれば、今は議論をすっ飛ばしてすぐにでもスパードへの避難を始めなければならない状況だというのが分かっている。

早く伝えて行動を起こさなければ、全て手遅れになってしまう。ただ問題なのは、クウアル村の村長と一切面識が無い為、ランク1冒険者でしかない俺の話を信用してくれるかどうかという点だ。

不安要素はあるものの、まずは話してみないことには始まらない。

「よし、行くぞリリース！」

「うんっ！」

覚悟を決めて、俺は村長宅へと踏み込んで行った。

第73話 避難開始(2)

クウアル村は西北と西南の両街道が合流する交通の要衝であるため、イルズ村に比べて規模はずっと大きく、それに比例するように村長の邸宅も立派なものであった。

木造三階建ての村長宅は二階より上が居住空間であり、一階が集会所の役割を果たす公共のスペースとなっている。

今はその一階部分に不安を抱えた多くの村人が集っているが、この中で対応を協議する中心的な人物はクウアル村長、自警団長、そして冒険者ギルドのギルドマスターの三者である。

「数だけの人間の軍団など、全く恐れるに足りん！」

ヤツらは我が勇敢なる自警団の姿を見るや、武器を投げ捨て、背中を向けて逃げ出しおった、あんなのがいくら来ようが全く相手にならん！」

前に立って熱弁をふるっているのは、クウアル村自警団の団長であり、村長の息子でもあるナキムという名の男だ。

彼はイルズ村救援部隊が鎧袖一触に敵部隊を追い払ったという報告を受けるや、クウアル村での徹底抗戦を主張し始めた。

朝方にイルズ村からの避難民がやって来た段階では、敵の正体は人間の軍団らしいという以外は一切の情報は無く、万全を期して避難を始めるべきだとの意見が出始めていた。

現にクウアル村の住民達はいつ避難命令が出てもいいよう準備に取り掛かっている。

だが、救援部隊があっさり勝利したという事で、敵の戦力は大量のものでは無いと、少なくともこの恰幅の良い自警団長ナキムは判断を下した。

避難それ自体は、イルズ村と同じ理由で問題なく行うことができるだろう、だが、それとは別に誰だって自宅を離れていつ帰れると

も分からない避難生活をしたとは思わない。

ナキムが‘自分が率いる’という点を強調しながら、敵を華々しく破った救援部隊の勝利をまるで自分が見てきたかのように大声で弁舌し、避難の取り消しを求めた。

しかも救援部隊の半数以上は冒険者で構成されており、自警団員は数えるほどしか参加していない。

当然、ナキム自身は救援部隊でその数少ない自警団員として直接指揮をとっておらず、クウアル村で「事態の推移を見守りたい」とただ待っていただけである。

「敵が盗賊紛いの連中相手に、わざわざ避難までする必要は無いと皆は思わんのか？」

親父、いや、村長殿はどうか？」

「うゝむ……」

渋い顔で考え込む村長ナハド、彼はどうにも息子が勝利に酔って安直に戦いの決断を下しているようにも思え、徹底抗戦に全面的な賛同をしかねている。

エルフであるイルズ村長シオネに比べて、人間であるナハドは若いといえるが、それでも齢60に近く村長として何十年も勤めた経験がある以上、勢いに任せた迂闊な判断はしない。

だがそんな父親の慎重な考えを、歳のせいで臆病になった、としかなキムは思わないようである。

「ふむ、ギルドマスター殿はどうか？ 報告を聞いて、何か敵の戦力に脅威となるようなものがあると思われるか？」

「聞いた限りでは、魔術士が三人だけで、槍や弓で武装した兵士がほとんどと言う。

百人をはるかに超える数は脅威だが、特別に力や固有魔法エクストラを持たない人間のみで構成され、さらに魔法や武技を習得した者がいないとなれば、イルズを襲った部隊の倍が来ても、ここでなら撃退できるだろう」

「そうとも、三人いた魔術士もあっさりと我らが倒した。

特別な力を持たない人間の兵などどれだけ集まっても野良ゴブリンと変わらん」

三人の魔術士とは、キルヴァンとその弟子二人の事で、その死体の装備から魔術士だと判断されたが、彼らを倒したのは救援部隊では無い。

だが、誰が倒したのか明確に判明しているワケでは無いので、さり気無く手柄の横取りをしたのだった。

「このクウアルには、イルズよりもずっと多くの自警団と冒険者がいる。」

少数の救援部隊だけで百を超える敵を追い払ったのだ、たとえ敵が千人来ようが、強固な石壁で守られたクウアルが決して落ちることは無い！」

あまりに自信満々に言い放つナキムの言に、この場に集った者達は避難から抗戦へと意見が傾き始める。

村長もこの様子では抗戦も止む無しか、と考えた矢先であった。

「村長、クロノと名乗るイルズ村の冒険者が話をしたいと」

一人の村人が村長へ耳打ちする。

「イルズの冒険者は全滅したと聞いたが？」

「どうやら別の場所へクエストに行っていたようで、朝方にクウアルへやってきて、イルズの事を聞きそのまま向かったということですよ」

「おお、その話は聞いておる、そうか、生きて戻ったとは、救援部隊が間に合ったようだな」

見ず知らずの冒険者ではあるが、助かったと聞いて安堵の表情を村長は浮かべた。

「それで、どうします？」

「うむ、通せ、ワシも実際にイルズを見てきた者の話が聞きたいと思っていた」

了承の意を受け、伝令役の村人が部屋を出る。

「みなの方、イルズの冒険者が話をしたいそうだ、現地が如何なる

状況であつたか詳しく聞こうではないか」

室内に集った者達の間でざわめきが起る、が、わざわざ表立つて反対する者はいない。

「イルズの冒険者クロノ、入るが良い」

村長の呼びかけと同時に、扉が開かれ、全身黒尽くめのクロノが後ろにリリィを連れて入室する。

「失礼します、私はイルズ村で冒険者をしているクロノと申します、ランクは1です」

「ふっ、ランク1とはとんだ新米だな」

たかだか村の集会所でしかないが、領主気取りのナキムとしては場違いだとも言わんばかりの台詞であつた。

あからさまに侮蔑の意が籠ったその言葉を一言一句漏らさずクロノの耳に届いたが、一切反応する事無く話を切り出すことにした。

「まず、私が直接ダイダロスへ赴いて知りえた事を伝えます」

「ダイダロス？ 今は封鎖され出入りは出来ないはずだが？」

村長が問いかける。

「違法ですが、不穏を感じて様子を見に行きました」

「なるほど、今はその行動を咎めたりはせんよ、それで、ダイダロスで何を見た？」

クロノは一拍おいて、口を開いた。

「竜王ガーヴィナルは死に、ダイダロスは陥落しました」

「馬鹿なっ!？」

驚きに大声を張り上げたのはナキム、だが、彼でなくともこの場に居る者には到底信じ難いことであり、普段動揺を見せることの無い村長とギルドマスターも、驚愕に目を見開いている。

「適当なコトを抜かすなっ! 今がどういう状況か――」

今にも腰の剣を抜いてクロノへ切りかからんばかりに興奮するナキムだが、

「落ち着けナキム、そして皆も静まれ、まずは詳しく話を聞こうではないか」

村長がどうかその場を治め、クロノに続きを促す。

「ダイダロスを占領しているのは、アーク大陸から渡ってきた十字軍と名乗る人間の軍団です。」

一年ほど前に、北東の海岸線にヴァージニアという町を築いたのと同じ者達です」

村長もヴァージニアという町の存在は勿論知っている。

だが、それは竜王率いる強力なダイダロス軍にとっては取るに足らない存在であるとしたか、彼は聞いた事は無かった。

「確かにダイダロス軍はヴァージニアへ人間を押し留めていたようですが、何ヶ月か前に大規模な増援部隊が派遣されました。」

どれほどの数がいるのかは分かりませんが、十字軍は確かにダイダロス軍を破り、その時の戦闘で竜王ガーヴィナルを討ちました。

街道を封鎖する命令は、恐らくダイダロスが占領された直後に出されたものでしょう」

「うむむ、まさか、そのような事になっているとは、俄かには信じ難い……」

明確に否定こそしないものの、言葉どおり事実として受け入れがたいようで、腕を組んでうんうんと唸る村長。

「ですが、十字軍は現実に、イルズまでやって来ました。」

イルズに來た部隊はほんの一部に過ぎません、今日は撃退できたとしても、すぐにまた新しい部隊が村を占領するために派遣されます。

すぐに避難を始めないと手遅れになります、どうか、今すぐ避難命令を出してください」

クロノは真剣に訴える、だが、ガーヴィナルが死に、ダイダロスが陥落したという事実は、これまで長きに渡って竜王と讃え、その支配の下で暮らしてきた彼らからすれば、今すぐに受け入れることは難しい。

村長でさえ、あまりに現実離れたクロノの話に、すぐに首をたてに振ることはできないでいる。

まして短気なナキムがランク1の冒険者でしかないクロノの話を信じるはずがなかった。

「嘘だ嘘だ！ そのような話は全てホラ話だ！

この男は故郷が襲われて頭が狂ってしまったのだ、ただの盗賊団をありもしない軍団だと思ひ込んでいただけだっ！！」

流石にクロノも自分が物狂い扱いされると腹が立つ、が、どうにか堪えて真実を訴える。

「私はダイダロス王城に翻る十字の旗を確かに見た」

「それも見間違いだ！ あの竜王様が討たれる？ ダイダロスが落ちる？ そんなコトは古の魔王でも現れない限り絶対にありえん！！」

口角泡を飛ばすナキムの言に、クロノも声をあげて応える。

「十字軍はただの盗賊団なんかじゃ無い、なんなら、捕らえた兵士を尋問でもしてみればいい！」

「ふん、全く哀れな男だな、だが安心しろ、この村は我が自警団が確りと守って見せる、お前はギルドのベッドで神々に祈りでも捧げてぶるぶる震えているがよい」

心底蔑んだような目を向けるナキムを前に、クロノは自分を馬鹿にされて腹が立つというよりも、寧ろ焦りを覚えていた。

もしもここで自分のいう事が一切信じられなければ、とてもスパ―ダまでの避難は実行されない。

それどころか、この男は自分達だけで戦うと言いつけている。

確かにクウアル村はイルズ村に比べて倍以上の自警団員と冒険者達がいるのはクロノでも知っている、だが、その程度で万に及ぶ十字軍を止められるはずも無い。

包囲されてしまえば、今度こそ村人は皆殺しの目に遭う。

クロノの額から汗が流れる、ここで、何としても避難を進言しなければ、全て終わる。

「信じてくれ、全て本当の事だ！ 今すぐ避難しないと手遅れになる！！」

「ええい黙らんかこの狂人め、貴様の世迷いごとに付き合っている暇は無い！」

おい、さっさとコイツをつまみ出さんかっ！」

クロノの主張とソレを嘘と断じるナキムの主張どちらが正しいのか、正確な情報を与えられていない村人達に判断できないのは仕方のない事かもしれない。

村長でさえ、クロノの言葉には半信半疑、いや、疑いの方が強い。室内は喧騒に包まれる、本当に竜王は死んだのか？ ダイダロスは？ 全て嘘なのか？ ただ狂った哀れな冒険者でしかないのか？ その騒然とした中で、

「私のクロノを馬鹿にするな豚が、殺すわよ」

そう、小さく呟いたリリイの声は、クロノは勿論、誰の耳にも届かなかった。

クロノはどうか村長達を説き伏せる為の言葉を必死で考える、そんな時に、リリイはローブの裾を引っ張った。

「な、なんだリリイ？ 今は――」

「クロノ、ここは私に任せて」

そう言っただけで微笑むリリイ、そのエメラルドの瞳に知性の輝きが宿っていることにクロノは気がついた。

「リリイ――」

呼びかけるが、リリイはクロノの足元を離れ、村長達が座る上座へと一直線へ向かう。

そして七色に煌く羽ばたきと共に中空に舞い上がり、村長の前へと躍り出る。

「久しぶりね、ナハド村長」

リリイの姿を目にした村長は驚きの声を挙げる。

「リ、リリイさん、何故このような場所に……」

「うふふ、お元気そうで何より、この様子ならしばらく霊薬のお世話になることは無さそうね」

村長の脳裏には、十数年前に患った重い病に倒れて死を覚悟した

時、枕元に立って治療を施してくれた小さな妖精の姿が思いおこされる。

それ以来、年に一度はリリィの作る妖精の霊薬を処方され、健康を維持し続けてきた。

しかし、見た目通り幼児のような振る舞いを見せ、妖精らしく裸だったいつものリリィと同じ姿でありながら、流暢に言葉を話し黒い衣服を纏う今のリリィが、凄まじい違和感を伴っていた。

その戸惑いの感情をリリィは直ぐに読み取る。

「ああ、これが本来の私なの、あまり気にしないでね村長さん」

「それで、一体どのような要件で？ 今はご覧の通り非常に込み入った事情が――」

「大丈夫、全て理解しているわ。」

そしてクロノが言ってることが全部真実だってことを、教えてあげる」

「真実、ですと？」

初めてみる真剣な表情を向けるリリィに、村長はゴクリと唾を飲み込む。

「ええ、竜王が死んだこと、ダイダロスが陥落したこと、そして、それをやったのは十字軍という恐ろしい人間の軍団だってこと、全て本当の話」

「ま、まさか……」

「知っているでしょう、妖精は悪戯するけれど、絶対に嘘を吐かないって」

室内はシンと静まり返っていた。

村人達は全員、あのナキムも、妖精であるリリィが『真実だ』と言いつれば、それを信じざるを得ない。

何故なら妖精という存在は、‘嘘をつけない’のだから、証拠など無くとも真実として受け入れるほかは無いのだ。

本当のところは、ハーフであるリリィ、特に今のように本来の知性を取り戻した状態では平然と嘘を吐くことが出来るのだが、そん

なことはこの場にいる村人達の誰にも分からない。

故に、リリイの言葉は妖精の伝承と同じく、真実しか語らないと村人達は信じて疑わない。

「私はクロノと一緒にダイダロスまで行って、この目で確かに見てきた、ダイダロス王城に翻る十字の旗を、そして、竜王を殺せる力を持った人間^{バケモノ}をね」

「お、おお……なんという事だ……」

リリイによって突きつけられる絶対の真実に、村長は今度こそ驚き、嘆く。

「聞きなさい、ダイダロスという国は滅亡した。」

領内は全て十字軍によって支配される、今すぐ逃げなければここもイルズ村と同じことになる。

彼らに取り入ろうとしても無駄、十字教という宗教を信じる人間共は、私達を魔族と呼び、絶滅させようと本気で考えている。

助かる方法はただ一つ、すぐにスパードへ避難を始めること」

「ス、スパードだとお!？」

声を挙げたのは、村長ではなくナキム。

スパードがダイダロスを敵国として見ている以上、逆もまた然り、ナキムはいつか来るスパード攻めに自分も参加し、武勲を立てることを夢見ていたのだ。

その攻めるべき敵国が避難先とは、他の村人にもまして受け入れがたい。

「貴方、さっきから五月蠅いわね、ちよつと黙っていてくれない?」

ゴミを見るような本気で蔑んだ目つきを少女姿のリリイに向けられ、ナキムは激高、

「お、おお……イイ……」

するかと思いきや、ナキムの全身に不思議な快樂が流れる、彼は冷たいリリイの目に見つめられて、魅了、されてしまっていた。

美しいものには魅了の魔法が宿るこの世界、すごいタイミングに魅了が発動したものだ、兎も角『魅了^{チャーム}』状態に陥ったナキムは、

恋する乙女のような表情で陶然とリリイを見つめるだけで、声を荒げることが無くなった。

ナキムの存在そのものを忘れたように、リリイは村長へと視線を戻す。

「村長さん、辛いかもしれないけどクウアル村は捨てるしかないわ。私達妖精はすでに故郷を捨てた、これを見なさい——」

そうしてリリイが取り出したのは、神々しく光り輝く紅玉の大魔^{アーティファクト}具、『紅水晶球』である。

「こ、これは、まさか……」

その濃密な魔力の籠った真紅の光を前に、特別魔法に詳しいわけでもない村長でも、その正体がなんであるかすぐに想像がついた。

「そう、光の泉に加護をもたらす宝玉、けれど十字軍が来た所為で、もう妖精女王の加護は無くなった。」

私^レ達^はは必死に十字軍と戦って退けたけれど、荒れてしまった光の泉は、もう元には戻らない」

悲しげに言うリリイの言葉だけで、これまで不可侵とされてきた光の泉がどうなってしまったのか、村長は納得してしまった。

同時に、クロノもこの時初めて光の泉がどうなったのかを聞くこととなったのだが、すでに事情を察していたのか、あまり驚いた表情は見せなかった。

「さあ、もう分かったでしょう、貴方達がこれからどうすべきか」

そう言い残し、リリイはクロノの元へ戻り、腕を引っ張るようにして部屋を退室していった。

「……逃げよう、スパードへ」

かくして、クウアル村に緊急避難を知らせる鐘の音が響き渡った。

第73話 避難開始(2) (後書き)

ウソをついている「味」だぜ！　ですが今回は嘘も方便という話になりました。

思えば、クロノ達の行動が初めて多くの人々に影響を与えることとなりましたね。こうして物語は沢山の人を巻き込んで大きくなっていくものだと思います。

第74話 イヤな女(1)

イルズから見てクワアルの反対側へ隣り合う、つまり十字軍の占領する最西端に位置する村がある。

その村の村長宅にキルヴァンが所属していた占領部隊の司令部が置かれている、勿論一時的なことではあるが。

報告を済ませた伝令が出て行った後には、占領部隊の指揮官と副官の二人が残っていた。

「キルヴァン隊が壊滅とは、イルズにはドラゴンでも住んでいるのか？」

眉をしかめながらそう言葉を発するのは、指揮官のノールズ司祭長。

腰から鋼鉄のメイスをぶら下げた、いかにも僧兵^{モンク}といった風貌の厳つい中年男性である。

「ドラゴンでは無く、悪魔’です、話、聞いてなかったんですか？」とても上司に向けたとは思えない冷たい台詞と視線を送るのは、

副官であるシスター・シルビア。

炎のような赤い髪を結い上げ、ゆったりした修道服を着ても尚ボディラインが分かるほど抜群のスタイルを誇る。

組んだ腕の上で重そうに乗っかる巨乳をノールズは横目で見るが、今は興奮の鼻息よりも溜息しか漏れなかった。

(この赤頭がっ！ 口を開けば腹立たしいことしか言わん！)

そう思っても特にシルビアを咎めないのは、ノールズがフェミニストだからでは無く、自分の上司であるメルセデス枢機卿の口利きで副官に任命されているからである。

どれほど魅力的であっても、自分より偉いヤツの女に手を出すほど彼は愚かではなかった。

勿論この本国より遠くはなれたパンドラ大陸で枢機卿が直接彼女

を守ることは無い、殺そうと思えばいつでも出来る。

だが、もしも彼女が無事に帰還することが無ければ、指揮官であるノールズの信用は落ちる、それ以上に、枢機卿の個人的な感情で恨みを買う可能性が大いにありうる。

キルヴァンほど露骨ではないものの、それ相応の野心を抱くノールズとしては、自分の昇進の為にシルビアの生還は絶対条件となっているのだ。

輝かしい未来の為に必死に自分へ言い聞かせ、どうにか溜飲を下げるノールズ。

「分かっている、実際のところは黒魔法を行使する凄腕の冒険者のだろう」

「私としては、聖域の制圧へ向かわせた部隊を全滅させた存在の方が気になります」

「ただモンスターに襲われただけかもしれん、その森はダンジョン扱いだと言うではないか」

予想外に強力なモンスターに遭遇し、半ば事故のように全滅したと考える可能性が最も高いだろう。

しかしながら、もしそうじゃないとするならば、部隊を全滅させるだけの戦力を持った魔族の兵が敵側には存在しているということになる。

キルヴァン隊を壊滅させた‘悪魔’に加えて、この聖域制圧部隊を殲滅した‘魔族の兵’がいるとするならば、それなりに厄介な敵となりうるだろう。

「何にせよ、早急に斥候部隊を派遣した方が良いでしょう」

シルビアの意見に、ノールズは是非も無く答える。

「情報収集は任せる、好きにしろ」

「言われなくともそうします」

チッ、と舌打ちを一つしてから、ノールズは言葉を続けた。

「明日にはこの村の支配も完了する、それが終わってから本隊をノールズへ向かわせる、結局はこれまでとやる事は変わらん」

慌てる必要は無い、占領するべき土地は逃げたりしないのだから。この占領任務はもう一月もしない内に、滞りなく終えることができるだろうとノールズは考え、殊更に取り乱したりはしなかった。

「しかし、キルヴァン隊を丸ごと失ったのは少々手痛いですけどね」「あんな粹がった小僧など居なくなっただころでどうもせんわ」

「少なくとも貴方よりは兵として優秀でしたけど」

ノールズのこめかみに青筋が浮き出るが、シルビアは気づいていないのか、全く上司の反応など気にせず言葉を続ける。

「キルヴァン隊にはそれなりの数の魔術士もいましたし、歩兵も新兵ばかりというわけでもありません。

この程度の勘定も――」

「あゝあゝ分かった分かった、俺が間違っていたよ！」

これ以上こんな話を黙って聞かされれば、この見目麗しい副官を殴り飛ばさずにはいられないと思ったノールズは、さっさと自分の方から折れることにした。

「分かってくれれば良いのです、戦力の適切な把握もしていないようでは指揮官として失格ですからね、とても命なんて預けられませんよ。」

それに、今度はこれまでにないほど魔族の抵抗が予想されます、くれぐれも油断などしないで下さいよノールズ司祭長。

では、斥候部隊の選抜があるので私はこれで失礼します」

ノールズへ一瞥すらせずに、真っ直ぐ背中を向けて部屋を出て行くシルビア。

「くそっ、本当にイヤな女だっ!!」

第75話 イヤな女(2)

「クロノは、これからどうするつもり？」

クウアル村の冒険者ギルドへ一旦戻ると、私はクロノへ問いかけた。

姿は幼児のままだが、『クイーンベリル紅水晶球』の力を借りて大人の意識だけならしばらくの間は保つことが出来る。

だから、こうしてクロノと真面目なお話もできる、本当にコレを持ってきて良かったわ。

「そりゃ当然、冒険者として避難の護衛をするさ。

スパードへの避難も決定したし、すぐにでも緊急クエストが出されるだろう」

クロノの言っている事は正しい、私がナハド村長へ言い聞かせ、すでに緊急避難の鐘は鳴らされた。

村を捨てる以上、今ここにいる者は総動員で避難が始まる、そして村の者ではない冒険者は緊急クエストという形で強制的に協力させられる。

と言っても、冒険者ギルドは国境を越えてパンドラ大陸全土に広がる巨大組織、ダイダロスが滅亡しても、スパードへ行けばそこで緊急クエスト達成の報酬は貰える。

敵の戦力が未知数で危険な緊急クエストだが、きちんと報酬がでる以上これをわざわざ断る冒険者はいないだろう。

「具体的にどういう仕事になるのかは、これからやってみなきゃ分からないけどな」

クロノはランク1でしかない一人の冒険者としては正しい、でもね、

「それじゃダメよ、クロノ。

これから先どうなるか、もう少し考えてみて」

ここでダメ出しされるとは思わなかったのか、それとも子供姿の

私にダメ出しされたのがショックだったのか、やや驚いたような表情を一瞬浮かべる、が、すぐに言葉を発する。

「まずはスパードが本当に受け入れてくれるかどうか、ってところが問題じゃないか？」

嘆願書を持った使者が先行してさっき出発して行ったみたいだが、すんなり受け入れてくれるかどうかは分からん。

後は十字軍の追撃部隊が来たら、どうやって止めるかだ。

スパードが避難民の保護に兵を出してくれりゃ一番安心なんだが、ダイダロスとの関係を考えると期待するだけ無駄だろうな。

それよりは、俺達冒険者と自警団だけで対策を考えるべきだろう」
うん、その通り。

外からの援軍は期待できない以上、手持ちの戦力でやりくりするしかない。

「まずスパードの受け入れについては今考えても仕方が無いから後回しでいい、国境でゴネればどうとでもなるでしょ。」

それで、私達に関わってくるのは冒険者がどう動くかについて、ね」

自警団の長はあの人だか豚だか判別のつかない男だ、円滑な協力関係は望むだけ無駄というものだろう。

期待できない以上は無視して、まずは冒険者についてのみ考えるべきである。

「この後はすぐ冒険者同士の打ち合わせになるだろう。」

クウアルはイルズ以上に数がいるし、なによりスパードへ行く途中にもいくつか村がある、そこにいる冒険者も含めれば、結構な人数だ。

まずは誰がトップに立つか、ってところから話が始まるんじゃないか、まあ対等な協力関係もあるかもしれんが」

「そう、私が言いたかったのはね、そこなのよクロノ」

「誰がトップに立つかって？」

うん、と肯定する台詞を満面の笑顔で返すと、クロノが鎮痛な面

持ちで一つ溜息をつく、うふふ、物分りがいいね。

「もしかしてリリィ、俺がトップに立てって言いたいのか？」

「その通り！ 頑張ってねクロノ！」

「いや、待て待て、それは無理だろ、だって俺はまだランク1だぞ？

こういう場合は普通、一番ランクの高いヤツがやるもんだらう。

確かここにはランク4になるパーティもあるって聞いたぞ、だからソイツらがまとめ役になるべきだろ」

こういった複数のパーティが共同でクエストにあたる場合、最もランクの高い者が全体のリーダーを務めるのは基本的なことだ。

ランクが全てとは言わないが、それはあくまで一番ランクの高い者が、よほど人望が無かったり、ただ強いだけの狂戦士だったり、と言った例外だけ。

ランクが高ければそれだけ強さが保証されるのは勿論、クエスト経験を証明するものでもあり、それだけのキャリアがあれば自然と他のパーティにも顔が利いたりするのだ。

多数の交流関係を持ち、顔が広く各間の意見調整がしやすいといった者ならば、ランクが多少低くてもリーダーを務められることはあるだろう。

この点で言えば、クロノの交流関係はイルズ村の冒険者が全滅したのでゼロ、ランク1がトップに立つ理由とはなり得ない。

「でもねクロノ、一番大事な事を忘れているよ、基本中の基本、絶対変わらない自然の摂理」

「はあ？」

「ふふふ、一番強い者が頂点に立つの」

そう、人間であり、かつ平和な異世界出身のクロノにはあまりピンとこないかもしれないけれど、弱肉強食は全ての基本、原理、原則。

そんなのはモンスターだって知っている、弱い個体がボスになる群れなどどこにも存在しない。

だからそれは、私達人の社会にもそのまま適用される、特に荒事

を生業とする冒険者なら尚更、強さとは何物にも変えがたい絶対の価値がある。

人望？ 人徳？ そんなの関係ない、少なくとも今ここにいる冒険者の中では圧倒的な力を持つ者が支配者となることに異論を唱えるものはいない。

「あれ、それじゃアリイが一番強いんじゃない」

「私のことはいいのっ！！」

「そ、そうですか……」

クロノが納得してくれたようで何より。

「でもクロノが冒険者を率いるべきなのは、それだけが理由じゃないよ。」

今いる冒険者の中で、十字軍の恐ろしさを知っているのはクロノだけ。

特にあの救援部隊にいた誰かが指揮するなら、絶対に人間の軍と侮って、初手で致命的なミスをする」

少なくとも、あの自警団長を名乗る豚はまず間違いないミスる。

そもそも適切な戦力の分析がまるで出来ていない、突撃するしか脳の無い筋肉馬鹿は分を弁え、一兵卒として最前線で派手に死んでくれれば良いのだ。

「確かに、十字軍を舐めるなど俺が言ったところで、大人しく聞いてくれるとは思えない」

「そうでしょ、相手の戦力は圧倒的、こっちは一度の失敗で全滅する危険性がある。」

私は信頼できない人の下で戦うのは絶対にご免、ああ、こう言えばいいのかな、私はクロノがリーダーになってくれなきゃ十字軍とは戦わないって、ね」

その言葉に驚きの顔を見せるクロノ。

でもこういうコトははっきりと言ってかなきゃね。

「私だって避難民を見殺しにするようなことはしたくない、でもね、私にとって一番大事なのは私とクロノが二人共生き残ること。」

今のクロノは自分の命を捨ててでも戦う、って感じがして、すごく心配なの」

台詞の前半分は真っ赤な嘘、他の命全てを見捨てることになって
も一向に構わない。

私からすればクロノと他人の命なんて天秤にかけて量るまでも無い、何百何千の命を乗せたところでそっちに針が傾くことは決していないのだ。

でも今はそこまで分かってもらえなくてもいい、ただ私がクロノの身を案じているというキレイな部分だけ伝わればそれでいいのだから。

「スマン……確かにその通りだな。

それにリリイはちゃんと村人の治療してくれたし、今の俺なんかよりよほど役に立っている」

あ、それはその方がクロノの心象が良くなるからやっただけなの、気にしないで。

「心配してくれてありがとう、けど、だからといって戦いそのものをやめるわけにはいかない、俺にはこれしか出来無いし」

「ううん、別にそこまで止めたりしないよ。

でもね、分かるでしょ、命がけで戦う以上は打てるだけの手を打っておく必要があるって」

「ああ、今までやってきたランク1クエストとは危険度が段違いだからな、人任せにはできないよな。

分かったリリイ、俺が冒険者のリーダーになってやる」

堂々と宣言するクロノ、うん、やっぱりヤル気に溢れるその精悍な顔はとてもカッコいい。

頑張っ、とエールを送りながら、私は人知れず胸をときめかせる。

「けど、俺に人を率いた経験なんてないから、サポート頼むぞリリイ」

「任せてよクロノ！」

私もそんな経験なんてないけどネ。

まあいいわ、私とクロノの為に他の冒険者共を散々使い倒してやろう。

最悪、私とクロノの二人だけでスパイダに辿り着けばそれでいいんだし、囃でも何でも、精々役に立ってよね。

第75話 イヤな女(2) (後書き)

本当は前回と今回を一つに合わせて一話分でしたが、視点が十字軍サイドとリリィ一人称と変化してしまうので、分割することになりました。

二話連続更新だ！ と期待してくれた方がいましたら、申し訳ありませんでした。

第76話 リーダーの座を賭けて

クウアル村ギルドの一階ロビーには、溢れんばかりに冒険者達の姿があつた。

現在クウアル村を拠点に活動、あるいは偶々宿泊していた冒険者達全員がここに集っているのだから当然ともいえる。

本来なら冒険者達はクエストなどそれぞれ活動しており、一堂に会する事など無い。

しかし――

緊急クエスト・避難民の護衛

報酬・未定

期限・未定

依頼主・ダイダロス冒険者ギルド

依頼内容・全村民のスパイダへの避難が決定した。道中の実質的な護衛の役目は各村の自警団が受け持つので、冒険者諸君は最後尾にて敵を出来る限り抑え、村人が避難する時間を稼いで欲しい。敵に関する情報は人間の軍団であるという以外は一切不明、これまでにない危険なクエストだが君達に村人全ての命がかかっている、勇気ある冒険者諸君の参加を願う。

こうして緊急クエストが出された今は話が別、ここに滞在する全ての冒険者は半ば強制的にクエストへの参加・協力が義務付けられる。

ここに集う彼らも冒険者である以上、その辺のことは百も承知、彼らの関心はこのクエストをどうこなすかについてである。

そして今現在クウアル村に滞在する、9つのパーティと単独^{ソロ}で活動する十数名の冒険者達、総勢50名以上のメンバーを誰が仕切るか、という最も重要な事項を彼らはこの場で話し合っていた。

「ハっ！ ランク4に満たねえ雑魚はすっこんでな！」

いや、正確には殴りあいであった。

軽鎧を着た戦士の冒険者が鈍い音を立てて殴り飛ばされる。

転がる先には彼と同様に床に臥せて動けなくなった者がちらほら。

「俺がテメエらを仕切る！ 文句があるヤツは前へ出な！」

そう吼えるのは身の丈2メートルをゆうに超える巨漢の狼獣人だった。ワーウルフ

ただデカいだけでは無い、灰色の毛に覆われた巨軀には鍛え上げられた筋肉が隆起し、体の至る所に走る古傷が、彼の激しい戦闘経歴を表していた。

「どうした、もういねえのか！ この不死身のヴァルカン様を相手にしようってヤツはよお！！」

些細なきっかけで始まったリーダーの座を駆けての殴り合いは、このヴァルカンと名乗る人狼が圧倒した。

胸元に下げられた輝く金ゴールドのギルドカードが彼の冒険者ランクの高さを示している。

現在クウアル村に滞在する冒険者の中で数少ないランク4が彼であり、その中でも抜きん出た実力を持っていた。

クロノが言っていたランク4のパーティというのは、彼が率いる『ヴァルカン・パワード』だ。

パーティ名に堂々と自分の名前を出しているのは、彼がメンバー中最強で、典型的なワンマンチームだからだと冒険者ならすぐに察することが出来るだろう。

事実、ヴァルカン以外はみなランク3の冒険者である。

一人でもランク4がいればパーティのランクも上がるわけではない、ランク3のメンバー全員分を補うほどヴァルカンの力があるとギルドが認めているからこそ、ランク4のパーティを名乗れるのだ。「ふん、誰も出ねえってことは決まりだな」

ヴァルカンの鋭い目がぐると周囲を威圧するように見渡す。

最終的に殴り合いという荒っぽい決め方になってしまったが、ヴァルカンの力は誰もが認めるところであり、尚且つパーティーのリーダーを務めている実績もあるので、冒険者達に特別不満は無いようだった。

「決まりだな」の言葉に異を唱える者はおらず、ロビーはしんと静まり返る。

異論がない事を受け、満足そうな笑みを浮かべた瞬間、

「待て」

一人の男が彼の前へ出た。

「ああん？」

黒髪黒目に黒いローブを纏った黒尽くめの男。

人間にしては背が高い方だが、2メートルを超えるヴァルカンからすれば人間はみな等しくチビだ。

「アンタを倒して、俺がリーダーになる」

「ほおう」

ここまでストレートな物言いをするヤツは、先ほどブツ飛ばした男達の中にはいなかった。

実際のところは、何かしらの不満を唱えた者がヴァルカンにぶん殴られただけのことだ。

「いいぜ、来いよ坊主、貧弱な人間の魔術士だからと言って手加減して貰えると思うなよ？」

拳をバキバキと鳴らしながら、ヴァルカンはその見た目通り野獣の如き殺気を叩きつける。

「坊主じゃない、俺の名前はクロノだ」

特にビビった様子も見せないクロノに、ヴァルカンは相当腕に自信のある魔術士か、それともただのバカか、と思いをめぐらす。

「いいぜクロノ、一応分かっているとは思うがお互い武器は無しだ、ここで俺を隠し武器で倒したとなっちゃあ誰も従っちゃくれねえぜ」

「分かっている、俺は無手のままで戦う」

勝った、とヴァルカンは勝利を確信した。

（無手の魔術士じゃあ絶対に俺を倒せない、伊達に不死身を名乗ってるわけじゃねえんだぜ坊主。

まあコイツが武器を使つたとしても、負ける気はしねえがな）

魔術士は杖や魔道書が無くとも魔法は使える、だが、それは武器を使わなかった場合に比べて威力は格段に落ちる。

武器が無くとも長い呪文詠唱や儀式を行えば、強力な魔法が使えないこともない、だが、今のうちに10メートルも距離が無い立ち位置で一对一の決闘方式で戦うならば、魔術士が行える攻撃方法は即座に発動できるシングルアクションの攻撃魔法しか無い。

殴りかかってくる相手に無詠唱のシングルアクションを打ち込めば、魔術士でも無手のまま勝つことができるだろう。

もしそれで仕留め切れなければ、殴られて負ける、一応は魔術士も殴り返すくらいは出来るかもしれないが。

不死身を名乗るヴァルカン^{エクストラ}は、自分の体力に特に自信を持っている、いや、そんな気持ちの問題ではない、彼は現実に人狼^{ワーウルフ}が稀に持ちえる固有魔法『自動回復^{オート・ヒール}』を生まれながら習得している。

その名の通り、ダメージを受けた端から自動で回復、肉体の再生を行う効果を持つ。

ただし時間あたりの回復量・再生量は一定であり、心臓を貫く、首を落とす、などの攻撃を受ければ即死は免れ得ない。

その例外を除けば、常に一定ダメージを軽減できる、特に殴り合いなどダメージが小さい攻撃方法では、ほとんど無効化に近い効果を発揮する。

故に魔術士のパンチともいえるシングルアクションの威力では、真正面から十発くらっても立っていられる。

冒険者の常識からいえば、シングルアクションは精々が1発か2発撃つのが、この立ち位置から考えれば魔術士の限界だ。

（どんなに多く見積もっても4発以上は撃てやしない、例えこの坊主が1発の威力が並みの魔術士の倍以上であっても、俺を倒すには火力不足だぜ）

ヴァルカンは構える、火が飛んで来ようが雷が飛んで来ようが、全く怯まず直進して、この小生意気な魔術士坊主の顔面に拳を叩き込めると確信して。

「テメエが撃つまで動かないでいてやるよ、一発も魔法が撃てずにやられちゃあ格好つかねえだろ？」

「そりゃどうも――行くぞ」

「来なっ！」

ドンっ！ という音は同時に鳴った。

片方はヴァルカンが床を踏み込む音、もう片方はクロノが魔法を放つ音。

黒い弾丸がヴァルカンの胴へ撃ち込まれる。

（こんなもんで止められると――）

止められると、ここに集う冒険者の誰も思っていないだろう。

だが、それはあくまで一発で、という話だ。

バレットアサルトバースト
「魔弾全弾発射」

瞬時に物質化された無数の黒き弾丸が、巨大なでしかないヴァルカンへ殺到する。

「がああああああ！！」

シングルアクションを十発受け止めることが出来ると豪語するヴァルカン、だが、それが百発、千発、となればどうか。

当然、受け止めることなど出来ない。

致命傷を与えないよう通常より柔らかく、さらに弾頭を丸めて形勢した魔弾だが、着弾時の衝撃は相当なもの、普通の人間なら頭部に一発くらえば卒倒するくらいのショックは与えられる。

ヴァルカンは確かに十発目まではノーダメージでいられた、が、刹那の間すらおらずに次々と飛来する弾丸の嵐の前に、自動回復の治癒力を上回りダメージが見る間に蓄積されていく。

「ぐ……おお……」

クロノの手前2メートルほどの位置まで突き進むものの、ついにヴァルカンは片膝を屈する。

その時には、あらかじめ『装填』しておいた弾丸は全て撃ち終えていた。

「全弾受けても気絶しないとは流石ランク4、タフだな」

膝を折りつつも未だ意識を保ち殺気を放つヴァルカンの姿に感心しながらも、クロノは油断せず、冷静に追い討ちをかける。

拳を振り上げ、床を蹴って一足に間合いを詰める。

なぜ魔術士がわざわざ殴りかかるような行動を見せるのか、ギアラリーは疑問に思うが、即座にその回答は得られた。

なぜならクロノが放つのは、原初にして最速の黒魔法。瞬間的に魔力を腕に圧縮し、

「パイルバンカー」

ドリルのように高速回転させながら一点集中解放、ゼロ距離で放つ為に弾丸一発とは比べ物にならない破壊力を叩出す。

弾雨によって一気に体力と集中力を持っていかれたヴァルカンに、この一撃を止める術など無かった。

クロノの腕から目に見えるほど濃密な黒色魔力が放たれ、強かにヴァルカンの身を打つ鈍い衝撃音がギルドに響き渡る。

僅か数秒間の内に二人の決着はついた。

完全に意識を失い床に倒れ伏すヴァルカン、そして堂々と立つクロノは高らかに宣言する。

「俺がリーダーだ、文句があるヤツは前へ出ろ」

先のヴァルカンとほぼ同じセリフを吐くクロノ。

そして、今度こそ異論を唱えて進み出る者は一人としていなかった。

第76話 リーダーの座を賭けて（後書き）

ついに累計ランキング100位入りを果たしました、みなさん本当にありがとうございます！

第77話 結成（1）

クロノが冒険者のリーダーとなるべく、ギルドのロビーでヴァルカンと決闘をしている頃、とある客室にリリイとフィオナの姿があった。

「話とはなんですか妖精さん？」

「うん、貴女とちゃんと契約しようと思ってね」

フィオナの問いかけに応えるその口ぶりから、リリイの姿が幼児であっても、意識だけは完全に覚醒状態だと判断できる。

「何の契約ですか？」

「私達と正式にパーティを組んで欲しいの」

冒険者なら、いや、この世界の一般人でもリリイの言わんとしている事はすぐに理解できるだろう。

冒険者の基本はやはり仲間と共に戦うパーティプレイだ。

時には見ず知らずの冒険者とクエスト一回に限った協力関係を結ぶことも珍しくはないが、普通はあらかじめ組んだパーティでクエストに挑む。

パーティ名とメンバー全員の名前をギルドに登録すると正式な冒険者パーティという扱いになる。

もつとも、このパーティ登録をしなくても勝手に徒党を組んでクエストに挑むのも別に問題は無い、登録しておけばギルドも把握しやすく、冒険者としては仕事の成果をアピールしやすいという程度のことだ。

「貴女とクロノさんの二人パーティ、という認識でいいですか？」

「うん、パーティ名は別に決めてないけど、貴女が入ったら何か考えないとね。」

それで、どう？」

フィオナは一瞬迷ったような素振りを見えたが、

「お断りします」

きっぱりと拒絶の言葉を発した。

「理由を聞いてもいいかしら？」

リリイはその応えに対して特に気を悪くした風は見せず、寧ろ不敵に笑って問いかける。

クロノにはちょっと見せられないどこか邪惡な笑みだった。

「向いてないんです。」

私とパーティを組んで三日以上もったことはありません、クエスト中に解雇されたこともあります」

フィオナは無表情ながらも、その経験は多少なりともトラウマになっているのか、彼女の強固な心の壁から僅かに溢れる悲しみの感情をリリイは読み取った。

だが、それを知りつつもリリイに彼女を慰める気など毛頭ない。重要なのはフィオナの気持ちでは無く、彼女を己の内に引き込んでおくこと。

真っ当にパーティを組むことが不可能なほど、‘力’を持て余す、フィオナという魔女を。

「貴女が途轍もなく魔法の制御がヘタクソなのは知ってる、それも含めて誘っているの」

「どうして知っているのですか？」

特に驚いた風も無く、フィオナは静かに問いかける。

「ただの『火盾』イクニス・シルドをあんな派手に発動させる人なんて、初めて見たわ」

「妖精族は、魔法に詳しいんですね」

やはり驚かないフィオナ、まるで以前にも同じような言葉を聞いた事があるかのようだった。

「私が特別なだけ、あんな羽虫共と一緒にしないで」

少なくともリリイは今クウアル村にいる誰よりも魔法に対する知識、分析力を持っていた。

学んだモノではない、本来のリリイが生まれたときから持ちえて

いるに過ぎない。

「貴女の気持ちはこの際置いておくとして、こっちの事情も理解して欲しいんだけど」

どういうことですか、とフィオナの問いかけにリリイは淀みなく応える。

「クロノはこれから村人達を逃がすために十字軍と戦う、そんな中で貴女みたいな四方百里を焦土に変えるような暴走魔女をフリーにさせたくない。

言い方が悪かったかな？ 私は貴女の力を今のところ誰よりも高く評価しているの、その攻撃力は是非手元においておきたい」

愛らしい微笑を浮かべて賛辞の言葉送るリリイ。

「ありがとうございます、私の魔法を褒めてくれたのは貴女が二人目です」

皮肉ではなく、心からそう言っているのだということが、フィオナの表層意識に現れる感情の動きを読み取ってリリイは理解した。

「うふふ、アーク大陸にはよほど見る目が無いバカばかりなのね。

それで、私としてはただの協力してくれる冒険者では無く、より近い立場の‘仲間’として迎えたいと思っているの。

そうすれば、貴女の抑え切れない強力な魔法を‘問題なく’発揮できる場所も提供してあげられる。

まあそれを考えるのは私じゃなくてクロノだけど」

フィオナは少し考え込むように俯く。

その様子を「もう一押しかな」とリリイは考える。

「貴女が哀れな村人を助けたいと願う善良な冒険者であるなら、是非私達に協力して欲しい。

ただ保身のために一人で先にスパードへ逃げ込むというなら止めないし、十字軍へ戻るようならこの場で殺す」

「私は十字軍へ戻るつもりはありません、それに、パンドラ大陸の冒険者として緊急クエストに協力したいと思っています」

即座に答えるフィオナだが、そう答えることが分かりきっていた

と、リリイの満足そうな表情は物語っていた。

「貴女は素直だから、十字軍に未練がないことや、虐殺行為を許せない正義感、色々な気持ちを私は分かっている。

そして、そんな貴女は私の申し出を断るべきじゃないというのも、分かってもらえるかしら？」

また少しだけ考える素振りを見せるフィオナ。

だが、今度はその頭を縦に振るのだった。

「そうですね、私を受け入れてくれるというのなら、断る理由はありません」

「そう、ありがとう」

リリイは満面の笑顔で、パーティ入りを承諾したフィオナを歓迎する。

「ん……そろそろ時間かな」

「なにがですか？」

「今日はもう大人の意識を保っていられる時間が無い、だから簡単に後のことを説明するからよく聞いて」

リリイが大人と子供の二つの意識を持っていることは、すでにフィオナは知っているので、特に疑問を差し挟むことなく了解する。

「パーティのリーダーはクロノ、もうすぐここへ来るはずだから、適当に自己紹介して、後は彼の指示に従ってちょうだい」

「分かりました」

素直に頷くフィオナ。

「それと、貴女が他のパーティに引き抜かれないように、ウチのセールスポイントを言っておこうかしら」

幼い姿だが、妙に様になったウインクをフィオナに向けるリリイ。

「なんですか？」

「クロノはとても遠い国の出身だから、貴女の知らない美味しい料理を沢山作ってくれる、だからウチにいる間は色々珍しいモノが食べられるわよ。」

うふふ、甘いものがアイスクャンデーだけだと思わないことね」

その言葉は、これ以上ないほどにフィオナの興味を惹いた、心など読まずとも分かるだろう、何故なら彼女は身を乗り出してリリイに迫っているのだから。

「それは……本当ですか？」

「うん、例えばプリンとか」

「な、なんですかその‘ぷりん’、という聞くからに甘そうな響きの食べ物」

頭の中で、様々な甘味を再現するフィオナだが、初めて耳にする謎の食品名、期待は高まる一方のようである。

「それは自分で確かめなさい」

「すぐに確認します」

フィオナはキューと鳴った腹の虫の鳴き声と共に応えた。

「そうそう、最後に一番大事なルールを言っておくわ」

「なんででしょうか？」

愛らしい笑顔だが、僅かばかり殺気を滲ませて、リリイは言った。
「ウチはパーティー内の恋愛は禁止だから、絶対に、忘れないでおい
てね」

そう言い残すと、ぱったりとベッドへ倒れこんだ。

そのまますぐに、可愛い小さい小さな寝息がフィオナの耳に届いた。

第78話 結成（2）

「はあ……すげえ緊張したな……」

安堵の溜息をつきながら、俺はギルドの階段を上がりリリーの待っている客室へ向かう。

しかし「俺がリーダーだ、文句があるヤツは前でろ」とか何言っちゃってんの俺、超恥かしいんだけど。

でもまあ、力を示した以上、堂々とした態度は必要だろう。

あの感じが正しい強者のあり方なのかどうかは甚だ疑問であるが。「それにしても流石ランク4だ、ちょっと危なかったな」

ヴァルカンとの決闘は俺が一方的な勝利を治めたように見えただろうが、実のところそれほど力の差はないと感じた。

俺があっさり勝利できたのは相性が良かったからに過ぎない。

ヴァルカンは見た目通りのパワーファイターで、俺の攻撃を真正面で受け止めるつもりで突撃してきた。

並みの魔術士なら彼の突進を止めるだけの火力は出せず、そのまま殴り倒されていただろう、実際に魔弾を10発近く受けて尚ノーダメージだったのだから。

ヴァルカンはそのタフな肉体だけでなく、パワー、スピード、反応速度、その身体能力は改造強化された俺よりも高いと思われる。

「お互い武装してもう一度やりあえば、勝てるかどうかは分からない」

今はその機会が来ないことを祈ろう。

リリー曰く「リーダーになったら舐められないよう強気でいかなきゃダメ」ということなので、俺の不安はヴァルカンや他のヤツの前で見せるわけにはいかない。

まあナチュラルに「ガンつけてんじゃねえぞ!」とイチャモンつけられる俺としては、普段の表情を維持していれば大丈夫だろう。

そんなことを考えながら、俺は目的地である客室に辿り着きノックを鳴らす。

「リリイ、戻ったぞ」

「クロノさんですか、どうぞ」

ん、この声はリリイじゃなくて、フィオナさんか？

開錠の音に続き、扉が開かれると、そこには確かにフィオナさんの姿。

とりあえず入室すると、リリイがベッドの上で横になっている姿もすぐに視界に入り、眠ってしまったのかと状況を把握する。

「リリイはフィオナさんに話があるって聞いてたけど、もう終わったのか？」

何気なくそう問いかけると、

「はい、‘ぷりん’という甘いものがあると聞きました」

斜め上の答えが返ってきた。

「は？ プリン？」

「ぷりん、無いんですか？」

やけに期待に満ちた金色の瞳で見つめてくるフィオナさん。

「いや、無いよ？ 別に俺は料理しに行ってたわけじゃないし」

そんな目で見られても、無いモノは無い。

「そうですか……」

あからさまに落胆の表情をするフィオナさん。

え、なにこの俺が悪いみたいな感じ？

「食べたかったら、今度作ってみるから」

「本当ですかっ」

急に元気、何かこの反応はアイスクャンディーをあげたあの時を思い出すな。

「今度な、今は無理だぞ、緊急クエスト終わるまでは忙しいし、材料もないし、あと上手くできるかどうかも期待せんでくれ」

「大丈夫です、必ずスパードまで避難を成功させましょう」

心強いお言葉ありがとう、とりあえずスパードについたらキッチン

ンを貸してくれる場所を探すことにするよ。

「それでは早速、私達のパーティ名を考えましょう」

「え？」

「え？」

拙い、なんかフィオナさんと全然意思疎通できてくないか？

というか何の話だ？ パーティ？ 避難が成功したお祝いのパーティーなの？

「私はクロノさんのパーティメンバーですよね？」

「そうなの？」

「違うんですか？」

もうイヤだ、この語尾がクエンスチョンマークにしかない会話。

落ち着け、諦めるな俺、なんとかフィオナさんの全く関連性不明の言葉から、意味を見出すんだ！

リリイの話、プリン、パーティメンバー……

「えーと、リリイの話ってフィオナさんをウチのパーティに加えるとか、そういう話だった？」

「はい」

ビンゴっ！ 冴えてるぜ俺っ！

「なるほど、分かった、全て分かったぞ」

「納得してもらえたようで何よりです」

OK, 話が見えてきた。

「一応確認しておくけど、フィオナさんは俺とリリイのパーティに入ってくれるってことでいいのか？」

「はい、リリイさん曰く四方百里を焦土に変える暴走魔女の私ですが、よろしく願います」

えーなにその超不安になる自己紹介、リリイそんなヤバい評価をフィオナさんに下していたなんて聞いてないよ。

「それは魔法に自信がありますって意味に受け取っていいのかな？」

「はい、魔法の威力に、だけ、は自信があります。」

敵味方関係なく全てを灰燼に帰してみせましょう」

ツッコミを入れるのを我慢するため、一拍おいてから問いかける。

「……敵だけ焼き払ってくれるわけにはいかない？」

「私、魔力の制御がちょっとだけヘタなので。」

それでもいいから是非仲間になってくれと熱烈に勧誘されたので、パーティ入りを決めました」

ふん、と鼻息が出ているかのように胸をそらして自信満々なフィオナさん。

「そ、そうか、まあリリイがいいって言うんなら間違いないだろ。」

それじゃあこれからよろしくなフィオナさん、俺も歓迎するぜ」

どこまでも不安の残る自己紹介だったが、結局は彼女を受け入れることには是非は無い。

フィオナさんの魔法の威力は、炎の壁で矢の雨から救ってくれた一件で、俺も信頼はしている。

なにより命の恩人、彼女を拒む理由など無い。

「はい、よろしくお願いします」

お互いに固い握手を交わし、ここに契約は成立した。

「クロノさん」

少しだけ言いづらそうな表情のフィオナさん、一体今度は何を告白してくれるのだろうか。

「リリイさんには話した、というかバレてしまっていることなのですが、先に言っておきます」

「なんだ？」

やや緊張しながら彼女の言葉を待つ。

「私はアーク大陸の人間です」

「……なんだと」

「私が憎いですか？」

反射的に俺はいつでも魔弾を撃てるよう魔力を巡らせていた、それにフィオナさんが気づかずとも、無意識に発してしまった殺気は間違いなく読まれただろう。

「すまない、少しだけ待ってくれ」

アーク大陸からやって来た人間、つまりそれは十字軍と同じ勢力の者だということになる。

イルズ村に破壊と殺戮をもたらした許されざる狂気の十字軍、それと同じ、同族、同類、生かしてはおけない、今すぐ殺すべきではないのか？

「鉈を持って無くてよかった」

持っていたら、そんな感情に流されていたかもしれない。

落ち着け、今はフィオナさんの話を聞くほうが先決。

そもそも俺を助けてくれた人だし、なによりリリイが認めたのなら人物として何も問題無いのは確実だ。

「大丈夫だ、話してくれ」

「はい、ですが、どこから話せばいいでしょうか」

過去を詮索しないのが冒険者の礼儀だ、と前置きをしてから、言葉が続ける。

「身の上話は聞かないし、十字軍の兵士だったのかどうか、パンドラ大陸で人を殺したかどうか、今は全部聞かない、話せる範囲で話してくればそれでいい」

「分かりました、と言っても私にはとりたてて隠すような過去などありません。

エリシオンの魔法学校に通い、卒業したら行くアテが特に無かったので、傭兵としてパンドラ遠征に参加しました。

ですがご飯は美味しくないし、とても居心地が悪かったので辞めました」

「本当にそんな理由だけで裏切ったのか？」と、思わずストレートに問いかけてしまう。

フィオナさんならありえなくは無いかと思えるものの、やはり現実にはそう言われると俄かには信じがたい。

「私は十字教徒ではありませんし、お金も受け取らず正規の手続きを経て辞めたので、傭兵としても裏切り行為ではないですよ」

「けど、いいのか、これから俺達はフィオナさんと同郷の人と戦うことになるんだぞ」

その問いかけにも、フィオナさんは相変わらず眠そうな表情で、特別気にしていない平気な様子で応えた。

「国、宗教、人間か魔族か、どちらも私には関係ありませんね。」

私の事は、そうですね、どこか遠くの国から気まぐれにやって来た旅人だと思ってください、クロノさん、貴方と同じように」

「リリィから聞いたのか？」

「とても遠くの国の出身だ、としか。」

ですから、私の出身は意味の無いものと考えてください、それに縛られることは決してありませんので」

俺にはアーク大陸がどういう場所なのか全く分からない、だが、フィオナさんの言わんとしている事は何となく分かる。

ようするに、彼女には守るものが無いのだ。

それが善い事なのか悪い事なのかは置いておく、兎に角フィオナさんという人は、どこにも所属しない完全にフリーの旅人、いや登録している以上は冒険者である、と呼んでおこう。

「分かった、信用するよ、すでにフィオナさんはパーティの一員だしな」

「いいんですか？ 私は最初のダイダロス侵攻に参加して、ある程度の人数は殺害しています、それも許せるんですか？」

「いいさ、傭兵の仕事だろ、今は別な仕事に変わった、それだけのことだ」

すでに人殺しの身分の俺が、どうこう言えた義理はそもそもない。

「そう思ってくれるのならありがたいですね」

「俺は寧ろ、フィオナさんがアーク大陸の人間で良かったと思う」
「思えば俺は、いいや、今ここにいる村人も冒険者も、誰も十字軍について知らない。」

俺達はほとんど正体不明の敵と戦おうっている状態だ。

「私もこれまで村を回ってきましたが、誰一人として十字軍や共和

国の事を知っている人はいませんでしたね」

「そうだ、俺はその‘共和国’、っていう国も名前しか聞いた事が無い」

情報はどんな時にも重要なファクター、戦いの場合には命がかかっているだけ尚更だ。

敵を知り己を知れば百戦危うからず、なんて情報の重要性を示す言葉なんてのはいくらでもある、探せばこの異世界でも伝わっていることだろう。

俺は思わぬところで十字軍を詳しく知りえる人物と出会えた、しかも気づけば仲間になっていたなんて、これは幸運以外のなにものでもない。

敵の数、装備、士気、熟練度、指揮系統、ヤツラは何を考え、何をしようとしているのか、聞きたいことは山ほどある。

「フィオナさんが仲間になってくれて本当に良かった、これから世話になる、改めてよろしくな」

「はい、私を受け入れてくれてありがとうございます」

相変わらずほとんど変化の無い表情のフィオナさんだが、どこことなく安心したような雰囲気を感じた。

「色々聞きたい事はあるけど、まずはパーティ名を決めておこうか、これから名乗る時不便だしな」

「そうですね、一緒に良い名前を考えましょう」

決闘の一件で冒険者達のリーダーポジションを勝ち取ることが出来たが、それは俺個人だけでなく、所属するパーティそのものが中心的な役割を果たすことにもつながってくる。

まずはリリィ、今はフィオナさんも加えて、3人まとめて冒険者に紹介する必要があるわけだ、その時にパーティの名前がないと呼びにくいだろう。

「しかし、パーティ名なんて今まで一度も考えたこと無かったな」

いや一度もというのは嘘か、ラノベ書くのが趣味だった高校時代は、そりゃあ組織とか機関とか部隊とかの名前を考えたもんさ。

だがソレとコレとは話が別だ、自分のパーティに神がどうか、滅びがどうか、そんな大げさな名前はつけたく無い。

直接的に自分を示すものならば、やはり身の丈にあった名前が良いだろう。

「冒険者は普通こういう感じでパーティ名をつけるもんなんだ?」

「基本的にはみなさん好き勝手につけますが、そうですね、リーダーの名前をそのままつける場合は多いですよ」

なるほど、ヴァルカンも自分のパーティ名は「ヴァルカン・パウード」と堂々たるものだ。

が、それは彼が唯一のランク4であり、メンバー中で抜きん出た実力を持ちえるからこそ名乗れるのだ。

パーティ最強の名前をとるなら、ウチは「マジカル☆リリイ」になっってしまう。

「他によくあるのは出身地だとか、メンバーのクラス、特徴、または伝説にあやかったものや、探し求める宝の名前を直接用いる場合もありますね」

俺達の場合、出身地はバラバラ、というか俺はそもそもこの世界ですらない、『イルズ・ブレイダー』のように同郷出身者で構成されていけないので、そういう名づけはできないな。

それにこの世界の伝説には、まだこちらへやって来て一年も経たないような俺は特別詳しくないし、ついでに探し求める宝も無い。

強いて言えば元の世界に帰れる召喚魔法を探しているといえ探しているが、今この状況を捨て置いてそんなものの搜索をする気は無い。

「俺達の共通点と言えば、全員が魔法を使うくらいか」

「前衛になってくれる戦士がいないとは、何とも心もとないパーティですね」

全くもってその通り、俺は苦笑しつつ言い訳のように応える。

「ランク1のクエストしか受けてこなかったから、今までは戦うことをあまり考えなくてよかったんだよ」

「でも私が攻撃すると必ず前衛を巻き込むので、かえってこの方が良かったと思います」

フィオナさんはどれだけ自分の攻撃コントロールに自信が無いんだ。

いや、これ以上はあえて突っ込むまい、自分でも気にしている風だったし。

「そういえば、フィオナさんは炎の魔法が得意なのか？ 俺を助けてくれた時も『イクニス・ランパートデファン火焰城壁』使ってたし」

「あ、それはただの『イクニス・シルド火盾』です」

なんだよその理屈は、最強アピールなんかですか？

「イクニス・シルド真正銘『火盾』です、私が魔法を使うと、下級魔法でもあの程度の大きさになってしまいます」

それじゃあ攻撃魔法を撃ったらどうなる、という疑問には、フィオナさんは懇切丁寧に答えしてくれた。

「『イクニス・サギタ火矢』でも範囲魔法と同じ、威力は通常の『イクニス・フォルティスサギタ火焰長槍』になるかならないか、といったところでしよう」

なるほど、これは確かに「敵味方関係なく灰燼に帰してしまう」

な、特に遺跡や洞窟のような狭いダンジョンで撃たれたらと思うと……

使いどころをよくよく考えないと、大惨事になってしまう。

しかしながら、なぜリリイがわざわざ彼女をパーティに引き入れたのかよく分かった。

大人の頭脳を持つリリイは本当によく考えてくれる、フィオナさんを野放しにしておかなくて本当に良かった、予期せぬタイミングで大爆発が起きたかもしれないのだから。

「私は火の属性が最も得意ですけど、光と闇以外の属性は、全て中級まで使えます」

少しだけ自慢げに言うが、少しと言わずそれは実際かなり凄い事だと思う。

「2つくらいなら珍しくないけど、ほとんど全部使えるって人は初

めてだ」

俺なんて黒魔法オンリーしか使え無いしな！　っていう自虐は虚しくなるだけなのでしないでおう。

「俺の闇とリリイの光をあわせれば全属性網羅できるな」

俺が使う黒魔法は現代魔法と術式系統こそ違うものの、闇の属性を顕現させることには変わらない。

魔法はただの物質化でしかないが、影空間は完全に闇の属性を利用した魔法といえる。

「いいですね、全ての属性を扱えるなんてあまり他には無いパーティですよ。」

一人で出来れば伝説の『元素の支配者』を名乗れます」

「エレメントマスターか、いいなソレ、カッコいいじゃん」

全ての属性を扱えるということは、魔術士やモンスターなど属性と密接な関わりのある相手の弱点をつくことができるし、逆に相手の攻撃を耐性の高い属性で防げるということだ。

魔法に限定されてしまうが、中々強そうなパーティ構成じゃないか俺達は。

「全ての属性、原色魔力を一人で操るのがエレメントマスターって呼ばれるのか？」

「そういう認識で正しいです、本物のエレメントマスターは上級以上の全原色魔法を行使し、必ずなにかしらの偉業を成し遂げ歴史にその名を残します。」

魔術士が抱く理想の一つですね」

おお、やはり良いじゃないか、全ての属性を操る伝説的な魔術士の称号。

「なるほど、じゃあその名を俺達で名乗らせてもらおうじゃないか」「そうですね、私は良いと思いますよ。」

リリイさんも賛成してくれるに違いありません」
かくして、パーティ名は決定した。

「OK，今から俺達は『エレメントマスター』だ」

第78話 結成（2）（後書き）

フィオナが仲間に加わった！

第79話 焦土作戦

「俺が『エレメントマスター』のリーダー、クロノだ」

俺は決まったばかりのパーティ名を、ギルドのロビーに集合した50名以上の冒険者達に早速紹介して、リーダー就任の挨拶をした。と言ってもハリウッド映画に登場するやたらパワフルなアメリカ大統領並みの熱い演説などできるワケも無く、緊急クエストの内容確認、中心となるメンバー紹介など、事務的な話しかしなかった。一応みんなは大人しく聞いてくれてはくれたが、俺が示したのはヴァルカンをボコったパワーだけであり、リーダーとして信頼されるには程遠い状況にある。

ランク1で経験皆無な俺は、これから実績を作っていくよりほかは無い。

そう決心した翌日、新陽の月21日のことである。

「しかし、ロクに馬も乗れねえとはな、テメーは本当に冒険者かよ？」

「五月蠅いぞヴァルカン、俺は今集中してるんだ、邪魔をするな」
早朝からイルズ村へ向けて出立した途上にて、俺は早速メンバーからリーダーとしての資質を疑われ始めている。

今俺が跨っている、というかしがみ付いているのは、イルズ村を襲った部隊の指揮官が乗っていたと思われるでっかい馬だ。

乙女の黒髪のような艶やかなたてがみと毛並みを持つこの駿馬は、十字軍を撃退した後にあっさりと鹵獲され、目出度く報酬品に。元々は別の誰かのものになるところだったが、俺がリーダーとなったので譲り受けることになったのだ、リーダーなら騎馬の一頭くらいないといかんらしい。

まあそれだけじゃなく、俺がイルズ村で相当数の十字軍兵士を倒していたので、その報酬という意味合いも含まれている。

そんな立派な馬を与えられたのだが、元は文芸部の高校一年生、人体実験歴半年、冒険者歴三ヶ月の俺が、一体どのタイミングで乗馬なんていうハイスなスキルを習得しているというのだろうか。

いや、知ってたよ、馬は車に代わってこの世界じゃごく一般的な乗り物だってことは。

俺だっていつかは乗りたいな、と思ってたさ、けれど今いきなり馬を与えられて「さあこれに乗って颯爽と冒険者達の先頭を駆け抜けてゆけ！」とはあんまりじゃないのか？

あ、ちなみにフィオナさんは颯爽と馬に跨り、華麗な手綱捌きで軽やかに街道を駆け抜けて行っている。

どうやら冒険者としては一日の長が彼女にはあるようだな……ぐぬぬ。

「がっはっは、落っこちないよう精々頑張んな新米リーダーさんよお！」

「くそっヴァルカンめ、もう一回フルバースト撃ち込んでやろうか……」

自身の巨体に見合った大きさの二角獣バイゴンに跨ったヴァルカンが、俺をバカにする高笑いを上げながら列の先頭目指して追い越していった。

ちなみに二角獣バイゴンとは、あの有名な一角獣ユニゴンの亜種である。

その名の通り二本の立派な角が生えており、馬というよりも山羊に近い面構え、しかし身の丈2メートルを遥かに超えるヴァルカンを乗せるのだから、その大きさは象かと思えるほどに巨大だ。

「こんなことになるなら、早くから練習しておけばよかったぜ」

「クロノがんばって！」

「ありがとなリリイ、お前がいなかったらどうなったことか、いやホント、マジで」

リリイは俺の前に座っており、一見すると落ちないようそのポジションに座らせているように思えるが、実際は逆であり、リリイがここにいるお陰で乗馬初挑戦の俺がそこそスピードを出しつつ、

かつ落馬もせずにいられるのだ。

妖精ってのは本当にファンタジーな能力をお持ちだ、触れ合えば動物とある程度心を通じさせることができるなんてな。

そんな夢のある素敵能力のお陰で、馬が俺を振り落とさないようリリイが働きかけてくれているのである。

俺はダメな男だ、何から何までリリイの世話になりっぱなしだ、涙が出てくるね。

「泣いてるの？」

「泣いてねえよ、目にちよっとゴミが――」

「あっ、手を離したら危ないの！」

「ヤベっ！？ お、落ち――」

頼む、早く目的地へついでくれ。

俺は一心にそう祈りながら、初めての乗馬体験を心行くまで楽しんだ。

俺が目指した先はスパイダ方面ではなく、今やもぬけの殻となったイルズ村である。

ここへ連れて来た冒険者達12名の代表としてヴァルカンが俺へ問いかけた。

「偵察にしちゃ多すぎる、だが防衛線を敷くには少なすぎる、一体こんなところで何するつもりだ？」

「なるべく急ぎたかったから、出発前に説明しなかったことは謝る、本当は道中説明しようと思ってたんだが、あのザマだったから、スマン」

冒険者達の間で失笑がおこるが、俺はあまり気にしない事にして話を続ける。

「ここへ来たのは、イルズ村にある全ての穀物倉庫を焼き払うためだ」

「なんだと？」

俺の解答がよほど予想外だったのか、それとも不謹慎だと思われるのか、冷ややかな視線が集中する。

「テメエ、自分が何言ってるか分かってんのか？ つーかここはテメエの村だろ、トチ狂ったこと言ってるじゃねえぞ」

「抵抗はあるかもしれない、だがこれは敵を足止めする一つの方策であることを理解して欲しい」

俺が思うに、冒険者達はサバイバル能力やモンスターとの戦闘技術こそ高いが、純粋に戦略・戦術といった軍事的知識があまりないのだと思う。

平和な日本人でも多少戦争の知識、といえば大げさだが、小説やドキュメンタリー、あるいはフィクションでも構わない、そういった媒体からある程度戦いについて知っていれば、俺が何を言おうとしているのかすぐに分かるだろう。

「これは焦土作戦だ」

「シヨード作戦？」

やはり誰も聞き及びの無い言葉なのか、コイツは一体何を言ってるんだという表情をする。

「簡単に言えば、敵に奪われる利用価値のある施設や食料を、逃げる前にあらかじめ破壊しておくという作戦だ」

「……はあ」

このヴァルカンという人狼はどうやら見た目通り頭脳労働は苦手らしい、一方で俺の短い説明で何となく得心のいったという表情をする冴えた冒険者も何人かいた。

「イルズ村に大量の食料を残したままだったら、ここへやってきた敵がすぐに飯が食えるだろ、飯が食えるってことはすぐ戦えるってことだ、分かるか？」

俺達に求められるのは敵を足止めすること、敵がすぐ戦える状態じゃ困るわけだ。

「おお、つまり敵に飯をおごってやる義理はねえってことだな！」

「そうだ、敵が食料を現地調達できなければ、外から補給しなければならぬ。」

補給が必要になれば、その分だけ進軍速度は確実に落ちる、俺達に必要なのはスパードへ逃げ切るだけの時間を稼ぐことだから、戦わずに勝利へ一歩近づける」

「理屈は大体分かったが」

半分くらいしか分かっていない顔でヴァルカンが続ける。

「本当にそれでいいのか？　今まで溜め込んだ食料を全て焼き払うなんぞ、ここの村人が納得すんのか？」

「ヴァルカン、村人のことを考えてくれるなんて、お前顔に似合わない意外と良い奴なんだな」

「うっせえ！　んなことよりどうなんだよ！？」

照れ隠しなのか本気でキレてんのか、凄い剣幕で迫られる。

「みんなは納得しないだろう、確実にこの作戦には反対する。」

だからクウアルへの避難が完了した今になってわざわざ戻って来たんだ」

「騙したってのかよ？」

「焦土作戦については後でナハド村長を通して説得してもらおう、今は十字軍が来る前に一つでも多く手を打っておかなくちゃならない。スパードへ避難が完了した後なら、俺はどんなに責められてもいい、けどそれまでは、どんな反対を受けようと、俺は最善の策を取り続ける、それをするためにリーダーになったんだ。」

だから頼む、このクエスト中だけは俺を信じてくれ！」

ここで受け入れられなければ、俺はそれまでだ。顔には出さないが、こんな口先で今だけでもみんな信用してくれるんだろうか、と不安になる。

だが、俺の足元にいるリリィが「大丈夫だよ」と言わんばかりの微笑みを向けてくれた。

「なんでもいいや、とりあえずテメエがリーダーなのはもう決まったコトだ、今更ガタガタ文句抜かす奴はいねえよ。」

ただし、ヘマしやがったら俺とすぐにリーダー交代だからな、憶えておけ」

ヴァルカンはやっぱり見た目に反して良い奴そうだ、ミスしても俺が変わってやるから安心してやれ、と言っているようにしか聞こえない。

「ありがとう、それじゃあ簡単に作業の指示を出すから聞いてくれ――」

俺が馬に乗ってイルズ村へやって来たように、ここへ連れて来た冒険者もみな何かしらに乗ってきた。

ランク1の俺が当たり前のように騎馬を持っていなかったように、冒険者の誰もがそうした移動手段を持っているわけではない。

地球の中世と比べれば、この異世界では騎馬のコストは低いといえるだろうが、それでも誰もが気軽に手に入れられるものじゃない。個人で騎馬を手に入れるのはランク3あたりからというのが冒険者の常識だ。

そして、今連れて来ることが出来た冒険者の数は、俺、リリイ、フィオナさんの『エレメントマスター』メンバーを除き全部で12人。

基本的には馬だが、ヴァルカンが乗る二角獣バイコーンや、ソロで活動中のスケルトン族の魔術士が大型グールに乗っているなど、異色の騎乗モン生物スターを利用する者もいる。

ちなみにグールというのはただの人型ゾンビではなく、ハイエナのような姿をした動物型アンデット族である。

このスケルトンさんが乗っているのはデカイゾンビ犬だと思ってくればいいだろう。

個人の騎馬の他にも、パーティで馬車を保有している場合もあるが、今回は『ヴァルカン・パワード』のメンバーだけが馬車で同行

してもらっている。

ヴァルカンだけ並外れてデカイ図体なので、馬車ではなく愛用のバイコーンというわけだ。

俺がわざわざ騎馬で移動、ようするに徒歩より圧倒的に早い手段で移動できる者だけを選んで連れて来たワケは、さきほど話したとおり時間的余裕が無いからだ。

人間のみで構成された軍隊なので、ある程度十字軍の進軍速度というのは割り出せるが、それはあくまで予想でしかない。

魔法で進軍速度をあげる、あるいは部隊まるごと転移してくる、なんてこともあるかもしれない。

相手の手の内が何もかも不明な以上は、こちらが出来る限りの早さで行動するしかないのだ。

そういうワケで、十字軍が本格的にイルズ村へ駐留する前に、ここにある食料は全て焼き払わなければならないのだ。

欲を言えば穀物倉庫だけでなく、村長宅や冒険者ギルドなど大型の建物も破壊しておきたい。

実際に撃退した部隊はギルドを中心にして展開していたので、少なくとも司令部として利用していたのは間違いない。

こうした敵にとって利用価値のある施設を破壊し、食料を焼き尽してから、撤退するのが焦土作戦である。

「クロノさんは、騎士の学校にでも通っていたんですか？」

「いや、普通」の学校に通ってただけだ。

ちゃんと習ったわけじゃない、所詮は聞きかじりの素人兵法さ、どの程度効果があるのかは、正直分からん」

俺は焦土作戦についてより詳しく説明しながら、穀物倉庫焼却のための準備を進める。

相槌を打ってくれるのはフィオナさんだけが、近くで作業しているメンバーも一応は耳を傾けてくれているようだ。

「それに、今回は完璧な焦土作戦じゃない、もしかすれば全く効果が無いかもしれないからな」

「そうなんですか？ ご飯がないのは致命的ですよ、私なら耐えられません」

そりゃあ飯が不味いという理由だけで仕事を辞められるフィオナさんはそうだろうな。

「今は倉庫を焼き払うだけで精一杯だけど、本来は畑も民家も、近くの森林まで焼いてしまわないと完璧じゃない。

それに焦土作戦が最も効果を発揮するのは雪の降る寒冷地だ。

食料は勿論、火をおこす燃料である薪を無くせば、それだけで兵を殺せる」

「なるほど、共和国にも冬將軍に負けて侵攻を断念した、という話は昔からよく聞きます」

寒さが大きな脅威となるのは地球人も異世界人も同じだな、というかこっちでも‘冬將軍’って言う認識があるんだな。

「こっちは時間も人手も不足だ、この不完全な焦土作戦が少しでも効果が出てくれることを祈るしかないね」

俺はイルズ村を襲った部隊の‘置き土産’である鍊^{オイル}金油、その最後の一缶を穀物倉庫へ投入する。

これで焼却準備は完了、あとは火を入れればあつといまに倉庫を炎が包み込むだろう。

いよいよ火を投げ入れる、というその時、俺のローブの端っこがリリィに引っ張られた。

「ん、どうしたリリィ？」

イルズ村のみんなが汗水たらして収穫した沢山の小麦が納められる倉庫を燃やそうとする俺にもったいない精神でも説こうというのか、と思ったが、子供状態にも関わらずキリリと眉を上げて真剣な表情をみせるリリィに、俺は不穏な気配を察した。

「おいクロノ、敵がこっちに向かって来てるぞっ！」

そう叫ぶのは、周囲の見張りを担当させていた冒険者パーティ『三獵姫』のメンバーの一人、弓を背負い馬に跨ったエルフの少女。

少女ではあるが、ああ見えてれっきとしたランク3のベテラン冒

険者だ。

伝令役を担った彼女は俺の前で馬を止めると、簡単に状況説明をしてくれる。

「スーさんが7名の騎兵部隊を発見、街道を走って真っ直ぐこっちへ来てるって」

スーさん、とはソロで活動しているランク4の盗賊だ。

一見すると人間に見えるが、その種族はスライムである。

目端の利く盗賊であるスーさんも見張りの役をしてもらっていたが、早速敵を見つけてくれたようだ。

「7人だけで、他にはいないのか？」

「街道を走ってんのはソイツらだけだ」

どう考えても斥候部隊だな。

「部隊が撃退されたからイルズの様子を見に来たってところか」

敵は人間の軍団、ならば大人数を街道から外れて森を通って奇襲、なんてことは無いだろう。

数の優位がある以上、わざわざ正攻法、この場合は堂々と街道を進軍させるという選択以外はとらない。

「どうするんだ？」

考えるまでも無く、即座に決断を下す。

「迎え撃つ、一人残らずこの場で始末する」

「了解、そうこなくちゃね！」

エルフの少女は勝気な笑みを見せて、戦闘準備を伝えに駆け出した。

第79話 焦土作戦（後書き）

ヴァルカンは別にツンデレとかそういうんじゃないんだからねっ！

第80話 斥候部隊

イルズ村より2キロほど離れた地点に、ノールズの本隊より派遣された斥候部隊の姿があった。

「どうだ？」

「やはり村に人がいる様子はありませんね」

斥候部隊の隊員は、遠くの景色を見通す魔法『鷹目』ホーク・アイを一旦打ち切る。

「そうか、どうやら村人全員逃げ出したようだな」

「追いますか？」

「目の前で逃げ出す姿が見えたのなら、追うべきだろう。」

だが恐らく村人共はこの先にあるクウアルという村へ避難しているはずだ、今から追いかけても間に合うまい」

兵士は部隊長の言葉に了解の意を告げる。

二人ともイルズ村がすでもぬけの殻になっていると予想していたので、特別驚くべき結果ではない。

「よし、では村に残っている者がいるかどうか搜索するでしょう。」

もうそろそろ陽も落ちる、クウアルへの偵察は明日にして、今夜はイルズで野営する」

了解の意を部下が軍人らしくハッキリとした口調で伝えた。

「ヤツラ急いで逃げ出したようだからな、探せば銀貨くらいは見つかるかもしれないが、あまり‘宝探し’に熱中しすぎて徹夜なんてするなよ？」

「それは了解しかねますね」

ハハハ、と二人で軽く笑う。

彼らは厚い給金が保証されているわけでもない遠征の末端兵士だ、こういった‘ボーナス’は自分が現地で手に入れるより他は無い。

「金はあるても女がないのは残念ですね」

「心配するな、その内娼館も建てられるさ、ダイダロスにはすでに

‘現地で雇った女’を使ってるらしい、全く商売人ってヤツは手が早いもんだぜ」

こっちとしてはありがたい話だけどな、と唇を歪めてニヤリと笑みを浮かべた。

「でも魔族の相手はご免ですよ」

「エルフくらいなら俺は構わねえがな、少なくともああいう――」
部隊長がうんざりした顔で後ろを振り向くと、

「おい、ツミキいゝツミキちゃん、どこいったのー！」

一人の少女が何やら叫びながら隊員立ちの間を忙しく駆け回っていた。

「ああいう馬鹿な冒険者の女よりはな」

「一体何ですあの女？」

呆れたような視線を向けつつ、兵士が聞いた。

「俺が知るか、シルビアのネーちゃんが同行を許可した以上は文句言えねえだろ」

斥候部隊を選抜する際に、冒険者の少女が一人、まるで気まぐれのように急遽加わったのだ。

どう考えても怪しいが、命令である以上逆らえないのは台詞の通りである。

「そもそも、十分に兵の数は足りているのに、ああいう‘ヤツら’をわざわざ雇うというのもおかしく無いですか？」

遠征の為にシンクレア共和国内であらかじめ冒険者や傭兵を雇うのは珍しいことではない。

だが、それはあくまで派遣する自分の手勢が少ない者がやることである。

ノールズ含む占領部隊に派遣したメルセデス枢機卿は、わざわざ外から雇い入れる必用などなく十分な兵を用意することが出来る。

それにも関わらず、多数の冒険者を含む傭兵団が不自然にも雇われているという事実は、彼のような末端の兵士でも怪しむほどのものだった。

統一された十字軍の基本装備とは異なる、それぞれ好き勝手の装備をした冒険者や傭兵は非常に目立つ、彼らの存在自体は別に隠すつもりもないようなのは誰にでも分かった。

しかしその傭兵団が雇われた目的は誰にも分からない。

「上が何を考えているのかは知らん、ただ特別扱いしろとも言われてねえから、放っておくのが一番だ」

実は冒険者達が特別な使命を帯びた秘密部隊、ということはないだろうと部隊長は感じた。

彼が見る限り、同行している冒険者はどれも平凡な様子で、特に背後で「ツミキ、ツミキ」と騒いでいる少女は冒険者として一定の力量にすら達していないように見えるのだ。

「まあ任務の邪魔さえしてくれなきゃ何でもいいか」

お荷物でしかない少女が妙な騒ぎを起こさないことを神に祈って、部隊長は任務を続行する。

謎の冒険者少女は斥候部隊の先頭に行く部隊長と轡を並べて、イルズ村の大通りを進んでいる。

彼女の実力をこれまでの行動からそれとなく窺い知っている十字軍兵士達は、ドジでノロマな初心者レベルの冒険者と評している。

同行する傭兵団の中でも最低クラスの評価を受けている彼女だが、流石に乗馬の心得くらしいはあるようで、危なげな様子は特に無い。

「ツミキってのはソイツのことかいお嬢ちゃん」

視線の先には漆黒の毛並みを持つ小さな猫、首元にある銀色の首輪が野良では無く飼い猫であることを示している。

「うん、カワイイっしょ!」

どこか誇らしげな笑顔で「ツミキ」と名づけられた黒猫の首根っこを掴んで部隊長の鼻先へ向ける。

ツミキは金色に輝く瞳と部隊長の目が合うと、ニャーと挨拶する

ように一声鳴いた。

「それとアタシの名前はアイっていうの、憶えておいてよネっ！」

「どこにでもある名前だな」

「そういう事言うなよう」

可愛らしく頬を膨らませて抗議するが、『アイ』という女性の名前が共和国ではごくありふれたものであるのは事実であった。

「そんなことより、次はそのニャンコ逃がすんじゃねえぞ」

「あっはっは、大丈夫だって！」

部隊長の溜息は少女の笑い声に掻き消される。

（本当に、ただのガキじゃねえかよこいつは）

呆れたような目を少女へ向ける。

長い金髪を左右で括ったツインテールは、青色のクリクリと大きな瞳の可愛い顔立ちにはよく似合っているものの、実用重視の冒険者がやるヘアスタイルとしては失格だろう。

魔術士ならば、まだ魔力が宿るなどの理由でロングヘアは許されるが、彼女の格好はどうみても射手。

メインの武器は最低限使用に耐えうる古ぼけた木の長弓。ロングボウ

どうにか防具と呼べそうなのは革の胸当てにグローブとブーツのみで、上半身は薄手のシャツ一枚、下半身に至ってはなぜかミニスカートという有様である。

右手に装着された輝く銀色の腕輪だけが多少の価値がありそうなものであったが、他よりマシというだけで、そのくすんだ鈍い光は退魔の効果を持つシルバーアクセサリーの品質としては下の下であることが一目で窺い知れた。

最早冒険者というよりは、そこらの町娘が冒険者の仮装を試みました、という方がしっくりくる。

アイの細身で小柄ながらも引き締まった体がなければ、本当に冒険者らしい要素は見当たらなかった。

（上のヤツらは一体何を考えてこんなのを遠征に参加させたんだか）
考え込む部隊長をどこかバカにするようにツミキがニャーニャー

鳴く。

「つーか何で猫なんだよ、弓背負った狩人のオトモは犬って相場は決まってるだろうが」

「えー、でも猫の方がカワイイよ？」

（ダメだコイツ、ペット感覚で動物連れてきてやがる）

彼の言うように、人間が狩り、あるいは戦いで役立ってくれるのは犬である。

飼い主のいう事を聞かない猫など連れてくるだけ無駄、むしろ途中で勝手にいなくなるのでマイナスにしかない。

「もし戦闘になった時はちゃんと面倒みとけよ」

「任せてよオッサン！」

「俺はまだオッサンなんて歳じゃねー」

瞬間、部隊長の頭が突如弾けた。

「あり？」

アイは目を丸くしながら、額から血を噴出しつつ馬の背から転がり落ちる部隊長の姿を見た。

「敵襲だっ！ 気をつけろ、待ち伏せされてるぞ！！」

アイの後方を歩いていた兵士が声を張り上げる。

それと同時に、武器を持った魔族達が家々の影から続々と姿を現し、大通りへ雪崩れ込んで来た。

軽鎧姿の亜人や獣人、あるいは人間が、慣れた動作で刃を振り上げ兵士達に斬りかかる。

敵が魔族の、しかも熟練の冒険者達であるということは、誰に言われずとも即座に理解できた。

「わわっ！ 何かいっぱい来たっ！？」

慌てたアイは思わず手綱を引っ張ってしまい、馬が暴れた拍子に落馬してしまう。

「うぎゃ！ 痛ぁーい頭打ったぁー」

涙目で頭をさするアイの目の前では、すでに血飛沫の舞う戦闘が始まっていた。

「くそっ、数が多い、分断されるなよっ、密集して――」

部隊長に次いで指揮を振るう兵士の頭が、またしても弾け飛ぶのをアイは見ていた。

「あちゃーこりゃあヤバそうだ、ケツまくってさっさと逃げよっかツミキ。」

ってツミキ、こらあ！ 主を置いて先に逃げるなあ！！」

待てーと叫びながら、戦闘中の兵士達の間をすり抜けて行く黒猫をアイは追いかけた。

第81話 冒険者VS斥候部隊（1）

ギルドの屋上に身を伏せて、敵が村へ入るのを待つ。

相手は7人、こちらは全員ランク3以上の冒険者で数も勝っている。

戦力の詳しい内わけは、

『エレメントマスター』・黒魔法使い、妖精、魔女、3名の魔術士で構成される俺のパーティ。

『ヴァルカン・パワード』・ヴァルカン率いる戦士3名、射手1名、魔術士1名、全員獣人族で構成されたランク4のパーティ。

『三狷姫』・エルフの女性射手三名で構成される、同族、同性、同クラスの珍しいパーティ、しかも三人は姉妹、ランク3。

その他に単独行動のオーク戦士二名、スケルトン魔術士一名、スライム盗賊一名。

以上の総勢15名だ。

敵の詳しい実力などは不明だが、通常の斥候部隊だとするならば、どう高く見積もってもランク3冒険者パーティには及ばない程度の戦力。

上手く奇襲をかければ、一人の犠牲も出さずに十分相手を全滅させることは可能だ。

俺達全員は一時的に協力関係にあるだけであり、チームワークを発揮するほどの連携はとれないだろうが、今回のように数、実力、先制攻撃、の好条件が揃っている前では作戦失敗を懸念するほどの問題ではない。

すでに冒険者達は配置済み、敵が来るのを今かと待ちわびている。

「上手くいけばいいんだがな」

「みんな頑張ってるよ！ 大丈夫なの！」

今回、俺の果たす役割は後衛、なんと言っても頼れる前衛が何人もいるのだ、ここは魔術士のセオリー通り後ろから援護射撃をさせよう。

実のところ後衛というよりは狙撃手スナイパーを意識している。

なので、隣にいるリリイは観測手スポッターということだ。

ハリウッド映画とかだと孤独なスナイパーが一人で大活躍だが、基本的には狙撃手スナイパーと観測手スポッターの二人一組で行動するもんだ。

「ああ、俺らも頑張って作戦成功させないとな」

気を引き締める、ここで上手く斥候部隊を始末できれば、多少は俺への信頼感も生まれるだろう。

そもそも銃の普及していない異世界の住人にはスナイパーといっても、動物やモンスターを狩猟する際に待ち伏せする猟師の姿以上には想像が出来ていない様子、戦場から遠くはなれた位置に陣取る俺に不信の目がちらほら。

だが口で説明するよりも、ここでスナイパーの有用性を示すのが一番早い理解への道だ。

十字軍は一目で階級の違いが分かることから、特に狙撃への対応がなされていないように見える。

要するに偉いヤツから狙い撃ちができるってことだ。

そして俺の魔弾バレットアーツと命中精度なら、スナイパーライフルなんて上等なモノがない世界でも、現代並みに強力な狙撃を可能とする、はずだ、まあやるのはこれが初めてだし。

それに、リリイも俺の狙撃を快適にサポートする便利な固有魔法エクストラを持っている。

その一つが俺の目の前に浮かぶガラスのように透明な光球。

これを通すと遠くの景色を拡大して見る事が出来る、まんま望遠鏡みたいな、いやこの場合は狙撃銃のスコープ代わりと言っておう。

いくら改造強化で視力2,0オーバーでも、スコープの望遠能力には及ぶはずもない。

ホーク・アイ

『鷹目』など視力を強化する魔法を身につけていない俺にとって、こうした支援は実にありがたい。

スボッター

あとついでに、本来の観測手が担う、周囲の状況把握や命令伝達、場合によっては接近する敵の排除といった役割をリリイは全てこなせる。

テレパシー

このスコープの他に、精神感應で伝令は即座に可能、さらに応用で、リリイが見たものをリアルタイムで俺へ映し出すこともできる。最悪、敵に後ろから迫られてもリリイならサブマシンガンの如くレーザーを乱射して相手を蜂の巣にしてくれる。

「……リリイは前線に投入した方が良かったか？」

今更考えても仕方有るまい。

俺は思考を切り替えて、目前に迫ってくる敵部隊を睨む。

「来たな」

敵の斥候部隊は予想通り西北街道を逸れる事無く進み続け、最初の襲撃で破壊された門を通過して村へと侵入してきた。

スライム盗賊のスーさんが言っていた通り、確かに人数は7名。

あの白いサーコート姿は紛れもなく十字軍兵士のもの、だがその基本装備をしているのは6名だけ。

「ん、なんか一人だけ変なヤツがいるな」

ソイツは金髪ツインテールの少女で、普通の女の子にしか見えな
いが、一応弓を背負い胸当てを装備している以上は、十字軍に雇わ
れた傭兵か冒険者の類なのだろうと予想できた。

堂々と先頭に行く部隊長と思わしき人物と轡を並べて歩む姿は、
彼女がダイダロスの人間で捕虜になっているわけではないことを示
している。

気にはなるが今更作戦に変更はできないし、するつもりも無い。
予定通り、ここで全員始末させてもらう。

「作戦開始だ」

クロノはギルドの屋上から、遠距離狙撃用に作り出した魔弾を、列の先頭を歩く部隊長の頭部へ向けて発射した。

部隊長は下級だが魔法も武技も両方習得している優秀な兵士であるとフィオナから聞いていたが、狙撃という全く予期せぬクロノの攻撃を防ぐ手立てなど彼には一つも無かった。

本物のスナイパーライフルと同等の威力を持つ黒き弾丸は、見事に寸分変わらず部隊長の額をぶち抜いた。

それが周囲に潜んでいた冒険者達へ、作戦開始の合図となる。

「いくぞテメえら、一人も逃がすんじゃねえぞお!!」

大剣を担いだヴァルカンが唸りをあげて先陣を切る。

「敵襲だっ! 気をつける、待ち伏せされてるぞ!!」

部隊長を失ったが、この斥候部隊はよく訓練された上に経験も豊富な兵士で構成されているようで、奇襲に驚きこそするが、全員が即座に馬を下り戦闘態勢をとった。

相手がただの人間や力押しの盗賊などであれば、相手をする事無くそのまま馬を走らせて突破するのが一番の解決策だったが、

デス・ウォルデファン

「邪心防壁」

前方の大通りを、スケルトンの魔術士が中級範囲防御魔法で封鎖し、

テラ・シルド

「石盾」

後方をフィオナが塞いだ。

斥候部隊の前後に、大通を完全に塞ぐ形で防御魔法の壁が出現したのを見て、この場で応戦するしか彼らに選択肢は残されていなかった。

モデル

クロノが初めて見る現代魔法の闇魔法である邪心防壁と、フィオ

デス・ウォルデファン
テラ・シルド

ナの強大な魔力で一段階効果が強化されている石盾、どちらも易々と突破できるものでは無い。

前方を塞ぐ黒々とした凹凸の無い一枚壁も、後方を塞ぐ崖のように聳える岩壁も、どう見ても馬で飛び越せる高さではないし、また

防御魔法を直接破壊するのも今すぐには困難であると兵士達は判断し、この場で奇襲部隊を返り討ちにする覚悟を決めた。

（コイツら、イルズを襲った腰抜け共と違って、よく訓練されてやる）

ヴァルカンが奇襲に動じる事無く、即座に応戦体勢をとった十字軍兵士を見て密かに感心する。

楽に始末はできそうにないとは思うが、それはあくまで‘楽’じゃないというだけで、彼らが全滅の道を辿る運命が覆るとは露ほども考えなかった。

（しかし、あのガキはなんなんだ？）

視界の端には、未だ馬から下りず、武器も構えない少女の姿が映っている。

「わわっ！ 何かいっぱい来たっ!？」

突然の襲撃にほど慌てたのか、少女はうつかり手綱を引っ張ったようで、馬が暴れた拍子に彼女はあっさりとその背から放り出されてしまう。

「うぎゃ！ 痛ぁーい頭打ったぁー」

そんなランク1の冒険者でもするかどうかという無様な姿を見て、（とりあえず、捕虜にするのはあのガキで決まりだな）

ヴァルカンは考える、同時に他の冒険者達も全く同じ感想を抱いていたようで、彼女に密かな注目が集っていた。

クロノは「全員始末する」と言っていたが、それは一度の戦闘で皆殺しでは無く、捕虜をとって、情報を得た上で殺害するところまで含めて始末と言っているのだ。

荒事を生業とする彼らにクロノの言葉は当然理解できるものであったが、一切躊躇せずに用済みの捕虜を殺害する意思を見せた点でいえば、最早彼は‘普通の高校生’の精神では無いといえる。

それを分かっているのかいないのか、ただ今のクロノは冒険者として、冷静に己の成すべき事、すなわち次の標的に魔弾の狙いを定めているのだった。

「おう、テメえが一番強そうだ、相手しやがれ」

「くそっ、舐めやがって低脳な魔族があっ!!」

ヴァルカンが部隊長が倒れ、捕虜候補の少女を除いた5人の兵士達の中で最も腕の立つ者を瞬時に見抜き、猛然と襲い掛かった。

ヴァルカンは己の身の丈ほどもある巨大な剣を振り上げ、対する兵士は迫り来る巨軀に抗うべく自身に『腕力強化（フォルス・ブースト）』をかける。

「一閃!」
スラッシュ

人狼の冒険者と人間の兵士、互いに繰り出す武技は同じ、剣による斬撃の威力を飛躍的に上昇させる『一閃』
スラッシュ

しかし、同じ魔法でも術者によって威力に差が出るように、当然同じ武技でも差は出る。

「はっはあ! よく一撃耐えたな、やるじゃねえか!」

結果はヴァルカンの圧勝、1秒たりとも鏖迫り合いは拮抗せず、

兵士は数メートル吹き飛ばされ地面を転がった。

いくら『腕力強化（フォルス・ブースト）』で力が強くなっているといっても、非力な部類の人間とパワーに優れる狼獣人^{ワイルド}、それも飛び切りガタイの良いヴァルカンが相手となっては、その差を覆せる道理は無かった。

その上さらに、一般的に用いられるタイプより1グレード上という程度の長剣で、ランク4であるヴァルカンが最も金と労力をかけた愛用の大剣では、武器としての性能差もありすぎた。

兵士は彼の言うように、よく一撃耐えたと賞賛されるべきであろう。

「バケモノめ——」

「早く立てよ、このまま終わりなんてこたあ無えんだろ?」

大剣を肩に担ぎ、悠然と兵士の前へ歩みを進めるヴァルカンは、この圧倒的に優勢な状況から、速やかに殲滅という目標よりも、少しでも強い者と刃を交える自分の楽しみを優先していた。

時に目標を蔑ろにする彼の悪い癖の一つだが、そこはパーティの

メンバーがしっかりサポートしており、それが分かっているから存分に‘楽しい戦い’が出来るのであった。

「その余裕が命取りだっ！」

「????????????????????——『ライン・サギタ雷矢!!!』」

「おっ!?!」

兵士は詠唱を瞬時に終え、未だ数メートルの距離にあるヴァルカンへ向けて攻撃魔法を放つ。

が、いくら短いとはいえ1秒以上はかかる詠唱、それだけの時間があつてランク4の冒険者が単発の、しかも下級攻撃魔法を防げないワケが無い。

「なんだオマエ魔法も使えんのか、へへっ、器用貧乏ってヤツだな」
一枚の板のように幅広い刀身を持つ大剣を瞬時に盾にして、ヴァルカンは雷を防ぎきっていた。

「言つたろうが、その余裕が命取りだつてなあ!」
すでに立ち上がっていた兵士が、手にするモノを思い切り投擲する。

ヴァルカンは真っ直ぐ飛んでくる赤い石つぶてのような飛来物を見て、ソレが何なのか即座に理解した。

「死ねえ! 『イクニス・オーヴァプラス火炎葬』!!!」

兵士が叫んだ瞬間、爆炎が轟く。

爆心地から放射状に広がった炎がヴァルカンの巨体を飲み込み、爆風と黒煙が吹き荒れる。

中級範囲攻撃魔法『イクニス・オーヴァプラス火炎葬』は、いくら優秀とはいえ斥候部隊の

隊員が習得しているような魔法ではない、そうであるならば彼は魔術士としてクラスを改めねばならないのだから。

彼が投げつけて使用したものは、ただの石でも無ければ手榴弾でもない、『イクニス・オーヴァプラス火炎葬』一発分の効果を秘めた魔法具である。

このような一回限りの魔法効果を発揮するアイテムはさして珍しいモノではない、だが大量に入手できるほど安価でもないし、使用するにもそれなりの技術と僅かばかりの魔力を必用とする。

この魔法具は兵士がお守り代わりに個人的に持っていたものであり、十字軍兵士に支給されたものではない。

由来はどうであれ、ヴァルカンが投げつけられたモノが即座に攻撃魔法を秘めた魔法具であることを見抜いた。

しかし、分かることと、それを防ぐことはまた別の問題である。

兵士は圧倒的に腕力で劣ることは最初の一撃を受けるまでも無く分かっていたことだが、この奥の手とも呼べる魔法具を使えば倒せると確信していた。

彼にとって幸運に思えたのは、ヴァルカンが機動重視で厚く重い鎧を纏っていないことである。

全身ガチガチに固められれば、一般的な鋼鉄製でも致命傷を与えられる可能性は減少する、防御魔法効果が追加された高価なモノならほぼ確実に防ぎきることだろう。

しかしヴァルカンの纏う衣服と薄手の片胸鎧だけでは、あの全身を隙間無く包み込む炎熱を耐え切るのは不可能である。

「これで止めた、バケモノめっ……」

兵士は先の一撃で輝の入った長剣を構えて一歩踏み出す。

この攻撃で強靱な生命力を持つ魔族を殺しきったとは彼も考えていない、しかし戦闘力を奪うには十分なダメージは与えたと確信している。

だが、不幸にして彼は知らない、ヴァルカンという男が如何にして冒険者のランクを4まで上げることが出来たのか。

「中々いいモン持ってるじゃねえか、で、これで終わりか？」

黒煙の内より、先と同じように大剣を担いだヴァルカンが歩み出した。

服と鎧が多少煤けているだけで、その体はどう見ても無傷であった。

「な、何故……まさか、治癒魔法かつ!？」

「半分正解だ、けど秘密はそれだけじゃあねえんだぜ」

ヴァルカンの持つ固有魔法・自動回復は、彼に「不死身」を名乗

らせるだけの効果を持つ。

だが、今この時ヴァルカンを襲った炎熱を防いだのはその回復力では無く、

「コオオオオオ——」

不気味な唸りを挙げて魔力を、喰らう、大剣であった。

「秘密」とは言うもののそれなりに熟練した冒険者ならば、その大剣の正体はすぐに分かる。

少なくともこの白い板状の大剣が、鈍い光沢を宿す鋼では無く巨大なモンスターの牙で出来ていることに気づけば、生前元になったモンスターの能力を宿す武器なのだと理解できるだろう。

この大剣の銘は『牙剣・悪食』、素材となるモンスターの正体は『カオスイーター悪食魔獣』、幼体ならランク4、成体ならランク5にもなる、強力なドラゴンに匹敵する力を持つ魔獣である。

『カオスイーター悪食魔獣』は、その名前と同じ『悪食』という、魔力ならばどんな形態でも、喰らう、すなわち吸収してしまう固有魔法エクストラを持っている。

つまり攻撃魔法によって倒すことは事実上不可能であり、またその攻撃も防御魔法で防ぐことが叶わない、下手をすれば治癒魔法すら一息で吸い込まれてしまうほど。

これを討伐する方法は、自分の肉体に直接作用する強化魔法を使い、己の物理的力のみを用いて攻撃するより他は無い。

攻撃方法が純粹な力に限定されるが故にモンスターの危険度ランク5という最高位に分類されるのだ。

ヴァルカンの大剣は、死して牙一本となって尚その固有魔法エクストラを宿し、一振りで中級魔法程度なら完全に効果を打ち消すことの出来る魔法武器なのである。

戦士として高い実力を持つヴァルカンが、『牙剣・悪食』による魔法無効化能力を併せ持つことで、彼はランク4という高位の冒険者となれたのだ。

「面倒だから秘密の説明は無しだ、あの世でゆっくり考えな」

そうして、人狼の俊敏さを生かした高速の踏み込みで迫り、奥の手を破られ呆然とする兵士をそのまま一刀両断した。

第81話 冒険者VS斥候部隊（1）（後書き）

クロノは奇襲を仕掛けた！

ランク4冒険者とそこそこ強い人間の兵士の實力差がどれほどのものか伝われば良いかと思います。ただ今回のバトルに関しては少し説明的すぎたかもしれません、申し訳ないです。

第82話 冒険者VS斥候部隊（2）

斥候部隊はランク3以上の冒険者を相手に実に良く戦った。

「くそつ、数が多い、分断されるなよつ、密集して――」

部隊長に次いで指揮を振るう兵士の頭がクロノの狙撃を受けて吹っ飛ばされても、兵士達はそれぞれ死力を尽くして抗っていた。

「あーあ、もう3分も持ちそうにないなあコレ」

そんな兵士を尻目に逃亡を図る冒険者少女アイ。

飼い猫のツミキが主を置いて走り去っていった方向へ向かって、自分も急いで駆け抜けていく。

「ゴォアアア！」

「ほっ！」

オークの戦士が振るうグレートソードがアイを襲う、が、間一髪ギリギリ回避に成功。

「ヴァアアア！」

「そおい！」

今度は別のオーク戦士が放ったバトルアックスの一撃を、スライディングするようにすり抜ける。

二人のオーク戦士は背中を向けて走るアイへ追撃せず、近くで戦う兵士へそのターゲットを切り替えた。

「今のヤバかったなあ、毛先ちよつと切れちゃったじゃん」

血で血を洗う激戦が繰り広げられる大通り、アイは飛び交う攻撃魔法の余波と流れ矢を幸運にもどうにかこうにか交わしながら、着実に歩を進める。

「よーし、もう少しだ」

数十メートル先に聳えるのは、フィオナの『石盾』テラ・シルドで作り上げられた石の壁。

馬で飛び越えるのは不可能であると一目瞭然だが、ごつごつと天然の岩壁を思わせるその外観から、手をかけて登ることは出来る。

いくら操作を誤って落馬してしまうようなアイであっても、冒険者を名乗っている以上、ロッククライミングくらいワケは無い。

アイは二階建て程度の高さを誇る石壁の前に、「そこに壁があるから登るのだあ！」と言わんばかりの意気込みで挑む。

「ちよつとアンタさあ、なに逃げようとしてるワケえ？」

だがその直後、殺気と共に背後から待ったのお声がかかる。

「……ヤバ」

アイは恐る恐る振り返ると、そこには3人のエルフの姿。

金髪碧眼に特徴的な細長い耳、それに引き締まった細身の体は、見間違いようも無くエルフ族の少女であった。

その清楚可憐な外見とは裏腹に、一人の女性が倒れた兵士の頭を躊躇無く弓で撃ち抜きトドメを刺している光景がアイの目に映る。

「あちゃーあの兵士1分ももたなかったかあ」

アイの脳裏に、その兵士がエルフ三人組の攻撃を魔法で必死に防御している数十秒前の姿が思い起こされる。

「ダメでしょ大人しく捕まってくれなきゃ、手間かけさせないでよね」

兵士にトドメを指しているのとは別な二人が、雷で出来た矢が番えられた弓をアイへと向けながら投降を呼びかける。

「えーと、大人しく降参したら、身の安全は保障してくれる？」

「はあ？ アンタも冒険者なら、生け捕りされた獲物モンスターがどうなるか、分かってるでしょ」

「ですよー」

額から冷や汗を一筋流しながら苦笑いのアイ。

「ま、ツミキちゃんを置いてはいけないし、ここは諦めないで、頑張らないとねっ！」

動きを見せたアイに、瞬時に雷の矢を射出する二人のエルフ。

矢が放たれると同時に、アイの手からも丸いボールのようなものが投擲されていた。

投げると同時に地へ這い蹲るような体勢のアイ、その頭上、雷の

矢がかすって行きツインテールの先が少し焦げた。

ゆったり放物線を描いて飛来する謎の玉を警戒し、エルフの少女達は追撃せずに、その場から飛び退いた。

瞬間、その玉が眩い光を放ちながら弾ける。

フラッシュ
「閃光かつ!？」

その正体を即座に看破するエルフだったが、この一瞬で出来る対処は精々が目を瞑り、腕で顔を庇うことしかできなかった。

瞼の裏からでも光を感じる凶悪な白い閃光、直視すれば失明の危険性すらある。

目を閉じていたお陰で直接的なダメージはないものの、視力の回復に多少の時間はかかる。

「ちいつ、もうアイツ死んでも知んないからねっ!」
『エール・プラスト風連刃』っ

視力が奪われた状態での追撃を警戒して、二人のエルフは生け捕りを半ば諦めて即座に反撃。

彼女達が装備する、風と雷の原色魔力に特化した『シルフライト風雷弓』は、

魔力を箆めて弦を引くだけで、下級攻撃魔法なら即座に発動させることができる。

普通に弓として使うことはできるが、どちらかといえば弓の形状をした杖と呼ぶべきだろう。

二人が放った『エール・プラスト風連刃』、前方の空間を広範囲に渡って風の刃が風いでゆく。

カミソリのように鋭利な切れ味を持つ見えない刃は、地面と石壁に無数の切り傷を残す。

レッサー・ヒール
「????? ???? ????——微回生」

吹き荒れる鎌鼬がおさまると同時、兵士にトドメを刺していたエルフから治癒魔法が発動され、二人の視力が回復する。

「助かったわ姉さん」

「ありがとねっ!」

一言で礼を済ませながら、再び戻った視力で逃した獲物アイを捉える。

「うっそ、回復早っ!?!」

石壁を登り、『風連刃』エール・ブラストの効果範囲からはギリギリで逃れられたアイだったが、彼女が今カエルのような格好でしがみついている地点は壁の中ほど。

こんな体勢では回避も反撃もままならないのは勿論、次の攻撃が来る前に壁を登りきれぬほどでもない。

背中越しに振り返り見るアイの目に、三人のエルフが一拍のズレも無く同時に雷の矢を番えて弓引く姿が映る。

一人に撃たれるなら外す可能性も回避の余地もまだあったかもしれないが、三人同時となれば、どう考えてもどれか1本は確実に命中するだろう。

もつとも、ランク3の冒険者である彼女達が、この程度の距離で的を外すことは無い。

「ええい、もうアイテムをケチってる場合じゃないっ!

喰らいやっ!!」

よく分からん絶叫と共に、再びアイが何かを投擲する。

完全に狙いが定まる前にそのアイテムは効力を発揮。

ポンっ、という軽く弾けるような音と共に、濃い緑色をした煙が瞬時に拡散してゆく。

「今度は毒かっ!?!」

「それじゃ自分も巻き込まれる、ただの煙幕」スモーク

濛々と立ち込める不思議な緑の煙がアイの姿を覆い隠して行く。

「どっちにしろ、散らすしか無いわ」

再び美しい動作で弦を引き絞る三人。

「『風連刃』」エール・ブラスト

二人は先と同じ攻撃魔法、だが今回はこの邪魔な煙幕を払う為のもの。

突風を伴う『風連刃』エール・ブラストによって、瞬時に視界を覆う緑の煙が晴れてゆく。

「『雷矢』」ライン・サギタ

そして、残りの一人が必殺の意思を窺めて雷の矢を放つ。

レーザービームのように直線的な稲光を引きつつ飛んでゆく『雷^{ライ}矢^{ギタ}』はしかし、

「危なっ!？」

またしても間一髪、ちょうど石壁を登りきったアイはその向こう側へ素早く飛び降りて、迫り来る雷の矢より逃れる。

「な、なんて逃げ足の速いヤツ……」

危なげではあったが、終わってみれば無傷のまま逃げおおせた金髪ツインテの冒険者少女に、思わずそんな呟きがエルフの口から漏れた。

「一応、外にまだ一人いる」

「ああ、フィオナ？　だっけ？」

「たしかランク1だけれど、ここまで立派な防御魔法を発動できるのなら、大丈夫なんじゃないかしら？」

三人は自分達も壁を乗り越えて追撃するのを諦める。

すでに逃げた獲物よりも、残りの兵士を相手にしようか、と考える振り向いてみれば、

「うあああ！　待ってくれ、助け――」

最後の一人が、獣人の戦士二人に刺されて絶命する場面であった。
「なあんだ、もう終わりか」

「…門から100メートル離れたら、撃つ」

そう呟きながら、全身黒尽くめの魔女衣装に身を包んだフィオナが、崩れ落ちた正門の影から歩み出る。

つい十数秒前にこの正門を、黒猫を抱えた一人の少女が「よっしやー！　脱出クエストクリアー!!」と叫びながら走り抜けていった。

ツインテールを馬の尻尾のように跳ねさせながら街道を駆ける彼

女の小さな後姿がフィオナの目に映った。

「それではクロノさん、機会が巡ってきたので、約束通り私の攻撃魔法をお見せしましょう」

その台詞は当然ギルド屋上にいるクロノに聞こえはしなかったが、これから繰り出すフィオナの、^{「中級」}攻撃魔法は確実に見えることだろう。

「?????? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ?

その小さな唇から紡がれるのは、現代魔法^{モデル}においては何も変わつたところのない、魔法学校の教科書どおり基礎に忠実な詠唱。

手にする長杖^{スタッフ}、『アインズ・ブルーム』には順当に魔力が巡ってゆき、これから発動する魔法、その属性の威力を高める。

言葉に詰まることも無く、ゆっくりと実に15秒もの時間をかけて紡ぎ上げた魔法の呪文。

これより放つは火属性の中級攻撃魔法『^{イグニス・クリスサギタ}火炎槍』。

文字に書けば槍と名がつくように、魔術士が並んでこれを繰り出せば火炎の槍衾となり、また地面から吹き上がるように発動させれば、林立する炎の柱となる。

フィオナの詠唱を魔術士が聞けば、これから撃ち出されるのは吹き上がるタイプだと判別できるだろう。

だが彼女の攻撃魔法を初めて目にするというのなら、そこから先に想像される、勢い良く炎の柱が突き立つ、一般的なイメージは絶対確実に裏切られることとなる。

「――『^{イグニス・クリスサギタ}火炎槍』」

なぜなら、フィオナのソレは柱などではなく、天を貫く灼熱の塔なのだから。

ドゴゴゴゴオオオ!!

「うおっ！　なんだっ!？」

「!？」

ギルドの屋上ではクロノとリリイが、

「何だ!？」

「なんやっ!？」

「なんだありゃ……」

「なんなの……アレ……」

大通りでは冒険者達が、

「――どうですかクロノさん、私の魔法、気に入ってもらえましたか？」

爆音と共に出現した20メートルにも及ぶ竜巻のように巨大な炎の塔を目撃し、驚愕した。

およそ数分の後に、フィオナの『イグニス・クリスサギタ火炎槍』は魔力を燃やし尽くして消え去る。

その灼熱の塔が突き立った後は、黒焦げになって抉れた地面があるのみ、何者かがそこへいた痕跡は一切見つけることはできなかった。

第83話 生還

「……それで、お前だけが一人でのこのこ逃げ帰ってきたというワケか」

「えーと、一人と一匹です」

気がつけば、アイは司令部の一室で占領部隊指揮官であるノールズと副官シルビアの前に立たされていた。

「バカヤロウっ！ どっちでも変わらんわっ！！」

自分と飼い猫だけが生きて帰ってきたことに全く悪びれもせず答える様子に、ノールズは激高し怒鳴り声をあげる。

「落ち着いてください」

マジでぶん殴る5秒前なノールズへ、シルビアは冷めた様子で耳打ちする。

「彼女は恐らく枢機卿下のお気に入り、下手に手を出すべきではないということをお忘れですか？」

「ぐっ……しかしだな」

「彼女に構っている暇などありませんよ、すぐに対応を考えねばならないでしょう」

「ちっ、仕方あるまい」

ノールズはどうか怒りの矛先を治め、目を瞑って腕を組む、もうこのふざけた冒険者に言う事などなにも無いという風に。

「冒険者アイ、ご苦労様でした、下がってよいですよ」

「はい」

間の抜けた返事を一つして、アイはツミキをオトモに部屋を出て行った。

「……しかし、今回はようやく戦いらしい戦いになるな」

ノールズの言葉にはどこか期待が籠っていた。

彼はキルヴァンほどでは無いが魔族を蔑む生粋の十字教徒だ、そ

れにも関わらず今までほとんど戦闘無しで村を占領出来たのは、副官のシルビアが上手く交渉し、またノールズが暴走しないよう手綱を握っていたからであった。

すんなりと占領を進ませるシルビアの手腕は評価するところであるが、それでも「魔族を血祭りに挙げてやる」と意気込んでやって来たノールズにとって、これまでの‘平和的’な行動は少々不満の溜まるものであった。

「キルヴァン司祭の行過ぎた行為が、魔族に強い反抗心を持たせたのでしょ」

見せしめに十字架磔の刑を私的に行うなど、その残虐な所業はすでに逃げ帰った兵士の報告で聞いている。

そのままイルズ村を難なく占領できれば、村人に恐怖心を与えるだけで済んだのだが、下手に撃退された所為で、彼の行動は翻って強い怒りや敵意に変わってしまった。

「ふん、敵の数はたかが知れている、悪魔だかんだか知らんが、その気になればこっちは10万でも援軍を呼べるのだ。

もつとも、すでに十分な数が揃っている我々の部隊だけで事足りるだろうがな」

村の規模から考えて、例え村人全員が武装して戦ったとしても尚、ノールズ率いる占領部隊の兵数には遠く及ばない。

無論、女子供まで残らず戦うなんてことはいくら魔族でも実行しない、真つ当な戦闘員として数えられる自警団や冒険者に数を限れば、どんなに多く見積もっても300に届くかどうかというところ。それこそ本当にドラゴンでも現れない限り、ノールズが予想するように自分の部隊だけで十分決着がつけられる。

故にシルビアもその点に対しては特にいう事は無い、彼女が寧ろ心配しているのは別な事柄だった。

「ダイダロス領内にはどこにも逃げ場など無い、神に逆らったことを魔族共に後悔させながらじつくり追い込んでやる」

「……いいえ、逃げ場はあります」

「なんだと？」

テーブルの上に広げられた、ダイダロス西部周辺の略地図をシルビアの細長い指先がなぞる。

「クウアルから西南街道を通ってダイダロス方面へ向かうなら何の問題ありません。」

しかし、西北街道をそのまま西へ逃げたとすれば「

ガラハド山脈、と書かれたラインの先には『スパード』という国名が記されていた。

「まさか、スパードは敵国扱いだと聞いている」

「もしダイダロスがすでに陥落していると知れば、村人達は己の住む国がすでに滅んだことを悟るでしょう、難民となってスパードへ助けを求めるのは、当然の判断といえます」

「ううむ、情報封鎖が完璧ではない可能性は、確かにあるか……」
眉をしかめて唸るノールズ。

「村は占領すればどうせ入植者のものになります、一万にも満たない非戦闘員の魔族を見逃したとしても、それほど問題にはなりませんよ」

少数とはいえ強い抵抗が予想される、よってこちらもある程度の損害は覚悟しなければならぬ。

勿論その損害も十字軍全体から見れば微々たる数でしかない、だが、避けられるというのならそれに越したことは無いだろう。

「いいや、それだけはダメだ」

しかしノールズはシルビアの示唆する、敵味方双方に犠牲が出ない提案を強く否定する。

「シスター・シルビア、いくらお前の進言でもこれだけは聞くわけにはいかないなあ」

「……そうですか、司令官は貴方ですのでどうぞ好きに、私は止めませんよ」

覚悟を決めたらしい様子のノールズに、シルビアはそれ以上余計な事を言うのは止めた。

「分かってくれて嬉しいよシスター・シルビア。

では命令を下そう、逃げる魔族は皆殺しだ、一人も逃がしはしない、絶対にな」

そういう放つノールズの瞳は、キルヴァンと同じく狂信者の光を宿していた。

偵察から生還し、ノールズへ報告も終えたアイはツミキを抱っこしながら、所属する冒険者パーティ、いや、正確には傭兵団が寝床としている野营地へ戻ってきた。

十字軍の占領部隊は、どこの村でも必ずある村長宅か冒険者ギルドといった大きな建物を司令部とし、その周辺の施設を接收して一時的な駐屯地としている。

しかし軍属ではない冒険者や傭兵は、部隊の邪魔にさえならなければ好きな場所に居を構えることを許可されている。

あくまで臨時に雇われているにすぎない彼らと十字軍兵士の仲は勿論良好とはいえず、下手に交流があると喧嘩などトラブルが発生するので、あえて村の外に野営をするという場合も珍しくはなかった。アイの所属している『キプロス傭兵団』は、正しくその典型的な例と言える。

村を覆う柵からやや離れた位置に立つ、比較的大きな農家の建物を中心に彼らの野营地があった。

帰って来たアイは出歩いている傭兵団のメンバーと適当に挨拶を交わしながら、自分のテントへ向かう。

ツミキを腕から降ろし、今日はさっさと休もうかと思いながらテントへ入ろうとしたその時だった。

「よお、帰ったんならオレんどこに顔だせよなアイ」

後ろからかけられた男の声に、あからさまにイヤそうな顔でアイは振り向いた。

歳はアイよりもやや上といったところ、それなりに体格も顔も良い優男だが、下品なニヤけ面に、鎧の一つも装備せずに半端に衣服を着崩しているその姿は、粹がった悪ガキがそのまま成長しましたという風にしか見えなかった。

「話しかけないでもらえる？ あとそれ以上近づかないで」

冷たいアイの返答をまるで意に介さず、ブラウンの跳ねた長い髪をなびかせながら男はさらに一步距離を詰める。

「おいおい、団長様に向かってその口の利き方はないんじゃないの？ つつーかオレら仲間じゃん、もっと仲良くしようぜえ」

男はこんなナリでも自分で言うように、ここにいる87名の傭兵団の長である。

名はキプロス、長の名前をそのまま団名にしているのは、誰でもすぐに理解できる。

「キモいこと言うな、あと一步でも近づいたらキプロス傭兵団からアイ傭兵団に名前が変わっちゃうよ」

アイの手にはいつの間にか抜いたナイフが握られ、その切先はキプロスの腹先に突きつけられていた。

「今日はアタシ疲れてんの、飛んだり跳ねたり大爆発、命からがら逃げ帰ってきたんだから。」

グレート級な冒険者のアタシじゃなかったら、死んでたよ？」

半ば冗談のような台詞だが、未だにナイフを向け続けるアイの目は本気の色が宿っている。

「へへ、マジで言ってるの？」

冗談に冗談で応えるような気安い返事だが、どうやらキプロスの興味は自分が言った台詞の内容、つまり‘戦闘があった’という点に興味が移っていることをアイは雰囲気で察した。

「うん、忙しくなるから、すぐ準備始めた方がいいんじゃない？」
それだけ言い残して、アイはナイフを仕舞ってさっさとテントへ入っていった。

キプロスはその場に立ったまま、アイを追わずに、いや、もう彼

女のことなど忘れてしまったかのように、突然笑い声を上げた。

「――ははっ、ようやく、‘マトモ’な仕事ができんのか。

メスの魔族を弄んものいい加減飽きてきたしな、いいタイミング、いや、これもアイツに言わせりゃ、‘運命’ってヤツかあ――へっ、やっぱ俺って神サマに愛されてるわ」

第83話 生還（後書き）

というワケで、早々にフィオナが討ち漏らしていたことが明らかとなりました。

感想でウザいと大絶賛のアイですが、残念ながら彼女のウザさはこれからも続くようです。そしてさらにウザそうなチャラ男団長も登場。

果たして彼らはどうクロノ達との一戦に関わってくるのでしょうか。

第84話 親睦

イルズ村に存在する利用価値ある施設の破壊は、俺が当初予定していたよりも上手く行った。

穀物倉庫を焼き払うのが精々、と考えてはいたものの、凄まじい魔法の威力を叩出すフィオナさんのお陰で、頑丈な造りの冒険者ギルドすら破壊し、村の中央広場一帯を更地にすることに成功した。

粗方壊し終わると、俺達はすぐにイルズを出て、夜にはクウアルまで帰りついた。

そして現在は待機組みとなっていた他の冒険者達も含めて戦果の報告、という建前でギルドに集って杯を酌み交わしているのだ。

この非常時にそんなんでいいのか？　と思うかもしれないが、俺達冒険者は殿のため村を出てゆくのは最後であり、そして村には避難に持って行くことが出来ない物資が残っているので、好き勝手に飲み食いさせてもらっているのだ。

もしかすれば最後の晩餐、なんてことになりかねないが、俺含め冒険者の誰もが表立って不安を出すようなことは無かった。

「まあ、よくやった方なんじゃねえの？　ギルドの屋上に行くなんて言い出したときは、土壇場になってブルっちまったのかと思っただけ、はっはっは！」

ヴァルカンのデカイ掌がバンバンと背中へ叩きつけられる、普通に痛いのだが、獣人特有の肉球があるお陰でかなり衝撃が軽減されているんだろうな、これでも。

「だからちゃんと説明はしただろ、それで役目もきっちり果たしたぞ」

「旦那が一発で敵さんのドタマふっ飛ばしよる大活躍、ちゃんと見とったで！」

このエセ関西弁で喋っているのは、黒いローブを纏った白骨死体、

では無くスケルトンの魔術士モズルン、通称モっさんと呼ばれている人物だ。

今日の戦闘において『邪心防壁』デス・ウォルデフアンで大通りの前方を塞いでくれたのが彼である。

モロに死神のような風貌の上に『闇魔術士』ダーク・ウィザードというストレートなクラス名をギルドカードに表記し、いかにも邪悪の化身みたいな第一印象だったが、

「いやあこの若さであれほどの黒魔法習得しとるなんて天才やで！
こりゃあナントカ軍団の撃退なんざ楽勝やな！　がははは！」

もう中身が大阪のおっさんだとは思えてならない。

話してみればこんな感じに調子が良いなので、良い人（？）ではあるんだろう。

「楽勝、とは言い過ぎですけど、クロノさんはリーダーとして十分信用できそうですし、高度な原初魔法オリジナルを習得しているのは確かですよね」

落ち着いた感じで話しているのは、スーさんことスライムの盗賊、その姿はどこからどうみても人間、中肉中背で良くも悪くも目立った容姿ではない普通の女性にしか見えない。

スライムという種族はRPGでお馴染みのゼリー状のモンスターであることは確かなのだが、個体の能力が上がると様々な姿に変化することができるといいう。

ちなみに、美男美女といった容姿へ変化する為には、それ相応の技術と魔力が必要らしい。

美しい姿には魅了チャームが宿るような世界、やはり美しいというだけで魔法的に特別な意味合いを持つようだ。

あとついさっき知ったのだが、名前が『スース』なのでスーさんと呼ばれているのだとか、スライムのスーさんでは断じてない。

「けど、やっぱり一番驚いたのはフィオナさんの魔法じゃないかしら？」

「そうでしょうか？」

「ええ、そうよ」

相変わらず眠そうなフィオナの目を真っ直ぐ見て話しているのは
柔和な微笑を浮かべるエルフの女性。

『三狍姫』のリーダーにして三姉妹の長女イリーナさんである。

三人は金髪碧眼と細身の体格に加えて装備も全く同じではあるが、
髪型がそれぞれ異なっているので見ればすぐに判別できる。

イリーナさんは首の後ろで長い髪を一本の三つ編みにするヘアスタ
イルだ。

「あのゴっつい魔法、近くで撃たれたらかなわんなあ」

「あの配置で正解でしたね」

モっさんとスーさんの台詞を聞きながら、あらかじめフィオナか
ら「魔力の制御に自信が……」と聞いておいて良かったと改めて思
う。

確かにあの威力の魔法を、狭いダンジョンの中で毎回使われたら
シャレにならないだろう。

「これは褒められているのでしょうか？」

「ああ、フィオナさんの魔法は凄い威力だ、俺のパーティに入って
くれて本当に良かった」

「……そうですか」

小さく呟いて俯くフィオナさんの頬が心なしか少し赤い、どうや
ら酔いが回ってきているようだな。

「そうだ、フィオナさん」

「はい？」

彼女が酔いつぶれる前に、言っておかなければならないことがあ
る。

「後で俺の部屋に来てくれないか？」

「っ！？」

パリーン、とグラスが床に落ちて割れる音が響き渡る。

「どうしたリリィ？ 大丈夫か？」

「……ごめんなさい」

俺の膝の上に座っていたリリイが、ふとした拍子にグラスを落としてしまったようだ。

「なんだあ、妖精のお嬢ちゃんも酔っ払っちゃったかあ？」

「いや酒は飲ませてねーよ」

酔っ払ってはいないが、リリイには疲労が溜まっている。

満月の夜にしか元の姿に戻れないリリイだが、昨日は村長の前で避難を進言したり、俺をリーダーになるよう話した時など、光の泉から持ってきたアイテムを使用して意識だけが長時間元の状態に戻っていた。

リリイ曰く、

「『クイーン・ベリル紅水晶球』を使えば、私は元の姿に戻ることが出来るけれど、体に負担がかかるから1日あたり30分が限度」

らしい。

妖精女王の加護を受けて始めて自然に元の姿へ戻れるのだ、いくらキーアイテムだった『クイーン・ベリル紅水晶球』が手元にあるとはいえ、その効果は莫大な魔力を利用した強化に過ぎない。

もともと、30分というのは真の姿で戦闘可能な時間であり、意識だけならもっと長く保ってられる。

しかしそれでも体にかかる負担はゼロじゃ無い、疲労という形でその負担は確実にリリイの小さな体に蓄積されていることだろう。とりあえず、今はさっさと切り上げてリリイを部屋へ運ぶとしよう。

「リリイが疲れてるみたいだし、俺達は先に上がらせてもらう。

明日の予定はさっき話した通りだ、またよろしくな」

テーブルについた冒険者達から了解の声を聞き届け、俺はリリイを抱っこして席を立つ。

「クロノさん」

「ん？」

「私も行きます」

席から立ち上がったフィオナさんの顔は、なぜかさっきよりも赤

くなっていた。

ギルドの客室、そのベッドの上にクロノ、リリイ、フィオナの三人がいた。

真剣な表情のクロノ、冷めたいいつも通りの表情のフィオナ、そして二人の間にちよつと不機嫌な表情のリリイ。

（クロノさん、もしかして私を……）

つい先ほども、クロノ以外あの場合に居た全ての冒険者が想像したような色っぽい状況を、フィオナもまた脳裏に描いていた。

（確かにクロノさんは、アイスキャンデーを食べさせてくれたり、私の攻撃魔法に引いたりしなかったり、とても良い人ですが、そういう関係になるのは早過ぎると思います）

夜に「俺の部屋に來い」なんて男から初めて言われたフィオナは、やや混乱する頭でそんな思考をしていたのだが、

「フィオナ、ウチのパーティのルール、忘れてないでしょうね？」

ベッドに寝転がったリリイがその言葉を言い放った瞬間、今夜クロノがどう熱烈なアプローチを仕掛けてきたとしても、フィオナの貞操が破られる可能性はゼロであると悟った。

そして椅子のない客室で、ベッドの上に三人が座る（リリイは寝転がったままだが）今の状況となっている。

「リリイ、意識を戻しても大丈夫なのか？ 疲れてるんじゃない？」

「大丈夫、気にしないで。」

だって、これから大事な話をするんでしょう？ ちゃんと聞いておかないとね」

笑顔で答えるリリイに、クロノはどこか納得した表情。

そして、もうリリイのことは気にせず、フィオナと向き合い口を開く。

「フィオナさんを部屋へ呼んだのは、どうしても聞いておかなきゃ

いけないことと、話しておきたいことがあったからだ。

フィオナさんはアーク大陸の人間だってことを打ち明けてくれたし、俺も自分の正体について話しておこうと思う」

フィオナは相変わらずの眠そうな表情で、クロノが何故自分を部屋へ呼んだのか、その理由がおぼろげながら理解できた。

「そして、聞きたいことはアーク大陸、シンクレア共和国、十字教、そういった事についてですか？」

クロノの話しておきたいこと、までは予想がつかなかったものの、自分から聞くような内容はこれしかないとすぐに分かった。

そして、他の冒険者にフィオナが元々十字軍の傭兵であったことを知られないために、部屋へ呼んだのだということも理解した。

「その通りだ、けど俺が一番聞きたかったのは――」

だが、フィオナもクロノがその言葉を口にすることは全く予想でしなかった。

「――『使徒』ってのは、一体何者なんだ？」

第84話 親睦（後書き）

次回で第6章は最終回となります。果たして、使徒の正体がフィオナの口から語られるのか!?

今回で多くの冒険者メンバーの名前が明らかになりました。まだ名前を覚えるような段階ではないですが、一応キヤラ紹介にまとめおきますので、今後忘れそうになったらご覧ください。

第85話 黒き神々と白き神

神はいるのかいないのか？ 信じる人の心に神はいる？ いいや、それでは神が実在していることにはならないのでは？

神について様々な議論はあるけれど、俺が17年間生まれ育った現代日本において神の存在なんて幻想でしかない。

少なくとも俺は人間の姿をした神様なる人物が空の上から人々を見守っているなんてのが現実にあるとは思っていない。

別に宗教や信仰心そのものを否定するつもりはないが、目で見て触れるような、それでいて奇跡を成してくれる実物の神様は、地球では誰も目にしたことがないのは事実だ。

しかしここは異世界、俺がいた世界とは別の理・法則が支配するファンタジーワールド。

そう、この異世界において『神』は実在するのだ。

その証拠の一つが『加護』である。

単純に言えば神様が人に力を与えること、またソレによって得た能力そのものが『加護』と呼ばれる。

例えば、強化魔法を使わずに通常より身体能力が上昇したり、習得していない特別な魔法を使えるようになるなど、その効果は様々だ。

実感はないが、なんと俺の黒魔法も『加護』の一種だという。

黒色魔力は、異世界の自然に存在する原色魔力とは完全に別種であり、神によってもたらされる特別な質の魔力、らしい。

「クロノの場合は、魂に『黒き神々』と繋がる門ゲートがあつて、そこから黒色魔力を引き出しているんだと思うよ」

「リリイ、そんな話初めて聞いたけど……」

「え、だって普通に知っているものだと思ってた、っていうか魔力の源なんて何となく分かるものじゃない？」

「……分かりません」

つーか『黒き神々』ってなんだ、いつの間にそんな怪しげな連中と繋がってることになってんだよ。

いや、「いつか？」と問われれば、きっと最初にやった体に魔力を宿す実験によって、その神と繋がる門ゲートとやらが開かれたってことなんだろうな。

えらいキツかったからなアレは、魂をどうこうしたってのが納得いく苦しさだぜ。

「私もクロノが神の存在を知らないとは思わなかったし。

でもちゃんと魔法が使えるんだし、魔力がどうかはあんまり関係ないでしょ」

「ん、それはそうだが……『黒き神々』って……」

「それはパンドラに伝わる神様全ての総称ってだけ。

イルズ村にも五穀豊穡の神様を祀ったりとかしてたでしょ？ そういう各地で祀られている神様を纏めて『黒き神々』って呼ぶの。

ちなみに私達の『妖精女王』も神様の一人」

「なるほど、八百万の神々みたいなもんか」

パンドラ大陸の各地で、現地の人々に様々な『加護』を与えながら信仰されているってことだ。

元の世界にある宗教が、本当に神様がいて現実に加護を与えているのだと思えばいい、まあこれも‘魔法’の一種みたいなもんだよな。

ただ俺の場合は魔力の供給だけなので特定の神と繋がってはいないようだ。

いわば神の住む世界そのものと繋がっているらしく、便宜的に『黒き神々の加護』と呼ばれる。

じゃあ俺も何か特定の神様を信仰すれば、何らかのスーパーパワーを得られるのだろうか？

とりあえず、願えば即座に与えてくれるほど『加護』ってのは安いもんじゃないらしい、神様も現金なことだな、いや、現実的と言

うべきか。

「では、クロノさんが神について理解してくれたようなので、『使徒』についてお話ししましょうか」

「ああ、頼む」

そう、元々は使徒の正体を知る為の話だったんだ。

俺が今まで異世界における『神』の存在を曖昧にしか認識していなかった所為で、説明しようが無かったらしい。

「『使徒』とは『白き神』が特別に加護を与えた、人間を超越した存在です。」

白き神は十字教においてこの世界全てを作った創造主であり、その世界を支配させるために、最後に生み出したのが人間である、と伝えられています」

どうやらアーク大陸には、聖書に登場するような一週間で世界を創造した唯一絶対の神が存在しているらしい。

もう最初から胡散臭さ全開である。

「本当に世界の全てを作ったのかどうかは分かりませんが、アーク大陸においては最も古く影響力のある神でしょう」

「それで、欲張りな『白き神』は自分の支配領域を広げたくて、『黒き神々』の支配するパンドラ大陸に人間共を派遣したってワケ」

「その通りですリリィさん、パンドラ遠征は白き神により『神託』がくだったことによって実行されました」

俺の元いた世界で十字軍といえば、聖地の奪還を名目に様々な思惑の絡んだ軍事行動ってイメージだが、まさか神様が直々にやれと命令したもんだとはね。

「主である『白き神』はこの地を欲しました、故に、私たち『十字軍』がこれを捧げるためにやって来たのです」

と、ダイダロスの城壁でサリエルは言っていたが、あの台詞は言葉どおりの意味だったってことだ。

「支配領域を広げるって、具体的にどういうことなんだ？」

「十字教を信仰させることです、『白き神』のみを崇め、教会を打ち建て、他の宗教を徹底的に排除します。」

結果的に、元々そこにあった宗教や文化は十字教によって完全に駆逐され、消滅することとなるでしょう」

その辺は現実世界と同じってことか。

サリエルが「改宗する」と言っていたが、あの台詞を聞いた時に思ったイメージは間違っていなかったってワケだ。

改宗だけで済むならまだマシだ、イルズ村の惨状を見れば、ヤツらは人間以外の種族は絶滅しても良いとすら本気で思っている節がある。

降伏することすら許されない、本当に悪魔のような連中だ。

「話を戻す、使徒は何人いる？」

「全部で12人と決まっています」

「ってことは、常に一定なのか？」

「はい、欠けた場合は新たな使徒が発見されるまでしばらくそのままとなるようです」

流石に神様のお気に入りも百人も千人もないってことか、どうやら使徒の大軍団が結成されることはないようで一安心だ。

「もし相手にすることがあれば、誰か一人だけでしよう。」

可能性としては、十字軍総司令官を務める『第七使徒・サリエル』が最も高いですね」

「……もう戦ったな」

「そうね、ちょっと忘れられそうにないわ」

「それはまた、どういった経緯で？」

流石にフィオナさんも驚いたのか、珍しく表情に明確な感情の色が浮かんでいる。

「ダイダロスの偵察に行ったとき、城壁の上でぼったり出くわした。司令官だって名乗ったから、その場で暗殺しようとしたがあっさり返り討ち、手も足も出なかった」

「それは……よく生きて帰れましたね」

その目はバカなことをした、と哀れんでいる目なんでしょうかね
フィオナさん。

「ああ、リリイが助けてくれなかったら確実に死んでいた」

「そんなことないわ、あの女が見逃してくれただけのことよ」

俺はリオール峠で目を覚ますまで気絶しっぱなしだったから、いったいどうやってリリイがサリエルから助け出してくれたのか具体的に不明だ。

「逃げてもいい」って言ってたが、刃を向けられても逃がしてくれたとは、サリエルが何を考えていたのか分からん、殺す価値もないほど雑魚だったとでもいうのだろうか。

「使徒は教会において最強の存在です、一対一で彼らに敵う人間は、少なくともアーク大陸には一人もいません。」

見逃してくれたとは、運が良かったですね」

「気まぐれに救われたただだが、いいさ、これから俺を見逃したことを後悔させてやる。」

一対一なら、と言ったが多人数相手ならどうなんだ？ 使徒に何か弱点は？ というか、殺せるのか？」

問題はそこだ、神様のスーパーパワーで余裕の不老不死とかだったら手に負えない。

一応は『バジリスクの骨針』によってサリエルの右手に負傷させることが出来たのだから、大丈夫だとは思うが……まさか、殺しても神の奇跡によって死者蘇生とかやらないよな？

「殺すことは可能です、いくら強力な加護を受けているからといっても、その体は人間なのですから。」

首を落とす、心臓を貫く、大量の出血を強いる、そういった致命的なダメージを与えることができれば死にますよ」

流石に完全な『不死』の存在は魔法のある異世界でもあり得ないってことか。

ついでに死者蘇生も無いらしい、これで一安心だな。

「使徒はクロノさんが黒色魔力を神から引き出しているのと同じように、魂の門ゲートから『白き神』より白色魔力を引き出して魔法を行使します。

ただ、その引き出せる魔力量は莫大です。

どれほどかと言うと、そうですね、クロノさんは無限に黒色魔力を引き出すことはできますか？」

「無理だな、俺にだって限界はある」

機動実験では常にギリギリの戦いだったから、魔力切れ寸前というのはよくあった。

最近では呪鉈を進化させて司祭をぶった切った時に魔力切れで倒れたな。

「使徒には、魔術士なら誰しも経験する『魔力切れ』という現象が存在しません、どれほど魔力を使用しても即座に補充されるからです。

勿論、『白き神』が供給する魔力量は無限です、どれほど魔法を行使しても彼らは永遠に魔力が途切れることはありません」

ただ、その無限の魔力も使徒が持つ加護の力の一部でしかない、と恐ろしい事実も伝えられる。

「ならどうやって殺す？ 使徒を一撃で即死させられるだけの攻撃手段を用意するしかないのか？」

そんな都合の良いものがそうそうあるとは思えないけどな。

「最も確実に使徒を殺す方法は、犠牲覚悟で絶え間なく攻撃し続けることですね。

いくら無限に魔力を引き出せるといっても、その体はあくまで人間、無限の魔力の使用に、器である肉体は永遠に耐えることはできません。

ですが、使徒の体が限界を迎えるほど消耗させるには、およそ一万人の兵士が必要だと言われています。

その数が正確かどうかは知りませんが、万が一途中で逃げられれば、体は回復して最初からとなりますし、下手な兵の動かし方

では本当に1万人が犠牲になるでしょうね」

「消耗戦を強いるのは不可能じゃないが、現実的ではないってことか」

使徒だって自分の体調管理くらいは出来るだろう、肉体の限界に気づかず戦い続けるなんて――ああ、なるほど、逃がさないほど包囲し続けるっていうなら、確かに一人相手に一万人が必要なかもしれないな。

「アーク大陸の戦史では、使徒が相手の場合、最善手が逃げることで、次善策としては足止めすること、殺すことを考えてはいけない、と伝わっています。

一応、使徒が戦死した例もありますが、どれも多大な犠牲を払ってようやく討ち果たしたようです」

「そんなのが12人もいるのか」

単純計算で12万人の軍隊がいるってことじゃないかよ。

それに通常の兵力を加えれば……これはひょっとするとリアルで100万人級の戦力をシンクレア共和国は保有しているかもしれないな。

「パンドラ大陸に12人全員が来ることは絶対に無いのでその心配はいらないでしょう。

基本的に第一使徒と他数名はエリシオン防衛のためシンクレア共和国を離れることは無いですし、他の使徒もアーク大陸における共和国の覇権維持のため国境付近や紛争地域へ配置されています。

中には行方不明の使徒も何人かいるようですよ」

「行方不明？ どういうことだ？」

「なんでも、一般人に紛れて人知れず世直しを行うだとか、秘密の研究をしているだとか、実は使徒は12人もいないとか、そういう噂があります。

実際のところはどうかはわかりません、なにせ噂なのですから」

世直して、水戸黄門的な活動をしているってことか？

まあいいや、ソイツらは放っておいても良さそうだ、共和国内で十字のエンブレムを振りかざして悪徳商人やら貴族やらを正義の名の下に成敗してればいい。

12人いないというのも、人数が削れるならむしろこっちには好都合だ、是非とも使徒はサリエル一人しかいませんでした、とかになっただけだね。

「使徒というのは、信仰心や地位や魔法の強さなどに関わらず、ある日突然『加護』を受けて使徒になるのですよ。」

なので、教会の為に働く信仰心の厚い者もいれば、行方をくらまして自由気ままに活動する者など、各人様々な思惑が使徒にはあるようです」

「加護を得ているから、宗教的に偉い上に強い、誰も意見なんてできないってか」

「一応は教皇が十字教のトップで使徒よりも唯一上位の存在となっていますけど、やはりそこまで強くは言えないですよ。」

ただし、使徒本来の役割である‘神の敵の排除’という行動原理は全員共通して持っています、故に十字教を裏切ることはありませんし、歴史上神を裏切った使徒も存在しません」

多少自分勝手な行動は許されているものの、白き神から力を貰っている以上、最低限守るところは持つてくることがか。

「まあいいや、使徒ってのが特別な存在だっていうのなら、そうそう見えることもないだろう。」

少なくとも、避難民の追撃部隊として直接やってくることはなさそうだ」

パンドラ大陸にいる唯一の使徒はサリエルただ一人、しかも敵軍の総大将という立場である以上、簡単に動くようなことはないと思われる。

ダイダロスの領地は広大だ、西の端っこにすぎないこんな田舎にわざわざ注目するとは思えない。

「ただ、サリエルは来なくても普通に十字軍の占領部隊は来るんだ

よな、問題はその質と数か」

「私も元傭兵の身ではありますが、そこまで十字軍の詳しい内部事情は分かりません。」

教えられるとすれば、共和国における軍隊や騎士団について、ごく基本的なことだけです」

「いや、こっちは敵の正体が一切分からないようなもんだし、それだけ分かれば十分だ」

十字軍の思惑は凡そ理解できた、後は人間の組織にありがちな利害対立やなにやら、ドロドロした諸事情が付随していることだろう。その辺までは詳しく知る必要は無い。

これから知らねばならない事は、十字軍の具体的な戦力に関してだ。

「よろしければ、先にクロノさんのお話、聞かせてもらえませんか？」

まず何から聞いていこうか、と頭を悩ませていると、先にフィオナさんからそんな要望をされる。

「ああ、そうだな、それじゃあ先に俺の話をしておくか」

どこから話すかな——俺はリリィに打ち明けた時と同じようなことを悩みながら、まず核心部分について先に述べることにした。

「実は俺、こことは別の世界から来た人間なんだ」

第85話 黒き神々と白き神（後書き）

申し訳ありません、またしても怒涛の説明回でした。

けれどフィオナが仲間になった以上、このタイミングで語らせるしかありませんでした……お陰でフィオナが便利な解説キャラに。

なにはともあれ、これで第6章完結です！ タイトル通りスパードを目指しはしましたが、クウアル村より先に全く動きませんでしたね。

それでは、展開の遅さを気にせず、次回もお楽しみに！

第86話 使徒の消失

朝起きたら、丁重に招いていた使徒の一人がゲストルームから忽然と消失していた。

「どうしよう……」

かくして、第七使徒サリエルは再び頭を悩ませることとなる。

「だ、大丈夫ですよ、ミサ卿なんてすぐに見つかりますよ!」

俯くサリエルに全く根拠の無い慰めの言葉をかける第十二使徒マリABELの台詞にある通り、失踪したのは第十一使徒ミサ。

今朝、世話役のシスターが起床準備のために入室したところ、大きな天蓋付きのベッドには蹴っ飛ばされて散乱した布団があるだけで、そこで眠りにについているはずの神に愛された少女の姿はどこにもなかった。

その悲劇的な一報は、修道院の規則正しい生活習慣を送り、夜明けと共にすでに起床していた十字軍総司令官サリエルの耳に届いた。「現在、首都ダイダロスの全門を閉鎖し厳重な検問を行うと同時に、街中に搜索の兵を出しております」

こうした戦闘以外の不測の事態に素早く対応するのは、サリエルの副官であるリュクロム大司教の役目である。

今回の使徒三名のサリエル見舞いの訪問は、公には伏せられているので、現場で搜索する兵士達にはとある重要人物とだけ伝えられている。

しかしながら、ミサの容姿は何点かの特徴を伝えるだけですぐに分かるほど目立つものであり、実際に見た事が無い末端兵士であっても見かければ即座に判別できるだろうと予想がつく。

だからこそ多少込み入った事情があろうとも、首都ダイダロスに潜伏している限りは、すぐに見つけることが可能だろう。

そう、ダイダロスに居れば、の話である。

「ミサ卿が‘能力’を使っていれば、誰にも気づかれず首都ダイダロスの外に出ていることでしょう」

ポツリと呟くようなサリエルの言葉に、二人の麗しき兄弟は痛いところを突かれたとばかりに鎮痛な面持ちとなる。

「『空中要塞』^{ピースフルハート}のことですよね……」

うんざりしたような顔つきで、マリアベルはミサの持つ厄介な能力名を口にする。

「確かに、空を飛ばれてしまっただけはいくら地上を探そうが無意味ですね。」

城に籠られてしまえば、補給の必要も無いので姿を現す機会も、気まぐれ以外にはありませんし」

第十一使徒ミサの誇る『空中要塞』^{ピースフルハート}は、自称でも誇張でも無く、全く文字通りの効果を秘めた恐るべき能力である。

もしも‘ソレ’を利用しているのだとすれば、発見できるのは天^ペ馬騎士^{ガサスナイト}などの実際に空を飛ぶ者しか不可能だ。

「私が、出ます」

サリエルは、今自分に出来ることを提案する。

十字軍総司令官といっても、サリエルにこうした戦闘以外の事案に上手く対処する能力は無い。

自分は口出しせず、臨機応変に的確な指示を出せるリュクロムに任せきりにしてしまった方が効率よく兵が動くだろうことが理解できている。

「申し訳ありません、戦場以外でサリエル閣下のお手を煩わせるようなことは決してせぬよう心がけておりましたが……」

「気にしないでください、ミサ卿は私の客人なのですから」
リュクロムは感謝を籠めて深々と頭を垂れた。

「ところで、マリアベル」

「え、なに兄さん？」

ふいの問いかけに思わず素で応えてしまうマリアベル。

「第三使徒ミカエル卿は、今どちらへ？」

そう、サリエルの見舞いに馳せ参じた使徒は三人、失踪したミサ、この場に居るマリABEL、そして、この大騒ぎの中にあって姿を見せない美貌の第三使徒『聖女』ミカエルである。

「ああ、ミカエル卿なら、ミサ卿の失踪を聞いて――」

「それは大変ですねえ、では、私も探しに行きますよお」

「――って」

呑気に応えて、そのまま優雅な朝の散歩にでも向かうような足取りで、その場を立ち去っていった、とマリABELは伝えた。

「ミカエル卿との連絡手段はあるのですか？」

「……あ」

探しに行く、と言っても、この見知らぬ街であるダイダロスの一
体何処を探すというのだろうか。

真っ当に考えれば、城の周辺でもぐるっと一周すれば「見つからなかった」と言って帰って来るだろうが、相手は無限の魔力を持つ使徒である。

その気になれば地の果てまでも歩いて行けるに違い無い。

『聖女』の二つ名は伊達では無い、彼女は己の身など全く省みずにミサ搜索を続ける可能性がある、見つからない彼女を心配して、どこまでもどこまでも歩いて行く献身的な姿が目に見えようである。

「これは、二次遭難の可能性もありますね……」

何故彼女を止めなかった、と弟の迂闊さをしかることなく、リュクロムは溜息をつくように重苦しい言葉を吐いた。

「ミカエル卿も、探しておきます」

本当に申し訳ない、と二人の兄弟はサリエルへ寸分のズレも無い華麗な動作で頭を下げた。

第86話 使徒の消失（後書き）

またしても1章ぶりのサリエルの出番で始まりました、第7章『迎撃準備』です。

タイトルでお分かりかと思いますが……準備だけでまだ戦闘は……
ともかく、クロノがどんな作戦で十字軍を待ち構えるのか、そんな祭りの前の準備期間的な楽しさをお伝えできれば幸いです。

では、明日もお楽しみに！

第87話 防衛計画

クウアル村ギルド二階にある会議室では、昨晚クロノと卓を囲んだと同じメンバーが集っていた。

偶然ではない、わざわざ名指しでクロノが呼んだからである。

クロノ、リリイ、フィオナの『エレメントマスター』のメンバー全員に加え、『ヴァルカン・パワード』の代表ヴァルカン、『三狼姫』の代表イリーナ、それとスケルトンの魔術士モズルンことモッさん、スライムの盗賊スースことスーさん、合計7名が大きなテーブルを囲んで席についている。

ただ、エレメントマスターのメンバー以外は、一体どういう目的で自分達が集められたのかイマイチよく分からないという表情をしている。

クロノはそんな彼らの様子を気に留めず、テーブルヘダイダロス西部地方の地図を広げると同時に、言葉を発した。

「これから『冒険者同盟』の作戦会議を始める！」

冒険者同盟とは読んで字の如く、今回緊急クエストに参加を表明した冒険者全員を指す名前だ。

その冒険者同盟の作戦会議の開催を堂々と言い放つクロノだったが、

「はあ？」

他のメンバーは一樣にポカンとしていて、その反応は実に冷ややかなものであった。

「作戦会議って、何よ？」

疑問符を浮かべる者達の代表として、ヴァルカンがクロノへ問いかける。

「何って、作戦会議は作戦会議だ。」

パーティならクエスト挑む前には誰でもやるだろ？」

ギルドの食堂やロビーで交わされる冒険者達の会話内容は専らそれである。

「そりゃパーティだからだろ、こういう冒険者の寄せ集めを仕切るのはリーダーの独断だ、他の面子集めて会議なんざしねえよ」

「そうなのか？」

「当たり前だろ！ 一々他のヤツの話なんざ聞いてちや何も決まらねえだろが、だから誰にも文句言われねえよう一番強えヤツがリーダー張るんだろが！」

ヴァルカンの言い分は動物の群れのボスを決定するのと同じ理屈ではあるが、このパンドラ大陸で活動する冒険者の間では、当たり前前の考えである。

冒険者パーティのように少人数ではかなり連携をとることが出来るのだが、今回のように何十人もの大所帯、それも種族や実力の異なる冒険者の寄せ集め、そういった者達を一つに纏めるには、ヴァルカンの言うように一番強いヤツが治める絶対的な上意下達が最も効率的かつ効果的なのだ。

ここはクロノが生まれ育った平和な日本では無く厳しい環境の異世界、さらにその中でも荒くれ者と言えるような冒険者の集まりである、無条件にみんなの意見を平等に聞いていきましようという習慣などあるはずもない。

だが、クロノとてその程度のこと、いくら三ヶ月の短い冒険者歴といえども理解していた。

分かった上で、作戦会議を提案しているのだ。

「ヴァルカンの言う事はもっともだ、けど、俺は冒険者ランク1が示すように経験豊富じゃない、それにこの辺の地理も多少知っているだけで詳しいと言えるほどでもない。

俺が考える作戦が実行可能かどうか、みんなは何が出来て何が出来ないのか、俺一人だけの知識量では有効な作戦を立てられないんだ。

他のメンバーから意見を募るなんてのは、冒険者からすれば情け

ないように見えるかもしれない、けど、俺にはみんなの力が必要なんだ。

ここは俺を助けると思って、協力してくれないか？」

クロノのストレートに協力を求める声に、会議室は沈黙する。だがその静寂もすぐに破られた。

「いいんじゃないかしら？ リーダーが知恵を貸して欲しいと言うのなら、素直に応じてあげましょう」

最初に賛成の意を表明したのは三独姫の代表イリーナ。

「そうやな、ここは50人全員が一つのパーティや思て仲良くいきましょ、まあワシはソロやったけどな！ あっはっは！」

「私も賛成です、どうやらクロノさんは短絡的な思考の持ち主では無さそうなので、意見を募っても上手く纏めることができるのではないでしょうか」

モズルンとスースもクロノの提案に賛成を示す。

最後まで渋い表情だったヴァルカンだったが、彼も思い切りはよい男、くよくよと迷わず即座に決心を固める。

「仕方ねえな、俺らで経験不足なリーダーの面倒みてやろうじゃねえか！」

「ありがとう、助かる。」

モっさんの言うように、俺達は『冒険者同盟』という一つのパーティだと思って、一致団結してこの緊急クエストにあたろう」

クロノはすぐに全員が協力的な姿勢を見せてくれたことに安堵する。

やはり昨日の斥候部隊を上手く迎撃できた経験がクロノへの信頼に結びついているようだった。

ここへ集っているエレメントマスター以外のメンバーは全員がこの辺りでは名の通った実力者達である。

冒険者同盟内において彼ら全員の協力を取り付けたとなれば、より確実に他の冒険者も協力する。

クロノが彼らの協力を仰ぐことを明言したこの時において、冒険

者同盟は組織として一段階結束力が高まったと言えるだろう。

「で、ここで何を決めようってんだ？　昨日やった焦土作戦とかいうのをやるんじゃないのか？」

「あれは敵を足止めするための小細工みたいなもんだ、本格的に敵を止める作戦じゃない」

小細工とは言うモノの、すぐにやっておかねば間に合わない可能性があったからこそ、作戦会議を今日にして、昨日はイルズでの破壊工作に専念したのだ。

「敵を止めるったって、そのまんま戦う以外に何かあんのか？」

「そうや、この辺で一番頑丈なクウアルの正門で敵さんを待ち構えるんじゃないの？」

真っ当に考えればそうだろう。

そもそも、あまり作戦というものを重視しないのがパンドラ大陸の住人だ。

よって、大人数が集まって戦おうという場合には、前衛後衛の簡単な役割分担以外は、とりあえず広い場所で全員戦うという程度の事までしか考慮されないのだった。

「いや、それじゃあダメだ」

しかし、クロノは考える。

高校では文芸部に所属し、痛いライトノベルを量産するような中二病的文学少年だった黒乃真央は、こと『戦い』という分野に関しては一般人よりも知識だけはあった。

当然、現実世界においてそんな情報は多少の教養と知識欲を満たす以上の価値などないが、実戦できるかもしれない状況となれば話は別だ。

もともとクロノとして自分の持ちえる知識が、歴史の教科書や英雄伝に書かれるような凄まじい効果を100%発揮してくれるとは思っていない。

自分で何度も命がけの戦闘を経験した以上、むしろそういった知識は所詮、己の空想の世界でのみ通用するご都合主義なモノなんじ

やないか、とも疑った。

だが、クロノには頼るものがこれしかないのもまた事実である。まだまだ子供と呼べる程度の短い17年間の人生において、彼がこんな状況で役立ちそうな実体験などあるはずもない。

例え聞きかじりの曖昧な知識であっても、クロノはそれに賭けるしかなかった。

特に今回のような‘作戦’というものとことん無頓着な集団においては尚更、クロノだって冒険者達に明確な戦略・戦術があるのならば口出ししようとは思わなかった。

そうして、クロノは知りえる知識を総動員して必死に防衛計画を考え出したのだ。

だがそれを実現するためには、やはりこの異世界の住人、冒険者のベテランである彼らの助言や協力が必要不可欠なのだ。

クロノは自分の立てた作戦に絶対の自信は持てない、だがその不安を表情へ出さずに防衛計画の説明を始めた。

「クウアル村は捨てる、俺達の防衛ラインは――」

クロノの指先が、テーブルに広げられた地図のある一点を指す。

「ダイダロスの最西端に位置するアルザス村だ」

アルザス村は、ガラハド山脈から流れるローヌ川という比較的大きな河川の傍にある小さな農村、だいたいイルズと同規模の村である。

正門となる東側にローヌ川、裏門となる西側にはレーヌ川と呼ばれる支流、この二つの河川に挟まれる中島のような地形となっている。

「ローヌ川のすぐ傍に建つ冒険者ギルドを砦として、アルザス村の正門で十字軍を足止めする」

「どうしてそこじゃないとダメなのかしら？」

村を囲う柵も門もクウアルの方がずっと立派、アルザスのギルドも特別堅固な造りというほどではないわよ」

イリーナは現地（アルザス村）を訪れたことがあるが、クロノは

行った事が無い。

だが設備はイルズ村とどっこいといったイメージを抱いているクロノの認識は正しかったことを、イリーナの説明で証明された。

「大事なものは設備よりも地形、俺達の前にそこそこ大きい川があるってことだ。

一応聞いておくけど、この中に軍隊と戦った経験のある者はいるか？」

密かに元傭兵の肩書きを持つフィオナ以外に手を挙げる者は誰もいなかった。

彼らは兵士では無く冒険者なので、当然と言えば当然の結果であるといえる。

「ランク4の冒険者なら、ゴブリンとか徒党を組むタイプのモンスターと戦ったことは何度もあるかと思う。

だが、十字軍は野生のモンスターが集まるレベルを遥かに超えた人数、しかも訓練されて多人数での連携攻撃が可能だ」

昨晚、フィオナは私見ながらクロノにシンクレア共和国の軍とダイダロス軍の違いを簡単に説明していた。

人間は軍隊のような組織での戦闘に関しては、命令系統、作戦、陣形、など長い歴史の中で培った様々な知識がある。

だがその一方で魔族の軍隊は、強力な個体能力に任せて、ボスの下ただ集団で攻撃をするような単純な軍事行動しかできない。

クロノが大軍を相手に平野（クウアル村）で戦うか、河川を挟んで（アルザス村）で戦うか、いくら冒険者といえどもその違いをすぐ理解してくれなかったあたりで、やはり組織での戦闘は不得手なのだと実感した。

「個人の力が強くなってくると、数だけで力の弱いモンスターはあまり脅威では無くなってくる、だが、人間の軍隊相手ではそうもいかない。

いくら強くても、百人も千人も兵に囲まれて攻撃され続ければ、ゴブリンの群れに捌り殺しにされるランク1冒険者と同じ末路を辿

る。

要するに、50人程度しかいない俺達じゃあ、クウアル村のように開けた場所で戦ったら、敵の大群に包囲されて殲滅されるだけだ」
もつとも、クウアルにはそこそこ頑丈な壁と門がある為、即座に敗北とはいかないが、それでも結果は変わらないだろうことをクロノは伝える。

「人間は他の種族と比べて特別に秀でた能力を持たない、だから川があるだけでその行動を大きく制限することができる」

水辺での行動が得意なワニ型のリザードマンや人魚など、川が全マーメイドく足枷にならない種族は多々あるが、人間に限っていえばその心配は無い。

「渡河中の無防備なところを叩こうというのが基本的な作戦だ」

「ふうん、まあ敵を有利な場所へ誘き出すってのはよくある話だな。

それに、敵が真っ直ぐ街道を進んでくるってだけなら、モンスターを誘導するのと違って色々と気を回す必用も無え」

「いくら寄せ集めの冒険者と言っても、大人しく待ち伏せくらいはできるわよね」

「そういう事だ。」

それじゃあこれからもつと詳しい作戦内容を話す、この場でどれが実現可能かどうか、やるなら誰が担当するかを決める。

残念ながらゆっくり議論をしている暇は無いから、さっさと決めてすぐそれぞれの仕事にとりかかろう」

第87話 防衛計画（後書き）

なんと1万ポイント突破です！ 読者のみなさん本当にありがとうございます。
うございます。これからもどうぞ『黒の魔王』をご愛読ください。

第88話 アルザス村

ダイダロス領内の西部、西北街道沿いにある村は東のイルズ村から順番に数えると、クウアル村、ヘジト村、ワト村、そして最西端のアルザス村となっている。

クロノは選抜した20名ほどの冒険者を連れて、防衛線となるアルザス村を目指した。

その途上にあるヘジト村、ワト村の冒険者を加え、目的地であるアルザス村の冒険者達も加えると、最終的に冒険者同盟の人数は103名もの人数に上った。

すでにクウアル村より各村へは非常事態を告げる使者が出されていたので、リリィがナハド村長達をわざわざ説得した時のような手間はかからなかった。

また冒険者同盟のリーダーであるクロノに対しては、この辺では名の知れたパーティである『ヴァルカン・パワード』を始めとしたランク4冒険者達がみな協力している事実によって、特に反発などには無く大人しく指揮下に入ったのだった。

むしろ問題だったのは冒険者達では無く、

「なぜ貴様がアルザスに居る！？ 冒険者の役目は殿だろう！！」

クロノが冒険者のリーダーとなったように、各村合同の自警団のリーダーとなったナキムであった。

クロノがアルザス村の冒険者ギルドへ足を踏み入れた瞬間に、ナキムの声がロビーに響いた。

「さては貴様、怖気づいて自分だけ逃げ——」

そのまま口を挟む余地がないほどクロノを罵倒する台詞が続いたが、

『うっさい黙れ、10秒だけ待ってやるから今すぐこの場から失せろ』

リリイが精神感応テレパシーの固有魔法でその言葉をナキムの脳に叩き込んだ。
だ。

「は、はい、それでは御機嫌ようリリイさぁん！」

ナキムはどこか幸せな表情を浮かべながらギルドを出て行った。

「なんかあの人、俺を目の仇にしていらないか？」

「うふふ、そうかもね」

「……なにか、言った、のかリリイ？」

突然態度を変えて退出したのは、リリイがテレパシーで何かしたのだろうと察してはいたが、

「うん、構っている暇なんてないし、丁重にお引取りを願ったの」

「そうか、ありがとな」

どんな台詞を彼に聞かせたのかまでは知らなかった。

「けど、自警団ともそれなりに連携とれてないと色々拙いだろうしな、どっかで話つけておかないと」

冒険者の役割とは殿、つまり一番後ろで敵と戦い足止めすることである。

対して、自警団は避難する村人達の道中を警護、また治安維持がその仕事だ。

基本的に両者が一緒になることはないのだが、村人全員がアルザスを後にするまで、下手に仲違いして余計なトラブルを招くのは当然避けるべきである。

「まあいいや、今はこのギルドマスターに話を通して、ギルドの要塞化に協力してもらわないとな」

クロノはアルザスに來た目的を果たす為、ギルドマスターが待っているであろう会議室へと歩みを進めた。

村人達の避難は、今のところは順調である。

なぜなら、イルズーアルザスまでの区間は街道がそれなりに整備

されているので大人数でも進みやすく、また各村の間隔も大人の足ならちようど1日歩けば辿り着く程度の距離しかないからだ。

しかしこれから行くアルザス村の先、ガラハド山脈を越えスパードへ至る道のりはそう簡単には行かない。

国境をまたぐアルザス・スパード間は街道の整備がされていない悪路であることに加え、人の生活圏から離れている為、モンスターの出現頻度も格段に上昇する。

また1日歩いても休憩できる村など無い為、野営をする必要がある。

野営をする場合、その準備は日が沈む前には始めなければならぬ。

安全や水場の確保、野営するのに適した地形を探すのにある程度時間がかかってしまうなど諸々の理由によって、夕方から準備を始めたのであつては到底間に合わないのだ。

これまでは村があるので夕暮れ近くまで歩を進めることができたが、これからは移動に割ける時間が大幅に制限されてくる。

こうした状況下では、人間が1日に進める距離はおおよそ20キロであると言われる。

常人を想定してもたったの20キロしか進めない、まして子供や老人、病人なども抱えて進むとなれば、その距離は大幅に落ちるだろう。

実際のところ、どれだけの時間を稼げば十字軍から逃れるに十分なのかは誰にも分からない。

クロノは一分一秒でも長く、ここで十字軍を足止めする必要性に迫られているのだ。

そして、その為の策が先日クウアルのギルドで決めた防衛計画である。

「――そういうワケで、冒険者同盟はこの村で防衛線を敷き、村人達が避難する時間を稼ぎたいと考えています」

冒険者ギルド二階にある会議室にて、クロノはアルザス村のギル

ドマスター、ビーンへ防衛計画の概要を語る。

中年のドワーフであるビーンは、鬱蒼と生い茂る顎鬚を撫でながら快く返答した。

「うむ、うむ、相分かった、協力は惜しまんよ、何でも言っとくれ」

「ありがとうございます」

「とは言っても、本当にこんなオンボロギルドを砦にするつもりかね？」

ある程度の補強はできるだろうが、元々が木造建築だ、根本的な耐久力は低い、あまり期待出来そうに無いと思うのだが」

ビーンの言う事はもつともである、だが、それを踏まえた上で、クロノは断言する。

「大丈夫です、一晩でこのギルドを石造り並みに硬くします」

「面白い、何やら策があるようだ」

「はい、ですがソレ以外にもギルド周辺に守りやすいような色々と手を加えなければなりません。」

大工や工事のできる者に要塞化の協力をして欲しいのですが」

高ランクの冒険者は何人かいるが、流石に土木建築のスキルを持つ者はいない。

工事を計画、指揮、監督する専門的な人物、いわば工兵の役割を担う者が必要なのは当然と言えた。

「ワシもドワーフだ、そういったことが得意な知り合いには事欠かん、任せてもらおう」

ビーンは二つ返事で快くクロノの申し出を受けた。

ギルドマスターを務めるだけあってか、要塞化工事によって自分の避難が遅れることに対して一切気にするような素振りを見せない。それこそがきっと大人の責務というやつなのだろうと、クロノは頭が下がる思いであった。

「よろしく願います。」

ただ、敵の本隊がここへ到着するまでの時間は最短で3日だと予想されます」

なぜなら、クロノがクウアルからここアルザス村へ到着するのに丁度3日かかったからである。

騎馬を所有する冒険者だけが先行してやって来て3日、ということとは敵もまた騎兵のみで進撃すれば同じ時間でここへ辿り着くことができるのだ。

敵が歩兵を待たず騎兵のみで乗り込んでくるとは考えにくいだが、万が一ということもある。

「それを過ぎたら、もういつ敵が雪崩込んできてもおかしくありません」

3日目までには、何としても敵の騎兵が現れても迎撃できるだけの防備を最低限整えておく必要があるのだ。

クロノの説明をビーンは理解し、また快い返事を大声で返した。

「良からう、新陽の月28日までに、このアルザス村を難攻不落の大要塞にしてやるわい！　がっはっは！」

第88話 アルザス村（後書き）

さり気無く、クロノの配下が100人越えています。随分と偉くなつたものですね。

ちなみに、規模がやや大きいクウアル村には冒険者が約50人。その他の農村には20人弱の冒険者が滞在しているという計算になります。田舎でも結構な人数がいるものですね。

第89話 迎撃準備（1）

要塞化の工事はその日の内から始まった。

ギルドには冒険者の他に、ギルドマスターのビーンが呼んだドワーフを中心とした作業員達が集い、すでに工事へとりかかっている。現場での細かい指揮監督はクロノの仕事では無いが、造るべき設備に関してはクロノ自身が要望する。

指示した要望は以下の通り。

その1・ローヌ川堤防の強化。

最初から防壁を作るだけの時間も人手も資材も何もかもが足りないの、当然目の前にあるべきモノを利用するより他は無い。

堤防とは土砂を盛り上げ河川の水を浸入させない治水構造物である、故にその造りは木の柵とは比べ物にならないほど頑丈である。

これに手を加えて堅固な防壁の代わりとするのだ。

と言っても所詮は小さな村の堤防、それほど高さがあるわけでは無い為、過度の期待は禁物といえよう。

さらに言うなら、土台は堤防だがその上に築かれる新たな柵は、基本的に元々アルザス村を囲っている木の柵を解体したものを利用する。

材料も時間も無いというのは前述の通り、少々頼りなくはあるのだが、こればかりはどうしようも無いのだった。

ちなみに、防御魔法を防壁代わりにできない理由としては、効果時間が定まっているからである。

発動したその瞬間は巨大で堅牢な防壁を造りだすことは可能だが、基本的に短時間で劣化が始まり形状を維持できなくなってしまうのだ。

ダイダロスの城壁のように、常時発動型の結界を設置するには、それ相応の技術と設備と時間が必要、今のクロノ達にそんな大掛か

りな魔法設備など建設できるはずがない。

よって、古典的ではあるが絶対確実な防衛方法として、一から柵を作るしかないのだ。

その2・ギルドの地下に抜け道を造る。

これは脱出路と補給路を兼ねる。

クロノは冒険者全員を島津の‘捨てがまり’が如く地獄へ道連れにするつもりなど毛頭無い、ちゃんと生きて帰れる手段を確保しなければならぬ以上、脱出路を作成しておくのは当然である。

もつとも、たった3日しか期間の無い突貫工事である、トンネルというよりは塹壕と呼ぶべき出来になるのは計画当初から判明している。

また、合計100名以上の冒険者が駐留するので、食料や水などの物資を補給するルート確保も必須となってくる。

クロノだけなら一週間不眠不休、飲まず食わずで行動（魔力が尽きなければ）できるが、他の者はそうはいかない。

十分な補給がなければ士気は保てない、特に今回のようにただの協力関係の場合は尚更である。

その3・ギルド内部を行動しやすいよう改装。

これは戦闘する際に、連絡や物資の補給などがしやすいよう邪魔な壁や天井をあらかじめ壊しておくことである。

この3つが今のところ指示した内容であるのだが、

「防壁の資材が足りん」

という問題が早速発生した。

ビーンはクロノが地図上に示した防壁を敷くラインを指でなぞりながら続けた。

「ウチは見ての通り小せえ村だ、木材、石材、その他色んなモンが無え。」

オマケに時間も無いときたもんだ、このままじゃ大した範囲はカバーできないのだが」

「それについては、コレを造ってもらいたいんですが」

クロノは影空間から、一本のワイヤーを取り出す。

長さは30センチほど、鈍色の輝きはその材質が鉄のような金属であるとも目で分かる。

それだけならさして珍しいモノではない、鉄のワイヤーは結束材料から動物を捕らえる罠など色々なところで利用されている、鉄製品を扱う鍛冶工房ならどこでもそれなりの在庫があるだろう。

だがクロノが取り出したものには、小さな棘が等間隔に生えている為、ただの鋼線では無いのだと理解できる。

「なんなんだソレは？ 棘のついた、鉄のワイヤー？」

「はい、『有刺鉄線』といいます。」

文字通り、ただ棘の有る鉄の線というだけです」

しかし、と前置いてクロノは手にする有刺鉄線をテーブルへ置いた。

「人間相手なら確実に足止めの効果があります。」

リザードマンやゴレムなど硬い鱗や皮膚を持つ種族には効果が無いかもしれませんがね」

クロノでなくても、現代の世界に生きる人々の大半は有刺鉄線を見たことがあるだろう。

立ち入り禁止区域や私有地の柵に巻き付けて侵入者を防ぐ効果を持つのだが、そんなコトはわざわざ説明せずとも、異世界の住人で初めて有刺鉄線を目にしてもすぐに理解できた。

そもそも鉄線という材料自体はあるのだ、開発されて普及するのも時間の問題であつたかもしれない。

「うむ、なるほど、確かにこれを張り巡らせるだけなら、隙間無く木の柵を立てるより楽に広範囲を防げるのう」

ついでに完成した柵にも巻きつけておけば、簡単に触れられないのでさらなる防御効果も期待できる。

「鉄線さえあれば、数十センチごとに短いものを巻きつけるだけで簡単に作成できます。」

明日にでも他の村から運ばせた鉄線の束が届くと思います、それ

で出来る限りの有刺鉄線を作って、バリケードに利用します」

「分かった、すぐに作らせよう」

その効果のほどを即座に頭で理解したビーンは、大きく頷く。

「しかし、厚い全身鎧を着た者が相手なら防げないのではないか？」

「十字軍の基本的な装備はチェインメイルにサーコートと、それほど重装備ではありません、大多数の歩兵、それと騎兵も防げます。」

ただ有刺鉄線も万能ではありません、これをものともせず乗り越えられるような者も当然いるでしょう。

ですが、そういう者の相手こそ俺達冒険者の仕事です」

クロノがアルザス村で要塞化の工事を指示する一方で、『ヴァルカン・パワード』のメンバーは妖精の森の中を進んでいた。
フェアリーガーデン

「暑いな……」

ぼやくヴァルカン。

だがそれは彼が軟弱だからでは無い、厚い毛皮に覆われた獣人が全身を覆うサーコートを被り初夏の日差しの下を歩けば、暑さを訴える文句の一つが出るのも当然だ。

パーティメンバー全員が獣人で構成されるため、彼らは等しくヴァルカンと同じ悩みを抱えつつ歩き続けるしか無い。

「こんなんで……本当に上手くいくのかよ」

獣人達が暑苦しい思いをして頭から被っているのは、十字軍兵士のシンボルともいえる白いサーコート、要するに今の彼らは敵に変装中というワケだ。

何ゆえそんな真似をする必要があるのか、それは焦土作戦に続き敵に損害を与える為の作戦第二弾、通称『MPK作戦』としてクロノが命令したからである。

英語のアルファベットなど存在しない異世界において、クロノ以外はみんな「エムピーケー」が一つの単語だと勘違いしているのだ

った。

「エムピーケーが何だか分かんが、成功しなかったらクロノの野郎一発ぶん殴ってやるぜ」

ちなみに、メンバーが着ているサーコートは十字軍兵士の死体から奪い取った本物であるが、ヴァルカンが着れるサイズはなかった為、ギルドにあった白いシーツを縫い合わせ、十字のエンブレムを染料で描いたオーダーメイドである。

本来のサーコートよりも厚手の生地なため、ヴァルカンは他のメンバーよりも暑い思いをしているのだった。

「みんな生まれ、目標を発見したぞ」

先行していた、目の良い獣人の射手が声を発する。

「そうかい、そんなじゃさっさと済ませてヘジト村に行くとしようぜ」
背負う大剣の柄へ手をかけるヴァルカンの視線の先には、妖精の森に広く生息するランク1のモンスター『ゴブリン』、その集落があった。

一方、ランク4の盗賊スライムのスーさんことスースは、かつてクロノがリリィを背負ってえっちらおっちら登ったガラハド山脈にある断崖絶壁にいた。

「彼もなかなか、無茶な‘クエスト’を出してくれるね」

岩壁にへばり付くスースへ強い突風が吹きつけ、その身に纏う白いサーコートが激しくなびく。

だが、手と足の先をそれぞれ本来の姿であるゼリー状のスライムに戻し、人間ではありえないグリップ力で垂直の壁に張り付き、全く危なげな様子は見られない。

彼女はそのまま手と足を離すことなく、匍匐前進をするように絶壁を登ってゆく。

「さて、目的地まであと少しだ、みんなに遅れないよう頑張らない

と、ねっ！」

目指す場所はランク4のモンスター『ガルーダ』が巣を構える洞窟。

相手が相手だけに、このクエストをこなせるのは最も隠密行動に長けた彼女しかいなかった。

偵察任務を果たす『三獵姫』のエルフ三姉妹は、西北街道沿いの森に身を潜めていた。

「うわ、まだ列が続いてる……ホントにあんな沢山いたんだ」

木陰から街道を進む長い十字軍の列を直接その目で見た三女のハナは、改めて敵対する存在の大きさを認識する。

十字架の描かれた旗を掲げ、またそれと同じデザインが記された白いサーコートを着た軍団が足並みを揃え整然と進軍して行く。

歩兵の掲げる長槍が林立し、その先を兵も騎馬も白銀の甲冑に身を固めた重装騎兵が轡を並べて堂々と歩む。

「あんな軍団、ダイダロスでしか見たこと無い」

二女のローラは、いつか見たダイダロスの記念パレードを思い起こす。

黒竜であるガーヴィナルと同じく黒色の鎧で統一された漆黒のダイダロス軍に対し、白一色の十字軍は対照的だ。

目の前の軍勢が堂々とダイダロス領内を闊歩している様を見て、この白い軍団が本当にダイダロス軍を打ち破ったのだと彼女達は思い知らされる。

「見て姉さん、上！」

ハナナの言葉にローラとイリーナが視線を上げると、上空にはいくつもの影が見えた。

ベガサスナイト

「天馬騎士！？ あんなのまでいるなんて、本当に厄介ね……」

穢れの無い純白の翼を広げ、見事に編隊を組んで悠々と空を行く

天馬騎士の部隊に、いつも穏やかで冷静なイリーナも流石に驚きを隠せない。

騎乗生物としてペガサスは馬よりも圧倒的に高価だ、それに加えて乗りこなして空を自由に飛べるようになるために必要な技術は乗馬と比べ物にならないほど高度である。

金も育成時間もかかる天馬騎士はしかし、空を飛べるというだけで、デメリットを補って余りあるほど価値の高い兵となる。

さらに天馬騎士はどんな都市国家でも保有できるほど安い代物ではない、部隊があるというだけでその国の国力の高さを示す一例になり得る。

イリーナが相手の強大さ、そして強力な天馬騎士と直接戦わねばならない事に対して危機感を覚えるのは当然といえた。

「イルズを襲ったのも、前に全滅させた斥候部隊も、敵のほんの一部に過ぎなかったようね。」

クロノの言っていた通り、敵は装備も数も揃った大軍団だわ」

「本当に、アレと戦うの？」

「今回は絶対ヤバいって」

「でも――」

イリーナは不安を口にする二人の妹へ向かって微笑みかける。

胸中に渦巻く恐怖や不安は彼女も同じ、だが、それを押し殺して普段どおりの優しげな表情を作る。

「村人達を見捨てるワケにはいかないわ。」

それに、これまで危ない橋なんて何度も渡ってきたじゃない、私達なら大丈夫、必ずこの緊急クエストを成功させましょう」

長女の言葉に、二人は力強く頷く。

そもそも敵の強大さに怯えて戦う前から逃げ出すような者ならば、ランク3という位になるまで冒険者生活が続けることなど出来ない。これまで現れる強敵を倒し、様々な困難を乗り越えてきたからこそ、今の『三獵姫』があるのだ。

「さあ、そろそろ帰りましょう。」

ペガサスが空から目を光らせているから、遠回りになるけれど森の奥を通るわ、いいわね」

「はい、姉さん」

三人のエルフは完全に気配を殺し、薄暗い森の奥へとその姿を消していった。

第89話 迎撃準備（1）（後書き）

さて、章タイトルと同じくついに本格的な迎撃準備の始まりです。そういえば、十字軍の大部隊を目撃したのはエルフ三姉妹が初めてですね。

第90話 迎撃準備(2)

冒険者達がそれぞれの役割を各地で果たしている一方、リリイとフィオナの二人もアルザス村冒険者ギルドの一室で準備を行っていた。

[illegible]

室内に響くりリイの詠唱、そして彼女を中心に展開される光の魔法陣。

リイが呪文を紡ぐ度、目の前の器に山と盛られた白い粉末が淡く明滅を繰り返す。

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

若い姿でありながら、熟練の職人を思わせる集中力を発揮するリイを、フィオナは黙って見つめている。

額に汗を浮かべて魔法を行使するリリイとは対照的に、フィオナは普段よりも輪をかけて眠そうな顔で、その手にするすり鉢と乳棒でゴリゴリとひたすら薬草をすり潰す簡単な作業に従事していた。

[.....]

一際強く魔法陣が光を発し、次の瞬間には消滅する。

魔法の効果は発揮されたようで、リリィは短い手足を投げ出して「ふうー」と息をつきながら床に転がった。

「それで完成なのですか？」

遊びつかれて昼寝しているようにしか見えないリリィへ、フィオナは声をかけた。

「んーん、まだ。」

あとはね、最後の仕上げが残ってるの」

小さな顔に汗は浮かんでいるものの、ほとんど疲労を感じさせない

い元気な声でリリィは応える。

そんな様子に「子供状態は本当に可愛らしいですね」なんてやや失礼な感想をフィオナは抱く。

「そうですか、では後ほど元の姿に戻る必要があるということですね」

「うん、リリィ頑張るよ!」

にこやかな笑顔、「これを見られるのも今だけですネ、元の性格はたいそう腹黒いようですし」と、本当に失礼な感想をさらに抱いた。

「私の方はもうすぐ終わります、リキセイ草の束も今ある分で最後のようですし。」

これ以上はお手伝いできることはありませんので、終わり次第、私は‘普通’のポーション作成に取り掛かりますね」

現在、二人がやっているのは‘普通’ではなく‘特別’なモノを作り上げる作業であった。

それは『妖精の霊薬』、30年間リリィが販売してきた信頼と実績の万能薬である。

これまで主に病気の治療に用いられてきたが、リリィの固有魔法エクストラの粹を集めて作り上げられただけあって、出血を伴う外傷にも抜群の効果を発揮する。

これから十字軍を相手に戦うのだ、治癒のための薬品はいくつあっても足りない。

今はクロノが予想した3日を目処に、村中から素材をかき集めてポーションなど回復薬の量産体制に入っている。

中でも『妖精の霊薬』は店売りのポーションを遥かに凌ぐ回復効果を誇る、リリィの元には最優先で必要な素材が集められ、その作成にあたっているのであった。

「私も治癒魔法が得意だったなら……」

フィオナの呟きはリリィには聞こえなかったが、その治癒の力で人々から頼られる彼女へ、僅かばかり羨望の眼差しを送っているの

は否定しようのない事実であった。

もし自分が暴発する攻撃魔法ではなく治癒魔法の使い手だったならば、誰に疎まれること無く人の役に立てたかもしれない、そんな考えを、フィオナは無駄な事だと思いを打ち切る。

「今の私はエレメントマスターの一員、クロノさんとリリィさんは私を認めてくれている、それだけで十分」

未だ不安は残るものの、これまで組んだ誰よりもクロノとリリィはフィオナを快く受け入れてくれたのだから。

「それに、ポーションの作り方をちゃんと習得しているだけ良しとしましょう」

フィオナは思考を切り替え、脳内に様々な薬草、薬品、治癒魔法の知識を思い浮かべる。

実はこの異世界で治癒魔法といえは2種類あった。

一時的な回復効果の『回復^{ヒール}』と、自然な治癒力を促進して傷を完治させる効果の『治癒^{キュアー}』、この2つである。

傷を癒す効果の魔法の総称が『治癒魔法』なので、『回復^{ヒール}』タイプも治癒魔法と呼ばれるのは正しい。

異世界の住人にとって常識だが、RPGの‘回復魔法’のイメージが根強く頭に残るクロノは、この違いをイルズ村で生活をして一月ほど経ってから漸く気がついたのだった。

例えば、仲間がゴブリンにナイフで斬りつけられた場合、治癒魔法を行使する術者はまず間違いなく『回復^{ヒール}』タイプを選択する。

ナイフで手足を斬りつけられた程度なら、下級の『回復^{ヒール}』で即座に傷を塞ぐことができるからだ。

しかし『治癒^{キュアー}』タイプでは、すぐに傷は塞がらない。

僅か1秒反応が遅れただけで生死を分かつ戦闘において、一時的であろうと即座に回復効果を発揮する魔法が重宝されるのは当然のことである。

しかし、その効果はあくまで一時的、魔法に籠められた魔力の減少に依じて、塞がっていた傷は再び開いてゆくのだ。

戦闘が一回だけなら、適切な手当てを施して安静にしていれば傷は自然と治るのだが、冒険者や兵士はそういうワケにはいかない。

そこで、負傷した傷を通常よりもずっと早く完治させるための『^{キュアー}治癒』が求められるのだ。

この異世界ではゲームのように魔法一発で傷を完治させることはできないが、外傷を塞ぐという点においては現代医療を遥かに超える効果を発揮するのである。

そして、それはポーションを始めとする治癒魔法の効果を秘めた薬品にも同じ事が言える。

当然、ポーションにも『回復^{ヒール}』タイプと『治癒^{キュアー}』タイプの2つがある。

治癒魔法の使えない冒険者は、2種類のポーションを使い分けてクエストに挑むのだ。

ちなみに『回復^{ヒール}』と『治癒^{キュアー}』両方の効果を持つ万能な治癒魔法や薬品も存在する。

その一つが『妖精の霊薬』なのである。

リリイはこれまで村人でも買えるような安価で販売してきたが、しかるべきルートに流せば1ゴールド金貨一枚では足りないほどの高値がつく代物だ。

それほどの価値が霊薬にはあるのだ、そしてそれを幼女リリイが正しく認識しているのかどうかは果たして分からないが。

「よし、次！」

リリイが羽を瞬かせて床から飛び起きると、そのままジャンプして大きなテーブルの上に降り立った。

そこにはフィオナがすり潰した薬草を始めとした、多種多様な素材がそれぞれ器や瓶に入って並べられている。

ここから、リリイだけが知る秘密のレシピに基づいて調合する。

一般的に流通するタイプのポーションであれば、かつて魔法の学校に通っていたフィオナは当然のように生成方法を知っているのだが、固有魔法^{エクストラ}によって作り出されるリリイオリジナルの『妖精の霊

薬』に関しては、材料の用意と下ごしらえ以外に出来る事など彼女には無い。

リリイは調合に必要な集中力に、治癒魔法の効果を籠める為の膨大な魔力の消費と、多大な負担をかけることになるが、彼女しか作れない以上は仕方のないことである。

その上、普段なら丸一ヶ月かけて作り上げる『妖精の霊薬』を、十字軍が迫る猶予である3日で仕上げなければならないのだ。

そもそも元の姿に戻らなければ、つまり満月の夜まで待たねば霊薬は完成しない。

リリイ曰く「最後の仕上げ」には子供状態では行使できない高度な魔法を必要とするからである。

本来なら満月の夜を含まない3日という短時間で『妖精の霊薬』を生成するのは不可能だった。

しかし『紅水晶球』クイーン・ベリルをリリイが手にする事で、この無茶な短期生産を可能にしていた。

「んゝむむむ……」

両手に器と瓶を持ち、眉をしかめて真剣な目つきで調合に挑むリリイ。

（秤も使わずそのまま調合してる……あんなので本当にできるのでしょうか？ いえ、できるんでしょうねあの子は）

正確な量も測らず、気まぐれで混ぜ合わせているようなリリイの姿は、ままごとに興じる幼子にしか見えないのであった。

陽が傾き始め、空が赤に染まる夕暮れ時になっても、アルザス村の正門付近で要塞化工事に従事する作業員は撤収する様子が無かった。

安全に工事ができるのはたったの3日、高価な油を消費して光を灯しながらの夜間工事を選択するのは当然ともいえた。

そして勿論、冒険者同盟のリーダーであるクロノも自分の仕事を続けていた、というより、これから夜を徹して行かねばならない仕事^{エタニティ}が控えているのだった。

「んー、ま、こんなモンやろ」

「お疲れ様、あとは俺の仕事だな」

ギルドの裏手にいるのはクロノとモズルン、黒魔法使いと闇魔術士の暗黒コンビである。

この二人は似たような性質の魔法を使う所為か、何かする時はお互い協力することが多い。

特に、日夜新しい黒魔法の開発に余念が無いクロノは、モズルンから闇属性の魔法に関して色々と教えを受けたようで、準備の合間を縫っては術式の改良を行っている。

「ほんなら、これでワシの仕事はお終い、っと」

壁に向かって佇むモズルンは、その身に纏う漆黒のローブの隙間から、影そのものが実体化したような黒々とした不気味な触手を何本も生やしていた。

ギルドの壁へウネウネと伸びており、白塗りの壁面をキャンパスに黒い触手が墨のような色合いで魔法陣を描いている。

その魔法陣もモズルンの台詞通りすでに完成したようで、触手達は役目を終えて、一本また一本と黒い霧のように中空に消えていった。

「いやあー疲れた、半日でギルドの壁覆うんはホンマに苦勞したでえ」

長方形の形状をしたギルド、地面に接する底面を除いた全ての面に緻密な闇の魔法陣をモズルンは丸々半日かけて一人で描ききったのだ。

その魔法陣の効果自体は単純そのもの、闇の属性を強化する、その一つだけだ。

しかしながら、魔力が減少することにより魔法の効果が劣化・消滅するのを防ぐ『^{エタニティ}永続』が組み込まれており、術の完成度は非常に

高い。

「しかし、ホンマにできるんかいな——」

そんなランク4の魔術士のスキルを見せ付けた彼であったが、
「ギルドを丸ごと全部、強化するなんて」

クロノが言い出したギルドの強化案は流石に半信半疑であった。

施設を強化する魔法は当然ある、だがそれは大工が家を建てるのと同じような手間をかけて、複数の魔術士が行う大規模な‘改装工事’である。

例えば、ダイダロスのように城壁そのものに結界能力を持たせるといったものが代表的な魔法による施設強化である。

魔術士の常識に則れば、4階建ての建造物であるアルザス村ギルド全体に何等かの防御効果を施すには、ランク3相当の術者が5名、一週間の時間をかけて行うのが妥当である。

しかしクロノは一人、しかもたったの一晩で建物全てを強化してみせると言ったのだ。

真っ当な魔術士であるモズルンが、その言葉を信じきれないのはムリもない、精々3日かけて半分でも強化できれば良いほうだろうと彼は予想していた。

「大丈夫だ、壁だけ強化するならなんとかなる、というか、なんとかする」

だが大人なモズルンは自身の疑惑をあえて口に出したりはせず、力強いリーダーの言葉をとりあえずは信用して様子を見ようと判断していた。

「期待しとるわ、そんじゃ頑張つてなクロノの旦那」

モズルンは白骨の掌をひらひら振りながらその場を後にした。

一人残ったクロノは、先ほど完成したばかりの黒い魔法陣へ、両手を押し当てた。

「——凄いな」

魔法陣に触れた掌から、黒色魔力が活性化するのを即座に感じられた。

「これなら、明日の日の出までには終わりそうだ」

成功を確信するクロノは、目をつぶって全神経を魔法の発動に集中する。

「行くぞ——『黒化』」

剣などの武器を己の魔力で包み込み強化すると同時に、手を触れず自由自在に操れるようにするのが『黒化』の魔法である。

クロノが施設を脱出する際にはすでに習得しており、黒化した剣が毎回サリエルに破壊されたり、ローブの入っていた宝箱を開けたりするのに役立ったりと、色々思い出のある魔法でもあった。

そして恐らくこのギルド全ての『黒化』も、クロノの新しい思い出の一つとなるだろう。

クロノの黒化を受けたモノに共通する効果は、何よりもまずその物質が強化されることである。

要するに、クロノは黒化して剣の強度を上げると同じように、建物をそのまま黒化させて木造建築のギルドを強化しようという、単純な発想だ。

しかしながら、黒化は対象物を完全に黒色魔力で包み込むことで完成される、包むモノが大きくなればその分だけ必要量が増えるのは当然である。

まして今回は剣や宝箱を遥かに越える巨大な表面積を持つ4階建ての建築物、その消費量はこれまで行ったどんな魔法より、あの呪蛇を進化させた時よりも、魔力を消費することは予想できる。

（だが、一晩の時間をかけて少しずつ黒化させていけば、絶対にイケる）

黒化の消費量と自分の自然魔力回復量を天秤にかければ、確かに可能なのは事実である、ただし理論的にはだ。

時間の経過で黒色魔力が回復したとしても、黒化の魔法を行使し続けるための集中力と根気は削られる一方。

（つまり、俺の根性次第ってことだ！）

そうして、クロノの長い夜が始まった。

第91話 イルズ占領

キルヴァン隊の壊滅に斥候部隊の全滅とイレギュラーな事態の連続であったが、新陽の月25日、十字軍はついにイルズ村を占領。入念な偵察活動の末に本隊が進軍を始めたので、この日まで遅れたのだった。

「完全に逃げられたな」

当然である、すでにイルズの村人達とはとくに避難済み、現在もスパード目指して街道を行進中だと、占領部隊の指揮官であるノールズ司祭長はその証拠こそ掴んでいないが、想像するに難くない。ノールズはさらに予想、しかも悪い方面で的中する。

「村人だけでなく、糧食、財貨、およそ利用価値のあるものはほとんど全て失われています」

副官であるシスター・シルビアの報告でそれが裏付けられた。

そもそも、焼失した冒険者ギルドの跡地を発見した段階で、魔族達が焦土作戦を行っただろう事は明らかである。

「ちっ、魔族共め、小賢しいマネを」

共和国で幾度も戦争・紛争に参加した経験を持つノールズは、撤退した敵が利用価値のある施設を破壊する焦土作戦の結果、どういよう影響が発生するのか身を持って知っている。

それを踏まえても尚、現在の状況は悪態一つく程度のものであると認識した。

「だが大した問題ではあるまい、これまで村から徴収した兵糧はいくらでもある、急いで運ばせろ」

焦土作戦が本領を発揮するのは、敵が現地調達を当て込んで補給が満足に出来ない状況にこそある。

その点で言えば、イルズの前に占領した村には未だ十分な食料が残っており、補給のあてがあるのでノールズは焦ることも無かった。

「では、そのように手配しましょう」

てつきり皮肉の一つでも返されるかと思ったノールズだったが、素直な肯定の言葉に一抹の違和感を覚えた。

「珍しく気が利くじゃあないかシスター・シルビア」

「戦いは貴方の役目ですから、村の統治が必要ない以上、私の仕事は補給を整えるくらいしかありませんから」

いつも通りの冷め態度だが、その言葉の内容自体は謙虚なものと受け取ることすら出来る。

「ほう、そうかね」

「ええ、そうです、余計な口出しはしませんので、どうぞ貴方のご自由に指揮を振るってください」

「そうさせてもらおう」

意外なところで身の程を弁えている。

この女はこれまで一々自分のやることに口出しし、ケチをつけることしきりであった。

だが実際に戦闘が発生することが確実なこの状況になってからは、全く反対意見などその口から出ることは無くなった。

所詮は小賢しい知恵と女の武器で枢機卿に取り入っただけ、いざ戦いとなれば自分の命令に従う以外何も出来ない小娘に過ぎん。

そうノールズはシルビアの態度を解釈した。

それが正しいかどうかは別としても、ノールズにとって現状は喜ばしいことこの上無い、魔族相手に敗北がありえないことは当然だが、副官に余計な事ばかり言われ水を差されれば勝利の美酒もその分だけ薄まってしまふのだから。

「ふっ、明日は久しぶりに暴れさせてもらおう」

「明日？」

「ん、なんだ分かんのか？ 魔族共はこの先のクワアルで待ち構えているだろうからな、戦いは明日になる」

こんなことも分らないのか、と言わんばかりに溜息をついてから、ノールズはさらに言葉を続けた。

「クウアルはこの辺で唯一石の防壁を持つ村だ、村人を逃がす時間稼ぎに戦いを挑むならば最も硬い守りを誇るこの村を選ぶのは当然だろう」

「ですが、先ほど戻った斥候の報告によればクウアルに敵影無し、とあります」

「……なんだと？」

聞こえなかったはずはないが、思わずもう一度問い返してしまった。

「クウアルには誰もいません」

とんだ恥をかいだ、と思うがその直後には別な思考が回る。

「いや待て、それが本当なら兵も冒険者も村人と一緒に逃げ出したということか——ふははっ、とんだ腰抜け共だ！」

キルヴァン隊と斥候部隊が撃破されたため、ノールズはてっきり魔族が自分達に真っ向から抵抗するものだと思っていた。

だが彼らは7人の斥候部隊を攻撃したのを最後に、逃げの一手を打ったとすれば、クウアルで待ち伏せしなかった理由となる。

「まさか、あの程度の攻撃とこの中途半端な焦土作戦だけで、逃げるに十分な時間を稼いだと判断するとは、いや、単純に仲間割れでも起こったか？」

まあいい、今重要なのは魔族が全員逃げ出したということだ。

最早警戒は無用、一刻も早く兵を進めるぞ、愚かな魔族は一匹たりとて逃がしてはならんのだからな！」

追撃に向けて熱くなるノールズだったが、シルビアが変わらぬロ―テンションで報告を続けた。

「話は変わりますが、先ほどノールズ司祭長宛に一通の封書が届けられました。

送り主はグレゴリウス司教です」

「まさか帰還命令ではあるまいな」

キルヴァン隊は壊滅したものの、即時帰還が命令されるほどの損害ではない、それどころかノールズの上司にあたるグレゴリウス司

教はダイダロスにいるはずで、報告そのものがいつてない。

これまで順調に村の占領を続けてきたノールズには、殊更ケチをつけられるところなど全く無いのは自他共に認める事実である。

様々な予想を頭に浮かべながらノールズは十字の封蝋を剥がし、文面へ目を通した。

「……援軍だと」

思わずノールズが呟いた。

「援軍要請ですか？」

「逆だ、援軍を送ったとある、読んでみろ」

シルビアは書面を受け取り、一通り読み終えたとノールズへ告げた。

「ノールズ司祭長の行く先に不吉な黒い影が立ちはだかっているのを見た、とありますが、何かの暗号ですか？」

「知らん、恐らくそのままの意味だろう。」

グレゴリウス司教は自ら『予言者』を名乗るなんとも胡散臭い男だ、知らんのか？」

現在の直属の上司にあたる司教を胡散臭いと切って捨てるノールズ、しかしながらこの異世界においても絶対確実な未来予知の能力は存在していない。

にも関わらず『予言者』を名乗れば、その能力には誰もが疑問をもつのが当然だろう。

「その『予言』というのは当たるのですか？」

「路地裏の占い師と同じだ、誰にでも当てはまることをそれらしく言っているに過ぎん」

しかし、ただ抽象的で適当なことを言っているだけの男ではないが故に、グレゴリウスは司教という高位にまで登り詰めた、そのことをノールズはよくよく知っている。

「『予言』とは言うが、恐らくは高度な『予測』だ。」

要するに司教は凄まじく頭のキレる男で、それを『予言』と称して婉曲的に伝えているに過ぎん、どういう意図でそんなことをして

いるのかは知らんがな」

「『不吉な黒い影』と書いてありますが、司教は何らかの脅威を察知してこちらへ援軍を送った、と解釈できますね」

「うむ、しかし……」

ノールズは考える。

この文面にはただ占領部隊の行く先に『不吉な黒い影』が立ちはだかるのを予見し、万一に備えて援軍を送ったとだけ書いてあり、何処の部隊を、どれだけの数送ったのかという援軍の詳細は一切不明。

千人単位で受け入れ自体は可能、だがそれよりも司教がこのタイミングで援軍を送る意味が理解できない。

もしも本当にノールズの兵だけで対処できないような脅威、黒い影という表現になぞらえるなら、大量のアンデッド、あるいは黒竜が出現するということであれば、司教の『予言』は当たったと言えるだろう。

だが曖昧なものの言いである『予言』というものは、後になってからどうしても解釈できる、『影』の正体がモンスターでは無く、突発的な事故であったり、部隊の反乱などという可能性も考えうる。

そこまで思い至った時、ノールズはどうにもこの援軍が純粹に自分を助けるただけに派遣されたとは思えなかった。

最悪この援軍、またはそれに加えて現在の配下の一部が加わり、ダイダロス西部の占領を終えた段階で自分を暗殺し、手柄を司教が横取りしていく可能性すらある。

そうなった場合、司教はきつと「ノールズ司祭長は最後まで卑劣な魔族と戦いぬき、その尊い命を散らした」云々と涙ながらに語ることだろう、しかし死者に物質的な褒賞を与えることは出来ない、結果的に上司である司教だけが得をするのだ。

「……現段階で援軍の必要性は無い、もしも部隊がやってきたら合流させず、イルズより先の村には進ませるな」

「はい、ではそのように」

そう、ノールズは与えられたダイダロス西部占領の任務を問題なく遂行できるのだ、ここで暗殺は無くとも下手に援軍を受け入れた所為でその手柄が半減しては困る。

グレゴリウス司教は十字軍の組織においては直属の上司ではあるが、信頼しているわけではない。

この『予言』に基づいた意味不明な援軍も、今現在十字軍内部に渦巻く権謀術数の一つなのだとノールズは解釈したのだった。

「ふん、全く余計なことをしてくれる」

ノールズは隠す事無く上司への悪態をついた。

ノールズ率いる本隊に同行し、キプロス傭兵団も25日の段階でイルズ村へ駐留することとなっていた。

アイは十字軍兵士に「うろちよろするな!」と怒られない程度に人目を避けて、焼け跡があらこちらに残るイルズ村を見て回った。一通り回り終え、適当な場所へ腰を下ろすとアイはポーチから『携帯食料』と呼ばれる成分不明の飯を食べ始める。

「まっず、もうちょっと味つけてよねー」

チョコレートバーのような色と形の携帯食料ではあるが、アイが愚痴るように味はほとんど無く、おまけに硬いパンのように食感も悪い。

腹が減ってもしばらくは口にするかどうか躊躇する代物だ。

「ツミキ、食べる?」

足元に座り込んでいる黒猫は、そっぽを向いて走り去って行った。「そんな拒否しなくたっていいじゃん……」

ツミキが姿を消した方向をジト目で睨むアイに、後ろから声がかかった。

「よお、こんなとこにいたのかよアイ」

「うっわ、ただでさえ不味い飯がさらに不味くなった」

アイの不機嫌さは隠す事無く台詞に乗っている。

「ああソレ、クッソ不味いよね、よく食ってられるねー」

「アンタがみんなに配ったんでしょーが」

「そうだった？ 憶えてねーわ」

ゲラゲラと笑うキプロス傭兵団長の姿から、アイはすぐに目線を逸らす。

キプロスの両脇には護衛だと思われる二人の女傭兵が付き従っていた。

相変わらず鎧をつけていないキプロスに対して、二人の女性はフルプレートというほどでは無いが厚手の鎧をしっかりと身に纏っている。

両者とも深く被ったヘルムによって表情はよく見えない。

アイは二人の存在を全く気にせず声を放つ。

「こんな不味いのもう二度と配しないでよね、食料が全部コレになったら暴動起きる、っーかアタシがアンタを殺す、心臓にゆっくりナイフ刺して殺す」

「それなんだけさあ、悪知恵の働くクソヤローが村の飯を根こそぎ焼き払っちゃった所為でロクな食いもんがねーんだわ」

「え、嘘！」

「マジだって、そこら中焼けてんのアイも見たっしょ？」

いくら適当なことばかり言ってるキプロスだからといって、このセリフだけはアイに否定できなかった。

アイは傭兵団がどの程度の食料を持っているかも荷物の大きさからそれなりに把握している、故に行く先々である程度の食料を調達する必要があることも知っている。

そして食料の現地調達が出来なければ、1週間以内に今ある食料が底を付くのは確実であった。

「じゃあ十字軍に食料分けてもらいなよ、多少の余裕があるでしょ向こうは」

「イヤ無理、あのムサイオッサンに頭下げて恵んでもらうとかマジ

で無理だから俺のプライド的に」

この男は自分の格好のためだけに本気で傭兵団全員に餓えを強いることができる、しかも一切悪気無く当然のように、そうアイは思った、そして事実でもあった。

「いやでも大丈夫、俺の飯はちゃんとあるから、美味しいヤツ」

「みんなの分は？」

「携帯食料」

「死ね、アンタはホントに死んだほうが良い」

半分マジで言い放ったアイのセリフに反応したのか、二人の護衛が腰に差すブロードソードへ手をかけた。

座り込んだ体勢のアイからヘルムの下に隠れている二人の無表情が見える。

ぼんやりとこちらへ視線を向けるその黒い瞳は、戦士というより奴隷の目つきだとアイは思った。

「いーいじゃん携帯食料、コレと水さえありゃ生きていけんだからさあ、みんな仲良く食べよーよ、俺は食べないけどお」

二人の様子に気づいているのかいないのか、キプロスは変わらずふざけた口調で話を続けた所為で、剣が抜かれることはなかった。

「てかさー、アイが俺と一緒に食事してくれたらソレで解決だろ、な、だから今夜オレんどこに来いよ」

「はあ？」

「酒もハッパも色々あるし、楽しーよ？」

舐めるようなキプロスの視線に心底嫌悪しながら拒絶の言葉をつき返す。

「楽しいのはアンタの頭ん中だけだ、女に餓えてんなら他をあたりな」

「いやあウチで残ってるのアイだけなんだわー、いい加減コイツらも飽きたし、十字軍のシスターに手え出すわけにはいかねーし、魔族もしばらく手にはいんねーし」

「知るかそんなこと」

もうそろそろ会話を続ける限界だと思ったアイは携帯食料の最後の一欠けらを口に放り込んでさっさと立ち上がった。

「とりあえずアンタが団長なんだから食料どうにかしてよね」

「うえーい」

気のない返事をするキプロスを一瞥せずにアイはその場から去った。

このまま野営地へ戻るのか、再び村を歩き回るのか、彼女自身も決めてはいない、とりあえずこの気持ち悪い男の前から離れられればそれで良かったのだ。

「あーあ、やっぱツレねえなーアイちゃんはさー」

つまらなそうに呟いたキプロスは身を翻すと同時に腕を振り上げると、隣に立つ護衛の女、その顔面へ真正面に拳を叩き込んだ。

硬い拳が肉と骨を打つ鈍い音が響いた。

悲鳴を漏らす事無く、鼻血を噴きつつ仰向けに倒れこむその様子を、キプロスも殴られなかった方の女も特別気にかけない。

殴るのは当たり前、殴られるのは当たり前、そこに正当な理由などないし、理由を求めることはそもそも許されない。

「あークソクソクソつ、なんで魔族共がいねーんだよ、逃げてんじやねーぞ面倒くせえ」

倒れた女へ何度もブーツの厚い靴底が叩きつけられる。

地に這う羽虫を踏みにじるように、容赦も遠慮も無い。

「マジでどーすっかな、しばらく飯も女も手に入りそうにねえーいっそ先に進んじまうかーダメだな、あーダメだ、まだマズいんだよなそーいのは、クッソ、結局我慢するしかねーのかよ」

ぶつぶつと考え事を終えて顔を上げる。

「まあいいか、どうせ半分以上は数合わせだ、適当に放り出ときや魔族に追いつくまで飯は持つだろ。」

おい行くぞ、いつまで寝てんだ甘えてんじやねーぞ」

第91話 イルズ占領（後書き）

クロノもすでに放棄したイルズ村ですが、ついに占領となりました。思えば十字軍もイルズ村を占領するのに随分と時間をかけたものです。

第92話 錬金術師

新陽の月26日、朝。

「……なんだコレ？」

現在のアルザス村は、スパードへ向けて避難する人々でごった返していた。

村の中央広場には大きな天幕がいくつも張られ、さながらダイダロス軍の野営地のような印象を抱く。

「夏越しの祭り、ってワケじゃなさそうだし。

僕がクエスト行ってる間に、一体なにが起こったんだ……」

アルザス村に滞在するランク1冒険者の少年シモン、彼は1週間ほどガラハド山脈の麓に籠り、薬草採取のクエストを達成し今ようやく帰還したところであった。

だが、帰ってみればこの不思議と不安にかられたような人々で村がネガティブな賑わいを見せている。

きつと何か予想もできないただならぬ緊急事態が起こっているに違い無い、と考えるものの、シモンは人見知りのする性格が災いし、この状況に疑問を持ちつつも、村人を問いただす事無く真っ直ぐギルドへ向かうことしかできなかった。

「えっ！？アレなに、ギルドが黒くなってる!？」

ギルドへ辿り着いたら着いたで、また別な驚きが彼を襲った。

一週間前、彼がクエストに出発するその時は確かに白塗りだった冒険者ギルドが、帰ってみれば闇夜のような黒一色に染まっているのだ。

「塗装工事……なワケないか……」

不気味に聳える暗黒のギルドを前に、中へ入るのに若干躊躇するが、戻らなければ報酬は受け取れ無いし、入らないわけにはいかない。

怪訝な表情を浮かべながら、シモンはギルドの扉へ手をかけてゆつくりと開いた。

「うわ……」

ギルドのロビーには、武装した冒険者の姿。

冒険者ギルドなのだから当然の光景、だが異常なのはその数、一週間前に比べ、彼らの数はあまりにも多すぎた。

まるで都市部の冒険者ギルドのような賑わいだ、とシモンは思いながら、カウンターへと足を進めた。

しかし、三度目の衝撃が彼を襲う。

「カウンター閉まってる!？」

緊急クエストでも正式に発布しない限りは、ギルドのカウンターが閉まることは無い。

これは一体どういうことなのかと、事情の知らないシモンは頭の上にハテナマークしか浮かばない。

「なんで……って言うかどうしよう……」

辺りを見回せば、顔の知らない冒険者ばかり。

いや、そもそも見知った顔であるアルザス村の冒険者であっても、ソロな上にここへやって来て日も浅いシモンに言葉を交わすような者は一人としていなかった。

「うーん、村もギルドも、一体どうしちゃったんだ」

これからどうするべきか、どこの誰に言えばクエスト達成の報酬が受け取れるのか、今ここで何が起きているのか、ぐるぐると思考しながら、シモンはとりあえずロビーの隅に立ちすくんでいた。

「その君」

俯き悩むシモンの頭上から、突然声がかかった。

「え？」

視線を上げると、そこに立っているのは黒髪黒目に黒いローブ、頭の天辺から足のつま先まで黒一色の男。

種族は人間だが自分を頭2つ分近く越えるほどの長身、ローブを纏っていることから魔術士だと判断できるが、広い肩幅に引き締まっ

た筋肉とまるで戦士のような立派な体格だ。

顔は鼻が高く輪郭やそれぞれのパーツは整っているものの、恐ろしく鋭い目つきが、この男に圧倒的な威圧感を与えている。

（うわ、僕の苦手なタイプだな……）

偏見ではなく、背が低く貧弱な体格のシモンは、同年代の男達からは常に嘲笑の対象となった実体験があった。

特に恵まれた大きな体格を持つ者は、ことさら自分に対して軽蔑の眼差しを向けてきたことを彼は覚えている。

だが、そんな半ばトラウマのような思いは胸のうちに留め、あくまで無感情にシモンは男の声に応えた。

「なに、お兄さん？」

「見かけない顔だったから、今日クエストから戻ったのか？」

「そうだけど……」

男の言葉に冷たく返事をしながらも、

（折角声をかけられたんだし、ここはこのお兄さんに何があったか聞いてみようかな）

そんな事を思うシモン。

説明を求める台詞を続けようとしたのだが、その前に男が発した、「君が背負ってる武器、もしかして銃じゃないのか？」

その言葉にシモンは驚きに目を見開いた。

「……なんで知ってるの？」

ギルドの黒化に見事成功した俺は、皆から、特にモっさんから、

「流石クロノの旦那や！ 信じとった、ワシは最初から旦那のこと信じとったんやでえ！」

と、賞賛の言葉を受けた後、一階のロビーへと戻った。

一晩の徹夜程度で疲れのたまるヤワな体じゃないが、いかんせん魔法を行使し続けた為、精神的な疲労に襲われている。

これから部屋に戻って1時間ほど休憩させてもらう予定だったのだが、

「あ、あれは――」

ふと目に入ったあるモノを見て、俺の脳内に衝撃が走った。

俺の視線の先に居るのは一人のエルフ、その特徴的な細長い耳で即座に判明する。

灰色のショートヘアに、リリィのように大きく円らなエメラルドの瞳と、幼く愛らしい顔つきの少女、いや、少年だろうか？

濃紺のコートを身に纏い、下は革のズボンにブーツという軽装の冒険者ではよくある格好をしており、その服装から男女の区別がつけられない。

あれで『三猫姫』のエルフ三姉妹のようにスカートでも履いててくれれば一発で少女と断定できるのだが。

兎も角だ、俺はそんな性別不明の男の娘に一目惚れして衝撃を覚えたのではない、彼(?)が背負っている武器に目を奪われたのだ。「――もしかしくなくても銃じゃねーのか!？」

その長い重厚な鉄の筒はどう見ても銃だとは思えない。

あの男の娘が後ろを向いた時、ソレには長い銃身を備えたグリッブとトリガーが確かに見えたから、もう確定と言っても良いだろう。ショットガンのような、いや、より正確にはストックの無いライフルのような形状だ。

十字軍の兵士がボウガンを持っているのは見たが、この異世界でまさか銃にお目にかかれるとは思ってもみなかった。

一晚徹夜してハイになっちゃったようなテンションの上がり具合だ、もちろんロビーにいる冒険者達に不審がられないようつとめて顔はポーカーフェイスのままだが。

「気になる、いや、もしかすればあの銃はデカイ戦力になるかもしれない」

どちらにせよ、緊急クエストが発行し冒険者同盟が結成された以上は彼も俺達の一員となるのだ。

なら今の内に声をかけておこうじゃないか。

俺はロビーの隅でどこか寂しそうに佇む彼(?)へ向けて足を進めた。

ヤバい、ちょっと緊張してきたぞ、なんなんだこの街中でナンパするみたいな心境は、ナンパしたことねーけど。

「その君」

つとめて冷静に、声をかける。

「え?」

その子は顔を上げて、真っ直ぐ俺を上目遣いで見つめてきた。

うお、近くで見るとホントに可愛い顔してんな、これはもう彼(?)じゃなくて彼女(?)に二人称を改める必要があるんじゃないかねーの。

ほら、なんか彼女からリリィを抱きしめた時のようなふわふわした良い香りが漂ってきてるし。

つーかエルフってみんなこんな匂いすんの? 男までコレだったらちょっとアレだな。

「なに、お兄さん?」

俺の変な思考が読まれてしまったのだろうか、拒絶オーラ全開な冷たい返答が彼女から返ってきた。

そんなあからさまに氷点下な態度をされると若干ショック、まあ俺みたいな目つきの悪い黒尽くめの怪しい格好した男に声かけられたら警戒するかもな。

そういうコトにしておこう。

「見かけない顔だったから、今日クエストから戻ったのか?」

「そうだけど……」

やはり冒険者であることは間違いないようだ。

ってことは、今起こっている事情も知らないってことか、昨日戻ってきた何人かの冒険者もそうだったし、当然と言えば当然だ。

しかし、二言目にしてもう彼女から陰悪なオーラが放たれつつある。

これは拙い、まだ本題に入っていないのにこのままでは次の台詞がこの場を立ち去る内容に確定だ。

早いと銃について聞いたさなければ。

「君が背負ってる武器、もしかして銃じゃないのか？」

「……なんで知ってるの？」

質問がそんなに驚きだったのか、大きな愛らしい瞳が目一杯開かれる。

「普通は知らないものなのか？」

「銃なんて、よほどの武器マニアじゃなきゃ知らないよ。」

‘普通は’、ってお兄さんの常識はどうなってんのさ」

出会って数十秒の相手にいきなり常識疑われてしまった。

まあ異世界の住人では無い俺は、確かにここでの常識を未だ把握しきれない部分が多々ある、常識知らずと言われても仕方ない。

「俺の故郷では普通だったんだよ」

言い訳くさいが、嘘では無い。

元の世界の常識からいけば、銃なんて誰でも知ってるもんだ、特に俺みたいなヤツならその知識は尚更だ、銃オタクと呼べるほどじゃないけど。

それは兎も角、この返答から彼女の背負っている武器は銃で確定した。

というか、一応この異世界にも銃は存在しているらしいことも分かった。

しかし、こんな立派な銃があるのに全く普及していないのは何故なんだろうか、魔法の方が便利だからなのか、高価すぎるのか、まあこれから普及し始める時代なのかもしれんが。

「とにかく、俺は君の銃にもの凄く興味があるんだ、良かったら見せてくれないか？」

「僕の銃は杖^{ロッド}みた魔法機構を一切使っていない鉄の塊だよ、魔術士のお兄さんが期待するような術式なんて無いよ」

なるほど、杖^{ロッド}の延長に銃に似た形状のモノもあるってことか。

俺の『ブラックバリスタ・レプリカ』も銃の形さえしていれば、見た目通りの効果を発揮してくれるな。

それよりも、

「魔法を使ってないってことは、ソレは鉄と火薬で鉛弾を飛ばす純正の銃ってわけか。」

俺はそういう、本物の、銃が見たいんだ。」

「お兄さん……なんでそんなコトまで知ってるの」

あれ、似た台詞をついさっき聞いたばかりだが。

そして彼女の驚愕の表情も二度目だ。

「魔法の代わりに火薬を使って弾丸を飛ばすタイプの銃は僕が造ったんだ、まだ誰にも構造を教えたりしてないのに、どうして火薬を使ってるって分かったのさ！」

待てよ、今彼女は確かに、自分が造ったって言ったよな。

「待ってくれ、一つ確認しておきたいんだが、武器マニアが持つてするような銃ってのは、全て杖の変形ロッドみたいなものなのか？」

「……そうだけど」

「それで、君は一切魔法を排除して、弾丸を発射するその銃を造り上げた、もしかして、火薬も自分で調合したのか？」

「調合ってほど立派なものじゃないけど、そうだね、だから僕以外に火薬を使う銃を知ってるわけないんだ。」

いや、待てよ——ひょっとして、お兄さんの故郷じゃこのタイプの銃がすでにあるってこと……」

ぶつぶつと独り言のように呟く彼女を前に、俺は銃を見つけた時を越えたさらなる衝撃に震えた。

「天才だ」

銃の歴史は浅くない、火縄銃のようなモノが出来るまでも、火薬の発明から様々な試行錯誤の末に生み出された武器だ。

何も無いところから、たった一人でこの形状へ行き着くなんてありえない。

いや、彼女には何かしらのヒントがあったのかもしれない。

だとしても、火薬の存在していないこの世界で、自ら作り出し銃を生み出すというのはやはり、

「君は天才だ！」

そう、天才という以外にはありえない。

「お、お兄さん？」

俺は今、世紀の大発明家を目の前にしているのかもしれない。

「凄い、凄いぞ、頼むからその銃を見せてくれ！」

「うう……そこまで言うなら、いいけど……」

俺の勢いに引いてしまっているのか、困り顔の彼女だが、もう今はそれを気にしていただけるテンションじゃない。

おずおずとこちらへ差し出される銃。

「ありがとう！」

受け取ると、ずっしりとした鉄の重量が手にかかる。

モデルガンくらいなら持ったことはあるが、実銃は初めてだ、しかしこの重量感やはり本物であると思わずにはいられない。

「これ弾は入ってる？」

「まさか、今は抜いてるよ。」

トリガーを引いても何も起こらない、ただの鉄の筒でしかない「なら、下手にいじって暴発なんて事故は起きないな、安心して観察できる。」

「猟銃のような感じだな――」

外観はストックのない猟銃、だが目の前のコレと俺の頭の中にある銃の知識に照らし合わせてみるともっと良く似た形の銃がヒットした。

「コンテンダー、か」

アメリカのトンプソンが開発した狩猟用のシングルショット・ピストルだ、あれにソックリな形をしている。

ただ、この銃は彼女が使うことを前提に作られているためか、グリップはやや細く、全体としてコンパクトな形状をしていると思われる。

それと一見して猟銃だと思ったように、銃身は長い、コンテナ
ーよりは確実に長いはずだ、まあ実物は見たこと無いけどな。

「けど、構造もほとんど同じような感じだな」

マガジンもボルトも無いところを見ると、一発一発弾を装填する、
正しくシングルショット。

流石に彼女一人で開発したためか、現代の銃に比べて、弾丸を撃
つための必要最小限の機構しか備えていないようだ。

銃身を除けば、内側は滑らかでライフリングも無い、火縄銃と同
じように丸い弾丸を発射するんだろうか。

撃鉄の先に赤く輝く石が取り付けられているから、恐らくこれで
点火させるいわばフリントロック式、少なくともかなりそれに近い
方式のはずだ。

ということは、火薬と弾丸は別々に装填しているってことか？
詳しい事は聞いてみれば分かるか。

トリガーを引けば、ガキン、と撃鉄が叩く音。

ちよつと感動だ、この音ってやっぱカッコイイよね。

「リロードはどうやるんだ？ 銃身から弾を箆めるのか？」

「前はそうしてたんだけどね、今は――」

銃を返すと、彼女は慣れた手つきで構えると、ガシャン、と音を
立ててバレルが折れる。

「中折れ式！？ ヤバイ、超カッコいい！」

「だよね、これカッコいいよね！」

ちなみにコンテナダーも中折れ式だ。

というか、今俺と彼女は通じ合った気がする、この名も知らない
少女と――あ、そういえば、

「まだ、自己紹介してなかったな」

「え、うん」

俺は首から提げていたギルドカードを懷から取り出して、彼女へ
見せる。

「クロノだ、よろしくな」

「……シモン」

お互い名乗り、ギルドカードを交換した。

氏名・シモン ランク・1 クラス・錬金術師 と、彼女のギルドカードには書かれていた。

「錬金術師？」

初めてみるクラスだった。

炎やら闇やら頭についた魔術士なら分かるが、錬金術師、一体どういうクラスなんだろうか？

「お兄さん、錬金術師知らない？」

「金を作り出すってやつ？」

「そう、魔法無しでね」

「……出来るのか？」

「まさか、それが出来たら金貨なんて流通してないよ」

そうりゃあそうだろうな、やっぱり金の希少価値は元の世界でも異世界でも絶対的なものがある。

魔法を使っても金を生み出すことはできないのだろう。

「錬金術師っていうのは、魔法以外の研究者の総称ってところかな、みんながみんな金の錬成を研究してるわけじゃないからね」

「なるほど、魔法以外ね……」

ということは、元の世界と同じように、錬金術師ってのは科学者の祖先的なものかな。

だとすれば、俄然興味が湧いてくる。

ひよっとすれば銃以外にも、このシモンちゃんは何かしら現代に通じる発明品を生み出しているのかもしれない。

異世界に召喚されてから今までずっと魔法に振り回されてきた身としては、久しぶりに科学技術に触れ合いたい。

「錬金術師が研究者っていうなら、研究室とか持っているのか？」

「そんな立派なモノじゃないけど、実験する場所が必要だからね、近くの宿を借りてるよ」

「よかったら、そこも見せてくれないか？」

「ええっ!? そ、それは……」

「あ、スマン、もしかして研究室は秘密の集まりだから他人には見せられないか？」

「なら無理にとは――」

「いや、そういうんじゃない、どうせ僕以外に見ても誰も分かんないし、というか、ホントに狭くて、人を呼ぶようなトコロじゃないし……」

うーん、理由としては「俺の部屋ちょっと汚いから入るの勘弁な！」みたいなもんか。

だがしかし、今の俺には割りとマジで時間が無い。

もしかすれば彼女の研究室には火薬をはじめとした、十字軍迎撃に役立つ発明品があるかもしれないのだ、ここは是非協力を仰がなければならぬ。

ていうか、結局まだこの娘に何の事情説明もしてないよな。

「ちょっと話が変わるんだが、実は緊急クエストが発行されてこの村は危機的事態に直面しているんだ」

「あつ、そうだよ、その辺を詳しく聞こうと思ってたんだよ！

今の村は一体どうなっちゃってるのさ、ギルドも冒険者がやたら一杯いるし、カウンター閉まってるし、僕の報酬は――」

「分かった分かった、ちゃんと説明してやるから、とりあえずシモンの研究室まで歩きながら事情を話そう」

「え、僕のトコに来るの決定事項なの!?」

「悪いが最終的にそうなるな」

「最終的もなにも最初からそうなってるじゃない!」

今思ったんだけど、この娘やたらツツコミが鋭いな、物凄く弄りたくなってくるじゃないか。

リリイは子供だし、フィオナさんは天然だしで、これまで俺がふざける余地が無かった、そんな折にシモンちゃんのこの反応だ。

なんだか高校の文芸部で活動し始めて2年目に入ったその時期、交流のあるイラストレーション部に俺のライトノベルに挿絵をいれ

てくれる後輩の男の子がいたのだが、彼とのやりとりを彷彿とさせる。

あいつも小柄で男か女かわかんないような童顔だったからな、完全にこのシモンちゃんと姿が被って仕方が無い。

やべ、嬉しさと郷愁の思いにちよつと泣けてきた。

「なに涙ぐんでるのさお兄さん」

「いや、ちよつと故郷の事を思い出して」

「今のやり取りのどこら辺に郷愁の要素があったのさ？」

そうだ、郷愁の思いに浸っている場合じゃない、このままボケ続けてもストレス発散にはなるが、如何せん話が何も進まない。

早いトコ事情説明して協力を取り付けて、銃の実戦投入を考えねばならんのだ。

「兎も角、今は君の力が必要なんだよ！」

「……それはギャグで言ってるの？」

「いや、これはマジで言ってるんだけど」

ふざけすぎた所為か、俺の台詞の信用力がガタ落ちな気がする。

「悪い、全部説明したら納得してくれると思うから」

「ふーん、まあいいけど、じゃあ行こうか？」

「ああ」

と、その前に外出することをみんなに伝えておかなきゃいけないな。

いきなりリーダーが居なくなったら逃げ出したと思われかねん。

俺は大きく手を叩いて、冒険者達に呼びかけた。

「おい、ちよつとみんな聞いてくれ」

ロビーに集っている冒険者達は、俺の声に即座に反応し一斉に視線を向ける。

「ちょ、お兄さんなにやって——」

「今から少し出かけてくる。」

昼前には戻る、その後は予定通り演習を行うからそのつもりでいてくれ」

「了解！」

冒険者達の声を背に、俺とシモンちゃんは並んでギルドから出て行く。

「……お兄さんって、何者なの？」

「ギルドカード見ただろ、ランク1冒険者の黒魔法使いだ」

冒険者同盟のリーダーもやってるけどな、その説明は、まあ後でいいだろう。

第92話 錬金術師（後書き）

ここでもさかの新キャラ登場です。シモンって名前聞いたら一発で男って分かるだろ、というツツコミは勘弁してください。

ところで、今回で初めて第三者視点でクロノの容姿を細かく描写されています。どうやら自分で思ってる以上に体型含めてイケメンなようです。

第93話 突撃！ シモンの研究室（1）

「そっか……そんな大変なことになってたなんて」

僕の手には、お兄さんからもらった緊急クエストの手配書がある。凡その事情はそれで理解できた。

もし僕がもう一週間ほど山に籠ったままだったら、何も知らずに十字軍とかいう恐ろしい軍団と鉢合わせていたかもしれない。

「今は堤防を防壁として使用するために工事中だ、見えるだろう？」

お兄さんが指差す先には、木の柵を堤防の上に打ち建てると同時に、グルグルに巻かれた鉄の線みたいなのを設置するドワーフや獣人の姿が見えた。

事情を知った上で村の様子を思い出してみれば、確かに、戦いの準備をするために皆が行動しているのだと納得できる。

「俺達はここで十字軍を止める、早ければ明後日にはヤツらが来る」

「なら、僕なんかに付き合っていていいの？ お兄さんリーダーなんでしょ」

「だからだよ、銃は恐ろしく強力な武器だ、使えるなら是非欲しい」

「そんな大したもんじゃないよ、ちょっと硬い鱗を持つモンスターなら簡単に弾かれるし、爆発するタイプの下級魔法と比べたら攻撃も地味なものだよ。」

それに下手したらリロードするより詠唱の方が早いし、無詠唱は言うまでも無いけど」

通常の弾丸でダメージを与えられるのはランク2までのモンスターが限度だ。

ランク2でも強いタイプのモンスターとなれば、単純に鱗や皮膚が頑丈なことにも加え、魔法的な要因で防御力を底上げするヤツもちらほら出てくる。

モンスターだけでなく、魔法防御の効果を宿す防具も同じように

弾丸を防げるし、魔術士の下級防御魔法でも一発二発は難なく耐えるだろう。

そういった防御を破るには、より威力の高い魔法で、剣を使うならば武技で、となるのだ。

だから魔法も武技も全くダメな僕のような者は、いつまでたってもランク2になれない。

僕だって冒険者になってまだそんなに年数は経っていないけれど、このまま十年後もランク1のままだとは思えない。

「確かに、モンスター相手なら分が悪いかもな。

けど、人間を殺すだけなら銃の方がいい」

そう言い放ったお兄さんの目は、少しだけ怖くなったように思えた。

この人はきつと、これからやってくる敵を物凄く憎んでいる、他人の感情に疎い僕でもそれが分かるくらいだ。

「敵の装備はチェインメイルに厚手のサーコート、魔法防御がかかっている装備じゃないから、弾丸なら十分貫ける。

人間は他の種族に比べて脆い、一発当てればそれだけで戦闘不能だ、その口径の銃でも殺傷力は十分だろう」

人間を撃つことはないけどゴブリンならある、お兄さんの言うとおりああいう毛皮も鱗もない種族なら銃弾一発で倒せる。

けれど連射はきかないし、なにより僕はソロだから群れを相手に戦うことなんてとてもできない。

「それに、今回は前衛がいるだろ？」

僕の考えを見透かしたようにお兄さんが言った。

「君はギルドから川を渡ってくる敵を撃って欲しい、できるか？」

「ギルドと川ってすぐ傍じゃないか、十分射程範囲内だし、人間の大きさなら対岸にいても当てられる」

「……本当か？」

やや驚いた表情のお兄さん、むっ、僕が嘘ついているとも思っているのかな。

「それくらいできなきゃ銃なんて使ってられないよ。
それに弾丸も矢より高価だし、いちいち的を外してたら破産しちゃう」

矢は束でどこの村でも売られているけど、弾丸はそれ専用につっても貰わなきゃいけないから、その分だけお金がかかる。

「そうか、じゃあ見せてもらって、いや、ついでに撃たせてもらってもいいか？」

お兄さんがどこかワクワクした顔で問う、そんなに銃が好きだなんて、魔術士なのにな変わってるよねホント。

「ああ、弾が高いつてんなら金を出すぞ、コレで足りるか？」

キーンと指で弾かれた一枚のコイン、落とさないよう慌てて手に取ると。

「1ゴールド金貨！？　こんなにもらえないよ！」

「いいからとつとけ、先行投資みたいなもんだ」

「はあ？」

「気にすんなくてことだ」

「そこまで言うなら、いいけど……」

特に断る理由も無いし、引き金を引くだけだし壊れる心配も無い、というかかなり乱暴に扱っても壊れないよう設計してある。

僕はさっさと弾丸を装填して、お兄さんに銃を渡す。

「おお……」

お兄さんの目がキラキラしてる、まるで子供みたいだ。

「ここから、うーん、あそこに立ってる木が有効射程距離かな」

指差すのは前方150メートルほど先に、道端に立っている一本の木。

大木というほどじゃないけど、幹の太さは人の胴ほどある、的としては丁度良い大きさだ。

「なるほど、それじゃあ早速一発——」

乾いた銃声、嗅ぎ慣れた火薬の匂いが漂う。

銃は問題なく籠められた弾丸を撃ち出すが、それがどこへ飛んで

行ったのかは分からなかった。

「外したか、これは難しいな」

「慣れてなきゃそんなものだよ」

「そうだな、確かに――」

お兄さんが銃を持つのは反対の手を前へ突き出した瞬間、その指先に魔力が渦巻き一瞬で黒い弾丸が形成される。

その弾の形は、僕が使ってるような丸い球ではなく、先端の尖った細長い形状をしていた。

あれ、もしかしてこの形状の方が弾丸としての威力は高くなるのかも――

そう思いかけた時には、その黒い弾丸は銃弾と同じように魔力の炸裂する発射音と共に目にも止まらぬ超高速で撃ち出された。

バキン、と木の幹が砕ける音が耳に届く。

「うん、やっぱり使い慣れたモノじゃないと当たらんな」

「お兄さん、今のって」

「俺の原初魔法オリジナル、銃のイメージで攻撃魔法を創ったものだ」

銃身もトリガーも無いからカッコはつかないけどな、と言ってお兄さんは笑った。

っていうか、そんな魔法あるんなら武器として銃はいらないよねお兄さん。

僕が苦勞して造り上げた銃も、お兄さんのような魔術士にとっては、己の魔力だけでいくらでも再現できるものでしかない。

やっぱり魔法ってのは嫌いだ、使えない者からすればこれほどズルイ存在は無い。

「じゃあ、次は手本を見せてくれよ」
「うん」

やめよう、僕は魔法を羨んだりなんかしない、何故なら今の僕は魔法に頼らない錬金術師なんだから。

銃に弾丸を再装填、この操作をするだけで一気に集中できる。銃を構えれば、そこにあるのは僕と的だけしかない。

この程度の距離であの的の大きさ、よく狙いをつけなくても、すぐに照準を合わせることは簡単だ。

構えて1秒もしないうちに、さっさとトリガーを引く。

発砲、命中、撃てば当たる、当然の結果。

「すごいな！ 一発で当たった！」

「べ、別に、使い慣れれば誰でもできるよ……」

思えば銃を撃って誰かに褒められるなんて初めてだ、普通はみんな「ふーん、それで？」ってなるし。

的に当てるだけならお兄さんだって魔法で命中させてたじゃないか。

「なあ、コレを投げても当てられるか？」

「え、なにそれ？」

いつの間にか、お兄さんの右手には魔力で作ったと思われる黒い円盤のような物体が。

直系30センチ弱といった大きさ、この的を投げて空中で当ててみるってことなのかな。うん、それなりに面白そうじゃないか。

弾丸を装填、銃を再び構える。

「投げてみてよ」

「おう、じゃあ行くぞ」

ブウン、と風を切って黒い円盤は矢のような速度でお兄さんの手から放たれた。

僅かながら吹き付ける横風によって、円盤の軌跡は右方向へ緩やかなカーブを描きながらぐんぐんと飛距離を伸ばしていく。

動いている的を狙うのは、動かないのに比べれば当然難易度は上がるけど、羽虫のモンスターのように不規則な軌道をとらないだけマシ、命中させるのに大した問題にはならない。

トリガーを引く、発砲音の僅か後で、黒い円盤は空中で粉々に砕け散った。

「クレー射撃も完璧だな！ 君には間違いなく射撃の才能がある！」
「あ、そ、そう……っていうかクレー射撃ってなにさ……」

「はっはっは、照れるな照れるな」

上機嫌に笑いながら、お兄さんがバシバシと僕の肩を叩いてくる。ちよちよっと痛いんですけど、っていうかついでに頭も撫でてくれるお兄さん。

「や、やめてよねー！」

でも、いつも固まったような僕の表情が緩むのが分かる、自分が笑っているのだと気がつく。

そうだ、僕の事をこんなにストレートに褒めてくれたのは、認めてくれたのは、これが初めてだったんだ。

第93話 突撃！ シモンの研究室（1）（後書き）

すみません、次回はちゃんと研究室に到着します。

第94話 突撃！ シモンの研究室（2）

そこに建っていたのは小屋、というよりも物置だった。

「ど、どうぞ……」

シモンがバツの悪そうな表情で扉を開いて中へ招いてくれる。

「これが研究室、か」

「そうだよ！ こんなのが研究室だよ！

でもしょうがないでしょ！ ランク1の冒険者が広い部屋を借りる余裕なんてないんだから！」

「いや、分かってる、分かってるから落ち着け」

この宿へついた時、正面扉に入らず真っ直ぐ庭先に足を向けたのは、この物置がシモンの宿泊場所兼研究室だからだと、今更気づく。考えてみれば、寝泊りする以外の目的に宿の客室を使うのは拙いだろうし、またランク1冒険者の収入では宿以外に利用できる部屋など確保できない。

シモンがこの物置で研究し、寝泊りしていることはある意味当然の結果だと理解はできるし納得もいく、だが、

「不憫だ……」

俺は聞こえないようにストレートに心情を吐露した。

「座って」

普段使っているであろうデスクから小さな木の椅子を俺へ勧めてくれる。

他に椅子は無く、シモンはベッドへ腰掛けた。

ってよく見たらアレ、木箱を並べた上にシーツをかけたただけでもそもベッドですらない！

ヤバいぞ、シモンちゃん是世界名作劇場に登場する不幸な生い立ちの主人公みたいな生活してんのか、ホントに不憫だ。

「お兄さん、今ちょっと失礼なコト考えてたでしょ」

「いや、そんなことないって！」

それよりも、確かにここは研究室って感じがするな——」
ぐるりと部屋を見渡せば、最初に出てくる感想は「物で溢れてる」だ。

デスクの上には年季の入った辞典のような厚い本がうず高く積み上げられ、種々の工具が散らばっている。

造りかけの機械、カラクリ原色が目に眩しい怪しげな液体、鱗や牙といったモンスターの素材、そんなモノが机、テーブル、棚、床、至る所に雑然と並んでいた。

うん、いかにも研究室といった感じだ、何もこんなところまでファンタジーイメージじゃなくてもいいのにと思えるくらい見事な散らかりっぷり。

確かにコイツは錬金術師の研究室だぜ！ と違和感無く思える、まあ他の錬金術師がどうなのかは分からんが。

「——とりあえず、あんまり時間も無いし早速本題に入ろうと思う」
「え、うん」

俺の真面目な雰囲気を察したのか、若干緊張といった面持ちのシモン。

確かに、ここから先は俺個人では無く冒険者同盟のリーダーとしての話だ。

「まず確認しておきたいんだが、君は緊急クエストを受けるか？」

「勿論、僕だって冒険者の端くれだからね、クエストの受注に否やはないさ」

淀みなく即答するシモン。

「今回ののはかなり危険だぞ、命の保証はできない」

「冒険者に向かって言うセリフじゃないね、僕じゃなかったらキレる人もいるよソレ。」

でもここは素直に忠告と受け取っておくよ」

「スマン、一応確認しておきたくな」

ほとんどの冒険者は強い者に従う理論で俺についてきてくれるが、

どうにもシモンはそういうタイプには思えなかったので、前線で戦わせる以上意思確認はしておきたかった。

「それで、シモンには特別に協力して欲しいことがある、如何せん時間が無いから出来るかどうかは分からないが――」

「何さ？」

「機関銃を造ってほしい」

リリイとフィオナが姉妹のように仲良く並んで階段から一階ロビーへと降りてきた。

「ポーション作成は目が疲れますね」

「うーん、しばしばするうー」

量を正確にするため秤とにらめっこを続ける調合作業を終え、二人は一旦休憩兼食事のために降りてきたのだった。

ちなみに、リリイの調合は目分量だが、なんとなく調合素材を凝視しながらやっているの、彼女の目も無駄に疲労していた。

「お疲れさん、休憩するんかい？」

二人に声をかけたのは動く白骨死体改めスケルトンの闇魔術士モズルン。

共和国なら真っ先に討伐対象となる死神を思わせる邪悪な髑髏の風貌だが、フィオナにとってはすでに慣れた顔見知りである。

「はい、お腹が空いたので」

「あっはっは、いつもソレやなあ、戦う前に兵糧食い尽くしたらあかんでえ」

「善処します」

「ねークロノークロノどこー」

リリイがキヨロキヨロとロビーを見渡すが、お目当ての黒い長身は見えなかった。

リーダーであるクロノは多忙だ。

ヴァルカンのようなタイプであれば、ただ敵が来るまで黙って待ち構えているだけなのだが、事前準備に全力をかけるクロノは、敵が来る直前こそ最も忙しいと言えるほど。

冒険者の配置、パーティ間の調整、工事の進行状況、物資の確保、やらねばならないことは山ほどある。

その為クロノは常にギルドに留まっているわけでは無く、村のあちこちを東奔西走している。

「会議室にいるのではないでしょうか」

「あーちゃうわ、旦那はさっき出て行ったで」

フィオナの予想をすぐにモズルンが覆す。

「そうなんですか」

「えーどこいったのー？」

という幼い問いかけに、モズルンは骨を不気味にカタカタならしながら懇切丁寧に答えた。

「えらい可愛らしいエルフのお嬢ちゃん仲間と仲良く出て行ったで、コレは今頃お楽しみ中に違いないでえ、まあ旦那はえらい頑張ってたし、これくらいの息抜きは許され——」

「許さない」

「「っ!」？」

膨大な魔力が瞬時に膨れ上がったのを魔術士であるフィオナとモズルンが即座に感じ取ったのと同時、

「そんなの許さない」

目の前には、いつの間にか真の姿へと戻ったリリイ。

先ほどまでにこやかで愛らしい表情を浮かべていた幼子の面影は最早無く、能面のような冷たい美貌があるのみ。

「……リリイさん？」

リリイの急変振りに、珍しく冷や汗を流すフィオナ。

触れれば大爆発を起こしそうな光の原色魔力を感じる。

お陰でモズルンはリリイの光で浄化されるのでは無いかと戦々恐々といった様子。

「ちょっと、クロノを連れ戻してくるね」

「え——」

目が合うが、その瞳はフィオナを映していない、彼女はもつと遠くの‘何か’を見ているに違い無い。

フィオナが何か返事をする前にはもう、リリイの姿は視界から消えていた。

「……大事にならなければ良いのですけれど」

「旦那あ、どうか、どうか無事に帰ってくるんやでえ……」

フィオナとモズルンは高速飛行で文字通り飛び出していったリリイを見送った、というか、見送ることしかできなかった。

第94話 突撃！ シモンの研究室（2）（後書き）

ハイパー修羅場タイムの予感！

第95話 初めての嫉妬

浮気、という言葉がクロノの行動に当てはまるかどうかといえ、それは恐らくNOと言えるだろう。

クロノはリリイのことを相棒として絶大な信頼を寄せ、この異世界において誰よりも大切に思っているが、恋愛関係の方向には発展していない。

端から見れば、リリイが抱きついてくるのを甘んじて受け止めたり、優しく頭を撫でたりと、そこらのカップルよりもスキンシップ過剰であるが、断じて二人は恋人では無いのだ。

なぜならリリイはその小さな胸のうちに秘めた熱い思いをクロノに打ち明けて、つまり告白をしていないし、クロノもまた彼女へ告白したなどという事実は一切無い、雰囲気すら無い。

しかし、そんな一般論的な見方は今のリリイにとって犬にでも食わせた方がマシなほど無価値な論理である。

（誰よっ！ 私の、私のクロノを誑かそうとしている女は、雌は、ケダモノは！ クロノに指一本でも触れてみる、欠片も残さずぶち殺してやる！！）

モズルの要約すると「女を抱きにクロノが出て行った」という台詞をこれ以上ないほど真に受けたリリイは、

（許さない、そんな羨ましいこと絶対許せない、私だってクロノとまだ、キ、キ、キッスだってしてないのい！！）

理性の箍が月までぶっ飛んで行ったように感情を爆発させていた。（どこ、クロノはどこに行ったの、どこにいるの……）

だが、それでもクロノの居場所を推理する冷静な思考も同時に出来るところがリリイの狡猾なところでもあった。

（今この村に残ってるということは、まず間違はなく冒険者。

それに、モズルが「えらい可愛らしいエルフのお嬢ちゃん」と

言ってたってことは、『三獵姫』のメンバーでは無く、今日初めて見かけた人物。

ということは、事情を知らずに今日クエストから帰ってきた、つてところかしら。

それなら、男と二人きりになれるような場所は――冒険者が利用する宿屋、ね）

アルザス村に冒険者が宿泊する施設は二つある。

一つは今全ての冒険者が集結している冒険者ギルド、もう一つは通常の宿屋、アルザスの村の規模を思えば、ギルド以外にもう一件宿があるだけで十分過ぎる設備と言えるだろう。

そして、リリィはこの小さなアルザス村の脳内マッピングは完了してある、一切迷うことなく、村で唯一の宿目指して飛翔して行った。

見つけた。

宿の裏手にある、薄汚い物置小屋、ここにクロノと泥棒猫がいる。

「クロノ……私が助けてあげるからね」

私のクロノが今この瞬間にでも穢されるかもしれないと思えば、1秒でも時間が惜しい。

外から様子を窺ってあれこれ考えるのは時間の無駄以外のなにものでもない。

故に正面突破、最短距離を最短時間で、クロノの元へ。

だが用心はする、何と言ってもクロノというこの世で最高の男をほんの一時とはいえ手に入れている女がこの中にはいるのだ、邪魔が入れば冒険者である以上は実力行使で排除してくるはずだ。

もっとも、本気の私の前では一介の冒険者など相手にならない、いや、例え私の実力を上回るランク5冒険者だったり、ドラゴンだったりしても、私はクロノを助けに行くことに躊躇などしない、す

るはずもない。

そして、今この瞬間にそれを実行。

防音性の欠片もない薄い木の扉の前に、

オラクルワールド
「妖精結界全開」

光の防御魔法は、扉どころか触れた壁までも木っ端微塵に吹き飛ばして、私の通る道を作る。

光線、光弾、さらに『星墜』メテオストライクも詠唱を終えた状態で突入、抵抗すれば、跡形も無く消し去ってやる。

「クロノっ!!」

踏み込むと同時に、物が溢れ雑然とした室内に愛しい彼の姿を見つけた。

「リリィ!?!」

「え、何!?! 何なの!?! っていうかドア壊れてるし!」

驚愕に目を見開くクロノともう一人の人物。

そうか、コイツがクロノを誑かした悪い泥棒猫ってコト。

小柄で華奢な体つき、灰色の髪にエルフ特有の尖った細長い耳。

顔立ちはモズルンが評した通り、可愛らしい、緑の瞳を持つ猫のような目が愛嬌を誘う。

けれど、私に言わせればそれまでの顔、魅了チャームが宿るほどの美貌では無いし、私には無いような大人の色気溢れる体つきをしているワケでもない、ただのガキ。

こんな、こんなレベルの女に手を出すくらいなら、どうして私に――いや、止めよう、今はとりあえずコイツの排除が最優先だ。

「大丈夫だよクロノ、今私が助けるから」

二人に着衣の乱れは無い、最悪な事態は免れていたようで一安心けれど、コイツをクロノの前から消し去るまで油断はできない。

私はクロノを安堵させるように満面の笑みを見せると、今度は必殺の覚悟をした無表情でエルフのガキを睨みつける。

「ひ、ひいっ!?!」

ふん、雑魚が、私の殺気を真正面からうけて完全に怖気づいてい

る。

クロノに手を出そうって言うんなら、もっと自分の力を磨いてから現れなさい、この身の程知らずの馬鹿女——が、いや、待て、ちよっと待って。

「……」

コイツ、もしかして男？

それは直感に近いものがある、だがそれを確かめる為に、私に対する恐怖がだだ漏れとなっているコイツの表層意識から、より深いところまでテレパシーを仕掛けてみる。

その回答は、すぐに得られた。

（なんで——どうして、僕は男なのに——弱い、情けない——）

正真正銘、コイツは男だ。

円らな瞳に薄っすら涙を浮かべて可愛らしく怯えてみせるこのエルフは、男なのだった。

けど、だからと言ってまだ油断は出来ない。

いや、寧ろクロノが、‘こういうタイプ’が好みだったと言うのなら、尚更私に手を出さなかった納得もいく。

特に勇敢に戦う強く逞しい真の男は、女だけでなく男もイける、寧ろ男を抱いてこそ、みたいなことを、森の魔術士が小屋に残していった本で読んだことがある。

なら、クロノがこの少年に食指が動いてしまったことも——

「ちよっと待てリリィ！ 絶対何か勘違いしてるぞ！」

と、いつの間にかクロノが私の前に立ちはだかっていた。何、この女ですらないガキを庇うの？

「コイツは敵じゃない！ ただの冒険者だ、俺に協力してもらうために話してただけだぞ」

「信用、できない」

「コイツは今日クエストが終わって帰ってきたから、見たことがな

いというだけだ、別に十字軍のスパイとかじゃないと思うぞ？」

何か、致命的な食い違いが起こってるように思える。

いや、確実に間違ってる、どちらかと言うと、私が。

え、なによ、もしかして私の早とちりだったとか言うワケ？

「な、だから落ちついて話を——」

「うん、そういうこと……」

いや、それならそれでいい。

少なくとも自然に流れ込んでくるクロノの表層意識には、一切の色欲が映っていない。

隠し事をしている感じでは無い、勘違いして暴走している私をどうにか必死に食い止めようとする熱い思いがあるだけだ。

そうか、ただの協力者……それなら、私が少し恥かしい勘違いをしただけでこの場は丸く治まるだろう。

「……じゃあ、詳しく聞かせてもらおうかしら」

私は素直に折れることにした。

クロノが何らこの男に思うところが無いというのなら、問題は無い。

一番の問題点は、あの骸骨男が適当なコトを言ったことだ、何が「お楽しみ中に違い無い」よ、ふざけんじゃない、お陰で無様に取り乱した姿をクロノに見せてしまったじゃない。

光線の一発でもぶち込んでやらなきゃ気が済まないわね。

「ああ、えっと、この子はシモン、ランク1の冒険者だ」

そうして、シモンとかいうヤツと、私も一応自己紹介して、クロノから事情を聞き始める。

と言っても、すでに女としての‘敵’でない事が分かった以上、このシモンという人物に興味など失せてしまっている。

「——そんなワケで、シモンには協力して貰おうと思ってるんだ」
後は適当に話を聞いて、私が納得したようにすればこの場は解決だ。

解決、するはずだった……

「怖い顔をして、どうかしたんですかりリイさん？」

もしかして、本当にクロノさんは――」

「いいえ、何も無かったわ、ただあの骸骨の下品な勘違いよ」

フィオナの問いかけに、リリイは努めて冷静に返事をする。

だが、すでに幼児の肉体へ戻ってしまっても、フィオナをして「怖い顔」と言わしめるほどの表情をしてしまっていることに、リリイは気づけない。

「そうですか、それなら良かったです、色恋沙汰で内部分裂というのは、そう珍しい話ではないですからね」

「フィオナにしてはマトモなことを言うじゃない、経験あるのかしら？」

「いえ、私は一人で外から眺めているだけだったので、よく観察することが出来たというだけのことですよ」

「そう、なら安心して、クロノは性欲も満足に御せ無いような頭の悪い男じゃないから」

そして、リリイは少し休むと言ってフィオナの前から立ち去った。向かう先はクロノが利用している客室。

本人は今もまだ扉が消滅して風通しの良くなった物置研究室でシモンと語り合っている最中。

リリイは主のいない客室に入ると、すぐにベッドへ飛び込んで、小さな手足を投げ出して寝転がった。

「……イライラする」

布団を被り、枕に顔をうずめるリリイは、そこに染み付いているクロノの匂いを胸いっぱい吸い込む。

普段ならこれ以上ないほど心を落ち着かせてくれるその香りも、今はリリイの心の波を殊更に掻き立てるだけの効果しかない。

「なんで、クロノ……あんな……」

一体何が、これほどまでに自分の心をかき乱すのか、分からない。だが原因はハッキリとしている。

「あんなに、嬉しそうにしてるの……」

それは、クロノがシモンへ向けていた感情。

銃の存在、魔法を使わない錬金術、事情を聞いている間に、クロノがシモンの持つ‘能力’に対して凄まじく心が惹かれていたことが分かってしまった。

それこそ、テレパシーなど無くても分かってしまうほどに。

歓喜、好奇心、期待、そんな正の感情が入り混じった強い思いは、変に歪むこと無くストレートに賛辞の言葉となってシモンへ届けられていた。

「あんなの知らない、あんな思いは、一度も、向けられたことなんて、無い」

リリイはこれまで間違いなくクロノと心を通わせて、圧倒的な信頼関係を築き上げてきた、それは勘違いではなく、自他共に認められる確かな絆。

クロノが異世界において、いや、その人生において家族に匹敵するほど大切に思う人物はリリイの他にはいない。

クロノの信頼と親愛は嘘偽り無く本物だ、そしてそれをリリイも理解している。

だがしかし、親愛と興味はまた別の感情である。

リリイは確かにこれ以上ないほどクロノの‘情’を獲得しているが、好奇心的な興味・関心をひいているわけでは無い。

シモンという存在は、これまでリリイがひくことの出来なかったクロノの関心を、錬金術によって一気に集めたのだった。

何故クロノがそれほどまでに錬金術という技術に心惹かれているのか、詳しい事情は心の奥底まで覗いていない、いや‘構造上’、覗くことが出来ないリリイには分からない。

だがそんな理由よりも、現実としてシモンがクロノの興味を一身に集めていることが、

「気に食わない、なんで、どうして、あんなヤツが……」

何よりも納得のいかないのであった。

リリイはこれまで一度も、クロノとの関係に不満を覚えたことは無い。

それはクロノの態度だけでは無く、リリイ自身に関しても。

例えば容姿。

クロノの前に現れる様々な女性、中にはフィオナやイリーナのように見目麗しい者がいる。

だが、彼女達の美貌に対して自分が劣っているとは思わない、故にその美しさを嫉むことなど無い。

冒険者として命がけの戦いをするクロノ、そんな彼と肩を並べて戦う力も持っている、何ら無力感に苛まれることも無い。

そう、自分はクロノの相手として一切不足の無い、完璧な存在だと思っていた。

だがしかし、今日この日、シモンという男の出現によって、最もクロノの心を惹いていたという事実が覆されたのだった。

「なんで、なんでよ、悔しい——」

そうして、ついにリリイは自分が持て余す感情の正体に気づく。

それは、完全無欠の美と力を持つリリイにとって、これまで全く無縁であった感情。

人として本能に近いほど原始的な感情にして、大罪とも称される、負の思い。

「——そうか、私、嫉妬してるんだ」

リリイは、生まれて初めて嫉妬の感情を覚えたのだった。

第96話 MPK作戦

新陽の月26日、ノールズ率いる十字軍ダイダロス西部占領部隊はイルズ同様もぬけの殻となったクウアル村を占領。

当然ながらここでもクロノが行った焦土作戦により食料を入手することが出来なかった。

クウアルに誰もいない以上、こうなることはすでに分かりきっていたことであり、ノールズは大人しく補給が整うのを待つのみである。

恐らくこのまま最西端に位置するアルザス村までこの収穫の無い占領が連日続くことだろうとノールズは予測した。

現在偵察させている範囲において魔族の姿は発見できていないので、実際に追いつくのはアルザスを越えてダイダロス領土を抜けた先、スパードへ至るまでのガラハド山脈の間であるとも見当がついた。

アルザス―スパード間は山があることに加えて距離もある、アルザスまで順調に避難できていたとしてもそこから先に進むのは、人間は勿論魔族にとっても厳しいもので、行進速度は大幅に低下する。例えば1週間前に出発したとしても騎兵のみで向かえば十分追いつくことが可能、故にノールズは焦る事無く順調に兵を進ませている。

しかし新陽の月27日、クウアルの次にあるヘジト村へ本隊が到着した時、ノールズは無人のはずの村を前にして何か不穏な気配、いや、もっと直感的な予感めいたものを感じ取ったのだった。

そして、それはすぐに的中することとなる。

「おお、この倉庫は無事だぞ！」

ヘジト村を探索していた十字軍兵士は、焦げ後一つない木造の倉庫を発見し喜びの声を挙げた。

「食料庫だといいんだがな」

「いいや、やっぱ宝物庫だろ」

「バカ、こんなド田舎に宝物庫なんてあるわけねーだろ」

「おら、アホなこと言ってるねーで、さっさと中を調べるぞ」

「了解」

部隊長の指揮の下、兵士達は倉庫の扉へ手をかける。

鍵はかかっていない、扉は抵抗なくあっさりと開き、薄暗い倉庫内へ兵士達を導いた。

「ん、なんかここ臭くなー」

先行して入った兵士が、室内に漂う獣のような異臭を察知したと同時に、彼の言葉は途切れた。

「――あっ？」

彼は自分のわき腹に深く突き刺さった槍を認識した瞬間、恐怖と苦痛に絶叫する。

喚きながら仰向けに倒れこんだ彼へ、幾つもの刃が殺到し、あっという間に断末魔の悲鳴を掻き消し絶命させる。

「おいっ！ 何かいるぞっ！！」

「何だっ！？ 何なんだよお？！」

「気をつける、そこら中に――」

兵士を殺害した者達の姿は、暗い倉庫内で即座に確認できない。

「一旦外に出ろっ！」

見えない敵に剣を振り回しながら牽制しつつ、部隊長の命を受けて外へ逃げ出す兵士達。

「うがあ！ 痛っええ！」

「待ってくれ！ 足が――」

足を切られたのか、倒れて動けない兵士が2人、片方は味方に担がれ救助できたが、もう一人の方は間に合わず暗い倉庫の奥へと引きずりこまれていった。

先ほどまで和やかに会話をしていた仲間の悲鳴を極力聞かないよう意識しながら、兵達は2名の犠牲者を出し、ようやく倉庫内から外へ出た。

「くそっ、なんなんだよ！」

屋外には、開け放たれた扉に向かって兵士達が弓を引いて待ち構えていた。

すでにこの倉庫での異変を察知して仲間の兵士が次々と集結しつつある。

兵士達は体勢を立て直し、倉庫に巢食う姿を見せない敵に向かってそれぞれ武器を構えた。

「出てくるぞっ！」

獣のような、猿のような、不快な奇声を上げながら、倉庫の扉から小さな影がいくつも飛び出した。

「撃てっ！！」

ソレを認識した瞬間、扉に向かって弓の一斉発射。

「ゴ布林だっ！」

扉から飛び出すと同時に、体中に矢を受けて転がる死体を目に誰かが叫ぶ。

「くそっ、魔族の待ち伏せか？」

「こんなに潜んでやがったのか」

次々に扉から、倉庫に潜んでいた襲撃者の正体である緑色のゴ布林が現れる。

穂先の欠けた槍、刀身の錆びた剣、大きな骨で出来たメイス、統一感の無い粗末な武器とボロ切れのような衣服や汚れた毛皮を纏ったゴ布林。

どう見ても村で生活するタイプの魔族では無く、山野に生息する野良ゴ布林、つまりモンスターだ。

何故こんな所に？ 疑問を思う者は兵士の中で多々いるが、今はそれをゆっくり考えている暇は彼らに無い。

「ゴ布林を掃討する、俺に続けっ！」

部隊長が長槍を振り上げてゴブリンの群れへ突撃、それに部下の兵士達が雄叫びを挙げて続いた。

ヘジト村の各地でモンスターとの散発的な戦闘が発生していた。それは指揮官であるノールズが今いる村の大通りも例外ではない。そこかしこから聞こえるモンスターの鳴き声や兵士の怒声によって、ノールズは伝令から報告を受ける前に凡その状況を理解できた。「魔族が待ち伏せていたか」

「野生のモンスターだけのようですよ、住民の姿はどこにもありません」

どういう理屈で野生のモンスターがわざわざ村の中にいたのかは分からない、だがノールズには今やらなければならないことは分かっている。

「各地で戦闘中の小隊にこっちから何人か送れ、それと負傷者の回収と治療を任せるぞシスター・シルビア」

「了解しました、それで貴方はなにををするのです？」

「はっはっは、決まっているだろう」

ノールズは馬から降りると、腰から下げた巨大なメイスを抜き片手で軽々と振り上げ肩に担いだ。

「目の前には神の敵がいるのだ、討ち滅ぼすのが我ら司祭の使命よっ！」

隊列を整え槍袂を形勢している歩兵の前には、理性の無いぎらついた目つきのゴブリンが群れをなして迫ってきていた。

「そうですか、ご武運をノールズ司祭長」

シルビアが後方へ引くのは逆に、ノールズは通常より1サイズ大きいメイスを片手に立ち並ぶ歩兵の戦列を越えて前へと躍り出る。「おお、司祭様！」

司令官自らが最前線へ出ると同時、兵達から歓声が上がる。

ノールズはキルヴァンと同じように兵の先頭に立って部隊を率いるタイプである、故に参謀役としてシスター・シルビアが副官にっているのだ。

彼は明確な敵が目の前に現れたことによって、パンドラ大陸にて初めて自身の本領を発揮できるのだった。

「さあかかって来いモンスター共、神に代わってこの俺が天罰を下してやろうっ！」

言葉の意味を理解しているかどうかは不明だが、迫り来るゴブリンは前に立つ巨漢のノールズへ向けて一斉に敵意の視線を向ける。それぞれ錆びたり欠けたりした武器を振り上げて、ノールズの元へ猛然とゴブリン達が殺到する。

「????? ???? ???? ???? ???? ???? ????
テラ・オーヴァプラスト
?——岩礫崩っ!!!」

メイスを地面へ叩き付けると同時に、地面が土砂を噴き上げる。それは円錐の石柱が何本も天へ向かって突き上げられたことによって、地面が隆起したように兵からは見えた。

舞い上がった土砂のカーテンが消え去ると、そこには石柱によって串刺しとなった、あるいは手足が削り取られた無惨なゴブリンの死骸がいくつも転がっている。

魔法攻撃の範囲から幸運にも外れ、生き残っているゴブリンはまだ残っているが、直前まで奇声を上げて仕掛けた突進の歩みはすでに止まってしまっている。

ノールズはここで突撃を命令すれば、残ったゴブリンもあっけなく殲滅できるだろうと考えたが、

「むっ、どうやらボスがいるようだな」

突き立つ石柱のさらに向こう、他の者よりも上質な毛皮をローブのように纏い、骨の短杖ワンドを手にしたゴブリンが現れたのを見て、突撃指令を出すのは留めた。

（魔術士タイプのボスカ、先に仕留めておかねば兵を無駄に損なう危険性があるな）

さらにボスは多くの配下を従えており、その半分ほどは弓を携え、すでにこちらへ向かって弦を引き絞って狙いを定めている。

ゴブリンのボスがダミ声だが確かに魔術の詠唱を始め、見る見る
ワンド
 内に手にする短杖の先端に火球が形勢されてゆく。

詠唱が完了する、灼熱と爆発力を秘めた直系30センチほどの火球がゴブリンより放たれる。

「……? ……? ……? ……? ……?
テラ・アルマシルド
――巨石大盾っ!!」

「……? ……? ……? ……? ……?
……? ……? ……? ……? ……?
……? ……? ……? ……? ……?

より防がれる。

ド
ド
ド
ド
っ
!!

事攻撃を防ぎきった。

雄叫びと共に無詠唱で放つ範囲攻撃魔法。

ノールズのメイスが岩の盾を打ち付けると、巨石大盾はバラバラに砕け散る、いや、それは人の頭ほどの大きさもある無数の岩の塊となり、砲弾のように立ち並ぶゴブリンへと殺到した。

高速で飛来する岩の砲弾。

される音と断末魔の悲鳴が響く中、

「今だっ！ 突撃いい！！」

ノールズから突撃指令が下される。

かくしてノールズの本隊と大通りで相対したゴブリンの群れは、10分と経たずに殲滅されることとなった。

陽がくれる前にはヘジト村に巢食うモンスターは殲滅され、十字軍は晴れて村を完全に占領下においた。

ノールズは兵を引き連れてある一軒の倉庫へとやって来た。

その中に、ゴ布林などのモンスターが村にいた‘原因’があった。

「む、これは……」

薄暗い倉庫の奥には、鋼鉄製の頑丈な檻が鎮座している。

その内には、まだ子供だと思われるゴブリンの死体が4体横たわっていた。

発見した兵があらかじめ殺しておいたのだろう、十字軍で使用される矢がその小さな体に何本も突き刺さっている。

何とも汚らわしいものを見た、と眉をしかめるノールズへ案内した兵の一人が説明の言葉を発した。

「これと同じものが村のあちこちで発見されています。

恐らく、野生のモンスターの子供や卵を巢から奪い、檻に閉じ込めたものだと思われます」

目を凝らせば、檻の太い格子にはいくつもの引っかき傷のような跡が見受けられる。

盗賊のように鍵を開錠するスキルなど持ち得ない野性のモンスターは、己の子供を救うべく力の限り檻を壊そうと試みたのだろう。

だがランク1程度のモンスターが鉄の檻を破壊するだけの攻撃力も、また別の方法でこじ開ける知恵もありはしない。

「では何か、魔族が子供を餌にモンスターを村に引き入れておき、我々に対する伏兵に利用しということか？」

「はい、偶然こうなったとは考えられないでしょう」

「モンスターといえど親子の情を利用するなど……なんとおぞましい策を弄するのだ魔族共は！」

モンスターが死ぬことに対しノールズや十字軍兵士に忌避感はない。

しかし子供を人質とすることで全く無関係の存在を強制的に戦闘に引き入れるという発想が、十字教的な正義感の強いノールズにとっては吐き気を催すほどの邪悪な策であると思えなかった。

「ただ逃げ出したただけかと思ったが、どうやらヤツらは本気で我らに抵抗するとみた」

根拠は無い、これもただ時間稼ぎのための小手先の策であると断じることできる。

「だがノールズの直感は告げている、敵は間違いなく、それこそ、どんな手段、を使ってでも抗ってくると。」

「やはり魔族という邪悪な存在は、一刻も早く殲滅せねばならんな」

第96話 MPK作戦（後書き）

という一方で、クロノはシモンの研究室で修羅場ってたというお話。

第97話 『エレメントマスター』の最大火力(1)

新陽の月30日、最短襲来予想である3日を過ぎても十字軍は現れなかったので、より強固な防衛線を築くべく現在も工事を続行中である。

そうして、ある程度要塞化のめども立ち、MPK作戦に出ていたメンバーも全員無事に合流と順調に準備が整ってきたので、本日はこれまで先送りになってきた、

「俺達の最大火力を確認する実験を行う！」

ということ、アルザス村から西へ1キロほど離れたただっ広い平地へとやって来た。

ちなみにメンバーは俺とリリィとフィオナ、冒険者パーティ『エレメントマスター』のみである。

今日の実験は、自分が出せる最大の魔法をぶっ放してその破壊力を見ようという至極単純なもの。

本格的にやれば魔法具に分類される種々の計測機などあるようだが、今はそんなもの用意して厳密に数値測定する時間も無いし、そもそも田舎であるこの辺にそんな魔法的にハイテクなモノなどあるはず無かった。

とりあえず、一度魔法を見ておけば大体どんなものか把握できるだろう。

「でもこれって今更な気がしますね」

「そういうこと言うなよフィオナ、ほら、今まで忙しかっただろ」

まあ今も忙しいことには変わりはないけどな。

「俺は大人状態のリリィとフィオナがどれくらい威力のある魔法を使えるのか分からないからな。」

けど二人の實力はかなりのものだと思うし、きっと今回の戦いの鍵になるはずだ、期待してるぜ！」

「面と向かって言われると何だか照れますね」

「ねー！」

本当に照れてるのかどうか分からない表情のフィオナとニコニコ元気な笑顔のリリイ、このツーショットは、なんだかんだで絵になるな。

ただのハイキングやらピクニックやらでここにいるのだったら、そりゃあもう楽しいことだったろうが、今はそんな愚痴は言うまい。

「それじゃあまずー」

「クロノさんからどうぞ」

「あ、俺から？」

「はい、リーダーですので」

「頑張って、クロノー」

そうか、俺もやるのか、確かに俺が戦っているところをリリイは兎も角フィオナは見えていない、すっかり失念していたな。

「よーし、じゃあいいところ見せるぜ！」

「わー」

「わー！」

フィオナの無感動な拍手とリリイの無邪気な拍手が耳に心地いぜ。

いざ、と思うが、ちょっと待てよ。

俺の魔法で最大火力といえば『魔弾全弾発射（フルバースト）』
だ。

魔剣も貫通力だけで言えば魔弾一発あたりを遙かに上回るが、これは武器依存の攻撃力なので置いておこう、実際ただの投擲攻撃だと言われればそれまでだし。

あと魔法と武技も別扱いなので、『呪怨鉈「腹裂」』を装備して発動可能となる武技『黒風』もここでは除外。

それで、『魔弾全弾発射（フルバースト）』なのだが、その効果は黒色魔力の弾丸を大量に撃ち込むというものだ。

この遮蔽物の無い平原で撃ちっぱなしにすれば、その弾丸は遙か

彼方へ飛んでゆくのみで、特に爆発が起こるわけでも光るわけでもなく、後には攻撃前と何の変化も無い風景が広がるのみである。

これでは拙い、何も破壊力が分からないではないか、そう、射撃には的が必要なのだ！

「難しい顔をして、どうしたんですかクロノさん？」

「おなか痛いのか？」

勤めて冷静を装って、俺は一直線に走り出す。

「あ」

後ろに残された二人の声が聞こえたが、聞こえないふりでそのままダッシュ。

100メートルほど進む、うん、まあこの辺でいいだろう。

「『影空間』」
シャドウゲート

『影空間』はこれまで使っていた『影空間』と効果そのものに変化は無いが、高位の闇魔術士であるところのモツさんから助言と術式の提供を受けて、その容量と展開速度など、様々な追加効果を持つレベルアップバージョンだ。

その追加効果の一つである、影の操作を応用して、地面に直系1メートルほどの丸い影を作り出す。

影の操作は基本的に俺自身の影を様々な形に変形、あるいは拡大・縮小も可能。

だが術者本人の影から分離することはできないので、今作り上げたこの丸い影も、細い影で密かに俺の足元へと繋がっている。

「えーと、確か十字軍兵士の防具が1セットくらいあったような――」

四次元ポケットを漁るタヌキ型ロボットのような感じだな、ここ最近の中に入れている物品の量も増えている為、尚更だ。

容量が増えた影空間の中から、目当てのものである十字軍の基本的な歩兵装備である白いサーコートとチェインメイルを取り出す。

あとは、適当に人型を作ってかぶせればいい。

魔力の物質化は俺の黒魔法が得意とするところだ、硬さ、耐久性、
マテリアライズ

形状維持の時間、その他諸々に目を瞑れば、とりあえずはある程度の物体を出現させることが出来る。

適当に作った脆い物など戦闘では何の役にもたたないが、こうした的となる案山子くらいの役目は果たせるだろう。

数秒で俺と同じくらいの高さをもつ人型、頭と肩のラインだけであとは板状になっている簡単な形の出来上がる。

チェインメールとサーコートをそのまま頭から被せると、見事な的の完成だ。

「ま、こんなもんだろ」

そして、来た時とは逆に100メートルダッシュして、フィオナとリリイが待ってる場所へと戻ってくる。

「よし、じゃあいいとこ見せるぜ！」

「あ、そこからやり直すんですね」

フィオナからちよつと冷たい言葉が刺さるが、気にしてないフリをして話を進める。

「見れば分かると思うけど、あの的に向かって魔法を撃つ、行くぞ」俺は二人から一歩前へ進み出て、『ブラックバリスター・レプリカ』を構えた。

すでに弾丸は『装填』済み、俺の周囲を取り巻くように、弾丸の列が現出する。

「『^{バレットファース}魔弾全弾発射（フルバースト）』」

千を越える黒き弾丸が、一斉に的へ向かって撃ち出される。

そこに立つのはただの的ではなく、本当に十字軍兵士へ向かって撃つように、発射された弾丸の威力に加減は無い。

100メートルの距離を刹那の間に0にしてターゲットへ到達。

蜂の巣になる、という状態すら通り越して、黒色魔力の人型も、チェインメールもサーコートも全て、ミキサーにでもかけたようにバラバラに吹き飛ぶ。

的があってもなくても、撃ち終わってみれば結局、そこに元から何も無かったかのような平野の風景が広がるのみであった。

「どうだ？」

「えーと、終わりですか？」

「え、これで終わりだけど？」

それほど驚かれることは無いだろうとは思っていたが、まさかここまで拍子抜けされるとは……

「爆発したりとかは？」

「いや、爆発もしないし、ただ魔力を固めたただけだから」

「あ、では追尾性能を持っているとか？」

「……真っ直ぐにしか飛ばないよ」

「ただのシングルアクションなんですか？」

「ああ、シングルアクションを大量に撃ってるだけだ」

「そうですか——」

俺はフィオナが言う前に気がついてしまった、そうか、俺の黒魔法って、

「——思ってたよりも地味なんですネ」

フィオナの容赦ない感想に、俺はちよっただけ泣いた。

第97話 『エレメントマスター』の最大火力（1）（後書き）

さあクロノがエレメントマスター最弱の実態が浮き彫りになって
きましたね……

第98話 『エレメントマスター』の最大火力(2)

「クロノークロノー元気だしてー」

「すみませんクロノさん、私思ったことが口に出てしまうタイプなので」

「いや……いいんだよ、俺の魔法が地味なのは事実だし……」

「はい、嘘でも凄いですと言ってあげるべきでしたね」

全然フォローになってないフィオナの台詞を甘んじて受け止めた俺は、どうにか気を取り直して、ネガティブ状態から復帰する。

健気にダメな俺を慰めてくれるリリイだけが心の支えだぜ。

「よし、それじゃあ次はリリイがやるか？」

「うん！」

元気一杯に応えたりリイは、いつの間に取り出したのか、テニスボールくらいの大きさの真っ赤な宝玉を手に入っていた。

クイーン・ベリル

アーティファクト

『紅水晶球』と呼ばれるその大魔法具は、妖精女王の加護無しで

もリリイを本来の姿へ戻すことができる膨大な魔力が秘められている。

その輝きと、滲み出る魔力の気配から、それが事実なのだと実感できる。

「ええーい！」

可愛らしい掛け声と共に、リリイの体が眩い光に包まれ、思わず目を背けた。

「――ふう、それじゃあ私も頑張っちゃおうかしら」

次の瞬間にはもう、そこに幼いリリイの姿は無く、大人と子供の中間にある少女の美しさを具現化したような、成長したリリイが立っている。

その身に纏うエンシェントビロードのワンピースは、俺の『悪魔

パフォメット・エンプレス

の抱擁』と同じように、着る者に合わせてサイズが変化する。

幼児から少女へと大きく体の大きさを変化させても尚、そのサイズは測ったかのようにピッタリと、そのシルエットを崩す事無くリリーの体を着飾っていた。

「あ、的を用意する必要は無いわよ、私の魔法は地味な方じゃないからね」

「ぐはぁ！」

唯一の味方だと思っていたリリーがこんなこと言うなんてっ！？

「んふふ、ごめんごめん、クロノの魔法が凄いて、私はちゃんと分かってるから、ね？」

意地の悪い笑みを浮かべながら、いつもとは逆にリリーが背伸びして俺の頭を撫でてくる。

なんだこのアメとムチ作戦は、こうやって男を手玉にとるイケナイ娘なのか少女リリーよ。

「俺の事はもういいから、早いとこやってくれ」

「はい♪」

驚くほど自然にウインクを俺へくれたリリーは、こちらに輝く羽が生える背を向けて、詠唱を開始した。

「????? ???? ???? ????」

その言葉の意味はやはり分からない、だが、これまで聞いた詠唱に比べるとかなり短いように思える。

現代魔法では下級のものがこの程度の短さだが、リリーの魔法が下級程度の威力に留まるはずが無い。

その短い詠唱だけで、俺が100メートル先に的を設置した辺りの真上に、白い光の線で描かれた巨大な魔法陣が瞬時に完成する。

「凄いですね」

「ああ、凄いんだよりリリーは」

俺がこれまで見たリリー最大の攻撃魔法は、空中に描かれた魔法陣から撃ち出される光の柱だ。

子供状態でも、ゴブリンの済む洞窟ごと崩落させる威力を誇っていたんだ、今の状態で撃てばどれほどのものになるか。

空中に描かれているあの魔法陣は、これまで見てきたものの倍以上の大きさを誇っている。

メテオ・ストライク
「――星墜」

魔法陣から撃ち出されたのは、光の柱では無く、塊。

そう、それは正しく魔法の名前に相応しい、七色に煌く隕石であった。

「素晴らしい魔法です、この威力を完全に制御できているのは、羨ましい限りですリリイさん」

目の前に広がる直系50メートルほどのクレーターを前に、フィオナが賛辞を送る。

予想を超えた威力を前に、俺もフィオナと同じ心境だ。

っていうか、魔法ってここまで凄い威力を出せるものなんだな、コレに比べりゃ俺の『魔弾』バレットアーツなんて地味どころか無に等しいんじゃないのか。

「ふふ、ありがとね。」

でもこれ、威力はあるけど攻撃速度遅いし、素早い相手だと上手く中心に捉えられないんだよね。

クロノの魔弾は必要な殺傷力だけを維持して無駄を省いてるから、人間相手ならこっちの方が便利だわ」

「そうですね、同じ数の相手を倒すにしても、クロノさんの方が魔力の消費はずっと低く抑えられるでしょう。」

リリイさんの方は、見た目通りかなりの魔力を消耗するのではありませんか？」

「連発できない程度にはね、確実に当たる時じゃなきゃ使えないわ」二人とも、さり気無い俺へのフォローをありがとう。

「しかし、これだけの威力は並の魔術士じゃ出せるもんじゃないよな？」

「まあね、今の私ならランク5の実力はあるし」

「十字軍にも、これだけの威力を一人で出せる魔術士は、ほんの一握りでしょう」

「やっぱリリィだけ抜きん出て実力あるな、30分だけとはいえ、守りの要になる」

「うふふー、そうでしょう、だから褒めて褒めてっ♪」

子供状態の時と同じようにすりすりとし身を寄せてくるリリィ。

少女の姿でやられるとえらい恥かしいぞ、でも、ちくしょう、可愛いやツめ！

「では、最後に私の番ですね」

「あ、ああ、思い切りやっちゃってくれ」

甘えるリリィの所為で緩みかけた表情をキリリと引き締める、だが俺の右手はリリィの頭を撫で続けたままではある。

「はい、ご要望通り、というよりは、今の内に私の全力を、お二人には見ていておいて欲しいのです」

フィオナは魔力の制御が上手くできず、計らずとも広範囲に攻撃してしまう、ようするにフレンドリーファイア問題でパーティを組めなかったという過去がある。

ここで一番ヤバいのを俺達が見て、それを納得した上で受け入れてこそ、フィオナを真のパーティメンバーに出来るといえよう。

だから俺は、恐れずフィオナの全力を見ようじゃないか。

「ああ、一番強いのを頼む！」

「はい、それでは——」

そして、フィオナが普段から手にする長杖^{スタッフ}『アインズ・ブルーム』を振り上げて、朗々と詠唱を紡ぎ始めた。

その時、アルザス村で今日も迎撃準備に迫られる冒険者達は、一斉に動きを止めた。

まるで火山が噴火したかのような轟音が響き渡り、次の瞬間にはその威力を誇示するように濛々とした黒煙が吹き上がったからだ。

「なんだありゃあ？」

「あの方向は、クロノが実験するとか言っていた場所ね」

中堅以上のランクと呼べる、ヴァルカンとイリーナの二人でさえ、その光景は不可解なものだった。

「ってこたあ、魔法なのか？」

「そういうことなんでしょね、でも……」

魔法が行使されたであろう地点から、およそ1キロ近く離れたここからでもはっきりと見る事が出来る、その巨大な爆炎はここにいる冒険者全員を震え上がらせた。

「……とんでもない威力だわ」

天に向かって立ち上る黒煙。

山火事でもなければお目にかかれないような濃密にして巨大な煙は、それがたった一発の魔法で引き起こされたことを思えば、攻撃魔法を見慣れている冒険者をして恐れさせるに足るものであった。

「炎ってこたあ、あの大喰らいの魔女っ娘か」

「そうね、イルズであの娘の魔法は一度見たけど、アレで全力じゃなかったということね」

「クロノとちびっ子妖精だけでも妙な面子だったのに、オマケに大火力の魔女とは、アイツの『エレメントマスター』とかいうパーティはどうなってやがんだ」

リリイが造った直径50メートルのクレーターは、今やその面影は無い。

何故なら、俺の目の前には新たに穿たれた破壊の跡、その大きさに直径100メートルに近い巨大なクレーターが誕生しているからだ。

「……大丈夫、クロノ？」

「ああ」

未だ少女姿のリリイが正面から俺に抱きついている。

彼女の全身を覆う妖精結界の光の内に、俺の体も覆われていた。

「庇ってくれてありがとな」

「うん、無事で良かった」

そう、フィオナが、一番強い魔法、を放ったその瞬間、リリイが俺の元に駆けつけ守ってくれたのだ。

100メートル先で炸裂したフィオナの魔法だったが、その余波がここまで及んだからこそその行動であった。

大爆発によって生じたクレーターは、俺とリリイの目と鼻の先で止まっている。

もしあの範囲にいれば――その答えはあまり想像したいもんじゃないな。

「……どう、ですか？」

そして、この大破壊をもたらした本人、俺達より一歩先にいるフィオナがゆっくりとこちらへ振り返り言った。

「どうだったかだって？ そんなの決まっているだろう。」

「凄いぞフィオナ！ これで十字軍に勝てるっ！ はーっはっはっはー！！」

そう、凄い、兎に角この火力は凄いぞフィオナ、全く俺の想像を遥かに超える素晴らしい威力だ。

この破壊力をたった一人で叩出すフィオナはとんでもない魔術士だ。

フィオナをパーティから外した共和国のヤツらは一体どれだけ愚か者なんだ。

まあいいさ、そのお陰で廻り廻ってフィオナと出会えたんだ、十字軍が迫る、この絶好のタイミングで。

「フィオナが仲間になってくれて良かった、この火力、存分に生かしてくれ」

フィオナの前に立って、堂々と歓迎の意を伝える。

「そう、ですか……頑張ります」

トレードマークの三角帽子、その広いつばがやや下向きにフィオナの表情を隠す。

なんだか、あまり元気の無い返事だが。

「ん、大丈夫か？」

「すみません、この魔法を使うと――」

そのまま、フィオナは俺の胸へと倒れこんでくる。

「――しばらく動けなくなるくらい、疲れてしまうのです」

イルズ村で俺が一人で十字軍部隊と戦い、フィオナが助けに入った時とは逆だな。

あの時、倒れる俺を優しく抱きとめてくれたように、今度は俺がフィオナを受け止めた。

「そうか、ゆっくり休め」

「はい、お言葉に甘えます」

少しばかり恥かしいので、俺はとりあえず話を続ける。

「しかしあれだな、一発撃つとぶっ倒れるっていうなら、使いどころはよく考えないといけないな」

「そうですね、でもそこはクロノさんが考えてください」

「分かった、ここぞという時に使わせてもらおう」

早速、攻め寄せる十字軍との戦いを脳内シミュレートしながら、俺はフィオナの体を抱き上げた。

いわゆる、お姫様抱っこという状態だ。

「ふわぁっ!?! ク、クロノさん、この体勢は……」

「動けないんだろ、このまま村までちゃんと運んでやるから安心しろ」

「そういうことでは、その、なくてですね……」

三角帽子をいよいよ顔の前までもってきて表情を完全に隠すフィオナ。

あ、もしかして、女性の体に軽々しく触ってんじゃねーよ的なこ

とを思われたか……あくまで善意でやった行動なのだが、余計だったか？

「やっぱり降ろそうか？」

「そういうことでもなくてですね……いえ、ではもうこのまま村までお願いします」

「おう、任せとけ！」

さあ行くか、と思ったその瞬間、背中にぶつかる小さな衝撃。

「クロノ、私も、動けないくらい疲れたから、運んで」

「り、リリィ？」

振り返り見ると、

「運んでよ、私も」

いつもの微笑みを浮かべて可愛くお願いしてくるリリィ。

だが俺には分かる、目が笑ってない、いうなれば、ちょっと怖い。

「い、いや、リリィさっきまで普通に元気だったじゃ——」

「疲れたの、今どっと疲労が押し寄せてきて立ってられないの、だから私も運んでよ、抱っこしてよ、フィオナだけズルイ」

「……分かったよ」

抵抗できる気がしなかった。

結局、リリィとフィオナをおんぶに抱っここの状態で、俺は頑張ってアルザス村目指して1キロ歩くことになるのだった。

そして帰還した俺達の姿を、冒険者達は何も言わず生温かい目で見送ってくれたことは、言うまでもないだろう。

第98話 『エレメントマスター』の最大火力(2) (後書き)

気がついたら、プロローグ、キャラ紹介、含めて100話に到達です。なんだか全然話が進んでない気がします……これからも、よろしくお願いします！

第99話 夏越しの祭り(1)

本来は夏越しの祭りが行われたはずの新陽の月30日は、前日と変わらぬ迎撃準備で過ぎ去る――はずだった。

「な、何だこれは……」

防壁の工事現場から陽が暮れたのでギルドへ戻ってみれば、ロビーには提灯に良く似た光を放つ飾りつけがそこら中に施され、殺風景な広間が一変してお祭会場の装いだ。

おかしい、俺が昼過ぎにギルドを出て行ったときには見慣れたロビーだった、ということは外出中にこの飾りつけが成されたってことなのか？

「おう、帰ってきたなクロノ」

「ヴァルカンか、なんだこの――ってお前の格好もなんだよ!？」

現れたヴァルカンは、厳つい狼ヘッドに捻り鉢巻、それどうみても法被^{はっぴ}にしかみえない薄手の衣服を灰色の巨軀に羽織っている。

ちなみに法被にはこっちで『夏』を意味する文字が背中にデカデカと描かれていた。

「そりゃお前え、今日は夏越しの祭りだろうがよ、ほら、みんな待ってんだ、さっさと着ろや」

常識を疑われるような眼差しを向けられつつ、ヴァルカンから法被と鉢巻を押し付けられる俺。

聞いてねえよ、夏越しの祭りやるってのも聞いて無いし、そもそもお祭りコスチュームがトレース疑惑かかるくらい和風なのも聞いてない、これに加えて禪まであったら訴えて勝てるぞデザイン的に「なに辛気臭い顔してやがる、敵は今頃ワト村占領すんのかかりきりだ、今日中には来ねえよ」

「そ、そうか――」

確かに、敵の進軍具合からいって明日1日くらいは確実に余裕が

あるというのは偵察の報告で明らかになっている。

なら今夜、折角の夏越しの祭りをパーっとやるのも有りかも知れない、いや、このロビーに集う冒険者達から向けられる期待の籠った視線を受ければ、無しという選択肢は有り得ない。

「――分かった」

俺はすでに自分のトレードマークと化している黒ローブを脱ぎ、その下に着るシャツも脱ぎ捨て、上半身裸になって法被に袖を通す。気合を入れて捻り鉢巻を頭に巻くと、うん、もう完全にお祭気分！

「よっしゃあ！ 今夜は派手に行こうぜっ！」

「おう、その意気だクロノ！ おらっ早く乾杯の音頭をとりやがれっ！」

俺はヴァルカンからいつの間にか用意された杯を受け取り、冒険者達が待つロビーのど真ん中へ進んでゆく。

みんなの手にはすでに杯は行き渡り、一杯に注がれた酒を口にするのを今か今かと待ちわびている。

この雰囲気、長い前口上は不要、ただ一言、杯を高々と掲げて言い放つ。

「乾杯っ！！」

思えば、こうして冒険者同盟がほとんど全員集って酒盛りつてのは無かったな、結成当日にクウアル村ギルドで酒は飲んだが、あの時はクウアルに滞在する冒険者のみで今ほど人数もいなかった。

俺はこの機会に冒険者達との親睦を深めるべく、ロビーに広がるテーブルをあいさつ回りの営業マンよろしく右に左に大忙しだ。

と言ってもすでにここ何日も共に迎撃準備を過ごした仲だ、全員顔見知りにはなっているのだが。

「へっ、マメなこったな」

最初の席に戻ってくるなりヴァルカンが言った。

「大事なんじゃないのか、こういうの」

そう考えるのは俺が日本人だからだろうか？

まあいいさ、とりあえずあいさつ回りもひと段落して、ようやく落ち着いて飯が食える。

「そういえば、リリイとフィオナはどこ行った？」

乾杯直後にはこのテーブルにはいたはずなんだが、もしかして他の女性冒険者とガールズトークでもしにいったんだろうか。

「あのお嬢ちゃんならもうすぐ来る、ま、後はテメーのパーティー同士で親睦を深めてくれや」

そんなコトを言うなりヴァルカンは立ち上がって、さっさと他の盛り上がってるテーブルへ向かうのだった。

「ま、そういうことですわ、ほなワシも外させてもらうで」

モっさんがヴァルカンに続くと、他にテーブルにいていた者達も申し合わせたかのように揃って席を離れる。

「な、なんだってんだ一体……」

色々と疑問に思うが、すでに俺だけ取り残された状態。

え、何、俺もしかして避けられてる？

なんて心が傷つきかけたその時、

「クロノおー！」

「クロノさん……」

現れたのは、我がエレメントマスターのメンバーであるリリイとフィオナ。

っていうか、何でリリイは真の姿である美少女状態になってんの？ 今日別に満月じゃないよね、いや、違う、本当に驚くべきポイントはそこではない。

「な、な、何て格好してるんだ！？」

その姿、一言で現すならバニーガール、だ。

二人の少女が身に包むのは、水着程度の面積しか無い黒地の服、胸元は半分程度しか覆われていないし、両足も全て露わになっている。

頭には何の毛皮を使っているのわからんがやたらモフモフしたウサミミをすっかり装着しているため、やはりバニーガールにしか見えなない。

「どう、似合う？」

「……どうですか？」

絶対の自信が表情からにじみ出ているリリイに対し、フィオナの目は泳ぎ、頬はほんのり赤く染まって実に恥かしそうだ。

恥かしいなら無理して着なきゃ良かっただろうに、と思うが、普段のボンヤリと眠たげな表情しか見せないフィオナが恥らっている様子は、ただそれだけで千金に値する価値があるんじゃないのかと即座に考え直す。

リリイの容姿が魅了^{チャーム}を宿すほど美しいということはこれまでで十分過ぎるほど実感しているが、そんな彼女の横に並ぶ恥じらいフィオナはリリイに勝るとも劣らないほど可愛らしいものだった。

「に、似合っていると、思うぞ」

二人に見蕩れるが、どうにか返答する。

「うふふー良かったあ」

満面の笑みを浮かべるリリイは、そのまま真っ直ぐこちらへ歩み寄ってくると、まるでまだ子供状態で当然といった風に俺の膝の上へと腰を下ろした。

「うおっ、ちょ、リリイ!？」

「んん、なあにクロノ？」

膝の上に横向きに座るリリイは露わになった艶かしい両足を組むと同時に、そのか細い両腕が俺の首元へ回される。

ヤバイ、顔が近い、いやもっとヤバイのはリリイの白い素肌が俺の胸元と直に触れ合っていることだ。

調子にのってシャツまで脱ぐんじゃないかった、もしくはこの頼りない法被をすっかり前で止めておくべきだった、肌が触れるのはホントにヤバイんだって、男子高校生が耐えられるレベルじゃないんだよ。

落ち着け、平常心だ平常心、少女リリィと初めて出会ったあの満月の晩では裸だったじゃないか、今は面積少なくとも服着てるだけマシだろう。

し、しかしだな、何故か今のリリィの肌は妖精特有の発光がほとんど収まっていて、ホントに普通の女の子の素肌にしか見えんのだ。何、これ、どういうトリック？ これも魔法なの、便利すぎるよリリィの固有魔法^{エクストラ}。

なんだかぶっ飛びつつある思考をどうにかこうにか押し留め、この嬉し恥かしな事態の解決を図る。

「ちょ、ちよつと離れような、リリィ」

「うふふ、イ・ヤ♪」

このやり取りは初めて会った時もやったよな、やっぱり少女リリィは反抗期に違い無い、この32歳め、遅れてやってきた反抗期だよ。

「ほら、この状態だと飯食え無いし、さ」

「大丈夫、ちゃんとして私が食べさせてあげるから」

真っ直ぐ俺を見つめるエメラルドの瞳が妖しく煌く、どこか獲物を前にした猛禽のようである。

つまり、どうあっても俺を逃がさない意思が見て取れた。

「あーえーと、それは、なんつーか、普通に恥かしい、人目もあるし」

「えーっ、しょうがないなあ、それじゃあねー」

と、小悪魔的な笑みを浮かべるリリィ。

「ここにキス、してくれたら離れてあげる」

指し示すのは仄かに朱に染まったプニプニと柔らかそうな頬。

「ほ、本気かリリィ……」

「ふふ、冗談かどうか試してみてよ、クロノ」

さあどうぞと言わんばかりに、瞳を閉じて横を向くリリィ、その頬には俺がほんの僅か顔を前に動かせば唇が届く距離にある。

「ほら、早くしてよ、私も恥かしいじゃない」

なんて言うが、その口調は俺と違ってはっきりとした余裕を感じさせる。

くっ、何だか一人悩んでる俺が馬鹿らしくなってくる、リリイが酔っているのか、ふざけているのか、からかっているのか、マジなのか、その心は分からんがここまでされてほっぺにチュウ如きで戸惑うのは男が廃るってもんじゃねえか。

如きとは言うが、初めてだけどな、女の子のほっぺにチュウすんの。

「ええいつ、行くぞっ！」

覚悟を決めたその瞬間、俺の唇に柔らかな感触がする前に、

「うおっ！ 眩しっ!？」

眼球に真っ白い閃光が突き刺さった。

「な、なんだよ！ ドッキリかこれっ!？」

残念だよくしょう！ とか思いつつ、ホワイトアウトした視界が数秒で正常に戻ってくる。

「んー、はやくー、チュウー」

視線を下げると、俺の膝の上にいるのは、ついさっき色っぽい表情で俺へ頬を向けたそのままの体勢でいる、子供の姿のリリイであった。

「はいはい、ほっぺにチュウね」

俺は何も考えず、何の抵抗も覚える事無くリリイを抱え挙げると、その丸いほっぺに唇を落とした。

「キャ！」

頬を赤く染めて恥らっているのか身をよじるリリイ、うん、実に可愛らしいぞ、やっぱりリリイはこうでなくちゃな。

「はい、じゃあちゃんと自分の椅子に座ろうな」

「はい」

デレデレと嬉しそうな表情の幼女リリイを、右隣の席へと降ろす。バニーガールの衣装は、体が小さくなった所為で脱げ落ち、頭にあるウサミミが残るのみである。

ちょっと懐かしの全裸リリイであるが、その素肌は妖精の白い輝きが戻り、その身を優しく包み込んでいた。

「ふう、なんかドッと疲れたぜ」

「リリイさんは残念だったでしょうけど」

気がつけば、いつの間にやら左隣の席へ腰を下ろしているフィオナ、勿論バニー姿のままだが、すでに自分の前に肉料理山盛りの皿を用意しているあたり実に彼女らしい。

俺とリリイの恥かしいやり取りを間近で見ていたせいかな、すでにフィオナはいつもの冷めた表情となっていた。

「……フィオナまでキスしろとか言わないよな？」

「言って欲しかったのですか？」

「魅力的な話ではあるけど、今は困る」

「それでは、代わりと言ってはなんですが、私が料理を食べさせてあげましょう」

思わぬ返答に、目を丸くする。

「え、マジで？」

「遠慮しなくても良いですよ、これは特別サービスですので」

特別サービスってなんぞ、祭りだからか？　そもそもバニー姿の意味も未だに分からんし……

「ではどうぞ、あーん」

俺の疑問を他所に自分のペースでさっさと料理を差し出すフィオナ。

顔の前に突き出されたのは肉汁滴る謎肉、ではなくドルトスの肉、イルズ村のギルドでリリイと一緒に初めて食べた思い出の一品だ。

「あーん、ああ~~~~~」

「分かった分かった、今食べるから急かすな！」

思い出に浸る間を与えてくれないようなので、意を決して目の前の肉にかぶりつく。

「うん、美味しい、やっぱ謎に——ドルトスの肉は美味しいな」

「そうですか」

フィオナは再びジューシーなドルトス肉をフォークで突き刺す。
俺もまた口を開いて食べさせてくれるのを待つ、が、

「モムモム——確かに美味しいですね」

「俺に食べさせてくれるワケじゃねーのかよ!？」

一人であーんって口開けて待ってた俺バカみたいじゃねーか!

「もう一口あげたから良いじゃないですか?」

後の料理はもう全て私のモノだと言わんばかりに、高速のフォー
クさばきでドルトス料理を消費してゆく。

「いや、うん、期待した俺が馬鹿だったよ……」

フィオナのサービスタイムは早くも終了、今の彼女はもう自分と
料理だけの美味しい世界に旅立っていったのだった。

「クロノおーあーん!」

右隣から聞こえてくるのは、天使、改め麗しき妖精の声。

小さな手にフォークを握り閉め、俺へ料理を差し出してくれてい
る。

「うう、ありがとなリリィ……」

口にする料理の味は、いつものよりずっと美味しく感じた、愛情
補正って凄い。

第99話 夏越しの祭り(1) (後書き)

夏越しの祭りってなんだっけ？ という人は第47話『夏の始まり』をご覧ください。

第100話 夏越しの祭り(2)

そんなこんなで、リリイとキャッキヤウフフしつつも一頻り食事を終えて、俺は改めてこの話題を切り出すことにした。

「ところでさ、その格好は一体何なんだ？」

「え？」

何かおかしいところでも？ と本気で分からない顔をするフィオナ。

いやフィオナが着てるのいつもの魔女ローブじゃないから、自分が今どんな格好してるのか忘れてんじゃないのか？

「ああ、コレですか」

俺の顔と自分の格好を3往復くらい見てから、漸く理解を示してくれる。

「この辺に伝わる若い女性の伝統的なコスチュームらしいですよ」
バニーガールが？ そりゃまた随分とヤラシイ伝統もあったものだ。

「ここ一番で装備するのだとか」

ここ一番ってどのタイミングを指すんだよ。

「リリイさんが夏越しの祭りにかこつけて、この格好でクロノさんにサービスして労ってあげましょう、というワケなのです」

「そうなのか」

「そうなのです」

自信満々に言い切るフィオナ、登場時の恥じらいはどこへやら、今は何の後悔もありませんという顔をしている。

いや、まあ嬉しく無いといえば100%ダウトになるけどさ、如何せん唐突すぎた、まさかバニー姿で登場とは思ってもよらないよ、そしてそれが伝統的なコスチュームということなんざもっと思いつかないよ。

「うん、でもありがとな」

「いえいえ」

フィオナへ素直に礼を言いつつ、リリイを膝の上に乗せて、その子供特有の細くサラサラな髪を撫でる。

「ありがとなりリイ、元気でたぞ」

「えへへー」

くすぐったそうにするが、嬉しそうに微笑むリリイ、ヤバイ、可愛すぎて俺のリリイがヤバイ。

「しかし――」

改めてフィオナに視線を戻すと、凄い格好だなとしみじみ思う。

俺を労う為にこんなことしているという感動(?)話を理解してはいるが、この露出の高さがストレートに刺激的なことに変わりはない。

まして、普段からデカイ三角帽子と魔女ローブという、肌どころかボデイルインすらほとんどでないような格好だ、いつも隠れているものが露わになるというHENTAI相乗効果のお陰で、そのインパクトたるや計り知れない。

尚且つフィオナの素顔はあの少女リリイと並べても霞むことの無いほどのハイレベル、冒険者ランクで例えれば文句なしの5がつく。輝く太陽を思わせる金色の瞳に、淡い水色のショートヘア、日本人から見れば不思議で幻想的なカラーだが、そうあるのが当然のようにフィオナには似合っているのが凄い所だ。

光こそ放っていないが彼女の白く透き通るような肌は、今や肩や両足などかなりの部分が俺の目の前で晒されている。

少女リリイよりも肉体的な年齢が上のフィオナは、ちゃんと出るところは出るような女性らしい丸みを帯びた体つきであることが今なら分かる、バニー姿の所為で見事にくびれた腰周りなど世の女性が羨むことしきりだろう。

しかもあんなに朝昼晩ガッツリ食べているのだから、尚更である。「どうかしましたかクロノさん？」

俺の不躰な視線の前に突如割り込んでくる黄金の双眸、その目に

は言葉通りの疑問の色しか浮かんでいないことが、かえって心苦しい。

「スマン、なんでもな——痛っ！」

とは言うが、言うほどのダメージは無い。

指先に走る僅かな痛み、見ればリリイがジト目で俺を睨みながら指にカプカプ噛み付いていた。

「うーっ！」

「あーっ、ごめんごめん、俺が悪かったから離してくれ」

「ぶん」

頬を膨らませてそっぽを向くリリイ、いかんな、これは俺がいか
がわしい感想をバニーフィオナに抱いたことを読まれたに違い無い。

「ごめんなー」

怒ってるくせに俺の膝の上でごろごろするリリイは、なんだかワ
ガママな猫みたいだ、ならばここはしっかり撫でてご機嫌をとらな
きゃな。

「クロノさん」

「ん？」

リリイを撫で撫でしつつフィオナとの会話に戻る。

「そのままリリイさんを可愛がってあげてください、この衣装をク
ロノさんに見せるのだと物凄く意気込んでいましたから」

それはまた、嬉しくも恥かしい、心温まるエピソードだな、ちょ
っと本気でときめいちゃいそうだぞ。

「そうか、ありがとなーリリイー」

「キャツキャ！」

わしわしといつもより三割り増しに愛情籠めてリリイを撫でる。

俺の熱い思いを分かってくれているのか、リリイの撫でられテン
ションもいつもより高いと見える。

「しかし随分と仲良くなったもんだな二人とも」

「ここ最近はずっと一緒にポーション作りでしたから。」

リリイさんは妖精の霊葉を仕上げる為に今日も元の姿に戻って魔

法を使っていました。けれどその所為でクロノさんの前で元に戻っていられる時間が数分しか残らなかったのですよ」

「ああ、いきなり子供に戻ったのはそういうことだったか」

確かにリリイが『クイーン・ベリル紅水晶球』で元に戻っていられる時間は30分、その最後の持ち時間を使って全力で俺に絡んできたわけだ。

なんだか、少女リリイにちゃんとキスしてやれなかったのが酷く惜しく思える。

「今日は限界まで力を使ったようなので、一晩眠るまでは、意識を戻すこともできないでしょう」

「そうか、凄い頑張ってたんだなリリイ」

むふーっと、リリイが膝の上で恥かしそうに体をよじる。

「それはそれとして、こうして3人だけが集ったのは、リリイさん曰く『エレメントマスター』としての親睦をより深めようというところらしいですよ」

「ああ、だからみんな席を外してくれたのか」

以外と気が利くんだな、感心すると同時に心の中で空気の読める冒険者達に感謝する。

「ところで、親睦を深めるって具体的に何をどうすればいいんだ？」

「それは私にも分かりません、学生時代はそういった集りにまるで縁が無かったものですので」

サラっと悲しいことをカムアウトしちゃうフィオナ。

「えーと、学生時代の話は触れない方がいいか？」

「いえ別に、ずっと一人でも卒業は出来ましたし」

うわ、もっとイヤなこと聞いちゃった、これは確実に友達0人だよ、俺も友人は多いほうじゃなかったけど、0ってのはあんまりじゃないか。

いくらフィオナが超ヤバイ威力の攻撃魔法をダンジョンで撃っちゃうからって、それだけで避けなくなっただけいいじゃないかよ。

だが当の本人は特に気にしていないように言っている、でもそれが返って悲しくて……

「よし、今夜は飲もうぜフィオナ」

イヤなことがあったらお酒を飲んで忘れるのが大人ってものさ、俺まだ高校生で飲み会の経験なんか向こうの世界では一度も無かったけどな。

でもこっちきてからはそれなりに嗜むようになったんだぜ。

「もう飲んでますけど」

「いいんだよ、こういう勢いが大事なんだ、じゃあエレメントマスターの親交を深めるために、乾杯っ！」

「乾杯」

「かんぱーい！」

3つのグラスが合わさる。

さて、何を話そうかな、なんだか今のノリで行くとあることないこと余計な話をうっかり喋ってしまいそうだ、気をつけなければ。

深夜、俺は眠りこけたリリィを背負ってギルドの階段を上がる。

フィオナとはついさっき分かれたばかり、結構な量を飲んでいたが、高いアルコール耐性を持っているのかほんのり頬が染まるくらいのはろ酔い状態だったので、良い気分で今夜は眠れるだろう。

一方の俺は相変わらず改造された体のお陰で、足取りもしっかりと危なげなく階段を上り、廊下を歩く。

このまま自室に戻ろうか、と思うが俺には寝る前に寄っておかねばならない部屋がある。

「入るぞ、シモン」

「あ、お兄さん」

そこはシモンの部屋、開発の為のスペースを確保する為二つの部屋の壁をぶち抜いて繋げてある。

その倍広い部屋の中心で、白衣姿のシモンが座っていた。

「悪いな、俺達だけで騒いで、うるさくなかったか？」

「いいよ、僕、ああいうの苦手だし、お酒も飲めないし。

それに音も気になるほどじゃないよ、集中すると周りの雑音は気にならないタイプだから」

シモンは自分の銃の調整を一旦切り上げたのか、その場を立ち上がって俺の方を向いた。

その可愛らしい顔に若干の疲労が窺える。

出会ったあの日から今まで、かなり根をつめて作業してたからな。それにシモンの仕事は開発だけではないし、実は俺以上にハードワークなんじゃないだろうかと少し心配になる。

「しかし、錬金術師ってのは、魔法にも詳しいものなのか？」

その問いかけに、シモンは苦笑しながら応えた。

「僕はただ、術式を少しかじったことがあるくらいで、描いた魔法陣や唱えた詠唱で実際に魔法を発動させられるわけじゃないよ」

だから、魔力の無い自分には一番肝心な現実の魔法の行使が出来ないのだと、半ば自虐気味に呟いた。

「けど、そのお陰で機関銃は完成しそうだ」

「まあね、初めて魔法の技術を覚えておいて良かったと思えたよ」
使えない技術を覚えるのは、きつと苦痛だっただろう。

まして、他に難なく使いこなす人がいるのだ、覚えるのがバカらしくなることを、一体誰が咎められるというのか。

しかし、今はそんなことを詳しく聞くべき時では無い。

俺は思い出したように別な話題へ切り替えることにした。

「あ、何か食うものでも持ってきた方が良かったか？」

「大丈夫、さっき、って言っても結構前だけど、スースさんが色々持ってきてくれたし」

「そうか、仲良くやってるようだなによりだ」

うん、と小さく頷いたシモンは、椅子の一つを引いて「座る？」と問いかけてくる。

「いや、ちょっと様子を見に來ただけだから、もう行くよ。」

シモンも今夜はもう寝た方がいいぞ」

すでに真夜中といえる時間帯、夜警についているわけでもないし、夜更かしして良いことなど無い。

「うーん、でも——」

「無理しなくていい、倒れられたらこっちが困る」

「そっか、うん、じゃあもう寝ようかな」

「ああ、そうしろ」

シモンに背を向けて退室すべく扉へ向かう。

「……たぶん明後日、なんでしょ」

何が、とは聞く必要が無い。

足を止めて、そのまま背中越しに別の質問をした。

「ああ、怖いかな？」

「ううん、この数日は、凄い楽しかったよ。」

今まで考え付かなかったようなアイデアをお兄さんから沢山聞けた。

それにね、こんなに僕を頼ってくれた人ってお兄さんが初めてだったから、ちょっと、嬉しくて、ね」

「そうか——これが終わったら、シモンには造って欲しいもの、沢山あるからな」

「うん、僕も楽しみにしてる」

それ以上は、言葉を重ねることはしなかった。

「じゃあな、おやすみ」

「うん、おやすみ」

俺は静かにシモンの部屋を後にした。

「明後日、か——」

小さく呟く。

今日の夏越しの祭りにかこつけたどんちゃん騒ぎは、迫る戦いの緊張感を大いにやわらげてくれた。

しかし、新陽の月30日、今日この日、本来なら俺はイルズ村で過ごしていたはずだったんだ。

ニアレコに酒をおおると約束したし、リリイと一緒に屋台を回る

はずだった、きっとヘタレなニーノを見て笑っていただろうし、ア
テンに約束以上にたかられたりもしただろう。

けれど、それはもう二度と叶うことの無い光景。

それがどんなに悔しくて、悲しくて、辛いことか――だが、俺の
目にはもう涙は流れない。

イルズのみんなを埋めた墓の前で、俺はもう十分泣いた。

これから先、俺がやるべきことはただ一つ、

「――見てくれよ、俺がヤツらを殺す、何人でもな」

十字軍を名乗る悪夢の軍勢に、一つでも多くの死をくれてやるこ
とだ。

このアルザス防衛線で、お前らが仕出かしたことを、その血でもっ
て贖わせてやる。

第100話 夏越しの祭り（2）（後書き）

表向きには今回が祝100話ですね。文字数から換算して、文庫本4冊くらいになります。その割には話の展開が……

戦いの前の最後の平穏、最後の晩餐と言ったほうが良いでしょうか、そんなお話でした。

フィオナ（学生時代）がぼっち、シモン（現在進行形）もぼっちと何だかクロノの仲間はぼっちが多いですね。そういえばリリイもぼっち……

さて、次回でついに第7章が完結となります。なんだか後半部分はあんまり準備してなかった気がしますが（苦笑）

第101話 黒の館（ブラックボックス）

その翌日、月は替わり初火の月1日、クロノの黒化により闇夜のような外観をもつギルドの会議室にて、冒険者同盟の代表メンバーが一堂に会していた。

「まずは順に報告を聞いていこう、ワト村のMPK作戦も破られたと？」

「ええ、恐らく敵の大将であると思われる司祭が、ガルダを仕留めたわ」

クロノの問いかけに、偵察部隊の代表である『三獵姫』のリーダーにして長女のイリーナが回答する。

「ガルダはかなりの歩兵を負傷させたようだけど、残念ながら重装備の騎士や天馬騎士などに損害は与えられなかったようね。」

土と光の魔法を巧みに扱う司祭が先頭に立ち、ガルダを始めワト村のモンスターを順当に殲滅していったわ」

「そうか、ランク4のガルダをぶつけても戦果はかんばしくなかったか」

「なんだよ、エムピーケー作戦とやらは失敗なのかよ？」

MPK作戦実行メンバーの一人であるヴァルカンは、2メートルを超える巨躯を窮屈そうに椅子へと座らせている。

「一人でも敵の戦力を減らせたなら成功とはいえるぞ、実際に何人殺して何人負傷させたかという正確な数字は分からないから実感は無いかもしれないが。」

それに、一番の戦果は最短3日で来ると予測した十字軍の進軍を、今日まで遅らせたことだ」

そのお陰で、3日で仕上げるよりはずっと多くの備えをすることが出来ていた。

焦土作戦とMPK作戦がどれほど十字軍の進軍に影響を与えたの

か詳しい事はクロノ達には分からないが、現実には敵が1週間もの時間をかけてここまでやって来たという結果が何よりも重要である。

「どうやら敵はランク4のガルーダを難なく仕留められる程度には力を持っていると改めて認識はできただろう、人間だけの軍団だと舐めてかからないよう注意して欲しい」

これまでに偵察部隊の報告で敵の姿や装備などの情報は冒険者達の耳に入っていたが、現実には高ランクのモンスターを倒した実績を示されれば、その力をより理解できるというものだろう。

もつとも、この忙しい迎撃準備期間を経てこの場に居る彼らには人間相手という油断はすでに無いと言っても良いほど緊張感を保っていた。

「結局よお、エムピーケーって何のことだったんだ？」

「え、言って無かったっけ？」

「言ってねーよ！」

ガオーと吼えるヴァルカン。

「言っても分かんないと思うけどな、モンスタープレイヤーキラー、俺の故郷の言葉で頭文字をとってMPKと略されるんだ」

「はあ？」

「モンスターを利用して敵を殺す、そのままの意味だ、それ以上の深い意味は無いからあまり気にしないでくれ」

そもそもMPKモンスタープレイヤーキラーというのはクロノが以前、まだ異世界に召喚される前、つまり高校生だったころにプレイしていたとあるネットゲームに伝わる悪戯(?)の一種である。

ゲームをするプレイヤー同士は攻撃が通らないので、普通は他のプレイヤーを倒すことは出来ない。

しかし一定の距離に接近する(視界に入る)とどこまでも追いかけてくるアクティブモンスターの習性を利用して、多数のモンスターを自分へターゲットさせる。

そしてそのまま他のプレイヤーが戦っている、あるいはパソコンから離れて休憩中の無防備なプレイヤーに向かって進むのだ。

そして相手プレイヤーの前で自分はレポートしてその場を脱する、すると残されたモンスターはその場に居た別のプレイヤーにターゲットを切り替え、結果殲殺にされるといふ悪質なプレイである。

ちなみにクロノのとある友人はこのMPKの達人であった。

兎も角、そんなしょうもないゲーム知識から着想を得たのがMPK作戦、野生のモンスターを誘導し、十字軍にぶつける、そういう作戦だったのだ。

モンスターの子供を囨に村まで誘導させる、というある意味非人道的な作戦とも言えるが、そういった囨作戦はクエスト成功のためなら手段を選ばない冒険者の間では特別禁忌というワケではない為、特にクロノの品性が疑われること無くヴァルカン達はMPK作戦の実行に協力したのだった。

ついでに、子供（あるいは卵）を誘拐する冒険者にはちゃんと十字軍のコスチュームで変装させたので、怒り狂ったモンスターは村へやってきた十字軍をより確実に敵視したことだろう。

「大事なのはここから先だな、十字軍がワト村まで占領したってことは、もう明日にはヤツらがここを攻撃できるってことだ」

クロノの言葉に、冒険者達はついに決戦の時が近いことを悟り、室内により一層の緊張感が漂った。

「つい先ほど、敵の斥候が村の近辺に現れました、こちらが迎撃準備を整えて立て籠もっていることはすでに向こうも知っていることでしょう」

イリーナの報告にクロノは一つ頷いて、言葉を続けた。

「恐らく、いや、確実に十字軍は明日の朝、アルザスに攻撃を仕掛けてくる。」

ビンさん、工事の方はどこまでいけそうですか？」

アルザス村ギルドのギルドマスターにして、ギルド要塞化工事の担当者にもなっているビンが「うおっほん」と一つ咳払いをしてから報告を始める。

「出来る限りの防備は調った、有利鉄線のお陰で歩兵の侵入を許すことはないじやろう、その代わり天馬騎士やら重騎士やらを止めるのはオマエさん方にかかっとる」

「十分です、どちらも止めて見せます」

力強いクロノの肯定に、豪快に笑いながら期待している、とビーンが言った。

「おお、それとアレの設置も先ほど終わったぞ」

「アレって、あのデカイバリスタ？」

クロノの脳裏に、今朝方ビーン他数名のドワーフ達が荷車を引いて持ってきた巨大なバリスタ、丸太のような矢を二連装するダイダロス王城でも使用されている兵器を思い出す。

「とりあえず正門に置いといたから、上手く使ってくれ」

一体何処からそんなモノを持ってきたのかは知らないが、その辺の詮索は野暮だと思ってクロノはありがたく受け入れることにした。

「素敵なロマン武器をありがとうビーンさん」

「なあに、いいってことよ、この機会に使い潰してやってくれ」

由来はどうあれ火力のアップはクロノの最も望むところである。

バリスタの導入は予想しなかったイレギュラーではあるが、本来あるべき火力アップの方法である『機関銃』に関して、クロノは問うことにした。

「シモンの方はどうだ？」

「は、はい！」

多くの冒険者が集っている為か、やや緊張の面持ちで立ち上がるシモン。

幾つもの視線が彼に集中するが、その中の一つだけ、
「うー」

どこか敵意の籠ったリリイの視線があった。

「あの、お兄さん」

「どうした？」

「何か、リリイさんが睨んでるんだけど……」

「こ、こらリリィ、まだ気にしてるのか!？」

「ううー!」

如何にも不機嫌ですと言わんばかりに頬を膨らませるリリィに、クロノは彼女とシモンの邂逅の瞬間を思い起こしていた。

吹き飛ぶ研究室（物置）の扉、魔力全開の少女リリィが震え上がるシモンに詰め寄る、そしてそれを必死に止めるクロノ。

あの一件以来、リリィは幼女状態に戻っても不思議とシモンを敵視、というか警戒しているのだ。

誰にでも優しいあの妖精リリィが何故シモンにだけそんな厳しい態度なのか、クロノには分からなかったが、分からないなりに二人の仲を取り持とうと努力はしていたものの、未だにその成果は実っていないようであった。

「すまん、続けてくれ」

むくれるリリィを膝の上に抱きかかえたクロノは気まずい表情を浮かべつつシモンへ話を促す。

「あ、うん、えーと、とりあえず機関銃の方は完成したよ。

あとは換えの銃身と弾がどれだけ用意できるかによるね」

「よくやってくれた、弾の方は引き続き俺が造る。

銃身は、換えが少ないし魔法で冷やしつつ騙し騙し使っていくしかないな」

むしろ本当に一週間で完成させただけ、十分過ぎる成果である。

「うん、流石に今から適切な冷却機構は実装できそうにないしね」

「十分だ、機関銃が‘二挺’あれば必ず敵の突撃を止められる。

モっさん、機関銃の使い方は大丈夫か？」

「おう、ワシに任せとき!」

サムズアップで自信のほどを表すモズルン、いつも調子のよい彼だが、そこは流石のランク4冒険者、大丈夫だろうとクロノは判断する。

「よし――」

それから、クロノは幾つか補給やメンバーの配置に関して報告を

聞き終えてから、最後に言った。

「ついに明日、敵はここへやって来る。

結果的にたった一週間しか準備期間は無かった急造の防衛線だが、ここで何とか俺達が持ち堪えるしかない」

避難する村人達の最後尾となるビーン達はこの後出発する、もし1日や2日でここを突破されれば、彼らを含め間違いない全滅の道をたどる事になるだろう。

「俺達は少なくとも1週間はここで敵をくい止めなきゃいけない、苦しい戦いになるだろうけど、みんなの命は俺達にかかってるんだ、死力を尽くして戦おう」

そう静かに決意の言葉を述べたクロノ、集った冒険者達がそれぞれ何を思ったかは分からない。

「戦おう、おう！」

リリイが小さな拳を振り上げて声を挙げる。

「おう」

フィオナも無表情ながらリリイの声に続く、そして次の瞬間には、

「おうっ！！」

「おおおっ！！」

「おうっ！！」

この場に集った全ての冒険者は立ち上がり鬨の声を挙げる。

ギルドを揺るがすほど勇壮な鯨波が轟き、クロノの元に冒険者達の意味は一つとなった。

初火の月2日、薄っすらと白い霧が立ち込めるローヌ川の向こうから、十字を掲げた白き軍勢がやって来る。

「あれか——」

列の先頭に行くのはダイダロスの西部占領を担う十字軍の将にして、敬虔な十字教徒ノールズ司祭長。

「報告通りですね、魔法で強化されていると思われる建物^{ギルド}は」

隣に立つ部下の言葉に頷き、応える。

「なるほど、偵察兵が黒の館^{ブラックボックス}と仇名をつけたのも納得がいくな、なんと禍々しい闇の色をしているではないか」

街道の左右に広がる林はまばらになりローヌ川の河川敷が広がり、川にはアルザス村へと通じる一本の橋がかかっている。

その先には何者の立ち入りを拒むかのように、木造の柵と共に鉄線の茂みが設置されていた。

そして村の正門のすぐ脇に、黒一色のギルドが不気味に聳え立つ。「だが、所詮は見掛け倒しよ」

目の前で待ち構えているであろう魔族にノールズは一切恐怖を抱く事は無い。

敵の数はどんなに多く見積もっても300、自軍の総兵力を考えれば比較にならないほどの小勢。

この圧倒的戦力差を生かして行う戦術は、正々堂々と正面突破のみ。

川が前面にあるが、兵を迂回させて包囲を完成させるには、この辺の地形を考えると難しく、また出来たとしてもかなりの時間を要する。

時間をかけすぎると魔族を逃してしまい、そもそもの目的が達成できないので、今回は渡河作戦の常套手段と呼べる迂回戦術はとれない。

また、追撃用の騎兵も消耗させるわけにはいけないため、基本的に攻撃には参加させない。

このような‘縛り’はあるものの、例え手持ちの兵が同数の300程度しかいなかったとしても、鋼鉄の全身鎧に身を包み、耐物理^{アーマースナイト}耐魔法に優れた重騎士と、空を舞う脅威の機動力を誇る天馬騎士^{ペガサスナイト}、この2つがあるだけで急造の防備を整えた魔族など、打ち破るのは容易い。

ノールズは必勝を確信しながら、自身が待ちに待ったその命を下

す。

「攻撃開始っ！！」

しかし、幸運にも彼はまだ知らない。

クロノの十字軍に対する憎悪と、現代の知識、そして自身の魔力の全てを注ぎ込んだ要塞化ギルドの立つアルザス村防衛線、これがどれほど血の犠牲を強いる脅威の殺戮地帯キルゾーンであるかを。

かくして、冒険者同盟と十字軍による、血で血を洗う泥沼の攻防戦が始まった。

第101話 黒の館（ブラックボックス）（後書き）

第7章「迎撃準備」完結です。

さーて、明日から血で血を洗う泥沼の攻防戦がはっじまっるよー

第102話 冒険者同盟VS十字軍（1）

攻撃開始の命を受け、十字軍の先鋒である重騎士部隊アーマリーナイトが動き出す。
重厚な全身鎧フルプレートアーマーに全身を包み巨大な大盾タワシールドハルバードと槍斧を手に横一列となつて進む重騎士は、鋼鉄の壁が迫り来るような威圧感を放つ。

「まだ撃つな、アレにはどうせ矢も攻撃魔法もロクに通らないだろう」

柵の前に弓を始めとした遠距離攻撃用の武器を携えた冒険者達に向かつてクロノが声を発する。

重騎士の部隊はすでに川にかかる橋へ足を踏み入れ、とつくに弓の射程圏内に入っているのだが、クロノは攻撃命令を下さない。

「敵が持つ最大の防御力を誇る部隊でしょう、私達が見た限りでは、あれ以上に重装甲の兵はいませんでした」

クロノの横に立つのはリリィでは無く、エルフ三姉妹の長女イリナであった。

姉妹全員がこの場には揃い、迫り来る敵をその手にする魔法の弓シルフライト『風雷弓』で撃つべく魔力を滾らせている。

「真っ先に重装甲の騎士で正面を蹴散らしてから、歩兵を突撃させるつもりだろう。」

攻城兵器の代わりといったところか、確かにアレなら木の柵も有刺鉄線も難なく突破してくるだろうな」

もしこのまま重騎士の接近を許せば、正門はあっさりと突破され、後続の部隊の道が切り開かれる。

門が突破されれば、圧倒的な数で勝る敵を止めることなどとてもできない、アルザス村は今日の日暮れどころか正午前には陥落するだろう。

「どうやら、魔法によって強化されているようですね、それに——光の防御魔法も展開しているのが見えます」

「じゃあ本当に矢も攻撃魔法も効かないな、見た目通り鉄壁の防御力ってわけだ」

クロノの元いた世界では、銃の登場によって甲冑の歴史は幕を閉じた。

鋼鉄のプレートで全身を覆っても銃弾を止める事は出来ない、兵の主力が銃になれば、最早鎧はただの重りに過ぎない。

だがこの世界では魔法の強化によって銃弾を完璧に防ぐことが出来るのだ。

故にクロノの目の前に迫り来る白銀の甲冑は、その見た目以上に強固な防御力を発揮する。

彼らの突撃を冒険者同盟の火力で止める事は難しいと予想される。フィオナはクロノに、ああいう重装甲の部隊は隊列を組んだ上で、^{ユニオン}複合魔法を発動させて非常に強力な防御魔法の行使も可能だと聞いていた。

重騎士の部隊はその機動力の低さを補うべく、遠距離からの攻撃を防ぐことに特化しているということだ。

ではどうするのか、強力無比な防御力を誇る重騎士の軍団をどうやって止めるのか、すでにして絶体絶命なのではないか、そう考えてしかるべき状況だがしかし、

「クロノ、顔が笑ってますよ」

「ああ」

クロノは笑ってしまった。

「そりゃ笑うさ、こんな素人兵法が本当に上手くいくんだから——」

すでに重騎士の軍団は橋の中ほどに差し掛かり、鋼鉄の踵で踏み鳴らす行進音が冒険者達の耳に届くほどの接近を許している。

そう、敵は橋のど真ん中にいるのだ。

「今だ、橋を爆破しろ」

その音を聞いた瞬間、ノールズは無数の後悔の念がよぎった。
何故、目の前の橋をろくに調べもせず進ませたのか。

何故、敵がわざわざ川のあるこの場所に防衛線を敷いたのか。
何故、この期に及んで罠など無いと侮ったのだろうか。

どれも今となっては遅い、後で悔いるからこそ後悔なのだ。

どれほど悔やんでも、失った兵の命は決して戻ることなど無い、
そう、あっけなく川面に沈んだ重騎士達の白銀の威容は二度と戻る
ことは無いのだ。

ドドンっ！！

爆音が響いた。

「バ、バカな……」

ノールズも、隣で突撃を待つ兵達も、目の前の光景を瞬時には受
け入れがたかった。

川にかかる木製の橋、それなりの大きさと馬車は何台も通っても
崩れる心配は無いような頑丈な造りをしたものだと一目で分かる。

いくら重装備と言っても騎士が集団で渡った程度で崩れるはずが
無い。

だが、その崩れるはずが無い、崩れてはいけない、大きな橋はそ
の支えとなる橋脚から爆炎を吹き上げると同時、脆くも崩れ去った。
気づいた時にはもう遅い、敵はあらかじめ橋に細工をしていた、
ただそれだけの事に過ぎない。

土台部分を切断しておいた、あるいは木材を抜いて構造の弱体化
を計っておき、ここぞというタイミングで橋が崩れるよう、何等か
の魔法の遠隔操作によって爆破、破壊したのだ。

魔法による爆破工作は、魔法陣を描くか魔法具マジック・アイテムを設置、あるいは
攻撃魔法を宿す杖に許容量以上の魔力を一気に流し込む、などなど
時間と魔力をかければ中級程度の魔術士が数人いれば不可能な事で

はない。

「そんなバカなっ!!」

ノールズの叫びは、ガラガラと橋が崩れ去る轟音に掻き消される。空中でバラバラと分解しながら落ち行く橋、そして、無様に転げ落ちる幾人もの重騎士。

矢も炎も雷も防ぐ強力無比な防御力を発揮する重騎士だが、深い川面に向かって投げ出された彼らはあまりに無力。

あらゆる攻撃を無効化する頑強な鎧も、光の防御魔法も、丸ごと沈んでしまえば意味は無い。

ただその鋼鉄の圧倒的な重量によって、人間では到底浮上する事など出来ない脱出不能な棺桶となり水没するより他は無い。

「す、進めっ! 重騎士を助けるのだっ!!」

バシヤバシヤと水面を叩き儚い抵抗を見せるも次々と沈んでゆく哀れな重騎士の姿を前に、ノールズは救助の命を下す。

恐らく半数以上は助からない、だが、一人でも、一人でも多く助けなければ。

その思いは自分の配下を救うという純粋な善意からか、それとも自分の油断によってあっさり重騎士部隊を壊滅させた責任を少しでも軽くしたい為か、様々な感情がない交ぜになりながら、ノールズは兵を率いて駆け出した。

「見ろ、水深の浅いところに落ちた者は無事だ! 急いで引き上げろっ!!」

ロース川は全ての重騎士を飲み込むほど絶望的な深さは無かった、かろうじて胃の先端を水面から出して、必死に岸へたどり着こうと蠢いている姿がちらほらと見える。

せめて彼らだけでも助けなければ、その思いは、さらなる轟音によってまたしてもあっけなく崩れ去る。

「何だ、この音は……」

ドドドド、とまるで大雨で増水した河川のような轟音が上流から響く。

ありえない、兵の誰もが思うが、その音はどんどん大きくなる。
今日は晴天、雨など一粒たりとも降っていない、川が増水するはずがない。

しかし、音はもうすぐそこまで、

ドドドドドオ！！

認識した瞬間、巨大な水のうねりが川の中に存在する者を死者と生者の区別無く全てを飲み込み、流していった。

僅か数秒、川面を瀑布がなぞり、そこにあった全ての重騎士を押し流し十字軍の目の前から完全に消し去った。

崩落した橋より数百メートル程上流、その河原に一人の魔女が佇んでいた。

「こんな感じで良かったんでしょうか」

フィオナ・ソレイユ、クロノの冒険者パーティ『エレメントマスター』のメンバーにして魔力の制御がヘタクソな暴走魔女。

そして、川に投げ出された重騎士達を鉄砲水で押し流した張本人である。

方法は実に単純、フィオナが使える最大の水属性攻撃魔法が発揮する膨大な水量をローヌ川へぶち込んだのだ。

水攻めは本来、堰の建造と水が溜まるまでの時間の両方が必要だが、フィオナはその二つの条件をたった一発の魔法で代用したのだった。

「ああ、大成功だフィオナ」

フィオナの手には淡く白い光を発する水晶の欠片、そこからクロノの声が聞こえてくる。

リリイの精神感応を大元にして、離れた相手と会話をやり取りで

きる魔法の効果をこの水晶の欠片は有していた。

「敵も上流に魔術士がいることにすぐ気づくだろうし、急いでこっちへ戻れ」

「了解です」

短いやり取りを終えると、水晶の欠片はフィオナの手の中で砕け散った。

きちんと設計も術式も構築されていない急造品である為、通信時間は短く、使い捨て。

いくら魔法があると言っても、携帯電話のように万能な機器を作り出すのは不可能であるが、今はこの程度の機能で十分役に立っている。

「ふう、あまり水の魔法は得意ではないんですけど」

フィオナは一発の魔法の行使で使い物にならなくなってしまった水属性強化の短杖^{ワンド}を投げ捨てると、クロノに言われた通り村へ向かって歩き始める。

「慣れない属性を使った所為でお腹が空きました、アイスキャンデー食べたいなあ」

朝ご飯はさっき食べただろ、というクロノの声は聞こえてこなかった。

第102話 冒険者同盟VS十字軍（1）（後書き）

第8章『アルザス防衛戦』スタートです。

とりあえず先制パンチを華麗に決めることができた冒険者同盟ですが、さて「ワシの十字軍は108部隊まであるぞ」状態の大軍団を引き続き抑えることが出来るのでしょうか。

第103話 冒険者同盟VS十字軍（2）

目の前で重騎士が流されていった川を前に、十字軍の歩みは完全に止まってしまっていた。

進むべきか退くべきか、兵達のほとんどはあっけなく重騎士部隊が全滅したことを目の当たりにした所為で一旦退却を望むところであつたが、

「突撃だっ！ この程度の川、橋など無くともそのまま突っ切れる！！」

ノールズは突撃を選択した。

「し、しかし――」

「俺が先陣を切る、着いて来いっ！！」

部下の一人が何かを言う前に、ノールズは川へ向かって進み始める。

司令官自ら率先して動いたのだ、配下の兵達が続かないわけにはいかない。

「司祭様に続けっ！」

「もう罨なんか無い！ 突撃だっ！」

「騎士の仇をっ！」

「敵を殺せっ！」

「魔族を殺せっ！」

「神の名の下に、魔族を根絶やしにっ！！」

兵達は覚悟を決めて川に向かって次々と飛び込んでゆく。

歩兵達の前進を確認し、ノールズはさらに命を下す。

「魔術士部隊は強化と防御魔法で渡河する兵を出来る限り援護、天馬騎士も出撃させろ！！」

渡河の最中は無防備になることくらい一兵卒でも理解できる。

魔術士には一緒に渡河を強要するよりも、鎧を着込んでも泳げる筋力を発揮させる腕力強化や、敵の遠距離攻撃対策に防御魔法に専念

「司祭様、魔術士無しで敵の門を破れるでしょうか？」

アレを突破するのに攻城兵器も魔術士部隊も必要無い、歩兵が押し寄せればあの程度の門はあっけなく倒壊する」

石と木ではその防御力に雲泥の差がある、盗賊や山賊風情なら木の柵で十分かもしれないが、これほどの人数を押し留められるほど耐久力は無い。

そしてその言葉は冗談でも過信でも無く、事実としてそれだけの力を持っていると兵達は知っている。

彼が強力な武勇を誇る英傑であると、すでに占領部隊全てに事実として伝わっていた。

川を突き進むノールズとそれに続く数多の兵、その頭上から今正に矢の雨が降らんとしていた。

無數の風切り音を響かせ、鋭い鏟がゆつくりと前進することしか出来ない兵の群れに向かって殺到する。

「光壁！」

ノールズの防御魔法が展開され、自分を含め十数メートル四方が白い光の壁によって覆われる。

また、岸にいる魔術士達が発動する防御魔法が効果を発揮し、あちこちで防御魔法が展開され無防備な兵達を矢の雨から守る。

だがそれは渡河する兵全てをその守りの下へおくことは到底出来ず、運悪く効果範囲外を進む者達、そこからさらに運の悪い者が降り注ぐ矢に貫かれる。

（それなりに死傷者が出るな、しかし、こうするより他は無いっ！）次々と倒れる兵達を一瞥すらせず、ノールズは僅かの後悔も無くひたすら前へ前へと突き進む。

ノールズ含む先頭グループは川の中ほどまでに達し、その水深はすでに人間の平均身長を軽く上回るほどとなり、彼らは武器と鎧の重量に喘ぎながら泳ぎ始める。

そこから攻撃は一層激しさを増す。

矢に混じって炎や氷や風といった下級攻撃魔法も容赦なく空から降り注ぎ始めたのだ。

多種多様な属性が降るその様はまるで天変地異のようだが、異世界の戦場においては当たり前の光景、当然ノールズも予想していた。（しかし、やけに雷の攻撃魔法が多い……偶然か？）

魔術士は誰もが全ての属性を扱えるわけではない、得意な属性は1つか2つ、多くて4つといったところ。

得意属性はほぼ本人の体質、魔法の素質に関わってくるものである為、後天的にどうなるものではない。

要するに、不特定多数の魔術士を集めて攻撃魔法を撃たせれば、どれか一つの属性に偏ることは無いということだ。

命を賭けて戦っているのだ、攻撃魔法を使うなら当然自分が最も得意とする属性を選ぶはず。

まして魔族ならば、獣が己の牙や爪を使うのと同じように、一切の疑問を差し挟む余地無く得意属性を行使する。

そうノールズは思っていたのだが、降り注ぐ攻撃魔法のおよそ半分が雷であるという事実に対して、彼は考えを改めざるを得なかった。

（間違いない、敵はわざわざ雷の属性を選んで撃たせている！）

その理由は、きっと魔法に詳しく無い歩兵であっても、この渡河に参加さえしていれば理解できただろう。

「ぎゃあああっ！」

「おい！ 落下点に近づくな！」

「バカヤロウ、川の中で避けて歩けるかよお！」

「直接当たらなくても電撃をくらうぞ！？」

「は、離せっ！ 溺れっ——」

なぜなら、雷の魔法によって倒れる兵の数が、あまりに多すぎるからだ。

（敵は明らかに感電を狙っている！）

ノールズは即座に敵の思惑に気づく。

炎は川に落ちればそのまま消える、水は浮かぶ、風は川面に飛沫を立てるのみ。

だが、雷が落ちればその電気は水を通して周囲に拡散する。

落下地点の近くにいただけで巻き込まれるのだ。

それによって例えば即死や致命傷を免れたとしても、水の中で手足が痺れれば溺れてしまう。

周囲は己のことで手一杯、とても救助できる状況では無い、溺れるものは寧ろ近くに居る者を共に水底へ道連れることすらある。

つまりこの場所において雷の属性は単発の攻撃魔法であっても、小規模ながら範囲攻撃に相当する効果を発揮するのだ。

「くそっ！ 魔族めっ！ どこまでも小賢しい策を弄しおってええ！！」

怒りの声をあげるノールズ、彼の背後では感電し身動きができなくなり、溺れ行く者達が虚しく水面を叩く音が響く。

（耐えろ、今は耐えるのだっ！ もうすぐ対岸に着く！）

先頭グループはすでに川の間地点を越え、再び水底に足が着き始めていた。

もっとも、ここへ来るまでに敵の攻撃で倒れる者、あるいは単純

に川に流される者などの犠牲者が続出している。

さらに、川岸に展開した魔術士部隊の防御魔法などの援護はここから先は届かないため、身体一つで敵の攻撃に立ち向かわなければならぬより過酷な戦場である。

それでも敵陣を^{ゴール}目の前に、闘志を漲らせて怯まずに突き進む。

（所詮は小勢、渡河の最中を叩こうが部隊の壊滅にはほど遠い！

上陸さえすれば、後は真っ直ぐ貧弱な防備を破ってヤツらを血祭りにあげてやるだけだ！！）

十字軍兵士とアルザス村に立て籠もる冒険者達の数の差は到底覆せるものではない。

流れた血はすでに多い、しかし未だ勝利は揺ぎ無い、ノールズは今もそう確信しているからこそ、全身に怒気を漲らせて一切省みる事無く歩を進めていられるのだ。

（あと、少しだっ！）

対岸までの距離はもう50メートルも無い。

あと半刻もしない内に自分達は門を破り、村へ雪崩れ込んでいるだろうとノールズは予想する。

だがしかし、それを絶対の意思と力によって阻むべく、二人の闇を操る魔術士が待ち構えていることに、十字軍の兵士は誰一人として気づいていなかった。

第103話 冒険者同盟VS十字軍（2）（後書き）

小賢しい策 ×

電気ショック漁法 ○

第104話 十字砲火

「すごい数だな」

矢と雷が降り注ぐ川を突っ切って、無数の白い影が迫り来る。

かなりの数を沈めているはずだが、敵はそれが気にならないだけの膨大な兵数を有しているのを改めて実感する。

「ねえ、本当にあれを——止められるの？」

俺の隣で雷矢を何本も束ねて一気に空へと放つイリーナさんが問いかけてくる。

その声には期待半分疑問半分、といったところだ。

「大丈夫だ、必ず止められる」

今は敵が射程範囲内に来るのを静かに待つ。

「俺のせか——故郷では、コレの所為で戦いのあり方が変わった、歩兵の正面突撃を完全に防ぐことが出来る」

はずだ、とは言わなかった、この期に及んでそんな曖昧な台詞言えるワケが無い。

「本当にできるのかどうかは、どうせあと少しで分かるんだ」

「そうですね、楽しみにしています——よっ！」

敵はあと数十メートルほどで完全に川を渡りきる、というところまでできている。

ここまで引き寄せれば、もう十分だろう。

バレット・アーツ
「魔弾——」

漆黒のタクト『ブラックバリスタ・レプリカ』を手に、その先端を真っ直ぐ十字軍へと向ける。

圧縮された黒色魔力が爆ぜる時を待ちわびる、すでに身の内には‘装填’済みの弾丸が幾千幾万。

そして敵はついに踏み込む、黒き弾丸の飛び交う殺戮地帯へ。
キルゾーン

全ての弾に、敵を撃つ必殺の意思と憎悪を乗せて、死に逝く彼らに手向けるのはただ恨みを籠めた皮肉の言葉。

大盾から僅かに顔を覗かせ、謎の弾丸攻撃を続けているだろう前方を注視する。

彼の目には、柵の両端からギャリギャリと規則的な発射音を響かせて、渡河をする兵達に向かって弾丸を撃ちまくる真っ黒い二つの人影が映った。

（そうか、アレがキルヴァンの部隊を壊滅に追いやった‘悪魔’の正体かっ！）

事実はどうであれ、少なくともノールズにとっては黒いローブを纏った黒髪黒目に凶悪な顔つきの男とそのまま髑髏の顔を晒す二人の姿は、これ以上ないと言うほど邪悪な化身のイメージを体現したものに思われた。

だが驚くべきなのはそんな凶悪な容貌では無く、瞬く間に死体の山を築き上げる脅威の黒魔法である。

男の方はタクトから、髑髏の方は見た事の無い細長い鉄の筒から、それぞれ弾丸を発射しているのをノールズは確認する。

（逃げ帰った兵の言っていたことは真実だったのか、まさか、本当に即死級の威力を持つ攻撃魔法を連発できるとは……）

無数に飛んでくる小さな黒い弾丸、その一発一発が難なくチェインメールを貫き致命傷を与える。

イルズ村から帰還したキルヴァン隊の生き残りは確かにそう証言していた、だが、ノールズは『ただ凄腕の冒険者が一人いる』という程度の認識しか持たなかった。

特に‘悪魔’への対策を立てなかったことに対して後悔はするものの、それは後回しにしてノールズは戦闘へ集中するべく頭を切り替える。

「???? ???? ???? ???? ???? ???? ????——石壁！」
テラ・デフアン

遮蔽物の一切無いこの場であの黒い弾丸の嵐に立ち向かうのは危険すぎる、ノールズは下級だが最も広い範囲を防ぐことの出来る防御魔法を発動させる。

川底を突き上げて石の壁が形成されるが、テラ・アルマシルド巨石大盾に比べればか

プロテク・ブリスト
――防御強化――

最低限の防御力強化を施し、いざ大盾を出て突撃しようとした瞬間、

ズガンっ！

大盾を巨大な何かが貫き、その衝撃でノールズは後方へ大きく吹き飛ばされた。

「ぐはああっ！！」

朦朧とする意識の中、彼の視界には巨石大盾を貫通する二本の黒い丸太と、その向こうに発射元だと思われる‘装置’を確かに見た。

「穹砲だ……何故、あんなモノまで……」

「司祭様っ！」

「司祭様がやられたっ！？」

兵達の声がノールズにはやけに遠く感じる。

「う、うろたえるな、俺は無事だ……」

二人の兵士が自分を支えていると理解できるが、視界は泥酔したようにぐるぐると歪んで回っている為に、顔まではっきり認識できない。

「俺に構うな、行け、退却は許さん、ぞ――」

ノールズは途切れそうな意識の最中、見上げた晴天に幾つもの陰が、その歪んだ視界の中でもはつきりと見えた。

「――天馬騎士部隊が来たか、これで、勝てる……」

ニヤリと口元に笑みを浮かべたノールズは、そこで自分の意識を手放した。

地上から突撃する歩兵の大軍団と空から攻撃を仕掛ける天馬騎士部隊、この二つが揃った今、悪魔の守るアルザス村の防衛線は確実に陥落する。

ノールズはこの瞬間も、そのように勝利を確信していた。

「凄いつ！ コイツはどエライ武器やでえホンマ！！」

台車に備え付けられた大型の機関銃を握り、モズルンは興奮気味に弾を撃ちまくる。

漆黒のローブに髑髏の素顔と正しく死神の風貌、そして今この時大量の人間の命を奪っている状況も死神と呼ぶに相応しい。

「そらそら！ 海の方こうから遙々死ににやって来てご苦労さんっ！！」

ヒャッハー！ という声が聞こえんばかりのハイな様子だけは死神のイメージにはそぐわなかった。

だが操作する機関銃は死神が手にする鎌の如く必殺の威力を誇り、また闇魔術士である彼でなければ使用できないのであった。

クロノはシモンと出会ったその日の内に機関銃の作成を依頼したが、この科学技術も機械工業も発展していない異世界において、地球に存在する機関銃と同じものが造れるはずがない。

クロノが欲しかったのは『魔弾』^{バレットアーツ}の代用魔法、火薬で弾丸を飛ばすのではなく魔法で弾丸を飛ばす、そういう武器を作ってほしかった。

つまるところ、コレは機関銃のような形をした魔法の長杖^{スタッフ}であり、この異世界での『銃』がそもそもこういったタイプなのだ。

外観はグリップのついた長方形の細長い箱から銃身である鋼鉄の筒が飛び出ているだけと、本物の機関銃を知るクロノからすればえらく不恰好ではある。

だがその内部はクロノの『魔弾』^{バレットアーツ}の術式を模倣した魔法が組み込まれ、現実弾丸の連射を可能としている。

そしてこの機関銃に組み込まれた術式を使用できるのは、クロノの黒魔法に最も近い系統の闇魔術士であるモズルンだけなのだ。

「むっ！ アカン、もう銃身が焼きついてもうた、早う交換したってやー！！」

「はいっ！」

二人のゴブリンが即座に機関銃の銃身交換を開始する。

この日の為に何度も練習してきたお陰で、流れるような動作でスムーズに交換作業を行っている。

そもそもこの魔法式機関銃の設計思想は、‘術式を物質でカバーする’ことである。

例えば現在交換中である銃身は、弾丸の発射方向、弾道の安定、といった効果を受けている。

魔法で弾丸の発射を実現しようと思えば、こういった部分も自分の魔力と集中力を使い、術式として構成しなければならない。

このように銃身という‘物質’を用意することで必要な術式を削っているのだ。

魔術士の武器である『杖』は、‘物質’では無くあらかじめ術式を刻んでおくことで、術者の負担を軽減しているタイプもある、この機関銃は正にそれと同じ効果を持っているといってよい。

クロノの『魔弾』^{バレットブリーズ}はそもそも銃のイメージを元に作り出された魔法である、逆にある程度銃の‘カタチ’があれば、大部分の術式を省くことが可能であった。

この機関銃の発射に必要な魔法の効果は、‘弾丸の装填’と、‘火薬の代わりに銃弾を撃ち出す圧力’、この2つである。

弾丸は直接チェンバー内に『召喚』し、後は火薬の爆発に相当する閾属性による圧力を内部にかければ、弾丸は銃身を通して真っ直ぐ撃ち出されてゆく。

モズルンはこの2つの魔法効果を上手く発揮できているからこそ、クロノと同じく実在の機関銃の如き破壊力と連射を実現させているのだった。

ちなみに、肝心の弾丸を発射する部分を魔法で代用している為、銃のくせにトリガーは無いのであった。

「旦那、ソッチはどうや？」

リリーの精神感応^{テレパシー}は現在、アルザス村正門付近を丸々カバーして

いる為、この範囲内にいれば自由に意思のやり取りが出来る。

モズルンは何十メートルか離れているクロノに向かって通信した。

「俺はまだ撃ち続けられる、モっさんの方は？」

「弾はあるんやけど、銃身の消耗が思ってたより早いわ。この調子やともうそんなにもたんで」

「やっぱり急造品じゃ耐久力に問題があったか。」

けど今はそれしかないから仕方無い、使い潰さないよう上手く冷却しながらやってくれ」

「ワシに任せとき！ こう見えて節約プレイは得意なんやで！」

あっはっは、いつもの快活な笑い声をクロノは苦笑いで聞いていたに違い無い。

「銃身交換終わりましたモズルンさんっ！」

「おしっ！ ほんならまた張り切って射撃再開するでええ！！」

再び機関銃のグリップを握り、モズルンは怯む事無く押し寄せる大軍勢に向かってフルバーストで掃射を開始した。

圧倒的な数で正面突撃を仕掛ける十字軍、これをギリギリのラインで近寄らせないでいられるのは、正しくクロノとモズルンが行うクロスファイア十字砲火のお陰である。

そもその発想は、クロノがイルズ村にてキルヴァン隊を一人で百人近く殺戮した経験によるものだ。

その時は呪銃の効果によって軽い狂化状態バサークに陥っていたが、記憶そのものは鮮明に残っている。

クロノが冒険者同盟のリーダーとなり、無い知恵を振り絞って迎撃作戦を考えていた際に、『銃撃』が多数の相手に絶大な効果を発揮することにあらためて気がついたのであった。

たった一人で百人近くの兵を一方的に殺すことが出来たのは、単純に実力の差以上に相性、剣VS銃という圧倒的な武器（魔法）性能があったからであるとクロノは思い至った。

そして考える、自分と同じマシンガンを連発するような、いや、それこそ機関銃を掃射するような攻撃方法をあと一つでも用意でき

れば、歩兵の突撃に対して圧倒的な効力を挙げる『十字砲火』が可能だ。

十字砲火とは、機関銃などを用いる戦法の一つで、二つの火器から放たれる火線が交差するためクロスファイアと呼ばれ、防御において大きな効果を発揮する戦法である。

この戦法は第一次世界大戦で登場したが、単純に機関銃の威力を発揮した例として、日露戦争における旅順要塞攻略戦がクロノの頭にあった。

そして今、かつて旅順要塞でも繰り広げられたであろう歩兵突撃が一方的に粉碎される光景が、アルザス村防衛線では現実となっていたのだ。

対岸まであと十数メートル、と迫りながら、誰もがその僅かな距離を踏破できない。

川の流れに足をとられ、走る速度が大幅に落ちるこの状況下がさらに対岸までの距離を遠くさせる。

それでも兵士は進み続ける、この黒い弾丸の雨が止むまでは、決して川を越えられない事実を知らずに。

第104話 十字砲火（後書き）

ようやく『機関銃』の正体を現す事ができました。正確には『機関杖』と呼ぶべきでしょうか。

第105話 狙撃の錬金術師

十字軍に黒の館^{ブラックボックス}と仇名されたアルザス村冒険者ギルドは、無数の矢を敵へ浴びせる強力な戦塔として機能していた。

冒険者の中で射手などといった弓を最も得意とするクラスを名乗る者は、『三狍姫』など一部を除き、ほぼ全員がギルドに配置されている。

その為、現在正門に配備され十字軍の正面から直接弓を射ているのは、剣士や戦士のクラスをもつ者達だ。

お陰で本職の射手達は敵を撃つのに有利な高い場所から、黒化によって堅牢な防御力を誇るギルドに守られ援護射撃に集中できている。

そして、最も射手達が多く立ち並ぶギルド屋上、そのさらに一段高く組まれた台座の上に、長大なスナイパーライフルを構えるシモンの姿があった。

「2時の方向、距離380、格好からして部隊長クラス、シールド無し」

隣には、観測手^{スポッター}としてランク4の盗賊スース。

彼女は本来あるべき観測手の役割に加え、銃のスコープ代わりを務めている。

腕を本来の姿であるスライムに戻し、その透明な体の成分を調整し、双眼鏡のように遠くの景色を拡大できるレンズを形成している。一種の固有魔法^{エクストラ}とも呼べる変化、シモンはこのスライム型望遠レンズをスコープ代わりにして狙撃をしているのだ。

「……捉えた」

彼の視界に映るのは、無防備な詠唱中の姿を晒す魔術士の男。

十字軍の魔術士部隊の部隊長だと推察される彼は、対岸に立つギルドの屋上から狙われていることに最期の瞬間まで気づく事無く、頭部を吹き飛ばされて魔法の詠唱を永遠に中断することとなった。

「また一撃で仕留めたね、良い腕だ」

「別に、銃が凄いただけです……でも、ありがとうございます」

馴れない賛辞の言葉に少しだけ頬を染めてシモンが応える。

だが彼にとって『銃が凄い』というのは嘘偽りの無い事実である。今シモンが使用している銃は、クロノと出会った日から即座に開発し、完成させた急造品ではあるものの、これまで使用してきたものとは比べ物にならない性能を誇っていた。

そもそもクロノがシモンに求めた役割は2つ、1つは機関銃の製造、もう1つは彼自身が狙撃手として戦いに参加することだ。

遡ること数日前、シモンの研究室にて、怒り心頭の様子で文字通り飛び込んできたリィをどうにかこうにかクロノが言いくるめて追いついた後の話である。

「ねえお兄さん、故郷にあるっていう銃の話、聞かせてよ」

先にその話を振ったのはシモン。

己が最も力を入れて造り上げた武器、それと恐らく同じだと思われる銃の存在を仄めかされて、気にならないワケが無いだろう。

「ああそうだな、えーとどの辺から話せばいいかな——」

のんびり話す時間も無いという事で、クロノは簡潔に銃の説明をした。

クロノの故郷（地球）において銃は軍隊の主力装備であること、どんな形状で、どんな構造をしているのか、そして、銃は剣よりも多くの命を奪うことができる恐ろしい武器であるということ。

とは言うものの、クロノは別に銃を造ったシモンにその危険性を説教するつもりは毛頭ない、今必要なのはより強力な銃なのだから。

「今出来る改良点は3つ、銃床を取り付けること、銃身にライフルングを施すこと、そして——」

クロノは指先に魔弾を発動させ、黒色魔力で形勢された漆黒の弾

丸をシモンの前へ置いた。

「俺の弾丸を使うこと」

「これって、さっきお兄さんが魔法で撃った弾だね？」

「ああ、火薬は作れないが鋼鉄並みに硬い弾頭はいくらでも作る
ことが出来る。」

エタニティ
「永続さえ上手く施せば、何日でもその形状は保たれるし、鉛弾を
イチから作るよりは大量に用意できるぞ」

「でも火薬がなきゃ撃てないよ、僕は魔法使え無いし。」

今使ってる火薬は火を宿すタイプの魔石を主原料にしてるから、
あんまり安いものじゃないよ」

どうやら効果は同じでも、地球製と異世界製では火薬の原料がそ
もそも違うらしかった。

ただクロノとしては素材の違いなどあまり関係無い、用は弾丸を
撃てれば良いのである。故に気になる部分はシモンが言う原料の入
手においてのみ、なのだが、

「魔石？」

クロノに心当たりは無かった。

だがシモンは特に気にせず話を続ける。

「ほら、炎の杖によくついてるあの赤い結晶、ああいうやつのこと。
魔法の杖は剣よりずっと高価なのは知ってるでしょ、僕の手持ち
じゃ1本買えるかどうかってとこだよ」

仮にも魔法使いと名乗るクロノが「魔石」を知らないのは、これ
まで魔法の杖をあえて買い求めなかったことに由来する。

冒険者登録をした段階で、すでに『ブラックバリスター・レプリカ』
を手に入れたクロノは、わざわざ他の杖を買う必要はなかったし、
そもそもマイナーな黒魔法or闇属性の杖はイルズ村の道具屋には
置いてなかったのであった。

しかしながら、魔術士が装備する杖そのものは何度も目にした事
はあるし、構造も凡そ把握していた為「あの部分が魔石だ」と言わ
れればすぐに理解はできた。

ただ、魔法の杖が必ずしも魔石を利用しているわけではないのだが、それはまた別のお話である。

「なら、実際に炎の杖何本あれば十分な火薬が作れる？」

「十本もあれば僕はもう来年まで火薬に困らないね、全く、無い物ねだりしたってしょうがな――」

「じゃあ十本用意してやる」

「――は？」

「なんだ、足りないのか？」

「違うよ！ どうやって十本も用意すんのさ！？」

「どうやるものにも、村に残されたモノは自由に使えるんだ、武器屋の倉庫を総ざらいすればそれくらい手に入るだろ」

「なにその山賊理論！？ それって略奪じゃないの！？」

改めて言われればそうなのかもしれない、が、もうすでに焦土作戦を実行してしまっているクロノにとって、現在残されている‘資源’を自分達で使い潰すことに躊躇は無い。

小市民的金銭感覚を持つシモンはクロノの「あるものは全部使う」豪快な言い分に一抹の不安感を憶えるものの、

「村にある物は優先的に利用できるようにしよう、それと、銃を造るには鍛冶工房が必要だろうし、これも設備と鍛冶職人に全面協力させようか」

これまで人員一人で低予算の開発しかできなかった貧乏錬金術師のシモンにとって、クロノの提案はあまりに魅力的。

「よろしくお願いします！」

結果、シモンは細かいことは気にせず、銃の製造に取り掛かるのであった。

そうして出来たのが、現在十字軍の魔術士に次々とヘッドショットを決めている恐らく異世界初のスナイパーライフル『ヤタガラス』

である。

ちなみに命名はクロノ、

「俺の故郷でその昔、傭兵部隊の頭が使ってた銃が『ヤタガラス』
って言うんだ」

という言葉聞いて、なんかグッときたシモンがその名前を採用
したのだった。

（本当に凄い銃だ『ヤタガラス』は、お兄さんのアドバイスと協力
のお陰で、これほどのものが出来た）

シモン会心の出来の銃は、今もまたその銃口より火を噴き、対岸
に立つ魔術士を撃ち抜く。

流石に今も単発式であるが、百発百中の腕前を持つシモンは、こ
の屋上で誰よりも多くのキルカウントをすでに稼いでいる。

（でもまだだ、まだ銃には改良の余地がある、機関銃だって造りよ
うによつては魔法無しで撃てるようにできるはず）

シモンはクロノと出会ったその日から、頭の中は新たな研究のこ
とで一杯になってしまった。

それほどクロノがもたらした彼の故郷、すなわち地球の知識はシ
モンにとって金塊に勝る価値がある。

（だから絶対に死ねない、僕はこれから作りたいものが沢山あるん
だ！

いきなり現れたワケの分からないヤツらなんかに、殺されてたま
るかっ！！）

未だかつて無いほど闘志と生存本能を発揮するシモンは、熱くた
ぎるその胸中とは裏腹に、ターゲットへ狙いを定める姿は冷静その
ものであった。

「ん、あれは——」

「どうかしましたか？」

「それ、^{ベガサスナイト}最初に気づいたのは観測手を務めるスースだった。
「天馬騎士のお出ました、11時方向、見えるかい？」

シモンの目の前にあるスコープ代わりのスライムレンズを通して、

遠く森の向こうから迫る天馬騎士部隊の影が点々と見えた。

「思ってたより……沢山いますね」

「そうだね、でも、今は信じるしか無いんじゃないのかな」

「……はい」

グリップを握り直し、再度集中を計るシモン。

彼はまだ天馬騎士を相手にする必要は無い、今はただ多くの魔術士を葬ることが自分の役割と心得ている。

天馬騎士の恐ろしさは、冒険者という戦いを生業にする職業に就いている以上は耳にした事くらいはある。

だがシモンは遠く空より飛来するペガサスの軍団にそれほど恐怖は覚えなかった。

なぜなら、天馬騎士を相手にするのは、もっと恐ろしい‘妖精’なのだから。

第105話 狙撃の錬金術師（後書き）

火薬（黒色火薬）は不老不死（仙人）を探求する中国の錬丹術士が調合の結果偶然に生み出されたモノらしいですが、炎の性質を秘めた魔法の鉱石が存在する以上は、ある程度目的意識があれば狙って造れるのでは無いでしょうか。

しかしながら、魔法なしで爆発力を得るにはそれなりの試行錯誤が必要です。まあそこそが錬金術士のお仕事というものですな。

第106話 妖精VS天馬騎士

ギルドのとある一室に、リリイは一人床に座り込んでいた。

壁一枚隔てたすぐ向こうでは数多の血が流れる攻防戦が行われており、その喧騒はこの部屋にも届いてはいるのだが、不思議と室内は静寂を思わせる雰囲気漂っている。

それは床に描かれた光る魔法陣、そしてその上に静かに目を閉じて座るリリイの姿がそう感じさせているのかもしれない。

彼女はこの魔法陣を通じて精神感応テレパシーの固有魔法エクストラを行使し、冒険者同盟の通信を一手に引き受けているのだ。

だがその通信兵の役割も今は終わりを向かえる。

「リリイ、聞こえたと思うが天馬騎士が出張ってきた」
「うん」

リリイの頭の中にクロノの声が届く。

その言葉の意味を心得たとばかりにリリイは肯定の言葉と共に小さな頭を大きく縦に振った。

「これよりテレパシーは完全に遮断される、それぞれ、アナログ通信に切り替えだ」

クロノが冒険者全員にその命令を発した直後、アルザス村正門付近を覆うテレパシーの網は消え去った。

今はリリイとクロノの二人だけが、頭の中で意思の交換を可能としている。

「済まないリリイ、一番キツイ役を押し付けちゃったな」

「ううん、いいの」

恨みも皮肉も一切無い純粋な肯定。

リリイは目の前にごろんと無造作に置いておいた『クイーン・ペリル紅水晶球』を手を立ち上げる。

「頼んだぞリリイ」

クロノの絶対の信頼を込めた一言が頭の中に届いたその時には、

「うん、私に任せてよクロノ」

すでに幼い妖精の姿はそこには無く、スラリと手足の伸びた、美貌の少女が立っていた。

『紅水晶球』の力を借り、真の姿へと戻ったりリイは即座に行動を開始する。

「待っててねクロノ、あの鬱陶しい‘羽付き売女’は私が叩き落してあげるから」

その言葉はすでにテレパシーを打ち切っていたため、クロノへと届くことは無い。

そして、言葉と共に浮かべた殺意向き出しの凄惨な笑みも、彼が知ることは無かった。

「ふふ、頑張るから、後でいっぱい褒めてよね、クロノ」

リイは窓を開け放ち、煌く七色の羽を羽ばたかせ、日の光が眩しい青空へと舞い上がっていた。

天馬騎士部隊は基本的に女性のみで構成されている、それはアーク大陸でもパンドラ大陸でも同様だ。

これは天馬という種族が、雌のみが空を飛ぶ翼を持ち、また己に騎乗する者も特別な場合を除いて、同じ女性（雌）しか受け入れないからである。

そしてノールズの占領部隊に所属し、これよりアルザス村へ空からの襲撃を狙う天馬騎士部隊も、通常通り全員女性で構成されていた。

彼女たちの眼下には、十字砲火によって儚く命を散らす歩兵達の姿。

「どうやら‘悪魔’の噂は真だったようだ」

見事な編隊を組んで飛行する彼女たちは、互いに声が届く距離には無いが、テレパシーの魔法具を全員所持しているため、飛行中に

あっても問題なく会話が可能だ。

リアルタイムで意思の疎通を可能とする魔法具は高価だが、それを全ての隊員に装備させるだけの価値が天馬騎士というクラスにはある。

「なんて酷い、ここからでも川が血で赤くなっているのが見えるわ」

「彼らの突撃を支援しなければ、徒に被害が増える一方だろう」

「そうか？ 悪魔だかなんだか知らねえけど、あんな攻撃がいつまでも続けられるとは思えねえな」

「いーんじゃないの、男共に突撃させておけば、その内突破できるでしょあんなショボい守り」

「だよー、どうせ歩兵なんて使い捨てなんだし、そのまま突っ込んでけってね」

「口を慎め、我々以外に聞こえないとは言え、問題発言だぞ」

「はーい」

あれほどの味方が死んでゆく戦線へこれから向かうというのにも関わらず、彼女達の声は余裕で満ちていた。

それは死を恐れていないからでも、任務に忠実だからでもない。

ただの歩兵と天馬騎士では、そもそも防御力が段違い、矢で撃たれば歩兵は死ぬが、天馬騎士はその程度の攻撃で負傷する事は滅多にない。

彼女達が装備する鎧兜には防御魔法が施された上に軽量化や腕力集中力といった各種強化魔法も下級ながら数多く付与されている。

そんな高級装備を纏うのは、武技・魔法共に習得した軍の実力者、ただの歩兵に比べれば、装備も技量も天馬騎士は大きく上回っている。

戦場においてそんな彼女達が歩兵よりも生還率が高いのは当然、眼下で彼らが謎の攻撃によってバタバタと死んでいったからといって、その攻撃で自分達もあっけなく死ぬとは誰も考えていないのだ。「――でも残念、貴女達はここで死ぬのよ」

その時、突如として美しい少女の声音が聞こえた。

いや、聞こえたという表現は正確では無い、なぜならその声は頭の中に直接響いてきたのだから。

「誰だっ!？」

天馬騎士の隊長は即座に気づく、敵が、魔族が現れたのだと。

「私の名前はリリイ。」

ようこそアルザス村へ、そしてさようなら」

彼女達がこれまで聞いたどんな声よりも凜と響く透き通った少女の声はしかし、悪意と敵意と殺意に満ち満ちていた。

「地上を警戒しろ! 狙われている可能性が――」

「うふふ、おバカさあん」

即座に警戒態勢をとる天馬騎士部隊、そしてそれを嘲笑うリリイの声。

メテオストライク
「『星墮』」

天馬騎士部隊の頭上から、突如として七色に煌く巨大な光の塊が雲を割って現れる。

夜空に浮かぶ星の一つが丸ごと落下してきたかのような錯覚。

超高速で落下してくる巨大な光球は、まるで意思を持っているかのように空を行く天馬騎士部隊に向けて迫る。

「上からだと!？」

天馬騎士にとって最も警戒すべき攻撃は地上からの対空魔法攻撃、彼女達の上から攻撃を仕掛けることが可能なのは同じ天馬騎士か竜^{ドラゴン}騎士、あるいは空を飛ぶモンスターの類のみ。

戦場において天翔る天馬騎士の上を行く存在は非常に稀、まして魔族の寄せ集め軍団が上空から攻撃する手段を持っているとは考えられない。

故に警戒すべきは地上のみ、死ぬ可能性があるのは直接魔族の部隊と切り結ぶ時だけ。

そのはず、だが現実には予想を大きく裏切る、彼女達の頭上には圧倒的な質量と爆発力を秘めた魔法の流星がもうすぐ目の前に迫ってきている。

「????? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ????
ルクス・アルマシルド
????? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ????
白光大盾っ！」

虚を衝かれたことで回避不能なほど距離を詰められている巨大な光の塊を前に、下策でしかないが出来る限りで最大の防御行動をとることしか選択肢は残っていないかった。

高い防御力を誇る鎧兜に重ね掛けした中級防御魔法、それにこの攻撃は光でこちらの防御魔法も光、防ぐ属性の相性も悪くない。

耐えられる、必ず耐えられる、そう一心に信じて天馬騎士部隊の隊長は『メテオストライク星墮』と衝突する時を迎える。

「あっはっはっはっは！ 無駄、無駄、無駄あ！！」
七色の光球と白色の光盾。

僅かな拮抗を保ったが一瞬の後に身を守る盾は粉々に碎け散り、眩い煌きを発する七色を彩る光の一つとなる。

そして虹色に輝く光の奔流は隊長を含む数人の天馬騎士を飲み込んで行き空中爆発を起こした。

轟く爆音と爆風の衝撃波が、散開し難を逃れた天馬騎士達の体を大きく揺さぶる。

「そんな、隊長——」
「ちよっと、嘘でしょ!？」

「なによあの威力！ ありえないでしょ!!」
爆発に巻き込まれた天馬騎士は影も形も残らず爆散、碎け散った血肉は果たして人のものか天馬のものか。

数多の肉片は血霞を作りながら、遙か遠くにまで四散し地上に落ちてゆく。

爆心地には最早彼女達が存在した痕跡は一切なくなり、仄かに漂う血の匂いと魔力の残滓だけがあるのみだ。

「静まれっ！ 指揮権は副隊長の私が引き継ぐ、敵は雲の上だ、迎撃態勢を——」

「そう、次は貴女がボスなのね」
その時、天馬騎士達は初めてリリィと名乗った少女の姿を目にし

た。

基本的に美女が多いと言われる天馬騎士達の中であって尚、その美貌は圧倒的、翻るプラチナブロンドヘアの艶やかさ、白い肌の瑞々しさ、そして男女問わず見るものを魅了する輝きを宿すエメラルドグリーン双眸。

漆黒のワンピースドレスに身を包み、七色に煌く二対の羽を瞬かせ浮遊するその姿は、御伽噺に登場する妖精のお姫様を髣髴とさせる。

だがその幻想的な美を体現するリリイに見蕩れる事は出来ない、彼女達は一撃で隊長以下数名の仲間を葬り去った脅威の攻撃魔法を放った恐ろしい敵であることをすでに知ってしまったている。

そして何より、

「い、いつの間に――」

「ん、今来たところ」

指示を出す副隊長、彼女を背中から抱きしめるように天馬の背へとリリイが降り立っていた。

‘敵’は、すでに目の前に現れたのだ、彼女達の心に去来するのは戦意か敵意か、あるいは恐怖か。

「妖精結界展開」

リリイは副隊長の両肩に優しく手を置いたまま、妖精族が誇る固^エクストラ有魔法を発動させた。

淡くグリーンに輝く光の結界は妖精を守る盾であるが、内にあるものを無条件で保護するわけではない。

彼女にとって敵であるこの人間を守る道理などある筈も無い、ならばこの結界はただの凶器として用いられる。

リリイを中心に直系2メートルほどの球状に展開した結界内に閉じ込められるかたちとなった副隊長は、即座に自分の身に起こった異変に気づく。

「なに、これ、熱っ――」

妖精結界の内部は美しい緑の光が宿す高熱に満ちている、それは

飛来する鉄の鏃が一瞬で溶けるほどの温度。

それは人間でなくとも、生物が生存できる温度を遥かに超えている。

「ああああ——」

リリイの腕の中、ただ身を焦がす高熱のみを感じながら彼女は事切れた。

皮膚は焼け爛れ、次の瞬間には灰となる。

凜とした美しき天馬騎士の姿は、最早どこにもない。

後には原型を保ったままの鎧と半身を焼かれたペガサスの死体だけが残る。

「さて——」

半ば白骨化した遺骸を閉じ込めた全身鎧と焼死したペガサスは、最早空中に留まるための力を完全に失い、ただ重力に従い落下してゆくのみ。

自身が手をかけた者の末路にリリイは一片の興味も無く、存在そのものを忘れてしまったかのように目もくれない。

「大人しく投降するならこれで終わりにしてあげる、勿論、身の安全は保障するわ」

誰もが虜になるような笑顔を浮かべてリリイは天馬騎士達にテレパシーで語りかけた。

「さ、どうするか早く決めてちょうだ——」

「なめんなクソガキい！」

罵倒と共に放たれた雷矢がリリイに直撃する。
ライン・サギタ

「私ら天馬騎士がつ、たかだかデカイ妖精一匹にビビって降伏なんぞするかあ！」

強固な妖精結界が完全に雷撃を防ぎきり、リリイには静電気ほどのダメージも感じていない。
オラクルシールド

「そう、それが応えね」

天馬騎士達は槍を構えつつ散開、全員が攻撃態勢をとっている。今度はリリイへ正面きって宣戦した天馬騎士が指揮権を引き継ぎ、

部隊を動かし始める。

頭を二人潰した程度じゃ戦意も連携も崩せない、彼女達が伊達にエリート部隊を名乗っているわけではない。

手間をかけさせやがって面倒くさい、と言わんばかりに舌打ちを一つしてから、リリイは面を上げ、自分を取り囲む天馬騎士達を睨んだ。

「それじゃあ、空から地獄まで叩き落してあげる、覚悟しなさい、羽付き売女、共」

「なめんなクソガキい!!」

天馬騎士部隊の一員、エステルは考えるより先に口と手が動いていた。

無詠唱発動の域に達した雷矢がリリイと名乗った妖精少女を撃つ。
ライン・サギタ

「私ら天馬騎士がつ、たかだかデカイ妖精一匹にビビって降伏なんぞするかあ!!」

ライン・サギタ
雷矢はリリイに直撃、だが5人もの天馬騎士を瞬く間に殺してみせた者が、下級攻撃魔法一発で仕留められるとはエステルも思っていない。

「コイツは必ずここで落とす、いいな!」

テレパシー通信機を通して全員に聞こえるように言うと、即座に4つの返答。

「賛成よエステル、貴女の指揮に従うわ」

「私も賛成です! 隊長の仇をとるのですう!」

「えー、やめない?」

「帰ろーよ」

部隊を構成する各班長の意見は賛成反対と半々のようだった。

「じゃあ撤退、キャミーとキャシーが殿な」

「やっぱり仇はとっておかないとだよね!」

「うんうん、みんなで力を合わせて戦おう！」

反対意見は消滅、部隊の意思は戦闘の続行を最終決定とした。

敵の数はたったの1、上下左右を包囲し、全方位から魔法の波状攻撃をかければ1分と持たずに地上へ叩き落すことが出来る。

ただ、それは相手も同じ人間であればの話。

「あれは下級魔法じゃ足止め程度にしかない、槍を叩き込まなきゃ落とせねえな。」

フランとマティは援護、ヤツを包囲から逃すな、あと詠唱もさせんな、ヤベーのが飛んでくるに違いねえ。

キャミーとキャシーは私と一緒に突撃だ、覚悟決めろよ」

「了解」

「ええーなんでウチらは突撃組みなのぉー！」

「チヨー怖いんですけどぉ！」

「テメーら馬鹿姉妹は武技しか取柄ねーだろーが」

「ええーなにそれえ差別うー」

「自分だって武技だけな脳筋のくせにい」

「グダグダ言ってるじゃねえ！ 馬の背から叩き落されてーか！！」

「はいはいはい、分かりましたあー！」

「イケばいーんでしょイケばあ！」

エステル・キャミー・キャシーの三騎はそれぞれの班を率いて直接攻撃を仕掛けるべく動き始める。

「一人で私ら天馬騎士部隊に喧嘩売ったこと、後悔しやがれ妖精やロウ！」

かくしてアルザス村数百メートル上空にて、一人の妖精と天馬騎士部隊による空中戦が開始された。

第106話 妖精VS天馬騎士（後書き）

機関銃で対空砲火するんじゃないね、というような意見をいただきましたが、リリイによるドッグファイトとなりました。折角の飛行ユニットですからね。

忘れがちですが、幼女リリイはほとんど空を飛べません。第46話『林檎箱の謎』と第63話『光の泉（1）』でその旨が書かれますね。

ついでに、少女リリイが飛行可能な事は、光の泉からイルズ村まで飛んできた68話『解呪』で明らかになっています。

第107話 戦士の役目

「あかん!? 銃身が全部焼きついてもうたわ! しばらく冷やさんと撃てへん!!」

というような旨の伝令を受け、クロノはついにこの時が来たか、と高まる不安を表情にまで出ないよう押し殺す。

最初から十字砲火を続けるのは無理なことは分かっていた、そして、ソレが途切れれば圧倒的な数で押し寄せる十字軍を押し留めることはできず、必ず何人もの兵が無傷のまま頼りない防壁まで到達するということも。

「了解、モっさんは銃身が冷却されるまでその場で待機、冷却が完了次第、すぐに十字砲火を再開する」

伝令役の冒険者がクロノの指示をモズルンへ届けるべく走り出す。それを見届け、クロノは自分も『魔弾掃射』ガトリングバーストを一旦撃ち止めると、大きく息をつく。

呼吸を整えると同時に、クロノは覚悟を決めて叫んだ。

「開門しろ! これより打って出る!!」

その声は防壁前に詰めている冒険者達は勿論、ギルド内に立て籠もる射手達にも聞こえた。

「『ウオオオオオ!!』」

冒険者達の雄たけびがクロノの命に応える。

特に、防壁前で使い慣れない弓を撃ちつつ、敵と斬り合うことを待ち望んでいた戦士達はより一層沸き立った。

彼らは今まで経験したことが無い大規模なこの戦闘、迫り来る数多の敵を前にして、怖気づくどころか、返って戦士の血を強烈に刺激されているようだった。

「はっはっはっはあ! ようやく俺らの出番ってワケだなあ!!」

正門前にはヴァルカンを筆頭にランク3以上の剣士や戦士を始めとした近接戦闘に特化したクラスを持つ冒険者が勢揃い。

彼らこそ、あえて門から飛び出し敵を切り伏せに行こうという命知らずの突撃部隊である。

人間をはじめ、獣人、エルフ、リザードマンなどの他に、オークやゴーレムといったクロノがこれまで見慣れない種族も含まれ、部隊の種族構成は見事にバラバラ。

だがその心は同じ、みな一様に門が開くのを今か今かと待ちわびている。

クロノはいつの間にか取り出していた『呪怨鉈「腹裂」』を手に、戦意向き出しの彼らの前まで歩み出た。

「いいか皆、ここが最初の山場だ。」

十字砲火が再開できるまでの時間をなんとかしてでも稼ぐ、その間は絶対にこの防衛線を守りきる」

単純に銃身を冷却するだけなら水と氷の魔法があるのでそれほど困難な作業ではない、だが一番問題なのは射撃の高熱によって歪む銃身、それを最低限射撃に耐えうるよう再調整するのだ。

このメンテナンスは致命的ともいえる隙を生じさせるが、今日の一戦だけで機関銃を使い潰すわけにもいかない、クロノ達は明日も明後日も戦い続け、敵をこの場で足止めしなければならぬのだから。

「行くぞ——」

クロノはローブを翻し、ヴァルカンへ背を向け、今にも開かんとする門へと向き合う。

「突撃っ!!」

門が開く音と、戦士達の鯨波が同時に響く。

総勢24名の突撃部隊は、檻から解き放たれた猛獣の如く目前にまで迫る十字軍兵士達へと飛び掛っていった。

クロノの突撃指令は、ギルド屋上に陣取るシモンとスースの狙撃

組みの耳にも入った。

「もう突撃が始まるのか……時間さえあればもっとマトモな銃身を作れたのに」

シモンはこの突撃が十字砲火を再開させるための時間稼ぎであることを理解している。

逆に言えば、機関銃さえ撃ち続けることができれば、危険を冒して突撃する必要はないのだ。

この時間稼ぎを作戦に組み込まねばならなかったのは、自分が耐久性のある銃身を仕上げることが出来なかった所為だとシモンは一人悔やんでいた。

機関銃を完成させた際、「よくやってくれた」とクロノは感謝と労いの言葉をかけたが、その言葉に応えられるだけの成果を出せたとはいえなかった。

「けれど、今は後悔する時間すら無い、さあ、次の仕事にとりかかろう」

シモンの心中を察したような台詞を言いながら、スースはそれまでスコープ代わりにしていたスライムの手を再び人間の腕へ擬態させる。

「はい！」

シモンは『ヤタガラス』のグリップから手を離し、狙撃体勢を解いて立ち上がる。

本来なら、このまま梯子をつたって台座から降りるはずだったが、

「急いだ方がいい、このまま降りるよ」

「へっ？」

いつの間にかシモンはスースに抱えられ、何が何だか分からない内に台座の上から一緒にダイビングしていた。

高さは3メートルほどしかない為、シモンが何か声を挙げる前には屋上の床へと二人は降り立っていた。

あっという間すぎて、着地の衝撃が全く感じなかったことにすら

シモンは気づかなかった。

「あ、ありがとうございます……」

とりあえず、お礼だけは言っておくことにした。

「これからは別行動だ、気をつけるんだよシモン、特に天馬騎士にはね、もしかしたらここまで抜けてくるかもしれない」

「いえ、スースさんこそ」

「なに、私のことなら心配いらない。

何と言っても盗賊だからね、私はあの最前線にいても敵の注意を引くことは無いのさ」

それは盗賊というより暗殺者のスキルなのは、とシモンは思うが、ここで言うべきことでもないと胸の内に留めておく。

「それじゃあ、また後でね」

「はい」

そう言い残し、スースは屋上からその身一つで飛び降りていった。彼女は姿こそ人間の女性であるが、その正体はスライム、手足を元の状態に戻せば壁へ張り付くことなど歩くのと同じくらい簡単に行える。

だからロープも武技も魔法の補助も無しにあんな真似が出来るのだと、シモンは飛び降りたスースを見て思い出していた。

「よし、僕もお兄さん達を援護しないと」

シモンは銃を担いで走り出す、目指すはあらかじめ決めておいた、村の正門を見下ろせる絶好の狙撃ポジション。

これまでは対岸に姿を現す魔術士にターゲットを絞っていたが、今は味方の突撃を支援する援護射撃が彼の役割だ。

狙い撃つ敵はギルドのすぐ下、距離は近いためにスコープ、つまりスースのサポートも必要ない。

（敵の部隊長は下級魔法も行使する、優先的に排除……）

突撃支援時のメインターゲットを頭に思い浮かべ、シモンは屋上から再び『ヤタガラス』を構える。

これから狙い撃つ相手は対岸では無くすでにこちら側へと到達し

た者。

（こんな近距離、外す気がしない）

躊躇無くトリガーを引くシモン、放たれた弾丸は敵の頭部へ吸い込まれるように飛んでいった。

接近戦はイルズ村で司祭を斬った時以来だ。

未だに剣で斬りあうような近接戦闘は得意では無いと思っているが、

（斬、斬――殺――斬、血、殺――死、殺、斬、斬斬――）

「お前は相変わらずだな」

右手から伝わってくる『呪怨鉈「腹裂」』の強烈な殺意のお陰で緊張感はない。

呪いでリラクゼーション効果を得ているとは果たして妙な話だが、今はそんなことを気にしている場合では無い、敵は槍を掲げてすぐ目の前に迫っているのだから。

川を個別に渡ってきている為、十字軍兵士は最初に突撃を仕掛けてきた重騎士のように列を組めずバラバラになって川岸に展開している。

だが、その数はイルズ村を占領した部隊と戦った時とは比べるべくも無いほど圧倒的。

対岸からここまでの距離を白い影で埋め尽くさんばかりの勢いだ。

「いいぜ、もう一度進化できるほど血を吸わせてやる」

とりあえずは、一番前にいるヤツラから順番に斬っていくより他は無い。

すでに相手の顔がはつきりと認識できるほどにまで距離を詰めたところで、筋力と魔力を足に籠めて一気に跳躍。

前方へ突き出された槍を飛び越え、頭上から斬りかかる。

「黒風 いいいい!!」

空中で武技を放ち、兵士の頭を3つほど斬り飛ばす。

頭部もチェインメイルで覆われているはずだが、鎖のような硬い物を斬った感触はほとんど感じられない、相変わらず凄まじい切れ味だ。

1週間ぶりに味わう血に刃が喜びの声を挙げるかのように不気味な共鳴音、今宵の虎鉄は血に餓えているとも言わんばかり、今はまだ午前中だけだな。

背後で3つの首なし死体が倒れるのと同時に地面へと着地、集団のど真ん中目指して飛び込んだ為、前後左右と隙間無く全方位が敵によって囲まれている。

兵士は俺との距離が近すぎると判断したようで、即座に長槍を手放し、腰から下げたブロードソードを引き抜く。

だがその動作は俺にとっては酷く緩慢に思える。

思えばあの施設を脱走した時点で、すでに数十人の兵士を難なく殺害できているのだ、魔法も武技も習得していない一般兵士、いわゆる‘ただの人間’が武装を整えた俺に、数以外のアドバンテージは無い。

正面に位置する兵士目掛けて鉦を一閃、鞘から剣を引き抜く途中の彼らを纏めて切り払う。

『呪怨鉦「腹裂」』はその名の通り綺麗に腹を裂き、血と臓腑を撒き散らして兵士達が倒れる。

俺が一撃与えた終わった後、漸く左右と背後の兵は剣を抜き放ち、「死ねええ悪魔っ！」

それぞれ気合か恨みの言葉を吐きつつ一斉に斬りかかって来る。流石にこの鉦でも同時に襲い来る何人もの兵士を一振りで止めることは出来ない。

さらに前方からは俺へ向かって穂先を向ける別の兵も現れる。

圧倒的な数の有利を生かした同時攻撃——だが、そんな‘基本的な攻撃の対処法など機動実験の時に学習済みだ。

「影空間開放、魔剣——」
シャドウゲート ソードアーツ

俺の足元に広がる黒々とした影と同化するような漆黒の刃がその切先を除かせる。

「――貫け」

合わせて10本の黒化剣が同時に影空間より射出され、左右と背後から迫る敵に目掛けて一直線に飛んで行く。

視界にいれずとも、それぞれの刃が俺へ向かってくる全ての兵士を貫いた事が分かる。

手を触れずとも剣を操っているのは俺自身、刃が敵を斬る感触ははつきりと頭で認識できるのだ。

左右と背後の敵を魔剣で一掃し、俺はそのまま前より槍を繰り出す兵の相手が出る。

一振りで突き出された槍の柄を中ほどから鉋で切り飛ばし、返す刀で兵士の胴を袈裟切り。

終わってみれば、着地から10秒もせずに四方から襲い来る兵達を斬り捨てた、次に控える兵士達が勢いで斬りかかるのを戸惑わせるほどのインパクトはあったようだ。

兵達は槍の先を向けはするものの、俺から数メートル離れて取り囲むだけの膠着状態に陥る。

「この、悪魔め――うおおお！」

僅か数秒の沈黙を破り、俺の真後ろから一人の兵が槍を突き出す。だが先ほどの魔剣は10本とも健在、俺の後方を守るように浮遊させているため、背後からの攻撃にも瞬時に対処できる。

俺は振り返ることもせず、ただ黒化剣の一本を操って敵へ飛ばすだけ。

槍の穂先が俺の背に到達するよりも、剣が敵の胸を貫く方が早い。断末魔の声を挙げ、また一人敵が倒れる。

その様子を怖気づいたのか、取り囲む兵が包囲の半径をさらに広めた。

「来ないのなら、こちらから行くぞ」

右手に鉋を、左手にタクト、そして背後を守る10本の黒化剣を

携えて、一步を踏み出す。

防御魔法ごと切り裂く『呪怨鉈「腹裂」』、サブマシンガンのように連射が効き、かつショットガンのように広範囲に弾丸をばら撒く『魔弾^{バレットファース}』、死角を10の刃でカバーする『魔剣^{ソードファース}』、この3つを併用することで、武術も剣術も碌に習得していない俺が、多数の敵と同時に戦うことを可能としている。

俺はすでに魔法使いの身、ならば接近戦も魔法で行うのが道理。サリエルには通用しなかったが、ただの歩兵相手なら魔力と集中力が続く限りどれだけ相手にしても遅れをとることは無い。

「破あああああ!!」

今はただ、最前線で敵を食い止める戦士としての役目を果たそう。白いサーコートを纏う十字軍兵士の死体を踏みつけて、恐怖の顔を浮かべる兵士達に向かって、俺は持てる全ての刃を向けた。

第107話 戦士の役目（後書き）

クロノが魔弾を最前線でぶっ放さないのは、味方が周りで戦っているからです。

また、掃射ガトリングバーストしている間は他の攻撃が出来ないので、接近戦においては通常の魔弾バレットアーツを併用するに留める方が安全に立ち回れます。

第108話 妖精VS天馬騎士(2)

ペガサス
天馬の翼は、鳥のようにただ羽ばたくだけで空を飛べるものではない。

物理法則に則るならば一対の羽のみで馬の巨体を宙に浮かせることなど出来無いし、まして高速で飛行など出来るはずもない。

しかし異世界の現実においてペガサスが人を乗せて空中戦闘に耐えうる機動力を発揮するのは、偏に魔法という地球には無い力が存在するからである。

‘魔法の力’でペガサスが飛翔するというのなら、その翼こそが空を飛ぶための魔法、その出力装置と言えるべき部位。

天馬騎士はこの翼に『速度強化』スピード・ブーストの魔法をかけることによって、より一層の加速と飛行速度を与えることが出来るのだ。

「????? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ????
? ???? ???? 『速度大強化』スピード・ハイブースト」

エステルを先頭に数名の天馬騎士がペガサスに速度強化の中級魔法をかけるのは同時、効果が発揮した瞬間に急加速、瞬く間に常人では認識困難なほどのハイスピードに達する。

その高速移動の最中にあっても等間隔で隊列を崩さずに飛行を続けるのは、それだけ彼女達がペガサスの扱いに習熟していることと、兵として一流のチームワークを持っていることの何よりの証拠。

一糸乱れぬ動きで空を駆ける彼女達はさながら白い流星群、それに対するリリィは眩い光を自ら放つ恒星のようである。

ライン・チャージ
オラクルシールド
「紫電突撃！」
妖精結界を纏うリリィに向かって、エステルが武技を放つ。

もしただの人間がそのまま直撃すれば、胴に穴が空くどころか、上半身が丸ごと吹き飛ばされるほどの威力を発揮する、達人級の武技である。

雷を纏った豪槍が馬上より猛烈な勢いで繰り出される。

エステルの雷光とリリイの彩光が交差、バチバチと弾ける音と光衝突は一瞬。

リリイに一撃を加え、勢いそのまま通り過ぎていったエステルは、速度強化の効果がきれ減速を始めるペガサスの上で舌打ちをする。

「硬すぎんだろ、くそがつ！」

渾身の一撃は妖精結界の表層を幾らか削りとっただけに留まり、刃はリリイの白い柔肌へ寸分も届くことが無い。

当然、発する電撃の効果も全て防がれている。

エステルの後方から連続して稲光と雷鳴が轟く、後続の天馬騎士が同じ攻撃をリリイへと見舞っているのだ。

攻撃が命中したのは自分を含め3か4、他は回避されたのだとエステルは振り返らずとも凡そ見当がついた。

防御が硬い上に半分近くも攻撃を回避されるとは始末に終えない、心の底からそう思うのは彼女だけでは無く、この場にいる天馬騎士の誰もが感じるところ。

エステル班が一連の攻撃を終え空中で旋回を行う、再び視界に捉えたりリイの妖精結界は妖精結界は何箇所か切り裂かれたような跡が見えたが、ものの数秒で破損箇所は再生し、再び欠けるところの無い完全な光の球を形成した。

「オマケに再生力も高いってか、バケモンが——」

悪態をつくのを許さないかのように、リリイがお返しとばかりに反撃の光線を放つのを視認し、エステルは手綱を引いて回避運動をとる。

生身で受ければ火傷じゃ済まないほどの熱量を宿す光線の束を、空中で二転三転、巧みな手綱さばきで避けきる。

光線で狙われているのはエステルだけでは無い、彼女が率いる班員全てが等しくリリイの攻撃で狙われている。

ただ全てを回避できているのはエステルのみ、並みの騎士では何発か被弾してしまう。

流石に防御魔法の籠められた鎧に、瞬時にガードできる技量を持

つ天馬騎士は一発や二発当たったくらいで戦闘不能になることは無いが、ダメージは確実に蓄積された。

（くそっ、くそっ！ コイツは本当にヤベえぞ、まだ一撃もマトモに食らわせてねえってのに、こっちは確実に体力が削られてる）

エステルの心に焦りが見え始める。

戦闘開始からすでに30分が過ぎようとしている、その間は負傷した二名が戦線を離脱しただけに留まっているが、天馬騎士達の内にかんりのダメージと疲労を溜め込んでいる者が何人もいる。

このままのペースで戦闘を続けていけば、ふとした拍子で次々と戦闘不能、最悪戦死者が続出するだろう事は十分予測できた。

「——きゃあああっ！」

視界の端で瞬く閃光と絹を裂くような悲鳴が上がる。

顔を向けると、人馬とも気を失いかけているのかフラフラと低速でどうにか飛んでいるといった様子の天馬騎士が一騎。

「拙いっ！ 誰かサポートしろお！！」

自分では距離が遠いと判断し即座に命令を送信するが、弱った‘獲物’をリリイが狙う方が早かった。

圧倒的な人数差の中にあって尚、リリイは抜け目無く弱い敵、あるいは弱った敵を正確に見抜く。

すでに回避も防御も不可能なほど弱りきった騎士目掛けて放つリリイの攻撃は、光線では無く光弾。

光線よりも速度は劣るが精密な追尾性能を誇る光弾、ペガサスを全力で飛ばせば逃げ切ることもできたかもしれないが、気力体力共に限界を迎えつつあるその騎士は今やただの的でしかない。

放たれた5つの光弾は、助けに向かう他の騎士をあざ笑うかのようには彼女達の間をすり抜けていく。

轟く爆音と閃光、今度は悲鳴の一つも聞こえる事は無い、ただ一人と一頭がこの空より地上へ向かって落下してゆくのみ。

また一人の敵を撃破したリリイは、それに慢心することなくすぐに次の行動へ移る。

今リリイが攻撃出来たのは、エステル班の突進攻撃をやり過ぎた直後だから出来た隙、彼女達が攻撃を終えた後は、リリイの動きと詠唱を封じ込めるように四方から攻撃魔法が雨となって飛んでくるのだ。

リリイの行動を妨害する役目を担うフラン班とマティ班が再び魔法による遠距離攻撃を再開、それを見越してすでにリリイはペガサスには真似のできない不規則な軌道を描き攻撃の隙間を縫うように高速飛行する。

（どうする——犠牲を覚悟で仕掛けるなら今しかない、これ以上はジリ貧だ）

もっとも厄介なのはやはりリリイの圧倒的な機動性能、ペガサスが鳥のように飛ぶのなら、リリイは蜂のように不規則に飛ぶことが出来る。

これは単純な直線勝負ならそれほど違いは出てこないが、回避を行う際には、この小回りの聞く運動性能は凄まじい効果を発揮する。攻撃は当たらなければダメージは0、紙一重の回避には集中力が必要だが、今のところリリイの動きに疲労はまるで見えない。

（直接掴んで動きを止めるしかねえか、くそが、そんなことしたら副隊長の二の舞、だがそれ以外に方法も思いつかねえし——）
グルグルと無為な思考が空回りを続けるだけ、画期的な答えは出ない。

「ちくしょう、何かアイツを止める良い方法ねーのかよっ！ チョロチョコ飛びやがって！」

テレパシーの通信機ごしに怒鳴りつけるものの、返って来る応えはどれも芳しくない。

「もう30分も戦ってんのに今更それ言うー？」

「多対一でこっちのが消耗早えなんて普通思わねえだろ！」

「そうね、悔しいけれど正攻法で戦ってもこちらの分が悪いのは事実だわ」

「何か手を打つなら今しかありません！ こっちも何時までも魔力は

持たないですよ!」

正攻法以外で策を打つ、というのは共通見解のようだが、やはり画期的な提案は出ない。

「……仕方無え、アタシがああ妖精野郎の動きを止めてやる」

「妖精野郎って、どう見ても女じゃん、しかもムカつくほど美少女」

「そこは今どうでもいいだろバカヤロウ! 人が一大決心してんのに水差してんじゃねーよ!!」

「本気なのエステル? ああ光の結界は触れたらただじゃ済まないことは分かっているでしょう」

「他に方法は無え、それにここでアイツに足止めされたままじゃ何時までたっても地上部隊の援護ができねーだろうが、それじゃ作戦そのものが崩壊する」

そう、そもそも彼女達の任務はリリィを倒すことでは無い。

敵陣を上空から襲うことで防衛線の守りを打ち崩し、歩兵の突撃を成功させることが本来の目標である。

「見ろよ、下じゃあついに魔族共が出張ってきてやがった、ここから強襲かければあそこの守りは簡単に落ちる」

通信機の向こう側、現在では副隊長の位置付けになるフランが僅かに逡巡する様子がエステルには想像できた。

そして、何秒かの間をおいてフランの返答が聞こえる。

「貴女に任せるわエステル、その代わりこっちは全力で防衛^{プロテク}をかけるから、絶対に生きて戻るのよ」

「当たり前だ、誰が相打ちになるかってんだよ」

「え、嘘、ホントにやんのエステルう!」

「それはマジでヤバいってえ!」

「んだよ、今更心配してくれてんのか?」

「「そんなんじゃないし!」」

こういうところはやはりキャミーとキャシーの二人は姉妹なのだな、と思うエステル。

「いいか、私がヤロウを抑えたらトドメを差すのはお前ら二人だ、

絶対しくじんじゃねーぞ」

躊躇しつつも、姉妹二人分の返答が返って来る。

天馬騎士達はそれぞれ覚悟を決めて、悠々と大空を飛び交うリリイへ視線を向ける。

「おし、んじゃあ行くー」

エステルが動き出そうとした直前、リリイの様子が突如変化したのを見た。

それまで全身を覆う光の結界の内側より光線や光弾を発射していたリリイであったが、結界の外側に小さな光の球が次々と出現していった。

「おい、何か仕掛けてくるぞ、気をつけろっ！」

幾つもの光の球は徐々にその大きさを増してゆき、これまで放った光弾の倍近い直径となっている。

もしもソレが見た目通りの威力があるとすれば、直撃して耐えられるかどうか分らない、まして体力を消耗した今ならば尚更。（なんでだ、マトモに詠唱する隙を与えたワケじゃねえってのに、兎も角アレはヤバそうだ）

エステル以下、天馬騎士の全員がリリイの攻撃に備えて散会してゆくのとほぼ同じタイミングで、その光の球は撃ち出された。

四方に散る天馬騎士へ向けて満遍なく撃ち出された光の球は、リリイがこれまで行ってきたどの攻撃よりも明らかに速度が遅い。

（遅いだと、すげー追尾性能でもあんのか？　これだけ遅けりゃ魔法を撃って迎撃した方が――）

思いのほか鈍重な攻撃速度を見て、エステルと同じ回答にたどり着いた者達が迎撃行動に移ろうとした瞬間、光の球は中空で眩い光を放ちながら弾ける。

「くっ――」

彼女達の視界は漏れなく白い光で埋め尽くされ、完全に視覚を閉ざされる。

一瞬、物凄い爆発に巻き込まれたのか、と思うが体には一切の異

常は感じられない。

この攻撃の正体に気づき、エステルは瞬時にこの隙を突いての追撃を予測する。

ルクス・デファン
光壁

レッサ・ヒール
「微回復」——?..?..?..?..?..?..?..?..?..?

身を守る為の防御魔法と、視力を回復する為の治癒魔法を連続して発動。

のみ。

「いや、待て、ヤロウはどこ行った？」

周囲を注意深く見渡しても、先ほどまで空中にあつた直径2メートルほどの光の結界に包まれたリリーの姿が見当たらない。

通信機で呼びかける。

を誰もが予想できることだ。

「ウチらも見てなあい」

「ホントかマテイ？」

きり見えましたよ！」

は

つたりリイ。

隊列を整える。

「――どういふことだ、何もしてこねえぞ」

およそ3分、地上を警戒しつつ滞空しているが、エステルのお台詞の通りリリィが落ちて言ったと思われる付近の森からは光線の一つも飛んでくることは無い。

「エステル、もしかしたら何らかの魔法の効果時間が切れたのかもしれないわ」

通信機では無く、エステル横に並んだフランが直接口でそう話した。

「……ありえなくは無いな、とんでもねえ強化魔法を重ねてかけていたのかもしれないし、それこそ邪神の加護を受けてたのかもしれないな」

「ええ、特に魔族が受ける加護に関しては詳しい事が不明、どんな能力を持っているか予測がつかない」

「要するに、逃げたと考えるべきってことか」

この状況を考えれば、誰もが自然とリリィ逃亡という答えに行き着く。

「ねえー逃げちゃったみたいだけどお、どーすんの？ 追撃かけんの？」

「いや、任務に戻る、ヤロウが逃げたってんなら好都合だ、このまま目的どおり敵防衛線に攻撃を仕掛ける」

もしマティの言うように、何らかの魔法あるいは加護の効果が切れたというのなら、リリィを殺す絶好の機会である。

たった一人で天馬騎士部隊と渡り合える化物を確実に始末しておきたいとはエステルも当然考えるが、如何せん逃げ込んだ先は深い森の中。

空からの視界を塞がれては天馬騎士の出番は無い、こうした森の中や地中、屋内と言った場所を索敵するのは歩兵頼みとなるのだから。

結果として追撃は不可能と断じ、そうであるならば早急な目標達

成が望まれる。

「もう30分も足止めくらっちゃったんだ、下手すりゃビビった地上部隊が退却を始めるかもしれないねえ、急ぐぞ！」

「了解」

通信機越しに全員へ命令伝達し、即座に天馬騎士部隊は動き始める。

そうして彼女達の目が、リリイが落ちていったであろう地上から、これから強襲をかける敵の防衛線へと向けられた時、森に異変は起こった。

森の木々が生き生きとした深緑の葉を枯らし、白い枯れ木へと姿を変えてゆく。

それが一体何を示しているのか、魔術士ほどでは無いが魔法に精通している天馬騎士にはすぐに理解できた。

『生命吸収ライフ・ドレインだと……』

『生命吸収』は共和国において使用が禁止されている魔法の一つであるところの禁術だ。

生命の維持に必要な分まで含めた魔力、すなわち生命力を全て奪うという実に単純な効果だが、その威力は絶大。

下手に使うと今後100年雑草すら生えない不毛の地となることもある、アーク大陸ではそうして完全に生物が姿を消した島があるのだ。

こうした環境的な影響を抜きにしても、敵味方の別なく生命力を奪う危険性がある、そしてなにより『生命吸収ライフ・ドレイン』を使う術者は、他者から力を奪い我が物とすることに快楽を覚え、狂人となる場合が非常に多かった。

故に禁術、だが、ここはアーク大陸では無くパンドラ大陸、魔族の支配する別天地、人間社会の条理は通用しないのは当然。

人にとって禁忌であっても、魔族にとっては何ら忌避の対象となりえない。

「全員、警戒態勢っ！ アイツはまた仕掛けてくるぞっ！！」

天馬騎士達に再び緊張感が走る、あのリリィと名乗る美しい妖精の脅威は、未だ去ってはいないことを彼女達は悟らざるを得なかった。

第108話 妖精VS天馬騎士（2）（後書き）

感想でリリィ無双と言われた天馬騎士戦ですが、彼女たちはこれでもエリートです。表向きめっちゃ苦戦してますが、それでも30分リリィとの戦闘に耐えたのは、歩兵と違って高い実力を持っているからに他なりません。

ちなみに、彼女たち天馬騎士部隊は、ゴルドランの戦いに従軍したのとは別の部隊です。もしかして紛らわしかったですかね。

第109話 黒き神々の加護

深い森へと姿を隠したリリイは、追撃を選択しなかった天馬騎士部隊を嘲笑った。

「んふふ、貴女達がこの私を殺せるかもしれないチャンスだったのにね」

もっとも、彼女達が追撃を選んだとしても簡単に殺されてやるつもりはない。

それはあくまで確率の話、あの天馬騎士部隊がリリイを空中戦で倒せる可能性はゼロ、今を狙えば僅かに勝機があった、ということだけのこと。

「魔法の効果がきれた、という予測だけはアタリ、でもその対処を間違えたわ」

今や完全にリリイへの注意を逸らし、眼下に広がるアルザス村防衛線へ向かうのに集中する天馬騎士部隊。

唯一の敵の空中戦力と思われるリリイが目の前で逃亡を図ったと見たならば、その行動は当然といえるだろう。

だがしかし、

「浅はかね、また私が戦線に復帰するとは思わないのかしら、それとも、そう思いたくないからなのかしら」

リリイの言葉の通りであるならば、彼女達はすでにリリイは魔法の効果が切れて戦えない、と信じたかったということになる。

そして、それが半ば正しいことを、真の力を発揮するリリイの強力な精神感応能力テレパシーによって証明している。

少女リリイにとって、特別に精神防壁マインド・プロテクトをかけていない相手など、戦闘中であつてもその表層意識を読み取るとは造作も無い。

リリイは彼女達が何を考え、どういう予測を立てて今の行動に移したのかを全て正確に理解している。

「魔法か加護のどちらかが切れた、と考えたみたいだけど、どうし

力が失われることに気づき、逃げようとした時にはすでに一步も進むことができないほど生命力を奪われ、数秒後には命を維持する分まで根こそぎ搾り取られる。

それは普段は狩る側である肉食動物も同じ、雄の個体はこの異変に警戒する間も無く倒れ伏し、雌は巣で子供か卵を守るように抱いたまま力尽きた。

無論、残された子供にも抵抗する術は無い、生まれたばかりの命の火は些かの熱すら残さず奪われ、さらにまだ生まれてすらいらない卵の中に宿る小さな命までも糧とされる。

無差別に、無慈悲に、ただ周囲にある命を奪い取り我が物とする、
ライフ・ドレイン
『生命吸収』とはそういう魔法。

「うん、まあこれだけあれば20分は持つかな」

だがリリイにとってこの魔法は必要な準備の手段でしかない。

これは加護を得るために必要な代価であり、供物であり、生贄なのである。

「純情可憐にして美しき我が女王陛下――」

魔力の源はこの世界そのもの、だが加護の源は神である、ならばそれを引き出すのはこの世界では無く神のいる別の世界。

その神が座す世界・次元と繋がるのは魂。

集った半径100メートル以上に及ぶ範囲にある全ての生命力という名の魔力は、リリイの魂を『ゲート門』として、今まさに神の元へと捧げられた。

そしてリリイの身に加護の力が満ちると同時に、叫ぶ。

感謝と敬意を籠めて、加護を与えた神の名を声高に。

「『妖精女王・イリス』」

加護によって真の姿を再び保つ力を得たリリイは、真っ白に枯れた死の森を後に残し、再び空へと舞い上がる。

これまでクロノは加護というものを目にする事が無かった。

厳密に言えばクロノ自身の力そのものが『黒き神々の加護』であるし、またサリエルの行使する力も全て『白き神の加護』である。

だがこの両者はあくまで特殊、人体実験によって力を得たクロノとある日突然加護を受ける使徒は、この異世界においては真つ当な加護の受け方では無い例外中の例外。

では一体どういう人物が真つ当な加護を受けたと言えるのか、もつとも普遍的な解答としては『強い者』である。

パンドラ大陸には戦闘に関する分野以外でも多くの加護は存在する、しかし誰の目にも分かり、またその力を見せ付けることが出来るのは戦いの力、まして弱肉強食の理が強い魔族の世界において、それはより顕著であるといえるだろう。

ある一定以上の強さを持つ人物はほとんどの場合何らかの神から加護を得ているのである。

その効果は特殊な魔法の行使、身体能力の上昇、魔力の補給、属性の付加、形態変化、などなど実に様々な種類がある、そしてそのどれもが加護を受けた者に大きな力を与えるものに他ならない。

逆に一定の水準に達しないような弱い者は加護を受けることが無い、ある程度の力が無ければ加護は受けられないとも言える。

その基準は冒険者のランク分けでいえば3に当たる、より詳しく言うなら3の後半、ランク4に近いほどの力量だ。

パンドラ大陸に渡ってよりクロノはひたすら安全なランク1のクエストばかりを受けていたため、加護を持つほど強い冒険者と一緒になることが無かったのは当然と言える。

しかし今は違う、クロノ率いる突撃部隊は全員ランク3以上の猛者ばかり。

ランク4の人狼を筆頭に、オーク、リザードマン、ゴーレムといったパワーに秀でる種族と達人の域に達する武技を身につけた人間やエルフなど、それぞれタイプは異なるが全員何かしらの加護を持ちえる戦士だ。

そしてクロノは初めて加護の力を目の当たりにすることとなる、この圧倒的な兵力差のあるアルザス防衛線において。

「おらああああ!!」

ヴァルカンが手にする大剣『牙剣・悪食』が振るわれるたび、十字軍兵士の体が宙に舞う。

彼の剣を受けた兵士は四肢のどれかは欠ける、五体満足で吹っ飛ばされた者とはとびきり運が良かったといえるだろう、ただどの道死んでしまうことを考えなければの話だが。

「かかって来いよ人間共、こっちはようやく気分がノってきたところなんだぜえ」

血に濡れた牙の刃を肩に担ぎ、立ち並ぶ兵士達に不敵な笑みをみせるヴァルカンの姿は、正しく共和国の人々が思い描く恐ろしい魔族の姿そのものの。

だが兵士達は退かない、退くことなど出来ない、なぜならこういう者をこそ殺し、滅し、地上から消し去ることが彼らの教義である。

「怯むな、一斉にかかれっ!」

部隊長の声の下、兵士達は鎗袈を形成し立ちはだかるヴァルカンと向き合う。

「へへ、ビビっちゃいねえようだな、いいぜ、ここらでいっちょ本気の一つでも出してやろうじゃねえか——」

ヴァルカンの放つ圧倒的な殺気と闘気に屈することなく、声を張り上げ幾人もの兵士が鎗の先を向けて猛然と襲い掛かる。

繰り出される鎗袈、いくら大剣といえどもリーチは鎗の方が長い、逃げ場なく迫る刃の壁を前に、ヴァルカンは唱える、己が信じる神の名を。

「風纏う孤高の牙——『孤狼・ヴォルフガンド』」

魂より出でる加護の力は瞬時にヴァルカンの全身に行き渡る、そ

れはすぐ目の前に槍の穂先が迫ってなお余裕を感じるほどの圧倒的な力。

「『疾風一閃』^{エール・スラッシュ}っ!!」

横一文字に振るわれる大剣の刃には、逆巻く風が宿る。

ヴァルカンが『牙剣・悪食』を完全にコントロールする力量を持つ為、刃が魔力の風を喰らう事は無い。

放たれた武技『疾風一閃』^{エール・スラッシュ}は、大剣の刃がそのまま何メートルも伸びたと思わせるほど鋭い風の斬撃で、前方の空間を端から端まで薙ぎ払う。

あと僅か数センチでヴァルカンの身に届いたはずの槍は悉く叩き折られて彼方へ吹き飛んで行き、刺突を繰り返した兵士は自分の攻撃が届いたと信じたまま胴を両断され絶命した。

たった一振りで何人もの兵士を斬り捨てて見せたヴァルカンは、死んだものに用は無いとばかりに次なる得物を即座に見定める。

凶暴な狼の視線の先にあるのは、他の兵士よりも幾分か上等な装備を身につける部隊長の姿。

その装備が見掛け倒しでは無く、ある程度の下級魔法と武技を習得し、通常の歩兵よりも強い力を持っていることはすでに知っている。

この部隊長クラスがあと5人ほど同時にかかってくれば、一太刀くらいは浴びせられたかもしれない、とヴァルカンは考えた。

「か、神よ、我が身を守りたまえ!——????????????????」

部下を一刀の下に切り捨てられたのがよほどショックだったか、部隊長の顔にはありありと恐怖が浮かんでいる、だが戦意喪失とまではいかない。

唱えるのは神に捧げる祈りでは無く、攻撃魔法の詠唱。

（『氷矢』^{アイズ・サギタ}程度じゃ俺は倒せないぜ）

圧倒的な実力差を前に逃げ出さない根性は認めるが、それだけで如何ともしがたい力の差が埋まることは無い。

(まして加護が発動してりや、傷一つつかねえな)

『孤狼・ヴォルフガンド』の加護、その力は風。

加護を受けた者はその身に風を纏い、攻撃すれば風の刃と衝撃が伴い、防御すれば風圧によって威力を殺ぎ、走れば疾風が体を運ぶ。攻撃、防御、回避、全てをバランスよく上昇させるこの効果は、今のように多対一の局面において大いに役立つている。

これから自分に向かって放たれる『氷矢』^{アイズ・サギタ}は、防ぐのも避けるのも思いのまま、何ならこのまま直進してわざと当たりながら正面から切り伏せることもできるのだ。

ヴァルカンが何れかの行動を選択し、風が乗っていつもよりずっと軽くなった足を一步踏み出し、疾風の如き俊敏さで斬りかかる。

「氷矢(アイズ・サー)——ぎゃあああっ!!」

「あん?」

ヴァルカンの足と剣を振り上げた腕が止まる、もう攻撃が届く間に合いに踏み込んだその瞬間、部隊長の首から突如として鮮血が噴出し、魔法を放たんとする直前にぱったり倒れこんだのだ。

(まだなにもしてねーんだが……)

疑問に思うが、そのよく見える目を凝らせばすぐに答えは得られた。

「ちっ、獲物の横取りは勘弁だぜ、スーさんよお」

「ふふふ、早い者勝ちだよ」

悪びれもせず、笑顔でランク4の盗賊スースは応えた。

灰色のローブを纏った、取り立てて目立つ特徴の無い女性、街中で見かければ10人の内9人は振り返らないその凡庸さ。

しかし首下を覆うチェインメールごと喉を切り裂いた大振りのダガーを逆手に握り、凄まじい闘気を発するヴァルカンを前に爽やかに会話をかわす彼女は非凡そのもの。

いや、最も恐るべきところは、ヴァルカンがよく見なければ、そこに居る、と気がつかないほど希薄な存在感だろう。

魔法で直接その姿を消しているわけではない、まるで路傍に転が

る石のように注意しなければ記憶に残らない、そんな凄まじい気配の消し方。

この刃と血が飛び交う修羅場にあって彼女の存在に気づくのは、こうして面と向かわなければ不可能だ。

「いつに無く張り切ってんじゃねーの」

「まあね、相方に良い所をみせなきゃいけないし」

「はっ、随分と気に入ったみたいじゃねえか、ああいうガキが好みだとは知らなかったぜ」

言ってから気づく、すでにヴァルカンの視界にスースの姿が映っていないことに。

何処に、と考える前に彼女の声が背後から聞こえた。

「彼を気に入っていることを否定はしないけど、そういう言い方は無いんじゃないのかな、デリカシーに欠けるよ」

（今のはマジで見えなかったぞ、隠密に加えて移動速度はヴォルフガンドより上か、本気で加護使ってんなこのスライム女は）

これ以上の軽口は藪蛇だと判断したヴァルカンは素直に謝意を口にする。

「悪かった、まあ二人で仲良くやってくれや」

「言われなくともそうするさ、じゃあね、お互いもう少しの間だけ頑張ろうじゃないか」

振り返ると、そこにはもうスースの姿は無い。

まるで幻と会話していたかのような錯覚をヴァルカンは覚えた。

「『影渡・ハンゾーマ』の加護を使うんだ、やっぱ盗賊シーフじゃなくて暗殺者アサシンだろアイツは」

まあいい、信じる神も使うスキルも人それぞれ、余計な詮索と口出しをしないのは冒険者のマナー、そう考えを打ち切り、ヴァルカンは未だ懲りずに川を渡って迫り来る白い軍団に向き直る。

「今は精々、楽しませてもらわなきゃなあ！」

今度こそは獲物を横取りされん、と心に誓い、ヴァルカンは大剣を振り上げ、敵の集団へ嬉々として突っ込んでいく。

その纏った風に灰色の毛を逆立たせ、嵐のように敵を切り刻むヴァルカンは、『孤狼・ヴォルフガンド』の加護を受ける者として正しい姿であった。

第109話 黒き神々の加護（後書き）

加護はRPGで言うステータスでもスキルでも無い、特殊能力みたいな感じですね。今回登場のリリィ、ヴァルカン、スースは3人とも強力な部類の加護を持つてると言えるでしょう。逆に効果がイマイチな加護もあるということです。

ところで、ようやくスーさんのランク4らしい活躍させることが出来ました。スーさんマジ暗殺者！

第110話 妖精VS天馬騎士(3)

『妖精女王・イリス』の加護により再び力を取り戻したりリイと、疲労の色を見せ始める天馬騎士との戦いが再び上空で始まった。

「――『イグニス・チャージ火炎突撃』！」

キャミーの繰り出す突撃攻撃、燃え盛る火炎の槍はしかし、リイオラクル・シールドの妖精結界を破れない。

「――『アイズ・チャージ氷結突撃』！」

続けてキャシー班が氷属性の武技を用いてリイへ連続攻撃を見舞う。

武技の威力もさることながら、火と氷の属性を連続的に叩き込まれれば、熱膨張によって鉄の扉をも破碎することが出来ただろう。

だが、リイの妖精結界は物理法則などまるで無視するかのようオラクル・シールドに、変わらずに輝きを放ち続けている。

「あーん、もうヤダあ！」

「全然効いてないじゃーん、なんなのよー！」

通信機を通して姉妹の愚痴がエステルの耳に届く。

「ちっ、やっぱさっきと変わんねーか」

向こうも退くに退けない戦いのはず、もしかすればリイは表向き変わらぬよう見せているだけで、先よりもパワーが下がっているのかもしれないと考えたが、アテは外れたようだ。

こちらもそれなりに消耗してきているというのに、向こうは今でも魔力が漲り光り輝いている。

「いや、寧ろ強くなってんじゃねーのか」

心なしか、突撃攻撃の時に与えられるシールドへの傷が小さくなっているように思えた。

それは自分達が疲れた所為なのか、本当に向こうが強くなったのか、はたまたその両方か、知る術は無かった。

「仕方無え、さっき言ったこと覚えてっか？」

エステルが接近戦で直接リリーの機動力を封じる、その上でキャミーとキャシーが力づくでシールドを削りきり、止めを刺す。

危険だが他に方法は思い浮かばず、また考える時間が無いのも先と同じ。

止める者は居なかった、

「――うふふ、ダメよ」

しかし静止の声を確かにエステルは聞いた。

発信源は通信機、仲間の声では無い、この声は、

「て、テメェ！」

「随分とお粗末なテレパシーの術式ね、簡単に割り込めたわ」

紛れも無く、目の前で戦闘中であるリリーの声である。

エステルからは、リリーがフラン班とマティ班から繰り出される攻撃魔法の嵐を回避するのに専念しているように見える。

だが、通信機から聞こえてくる声は、まるで茶飲み話でもするかのように優雅なものだった。

「このクソ野郎！ 舐めた真似しやがって、今すぐ私の槍でぶっ殺してやる！」

「私にトドメを刺すのはあの頭の悪そうな姉妹じゃなかったの？」

自分で言った作戦を忘れるなんて、ボケてるんじゃないの、イヤね、人間って種族は老いが早くて」

エステルは気づいた、

（ヤベえぞ、こっちの通信機越しの会話を全て傍受していやがる！
？）

いくら単純な作戦とはいえ、相手が知っているのと知らないのでは大きな違いが出てくる。

「くっ、くそが……」

一筋の冷や汗がエステルの頬を伝う。

その様子をリリーは知っているのかいないのか、変わらぬ調子で語りかける。

「ふふ、貴女って口は悪いけれど、仲間の為に率先して自分が犠牲

になろうなんて、可愛いところあるじゃない」

「ふざけんな！ 知った口を利くんじゃねえ！！」

通信機には一切の魔力を流していない、声の受信も送信もできないはずだが、スピーカーから流れる声は止まらない。

「でも貴女、自己犠牲をするには少しばかり未練がありすぎるんじゃないかしら？ 私には分かる、とてもよく分かるわ、貴女の心の秘められた恋心、とかね」

「や、やめろ」

思わず声が震えるのが自分でも分かった。

（落ち着け、ハツタリだ、私を女だと見て、適当言ってるだけだ！）

「えーと、貴女の思い人の名前は――」

「やめろおお！！」

リリイが口にした男の名は、エステルが脳裏に浮かべた人物と全く同一のものであった。

（な、な、なんで、なんで知ってる……）

呆然とするエステルに構わずリリイはさらに言葉を重ねる。

「これはこれは随分と可愛らしい、茶色の髪の毛のくりくりした目、まるで子犬みたいな男の子ね、虐めたくなっちゃう」

（そうか、コイツ、人の頭の中を覗けるのか、この距離で、こんな正確に……なんだよ、通信の傍受どころか、コイツは最初から全部こっちの考えを見抜いてるってことかよ！）

見事にエステルの思い人の容姿を言い当てたことで、リリイのテレパシー能力の精度をようやく理解する。

同時に、己の心に土足で踏み込まれたことに、形容しがたい不快感を覚える。

「ダメじゃない、まだ告白もしてないのに、こんなところで死のうとするなんて」

「五月蠅いっ！ 黙れええ！！」

「彼、衛生兵として近くにいるんでしょ、良かったじゃない、今すぐ飛んでいって告白できるわよ」

「黙れっ！」

「ほら、早くしないと貴女より先に彼、死んじゃうかもしれないでしょ」

「黙れっ！！」

「長い時間をかけてようやく仲良くなれたんだから、彼を自分のモノにするまで、死ぬことなんてできないわよね」

「黙れって、言ってるんだろうがああ！！」

叫ぶエステルと嘲笑うリリィ。

「あはははは、貴女って本当に可愛いわ、好きな男の話でこんなに動揺するなんて——」

この通信機の向こう側にいる女は確実に自分を動揺させる言葉を吐く、自分の心が揺らいでいる事は最早隠しようも無く認めざるを得ない。

エステルは身を固める、次に放つ彼女の言葉を恐れて、心を揺さぶる恐怖の言霊を。

「避けてエステルっ！！」

聞こえた声は誰の者か、瞬時に判断がつかない。

分かったことは、目の前に迫る一筋の白い閃光。

そしてその光の出所は、煌く妖精結界に包まれ、宙で逆さまの体勢で正面から自分を指差す、その指先。
オラクルシールド

一体何時から狙われていたのか、これほど殺気の籠った一撃を撃たれてから気づくなど、普段のエステルからすればありえない。

思えば単純なこと、リリィの言葉に惑わされ、動揺した不意をつかれた、ただそれだけの事。

（ヤバい、避けきれない——）

ペガサスの純白の羽が綿毛のように宙を舞った。

「がああああああ！！」

熱と痛みに声をあげるエステル、未だかつてないほどの激痛が全身を駆け抜ける。

痛覚に犯される脳内だが、かろうじて冷静に思考できるキャパシ

ティが残っていた。

（――生きてる、死ぬほど痛えが、まだ死んじやいねえ！）

自分が即死しなかったことを認識した次の瞬間には、ペガサスが落下を始めていることに気づく。

視界の端に、多くの羽が焼失した翼を捉える。

負傷したのは自分だけでは無くペガサス、それもよりによって翼。だが、致命傷では無かった。

「テメエ根性見せやがれっ！ ペガサスが落ちてんじやねえぞオラ
ああああ！！」

賢明に翼を羽ばたかせ、ペガサスはどうにか体勢を立て直し再び宙に舞い上がる。

気がつけば、フランとその部下二名が形成する三角形の真ん中に位置するような場所にエステルはいた。

それが負傷した自分をリリィの追撃から守る為にやって来たのだと、エステルは一拍遅れて思い至った。

「「????? ???? ???? ????——微回復」
レスサー・ヒール

二人分の治癒魔法が飛んでくる、だが痛みが僅かに和らぐだけで、到底傷口を塞ぐに足る回復量では無い。

「……悪い、油断した」

それだけ言うと、エステルはあらかじめ所持しておいたポーションを一気に飲む。

それなりに高価な一品だが、それでもまだ傷の半分も癒えてない事を感じる。

さらにもう一本を取り出すと、ペガサスの羽が抜け寂しくなった翼へと振りかけた。

こちらもエステルと同じく回復効果をもってしても即座にいえる程の軽い負傷ではない、どちらも気休めより幾分かマシといった程度。

「撤退しましょう、エステル」

フランの進言にはすぐに答えず、エステルは改めて自分の負傷箇

所を見た。

(見なきゃ良かった、クソっ)

最も酷い負傷箇所は左手、恐らくリリイの閃光を反射的に腕で庇ったせいだろう。

鋼鉄と魔法の防御を併せ持つプレートが完全に焼き切れて、腕にまで深い傷跡を残している。

傷は左腕を縦に切り裂くように走り、そのまま肩口まで達し、さらにギリギリ首の直前でようやく止まっている。

あと数十センチ進んでいればエステルの首と胴は別離していたに違い無い。

どうやらリリイの閃光は左方向からペガサスの翼ごとエステルを薙ぎ払ったようだった。

(戦えないことは無い、だが、この有様じゃヤロウの動きを止めるなんて到底できねえな、けど、だからって……)

「ふざけんな、まだ私は戦える」

「そうじゃないわ、見なさいエステル、地上部隊が退却を開始したのよ」

「何っ!？」

即座に視線を地上へ向ければ、つい先ほどまでとは全く逆方向に進む歩兵の姿が見えた。

しかし、自分が犯した失態を思えば、逃げ出す歩兵達を罵倒することなど出来なかった。

「……撤退するぞ」

「「了解」」

通信機からの返答を聞いたエステルは、宙に浮いたまま動きを見せないリリイへ視線を向ける。

彼女の表情が見えるほどの距離には無いが、恐らくその顔は笑っているのだと思えてならなかった。

「じゃあね、帰ったら愛しの彼にその傷と心を優しく慰めてもらいなさい、エステル」

その言葉を通信機越しに発したリリィは、退却する天馬騎士を追撃することなくアルザス村の方向へさっさと飛び去って行った。

「くそがっ、最後まで舐めたこと言いやがって……」

悪態をつくエステルの頭の中に愛らしい彼の笑顔しか浮かんでこないのは、果たしてリリィの所為なのかどうか。

第110話 妖精VS天馬騎士(3) (後書き)

心理戦……なのか？ というリリィの相手の弱み(？)につけこむ作戦でした。未練を余計に意識させると、死の覚悟も揺らいだり、みたいな。

さて、そんなワケでついに十字軍が退却を始めたようですが、果たしてクロノ率いる地上部隊はどうなっているのでしょうか。それでは、次回もお楽しみに。

第111話 火焰城壁

24人の突撃部隊は、武技と魔法と加護を尽くして未だ一人も倒れる事無く川岸で奮戦している。

だが渡河して来る敵の数は百や二百では済まない、一騎当千の勢いで戦う突撃部隊といえども、彼らを一人も後ろに通さないということは人数的にも地形的にも不可能。

矢と魔法の雨を潜り、突撃部隊の刃を切り抜け、歩兵達はずいにアルザスの防壁へと到達する。

だがこの低い堤防と木の柵を組み合わせ、とても堅固とはいえない防壁を、兵士達は未だ超えられないでいた。

「な、何だこの鉄の線は――」

防壁の前にびっしりと敷かれた有刺鉄線の茂みへと、兵達は躊躇無く足を踏み入れる。

そして踏み込んだ時に後悔する、この棘付きの鉄のワイヤーは足に突き刺すような痛みと共に絡みつき、恐ろしく動きを阻害してくるのだ。

「うらあ！ 大人しく国に帰りやがれ人間共！！」

防壁の前でほとんど身動きの取れない兵士達は、柵の内側で迎撃にあたる冒険者達の良いたしにしかない。

平均ランク2で構成され突撃部隊よりも実力に劣るが、それでも彼らは何年も危険な冒険者生活をしてきたのだ、兵士としてみれば十分に熟練兵の域に達している。

柵から突き出される槍の突きは実に堂に入ったもので、有刺鉄線に囚われた十字軍兵士の命を的確に奪ってゆく。

だがその一方で、十字軍はやはりその圧倒的な数で押し寄せ、防壁の前は徐々に戦う兵士の数が増えてゆく。

「姉さんこれそろそろヤバいんじゃないのっ！？」

防壁前で伝説の戦乙女ヴァルキリーのように勇ましく戦う『三狼姫』のメンバ

「三女のハンナが思わず声をあげる。

「落ち着きなさい、まだ大丈夫よ、エルフはどんな時でも慌てない。
ローラ、準備は良い？」

「はい、姉さん」

ハンナはすでに弓では無く槍に装備を切り替えて、防壁をあと少しで乗り越えんとする兵士を突き刺す攻撃を5分ほど前から繰り返している。

一方で、長女イリーナと次女ローラはシルフライト風雷弓を手に、通常よりも大きな雷の矢を番えていた。

目前に敵の集団が押し寄せ、最早目を瞑って撃っても敵に当たるだろうというこの状況において、イリーナとローラの狙う先に敵兵の姿は無い。

「みんな、柵から離れてっ！」

イリーナの声に、ハンナ以下防壁前で槍を振るう冒険者達は即座に一步下がる。

その槍袂が止む僅かな隙について、兵士達は一気に柵へ張り付き、乗り越えようと試みる。

「『ライン・ブラスト雷電放射』っ！」「

弓より同時に放たれるのは雷の下級範囲攻撃魔法、二発撃ったからといって防壁の前に押し寄せる敵を全てその攻撃範囲に捉えることはできない。

だが、彼らの足元には有刺鉄線が広がり、また柵にもそれがしっかりと巻きつけられている。

シルフライト風雷弓から解き放たれた雷は、まず柵を取り巻く有刺鉄線へと吸い込まれ、そのまま電気の通りが良い鉄のワイヤーを通り、瞬間に展開された有刺鉄線のネットワーク全てに通電する。

この瞬間、ただの有刺鉄線は、電流有刺鉄線と化した。

柵にべったりと張り付いていた兵士達は、網戸に止まった蠅が殺虫剤をかけられたのと同じような動きで倒れ、また一步でも有刺鉄線の茂みに足を踏み入れた者は悉く感電し戦う力を失った。

「ほら、まだ大丈夫でしょう」

「え、うん……」

やってやった顔のイリーナに、ハンナは姉と自分とのテンションの温度差を感じた。

「みんな構えて、次が来るわよ！」

防壁前に殺到した兵士達はほぼ一掃できたが、すぐに後続の敵が姿を現す。

大量の敵を一網打尽にして喜ぶ暇は無く、冒険者達は再び気合をいれて敵へと向かう。

「姉さん、次は少し拙いかもしれない」

ローラの落ち着いた声がイリーナにかかる。

「何かしら？ 柵はまだどこも崩れてはいないけれど」

「そうじゃない、死体が多すぎる」

柵の向こう側をローラは指を差す、そこには死亡した者も重傷で身動きがとれない者もない交ぜとなって地に伏せている。

当然の事ながら、その倒れているのは地面の上では無く、有刺鉄線の上だ。

「まさか、死体を足場に――」

イリーナが気づくと同時に、それは現実が起こった。

再び押し寄せてきた十字軍兵士達は、横たわる仲間の死体を、あるいはまだ息のある者、その体を平然と踏みつけて、有刺鉄線に足を囚われること無く防壁へと迫る。

「テメェら、仲間を足蹴にするとは正気かつ！」

冒険者の誰かが叫んだ。

チームワークを重視する冒険者にとって、仲間の死体どころか、まだ生きている者を助けようともせず、まるで物のように足場として利用する十字軍兵士の行為は許しがたかった。

しかし、兵士としては当然の行動であるともいえるし、実際に地球では有刺鉄線を突破する一つの方法として、仲間の体を足場に突き進むというものがある。

もっともそんな事を知る冒険者はクロノ以外にはいないし、十字軍兵士も目の前に都合の良い足場があるから使っているだけに過ぎない。

「確かに、これは拙いかもしれないわね、これじゃあまた電流攻撃をしても、ほとんど感電しない」

ここから先は、もう力で敵を押し返すしか無い。

そう覚悟を決めてイリーナとローラは弓を引き、先ほどよりも勢いを増した敵と向かい合った、その時、

「復活っ！」

という掛け声と共に、十字軍兵士にとって忘れがたい悪魔の爆音を聞いた。

ギヤリギヤリと機械的な音を響かせながら、黒いマズルフラッシュと共に撃ち出されるのは鎧ごと貫く脅威の弾丸。

「待たせたなみんな、機関銃復活やでえ!!!」

人間にとって一撃必殺の威力を秘めた弾丸の嵐が再び十字軍を襲う。

モズルンは機関銃のグリップを握り、闇の魔力全開で防壁に殺到する兵士に向かって撃ちまくる。

「ふう、いいタイミングで復活してくれたわ」

どこか安堵の顔を見せたイリーナは、指示を出すべく後ろを振り返った。

「では、クロノさん達を迎えに行つてあげましょう」

そこに立っているのは、クロノとは違う意味で黒尽くめの魔女フィオナ。

「それじゃあ、お願いするわね」

「はい、任されました」

フィオナは魔女のトレードマークといえるトンガリ帽子の中から、大振りの角笛を取り出した。

小さな唇を角笛へ寄せて、軽く息を吹き込むと、

ブオオオオオン

兵士の怒声、機関銃の射撃音、戦いの音を掻き消さんばかりに大きな音色が響き渡った。

その音は防壁の向こうで奮戦する突撃部隊、クロノ達の耳にも確かに届くほどのものだった。

「角笛の合図だっ！ 全員退くぞっ！！」

俺の耳に特徴的な角笛の音色が聞こえると、即座に退却命令を発する。

と言っても、すでに角笛の合図で退却と突撃部隊全員に通達しているので、俺の言葉を聞くまでもなく後退してくれるはずだ。

「うらあああ！ かかってこいやあああああ！！」

血の気が多い戦士達の中には、どうやら角笛の合図を忘れて戦いに没頭する者もいるようだった。

「つーかヴァルカン、お前のことだよ。」

バレットアーツ
「魔弾」

ヴァルカンの側頭部に向けて弾丸を見舞う、前に決闘した時と同じ柔らかな弾頭で。

「痛っ！ なんだクロノ、邪魔してんじゃねーぞっ！」

怒声と共に振るわれた大剣の一撃に巻き込まれて、兵士が2名ほどぶっ飛んで行った。

「撤退だ、笛の音が聞こえなかったか？」

「ああ、そーいやそんな合図もあったっけ」

お前、俺が言わなかったらいつまでここで戦い続けるつもりだったんだよ、死ぬまでか？

スモーク
「黒煙」

とりあえず頭の中が戦うことで一杯な脳筋の人狼を連れ、速やか

に村まで撤退すべく煙幕を繰り出す。

広範囲に渡って濛々と立ちこめる黒い煙の出現に、もしや毒かと警戒する素振りを見せる兵士の姿が見えたが、残念ながらこの煙に攻撃力は皆無だ、本当にただの目くらまし。

最初にサリエルから逃亡する時に使った思い出深い黒魔法ではある、今はあの時のように煙幕の向こうから正確に攻撃をしてくるような者はいないだけ、かなりマシな状況だと思うね。

「流石は熟練の冒険者だな、退く時の手際も鮮やかなもんだ」

つい先ほどまで兵士に囲まれ乱戦を演じていた彼らは、即座に包囲を切り抜けて後退を始めている。

しかしながら、このほぼ平らな河川敷において敵の足を止めるものは無い、下がる俺達へ兵士達は煙幕を突っ切って追撃をかける。

「魔族が退いたぞ！」

「追え！ 追え！」

こちらが明確な退く姿勢を見せたことで、十字軍が勢いづく。

このままだと真っ直ぐ門に向かって下がって行けば、俺達が開いた門に入ると同時に雪崩れ込んで来るだろう。

どこかで俺達が村へ戻る僅かな時間を稼ぐ為に敵を足止めしなければならぬ。

だが、それは俺の仕事では無い。

「どけやオラああ！」

突撃部隊を避けて防壁に群がっていた敵兵を、ヴァルカンを先頭に突撃部隊の面々が片付け始める。

一時的に挟撃される形となった兵士達は、突撃部隊が刃を振るう門の前からあっさりと追い出される。

そうだ、とりあえず門の前に敵を寄せ付けなければそれでいい。

俺達が出て行った直後に敷かれた有刺鉄線の前に、24人の突撃部隊が集う。

後は迎えてくれるのを待てば良いだけだ。

「おかえりなさいクロノさん」

そんなフィオナの言葉が、開門と同時に俺の耳に届いた。

ないのと同じように、何百もの兵の歩みを、その『イグニス・ランバートデファン火焰城壁』は完全に止めていた。

「……凄いな」

「ありがとうございます」

そう思っているのは俺だけでなく、仲間の冒険者も、さらに防壁の前で攻撃の機会を窺っていた十字軍兵士までも、突如出現した巨大な火の山岳に目を奪われている。

そうして、敵の一人を入れることも無く、帰還した突撃部隊24名全員を村へ収容し、再び門は閉じられた。

それと同時に、紅に輝く火焰城壁は蜃気楼のように大きく揺らめいたかと思うと、次の瞬間には幻のようにその姿を消した。

第112話 一時撤退

門の内へと戻った俺は、機関銃が復活したモっさんと共に再び十字砲火を敵に浴びせた。

かなりの数が門にまで接近されていたが、再開した十字砲火と、突撃部隊を構成する手練れの冒険者達が戻ったことにより、敵を押し返すことに成功している。

やはり十字砲火の殺傷力は凄まじいものがあると再度実感するが、機関銃が使用不可となればまた俺達が門を出て敵を止めになければならない。

さっきは一人も戦死せずに帰ってきたものの、2回目からは確実に死者が出るだろう。

おまけに、俺自身も無限に魔弾バレットアーツを撃ち続けることができないのだ。まだまだ余裕があるとはいえ、このままのペースで敵が攻め続けてくれば、今日一日を守りきれるかどうかも怪しい。

だが、その考えはどうやら杞憂に終わった。

「……敵が退いたな」

二度目の十字砲火を開始してから、防壁まで迫った敵兵を押し返し、それからほどなくすると、敵は次々と踵を返して退却していった。

「おいクロノ、ヤツら逃げ出したが追撃しないでいいのかよ？」

ヴァルカンが弓を放り出し、今にも門から飛び出さんばかりの勢い。

逃げる敵を追撃するっていうのは兵法の基本ではあるのだが……

「追撃はしない」

「よっしゃ、俺に任せ——って、何でだよ!？」

落ち着けヴァルカン、だから剣の柄に手をかけるのは止せ。

「敵に機関銃は無いが、それを補って余りあるほどの魔術士が対岸に控えている、こっちが突撃したらチャンスとばかりに範囲攻撃を

ぶっ放してくるぞ、それこそ逃げる味方を巻き込んででもな」

「そんなのにビビって冒険者やってられるかよ！」

「突撃部隊が返り討ちにあえばここは半日と持たずに落ちる、そうでないとしても、ここで追撃をかければ確実に死者が出る。」

こっちは今の人数でギリギリ守っていられるような状況だ、百かそこらの歩兵を倒すために突撃部隊の人数を減らすわけにはいいかな」

「ちっ、仕方無え、リーダーがそこまで言うなら従うしかねえな。」

おい、テメえら持ち場にもどれ、追撃は無しだよ、おらそこお、弓を投げ捨ててイヤそうな顔すんなや！俺だって我慢してんだよ！！」

ヴァルカンと同じように追撃命令を期待していた突撃部隊のメンバーが面白く無さそうな顔で散ってゆく。

「しかし、クロノよお」

「ん？」

「敵はまた来んのか？」

十字軍は対岸へと引き返し、上空に展開していた天馬騎士部隊もすでに影は無い。

今は完全に戦闘停止となっているが、これを素直に勝利と喜べるほど、単純な戦いではない。

これは会戦では無く防衛戦、敵が来る限り守り続けねばならない、いわば泥沼の戦いだ。

敵は一時的に退却したに過ぎない。

「いつ攻めてくるかは分からないが、諦めるなんてことは絶対に無いだろう」

「そうかい、まあこっちの目的は時間稼ぎ、ヤツらがサボってる分には構わねえってことだ」

「ああ、けど警戒を緩めるわけにはいかない、また突撃をするかもしれないし、奇襲や夜襲の可能性もある、気は抜けない」

今回の一戦で十字軍がなにを考え、どういう作戦に打って出てく

るかは分らない。

こちらは不意をつかれたりしないよう、これから24時間体制で警戒を続けなければならない。

いつ敵が攻めてくるか分からない状況でこれから1週間は過ごそうというのだ、直接の戦闘が無くとも疲労は蓄積されるだろう。

「こっから先は、持久戦だな――」

そろそろ陽が傾き始めるかという時刻になり、バリスタに撃たれ気絶したノールズは目を覚ました。

周囲を見渡せば、自分がどこにいるのかすぐに理解できた。

ここはワト村に敷いた十字軍の陣地、その中に設置された急造の野戦病院である。

魔族の焦土作戦によって大きな建物はあらかじめ破壊されていた為、比較的大きめの民家を代用している。

ノールズがベッドで横になっていられるのは指揮官という現場において最高位の立場であり、傷ついた一般の兵は薄いシートが敷かれただけの床に直接寝かせられている。

「ううむ……」

未だ痛む体を起こすと、目覚めたことに気がついた衛生兵が即座にやって来る。

ノールズと衛生兵が状況確認のやり取りを経ている間に、目覚めの報告を受けて副官であるシスター・シルビアがやって来た。

「お加減はいかがですか？」

「問題ない、すぐにでも戦える」

今この瞬間に魔族が奇襲をしかけてきた、と報告を受ければ即座にメイスを掴んで飛び出していけるほどには回復している。

逆にいえば、それほどの緊急事態でなければ無駄に動こうとは思えないのだが。

「あっさり死んでしまつては困ります、これから自重して頂きたいものですね」

「ぐっ……そんなことよりも、戦いはどうなった？　もうアルザスは占領できたのだろうか？」

その問いかけに、シルビアは一つ溜息をついてから否定の言葉を発した。

「いいえ、攻撃は中止し、アルザスからは一時撤退しました」

「な、なんだとっ！？　それはどういうことだ！」

あまりに予想外の返答に語気を荒げるノールズだが、シルビアはその反応は予想通りだと言わんばかりに落ち着き払っている。

「敵の防衛線はこちらの予想を上回る堅牢なものです、あのまま突撃を続けていれば徒に被害を増やす一方との判断が現場でなされ、退却となりました」

「ふざけるなっ！　あんな貧弱な防壁のどこが堅牢だというのだ、こちらがどれだけの兵を――」

「詳しい説明はここを出てからにしましょうか、各隊長を集めて報告と今後の対応も話し合わなければなりませんし」

シルビアはそれだけ言い残すと、さっさと部屋を退室していった。

「馬鹿な、大量の歩兵に天馬騎士部隊まで動員したにも関わらず、あんな田舎の小村一つ落とせなかっただと……」

ノールズはシルビアが退室したことに気づかず、頭を抱え込んで、この受け入れがたい事実と葛藤する。

絶対の自信を持って望んだ一戦だったが、まず最初に重騎士部隊丸ごと一つを敵の罠にかかり全滅させ、勢い込んで突撃した自分はバリスタに倒れ、あまつさえアルザス村を落とせないという当初の目的すら達成させることができなかった。

完全に予想外、これほどの軍を率いていながら魔族の小勢に退くなどとは、司令官としても十字教徒としてもあるまじき大失態。

これならばあのまま討ち死にした方がまだ格好もついたと思えるほど。

だがノールズは頭を振ってそんな思考を切り替える、恨むべきは邪悪にして姑息な策を弄する魔族。

アルザス村に立て籠もる魔族は絶対に一人残らず葬り去る。

この戦いが終わり、自分が責任を問われ何らかの処分をされるのだとしても、あの魔族共だけは始末しなければならぬ。

特に兵達が騒ぎ立てる‘悪魔’と呼ばれる黒衣の魔術士、あの男は十字架に磔とし、その死体が朽ち果てるまで晒し続け見せしめとしなければ気が済まない。

「おのれ魔族め……元より生かしておくつもりなど無いが、楽に死ねると思うなよ……」

第113話 初火の月2日の夜(1)

どうやら十字軍は完全に兵を退いたらしく、ローヌ川の対岸に押し寄せていた白い大集団は、今や見る影も無い。

対岸周辺には、恐らくこちらを監視する為の少数の部隊が潜んでいるだけだろう。

本隊はアルザス村の隣にあたるワト村に今頃帰りついたのではないかと思う。

「なんとか、今日一日は守りきれたな」

しみじみと呟いて、ベッドの上で目を瞑る。

本当はギルドの部屋で休んでいたくはないのだが、休息も仕事の内だとモっさんに言われたので、しぶしぶ引き下がった。

歩兵の突撃を止める最大の火力である俺の魔弾バレットアーツと機関銃は、両方とも門から離れるわけには行かない、今後は俺かモっさんのどちらか片方は必ず警備につくことになる。

これがただの人間だったら中々辛い警備体制だが、俺の体は人間より遥かにタフだし、スケルトンのモっさんも半分魔法生物に近いので休養も多くは必要としない、お互い1週間は元気に動ける。

だが人間を始めとしたほとんどの種族はそうはいかない、しっかりと休息をとらせなければ疲労は溜まる一方で、大きな戦力低下を招く。

とは言ってもここにいるのは冒険者だ、きっちり交代で休憩をいれるようにすれば問題ない、寧ろクエストには付き物の野宿ではなくギルドのベッドで眠れるとあって喜んでいるほどだ。

勿論、全員分のベッドは無いので、半分以上は床で寝ることとなるのだが。

「けど、死者が増えるとそうも言ってられなくなるな……」

今日の戦闘ででた死者の数は2人、敵が防壁まで迫った時に、投げ込まれた槍に運悪く当たって死んだそうだ。

結果だけ見れば、たった100人そこその人数で何倍もの敵軍を止めたとは思えないほどの損耗率の低さ、作戦的には大成功といえる。

だが例えそうであっても、簡単に割り切れるものではない。

冒険者が死ぬのは自己責任であるのは常識だが、自分の判断で死ぬのと、俺の指揮の下で死んだのでは責任の所在が違う。

俺の判断ミス一つで人の命が奪われるのだ、それがとてつもなく恐ろしいことなのだ、死者の報告を聞いて改めて実感する。

「――思い悩むのは後でいくらでも出来る、もう覚悟は決めた、俺も、皆も、どれだけ犠牲を払っても避難する時間を稼ぐんだ」

今更余計な事を考えて、悩んで、ショックを受けている場合では無い。

俺が考え、悩むべきなのは作戦行動のみ、これから敵はどう動く、どう攻める、そしてそれにどう対処するか。

考えることは山積み、特に今日の戦いで得られたデータは貴重なものだ、何と言っても初めて十字軍と正面衝突した大規模な戦闘、これまで未知数だった敵の戦力、戦い方が判明したのだ。

「結果としては上々、大勝利といえるぐらいの戦果だ、こっちの死者は二名、向こうの死傷者は千を越えていてもおかしくない」

治癒魔法があるので、負傷者も明日になれば即座に戦線復帰される可能性はあるものの、確実に死んだ人数もかなりのものだ。

今日の一戦で十字軍の兵力を大きく削ることができたのは間違いないだろう。

ただし、それだけで軍そのものの崩壊は期待できそうもない、全滅と目される三分の一に届くほどの打撃は与えられていないのは、対岸の様子から何となく察することが出来る。

しかしながら、それでも橋を落とすトラップを始め、戦いの流れとしては何もかも上手く行ったのは間違いない、いや、上手く行過ぎたと言ふべきか。

戦いはこれで終わりではない、長い目で見れば俺達がこの先ここ

を退却するのは確實、敵がよほどビビって全軍退却してくれない限りはだ。

敵の指揮官に少しでもプライドがあるのならば、今日の戦闘結果に怒り狂っているだろう、あれだけの兵を動員してこの小さな村一つ落とせなかったのだから。

だとすれば、次に攻めてくる時は損耗など度外視で兵を繰り出してくるかもしれない。

単純だが確實、その戦法をとられればまず間違いなくアルザスは落とされる。

「やっぱり十字砲火の時間制限はネックだな、だが今更どうしようもない、中断した時間を如何にして防ぎきるか……結局、力に頼るより他は無い、か」

解決方法は今日のように皆が頑張るしかないのだ、敵を千人単位で一網打尽にするような逆転の策など簡単に用意できるはずもない。いや、そもそも十字砲火がこれほどまで上手くいった事がすでに幸運と言えるだろう。

予想以上に十字軍兵士がタフで、機関銃の弾幕をものともせず突っ込んでこられるパワーを持っていればそもそも作戦は破綻していた。

いくら有刺鉄線と防壁があるといっても、圧倒的な兵力差で潰されるのは半ば必然、押し寄せる歩兵突撃を十字砲火で止められるという前提があるからこそ、俺はアルザス村で敵を一週間止められる可能性は十分あると考えたのだ。

そして今日、機関銃の威力は実証された、後は俺達の努力と根性でどうにかカバーできる範囲の問題だ、ある程度対等に戦えるだけマシな戦況だろう。

「それと、本当にリリィ一人で天馬騎士部隊を止められるとはな……これは一番のラッキーだったな」

リリィが強いことは知っている、しかしたった一人で天馬騎士の全てを抑えられるとは思っていなかった。

故にリリィを抜けて防衛線に飛来する天馬騎士を迎撃するのは、シモンを始めとしたギルドに配置した射手達の役目だ。

実のところ今日一番の死者が出ると予想したのはここだった。

空中から攻撃をしかけ、尚且つ魔法も武技も扱えるという精鋭兵を相手にするのだ、正面からやりあって無傷で済むはずがない。

しかしいざ蓋を開けてみればギルドでの死者は0、天馬騎士はそもそもこっちまで来ることは無く、リリィ一人で部隊全てを足止めしていた。

そしてリリィが戦っている内に、地上部隊が撤退したのにあわせて天馬騎士部隊も退いて行った。

現実起こったことではあるが、俄かには信じ難い、真の姿のリリィがこれほど強いとは思わなかった、というか少女リリィが戦っていると見たの初めてだよなそういえば。

なんと言うか、妖精というよりドラゴンが正体なんじゃないかと思えるほどの戦いぶりだ、いや本当にリリィがリーダーの方が良かったんじゃないのか強さ的に……

「けど流石のリリィにも限界はある、次に天馬騎士が来たら、今度こそギルドまで飛来するだろうな」

敵が退き戦闘停止となった後、戻ってきたリリィが俺に伝えたのは謝罪の言葉だった。

「ごめんねクロノ、私一人じゃ天馬騎士部隊を殲滅することはできなかったわ。」

やっぱり時間制限のあるこの体じゃ何人か倒すだけが限界。

今日は加護を使って戦闘時間を延ばしたけど、これはそう何度も出来る事じゃない、次はきつと止めきることは出来ないと思う」

それだけ言って、少女から再びいつもの幼児姿に戻ったリリィは、かなり体に無理をしたのかその場で俺の胸に倒れこんできた。

すぐにギルドに運び込んでベッドに寝かせた、恐らく今も眠り続

けて体力の回復を図っている事だろう。

「はあ、あんまり無茶しすぎないでくれよリイ」

平静を装ってはいたが、実のところリイ一人を天馬騎士部隊と戦わせることに對して俺は気が気じゃなかったんだぞ本当は。

というかりリイ、一人で部隊殲滅するつもりだったのかよ、俺は出来る限りの足止めで良いってちゃんとやったよね……

「いかん、あんまり身内を最前線するのは良くない……でもやっぱり心配だ」

とりあえず、天馬騎士部隊が現れてもリイがいれば30分は間違いない足止めできる。

今日の戦闘で7人を倒し、何十人もの隊員に重軽傷を負わせた、次に戦えばこれと同程度、いや敵が負傷しているのならそれ以上の戦果が期待できる。

どちらにせよリイのお陰でかなり天馬騎士の戦力を削ることが可能だ、こちらこそそれなりの犠牲を払うことになるだろうが、壊滅状態まで追い込むことも不可能ではない。

「天馬騎士部隊は抑えられるとすれば、やはり問題は地上がどれだけ持ち堪えられるかだな」

逆転の策も無く援軍の期待も無い以上、現状の戦力でどうにかするしかない。

実際に門からの射撃とギルドからの援護射撃によって、かなりの数の歩兵をローヌ川の渡河中に仕留めることができた。

どうにも絶対数が少ないので矢の雨を降らせるとまではいかないものの、感電効果を狙った雷の攻撃魔法は有効だったようだ。

当たらずとも水を伝って感電した兵士が溺れるのが門からでも見えた、ギルドの屋上からなら尚更よく見えたことだろう。

「シモンも頑張ってくれたみたいだし」

個人的に期待していたスナイパーであるシモンは、対岸に展開していた魔術士の部隊を相当数排除してくれた。

俺の少ないアドバースを元に、本当にスナイパーライフルを造り

上げた開発力もさることながら、その射撃能力も一発必中、正確無比という恐るべき女の子だ。

こちらが期待した以上の戦果をシモンとスーさんのコンビは見事に挙げてくれた。

準備期間中も二人仲良く狙撃の練習をしていたところを見たので良いコンビになっているようだ、やはり観測手としてスーさんをあてがったのは正しい判断だったな。

そういえば、俺が突撃して河川敷で戦っている時、よく後ろに迫った敵の頭が吹っ飛んだり、いきなり目の前の敵が首から血を噴出して死んだりしたのは、あの二人のお陰だろう。

シモンの狙撃はまだ分かるが、スーさんが気配を消して首を刈る戦い方にはそれ程恐ろしいものを感じる、ヴァルカン曰くあれが加護の力らしいが……ランク4ともなると色々凄いなと実感する。

「冒険者達は思っていたよりもずっと強い、今日守りきることが出来たのは全員が死力を尽くして戦ってくれたからだ」

感謝の言葉も無い、だがやはり、そんな彼らの血がこれから先どれだけ流れることになるかを思えば、どうしても胸のうちに暗い不安が募る。

次に死ぬのは俺や、俺の親しい人なのかもしれない。

イルズ村のみんなを失った事がすでに遠い過去に感じられる、けどあの時の怒りと悲しみと言い様の無い喪失感は、ずっと心の奥底で燻ったままだ。

もう二度とあんな思いはしたくない、いや、本当はもう何もかも忘れて逃げ出したいのかもしれない。

「……ダメだ、そんな事は考えるな、俺はもう自分以外の命も背負ってるんだ」

そう、すでに逃げ場などどこにも無い、戦いはもう始まってしまったのだから。

第113話 初火の月2日の夜(1) (後書き)

クロノの死傷者目算を修正しました。感想でご指摘してください。皆様、ありがとうございます。

第114話 初火の月2日の夜(2)

夜間の警備は専ら夜目が利く獣人などの種族、または闇を見通す魔法やスキルを持つ盗賊などのクラスが担当する。

遠距離攻撃に特化した狙撃手であるシモンだが、暗視ゴーグルでも無ければこの闇夜の中では無力に近い。

また、集中力は高いが、体力や持久力といったフィジカルに関しては歳と見た目相応しか無く、長時間の警戒任務には向かないと判断され、早々に休息を得るのであった。

敵が夜襲を仕掛けてこない限りは丸一晚休めるシモンだが、屋上から降りてきた彼は真っ直ぐ割り当てられた部屋では無く、クロノが先に寝ているであろう部屋へ向かっていた。

「お兄さん、もう寝てるかな」

休憩に入る時間はクロノもシモンもほぼ同時、ただクロノは2時間ほど仮眠をとった後、再び防壁前に戻ることとなっている。

シモンが階段を降り、クロノの寝室が面する通路の先に視線を向けると、

「あ、リリイさん……」

小さいながらも、二対の羽を生やした特徴的な姿形は遠目でもすぐに判別できる。

そもそも冒険者同盟のメンバーで明らかに子供と言える姿をしているのはシモンとリリイの二人だけである。

「ん、何よ貴方？」

（うわ、しかも中身が大人状態に戻ってるし……子供の方ならまだ良いけど、こっちは本気で怖いんだよなあこの人……）

リリイの二面性は冒険者同盟にあってはすでに周知の事実、シモンもその例には漏れない。

むしろ早々に子供と大人の両人格があることを知った方だ。

クロノと出会ったあの日、自分の研究室に如何なる勘違いをした

のか、凄まじい剣幕で怒鳴り込んできたリリイは、未だにシモン少年のトラウマとなってしまうている。

「え、えっと、大した用じゃないんだけど……」

目を泳がせながら、歯切れの悪い言葉を紡ぐシモン、しかしリリイはテレパシーで頭の中を覗かずとも凡その見当はついていた。しかし、それが即座に理解を示すことに繋がるとは限らない。

「そう、クロノはもう寝てるから、後にしてちょうだい。」

クロノは誰よりも頑張って疲れてるの、睡眠を邪魔しようものなら私が許さないわ」

「え、でもそれじゃありリイさんは——」

「私はいいの、添い寝に來ただけだから」

「そ、そうですか」

（リリイさんって帰ってきた後、すぐ別室で眠ったって聞いたけど、わざわざお兄さんの部屋まで移動しに來たってことだね？）

異常、とまではいかないが、そこまでしてクロノと同衾する必要性があるのだろうか、とシモンは不思議に思う。

「分かったらさっさと自分の部屋に戻りなさい」

「うう、はい」

しかしながら、どんな時でも譲れないものが人にはあるんだな、とリリイの円らな瞳に宿る強い意志の光を見てシモンは思うのだった。

「はあ」

クロノが眠る扉の向こうへリリイが消えていったのを見送ったシモンは、しぶしぶといった様子で踵を返した。

「色々、話したかったんだけど……」

「——それはつまり、クロノに褒めてほしかったってことかな？」

「うわっ!? スースさん、なんで——」

突如として独り言に介入され、驚いたやら恥かしいやら、思わず叫んだその口をスースの手が素早く塞いだ。

「静かにしないと、クロノは怒らないだろうけど、リリイさんの方

がね」

うんうん、と同意を示すシモン。

「彼女に先を越されて残念だったね、明日にでもクロノに褒めてもらえば良いさ、存分にね」

「え、違、別につ、そういうのじゃ無くて——その、ライフルとか、機関銃とか、始めて実戦で使ったわけだし、どうだったか、ちゃんと聞いておかなきゃいけないと思って……」

「ふふ、そういうことにしておこう」

「もうっ、本当のことだってば！」

頬を赤らめて反論するシモンの様子を見れば、スースの言った事が正しかったのかどうかは誰の目にも明らか。

シモンの言う事も一理はあるだろうが、所詮はオマケ程度、本心は間違いなく、初めて自分の研究を認め、理解し、賞賛してくれたクロノ、彼の「よくやった」という言葉が欲しかった。

「けれど、最初にクロノの部屋に向かう君を見た時は、夜這いに行くのかと勘繰ってしまったよ」

「夜這いって、ええっ！？ いや、しない、しないよ絶対、男同士だしおかしいよそんなのっ！ っていうかどーいう目で僕のコト見てるのさ！」

少なくともクロノの方は未だにシモンの事を女の子だと思っているのだが、幸か不幸かシモンは未だに気づいてない。

「いやしかし、君もとうに色恋の一つでも覚える歳だろう、少なからず好意的な視線をクロノに向けていたようなので、もしか、と思っ
ってね」

「僕はノーマルですう！」

全力で否定する、確かにクロノの事は好意的に思っているが、決して男が好きというワケではない。

「んーどうかな、冒険者同盟には三獵姫の三人にフォオナとかの魔術士、かなり顔が良い娘が揃っていると思うんだけど、あまり興味なさそうな感じだし？」

「そんな、皆を変な目で見てたらただのスケベじゃないですか」

ただスースが挙げた女の子達が見目麗しいことに関しては認められる、狂った美的感覚をシモンが持っているわけではない。

「じゃあ実はリリイさんとか、あの人は飛びぬけて綺麗だけど、オススメはできないな」

「リリイさんだけは絶対無いですね」

いくら魅力チャームを宿すほどの美貌でも、会うたびに視線で射殺さんばかりに睨み付けられれば苦手になるのは当然と言えた。

「うーん、じゃあーお、分かったぞ」

「っていうかこの話やめませんか、僕は別に好きな人の話とかそういうの苦手――」

「胸が大きくないとダメなんだな」

「あの、聞いてくださいよ……」

はあ、と溜息を一つ吐いて肩を落とすシモン。

何と言ってこの妙な話から脱しようか、と足元の床を眺めつつ、結局良い切り替えしを思いつかないまま、再び視線を上げると、

「これでどうかな？」

シモンの目の前に、二つの揺れる山。

「え、ええっ！？　なんですかつ、なんで胸大きくなってるんですか！？」

「お、その反応は脈ありと見て良いのかな」

「普通に驚いてるんですよっ！」

はっはっは、とどこか意地悪い笑みを浮かべるスース、僅か数秒前には特に主張することも無い平らな胸だったそこはしかし、今や地母神の祝福でも受けたかの如く豊かな実りの丘となっている。

その大きさは片方だけでシモンの頭ほどもあり、巨乳のレベルを超えたソレは薄手のシャツをその圧倒的な質量で押し上げはち切れんばかりだ。

「何なんですかこれは……」

「私はスライムだからね、普段は目立たないような容姿に化けてい

るだけで、やろうと思えば胸の一つや二つ、ふふふ、見ての通り、思いのままなのさ」

そう言って自慢げに胸を逸らすと、ブルンと悩ましげに揺れる。思わず反射的にその動きを目で追ってしまったシモンを、男なら誰もが咎めることはできないだろう。

「まあそんなことよりも、どうかな？」

「え、あの、どうって……？」

一歩詰め寄り、背の低いシモンの目線に合わせるようスースがやや前傾姿勢をとる。

僅かに視線を下に逸らせば、大きく胸元の開いたシャツから覗く魅惑の深い谷間がそこにあった。

はっきり分かるほど顔を赤くして、必死に視線をあさっての方向へ逸らすシモンの初心な反応をスースが気づかないわけは無い。

「どう、というのは――」

だがそれだけに満足せず、ここで退かなかった彼女が何を思っているのか、それを理解するのは男女の経験がランク1なシモンにとっては無理な話である。

「――こういうことさ」

いつの間にか手首を掴まれていたシモンの右手は、抵抗する間も無くスースの豊かな胸元へ。

手のひらに押し掛かる柔らかく温かい感触、隔てるのは薄いシャツ一枚、その極上の触り心地にはただだけで男の理性を狂わせ、木っ端微塵に吹き飛ばすだけの破壊力がある。

「わあああっ！？　ご、ごめんなさいっ、僕もう寝る時間だから！　じゃあねっ！！」

しかし、どうやらシモンには刺激が強すぎた。

慌てて手を振り払うと、さらに顔を赤くしたまま逃げようないや、事実逃げ出したシモンは、言うだけ言って自室へと走り去っていった。

「あっはっは、やっぱり可愛いな――」

そんなシモンを笑顔で見送ったスースは、

「――本気になっちゃいそうだよ」

そう一言残して、足音一つ立てずその場を静かに去ったのだった。

ワト村に駐留する十字軍は、本来ならばその日の内に引き払い、日も沈んだ今頃はアルザス村を新たな占領地としていたはずだった。しかしローヌ川を隔て村に立て籠もる魔族の防衛線に阻まれ一時撤退したため、少なくとも明日まではこのままワト村に留まることとなる。

それは十字軍占領部隊に随伴するキプロス傭兵団も同じであり、彼らは例によってワト村の外れに野営地を構えていた。

どんな時も怠惰を地で行くキプロスは、月が天に昇るこの時間帯にはすでに部下の女と共に床に入っているはずだが、野営地を少し外れた林の中に彼は立っていた。

姿は見えないが、彼の周囲には部下が監視についており、複数の気配を僅かに感じさせる。

大きな木に背を預けるキプロス、その手は一本の短杖。ワンド

一見すれば節くれ立った黒い木の枝に見えるが、その表面には白い幾何学模様が全体に渡って描かれ、先端は槍のように鋭く尖っている。

「旧型の『アラネア』を押し付けやがって、効果1日じゃ再発動が面倒くせえだろうがっ！」

手にする短杖『アラネア』をキプロスに寄越した者に対し恨み言を吐きながら、杖の先端を思い切り地面へと突き刺した。

「???????? ???? ???? ???? ???? ???? ????
????????」

キプロスの詠唱に反応し、杖に描かれた白い模様が不気味に明滅

する。

それに伴い、杖と同じく黒地に白模様の魔法陣が突き刺さった先端から少しずつ地面へ広がってゆく。

直径1メートルほどに広がったその魔法陣の模様は、蜘蛛の巣に良く似たものだった。

「――『視記蜘蛛』」
アラネア

ここに完成したのは召喚魔法、呼び出されるのはその名の通り蜘蛛の姿をした使い魔。
サーヴァント

蜘蛛の巣の魔法陣より、水底から這い上がるように次々と黒色の蜘蛛が出でる。

その大きさは大人の手のひらほどもあり、そんな大きな体躯を持つ蜘蛛が何十匹も湧き出てくる光景は本能的な嫌悪感を人に覚えさせることだろう。

だが術者本人であるキプロスには何ら思うところなど無く、ただ無感動に、そうあるのが当然といった表情で、四方へ散って行く蜘蛛を見送った。

現れた蜘蛛はあつという間に暗い闇に閉ざされた森の向こうへと消えていく。

しかし、それから1分も経たない内に、蜘蛛は戻ってくる。

「……ちっ、何匹か減ってやがる、欠陥品が」

それは先ほど召喚した蜘蛛と姿は同じだが別の、昨日の晩に放ったものであった。

『視記蜘蛛』
アラネア、その役目は監視。

キプロス傭兵団は今日の戦闘に出撃要請は出ず、ワト村での待機を厳命されていたため、この使い魔を派遣して戦いの様子を記録させたのだった。

「悪魔だかなんだかにあっさり負けて逃げ帰ったって聞いたが、さあて、どんなもんなのかね――」

戻ってきた内の蜘蛛を一匹、手のひらへ乗せるキプロス。
すると、脳内に浮かび上がる断片的な映像と音。

この使い魔が記録したものを読み取るにも、それ相応のスキルは必要だが、術者であるキプロスにとって光と音の洪水とも呼べる雑多な記録映像を正確に読み込むのは造作もないことであった。

「――おお、エルフの女の子発見、いいねえ、こーいうのを探してたんだよ」

浮かび上がるのは金髪碧眼のエルフ、妙齡から少女とった年もバラバラな三人組、だがその顔は美形と名高いエルフ族の名に恥じない整った顔立ちをしている。

柵の向こう側から魔法の弓を引き雷の矢が放たれる度に、川を進む兵士が倒れる光景が見えた。

「んー、けど、ほとんど魔族のカスばかりでそんなに――」

どこかふざけた感想ばかりを口にするキプロスだったが、記録を読んでいる内に、その表情が少しずつ変化を迎える。

最初は獲物を物色するような笑みを浮かべていたが、今となってはその顔に一切の感情は消えている。

「――へえ、なるほど、そういうことかよ」

キプロスはそう呟くと、手に乗る蜘蛛を投げ捨てるように放る。

蜘蛛は未だ地面に存在し続ける蜘蛛の巣の魔法陣へ、池に飛び込んだ蛙のように姿を消した。

「面白え、コイツはパンドラまで来た甲斐があるってもんだぜ、へ、こりゃあマジで運命に導かれちゃってるってヤツじゃねーの」

一体何がそれほどまでの愉悦を彼に与えているのか。

凄絶な笑みを浮かべたキプロスは、上機嫌に野営地へ戻るのだった。

第114話 初火の月2日の夜(2) (後書き)

おや、スーさんのようすが……

おめでとう、スーさんは盗賊から爆乳盗賊に進化した！ スーさんは新たにパフパフを覚えた！

そんなワケで、主人公を差し置いてサービス回でした。だが果たして、シモンが揉んだのは乳なのかスライムなのか……

第115話 砲撃（1）

初火の月2日の夜が開け、翌日3日。

陽が昇り、朝日に照らし出されるローヌ川の向こうに、昨日イヤというほど見た白い軍団が再び姿を現していた。

俺が建つギルドの屋上からは、対岸の先に通じる西北街道まで見渡せる。

ここから見た限りでは、対岸に至るギリギリ手前で進軍を停止した十字軍部隊の姿が見える、しかしながら左右に森が広がっている為に、その影となって全体としてどれくらい集っているのかは判別しづらい。

「渡ってはこないみたいだね」

「ああ、何か準備でもあるんだろうか」

隣で異世界初のスナイパーライフル『ヤタガラス』を抱えたシモンが声をかけてくる。

早朝、敵影発見の報告を聞き即座に一番高い場所であるここに昇ってきたのだが、何を企んでいるのか敵は止まったまま一向に動く気配が無い、もうかれこれ30分は進軍を停止したままだ。

昨日のように雪崩を打って攻め寄せてくるようなら、即座に屋上から飛び降りて、防壁前で再び魔弾を乱射する作業に従事することとなる。

だが敵に動きが無い以上こうして見ている他は無いし、こちらからわざわざ打って出るメリットも無い。

もうこのまま1週間くらいにらみ合いを続けていられるだけなら楽でいいんだけどな、と思うが、相手もそこまで馬鹿ではないだろう、正攻法で突撃してこないということは、何らかの策があるに違いない無い。

「しかしここに3人もいると少々狭いものだね」

そんな呑気な愚痴をこぼすスーさん。

確かに狙撃手であるシモンのために組んだ台座は、とてもじゃないが大きいとは呼べる広さは無い。

子供1人、大人2人は明らかに積載量オーバーだ。

「悪いけど、ここが一番見晴らし良いからな」

敵が目の前にいる以上その動向には目を光らせておかなければならない。

「別に構わないさ、こうして私とシモンが身を寄せ合ってスペースを開ければいいのだからね」

「いや、僕は構うんですけど……もうちょっと離れてくれませんか」
小柄なシモンを抱っこするように後ろから抱え込んでいるスーさん。

朝見たら何故か巨乳になっていたスーさんの胸が「当たったんじゃない、当てているんだ」と言わんばかりに堂々とシモンの頭の上に乗せている。

「二人とも仲が良いな」

これが噂のガールズラブってヤツなのか？

「ふふん、妬けるかい？」

「少しな」

「ホントにそう思うんだったら助けてよお兄さん！」

涙目で訴えるシモン、うん、今日も可愛いぞ錬金術師。

リリイとは異なる愛らしさに心を和ませながら、朝食代わりのパンを片手にミルクを飲む。

このナントカ言う牛だか山羊だかわからん謎の家畜から絞られたミルクは、牛乳とはちよっと一味違った不思議な味がするのだが、すでに慣れて普通に美味いと感じるようになった。

そんな謎のミルクが詰まったビンを一気にあおり、ごくごく喉を鳴らして飲み干――

「ところで、クロノは大きくなった私の胸に一瞥もくれないのだが、ひょっとして君はゲイなのかい？」

ブホオオー！

白いミルクが爽やかな朝日を受けてキラキラと輝く、勿論、俺の口から吹き出したヤツだ。

「うあーっ！？ お兄さん汚いっ！！」

「ぶはっ、げほっ、いきなりなんてコト言うんだよ！？」

人が美味しくミルクを嗜んでいるときにとんでもない爆弾発言を投げかけたスーさんに恨みの視線を向ける。

「いやだって、人型のオスなら必ず大きい胸を目で追う習性を持っているじゃないか、反応しないということは、つまりそういうコトなのかと――」

「えっ、そうなのお兄さん！？」

「信じるなよシモン、つーか完全に誤解だ、俺はノーマルだぞ」

「ふむ、昨日も聞いた台詞だね」

「はあ？」

「いや、こっちの話さ」

ふふふ、と不敵に笑うスーさん、まったく敵が目の前に迫ってるってのに悪ふざけが過ぎるんじゃないのか！

「それで、本当のところはどうなのかな？」

「断じて俺はノーマルだ、男より普通に可愛い女の子が好きに決まってるだろ。」

まったく、男がみんな巨乳好きだと思ったら大間違いだぞ」

「じゃあ『童女趣味』ロリ・コンなのかい？」

「それも違う」

っていうかロリコンを『イグニス・サギタ火矢』みたいな魔法名っぽい言い方するのはヤメロ。

「リリィさんの例があるから、どうにもね、寧ろこっちの方が信憑性高いんじゃないだろうか」

「……確かに」

「そこで納得すんなよシモン、というか俺に妙な性癖をレッテル張

りすんのは止めてくれよ」

俺になんか恨みでもあんのかスーさんよ。

「ふむ、ではこれ以上の追求はやめておこうか」

本当に巨乳には興味が無いのかい？ と暗に言わしめるようにシモンの頭へ押し付けられた胸がたわむその様子は、まあ確かに大抵の男の目を惹きつけてやまないことだろう。

「はあ、大きい胸を見ると思い出すんだよな……」

母親のコト、あの人の胸は本当に大きかった、お陰で子供の頃から見慣れて全く巨乳にありがたみを憶えることは無くなった。

これが良いことだったのか、悪いことだったのか、まあ胸の大きい人に対して不躰な視線を向けないことを思えば良かったのかなと言えない事も無いな。

「あ、お兄さんが何か遠い目をしてる」

「ふーむ、なかなかどうして私達のリーダーはストイックなようだね」

とりあえず、俺が変態的な性癖を持つてはいないということで、上手く話がまとまってめでたしめでたし、と思いながら、ほとんど飲んでないにも関わらず残り僅かとなったミルクを飲み干す。

いやしかし、故郷を思い出した所為で無償に白米が食べたくなってきたぞ、どうしてくれる。

こっちは主要な穀物が小麦なので専らパンが主食、そうだ、これが終わってスパイダに行ったらついにお米を探しに行こう、そうしよう。

そんな、郷愁の思いに浸っていたその時、

「いけない、攻撃だっ！」

スーさんが叫ぶと同時に、詠唱を開始するのが耳に届く。

「なんだよアレ!？」

対岸に広がる森の中から立ち上る、火の柱、いや、それはどうやら大きな火の玉で、黒い煙の尾を引きながら放物線を描いてこっちの方へと飛来する。

その数、実に5つ。

「伏せてシモン！」

????? ???? ???? ???? ????
????? ???? ???? ???? ????
「氷結大盾」
アイズ・アルマシールド

シモンの上に覆いかぶさるような体勢のスーさん、その上を中級
防御魔法である氷の大盾が守る。

「『黒盾』！」
シールド

俺もとりあえずは身を守るべく、黒色魔力の盾を形成。

視界を大きく遮る漆黒の盾が出現した瞬間、

ドドドドオツ！！

衝撃と熱風が駆け抜ける。

飛んできた火の玉の一つが、運悪くこの屋上に着弾したようだ。

「みんな、無事かっ!？」

「私達はね、だが――」

その言葉を聞かずとも、俺の目に飛び込んでくるのは屋上で待機
していた射手クラスの冒険者、彼らの内の何人かがその身を炎に飲
まれかけている。

「くそっ」

黒魔法しか使えない俺には、効率よく火を消す術が無い。

どうするか、考える前に動いたのはスーさんをはじめ、炎を逃れ
た無傷の冒険者達。

火に包まれている者を、水や氷を魔法で生み出し見る間に炎を消
してゆく。

よし、火が消えたのなら、応急処置くらいは俺でも出来る。

「おい、大丈夫か？」

台座を飛び降り、倒れる冒険者の下へ駆け寄る。

「ははっ、何とか生きてはいるぜ」

炎で炙られ毛先が焦げているにも関わらず、ある獣人の冒険者は

笑みを浮かべて応える。

火を浴びた他の者も、多少苦痛の声を漏らすが、すでに自分でポーションを体にふりかけ回復を図ろうとしている。

まったく、冒険者ってのはタフなヤツばかりだ、お陰で冷静さが戻ってくる。

「あんな砲撃してくるとは予想外だった、だが威力は大したことは無さそうだ」

着弾地点には少しばかりの焦げ跡がある、と言っても俺がギルド全てを黒化した所为で床も真っ黒な為かなり分かりにくい。

本来の木造のままなら延焼する危険もあるが、この程度の火力なら何発受けてもギルドが燃えることは無さそうだ。

「とりあえずギルドに退避だ！ スーさん、避難と怪我人の処置は任せる、俺は下に行く」

「了解した」

向かう先は防壁の前、警戒のため屋上よりも多くの冒険者が集っている、ギルドへの退避を促すなら早いトコ伝えておかねければならない。

「おいつ、もう一発飛んでくるぞっ！」

背後から誰かの声、言われずとも先と同じように黒い尾を引いて飛来する火の玉が目に入る。

「くそう、遠距離から砲撃してくるとは面倒なことを――『アンカーハンド影触手』」

一々階段を伝って降りる余裕は無い、屋上から飛び降りるのが下へ行く一番の近道だ。

前にダイダロスの城壁をえっちらおっちら登った時に利用した『アンカー』の改良型、見た目はそれほど変わらないが、触手のような変幻自在な動きも可能としたのがこの『アンカーハンド影触手』である。

両手から黒色魔力で形成した黒いワイヤー状の触手を屋上の柵に絡みつかせて固定すると、そのまま宙に身を投げる。

直後、再び屋上に着弾した火の玉が炎を吹き上げて炸裂。

だが、すでにギルドの垂直な壁を走る俺には、その熱風も爆風も届くことは無かった。

第115話 砲撃(1) (後書き)

クロノは新たに触手プレイを覚えた！
すみません、触手は使いますが、プレイすることはありません、
それでもR15なので。

第116話 砲撃（2）

「一旦ギルドに避難しろ！ 急げ！」

防壁前へとギルドから降り立った俺は声を張り上げ避難命令を発する。

ここにいるのはただの村人ではなく冒険者、この降り注ぐ火の玉攻撃のただ中にあっても皆冷静に指示に従い動く。

「おーい、何だよこの火の雨はよお、参るぜ全く」

ヴァルカンが大剣を傘のように頭上に掲げながら、酷く面倒くさそうな面持ちでやって来る。

何発目かの火の玉がヴァルカンのすぐ近くに落下するが、吹き上がった炎は瞬く間に大剣に吸い込まれ消え去る。

『悪食』能力すげーな、あんなの持ってたらしりゃあヴァルカンの余裕ぶりにも納得だ。

「ヤツら遠くからチマチマ撃ってきやがる、パーっと行って蹴散らしてくっか？」

「いや、出来れば突撃は避けたい」

「じゃーどうすんだ？ このまま黙って撃たれっ放しかよ？」

火の玉攻撃は徐々に勢いを増してくる。

一発一発は着弾点の半径数メートルほどに炎をばら撒く効果を持っているが、爆発力はそれ程でもない。

果たして、この遠距離攻撃魔法はこれで最大威力なのだろうか、それとも威力を抑えて撃っているのか。

もしもTNT火薬10キロトン級の爆発力を持つ攻撃魔法で絨毯爆撃を喰らえば、ここはひとたまりも無い。

いや、向こうは昨日の一戦で撤退した以上こちらの防衛線を見た目通りのものだとは思っていないはず、だとすれば、二度目の攻撃となる今回は戦力の出し惜しみをする理由が無い。

「このまま撃たせておくしかないな、これは俺達が飛び出してくる

のを誘っているんだ」

「はあ？」

「ヴァルカンはすぐ俺に突撃しないかと言った、ってことは誰もがそう考えるってことだ」

「そりゃそうだろ、こんな舐めたことされて黙ってるヤツはただの腰抜けだろうが」

「そうだ、ヤツラは俺達が出てくることを見越して兵を連れてきたんだ、あれはこの砲撃をする魔術士部隊の護衛じゃない。

きつと川の向こう側には昨日の仕返しとばかりに俺たちがやって来るのを手ぐすね引いて待っているに違い無い」

こちらが川を渡って突撃を敢行すれば、今度は俺たちが渡河中を狙い撃ちされることだろう、それに相手は射手の数も魔術士の数も大量に揃っている、機関銃など無くとも100人程度は簡単に迎撃できる。

「……じゃあ何か、大人しくギルドに引きこもってるしかねえってのか」

「ああ、偵察くらいは出すべきだろうけど、基本的にはそうなるな」
発射地点から見て、かなり川に近い場所に潜んで撃ってきている、上手くいけば奇襲で魔術士部隊を片付けることができるかもしれない、多少リスクではあるが。

「いいのかよ、敵が昨日みてえに突っ込んでくるかもしれねえぞ」

「見ろ、火の玉は河原の方にもかなりの数が落ちてる、正確な狙いがつけられないんだ。

ヤツラが突撃してくるとしたら、この砲撃が止んでからだろう」
そうじゃないと、かなりの数の歩兵が味方の攻撃で吹き飛ぶことになる、流石にそんな事態は十字軍も避けるだろう。

「歩兵が突っ込んでくるだけなら、俺とモっさんが出ればすぐに足止めは出来る」

「ちっ、仕方ねえな」

渋々と言った表情のヴァルカンと共に、俺もギルドへと退避する

ことにした。

ギルドに戻った俺をリリイが出迎えてくれる。

「クロノ！ だいじょーぶ！？」

「ん、起きたのかリリイ、俺は大丈夫だ」

火の玉攻撃の音で目が覚めたのだろうか、少なくとも俺が起きた夜中にはぐっすり眠っていた、何故か同じベッドで。

兎も角、この様子を見ると疲労は十分回復したようであり、リリイは天馬騎士が来なくともテレパシーの通信や治癒魔法など、やれる仕事はいくらでもある。

「フィオナはどこにいる？」

とりあえず今すぐに用があるのはリリイではなくフィオナだ。

「あっちでご飯食べてるよ」

リリイの小さな指先が指し示す方向には、ついさっき屋上で俺が食べていたのと同じパンが山と盛られた皿に挑む魔女の姿があった。敵の砲撃に気づいてないわけではあるまいに、呑気に食事とは本当にマイペースだよなこの人は。

「フィオナ」

「おやクロノさん、おはようございます」

金色の瞳をちらりとこちらに向けるが、その口はもしかしたらとパンにかぶりついて頬をいっぱいにしてている、ハムスターかよ。

「おう、おはようさん。」

優雅に朝食ってことは、連中の攻撃は大したことないと思っていってことか？

「ん、そうですね——ごくごくっ」

応える前に、コップというよりジョッキというべき大きなグラスに並々と注がれたミルクを飲むフィオナ。

このタイミングで「フィオナってレズなのか？」と聞いたら俺の

ように華麗に噴出してくれるのだろうか。

何だか後が怖そうだから言わないけど。

「ぷはっ——アレの威力は『イグニス・サギタ火矢』と同程度、『カタバルト遠投』術式を組み込んだだけの単純な砲撃です。」

クロノさんが私の下へ来た時点で、心配はいらないですね」

「突撃はしなくて正解だったってことか」

「はい、こちらが単純な思考の‘魔族’と考えて、ちよつとついで炙り出そうという作戦でしょう。」

それで出てこなかったとしても、ギルドに火が点いて炎上すれば儲け、といったところでしようか」

「なるほど、俺の予測は凡そ当たりってことか」

ギルドにいる限り騒音を伴ういやがらせ程度の効果しかない砲撃だが、下手に外へ出れば火傷じゃ済まないダメージを負う危険性はある、止められるなら止めたいたいものだ。

「何か対処法はあるか？」

「こちらも撃ち返せば良いのではないですか？」

「それが出来る魔術士がウチに何人いるよ……」

「そうですね、いくら単純な魔法と言っても、複数の魔術士が組んで発動する複合魔法ユニオンですから、こちらがまとまった砲撃が出来るとは思えませんね」

複合魔法ユニオンを行使するってことは、チームとして訓練を積んだ者しかできないはず。

ウチの魔術士クラスの冒険者だって個々の技量はそれなりだが、その基本は個人プレイ、ただ集っただけで強いチームが組めるとは限らない、まして複合魔法ユニオンなんて一朝一夕で習得できるもんじゃないだろう。

「大砲でもあればいいんだけどな」

それは望みすぎか、流石に天才錬金術師のシモンでも今すぐ大砲を造るのは無理だろう、そもそも材料も設備も無い。

「リリイさんだけ突撃させて空から襲うというのは？」

「その30分後に天馬騎士部隊が来たら、恐らくここは落ちるだろう」

「ですね」

一人で天馬騎士部隊を相手できる脅威の戦闘能力を誇る少女リリイだが、その真の力を発揮するのは30分という時間制限付き、無闇に前線に出すわけにはいかない。

というより、天馬騎士に対する有効な航空戦力がリリイ以外に無いため、天馬騎士部隊が現れるまで出撃させることは出来ないのだ。「っていうかりリイを便利な駒扱いするなよ」

「クロノさんが頼めば喜んで突撃していきそうですけど」

「ちょっとリアルに想像できるからそういうこと言うのやめような」俺の頭の中に神風と書かれた鉢巻を巻いて出撃してゆく幼女リリイの姿が浮かんだ。

あまりに素直なリリイのこと、頼めば本当に疑う事無くやってしまいそうで恐ろしい。

「とりあえず、敵が突っ込んでこないかの監視と、防壁とか施設が破損した場合の補修、後は、敵の魔術士部隊が潜んでいる場所が正確に判れば、奇襲をかけてみるのも手か」

機動力が高いメンバーのみで行ってくれば、出来ない事も無さそうなのがする。

しかし、ああして森の中に潜んでいるのは、昨日の戦いで対岸に展開した魔術士達がシモンの狙撃で脳天ぶっ飛ばされまくったから警戒しているのもあるんだろう。

「奇襲は危険性が高すぎるのではないですか？」

「俺もあまりやりたくは無いが、冒険者達に不満が溜まれば決行も止む無しかな、と」

「なるほど、部屋の中でじっとしているのが苦手そうな方ばかりですからね」

「まあ、明日か明後日になれば敵もまた突撃してくるだろうから、そんな心配はあまりないけどな」

「何故、今日突撃しないと云えるのですか？」

「昨日あれだけ川に阻まれたんだ、次に来る時は橋か船か、最悪イカダくらいは用意してくるだろう」

「……なるほど、確かにその可能性は十分ありますね」

「ただの歩兵だけで来るってんなら、昨日と同じように迎撃すれば済むだけの話だ。」

ただ、渡河する手段を用意されれば次の戦いは厳しいものになる、魔術士や重騎士も渡ってくることになるだろうからな」

一度目は敵が勢いで突撃してくれたから、首尾よく撃退できた。

次こそ、敵も油断無く攻めてくる本当の戦いとなるだろう。

「結局、今すぐ出来ることは限られてしまいますね」

「そうだな、敵が来るまで大人しく待ってるとしようか」

第116話 砲撃（2）（後書き）

なんだかフィオナが軍師ポジションみたいな感じですが気のせい
です。あくまで十字軍の戦力・戦術を知っているので、クロノが確
認程度に聞いている、といったところですね。

第117話 対岸事情

正式に天馬騎士部隊隊長に任命されたエステルは、ブラウンの艶やかなセミロングの髪に寝癖をつけたまま、あからさまに眠そうな顔で立っていた。

黙ってさえいれば、その高身長と整った顔立ちのお陰で凛々しい女騎士に見えるのだが、その緩みきった表情は折角の雰囲気を台無しにしている。

ふぁー、っと大口を開けて豪快に欠伸をするエステルは、いつ何時戦闘になるかという戦場に立つ緊張感をまるで感じさせない。

「欠伸をする時は口を押さえなさい、はしたないわよ」

隊長の様子を嗜めるのは部隊で最年長にあたるフラン。

彼女もまたエステルと同じように、現在では正式に副隊長に任命されていた。

「昨日はお楽しみだったんだもんねー！」

「しょうがないよねー！」

いやらしい笑みを浮かべながら横から口出しするのは、キャミーとキャシーの姉妹。

「うるせえな、黙ってる馬鹿姉妹」

女性にしては鋭い目つきをさらに鋭くしてニヤける二人の日に焼けた黒い顔を睨むが、すでに慣れているのかあまり沈黙の効果はみられない。

「あの、お楽しみって何の事ですか？」

無邪気な問いかけをするのはフランとは逆に部隊で最年少となるマティ。

「貴女はまだ知らなくていいことよ」

子供に聞かせる話題ではないと大人の判断をするフランは、それとなくマティを向こう側へ追いやる。

マティはハテナマークを浮かべながらも、赤毛のサイドテールを

揺らして素直に去って行った。

「それにしても、油断しすぎじゃないのかしら？　もし出撃命令がきたら、相手は確実にあの妖精よ、気を引き締めないと――」

「だからこそ、なんだよフラン。」

あのクソ生意気な妖精ヤロウが、こんなチャチな砲撃に釣られて出てくるはずがねえ」

ついでに、あのどう見ても魔法で強化された黒の館ブラックボックスも破壊できるとは思えない、とエステルは語った。

「けれど、相手は魔族なのよ？」

「アイツは、馬鹿、じゃあねえ、少なくともキャミーとキャシーよりはかはよほど上等な脳味噌もってやがる」

ちよつとおそれてどういう――ハモる抗議の声を完全に無視してエステルは続ける。

「恐らくアルザスに籠もってる魔族の中じゃアイツが一番強い、だとすりゃボス、もしくはそれに近い位置にいるのは確かだ。」

人間並みの思考能力を持ってるヤツがトップにいりゃ、そうそう下手はうたねえさ」

天馬騎士部隊は現在、アルザス村に向かって砲撃を行う魔術士部隊の護衛を勤めている。

敵方にたった一人ではあるが、強力な空中戦力を持つ者が存在する以上、空からの攻撃を防ぐ者が必要となってくる、そしてそれが出来るのは彼女達の他には占領部隊にはいない。

逆に言えば、リリィさえこなければ彼女達の出番は無い、このまま今日の砲撃が終了するまで森の中で待機するのみである。

エステルの言葉が正しければ、リリィどころか他の魔族も出てくることはない、そしてそれは、砲撃が開始されて暫くたつ今になっても、一向に門から打って出てこないことを鑑みれば、半ば以上証明されたといってよい。

「ま、今の内にゆっくり休ませてもらうわ、こんな股座が痛え時に馬なんざ乗りたくねえし」

あはは、と下品に笑うエステルにフランは呆れたとばかりに溜息を一つ吐いた。

「あんまり強引に事を運ぶのは感心しないわよ、男女が逆でもね」
フランの脳裏に浮かぶ昨夜の光景、意中の少年衛生兵を自分のテントへ誘う、否、拉致するエステルの姿。

「じゃあ今夜は優しくするわ」

「……ここ、一応戦場なんだけど、分かっているわよね？」

「大丈夫だ、バレねーよう上手くやるから」

やはり溜息を吐くしかないフラン、思えばキャミーとキャシーほどでは無いが、士官学校時代は十分問題児だったエステル、言って素直に聞くような性格ではないというのはすでにイヤというほど分かりきったことだった。

「次は死ぬかもしれねえんだ、今の内に楽しんでおかなきゃよ」

「珍しく弱気な発言ね、男を知って未練ができたのかしら？」

「そうかもな」

フランの皮肉に怒りもせず真顔で答えるエステル、その視線は昨日の戦闘で負傷した左腕に向けられる。

天馬騎士だけあって優先的に治療を受けられ、すでに自由に動かせるほどには回復してはいるが、その傷跡は未だ残ったまま。

「けど、ヤツにはこの腕と仲間をやられた借りがある、キツチり返してやるさ」

ワト村の外れに構えられたキプロス傭兵団の野営地、今その場所は総勢87名の団員が中央の空き地に集っていた。

軍隊では無い彼らは整然と列を組む事無く、各々好きなように寄り集まって雑然と立っている。

「ねえねえ、アイツまさかこの場で解散とか言い出すんじゃないよね？」

ツミキを胸に抱いたアイは、口を尖らせながら近くに立つ仲間の傭兵へ話しかけた。

「まさか、こっち来て俺らはまだ一度も仕事らしい仕事しちやいねえだろ、ようやく出番ってとこじゃねえのか？」

小柄なアイの身長を大きく超える筋骨隆々、如何にも傭兵という風貌の男が応える。

「十字軍のヤツら、あのナントカいう村を落とせなかったんだろ、へへ、ここでオレ達がサクッとやりゃあ一気に名を上げるチャンスだぜ！」

威勢よく言うのは、まだ歳若い少年の傭兵、いや、正確には冒険者で、アイと同じようにパンドラ遠征へ向かうキプロス傭兵団に飛び入り参加をしたクチだ。

「チャンスかあ、でも美味しいところだけ持っていかれそうな気がするんだけど、元々の団員と私らみたいな冒険者集団って明らかに壁あるし」

「確かに、ヤツら見た目は凡百の傭兵ってとこなんだが、妙に大人しいし、どっか不気味だぜ」

「あつ、それオレも思ってた、アイツらとマトモに喋ったことねーし、何か隠してるぜ絶対！」

不信の目を向けられるのは、キプロス傭兵団に最初から在籍していた者達。

最初は30名そこそこの傭兵団だったが、パンドラ遠征に伴って団員をギルドで募集、その結果、アイや彼らのような冒険者が50名以上参加し、今の規模となっている。

しかしながら、これまで行動を共にしてきた総勢87名の傭兵団ではあるが、飛び入りの冒険者組みから見ても、元からいた傭兵組みの様子はどこか異様なところがあった。

それは男や少年の言うとおり、彼らがほとんど言葉を発せず、暴力を生業とする傭兵としてはあまりに大人しすぎるのだ。

もっとも、そのお陰で傭兵組みと冒険者組みが妙な仲違いをする

というトラブルは無かった、いつも喧嘩沙汰を起こすのは冒険者組みの内輪だけである。

「噂だと、奴隷軍団らしーよ」

「あのキプロスとかいう団長、金払いはいいが、どうにも胡散臭え、だが金持ちのボンボンで、洗脳済み、の奴隷を率いて傭兵団ごっこしてるってのは一番しつくりくるな」

で、あるならば、権力のごり押しで無理矢理この占領部隊に随伴しているのだと納得もゆく。

「まあ何でもいいんじゃないの？ あのチャライ団長が逃げ出しても、オレらだけでなんとかなるって、冒険者舐めんなっつーの！」

「まーね、それならそれで、なんだ、結局早いトコ解散しちゃった方がいいんじゃない」

「おい、出てきたぜ」

男の言葉にアイが視線を上げると、その先にはいつの間にも用意したのか木箱を組んだ台、その上にいつもの気だるげな様子でキプロスが立つ。

相変わらず鎧をつけずに、胸元を晒すだらしない着衣、そして口から出るその言葉も全団員を前にしても尚ふざけたような口調であった。

「あーみんな揃ってるう？」

面倒だから手短に言うわ、あの魔族が立て籠もってるなんちゃら村に突撃しまーす」

団員達の間には動揺が走る、しかし、その言葉の意味は現状を考えれば納得できる範囲のもの。

昨日の一戦で落とせなかった敵の陣地を、今度は傭兵団を使って攻めようというのだ、折角自分達を連れて来ているのだから、使わない手は無い。

「明日ここ出発して、そのまま突っ込んで感じだから、まあみんな適当に準備よろしく、以上、はい解散」

疑問も質問も一切受け付けず、キプロスはさっさと引っ込んでい

った。

「うおおおー！ やっとマトモな仕事だぜ！」

少年を始め、ほとんどの冒険者組みはようやく出番がきたと喜んでいる。

だが、アイの表情はあまり芳しくない。

「はぁ、あんまり良い予感しないんだけどなぁ」

第117話 対岸事情（後書き）

ペガサス
天馬は処女じゃなくても乗れます。女性なら基本的にOKなので
す。

第118話 捨て駒

翌日、初火の月4日、今日も早朝から火の玉砲撃が続いている。

「いっぱい魔術士がいるからってバカスカ撃ちやがって……」

ギルドの窓から外を眺めていると、対岸のさらに向こう側、白い十字軍とは異なる装いの一団がふとした瞬間に目に付いた。

あれは……

「傭兵ではないでしょうか？」

「うおっ!？ いきなり現れるなよフィオナ」

いつの間にやら隣に立っていた魔女にも、どうやらあの集団は見えているようだ。

「けど確かに、あいつらは格好もバラバラで俺達みたいだな」

「ええ、パンドラ遠征にあたって共和国の冒険者も傭兵団に飛び入り参加して、十字軍の色々な部隊に雇われているのでしょう」

「そういえば、フィオナもその傭兵の一人だったな」

「正確には傭兵団に参加した一冒険者ですけど。」

私の時はヴァージニア陥落間近といった状況でしたので、あまり人は集らなかったようですが」

「今は違う、ってか」

ダイダロスの広大な領地全てを支配しようと、本国から続々と十字軍の増援がやってきているこの状況、傭兵もその例に漏れずってことか。

「強いのか？」

「有名なところは強いですよ、正面から戦えば私達を簡単に打ち負かす程度には。」

逆に言えばそれ以外はたかが知れています、所詮は数合わせの寄せ集めですよ」

「そうか、アイツらはどうなんだ？」

「強くて有名な傭兵団は、正規軍のように装備も揃えて旗を掲げま

す、それが無いという事は、凡百の傭兵団ということで間違いないと思います」

そこまで警戒するほど強い、というワケではなさそうなので一安心だ。

しかし、その寄せ集めの傭兵団一つで俺達くらいの人数になるんだ、少なくとも十字軍の歩兵軍団と同じくらいの脅威と成り得る。

「隠れる事無く真っ直ぐ向かってくるな、このまま突撃しようってのか？」

そう思った時、リリィのテレパシーを介して俺の頭の中に監視部隊から報告が届く。

「クロノさん、敵の傭兵団と思しき部隊が接近中です、もう対岸まで出て来ますよ」

この声はランク1の狼型モンスターのウインドルを使い魔^{サモナー}として使役している召喚士の男だ。

直接人員を村の外にやるには憚れる状況において、彼らのような召喚士は実に頼れる監視役である。

「こっちでも確認した、砲撃は続いているが、外に出るしかないな」俺は一旦フィオナへ向かって問いかける。

「一昨日は十字砲火で蜂の巣にしてやったが、それを分かった上で捨て駒的に傭兵団を突撃させよう、と敵の司令官は考えると思うか？」

「厳しい戦況の矢面に立たされるのは傭兵の常ですからね、雇う側とすれば、よく戦って死んでくれたほうが都合良いのではないですか？」

「なるほど、よく参考になったぜ——」

テレパシーに集中して、ギルドに立て籠もる全ての冒険者へ通達する。

「——敵が来るぞ、戦闘配置につけ！」

「おおーっ！ アレが噂の黒の館ブラックボックスかあ、ホントに真っ黒だねえ！」

敵から矢と雷魔法の雨が降り注ぐローヌ川の河畔にあって、アイは呑気な感想を語る。

視界の先には、それぞれ好き勝手な装備をした統一感の無い傭兵集団が、丸太にしがみ付きながら川を渡る光景が見える。

一昨日に比べれば丸太という浮力を得られるアイテムがあるだけマシと言えるが、戦況の方はむしろ悪化していた。

魔族の射手は数こそ少ないが、撃ち出す矢はかなりの精度、雷の魔法は物理法則に従って今日も川面を通电し、多くの感電者を水底へ沈める。

そして極めつけは、

「なんだっ！ おいつ、何に撃たれてんだよ！？」

「誰かシールド張れよっ！ こんな先に進めるかあ！」

ギヤリギヤリと機械的な音を響かせながら飛来する無数の黒き弾丸。

その出所は二箇所、片方は黒尽くめの魔術士の男がタクトを振るたびに撃ち出され、もう片方は御伽噺に登場する死神そのままの風貌の魔族であるスケルトンが、妙な筒の先から発射している。

人間にとって一撃必殺の威力を持つ黒い弾丸が飛び交う十字砲火は、一昨日と同じく、真正面から突撃をしかける愚か者を瞬く間に屠ってゆく。

ただ、防御魔法や防御の武技を習得している一握りの者が、黒い嵐の中で僅かながらの命を永らえている。

「ほらほら、さっさと行けヤロウ共！ 魔族ぶっ殺せえーぎやははは！」

こんな状況下にあって盛り上がってるのは大将のキプロスただ一人
アイが見立てたとおり、部下の命を本当に何とも思っていないことがこの場で証明された。

しかしながら、すでに川を渡り突撃に参加した傭兵にとって、キ

プロスの耳障りな笑い声など届いてはいない。

「んん？ ああ良かった、アイちゃんまだ突撃してなかったんだあ」
いつものニヤけた表情のキプロスが、目ざとく川岸に立つアイを見つけて近寄っていく。

「うわっ」

これもまたいつも通り、あからさまにイヤな顔をするアイ、だがそれで退くようならそもそもキプロスは彼女に絡んだりはいしない。

「いやー凄いねえ魔族の攻撃、必死になっちゃってさあ、けどホント良かったわあ、あんなトコにアイちゃん突っ込んだら――」
ちらりと対岸を一瞥するキプロス、視線の先で名も知らぬ傭兵がまた一人血を噴出して倒れた。

「――フツ―に死んでたっしょ、困るんだよねえまだ手をつけてないのに勝手に死なれちゃさー、数少ない俺の楽しみなのにネ」

「そ、じゃあアンタが行ってきてアレどうにかしてきてよ」

ジト目でキプロスを睨みつつ、アルザスの正門を指差すアイ。

その先ではついに防御魔法が破られ、弾丸の釣瓶打ちを喰らい吹き飛ぶ魔術士の姿があった。

「いやいや、あんなトコに飛び込むとかマジでただのバカでしょ」

「はあ？ 突撃するつつつたのアンタでしょ？」

「そりゃまあノールズのおっさんから言われた仕事だし？ やんなきゃ金もらえないしょ？」

まあ、もう結構な数死んじやったみたいだから、そろそろ引き上げてでもいいかなー、なんて」

これだけで金もらえるとか傭兵業チヨロすぎ、とゲラゲラ笑うキプロスに、アイは軽蔑の眼差しを送ると同時に言ってやった。

「帰るんならアンタ一人で帰んなよ」

「え、なに？ アイちゃんもしかして自分も突撃するとか言っちゃうワケ？ 勘弁してよ、ほらほら、一緒に帰って俺とイイコトしよーぜ」

無遠慮に伸ばされるキプロスの手をひらりとアイが避ける。

「触らないでって言ってんでしょ、アンタと一緒にいくくらいなら、私はアッチの方がよっぽどマシ」

「おいおい、マジかよ、もっと素直になんたって——」

「じゃ、行こっかツミキ」

キプロスに別れの言葉もかけず、飼い猫のツミキを引き連れてアイは川へと向かった。

すでに背を向けているので、キプロスがどんな表情をしているのかは分からない、だがアイには彼の事など万事において欠片も興味が無い。

アイの進む先にはちょうどこから川を渡らんとする傭兵の一団がおり、彼らと一緒に渡河するために丸太へと手をかけた。

「よっしゃ、行くぞっ！」

「「おうっ！」」

「おう！」

勇ましい傭兵達の声と、どこか間延びしたアイの掛け声が唱和する。

そして未だ冷たさの残るローヌ川へ、勢い込んで漕ぎ出してゆく傭兵達。

上空からは未だ容赦なく矢と雷が、彼らの進撃を阻まんと降り注ぐ。

「うおっ、危ねえ！」

完全に命中する軌道をとって迫ってきた矢を、アイの前に位置する男が左手に装備した小盾で弾く。
バックラー

「おおー、オジサンありがと！」

「オジサン言うな！　つーかオメーも射手ならちっとはやりかえしやがれ！」

「あ、そお？　そんじゃあ私、張り切って撃っちゃうよ！」

満面の笑顔で丸太の上へ器用によじ登るアイ、ちなみにツミキは頭の上。

アイはミニスカートから伸びる艶かしい両足でしっかりと丸太をホ

ールドして、体勢を安定させる。

丸太がひっくり帰らないのは、計らずともしがみつく傭兵達が支えとなっているからである。

「そこから撃つのかよ」

「頑張って撃つから、前進よろしくう」

「重いつつの」

「ひどおーい！」

もういいからさっさと撃てよ、と言わんばかりに非難の視線が傭兵達からアイに突き刺さる。

「そんじゃ、行くよっ！」

戦闘に耐えられるかどうか怪しい、古ぼけた木の弓を構えたアイは、矢を番えてギリギリと弦を引き絞る。

「喰らえーい！」

いちいち煩い女だな、と傭兵達が感想を抱くと同時に、アイの弓から矢が放たれる。

へろへろと頼りない軌道を描いて飛んでいく矢は、遙か明後日の方向に飛んでいった。

「期待してなかったけどな」

「ま、味方に当たんなかったただけ良しとしようや」

呆れたような男達の視線を受け、アイは「ぐぬぬ」と悔しがる。

「もういいから降りろ、どうせ近くに行くまで当たanneーだろそんなんじゃよ」

「えーっ、待って、もう一回、もう一回だけ撃たせて！」

「うるせえ、いいからさっさと降りー危ねえっ!？」

「ほえっ？」

と、アイが正面を向いた時には、すでに雷の攻撃魔法、

『ライン・サギタ
雷矢』

が紫電を迸らせながら目前に迫っていた。

バチイイイン！

電撃が弾ける音と共に、

「あばばーっ！」

モロに直撃したアイが丸太から転げ落ちる。

「おいっ、お嬢ちゃん!？」

「ダメだ、アイツ落っこちまった！」

間近で炸裂した雷は、傭兵達の体へ多少なりとも通電し、鋭い痛みと痺れを残す。

溺れないよう丸太にしがみつくだけで精一杯の彼らは、とてもアイを助けにいく余裕など無い。

さらに今いる場所は丁度川の中央付近、水深も足が届かないほどに深く、痺れた手足のまま放り出されたら川底に沈む運命を辿るほかないというのは明らか。

「くそっ、可哀想に」

川へ投げ出されたアイは、そのまま傭兵達の視線に見送られて、下流に向かってどんぶらこっこと流されてゆくのであった。

第118話 捨て駒（後書き）

冒険者同盟VS傭兵団、というタイトルにもならないワンサイドゲームでした。

第119話 キプロス傭兵団壊滅

その姿を見たのは、夢か幻か。

「あの少女は……」

もう一週間近く前のことになる、焦土作戦をすべくイルズ村へ向かい、敵の斥候部隊を襲った時だ。

全部で七人いた斥候部隊、その中で一人だけ場違いな格好をした少女の姿があったのを、たしかに俺は覚えている。

彼女は命からがら通りを塞ぐ岩壁を乗り越えたが、走って逃げたその先でフィオナの炎魔法に包まれ、死体も残らず焼失したはずだ。だが、その死んだはずの少女は、金髪のツインテールに弓を背負った、覚えているそのままの姿で、俺の視界の端に映りこんだ。

だが彼女に気づいた瞬間には『ライン・サギタ雷矢』の直撃を受け、丸太の上から川へ転げ落ちそのまま姿を消したので、目に入っただのは本当に僅かな時間だけだった。

「見間違いか、いや、でも確かに――」

すでに正面を流れるローヌ川には、彼女の姿どころか傭兵達の影も無い。

無謀にも、十字軍からの援護も無く突撃してきた彼らは、多くの犠牲者を出し、ついさっき逃げ去って行った。

一応は渡河のために丸太を用意してきたようではあったが、所詮はビート板代わりのようなもの、渡るスピードに劇的な変化は無い。ただ『ライン・サギタ雷矢』に撃たれても溺れずに助かる可能性は上がっていたようだ。

しかし戦況に影響は無い、今は彼らと入れ違いのように、一旦止まっていた砲撃が再び始まっている。

「あの少女のことは今考えても仕方ないか」

俺が見たのは一瞬のことだ、やはりただの見間違い、勘違い、あるいは双子か他人の空似の可能性だってある。

俺が考えるべきなのは、そんな答えの出ない疑問では無く、目の前に迫る砲撃への対処である。

「敵は退いた、こっちも急いで引き上げる！」

火の玉に注意しろ、魔術士はなるべく防御魔法でカバーしてくれ
！」

了解、の声と共に防壁前に展開した冒険者達は一斉にギルドへの退避を開始する。

「しっかり押さんかい！ コレが吹っ飛んだらお終いやでえ！」

モっさんと2人のゴブリンが機関銃を搭載した台車を大慌てで引っ張っていくのが見えた。

機関銃は固定ではなく、移動できるようあらかじめ台車に載せておいたのは正解だったな。

砲撃された時はこうやってギルドに格納して保護することが出来るのだから。

「被害状況はどうなってる？」

リリースの精神感應^{テレパシー}の固有魔法^{エクストラ}を通して報告を聞く。

ハンズフリーで双方向通信ができるとは便利すぎるな全く。

俺の問いかけへの返答はすぐに頭の中へ届いた。

「死者は1名、重傷者が3名、軽傷者は数十人出ていますが、治療を受ければ皆すぐに戦線復帰できる程度です」

「そうか、急いで手当てしてやってくれ」

また一人仲間から犠牲者が出てしまった。

報告を聞かずとも、敵の傭兵が放った矢が運悪く防壁前に立つ冒険者の一人を貫くのを俺はすぐ横で見ていた。

恐らく、魔弾^{バレットアーツ}を撃つ、俺を狙って放たれたものだったんだろう。

狙い通り俺に飛んでくれば、矢の一本くらいどうとでもなったのだが……悔しく思うが、それで心を沈ませることは出来ない。

俺の代わりに矢を受けた彼の為にも、今は戦い続けなければなら
ないのだから。

この戦いで死んだ者を弔うのは、全て終わってからだ。

「しかし、アイツらは本当に捨て駒だったようだな」

あまりにあっけなく撃退できたことに拍子抜けするほどだ。

敵にどんな思惑があって、こんな無駄とも思える突撃作戦を傭兵にやらせたのか、詳しい事は分からないが、どこか哀れにも思う。

だからと言って、この川を越えて向かってくる者には、一切の慈悲をかけるつもりは俺には無いが。

そうして、この日は砲撃が続くばかりで、これ以上の攻撃は無く、無事に三日目も防衛線を守り通した。

「キプロス傭兵団は壊滅したようです、生きて戻ったのは21名、キプロス団長を始め、元々の構成員は全員行方不明となっております」

シスター・シルビアの報告に、十字軍占領部隊の司令官であるノールズは笑みを浮かべた。

「そうか、もうあのニヤけ面した小僧の顔を見ずにすむかと思うと清々するな」

ノールズはメルセデス枢機卿直々に同行を命じられた、キプロス傭兵団なる胡散臭い集団をずっと疎ましく思っていた。

自分で必要と思って雇ったならまだしも、明確な意味も目的も分からないまま、ただ上司から連れて行け、と言われて素直に納得できるはずもない。

その上、団を率いるキプロスはふざけた見た目通りの性格、良好な関係を築くのは、短気で頑固なノールズでなくても不可能であつただろう。

「ですが、良かったのですか、あのようにあっさりと使い捨ててしまつて。」

村の防衛力に関してほとんど情報を隠した状態で依頼するなど、騙したようではありませんか」

傭兵団に村を攻めて欲しい、と団長であるキプロスに要請したところ二つ返事でOK、これ幸いとばかりに、‘悪魔の攻撃’をはじめ苛烈な抵抗を示す魔族の情報を一切明かさずに契約となったのである。

「メルセデス枢機卿殿下には、パンドラ大陸に連れて行け、と言われただけで、生きて帰せとは言われておらん」

「それは詭弁なのでは？」

「いや、扱いについては同行さえさせていれば、通常通り、傭兵を雇ったのと同じ扱いをして構わないと言質はとってある。

こうして真っ当に‘仕事’をさせて壊滅したのだ、何も問題はあ
るまい」

結局、メルセデス枢機卿が何を思って傭兵団の同行を命じたのか、ノールズには分からなかったが、扱いに困る面倒な集団を綺麗さっぱり処分できたのだ、最早余計な事に思い悩むことも無いと、隠す事無く喜ぶ。

「そうですか、生きて戻った傭兵についてはどのように？」

「捨て置き、と言いたところだが、後々面倒になるのも困る。

契約通り金を払って、後は全員帰らせろ。

小賢しく立ち回る傭兵風情だ、あれほどの目にあえば、この戦場に旨味は無いと判断して喜んで帰るさ」

「では、そのように」

シルビアはその場で命令書をさっさと仕上げ、控えていた兵士の一人に手渡した。

これでノールズの言うとおり命令は実行される、雇い主であるこちら側が契約通り金銭の支払に応じるのだ、傭兵との間に問題が起きることはないだろう。

「しかし、やはりあの‘悪魔’の攻撃は厄介だな」

眉をしかめるノールズ、彼は今日の戦いで突撃してゆく傭兵を苦も無く粉碎する十字砲火を見て、改めてその威力を実感した。

「今日も問題なく撃っていたことを鑑みれば、特別に回数制限や時

間制限のあるタイプでは無い事が証明されましたね」

シルビアが言う回数制限や時間制限は、弾の数や射撃に耐えられる銃身の問題では無い。

この異世界における、もっと魔法的な意味合いの強い制限である。例えばリリィが満月の夜にだけ元の姿に戻れる、というように、特定の時間、時期、季節、あるいは星の廻り合せ、といったその時でなければ発揮できない‘時’の制約がある魔法は多様に存在する。回数制限も同じように、特定の触媒や魔法具マジック・アイテムを消費し、ある程度使えば二度と使用不可になってしまうような意味合いである。

ただ、そうした時間制限、回数制限は厳しければ厳しいほど、発揮される魔法の効果は大きいので、いくら十字砲火が強力な攻撃といっても、その制限がかかっているほど大掛かりなものであるとは、発言した当の本人であるシルビアも該当する可能性が高いとは思っていないかった。

強いて言うならば、通常に使う魔法と同じように、それほど労せず扱えるものであるという認識が改めて固まったという程度に過ぎない。

「うむ、特別欠点が無い完成された魔法であるというのなら致し方あるまい、やはり正攻法で挑むのが一番だ。

なによりこちらには未だ圧倒的な数の兵が残っている。

それに、あの攻撃が数十分ほど一時中断した、という事は、永遠に撃ち続けるのは不可能だということだ」

「そうですね、恐らくそのインターバルは継続して魔法を行使するには必要不可欠なものでしょう。

真っ当に考えれば、二度、三度、と繰り返せば必要なインターバルの時間も増加するはず、こちらの被害を考えなければ、数で押し切ることは十分に可能ですね」

確実な証拠こそ無いが、状況と魔法のセオリーを考えれば納得のゆく解答であることが理解できるため、ノールズも同意を示す。

「ああ、そういえば、グレゴリウス司教が送ったという援軍の話は

どうなった？」

前に届いた‘予言’に基づいて援軍を送ったと書かれた手紙の存在をふと思い出す。

「そのような部隊が到着した、あるいは接近中であるという報告はありません。」

本当に援軍を送ったという言葉が嘘でなければ、随分のんびりと進んでいるようですね」

「ふん、どちらでも構わん、妙な部隊を手元においておきたくはないからな、来ないほうが都合良い」

「そうですか、どちらにせよ次の攻撃までに新たな部隊がここへ到着することはないでしょう」

「ふっ、次の攻撃、か」

その言葉に反応し、ノールズは獰猛な肉食獣のような笑みをその厳つい顔に浮かべた。

「明日か、いや、明後日だな、渡河準備を整え再び攻撃を仕掛ける。5日間の足止めは、ヤツらが逃がした魔族共に追いつけるギリギリのタイムロスだが――」

ノールズの笑みには、魔族を蹂躪することに対する元々の喜びに加えて、一度辛酸を舐めた相手に、復讐できることへの歓喜も混じっていた。

「――ふはは、今度こそ、あの忌々しい魔族共を根絶やしにしてくれる」

翌日、初火の月5日。

その日は昨日のように傭兵団が無謀に突撃してくることも無く、飽きずに火の玉砲撃をしてくるだけで、十字軍に動きは無かった。

度重なる砲撃の所為で、有刺鉄線の一部が吹き飛んだり、柵が崩れそうになっていたので、その補修に出たりした。

どんな思惑があるのか向こうは黙認してくれたようで、降り注ぐ火の玉さえ除けば補修作業はスムーズに進んだといえる。

本当はこの防衛線にもギルドのように黒化で強化しておきたかったのだが、モっさんが形状的に『永続』^{エタニティ}の術式を施すことができず、効果を持続させられないので、仕方なくそのままにしてある。

ついでに砲撃のお陰(?)で、あらかじめ準備しておいた脱出路兼補給路の地下通路が思わぬ活躍となっている。

初日のように歩兵のみの攻撃だけなら、そもそも表から物資を搬入すればいいだけの話で、補給路として利用することは無かったが、敵が遠くから一方的に砲撃してくるとなれば話は別だった。

いくら地下通路と呼ぶのもおこがましい、カムフラージュした塹壕程度の出来であっても、通路の真上から火の玉が落ちてこない限りは炎を防いでくれる。その上補給部隊の姿を隠せるので狙い撃ちされる心配も無い。

砲撃が止む夜中に運び込んでも良いのだが、それでも敵の監視の目が光っていることに変わりはない、安全確実に地下通路を使って補給しているというわけだ。

それにしても全く忌々しい砲撃であるが、ギルドに立て籠もる冒険者達は、あのヴァルカンでさえ不満の一つももらさず、みんな不思議と大人しくしている。

抑えられないほど不満が溜まれば多少無茶だが砲撃部隊へ奇襲もやむなしか、と覚悟していたが、どうやらただの杞憂に終わった。

そんな事を思いながら、この日はまた2時間ほどの仮眠をとって一日を終えた。

そして夜が明け、十字軍が渡河準備を整え、総攻撃と定めたその日がやってくる。

アルザス防衛戦、その決着がつく運命の初火の月6日が始まる。

第119話 キプロス傭兵団壊滅（後書き）

第8章はこれで最終回です。俺たちの戦いはこれからだ、という引きです。

それでは、アルザス防衛戦の完結編となる次章をお楽しみに！

第120話 再攻撃

初火の月6日。

目覚めたのは夜中、砲撃は早朝から始まり日が暮れる頃には撃ち終えるので、この時間帯は火の玉が降り注ぐことは無い。

ギルドの屋上で、現代日本では見られない満天の星空を眺めながら、俺は夜明けを待つ。

昨日が何も無かった為、向こうが仕掛けてくるなら今日だろう、そう予想していた為、日の出と共に現れた十字軍の大集団を見ても、ついに来たか、と思わなかった。

「全員戦闘配置につけ、敵は今日こそ一步も退かず、本気でここを落としにかかってくるぞ」

命令を伝えるため屋上から走り去ってゆく冒険者の慌しい気配を感じながら、朝日に照らされて浮かび上がる、十字軍の白い長蛇の列を眺めた。

鋭い穂先の長槍を構える歩兵、煌く魔石が埋め込まれた長杖を抱く魔術士、白銀の甲冑に身を包む重騎士、朝日を背に悠然と飛行する天馬騎士、彼らは全員、あの象徴的に翻る十字の旗をこの地へ突き立てんが為に、真っ直ぐ迫ってくる。

恐らく、今日はこれまでにないほど血が流れる、一つでも下手を打てば全滅になるかもしれない。それほどのプレッシャーを、彼方から迫り来る白い軍団から感じる。

だが退かない、退くわけにはいかない。そうさ、俺は一人でも多くの人を助けるために、一人でも多くの悪魔を殺すために、この場にいるのだから。

「――行くぞ」

アルザス村へ続く西北街道を、4日前と同じように意気揚々とノールズは進む。

「おい、上流の様子はどうか？」

「はっ！ 敵魔術士の姿は見えませんが、また、何らかの工作の跡も見つかりませんでした」

ついさきほど戻った斥候部隊からの報告を、満足そうにノールズは聞いた。

最初の攻撃では、橋を落とされ水攻めという罠にまんまと引っかったのだ、また上流から鉄砲水を流されては堪らない。

ただ、多くの兵を一挙に葬ることの出来る水攻めは、当然あの日から警戒はしており、今の報告も念には念を入れた、という程度の意味しかない。

本日は晴天、突然の大雨で川が氾濫という心配をする必要がないほど晴れ渡っている。

そんな爽やかな青空に向かって、そこだけ未だ夜が去っていないかのように、黒々と聳えて建っている黒の館ブラックボックスは、徹底抗戦する魔族の意思を象徴しているように見える。

下級攻撃魔法程度の威力とはいえ、4日間におよぶ砲撃にほぼ無傷で耐え切った高い防御力を発揮したのを、ここで知らない者はいない。

だが、ノールズを始め、十字軍兵士は誰もが思う、その忌々しき黒の館（ブラックボックス）は、確実に今日をもってこの地上から消滅するのだと。

「敵には策など無く、渡河の準備も整った」

目の前に開けるローヌ川の川岸には、重騎士部隊と魔術士部隊が展開している。

前回の戦いにおいて、対岸に展開させた魔術士が敵の精密な遠距離攻撃によって頭部を撃ち抜かれて即死させられる被害が多かった。今はそれを警戒して、上手く防御魔法で安全地帯を確保しながら、迅速にローヌ川へと部隊を進ませた。

「これで、我々の全力を発揮できる」

橋が落ちてしまった以上、どちらも渡河させることのできなかった部隊だが、今はイカダが川面に浮かび、彼らを確実に対岸まで送り込むことを可能としている。

イカダは急ごしらえの見栄えが良いものではないが、少なくともこのローヌ川を横断するくらいは問題なくこなせる最低限の性能を持っている。

「今こそ、あの邪悪な魔族共に、目にものを見せてくれるっ!!」
響き渡る突撃の号令。

ここに再び、十字軍と冒険者同盟の死闘が幕を開けた。

眼前に広がる十字軍は、思った通り渡河準備を整え、満を持してやって来たようだ。

「分かったが、とんでもねえな……」

そう、こうなることは予想していたさ。

だがしかし、川に浮かぶイカダは、対岸まで埋めるつもりなんじゃないかと思うほどの数。

そしてそれに乗り込むのは、初日に見た以来の重騎士部隊と、今日までチクチクと砲撃くれやがった魔術士部隊だ。

どちらも橋が無い状態で渡河させるには無理な部隊、しかしイカダという足が完成すれば、こちらへ渡ることが出来る。

希望的観測でいえば、最初の橋爆破トラップで全滅させたのが相手の保有する全ての重騎士部隊であって欲しかったが、当然のように期待は外れた。

見た限りでは、あの規模の重騎士部隊をまだ2つか3つほどはありそうだ。

「どうするの？ あれ相手じゃ弓と下級魔法程度じゃ止めきれないわよ」

イリーナの言う通り、あの鎧は見た目以上の防御力があるだろうし、魔術士部隊とくれば、広範囲の防御魔法を幾重にも展開されれば、かなり接近しなければ攻撃を加えられない。

これまでは、魔術士部隊が対岸よりこちらへ近づけなかった為、川の向こう側半分ほどまでしか防御魔法で突撃する歩兵を守ることができなかったが、イカダに乗ってくれば、この防壁まで魔法の効果範囲に治めることができる。

流石に何重にもシールドで固められたまま前進されると、十字砲火でどれだけ止められるかどうか分からない。

逆に言えば、重騎士部隊と魔術士部隊さえどうにかできれば、何とかなるということだ。

流石に騎兵はイカダ程度じゃ部隊全てを輸送するのは不可能だし、天馬騎士部隊はリリイが一人で抑えてくれる、30分という時間制限付だが。

「とりあえず、向こうが重騎士と魔術士を前面に押し出して来るようだし――」

俺はギルドの屋上へちらりと視線をやる。

この防壁前からではその姿は見えない、だがそこに確かに彼女はいる。

「――最初に倒せるだけ倒させてもらおうか」

今日もギルドの一室で頑張るリリイによってもたらされるテレパシーの通信ネットワークを通して、俺は本日最初の攻撃命令を下した。

「フィオナ」

「はい、なんですかクロノさん？」

「一番強いのを頼む」

一拍おいてから、返事が返って来る。

「了解しました、みなさん、ヤケドしないよう気をつけて下さいね」

第120話 再攻撃（後書き）

ちょうど120話とキリのよいスタートですね。今回は新章突入で話も短いので二話連続更新です。

第121話 黄金太陽

かつて、私の魔法の先生は言った。

「フィオナ、魔法の力はね、大切な人を守る為に使うのよ」

あの時は確か、こう応えた気がする。

「私の力では、まだ先生を守ることはできないと思います」

つまり、大切な人は先生の他に誰一人としていないということだった。

その意味を、私の先生が分からないはずが無い、けれど彼女は笑ってこう続けた。

「貴女もここを出て、外の世界へ行けば、きっと守りたいと思える大切な人ができるわ」

先生が言うのだから、あの言葉はきっと間違いでは無いのだろう。けれど、私が魔女としての修行を終えて、‘外の世界’に出て、何年経っても、同じ魔法を使う者が集う、シンクレア共和国の最高学府『聖エリシオン魔法学院』に行っても、私の大切な人はできなかった。

それは私の所為なのだろうか。

魔法を撃っては「殺す気か」と人が怒り、口を開いても「ふざけるな」と人は怒る。

そんな人達でも、守ろうと思えるほどの価値があるのだろうか。分からない、私には先生の言っていた事が分からない。

誰もが、私を受け入れない。

誰もが、私を遠ざける。

誰もが、私を騙し、陥れ、時には、殺そうとする。

だから私はずっと一人だった、誰とも話さず、誰とも触れ合うことは無い。

けれど、これでいい、魔女なんてそんなもの。

だから私は一人で旅をする、勝手気ままに、足の赴くまま、大好きな美味しいものがありそうな所へ。

パンドラ大陸へ来たのも気まぐれ、ヴァージニアの傭兵を辞めた後、共和国に帰らず、まだ見ぬパンドラの地を行こうと決めたのも、ただの気まぐれ。

精々が見たことの無い美味しいものがあるかもしれない、という程度の個人的な理由。

でも、私は出会ってしまった。

「何だ、起きてたのか？」

ちょっと長いお昼寝から目覚めると、そこにいたのは妖精を連れた黒い魔法使いの青年。

「分かったよ、食い物はやるから俺の話聞いてくれ」

本当に見たことの無い美味しいものを、私へくれたその人。

「ああ、まだ名乗ってなかったな、俺はクロノ」

「リリィなのー」

そうして、私は出会ったのだ、クロノさんとリリィさんの二人に。

「私達と正式にパーティを組んで欲しいの」

その時、私にパーティを組む意思は無かった。

「貴女が途轍もなく魔法の制御がヘタクソなのは知ってる、それも含めて誘っているの」

リリイさんの言葉に、断りきる理由を見つけられなかった私は、久しぶりにパーティを組む事になった。

それでも、本当はずっと不安だった。

いざ私の力を見れば、あるいは、私のちょっと人とはズレた言動で、きつとまた離れてゆく、今まで先生以外の全ての人がそうしたように。

でも――

「それじゃあこれからよろしくなフィオナさん、俺も歓迎するぜ」
「分かった、信用するよ、すでにフィオナさんはパーティの一員だしな」

「ああ、フィオナさんの魔法は凄い威力だ、俺のパーティに入ってくれて本当に良かった」

「凄いぞフィオナ！ これで十字軍に勝てるっ！ はーっはっはっはー！！」

「いいんだよ、こういう勢いが大事なんだ、じゃあエレメントマスターの親交を深めるために、乾杯っ！」

気がつけば、私の不安は消えていた。

「――先生、私にも、ようやく大切な人ができました」

『エレメントマスター』を結成してから、ずっと居心地が良かった。

クロノさんとリリイさんだけじゃない、いつの間にか、他の冒険者の方々とも、それなりに打ち解けることができていた。

当然のように、クロノさんが率いる冒険者同盟、その仲間の一人

なんだと感じられました。

「だから、私は魔法で大切な人を守ります」

眼下に広がるのは、私と同じ人間が、群れをなして攻め寄せんとする光景。

シンクレア共和国という、同じ出身を持つ者達。

あの中には私と学院で同期だった者もいるかもしれない。

「でも‘アレ’は、私が守りたい人ではありません」

同じ人間、同じ故郷、だからどうしたと言うのだろう。

異教徒、魔族、それがどうしたと言うのだろう。

「私が守りたい人は‘ここ’にいるんです」

呟くと同時に、頭の中に、私の大切な人の声が響きます。

「フィオナ」

「はい、なんですかクロノさん？」

本当は聞かなくても、私は分かっていますよ。

「一番強いのを頼む」

嬉しい。

私を必要としてくれる。

私を信じてくれる。

その思いが伝わるだけで、私は戦える、命をかけて。

「了解しました、みなさん、ヤケドしないよう気をつけて下さいね」

私が先生から皆伝の証に賜った長杖『アインズ・ブルーム』に、触れた先から魔力を流す。

魔力の種類は当然、私が最も得意とする炎の原色魔力。

杖を振り上げ、詠唱を始める。

現代魔法の系統外にある、私が編み出した、私だけの術式、そう、これが私の持つ唯一にして最強の原初魔法

「???????? ???? ???? (私を燃やして創り出す)」

効果は単純にして明快。

「???????? ???? ???? ???? ???? ???? ???? (東より昇る朱色)」

などの攻撃魔法を撃ち込む。

氷と冷気が吹雪となって、迫り来る火球に殺到する。

しかし、そのどれもが金色の炎に届く前に消滅、圧倒的な赤熱は氷の魔法を十や二十撃ち込まれた程度では僅かほども冷ますことなど叶わない。

「く、来るぞっ——」

ついに、川岸に展開する部隊のど真ん中に、火球が飛び込む。

これだけの魔術士が防御魔法を重ねたのだ、防御は万全。

運悪くシールドの守りに入れなかった歩兵は死ぬかもしれない、だが、防御の中心に位置する魔術士、または強固な鎧で守られた重騎士は死ぬどころか傷一つつかない。

どれだけ大きいと言っても、一発、そう、敵の攻撃はたったの一発だ。

破れる筈が無い、防げない筈が無い。

だが、

「か、か、神よ、どうか我らを——」

頭上から迫るこの燃え盛る巨大な炎の塊は、まるで、太陽がそのまま落ちてきたかのような輝きを放っている。

太陽が墜落したのなら、そもそも人の手で支えられるはずなど無い。

神に祈りながら、彼らは逃れられない死をこの瞬間に理解した。

そして『黄金太陽』は、そこにある全てを焼き尽くした。

「な、なんだあ、コレはあ——!!」

光と熱と爆風が過ぎ去り、ようやくノールズは目の前に広がる光景を認識した。

数秒前まで見ていた河原の景色が一変している。

この占領部隊の戦力の中核を成す魔術士部隊と重騎士部隊、そし

て数多の歩兵が堂々たる威容で展開していたはずが、今やその影はどこにも見えない。

変化は兵の姿が消えただけに留まらない、河原の地形そのものも変化していた。

それは巨大なクレーターとなって、見るものにただそこにあった破壊を示している。

数秒前には川が流れていたはずのそこに一切の水は消滅しており、今になって思い出したかのように失った体積を埋めるべく上流からの水が怒涛となって注ぎ込んだ。

ほどなく、川の流れは元通りになる、が、消え去った兵士が元に戻ることは無い、あるはずが無かった。

「どうなってる、たった一撃で、こんな――」

瞬く間に部隊を丸ごと一つ失う悪夢は、すでに前回経験している。だが、今度はそれ以上の兵を、同じ場所で失うことになるとは、ノールズは予想もしていなかった。

相手はいくら強いといっても、所詮は田舎の小村に立て籠もる魔族の小勢、一国の軍隊では無い彼らが一流の魔術士部隊も古代兵器も保有しているはずがない。

にも関わらず、まさかこんな広域殲滅級の攻撃魔法が飛んでくるなど、ノールズでなくとも常識的な十字軍兵士なら予想することはできないだろう。

「少し、落ち着かれたらどうですか？」

冷ややかな声がノールズの混乱した頭に突き刺さる。

「シスター・シルビア……何故ここに」

「一応は副官ですので、こうして前線に出ることもあるでしょう。それより、早く指示を出した方が良いのではないですか、收拾がつかなくなりますよ」

「うむ……そうだ、その通りだな」

頭を振って無理矢理にでも冷静さを取り戻すノールズ。

この光景に衝撃を受けたのは自分だけではなくここにいる兵も同

じ、己が率先して動かねば、攻撃どころでは無くなる。

「負傷兵を急いで回収しろ！ あの火球は恐らく敵の奥の手だ、連続で撃たれることは無い！」

指示の言葉に、呆然とした周囲の兵士が慌てて動き始める。

「新たな部隊を展開させろ！ 手痛い打撃だが全滅したわけではない、攻撃方針はそのまま、魔術士と重騎士の渡河準備を進めろっ！」
「はっ！」

命令を受ける兵士が四方へ散って行くのを見送った頃には、ノールズ自身もかなり冷静さを取り戻していた。

「魔族共め、これしきで我らが退くなどと思うなよ」

「そうですね、ここで退けば相手の思う壺。」

前回攻めた時に、この火球攻撃を使わなかったところを見ると、貴方が言ったように奥の手だったのでしょう」

「ああ、まだ攻めるに十分な兵は残っている、予定通り攻撃すればアルザスを落とすに支障は無い」

前と同じように、最初の一手で大きな痛手を被ったが、戦局を決定付けるほどではない。

十字軍には、まだ大多数の歩兵と魔術士、重騎士、天馬騎士、騎兵、作戦を遂行するには十分過ぎる兵力が残っているのだ。

もっとも、この戦いはすでにノールズにとって一生忘れ得ないほど屈辱に満ちた苦戦の記憶となってしまうている。

「……だが、我らの敗北だけは許さん、必ずやあの見るも忌々しい黒の館に、ブラックボックス神の御旗を打ち立てるのだ」

内心で怒りを燃やすノールズは、準備が整い次第、躊躇無く突撃命令を下す。

どれほど魔族が抵抗し犠牲が出ようとも、今日ばかりは決して後に退かず、勝利することを神に誓った。

「全員無事か？」

フォオナの『黄金太陽』^{オール・ソレイユ}の余波が、俺達の防壁前まで届くのは実験で予測済みだったので、あらかじめ防御魔法で広範囲をカバーしていた。

無事を知らせる返事はすぐに返って来る。

それに周囲を見渡しても、誰も負傷した様子は無い、どうやら上手く凌げたようだ。

「凄い……さっきまでいた敵の部隊が丸ごと消えてるわ」

イリーナの意見には全く同意だ。

俺は一度見ていたが、あらためてこの威力を目の当たりにすれば、驚かないはずは無い。

「ああ、シールドも鎧も関係無しにブツ飛ばしてくれたな」

つい先までこちらへ攻めかからんとイカダに乗り込んでいた重騎士と魔術士の姿は忽然と消失していた。

敵集団のど真ん中に落ちたからな、爆心地がどんな惨状となっているのかは考えるまでも無い。

「けど、それでも敵はまだヤル気みたいだ」

再び十字軍兵士は勢い込んで河原へと雪崩れ込んで来る。

そのくせ、狙撃を警戒しているのか、きっちり防御魔法を展開させながら、イカダを川へ浮かべて渡河準備を開始している。

「ここから先は消耗戦ね」

「そうだ」

敵には未だ、重騎士も魔術士も全滅してはいない。

かなりの数を減らしただろうが、それでも尚、俺達を倒すには十分な人数は残っている。

「今日が最大の山場だな」

「ええ、頑張りましょう」

微笑むイリーナに、少しだけ心が落ち着く。

ああ、落ち着く、ってことは、やっぱ緊張してたんだろうな、俺は。

それも仕方が無い、なぜなら今日は、確実に多くの犠牲が出るだろうことが判っているからだ。

けれど、

「そうだな、俺達が頑張らないとな――」
すでに俺も皆も覚悟は決まっている。

「――準備はいいか？」

立ち上がり振り返ると、そこにはすでに、ヴァルカンを筆頭に突撃部隊のメンバー全員が集合している。

「おうよ、何時でもいいぜ」

これから俺達が相手にするのは、敵の最大の防御力を誇る重騎士部隊だ。

ヤツらは天馬騎士と同じように、その豪華な装備に見合った実力を持つエリートで構成されている。

ただの歩兵を倒すようにはいかない、分厚い鎧に守られた騎士は遠距離攻撃に高い耐性を持つが故に、十字砲火で止められない。

よって、俺達が接近して斬り伏せてくるのが確実にして唯一の倒す方法だ。

「……リリイ、フィオナ、聞こえるか？」

「うん！」

「はい」

テレパシーを通じて、二人に語りかける。

「フィオナ、よくやってくれた、後は俺達に任せてゆっくり休んでくれ」

「お役に立てたようで、なによりです」

今頃はギルドのベッドへ搬送されている最中だろうか。

彼女が起き上がるには、魔力回復用のポジションを使ってもしばらく時間が必要だろう。

「リリイは天馬騎士が来たら、また頼む。

ただ無茶はしないでくれ、加護の限界が来たら、すぐ戻るんだ」
「うん、だいじょうぶ！」

「よし、それじゃあ、ちよつと行つて来る」

「はい、行つてらっしゃい、クロノさん」

「いってらっしゃい！」

二人の声に後押しされた俺は、すでに正門の前にたどり着いている。

右手には『呪怨鉈「腹裂」』、左手には『ブラックバリスト・レプリカ』、そして影の中には幾本もの黒い刃を秘めて。

「行くぞっ！」

吼える突撃部隊と共に、俺は開かれた正門を飛び出した。

矢が、雷が、火が、氷が、川を渡る十字軍兵士達の頭上から降り注ぐ。

だが、イカダに乗りこんだ重騎士達にその攻撃は届かない。
魔法も武技も習得する高い実力を持つ者が、この白銀の甲冑フルプレート・メイルを纏うことを許されるのだ。

この程度の遠距離攻撃を彼らが防げないはずがない。

「あの大爆発が魔族の奥の手だったのは本当みてえだな」

「ああ、第2部隊のヤツらは運が無かったな、あんなの喰らったらひとたまりもねえや」

「俺らで仇を討つてやろうじゃないの、ついでに、アイツらが挙げるはずだった武勲もな」

すでに魔族の策は尽きたとみなす彼らは、正面から戦いさえすれば負けるはずがないとの思いから、どこか余裕に満ちていた。

「見ろよ、魔族が勇んで出てきやがったぜ」

一人の騎士が指差す先には、黒いローブを纏った男を先頭に、様々な種族とバラバラな装備を身につける集団。

種族は違えど冒険者の集団だと一目で判別できる。

だが、その冒険者集団が初日の戦闘において歩兵の突撃を少人数

で押さえ込み、さらに一人の死者も出さなかった脅威の部隊である。そんな彼らの矛先が自分達であることは、改めて説明されるまでもなく重騎士の誰もが理解できていた。

「なあおい、あの一番前にいる黒尽くめのヤツが、噂の‘悪魔’、ってヤツじゃねえか？」

「ああ、違いねえ、最前線で黒ローブのヤツは他にスケルトンだけって話だ、人間の男であの格好してんのは、悪魔のヤロウしかありえねえ」

「へへ、そんなじゃあ俺らで‘悪魔被い’、といきますか」

フルフェイスのヘルムで覆われた彼らの表情は見えない、だが、その顔には間違いなく笑みが浮かんでいた。

「よし、イカダから降りろっ！」

横列陣形をとれ、敵を一気に蹴散らすぞっ！」

第3重騎士部隊を率いる隊長の指示に合わせ、真ん中の最深部を越えて足がつくほどの浅瀬となった川へ、次々と重騎士達がイカダから飛び降りる。

地に足の着いた重騎士は、川の流れをもとめず素早く横一列の陣形を作り上げ、迫り来る魔族の突撃部隊を迎え撃つ態勢を整えた。

「さあ行くぞっ！ 邪悪な魔族を討ち滅ぼし、騎士の誉れを挙げよっ！！」

フルプレートメタルシールド

斧槍を高々と掲げ、白銀の甲冑と大盾で守られた鉄壁の重騎士部隊は、鬨の声を上げながら、アルザス防衛線を蹂躪すべく、ついにその重い一步を踏み出した。

第122話 突撃部隊VS重騎士部隊（1）（後書き）

本当は二話分割でしたが、短かったので一話に纏めました。一話の中で視点が飛び飛びで申し訳ないです。

第123話 突撃部隊VS重騎士部隊（2）

それは正に銀色に輝く鋼鉄の城壁。

大柄な重騎士が^{タワーシールド}大盾を構え、整然と横一列に陣形を組み迫ってくる様は、凄まじい威圧感だ。

「まずは先手必勝、魔弾——」^{バレットアーツ}

『装填』^{フルメタルジャケ}済みの弾丸を瞬時に出現させる、その黒い擬似完全被鋼弾の向く先は、勿論この迫り来る銀の壁。

さあ、俺の弾丸とお前らご自慢の^{フルプレートメイル}重甲冑、どちらが強いか勝負と行こうか。

「——全弾発射っ！」^{フルバースト}

『ブラックバリスタ・レプリカ』を振るうと、中空に現れた弾丸は黒いマズルフラッシュを焚きながら、眼前に迫る敵を貫かんと一斉に飛び出す。

^{アイアン・ガード}「硬身」

俺の攻撃の兆候を鋭く察知した重騎士部隊は、そのまま一斉に防御の武技を発動。

弾丸が届く前に、武技の効果によってただでさえ堅い盾と鎧が魔力によって強化される。

シールドと違って効果は数秒らしいが、その僅かな発動時間の間で受け止める力量があれば攻撃を防ぐに何の問題ないわけだ。

「それにしたって無傷は無えだろ——魔剣」^{ソードアーツ}

放った千の魔弾はあえなく巨大な大盾によって防がれる。^{タワーシールド}

弾丸と鋼がぶつかり合う甲高い音と火花を散らすも、盾の表面に僅かな傷さえ残らなかった。

効果の無い魔弾と代わり、次に出すのは黒一色の長剣。^{ロングソード}

『影空間』から出現する10本の剣を、俺の周囲に付き従うように展開させる。

「これで傷一つつかんとなれば、ちょっと拙いかもな——貫けっ！」

イチから魔力で物質化するよりも、本来ある物質に魔力を付加エンチャントさせた方が強度は高い。

サリエルだって魔剣ソードアーツは必ず自らの手で防いでいた、そのまま受け止めるには危険と判断した何よりの証拠。

ならば、この防御力MAXな重騎士共にも、少しは効果があるはずだ。

黒化剣は俺の意思通り、獲物を狙う鷹のような鋭さを持って飛び出す。

「当たり前だな」

攻防は一瞬で終わる。

俺の真正面に位置する重騎士が、その鋼の巨体を川へと沈めた。剣はそれぞれ別々の軌道をとらせて一人の重騎士目掛けて投擲したのだ、いくら盾が大きいといっても360度、全方位を防御する事は不可能。

そして俺の魔剣は見事、重騎士の分厚いフルフェイスのヘルムを貫通し、脳天にその刃を突き立てることに成功したのだ。

「しかし、消費量がヤバいな……」

どうやら10本全てをつぎ込まねば、重騎士一人を一瞬で倒すのは無理らしい。

倒れた重騎士は、頭部に喰らった剣を除き、残りの9本を盾やハルバード、あるいは鎧で受け止め、見事に全てを防ぎきっていた。

胴体の鎧に命中した魔剣は、鋼の表面に傷をつけることはできたが、一発で貫くには至っていない。

盾よりは鎧の方が多少は防御力が低いと思えば、少しはマシか。

「どっちにしろ、厳しい戦いになるには変わりないな」

右手に握る呪鉞、コイツの『黒風』でも鎧ごと両断はできないだろう。

左手に握るタクト、魔弾の方は、弾丸の数よりも一発あたりの硬度を高めて、3発の重ね当てを狙えば、鎧の薄い部分なら貫けるはず。

そして背後に再び影より呼び出す10本の魔剣、まだ黒化剣に多少のストックがあるといえども多用は禁物。

今使った10本の内、半分近くが硬いガードに阻まれ、刃こぼれを起こし黒化が解けかけている。

剣を覆う黒色魔力が剥がれ落ちれば、当然俺の制御下から離れる、この状況下じゃ再び拾って再黒化というのも中々難しいだろう。

「強敵だな、だが――」

重騎士部隊は、俺が倒した一人分の隙間をうろたえる事無く素早く塞ぎ、ガードを固めたまま、足並みを揃えてゆつくりと前進してくる。

もうすぐ、お互いの手にする刃で切りあう間合いに入る、そうなれば後はもう俺達突撃部隊と重騎士部隊のガチンコ勝負。

「上等だっ！ 一歩も退くな、冒険者の意地を、この屑鉄騎士共に見せ付けてやれっ！！」

第123話 突撃部隊VS重騎士部隊（2）（後書き）

すみません、重騎士KATEEEというだけで短い話なので、もう一話更新します。

第124話 妖精VS天馬騎士(4)

「――来た」

上空に敵影有り、なんて言ったらあの天馬騎士以外にはありえない。

今回は前よりも随分と出現が早い、クロノの言っていた通り、向こうは総力戦を仕掛けるようね。

「テレパシー切断、それじゃあ、後はアナログ通信でよろしくね」

最前線で戦う忙しいクロノに代わって、私は規定通りの報告を冒険者達に通達すると、さっさと部屋の窓を開けて、空へと飛び立つ。すでに体は元の状態、コンディションもまあ悪くは無いかな、砲撃の音が煩かったけど、子供の体は何処でもぐっすり眠ってくれた。「早く来なさい、こっちは時間制限があるんだから」

アルザス村の上空まで舞い上がると、前方から点々と編隊を組んで飛ぶ天馬騎士部隊の姿が確認できる。

向こうは明らかに私を警戒している、前回のように『メテオストライク星墜』からの奇襲はさせてもらえないだろう。

前の戦いで、もう少しこっちの弱みを見せて油断を誘うべきだったかな。

奇襲で動揺を誘った上での戦闘、さらに私には強力な精神感応のテレパシー固有魔法で、相手の行動や作戦がある程度察知できる。

そうして前回は終始私の優勢で戦いを進めることが出来たのだが、実のところこちらも限界ギリギリだった。

そもそも竜でも無い私が何であんな大人数を、しかもそれなりの手練れを相手にしなくちゃいけないのよ。

クロノの為に無理を押して戦ってるんだから、圧倒的な戦力差でも屈しないのは全て愛の力に他ならない。

まったく、私の玉のお肌に傷がついたらどうしてくれるのだ。

「——ん？」

迫り来る天馬騎士の影は徐々に大きくなり、そろそろ私のテレパシーの範囲内に入ろうかという時、違和感を覚える。

うん、この感覚は、間違いない、

マインド・プロテクト

「精神防壁か、一応は対策したってこと、小賢しい」

彼女達の心が見えない、薄い壁、いや、もっとボンヤリとした霧のようなものに包まれて、表面に出る感情のおおまかな色以外に詳しい思考を拾えない。

魔法のランクでいえば下級といった程度の弱い精神防壁だが、部隊全ての思考を読むことは、前回のようにはできないわね。マインド・プロテクト

一人あたりのプロテクトを突破するのは容易だが、集中砲火を浴びながら、攻撃と回避を両立させている私には、そこにまで一点に集中力を割くのは少しばかり厳しいものがある。

「まあいいわ、裏をかかれない程度に思考を読めば、後は前と同じように真っ向から戦うだけだしね」

そろそろ攻撃魔法の射程範囲に入る、私は妖精結界を展開させて前進を開始する。オラクルフィールド

奇襲する余地が無いのなら、正面から行くほかは無いでしょ。

「さあ、貴女達を殺してクロノにいっぱい褒めてもらうんだから、私のために、さっさと死んでちょうだい！」

お互い、攻撃魔法を放つのは同時。

雷、風、炎、氷——多様な下級攻撃魔法が私目掛けて飛来する。

私が放つのは光線と光弾の二種類、サイズは『光矢』ルクス・サギタ程度だが、内に秘める威力は中級。

追尾性能の高い光弾で私が飛ぶのに邪魔な軌道にある敵の攻撃魔法を迎撃し、その隙間を塗って距離をつめる。

対して直進しかできないが発射速度が光速である光線は、天馬騎士を直接狙う。

速度は速くとも、向こうもそれなりの実力者で構成された部隊、発射点を見切って回避行動をとれる程度の反応はある。

天馬騎士は私の攻撃が届くや、そのまま回避運動の常套手段である散開を――しない。

「え、反転した？」

そのまま散開し、私を包囲するように進むだろうとの予測は覆される。

彼女達は何を思ったか、私という敵を前にして一斉に180度反転し、背中を見せて元来た空を戻り始める。

「ちょっと、待ちなさいよっ！」

真意を測ろうと思うも、この距離ではテレパシーがギリギリ届くかどうかという範囲、プロテクトを突破できるほど強力な干渉が来ない。

とりあえず心を読むにも攻撃するにも接近しないことには始まらない、背中を見せて逃亡を始める天馬騎士を追いかけろ。

だが、直線距離においては天馬ベガサスの方が若干有利、全力で逃げられたらジリジリと引き離されてしまう。

私は飛行速度をかなり上げて追撃を仕掛ける、けど、拙い、これは追いつけない。

「ちっ、これ以上の深追いはできないわね」

速度を落とし一旦空中で停止。

あまりアルザス村から離れすぎるのは危険だ。

そもそも、今の私のように敵を追いかけて、伏兵で嵌めるのはごく基本的な戦術だ。

もし敵がそれを狙っているのなら、それに乗ってやる必要は無い。

ここは引き返そうか、と考えた次の瞬間、背中を見せて逃げた天馬騎士部隊が再び反転する。

再度正面から相對する私と天馬騎士、先と全く同じように、攻撃魔法の一斉射撃を開始する。

「これ以上先に進みたいくはないし、少し退くしかないわね」

射程ギリギリに仕掛けられた攻撃など、避けるのも撃ち落すのも楽だ。

私は正面を向いたまま、後退を始める。

すると、天馬騎士は下がる私とほぼ同じ速度で、ほぼ一定の距離を保ったまま追いかける。

そして、攻撃魔法の届くギリギリの射程に入ると、散発的に撃つて来る。

「くっ、まさか――」

私が空中で停止する、天馬騎士部隊も停止。

私が前進すれば、天馬騎士部隊は後退。

そして私が下がれば再び前進、常に一定の距離を保ち、嫌がらせ程度にしか攻撃を仕掛けてこない。

「――時間稼ぎ！」

理解した、敵の狙い。

心が読めずとも、こうもあからさまに動かれれば、分からないのはよほどの阿呆だ。

要するに敵は、私の加護が消失する、‘時間切れ’を狙っているのだ。

「ホントに、小賢しい真似をしてくれるわね……」

第125話 撃ち合い

今日のシモンは屋上では無く、ギルド四階のとある一室の窓に陣取って『ヤタガラス』を構えていた。

この部屋は、ローヌ川からアルザス村の正門付近まで見えるような位置取りとなっており、屋上に次いで格好の狙撃ポイントでもある。

今回の攻撃では魔術士部隊までもが川を渡り接近してくる為、屋上には砲撃こそされていないが、多種多様な攻撃魔法が降り注ぐだろうことは想像に難くない。

鍛えられた射手や魔術士なら下級攻撃魔法の1発や2発、頭上から迫っても対処できる。

だがシモンは、ただでさえパワーに劣るエルフの中でも体格に劣り、さらにエルフが誇るべき高い魔力の素養も彼には皆無である。

上空に防ぐものが一切ない屋上にいるのは、狙撃の腕前以外は一般人並みの力しかないシモンにとって危険に過ぎた。

故に、それなりに安全が確保でき、かつ狙撃に適する場所として、この部屋が彼に割り当てられている。

安全の確保、とは言っても、魔術士の数だけでこちらを上回る人数を抱える十字軍の魔術士部隊は、シモンが狙撃する小さな窓へも苛烈な攻撃魔法を叩き込んでくるのだった。

「うあっ、熱っっ!?!」

イグニス・サギタ

飛来する火矢が窓のすぐ近くに当たり炎を散らす。

運悪くその熱に炙られ、シモンの白い細腕に火傷特有の痛みが走った。

「う……くう……」

一旦銃を手放し、部屋の影に身を潜める。

クロノの黒化で強化されたギルドは、木造の壁一枚分しかなくとも、今この瞬間も如何なる攻撃魔法が撃ち込まれても全く揺るがな

い。

シモンは壁を突き抜けて攻撃される心配を全くせず、そのまま腕の治癒に取り掛かるべく、空間魔法ディメンションの施されたポーチを漁る。

このような見た目以上の容量を誇るポーチ、あるいはリュックやカバンなどは、高価ではあるもののランク3以上の冒険者なら大抵が持っている。

ランク1のシモンが購入できるはずもないが、こうして所持しているのは、かつて餞別として送られたからであった。

そんな使い古されたポーチから、シモンは小さな袋を取り出す。

「どうしよう、『妖精の霊薬』もこれで最後だ……」

火傷を負った腕へ光り輝く粉末を振り掛けると、瞬く間に痛みは引き、爛れかけた皮膚が元の瑞々しい柔らかな肌へ時間を巻き戻したかのように再生する。

凄まじい回復効果を持つ『妖精の霊薬』は、屈強な冒険者に比べ格段に痛みマジックダメージに弱いシモンにとってはこれ以上ないほどありがたい魔法具である。

だが、次に負傷すれば通常のポーションしかもう残っていない。

瞬時に傷を癒す『回復』系統のポーションとは言え、『妖精の霊薬』に比べれば天と地ほどの差がある。

痛みの残る腕で、どれほどの精度で狙撃を続けられるかシモンには不安が残る。

「……けど、やらなきゃ、みんな戦ってるんだ」

眼下に広がる圧倒的な数の敵、先の見えない戦いへの不安、恐怖、ネガティブな感情の全てを押し殺して、シモンは再び銃を手取る。

「だから、僕も頑張るよ、頑張って――敵を撃つよ」

構える『ヤタガラス』の銃口の先には、丁度タイミングよくシルドの途切れた魔術士が一人。

シモンは迷わずトリガーを引き、また一人の敵の命を奪った。

「くっ、どうなっている、何故あの黒の館は落ちない！」
ブラック・ボックス

部下の魔術士が胸から血を吹いて倒れる姿を横目に見ながら、第5魔術士部隊の隊長は叫ぶ。

イカダから降り、川の浅瀬に展開している魔術士部隊は、黒の館ブラック・ボックスと仇名されるアルザス村ギルドより行われる猛烈な敵の射撃を沈黙させるべく、集中砲火を行っているが、火の手どころかろくな傷一つその黒い外壁につけることができないでいた。

「隊長、一旦防御に専念して第6部隊と第7部隊の到着を待ちましょう！」

「仕方あるまい、二重防護に切り替えろ——」
デュアルシールド

堅牢な黒き壁で守られたギルドは頭上より敵を撃つ正に戦塔、対する魔術士部隊は数こそ多いが、何も遮蔽物の無い川辺にあっては、身を守る術は防御魔法の他には無い。

その防御魔法といえども、万能では無い。

発動にはそれ相応の魔力は必要であるし、現在のように常時展開さらに部隊を丸ごと覆う広範囲をカバーするのは中々に難しい。

防御魔法が如何なる局面にも対処できる万能なものであれば、そもそも城や防壁などの設備は必要ないのだ。

ブラック・ボックス
この黒の館のような堅牢な守備を誇る構造物に立て籠もる相手に対し、数に勝るとは言え正面から攻撃を仕掛けて陥落させるのは決して容易な事ではない。

「全く、重騎士部隊のノロマ共め、どれだけ時間をかければあの魔族の小勢を蹴散らして正門を破るといふのだ！」

作戦的に魔術士部隊だけでギルドを陥落させようと思っているのではない、自分達はあくまで歩兵と重騎士による正面突破の援護が目的。

故にこうして敵の射手と魔術士の立て籠もるギルドを狙い撃ち、敵の攻撃を歩兵達から逸らしているのだ。

ブラック・ボックス
もっとも、自分達の攻撃魔法だけで、この黒の館を破壊できると

思っていたからこそ、まるでギルドへダメージを与えられない様子に隊長は苛立ちを見せている。

まして上手くコトが運ばなかった上に、味方の突撃も思ったよりも進んでいない、正規の作戦行動すら滞り気味。

自分達の勝利は疑いようも無いが、明らかな苦戦の様相に内心穏やかではられない。

「もう少しすれば、必ず歩兵と重騎士達があの貧弱な防壁を突破します、やはり今は無理せず援護に徹していれば良いのではありませんか」

「うむ、その通りだな、こんな小競り合いで命など落としては――」
その瞬間、隊長の頭部を黒い弾丸が襲う。

「た、隊長!？」

眉間をぶち抜き、後頭部から血とその内容物を噴出すほど大きく決る大口徑の一撃は、治癒する一片の余地も無いほど死に至らしめる。

「くっ、あの窓を狙え! あそこに潜むヤツに撃たせるんじゃない!」

ほんの僅かなシールドの隙間を塗って弾丸を撃ち込んでくる脅威の命中精度を誇る狙撃手の位置を特定し、隊長亡き後、指揮を引き継いだ副官が指示を飛ばす。

「損害が大きすぎる、早くあの防壁を突破してくれ……」

第126話 防壁前

有刺鉄線を纏うアルザスの防壁前では、機関銃が高らかに射撃音を響かせて押し寄せる歩兵を薙ぎ倒している。

その圧倒的で一方的な攻撃は初日の再現、と言いたいところであったが、

「あ、こりゃあかんわ、こんなそう長くもたへんで！」

状況は少しずつ、だが確実に不利になりつつあった。

「弱音吐くなよモっさん！ ああほら、そこから敵来てるって！」

機関銃の長い砲身を急ぎ旋回させ、倒れる味方の陰から飛び出してくる十字軍兵士の一団に弾丸を浴びせかける。

クロノは重騎士部隊を潰すための突撃部隊を率いているため、当然この場では十字砲火が出来ていない。

一丁の機関銃だけでは、やはり隙が発生し、今のようにながりの至近距離まで歩兵の接近を許してしまい、ひやりとする場面がもう何度もあった。

「無理やって、今日は敵も魔術士仰山連れて来てるさかい、シールドかかった歩兵が硬い！」

闇のマズルフラッシュを噴きながら、嵐のように吐き出される黒き弾丸はしかし、魔術士部隊の支援を受けた歩兵部隊を粉碎するのには、それ相応の時間を要してしまう。

そして、その分だけ敵を防壁まで接近させてしまうのだ。

「うおっ！？ 危なっ——」

モズルンに向かって飛んでくるのは、歩兵部隊の突撃を支援する魔術士部隊から発射されたであろう『イグニス・サギタ火矢』。

完全に直撃コースを辿っていた火の矢は、

「????????????????——『エール・シルド風盾』」

すぐ横に控える『三獵姫』の三女ハンナが瞬時に防御魔法を展開し、風の盾で迫る炎を掻き消した。

「助かったわお嬢ちゃん！」

「お嬢ちゃん言うな！」

「がっはっはっは、ワシから見れば人の女子なんてみーんなお嬢ちゃんや！」

軽口を叩きつつ、機関銃を掃射するモズルン。

未だ攻め寄せる歩兵の勢いは衰えない。

（しかし、ホンマにこのままじゃアカンで……）

ちらりと左右を窺うモズルンの目に入るのは、弓を持つ戦士クラス的面々と、支援役として配置してある魔術士の数人。

時折、巨大な丸太のような矢を射出するバリスタが敵の団を粉碎するが、この圧倒的な兵の前では、その数も微々たるものに過ぎない。

敵を防ぐための火力が足りていないのは明らかだった。

敵の魔術士部隊のほとんどが堅い守りを誇る冒険者ギルドへ攻撃を仕掛けている為、こちらへの援護射撃が期待できない。

もっとも、そのお陰で大多数の魔術士部隊が防壁前で一斉攻撃してくるという事態も避けられてはいる。

重騎士部隊の突撃も、クロノ率いる高ランクの冒険者達による必死の応戦でどうにか押し留めている。

それでも、攻撃を仕掛ける敵の数が最も多いのはこの防壁であるという事実に変わりはない。

最初の攻撃時と同じように、歩兵部隊が突撃を繰り返し、さらには何組もの魔術士部隊が渡河を果たしたことで、数こそ多く無いが、魔術士が防壁魔法や強化によって歩兵の突撃を支援している。

機関銃が火を噴き続けられる今であっても、敵の接近を許してしまふ現状は、非常に拙いと考えるのは、きっとモズルンだけでは無いだろう。

今や防壁前にいる誰もが思っている、機関銃が攻撃不能になれば、ここは10分も耐えられず突破されると。

（旦那が重騎士部隊を排除して戻ってくれば、耐えられる可能性は

ある。

けど、それがアカンかった時は、退くしかないか……」

まだ交換用の銃身に余裕はある、だが、それが尽きるのはそう遠い未来の事ではない。

それでも今は、不安を押し殺してモズルンは機関銃を敵に浴びせ、死を振りまき続けた。

歩兵突撃を支援する魔術士部隊の隊長は、静かに戦況を見ていた。

「被害は多いが、もうすぐ落とせるな」

「そうですね」

ブラック・ボックス

彼らは黒の館と激しい撃ち合いを演じる第5魔術士部隊にやや哀れみの視線を向けながら、歩兵の後ろという安全地帯で支援行動に徹するだけの役割で済む自分達の幸運を喜ぶ。

「重騎士部隊も予想以上の苦戦を強いられているようだが――」

最初に渡河を果たした第3重騎士部隊は、すでに魔族の部隊と泥沼の大乱戦となってしまうている。

あのように双方入り乱れて立ち回られては、下手に攻撃魔法などで手を出すことは誤射の危険性もある為、突出してきた魔族の相手は完全に重騎士部隊に任せてしまっている。

「――第4重騎士部隊の渡河が始まれば、勝敗は決する」

「その前に、あの悪魔の攻撃が打ち止めになる可能性もありますよ」

「ああ、そういうば、そういう情報もあったな」

視線の先には、邪悪なスケルトンの魔術士が黒い閃光と共に歩兵を即死に至らしめる脅威の攻撃を行っている光景。

だが、前回の戦闘である攻撃には確実にインターバルが存在することがすでに証明されている。

この圧倒的な兵力を前に、あの凄まじい連射性能を誇る黒魔法によって、どうにかこうにか突撃を押し留めている状況、それを封じ

られればどうなるかなど、学のない一般兵士であっても容易に想像がつくだろう。

「ふふ、この悪魔の村が落ちるのも、最早時間の問題だな」

第126話 防壁前（後書き）

2011年10月11日、プロローグに少しだけ加筆修正を施しました。今日より以前から読んでくださった方は、この第9章が終わるまでには、もう一度プロローグに目を通していただければ幸いです。

クロノが白崎さんに騙されて文芸部室にノコノコやって来る辺りから読めば、すぐに加筆箇所が分かるかと思います。

勿論、プロローグの流れに全く変化はありませんので、読まずともストーリーを追うのに問題はありません。

修正箇所は僅かなものですが、それでも連載中に誤字脱字以外で修正を施すことになってしまったのは、私の不徳と致すところ、申し訳御座いません。

第127話 突撃部隊VS重騎士部隊（3）

アルザスの正門より数十メートル離れた川とその岸边では、今の場において最も激しい戦いが繰り広げられている。

「ゴオオアア！！」

分厚く長い刀身を持つグレートソードを軽々と振り上げ、真っ直ぐ切りかかってくるオークの戦士。

「くっ、硬身っ！」

対する重騎士はその攻撃を盾で防ぎ、そのまま弾くように押し出す。

怪力自慢のオークとはいえ、鍛え上げられた重騎士に武技を伴った全力で弾かれれば、思わずたたらを踏んで後ずさってしまう。

「突撃！」

体勢を崩したオークに向けて、ハルバードで刺突の威力を上昇させる武技『突撃』^{チャージ}を発動させ追撃をしかける。

だが、敵もさるもの、崩れた体勢でいながら素早くグレートソードを片腕で跳ね上げ、迫り来る槍の穂先を凌ぐ。

攻撃を防いだオークはそのまま何歩か下がり、再び仕切りなおしの間合いとなる。

「はあ……はあ……魔族め、まさかこれほどまでとは……」

第3重騎士部隊を率いる隊長は、息を切らせながら思わずそう呟いた。

正門よりたった20名そこその魔族が勢い込んで飛び出してきたのを見た時は、チャンスだと思った。

彼らはアルザスを守る魔族の中でも選りすぐりの戦士達、これを蹴散らせば一気に攻撃が勢いづくし、何よりそうするだけの自信が自分達にはあった。

だがしかし、実際に刃を交えてみればこの有様。

凄まじい魔族の突撃力に横一列の陣形はすでに乱れ、泥沼の乱戦

となってしまうている。

重騎士部隊だけでも相手の数を上回っているにも関わらず、鉄壁の防御力を持つ重騎士が一人、また一人と倒れてゆく。

予想以上の魔族の強さに、こちらは士気が下がり始めるやもしれぬ状況、対する魔族は逆に勢いづき、恐ろしげな咆哮を上げ果敢に攻撃を仕掛けてくる。

その魔族だって、重騎士が振るう槍斧ハルバードの餌食となり、当初より三分の二ほどまでその数を減らしている。

その生き残っている二十にも満たない魔族にしても、無傷でいる者などすでに皆無、自分が流す血と相手を斬って被った血が合わさり、全身を赤に染めているものばかり。

それでも尚、戦意が衰えることなく戦い続ける魔族の姿は、ベテランといえる経歴を持つ重騎士の隊員をもってしても、どこか空恐ろしいものを感じざるを得ない。

もしかすれば、本当にこの勢いのまま押されるのではないかと。

「有り得ん、我等が負けるはずが無いっ——『大断』フレイク！」

再び斬りかかるオークの攻撃を見事に受け流し、カウンター気味にハルバードの斧部分で切り払う。

斬撃力上昇の効果を秘める武技『大断』フレイクは今度こそオークの胴体を捉え、身に纏う厚手の革鎧ごとその鋼のような筋肉を裂き、致命傷を与えた。

「ゴアっ、グフウウ……」

縦一文字に切られた胴から鮮血を噴出し、口から血の泡を吐きながら、ついにオークの巨体が地面へ沈む。

倒した魔族はこれで2人目。

重騎士部隊の隊長である彼でも、まだたったの2人。

視界の端で、2メートルを越える巨漢ワイウルフの人狼の大剣にかかり、鎧ごと叩き潰される部下の姿が見えた。

「くそ、このままでは——」

「戦闘中に余所見するなよ、屑鉄騎士_{ボンコツ}」

凄まじい殺気と共に届くその声、咄嗟に反応できたのは彼の實力があつてこそだろう。

「硬身ガードっ！」

「黒風！」

閃く黒い剣撃、武技で防御してもその威力全てを殺しきることはできず、思わず一步下がってしまう。

だが体勢は崩さない、ここで隙を見れば次の一手で確実に仕留められる、今自分を攻撃した‘悪魔’はそういうヤツなのだ、すでに彼は理解していた。

「はあああっ！」

反射的にハルバードを振るう——手ごたえ有り。

追撃として飛んできた2本の黒い長剣ロングソードを何とか弾き飛ばすことに成功する。

再び盾を構え更なる追撃に備えるが、そこで相手も一旦下がった。
「‘悪魔’か……この男は危険すぎる、ここで仕留めておかねばならんな」

ヘルム越しに見る‘悪魔’と呼ばれる黒尽くめの男を確りと見据える。

イルズ村の占領に向かったキルヴァン隊を撃退し、前回の戦いで歩兵突撃を黒魔法で防ぎ、河原に無数の死体を築き上げたこの男の活躍は、正しく十字軍にとって‘悪魔’と呼ぶに相応しい。

こうして面と向かって対峙すると、より一層それが実感できる。

黒髪黒目の恐ろしく鋭い目つきをした男、その漆黒のローブも今や己と敵の血に塗れてしまっている。

だがその戦意は他の魔族と同様、いや、彼こそが最も戦意に溢れ、それに釣られる様に魔族の士気を引き上げているのだと悟った。

こちらを睨む闇夜のように黒い双眸には、はっきりと憎悪の念が籠められていることが分かる。

「……参るっ！」

湧き上がる恐れを鋼の理性で振り払い、必殺の念を持って踏み出

す。

この悪魔の攻撃はどれも恐ろしいが、この鎧と盾があれば十分防
ぐ事は可能であると、これまで戦ってきた様子からすでに判明して
いる。

先に喰らった黒い斬撃の武技を放つ、巨大な刃の禍々しい大鉈で
さえ、この大盾を両断すること叶わず、表面に傷をつけるに留まっ
ている。

（こちらから接近して、ヤツの攻撃をまず『硬身』で弾く、体勢を
崩したところで『突撃』か『大断』で仕留める！）
槍と盾を装備する重騎士の基本戦法を忠実に守り、攻撃を仕掛け
る。

確実に敵の攻撃を防ぐ防御力があり、また一刀の下に敵を殺しき
る攻撃力があるからこそ、余計な小細工は不要。

基本だが付け入る隙の無い、一種完成された戦法。

「うおおおお！」

バレットアーツ
「魔弾」

‘悪魔’が歩兵を散々に殺しつくした恐怖の黒き弾丸が、構えた
盾に突き刺さる。

「この程度で、止められると思うな！」

かなりの反動が腕に走る、だがこの突撃を止められるほどでは無
い。

ものともせずそのまま一気に突撃を続ける。

「――黒風」

ガード
「硬身！」

先と同じ技の応酬、しかし武技を放つ両者の体勢は逆転。

転がる巨石が突っ込んできたかのような勢いで繰り出される硬い
大盾に、武技『黒風』だけではその突撃力ごと両断することはでき
ず、

「ぐっ――」

悪魔の体勢が崩れる。

明確な隙、これを逃すほど甘い腕前では、そもそも重騎士部隊の隊長になどなれない。

「もらったあ！」

振り上げるハルバード、放つは岩をも切り裂く武技『大断^{ブレイク}』。

「――言っただろ、余所見すんなよ」

そう言って笑う悪魔へ向けて、真っ直ぐこのハルバードを叩きつけてやるだけで、終わる。

だが、腕が動かない、いや、体から一氣に力が抜けていくのを彼は感じた。

「闇を歩み、夜に舞う、一振りの白刃――『影渡ハンゾーマ』」
耳に届くのは誰かの声。

何者かが、自分の肩に乗っている、そして、その者が自分の首に刃を突き立てている。

何が起こったか分からないのは彼ばかり、目の前に立つ‘悪魔’、にははつきりと見えていた。

加護の力によって極限まで気配を殺して接近した一人の女が、重騎士の肩に乗っかり、鎧の隙間から首元へ大振りのダガーナイフを深く差し込んでいる姿を。

「かはっ――」

だが彼の目に映るのは、己の首から致死量を越えて吹き上がる鮮血と、その向こうで笑う悪魔の顔のみ。

自分を殺した何者かの姿は、事切れる最期の瞬間まで見ることも叶わなかった。

第128話 四つの戦況

「助かった、スーさん」

「お互い様さ、ここまで注意をひきつけてくれなかったら、私も狙えなかったよ」

それだけ言い残して、再びスーさんは戦場の背景に溶ける様にその姿を消した。

凄いな、ちょっと視界から外れたらもう姿を追えない。

恐ろしいのは加護の力か、それとも彼女の実力か。

「けど拙いな、このままじゃギリギリで全滅しそうだ」

恐らく部隊の隊長だと思われる重騎士を仕留めたが、この乱戦じゃあそれほど士気低下などの効果はなさそうだ。

こうも入り乱れて戦えば向こうも退くに退けないだろうし。

「痛てて、こんな傷だらけになったのは何時以来かな……」

とりあえず、今は戦況を考えるよりも治癒に専念する。

戦士でも無いのに無茶な接近戦を繰り返して重騎士部隊と戦って

きたが、その分だけ敵の刃にかかって体中斬り傷だらけだ。

軽く刃が当たる程度ならこの『悪魔の抱擁』パフオメット・エンプレスが防いでくれるが、

流石に武技の一撃を喰らえば多少ダメージを軽減してくれる効果しか発揮されない。

負傷すれば俺の持つ唯一の治癒魔法(?)である『肉体補填』で即座に傷口をゼリー状の黒色魔力で防ぎ、出血を最低限に抑えながら騙し騙し戦っている。

だが、こうなることも仕方無い、分かっててやったし、それでどうにか戦える算段もあるから躊躇無く突っ込めたのだ。

その算段とは、他でもないリリィ特製『妖精の霊薬』だ。

コレで大きな傷の回復も即座に出来ると思えばこそその突撃戦法である。

「そういえば初めて使うな、どれほどのもんなんだか――」

取り出したるのは小さな袋、ポーションと違って『妖精の霊薬』は粉末状だ。

さっと封を解いて袋を広げると、中にはキラキラと光を放つ白砂糖のような粉が詰められている。

放たれる光は、リリイの素肌を覆っているあの目に優しい白い発光とよく似ている。

だが今ここでしげしげと観察している暇など無い、さっさと粉末を手のひらにあけて、そのまま直接傷口に擦り付ける。

「うおっ、痛いぞコレ、痛みがガンガン引いていく」

その効果は正に言葉に出たとおり、傷口に触れた瞬間から一気に痛みが引く、というより消える。

肉体補填で埋めた黒色魔力も、その治癒効果を一足飛びで完結させ、傷跡は完全に再生した。

さらに、体に溜まった疲労感も根こそぎ吹き飛んでいくのも感じる。

「コイツは確かに万能薬だ、ありがとなりリイ」

（――それはどういたしまして、クロノが喜んでくれて嬉しいわ）

突然頭の中に響く声、聞き間違えるはずもなく、声の主は上空で天馬騎士部隊と戦っているはずのリリイのものだ。

「わざわざ通信してくるなんて、どうかしたか？」

戦闘中は通信を控えるよう言っている、少しばかりイヤな予感を憶えるが、

（ちよっと拙いコトになっててね）

どうやら予感的中らしい。

「何があった？」

（天馬騎士部隊はどうやら私の加護の時間制限に気づいて、時間切れを狙って攻撃を仕掛けてこないの。

今のところ、このまま私の加護が切れるまで睨み合いを続けるより他は無いわ）

「……そうか」

考えようによっては加護の効果時間内は確実に足止めできるというメリットはあるのだが、リリイとの戦闘によって相手に消耗を強いることが出来ないというのは、少しばかり拙い。

「加護はどれくらい持つ？」

（『クイーン・ベリル紅水晶球』はもう10分もたない。

竜皮紙の巻物（スクロール）はあと2本しかないから、それを使って加護を発動させれば、残りは全部で40分くらいってところね）
「一時間しない内に、無傷の天馬騎士部隊が攻撃を仕掛けてくるってコトか」

（うん）

「分かった、仕方が無い、そのまま時間一杯まで足止めしてくれ」（了解、でも、そっちは大丈夫なの？）

「多少無理してでも、こっちが何とかしなけりゃアルザスはお終いだ」

（そう……じゃあクロノ、あんまり無茶はしないでね）

「約束しかねるが、一応分かったと言っておこう」

そしてリリイとの通信が途切れる。

「本当に拙いコトになってきたな……」

現在のアルザス防衛線では大きく分けて4つの戦況に分けられる。

1つ目は、俺たち突撃部隊と重騎士部隊の戦闘。

2つ目は、リリイと天馬騎士部隊が睨み合いを続ける上空。

3つ目は、魔術士部隊とギルドで援護射撃を行うシモン達との撃ち合い。

4つ目は、防壁前で繰り広げられるモっさんの機関銃と歩兵突撃の攻防。

この4つは現在、圧倒的な戦力差に晒されながらも奇跡的な拮抗を保っている。

これを実現しているのは天馬騎士を止めるリリイ、下級から中級程度の魔法ならビクともしない頑強さを誇る黒化ギルド、歩兵を一方的に排除できる機関銃、そして全ての冒険者が死力と尽くして戦

つてくれていることによって成り立っている。

だがそれもあくまで一時的なもの、ほんの僅かな隙を晒しただけであつという間に切り崩されてしまう可能性はこの戦況もある。

いや、このままの調子で戦い続ければ確実にアルザスは落ちる。

「それを覆せるのは、俺達だけか」

俺達の相手である重騎士部隊、これを完全に叩き潰すことさえ出来れば、勝機が生まれる。

そのまま魔術士部隊に切り込んでもいいし、防壁に戻って防御に徹しても良い、特に俺は前回のように魔弾で十字砲火が出来るようになれば、一気に歩兵突撃を押し返すことも可能だろう。

今日を守りきるには、何としてもここで俺達が重騎士部隊を倒さなければならぬ。

それが出来なければ、もうこの圧倒的な兵力に飲み込まれるまま敗北となるより他は無い。

「かなり重騎士は倒したと思うんだが――」

視線を川の向こうに向ければ、血みどろになって叩き斬った甲冑と同じ装備の一団が、イカダに乗り込みこちらへ漕ぎ出してくるのが見える。

「あともう一部隊いるか……」

思わず息を吐く。

かなりの犠牲を払ってようやく重騎士部隊を壊滅寸前まで追い込んだのだ。

それにも関わらず、敵は当然のように新たな部隊を繰り出してきた。

ただでさえ人数が減り、俺含め突撃部隊のメンバーは大なり小なり負傷している。

いよいよ全滅の二文字が現実的となって俺へと圧しかかってくる。

「けど、やるしかねえ――ん？」

覚悟を決めて再び重騎士部隊へ挑まんとした矢先、俺の懷に忍ばせたテレパシー通信用の水晶片が伝言の傍受を光と振動で俺へと知

らせた。

ここで通信してくるとは、恐らく予想外の事態が起きたに違いないと瞬時に悟る。

リリィに続き、またしても不測の事態発生かと内心不安になりつつも、素早く通信に応える。

「どうした？」

「クロノさん、大変です――」

水晶片を通して語られるその内容は、

「なん……だと……」

俺に敗北を突きつける絶望的なものだった。

第129話 誤算

アルザス村周辺の警戒任務は、基本的に盗賊など目端の利くクラスが担当していた。

しかしながら、それ以外にこの広い範囲を監視する任務に向く能力を持っているのが召喚士^{サモナー}である。

冒険者の中ではあまりメジャーなクラスではないものの、総勢で100名以上が集う冒険者同盟には、3名の召喚士が在籍していた。そもそも召喚士とは、魔物^{モンスター}を特殊な術式や調教で支配下に置き、使い魔^{サーヴァント}として行使する魔術士の派生クラスである。

彼らはダガーラープターやウィンドルなどランク1のモンスターを利用して、広い範囲の警戒をカバーしていたのだ。

そしてそれは、現在のような戦闘状態にあっても、最低限、周辺を警戒する使い魔を放っていた。

元々、このアルザス村は地形的に敵の部隊に回り込まれたり、側面から奇襲を受けるようなことは不可能であると考えられた為、この使い魔の警戒も念には念を、くらいの意味合いでしかなかった。敵が後方に出現するというあり得ない懸念よりも、むしろモンスターの襲来を警戒という役割の方が強いといえるだろう。

しかし、その‘不可能’が現実になったことをいち早く察知できたのは、彼ら使い魔の警戒のお陰であった。

クロノ達を守る正門の反対側、レーヌ川にかかる橋から繋がる裏門に向かって、ある召喚士のウィンドルが走っていた。

ウィンドルは淡い緑色の毛並みを持つ狼のような姿をしており、微弱ながらも風の固有魔法^{エクストラ}を有しているのが特徴である。

そのウィンドルは自身の主によって命令された任務を果たすべく、全力で駆ける。

彼らの任務とは警戒、敵を発見したら知らせるという事。

そして、その任務が現在果たされている、それもこの正門と反対

に位置する村の裏側でということは、全く想定していなかった背後に、敵’が出現したことを示す。

この裏門より2キロほど離れた街道に、ウィンドルが発見した敵影を、

「な、何という事だ……これほどの部隊が背後に回りこまれていたなんて……」

ウィンドルの主である召喚士が、使い魔の見た視覚映像を断片的に読み取り、その事実を確認した。

「急いでクロノさんに連絡を――」

そして、その情報はクロノの元へテレパシー通信の水晶片を用いて速やかに伝えられる。

「――村の背後に敵部隊出現！ その数およそ百、重騎士部隊です！」
アーマーンナイト

「――村の背後に敵部隊出現！ その数およそ百、重騎士部隊です！」
アーマーンナイト

「なん……だと……」

その言葉を聞いた瞬間、脳裏に敗北の二文字がよぎる。

敵に背後を衝かれる、それは完全に誤算だった。

アルザス周辺の街道や地形を考慮すると、敵が即座に包囲できるような場所では無いからだ、そもそもそういう場所だからアルザスを防衛線に選んだのだ。

それが、こうもあっさり覆された。

ちくしょう、このまま戦えば守りきれるかもしれないのだ、こんな報告は嘘であって欲しい。

そう思いはするが、この勝敗を決定付ける衝撃的な情報を無視して、戦闘を継続するという選択肢は、少なくとも多少は冷静に回ってくる俺の頭には残されていなかった。

「くっ、ここはもうダメだ……撤退する……」

迷う時間は無い、敵の部隊に背後をとられた時点で、こちらの負けは確定なのだ。

「……いいのですか？」

水晶片の向こうから、戸惑いの声が返って来る。

「ああ、アルザス村は放棄する、撤退の合図を鳴らしてくれ、急いでここを脱出するぞ」

「了解」

通信の終了と同時に、水晶片が砕け散り、その役目を終える。

「くそお！」

何故だ、一体どうやって重騎士なんて機動力の悪い部隊が百人もアルザスの背後に回ったんだ。

迂回するルートはあるにはあるが、それを使えばアルザスの後方へ出るには絶対に1週間以上かかる、時間的にそこを利用されたとは思えない。

村のすぐ近くの森を強引に突っ切ったとして、万が一そんなことが可能で成功したとするならばの話だが、それでも百人規模の部隊の移動にこちらが気づかないはずが無い。

それくらいの警戒はしていた、だが、こちらの監視の目には今の今まで一切怪しい動きは引っかからなかった。

どんな魔法を使って俺達の後ろにいきなり部隊を出現させたのか、全く分らない。

いや、それこそ本当に部隊丸ごと転送させるような便利な魔法が向こうにはあるのかもしれないな。

ならばどうすれば良かった、後方を警戒して裏にも防壁を作っておけばよかったのか？

確実に敵が来る正門でも1週間の準備期間しか無かったのだ、来るはず無いと思われる後方に、念を入れて防備を築く余裕など無かった、警戒する人員を配置するだけでよくやった方だろう。

お陰で敵が裏門から雪崩れ込む前に接近を察知する事が出来たの

だ、まだ、運は尽きていないと考えるべきだろう、そうでも思わないとやってられない。

「よし、落ち着け、後はもう逃げることだけ考えろ……」

余計なことを考えるな、後悔は文字通り後ですれば良い、リーダーである俺の判断が遅れたら、その分だけ味方に余計な犠牲を強いることになるのだ。

心を落ち着かせ、頭を切り替えたその時、撤退の合図を知らせる角笛の音が戦場へ響き渡った。

撤退の合図となる角笛の音色が響き渡ると同時に、白と黒の煙幕がアルザスの正門前を包み込んだ。

「魔族が退くぞっ！ この好機を逃すな、一気に畳み掛けろっ！」
ローヌ川の対岸に出て、声を張り上げて指示を飛ばすのは司令官であるノールズ。

戦場を包み込む煙幕は、撤退する為の小細工であることなど一目瞭然。

「ふっ、ついに均衡が破れたな」

「そうですね、もう少し粘るものかと思いましたが」
隣に立つシルビアも肯定の意を示す。

確かに、魔族の精鋭で構成されているであろう突撃部隊は、それなりに数を減らしていたが、重騎士部隊を相手に果敢に攻めかかっていた。

それはノールズも見っていて分かってはいたが、急に手のひらを返したように撤退を始めたこの行動を、特に疑問に思う事はしなかった。

「これでようやく、この忌々しい村を占領できるな」

勝利を確信したノールズは、煙幕の中へ猛然と突撃を仕掛ける自軍の背後で、高笑いを挙げた。

アルザス村の上空に展開する天馬騎士部隊へ、陽の光を直視したような眩い閃光が襲う。

「……ちっ、逃げやがったな」

視界が潰れた隙について一気に距離を開けて後退を始めるリリイを見て、エステルはそう毒づいた。

「どうやら、真っ直ぐ黒の館ブラックボックスに向かうようね」

「ヤツの‘効果時間’はまだ切れちゃいねえはずだが――なるほど、地上の方でケリがついたみてえだな」

アルザス村の正門からローヌ川にかけて濛々と煙幕が立ち込めているのを見れば、魔族の軍が撤退を開始しただろうことが窺い知れる。

「ヤツらがこのまま逃げるのか、それとも黒の館ブラックボックスに籠こもって一戦やらかすのか、どっちだと思うよ、フラン？」

「真っ直ぐ逃げるようではなさそうだけど、どちらにせよ、私達のやることは決まっているでしょう」

「はっ、そうだな、そんじゃ追撃といこうか！」

エステルを先頭に、天馬騎士部隊がアルザスに聳え立つ暗黒のギルドへ強襲をかけるべく、動き始めた。

ヴァルカンを先頭に、突撃部隊が防壁前に張り付く歩兵部隊を蹴散らして正門の前まで退く。

俺はその最後尾で魔弾を煙幕の向こう側にばら撒きながら、敵の足止めを行う。

「煙玉全部使うとすごい煙の量だな」
スモーク

突撃部隊だけが退くときは、俺の黒煙だけでも十分だったが、今

回は防壁前に集う全員を、脱出路のあるギルドまで撤収させなければならぬ。

周囲を覆うには黒煙だけでは足りないので、逃走用のアイテムとして有名な『煙玉』^{スモーク}をあるだけ使って盛大な目くらましにしている。自分で放った黒煙と味方が投げた煙玉、黒と白の煙は混ざって灰色になることなく、ただ俺の目の前で目隠し（ブラインド）の役目を果たしている。

「……壁の準備は、もう少しか」

煙の中から槍を携えた歩兵が飛び出してくる度に魔弾で粉碎しながら、着実に門まで近づく。

フィオナが寝込んでいる為、今回は他の魔術士が敵を足止めする‘壁’を作る役目を負ってもらう。

そろそろか、と思えば、どうやらその通り、足元から隠す事無く魔力が走り、魔法発動の兆候を感じさせる。

「下がれ！ 壁に巻き込まれるなよ！」

俺が大きく一歩その場を飛び退いた瞬間に、魔術士の範囲防御魔法が一斉に発動する。

それは炎や氷や土が、新たな防壁として出現し、攻め寄せる敵の足を止める。

俺の目の前にあるのは、イルズで斥候部隊を迎撃した以来に見る、滑らかな漆黒の壁面、『邪心防壁』^{デス・ウォルデフアン}だ。

これくらい立派なシールドを俺も出せるようにならなきゃな、と思いつつ、種々の防壁が敵を止めてくれている間に、開かれた正門へと転がり込んだ。

「よう戻ったな、旦那！」

「なんとかな」

髑髏を模した禍々しいデザインの短杖^{ワンド}を片手に、モっさんが俺を迎えてくれる。

「よし、俺らで最後か」

「はいな、皆もうギルドへ駆け込んでったで」

流石は冒険者、素早い逃げ足、もとい迅速な撤退行動だ。

「俺らも早く行こうか、もうシールドが破られかけてる」

「せやな」

デス・ウォルデザイン

『邪心防壁』の壁面からすでに見慣れたデザインのハルバードの刃が突き出ているのを最後に見ながら、俺はギルドの開け放たれた玄関に飛び込んだ。

第130話 黒の館（ブラックボックス）陥落

ギルドのロビーには、生き残った冒険者全員が集結し、順次脱出路を通って撤退を始めている。

改めて見渡してみれば、皆一様に戦いの痕をその身に残し、どこ配置も激戦であったことを物語っている。

そして何より、その数が目に見えて減っていた。

全部で103名いた冒険者達だったが、特に今日の一戦で20人以上が戦死し、大幅に人数を減らしてしまっている。

だが未だ戦闘中、嘆いている暇は無いし、これから速やかにアルザス村から脱出しなければならない。

「ヴァルカン、突撃部隊を率いて先に裏門で準備しといてくれ」

「いいのかよ、お前が殿で」

「気にするな、最初からそうする予定だったろ」

「そーいやそうだったな、先に行ってるぜ」

敵の重騎士部隊が後方に迫っていることは、すでに全員へ伝わっている。

そして、これから街道を通って逃げるには、この100の重騎士部隊を正面突破するしかないことも理解している。

ここが最後の山場だ。

「あ、お兄さん」

「シモン——なんだ、そっちも大変だったみたいだな」

『ヤタガラス』を肩にかけるシモンは、全身がやけに煤けている。よく見れば、その細く白い手足には赤い火傷のような痛々しい跡が点々と見受けられる、きっと炎の攻撃魔法で狙われたのだろう。

「今日は魔術士が沢山いたからね、一発撃ったら火の玉が十発返って来るんだ、参るよホント」

そう言って苦笑を浮かべる、どうやら元氣はまだまだあるようだな。

「それでも無事で良かった、ほら、シモンも早く行った方がいい」
「うん、じゃあお先——にっ!？」

と言った瞬間、シモンの頭がガクンと揺れる。

まるでハンマーで叩かれたかのような反応だったが、シモンの脳天に叩きつけられたのは鋼鉄の塊などではなく、二つの乳の塊だった。

「なんてことだ、怪我をしているじゃないかシモン、よく私に見せてご覧」

「あ、スースさん……」

未だ加護発動中なのか、唐突に現れたスーさんがシモンを後ろから抱きしめている。

恥かしいのか逃れようとするシモンだが、以外とマジで拘束しているのかスーさんの腕から逃れられない。

ついでに、シモンが身をよじるたびに頭の上にある大きな乳房がたゆんたゆんと揺れたりたわんだり、まるでスライムのように激しく動く——いや、あの中身もスライムなんだっけ？

「遊んでないで、早く行け二人とも」

「これは失礼、それじゃあ行こうかシモン」

「うーあー……じゃあねお兄さん」

何か言いたげな目をしていたシモンだったが、結局、スーさんに抱えられたまま脱出路へと姿を消した。

そんな仲良し女の子二人組みを見送ると、もうほとんどの冒険者はこの場を脱したようで、ここ最近は毎日賑わっていたギルド一階のロビーは随分と物寂しい光景となる。

そんな感傷に浸っていると、最後のメンバーが帰還した。

「ただいま、クロノ」

リリイは地上にいる俺達の退避が完了するまでは天馬騎士部隊の動きを抑えてくれていた為、ギルドへ戻ってくるのは最後となってしまったのだ。

「無事に戻ったようだなによりだ」

「私は睨み合いしてただけだからね」

すでに少女状態では無くいつもの幼女姿になっているが、意識だけは元に戻しているようだ。

「私も空から確認したわ、白い鎧の集団が真っ直ぐこっちへ向かってた」

「そうか、ただの歩兵なら、まだなんとかあったんだけどな」

「でも、いいの？ 足止めはまだ5日目、もしかしたら、追いつかれるかもしれないわよ」

「ああ、そんな時はガラハド山中でゲリラ戦を仕掛けりゃ1日くらいは足止めできるだろう」

「ホントに？」

「……たぶんな、やってみなきゃ分からん」

意地悪く笑うリリイの視線が心苦しい、幼女の姿でそんな小悪魔的な微笑みしないでくれよ。

「ふふ、大丈夫、きっとなんとかなるわよ」

「そうだな、じゃありリイ、先に――」

「行くわけないでしょ、私はクロノと一緒に、離れるつもりはないわ」
必ずしも殿にリリイを配置する必要は無いため、先にギルドから脱出して欲しかったのだが、こうしてローブのフードへ入りしがみ付かれてしまったては、もう振り払うことはできないな。

「仕方無い」

首元に猫のように纏わりつくリリイの頭を撫でると、この修羅場にあっても凄まじい癒し効果を発揮して、俺の心を落ち着かせてくれる。

「この状況下で、随分と余裕ですねクロノさん」

「フィオナ！？ うっ、なんつーか、もう歩いても大丈夫なのか？」

現れた黒衣の魔女フィオナ、いつも眠そうな目は今も相変わらずだが、どこことなく冷めた感じに見えるのは俺の気のせいだろうか。

「魔力全開、とはいきませんが、普通に動く分には問題ありません、ポーシオンを沢山頂きましたので」

脳裏にベッドの上で各種ポジションがガブ飲みするフィオナの姿が鮮やかに映し出される。

「では、私も先に行って馬の用意をしておきますね」

「頼んだ」

フィオナを脱出路が通じる地下室へ降りて行くのを見送った直後から、ギルドを揺する音と衝撃が一際大きくなった。

「そろそろここもヤバいな――」

特に正面玄関などは、破城槌でも持ってきたのか、ガンガンと物凄い勢いでぶっ叩かれている。

いくら黒化で強化したと言っても、あの様子じゃ破られるのは時間の問題だ。

「それじゃ、こっちも最後の策の用意をするか」

十字軍兵士達は、有刺鉄線を乗り越え、柵を打ち崩し、ついにアルザス村の防壁を突破した。

魔族が組織的な抵抗を止めてギルドへと引きこもった今となっては、あれほど苦戦を強いたこの防壁もあっさりと超えられてしまう。そして、この戦いもついに終わりが見えてくる。

黒の館と仇名される黒一色の冒険者ギルドに向けて、兵達は砂糖ブラックボックスに群がる蟻の如き勢いと数で攻め寄せていく。

ギルド周辺は未だ目くらましの煙幕によって視界が悪いものの、矢の一本も飛んでこない無抵抗なことで、全く気にせず突き進む。

ただ天馬騎士部隊だけは敵の見えないこの状況にあって、無理に攻撃することはせず、上空で待機状態となりつつ、地上部隊がこの不気味な建物を制圧する様を高みの見物と決め込んでいた。

「よし、もう一撃だ！」

威勢の良い声がギルドの正面玄関から響き渡る。

渡河に用いた丸太をそのまま扉を破るのに歩兵達は利用していた。

魔法も技術も無い原始的な方法だが、何人もの男達が抱えて思い切り叩きつける丸太は、一撃ごとに確かな破壊力となって黒色魔力で強化された扉を歪める。

そうして、防ぐことの出来るダメージの限界に達した黒い扉はとうとう打ち破られ、堅牢な守備を誇る黒の館はついに敵の侵入を許す。

「開いたぞ！ 行けえええ！！」

「うおおおお！」

高らかに鬨の声を挙げて、一挙にギルド内へと雪崩れ込む兵達。

100名以上の冒険者を収納できる広めのロビーだが、怒濤のように踏み込んでくる兵達によってあっという間に面積は埋まってく。

「なんだ、敵がいねえぞ！」

「気をつけろ、上に潜んでるかもしれない」

「いや、逃げ道があるに違い無い！ 探せっ！」

ギルド内に敵の姿が見えない事に凡その見当をつけ、兵達は即座に動き出す。

ある者は階段を上り各部屋の索敵をする。

またある者は、秘密の隠し通路が無いかと壁や床をチェックする。恐らくは、上空で待機する天馬騎士へ、周辺の搜索を要請する命令もその内に下されるだろう。

少なくとも50名以上は生き残っている魔族の集団が、忽然と姿を消すことなどありえない。

どこに隠れたのか、あるいは逃げたのかは分からないが、敵はすぐに見つかる。

そう十字軍兵士の誰もが思っていた、その矢先である。

バキ——バキ——

不吉な音がギルド内を踏み荒らす兵達の耳に届いた。

「お、おい、今のって――」

まるで木の柱が折れた時のような音だ、そして、その感想は実
的を射たものであった。

致命的な部分が折れる連続的な音と共に、床がグラグラと揺れ始
める。

「早く逃げろ！ 崩れるぞお！」

兵達がギルドより脱出しようと慌てて踵を返すが、時すでに遅し。
数多くの兵を満載した建物は、その外に群がる兵までも巻き込ん
で、逃げる間も無く瞬時に倒壊する。

人の悲鳴を掻き消して、ただ崩壊の轟音が周囲一帯に響き渡った。

「――黒化解除」

ギルドを包む黒化を解除すると、あらかじめ細工をしていたこ
とで、すぐにこの4階建ての木造建築は崩れ落ちる。

「よし、上手く行ったようだな」

「やったね！」

肩に乗るリリィとハイタッチを決める。

この脱出路にまで響いてくる振動と轟音は、ギルド倒壊の策が成
功したことを如実に表していた。

こうしてギルドごと崩れてしまえば、この脱出路の入り口を塞ぐ
ことができる。

「んー、結構な人数が巻き込まれたみたいね」

「そうか、最後までギルドは大活躍してくれたな、感謝しないと」
自分で強化したとはいえ、今日までよく耐えてくれたギルド、い
つの日かアルザスを十字軍の支配から解放できたら、この場に記念
碑を打ち立ててもいいくらいだ。

「やれることは全部やった、ケツまくってさっさとズラかるぞ！」
「うん！」

第130話 黒の館（ブラックボックス）陥落（後書き）

最初に落とした橋に続いて、こういう建物を崩壊させるのも定番ですよね。

第131話 敵中突破

「戻ったかクロノ！」

脱出路を抜けた先では、すでに二角獣バイコーンに跨り出発準備完了なヴァルカンが出迎えてくれる。

「おう、ギルドできっちりヤツらを生き埋めにしてきてやったぞ」

「へへへ、んじゃ、さっさと行こうや」

俺達が守っていた正門と反対側に位置する裏門には、退却用の馬車を用意してある。

冒険者の所有する馬のほとんどを利用し、急造の荷台を引かせる。大きさもそこそこ、お世辞にも立派といえない出来だが、ちよつと無理して乗ればなんとか全員を収容できるようなにはなっている。

問題は走っている途中に壊れなきやいいってとこなんだが、せめてガラハド山脈の麓あたりまでは持って欲しいと願うより他は無い。「まあ、その前にあの重騎士部隊を突破できるかどうか問題なんだけどな」

平坦な道の先に、点々と見える人影。

十字が描かれているだろう旗らしきものを掲げて、こちらへ迫ってくるあの集団こそ、俺にアルザス村の放棄を決定付けた原因である、憎き重騎士部隊だ。

「行くぞ！ 全速力で突っ込め！」

敵中突破するにはこれしかない、ただ全力でもって突っ切るだけだ。

馬へ鞭をいれる音が響き、ガタガタと荷台を揺らしながら、冒険者達を満載した馬車が走り始める。

地面に力強い蹄と轍の跡を残しつつ、馬車は列を成してアルザスの裏門を飛び出した。

まず差し掛かるのは、かつての正門と同じように川にかかる木造の橋。

正面に流れているのがローヌ川、そして今渡っているのがレーヌ川である。

どちらも同じような大きさであり、橋が無ければ二つの川を越えるのに十字軍の大部隊では難儀することだろう。

「爆破準備は？」

「問題ありません、いつでもいけます！」

俺がいるのは列の先頭、リリイのテレパシーを通じて、最後尾に位置する馬車に乗る魔術士と連絡をとる。

「よし、やってくれ」

「了解——『火炎槍』」
イクニス・クリスサギタ
マジックアイテム

5日前にローヌ川の橋を破壊した時と全く同じように、設置した炎の攻撃魔法を発する魔法具が爆弾代わりとなって橋脚を吹き飛ばす。

橋が無ければ、即座に追ってこられるのは空を飛ぶ天馬騎士のみ、そしてリリイが未だ健在な俺達へ向けて天馬騎士部隊だけで追撃を仕掛けるようなことはしないはず。

これでしばらくは追っ手を心配する必要はない。

「あとは、目の前の屑鉄軍団を突っ切るだけだ」

すでにトップスピードに乗った馬車は、ぐんぐんと正面に陣取る重騎士部隊と距離を縮めてゆく。

俺が乗っているのは一番先頭に行く馬車、もともとはヴァルカンのパーティが所有するものであるが、今は御者役である獣人の戦士を除いて他のメンバーは乗っていない。

敵中を突破する先鋒となるこの馬車には、重騎士の戦列に穴を空けるために最も火力を稼げるだろうメンバーを乗せているからだ。

俺、リリイ、フィオナの『エレメントマスター』と、『三猫姫』のエルフ三姉妹、そしてちゃっかり機関銃を持ち込んできたモっさんの合計7名だ。

御者の右隣に俺、左隣にフィオナ、屋根の上には機関銃を構えるモっさんとすでに少女状態となって加護パワー全開のリリイ、荷台

の両窓を開けて魔法の弓を引くイリーナさん達、という配置となっている。

この馬車のすぐ隣を並走して、バイコーンに乗るヴァルカンを始め、単騎で高い突撃力を発揮してくれる高ランクの戦士クラスが各々の得物を構えて衝突の瞬間を待ち望んでいる。

「フィオナは戦っても大丈夫なのか？ 魔力的な意味と攻撃範囲的な意味で」

御者を挟んで、初めてみる赤い短杖ワンドを手にするフィオナへ問いかける。

「どちらも大丈夫ですよ、この『ファイアーボール』はどれだけ魔力を流しても一定の威力しか出ないタイプの杖なので」

「……そんな便利なものがあるのか」

ならそれを使えば冒険者パーティとして問題なくやっていったんじゃないのか？ と思うが、即座にフィオナが否定する。

「下級も満足に扱えない魔術士の初心者が使うモノですので」

「ああ、最低限の魔力さえ流せば一定の威力が出せるからか」

そして、その‘一定の威力’、平均よりやや低めの下級攻撃魔法を超える火力を出せるようになれば、この『ファイアーボール』という杖から卒業するってことか。

「じゃあ火力不足なんじゃないのか？」

「大丈夫です、箆めた魔力だけ連射が聞くように改造カスタムしてあります、高ランクのモンスターには無力ですけど、重騎士を押し留めるにはそれなりに効果が見込めるでしょう」

「なるほど、期待するぜ」

「そう言ってもらえると、恥ずかしながら三年生にもなって新入生に混じってこの杖を買い求めた甲斐がありましたね」

あ、またフィオナの黒歴史の1ページが紐解かれたようだぞ。

「ちよっとお、私を差し置いて楽しくお喋りしないでよね、寂しいでしょ！」

頭上から聞こえてくるリリィの不満気な声。

「スマン、別にそういうつもりじゃなかったんだけど」

「がっはっは、こんな時まで妬くなんてホンマにカワイイなあ妖精のお嬢ちゃんは！」

「そういう言い方は、止めてもらえないかしら？」

「あ、アカンて！ その光はスケルトンにはアカン！ 浄化してまうから、ホンマに——」

ここからは死角になって見えないが、なにやらピカピカと白い光が発光しているのが分かる。

「仲良いなアイツら」

「おや、クロノさんも嫉妬ですか？」

「ん、ああ、そうかもな」

「——残念ですリリイさん、脈なしです」

フィオナが何か呟いたが、脈ってなんだよ。

「テメーら、敵を前にして遊んでんじゃねーぞ！ 気合いれろや！」

並走するヴァルカンから渴が飛んできた。

「スマン、悪った」

気を取り直して、俺は手にする『ブラックバリスト・レプリカ』へ魔力を流し、攻撃準備を開始する。

すでに、重騎士部隊の姿ははっきり見えるほどの距離にまでやってきている。

「みんな、準備はいいか——」

そして、馬車はついに攻撃の射程範囲に差し掛かる。

俺達は立ち並ぶ重騎士の列、そのど真ん中に風穴を開けるべく、最大火力の攻撃魔法を叩き込む。

白銀の鎧にハルバード槍斧と大盾、先ほどクロノが相手にした重騎士部隊と全く同じ装備の集団が、街道を突き進む。

正面からは、猛烈な勢いをつけて全力疾走する馬車の列。

互いの距離が100メートルを切ろうかという時、先頭を走る馬車に凄まじい魔力の波動が迸る。

しかし、そんな騎兵突撃を凌ぐ質量を持つ馬車の突撃と、明らかな攻撃魔法の兆候を前にしても、立ち並ぶ重騎士達は一言も発する事無く、ただ只管に前進し続けた。

バレットガトウングバースト
「魔弾掃射」

最初に重騎士へ届いたのは、二筋の黒い銃火。

クロノが振るうタクトとモズルンの構える機関銃より連続的に吐き出される黒い弾丸が、鋼鉄の壁に着弾。

激しい金属音と、地面を抉る弾丸によって土煙が巻き上がる。

間髪入れずに飛来する弾丸に続き、さらに拳大の火球と稲光を引く雷の束が殺到した。

火球はフィオナの『カスタム・ファイアーボール』より放たれる
イグニス・サギタ
下級攻撃魔法『火矢』。

クロノの魔弾ほどではないが、それでも常識外の速さで連続発射される火球は、白銀の甲冑にぶつかる度に小爆発を起こし、その行進を大きく押し留める。

バチバチと甲高い音を立てて飛んでゆくのは、『三狻姫』のメン
ライン・オーヴァーラスト
バーが弓より放つ中級範囲攻撃魔法『雷鳴放撃』。

金属製の鎧の間を通電し、通常以上の範囲で雷撃が走り抜ける。

弾丸と火球と電撃によって、かなりの広範囲に渡って攻撃を叩き付けたが、最後に最も強力な一撃が残っていた。

メテオストライク
「――『星墜』」

重騎士が並ぶ頭上に描かれる光の巨大魔法陣、そこから落下するのは確かな質量を伴う虹の塊。

馬車が通過する為、地面にクレーターを作らないようにとクロノに注意を受けたリリイは、それなりに威力を抑えて放ったのだが、

ドゴゴゴゴオ！

街道を端から端まで塞ぐように横列を組んでいた重騎士をあっけなく吹き飛ばす程度には火力があった。

七色の閃光と爆音、爆風が周囲を包むが、クロノ達を乗せる馬車はそれに怯む事無く真っ直ぐ爆心地に向かってつぎ進む。

メテオストライク
『星墜』によってすでに隊列は崩れたが、戦闘可能な重騎士がハルバードを構えて、街道を再び塞ぐべく動き始める。

だがその時には、ついに馬車の先頭集団が重騎士の群れへと突っ込んだ。

エール・スラッシュ
「『疾風一閃』っ!!」

『孤狼・ヴォルフガンド』の加護を全開に発揮しているヴァルカンは、接近する重騎士にむけて風を纏った大剣の一撃を見舞った。

そして、魔弾から近接攻撃用に『呪怨鉈「腹裂」』へと武装を変えたクロノも、馬車に向けてハルバードを振るう重騎士に向けて、すれ違いざまに武技を叩き込む。

「黒風——っ!？」

漆黒の斬撃は、見事にハルバードごと重騎士の鎧を両断する。

だが、この瞬間にクロノはこの重騎士部隊の‘異常’を察したのだった。

「黒風——」

俺へと狙い済ましたように突き出されたハルバードの一撃を、そのまま防ぐように武技を放つ。

交差は一瞬、『呪怨鉈「腹裂」』の禍々しい形状の刃は、ほとんど抵抗を感じることなくハルバードの鋼鉄の柄を切断し、そのまま重騎士の鎧までも切り裂いた。
フルブレートメイル

「——っ!？」

が、おかしい。

この感触は明らかにおかしいぞ。

魔弾で遠距離攻撃を始めた時から、武技でガードすることもないければ、集団で防御魔法を展開する様子も無かったことから違和感を覚えていたが、今の一撃で確信した。

「コイツら、重騎士じゃない……」

「「え？」」

呟きに、フィオナとリリィが攻撃の手を休めず反応する。

俺もさらに迫った重騎士‘モドキ’へ向かって再び武技を叩き込む。

やはり、鋼鉄製で魔法の防御効果も秘められているはずの全身鎧フルプレートメイルがあっさりと両断される。

俺にはこの切り裂いた感触に記憶がある、そして、斬った断面から一切血や臓腑が吹き出ないことで、完全に確信に至る。

「ライトゴーレムだ！」

この兵のエリートとは思えない単調な挙動に、やけに薄い装甲の鎧。

かつて俺が機動実験で最初に戦うことになった因縁のある存在、それがライトゴーレムだ。

「こういうコトだ……それじゃあコイツらは見せ掛けだけの人形で——」

まさか、アルザスの背後に重騎士部隊と思わせて展開させたのは、俺達を防壁から撤退させるための囮、いわば擬兵！

そこに思い至った瞬間に、

「おい、ヤバいぞ！ 止まれえ！！」

ヴァルカンの大声が響いた。

「なにっ、あれは——有刺鉄線だど！？」

視線を正面に向けると、街道を塞ぐように茨の茂みを思わせる黒い棘が敷き詰めてあった。

黒い輝きを放つソレは、アルザスの防壁で敵の歩兵を押し留めてくれた有刺鉄線と全く同じ形状。

そして、有刺鉄線は歩兵だけでなく、馬の足も止めることの出来る効果を秘めていることを思い出す。

ヴァルカンはいコンの手綱を引き、黒い有刺鉄線の茂みへ足を突っ込む前にどうにか静止した。

だが、こちらは合計で8人乗っている馬車、急に止まれるはずもなく、ほとんど減速することも出来ずに敷き詰められた有刺鉄線へ飛び込んでゆく。

「ヤバイ——」

これは確実に横転すると思い覚悟を決めて馬車から飛び降りようかと判断した次の瞬間、

「うおっ、何だっ!？」

突如としてロープのフールドを掴まれて、俺の体は空中へと投げ出される。

何故だ、まだ馬車は吹っ飛んでない、というか——今この瞬間、俺の眼下で有刺鉄線に足と車輪をとられて横転する馬車が見えた。

瞬時に頭が事情を把握できなかったが、数秒の後に有刺鉄線を越えた地面へと降り立った時に、ようやく理解が追いついた。

「……リリィか」

「ごめんね、クロノを助けるだけで精一杯だったわ」

キラリと背中の中を羽を瞬かせて、隣へ並び立つ少女姿のリリィが上目遣いで俺の顔を覗きこんできた。

「いや、助かったよ、ありがとう」

「うふふ、どういたしまして」

馬車が横転することを見越して、屋根にいたリリィがそのまま飛び立って俺を掴んで救出してくれたのだ。

「他のみんなは——」

「冒険者だもの、死にはしないでしょ」

見れば、黒い有刺鉄線の茂みの中から、あるいは倒れた馬車の荷台から、人影が次々と立ち上がる。

「おい！ 大丈夫か!？」

「……酷いですリリイさん、私を見捨てましたね」

「ごめんねー、私もイキナリすぎて一人助ける余裕しか無かったの」
のっそりと黒い鉄の茨より身を起こしたフィオナは、脱げかけた帽子を片手で直しつつリリイへ抗議の声を挙げた。

俺だけリリイに助けられて申し訳ない気持ちだが、とりあえず大した怪我は無さそうで一安心だ。

不幸中の幸いか、有刺鉄線に巻き込まれて横転したのは俺の乗っていた馬車だけで、後続の馬車はギリギリで停車することはできていた。

「いや安心してる場合じゃねえ」

だがしかし、結構な数の敵に囲まれ、さらに街道は有刺鉄線で封鎖されている為に、すぐ突破することも出来ない。

結局こちらの行軍はここで見事に足止めを喰らってしまった。

モタモタしていると、これをチャンスと見て天馬騎士や無理を押して背後のレーヌ川を渡った歩兵部隊が増援にやってくるかもしれない。

「仕方無い、この場の敵を全部倒して行くぞ！」

敵は重騎士の姿をしているがライトゴーレムだ、ただの歩兵並の力しかない、倒せない敵じゃない！」

有刺鉄線の向こう側で、ゾロゾロと馬車から降り立つ冒険者達は、すでに各々の得物を手に素早く並んで警戒態勢を取る。

突発的な事態にうろたえず冷静に対処するのは、流石冒険者といったところか。

「おらクロノ！ テメーもサボってないでさっさとこっち来やがれ！」

ヴァルカンが大剣を振りかぶって、俺に発破をかけてくる。

「おう、すぐそっちに——」

「いやいや、待てよ、テメえはコッチだ」

不意に横からかけられた男の声。

「……誰だ」

声の方へ向けば、街道脇に広がる森、その木の一本に背中を預けた若い男の姿が目に入った。

茶色の長い髪を逆立たせ、大きくはだけさせて衣服を纏うそのだらしない格好、鍛えられた胸筋を除かせる胸元には、十字のネックレスが銀色の輝きを放つ。

その風体はこの異世界にあっても不良ヤンキーといった感じを覚える。

だが、その腰にぶら下げる長剣と、見たことの無いタイプの短杖ワンドを手にしているあたり、この男が戦いを生業にしている傭兵なのだと瞬時に悟らせる。

殺気は感じられないが、何とも言えない嫌な雰囲気漂う。

「おいおい、誰だはねーだろ誰だはよう、散々テメーの世話してやったじゃねえかよ、薄情なヤツ、ってアレか、あん時は、マスクつけてたから俺の顔なんざしらねえか、ひやははは！」

癪に障る笑い声を上げる男、だが、そんなコトは問題じゃない、コイツは今、何て言った？

「お前、まさか……」

「へへへ、折角パンドラまで逃げてきたのに、残念だったなあ、49番、テメエを迎えにきてやったぜえ？」

第132話 実験部隊（ハンドレッドナンバーズ）

驚愕と怒りがごちゃ混ぜになって心の中をかき乱す。

あの白いマスク共に、好き勝手に体を弄くられ、ワケの分からぬまま毎日モンスターと戦わせられる苦痛の日々は、未だ色褪せる事無く鮮明に俺の脳裏に焼きついている。

それでも、リリイと出会ってからの生活で、心の平穏を取り戻した。

それは十字軍がイルズ村を滅ぼし、村人達を逃がす為にこうして戦った今であっても、あの実験施設のマスクとは、そこまで直接的なものだと思えることは無かった。

だが、

「なあおい、女連れとは随分と良い生活してたみてえじゃねえかよ、それにい、こんなゲロカス魔族共引き連れて必死こいて戦ってよお、そんなにこの国が大事か？ ああ？」

あの白マスクの内の一人を名乗る、この男は現れてしまった。

何故、どうして、今更——そんな疑問は、会話の駆け引きも全て忘れて、そのまま口から出る。

「俺を連れ戻しに来ただと、どういうことだ？」

「異邦人が馴れ馴れしく人間様に口きいてんじゃねえぞオラ！」

——って、言いたいとこだが、いいぜえテメえは特別だ、お喋りに付き合ってやんよ」

気だるげな様子で歩きながら、街道の真ん中へと進み出る男。

（クロノ、こいつ殺しちゃっていい？）

隣に立つリリイがテレパシーを通じて語りかけてくる。

（いや、待ってくれ、ヤツには聞きたいことが山ほどある。

時間が無いのは分かっちゃいるが……少しだけ、付き合ってくれないか）

（ん、クロノがそういうなら、いいよ。

あ、でも先に言っておくけど、私もう――)

変身していられる時間が無いの、という言葉が伝わると同時、

「あっ、リリイ!？」

眩い光に包まれ、少女の姿をしていたリリイは、

「クロノー」

再び幼女の姿へと戻ってしまった。

「ぶははは！　おいおい何だよそれえ、何でガキんなっちゃってんの？　もったいねー」

ゲラゲラと無防備に笑い転げる男、その不快な視線から逃れるように、リリイが俺の足元にしがみつくようにして隠れる。

「うーっ！」

リリイが露骨に不機嫌な顔を男へ向ける、まるで威嚇する猫のようだ。

「俺の質問に答えろ」

「偶然だよ偶然、テメエ一人追っかけるためにパンドラ大陸(しんなどこ)までくるかよ。」

けど、こうして見つけちゃったら捕まえるしかねーだろ？　これまで脱走者ゼロだったのによお、テメーの所為でケチがついちまったんだぜ」

偶然か、どこまで本気で言っているのかは分からないが、確かにコイツがここにいるのは俺の追手だからというよりは、別の目的でやって来たと考えた方が自然だ。

「へへ、そんな難しい顔しちゃってよ、テメーはホントに自分のコトも俺らのコトも分かってねえみてえだな」

「お前らの目的は何だ？　何故俺が、いや、俺達をこの世界に召喚した？」

「けどお、そこまで説明してやる義理はねえな、知りたきゃエリシオンにいるジジイに直接聞きに行けよ。」

テメーらみてえなガキを全部で何人玩具にしてきたとか、何から何まで教えてくれると思うぜ」

心底おかしそうにニヤけた笑みを浮かべる男、くそつ、どこまでもふざけやがって。

「そう怖い顔すんなよ、大人しく捕まってくれるってんなら、もうちよいサービスして俺の知ってるコト教えてやってもいいぜ——」

その時、左右の茂みに潜んでいた何者かが路上へと飛び出す。

深くヘルムを被っているという共通点を除けば、革や金属の軽鎧とバラバラな格好、恐らく、一昨日に攻撃を仕掛けてきた傭兵団なのだろう。

体つきから判断して、男二人、女二人の合計4人。

素早く男の元へ集うその動きは無駄が無く、見た目通り凡庸な傭兵ではない事を示している。

「——例えば、コイツらがなんつって命乞いしたか、とかな」

男が一つ指を弾くと、その音に反応して4人の傭兵は頭部を覆うヘルムを脱ぎ捨てた。

「この下衆が……そいつらが、新しい実験体ってわけかよ」

年齢はそれほど俺と変わらないだろう若い4人の男女。

ヘルムを外し露わとなったその顔たちと黒髪黒目は、間違いなく俺と同じ日本人であることを現していた。

「実験番号100番台で構成した実験部隊だ、ホントは俺じゃなくハンドレッドナンバーて49番、テメえがこのガキ共を率いるはずだったんだぜ？」

100番台だと、あれからさらに50人以上も犠牲者を増やし続けたってのかよ。

許せない、が、自分が逃げるだけで精一杯で、あの実験施設や組織を潰すことなど考えもしなかった俺が、彼らにかけられる言葉などないのかもしれない。

もっとも、完全に自我を失って人形同然になってしまった彼らに、俺の言葉など決して届くことは無い。

4人の目には光が無く、暗く淀んだ底なし沼のような黒に彩られており、頭部には見るも忌々しい、例の白いリングがしっかりと装着されている。

あれをつけた経験があるからこそ分かる、彼らはもう二度と自分の意識を取り戻すことができないと。

「で、どうよ？ こっちに降伏すりゃあテメーは元々の計画通り、ハンドレッドナナバース実験部隊の隊長に目出度くご就任だ、勿論、この『思考制御装置』エンゼルリング付きでな」

男が不快なニヤけ面で、隣に控える少女の頭にあるリングを指先でつついた。

『思考制御装置』エンゼルリングなんて言うのかよ、ふざけた名前をつけやがって、益々胸糞が悪くなる。

「断る、お前も、この実験体達も全員、この場で殺す」

右手の鉈と左手のタクトを構える。

これ以上は、会話をしている余裕は無い、それに向こうもこれ以上は話す気などないだろう。

「おいおい、冷たいねえ、テメーら、ニホンジン」とかいう同じ種族なんだろう？ 助けてやろうとか思わないワケえ？」

「お前が一番分かってんだろ、そんな状態、でリングを外したって、もう意識も記憶も消滅してて元には戻らないってな」

そもそも、自分の身一つ守るので精一杯な俺が、彼らまで救おうなんて思えるほど、自分の力を過信しちゃいない。

この状況下において、敵、に情けをかけていられる余裕などありはしないのだから。

ならば、これ以上このクソ野郎の良い様に使われないよう、一息に殺してやるのが情けってものだ。

「ucci、どこまでも面倒臭えヤツだな、仕方無え——封印解除だ、アンロック49番の四肢をぶっ飛ばして俺の前に連れてこい」

「了解」

その言葉と同時に、4人の実験体が纏う装備が黒い粒子のように分解されてゆき、中空に霧散してゆく。

消滅する鎧は、そのまま灰色のローブに置き換わり、あっという間に全員が同じ姿となる。

「「戦闘準備——」」

右手を翳すと、鎧が消えたのとは逆に、黒い粒子が収束してゆき、瞬く間に黒色の長剣ロングソードが形成される。

左手を翳せば、剣と同じように、黒い粒子がタクトを形作る。

そして、極めつけは、彼らの背後には手にする長剣と同じものが3本、空中に固定するものも無く浮遊する。

「——完了」

「俺と同じ黒魔法、か」

まるで俺のこれまでの行動を全て見ていたかのようだ、ここまで同じスタイルの武装をするとは。

本当に全く同じ技を使うというのなら、1対4の単純な力比べになる。

いや、あのニヤけ面のふざけた男を加えるなら、敵の数は5人。

「クロノ！ リリイも頑張るの！」

「そう、だったな——」

グイグイとローブの裾を引っ張って自己主張をするリリイの姿に、思わず笑みがこぼれる。

そうさ、俺には心強い相棒がいるのだ、孤独に戦っていた実験施設にいた頃と違ってな。

今更、アイツらが実験体を引き連れて現れたからなんだというのだ、これ以上無いほど憎しみをぶつけるに相応しい相手じゃないか。

「——行くぞ」

俺の前にこのこ面だしたこと、全力で後悔させてやる。

「うおらあああ！」

ヴァルカンの大剣が、見せ掛けだけの全身鎧を紙細工フルプレートメイルのように叩き潰しながら、ライトゴーレムを一刀の下に斬り捨てる。

「はっ、ホントに手ごたえがねえな」

つい先ほどまで真に鋼の防御力を誇り、エリートで構成される重騎士部隊と死闘を演じていた彼にとって、この姿が同じなだけのニセモノは驚くほど拍子抜けする強さでしかない。

「おい、あんまり突出しすぎないでくれよヴァルカン、これでもゴブリンよりや強えぞ、数もいるしよお」

そのまま単身で敵の渦中に飛び込んでいきそうなヴァルカンと同じパーティメンバーの獣人の戦士が引きとめる。

「悪い悪い、さっきまでそういう戦い方だったからよ、つい、な」

鋭い狼の目線がちらりと辺りを見渡せば、もう随分長いこと見慣れた『ヴァルカンパワード』の基本的な戦闘配置にメンバーがついていることが分かった。

ただ、突撃部隊へ組み込まれ、重騎士部隊との激戦の最中で命を落とした、もう一人の戦士、彼を欠いた状態で陣形を組むのがメンバーに悲しみを誘う。

「しかし、こんな状態じゃフツーに共同の掃討クエストと変わんねえな」

辺りに注意を向ければ、自分達と同じように、他の冒険者達も本来あるようにパーティ同士でより集って、前衛後衛と素早く配置についている。

戦士中心のパーティは、突撃部隊の損耗率の高さの所為で半分ほどにまで数を減らしているものも見られるが、そこはソロの冒険者や他のパーティで上手く人員を補い合っている。

クエスト中に、それも敵を前にしてスムーズに協力体制をとるには、相手の一方的な思惑や騙しあいといった危険性もあるが、ここにいるメンバーはアルザスでの戦いを通して、少なくともこの緊急クエスト中においては信頼できるほど結束力が高まっている。

故に、互いが自然に背中を預けることに不安を覚える事無く、目の前の敵に集中し、素早い対処を可能としていた。

「よっしゃあ、さっさとこの人形共を片付け——っ！」

反射的に自分に向けられた殺気と魔力の気配に、大剣を跳ね上げ

て、刹那の後に飛来するであろう攻撃をガード。

「コイツは!？」

果たして、直感通りに飛んできた敵の攻撃魔法は、見事に『牙剣・悪食』の刀身に防がれ、魔法を構成する魔力ごと剣に吸収される。

だが、悪食の刃を一瞬叩いた硬質な攻撃の感触、そしてなにより高速で飛ぶ小さな弾丸の黒い火線を確かにヴァルカンを見た。

「クロノの魔弾^{バレットアーツ}じゃねえか！」

アイツ、まさかトチ狂って誤射しやがったか、などとは思わない。何故なら、その攻撃を放ったであろう敵は、すぐ目の前に現れたのだから。

「はっ、ふざけやがって、オマケに魔剣^{ソードアーツ}も使えるってかあ！」

大きな重騎士の姿を模したライトゴーレムの肩を足場に空中に飛び上がった敵の姿は、ローブの色が灰色であるという点さえ除けば、奇しくもクロノと似たような姿と装備であった。

右手に黒い長剣^{ロングソード}を持ち、左手には灰色のタクト、そしてその背後には手にする剣と同じ黒色の刃が2本、浮遊するように術者の後についている。

上方から真っ直ぐヴァルカンに向かって斬りかかる灰色のクロノ・モドキ^{モドキ}は、己の刃と相手の刃が合わさるタイミングを見越して、2本の黒化剣を撃ち出す。

「ちっ、面倒くせえ攻撃しやがってえ——」

右手一本で刃を振るう相手を、放られたボールをバットで打ち返すような勢いで大剣がフルスイングされる。

リーチの長い悪食の刃が先に相手へ到達し、そのまま剣が交わるが、一瞬の後にパワーで勝るヴァルカンが弾き返す。

その直後に飛来する2本の黒い剣は、『孤狼・ヴォルフガンド』の加護により全身に纏う風を利用して、そのまま体捌きで華麗に刃を受け流す。

人狼の巨体を刺し損ねた剣は、片方は即座に術者の下へと戻る為に宙を舞うが、もう片方は返す刀で振り下ろされた大剣の一撃を腹

に喰らって、その黒い刀身を粉々に粉碎し使用不能状態へ追い込まれた。

「退きやがったか」

目の前にはすでに灰色ローブの術者の姿は無い、最初の一撃で弾かれたままに後方へ飛び、再び人形の群れの中へ、暗殺者のように姿を隠した。

一旦距離は開いたが、ヴァルカンが油断無く大剣を構え、視線だけで左右を確認し、周囲の状況を把握する。

（おいおいマジかよ、このクロノ、モドキ、結構な数が潜んでるぞ）
見れば、自分と同じような方法で攻撃を受ける冒険者の姿が嫌でも目に入った。

自分はその実力でもって一合の打ち合いで引かせたが、他の者はそうそう上手くは行かない。

単身で3つの刃を同時に操る、その攻撃方法に慣れている者などいない。

ランク3の者でも僅かながら手傷を負う、厄介な攻撃だ。

「おい気をつけろ、クロノと同じ術を使うヤツが混じってやがる！」

「「了解！」」

「ったく、何なんだかこの面倒くせえヤツらは、クロノの関係者かよ……」

そう愚痴を吐きながら、大剣を振り上げるヴァルカンには、黒い有刺鉄線の向こう側で、そのクロノがもう二度と出会うことはないと思っていた‘関係者’と対峙していることなど、知る由も無かった。

しかし、どうして他の実験体は悉く俺よりシールド張るのが上手いのだろうか、俺に防御魔法の才能が無いのか？

それはともかく、現れた『ブラック・ウォール暗黒防壁』なるシールドは、詠唱した術者の数と同じく二つ、魔弾を防ぐ為の正面と、リリィの攻撃を防ぐ為の頭上だ。

ここから見れば、いきなりヤツら全員が黒い長方形の箱に閉じ込められたように見えた。

フルバースト
「全弾発射！」

「ええーい！」

相手が防御魔法を発動させた次の瞬間に、俺達の攻撃が撃ち出される。

千を越す黒い弾幕と、鉄槌のように頭上から迫る白い光の柱、二つの黒と白はシールドを飲み込むように眩い閃光と衝突音を響かせる。

ガシャン、とガラスを砕くような音と共に、『ブラック・ウォール暗黒防壁』は粉々に粉碎し消滅する。

「綺麗に相殺させられたな」

シールドは完全に破ることは出来たが、一発の弾丸も僅かな光の熱も、ヤツらには全く届いていない。

いや、ここはシールドが無傷で攻撃を防がれなかっただけ良しとするべきか。

オートキラー
「自動剣術」

暗黒の壁が消失するとほぼ同時、今度は女が二人、右手の剣と背後に浮かぶ剣を振り上げて突撃を仕掛ける。

しかし『自動剣術』とは懐かしい響きだ、機動実験やってた頃は『ソードアーツ魔剣』じゃなかったからな。

そして、俺が使用していたのと全く同じ効果、つまり剣だけが動いて斬りかかって来る。

手にする剣を除いて3本×2、合計6本の刃先が向く方向は全て同じ、

「リリィ狙いかよ——」

頑丈な体を持つ俺よりも、子供の姿をしたリリィの方が倒しやす
いと判断したのか、それとも光の柱の攻撃力を危険とみたか。

どっちにしろ、俺がやることに変わりはない。

「——俺の前でリリィに手え出してんじゃねえ！ 魔剣！」
ソードアーツ

矢のように空を切って飛来する黒化剣を、俺が操作する10本の
剣でもって迎え撃つ。

1本につき黒化剣を2本飛ばし、確実に抑える。

敵が飛ばした剣の数は6、10を2ずつ分ければ5組、必然的に
1本を撃ち漏らす計算になるが、

「おらああ！」

気合一閃、すっかり俺の相棒として定着した感のある呪いの大鉈
でもって、叩き落す。

黒色魔力でコーティングされた無機質な黒化剣と同じように、漆
黒の刀身を持つ『呪怨鉈「腹裂」』であるが、武器としての性能は
こちらの方が圧倒的に上だ。

禍々しい黒いオーラを放つ鉈の凶刃は、リリィへ向けられた殺意
の黒化剣を木っ端微塵に破碎した。

（リリィ、一歩下がってろ）

（うん！）

テレパシーを通じて、前衛、後衛の変形をスムーズに行う。

いくら新人冒険者だったといっても、3ヶ月近い期間をリリィと
一緒にクエストをしてきたのだ、この程度の連携はすでに慣れてい
る。

リリィを狙う女の実験体二人から、俺の背後にかばうように一歩
前へと出る位置取り。

俺が前衛に出たことに対し、何の感情も移さない黒い瞳は、やは
り動揺することもなく、そのまま真っ直ぐ突っ込んでくる。

「一閃」
スラッシュ

全く同じタイミングと動作で発動する『一閃』
スラッシュ、武技までしっか

り習得しているとは驚きだ、俺には教えてくれなかったじゃねえかよ。

だが、武技を使えるのはお前らだけじゃない。

「黒風！」

武器性能、武技の威力、どちらも俺の方が上、一振りで相手の一闪二つを同時に迎撃することは十分可能、寧ろ二人の女を押し返すだけのパワーがある。

けたたましい金属音をたてながら、3つの黒い剣戟が火花を散らして交差。

予測通り、細身の女は二人とも黒風に力負けし、一步、二歩と後ずさる。

体勢を崩す、まではいかないが、隙としては十分だろう。

「やあっ！」

すぐ後ろから聞こえる可愛らしい掛け声と共に、俺の背中から追いつくように光の弾が2つ飛んでゆく。

リリーの自動追尾能力を持つ光弾は、上手く俺を避け、敵である二人に向かって寸分の狂い無く迫る。

相手に回避も防御もさせる時間を与えない完璧なタイミング。

「ライフル「黒弾」」

だが、光弾は前方から飛んでくる黒い弾丸の連射によって撃ち碎かれる。

シールドを張って後ろに控えていた男二人組みによる防御射撃。

どうやら向こうもそれなりの連係プレイができるようだ。

「サンダー「黒散弾」」

俺はさらに追撃を仕掛けようと一步踏み込むが、二人の女は即座にバックステップで距離をとりつつ、こちらに向けて黒い散弾で牽制してきた。

「シールド「くっ、黒盾」」

その場に踏みとどまって防御、攻撃範囲は広いが威力に劣る散弾は、俺のシールドに僅かなヒビをいれるに留まり、碎けることは無

い。

それにしても、コイツらはどこまで俺の黒魔法をパクれば気が済むんだか、せめて散弾くらいは他のネーミングにしろよ、意味分かって言ってるのか。

「……仕切りなおし、か」

それよりも、リリイにアタックをかけた二人の女はすでに男二人が立つ元の位置にまで後退している。

彼女達の手にする剣は、黒風をモロに受け止めた所為で刃は欠け、ヒビが入っている。

エンチャント

下級の付加でしかない黒色魔力のコーティングは、衝撃を受けると剥がれてしまうのは俺も同じだが、ヤツらの方は俺よりもさらに脆いようだ。

剣に箆める黒色魔力の量をケチったか？

なんて思っていると、二人は剣を放り投げ、新たな剣を黒い粒子で構成して装備する。

なるほど、換えはいくらでもあるってことか。

ついでに、あの黒い粒子は単純に黒色魔力で剣を創っているのではなく、空間魔法で黒化剣と呼び出しているのだと、見ていて何となく分かった。

ああやって手元で物体を引き出すことができるとは、俺の『影空間』ゲイトよりも、一段階上のレベルにある。シャドウ・

直接的な攻撃力や魔力量は俺の方が上回っているようだが、他の部分では向こうの方が上のスキルを持っている、油断は禁物だな。

(クロノ！)

(どうしたリリイ？)

頭の中に響く声に耳(?)を傾けつつ、4人の相手からは注意を逸らさず警戒し続ける。

(あのね、テレパシーで繋がってるの！)

(……アイツらのことか？)

(うん！ それで、見えなくてもみんなの動きがわかるんだよ！)

なるほど、向こうの連携プレイや、寸分違わず同じタイミングで攻撃を仕掛けるのには、そういうカラクリがあるってことか。

それがヤツらの黒魔法なのか、あのリングがテレパシー機能付きなのか、それとも通信機を脳内に埋め込んでいるのかは分からないが、どちらにせよ厄介な能力ではある。

単体では弱いモンスターだって、群れを組むことで1ランク上の敵を狩ることだってあるのだ、直接脳内でやり取りできるってのは、集団戦闘においてはこれ以上ないほどのアドバンテージとなる。

(妨害^{ジャマー}できるか?)

ならば、それを無くしてしまえば大きなマイナスにもなるということ。

俺より後の実験体ということは、少なくともヤツらが‘生産’されてからそれほど月日は経っていない、テレパシーが無い状態で連携できるほどチームプレイを高める訓練期間もないだろう。

(うー、ゴメンねクロノ、今はできないの、とつても時間がかかっちゃうの)

(どれくらいかかる?)

(1分くらい……でも、『^{マインド・ジャマー}交信妨害』を使っていると、リリイ他に何も出来なくなっちゃう)

俺一人が壁役として1分は稼げるだろう、だが、リリイが攻撃に回れないとすれば決定打にかける。

テレパシーを妨害された4人なら、俺1人でも片付けることは十分可能だが、積極的に攻勢に出た場合、妨害^{ジャマー}を行使し続けるリリイを誰が守るかという話になる。

向こうは向こうで100体近くのライトゴーレムと実験部隊相手に戦闘中、有刺鉄線を超えてこっちまで増援にくることは期待出来そうも無い。

とすると、こっちが取れる最善策は、敵のトップと思われるあのいけ好かない元マスクヤロウをさっさと倒してしまうことか――

「おぉー、流石はジジイが入れ込んで創っただけあるなあ49番、

4人ってのはちょっと舐めすぎだったか？」

「ならお前も戦ったらどうだ、俺の代わりにリーダーをやってんだろ」

「ただの上司みたいに思われんのは心外だなあ、神に選ばれた人間様が奴隷以下の異邦人をありがたくも、使ってやってる、んだぜ？神は人の代わりに動くことは無え、人の代わりは人が、なら異邦人の代わりは異邦人にさせるしかねえだろうが――」

男が一つ指を弾くと、左右の森からさらに2人ずつ、合計4人の増援が出現する。

装備は同じだが背中に負う黒化剣は2本、最初の4人よりは多少性能が落ちているのだろう。

しかし、単純に数が倍になるのは拙い、8人全員がテレパシーで繋がっていることを思えば、そのチームワークは脅威だ。

「まあ、神を信じない野蛮で低脳な異邦人如きには理解できねえ話か」

男の不快な高笑いを聞きながら、俺は決意した。

やはり、この男を真っ先に殺すしかないな、と。

第133話 エレメントマスターVSハンドレッドナンバーズ（1）（後書き）

クロノと幼女リリィがコンビで真っ当に戦闘するシーンは、第二章のゴブリン退治以来だったりしますね。

第134話 エレメントマスターVSハンドレッドナンバーズ(2)

俺とリリイの正面には4人、左右に2人ずつ、後ろには黒い有刺鉄線と、壁を背に8人に囲まれたような形となる。

問題はコイツらの包囲をどうやって突破するか。

「と言っても、強行突破以外に思いつかないんだが――」

ズドドドン！

「うおっ、なんだ!？」

突如として、右方から爆炎が巻き上がり、2人の実験体を呑みこんだ。

立ち込める煙の内から、見慣れた黒い影が飛び出した。

「私もパーティーメンバーなのでから、混ぜてもらわないと困ります」

「フィオナ！ いいとこに來たぜ！」

赤い短杖ワンドを手に、いつもと変わらぬ表情で悠然とこちらへ合流するフィオナ。

「なにやら、クロノさんと因縁のありそうな相手ですけど、倒すことに代わりはないのでしょうか？」

「ああ、コイツら全員始末してから聞かせてやるよ」

「分かりました」

フィオナの不意打ちで右の二人が一気に片付いた。

残る実験体は6人、これなら何とかいけそうだ。

「リリイ、フォオナ、周りのヤツらを頼む、俺が頭を潰す」

「うん、任せてよクロノ！」

「了解です」

力技で敵中突破するのは俺が最も適任だ。

幼女状態のリリイと、魔力全開ではないフィオナの二人組みは、

実験体6人を倒せずとも防ぐには十分な力はあるだろう。

俺がさっさとあのいけ好かないヤンキー野郎を片付ければ、根本的に指揮系統は崩壊する。

その後は着実に実験体達を始末すればいいし、逃げるのなら無理に追わずともいいだろう、俺たちはこの場を脱することが出来さえすれば良いのだから。

もしかしたらもっと良い作戦があるのかもしれないが、他の策を考える時間を相手は与えてくれそうに無い。

「行くぞ！」

双方、動くのは同時。

「『黒弾』」
ライフル

前方と左方から放たれる弾丸と共に、再び2人の女と、左からは男が1人、剣を構えて攻撃を仕掛けてくる。

「黒盾」
シールド

シールドで正面からの銃撃を防ぎつつ、身を低くして一気に駆け出す。

前に陣取る4人はとりあえず俺の相手、左の2人はリリィとフィオナに完全に任せる。

「はああああ！」

弾丸をシールドで受け止めつつ、そのまま真っ直ぐ駆け抜ける。

こんな銃撃程度で俺の足を止めることは出来ない。

例えばシールドが無くとも、『魔弾』
バレットファースト・エンプレスよりも硬度の低いヤツらの『黒弾』
ライフルでは体に直撃しても『悪魔の抱擁』
バフオメット・エンプレスを貫くことは出来ない。

ただ、防弾ベストを着て銃弾を受けると同じように、それなりに衝撃は伝わってくるので、あまり好んでやろうとは思わないけどな。

目の前には、先と同じように手にする剣と操る3本×2、全部合わせて8つの刃を俺に向ける実験体の少女が2人。

改めてその顔をみると、クラスメイトを思い出し動揺しそうになるが、その郷愁も同情も悲哀も全て振り切り、戦いに集中する。

ソードアーツ
「魔剣――」

10本の内、6本の黒化剣を用いて、まずは相手の『自動剣術』を防ぐ。

残りの4本は、彼女達の先に控える援護役の二人に向けて投擲。魔剣の操作をする傍らで、シールドを展開させたまま、足により一層の力と魔力を籠めて猛ダッシュ。

銃撃によって前面にヒビ割れの走るシールドだが、硬さは申し分ない、このまま体当たりを決めてやる。

重騎士の大盾ほどの圧力はないが、二人の足を止めるには十分だ。
タワシールド
スラッシュ

「一閃」

「――だあああああ！」

黒化剣の二連撃によりシールドは音を立てて碎け散る、だが、

「――っ！」

「っ……」

見事に細身の少女二人をシールドタックルで跳ね除けるのに成功。片方は一歩後ずさるだけに留まるが、もう片方はたたらを踏んで明確な隙を見せた。

「黒風」

容赦なく、体勢を崩した少女に向けて武技を振るう。

横薙ぎに振るった黒い斬撃は、剣を持つ左腕を二の腕から斬り飛ばす。

胴を両断するつもりで放ったのだが、こっちの攻撃を瞬間的に反応し回避したようだ。

スモーク
「黒煙」

俺は追撃を仕掛けるよりも、目くらましを選択。

そもその目的は敵のヘッド、今この場で二人にトドメを刺すよりも、スルーして先に進むほうが重要だ。

それに、片方は左腕が切れたからと言っても、恐らく痛覚はほとんど感じてないだろうから、戦闘継続力はほとんど落ちていない。

「じゃあな、先に行かせてもらうぜ」

黒い煙幕につつまれる2人に背を向けて、再び駆け出す。

背後から散弾と思われる弾丸が飛来してくるが、構わず走り続ける、ここから先はリリイとフィオナが2人を止めてくれるだろう。

次の相手は実験体の男2人組み。

「「????? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ????」」

真っ直ぐ向かってくる俺の動きを見て、意思の無い頭でもこちらの狙いが分かったのだろう。

すでに『黒弾』^{ライフル}による援護射撃を中断し、詠唱に入っている。

彼らの傍らには折れた4本の黒化剣、先に投擲したヤツを破壊したのだろう。

まったく、重騎士部隊との戦いで黒化剣を消費した所為で、今出してる10本で打ち止めだ、貴重な残りの内4本も壊しやがって。

まあ、お陰でさっきの少女2人を相手にした時に、コイツらから撃たれることはなかったんだが。

「――戻れ」

相手の『自動剣術』^{オートキラー}封じに使っていた6本を手元に呼び戻す。

操作ははつきり目に見える範囲なら問題なく操れる、ついでに言うなら目視しなくても操作はできるので、こうして背中越しに呼び戻すことも可能だ。

「――『暗黒防壁』^{ブラック・ウォール}」

黒化剣が戻ると、目の前に展開されるのは、最初にも見た漆黒の防壁。

俺とリリイの同時攻撃を相殺し防ぎきった防御魔法だ、俺一人ではこれを破るには火力不足だろう。

「けど、ここまでくれば関係無い」

『暗黒防壁』^{ブラック・ウォール}の高さは目測4メートル前後、普通なら破壊して進むか、迂回するしか先に行く方法は無い。

だが、俺の身体能力を舐めてもらっては困る！

「はあっ！」

土の地面が軽く陥没するほど強い踏み込みと共に、垂直の黒壁に向かって跳躍。

一気に3メートルほど飛び上がった俺は、そのまま壁面を蹴って、さらに上昇。

ジャンプの頂点に達すると、そこは丁度壁の上。

軽く手をかけて、そのまま向こう側へと身を乗り出して防壁を越える。

「――貫け」

背中には6本の黒化剣、地面に立つ2人に向かって投擲。

そして、街道の真ん中に棒立ちのままにいる元マスクヤロウの男に向かって左手のタクトを向ける。

「おおー、やるねえ49番」

「その名前で俺を呼ぶんじゃないが、不快な気配を放つ男に向かって、

空中で俺と男の視線が交差する。

相変わらず殺意は感じられないが、不快な気配を放つ男に向かって、

「俺の名は――」

瞬間的に出現する黒い弾丸。

向かう先は当然、十字を掲げる狂気の研究者、その片割れである男。

「クロノだ！」

全身全霊で、黒き殺意の奔流を解き放つ――

第135話 妖精と魔女（1）

リリイとフィオナは黒い弾丸の雨から逃れるように、街道から森の中へと飛び退いた。

「遮蔽物の無い街道で、あの攻撃は受けたくないわよね」

「おやリリイさん、お目覚め、ですか？」

鬱蒼と生い茂る緑の森の中を、眩いエメラルドに光る球体と黒衣の魔女が高速で駆け抜けてゆく。

「貴女じゃ子供の私と上手く連携とれないでしょ、コレでも無理して意識戻してるんだから、感謝しなさいよね」

オラクルファイルド妖精結界の光越しに、幼い姿ながらも鋭い視線をフィオナへと送るリリイ。

「それはわざわざありがとうございます」

あまりありがたくない謝意を述べると同時に、フィオナが『カスタム・ファイアーボール』を一振りする。

注ぎ込まれた炎の原色魔力に反応し、短杖に組み込まれた術式の^{ワンド}効果通り、一定の威力を持つ火球が形成される。

だが、フィオナによってカスタマイズされた『ファイアーボール』は、本来なら単発でしか撃ち出すことの出来ない『^{イグニス・サギタ}火矢』を、同時に複数形成することを可能にする。

連続的に撃ち出された火球は、枝葉の向こう側からミサイルのように飛来する2本の黒化剣を見事に迎撃し、爆発によって黒色魔力のコーティングを散らされた黒化剣は制御能力を失った。

「人形、共は全員こっちについてきてるわね」

「1，2，3……全部で9人いますよ、どうして増えているんですよるか？」

視界には灰色ローブの姿は見えないが、微細な魔力を感知したフィオナは正確に敵の数を把握している。

「貴女が来たから、向こうも増員したに決まってるでしょ。」

そんなことより、あのチャライ男、クロノと一騎打ちする気のよ
うね」

自ら部下を遠ざけるとは、随分とこちら側に都合の良い選択だが、
「好都合ですけど、そんなに自信があるんでしょうかあの人」

どうやらクロノと一対一で戦うことを向こうも望んでいるように
思える。

「あるんでしょ、多分、生まれてから一度も挫折したこと無いタイ
プよ、アイツ」

「見た’んですか？」

「頭の中なんか見なくても、なんとなく分かるでしょ」

「そうですね、学校にもいました、ああいう人——と、この辺でも
ういいんじゃないですか？」

元より逃げているつもりではなく、戦いの舞台を森に移すことが
できればそれでよかった二人は、適当なところで足を止めた。

「思ったより早く追いついてくるじゃない、流石はクロノと同じ強
化実験を受けただけあるってところかしら？」

木陰から飛び出してくる4つの人影。

黒化剣より放たれる武技の同時攻撃がリリイとフィオナを襲う。

「——『一閃』」
スラッシュ
オラクルワールド

子供状態の妖精結界は、当然少女状態に比べて防御力は劣る、ま
ともに受けるのは危険。

フォースエッジ
「『光刃』」

全身を球状に覆う結界の表面から、光の原色魔力が高密度に圧縮
されて形成した、眩い光の刃が二つ出現。

およそ1メートルの白熱する光の刃は、レーザー以上の威力で触
れる物全てを焼き斬るのだと一目で理解できた。

リリイが小さな腕を振るう動きと連動し、2本の『光刃』
フォースエッジが結界の表面を高速で滑る。

二人の実験体が同時に繰り出す『一閃』
スラッシュと『光刃』
フォースエッジが交差、接触する二つの刃先は火花の変わりに白い光の帯を撒き散らす。

一瞬の拮抗の後、黒化剣の耐久限界を察したか、素早く剣を引く実験体達。

リリイの追撃を後方に控える別の実験体が『黒弾』ライフで牽制し動きを止め、その隙にアタックを仕掛けた二人は再び木の陰に身を潜めた。

「……やっぱりテレパシーの連携は厄介ね」

「私はまだよく分かりません」

リリイがちらりと背後のフィオナに目をやれば、馬鹿デカイ石の壁が立っていた。

武技も弾丸も、『石盾』テラ・シルドで一方的に防いだようだった。

これなら確かに敵の連携攻撃を実感することは無かっただろう。思わず溜息が出そうになるが、

「ん、貴女の防御魔法は丁度良いわ」

この場を楽に切り抜けられる方法を思い至った為に、どこかあくどい笑みがリリイの幼い顔に浮かび上がっていた。

「何が丁度良いんですか？」

「加護を使う、私に敵を近づけさせないで、できるわよね？」

「……お任せ下さい」

何となくリリイの意図を察したフィオナは、即座に行動に移った。ディメンション帽子の内に広がる空間魔法より、収納していた愛用の長杖スタツプ「アイズ・ブルーム」を取り出し、

「????? ?????? ?????? ?????? ?????? ?????? ??????」

詠唱を開始。

同時にリリイは、敵が潜んでいると思われる場所へむけて反撃を許さないほど光弾を大量に撃ち込む。

「????? ?????? ?????? ?????? ?????? ?????? ?????? ??????」

光の弾幕の隙を突いて、散発的に黒い弾丸の反撃が届くが、フィオナの詠唱を中断させることは出来ず、そのまま一言の詠唱スベル・ミス失敗も誘う事無く、魔法は完成した。

「――『アラ・アルマシルド巨石大盾』」

――『イグニス・アルマシルド火炎大盾』」

デュアルシルド

「一人で二重防護するなんて、中々やるじゃない」

ニヤリと不敵な笑みをフィオナに向けた瞬間、二つの防御魔法がリリイの姿を覆い隠す。

まず出現したのは、硬質な岩石を組み合わせた絶壁。

地面が隆起したような勢いで10メートルほどの高さにまで展開された『アラ・アルマシルド巨石大盾』は、本来あるような壁状ではなく、中心にリリイを閉じ込めるような円筒形、岩石の塔となって現れた。

直後、岩の壁面にマグマのような赤いラインが走ると共に、塔は真っ赤な火炎に包まれた。

轟々と燃え盛る炎は、その炎熱でもって敵を寄せ付けず、攻撃そのものを焼き尽くす。

フィオナの驚異的な威力を誇る魔法と、本来は二人以上の術者によって展開させる二重防護デュアルシルドによって形成されたこの灼熱の塔は、注がれた魔力が尽きるまで、内にいるリリイを守護する絶対防御の陣と成す。

「それでは、リリイさんが、覚醒、するまで、私が皆さんの相手をしましょう」

凄まじい熱量を振りまく火炎の防御塔を背後に立つフィオナ、右手に『アインズ・ブルーム』、左手に『カスタム・ファイアーボール』を構える。

目の前には灰色ローブを纏い、虚ろな目をした黒髪黒目の5人の男女。

他の4人は、正確な位置は特定しかねるが、左右か背後に隙を狙うべく潜んでいるのだと見当がつく。

リリイが、‘人形’と呼ぶ9人は正しく感情は無く、一切の恐怖を持たない。

剣撃と銃撃を操り、常時強化状態にある肉体、そして一分の狂い無く連携攻撃を可能とするテレパシー通信。

「なるべく早く出てきてくださいね、リリィさん——」

だが、相手の力量を正確に把握した上で、フィオナは相変わらずの寝ぼけた顔で、平然と言い放つ。

「——早くしないと、私が全員倒しちゃいますよ」

第136話 実験体と研究者

それは実験番号49番の、何度目かの機動実験を終えた後のことだった。

「49番が気に入らないか？」

第三研究所の所長にして、神兵計画の指揮を執るジュダス司教から、キプロスは唐突にそんな言葉をかけられた。

「いえ、そのようなことは……」

素顔を全て覆う白い仮面の形をした『フィルターマスク浄化装置』をつけているため、表情の変化は見えない。

だが、ジュダスはキプロスの心の中を見透かしているかのように、確信を持って言葉を続けた。

「稀にいるのだ、正気を保ち続けられる者が」

「49番の自我はすでに半分以上消えかかっています、完全に消滅するのは時間の問題ですよ」

「そういう事ではないだろう。」

アレは自我が消え去る最後の時まで、狂う事無く己の意識を持ち続ける、ソレが気に食わんのだろう？」

キプロスは沈黙で応える。

眼下には、3体のゴーレムを倒し終えた49番が、自分の独房へと引き返して行く姿が見える。

岩石の巨躯を持ち、人間など拳で潰せるパワーを誇る本物のゴーレムを相手に、一切の装備無しで戦い抜いた49番は満身創痍といった様子。

しかし、その異邦人特有の黒い瞳には、未だに力強い意思と生命の光が宿っている。

（ああそうだよ、その目が気にいらねえ）

決して救いなどない実験体の身であると理解していながら、絶望し、発狂することのない49番に対し、明らかに苛立ちの感情をキ

プロスは抱いていた。

（心ってのはな、必ず折れるもんなんだよ、覚悟も、決意も、誇りも、現実の‘痛み’の前にはクソの役にも立たねえ。

だからダメなんだよ、ここで正気を保つなんてことはあっちゃならねえ、テメえらゴミ以下の異邦人は、『思考制御装置』エンゼルリングで自我を消されるより前に、無様に泣いて、喚いて、狂って、全てを諦めて、絶望しなきゃなんねえんだよ。

俺は‘そういうの’が見たくて、『白の秘蹟』に来たんだ、ダメだろうが、ちゃんと俺の思い通りに壊れてくれなきゃよう)

49番は片足を引き摺りながらも、すでに暗い通路の向こうへと姿を消していた。

「――49番が正気を保っていたらるのは、単に‘供物’の素材が良かったから、ある程度精神性も強化されただけでしょう」

苛立つ本心を抑えながら、勤めて冷静に、一人の研究者としての立場でジュダスに意見を返した。

「ふむ、それで納得がゆくのならそう思えばよからう」

そうして、ジュダスは興味を無くしたように、そのまま去っていった。

立ち去るジュダスを頭を垂れて見送ったキプロスは、

（ふざけんなよジジイ、‘正気を保てる者’なんざいてたまるかよ、49番は多少我慢が効くだけで、近い内に必ず折れる、そうさ、まだ耐えられるというだけ、コイツも他の異邦人と同じ、特別なんじゃないねえんだよ）

しかし、『思考制御装置』エンゼルリングによる自我の封印が完了するまでの間、49番は狂う事無く己の意識を保ち続けたのだった。

無数の弾痕に穿たれた鋼鉄の巨体が3つ、音を立てて地面に倒れ伏す。

「ライトゴーレムで防いだ——」

空中から放った魔弾は、その射線上に男を確実に捉えていた。
だが、その弾雨を防ぎきったのは防御魔法でも武技でもなく、この重騎士の姿を模したライトゴーレムである。

「——コイツ、召喚士か」
サモナー

「ただの召喚士じゃねえ、上級召喚士のキプロス様だぞ、そんな豆鉄砲が効くと思ってんじゃねーぞ」

余裕の笑みを浮かべる、キプロスと名乗った男。

瞬時に3体のライトゴーレムを盾代わりに召喚してみせた力量を
思えば、ただのハツタリで粋がっているワケじゃなさそうだ。

恐らく、俺を殺すに足ると思えるほどの使い魔を持っ^{サーヴァント}ているに違
い無い。

「なあ49番、テメえ、俺を殺せると思ってたのか？」

「思ってるんじゃない、殺すんだよ」

右手の鉋を構え、後方の実験体二人に投擲した黒化剣を呼び戻す。
後ろの二人はまだ死んでいない、その為、魔剣は警戒の為に刃は
後ろに向けてある。

だが、敵が自分のリーダーの前に出ているというのに、後ろの二
人には不思議と攻撃の気配が無い。

「へへ、そうかよ——おい、お前らはガキと魔女の方に行ってい
いぞ」

背後から実験体の気配が消える、どうやらリリイとフィオナに向
かわせたようだが、わざわざ部下を外すとは、コイツ一体何を考
えている？

そんなに一人で俺を倒す自信があるというのだろうか。

「出来れば生け捕りで頼むわ、後で俺が、使う、んだからな」

「お前……」

たったの一言でこれほどまで怒りを覚えたのは、思えば初めての
経験だ。

俺の仲間に向けて、下衆な物言いをするんじゃないぞ。

6本の黒化剣が同時に到来するが、正面から迫る3本が剣戟によって軽々と弾き飛ばされる。

左右と真上から狙う3本は、まるで全方位が見えているかのよう
に、最低限の体捌きで刃を回避する。

左右に飛ばした2本は即座に手元へ戻すよう操作するが、真上から狙った黒化剣は、キプロスが回避した所為で地面に真っ直ぐ突き立つ。

それを引き抜いて戻す前に、銀色の一閃によって、黒化剣は黒色魔力と鋼を散らして両断された。

見事に6本の剣による同時攻撃を捌いてみせたキプロス、その剣技は並みの剣士を越えている。

だが、易々と魔剣^{ソードアーツ}を破った原因はそれだけじゃない、
「もしかして聖銀製か!？」

「馬鹿が、一目みりゃあ分かんだろうが!」

聖銀^{ミスリル}とは高純度の白色魔力を秘めた鉱石と特殊な製法によって精製される魔法の金属だ。

あの刀身に宿る光は伊達では無い、振るえば羽のように軽いが、
繰り出す一撃は鋼よりも重い。

聖銀^{ミスリル}の剣を使っているからこそ、素早い剣閃と、軽く黒化剣を弾き飛ばすことが出来たのだろう。

俺の黒化剣のベースは鋼鉄製の長剣^{ロングソード}、宿す魔力はコーティングしてある黒色魔力だけ。

対して聖銀製の剣は、刀身そのものに高濃度の白色魔力を宿しており、武器が持つ魔力量に圧倒的な差がある。

黒色魔力は単純な硬度や切れ味が上昇する効果をもたらすが、白色魔力は剣にどのような効果を発揮するかは詳しく分からない。

だが、どうであれ何らかの強化効果が発動していることに代わりは無い、武器に宿す魔力は、そのままイコールで攻撃力に変換されると言っても良い、だからこそ魔法の武器は重宝されるのだ。

そして、魔力を宿す武器でも使用者に不利益を与えるモノが、呪

いの武器、と呼ばれるのであり、キプロスが装備している剣は、どう見ても呪いなど憑いてない、完全に魔力の恩恵のみを受けられる、強力な武器だ。

「豪華な装備しやがって……」

聖銀の剣となれば、この『呪怨鉈「腹裂」』も難なく受け止められる可能性がある、相性は最悪だ。

「おいおい、俺を装備だけの男だと思ってもらっちゃ困るぜえ？」

ちゃんと上級召喚士のスゲーとこ、見せてやっからよ——『黒喰白蛇』」

先に唱えられた詠唱の効果がついに発動する。

キプロスの背後に白い光で描かれた直系1メートルほどの魔法陣が4つ浮かび上がる。そこに書かれている文字やら模様やらには意味があるらしいが、黒魔法以外はさっぱりな俺にとっちゃ少しも意味など解読できるはずもない。

そして、数秒の内に『黒喰白蛇』^{クライム・イーター}と言う名の使い魔が、魔法陣よりその姿を現す。

キシャアー！

それは全く名前の通り、白い鱗を持つ大蛇だ。

俺の腕よりも一回り太い胴、全長は3メートルほどだろうか、アナコンダと比べれば小さいと言えるかも知れないが、実際にこの大きさの蛇が現れると、大蛇と形容しても良いほど威圧感がある。

真っ赤な瞳が俺を見つめ、先の割れた長い舌をチロチロ言わせている、そんなに俺が美味そうに見えるかよ？

蛇という人にとって恐怖を掻き立てる造形に加え、全身純白で瞳は赤のアルビノカラーリングはサリエルを彷彿とさせる所為で、より一層の苦手意識を俺に与えてくれる。

しかし、不思議なのは4匹もの『黒喰白蛇』^{クライム・イーター}は尻尾の先を軽くキプロスの肩や胴に巻きついているだけでありながら、その体は中空

に固定されている。

あれだけ大きければそれ相応の重量があるだろうに、キプロス本人はまるで重さを感じていないかのよう、剣を構えたまま泰然とした様子で立っている。

「どうしたよ、いつまでもビビってねーでかかって来いよ、折角サシで相手してやってんだぞ？」

見え透いた挑発に乗るつもりは無いが、こっちに時間的な余裕が無いのは事実、仕掛けるならばやはり俺の方からだ。

クライム・イーター
『黒喰白蛇』なる使い魔の能力は全くの未知、真っ直ぐ接近するのは危険とみて、まずは、

バレットアーツ
「魔弾」

遠距離攻撃で様子見だ。

瞬時に出現する数百発の弾丸がタクトの一振りと共に撃ち出される。

この黒い弾幕に回避の隙間は無、さっきのように防ぐか、大きく飛び退いて射線の外へ逃れるほかに術は無。

キプロスは不敵な笑みを浮かべたまま、未だ地面に両足をつけ動く気配は無い。

ヤツの選択は防御、そう思った瞬間、全ての魔弾が消えた。

「……は？」

避けるでもなく、弾くでもなく、消えた、そう、数百に及ぶ黒い弾丸が、キプロスに届く目前で忽然と消失した。

ヤツに動きは無いし、蛇の使い魔もその身で主を庇うような動きは見せなかった。

なんだ、どうなってる？ 魔法の完全無効化？ そんな技があるのか？

「おら、来いよ49番」

ソードアーツ
「ちっ——魔剣」

ごちゃごちゃ考えるより、とりあえず攻撃だ。

最後の2本となった黒化剣を真っ直ぐ投擲、ついでに魔弾をもう

一度撃ち込む。

キプロスはやはり立ったまま動かない、だが、

シャッ！

今度は蛇が動いた。

ヤツの肩に巻きついて、新たな両腕となったかのような2匹の蛇が、大口を開けて飛来する黒化剣に齧りつく。

バキン、と金属が碎ける音が聞こえると同時、刀身をコーティングする黒色魔力が蒸発したかのように霧散した。

剣を碎いた蛇は不味いモノを食わせるなど言わんばかりの態度で、すでに武器としての役割を果たせない剣の残骸を地面へ吐き捨てた。そうしている間に殺到する魔弾は、やはりある一定までキプロスに近づくと、届いた端から消滅していった。

「そうか、分かったぞ——」

タクトを下ろし、魔弾の連射を止める。

これ以上は無駄であると判明したからだ。

「——黒色魔力の吸収^{ドレイン}、それが蛇の能力の正体だな」

「流石の馬鹿でもそれくらい気づくよなあ、けど、分かったトコロでどうしようもないってコトまで、理解してくれるかなあ、え、49番」

どうしてコイツが俺を前にこうも自信満々で相対していたのか理解できた。

コイツは研究者だから知っているだろう、俺に使えるのは黒色魔力を用いた黒魔法^{ドレイン}だけだと。

ならば、黒色魔力の吸収^{ドレイン}によって、黒魔法を無効化されれば、俺はある程度強化された人間に過ぎず、総合的な戦闘能力は格段に落ちる。

俺がコイツを狙う、という初手の段階でミスだったってことか、今更リリイかフィオナに選手交替とはいかない。

ちくしょう、研究者ならば当然、実験体を制圧するに有効な武装をちゃんと持ってるってことだ。

「俺に逃げられたから、急いでそんなモノを拵えたってワケか？」

「そうさ、テメエを見つけた時、楽に捕まえられるようになあ、まさか本当に使うとは夢にも思わなかったけどな、ひやはははは！」どこまでもふざけやがって。

だがしかし、黒魔法を封じられた状態でコイツを倒すのは難しい。

あの蛇はただ黒色魔力を吸収するだけの盾代わりだけでなく、単純に噛み付き攻撃されるだけでも、生身で喰らうには十分すぎる脅威になる。

最悪、ある程度の白魔法すら行使するかもしれない。

オマケにキプロス本人は聖銀ミスリルの剣を装備して、かなり剣術の心得もある。

「拙い、勝機が見えんぞ、どうするか――」

第137話 妖精と魔女（2）

リリイを守る炎の塔が建つ森の中に、新たな火炎が吹き上がる。

「――『火炎槍』」
イグニス・クリスサギタ

フィオナが撃ち出した中級攻撃魔法『火炎槍』は、略式詠唱によって通常の3倍速で発動される。

本来の詠唱に必要な単語や文章を削りつつも魔法を発動させる略式詠唱は魔術士にとって代表的な高等技術の一つだが、短縮した分は当然のように威力は落ちる。

真っ当に撃てば20メートルもの高さに達する炎の竜巻となるフィオナの『火炎槍』は、略式詠唱の代償によって今は瞬間的に10メートルを越す程度の爆発規模となっている。

しかしながら、本来であれば魔法の威力が半分以下となる略式詠唱において、フィオナはその減少率を40%程度に抑えているのだから、その確かな技術の高さが垣間見える。

「――『黒盾』」
シルド

通常の60%の威力ではあるが、フィオナの得意属性にして、中級でありながら上級に達する攻撃力を秘める『火炎槍』は、改造強化された人間である実験体にとっても、下手すれば一撃で戦闘不能に追い込まれるほど危険な攻撃だ。

その恐るべき炎熱は可能な限り回避し、それができない場合は二人同時に行う二重防護で確実にダメージを防ぐ。

お互いの詠唱タイミングが合わなければ完成しない二重防護だが、デュアルシルド精神感應通信によって常時意思疎通を可能とする実験体にとっては大した難度では無い。

二枚の黒い盾が業火に晒されながらダメージを相殺しつつ消えゆくと同時に、二人の実験体は即座に反撃に移る。

「『黒弾』」
ライフル

フィオナの装備する魔女のローブは、単発での威力が低い『黒散
ダン

弾』ではほとんどダメージを与えることが出来ないほど高い防御力を秘めていると察した実験体は、専ら『黒弾』^{ライフル}によって射撃を加える。

草木をすり抜けて飛んでゆく黒い弾丸と交差するように、フィオナのいる向こう側から複数の小さい火球状の『火矢』^{イグニス・サギタ}が飛来する。

フィオナは攻撃直後であったため、回避か防御が精々だと予測した実験体であったが、現実には防御した上に、反撃も行ったということだ。

「――っ！」

予想外の反撃だが、二人は素早く左右に飛んで火球攻撃を回避。

そこまでの動きを視認したフィオナだったが、高速で接近する3つの反応に気づいて、視線をそちらのほうへと移す。

「『岩崩』^{テラ・プラスト}」

フィオナの正面には、二人の実験体が放った『黒弾』^{ライフル}を防御するために作り出した『石盾』^{テラ・シールド}、そこへコツンと軽く長杖をぶつける。

土の下級範囲攻撃魔法『岩崩』^{テラ・プラスト}は、すでにある硬質な岩石をそのまま弾丸として利用され、周囲一帯に重い石の塊を振りまく。

岩のつぶては3人の気配がする方へ集中して飛んでゆくものの、フィオナの不完全な魔力制御によって、全く関係ない方向へも飛んでゆく。

そこにはリリイがいる防御塔も含まれており、いくつかの岩が自分で作り上げた二重防護^{デュアルシールド}を強かに叩いた。

（ちよっと、もう少し静かに戦えないのかしら？）

リリイのクレームがフィオナの頭に突き刺さる。

「今の私は自分でもビックリするほど静かに戦えていると思っていますが」

冗談では無く、自分で自分を褒めてあげたいくらい上手く戦えているとフィオナは信じている。

それはきつと、仲間の前で華麗な活躍を見せたいという一心からきている感情だったが、その結果が果たしてフィオナの思い通りに

なっているかといえば、

（そんなワケないでしょ、私じゃなかったら生命吸収ライフドレインの魔法陣ミスるくらいには騒がしいわよ）

リリーの言うとおり、これ以上ないほどやかましい戦いを繰り広げている。

実のところ、リリーは心の底からフィオナがこれまでパーティを解雇されたのは当然の事だと、今シールドの外で行われている戦いを感じ取ることと納得していた。

フィオナは怒り狂ったドラゴンの如き大火力をそこら中に振りまくような戦い方である、彼女についていけるのは自分のように魔法に優れた者か、クロノのようによほど頑丈な体を持っていないと無理である。

だが、それこそリリーが己のパーティに、クロノと二人きりのパーティに入ることとを許せるだけの實力を持っていることの証左に他ならなかった。

「リリーさん、『生命吸収（ライフドレイン）』の魔法陣をこの場で描いているのですか？

スクロール
竜皮紙の巻物が残っているはずでは」

（あと1個しかないの、いざという時に備えて節約してるのよ）

「その‘いざ’とは今の事では無いのですか？」

木の上から、木陰から、背後から、あらゆる死角について黒化剣がフィオナに向かって飛来する。

（まさか、この程度のこと、危機を演出する素敵なイベントでしやう？）

「――『エア・ウオーカー疾駆』」

リリーの呑気な発言が響くと同時に、フィオナは黒い刃の連撃を回避するべく動き出す。

エア・ウオーカー
使用する『疾駆』は、魔法では無く武技である。

ショート・スベル
略式詠唱を高い練度で使いこなすフィオナではあるが、『アインズ・ブルーム』と『カスタム・ファイアーボール』の‘二刀流’を

使いこなす上に、強化^{ブースト}まで魔法で行うとなれば、口がもう一つなければとても足りない。

故に、その動作のみで発動可能な武技をフィオナは選択したのは当然とも言える。

もつとも、行動の選択肢に武技があるパターンというのは、剣士や戦士のクラスであり、魔術士クラスがそう易々ととれるものではない。

だが現実にはフィオナはそうするのが当たり前かのように、体内の魔力を魔法とは別の理を用いて行使する武技によって、回避に必要な高速を己のものとしていた。

『疾駆』^{エア・ウオーカー}の効果は自分の速度上昇をもたらす強化系の武技、己の意思と動作によってフィオナの脚力は強化され、瞬間移動と見紛うほどの速度をもって駆ける。

（へえ、武技まで使うなんて、魔女って魔法以外にも色々覚えるものなのね）

「これくらい出来ないと、一人で卒業単位は取れなかったのだから、素早くステップを踏みつつ高速ですり抜けてゆく。

さらにその間には、『カスタム・ファイアーボール』を振るいつつ、距離を詰めて近接攻撃をしかけようと狙う実験体達を牽制する。（ふーん、学校って大変なのね、で、何をしたら、単位、とやらがもらえるの？）

「そうですね、私が一番大変だったのは――????? ???? ????
???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ?

前方から、これまで以上の大ききで魔力が集約する気配を察する。
『黒弾』^{ライフル}という攻撃魔法だが、恐らく詠唱を組み込むことでより弾丸一発当たりの威力を高めたタイプであると予測。

「火竜の番を討伐した事ですね――」^{イグニス・オーヴァーブラスト}『火炎放射』」
防御よりも範囲攻撃魔法によって相手の攻撃ごと焼き払うことを

選択。

ショート・スベル

略式詠唱とは思えないほどの威力を誇る『火炎放射』は、燃え盛る大波となってフィオナの視界全てを赤熱でもって塞いだ。

サラマンダー

（そう、火竜ね、なんだか‘皆’同じような経験してるのね）

サラマンダー

「そうですね、火竜はクラス全員が組んで討伐に行く有名な授業ですからね」

（で、それを貴女は一人で行ったってワケ）

「クラス全員参加のはずなのに仲間外れにされるって、どういうコトなんでしょね」

自分で放った火炎を眺めながら、二頭の火竜からしつこく炎のブレスを吐きかけられて逃げ惑った苦い記憶が蘇る。

「奇跡的に討伐できたから良かったですけど、二度とやりたいとは思いませんね」

サラマンダー

（私だけ火竜と戦ったこと無いし、一度は討伐に行ってみたかったんだけど？）

炎が収まり、フィオナの視界には再び緑の森、いや、見える限りでは炭化した木々が並び立つ光景が見える。

ライフル

イグニス・オーヴァプラス

どうやら相手の強化型『黒弾』は、正面から『火炎放射』の火炎を突っ切ってまで、フィオナへ到達することはできなかったようだ。「一緒に討伐、ですか？」

（うん、一緒にね）

接近してくる気配は感じられない、先の一撃で負傷したので治療に専念しているのだろうか、とフィオナは当たりをつける。

ダメージの回復は戦闘において大きな隙となる行動ではあるが、あえてフィオナは追撃を加えることはしなかった。

なぜなら、所詮は時間稼ぎ、無理して倒す必要などないからである。

「そうですね……三人一緒なら、また行っても良いかもしれませんね」

（でしょう、さ、お喋りはこの辺でお終いにしましょうか——）

それに、最早その時間を稼ぐ必要もないことがフィオナには分かった。

そう、すでに、勝敗は決まった、

「――『ライフ・ドレイン生命吸収』」

リリイが加護を得る準備は、すでに整ったのだから。

「んっ――」

強烈な生命力の吸引が嵐の如く巻き起こる。

まずは最も吸収点リリイの近くにあり、魔力の塊である炎と岩を組み合わせた二重防護デュアルシールドが崩壊する。

魔法の火炎は瞬く間に熱を奪われ霧散し、無数の岩を硬く結びつけて塔となす魔力は根こそぎ吸い取られ、脆くも崩れ去ってゆく。

後に残るのは、塔を構成していた岩石の破片ばかり。

その残骸の上に立つのは、神秘的なエメラルドの光を纏う一人の妖精。

この場にある魔力は全て自分のものであるかのように、遠慮も躊躇も慈悲も無く、生命を奪い取る吸収ドレインは貪欲にその効果範囲を広げてゆく。

「禁術の名に相応しい効果ですね」

フィオナは、リリイを中心にして、森が全ての魔力を吸い取られ、白く枯れて死んでゆく様が広がってゆくを見ながら、感心したように呟いた。

魔女であるフィオナは、当然その魔法の素養は高い、この生命吸収ライフドレインが吹き荒れる中にあっても、己の魔力を確りと保持し続けることは造作も無いし、自然に持つ魔力抵抗のみでも十分防ぐことが出来た。

それは恐らく、黒色魔力を自在に操る実験体達も同様、彼らは少しばかりの魔力を持っていかれるかもしれないが、ダメージらしいダメージになることは無いだろう。

しかし、通常の動植物は彼らのようにはいかない。

例外なく、その命をリリイのために強制的に供出させられ、枯れ

果てた骸と化して死に逝くのみである。

「さて、これでようやく準備が整ったわ」

半径50メートルに及ぶ生命力を根こそぎ吸い上げたりリイは、
「クロノを苦しめるこのクズ人形共を、やっとな片付けられるわね」
その幼くも愛らしい顔に極上の笑みを浮かべた。

「純情可憐にして美しき我が女王陛下――『妖精女王』^{イリス}」

自分の出番は終わったな、と思ったフィオナは、手にする二つの杖を、黙って帽子へと仕舞いこむのだった。

第138話 黒魔法使いVS召喚士(1)

輝く銀色の太刀筋が、闇を切り裂くようにクロノを襲う。

胸を横一文字に灼熱の感覚がなぞってゆく、深くは無いが、確かに己の体に刃は届いている。

「っ——」

その一撃が武技によるものならば死んでいた、と直感する。

黒色魔力によって防御力を高める魔法のローブである『悪魔の抱擁』^{エンプレス ミスリル}を、白色魔力の光を宿す聖銀の刃は易々と切り裂いてゆく。

軽い一振りであってもマトモに喰らえば致命傷となる可能性が高い、クロノは紙一重で回避したり、浅く斬られたりしながら、どうにかキプロスの斬撃を凌ぐ。

「おらっ！ どうしたあ49番、俺を殺すんじゃあ——」

胸元に浅い切り傷を負いつつも、構えを崩さずに立つクロノに向かって、4つの豪腕が迫る。

「——ねえのかよ！」

それは腕では無く4匹の『黒喰白蛇』^{クライムイーター}。

触れる先から黒色魔力を奪い取る硬質な白鱗を厚く纏った蛇の頭部は、高速で突き出されればヘヴィー級ボクサーのストレートパンチを軽く越える拳となる。

「くっ！」

二つまでは『呪怨鉈「腹裂」』を振るって弾くが、残りは避けきることができず、強かに胴を打ちつける。

高い背と戦士のように発達した筋肉を持つクロノの体重は平均的な成人男性のソレを超えているが、そんな重量をものともせず、白い大蛇の頭突きは軽々とクロノを吹き飛ばした。

「……う、痛えな」

追撃の隙を見せないよう、受身をとって素早く起き上がる。

「へへっ、まだまだ元気みてえだな、んじゃあ次はもうちょい厳し

目でいってみつか」

「はっ、手加減してくれてたのかよ」

2匹の『黒喰白蛇』クライムイーターを弾いた所為で、『呪怨蛇「腹裂」』の宿す黒色魔力が吸収されていた。

黒化が半分解けかかっている蛇に、再び魔力を注いで元に戻す。

「そうでもしなきゃツマラねえだろ？ パンドラ（こっち）来てから娯楽が無くて退屈気味だったんだよ、楽しめる時に楽しんでおかねーとな」

キプロスは圧倒的な優位にあるのをいい事に、クロノを弄んでいるのは明らかだ。

『黒喰白蛇』を頭突きでは無く、噛み付くか巻きついて動きを封じれば、後は自動的に黒色魔力を吸い上げられてクロノはすぐに行動不能となる。

それでも拘束中に動けるようなら、ミスリル聖銀の剣で一突きすればそれで終わり、そう防戦一方のクロノは理解している。

対するキプロスは、己と使い魔サーヴァントの性能を当然詳しく把握しており、さらに、

（テメエの情報は、自分で思っているよりも、創造主、である俺らの方が詳しいんだよ）

敵であるクロノの性能まで、キプロスは知っている。

（49番は神兵計画の第一段階終了時に脱走した、ってコトは、本能的に使える黒魔法以外に、魔法を習得することはできねえ）

実験体となる『異邦人』はこの世界とは別の世界から呼び出された存在であることをキプロスは理解している。

そして、その異邦人の住む世界に魔法の技術が一切存在しないということも判明していた。

故に、自分達が与えた‘力’の他に、魔法の素養がゼロである異邦人にはこの世界にある多様な魔法を自力で習得することは不可能であると、研究者の間では定説となっている。

（なんせ、『自動翻訳』トランスワードを言葉と文字の両方に永続発動させてる、

自力で言語を学ばななでできるわけがねえ)

現代魔法モデルに代表される、様々な魔法を習得できない致命的な原因がソレである。

術式に用いる言葉や文字の意味を正確に理解していなければ魔法は発動しない、ただ発音や筆跡を真似ても魔法は不発になる。

もともと、耳に入る端から異世界の言語を自動的に日本語へ置き換えられるクロノにとっては、発音を真似ることすらできないのだが。

バレットアーツ
「――魔弾」

クロノを追い込むべく、一步を踏み出すキプロスへと、実験でも実地でも見慣れた黒い弾丸が飛んでくる。

「無駄だっつってんだろう、このボケがあ！」

本物の銃弾と同等の性能を持つ魔弾だが、その構成は金属では無く全て黒色魔力、『黒喰白蛇クライムイーター』を操るキプロスにとっては子供の投げる石ころほどの脅威にすらなりはしない。

防御も回避もすることなく、キプロスは真っ直ぐ突っ込んでゆく。そして、当然の如く弾丸は敵に届く前に、焼け石に水滴をかけたように瞬時に蒸発した。

だが、今の弾丸に籠められた黒色魔力の量は通常の倍、最初に防がれた時よりも、ほんの僅かだがキプロスの体へ近づいたのを、クロノは確かに見た。

ルクス・スラッシュ
「『白光一闪』」

「黒風！」

交差する白と黒の軌跡。

刃を打ち合い火花と白黒両方の魔力の残滓が飛び散る。

一歩後ずさるのは、やはり相性の差によりクロノ。

すかさず追撃に入る4匹の大蛇による猛烈なストレート頭突き（パンチ）。

シールド
「くっ、黒盾」

咄嗟に防御魔法を展開するが、それは悪手であったとクロノは瞬

時に後悔。

だが、防ぐには他の方法が無いのも事実。
その結果、

シャアアアー！

黒色魔力の盾など無いが如く、あっさりとシールドを貫通し、重い4連撃をボディに喰らう。

意識が途切れそうになるほどの衝撃を感じながら、クロノは自分の張った黒盾^{シールド}が蛇の接触面から黒色魔力を吸い上げられ、ゆっくり消滅してゆくのを視界の端に捉えていた。

「がはっ、げほっ……」

またしても吹っ飛ばされたクロノは、どうにかこうにか受身だけはとるものの、即座に立ち上がるとまではいかなかった。

そして、未だこの一方的な戦いを終わらせるつもりのないキプロスは、クロノが立ち上がるまで悠然と構えて待つ。

（こんなもんじゃ諦めねえよな49番、あの死んだ方がよっぽどマシな人体実験を正気で耐え抜いたDMなテメえだ、この程度のダメージなんざクソほども苦痛になんねーだろうよ）

クロノは鉈を握っていない左手をつきながら、再び立ち上がる。

その瞳には、絶対的な相性差による不利を理解していながらも、全く戦意の衰えていない力強い光を異邦人特有の黒き双眸に宿している。

（そうだ、そのクソ生意気な目だよ！

俺は今マジで神に感謝してるぜ、今度こそテメえを、その絶望を受け入れねえムカつく目つきを、この手で狂気に染めるチャンスが廻ってきたんだからな）

キプロスは自然と笑い声が漏れていることに気づかない、だが、気づいたところでわざわざ止める理由も彼には無い。

（まだ‘本番’は先だ、テメえをボコって捕らえるのなんざただの

前座でしかねえが、まだ続けさせてもらうぜ。

テメえがどう足掻いても俺一人に手も足もでねえってコトが分かるまではな)

鉈を両手で構えるクロノを見てから、一拍遅れてキプロスも剣を構えなおす。

(実験の第一段階に武技の習得は無い、49番が使う『黒風』はあのデカイ鉈の能力だ。

その辺の雑魚ならそれでパワーと武器性能で押し切れるだろうが、『聖銀剣(ミスリル・ソード)』と正規に武技を習得している俺が相手をすりゃ、へっ、対した技じゃねえ)

心の底から湧きあがる嗜虐の歓喜を抑えながら、実験時には無い情報であるクロノが現地で入手した装備に関して、キプロスは冷静に分析する。

(黒魔法用のタクトを手に入れたのは随分とツイてたようだが、あの程度のモノじゃあ火力不足だな。

現状で持っている武器で一番強えのが、その鉈なのは分かっているだ。

コッチはテメえらが使う黒魔法系統の空間魔法を見破る術がある、鉈以上に上等な武器を隠し持って無いってのが丸分かりだぜ。

っつーか『自動剣術』用の剣も尽きてるじゃねえかよ、はっ、十字軍相手にバカスカ使いやがって、ご苦労なことだなあ(49番よ)もしも、クロノが大魔法具級の武器やアイテムを持っていれば、

逆転は可能だろう。

しかし、そんな都合の良いモノを持ち合わせているはずもないし、そんな奇跡的な幸運が100%無いことを、キプロスはクロノの『シャドウゲート』を『空間解析』の魔法を利用することで証明した。

(最後に頼れるのは自分の力だけ、ってな。

けど、テメえの黒魔法も、身体能力も、魔力量も、そして、施設を脱走した後の時間経過で得られる成長分も、全部含めてコッチは予測済みで対処済みなんだよ)

キプロスはクロノが召喚され実験体となったその時から、ジュダスの部下として人体実験に従事してきた。

クロノがどの程度の成長速度で、身体能力や魔力といったステータスが延びてゆくか、という本人でも正確に分からないような成長率のデータすら、彼ら研究者は保有している。

その情報に照らし合わせてみれば、魔法面においては、有する魔力量も爆発的に増大することは無い。

一人の魔術士として見るならば、かなりの成長率を記録した49番ではあるものの、どう高く見積もっても『黒喰白蛇』が2匹いればあつという間になる程度の魔力量だ。

そして、他の系統魔法を習得していないことも鑑みれば、魔法面でクロノは順当に育った以上の成長は見込めない。

また、クロノがまだ正規に武技を習得していないことから、肉体面においてもそれほど驚異的な戦闘能力の上昇は考えられない。

現状において強いて不安要素をあげるなら、リリイとフィオナに差し向けた実験部隊が苦戦している点だろう。

その戦況をキプロスはテレパシーの定期通信を用いてある程度は知ることが出来ていた。

しかしながら、そうであっても自分がクロノを存分に撈ってから捕獲するまでの時間稼ぎは十分にできると判断した。

全て予測の範囲内、イレギュラーは一切無い。

「想像力の無え馬鹿ばっかだぜ、テメエも同じだ49番、まだ、俺を殺せる気でいるんだろう、ええ？」

満身創痍といった様子のクロノ。

黒色魔力の吸収ドレインによって、肉体補填で傷口を埋めてもある程度近づいてしまえば自動的に剥がされてしまい、結果的に出血を止めることが出来ない。

体力には未だ多少の余裕はあるものの、時間の経過によって加速度的に消耗してゆくのは傍目から見ても明らかであった。

しかし、

「ああ、当然だろ、お前のような下衆野郎を――」

クロノは笑った。

キプロスが心の底から苛立たせる強い眼光を伴って、必殺の意思を見せる。

「――生かしておけるかよ」

第139話 黒魔法使いVS召喚士(2)

「ああ、当然だろ、お前のような下衆野郎を生かしておけるかよ」
やつとだ、やつと勝機が見えた。

俺が虚勢を張っているだけだとキプロスは思っ、その不快な薄笑いを浮かべたまま、ゆっくりと剣を構える。

右手一本で『呪怨鉈「腹裂」』を握り締め、恐らく一度きりのチャンスだと覚悟を決めてアタックを仕掛ける。

「行くぞ——」

真っ直ぐ駆け出す、ヤツは俺を完全に舐めている、遠距離攻撃はしない。

あるいは、剣と4匹の白蛇を操作するのが限界で、他の攻撃手段がとれないのかもしれないが、どちらにせよ俺の接近を阻む気はヤツには無い上に、こっちの体勢が整うまで待つという過剰サービスぶりだ。

お陰で、確実にお前を殺す手はずを用意することができたぜ。

「——『アンカーハンド影触手』」

本来なら崖や壁を上り下りするのに利用する移動用の黒魔法。

普段使用する時にはしないのだが、今は限界以上に魔力を注ぎ込み、黒いワイヤー状の『アンカーハンド影触手』は、『クライムイーター黒喰白蛇』に対抗するかのよう大蛇のような太さと長さになっている。

対抗とは正しくその通り、作り上げた極太の触手は4つ、それぞれを舌なめずりして待ち構える蛇に差し向けて行動を封じる。

「はっ、何をするかと思えば、馬鹿もここに極まったなあおい」

俺の意図を察したのだろうが、『アンカーハンド影触手』に対して何ら脅威を抱いていないようで、そのままこちらの予想通り4つの触手に4匹の蛇をぶつけてくる。

互いの距離約3メートルの地点で、黒と白が絡み合い、拮抗する。触手の先端は、通常であれば返しのついた刃を形成するが、抑え

るのが目的であるために3本の指を作り、蛇の頭を掴むことができるようにしてある。

対する『黒喰白蛇』クライムイーターは、この黒色魔力の塊である触手を、その名の通り喰らうかの如く大口を開けて噛み付く。

「テメエの体と直接繋がってんだぞ？　そのまま体内の魔力まで吸収されるだけだろうが」

「俺の魔力を――」

キプロスの言うとおり、『影触手』アンカーハンドを通してぐんぐん全身の魔力が吸い上げられていくのを実感する。

ここで『影触手』アンカーハンドを解除すれば、吸収の起点となる『黒喰白蛇』ドレインの口から離脱する事はできるだろう。

だがそれでは意味が無い、1秒毎に凄まじい魔力量が消費されてゆくのを、歯を食いしばって耐えながら蛇を抑える触手の形状を維持する。

「――舐めんなあ！」

3メートルある距離から、さらに一步前進。

「おいおい、このまま魔力切れでぶっ倒れるなんてツマンねーやられ方すんじゃないぞ」

興醒めだ、と言わんばかりに不満な顔のキプロスに向かって、俺は鉈を振り上げ、ついに互いの刃が届く間合いに踏み込む。

「黒尻いいいい！」

ルクス・スラッシュ
「白光一閃――」

ガキイン！

二つの刃が接触したその瞬間、俺の右手に握られていた『呪怨鉈腹裂』はあっさりとすっぽ抜けて彼方へ飛んで行く。

「――あ？」

俺の鉈が弾かれるのは、キプロスにとって不審に思う点ではない。だが、いくら勝ちが見えているといっても、武技同士を打ち合っ

たにしては、不自然なほど箆められた力の感触が無かっただろう。
だがそれは当然だ、なぜなら俺は武技『黒風』を発動させてはいない、普通に振り下ろしたただけだ。

「もらったぜ——」

鉈を手放した右手は硬く拳を握り、もともと空いていた左手は、

「——黒化」

力をもてあまし気味に剣を振り切った聖銀ミスリルの刃を力強く掴む。

鋭い刃先が手のひらを切り裂き血が流れるが、その輝く刀身に落ちる鮮血すら覆うように、俺の放出する黒色魔力が白銀の刃を侵食してゆく。

「くっ、テメえ——」

初めて焦りの声をあげるキプロス、だがもう遅い。

その自慢の聖銀ミスリルの剣は、もう俺のモノだ。

「おらあああ、飛んでけえ！」

一瞬の内に白銀の剣を黒色魔力で覆いつくし、黒化が完了、即座に慣れた投擲の操作をする。

「うおおっ!？」

俺の操作を受けて、キプロスが剣の柄を固く握るが、抵抗虚しくその手からすっぽ抜け、明後日の方向へ飛んでゆく。

このゼロ距離で剣は不要、ヤツの武器を奪えればそれで良いし、
ソードアーツ
なにより魔剣として精密操作を今の状況でできる自信は無い、とりあえず遠くにブツ飛ばすだけで精一杯だ。

首尾よく黒化を成功させたその一方で、鉈を手放し握りこぶしを作った右手には、別の黒魔法を行使。

4本の特大『影触手』アンカーハンドと黒化の同時進行でさらにもう一つ魔法を発動させるのは難しいが、

「パイル——」

この、最初に憶えた最も単純な黒魔法ならば、発動させるに何の問題も無い。

「バンカあああああああ！」

黒色魔力が破壊の螺旋となって渦巻く暗黒の拳を、キプロスの顔に向けて繰り出す。

「ぐおっ——」

防ぐことも避けることも出来ず、狙い通り顔のど真ん中にクリーンヒット。

だが、顔面を突きぬけ頭部を粉砕する手ごたえは無い、硬い、まるでシールドを殴ったような感触だ。

「う、おお……」

それでも衝撃によって鼻は潰れたのか、鼻血を垂れ流しながらキプロスがたたらを踏んでよろける。

無様なキプロスよりも、その胸元からぶら下げている銀色の十字架が魔法の輝きを放つのに注目する。シルバー

なるほど、防御魔法が箆められた魔法具か。マジック・アイテム

解除するか破壊するか、いや、最早自分の肉体一つしか俺には、

「破ああああああ！」

コイツを戦闘不能に追い込むまで拳を叩き込む以外に選択肢は無い！

「ぐっ、はっ——」

反射的に後ずさりして距離をとろうとするキプロスに、猛然と追撃を仕掛ける。

ここで逃がすワケが無いだろうが、そのままキプロスに体当たりをかまして路上に押し倒す。

素早く馬乗りになりマウントポジションを確保。クライムイーター

この時点で、『黒喰白蛇』は『影触手』を半分ほどにまで喰らい尽くしている。アンカーハンド

触手で抑えていられる時間はもう長く無い、ここで状況を覆されれば、今度こそ俺に逆転の目は無くなってしまう。

「おらあ！」

十字架が発揮するシールド越しに、俺はひたすらに拳を叩きつける。

「がはっ——なぜっ、まだ、動けるう——」

両腕に魔力を漲らせ、瓦どころか鋼鉄さえぶち破る威力を秘める黒い拳を顔面に向かって乱打。

貫け、このシールドを貫けっ！

「もう、魔力をっ——喰らい、尽くして……」

何をそんなに驚いていやがる。

『黒喰白蛇』クライムイーターは確かに黒色魔力を吸収する能力をもっているが、時間辺りの吸収量は一定だ。

触れた瞬間に全ての魔力を吸収することができのなら、2本の黒化剣を砕いた時、黒盾を貫いた時、シールドあのように触れた先から順に消滅する反応はしないはずだ。

通常の魔弾一発なら、効果範囲に入った瞬間に消滅するが、倍以上に魔力を籠めて打ち出せば、30センチ以上の距離を進んだ。

『黒喰白蛇』クライムイーターが最大でどれほどの黒色魔力をトータルで吸収できるのかは知らないが、吸収量は一定でしかないと言うのなら、俺の魔力が底を尽きる前に術者本人を叩けばいい。

幸運にも、コイツは俺が接近することに全く警戒しなかった。

召喚士らしく、自分の使い魔に全てを任せて高みの見物を決め込んでいれば良かったんだろうが、今更後悔したところで、もう遅いぜこの大馬鹿野郎。

「おらっ！」

ミシリ、と見えないシールドが軋む音が聞こえる。

いける、時間はまだ残っている。

「おらっ！ おらあ！」

殴る、殴る、魔力で強化しているとはいえ、硬質なシールドに阻まれた反動によって、拳に無数の傷が走る。

だが、そんな痛みがなんだ、もう少しで、コイツのシールドを砕けるんだ。

「馬鹿な——こんなっ——」

「おらああああああ！」

血まみれの拳を叩きつける、

ガシャアアアン！

そして、ついにシールドが碎ける。

破られると同時に十字架も粉々に碎け散り、その防御の力を失う。

「っ！？ おおい、待っ——」

「あああああああああああ！」

振り上げる右拳、これが、最後の一撃。

だがその時、右腕に激痛が走る。

「ぐあっ！ くそっ——」

拳を振り下ろすことが出来ない、なぜなら、俺の右腕には白い大蛇が牙を突き立てて噛み付いているからだ。

しまった、ついに『影触手』アンカーハンドを維持するだけの魔力が底を着いて、強制的に解除された！

「——くそお！」

阻むものが無くなった蛇は、容赦なく俺へ襲い掛かる。

キプロスを殺す最後の武器である左の拳も、もう一匹の大蛇が喰らいついて動きを止める。

「は、は……ひやはははは！ 残念だったなあ49番！」

両腕を二匹の蛇が拘束、残りの二匹は俺の無防備なわき腹に向けて噛み付く。

腹に深く突き刺さる鋭い牙の痛みよりも、この、残り僅かの黒色魔力が急速に消失してゆく感覚が辛い。

まるで生命そのものが体外へ流れ出てゆく感覚だ、どんどん体に力が入らなくなり、意識もちらついてくる。

「ぐ、ああ……」

「ビビらせやがって、予測以上の保有魔力量だったか、ったく、どこまでもム力つく野郎だなあ、ええ！」

さっきのお返しとばかりに、キプロスの拳が俺の頬へ突き刺さる。

だが、未だ組み敷かれた体勢では大した力が入らない、殴られたという衝撃だけは理解できるが、痛みなど両腕と両脇腹のせいで感じない。

「くそっ、くそっ、ふざけやがって、任務なんざもうどうでもいい、この場でテメエの女を犯してバラして、それからテメエもぶっ殺してやるうああああ！」

「ふざ、けんな——」

力の抜けかけた体が僅かに浮き、キプロスがマウント体勢から逃れようともがく。

ここで抜けられれば、もうコイツに俺の攻撃が届くことは無いだろう。

だが、そんなコトは考えるだけ無駄だ。

なぜなら、これが俺の最後の攻撃だから。

もう限界だと思ったが、その口汚い挑発をしてくれた所為で、リイとフィオナを失う最悪の想像が出来た。

お陰で、お前を殺す最後の氣力を振り絞れそうだ、ありがとうよ、最後の最後まで、お前は最低の下衆野郎だったぜ。

「ふざけんなああああああああ！」

そして、俺はキプロスの喉笛目掛けて喰らいつく。

「なっ——」

お前のご自慢の蛇が噛み付くように、俺はまだ動く口を使って、幼稚で、原始的で、だが硬い歯によって確実な威力を得られる噛み付きを喰らわせる。

「おおああ、あ、ああああ！？ やっ、やべえろおおお、お、おおお！」

お前らが俺の体の隅々までキッチリ強化してくれたお陰で、顎の力も獣人並みだ。

硬い鱗の無い、柔らかい皮膚しかない人間の喉笛など、簡単に食いちぎることができる。

「——っ！」

首の半ばほどまで喰らいつくと、そのまま喉に走る血管と肉をブチリ、ブチリ、と噛み千切ってゆく。

口の中に広がる鉄臭い血の味、人間の味。堰を切ったように吹き上がる鮮血が、俺の視界を覆った。

「っは——かはっ……はっ……」

キプロスは必死の形相で、己の血が止め処なく噴出す喉を自ら首を絞めるように両手で抑える。

その限界まで見開かれた目は、すでに血塗れた俺の顔など映していない。

目前まで迫る死の足音に怯え、ただひたすらに生にしがみ付こうとする無様な人間の顔。

「ヤバい……もう、意識が……」

どうやらコイツの死を見届けることは出来なさそうだ。

すでに体中から感覚が抜け落ちている、両腕と脇腹に喰らいつかれる痛みも、最早感じる事が出来ない。

「あ——」

ゆっくりと、仰向けに倒れていく。

背中に当たるのは、柔らかく温かい何かの感触。

薄れゆく意識と、ぼんやりとしか映らない視界に飛び込んできたのは、勝利の女神の微笑みだった。

「——リリイ」

「お疲れ様、あとは私に任せて、ゆっくり休んでね」

光り輝くような笑みを見せる美少女の姿をとるリリイへ、何か言おうとするが、唇が僅かに震えるだけだった。

「おやすみ、クロノ」

第139話 黒魔法使いVS召喚士(2) (後書き)

今日は二話連続です。

第140話 私に教えて

安らかな表情で気絶しているクロノだが、その口元から上半身にかけでは大量の血液によって赤黒く汚れている。

人の喉笛を噛み千切るという正気の沙汰とは思えない殺害方法を実行したクロノの姿は、頭のイカれた殺人鬼シリアルキラーの様相を呈しているが、

「ふ、ふふふ、すつごくカッコ良かったよ、クロノお」

リリイにとっては、白馬の王子様すら霞むほどの魅力を、血塗れたクロノに感じていた。

「もう、素敵！ チュツ、チュ！」

気絶しているのを良い事に、額へキスの雨を降らせるリリイ。

「リリイさん、早くクロノさんを治癒してあげないと手遅れになってしまうのではないですか？」

そんなリリイの行動を何とも思っていないのか、呆れているのか、それとも羨ましいのか、感情の読めないジト目で見つめながら、フイオナが止めに入った。

街道の真ん中に死体同然の男二人と4匹の大蛇の死骸が転がるこの光景はとてもキスシーンが似合うロマンチックなものではない。

キプロスの使い魔である『黒喰白蛇』サーヴァント クライムイーターはさも当然のように息絶えているが、それは術者が倒されたからではなく、単純にリリイが撃ち殺したからだ。

もっとも、必死の攻防を演じるクロノとキプロスは、どのタイミングでリリイが大蛇の頭部をレーザーで撃ち抜いたのかは分からないだろう。

「——ん、それもそうね」

すでに慣れたと言わんばかりに手際よく、クロノの大きな体をリリイは軽々と抱え挙げた。

「本当に残念でならないけど、クロノの治癒は貴女にまかせるわ、まだ『妖精の霊薬』は残ってるでしょ？」

「構いませんけど、良いのですか？」

「いいの、私はアイツに――」

リリーの視線の先には、首を両手で抑えたままの格好で動かなかったキプロスの姿。

もう命僅かといった様子だが、未だ死んではいなかった。

「――聞きたい事があるから」

目が覚めた瞬間、キプロスは未だ自分が生きていることを理解した。

「は、はは――」

その奇跡に心の底から歓喜の念が湧きあがる。

（そうだよ、俺が、この俺が、こんなところで死ぬはずがねえんだ！）

そう、自分が死ぬなどという最も忌避すべき事態が、自分の身に起こるはずがない。

なぜなら、これまで自分の思い通りにならなかったことなど無いからだ。

整った容姿にすぐれた身体能力、剣の才能も魔法の才能も事欠かない、そして資産家の両親、自分は生まれながらのエリート、他のヤツらとは違う、正しく神に愛された男。

それが自分だ、こんなところで、脱走した実験体に振り返りに合うなどという無様な死に様を晒すような存在ではない。

「はあい、お目覚めかしらゲスヤロウさん？」

九死に一生を得て全能感に浸るキプロスを、小鳥がさえずるような美しい声でゲス呼ばわりされ、己の内から外へと意識を移した。

「――あ？」

その時点で、ようやく周囲の状況に気づく。

緑溢れる森の中、木々のざわめきと共に爽やかな初夏の風が頬を

撫でる。

どうやら自分は木を背もたれに足を伸ばして座っている体勢にあり、見上げれば生い茂る深緑の葉から木漏れ日が漏れ、今がまだ日中であることを示す。

「貴方に聞きたいことがあるの、正直に答えてくれると嬉しいわ」
目の前に立つのは、プラチナブロンドの長髪とエメラルドグリーン
の瞳を持つ絶世の美少女。

「デメェっ！」

一目見た時から己のものにしたいと欲して止まないその圧倒的な
美貌を持つ少女が、どのような立場にあるのかキプロスは忘れてい
ない。

（49番の女、あのいきなりガキの姿になった妖精か）

こういう理屈か子供の姿をとっていたはずだが、如何なる魔法を
使ったのか、その姿は最初に見た少女へと戻っている。

「あまり大声出さない方がいいわよ、自分の喉がどうなったか、ま
さか忘れたわけじゃあないでしょう？」

「ちっ……」

脳裏に浮かび上がるのは、正しく悪魔の形相で、凶悪な顎を開き
己の首に喰らいつく49番の姿。

確実に致命傷だったはず、即座に治癒を施したところで完治はし
ばらく時間がかかると、魔法をよく知るキプロスが傷の回復具合を
察する。

大声を張り上げれば恐らく傷口が開き、再び鮮血を噴出すことにな
るだろう。

「まあ、貴方が喋れなくなっても、別に困らないんだけど」
（くそっ、舐めやがってこのメスガキが——）

命は助かったが捕虜となったか、と今の状況について考えをめぐ
らす、

「だって、貴方の‘心’に直接聞けばいいんだからね」
少女の無邪気な笑顔と共に、キプロスの鼻先に白い輝きを放つ一

本の大きな針が突きつけられ、思考が止まりかける。

実験施設で注射を始めとして様々な針を目にしてきたキプロスだが、今日の前にあるモノは、これまで見てきたどんなものよりも大きく、太い、針というより串、あるいは細めの杭と呼べるほど。

恐らく彼女の魔法で創りだされたであろう巨大な白い針、そして「心に聞く」と言った台詞から、この少女がこれから何をするのか瞬時に連想できた。

「自分達が同じことをやってきたんだものね、気づかないワケないか、うふふふ」

楽しそうに片手で針をクルリと回してから、少女は腕を目一杯に伸ばして振り上げる。

思い浮かぶのは、脳に直接針を突き刺して心神に干渉する『^{ゼリング}思考制御装置』の仕組み。

「さて、まずは貴方のお名前、教えてちょうだいな」

「止めっ——」

静止の言葉を吐く暇も無く、少女の眩しい笑顔と共に、極太の針先が魔法の加速度をもって振り下ろされる。

ドズっ——

キプロスは自分の頭の奥で、そんな鈍い音を聞いた。

「あ……おおああ……」

脳天に突き刺さる巨大針、白魚のような細い指先が一本だけ針の頭に軽く添えられているだけだが、針先は固い頭蓋をゴリゴリと削りながら、心、を直指して突き進む。

不思議と痛みは感じないが、それでも自分が何をされているのか不幸にも理解してしまっているキプロスは、脳を侵されようとしている事実にも身の毛がよだつほどのおぞましさを憶える。

「おおお……止め……止め、ろ……」

少女はニコニコと実に楽しそうな笑みを浮かべながら、より一層

の力を指先に籠める。

ついに針先が頭を守る強固な頭蓋骨を突破し、一切の防御力を持たない無防備でデリケートな器官へと、その鋭い先端を侵蝕させてゆく。

「――キプロス・ヴェルマーニ、あら、随分とお金持ちのお家ね、羨ましい、私もこんな豪邸でクロノと暮らしたいわ」

個人の情報が全て集積される脳は、強力な精神感応能力テレパシーを持つ者であれば、直接、触れて、そこにある情報を引き出すことが可能だ。ただ人間一人とはいえ、その脳内に納められている情報量は膨大、欲しいデータを効率よく引き出すにはストレートに質問して、そのことを本人に考えさせるのが一番である。

「貴方の個人情報なんてどうでも良かったわね、私が知りたいのは、貴方達、がクロノとどういう関わりがあるかってコト。

どうやってクロノをこの世界に、召喚、したの？

クロノに何をさせるつもりだったの？

クロノに何をしたの？

クロノに――」

脳内に自分とは違う、何か、が駆け巡り、グチャグチャにかき回される恐ろしい不快感を覚える。

乱暴に、強引に、頭の中を、心の中を、その、何か、が蠢く度に記憶の欠片が壊れてゆく。

それはきつと、彼女にとって必要が無い情報だから、49番に関わらない全ての事象は全て不必要、ゴミ、クズ、存在する価値もない。

「さあ私に教えてよ、クロノのコトをもっと、もっと！」

再び頭の奥底で響く不穏な音、頭蓋を貫く破壊の音、脳を突き刺す蹂躪の音。

キプロスはすでに認識することはできないが、自分の頭部に突き立つ針は2つ、3つ、と次々に増えてゆく。

ただ分かるのが、脳を侵す、何か、がどんどん勢いを増して、怒

涛のように押し寄せてくるといふ絶望の感覚のみ。

「私はクロノのコトが知りたいの、クロノのコトなら何でも知りたいの、だから、クロノも知らないクロノのコトを、もっと私に教えなさいよっ!」

最早キプロスの耳に少女の声は届かない。

白目を向き、舌を出してだらしなく開かれた口元からは涎が止め処なく流れ続けている廃人状態の彼に、人の言葉の意味など分かるうはずもない。

「ああ、分かる! クロノのコト分かるよ、今ならもっと分かってあげられる!」

すでに言葉を認識できていないことに気づいたのか、テレパシー本来の使い方である意思の疎通を用いて、キプロスの脳内に直接メッセージが叩き込まれる。

「クロノにこんな酷いコトして、ホントに許せない、徹底的に苦しませて殺してあげる」

頭に響き渡る、刻み込まれる残酷で純粋な殺意。

壊れゆく記憶の代わりに、殺意、敵意、侮蔑、罵倒、嘲笑——ありとあらゆる負の感情が詰め込まれてゆく。

ついに己の人格すら崩壊しかかってくる中で、キプロスは理解する。

(ああ……心が壊れるって……こういう、コトだったのか……)

彼に残されたのは、

(神様……助けて……)

決して救済することのない神に向かって助けを請うことのみ。

(助けて……助け——)

「あははは、そうそう、しっかり神に祈って自分を保ってなさい。だってえ、ホントに苦しいのはこれから、貴方の大好きな絶望ってヤツを、たっぷり味合わせてあげるんだから、ね?」

第141話 アンロック

「——うっ!？」

意識の覚醒と同時に飛び起きる。

俺はキプロスとほぼ相打ち状態で戦いを終えた、最後にリリーの顔が見えた気がしたが……いや、今はそれより状況確認が先だ。

目の前に見えるのは遠くガラハド山脈まで伸びる西北街道、そして俺の傍らに立っている黒い影は、

「どうなった、フィオナ？」

「大丈夫ですよ、全て終わりましたから」

魔女の衣装を翻し、いつもと同じ無表情で淡白な返事をしてくれた。

全て終わった、ということとはとりあえず、危機は去ったということとで一安心だ。

「俺はどれくらい寝てた？」

「30分ほどですよ、つい先ほど最後のライトゴーレムを倒して、敵は全滅しました」

辺りをよく見渡してみれば、格好だけは立派な全身鎧に見える偽の重騎士、ライトゴーレムの残骸が幾つも転がっている。

その人形部隊を征した冒険者達は、勝利に喜ぶよりも、横転した馬車を立て直したり、街道を塞ぐ有刺鉄線の除去に四苦八苦したりと、目の前の問題の対処にあたっている。

「俺も手伝わないとな」

思わぬ妨害で足止めを喰らってしまった、今は早くここを離れなければ十字軍の追撃が来るかもしれないのだ。

勢いよく立ち上がろうとするものの、足腰にあまり力が入らず、背もたれにしていた木に手をついてもたれかかる様にしながら立つのが精一杯だった。

「妖精の霊薬で外傷はほとんど回復しましたが、魔力までは戻り

ません、下手に動かない方が良いですよ」

「どうやら、そうみたいだな。」

くそ、メチャクチャに吸い取りやがって……」

痛みは無いが、体中が脱力感と倦怠感に満ちて動くのが酷く辛い。魔力は生命維持に欠かせないエネルギーだ、大幅に失えば大量出血した場合と似た症状に陥る。

情けない話だが、こんな状態じゃ手伝っても足手まといにしかならん、大人しく回復を待つしかないか。

しかし、それでも外傷はほとんど治っている俺は幸運だろう、なぜなら着ている『悪魔の抱擁』パフォメット・エンプレスの方は見事なまでボロボロになってしまっているのだから。

聖銀の刃よって散々切り裂かれ、両腕の部分など『黒喰白蛇』クライムイーターに拘束された際に完全に食い破られてしまい今や半そで状態だ。

もうあと僅かでもローブにダメージが入れば『悪魔の抱擁』パフォメット・エンプレスの宿す悪魔の魔力も限界に達し、再生能力を完全に失う。

いくら魔法の一品といっても、ある程度破壊されればどうにもならないのだ。

俺はローブがまた元の姿に再生するのはしばらく時間がかかりそうだなと思いつながら、再び木の根元へ腰を下ろすと、フィオナに問いかけた。

「実験部隊はどうなった、全員殺したのか？」

「私とリリイさんが引き受けた9名は全員仕留めました。」

ランク3以上の実力はあるチームでしたけど、リリイさんの『交信妨害』インド・ジャマーが発動してからは、楽なものでしたよ」

やはり連携はテレパシー通信に頼りきりだったか、意識が無い所為で妨害されれば臨機応変に対応できないのだろう。

「それにしても、よく発動できたな、というか、リリイは加護使ってなかったか？」

「はい、私が防御魔法をかけて加護発動まで時間稼ぎをしました」
簡単に言うが、それってかなり凄いことじゃないか、少なくとも

デカイ黒盾シールドを展開するのが精々な俺には無理な作戦だ。

「実験部隊の大半はライトゴーレムの群れに紛れて冒険者の方々と戦っていたようですが、クロノさんが敵のリーダーを仕留めてくれたので、全員撤退しました」

「そうか、逃げたんなら、まあ追撃する理由も力も無いしな、放っておけばいいか。」

それと、被害の方はどうなってる？」

「死者はいませんでしたよ」

正直予想外、いや死者が出ないのは喜ばしいことなのだが、相手の力量から考えてそれなりに戦死者は出るだろうと覚悟していた。

「そんなにライトゴーレムの方にいた実験部隊は弱かったのか？」

「いえ、どうやら向こうの目的は私達の捕獲だったようなので、倒れた者は皆、負傷はしていますが気絶させて拘束状態にあるだけでした。」

撤退する時に捕獲した彼らを全員置いていったので、そのまま救出できましたよ」

「そういえば、任務がどうか言ってたな……」

恐らく、俺と同じようにろくでもない人体実験を施すつもりだろう。

ダイダロスを占領したというのなら、嫌な考えではあるが利用できる‘魔族’はいくらでもいるはずだ。

それにも関わらずわざわざ俺達を捕らえようとするとは、冒険者のようにある程度強力な個体が欲しかったのだろうか？

「うん、大体そんなところよ」

「リリィ!？」

いきなり俺のモノローグに答えてくれたのは、やはり少女の姿をした状態のリリィ。

「おやリリィさん、もう拷も——尋問はもうよいのですか？」

待て、今もの凄く不穏な単語が出ようとしてなかったか？ 俺の気のせいかな？

「聞くべきことは全部聞いてきたわ」

優雅な笑みを浮かべて応えるリリィだが、その瞳にはどこか鋭い光が宿っているように見えた。

「尋問って……どういうコトだ？」

「あのキプロスとか言う男に色々聞いてきたの、情報収集は大事でしょう？」

「アイツがそう簡単に事情を話すとは思わないけどな」

「そこはほら、私の凄いテレパシーで、ちょっと、ね？」

俺には真似できない見事なウイंकをしながらにこやかに言い放つ。

その‘ちょっと’とは具体的にどういうことなのか、暗に聞かないでくれと言っているようなので、俺は追及する事はしなかった。

「とりあえず簡単に説明すると、アイツらは私達みたいに強い者を実験材料として捕獲する為に結成された部隊ってこと。」

一応それなりに秘密にしとかなきゃいけないらしくて、普通の傭兵団を装って十字軍にくつついて良さそうな‘素材’を探していたそうよ」

「一昨日に正面突撃仕掛けて来たあの傭兵団か？」

「そうよ、アレは偽装の為に雇った冒険者を都合よく処分しつつ、戦いのどさくさに紛れて自分の部隊を十字軍から離脱させるためにやってみたよね」

あまりに無意味な突撃だと思えば、そんな裏があったのか。

一攫千金を夢見て傭兵団に参加した共和国の冒険者は哀れなもんだ、自分達で殺しておいてなんだが。

「後は、少人数で森を無理矢理突破してアルザスの背後に回る、そしてライトゴーレムを大量に召喚して、私達に包囲されたと思わせて撤退を誘う。」

この辺まで誘き寄せることができれば、十字軍の目の届かないところで私達を襲えるってワケ」

「見事にその手に乗ってしまったな……情けないぜ」

こうして上手く撃破できたから良かったものの、捕まってしまうば戦死するよりも遥かに過酷な運命を辿ることになっただろう。

そしてそれは、俺だけでなく他の仲間までも巻き込むことになるのだ、今更ながらゾっとする話だ。

「ところでリイさん、他にも情報が手に入ったのではないですか、例えば、この実験体を造り上げた組織のこと、だとか」

組織か、全く胸糞の悪くなるろくでもない集団だが、こうして目の前に現れてしまった以上、その情報は出来る限り知っておきたい。

「白の秘蹟という組織、その創設者にして実験の責任者ジュダス司教、クロノがされた人体実験は神兵計画と呼ばれる計画の一環、この三つくらいよ、はっきりと分かったのは」

なるほど、なんとも分かりやすい構図だ。

ジュダス司教ってのは、あのマスクを唯一つけていなかった偉そうなジジイに違い無い、キプロスも俺が顔を知っていると踏んだ上で「エリシオンにいるジジイに聞いてみる」と言っただけだ。

創設者にして責任者か、もし、この手が届くところにいるのなら、確実にこのジジイだけは仕留めなければならないな。

しかし、神兵計画とは、その神の兵士ってのは俺たちのことだろう。

「勝手に呼び出して神の手先か、ふざけやがって……」

白の秘蹟、ジュダス、いいぜ、覚えておこう。

今はまだ、実験を続けるテーマをまとめてぶっ潰せるほどの力はないが、それでも、必ずいつか俺たちを悉く弄んだこの落とし前、キッチリつけさせやるからな。

森の中に、一つの死体が無造作に転がっていた。

それは一見すると焼死体のようであるが、目元から上の頭部が完全に弾け飛んでおり、死因が焼死なのか頭を吹き飛ばされたことに

よる即死なのか、判別はつかない。

それをこの世で正確に知る者は、自ら手を下した人物以外には存在しない、

「いやー随分と派手に殺られたねーキプロス」

そのはずだった。

元はキプロスという名の死体を見下ろす一つの人影。

「あの妖精ちゃん可愛い顔して頭イカれてるよお、エグゼキューター異端審問官並みの手際だったもんねえツミキ？」

金髪のツインテールをした小柄で細い体つき、その身に纏う防具も背に負う武器も貧弱そのもの、新人以下のお遊び冒険者にしか見えない少女、アイ。

凄惨な惨殺死体を前にしながら、アイは楽しそうにニコニコと笑顔で、傍らに立つ黒猫ツミキへ語りかける。

「わざと弱火でじっくり炙ってさ、しかも頭に刺さった針から絶対、ペインクライザー痛覚増幅と気絶阻止発動させてたよ、オマケにすぐ死なないように治癒魔法まで使ってたし。

こんな死に方だけはしたくないよねえ、まあコイツの場合、自業自得っていうか、因果応報っていうか、そんな感じだったもんね」
およそ20分近くに及ぶ拷問ショーの感想を嬉々として話すアイだが、ツミキは眠そうにニヤーンと鳴く以外には無反応であった。
そんな態度の飼い猫に、いつものことだと特に不満に思う事もなく、そのまま言葉を続けた。

「ふふ、それじゃあ‘縛りプレイ’はこの辺でお終いにして、あの悪魔くんと妖精ちゃんにご挨拶といこうか——」

アイは右手首に装着してある、彼女の装備品の中で唯一価値のありそうな銀の腕輪シルバリングアンロックに手をかける。

「——封印解除」

言葉と同時に、銀の腕輪は弾け飛ぶように細い手首から外れる。
その瞬間、これまでどこにでもいる普通の少女にしか見えないアイの雰囲気は激変した。

もしこの場に第三者がいれば、空気が、あるいは周囲の風景が、がらりと変わったように見えただろう。

突如として圧倒的な存在感を放つ姿へと変貌した彼女からは、ついに現実の目に見える変化が起こる。

キラキラと光輝く靄のような白銀のオーラが、アイの全身から吹き上がったのだった。

恐らく実験体が黒魔法で創り出したのであろう黒い有刺鉄線の撤去が完了し、再び馬車の出発準備が整った頃には、俺も普通に歩ける程度には体力と魔力が回復してきた。

それなりの時間を足止めされることとなったが、後方からは十字軍の追手は見えない。

今すぐどうこうなることは無さそうではあるが、向こうが本気で追撃を仕掛ければどれほどの速度でやって来るのかは不明、少しでも距離を稼いでおかねばならないので安心はできない。

それに先の戦闘によって、死者こそ出なかったものの負傷者は結構な数、というより無傷でいる者の方が珍しい。

全員脱出を前提に馬車を用意しておいて本当に良かった、とりあえず荷台に放り込んでおけば移動は出来るのだから。

「よし、全員乗ったな」

さあ急いで出発、と意気込んで俺も馬車へ乗り込もうかという正にその時であった。

「――みんな伏せろ！ シールド 黒盾っ！」

咄嗟に声を張り上げると共に、全力で防御魔法を展開。

なぜなら、遙か上空から白く輝く光の槍、いや、柱と呼べるほど巨大な何かが幾本も降り注いでくるのが見えたからだ。

なんだコレは、まだ敵が潜んでいたのか？ それよりも、この輝きと大きさのモノが爆発すれば、くそ、まんまミサイルじゃねえか

よ!

「????? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ???? ????
?——『テラ・ウォルデファン岩石防壁』」

背後から聞こえる高速の詠唱は、フィオナか。

そう直感するよりも早く、俺の防御魔法より遙かに立派な土の中級範囲防御魔法が効果を発揮する。

瞬間的に起こる地震のような揺れと共に、ちょうど俺の目の前から断崖絶壁がせり上がる。

本当に崖では無いが、そう思えるほどに巨大な岩の大壁が完成、横幅は街道の端から端までピッタリ、高さもその横幅と同じだけの長さ。

通常よりもずっと大きいだろう正方形の『テラ・ウォルデファン岩石防壁』が完成した直後、ついに光の柱が到達する。

ガガガガガ——

一列に並んだ光の柱は、狙い済ましたかのように岩壁の真上に直撃。

硬質な岩石で形成され、防御魔法として高い効果を発揮する土属性の『テラ・ウォルデファン岩石防壁』だが、その防御力をものともせず光の柱が貫いてゆく。

垂直に突き込まれた光の柱は、その勢いのまま岩壁を粉碎するかと思いきや、鉄骨を差し込まれたコンクリートブロックのようにそのままの形状を維持していた。

「……爆発は、しないのか？」

呟いた瞬間、思い出したかのようにガラガラと音を立てて岩壁は崩れ去ってゆく。

大量の岩石の欠片が路上に振りまかれ、後に残るのは堂々と地面に突き立つ光の柱のみ。

横一列に並んだソレは、まるで巨大な鉄格子のように通路、では

無く街道を塞いでいる。

もしかすれば、これは光の防御魔法の派生型なのかもしれない。だからと言って油断は出来ない、次の瞬間には大爆発を起こすかもしれないし、それともこれは俺達の足止めであり、これから攻撃魔法が飛んでくるかもしれないからだ。

「あー、ごめんねえ、そんな警戒しなくたっていいよー？」

と、いきなり聞こえてきたのは能天気な少女の声。

こちらの緊張を台無しにするかのような声音、それは勿論、俺達の中の誰かが発したものではない。

「……誰だ」

声は、俺のシールド越しに聞こえてきた、つまり、目の前に立っているという事だ。

台詞の内容を信用するのなら、今すぐ攻撃する意思はなさそうだ。意を決してシールドを消し、正面の相手をこの目に捉える。

「初めまして、アイでーす♪」

光の柱で構成される格子の向こう側に、一人の少女が立っていた。輝くようなブロンドの髪は少々幼さを感じさせるツインテールだが、青色のクリクリと大きな瞳の可愛らしい顔立ちにはよく似合っている。

防具は簡素な革の胸当てにシンプルなグローブとブーツのみ、その下は薄手のシャツにミニスカート、とても魔法の防御効果を宿す高級品には見えないただの衣服。

どこから見ても貧弱な装備の新人冒険者にしか見えない、だが、その小さな少女の体からは、

「ま、まさか……」

忘れもしない、あのサリエルが纏っていた濃密な白色魔力による白銀のオーラ、それと全く同じものが吹き上がっている。

だが、この少女は断じてサリエルでは無い。

それでも、このオーラを纏っているということは、

「……使徒、なのか」

少女は、ヒマワリを思わせる満面の笑みを浮かべて応えた。

「うん、私、第八使徒でーっす！」

まるでつまらない冗談のように軽い名乗り。

そんなわけがない、ありえない、そんな否定の言葉は、この漂う白銀のオーラを前に全く意味を持たない。

そうさ認める、ありえない事が起きたんだ、使徒が現れるという、最悪の事態がな。

「それでえ、悪魔さん、ちょっとアタシに付き合ってくれないかな？」

かくして、第八使徒アイは、俺の前に立ち塞がったのだった。

第142話 第八使徒の事情

アルザス村の中央広場には、騎兵を中心とした多くの兵が集っていた。

今回の戦闘において無傷となった天馬騎士部隊もそこには含まれている。

彼らの目的は村を脱し逃亡を図った魔族への追撃、すでにいつでも出発する準備は整っているのだが、未だに待機状態のまま。なぜならば、

「追撃はお待ち下さい」

副官であるシスター・シルビアが、勇んで出撃しようとするノールズを止めたからであった。

「今、何と言ったのかねシスター・シルビア？」

まさか、彼女のハッキリとした口調を聞き漏らすことなど、正常な聴覚を持つ者ではありえない。

聞き返したのは、一度だけ言葉を訂正する機会を与えてやるという意味に他ならない。

「追撃はお待ち下さいと言ったのです、聞こえなかったのなら貴方の耳がおかしくなっている可能性がありますね、微回復でもかけてあげましょうか？」
レッサー・ヒール

ここ最近彼女の毒のある言葉をあまり聞いていなかった所為で、スルースキルが鈍っていたようだ。

目の前に立つ彼女を反射的に殴り飛ばさなかった自分を褒めてやりたい気分だった。

「貴様、よもや魔族と通じているのではあるまいな？」

もしそうであればこの見かけ以外に良い所が一つも無い生意気な副官を、如何様にも‘処分’できる大義自分が立つ、寧ろそうであって欲しい。

ノールズの目に籠る殺気は、本物であった。

しかしながら、シルビアはそんな彼の反応に些かも怯える様子も無く、いつもと同じ冷淡な表情で言葉を続けた。

「大人しく従った方が貴方の身の為ですよノールズ司祭長、なぜならこれは命令なのですから」

「命令？ 命令だと、バカな、ここに居る誰がこの俺に命令できる立場にあるというのだ！」

彼の部下なら聞けば震え上がるほどの怒声を浴びせられながら、シルビアは少しだけうんざりした表情で、一枚の封書を取り出した。「どうぞ、お読み下さい」

ひったくるように封書を手にしたノールズ、そのまま破いて中を開かんばかりの勢いであつたが、そこにある赤い封蠟を見て、思わず動きを止めた。

「これは……聖十字記章だと!？」

十字軍、引いては教会で用いられる封蠟には、神のシンボルである十字のマークが必ず用いられる。

今ノールズが手にする封書を留める封蠟には、通常の十字とはデザイン異なるマークが刻まれていた。

この聖十字記章と呼ばれる印を封蠟に使用できる者は、教皇と枢機卿のみ、つまりこの世で4人にしか使うことを許されない特別な意味合いを持つのである。

そして、聖十字記章が封蠟に用いられているということは、十字教徒にとって天上人とも呼べる4人の内の誰かによる、直筆の指令書ということになる。

そういった意味を瞬時に理解したノールズは、先ほどの怒りをすっかり冷まし、慎重な手つきで封蠟を切って開封した。

「メルセデス枢機卿殿下の指令書か……」

書面に記された内容を読むノールズから、一筋の冷や汗が伝った。「ば、馬鹿な……第八使徒だと!？」

「少し落ち着いたらどうですか、一時的に使徒の指揮下に入ることなど、共和国の軍においてはそう珍しいことではないでしょう」

メルセデス枢機卿が記した指令書にはシルビアが言ったように「時がくれば第八使徒の指揮下へ速やかに入り、その指示に従うこと」と、高位の聖職者特有の回りくどい言い回しで書かれていた。

「そういう事ではない！ 一体誰が第八使徒なのだ、まさか——」
ハッとしてノールズは正面に立つ赤い髪のススターを見つめる。

「いえ、私ではありませんよ」

「な、なんだ、そうか、全く驚かせるんじゃない——」

「私の主が第八使徒ですけど」

「なんだとお!？」

唾を飛ばして驚愕するノールズに対し、シルビアは瞬間的に一步引いて射程圏外へと逃れた。

「そんな、シスター・シルビア、貴様はメルセデス枢機卿猊下の——」

「それは貴方の勝手な妄想でしょう」

これまで自分がどう思われていたのか、気づかないほど彼女は愚鈍ではなかった。

「私の主は第八使徒アイ様、奔放なお方ですので、私のような者が‘雑事’を執り行っているのですよ」

「アイ？ どこかで聞いたような名だな……」

副官の仕事を雑事と呼んだことよりも、アイという共和国では珍しくない名前を持つ人物の心当たりを探る。

「キプロス傭兵団に所属するただの冒険者、というのがアイ様の仮の身分です。」

最初にイルズ村へ偵察に出した後、ただ一人生き残って帰った冒険者、それがアイ様ですよ」

「あ、ああーっ!？ あの阿呆そうなガキか!？」

「言葉を慎んだらどうです、不敬罪で磔刑に処されたいのですか？」

「ぐっ……しかし、とても使徒だとは……いや、第七使徒サリエル卿の例もある、何ら不自然は無い、か」

使徒に関して知る限りの人物像を思い浮かべれば、それが女子供

であつてもおかしなところは何も無い。

それと同時に、第八使徒の噂も思い出す。

「なるほど、第八使徒か……まあ、それなら誰もその正体に気づけなかったのは、無理もあるまい」

「ご理解いただけただようでなによりです」

とりあえずは、事情を受け入れたノールズは、冷静に副官に、いや、使徒直属の配下であるらしいシルビアへ問いかけた。

「それで、追撃を待てというのは、第八使徒の指示だということか？」

「『悪魔』と戦つてみたいんだそうですよ。」

決闘が終わるまで、邪魔だから誰も近寄らせるな、と」

「あの忌々しい黒い『悪魔』を討つか、美味しいところをとられるのは些か惜しいが、天下の使徒がそう言うのなら仕方あるまいな」
使徒と悪魔、どちらが強いかなど、考えるまでも無かった。

散々に兵を屠つた悪魔の死が確定したと思い、ノールズは小さく笑みをこぼした。

「さあ、どうでしょうね……ただ、アイ様がお戻りになった後は、指揮権は貴方へお返ししますので、魔族を追撃するなり、どうぞお好きなようになさってください」

あまり興味の無さそうな声で投げやりに言うシルビアの台詞。

「使徒が直接向かったならば、魔族共は全滅するのではないのか？」

そう、悪魔どころかその配下である有象無象の魔族を丸ごと相手にしても楽に勝利できるほどの力が使徒にはあるとノールズは知っている。

確かにアルザスを廻る攻防戦で多大な被害を出し苦戦を強いられたノールズであるが、それでも使徒を相手に善戦できるほどの戦力では無いと確信できる。

「他の魔族に興味は無さそうでしたので、無視して逃がしてしまうかもしれませんね」

「な、なんだと!?!? それでは意味が無いではないか!」

「ですから、その場合には貴方が追撃して仕留めれば良い話でしょう。

今は精々、レーヌ川を渡河する準備でも進めておいたらどうですか？」

「ぐっ……」

魔族を見逃すなど馬鹿な、とは思うが、結局はこちらがやることに変わりは無い、事を荒立てず、シルビアの言うとおり大人しく準備をしておくのが最善だろうとノールズは理性的に判断を下した。

「ああ、そんなことよりも、アイ様を出迎える用意をしておいた方が良いでしょう、最近ロクな物が食べられなかったと大層嘆いておりましたので」

「……分かった、食事も用意しておこう」

ワガママな使徒だ、黙って敵を殺すだけのサリエル卿を少しは見習ったらどうだ、と内心で毒づきながら、ノールズは大人しく頷いた。

第143話 ハンデ

行く手を阻むかのように突き立った光の柱による格子は、すでに消滅している。

冒険者達を満載した馬車を留める存在は無く、車輪をガタゴト鳴らして全速力で走り去ってゆく。

そうして街道を進む馬車の列がついに見えなくなるまで見送ると、ホッとすると同時に、一抹の寂しさも感じた。

だが、今はそんな感傷的な思いに耽っている場合では無い。

冒険者達を見逃す、その対価として、俺は、いや、俺達はこの第八使徒の相手をしなければならぬのだから。

「んもー、そんなに睨まないでよう、ほら、折角の決闘なんだし、楽しくやろうよ、ね？」

アイと名乗る使徒は、サリエルと違って随分とお喋りなようだ。真意を測りかねるそのふざけた語り口で言うには、どうやら俺とリリィに興味があるらしい。

フィオナが勘定に入っていないのは、彼女の力を確認できていないからだろう。

「ちゃんと逃がしてあげたでしょ？　ちょっとはアタシのコト信じてくれないんじゃないの？」

「……そうだな」

とは言うものの、無条件でコイツのいう事を信じられるわけが無い。

彼女の望みは、俺達と戦うこと、逃げずに相手してくれれば、他の冒険者達、ひいてはこの先で避難中の村人達に対して、一切追撃も仕掛けないと言った。

俺達の命を度外視するならば、スパードへ避難するための時間稼ぎ、という緊急クエストの目的は完遂できるという破格の条件である。

しかしながら、そんな条件が守られる保証などどこにもない、彼女が機嫌を損ねれば平気で約束を破るだろうし、それに対しケチをつけられるほどの力は俺達にはない。

そう、使徒という存在が現れた時点で、俺達に交渉の余地など一切無い、向こうの言い分を飲まねばどうせこの場で全滅だ。

「クロノ！ みんな一緒なら大丈夫だよ！」

ローブの裾をグイグイ引っ張って力強い主張をする幼女リリィ。

「そうですね、向こうはただ力試しがしたいようですし、戦っても即死することはないと思いますよ」

微妙にネガティブな発言のフィオナ。

「……ああ、もう後には退けないし、やるだけやるしかない」

使徒を相手にするのは、俺、リリィ、フィオナの三人組、つまり冒険者パーティ『エレメントマスター』である。

この冒険者気取りの第八使徒様は、

「パーティ組んでるなら一緒に戦わないとダメでしょー！」

とかのたまって、パーティでの戦闘を望んだ、勿論こちらに断る理由はないし、断ることもできない。

リリィとフィオナを巻き込んでしまった、と考えるよりも、パーティを組んだ以上すでにメンバーの命は一蓮托生、そう覚悟を決めるべきである。

だから、二人には謝るような真似はしない。

「ねえーねえー、あのさー悪魔さーん」

こっちの緊張感などお構いなしに呑気な声が飛んでくる。

悪魔というのは、どうやら俺を指しているようである。

アルザス村で戦っている最中に十字軍兵士が俺のことを悪魔がどうとか言っていたので、そういう不名誉な仇名をつけられてしまったようだと分かった。

「なんだ？」

「悪魔さんとそっちの魔女っ娘さ、かなーり疲れちゃってるよね？
魔力が半分切っちゃってるよ？」

相手の持つ魔力量を見抜く術スキルでもあるのだろうか、確信を持った口調だ。

こっちの不利を悟られるような情報は敵に対して口にすべきではないが、使徒に対してそんな駆け引きは全く意味を持たない。

「それが、どうした？」

「困るんだよねーそういうの、だからさあー」

アイは腰にあるポーチをゴソゴソと漁り、

「――ちゃっちゃと全回復してくんない？」

そう言って放られる一つの小瓶、俺は反射的にそれを受け取る。

10センチほどの瓶を満たしているのは、水のように無色透明であるが、キラキラと輝く光の粒子が全体に溶け込んで淡い輝きを発している液体。

一見すると、ポーションの一種に思えるが、

エリクサー
「神薬、ですね」

横から覗き込んだフィオナが回答をくれた。

エリクサー
「神薬？ 随分と大層な名前だが、凄いのか？」

「一番凄いポーションですよ、少なくともアーク大陸においてですが」

「見せてーリリイにも見せてえー」

凄い、のだろうが具体的にどれほどの効果か分からないので、そうか、というより他に無い。

とりあえず爆弾のように危険なモノでは無さそうなので、リリイに神薬なる超高級ポーションを渡してやる。

陽の光に透かすように瓶を掲げて真剣な表情で見つめるリリイを視界の端に捉えながら、俺はアイへと問いかけた。

「飲め、というコトか？」

「うん」

にこやかに頷くアイ、まあそれ以外には考えられないしな。

「分かった」

「あれー毒だとか疑ったりしないの？」

「意味は無いだろ、それに信じろと言ったのはお前だ」

「ふふー、そっか、うんうん、素直な良い子は好きだよ。」

さ、その神薬はアタシの驕りだから、グイっといっちゃって！」

実に楽しそうなアイを冷めた目で一瞥してから、リリイとフィオナに向き合う。

「三等分すればいいか？」

俺＞フィオナ＞リリイ、の順で魔力を消耗しているが、リリイも全く疲れが無い訳ではない、回復できるなら全員がするべきである。

「神薬なら一口で十分な効果が発揮されるでしょう、この一本を三人で分けても問題ありませんね」

「そうか、じゃありリイから飲んでい——」

「はい、クロノ！」

俺の言葉を遮って、勢いよく突き出されるポーションの瓶。

「ん、そうだな、まずは俺が毒見しないとな」

この液体が神薬である保証はどこにもない、そんな怪しげなものをいきなりリリイに飲ませるワケにはいけないな。

そう思いなおし、これも一応リーダーの務めだと思い、瓶を開封し、勢い良く神薬を口に含む。

「——っ！ これは……凄い回復力だな」

残り10%も残ってないであろう黒色魔力が、燃料タンクにガソリンが流し込まれていくかのようにグングンと満ちてゆくのはつきり感じ取れる。

他のポーションや治癒魔法に比べ、圧倒的な速度で魔力が回復し、疲労を吹き飛ばしてゆく。

負傷も魔力も疲労も関係なく、全てまとめて全快状態にまで回復させる、恐ろしいまでの回復力だ。

「どうやら本物らしいですね」

「ああ、そうじゃないとしても、凄い回復力を持ったポーションで

あることに変わりはないな。

じゃあ次は――」

二番目に疲労しているフィオナに向かって瓶を差し出すが、

「ダーメー！ 次はリリイが飲むのー！」

またしてもリリイによって阻まれる。

なんだかいつになくワガママだが、一体何がそこまでリリイの気を引くのか、妖精の霊薬より高性能な神薬エリクサーに対して思うところがあるとか？

「ほら、残り半分だけ飲むんだぞ」

「うん！」

ニコニコ笑顔で瓶を受け取るリリイ。

両手でしっかり持ち、味を確かめるように飲み口を小さな舌でペロペロ舐めてから、意を決したように神薬エリクサーをあおった。

「――ぷはっ」

言いつけどおりきっちり半分だけ残して飲み終えたリリイは、

「はい」

と、もう興味などありませんというように、さっさとフィオナへ瓶を受け渡した。

だが、その顔はどこか一仕事終えて満足な表情であった。

「ん、この感じは紛れもなく神薬エリクサーですね」

いつの間にやら飲み干したフィオナがそんな感想を漏らした。

「味はしなかったけど、分かるもんなのか？」

「飲み心地が普通の水とは違います、お酒の一種に似たような感じがありますね、飲んだことがないと判りづらいかもしれませんが」

ああ、そういうえば口にいれた瞬間に、フワリと溶けてなくなるような不思議な感触だった。

この感覚と似たような感想を、いつだったか高級な日本酒を飲んだ両親から聞いた事がある。

なんだ、神薬エリクサーってアルコールも入ってんのかよ？

「とりあえず、これで全快ですね、まあ、それで使徒に勝てるかど

うかは話が別ですが」

「そういうコト言うなよ」

頑張ればきつと勝てる！　と思いついて言えないのがどうにも心苦しい。

だが、俺とリリィはサリエルとの戦闘を経験しているし、フィオナは共和国出身のため、使徒の噂はよく知っていることだろう。

誰も安易に「使徒を倒せる」などとは口に出来ないのだ。

「それでも、殺すつもりで対策を考えないとな……」

再びアイに向き直る、

「ふあゝ」

ヤロウ、欠伸なんぞしやがって、自分で突っかかってきておきながら、ヤル気あんのかコイツは？

「あゝあ、んあ、神薬エリクサー飲んだんね？　じゃあそのまま休んでいいよー、1時間くらいしたら全快するでしょ」

「そんなに待ってくれるのか、随分と気が長いな」

「神薬エリクサーつっても一瞬で全快ってワケじゃないしねー、それくらい待っててあげないと。」

それに、そっちも作戦会議する時間、欲しいんじゃないの？」

「くれるというのなら、ありがたく貰っておこう」

本当に、俺達が全快した状態と戦いたいようだ、一切の不備をこちらに残したくないような徹底ぶりだ。

「あ、そうそう、アタシの武器はこの弓だけ、武装聖典は使わないから安心していいよ」

と、左手にある今にも弦が切れてしまいそうなボロい木の長弓ロングボウをブンブンと振ってアピールする。

武装聖典って確か、使徒専用の凄い武器のことだったと思う、以前フィオナから聞いたことがある。

アイといいサリエルといい、使徒ってヤツは手加減して戦うのが好きなんだな。

全く腹立たしい、こっちは命がけの戦いしてるってのに遊び感

覚で介入してきやがる。

「……了解した」

「んふふ、あからさまにハンデつけられても怒らないなんて、やっぱり素直で良い子だねえ悪魔さん」

生憎、俺は誇り高き戦士でも高潔な騎士でもない一介の冒険者だ、付け入る隙を与えてくれるというのなら大歓迎さ。

だからといって感謝の言葉を述べるつもりもないけどな。

俺はそのままアイに背を向けると、街道脇の木を背もたれに腰掛ける。

二人もそれに続くように、柔らかな草地の上へ腰を下ろした。

「ふぁーあ……」

対するアイは俺達とは反対側に陣取って、使い魔なのかペットなのか、黒の子猫を抱えて座り込む。

そのままだらけた姿勢で、瞳を閉じると、すぐにグースカと寝息を立てて居眠りを始めたのだった。

どこまでも無防備、無警戒、完全に舐められているが、相手の力量を思えば軽率に怒鳴り込むわけにはいかない。

ここは苛立つよりも、変につっかかってこられるよりはマシだと思っておこう。

「さて、あのふざけた使徒を倒す方法を一時間で考えなきゃならんワケだが、何か思いつくか？」

第144話 エレメントマスターVS第八使徒(1)

陽が傾き始め、空が薄っすらと朱に染まり始めた時刻になり、アイは浅い眠りの淵より目覚めた。

「んー？」

パッチリ目を開けると、沈み行く夕陽を背景に、悪魔と妖精と魔女の三人が並び立っているのが見えた。

「いきなり撃ってくると思ったんだけど、んふふ、中々に紳士だねえ悪魔さん」

明らかに1時間じゃ済まない時間が経過しているが、どうせ自分は寝ていたし、急いでいるわけでもないので文句は無い。

向こうが戦いを始める気になってくれただけで、アイは満足していた。

そして、最初の一発目は‘冒険者らしく’、こちらが居眠りしている不意をついての奇襲攻撃に出るだろうと予測していたが、見事に外れてしまったことが惜しくもあり、嬉しくもあった。

「悪魔じゃない、俺の名はクロノ・マオだ」

「そっかあ、悪魔じゃなくて魔王だったのね、あっはっはっは！」

悪魔改め、魔王改め、クロノは、アイの高笑いに眉一つ動かさず、その凶悪な目つきで彼女の一挙手一投足を見逃すまいと鋭い視線を送っている。

「ついでにさ、そっちの魔女っ娘と、いつの間にやら育っちゃってる妖精ちゃんの名前も聞かせてくれると嬉しいな？」

クロノの両脇に立つ二人の美少女へ視線を向ける。

「フィオナ・ソレイユです」

「リリイ」

割と丁寧な名乗りを上げた魔女フィオナと、すでに並々ならぬ敵意が溢れている妖精リリイ。

三人の名乗りを聞き終えたアイは満足そうにうんうんと頷いてか

ら、木を背もたれに寝そべっていた体勢から勢い良く飛び起きた。

「さっきも名乗ったけど、第八使徒アイです。」

あ、こっちはツミキちゃん、カワイイでしょ？」

両手で抱えてつきだされる黒猫のツミキ、前に立つ三人の姿は見えているのだろうが、やはり興味無さそうに小さくニヤーンと鳴くだけの薄い反応であった。

「ソイツは使い魔^{サーヴァント}か？」

「ん、ああ、戦うのはアタシ一人だけだから、安心していいよ。」

じゃ、ツミキ、良い子で待ってるんだよ？　ご主人様のカッコいいトコ見せてあげるから！」

アイの拘束から解き放たれたツミキは、そのまま真っ直ぐ街道脇の茂みに飛び込んで行き姿を消した。

「んもー応援してくれたいいいじゃん——まあいつか、それじゃ、いつでもかかって来ていいよ？」

かくして、街道を左右に挟んでアイと三人が対峙する。

合図も何も無い、だが、この瞬間に戦いの幕は切って落とされた。

「——行くぞ」

最初に動いたのはクロノ。

手にするタクトを一振りした瞬間、アイの視界に夜の闇が広がるような黒い煙が広がった。

瞬時に黒煙が周囲一体に濛々と立ちこめ、一寸先も見えなくなる。

だがアイはうろたえる事は勿論、その煙幕から脱することもせず、その場から一步も動かずゆっくりと長弓^{ロングボウ}を構えた。

「『光散^{ルクス・ブラスト}』でいいかな」

今にも千切れてしまいそうな劣化した弦をギリギリと引き絞ると、雪のような白い粒子が収束してゆき、あっという間に光り輝く一本の矢が形成される。

どうやら彼女にとって物質としての矢は必ずしも攻撃に必要なアイテムではないようである、ただの弓であっても、魔法を行使するに全く不自由しない。

「えいやっ！」

弦より放たれたその瞬間、弾ける様に光の矢は分裂し、黒煙の中を突き進み現れた無数の黒い刃を迎撃した。

白色魔力と黒色魔力が中空で激突し、光と闇を互いに散らす。

「ハルバード？ ああ、ライトゴーレムのかあ、ちゃっかりしてるな」

敵の攻撃である黒い刃、その正体が重騎士の格好を模倣するためライトゴーレムが装備していたハルバードであることを、砕け散った欠片を見て察した。

ただし、実際の重騎士が装備するハルバードに比べ、かなりグレードが落ちる最低限度の品質である。

クロノは剣などを黒色魔力の付加によって自在に操る攻撃方法を、キプロスとの一戦を携帯食料片手に観戦していたアイが知らないはずが無い。

黒化したハルバードの投擲攻撃の正体などすぐに看破される。

「さて次は——」

こちらが攻撃しようか、と思い再び弦を引こうとしたアイだったが、

「おっと!？」

即座にその場を飛び退いた。

直後、1秒前にアイが立っていたその場所に、真上から降り注いだ光の柱、極太のレーザー光線が貫き大爆発を起こす。

恐らくリリイと名乗る妖精の固有魔法エクストラだろうと察する。

（上級攻撃魔法並みの威力じゃん、発動も早いし、危ないなあ）

寸でのところでレーザーより逃れたアイは、飛び跳ねた勢いのまま、視界を塞ぐ黒煙の範囲からも脱した。

反射的に使用した速度上昇の武技『疾駆』エア・ウォーカーによって、数十メートルの距離を瞬時に移動したアイだったが、

「——黒風」

黒煙を抜け出したその瞬間、目の前には大鉈を振りかぶり、武技

を繰り出さんとするクロノが現れたのだった。

「そおい！」

黒い軌跡を描いて振るわれる武技『黒風』を、真っ直ぐ飛び込むように前転で回避。

自分の体の上ギリギリのラインを赤黒い禍々しいオーラを纏った大鉈の刃が通過していくのを感じる。

避け切った、と思った次の瞬間、アイの背中に僅かな痛みが走った。

「いっ!？」

斬られた、というのは直感的に分かった、そのすぐ後、何に斬られたのかも判明した。

クロノの左手に握られているのは、白銀の輝きを放つ長剣。ロングソード

「流石は聖銀ミスリルの剣、そのオーラもあっさり切り裂ける」

「キプロスの!？」 ホントにちゃっかりしてんねアンタ！」

シンプルなデザインの剣だが、それは紛れもなくキプロス自慢の『聖銀剣』ミスリルソードであった。

そのまま使っているのは、恐らく白色魔力を宿す聖銀ミスリルとの相性が悪い事によるものだろう。

いや、そんなことよりも、とアイは考えた。

(さっきキプロスと戦った時と動きが全然違う——)

『疾駆』エア・ウオーカーを使って移動した自分に追いついてきた速度、そして自分の体に刃を届かせるだけの威力と剣速で攻撃を繰り出した事、どちらも先の戦闘では見られなかったものだ。

しかし、視線の端に長杖スタッフを振るう魔女の姿を捉えた瞬間、その回答も得られた。

「なるほど、強化してもらったってワケ！」ブースト

「正解だ！」

禍々しい闇を纏う大鉈と神々しい光を放つ長剣、黒と白が交差する二連撃が弓しか持たないアイを襲った。

「——っ！」

すでに人間の臂力を遥かに上回るパワーに加えて、フィオナの『
腕力強化』がかかったクロノの剣戟は、達人の域に達するほど鋭く、
速く、重い一撃となる。

物理攻撃、魔法攻撃、両方に対して耐性を持つ使徒特有の白銀の
魔力オーラだが、クロノの振るう剣は、そこにただの霞しか無いか
のように、あっさりと切り裂いてゆく。

オーラの防御力はすでに無いに等しい、アイは己の体捌きと動体
視力と直感を駆使して嵐のように繰り出される連続攻撃を回避する。

「おおっ——」

防戦一方のアイ、その柔らかな頬に一筋の傷が走り、鮮血が吹き
上がった。

乙女の命とも言える顔を傷つけられたにも関わらず、その顔には
喜びの表情が浮かぶ。

「やるねえ、予想以上だよ！」

そう言い放った瞬間、アイはすぐ背後にまで迫っていたかすかな
気配を察知した。

「そう言うくせに、貴女まだ手加減してるでしょう？」

振り向けば、アイの目に飛び込んできるのは美しき少女の姿。

白金のロングヘアを振り乱し、エメラルドの瞳から殺意の視線を
発しつつ、繊細なガラス細工のような手のひらを自分の頭に向かっ
て突き出すリリイがそこにいた。

（あ、コレはヤバイ）

背筋を凍らせながら、アイは今出せる全力でもって回避行動に移
る。

いったいどれほどの熱量が籠められているのか、紅葉のような可
愛らしい手のひらには緑色に輝く眩い光が宿っていた。

致命的な一撃となる可能性が高い妖精の手から逃れることに集中
し、正面より斬りかかって来るクロノの攻撃が上手く避け切れない
ことを許容する。

「くあっ！」

リリーの手のひらが側頭部をかすってゆくを感じると同時、これまででない鋭い痛みが手足に走る。

健康的な魅力溢れるアイの白い太腿と二の腕が、クロノの二連撃によって赤い傷跡を刻まれた。

致命傷とまではいかない、だが確実にダメージが入った、明確に認識できるほどの痛みに、どこか懐かしさを憶えると共に、

（これは、評価を改めないといけないね）

この三人の冒険者パーティの戦力評価を、一段階引き上げること
に決めたのだった。

「――『白光矢』ルクス・クリスサギタ」

素早く構えた弓を引いた瞬間、番えられるのは2本の白い光の矢。
放たれた光の中級攻撃魔法『白光矢』ルクス・クリスサギタは、それぞれ別方向にいる
クロノとリリーを確かに捕捉し、1本ずつ空中で軌道を瞬時に変化
させながら飛翔した。

クロノは軽量で光に高い耐性を持つ『聖銀剣』ミスリルソードで、リリーは元より強い光の属性を持つ『妖精結界』オラクルフィールドで、アイが高速で放った追尾能力付加の『白光矢』ルクス・クリスサギタを防ぎきった。

二人の目の前で光の矢が眩い閃光を放って碎け散る。

その光によって視界が遮られた一瞬の間に、アイは二人から10メートルほど離れた街道の上に移動していた。

「いやーホントにやるね、たった三人にここまで押されたのは久しぶりだよ」

傷口から血を流したまま、回復もせずにアイは楽しそうに言葉を続けた。

そんなアイに対し、三人は特に驚く様子も無く、注意深く構えたまま。

「これはもう一つ封印解除しないと、相手になんないわ――」

アイは弓を握っていない右手でゆっくりと、ツインテールを形作る髪留めへ手を伸ばした。

彼女の金髪はゴムや紐で縛っているのではなく、銀色のリングで

括られている。

つい先ほど己の右腕に装着していた銀の腕輪と全く同じ質感の髪留めに、軽く指先で触れてから、アイは唱えた。

「――封印解除^{アンロック}」

そうして、腕輪と同じように、銀のリングの髪留めは弾かれたように外れ――無かった。

「……あり？」

目を白黒させるアイ、それはいつものようなおふざけでは無く、心の底から驚愕していたのだった。

（あれ、どうなってんの、何で外れないのコレ？ 故障？）

ツンツンと指先で髪留めをつついてみるが、反応は無い、本当にただのシルバークセサリーになってしまったかのようなだった。

だがそんなはずは無い、この二つの髪留めは神より供給される無限の白色魔力を抑える為の封印器である、一介の冒険者を演じるアイにとって必要不可欠な‘枷’なのだ。

「封印解除！ 封印解除！^{アンロック}」

その一言で、簡単に封印から解き放たれるはずなのだが、やはり髪留めは反応を示さない。

（いやいや、このタイミングで故障とか――いや、壊れたんなら封印は自動的に解除されるはず、それでもキーワードに反応しないってことは）

このリングの構造を簡単に知っているアイは、咄嗟に一つの可能性に思い至った。

「――『交信妨害』だ！？^{マインドジャマー}」

そして、ソレを行使することのできる術者は、相手のパーティに存在している。

妖精リリィ、彼女は『交信妨害』^{マインドジャマー}によって実験部隊のテレパシー連携を無効化して、殲滅を容易にした。

（けど、ソレとコレとは妨害のタイプも異なるし、封印器にピンポイントで合わせてくるって、どういう――）

原因と対策、考えれば自ずと答えは出るのかもしれない。

だがしかし、その時間を与えてくれるほど相手は優しくない、なぜならアイは遊び半分でもやっけていても、彼らにとっては命がけの戦いのだから。

「――影触手！」
アンカーハンド

キプロスの『黒喰白蛇』クライムイーター 封じに利用した時と、全く同じ形状、大ききの黒い4本の触手を携えたクロノが、アイに怒涛の勢いで迫り来る。

「うわっ――」

慌てて迎撃のために弓を引く。

封印状態において、瞬時に反撃できる手段は限られる、出せるだけの『光矢』ルクス・サキタを放つが、

「黒盾！」
シールド

防御魔法を構えて突撃するクロノを、高々数十発ほどの下級魔法でとめられる筈も無い。

「もう、ちよっと待ってって――」

止められないなら逃げるしか、相手から距離をおくしかない。

アイは未だ『疾駆』エアー・ウオーカーの効果が残る健脚でその場から移動を試みるが、

「お馬鹿さん、逃がすわけないでしょう？」

何時の間にかアイの背後に回りこんでいたリリイが止めに入った。背後と左右、クロノから逃れる全ての回避経路を、リリイの放った無数の光の玉が封鎖する。

（ヤバっ、逃げ道無い――）

突っ切るか、と考えるが瞬時に却下、今の状態ではリリイの魔力と殺意によって構成される光の玉に触れるのは、そのダメージを思えば危険。

結果、退路を塞がれたアイはその場で弓を引き、もう目前まで迫った4本の触手を生やすクロノを狙うより他は無い。

何十という光の矢を受け止めたシールドはすでに消滅、生身に当

たれば足くらいは止められるだろうと放ったが、

「この距離で避けるっ!？」

それは果たして見切ったのか直感か、獣のように四肢を地に着けて伏せたクロノに、アイの放った『ルクス・サギタ光矢』は命中することなくその頭上を虚しく通り過ぎていった。

「捕まえたぜ」

不気味に蠢く4本の触手は、退路を塞がれ、反撃手段をなくしたアイの手足をついに拘束する。

「ああっ!？」

互いの距離約4メートル、クロノの両肩と背より生える4本の触手によって捕らえられたアイは、当然その身をよじって逃れようと動くが、

（うわっ、この触手、オーラの魔力程度じゃ相殺できないくらいヤバイ密度だ!）

クロノが大量の黒色魔力を使って作り上げた強靱な腕からは、封印状態のアイでは逃れる手段が存在しない。

オラクルフィールド
「妖精結界全開!」

アイの背後から聞こえるリリイの声、そして展開されたオラクルフィールド妖精結界は、

「今だ——」

クロノの全身を、眩い光の球体となって覆いつくしてゆく。

捕まった自分、防御魔法で身を包む相手、この状況下において予測される答えは即座に導き出される。

そして、その回答が正解であることを、頭上を見上げて判明した。

「——やれっ! フィオナ!」

アイの頭上には、直系5メートルにも及ぶ、金色に煌く巨大な火球。

オール・ソレイユ
「『黄金太陽』」

「えっ、ちょ——」

使徒を殺すべく、太陽が落下した。

第145話 エレメントマスターVS第八使徒（2）

「さて、あのふざけた使徒を倒す方法を一時間で考えなきゃならんワケだが、何か思いつくか？」

半ば投げやり気味に言った台詞だったのだが、

「はい、一つだけ方法があります」

以外にも、その実現不可能と思われた提案は、あっさりと出された。

手を挙げたのはフィオナだった。

「本当か？」

「絶対確実、とはいきません、前提条件があるので」

「話してくれ」

正直言って、真っ向勝負する以外に方法が思いつかなかった俺にとって、僅かでも倒せる可能性が上がるなら聞かない手は無い。

藁にも縋る思いでフィオナに話を促した。

「使徒の中には、自らの正体を隠すために、あえて魔力を封印する者がいるそうですよ。」

第八使徒アイは、以前話した行方不明になっている使徒の内の人です」

そういえばそんな話もあったな、水戸黄門的な活動に勤しんでいる使徒がいると思っただが、ソレがまさかあの少女だったとはな。

「しかし、よく知ってるな、そういうのは分からないものなんじゃないのか？」

「第八使徒が、人知れず活動しているというのは共和国では有名な話ですので、その代わり、姿や能力などは一切不明ですけど」

なるほど、知名度だけは拔群だったってワケか。

「そういう正体を隠した活動をしているヤツなら、魔力を封印している可能性は高いってことか」

「その通りです。」

そして、魔力の封印に魔法具^{マジックアイテム}、封印器を利用してゐるのだとすれば、ソレに干渉して封印の解除を妨害することが出来るはずです」
「なるほど、弱体化した使徒なら三人で倒せるか、しかし——」
だが問題は、アイが本当に魔法具で魔力の封印を行っているか、という点だ。

サリエルとは二度戦ったが、どちらもそういう類のアイテムを確認することは出来なかった。

例えその前提条件をクリアできたとしても、そう易々と封印器に干渉できるのかという問題も残る。

少なくとも、異世界の魔法技術において詳しく無く、黒魔法しか扱えない俺には無理だろう。

「ねえフィオナ」

頭を悩ませる俺の隣で声を挙げたのはリリイ。

すでに幼女に戻ってはいたはずだが、大人の意識を戻したのだから、このハッキリした口調を聞いて即座に理解できた。

「封印器に利用できる魔法具は、共和国じゃ沢山種類があるものなの？」

「いえ、人の能力を永続的に制限する類のモノはそうバリエーションのあるものではないですね。

それなりに高価ですし、なにより教会によって制限がかかっているのも、一種の禁術扱いですよ」

「そう、ならあの使徒が装着している封印器は——」

リリイは中空に小さな光の魔法陣で空間魔法を発動させると、そこから見覚えのある白いリングを取り出した。

「——コレと同じ構造をしてる可能性が高いってワケね」
「なっ、それは！」

リリイの小さな指先で、リングをなぞると、甲高い音と共に7本の針が内側に飛び出した。

「そう、あの実験体がつけていた『思考制御装置』よ」
再びリングをなぞると、針は内側へと収納された。

「……」

正直なところ、この『思考制御装置』エンゼルリングというふざけた名前のアイテムは、見るも忌々しい束縛の象徴である。

見ていて良い気分はしない。

だが、ここでリリイが持ち出してきた意味は理解できる。

「ソレと同じ構造なら、上手く干渉できるかもしれないってことか？」

「どうやら『思考制御装置』エンゼルリングにも、魔力を封印する機能がついているらしい。

俺がこいつを被った頃には無かった、いや、単純に使わなかっただけか、どちらにせよ魔力封印の実体験こそ無いものの、キプロスが連れていた実験体の偽装に、この機能を使用していたのは間違いない。

「そういうコト、さっき実験部隊のテレパシーを妨害したのとはまた違った種類の『交信妨害』マインドジャマーが必要だけど、たぶんできると思う」

「リリイさんなら、いけるかもしれませんね」

「どうやら、封印作戦が実行できる可能性が出てきたようだ。」

「一番の問題点は、本当に封印器をしているかどうかだな。」

「ヤツが明らかに手加減して戦ってくるのは間違い無いが、それは自分で抑えているだけかもしれないし」

「そうですね、あと封印器に直接干渉するなら、ソレがどこに装備しているのか特定する必要がありますね」

「フィオナ曰く、実験部隊のテレパシーを妨害するのは、空間そのものに『交信妨害』マインドジャマーを仕掛ければよいが、封印器の干渉の場合ではソレそのものにピンポイントで妨害しなければならぬのだとか。」

「前者は現代において妨害電波を発して電話や無線をジャミングしているイメージ、後者はインターネットを通じてパソコンにハッキング、あるいはクラッキングするイメージだろう。」

「どちらも問題ない、私がテレパシーで探りをいれるから」

「出来るのか？ 使徒ならテレパシー対策くらいしてるんじゃない」

のか？」

俺も自分で使えない以上は精神感応テレパシーという能力に関して詳しくは無い。

しかしながら、テレパシーは決して万能では無く、心の内を探られないよう防ぐ『精神防壁』マインド・プロテクトや、干渉してきた相手を逆に攻撃するカウンター・リフレクト反撃や反射などの効果を持つ魔法も存在していることくらいは知り及んでいる。

「大丈夫、サリエルは一切覗き見る隙間もないほどガチガチに、固めて、あつたけど、アイツの頭の中はかなりユルい、表向きの感情や思考は問題なく読み取れるレベルよ」

どうやら大丈夫そうだ、というよりリリイはサリエルにもテレパシーを仕掛けたことがあったのか。

今度もっと詳しく聞いてみようかな……

「よし、じゃあこの作戦で行こうか、一応聞いておくけど、封印器してなかった場合に対処できる案はあるか？」

「その時はみんなでがんばりましょう」

「リリイもがんばるの！」

「分かった、ダメな時は正攻法でいこう。」

あとリリイ、子供のフリしても俺の目は誤魔化せないからな」

少しだけ頬を染めて恥かしそうに視線を逸らすリリイは、やはり可愛かった。

いや今はリリイを愛でている場合ではない、真剣に封印作戦を考えねばならんだ。

「封印状態にある、と言っても相手は使徒です、一流の魔術士程度には魔力もあり魔法を行使すると思います。」

例え封印に成功しても、無傷で倒せるほど甘くはないでしょう」「そうだな、それに戦いを長引かせればどんな方法で封印を覆してくるか分かったもんじゃない、出来れば短時間で……そうだな、封印が解けないことに気づいて焦るタイミングを狙いたい——」

果たして、俺達の考えた作戦は成功した。

やはりアイは最初から手加減して戦い、封印器によって力を制限しているのかどうかは、

「そう言うくせに、貴女まだ手加減してるでしょう？」

リリイがアイの頭部にかするほどだったがギリギリ手が届いた、あの瞬間に確認した。

（見つけた、封印器は二つ、銀の髪留め）

手加減している、とのリリイの何気ない問いかけに、アイは瞬間的に封印器をイメージしたことだろう。

それはリリイがはっきり読み取れるレベルで、アイは思い起こしてしまった。

これで「アイが封印器を利用している」という第一条件はクリア。
（――大丈夫、リングとほぼ同じ構造、妨害できる！）
ジャマー

そして、封印器を妨害可能か？ という第二条件もクリアされた。ここまでくれば、後は手はずどおりに動くだけだ。

アイの足止めは俺の役目、トドメの一撃はフィオナの役目。

『オール・ソレイユ黄金太陽』を撃つためにフィオナは積極的に攻撃に参加させず、強化魔法による支援だけさせることにした。

もつとも、それだけでも凄い効果を発揮してくれた、まさか俺の刃が使徒に届くほど強化されるとはビックリだ。

そしてその結果、アイには俺達をもう一段階封印を解除して戦うという選択をとらせた。

これで、

「……あり？ アンロック封印解除！ アンロック封印解除！」

俺の読みどおり、致命的な隙が生まれた。

「――『マインドジャマー交信妨害』だ!？」

どうやらすぐ原因に気づいたようだが、それでも遅い。

「お馬鹿さん、逃がすわけないでしょう?」

「捕まえたぜ」

そして、ついに『アンカーハンド影触手』でアイの体を拘束した今に至る。

「今だ、やれっ! フィオナ!」

さあ、これで詰みだぜ第八使徒!

俺の体をリリイがかけてくれた妖精結界の眩い光に覆われてゆくと同時に、頭上から巨大な火球が迫ってくるのが見えた。

「えっ、ちょ――」

驚愕に目を見開くアイ、それでも俺の拘束から脱しようともがく。だが、封印状態にあり触手を振り払うほどのパワーが出せないのだろう、それは本当に非力な少女を捕まえたかのように身をよじるだけで、黒い触手はビクともしない。

いいぞ、このまま、あと5秒もしない内に『オール・ソレイユ黄金太陽』は着弾し、全てを灰燼に帰してくれるはずだ。

当然、俺も無傷では済まない、本当に生き残れるのかどうかも不安だが、コイツと相打ちなんてのは御免だ。

俺は『アンカーハンド影触手』の拘束力が落ちるのを承知で、元のワイヤー状へ細めると同時に、着弾点であるアイの立つ位置から全速力で後退を始める。

残り時間は約3秒、それまでは爆心地から50メートルくらいは離れておきたい、流石に4メートル地点では100%生き残るのは不可能だ。

走る、走る、振り向かずにとただ真っ直ぐと、一体どれだけの距離

を駆け抜けることができたのかは分からないが、一步でも遠くへ行こうと、最後の瞬間まで足を動かし続ける。

「……っ!？」

そして、ついに金色に輝く第二の太陽は地面へ届き、爆発。

失明せんばかりの閃光が広がる、咄嗟に目を閉じていても、瞼の裏からはつきりと荒れ狂う強烈な輝きを感じる。

それだけではない、その光は俺の体をも焼き尽くそうとしているかのように、全身に凄まじい高熱、灼熱が纏わりつく。

「熱っ——」

恐らく爆発の衝撃によって、俺は宙を二転三転しながら吹き飛ばされているのだろう、上下左右が判然とせず天地が逆さまになったかのように思える。

リリースが全力全開で守ってくれた妖精結界のお陰で、オラクルフィールド地面に叩きつけられる衝撃は感じない——だが、それもついさっき、僅か1秒前までの話。

最も強いインパクトのダメージを防ぐことは出来たが、それを相殺して完全に妖精結界は消滅した。

「ぐあああああ!」

全身に走る衝撃と高熱、だが致命的なほどではない、まだ防御手段は残っている。

それは『黄金太陽』オール・ソレイユを俺が至近距離でくらうことが決まったために、フィオナが防御用に貸してくれたレアな魔法具の『蒼炎の守護』マジックアイテム
ナナブラスト・アミュレット。

効果は炎によるダメージの大幅軽減、フィオナはこれのお陰で自分が撃った『黄金太陽』オール・ソレイユのギリギリ射程内に立っていても無傷で済んでいるのだ。

しかしながら、流石に爆心地から僅か50メートルしか離れていない状態では、身に降りかかる莫大な熱量から身を守るには少しばかり、いや普通の人間なら耐えられないほどに炎が通ってしまう。

「ああああ——」

ローブの胸にある内ポケットに入っている『蒼炎の守護』ナナブラスト・アミュレットが深い青色の輝きを放ち、炎熱防御の力が全開で発揮されているのが分かる。

でもダメだ、ヤバい、これ以上の炎は俺にも堪えられそうに無い。これまでずっと俺の身を守ってくれたローブの『悪魔の抱擁』バフオメット・エンプレスにまで火がついた。

キプロスとの戦闘において、すでにボロボロになってしまった黒ローブだが、『黄金太陽』オール・ソレイユの余波で、ついに魔力が尽き消滅しようとしている。

最後の最後までローブは俺の身を焦がす熱を防ぎながら、裾のほうから色を無くし、灰となって消え去ってゆく。

ローブが消滅しきってしまったえば、いくら改造によって強化された肉体といえども、この炎熱に耐えられるとは思えない。

つまり、『悪魔の抱擁』バフオメット・エンプレスが灰となって燃え尽きたその瞬間に、俺の死は確定する。

くそっ、頼む、頑張ってくれ、あと少しだけ、耐えてくれ！ 全身を苛む炎熱を堪えながら一心に祈る。

そして、ついに俺から悪魔の抱擁が解かれた――

第146話 エLEMENTマスターVS第八使徒(3)

生きてる。

致命傷は負ってない、手足が吹っ飛んだわけでもない、五体満足、体はなんとか動く。

「ぐっ、う……」

濛々と黒煙が立ち込める中、軋みをあげる体に活を入れつつどうにか起き上がった。

煙が晴れないので視界はほぼゼロだが、自分の姿くらいは確認できる。

ちくしょう、愛用の『悪魔の抱擁』バフォメット・エンプレスが影も形も無い。

今の俺は丈夫なだけで何ら魔法の効果など宿していない、黒いシヤツに革のズボンを穿いただけの一般人と同等の格好だ。

黒ローブは今の一撃によって、とうとうダメージの許容限界を超え、灰となって消滅してしまった。

「今まで、ありがとな」

リリーの小屋にあった宝箱から入手して以来、今日までの約3ヶ月間ずっと世話になった相棒に心から感謝の言葉を送る。

防具として最後の最後までしっかり役目を果たしてくれた『悪魔の抱擁』バフォメット・エンプレス、コイツを着てなければギリギリで死んでいたな。

「それで……どうなったんだ？」

多少焦げちゃいるが、しっかりと二つの足で立ち上がり、正面を見据える。

吹き抜ける風によって爆発の煙が霧散してゆき、足元から順に視界が晴れていった。

俺は爆風によって何十メートルも吹っ飛ばされたのだろう、爆心地に直撃した第八使徒アイは、果たしてどうなったか――

「……なんだ、アレは？」

ほぼ黒煙がおさまり、凄まじい爆発の威力を証明する直系100

メートル級のクレーターが確認できる。

俺はその淵に立っていて、ここから中心地点である場所まで一切遮るものなく見通すことが出来る。

そして、クレーターの中心に大きな黒い塊があるのを、俺の目は確かに捉えた。

「モンスターか？」

少し近づいて見れば、その黒い塊、いや、ブスブスと未だに熱を感じさせる黒焦げの物体は、どうやら獅子のような姿をしていることが分かる。

蹲っているような格好で、正確な大きさは測りかねるが、およそ全長は10メートル以上ありそうな巨体だ。

一体なんだコイツは？　アイはどうなった、このモンスターがアイなのか？

疑念を抱きつつも、警戒するために『呪怨鉈「腹裂」』を取り出して構える。

「クロノ！　大丈夫！？」

と、そこでクレーターの外側から叫ぶリイの声が届いた。

フィオナの声が無いのは、恐らく魔力切れで倒れているからだろう。

「大丈夫だ、ちゃんと生きてるぞ！」

未だ少女の姿を保つリイが現れる、どこか煤けて見えるのは、俺に妖精結界オラクルフィールドをかけてくれたため、自分の身を守ることが出来なかったからだろう。

そんなリイがこちらへ駆け寄ろうとしその時、生気を感じさせずに倒れ伏している謎の獅子のモンスター、その大きな口元が僅かに動くのを見た。

「まだ生きてるのか！？」

それは正しい意味での問いかけではなかったが、

「――いやあ、危なかった」

答えは返ってきた。

「ツミキちゃんが庇ってくれなかったら、死んでたよアタシ」
倒れているモンスター巨大な口が一気に開かれる。

その鋭い牙の並ぶ獰猛な口腔より、一人の少女が姿を現した。

「流石にビックリした、封印器に妨害ジャマかけてくるヤツなんて始めてだよ」

如何にも面白そうに微笑み、何事も無かったかのように、第八使徒は再び俺の前に立ちはだかった。

炎による負傷は皆無、先とほぼ変わらぬ様子のアイ。

唯一の変化は、綺麗な金髪を二つに結ったツインテールから、髪を下ろしたストレートヘアになっている点。

それはつまり、力の封印が完全に解けている事の証であった。

「くっ、マジかよ……」

互いの距離は10メートルも離れていない、それにも関わらず、濃密な魔力の気配が俺の肌を刺すように刺激してくる。

全ての封印が解かれ、その身に纏う白銀のオーラが明らかに密度を増しており、それ以外にも、何とも形容しがたい、見えない圧力のようなものも感じられた。

これは、拙い、『黄金太陽』オール・ソレイユで仕留め切れなかったことも拙いが、使徒を本気にさせてしまったのがなによりも拙い。

「逃げてクロノ！」

響き渡るリリイの声と共に、俺の背後から追い越すように光の玉がアイ目掛けて飛んでいった。

呆然と見ているわけには行かない、俺は兎に角、相手から距離を置こうと全力で後退を始める。

だがその一步を踏み出した時、アイが目にも止まらぬ速さで、あのボロい木の弓を構えた。

「逃がさないよ、この一発で終わりにしてあげる——」

リリイの放った幾つもの光の玉は高速で敵に迫る、1秒もしない内に距離はゼロとなり爆発するだろう。

だが、その刹那の間に、アイはいつの間にか形成された一本の矢

を放った。

「――『ルクス・サギタ光矢』アイテール付加『神聖元素』」

放たれたのは、先にも見た白く輝く光の矢、そのはずだが、矢から発する光がぼやけて、いや、矢が存在する空間そのものが歪んでいるかのように、はつきりと目に見えない。

妙なエフェクトのかかった『ルクス・サギタ光矢』を放つと同時に、木の弓が木っ端微塵に砕け散った。

矢の発射に耐えられなかった、恐らく本当に見た目通りにボロいだけの弓矢だったんだろう。

そんな事を思った時点で、ついにリリーの放った光の玉は着弾。眩い閃光と土煙を上げて、弓を放った体勢でいるアイの姿を隠した。

使徒の実力を思えば、それほどダメージにはならないだろう、だが今はそれよりも、アイが放った、よく見えない、『ルクス・サギタ光矢』の行方を気にするべきだ。

「くっ、リリー狙いか!？」

『ルクス・サギタ光矢』は正面に立つ俺を大きく迂回するように、背後に立つリリーに向かって飛んでいく。

光の矢がぼやけて見えにくい、飛来する速度そのものはそれほどでは無いので、はつきり目で追うことができる。

「こんな遅い攻撃――」

リリーが自身に向かって迫り来る『ルクス・サギタ光矢』を迎撃するべく、いくつもの光弾を高速で撃ち込んだ。

矢一本というそのものは小さいが、リリーの高い命中力と自動追尾機能を持つ攻撃が、目で追える速度で真っ直ぐ飛ぶ物体に対して当てられないワケが無い。

飛来する目標に次々と殺到する光弾が連続的に閃光を伴う小爆発を巻き起こす。

しかし、

「――ウソっ、下級魔法のくせにっ!」

光の下級攻撃魔法でしかないはずの『ルクス・サギタ光矢』は、リリーの攻撃をものともせず、軌道すらずらすことなく飛び続ける。

「避けるリリー！ その攻撃はヤバイ！」

アイが放ったのはただの『ルクス・サギタ光矢』じゃない、俺は確かに、ヤツが「アイテール」という、何か、エンチャントが付加されている意味合いの言葉を聞いた。

「っ！？」

回避行動にリリーが移ったその瞬間、光の矢はそれに反応したように急加速。

しかも、リリーが跳んだ方向へ急旋回し軌道修正した。

「自動追尾能力か！」

この速度、この機動性能、回避は不能。

リリーに残された手段は、オラクルワールド

「妖精結界全開っ！」

防御のみ。

ズドドドドッ！！

「リリーっ！？」

ルクス・サギタ

『ルクス・サギタ光矢』では有り得ないほどの大きな爆発が巻き起こる。

眩い破壊の光が弾けると共に、リリーの小さな体が吹き飛んで行くのが見えた。

そんな、まさか、リリーが――いや落ち着け、手足に欠損は見られないし、大量に出血している様子も無い。

オラクルワールド

『オラクルワールド妖精結界』は破られたが、エンシェントビロードのワンピースがリリーの身を守ったはずだ。

吹き飛ばされたリリーはそのまま地面を滑るように転がってゆき、ようやく動きを止める。

反応が無い、もしかして衝撃で気絶したのかもしれない。

「妖精ちゃんの心配してる場合じゃないよ、アタシの攻撃はまだ終

わっていないんだからね」

アイが言い放ったその言葉の意味は、少しばかり視線を上へ向ければすぐに理解できた。

「なっ——」

見上げれば、リリイを襲った『ルクス・サギタ光矢』は、変わらず矢本体を歪ませた状態のまま、今度は俺目掛けて迫り来るのが目に入った。

リリイをブツ飛ばした爆発だけでその効果を終えたわけではない、どうやら本当に『バレットアーツ一発』だけで終わらせるつもりらしい。

「ちくしょう、魔弾！」

左手にタクトを握り、リリイと同じように『ルクス・サギタ光矢』を迎撃するべく魔弾の弾幕を浴びせかける。

だが、やはり効果はないようで、何発も命中しているにも関わらず、矢はターゲットをロックオンしたミサイルの如き正確さで俺目指して飛び続ける。

全力で後退しつつ魔弾を撃ち続けるが、抵抗虚しく距離はあつという間に詰められてゆく。

回避は不可能だ、だが果たして、俺にこの攻撃を防ぎきれなのか？ リリイの『オラクルフィールド妖精結界』ですらあっさり破れたのだ、俺の防御魔法

なんかで——いや、諦めるな、やるしかないんだ！

「おおおおおお、黒盾っ！」

タクトを握った左手を前に掲げて、最大硬度で『ルクス・サギタシールド

光矢』、俺は両足を踏ん張ってインパクトの瞬間を迎える。

ギャリリリ——

甲高い不気味な音を立てながら、矢の先端が黒色魔力の盾に阻まれる。

着弾ではあるが、爆発はしない、そのまま壁にドリルで穴を開けるかのような勢いで、歪んで見える光の矢は黒盾に食い込んでくる。その拮抗は一瞬で破られる、矢は当然のように盾を貫き、その先

へ進む。

未だ前へ振り上げたままの左手、そこに握られているタクト、『ブラックバリスト・レプリカ』が、矢が纏う、歪み、に触れた瞬間、握りの部分まで粉々に粉碎してしまった。

砕け散るタクトの破片が一つ一つ見えそうなほど、時間がスローモーションで流れていつている感覚。

迫る矢、阻むものは無い、その先にあるのは俺の顔、より正確にいうなら、この光景を映し出している瞳に向かって迫ってきている。「くっ！」

それは反射なのか、それとも別な意思なのか、この僅かな刹那の間に右腕が動いた。

矢と俺の前に、黒い壁、いや、それは黒い刃、『呪怨鉈「腹裂」』を挟み込み、刀身の腹で受ける最後の防御と成す。

ギャリリ――

1秒前にも聞いたのと同じ音、矢は、呪いの武器である鉈の硬い刃に阻まれつつも、その前進を止めるものを一切許さないかのよう

に、進み続ける。
削られる、まずは鉈を覆う黒色魔力のコーティングを、0，2秒もかからない。

さらに削る、今度は呪いを秘めた刀身を。

『呪怨鉈「腹裂」』は呪いの武器、つまり魔法の武器である、魔力を宿すことで刀身の硬度は通常の鋼とは比べ物にならないほど高い。

だが、それでも、この、

バギンっ！

矢を止めることが出来ない！

「っ——」

愛憎の怨念を宿す黒き刃を、光の矢が貫通する。

今度こそ、俺を守るモノは何も無くなってしまった。

止められない、止める手段など無い。

だから、俺にはもう、矢が俺の視界にどんどん接近してきて、この目を、左目に突き刺さるまで、ただ見ていることしかできず、

ドズッ

「があああああああああああああああ！」

光が、俺の左目に飛び込んできた。

完全に眼球を貫かれた、痛い、激痛、だが——耐えられないほどじゃない！ まだ、死ぬほどじゃない！

「あ、あああ……」

矢は俺の左目に真っ直ぐ突き刺さり、ようやくその動きを止めた。生を認識できる時点で、そのまま貫き脳にまで達していないのだろう。

だが当然、視界の左半分が見えない。

健在な右目だけが映す景色には、俺の左目に突き立っているのだろう白い光の矢が見えた。

俺はすでに握りだけとなってしまうた『ブラックバリスト・レプリカ』の残骸を放り捨て、刺さった矢を掴む。

すでに空間を歪ませて見える不思議なエフェクトも消えており、さらに光属性のはずだが触れても確かな物質の感触があり、高熱も感じることはなかった。

『光矢』というより、白色魔力を固めたサリエルの『杭』サギタと同じようなものか。

「う、おおおおおおお！」

ほんの僅かな躊躇を振り切って、一息に矢を抜き放った。

左目の奥で、何かがブチブチと千切れる感覚、瞳孔が瞬間的に押

し広げられる感覚、どちらも二度と経験したいと思えないほどおぞましい感触を経て、

「ぐうおお……お……」

突き刺さった眼球ごと、光の矢を抜ききった。

「はぁ……はぁ……」

矢に突き刺さった自分の目玉など見ようという気にはならなかった、反射的にそのまま矢を投げ捨てた。

空っぽになってしまった眼孔に、半ば無意識的に『肉体補填』でドロリとした黒色魔力を流し込み、そのまま押し固めて失った眼球の代わりとする。

それも所詮ただ肉体を、傷口を埋めるためだけのモノ、ガラス玉をはめ込んだのと同じように、そこに映るはずの景色を俺に見せる事は無い。

「はぁ……」

今考えるべきことは、失った目のことではない、未だ立ちほだかる敵、使徒、アイのことだけだ。

残った右目だけで、いつの間にかすぐ前までやってきていたアイを睨む。

「ごめんね、ちょっと本気出しちゃった」

ペロリと小さく舌を出して、少しでもバツの悪そうな表情のアイは、まるで悪戯が見つかった子供のようだ。

この距離なら、矢の穴が空いただけでまだ壊れてはいない『呪怨鉈「腹裂」』が届く。

だが、動けない、鉈を握る右腕がピクリとも反応しない。

決してイカれてしまったワケじゃない、この至近距離にあって攻撃する隙、タイミングが全く無いからだ。

くそっ、動けよ、相打ち覚悟でもいいから、攻撃するんだ。

リリィは気絶、フィオナは魔力切れ、戦えるのは、もう俺しかないんだぞ！

「そんなに睨まないでよ、勝負は悪魔さん、じゃないや、クロノク

ん達の勝ち、ってことにしてあげるからさ」

「どういう、つもりだ……」

「どうもなにも、アタシの弓は壊れちゃったし」

両手を前に突き出して、開いた手のひらをひらひらするアイ、その動きはやはり子供っぽいコミカルさを感じさせる。

「どっちかが死ぬまで勝負をつけない、なーんて言って無いし、クロノくんも無駄に死にたくはないでしょ？　っていうか、ツミキちゃんに助けられちゃったし、アタシの反則負けもあるっていうか？　まあ、そんな感じ」

今の俺には、呼吸と瞬きする以外に動くことが出来ない。

コイツの言うコトに対して、首を縦に振って肯定する気も起きなかった。

「ふふふ、今日の決闘は本気で死ぬかと思ったし、ツミキちゃんも死んじやったしで、かなりハードモードだったけど、楽しかったよ」
ありがとね、と言いながら、気安く俺の肩を叩くアイ。

俺は反射的にその手を振り払った。

「んもー、そんなに怒らないでよねー！

でも許してあげる、三人ともよく頑張ってくれたしね、だから――

――」

その瞬間、アイから迸る白銀のオーラに混じって、圧倒的な殺意が奔った。

「――手え出しちゃダメだからね、ミサ」

その殺意は、俺ではない、別の誰かに、そう、今気づいた、俺のすぐ後ろに立っている何者かに送られているのだった。

「なんか苦戦してるみたいだったから、折角助けにきてあげたのに、それはないでしょ」

「だ、誰だ……」

ゆっくりと振り向くと、見たことの無い少女の姿。

「第十一使徒ミサ、この私が殺してあげるんだから、感謝しなさいよねっ！」

新たな使徒を名乗る者が、そこに立っていた。

第147話 惨めな勝者

淡い桃色の髪をなびかせる少女は、

「第十一使徒ミサ、この私が殺してあげるんだから、感謝しなさいよねっ！」

自信に満ち溢れた表情で、そうクロノに言い放った。

「第十一使徒だと……」

ただでさえ現れるはずが無いと思っていた使徒が現れ、この上さらにもう一人の使徒が登場したことに、状況の理解が追いつかない。だが、そんなクロノのことなど全く構わずに、二人の使徒は会話を始める。

「手え出すなって言ってるでしょ、大人しく帰えりなさいよミサ」

「はあ？ それ本気で言ってるの？ なんて魔族をわざわざ見逃してやらなきゃいけないのよ、目に付いたらちゃんと駆除しておかなきゃ神様に顔向けできないでしょ使徒として」

「アタシの神はそんなこと言っていない」

俄かに魔力と殺意が二人の間に迸る。

一触即発、本気の使徒を相手にできるほどの力が無いことをいやでも理解してしまっているクロノは、息を吞んで黙ってその場に立ち尽くすことしか出来ない。

「まあいいわ、ここは先輩の顔を立てておいてあげる」

数秒の間をおいて、ミサがあっさり引いたことで緊張状態は終息した。

「それで、何でミサがこんなところにいるわけ？」

「んふふ、私の力を借りたいって人がいてね、サリエルじゃなくて、この私に、どうしてもお願いされちゃったのよ」

ふん、と胸を張るミサ、その胸はサリエルの倍以上のボリュームを誇っており、それなりに様になっていた。

「豚もおだてりゃ——いや、で、そのお願いってなに？ もう終わ

ったの？」

「その野蛮そうな男と、あっちとこっちに転がってる女二人を始末すれば終わりだったんだけど、アイ先輩がどうしても、って言うから、これでやめというてあげるわよ」

「ふーん、それじゃあアンタの仕事って——」

「そ、この道を通る魔族の、殲滅♪」

ああやっぱり、と大した反応の無いアイの傍らで、それまで息を殺して立ちすくんでいたクロノの背筋は凍りついた。

（コイツは、今、何て言った？ 殲滅？ この道を通る魔族……それは、つまり……）

「ねえ、その男、私のこと超睨んでるんだけど——」

クロノの視界から、ミサの姿が消失、いや、それはただ消えたように見えただけ。

瞬間移動でもなんでもない、ただ素早く動いた、それだけの動作。そして、クロノの認識外の速度で動いたミサは、

「ごはっ!？」

厚い腹筋に覆われる腹部に、硬いヒールのつま先を叩き込んでいた。

深く突き刺さるミサの蹴りに、クロノの体が一瞬だけ宙に浮く。

「ムカつくから、やっぱ殺しちゃっていい？」

叩きつけられるように地面へ倒れ伏す。

うつ伏せの状態で目には一面の土色しか映らないが、いつの間にか首元に鋭い刃が押し当てられているのがはっきり分かった。

「ダメだっつってんでしょ、さっさと武装聖典しまいなさいよ」

「ちえっ、ケチー！」

首から刃の感触が消える。

その代わり、ミサが履くヒールのかかどがクロノの背中に突き刺さった。

無造作に踏みつけられただけとはいえ、使徒のパワーとミスリル製のヒールによる一撃は、そのまま鉄槌を叩きつけられたかのように

な凄まじい衝撃となってクロノを襲う。

「がっ……は……」

遙か彼方へぶっ飛んでいきそうな意識を懸命に繋ぎとめ、クロノはどうにか意識を保ち続ける。

「つていうか、あんまり勝手なことするとマズいんじゃないの、パンドラはサリエルちゃんの管轄、他の使徒の介入は認められてないでしょ」

「自分の事を棚に上げてよくもそんなコトが言えるわね」

「アタシはいいの、教皇の爺様にも第二使徒の勇者様にも、あとついでに神様にも許されてるから、ね」

「何か納得いかなーい！」

「はいはい、文句は気が向いたら聞いてあげるから、さっさと帰ろうよ」

不満気な表情を隠しもしないミサだが、アイの言葉には賛同したようだ。

「それもそうね、コイツら殺せないんなら、何時までもこんなところに居ても仕方無いし」

ミサが細い指先をパチンと弾くと、それだけで中空に白い光の魔法陣が瞬時に形成される。

倒れたままのクロノはソレを見ることは出来ないが、アイは一目見てその魔法陣が如何なる効果を秘めているのか理解した。

「グリフォンの使い魔だ！^{サイヴァント}」

目を輝かせるアイの先には、魔法陣より鷲の上半身と獅子の下半身を持つモンスター、グリフォンが召喚された。

その大きさは当然、元の動物である鷲と獅子よりも遙かに巨大な体躯を持っている。

10メートルを大きく超えるグリフォンはいかにもモンスター然とした力強さと獰猛さを感じさせるが、純白の羽毛と毛皮に包まれた全身は、神々しさを併せ持つように見える。

それは、最も強い神の加護を持つ使徒が騎乗するに相応しい姿で

あった。

「いいなあ、アタシも次のツミキちゃんキマイラは合成獣グリフォンじゃなくて有翼獣にしよっと」

「そうそう、いいでしょう私のグリフォン——って、勝手に乗らないでくれる!？」

召喚した主たるミサを差し置いて、さっさとグリフォンの背に乗っかろうとするアイを慌てて取り押さえる。

「ええーいいじゃん別に乗せてくれたって、っていうか乗せて、アルザス村までいいからさ」

「何処よアルザス村って……いいから、アイ先輩はアタシの後ろ! ほら、早く手綱を譲りなさいよ!」

グリフォンの豪華な鎧の上でキャイキャイと言い合う二人の少女、実に楽しそうなやり取りだが、

(なんだよ、コレ……ふざけんなよ……)

それが好き勝手に自分達を邪魔してくれた使徒であれば、反吐が出る思いであった。

「ま、待てよ……第八使徒、アイ」

痛む体に鞭打って、ゆっくりと起き上がるクロノ。

今にもこの夕暮れの天空へと飛び去っていつてしまいそうなグリフォンに跨るアイに向かって吼える。

「他のみんなはどうしたっ! 逃がしてくれるんじゃないのかよ!」

立ち上がったクロノに対して、少々驚きの表情を見せたアイだったが、すぐに悪戯っぽい笑みを浮かべて答えた。

「あははは、ゴメンね、なんか、死んじゃったみたいだよ、避難してる魔族も、あの冒険者達も、でしょ?」

ポンポンとミサの肩を叩くと、彼女は面倒くさそうに口を開いた。「あー、うん、何か一週間くらい前から村人っぽい魔族がイッパイ来たから、とりあえず全部駆除しといたよ。」

あと、ついさっき馬車でゾロゾロ来たヤツらなんてさ、結構しつ

こくつて、イヤんなっちゃうわ全く」

「まあ、そういうコトだから、一生懸命戦ってたのに、残念だったね、次また頑張ってよ」

それはクロノに突きつけられた残酷な真実。

冗談だと否定できない、なぜなら、使徒の力を知るが故に。

自分達が必死になって稼いだ、十字軍を足止めた6日間、その戦いをしている間、逃がすべき避難民はすでに死んでいて――

「……な」

そして、共に戦った冒険者達も、自分がこのふざけた使徒のお遊びに付き合っている間、また別のふざけた使徒によって、殺された。

「そん、な……」

クロノの体から、力が抜けてゆく。

あれほど離すまいと強く握り締めていた『呪怨鉈「腹裂」』も、気がつけば地面へと転がり落ちていた。

「もしまた出会うことがあれば、相手してあげる、次は負けないんだからね！」

それじゃあクロノくん、バイバーイ♪」

最後の最後まで、能天気な台詞を残して、二人の使徒は去って行った。

巨大な白いグリフォンは、夕焼けの赤い空へ消えてゆく。

後に残されるのは、第八使徒アイとの決闘を征した、惨めな勝者のみ。

「そんな……嘘、だろ」

第148話 アルザス村占領

アルザス村に敷いた司令部、村長宅の一室に、二人の使徒と十字軍占領部隊の指揮官ノールズと副官、改め第八使徒直属の部下であるシスター・シルビアの四人は会していた。

天上人たる二人の使徒を前に、深々と頭を垂れるノールズであったが、その表情は苦虫を噛み潰したかのようなものである。

「……魔族殲滅にご協力頂き、感謝の極みであります、第十一使徒ミサ卿」

それでも、その口から出るのは賛辞と感謝の言葉以外には許されない。

それが例え、肘掛付きの椅子にふんぞりかえって、

「だーかーらー私はもう帰るって言ってるでしょ！」

「いーじゃん、折角ご飯用意してくれてるって言うんだから、食べていきなよ」

キャーキャーと姦しく言い合いながら、全く自分の話など聞いていなかったとしてもだ。

「イヤよ、こんな辺境のショボい占領部隊が用意できる食事なんて、この私の口に合うわけないし」

「えー、パンとスープ美味しいよ？ 携帯食料より全然美味しいよ？」

「アンタは使徒のくせに食生活貧しすぎるのよっ！

私達は神に選ばれた特別な存在なの、だからその生活も他の人とは違う特別なものでなきゃいけないの」

「貴族みたいなコトいうねー」

「本当に貴族なのよ！ 伊達に、卿、ってついてるんじゃないの！」

「アタシは爵位もらって無いし――」

延々と続けられるガールズトークに、ノールズは硬直状態のまま待たされることを余儀なくされていた。

隣で自分と同じように傳くシルビアへチラリと視線をやって様子を見ているが、

「……」

彼女は穏やかな微笑みを浮かべながら、己の主であるアイがミサと交わす話をどこか満足そうに聞き入っていた。

どうやらシルビアには自分に代わって二人の無益な会話を止めるつもりはないようである。

結局、その後30分ほどの時間を費やして、アイの食事のお誘いを断ったミサが退室したことで使徒同士の世間話が終息したのだった。

「――では、あの‘悪魔’を意図的に見逃した、ということですか」
そうして、ようやく事の顛末をノールズが知るに至った。

「うん、あと妖精のリリイちゃんと、魔女っ娘フィオナちゃんの二人もね」

「そう、ですか……」

イルズ村より因縁がつき始め、最終的には部隊全体へ多大な犠牲を強いた‘悪魔’、クロノが生きて逃げ延びたという事実は、ノールズにいつて到底受け入れがたい報告であったが、使徒を相手に怒鳴り散らすわけにはいかない。

長く軍組織に身を置くノールズ、上官相手に意見する愚を冒すことなど無い。

「んふふー、ゴメンねシルビアちゃん、長い間放っておいて」

「いえ、良いのですご主人様、こうして戻ってきてくれたのですから……」

ミサがいなくなったのを良い事に、今度はアイとシルビアが報告そっちのけでイチャつき始めたとしても、ノールズは決して文句をつけたりはしない。

何故女同士で……などと悩むのは無意味だ、助平爺も顔負けのいやらしい手つきでシルビアを弄ぶアイの姿を見れば、彼女が真性でそういう趣味なのだとイヤでも理解させられてしまう。

「申し訳ありませんが、もう少しばかり事実確認をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

二人のまるで恋人同士のような熱い口付けが終わるタイミングを見計らって、問いかける。

「んー？ まだ何かあるの？」

「第十一使徒ミサ卿を派遣したのは、グレゴリウス司教であるということに、間違いありませんね？」

「うん、グレゴ何とか、って言ったら、パンドラに来てる中じゃグレゴリウスのオっさんしかないでしょ」

シルビアの豊満な胸元をまさぐりながら答えたアイ、その行動を意図的に無視しつつ、ノールズは内心で得心がいった。

「なるほど、グレゴリウス司教が派遣した援軍とは、使徒のことであつたか……」

呟くと同時に、この、

「んー、ここかぁ、ここがイイのかぁー！」

「あつ、いけませんご主人様、これ以上は……」

頭の悪さ全開なアイが、それ相応の情報を持ちえていることも察する。

第八使徒は身分を隠してあちこちでモンスター退治や悪徳商人・役人を成敗して回る放浪生活を送っていることは、共和国の市井において有名な噂であるため、勿論ノールズも知っていた。

エリシオン在住で権力の中枢にいないにも関わらず、当然のようにパンドラに派遣されている高位聖職者の情報等を知っているということは、恐らく各地にシルビアのような部下がいるのだろうと予測した。

この、修道服の上から豊満な肢体をいように弄ばれるシルビアのような部下がいるのだ。

全く、けしからん。

「まあ、ミサがやったんなら、取りこぼしはあるだろうけど、逃げた魔族はほとんど殺されてるでしょ、占領部隊の任務も完了だね」

「……はい」

僅かに不満気な様子を見せるノールズに、シルビアの白い首筋に小さな赤い舌を這わせながら、アイは釘を刺した。

「クロノくんのコト、追っちゃダメだよ」

「了解、いたしました」

言ってから、クロノ含めあの三人組なら‘足手まとい’がいなければ追跡を振り切って隣国スパードへ逃げ延びることはそれほど難しくないだろうともアイは言い放ち、ノールズの不満を益々に煽るのだった。

だが逆上して怒声を浴びせることの叶わない彼は、すでに聞くべきことは聞いたので、一刻も早くお引取り願うことにした。

「第八使徒アイ様も、ご協力ありがとうございます、後のことはどうぞ我々にお任せ下さい」

「ん、あーそっか、一応指揮権返しておかなきゃね。」

アタシは明日の朝ここから出て行くから、それ以降はまたオジさんが指揮官お願いね」

「了解いたしました」

もう話すことは無い、と言うようにアイは椅子より勢い良く立ち上がった。

今夜はお楽しみと言わんばかりにシルビアとガッチリ腕を組んで退室しようとしたアイだったが、扉の前で立ち止まり振り返った。

「あ、そうそう‘上’から村一つ占領するのに兵を死なせすぎだーって怒られるだろうけど、そんな時は第八使徒を負かすぐらい強いヤツがいた、って言い訳してイイよ？」

ま、信じてくれないと思うけど、じゃあねー！」

そうして、今度こそ部屋を出て行った。

一人残ったノールズは、その場から立ち上がると同時に、腰に下げるメイスを引き抜くと、

「クソがっ！」

使徒が直前まで腰掛けていた椅子に向かって振り下ろした。

兎にも角にも、初火の月6日、アルザス村の占領をもって、十字軍による全ダイダロス領の制圧が完了したのであった。

第149話 生き残った者

陽はとつくに峻険なガラハド山脈の稜線に消え、辺りには夜の帳が落ちていく。

本来ならこんな暗い夜道を通るものなどいないのだが、今この街道には、ボンヤリとした光に照らされて、粛々と歩く三つの影があった。

俯いたままひたすらに足を動かすクロノに、後ろに続くリリイとフィオナの二人はかける言葉を見つけれない。

三人は最後のポーションを消費して歩ける程度に体力を回復させてから、すぐに移動を始めた。

目的地は、冒険者達が第十一使徒に襲われたであろう場所。

ミサの言葉を信じるならば、街道に戦いの痕跡が必ず残っているはずである。

冒険者達を乗せた馬車の列がクロノ達を置いて走り去ってから、時間は半日と経っていない、襲撃地点はそれほど遠い地点ではないと予想できる。

そして、それをクロノは確認せずにはいられなかった。

（足が、重い……）

今のクロノは、考えることをやめている。

冒険者達がどうなったのか、避難民がどうなったのか、これからどうなるのか、どうすればいいのか――全て思考停止して、ただ足を進ませることに集中する。

それでも胸の奥底ではぼんやりと、だが確かに最悪の予感・予想が渦巻き、己の心を苛んでくるのだ。

故にクロノは進む、事の真相を自分の目で確かめるまでどうすることもできないのだから。

そうやってどれだけ時間歩き続けたらだろうか、恐らくそれほどではないのだろうが、クロノにとっては無限に思える道のりに、よ

うやく終わりが、答えが、見えた。

「……っ!？」

灯火代わりに輝くりリイの光球に照らされて、クロノのもう右片方しかない目に、遠くに転がる四角形が映った。

改造強化で夜目も夜行性モンスター並みに働くクロノにとって、見間違いなどあるはずない。

その四角い何かを認識した瞬間、クロノは走り出した。

「あっ、クロノ！」

「クロノさん——」

二人の声など聞こえない、それを確かめずにはいられない、例え、最悪の結末が待っていたとしても。

「あ、ああ……」

それは、紛れも無く馬車の残骸であった。

見間違えようも無い、自分達が脱出用に急造した、塗装すらされていない荒い木造の馬車、その荷台部分。

クロノの目に映ったのは後ろ半分、前半分は巨大な鉄球でもぶつけられたかのように、大破していた。

「こ、こんな……」

視線の先には、同じように横転し、所々に破壊の後がみられる馬車の残骸が点々と続いている。

そして、未だ見えない暗い道の向こう側から、ここ数日でイヤというほど嗅ぎ慣れた濃い血の匂いが漂ってきた。

クロノの脳裏に思い浮かんだのは、頼もしい冒険者達の顔でも、憎き十字軍の顔でも、ふざけた使徒の顔でもない。

それは燃え盛るイルズ村の光景、ただそれだけが頭の中にはつきりと浮かび上がっていた。

全てが手遅れで、誰も助けることのできなかった、あの地獄。

今この場所には焼け落ちる家々もなければ、十字架に磔にされた友人もない。

だがここは、滅び去ったイルズ村と同じ、絶望の景色であった。

「こんなの……あんまりだ……」

よろよろと歩き続けたクロノだったが、ついに気力が尽きてその場に膝を屈した。

目の前には、デコボコと大小のクレーターに、なぎ倒された木々など、激しすぎる戦いの跡が広がっている。

一体如何なる壮絶な死闘がこの場で繰り広げられたのか、今となつては窺い知ることなど出来ないが、ただ一つ分かっている事は、
「みんな……死んでる……」

冒険者達が無惨に敗北した、という事実のみ。

そこかしこに散らばる、どこか見覚えのある惨殺死体。

一際大きなクレーターの中心で、胸元に巨大な牙の大剣が突き立ち地面に縫い付けられている巨軀はヴァルカンだ。

心臓を貫いて真っ直ぐ突き立つ『牙剣・悪食』には、肘から切り落とされた右腕が、未だ力強く柄を握っていた。

路傍に打ち棄てられるように転がっている黒いボロきれば、傍らに髑髏を模した短杖ワンドがなければモズルンだとは分からなかっただろう。

執拗に打撃をくらったのか、それとも巨大な何かに踏み潰されたのか、つま先から頭为天辺まで骨の一欠けらも残さず粉々に粉碎されていては、骸骨の面影すら無くなっており、本人を特定するのは不可能だ。

横倒しの大きな木へもたれかかるように倒れこんでいる3つの死体は、『三独姫』の三姉妹に違い無い。

遠目には三人が横一列に仲良く手を繋いでいるように見えるが、実際は互いの手のひらを矢で貫かれ、強制的に手が重なっているだけ。

彼女達は首から綺麗に頭部を切断されており、三人とも同じ装備に同じような背格好をしているため、誰が誰だか分からない。

どこかに転がっているかもしれない生首を探す気にはとてもならなかった。

「なんだよ……ふざけんな、なんなんだよコレは……なんで、こんなコトに——」

周囲を見れば見るほど、目に入る死体、死骸、遺体、どれもこれも血みどろで、五体満足なものなど一つとして無い、殺害者の悪意を感じずにはいられない、殺しすぎ（オーバーキル）なもののばかり。だが、そんなバラバラでグチャグチャな死体であっても、その身体的特徴、服装、装備品などから、誰であるのかほとんど判別がつく、ついてしまう。

一月にも満たない期間であつたが、寝食を共にして、肩を並べて戦った戦友たちだ、変わり果てた姿となっても見違えるはずがない。だからこそ、尚更、彼らの死を理解し、信じ、どうしようもなく受け入れてしまう。

嘘だ、ありえない、信じられない、どんな否定も意味をなさない。ここにクロノは真実を知った、第十一使徒ミサは、本当に、この道を通る魔族’を殲滅したのだと。

「こんなコトの為に、戦ってきたんじゃないんだよっ!!」

絶叫と共に流れ出る涙が、頬を伝って雨のように地面へ零れてゆく。

「くそっ！　ちくしょう！　俺は、また——」

周囲に広がる現実を拒絶するように蹲るクロノは、

「——また、誰も守ることができなかったのかよお……」

ただひたすらに、後悔の涙を流すことしか出来ないでいた。

だが後悔と言っても、どうすれば良かったのかという答えも出ない。

十字軍の侵略、アルザス村防衛戦、実験部隊の奇襲、使徒の襲来、全ての事柄に対して、自分と仲間達は全身全霊で挑んできた。

しかし、それは結局全てが無駄に終わった、無駄な努力、無駄な戦い、そして、無駄な死。

何が悪かった、何がいけなかった、どこをどうすれば、こんな悲惨な結末を辿らずに済んだのか。

答えは出ない、出るはずも無い。

たとえその答えを得たとしても、それはやはりただの後悔であり、今そこにある現実を覆すことにはならない。

だが、そんな思考の堂々巡りに陥るクロノの頭の中で、一つの閃きが走った。

それは、出ないはずの答えに、単純明快にして絶対の解答を与えてくれた。

「……俺が、弱かったから、か」

その答えは『力』。

もし、自分が何千何万の十字軍を打ち破れる力を持っていれば？
もし、自分が使徒を殺せるだけの力を持っていれば？

「俺がもっと強ければ、力があれば、誰も死なずに、済んだんじゃないのか」

その答えに至った瞬間、クロノは本当の後悔に苛まれた。

取り返しのつかない事態を招いた自分への、決して贖うことのできない罪悪として認識される。

それがどんなに飛躍した理論であったとしても、クロノにはそれが真実だと思えなかった。

「そうか、みんなが死んだのは、俺の、所為なのか」

クロノの心を占めるモノ、それは、

「は、ははは……そうか、そうかよ、全部、俺の所為じゃないか、俺が悪かったんだ——」

紛れもなく『絶望』であった。

「クロノっ！」

その時、クロノに光が差し込んだ。

七色の燐光が右目に映ったと同時に、クロノの体に柔らかく、温かい、小さなものが飛び込んできた。

「クロノは悪くない！ クロノは頑張った！ 凄く頑張った！ 誰よりも頑張ったんだよ！」

「……リリィ」

クロノの胸元にしがみつき、円らなエメラルドグリーンの瞳の端に涙を浮かべて、必死に肯定の言葉を叫ぶリリイの幼い姿がそこにあった。

「クロノは、ちゃんとリリイのこと、守ってくれたもん！」

リリイ生きてるもん、クロノが守ってくれたから、生きてるんだもん！

だから、クロノは悪くなんかないの！」

拙い台詞、だが、その幼い叫びは確かにクロノの絶望に溢れる心に一筋の光を差し込んだ。

「リリイ……ありがとう」

その光は、この凄惨な現実を覆す奇跡ではない。

クロノは唯一残った武器である『呪怨鉈「腹裂」』の刃を、自分に向けて振るっていたかもしれないほどであった。

しかし、クロノを絶望に飲まれるギリギリ一步を踏みとどまらせるだけの力が、リリイの言葉にはあった。

ほんの少しだけ、冷静さが戻ってくる。

「俺は大丈夫だ、大丈夫だから……泣かないでくれよ」

「うん、うん！ リリイ、泣いてないよ！」

ローブを失い、シャツ一枚となった胸元に顔をうずめるリリイを、クロノは逞しい両腕でしっかりと抱きしめた。

胸に感じる小さな温もりが、クロノに冷静さと、再び立ち上がる気力を与えてくれる。

「……生存者を、探そう」

リリイを胸に抱いたまま、クロノは立ち上がった。

悲しみも苦しみも後悔も懺悔も、全て後回しにして、今やらなければならぬこと果たすために、動き出す。

「おーい！ 誰か、生きているヤツはいないか！」

周囲に広がる闇夜に向かって、大声で叫ぶ。

誰でもいい、誰か一人でも、生きている者がいるのなら、自分達が救わなくてはならない。

考えるまでもなく、今この場でやらなければいけないのは、生存者の搜索と救出である。

「おーい！ おーい！ 誰かつ！ 返事をしてくれ！！」

無駄だ、使徒を相手に無事で済むはず無い——そんな考えは、頭の隅に強制的に追いやる。

こうして立ち上がれても負のスパイラルに陥る感情が逆回転を始める、だが、立ち止っている場合じゃない、挫けている場合じゃない、絶望している場合じゃない、クロノは必死に自分を奮い立たせて、声を挙げる。

「おおーい！！」

泣いてない、と言いつつ未だにグズるリリイを抱きかかえたまま、クロノは生存者を探して歩き出す。

「????? ???? ???? ???? ????——『灯火』^{トーチ}」

その時、クロノの周囲が俄かに明るくなる。

見れば、数十メートル上空に明るく燃え盛る火の玉が、いくつもゆっくり落下してきている様子が目に入った。

まるで照明弾のように、空中の火球によって広い範囲が照らし出される。

「明るくした方が探しやすいかと思って」

背後から影のように姿を現したフィオナの手には、愛用の長杖^{スタッフ}である『アインズ・ブルーム』が握られている。

「助かる、ありがとな」

僅かな笑みを浮かべるクロノを見て、フィオナは表情を変えないながらもホッと胸を撫で下ろした。

友達ゼロ人のフィオナには、こんな時なんと声をかけて良いのか分からなかっただろう。

とりあえずは、リリイに対処を丸投げしたお陰で、上手いことクロノが動く元気を取り戻してくれたので、ようやく言葉をかけることができた^とと安堵したようである。

「ところで、人を探すのに適した魔法ってないか？」

思わず口元に笑みが浮かんでしまいそうになるフィオナだったが、唐突にかけられたクロノの言葉に再びポーカーフェイスを取り戻し、質問に回答する。

「殺気や魔力ならある程度の範囲内で読み取ることができますが」

「いや、それは俺も出来る、というか、瀕死の重傷だったらそんな分かりやすい気配だせないだろ」

少し呆れたようなクロノの視線すら、フィオナにはどこか心地よく感じた。

やはり、触れれば壊れてしまいそうなほど不安定な様子だったクロノを前に、かなり自分が動揺していたと改めて実感するのだった。「残念ですが、微弱な魔力や気配を探索する類の魔法は習得していません」

「そうか、じゃあ声を大きくする魔法とかは？」

「それも習得してないですね」

「仕方無い、地道に探すしかないか、これだけ明るくしてもらえば十分ありがたい」

そのお陰で、より一層周囲の惨状が明らかになっているが、クロノは極力意識しないよう努めていた。

「おい！ 誰か！、生きてたら返事してくれー！」

そうして、何度目になるかわからない呼びかけをした時だった。

カタン――

確かに、音が聞こえた。

「誰か、そこにいるのか！？」

クロノの声に答える様に、今度はよりハッキリとガタガタという音が響いた。

それは、上下逆さまに引っくり返っている馬車の荷台から聞こえてくる。

幌の部分が自重で押しつぶされ箱型は完全に潰れてしまっている

が、どうやら車体と地面の僅かな隙間に誰かがいて、必死にそこから出てこようとしているようだった。

発信源を特定したクロノは、リリィを放り出すように降ろすと同時に、潰れた馬車に向かって走り出す。

「おい！　そこか！？」

叫びながら、車体の淵に手をかけて持ち上げる。

改造強化によって人間以上の腕力を誇るクロノは、支援魔法や強化系武技を使わずとも、木造の馬車を軽々とまではいかないが、片側をもって傾けるくらいのことはすぐに出来た。

「大丈夫かっ！？」

手の空いてるフィオナに中にいる人を引っ張ってもらおうかと思っただが、その呼びかけをする前に、馬車の下敷きになっていた人物は自力で這い出てきたのだった。

「……お兄さん、だよね？」

そこから出てきたのは、狙撃の錬金術師、シモン。

愛用となったスナイパーライフル『ヤタガラス』はその手元にはなく、代わりにくすんだ色合いの赤い石のようなものを持っている。

「シモン！？　良かった、お前は無事だったか——」

見た限り、シモンの格好は酷く汚れてはいるものの、手足に擦り傷や打ち身の痕があるだけで、致命的な負傷はしていないのが分かる。

命には別状ないようで、クロノは一安心した。

「……良く、ないよ」

地面にへたり込んで、俯くシモンの表情は、灰色の前髪がかかってクロノからはよく見えなかった。

だが、その声は確かに震えている。

「全然、良くないよ……みんな、みんな死んじゃった、アイツに、殺されちゃったんだよ」

「シモン……今は、そのことは考えないほうがいい」

腰を下ろして、そう言葉を放った瞬間、シモンは顔を上げた。

シモンのリリィと同じように綺麗なエメラルドの瞳には、大粒の涙が浮かんでいた。

「スースさんは、僕を守って死んだんだっ！」

無理だよ！ 考えないなんて、あの人は、僕のことを、ずっと――」

それが本物のルビーであるかのように、シモンが大事そうに抱く赤い石の正体が、クロノは理解した。

ソレは、スライムの核^{コア}。

ランク4の盗賊であり、シモンの観測手^{スポッター}として組んでいたスース、彼女の命の源だ。

「ぼ、僕は、何もできなかった……怖くて、アイツが怖くて……守ってもらった、だけなんだ……くっ、ううううう！」

堰を切ったように、シモンは嗚咽を漏らして泣きじゃくった。

「ごめん……ごめんな、守ってやれなくて」

クロノは、むせび泣くシモンの華奢な体を抱きしめた。

つい先ほど、リリィが自分にくれたように。

「くっ、ううう……なんで、どうして僕なんかが……生きて――」

「それ以上は言うな！ お前が生きていてくれて、本当に良かった、良かったんだよ！」

「で、でもお……」

「いいんだ、今は生き残ったことだけを喜べ、俺は、お前が無事で嬉しいぞ、シモン」

それから先は、シモンはクロノの胸に抱かれたまま、押し黙るように泣き声をあげつつけるだけだった。

シモンを励ますクロノ自身だって、未だ心の整理などついていないのだ、小さな体を抱きしめつつも、心中にはまたジワジワと負の感情が広がりつつある。

「――クロノ」

その時、リリィの鋭い呼び声がクロノの渦巻く思考を中断し、現実を意識を一気に引き戻した。

「どうしたリリィ？」

リリィの姿は幼い子供のまま、だが、その自分の名前を呼んだ一言だけで、その意識が大人のものへと変化しているのをクロノは察した。

何故、意識を戻したのかという質問はしない。

考えるまでもない、『クイーンベリル紅水晶球』の魔力を体に負担のかかる限界以上に使っても、意識を戻さざるを得ない状況になったからであると。

「アレを見て」

子供状態では決して見られないような厳しい視線を、ガラハド山脈が聳える遙か彼方へ向けている。

俺はシモンの体を離すと、リリィの隣に並んで、同じ方向へ視線を向けた。

「あれは――」

そこには、点々と連なる灯火の列。

松明を焚いて、夜の街道を、何者か、が列を成して進んでくる姿に他ならなかった。

「――まさか、十字軍の追撃部隊か!？」

「でも、それなら後ろから来るはずじゃない？」

リリィの指摘はもつともであった。

クロノもすぐに、ガラハド山脈の方向から十字軍がやってくる可能性はありえないことを理解する。

「じゃあ、避難民の列か？ いや、それだと道を逆に来ていることに――」

「あの、リリィさん……」

気がつけば、泣きはらした目をしたシモンが隣までやって来ていた。

「なに？」

リリィの鋭い視線を受けて、シモンは一瞬たじろいだ様子を見せるが、すぐに言葉を返した。

「遠くを見る光の魔法を使ってみてくれませんか」

「そうね、アレが何者なのか、見て確かめておかなきゃいけないわね」

一言の詠唱を終えると、いつかイルズ村で斥候部隊迎撃の時に使った、スコープ代わりの透明な光球^{レンズ}がリリィの手元に形成された。クロノとシモンは同時にレンズを覗き込み、夜道の向こうより迫り来る集団を観察する。

「よく、見えない……」

望遠状態でも、やはり夜間だけあつてか、シモンの目には薄暗闇と、集団が掲げる松明の輝きしか見ることは出来なかった。

だが、夜目の利くクロノの右目には、はっきりと見えていた。

「――アレは、十字軍でも、村人でもなさそうだな」

レンズの向こう側にクロノが見たのは、馬に跨った鎧姿の騎士。白一色と特徴的な十字軍の装備とは異なっており、全く別の軍隊のようにも思える。

しかし、獣人やゴーレムに特有の人を上回る巨体の影などが見えないので、少なくとも全員が人間のサイズであり、やはり人間のみで構成される十字軍の可能性も完全には捨て切れない。

「お兄さん、掲げてる旗の紋章が見えない？」

「旗？ ん……ああ、あるな、見えるぞ」

「どんな柄してるか教えて！」

目を凝らして、クロノは騎士が掲げる二つの旗をよくよく観察する。

まず、二つとも十字架が描かれていないことに安堵を覚えた。

そして次に気づいたのは、二つの旗にはそれぞれ異なる紋章が描かれているということだった。

「片方は王冠と剣が交差している、もう片方は胄と盾と槍が描いてあるな。」

「知っているのか、シモン？」

「うん、間違いない、スパード軍だ」

思わず感嘆の息が漏れると同時に、スパイダへ救援を求める使者を送ったことも思い出す。

この状況で駆けつけてくれたということは、助けるために軍を派遣してくれたということか。

「いや、待て、本当にスパイダは俺達を助けてくれるのか？」

スパイダへ逃げようと言った張本人とは思えない台詞であるが、いざ完全武装の軍隊を前にすれば、その懸念はもつともなものと言えるだろう。

なによりもスパイダはダイダロスにとって友好国では無く敵国に近い関係、そもそも避難にしたって難民覚悟で赴いたのだ、軍隊を前に心配しないはずがない。

「大丈夫、あの部隊なら話は通じると思う、あ、お兄さん、念のために聞いておくけど、部隊の先頭にいる騎士って、他のよりも重装備じゃない？」

「んん……ああ、確かに、一人だけ完全に重騎士装備だ」

リリーのレンズを使っているといっても、そのシルエットが見える程度、あまり細部までは分からないが、それでも他の騎士との違いが見て取れた。

先頭に行く騎士は、恐らく隊長格であることは間違いない。

重騎士のトレードマークのようにハルバード槍斧とタワーシールド大盾を装備している。

当然、それらを持つ重騎士本人も相応の大きさを誇っており、左右に付き従う騎士にくらべ、頭一つ分大きく見える。

他の騎士は、柄が短く刀身部分が長い、歩兵槍とは異なる特徴的な形状をした突撃槍に、大きめではあるがチャージランス大盾ほどタワーシールドゴツくはない盾を装備しており、鎧も隊長に比べて薄手のように見えるのだった。

クロノは見たままの事をシモンに伝えた。

「うん、間違いなくあの部隊はスパイダ軍第二隊『テンペスト』だ、大丈夫、僕達を助けてくれるよ」

どこか安心したような顔のシモンに、当然のことながら問いかける。

「スパイダ軍に詳しいのか？」

すると、シモンは少しばかり躊躇するような様子、だが正直にありのままを話した。

「うん、『テンペスト』を率いる重騎士の隊長は、僕の姉なんだ」
義理だけだね、と付け加えるものの、クロノは驚きに開いた口が塞がらなかった。

「あーえっと、隠してたワケじゃなくて、色々事情があるっていうか、僕自身は別にスパイダ兵じゃないしー」と、兎に角、大丈夫だから！」

気になることは色々とあるが、とりあえずはスパイダから、迎えが来たことによって、

「そうか、俺達は、助かるのか……」

クロノは、この長い戦いが完全に終わりを告げたことを悟る。

誰も守ることの出来なかった、生存者僅か4名の圧倒的な敗北で終えたアルザスの戦いは、ここに幕を閉じた。

第149話 生き残った者（後書き）

第9章は次回で最終回となります。

表だって書いてはありますが、ここが一つの区切りと捉えています。しいて言うなら、ここまでが第一部ダイダロス編、という感じですね。次は第二部スパード編、といったところでしょいか。

それと、今回の第9章はバッドエンドなので、シリアスな雰囲気壊さないようあとがきは控えてました。これ以降のギャグ回くらいは、またちよくちよく書こうかなと思っています。

第150話 蠢く白い影

メディア遺跡は、首都ダイダロスより10キロほどの地点に存在する、危険度ランク4の高難度ダンジョンである。

広大な地下空間であるメディア遺跡に最近発見された新区画の調査は、十字軍の侵略によって冒険者の活動どころではなくなっていたため、ほとんど手付かずの状態であった。

首都ダイダロス陥落よりおよそ一ヶ月の間、冒険者ギルドはその機能を完全に停止していた。

そして、それは当然、魔族の自由など許さない十字軍が支配することによって、現在も、いや、最早永久にダイダロスの冒険者達の活動は禁止されている。

故に、普段ならばちらほらと冒険者の姿が見えるはずのメディア遺跡にあって、彼らの逞しい姿は何処にもない。

だがしかし、今ここには本来活動している冒険者の数よりも、遙かに多い人によって賑わっている。

それは全員が人間、白地に十字のシンボルをあしらった揃いの服装、紛れも無く、十字軍である。

彼らの大半は、メディア遺跡の新区画に集中していた。

なぜなら、そこに目的のモノがあるからである。

「へえ〜コレがそうなんですかあ、イヤあスミマセン、凄そうな祭壇というのは分かるのですが、古代魔法関係は専門外なもので――」
エンシエント

『白の秘蹟』の最高責任者であるジュダス司教は、目的の『祭壇』の前までたどり着いたその時、背後からこの耳障りな甲高い早口の台詞を投げかけられた。

いつもと同じ眉をしかめた険しい表情のまま、喧しい声の主に向けてジュダスは振り返った。

「いやあどうも〜、私、ワタクシメルセデス枢機卿殿下直属軍団の総指揮官を務めております、グレゴリウスと申すものです、あ、位はこう見

えて司教ですので、んふふ、お揃いですねえ、同じ司教同士、変な遠慮は無用ですので、どうぞよろしく願いますう」

紛れもなく司教の位を示す法服を纏ったその煩い男は、人間の成人男性としては平均的な身長で、少しばかり細身に見えるという以外には、とりたてて目立つ容貌では無い。

馴れ馴れしくジュダスに向けて握手を求めるグレゴリウスは目をやけに細めて、いや、元々細目なのだろう、どこか狡賢い童話のキツネを思わせるような顔つきで胡散臭い笑みを浮かべている。

「『予言者』グレゴリウスか……それで、用は何だ司教殿」

てつきり無視を決め込むのかと思える雰囲気だったが、ジュダス自身は特別気を悪くした様子は無く、そのまま握手に応じた。

「いやいや、『予言者』などとお恥かしい二つ名を、まあ私が自分で名乗ってるんですけどねえ、あっはっは！」

一人で笑い声を上げながら、握手を交わした二人の司教は隣に並び、言葉を交わす。

「何の用だ、と聞いているのだが」

「ああ、これはスミマセン、どうも私お喋りなクチでして、どうにも話を脱線しやすく、よく言われるんですよ、早く本題を話せ、って」

「……」

ジュダスの無言の圧力が分らないほど、どうやらグレゴリウスは空気の読めない男ではないようだった。

「深い意味はありません、ただのご挨拶ですよ。」

私、十字軍の‘皆さん’とは是非とも仲良くしていきたいと思っております、こうして方々を挨拶周りしているのです、貴方は色々が目立たな——おっと、何かとミステリアスな方ですからねえ、どうにも居場所と連絡先などが分かりづらくて、こうしてお会いするのが最後になってしまいました、どうかお気を悪くしないでくださいね？」

「ならば、もう目的は達したであろう」

言外に早く帰れと言っているのは明白。

だがそれに気づいているのかいないのか、グレゴリウスは笑みをより一層深くして、さらに話しかける。

「いえいえ、折角こうしてお会いしたのですから、少しばかり近況報告やら、情報交換といきませんかあ？」

私はこう見えて顔は広いですからねえ、ここ一ヶ月のダイダロスの様子など、色々お教えする事ができると少しばかり自負しておりますよ、はい」

「僕には必要のない情報だ、お主も研究で籠り切りの爺に聞くことなどないだろう」

ジュダスは司教という高い位を持ちながらも、自身の研究に没頭している根っからの研究者だということは、教会の中では割と有名な話である。

曰く、ジュダスという男は自分の満足いく研究環境を整えるためだけに、司教の位まで登り詰めたといわれる。

それはつまり、誰にも邪魔されず研究さえ出来れば、他に何も欲しない、多くの聖職者が求める‘富’と‘権力’には見向きもしないということ。

そんなジュダスの話から得られるのは、何だか分からない専門的な研究の情報だけであり、自身の利益に結びつくようなものは一つもない。

ジュダスは第七使徒サリエルを‘創り上げた’ことをはじめ、その研究成果は大々的に公表され、内外から高い評価を得てはいる。

しかし、その有能さを当て込んで自身の懐に取り込もうとするにしても、司教という位は厄介なものであり、なにより最高位たる教皇自身に目をかけられていることから、ジュダスとは干渉を貫くのが良いと、教会内で評価されているのであった。

勿論、そんな評判をグレゴリウスは知らないはずが無い、が、それでもしつこい娼館の勧誘のようにジュダスへ言葉をかけた。

「貴方が‘我々’の行動に影響を与えないものであるのはよくよく

「ご存知ですよ、しかしながら——」

軽薄な細目に、僅かに鋭い光が宿る。

「——方々で‘魔族狩り’を行っているのは、下手をすれば反感を買いかねない少々危険な行動ではないですかあ？」

ジュダスは、ゆっくりとグレゴリウスに顔を向ける。

大柄なジュダスはグレゴリウスを見下ろすような格好となった。

老齡の研究者としては、少々不自然なほど引き締まり、鍛え上げられた肉体は、第一線で戦う騎士のような印象を覚える。

だが、グレゴリウスは抜き身の刃の如き威圧感を前にしても僅かほども心が揺らぐことは無い。

「何故それを——と聞くのは、野暮であるな。」

儂の行動を『予言』した、そうだろう？」

「いやあ、実はそうなんですよお、コレ以外に証拠が無くてもう色々と探るの大変でしたよ！」

中々どうして、秘密裏に動くのがお上手ですねえ、年の功ってやつですかあ、んふふふ」

ジュダスが秘密裏に、十字軍兵士や傭兵として占領部隊に己の手のものを紛れ込ませ、有用な‘実験体’を捕獲するために暗躍していたことは、教皇以外に知るものはいない。

そのはずだった。

「それで、如何でしたかパンドラの魔族は？　ご満足のゆくものでした？」

「現段階で必要数は確保できた、研究は予定通りに行われる」

すでに隠す意味はないことを理解しているジュダスは割と正直に答えた。

「『神兵計画』でしたっけ？　いやあ思っていたよりも優秀なようですねえ、このまま‘量産化’が成功しちゃったら、十字軍兵士みーんな失業しちゃうんじゃないですかあ？」

賞賛なのか嘲笑なのか、判別しづらい台詞に、ジュダスはただ「予定通りの研究成果だ」という以上のことは言わなかった。

世辞も罵倒も、この研究に打ち込む司教に対しては馬の耳に念仏と同じ、何ら気にするほどのことではない。

「あ、そうそう、それでも壊滅しちゃった部隊があるそうじゃないですか、これの事に関しては、少々詳しいですよ？　なにしろ私の配下の占領部隊で起こったことですからねえ、確かキプロス傭兵団とかいう名前でしたっけ？」

キプロス、魔族捕獲任務において唯一戻らなかった若い男の顔を思い浮かべるが、ジュダスはすぐに忘却の彼方へ消し去った。

死んだ者に用は無い、必要な駒が、部品が、壊れたというのなら新しいものに取り替えれば良いだけの事。

キプロス担当の部隊は捕獲数ゼロ、生還した実験体も半分以下の壊滅状態であった。

だが、そういう失敗をする者の存在も織り込み済み、先も言ったように、実験体としての魔族の数は十分確保できており、目的は達成されている。

故に、いやみとも取られかねないグレゴリウスの言葉にも、別段思うところは無いらしく、逆にジュダスは問い返すのだった。

「お主の方は、使徒を動かしたそうではないか。」

一万にも満たない魔族の民を殲滅させるなど、使徒の仕事ではないな」

「まあそれは私も思ったんですけどねえ、どうにも『予言』には逆らえないものでして。」

動かすところまでは良かったんですけど、帰ってきたらえらく不機嫌でしてねえ、報酬の増額につぐ増額で、私の‘ボーナス’がパ

ーになっちゃいましたよ、たはは」
くすんだ金髪をボリボリとかきながら、グレゴリウスは第十一使徒ミサの暴虐ぶりを面白おかしく語る。

「アレはお主よりも強力な‘加護’を得ているのだ、僅かばかり『
神意』に干渉できるからと言って、使徒を容易く御することが出来るなどと思わぬ方が良い」

「……ええ、そうですね、よくよく肝に銘じておきますよ」

一瞬だけ、グレゴリウスの気配が鋭くなったのをジュダスは察知していた。

それは『予言』のカラクリを言い当てられたことに対する警戒か、動揺か、どちらにせよ、この場でどうこうするようなつもりは、お互いに無い。

「勘違いしないでいただきたいのですが、私は貴方と敵対するつもりも、邪魔するつもりもありません。

‘私達のダイダロス’で何かしようという時は、話を通していただければ、色々と便宜を図ってあげることができますよ。

思惑はそれぞれあっても、神の為に働くことに変わりはないですからね、円滑な協力関係が築けることを私は、いえきつと神も願っていることでしょう」

「……憶えておこう」

ありがとうございます、と恭しく頭を下げるグレゴリウスを、すでにジュダスは見てはいなかった。

その目は、正面に聳え立つ古代の祭壇。

それが如何なる効果を秘めた魔法装置であるのか、グレゴリウスが言ったように専門知識が無ければ分かるはずもない。

だがジュダスには一目見て、これが何なのか、どう使うのか、何ができるのか、即座に把握した。

故に、ここがランク4の危険なダンジョン内であっても、彼は躊躇する事無く、決断’を下したのだ。

「ああ、すっかり言いそびれてしまいました、お祝いの言葉を送らせていただきますね。

白の秘蹟、第四研究所、設立、おめでとうございます」

ここは最早メディア遺跡にある名も無い新区画では無い。

神兵計画を推進する、クロノを始めとした数々の実験体を生み出した忌まわしき第三研究所に次ぐ新たな研究所、すなわち『第四研究所』が、パンドラの地に建設されたのだった。

第150話 蠢く白い影（後書き）

第9章はこれで最終回です。計らずとも150話で終わられるとは、中々キリが良いですね。

スパードへ逃れたクロノは、これからどう再起を図るのか、どうぞ次章もお楽しみに。クロノたちの戦いは、まだまだこれからです！

第151話 悪夢（1）

体が重い、頭が重い、まどろみ続ける意識は決してこの温かい空間から脱することを許容しない。

だが、ボンヤリした怠惰な思考を許さない、

「何時だと思ってる！ さっさと起きな！」

母によって、俺は確かに目を覚ました。

「ん……何、時？」

呆れたように答える母の声は、現時刻がAM七時を大きく過ぎて
いることを示した。

「……そう、か」

「まだ寝ぼけてんのか……ほら、さっさと準備しないと本当に遅刻するよ！」

それだけ言い残して、母は艶やかな黒髪を翻して、部屋を去っていった。

モデルのように整ったプロポーションの後姿を見送った俺は、未だに眠気が抜けきらない頭を振って、よろよろと立ち上がる。

いや違う、これは眠気じゃない、もっと本能的に体が休息を求めているのだ。

おかしいな、昨日は夜更かしした記憶もない、いつも通りの時間に眠りについたはずだし、翌日に疲れを残すような運動などもしていない。

そう、昨日はいつもと変わらない平和な一日だったのだから。

「着替える、か……」

未だ低速回転を続ける頭のまま、俺は体を引き摺るようにクロゼットへ向かい、ハンガーにかけてある学ランに袖を通した。

それから先は、毎日同じルーチンワーク、特に意識しなくても、体は勝手に動いてくれる。

顔を洗い、歯を磨き、朝食をとるためにリビングルームへ足を向

け、そこで家族と朝の挨拶を交わす。

「……おはよう」

出てくる言葉、ただでさえ低い俺の声がさらに一オクターブは低い、亡者のような呻き声になってしまっていた。

だがそれだけで、いつもと何も変わらない。

昨日も一昨日も、そして明日も明後日も同じコトを繰り返すだろう、当たり前前の光景。

「おはよう」

テーブルについている父は、スーツ姿で新聞を広げながら顔を上げて俺へと短い挨拶。

それほど珍しくない一般的な父親の姿だが、小柄で年齢を全く感じさせない童顔のお陰で、新入社員どころか、まだ同じ学生ではないかと思えるほど。

が、実の父である以上、それに違和感を覚えることは無い。

「おはよう。」

真央、体調悪いの？」

小鳥のさえずりよりも涼やかに耳に届くのは、姉である真奈の挨拶と、俺を気遣ってくれる優しいお言葉。

真央、その名前で呼ばれるのは、何故だか酷く久しぶりな気がする。

「いや、熱は無いし、風邪引いたわけじゃない……ただ、ちょっとダルいというか、ヤル気が出ないというか」

覇気の無い台詞をだらだらと続ける。

姉貴はそんな俺の様子に、とりあえず病ではないことに理解を示す、きつと寝不足か何かだと納得してくれたんだろう。

俺は文芸部の締め切りに追われて徹夜することもあるので、睡眠不足で今のようにグッタリした様子を家族に見せることはそう珍しいことでは無い。

だが、今日の俺は明らかにおかしい。

どう考えても疲労するような原因は無いのだが、体がまるで俺の

言う事など聞けるかと反乱を起こしたかのように、動きが鈍い。

これはもしかすれば、肉体的な疲労ではなく、精神的なモノなのかもしれない。

もつとも、そんな精神的なショックを受けるようなコトも無かったはずだ。

勢い余って白崎さんに告白して玉碎したとか、そういう類の物悲しい青春イベントは経験していない。

まあ、告白しようと思いつほど熱い恋愛感情が彼女にあるわけではないのだが。

「なにボーっとしてんだ、コレ持ってさっさと行きな！　もう百合子ちゃんが迎えに来てるよ！」

「……百合子、ちゃん？」

母に愛情少な目弁当を押し付けられつつ、そんなコトを言われる。百合子ちゃんって、誰だ、ああ、待て、ついさっきまで考えていた白崎さんの名前じゃないか。

え、なに、迎えに来てるって？　誰を？　俺を？

ありえない、別に白崎さんとは同じ部活なだけで、知人以上友人未満の関係だ、恋人関係などもっての他、クラスメイトに話したら「妄想は創作の中だけにしとけ」と哀れんだ目つきで言われるだろう。

いや、だがしかし、現実を迎えに来たという以上は、俺の妄想ではない。

白崎さんが迎えに来たのは、きっと部活関係の何かだろう、よく分からんが、まあそういうこともあるのだろう。

適当に考えつつ、何はともあれこれ以上待たせるのは良くないと思ひ、弁当を乱雑に突っ込んだ学生鞆を持って、リビングを出る。

「いってきます」

家族三人のいってらっしゃい、の声を後ろに聞きながら、足早に玄関へ向かう。

だが、靴を履き替え、見慣れた家の扉に手をかけた瞬間、俺の体

は硬直した。

「……行きたく、ない」

ふと、そんなことを思った。

この気だるい体と鈍い頭は、確かに動く気力を大いに殺ぐ原因になりうるだろう。

だが、今の俺はそんなヤル気の問題では無い、もっと根源的に、本能的に、これ以上足を進めるのを拒む。

行きたくない、それは学校に？

否、行きたくないのは、外だ。

玄関を潜った先に広がる外、世界、俺の家と隔絶された、異なる世界。

「いや、ダメだよな……学校は、ちゃんと、行かないと……」

それに、この扉の向こうには何故か分からないが白崎さんという待ち人もいるのだ。

深みに嵌ってしまいそうな暗い思考を振り切って、俺は玄関の扉を開いた。

「あ——」

開け放たれた扉の先に広がっている光景は、地獄だった。

土の地面は血に濡れ、凄まじい衝撃によって生まれたクレーターのデコボコが無数に穿たれている。

左右は轟々と燃え盛る炎が迫り、よく見れば、その火の中には十字架に磔にされた誰かが焼かれている。

燃えているのは、人だけではない、それは大小様々な家であったり、馬車であったり、兎に角そこにあるあらゆるモノは破壊され、火がついていた。

「貴方は、逃げられない」

その小さな少女の呟きは、深く俺の耳に突き刺さった。

視線を僅かばかり下げると、そこに彼女は居た。

俺を待っていたのは、亜麻色の髪にセーラー服がよく似合う白崎百合子では無く、

「逃がさない」

髪も肌も服も純白にして、煌々と輝く真紅の瞳を持つ、神の使徒。
「サリエル……」

第七使徒サリエルは、細身の白い槍を手に、俺の前へ立っていた。
「この世界から、逃れることは許されない」

サリエルの細腕が奔る。

目に全く見えない速度で繰り出された細槍の突きは、深く俺の腹部に突き刺さった。

「がはあっ!？」

飛び散る血飛沫、全身を駆け抜ける激痛、どうすることもできず、ただ反射的に腹を貫く槍を両手で握った。

次の瞬間、槍が引かれる。

その刃は引き抜かれなのまま、突き刺した俺の体ごと、グイグイと引っ張られる。

「ぐあっ……や、やめ、ろ……」

槍を握った細腕一本で、ゆっくりと、だが確実に外へと、異なる世界へとサリエルは俺を引きずり込んでゆく。

足を踏ん張って、精一杯粘るが、それは結局、無力な俺の儚い抵抗に過ぎない。

「……やめろ……やめて、くれ」

イヤだ、そこには行きたくない、外には、その世界には行きたくない。

俺の居場所はここなんだ、家族が、平和な日常がある、ここなんだ。

だからそんな、血みどろで、痛くて、苦しくて、大切な人を誰も守れないような、そんな世界になんか、行きたくない。

「や、め——」

「絶対に、逃がさない」

体が宙に浮く。

完全に抵抗することができなくなった俺は、ゆっくりと、槍に貫

かれたまま、家の玄関を飛び出す。

そうして、俺が完全に‘異世界’へ放り出された瞬間に、さっきまで過ごした、俺の家は、真っ赤な炎に包まれて――

「やめろおおおおおおおおおおお！！」

「――クロノお！」

俺の名を呼ぶ声に、意識は完全に覚醒した。

「あ……ここ、は……」

目を見開くと、視界は右半分しか映らない。

その狭い視界の中に、泣きそうな顔の幼いリリイと、見慣れたギルドの客室とは少々異なる木の天井が見えた。

「夢、か……」

なんだか、酷くイヤな夢を見た気がした。

夢の中にいる俺が、果たしてどんなおぞましい光景を目にしたのか、今となっては分からないが、兎に角最悪な内容だったに違い無い。

その所為で俺はうなされ、心配したリリイが飛んできたというワケだ。

「俺は大丈夫だ、心配いらないぞ、リリイ」

「……うん」

安心させるように、リリイの小さな体を抱き寄せて、頭を撫でた。いや、逆だな、こうして撫でていて落ち着くのは俺の方だ。

そうして心に冷静さが戻ってくると、色々な点に気がつく、そう、例えば悪夢にうなされた所為で、酷く寝汗をかいてしまっている俺の体とか。

「悪い、汗臭かったかな」

「ううん、クロノの匂い、イヤじゃないよ」

それでも汚すわけにはいかないだろう、俺はそっとリリイを腕か

ら解き放つ。

小さな羽根をパタパタさせながらベッドから飛び降りたりリイは、朝食の用意は出来ていることを伝えてから、部屋を出て行った。

最後まで不安そうな表情を隠せていなかったが、そんな顔をさせてしまっているのは他ならぬ俺自身だ。

「……大丈夫、俺は、大丈夫だ」

自分に言い聞かせるように、俺は呟く。

忘れることは出来ない、考えないことも出来ない、だから、現実
は受け止めなければならない。

「顔、洗うか」

ここは、スパードにある冒険者が主に利用する宿泊施設の一室。

あの戦いが終わってから、今日でちょうど一週間が過ぎようとしていた。

第152話 悪夢（2）

その少女は、唐突に現れた。

淡い桃色の頭髮に、一見すると魔術士のような白い服装ではあるものの、丈は短く太腿や肩を露出する少々過激な格好。

よく整った顔立ちに、自身の美貌をよくよく理解しているかのようには飾り立てる煌びやかな装飾品の数々を身に纏っている。

派手好きな貴族の子女、という表現が一番しっくりくる姿。

だが、

「第十一使徒ミサ、まあ、魔族如きがこの名の意味なんてわかんないだろうケドね——」

彼女は、人の皮を被った化物だった。

「う、あ……」

気がついた時には、うつ伏せに倒れていた。

何らかの攻撃魔法の余波に巻き込まれ、軽々と吹き飛んだ自分は、全身を強く地面に打ち付けられたのだと、ボンヤリとした頭の中で理解した。

「……シモン」

自分の名前を呼びかける聞きなれた声で、シモンは意識が戻り始める。

「スース、さん？」

周囲の状況がハッキリと認識できるほど意識が回復すると、自分がスースに抱えられて、引っくり返った馬車の残骸の影にまで移動させられていることが分かった。

だが、それ以上に気になったのは、普段は飄々として常に余裕を感じさせる彼女の表情が、焦りに、いや、苦痛に満ちていた。

「あの、大丈夫——んぐっ！」

気遣いの言葉は、咄嗟に彼女の手で塞がれる。

「声を出しちゃダメだ、気づかれる」

背後から抱きしめられるような体勢で、耳元に口を寄せて小さく囁いたスースの言葉に、シモンは頷いた。

「アイツには、勝てない――」

スースはシモンを抱いたまま、音を立てず器用に転倒している馬車の隙間へその身を滑らせた。

狭く暗い、僅かに蓋が開いた棺桶に押し込められたような感覚。

「このまま隠れてやり過ぎすしか、生き残る道は、無い……」

その声音には、どこか諦めに近い響きがあった。

「ん、んー！」

口を塞がれたまま、シモンが抗議の声を挙げた。

外では激しい戦いの音と、冒険者達の絶叫が響き渡ってきている。まだ戦っているのだ、あの絶望的な強さを持つ少女と、諦めることなく、命の限り抵抗を続けている。

それにも関わらず、自分だけ隠れていることに、勇敢な戦士ではない脆弱な錬金術師であっても、激しい抵抗感を覚えた。

「不覚にも、核コアに一発くらってしまっただけ……すまないが、私にはもう君を擬態で隠すくらいしか、力が残ってないのさ……」

それを聞いて、シモンは体を硬直させる。

彼女の種族がスライムであることなど自己紹介の時点で知りえている情報、そして、ランク1冒険者のシモンでも、スライムの急所が核コアであるということも知っていた。

核コアは人体において脳と心臓を併せ持つような、スライムにとって生命を司る最重要器官であり、その損傷は避けがたい死を意味する。

「……」

かける言葉が見つからない、いや、例え何かを言おうとしても、未だ口を塞がれている以上は喋ることができない。

だが言葉など無くとも、スースにはシモンが思っていることなどお見通しという様子。

「大丈夫、必ず君を守り通してみせる、から……」

シモンは、足の先から水に浸かっていく様な濡れた感覚を覚える。

それは、下半身をスライム化させたスースがシモンの体を覆いくすような動きを見せているためだ。

それに嫌悪感など、感じるはずもない。

彼女は己の死を前にしても、ただシモンを守ることだけを考えて行動しているのだから。

「……ん、んっ！」

「ふふ、優しいな、心配してくれるなんて……君が気に病む事はないさ、好きな人を守って死ぬるなんて、そう悪い死に様じゃないだろう？」

スースの胸元から下にまでスライム化は進み、シモンの体をもう首元に届くまで覆いつくしている。

人の形が完全に残っているのは、平凡な容姿の女性の顔と、シモンの口を塞ぐ右手のみ。

「それじゃ、さよならだシモン、愛してるよ——」

スースはシモンの口から右手を離すと、代わりに唇で塞いだ。

いや、それは紛れも無く恋する女性の熱烈なキスだった。

「んっ！」

唇に触れる柔らかな感触は、僅か一秒にも満たない。

ついにスースの体は全てスライムへと戻り、シモンの全身を足先から頭の天辺までその半透明の液体で覆いつくす。

「……！」

守られている本人には分からないが、それは完璧な隠蔽技術であった。

まずスライムの表皮は周囲の風景と完全に同化するほどの擬態能力を発揮、実際に触れてみなければ、そこに何かがあるとは分からない。

次に、音と匂い。

シモンが僅かに身じろぎしても、物音一つ外に漏らす事無く吸収し、また体全体を覆っている為、嗅覚の鋭い獣でも察知できないほど完璧に体臭を遮断する。

そして『影渡ハンゾーマ』の加護によってもたらされる、完全な
気配の隠蔽。

五感は勿論、第六感までも欺くスースの技術は、
スキル

「おーい！ 誰かー、生きてたら返事してくれー！」

その言葉通り、見事に使徒の脅威から、シモンを守り通したのだ
った。

だが、クロノが現れる頃には、スースの体は生命の輝きを失った、
くすんだ赤い核の残骸と成り果てていた。

シモンは、あまりに寂しい彼女の遺骸を抱きしめながら、己の無
力感に打ちひしがれている。

そして、それは戦いから一週間たった、今も変わらず――

「ん……」

夢を見ていた気がした。

それは僅か一週間前の記憶、何も出来ず、ただ守られて生きなが
らえた、役立たずでしかない僕の記憶。

このまま考え続けても、どうしようも無く暗い深みに嵌ってしま
うことが分かりきっている。

意図的に思考を打ち切って、多少無理にでも動き出すことにした。

「……暑い」

今日は初火の月の13日、いよいよ本格的な夏に向かっていているら
しく、昨日よりもずっと気温が上がっている。

僕は嫌な寝汗をかいてベトつく体を引き摺るようにしてベッドか
ら抜け出す。

真っ白いシーツのかかったキングサイズのベッドはただでさえ小
さい僕にとって、持て余すほどに大きすぎる。

それも、ただ大きいだけではない。

天蓋こそ付いてはいないものの、シンプルな作りながらそこに使われている素材はどれも一級品。

僕のようなランク1冒険者が身を横たえるものではない。

そして、身分に不相応なものはベッドだけで無く、この寝室そのものがそうだ。

ギルドの客室や研究室という名の物置とは、比べるのもおこがましい。

広さや造りは勿論、そこに置いてある家具から調度品のどれ一つとして平凡なものなどない。

まるで貴族が住まう部屋のような――いや、ここは真正正銘、貴族の屋敷、その一室なのである。

「何時になったら、ここから出られるのかな」
思わずそう呟く。

それ以上の独り言は、止め処ない姉への文句にしかならないので止めておく。

「助かったのはよかったけど、こんなことになるなんて……」

はあ、と大きく溜息をつきながら、僕はスパイダ軍第二隊『テンペスト』の隊長にして、スパイダ貴族である義理の姉、エメリア・フリードリヒ・バルディエルと三ヶ月ぶりの再会の時を思い返した。

スパイダ軍第二隊『テンペスト』は、馬の嘶きと蹄が力強く地を蹴る音を響かせて、闇夜の向こうからその堂々たる威容を現した。

「おーい！」

大声を上げて、両手を振るうのはシモン。

クロノとリリィとフィオナの三人は、シモンから一步離れた後ろで黙って立っている。

今やってくるスパイダ軍の部隊、その隊長が姉であるというシモン

ンを表に立たせて接触することで、妙な面倒事を避けようという魂胆であった。

そして、それは見事に功を奏す。

警戒されることも、攻撃魔法をいきなり撃たれることもなく、鎧姿の騎士軍団は、シモンの前で静かに停止した。

「シモン？ シモンなのか！？」

夜空に凜とした女性の声が響き渡る。

「うん、リア姉——」

シモンが答えると、キングサイズの一角獣ユニコーンから鈍色の全身鎧を纏った重騎士アーマーンナイト、いや、より正確に言うならば將軍が軽やかに舞い降りた。

手にする槍斧ハルバードと大盾タワーシールドを隣の騎士に押し付けるように預け、自由になった両手を広げてシモンへ走りよった。

完全装備の女騎士が迫る様子は、さながら鋼鉄の壁が押し寄せるような威圧感である。

思わず背中を見せて逃げ出しそうになったシモンだったが、この状況で引けるはずも無い、甘んじて姉である巨大な鎧兜の突進を受け止める。

その瞬間、クロノは小学生の交通安全教室で見た、ダミー人形が10tトラックと正面衝突して交通事故の恐ろしさをアピールする映像が思い浮かんだ。

「シモン！ この大馬鹿者が、あんなババアにたぶらかされてスパーダを離れるからこんな事に——」

シモンは頑強なガントレットを装着した二本の腕に絞め落とされて、否、抱きしめられて、姉から突然の説教を浴びせかけられた。衝突して一瞬意識の飛んだシモンは、台詞の後半部分で目を覚まし、

「あの、リア姉、今はそれよりも、助けて欲しいんだけど——」

本来の役目である救助を主張するのだった。

その様子を、一歩離れて立っているクロノは余計な口出しをせず

黙って見守ると同時に、シモンの姉である女騎士を観察していた。

（すげえ、母さんより大きい女性なんて始めて見たぞ、というか俺よりもデカいんじゃないのか？）

そんな感想を抱いたクロノの見立ては正しい、彼女は重厚な鎧冑を装備しているとはいえ、その身長は確実に190センチを越えていた。

150センチ+αの小柄なシモンを抱きしめる様は、姉弟というよりも完全に親子のソレだ。

しかしそんな巨軀を誇りながらも、その兜から覗く素顔は男かゴリラか見紛うような厳ついものでは無く、エルフ特有のシャープで整った顔立ちをしていた。

蜂蜜色の濃いブロンドヘアはシモンの灰色の髪と異なっているが、その瞳は同じエメラルドグリーン、典型的なエルフの髪色と目の色である。

その切れ長の目は美しくもあるが、それ以上に冷酷さを思わせる鋭い容貌となっていた。

そんな冷たい美貌を持つことよりも、クロノはシモンを抱きしめつつ武器を手放した状態である彼女が、全く隙を見せない方が気にかかる。

自分よりも格が一つ上の実力を持っているとクロノは直感した。

（今ここで敵対されたら、俺達は確実に死ぬな）

シモンがいるので恐らく大丈夫だろうとは思うが、クロノの頬を冷や汗が一筋流れた。

そうして緊張状態の続く、シモンと姉の話し合いであったが、

「――おおその事情は、こちらでも把握している。

安心しろ、ダイダロスからの避難民は全て受け入れると、レオンハルト陛下は仰せだ」

その言葉に、クロノとシモンは安堵の息を吐いた。

レオンハルトという名はクロノも知っていた、『剣王』の異名をとるスパードの国王である。

敵国であるダイダロスの民であっても、寛大に受け入れてくれたスパード王にクロノは心の中で感謝した。

しかし、

「我々が動くのは、少しばかり遅かったようだ、避難民と思われる集団が列を成してガラハド山中で死に絶えていた。

ここも随分と酷い有様だな、一体何があったんだ？」

冒険者だけでなく、やはり避難民までも全滅の憂き目にあったことを、これからガラハド山脈を越えてスパードへいたる道中で、クロノは自分の目で見て思い知ることとなるのであった。

朝の身支度を整えて、朝食をとるべく寝室を出ると、

「あ、おはよう、ございます……」

「おはよう、もう起きていたか、まだ寝ているようなら叩き起こしてやろうかと思ったのだがな」

そら恐ろしいことを朝一番で言うリア姉と出くわした。

彼女は本当に、叩いて、起こすから始末に終えない、しかもパーでは無くグーだ。

みんなは口を揃えて美しいというけれど、僕にとっては人喰い竜にしか見えないリア姉の顔。

今はその美貌から汗が玉となって流れている。

肩口で切りそろえられたブロンドのストレートヘアも、どこか濡れているように見えた。

薄手のシャツ一枚に簡素な脚絆レギンスを穿いた体からは、オーラのように湯気も立ち上っている、きっと早朝から武技の鍛錬をしていたんだろう。

強制的に付き合わされなくて良かったと思う。

何をやっても体力も筋肉もまるでつかない僕の体質を分かっているながら、鍛錬という名のイジメを子供の頃から繰り返し行ってきた

姉である。

僕がバルディエル家を出て冒険者やっている理由の何割かは、この恐ろしい姉から逃れる為なのだ。

本当に恐ろしい、最狂最悪、傍若無人、人を人とも思わない姉、お兄さんみたいに少しは理解を示してくれる紳士的な態度がとれないものか――

「ん、何か失礼な事を考えていないかシモン？」

光の攻撃魔法でも出てるんじゃないかと思えるくらい鋭い視線が突き刺さる。

「え、いや、何も……」

「お前は動揺がすぐ顔にでるな、全く、男の癖にオロオロと情けないヤツだ」

そんな罵倒と共に、両肩を掴まれグイと引き寄せられる。

40センチ強の身長差があるため、前かがみになって身を乗り出すリア姉の顔が、息がかかるほど近くまで寄せられる。

こ、これは、威嚇の体勢だ、やられたのは三ヶ月も前だった所為で勘が鈍ったのか回避できずあっさり捕まってしまった。

緑の眼光を湛える鋭い目が、僕の瞳を覗き込むように映る。

それと同時に、僕の薄い胸板に圧し掛かる柔らかい超重量の山が二つ、リア姉の規格外のバストが自然と押し付けられる。

一瞬でも気恥かしい反応を覚えてしまう自分に少しばかりの嫌悪感が湧く。

「シモン、やはりお前は家ウチにいないとダメだな、戻ってこい」

そうしてかけられる否定の言葉は、さらなる嫌悪を僕の心の奥底から引き出した。

「子供の家出じゃないんだよ……僕はもう成人したし、一人で生きて――」

「お前は弱い、冒険者として大成することは出来ない。

そこらの凡夫なら低ランク冒険者のまま一生を終えるのも良いだろう、だがお前は養子とはいえバルディエル家の者だ、ならば家格

に見合った人生を歩むべきなのだ」

リア姉の言い分は、もし僕が長男だったら素直に頷くことができただろう。

けれど、バルディエルの跡継ぎである男子、つまり義理の兄は存在している、しかも三人もだ。

「お義父様だって納得してる、リア姉がどうこう言う義理はないはずだよ」

「父上はお前に甘い、ただ我俣を許されているのだと何故分らない？」

「そんなことっ——」

「錬金術などという下らない研究など止めて、家に戻れ。」

今からでも遅くは無い、私がバルディエルに相応しい‘仕事’を与えてやる、いいか、お前のためを思っ言っているのだぞ」

「リア姉は、家の体裁を気にしてるだけでしょ、僕のことなんて……」

分かってくれとは言わない、放っておいてくれるだけでいい。

ただそれだけなのに、この人は事あるごとにこうして口出ししてくる。

やっぱり、リア姉の屋敷にいるのはダメだ、これなら実家の方がまだマシだ。

「魔法も武技も使えないお前は、冒険者としては役立たずだ。」

‘戦’を一度経験しても、それがまだ分からないのか？」

それは、これまでの勝手な姉の言い分と一蹴できない、致命的な言葉だった。

「錬金術は戦う為の術ではない、とでも言い逃れるか？ それでも、お前が守られて無様に生き残った事実に変わりは無いぞ」

「や、やめてよ……」

「身の程を弁えろ、お前は誰かを守れるほど、強くない、決して強くなれない」

「やめてよっ！」

咄嗟に腕を振り払って拘束から逃れようとする、けれど、僕の非力ではビクともしない。

それが尚更、僕の弱さを象徴しているようで、途轍もなく情けなくなる。

「ふん、まあいい」

軽く突き放すように姉の両腕から解き放たれる。

振り切るように身を離すと、勢い余ってたたらを踏んで、そのまま尻餅について倒れこむ、益々情けない。

「この話はまた後で‘ゆっくり’するでしょう」

無様に倒れた僕を心底見下すような視線を送った後、そのまま踵を返して背中を向ける。

「そうだ、お前が気にかけていた避難民の生き残り、彼らの処遇が決まった」

「え、ホント！？　どうなるの、っていうか、何処にいるの！？」

僕らを襲った‘少女’^{バケモノ}が、アルザス村で戦いが始まる前の段階ですでに避難民を襲っていたことは知っている。

惨憺たる有様がガラハド山中に広がっていたが、僕のように奇跡的な生存者がいた。

その数は全部合わせて50人いるかどうか、元が万人近い大人数だったことを思えば、その生存率はきわめて低い、たったの0.5%だ。

それでも生き残ったことに変わりはない、彼らがスパイダでどのような扱いになるのかは大いに気になるところ。

これは恐らく一介の冒険者扱いでしか無いお兄さんはすぐ耳にはできない情報だろう、僕が伝えてあげなくちゃいけない。

「そう焦るな、朝食の折にでも話してやろう」

それだけ言い残して、リア姉は僕になど興味が失せたように、さっさと立ち去っていった。

第152話 悪夢（2）（後書き）

キャラ紹介を久しぶりに更新しました。第9章終了時点での情報が反映されています。

第153話 平穩の影（1）

初火の月の13日、あの忌々しい使徒との遭遇から一週間が経過している。

私達は無事にスパードへの入国を許され、現在は冒険者御用達の宿を借りて平穩な休日を送っている。

と言っても、ガラハド山脈を越えてスパード入りするまでには3日ほどかかっているし、到着したらしたで、ダイダロスの状況やアルザス防衛戦のことに關して報告したりなどで、それなりに慌しかった、何もせずにゆっくり休めるのは今日からだ。

報告の際には冒険者ギルドを通して行われ、特に問題なくスムーズに行われた。

軍に拘束され尋問という最悪の状況も予想していたものの、それは杞憂で済んでよかった、スパードについて早々、加護全開で大暴れするのは出来るだけ避けたい。

ギルドといえば、そもそも私達の戦いは緊急クエストの受注という形で行われたものだ。

冒険者の生き残りは僅か四名、守るべき避難民にも全滅と呼べるほどの死者を出し、実質的にはクエスト失敗、大失敗である。

だが、向こうもそれなりに情状酌量してくれたのか、僅かばかりの褒賞金が支払われた。

別にお金のために戦ったわけではないけれど、クロノの苦労を思えばあまりに少なすぎる金額に、思わず妖精女王のお世話になるところだった。

兎にも角にも、こうして戦いの後始末は終わった。

得られるものは無かったが、私の望み通りクロノと無事にスパードへ逃げる事が出来たので、一安心。

しかしながら、あの鍊金術師だけがチャっかり生き残ってしまったのは予想外だった。

その他大勢に紛れて死んでいればいいものを、よりによってアイツが助かってしまうとは……全く、女の情念とは恐ろしいものだ、ランク4の腕前ともなれば、使徒を前にしても守り通すだけのパワーがあるのだから。

スース、彼女の思いは他でもない、私が一番良く分かっている為に、余計な事をしたと非難するつもりは無い、できない。

私も半分は妖精、純情可憐な恋心はとても好ましく思える、敬意を払っても良い。

だが、シモンが生き残って不愉快と思ってしまうのとは、話が別である。

あの軟弱を絵に書いたような男は、この私に初めて嫉妬を覚えさせたのだ、嫌いこそすれども好ましく思うはずが無い。

いや、この際私の瑣末な愚痴は置いておこう、さし当たって問題となっているのはそんな事ではないのだから。

最も重要な懸案事項、それはクロノの心情だ。

私にとって避難民がどれだけ犠牲になろうが、知ったことではない、その数なんて他人がプレイするボードゲームのスコアほどにも興味が無い。

共に戦った冒険者については、その活躍は評価するし、多少は好ましく思っていたが、それでも泣いて悲しむほどの事ではない、精々が優秀な駒を失って残念に思う程度のこと。

だが、心優しいクロノはそういうワケにはいかない、駒を失っただけで割り切ることなど出来ない。

イルズ村の一件で分かっていたが、クロノはとにかく誰かの犠牲を嫌う、それが例え自分の責任でなかったとしても、どうしようもなく嘆き、悲しみ、思い悩んでしまうのだ。

二度目の敗北、それもイルズ村の時とは比べ物にならないほどの被害を出した今回の戦いに、クロノは酷くショックを受けてしまっている。

このままでは拙い、今回ばかりはクロノの心も折れかかってしま

っている、なんとか元気付けなければならぬ。

幸いにも、時間はある。

これからゆっくりと、クロノの傷ついた心を優しく慰めてあげればよいのだ、そう、他でもない、この私がね。

「……ふふふ」

「おやリリイさん、何か悪巧みですか？」

円形のテーブルを囲むように席へ付いているフィオナから声をかけられ、思考の海を泳いでいた意識を現実へと引き上げる。

「人間きの悪い事、言わないでちょうだい」

「すみません、どう見ても悪い笑いだっただので、つい」

歯に衣に着せるという事を知らない女だと思ってしまう。だが、こんな事で一々苛立っていたらこの天然魔女と付き合っているいけない、間の抜けた失礼な発言も、もう聞きなれたものだ。

「クロノさん、中々来ないですね」

素直にもう待ちきれませんと言えはいいのに、妙なところで律儀である。

すでに朝食が準備されたテーブルを前にお預けをくらうなんて、この食い意地の張った魔女にとっては拷問に等しいはず。

それでも文句を言わずに我慢するとは、不器用なりに努力しているということか。

「クロノは疲れているの、大人しく待っていなさい。」

けれど、貴女はクロノと比べて随分と平気な顔をしているわね、血の通った人間なら、もう少し落ち込むものかと思ったのだけれど、少しばかり意地の悪い質問。

フィオナは私と同じように、どうにもこの大きすぎる犠牲に対してショックを受けていないようである。

その事が、少しばかり気にかかる。

この女は、一体何をその胸のうちに秘めているのかしら？

「私の心など、リリイさんならテレパシーですぐ分かるのでは無いですか」

「それほど防御を^{プロジェクト}かけておいてよくもそんなことが言えるわね」
フィオナの本心、深層意識には、私の精神感応能力では破れないほど堅い精神防壁で^{マインド・プロジェクト}守られている。

読み取れるのは表層意識のみ、隠すつもりが無い本心は表れるが、本気で悟られたくないと思っている秘密にまでは届かない。

「心に壁をつくるのは、魔女にとっては当たり前のことですから」
「だからこそうして聞いているの、それで、どうなのよ？」

「どう、と言われましても……」

一見して変わらぬ無表情に見えるが、僅かばかり戸惑いの感情が心の表面に波立つのを感じた。

「……私も、ショックを受けていますよ、ただ、自分以上に落ち込んでいる人を目の前にすると、かえって冷静になってしまします」
「なるほど、それは確かにそうかもね」

一般的な人の心理状態としては、納得のゆく回答である。

自分が怒ろうとした時、代わりに友人が激怒してくれたら、自分の怒りの矛先が収まってしまうのと似たような状況だ。

けれど、本当にそんな理由で納得できていたら、

「だから、今はクロノさんの方が、心配です」

そんな思い詰めた表情にはならないでしょう、フィオナ？

「そうね、私も心配しているの、早く元氣付けてあげなくちゃね」
本心が読めない以上、これは予測の域を出ないが、フィオナは本当に今回の犠牲にショックを受けていないのだろう。

私と同じかといえば、そうではない、彼女は、ショックを受けなかった、という事に対してショックを受けているのだ。

真っ当な人であるならば、クロノのように嘆き悲しむのが当然の反応、けれど、自分はそうならなかった、守るべき民が死んでも、共に戦った仲間が死んでも、それほど心は揺れなかった。

全く、中途半端にモラルを持っていると面倒なものね、どうして人は一番大切なモノを守る為に、その他全てを犠牲にすることを躊躇するのだろう。

彼らの感情、普通の感情というのは、理解は出来るが、私には永遠に納得できそうもないわね。

「あ、クロノさん来ましたよ」

少しだけ嬉しそうなフィオナの声、そんなに朝食が食べられるのが嬉しいのだろうか、いや、嬉しいのだろうなこの食いしん坊は。

「おはようございます、クロノさん」

「ああ、おはよう、悪いな、待っててくれたのか――」

フィオナと挨拶を交わして現れたクロノは、一見すると普段と変わらない様子。

ただ、あの戦いで失ったモノは、クロノの外見に大きな変化をもたらしてしまっている。

黒魔法使いとしてのトレードマークでもあった黒ローブ『悪魔の抱擁』はその身に纏うことは無く、今は清潔な白いシャツと、ボロくなってしまった黒革のパンツ姿と、一般人とそう変わらぬラフな装い。

クロノの引き締まった鋼のような筋肉がついた逞しい肉体と、首から下げるアイアンプレートバフオメット・エンプレスのギルドカードが無ければ、冒険者だとは分からないだろう。

だが一番目を惹くのは、クロノの左目を覆う眼帯。

第八使徒アイによる最後の攻撃で、クロノは左目を失ってしまった、今その眼窩にあるのは己の黒色魔力を固めた『肉体補填』の代用品、自前の義眼、勿論それに視力などは無い。

失った部位を復元する高度な治癒魔法は存在こそするものの、クロノは目を失ったことをそれほど気にしていないようで、今すぐどうにかしたいと思っているようではなさそうだった。

私としては、痛々しい包帯こそとれてはいるが、医療用の白い眼帯を装着したクロノの姿には、やはり傷ついた彼として認識してしまい、胸が張り裂けそうなほど悲しくなってしまう。

ごめんなさいクロノ、私が癒してあげられなくて、妖精の霊葉なんかじゃ、眼球を復元することはできない……悔いているのは、己

の力不足だ。

「どうしたリリィ、もしかして体調でも悪いのか？」

「ううん、大丈夫だよ」

クロノの優しい気遣いの言葉に、私は穏やかな微笑を浮かべて返答する。

うん、私は大丈夫なの、大丈夫じゃないのは、クロノの方なんだよ。

どうして、そんなに平気な顔でいられるの？ 私はクロノの深い苦悩を知っている。

けれど、こうして日常生活を送っている間は、普段と変わらず、私を気遣い、微笑み、優しくしてくれる。

無理しなくてもいいのに、一日中部屋に、ベッドに籠って泣いて喚いて、私に当たってもいいんだよ。

私がお世話してあげるから、面倒を見てあげるから。

だから、私を心配させない為に、平気なフリをするなんて止めて——でも、そんな無理を押してでも私のことを思ってくれるクロノの気持ちは、たまらなく心地よい、抗いがたい快樂となって、私の心を甘く苦しめる。

ダメなのに、元氣付けるのは、慰めるのは私の役目なのに、クロノがそんな風だと、何もせずにただただ甘えていたくなってしまうのだ。

クロノの優しさに溺れるのはいけない、私は彼の役に立たなくちゃならない、だって私は、相棒パートナーなんだから、今は、まだ。

第153話 平穩の影（1）（後書き）

アルザス戦後の地味な状況説明でした。クロノ、眼帯キャラにクラスチェンジです。

第154話 平穩の影（2）

クロノ、リリイ、フィオナの冒険者パーティ『エレメントマスタ
ー』は、宿泊している『猫の尻尾亭』で、少し遅めの朝食をとって
いた。

このスタッフ全員が猫獣人^{ワーカーキャット}で構成されるユニークな宿は、宿泊施設としては中の下と低ランク冒険者向けであることに加え、入れ替わりの激しい外から流れてくる冒険者の利用が多く、クロノ達の身の丈にあった相応しい宿である。

豪華ではないが、量だけはある料理を食べながら、三人は特に決まっていない本日の予定を話し合う。

「今日はどうする？ ギルドに行ってクエストでも見て来るか？」
表向きは平静を装っているクロノは、冒険者としてあるべき行動を考え、そんな提案をする。

「無理しなくてもいいんだよクロノ、もう少し休んでいても……」
幼い姿ながら、今は大人の意識を戻しているリリイは、クロノを
気遣う発言。

「いや、大丈夫だ、それにお金もそこまで余裕があるわけじゃない
しな」

緊急クエストの報奨金は、一人当たり10ゴールド、より正確に
言うならスパイダの貨幣単位である10万クランが支払われた。

ダイダロスではシルバーとゴールドがそのまま単位だったが、ス
パイダを含むパンドラ大陸中部の都市国家群では『クラン』という
通貨単位で流通している。

1クラン＝1シルバーと分かりやすい、ちよつと頭の足りない冒
険者でもすぐに理解できる通貨価値だ。

「30万クランあれば、生活するだけならしばらくやっていけるの
ではないですか？」

この宿は一泊3000クラン、単純計算で100日は滞在できる。

それなりに飲み食いその他に出費しても、少なくとも一ヶ月以上は生活していけるだろうことは、クロノでもすぐ理解できた。

「そうね、貴女の食費が抑えられれば、かなり長く、生活していただける金額ね」

「私に死ねというのですかりリイさん」

フィオナの前にはクロノとリリイが消費した倍以上の皿がすでに重ねられている。

久しぶりにフィオナの本領発揮を見た気がしたのだった。

「生活費に全部使うわけにはいかないでしょう、私達は冒険者なんだし、そうね、色々消費しちゃったから、今日は装備を整えるために買い物に行かない？」

料理を追加注文し、現在進行形で食費を圧迫しているフィオナを放っておいて、リリイはそんな提案をする。

「買い物か、確かに色々……」

考えてみれば、クロノが一連の戦いで失ったモノはあまりに多すぎた。

愛用の黒ローブ『悪魔の抱擁』バフォメット・エンプレスに始まり、黒色魔力のみの扱いに長けた珍しいタクト『ブラックバリスト・レプリカ』ソードアーツ、魔剣用の剣、各種ポーション、等等。

結局、手元に残っているのは、矢が貫通し穴が空いただけですんだ『呪怨鉈「腹裂」』とキプロスから鹵獲した『聖銀剣』ミスリルソードの二つのみ。

およそ戦いに必要な全ての装備は、綺麗サッパリ使いきって、もしくは壊れてしまったのだった。

「色々、必要なモノが多いな、下手したら30万なんてすぐ飛んでしまう」

装備の破損が無い二人に対して、クロノは少々申し訳なく感じてしまう。

「別にいいわよ、30万くらいすぐに稼げるわ」

どうせ、はした金、だ、とまではリリイは言わなかった。

「そうだな、頑張って稼がないとな」

クロノは、このまま何もしないでいることに、どこか焦りを覚えていた。

スパードの軍事力に、国境線を守るガラハド山脈に構える難攻不落の要塞、十字軍が攻め込んできたとしても防衛できるほどの戦力があるという事は、数日前にスパード冒険者ギルドで事情説明した折に聞いた。

しかし、ダイダロス軍の前例がある為、いくら大丈夫だと言われても不安は拭い去ることは出来ない。

だからと言って、一介の冒険者でしない自分に一体何ができるのか、その立場からやれることの限界も自ずと理解できてしまう。

ランク1と最低ランクな上に余所者の冒険者、そんな自分がスパード軍に対して注意を促すことなど不可能、戯言以上の対応がされないだろうことは明らか。

今回の緊急クエストの報告と、ダイダロス陥落の情報を得たスパードの上層部が、十字軍に対する警戒を強めてくれることを祈る以外に出来ることは無い。

それが分かっているからこそ、クロノは何も言え無いし、リリィも十字軍の対策などすでに自分達の手を離れた事柄であると思い、忘れてしまったかのように話している。

しかしながら、クロノは十字軍の事を忘れることなど出来るはずも無いし、気にしないことも出来ない。

現実的に自分が出ることと言えば、十字軍がスパードへ攻め込んできた際に、冒険者として再び戦に参加することだけである。

それを思えば、十字軍との戦いに備えること、いや、より正確に言うならば、もう自分の無力を嘆かないよう、強く、なっておくことが、自分の責務のようにクロノは思っていた。

「それじゃあ、今日は買い物に行こうか、早くこの街にも慣れておきたいし」

それでも、クロノは今すぐ悲哀も後悔も振り切って、己が強くな

る為にアクティブな行動が出来るかと言えば、NOと言わざるを得ない。

人はそこまで単純なものではないのだから。

今はやはり、リリイが考える通り、クロノには休息が必要なのであった。

「うふふ、楽しみだな、私こんな大都会に来たのって初めてだからリリイは見た目相応の実に愛らしい笑顔をクロノに向ける。

「ああ、確かにスパーダは広い――」

「失礼します、お客様」

と、その時クロノの後ろから声がかけられる。

そこまで煩く騒いでいたわけではないのだが、と思いつつ振り替えると、そこに立っていたのはエプロン姿の小柄な猫獣人、格好といい発言といい、間違いなくこの宿の店員である。

「お客様、クロノ様、で間違いありませんね？」

「はい」

「お手紙が届いております、どうぞ」

ありがとうと札を言いつつ、一体誰が自分に手紙などを寄越すのか、と疑問を感じながら書面を見ると、すぐに得心がいった。

「シモンからか」

シモンとはスパーダに到着してから、すぐに別行動となっている。救助に現れた部隊の隊長である姉に連れられて、その後は忙しいのか会うことが出来ないでいた。

どうやって自分の居場所を特定したのか少々疑問に思うが、あの姉のようにスパーダのお偉いさんと関わりがあるなら、冒険者一人の消息くらい調べることは出来るのだろうと予想した。

「それで、シモンがどうしたの？」

「ん、ああ、えーっと……」

リリイに急かされる様に促され、クロノは書面に目を走らせる。そこに書かれている内容を読み取ったクロノは、真剣な表情になつて伝えた。

「避難民の生き残りが、何処に居るのか分かった」
そう、トリリィは短く返事をすると同時に、今日の買い物が中止になったことを悟るのだった。

第155話 拒絶（1）

スパードという都市は王城を中心に、そこから同心円状に城下町が広がる造りとなっている。

クロノが一度だけ見た首都ダイダロスとほぼ同じ、いや、実を言えばダイダロスの方がスパードを参考に街を造り上げていたのだ。

ダイダロスは外壁と王城を囲む内壁の二重防壁であったが、スパードはその規模をさらに超える三重防壁となっている。

まずは第三防壁、つまり一番外壁のすぐ内側は一般民が住まう下層区画、クロノ達が宿泊する宿もここにある。

次に第二防壁、内壁を隔てて、貴族や大商人が住まう上層区画、スパード冒険者ギルドの本部はここに立地しており、ランク4以上の冒険者のみが利用可能、今のクロノ達には縁の無い場所である。

そして最も内側にある第一防壁は、王族が住まう国の中心地、スパード王城を守護する最後の城壁だ。

クロノのような余所者では一步踏み込んだだけで処罰される最重要区画、一般人がここに立ち入る最も確実な方法は、スパード軍に入隊することだろう。

今のところ冒険者からジョブチェンジする予定の無いクロノ達にとっては、このスパードにおいて利用するのは第三防壁と第二防壁の間に広がる下層区画のみである。

そして、これから向かう先であるダイダロスからの避難民が住まう場所も、当然のことながら、この地域の一角にあるのだった。

「貧民街みたいところですね」

どこまでも正直な感想をフィオナが発する。

「あまりそういう事は言うなよ、聞こえるぞ」

やんわりと嗜めるクロノであったが、心中に抱く感想はフィオナと全く同じモノである。

だがそれも仕方無いだろう、差別意識など抜きにしても、この石

造りと木造の建物が無秩序に立ち並ぶ薄汚い家々の光景は、どう見ても上等な住環境であるとは言い難い。

クロノはいつかテレビで見たリオデジャネイロのスラム街のイメージがしきりに頭をよぎる。

ほの暗い路地の向こうで、ガタイの良い浅黒い肌の男が違法なクスの取引をしていたりしても全く不思議ではない、そんな怪しい雰囲気は漂っていた。

「けど、最貧民街に追いやられなかっただけ、スパードは寛大な処置をしてくれたんじゃないのかしら」

どこか淀んだ空気の籠るこの場には反吐が出る思いのリリイだが、この第三防壁の外側にはさらに貧しい人々が集うこの世の底辺区域があることを知っている以上、この言葉に嘘は無かった。

「ああ、そうだな」

クロノも同意を示す。

自分も冒険者という命を担保にした危険な職業に従事しているからこそ、簡素ではあるが不潔では無い宿に寝泊りする生活を送れるのだ。

これまで農民だった彼らは、耕す土地を失い、このスパードでどうやって生きていくのか、もしかすればやむを得ず冒険者になる者もいるかもしれない、とクロノは予想した。

けれど、そんな彼らの面倒を自分が見ようなどという立場の分を超えた考えは、一瞬だけ躊躇った後、ただの傲慢でしかないとすぐ破棄する。

「ねえクロノ、彼らに会って、何て言うの？」

入り組んだ迷路のような路地を少しばかり迷いつつ歩きながら、リリイは問いかけた。

「俺は……」

避難民の生き残りが僅かながら存在する、という情報を聞いたときは、正直に喜ぶことが出来た。

だが、果たして自分はそんな彼らと会った時に、素直に無事でい

ることを互いに喜ぶことができるのかといえば、NOと言わざるを得ない。

生存率0、5%を奇跡的に潜り抜けた50人の生き残り、彼らに何と声をかけるべきか、すぐに答えは見つからなかった。

「……分らない」

やはり生きてて良かったと言うのか？

それとも、守ることができなくて、すまなかったと懺悔するのか？
これからどうやって生きていくのか、心配すればいいのか？

「分らないけど、生きているなら、会って話をしたい」

言葉は見つからないが、その思いだけは紛れも無く本心だ。

だからこそ、彼らの消息をシモンからの手紙で知った瞬間、迷う事無く会いに行こうと、こうしてここまで歩いてきたのだから。

すでに良い予感のしていないリリイではあるが、クロノを止める言葉は見つからなかった。

一見してアパートだとすぐ分かる石造りの三階建ての建物に、木造の平屋などが軒を連ねている。

これまで通ってきた場所と何ら変わらない、特別目立つことの無い寂れた一角が、一時的に避難民に与えられた住居であった。

身寄りの無い幼い子供などは、今の段階でスパイダの孤児院や神殿などといった受け入れ先に預けられているが、ほとんどの者はこの場所に住むこととなっている。

アパートの前では、何事か話し込んでいる人の輪ができていた。

壮年の人間、小柄な猫獣人、腕に包帯を巻いたゴブリン、鱗が所々剥げたりザードマン、そこにいる種族は様々だ。

クロノはどこかで見たような覚えがある顔をいくつか見つけ、確かにダイダロスの避難民がこの場所にいるということを確信していた。

しかし、見るからに落ち込み、覇気の無い彼らに対して、すぐにかける言葉をクロノはやはり見つけられなかった。

そうして悩みつつも、とりあえず声をかけてみようと思い立ち、口を開こうとしたその瞬間だった。

「おい、貴様っ！」

突如としてかけられる声、ハッとして顔を向けると、そこには一人の男が立っていた。

「貴様、クロノだな、冒険者の！ 何故貴様は生きてる！ よくも俺達の前に顔を出せたものだな、ええっ！！」

そういきなり喚きたてる男の顔を、クロノは確かに覚えていた。

「あんたは、ナキム」

クウアル村の村長の息子にして、自警団団長、それがこの男の肩書きである。

村の集会場にてスパードへの避難を進言するクロノを散々に罵り反対した、少しばかり因縁の有る相手であったため、よく覚えていた。

あれからまだ一月も経っていないのだが、彼の恰幅の良い体はかなりやつれてしまっている。

それだけで、彼がどれほどの目に遭ったのか、容易に想像がつくというものだろう。

「貴様がっ！ 貴様がスパードに逃げようなんて言い出すから、こんなコトになったんだ！！」

「ま、待ってくれ、それは――」

あまりに突然の言いがかり、咄嗟に言い返そうとするものの、ナキムは全く聞く耳を持つとうとしない。

「よくも騙してくれたな！ あ、あんな、あんな恐ろしいバケモノに襲われるだなんて、聞いてないぞ！」

「騙したつもりなんてない、あの時は逃げなきゃ全員死んでいた」彼の言う‘バケモノ’とは、恐らく使徒のことだろう。

あんなバケモノに襲われるなんて聞いてない、そう言われても、

使徒が先回りして待ち構えているだなんて、あの時点で予測など出来るはずも無い。

スパードへの避難そのものについては、疑いようも無く正しい判断だとクロノは思っている。

しかし、全滅と言えるほどの犠牲者を出してしまった結果については、紛れも無い事実である。

「黙れ！ お前の所為だ！ 全部お前の所為だ、この疫病神め！ ふざけるなよ、何が冒険者だ、自分だけ生き残りやがって！

ふっ、ひひひ、そうか、分かったぞ、貴様、他の冒険者を見殺しにして、自分だけ逃げてきたんだろう、え！ そうなんだろ！ だから貴様のような男が生きていられるんだろうこの最低ランクのクソツタレ冒険者が！！」

「違う！ 俺は誰も見捨ててなんて——」

クロノの言葉は届かない、届くはずも無い。

ナキムはその怒りが声を荒げるだけでは抑えることが出来ないのか、腰から下げている剣を抜き放った。

一応は自警団の長を名乗っているだけあって、剣の構えはそれなりに様になっている。

だが、溢れ出る怒気と殺気のあまり、柄を握る手に力が籠り過ぎて、剣先がガタガタと震えてしまっていた。

「おい、待て、落ち着いて——」

「黙れっ！ お前の所為で、どれだけ死んだと思ってる……親父も、俺の部下も、みんな、みんな死んだ！！」

今にも斬りかからんばかりに気炎を上げるナキム。

だが、その剣が振るわれる前に、クロノは「攻撃」をその身に受けた。

「っ！？」

それは、小さな石ころ。

クロノの肩口に、コツンと当たってから、また再び路傍に転がる石に戻る。

呆然とした表情で、クロノは自分に投石してきた相手を見た。

「お前の、所為だ」

一人の少年だった。

歳は10を越えるかどうかというところ、よく日に焼けた肌は、両親の畑仕事を手伝っていたからだろうか。

イルズでも、アルザスでも、農村ならどこにでもいるような、ごく普通の少年だった。

けれど、彼は普通の少年は決してする事の無い、悲哀と憤怒の入り混じった、憎しみの形相を向けていた。

「俺、は……」

また一つ、石が飛んできた。

投げたのは少年ではなく、まだ小さな娘の手を引いた、母親だった。

「アンタの、アンタの所為で——」

気がつけば、クロノの前には、何十人もの人だかりが出来ていた。

「お前の所為だ！」

「よくも騙しやがったな！」

「俺の子供を返せっ！」

「死ね！ 死んで詫びろ！」

そして、そこから飛んでくる石、石、石——いくつもの石が、悪意と敵意をもって、クロノに投げつけられる。

「くっ……や、やめてくれ……」

クロノの強靱な肉体には、ただの人が投げつける石つぶてなど、ダメージにはならない。

だが、この石一つ一つに籠められた怨念は、クロノの心を深く抉る。

それは、どんな防御魔法でも防ぐことの出来ない、最悪の攻撃であった。

「やめて、くれよ……」

この大きすぎる犠牲の責任がクロノ一人にあるとは、客観的に見

れば言えないだろう。

誰が悪いのかと問われれば、実際に手を汚した第十一使徒ミサ、彼女以上に悪い人物などいない。

だが、そんなことは最早彼らにとって関係ない、石を投げる手を止める理由にはなりえない。

言いがかりに近いナキムの言い分、それが今や彼らにとっての真実。

この耐え難い不幸の責任を押し付けるスケープゴートに、クロノが選ばれた、ただ、それだけのこと。

しかし、例えそうであることが分かったとしても、今のクロノにはもう、言い返すこともできなければ、飛んでくる石を防ぐこともできないでいた。

故に、それを止められるのは、

「やめなさいよ——」

リリイしか、この場には居なかった。

「——殺すわよ」

その瞬間、クロノの目の前を光の球体が通り過ぎていった。

着弾、音と光の洪水が周囲一体を飲み込む。

「なっ、おい!?! リリイ!?!」

「大丈夫、誰も傷つけてないわ」

最悪の想像が頭によぎったクロノだったが、目の前に立つリリイが冷めた声で即座に否定する。

投石を止める為の、ただの威嚇射撃、いわば閃光弾。フラッシュグレネード

光と音が治まり再び静寂が戻ると、未だに剣を構えるナキムの前に、真の姿である少女の体となったリリイが堂々と立つ。

「リ、リリイさん……?」

ナキムにとっては初めてみる少女姿であるが、その正体は即座にリリイであると理解できた。

その圧倒的な美貌を前に、ナキムの心を占める怒りが魅了チャームの魅力に強制的に上書きされていく。

「これ以上はやめてちょうだい、私達も、もう二度と貴方達の前には現れないから」

「し、しかし……」

「お願いだから、ね？」

冷たく微笑むリリィに、ナキムはイエス以外に選べる言葉は無かった。

「し、仕方あるまい！　もう止せ、止すんだ皆の者お！」

ナキムは軽やかにくりりと背中を見せて反転すると、石を投げつけていた群集に向かって静止の言葉を投げかけた。

まだ自警団長の肩書きが生きているのか、それともリリィの威嚇を恐れたのか、再び罵倒も石も飛んでくることは無くなった。

そうして、すぐにその場は解散したようで、口々に恨み言を呟きながらも人々は方々へ散って行った。

後には、クロノとリリィ、そして終始我関せずを貫いたフィオナの三人だけが残るのみ。

リリィはその場に呆然と立ちすくむことしかできていないクロノの手をとって、優しく微笑みかけた。

「クロノ、帰ろう？」

「ああ、助かったよりリィ、ありがとな」

感謝の言葉に満面の笑みを浮かべて「どういたしまして」と応えようとしたリリィだったが、次の瞬間に、彼女の表情は凍りついた。「けど、悪い、今は一人にしておいてくれないか……」

クロノはそう言って、ゆっくりとリリィの手を振り解いたのだった。

第155話 拒絶（1）（後書き）

ナキムって誰だっけ？ という人は第73話『避難開始（2）』
をご覧下さい。アルザス戦前とは、随分と懐かしい話ですね。

第156話 拒絶（2）

「けど、悪い、今は一人にしておいてくれないか……」

リリイは振り解かれた自分の手のひらと、虚ろな表情を浮かべるクロノの顔を、交互に見つめた。

「え、あ……でも……」

思いがけぬクロノの言葉と行動、リリイは凍り付いてしまった表情にぎこちない笑みを浮かべて追いつがる。

「ごめんな、心配かもしれないけど、どうしても、一人で考えたいんだ」

対するクロノも、無理に作った微笑を浮かべて、リリイへと言い聞かせた。

「そ、そんな……」

「頼むよ、お願いだから、俺の我儘、聞いてくれないか？」

それは、明確な拒絶の意思だった。

この時、リリイは初めてクロノから自分に対する否定的な感情を突きつけられた。

リリイは妖精なら誰でも持ちえる精神感応能力テレパシーによって、他人の表面に現れる意識や感情を自然に察知してしまう、それはクロノも例外ではない。

これまでクロノは、一度たりともリリイに悪感情は勿論、共生活を送るにあたってプライバシーに関わる僅かなストレスすら覚えることは無かった。

そしてその事を、感情そのものを読み取れてしまうリリイはこれ以上無いほど理解していた。

だが、今この瞬間、クロノはリリイから距離を置きたいと思った、思ってしまった。

それは決して疎ましく思ったからでも、リリイの態度が気に入らなかったからではない。

このまま一緒に居ると、リリイには自分の見せたくない姿を見せ
てしまいそうだからだ。

リリイに情けない姿は見せたくない、それはきっと、妖精の森で
出会ったあの瞬間から
ずっとクロノが抱き続けた、男の意地である。

故に、心が張り裂けそうなほど大きすぎるショックを覚えた今は、
今だけは、リリイの前から姿を消したかった。

「ごめん、なさい……」

普段の冷静な彼女なら、クロノの本心を理解することが出来ただ
ろう、いや、例えテレパシーなど無くとも、その行動背景や態度を
見れば十分予測できていた。

だがしかし、クロノの表層意識に現れた、リリイの前から逃れよ
うとする感情、彼が「リリイから離れたい」という心の声が、この
32年間に及ぶ人生の中で、最大最強の衝撃となって彼女のハートを
襲う。

初めてクロノから向けられた拒絶の意思を前に、ただそれだけで
リリイは平静さを失ってしまった。

光の泉を自らの手で滅ぼし、誰が何人死のうと、その心を波立た
せることの無かった、伶俐冷徹、残酷無比なリリイ、だが今この瞬
間、彼女の心は揺れに揺れていた。

まるで、片思いの相手から告白を断られた純情可憐な乙女よう
に。

「いや、俺の方こそごめんな、余計な心配かけて、けど、俺の事は
放っておいてくれても大丈夫だから」

「ううん……いいの、引き止めちゃって、ごめんなさい」

リリイは、取り乱さずにそう返した自分を褒めてやりたかった。
だがその声音は確かに震えていた。

そしてそんなリリイの変化を、すでに他人を気かけられる余裕
の無いクロノが気づくこともない。

表面上の言葉通り、クロノは一人となり、リリイはそれを認めた、

それだけの取り決めが成されただけであつた。

「悪いけどフィオナ、リリイと一緒に先に帰ってくれ」

すぐ傍で影と同化していたんじゃないかと思えるほど存在感を消していたフィオナへ伝える。

「分かりました」

勿論、リリイでも引き止められなかった以上、心配ではあるがクロノを止めることなどフィオナに出来るはずも無かった。

「夕食までには帰るから、済まないな、買い物はまた今度だ」

「いえ、お氣になさらず」

クロノは苦笑気味にもう一言だけ謝罪の言葉を残して、元来た道とは別方向である、暗い路地に向かって歩き始めた。

少しずつ遠ざかってゆくその背中を、リリイは体を小刻みに震わせながら、目を見開いて凝視している。

けれど、その後姿が消える最期の瞬間まで、彼を引き止める言葉を一言もリリイは発すことができなかった。

「リリイさん、帰りましょう」

どこか輝きを失ったリリイの羽を見ながら、背中越しにフィオナは少しだけ心配そうなニュアンスを含ませて声をかけた。

だが彼女の声など聞こえていないかのようにリリイは無反応で、クロノが歩き去っていった路地の先を見つめたまま動かない。

「リリイさーっ！？」

背後から回りこんで、リリイの顔をみた瞬間、フィオナは予想以上の光景に、思わず息を呑んだ。

「ひっ……ぐすっ……」

美しいエメラルドの瞳から、透き通った輝きを放つ宝玉のような大粒の涙が零れていた。

「うう、ぐすっ……ク、クロノに……」

華奢な肩を震わせ、白く細い手で顔を覆って、
「クロノに、怒られたぁ……う、うううあああああああ！」

リリイは、生まれて初めて泣いたのだった。

大好きな人に拒絶された事が悲しくて、嫌われることが恐ろしくて、声をあげて泣いた。

心に渦巻く悲しみがそのまま溢れ出たかのように、涙は止め処なく流れ続ける。

「リリィさん、泣かれてしまっても、私にはどうすればいいかわかりません」

そもそも人付き合いの苦手なフィオナ、悲しみに泣きはらす人の上手な慰め方など分かるはずも無い。

けれど、この涙する妖精少女の姿を、人目に晒す事は憚られると思っただようだ。

「とりあえず、コレで顔を隠してくださいね」

そうしてフィオナは、魔女のトレードマークである巨大な黒の三角帽子を、自分の頭から、リリィへと乗せ換えた。

淡い水色の髪を露わにした魔女は、そのまま妖精が泣き終えるまで、ずっとその傍に立ち続けるのだった。

第157話 拒絶(3)

当て所も無く、さ迷い歩いていた。

暗く狭い、薄汚れた路地裏を歩いている、ここはまるで迷宮のようだな。

夕食までには帰ると言った様な気がするけど、本当にこんな所から帰れるかどうかは分からない、いや、そもそも本当に帰る気なんであるのか、俺は？

陽が暮れるまでに、この沈んで、淀んだ感情を振り払って、何でもない、笑顔でリリイとフィオナに言えるのか？

無理だ、空元氣も、虚勢も、今の俺には装うだけの氣力は持てない。

「俺の所為、か」

違う、俺が悪いんじゃない。

スパードに逃げなきゃ本当に皆死んでいたんだ。

俺は、俺達は必死に戦った、皆を逃がす為に。

どれだけいるか分からない、倒しても倒しても現れ続ける十字軍を相手に、力の限り戦った。

時間は稼げた、ギリギリだったが、どうにか逃げ切れそうなのだけの時間は確かに稼げたんだ。

でも、結局手遅れだった、無駄だった、俺達が戦っている間に、あのミサとかいう使徒に避難民は襲われていて、みんなとっくに死んでいたんだ。

そうだ、悪いのは全て遊び半分で全てを台無しにしてくれた使徒で、俺の責任なんかじゃない。

だって俺は、あんなに一生懸命戦ったんだから。

「言えるかよ、そんなこと……」

全滅、それが結果、それが全て、それが現実。
責任だとか、言い逃れだとか、どうでも良い。

いっそ清々しいほどだ、全部俺が悪い、そうだ、結局俺は誰も守ることが出来なかったんだ。

イルズ村で埋葬した友人達の前で、今度は、今度こそは誰も殺させない、そう誓ったはずなのに、はは、なんてことだよ、とんでもない数の犠牲者を出したんだぜ、俺は。

「誰も……守れなかったんだよ」

沈む沈む、どこまでも気持ちは沈んでゆく、後悔に、罪悪感に、無力感に。

やっぱり、俺なんかが、ただの高校生だった俺なんかが、何人もの人を助けようなんて考えたのがおこがましかったのだ。

人体実験で、少しばかり人より強い力を与えられたからって、それで、それだけで誰かを守れる強い人間になれたと錯覚しちゃったんだ。

イルズ村を救えなかった、一度失敗しているにも関わらず、どうしようも無いほど愚かだな、俺は。

もっと、自分の分というものを弁えていれば良かったんだよ。

他人の事なんて考えず、自分と、手の届く大切な人の事だけを考えて。

そう、ダイダロスの城壁でサリエルと再会したあの時から、俺は選択肢を間違えた。

命をかければみんなを救えると思って、愚かにも戦いを選んだ。

度し難いほど馬鹿だな俺は、英雄にでもなったつもりか、俺は誰かを救えるほど立派な人間じゃないのに。

自分の身すら守れるかどうかわからない、一人の人間に過ぎない。あの時、逃げてでも追わないと言ったサリエルの言葉に従って、リイを抱えて逃げれば良かったんだ。

それが正解、それが最善、他のヤツの事なんか知ったことじゃない。

そうさ、キプロスが言うように、俺はどこまでいっても実験番号49番なんだ、そんなヤツが守れるものなんてたかが知れている。

もう止めよう、誰かを守ろうなんて思うのは。
もう止めよう、誰かを救えるなんて思うのは。

「俺には、誰かを助けることなんて、できないんだよ……」

そう、自分と、自分の大切な人のことだけ考えろよ。

余計な責任を負うな、余計なお節介なんかするな。

何をしたって、どうしたって、こうなるのがオチだ。

苦しいだけだ、辛いだけだ、悲しいだけだ。

この思いは、こんな思いは、俺には重過ぎる、俺が背負えるようなモンじゃない、背負うべきじゃないんだ。

俺が背負うべきなのは、自分と、他の何人かの、大切な仲間だけでいいんだ。

もういいだろう、十字軍がどれだけパンドラ大陸を征服しようが、関係ない。

俺達だけ逃げればいいんだ、戦わずに逃げるだけなら、どうともなる、生きていくだけなら、なんとでもなる。

「だからもう、誰かを助けなくたって、いいんだ」

諦めろ、他人の事は諦めろ、無視しろ、関係ない、関わるべきじゃない、放っておけ。

俺は俺、彼らは彼ら、人生全て自己責任。

よく覚えておくんだ、もう二度と失敗なんかしないように、苦しまないように、俺は誰かを救えるような人間じゃないと、英雄じゃないと、自分の事で精一杯な、矮小な一個人なのだということを。

そう、これは決心だ、他人を見捨てる、その行動をとれる決心なのだ。

「きゃっ！ 助けてっ——」

その時、耳を劈く甲高い悲鳴が聞こえた。

これまで周囲なんて全く認識せずに歩き続けていた俺の体は、思い出したかのように意識を外側の世界に向け始める。

今立っている場所はさっきからほとんど代わり映えの無い、薄汚いスラムの一角。

叫び声はもう聞こえてこない、だが、すぐ目の前にある路地裏の奥から、何事か言い合う声が漏れていることで、最初の悲鳴が気のせいじゃないことを証明している。

心臓が一つ高鳴る。

誰か、そこで襲われているのか？

なら、早く助けないと――

「は、ははは、バカか、俺は」

三步も歩かない内に、決心を忘れるとは、鳥頭以下の頭の悪さだ。俺は、もう誰かを助けたりなんかしない、どうせ助けることなんてできない。

「面倒事は避ける、冒険者なんて、そんなモンだろ」

歩き始める。

複数人の声が聞こえる路地裏、その前を通り過ぎる時、何気なく視線を向けると、

「あう、や、やめて、ください……」

「うるせえ、大人しく出すもん出しゃ痛い思いはせずに済むぜ？」

「さっさとしやがれこのクソガキが」

壁際に押し付けられている、小さな少女と、彼女に向かって詰め寄る三人の大柄な男。

典型的な恐喝、いや、艶やかな黒髪とルビーのように綺麗な赤い瞳をした可愛らしい顔立ちの少女だ、あの三人の内に僅かでも年下趣味があれば、金目のものを盗られるだけでは済まないだろう。

他に何を奪われるのか、考えるだけで反吐が出る思いではあるが。「やめろよ、馬鹿馬鹿しい」

こんな場所だ、ああいうコトは日常茶飯事だろう。

下手に出て行って厄介事に巻き込まれたらどうする。

あの三人の男は如何にもただのゴロツキといった風体だが、そのバックにはこの街を裏で牛耳るギャングのような組織があるかもしれない。

れない、そこまで大げさなものじゃなくとも、他に徒党を組んでいる仲間が沢山いるのは十分可能性として有りうる。

もしそんな連中を敵に回せば面倒なんてレベルじゃない、四六時中付け狙われれば命の危険は十分以上にある。

それに、ああ見えてあの三人は俺なんかより遥かに強いランク5冒険者かもしれない。

有り得ない、なんてことは無い、使徒が来るなんて有り得ないと思っただら、みんなその使徒に殺されてしまったのだ。

使徒か、はは、ひょっとしたら第八使徒アイのように、あの三人の内の誰かが使徒だったりするかもしれない、いや、下手すると三人全員使徒かもしれない。

サリエルしかパンドラには居ないと思っていたら、二人も、しかも同時に目の前に現れたのだ、使徒の神出鬼没ぶりを思えば、全く有り得ない話じゃない。

「おらっ！ 早くしろっつつつてんだろが！！」

「あっ、いや——」

真の姿のリリィと同じかそれよりもやや幼いか、と思えるほどの小さな少女に、真ん中の男が乱暴に掴みかかる。

その拍子に、彼女の纏う簡素なグレーの衣服は破れ、真っ白い肌をした肩口が露わとなる。

そこまで遠目に見て、俺は路地の前を通り過ぎた。

背後から聞こえる、男達の怒号と、絹を裂くような少女の悲鳴。

「これで、いいんだ」

決めたんだ、俺はもう、誰も助けないと、決めたんだ。

第157話 拒絶（3）（後書き）

前回と今回は一話にまとめた方が良いレベルの短さですね、すみません。しかも今週は話の長さがかなりマチマチ……微妙な感じになって申し訳ないです。

第158話 守護の力(1)

強盗、窃盗、恐喝、スリ、およそ金目のものを奪う犯罪行為は、こうした貧民の集うスラム街においては活発なものである。

それはここ、スパードにおいても例外ではない。

この人通りの少ない、目立たない路地裏に、今また一人の哀れな犠牲者が居た。

「きゃっ！ 助けてっ——」

幼い、と言っても齢10は越えているだろう、その少女は思わず助けの声をあげるが、その悲鳴はすぐに塞がれた。

気がつけば、目の前には三人の男、少女も含めて4人とも全て種族は人間だが、人間の人口比率が高いスパードにおいてはそう珍しい組み合わせではない。

男は三人とも、成人男性の平均よりも大きな身長を誇り、シャツから覗く二の腕には筋肉が逞しく盛り上がっていると同時に、幾つもの傷跡が刻まれ凶悪さをより一層漂わせている。

「あう、や、やめて、ください……」

凄味を利かせた表情で迫る男を前に、ただでさえ小柄な少女は実際の身長以上に、男達の姿は大きく見えることだろう。

少女が発する拒絶の言葉は実に弱弱しいが、それでも言えただけ頑張ったと讃えられるべきだ。

「うるせえ、大人しく出すもん出しゃ痛い思いはせずに済むぜ？」

「さっさとしやがれこのクソガキが」

もっとも、やめてと言われただけで退散するようなら、男達はこの凶行には及ぶことは無い。

「おらっ！ 早くしろっつってんだろが!!」

「あっ、いや——」

少女の目の前に立つ、三人の内の真ん中の男が焦れたのか、乱暴に少女の胸倉に掴みかかる。

彼女が纏っているのは、この辺に住む子供達と同じような、飾り気の無い粗末な衣服。

魔法の防御効果などは勿論、物理的な品質だけをみても、丈夫とは言いがたい粗悪品。

男の腕力に晒された薄い服は、ビリビリと音を立ててあっさりと破けてしまう。

露わになる乙女の柔肌。

例え童女趣味などなくとも、その瑞々しい白い肌を細い首筋から肩口に渡って目の前に晒されれば、男なら思わず目を惹いてしまう。そして、このボーイッシュなショートヘアだが、絹のようにサラサラとした艶のある黒髪と、光り輝く赤い宝玉のような真っ赤な瞳を持つ、実に愛らしい顔立ちをした美少女だ。

そんな彼女の衣服が乱れた状況を前にして、粗野で粗暴、獣じみた欲望に忠実な男が何を考え、何をしようとするのかは、想像に難くない。

「きゃあああ！」

再び悲鳴を挙げる少女に向かって、金とはまた別の欲に駆られた三人の男達の手が無遠慮に伸ばされる。

その野太い指先が少女の身に届こうとする、その時だった。

「おい、止めろ」

一人の男が現れた。

少女と同じ黒い髪、だが眼帯に覆われていない右の瞳も深い闇のような黒色をしている。

黒髪黒目の珍しい配色、だがそれ以上に尋常とは思えぬ鋭い眼光を、男は発していた。

突然かけられた思わぬ静止の声に、少女へ伸ばしかかった三人分の手は止まる。

だが、勿論彼らが改心したはずなど無い。

突如として現れた乱入者を警戒し、即座に二人の男が臨戦態勢をとる、残る一人は獲物である少女を逃がさないよう、か細い腕を掴

みとっていた。

「ああ、誰だテメえ？」

ドスの聞いたその声は、ありがちな台詞だがこれ以上ないほどの威圧感を伴っている。

威嚇すると同時に、この現れた男の姿をしっかりと観察した。

背は自分達と同じ程度には高い、白いシャツに随分とダメージの溜まった黒い革のパンツ、この辺の住人と大差ない粗末な格好。

しかし、自分よりも引き締まったように見える腕の筋肉に、油断の感じられない立ち姿は、戦いを知らない一般人のソレでは無い。

胸元から下げられる鋼のプレートが、やはりこの男が一般人ではない事を証明している。

正真正銘ギルドカード、見間違えるはずも無い。

「この辺じゃ見ねえ顔だな、新入りだってんなら見逃してやる、こらじゃこういうのは、よく有るコト、なんだ、冒険者でも下手に首突っ込むと痛い目みるぜえ」

少女を抑える男は、男の正体が冒険者であると知って尚、余裕の笑みを崩さずにそう言い放つ、自分達が上位者であることを信じて疑わない、そんな口調だ。

何故なら、モンスターと戦う冒険者といっても、鋼鉄のプレートが指し示すのは最低ランクである1。

駆け出しの新人、いや、この様子を見れば多少は経験があるのだと窺えるが、所詮はそれだけ。

それに、黒髪黒目に眼帯をした特徴的な男が、ランク1でいながら凄まじい活躍を上げる期待の新人冒険者、だという噂などもスパーダには一切流れていない。

という事は、やはりランク1相当の、どう高く見てもランク2に上がるかどうかという程度の実力の持ち主。

その上、どこからどう見ても相手は完全な丸腰、ナイフの一本すら隠し持っている気配は無い。

三人の男達は、この乱入者を値踏みした結果、大した脅威では無

いと判断を下したのだった。

「おら、さっさと消えな兄ちゃん」

「んん、それとも、ひょっとしてこのガキに気があんのか？　へへへ、いい趣味してるぜ兄ちゃんよ、いいぜえ、そんなら兄ちゃんにプレゼントしてやるよ、遠慮はいらねえぞ、その頃にや中古品になっちまってるけどな、ひやははは！」

下品な笑い声を高々と上げる三人の男達。

そんな彼らに向かって、ランク1冒険者は、表情は変わらぬまま、強く一步を前へ踏み出した。

「止めろと言っただろう、大人しく、その子を離すんだ」

静かに言い放つその声を聞いた男達は、雰囲気ガラリと変えて俄かに暴力の気配を漂わせた。

「俺らとやろうってのか、あんま良い判断じゃねえな」

気合を入れて拳を構える男からは、明らかな殺気が漂い始める。

「冒険すんのは、クエストだけにしといた方がいいぜ」

もう一人の男も、同じように殺気を放つ。

一般人なら、その圧倒的な気配に当てられ、恐怖ですくみ上がる事だろう。

「その子を離せと言ってるんだ、頼むから、聞いてくれないか？」
拳を構え殺気を放つ二人など無視するかのように、その台詞は少女を抑える三人目に向けて放たれていた。

「はっ、バカな英雄気取りが、おう、もう殺っちまえ」

その声を合図に、臨戦態勢をとっていた二人の男が同時に動き出す。

「そうか——『魔弾』」
バレットアーツ

そう呟いた冒険者の声は、三人の耳に届くことは無かった。

なぜなら、少女を抑える男の立ち居地は、小さな呟きなど聞こえる距離には無い。

そして、小声一つ聞き漏らすことのない目の前ですでに距離を詰めていた二人の男は、

「がっ！」

「ぐはぁ！」

冒険者の手元より発射された黒い塊を頭部に喰らい、大きな衝撃を受けて意識を失ってしまったからだ。

いつの間に攻撃を受けたのか、いや、例えその高速で飛来する黒い物体を視認できたとしても、それが何なのか理解できなかっただろう。

どうであれ、すでに二人の男の体が、衝撃によって宙に浮かんでいた。

意識の無い浮遊時間はすぐに終わりが訪れる、路地を形成する左右の石壁にそれぞれ鈍い音を立ててぶち当たり、死体のようにグツタリと地面へ転がった。

「ちっ、このヤロウっ！ 何しやがった！」

殴りかかった男二人が、よく分からない内に倒されてしまった所為で、三人目の男は流石に少女に構っている余裕など無くなり、掴んでいた腕を手放した。

その時、すでに冒険者は気絶したのか死んだのか判別のつきがたい二人分の男を乗り越えて、最後に残った男に向かって駆け出している。

だが、こういった危機的状況も慣れているのか、男は慌てる様子を見せずに、腰の後ろに隠していた大振りのダガーナイフを瞬時に抜き放った。

「死ねやぁ！」

とは言うものの、男の狙いはナイフによる一撃必殺では無かった。素手の相手に対してナイフを持つのは大きなアドバンテージになるが、逆に奪われてしまえば形成は逆転する。

無理に密接するほど近づく必要性は無い、ナイフ分のリーチを生かしたアウトレンジから、少しずつ切り刻んで相手の体力を奪えばよいのだ。

特に街中での殺人は言い逃れしようの無い犯罪行為である、出来

れば半殺しくらいに留めておきたいのが本音である。

故に、ここで男が狙うのは向き出しの首元や鎧に覆われていない心臓では無い、相手の攻撃手段である手足だ。

男は、まずは腕へと狙いを定めた。

「りゃっ——」

ギリリと光るダガーナイフが男の腕から繰り出される、その一撃は完全に相手の腕を捉えている。

繰り出された拳を、逆に切り裂くかと思われた、いや、男は確実に斬ったと思った。

パキイイイン！

だが、それは突如として出現した黒い盾によって防がれた。

一見するとただの真っ黒い板、20センチ四方の小さな正方形。

しかしながら、それが魔法によって形作られた盾であると、男は瞬時に悟った。

「防御魔法だど！？」

驚きの言葉が漏れると同時に、防御魔法を展開した反対側の腕が、強かに男の胴を打ち抜いた。

「ひぎゃ——」

どこか情けない声を残して、軽々と男が路地の向こう側へ吹き飛んでいく。

ガラガラと何かを盛大に巻き込んで胴体着陸を決めたようだが、冒険者はすでにナイフ男の行方になど興味は無く、視線を向けることもしなかった。

直前まで男達を鋭く射抜いていた彼の目は、今や優しさに満ちた眼差しで、壁を背に立ちつくす小さな少女に向けられていた。

「怪我、してないか？」

「はい、大丈夫です」

少女は、自分を救ってくれた男に対して、臆する事無く返事をす

る。

そして、燃えるような真紅の瞳で、冒険者の深淵のような黒い瞳を真っ直ぐ見つめ、言葉を続けた。

「助けてくれて、ありがとうございます」

素直な礼の言葉。

冒険者の男は、満面の笑みを浮かべてこう応えた。

「どういたしまして」

第159話 守護の力(2)

自分の事だけを考えて、他人の事なんて放っておく、平気で見捨てる、面倒事はゴメン、厄介事に首を突っ込まない、それが正しい、それが利口な生き方。

分かっている、心の底からその通りだと納得できる。
けど、

「きゃあああ！」

そんな悲鳴をあげられたら、目の前で襲われていたら、助けるしかないだろうが！

気がついたら、三人の男達をブツ飛ばしていた。

最後に殴り飛ばしたナイフ男が言っていた、「バカな英雄気取りが」、ああそうさ、正にその通りだよ。

俺はさっき固めた決心さえ本当に三步も歩かぬ内に翻すほどのバカで、とんでもない犠牲を出しても尚、誰かを見捨てて逃げ出すことを未だに選べない英雄‘気取り’だ。

でも、その何が悪い、何がいけない。

何人死んだ？ どれだけ死んだ？ 誰も守れなかった？ だから、俺にはもう誰かを守ろうと行動する権利なんて無いのかよ？

否、断じて否だ。

次は、次こそは、誰かを助けることができるかもしれないじゃないか。

ビビってんじゃねえよ、俺の体にはまだ、溢れんばかりに黒い魔力があるだろうが。

頭の中に渦巻くのは、俺の行動を否定する正しい論理。

けど駄目だ、そんなものには従えない、この体が、本能が、魂が、全て一丸となって逆らう。

小さな少女が目の前で襲われているこの状況を、本当に見捨ててしまうことなんて、できるわけが無かったんだ。

そして、その行動に後悔なんて、あるわけ無い。

だって、今度こそ、今回こそ、本当に人を助ける事が出来たのだから。

「怪我、してないか？」

「はい、大丈夫です」

嬉しそうに微笑む少女、その真っ赤に燃えるような赤い瞳が、俺の目を真っ直ぐに見つめる。

「助けてくれて、ありがとうございます」

素直な礼の言葉が俺の耳に届く。

いや、礼を言うのは寧ろこっちの方だ。

君を助ける事が出来たから、君がお礼を言ってくれたから、俺は奈落に落ちていくような暗い思いを払拭することができたのだから。

けど、俺の事なんて彼女は知らない、知るはずも無い。

だから、余計な事は言わずに、一言だけ応える。

「どういたしまして」

俺は今、上手く笑えているだろうか？

いや、きっと今の俺は人生の中で一番良い笑顔をしているんじゃないだろうか。

心は晴れた、もう迷うことは無い。

これで、心置きなく動き始めることが、前を向いて歩き始めることが出来る。

今の俺に必要なのは、もっと強い力、使徒を打ち倒すだけの力だ。強くなるう、もっと強くなって、今度こそ、本当にみんなを守るんだ――

「ふふ、本当にありがとう、やっぱり僕を助けに来てくれたね、そうしてくれると信じていたよ、黒乃真央」

その言葉は、明確な違和感となって俺を襲った。

反射的にこの少女から一足跳びに距離をおき、身構える。

「どうして、俺の名前を知っている？」

しかも、完璧な発音で。

サリエルもリリイも、俺のフルネームを知ってはいるが、正確な日本語発音で名前を呼べたことは無い。

直感が訴えかける、俺が助けたはずのこの少女は、‘普通’、じゃない。

「そんなに警戒しないでほしいな、僕は君の敵じゃないよ」

少女が浮かべる微笑は、さっきと何ら変わらない愛らしいものだが、今は得体の知れない恐ろしいもののように思える。

一体何だというのだ、この一連の騒動は、俺を嵌める為の罠かなにかだったのか？

だとすれば、それに付き合ってやる理由などは無いし、この底知れない相手に戦いを挑む危険性も高い、とるべき選択は、逃げの手だろう。

「あっ、待ってよ、少しの間でいいから、僕の話聞いてくれないかな？」

路地裏を抜け出すべく一步踏み出す前に、俺の行動をどうやってか察知した少女が静止の言葉を投げかける。

だがそんな言葉で警戒感など薄れるはずも無く、やはりこの場から一刻も早く脱しようと思ったのだが、

「なんだ、壁が！？」

気がつけば、左右に広がっていた石壁は黒々と底なし沼のような色合いとなって蠢き始める。

本格的な危機感を覚えるが、壁の、いや、この路地裏全体が変化するほうが早い。

波打つ不気味な黒壁から無数の触手が飛び出し、互いに絡まり合っ

って前後の通路を塞ぐ。
まるで黒い茨の壁が出現したようだ、一足飛びに飛び越えられそうもないし、強引に破壊して突破するのも難しそうだ。

こんなのは初めて見る効果の魔法だ、路地裏の空間そのものを造

り替えたかのような変化など尋常じゃない、かなり上位の結界だろう。

よく見れば、俺が倒してそこらに転がっているはずの三人分の男の体も綺麗に消え去っている、ならばアレも魔法の一部だったのか？
どちらにせよ、この少女はとんでもない魔法の実力を持っていることは確定だ、まさか、本当に使徒だったりしないよな。

「お前は、誰なんだ？　なぜ俺を狙う？」

相手の口ぶりからして、俺を速攻で殺す意思は無さそうだ。

とりあえずは、聞けるだけ情報を聞いてからでも、戦うのは遅くない、上手く行けば話し合いだけでこの場を切り抜けられるかもしれない。

だから下手に攻撃の意思を見せないためにも『呪怨鉈「腹裂」』は、まだ呼び出さない。

「ごめんね、僕は君の事を知っているけれど、君は僕の事なんて知らないよね、それじゃあ、自己紹介させてもらうよ」

初対面の相手と友人関係を築こうとするかのような、愛想の良い笑みを浮かべながら、少女の体は暗黒と化した地面から伸びる触手に包まれてゆく。

俺の『影触手』アンカーハンドとほぼ同じ質感を持つその触手は、少女の全身を覆いきったと思ったその瞬間に変質する。

彼女が身に纏っていたはずの、暴漢の腕によって破かれたグレーの上着と、少女らしいロングのスカートはいつの間にか消え去っており、代わりに触手が変質した黒い闇の衣装で身を包んでいる。

その格好は一言で言うなら、学ランにマントを羽織ったような姿。学ランというよりは、旧日本軍の将校が着る軍服と言ったほうがよりの確だろう、黄金の装飾や白金の勲章が煌びやかに深い黒地を飾り立てている。

高く襟の立った漆黒のマントは、創作の中で登場する吸血鬼が纏っているような、実用度外視なほどの大きさを誇っている。

よく見れば、マントの先は地面に垂れているのではなく、闇の地

面と一体化していた。

もしかすれば、この黒い空間は彼女が装備するマントによって造り出されたものかもしれない。

その大きすぎるマントと被ってはつきりとは見えないが、彼女の腰には一本の剣が、いや、恐らく黒色の短杖ワンドと思われる武器を携えている。

そんな魔術士と貴族の中間のような出で立ちとなった彼女は、幼く可憐な容貌は変化していないはずなのに、少女というより少年であるかのように印象がガラリと変わってしまった。

目の前にいる存在が少女であるのか少年であるのか、性別すら定かでなくなり、より一層の得体の知れ無い不気味さを増幅させる。

だが俺のそんな不安感など関係なく、漆黒の衣装を身に纏ったことで、自己紹介をする準備がようやく整ったと言わんばかりに、どこか満足そうな笑みを浮かべている。

そして、その名がついに小さな唇から紡がれた。

「僕の名はミア・エルロード、君に加護を授けたくて、会いにきたんだよ」

ミアという名も、エルロードという姓のどちらも記憶には無い、初めて耳にする名前だ。

だが、‘加護’という言葉そのものは、知っている。

「まさか、神なのか？」

神、そのあまりに現実離れた存在は、いざ口にしてみればどこか虚しさすら感じるほどリアリティーに欠ける。

だが、ミアは当然のように、大きく頷いて応えた。

「うん、パンドラの『黒き神々』僕はその一柱さ」

自ら神と名乗る行為は、この魔法の存在が当たり前となった今の俺の常識を持ってしても、即座に受け入れがたいものがある。

いや、この異世界には確かに‘加護’、という魔法でも武技でもない特別な力を与える者が存在しているのは紛れも無い事実だ。

だがしかし、こうして、どこからどうみても人間の子供にしか見

えない、確かな姿形をとって現れると、それが神なのだとすぐに信じることはできない。

「むっ、僕のこと信じてないでしょ、本当に神様なんだよ！」

君の黒色魔力はどこから引き出しているのか知っているでしょ」
プーっとほっぺたを膨らませて分かりやすくむくれる自称神様の反応に、俺は少しばかり警戒感を解く。

それに、俺の黒色魔力は‘黒き神々の加護’によってもたらされていると言っていたリリイの話も思い出す。

だが如何せん、俺にはその実感が無い。

「でも異世界の人ならしょうがないのかな、彼らは中々神の存在を信じようとしなから」

「俺以外に異世界から来た人の事を、知っているのか？」

俺のフルネームを正確に知っていたのだ、この際、どうして俺が異世界人であることを知っているのかはおいておく、問題は、他にも異世界出身のヤツを知っているかのような口ぶりだ。

「僕が生きていた時代にも、君のような者がいた、寧ろ今よりも多かったくらいだよ」

「そう、なのか……」

言っていることの理解は出来るが、すぐに納得できるかと言われれば話は別だ。

「詳しく教えることは出来ないけどね、神様にもルールがあるから」
「神様のルール、か。」

なら、俺達がこんな目にあっても助けようとしらないのも、ルールってヤツなのかよ？」

全くもって理不尽、他力本願もいいところな物言いだ、神を名乗るのならば、これくらいは言わせてもらいたい。

神なら、どうして誰も助けなかった、十字軍を、使徒を止めなかった、いや、そしてなによりも、いきなり地獄の人体実験をさせられた、俺を救ってくれなかった？

「神は万能じゃない、君が知っての通りだよ」

ミアは真剣な表情で、また俺をその赤い瞳で真っ直ぐ見つめて言葉が続けた。

「少なくとも、この世界において神は何でも出来る全知全能の存在ではないんだよ。」

僕達は、この世界と次元の異なる、君達の言う‘神の世界’に住んでいる」

だから、今ここにこうしているミアも仮初めの存在である、ということらしい。

「僕達‘黒き神々’は、基本的にこの世界を遠くから見守る存在ではない、神が世界に干渉できる事象はとも有限定的なものなんだ」その限定的な事象というのが、雨を降らせたり、実りを豊かにしたり、といった人々が神に願う自然現象というわけだ。

「個人に特別な力を授ける‘加護’も、その神が世界に干渉できる一部分ってことか」

「その通り、だから僕達がどう足掻いても、直接この世界に降臨して救済するなんてことは出来ないのさ。」

この世界において、神の存在は人々に力を与える‘システム’に過ぎない、僕達はその個人に見合った力を授けるだけ、目の前にいる‘敵’を倒すのは、この世界で生きる人々が自ら行わなければならない。

神は自ら助ける者を助ける、ってね」

神は人知を超える力を持っているが、世界に干渉可能な分でしかその力を顕現出来ない。

結局のところ、神の力の一部が使えると言っても、地球で信じられる神と大差は無い、全ての人を幸せに救済してくれる‘神’は決して存在しないのだから。

まあ、分かっていたことだけだな、神様が俺達を救ってくれるなんてのは、現実の努力を放棄した甘えた幻想でしかないことなんて「それで、ここからが本題だよ、僕は君を直接救うことはできないけれど、君に力を授けることは出来る」

「俺に‘加護’をくれると言うのか？」

ミアは肯定する、最初に名乗った時に言ったことはどうやら本気であるようだ。

「すぐには信じられないな、俺は神を信じたことも無ければ、信仰を捧げる為に祈りの一つもあげたことは無い、そんな俺に加護を与えるなんていうのは、都合の良すぎる話じゃないか？」

俺は確かに力を欲した、だがしかし、神が「はい分かった」と言っただけで何か力を与えてくれるなんてのは、あまりに出来すぎた話だ。力というのは、望んだからと言ってそう簡単に手に入るものじゃない。

俺はすでに人間離れした破格な力を手にしているが、それでも人体実験という地獄の責め苦を経験した結果、身についたものだ。

これ以上の力を、神が許したからと言ってそうそう簡単に得られるとは思えない。

「それは心配いらないよ、信仰を捧げる行為、はこれから行ってもらうから、試練、と言ったほうが正しいかな」

「試練か、なるほど、やっぱりそう簡単に力をくれるわけにはいかないようだな」

だが、そうと言うのなら納得がゆく。

加護を得るのも、剣を振って修行するのも、同じ力を得るという行為として違いは無い。

この異世界では加護の力が本物である、信仰を捧げる行為は精神的な自己満足以上の確かな効果がある。

「君も知ってる通り、加護を得るにはそれ相応の信仰を捧げる必要がある、でも信仰を捧げるといっても、それはただ神に媚びているわけじゃないんだよ。」

それは言うなれば、神が世界に干渉することを可能にする条件みたいなものさ、どれほど神がその人個人の事を気に入っている、干渉する余地が無ければ力を与えることはできないからね。

逆もまた然り、干渉可能なら力を与えざるを得ない、条件をクリ

アすればどんな者にも加護は与えられる、気に入らないから加護を取り消すなんてこともできない」

その言葉を信じるならば、フェアなシステムと言えるだろう、本当に神は平等を実行していたってワケだ。

「君は僕に加護を受けるための条件をクリアした最初の人なんだ、だから是非、君には頑張って欲しいと思っっているんだよ」

「なるほど、そっちの言い分は理解できた」

だが、今すぐ「ありがとうございます神様！」とひれ伏すかといえば、そうもいかないだろう。

要するに、このミアという人物は未だ自称神様でしかないのである。

これまでの話は、恐らくパンドラの住人でそれなりに加護について詳しくれば誰でも知っているレベルの知識、あるいは完全にでっち上げのホラ話の可能性もある、ミア自身が神であることの証明は成されていない。

もっとも、これほどの魔法を使える以上は、最初に見たような普通の少女である、ということは無いが。

「ふふふ、いいよ、まだ僕の事を信じてもらえなくても、最初から疑いもせずに信じるなんて言うのは神の傲慢、信仰を得るなら先に利益を示すべきだよな」

もったもな話だ。

地球の伝承・伝説も、困っていた人々を超常の力を持つ存在が救う事によってその後、信仰されると言うパターンは多い。

「だから、僕が今出来る範囲で加護を与えよう」

「これから試練を受けるんじゃないのか？」

「白き神の使徒に対抗できるだけの力はね、それ相応の試練を達成してから授けるよ」

白き神、そして使徒のことまで知っていると、やはり、本当に神なのか？

「これは冒険者で例えるなら、信頼を得るための前金みたいなもの

さ、だから、今は貰えるだけ貰っておいてほしいな」

そう言つてにこやかな笑みを浮かべながら、ミアは俺に向かって
ゆっくり近づいてくる。

何ともいえぬ存在感を肌でひしひしと感じるものの、敵意や殺意
といったものは一切無い。

神でなかったとしても、ミアは間違いなく俺を上回る実力の持ち
主であるに違い無い。

加護を与えるとは、いかにも怪しい物言いだが、ここは大人しく
従った方が良さそうだ。

「くれると言うなら、貰っておこう」

俺には未だに加護というのがどういうものか分からない。

だが、ここで本当に加護に相応しい力、いや、変化と言うべきか、
そういったものが得られたなら、この可愛らしい子供にしか見えな
いミアを神と崇めてもよいかもしれない。

「ねえ黒乃真央、君が僕の加護を得るためにクリアした条件の一つ
を教えてあげる」

すぐ目の前まで歩み寄ったミアが、大柄な俺の顔を見上げるよう
な上目遣いで言う。

こんな風に見つめられると、少しばかり照れくさい、もしかすれ
ばミアは男かもしれないのに。

「なんだ？」

努めて冷静に応える。

「それはね、君が憎い敵を殺す為の力を求めたんじゃない、誰か
を守ろうとする守護の力を求めた、という事さ」

「守護の力、か」

そう言われてみれば、そうなのかもしれない。

けれど、俺がやることは何も変わらない、敵を前にすれば、ただ
殺すだけ。

所詮は人殺し、誰かを守るためだから、自分の殺人は絶対の正義
であるとは叫べない。

とんでもない業を背負っていることは意識している。

もつとも、だからと言って十字軍に対して情けをかけることはしないが。

「だからね、この先どんなに辛いことがあっても、誰かを守ろうとする、助けようとする、君の心にある優しいその意思だけは、絶対に失わないでいて欲しい」

やめてくれ、そんな真摯な目で見つめるのは。

俺はそんなに褒められるほど大層な働きはしていない。

みんなを守りたい、その意思は間違いない本物だったといえる、けれど、やっぱりそれは意思だけでしかなかった。

俺は、まだ誰も守ることが出来ないのだから。

「それは違う、僕の事を、ちゃんと助けてくれたじゃないか」

「あれは――」

ただの自作自演、俺が間抜けにも引つかかってしまっただけのことだ。

そこまではっきり言わずとも、ミアは分かっていると表情で訴える。

「試すような真似をしたのは謝るよ。」

けど、君がさっきまでどんな気持ちでいたのか知っている、助けようとした人に拒絶されて、己の無力感に苛まれて、何もかも諦めて、利己的に生きようと決心した、君の気持ちを」

事実だった、俺は思わず目を背けてしまう。

「でもね、それでも君は助けに来てくれた、見ず知らずの、赤の他人である僕を、決して見捨てずに、助けに来てくれたんだよ。」

君は正しい行いをした、それは誰にも否定させない、だからもう迷うことなんて無い、今度は必ず、みんなを助けることが出来るはずだよ」

そのあまりに真っ直ぐな肯定の言葉に、

「ありがとう」

と返した。

ミアが神かどうかは分からない、けど、この子は確かに俺を元氣付けようとしてくれた、それが分かっただけで十分だ。

「ふふ、お礼を言うのはこっちの方なのに」

柔らかな笑みを浮かべるミアは、やはり可愛らしい少女にしか見えなかった。

「それじゃあ、加護を与えるよ」

まだパワーアップはできないけどね、と続ける。

「具体的に、何が起るんだ？」

「そうだね、ここは神様の奇跡らしく、その――」

ミアは俺の眼帯で覆われた左目を指差した。

「目を治してあげる」

「出来るのか!？」

勿論、神様は偉大なのだからね、と胸を逸らして自慢げに言う。

「じゃあ、ちょっとかがんでもらえるかな」

「あ、ああ」

本当にこの目が治る、というか再生するのかどうか、半信半疑だが、ミアの言うとおりに膝を屈してかがむ。

膝立ち状態になると、丁度ミアと同じ目線の高さとなる。

本当に大人と子供ほどの身長差がある、というか、俺の身長って183センチから伸びているんじゃないだろうか。

そんな取り留めのない事を考えながら、目の前のミアが手を伸ばして、俺の左目を覆う白い眼帯を取り払う。

「動かないでね」

「ああ――って、待て、なんだコレ!」

なんだ、とは言うが、その正体は地面から伸びる触手以外の何物でもない。

よほど俺に動かれたら困るのか、無数の触手がいつの間にか全身を縛り付けるようにガッチリと拘束される。

痛みこそ無いが、触手に絡みつかれるのは異常に嫌悪感を覚えてしまう、女性だったら一発でトラウマになるんじゃないかというほ

ど。

「大丈夫、すぐ終わるから」

と笑顔で言いながら、ミアは自分の左目に指を向けると、

グリっ――

と、一気に眼球を抉り取った。

ミアの小さな手のひらに、『クイーンベリル紅水晶球』のように真紅の輝きを放つ宝玉のような虹彩を持つ目玉が転がる。

「な、あ……」

絶句、あまりに突然のミアの凶行に、言葉が出てこない。

眼球は不思議と血には塗れていない、やはり綺麗な宝石のようにさえ見えるものの、だからと言って安心できない。

そうして驚いているのは俺ばかり、ミアは何事も無かったかのように、ただ失った左目の瞼を閉じて、手にする赤い目を細い指先で掴みあげる。

「じゃあ行くよ、この先、必要な事は僕の眼が教えてくれるから」
いや、ちよつと、待てよ、その目玉はもしかして――

グリグリっ――

もしかしなくても、ミアの眼球は、俺の喪失した左目へ押し込まれた。

「ぐあっ！」

何ともいえぬ鈍い痛みと圧迫感、そして自分のモノではない異物を体内へ取り入れられる本能的な不快感が全身を駆け巡り、ゾワリと鳥肌が立つ。

だが、その感覚も一瞬で終わりを迎える。

完全に眼球が俺の眼窩へと納まると、途端に意識が遠のき始め、痛みやら不快感やらは覚えていられなくなった。

「求めよ、されば与えられん——ふふ、君が僕の試練を乗り越えて、加護を得られることを願っているよ」

その言葉を最後に、俺は自分の意識を深い闇の彼方へ手放した。

第160話 守護の力(3)

気がつけば、空は夕焼けの朱に染まっていた。

その茜色の空を、圧迫感さえ伴う狭く暗い路地から、阿呆のように見上げている俺が居た。

「なん、だったんだ……」

まるで白昼夢から醒めた様な感覚。

そうだ、俺は本当にさっきまで夢を見ていたに違い無い。

突然の悲鳴、三人の男と乱闘、神を名乗るミアという子供……どれもついさっき起こったばかりの出来事として、はっきり記憶しているものの、まるで現実感が沸かない。

このまま5分もすれば、朝起きてから夢の内容を忘れ去ってしまうように、この記憶も忘却の彼方へ飛んでいってしまうかもしれない。

「俺、疲れてるのかな」

もし本当に白昼夢を見て、こんな場所でボーっとしていたとしたら、俺は自分が思っている以上に心が参ってしまってるってことだ。ノイローゼというべきか、精神の病など無縁だと思っていたが、どうやら俺は例外と繊細な心の持ち主だったようである。

なんて、馬鹿馬鹿しい考えを振り払って、とりあえず歩き始める。そういえば、一体ここは何処なのだろうか、あれこれと悩みながら無為に歩き回っていた所為で、元来た道など全く分からない。

もしかすれば、その時から俺の白昼夢は始まっていたのかもしれないな。

だが、そのお陰で心は不思議と落ち着きを取り戻している。

すでに日暮れということは、早く帰らなければ夕食までには帰るといった約束を破りかねない。

まずはこの細い路地を抜けて、大きな通りへ出るべきだろう。ただでさえ大きなスパイダの街、しかもやって来たのはここ数日、

全く土地勘など無いので、住所を頼りに歩くにはとりあえず起点となる分かりやすい通りへでることがベストだ。

さて、問題は大きな通りへどうやればここから辿り着けるかという事なのだが、とりあえず進んでみる以外に方法は無さそうである。ただでさえ薄暗い路地は、陽が没しつつある今は刻一刻と闇が支配しつつある。

俺は夜目の利く両目で、似たような景色の続く路地を見通し——いや、待て、両目だと？

「……見える」

それは、あまりに自然、ごく当たり前の事だったので、すぐに気づくことが出来なかった。

俺は今、両方の目でこの暗い景色を見ている。

だがそれはおかしい事だ、なぜなら俺の左目は第八使徒アイの攻撃によって失ってしまったのだから。

それでも左目は、一週間前と何ら変わらないように、確かな視覚として働いている。

何故、どうして、と自問してみれば、思い当たることなど一つしかない。

「そうだね、ここは神様の奇跡らしく、その目を治してあげる」

脳裏によぎるのは、自ら真紅の左目を抉り取り、俺へ押し込む異常な行為。

だが、それで本当に、

「目が、治ったのか」

疑いようも無く、左目が回復したのは事実であった。

それじゃあ、やはりついさっき起こった一連の出来事は本当にあった事で、ミアと名乗ったあの子は、神だったということなのか？

「マジかよ……」

言うとおりに、正しく本当に神様らしい奇跡がこの身に起こった。

だが、目から鱗が落ちるパウロのように、即座にミアを神様と崇めたいという気持ちは湧き上がってこない。

いや、そんなすぐ心変わりすると、改心というより洗脳に近く気持ち悪いのだが。

崇め奉ることは無いが、それでもミアは己が神である一つの証拠を確かに示した。

もしかすれば、眼球の再生も一瞬で出来るほどの凄い力を持った魔術士なだけかもしれないという可能性も、いまだに否定しきれない。

だがしかし、ミアの正体は何であれ、俺の目を癒し、さらに‘加護’、という力を与えようという意思があるのは事実だろう。

ならば、ミアが神を騙る魔術士でも、本当の神でも、はたまたとんでもない邪神であっても、俺に力をくれると言うのなら、望むところだ。

「いいぜ、試練だか何だか知らんが、受けて立ってやる」

信仰に足るかどうかは分からないが、ミアには心から感謝しよう。ついさっきまで気持ちが悪かったし、加護と言う名の力を授かる可能性はいえ立ち直らせてくれたし、加護と言う名の力を授かる可能性を示してくれた。

ただ、如何せん加護を授かる為にクリアしなければならぬ試練が何なのか分からないので、今すぐどうこう出来る話では無さそうだ。

ミアの言葉を信じるなら‘僕’の目、つまり俺の左目が教えてくれるらしい、何か反応があるまで待つしかないだろう。

さて、とりあえず今すぐ教えて欲しいことと言えば、試練の内容よりも、宿まで帰る道筋なのだが、

「そう簡単に神様が助けてくれるワケないか」

左目には何ら変化は無い、ようするに、自分で道を切り開くしかないという事だ。

やれやれ、せめて陽が沈む前にはこの貧民街を抜けて大きな通り

へ出られると良いのだが――

「きゃあああああ！」

突然、絹を裂くような悲鳴が聞こえた。

「え、いや、マジで？」

もしかして、俺はまたしても神の悪戯に弄ばれているのではないだろうか？

さつきと全く同じシチュエーション、違うのは俺の心のあり方くらいなものだ。

さて、どうにも疑心暗鬼になっても仕方無い状況ではあるが、

「何も聞かなかったフリは、できないよな」

そうさ、俺は薄っぺらい決心を早々に破って、やっぱり自分が思うままに行動することにしたのだ。

例えばこの悲鳴が罠であっても、今の俺に見捨てるという選択肢はありえないのだ。

願わくば、今度こそ本当に見知らぬ誰かを助ける事ができますように！

路地裏のさらに奥、今にも崩れそうな石壁が袋小路となって立ち塞がっている場所で、ついさつき見た神様の自作自演と全く同じシチュエーションが展開されていた。

「おらあ！ さつきと出すもん出しやがれ！」

「へへ、テメえが結構な金貨持ってんのは知ってんだよお」

如何にもな風体の男達が三人、寄ってたかって一人の少女を壁際に追い詰めている。

万に一つの可能性として、部外者が口出しするべきではないのっぴきならない事情が彼らの間にあるのかもしれないが、まああの口

ぶりから言って恐喝以外には有り得ないだろう。

「おい、そこで何をしている」

様子を窺う必要性も無いので、さっさと姿を現して男達に声をかける。

ついでに威嚇の意味を籠めて睨みつけるのも忘れない、俺が本気で睨むとクラスメートの誰も、友人でさえ目を合わせようとしてくれないほどの効果を発揮するのだ。

「ああ？」

華麗に身を翻して、一斉に俺へ敵意の籠った視線を向ける男三人組。

ついさっきもほとんど同じ反応を返された俺としては、デジャビュを感じることにしきりである。

しかしながら、今回こそは真正銘の恐喝だろう。

男三人組は、さっき俺がブツ飛ばしたのと全く違う風貌であるし、まして絡まれている女の子も服装こそ似ているがミア本人では無い。

「なんだテメえは？」

お決まりと言っているいいほど誰何を問う台詞。

とりあえず、通りすがりの冒険者だ、とでも言おうとしたその時であった。

「あっ、テメえ!？」

「うおっ! 待ちやがれっ!!」

壁際の少女は男達の体を押し退けて、一気に駆け出す。

あまりに突然の行動と、思いのほか素早い逃げ足で少女は俺の横を通り過ぎ、あっという間に暗い路地の向こう側へ姿を消して行った。

「なんだ、その……邪魔したな」

何もしてないのに事件は解決してしまった。

一瞬の隙を突いて逃げ出すとは、スパーダの女性は逞しいものである。

俺はそんな感想を抱きつつ踵を返そうとして、

「おい、待てや兄ちゃん」

呼び止められてしまった。

「あーあーどうしてくれんだよお、俺らの大事なお仕事邪魔してくれちゃってよう」

「コイツはちよつと謝罪と賠償が必要なんじゃねえのかなあ？」

どうやら恐喝相手に逃げられてしまったようで、男達のご立腹のようだった。

「テメえ、ランク1の冒険者だろ、粹がった真似しやがって、とりあえず有り金全部出しゃ見逃してやらねえこともねえぜ」

そう言つて、三人の中で一番ガタイが良いスキンヘッドの男が、腰から下げる長剣^{ロングソード}を引き抜いて、俺へと迫る。

男は凄い殺気を叩きつけているつもりなのかもしれないが、特にこれといって驚異的な気配は全く感じられないので、俺はこれみよがしに首から提げてるギルドカードですぐランク1冒険者だったので分かったんだろいうなあ、とか全然別なことを考えていた。

「おう、どうした、ごめんなさいとか、すみませんでしたとか、何とか言ったらどうなんだ、ええ？」

気がつけば、スキンヘッドは剣を構えることもなく、全くの棒立ち状態で俺の目の前までやって来た。

「早いトコ謝ったほうがいいぜえ、アニキは強化^{ブースト}も使いこなす凄腕の戦士だぜ、ランク1如きじゃ相手なんねーぞ？」

「アニキの必殺武技でソイツの腕ぶった切っちゃってくださいよー！」

後ろの二名がハゲのことをアニキがどうか囃し立てている。

なるほど、コイツは強化^{ブースト}も武技も両方扱える戦士クラスなのか、それは確かに凄い、冒険者ランク3に匹敵するんじゃないだろうか。

「なあ、お互い面倒事は御免だろ、大人しく見逃してくれないか？」
向こうはどうにもヤル気満々だが、一応最後まで話し合いでの解決を試みる。

だが、

「デメえ、馬鹿だろ」

どうやら交渉は決裂なようだ。

ハゲはゆっくりと片手で剣を振り上げると、いきなり絶叫した。

「『腕力強化！』
フォルスブリスト」

剣を握る右腕に、力瘤が浮き上がる。

「出たあー！ アニキの『腕力強化』
フォルスブリストだあ！！」

と、後ろの舎弟その1が懇切丁寧に説明してくれる。

だが、ハゲのアニキは強化魔法につきものの魔力の気配が一切感じられない、そもそも詠唱すらしていない、もしかして、ただ思い切り力を籠めているだけなんじゃないだろうか？

「俺を舐めた罰だぜ、腕の一本は覚悟しな——『一閃』
スラッシュ！」

と、叫ぶと同時に掲げた剣を真っ直ぐ振り下ろした。

「出たあー！ アニキの必殺武技、『一閃』
スラッシュだあ！！」

またしても懇切丁寧な解説をしてくれる、ちなみに今回の説明は舎弟その2がお送りしている。

だが、重ねて申し訳無いが、俺の脳天目掛けて繰り出されるこの斬撃、武技特有の圧力というか、威圧感のようなものが全く感じられない、もしかして、ただ思い切り剣を振り下ろしているだけなんじゃないだろうか？

「はあ、身構えて損したぞ」

ランク3相当の実力者かと思って、魔弾をフルバーストする準備を整えていたが、その必要は全く無かった。

俺は男が剣を振り下ろす右腕を、そのまま左手一本で掴み、その攻撃を止める。

「なっ！？」

ハゲの目が驚愕に見開かれる。

この程度の剣速に安直な太刀筋、おまけに強化も武技も無し、俺の身体能力で止められないわけが無い。

とりあえず、このまま剣を振り回され続けても面倒なので、

「パイルバンカー」

鋼の刀身に、黒色魔力がドリルとなって渦巻く右拳を叩きこんで、粉々に破壊してしまう。

「け、剣が……」

腕を掴んでいた左手を離すと、男はたたらを踏んで二三歩後ずさり、呆然と柄だけとなった剣を見つめた。

「ひい!？」

情けない小さな悲鳴を漏らすと同時に、後ろに控えていた舎弟その1とその2が先ほどの女の子と同じように、一目散に遁走を始める。

通路は俺が立ち塞がっているので、行き止まりとなっている石壁を見事なウォールクライミングでよじ登り、あっという間に壁の向こう側へ姿を消した。

どうやらスパードの人は女性だけでなく男性も素早い逃げ足をお持ちのようだ。

「あ、おい、お前ら……」

そうして遁走をはかった二人を、ハゲのアニキは親からはぐれた子供のような表情で見送ることしかできないでいた。

筋肉達磨なスキンヘッドがそんな顔しても気持ち悪いだけだが。

「おい」

俺が声をかけると、

「な、な、なんだ、なんだよ、まだやろうってのか! ああ!？」

へっぴり腰になりながらも、両の拳でファイティングポーズを構える、どうやら虚勢を張る元氣くらいは残っているようだ。

だが、それに付き合ってやる義理などない。

「俺はもう行くぞ、追いかけてたりしないでくれよ?」

すでに被害者の少女は危機を脱した、金をとられたワケでも無く、その身に危害が及んだわけでも無い。

この男に個人的な罰を与えようとは思えない、所詮は通りすがりの冒険者だ、彼女を助ける以上の行動をする権利は俺に無いだろう。

「お、おう……」

男はあからさまに安堵した表情で、力が抜けたのかその場にへたり込んでしまった。

「出来ればもうこういう事は止めて、真っ当に冒険者でもやって金を稼いでくれ」

そんな言葉で改心などするはず無いと分かっているが、そう言わずにはいられなかった。

そうして、俺は何もしていないが、一人の少女が助かった事実に満足感を覚えながら、その場を立ち去った。

さて、帰り道はどっちだろう、もう陽が暮れて辺りは真っ暗になっってしまったぞ……

第161話 魔女の一人酒

あまり上等とは言えない味の果実酒を飲み干す。

仄かな甘みと酸味が利いたこのお酒は、安価な値段ということもあり、スパードの庶民に広く親しまれているのだと、注文した際にお喋り好きな猫獣人の従業員がニャンニャンと教えてくれた。

彼女は今も『猫の尻尾亭』の食堂を忙しなく行ったり来たりして配膳を行っている、もう少ししたら、私も新たなツマミを頼もう。値段相応な品質の果実酒が喉を潤し、そこに含まれるアルコールが少しばかり私の身体を熱くさせてくれる。

「……あんまり、酔えないものですね」

今の私は、板挟み、という状態にあると言った所でしようか。

失意に沈むクロノさんと、絶望にむせび泣くリリイさん、その悲しみの因果に違いはあれど、両者の精神状態がどん底であることに変わりはない。

私だって、アルザスの一件に悲しみの感情を抱き、また、クロノさんを心配しています、リリイさんは、まあ自業自得、いえ、それなりに心配してますよ。

けれど、結果的に私だけがいつもと同じフラットな状態であることは変えようの無い事実であり、そんな私が二人の沈んだ姿を見るのは、酷く心が痛みます。

私には決定的に人と接する経験が不足しているので、こんな時、どう声をかけて良いのかまるで分かりません。

二人に接するのがストレスでは無く、上手く二人に接することが出来ない自分に、酷いストレスを覚えるのです。

そういう自己嫌悪しちゃった時はお酒を飲むに限る、なんて先生が言っていたような気がしたので、とりあえずこうして飲んでみたのですが、うーん、どうにもままならないものですね。

思い返せば、先生がベロンベロンに酔っ払って私が介抱した記憶

しか無く、お酒を飲んで問題が解決したことなど無いように思えます。

いえ、お酒を飲むのは嫌な事を忘れる現実逃避的な行動ですから、今の私に必要な解決策を与えてくれるものではそもそも無いのですよね。

なんてことを、果実酒の瓶を二つ空けた今更になって思う。

「はあ、どうすればいいんでしょうか、クロノさん」

目下のところ一番の問題はクロノさんだ。

アルザスの一件は、確かに悲惨で最悪の決着となりましたが、それでも今となっては終わったことで、どうにかすることなど出来ません。

そもそも、あんな少数で十字軍と事を構えようとしたのです、全滅してもおかしく無い戦力差がありました。

使徒の襲来は完全に予想外でしたが、全滅という結果は全く考えなかったわけではない、少なくとも、私とリリィさんは。

冒険者が悉く戦死を遂げたのは酷く残念に思えますが、それでも最悪の結末の一つとして、すでに受け入れることができている、と同時に、クロノさんほど思い悩むことの無い自分に対して、少しばかりの嫌悪も沸きますね。

しかしながら、生き残った避難民については、あのような態度をとった所為で、反感すら抱き、彼らの犠牲など尚更に心が揺れることがなくなりました。

あの人たちは、クロノさんがどれだけの思いをして、どれだけ頑張ったのかを知りません、知ろうともしません。

リリィさんが飛び出さなければ、私があの場合を焼き払っていたかもしれない、そう冗談に思えないほど、腹立たしい気持ちがふつつと湧き上がった。

そう考えれば、リリィさんは恐ろしく冷静で、理性的な対応をしたものです。

騒ぎを広げず、双方の距離を上手く引き離れた、完璧な手際、ち

よっと私には真似できない——けれど、そんな頼りになるリリイさんも、まさかクロノさんの一言だけであそこまで落ち込むとは……今の状況は、クロノさんが立ち直ってくれば全て解決する。

それに、そんな打算的な考えだけでなく、私個人としても、今のクロノさんの姿を見るのは、とても辛い。

クロノさん、異世界からやって来た異邦人、『エレメントマスター』のリーダー、冒険者同盟を率いて十字軍と戦った、強く、そして、優しい人。

私を受け入れてくれた、頼ってくれた、期待してくれた、パーティーメンバーだと、仲間だと言ってくれた。

その一方でリリイさんは、どこまでも怜悯冷徹、徹頭徹尾、己の利益のみを追求できる残酷さを持っている、私をパーティに引き入れているのはそこにメリットがあるからだ。

それでも、完全な利害のみで人を見ることの出来るリリイさんは、十字教の神なんかよりもよほど公平で平等、私のような暴走魔女を受け入れるのは、本来、彼女のような人物しかありえない。

そういう意味で、リリイさんには感謝もしているし尊敬もしている、まだ短い付き合いですが、少なからぬ友情の念も抱いています。けれどやはり、クロノさん、彼のように全幅の信頼と親愛を向けられるのは、一切の理屈抜きに嬉しく、そして心地よい、もう二度と一人に戻れなくなるほどに。

だから——ああ、そうだ、私は何よりも恐れている。

もし、クロノさんが冒険者を辞めてしまったら？ パーティを解散してしまったら？

「そんなの……絶対にイヤです」

彼と離れるありとあらゆる可能性が、恐ろしい。

それこそが、私にとって最悪の結末というものだ。

私はようやく出会えたのだ、自分を受け入れてくれる人を、守りたいと思える大切な人を。

「でも、私には……」

そんな彼に、かける言葉が見つからないのだ。

情けない、どこまでも情けない、今ほど人とのコミュニケーションを図らず一人で生きてきたことを悔しく思ったことは無い。

仲間だと言うのなら、こんな時にこそ力になるべきなのに、私ときたら、どうすれば良いのか全く分からないのです。

何かをするべき、でもその何かが分からない——なんて無様で愚かしい悩みなんでしょうか。

そうして、そのまま負の思考に囚われかけた、その時でした。

「フィオナ」

声が聞こえた。

聞き間違えるはずが無い、それは紛れもなくクロノさんのものなのだから。

「クロノさん？」

面を上げれば、そこに立つのはやはり、クロノさんに違いなかった。

「心配かけてしまったみたいだな、済まない」

そうして謝罪の言葉を口にしたクロノさん、けれど、その顔は別れた時と違って、どこか晴れやかな面持ちだった。

ああ、そうか——この人は、私なんかがどうこうする前に、自分で立ち直った、立ち直ることができたのだ、そう理解した。

「いえ、無事に帰ってきてくれて、なによりです」

結局、何も出来なかった自分に自己嫌悪、けど、そんな些細な思いよりも、今はただ、言葉にした以上に、彼が戻ってきてくれたことが喜ばしい。

「おかえりなさい、クロノさん」

「ああ、ただいま」

本当に良かった、どうやら私はまだ、彼の隣にすることができそうだ。

第161話 魔女の一人酒（後書き）

第121話『黄金太陽』以来のフィオナ視点でした。

今更な話ですが、主人公以外のキャラ視点を入れるのは、小説的にどうかと思ってます。しかし今のところこれ以外で上手く表現できないので、このままやっています。気になる人がいたらすみません。

第162話 クロノの左目

『猫の尻尾亭』の一室、その簡素なベッドの上にリリイは虚ろな目をして寝転がっていた。

幼い姿の彼女がピクリともせず何時間も横になっている姿は、心配と共にどこか異常を感じさせることだろう。

「クロノ……」

時折、思い出したようにリリイがその名前を口にする。

彼女の光を失ったような淀んだ緑の瞳と、クロノの黒い瞳が互いに視線を交差させる。

ベッドにはリリイ以外に人の姿は無い。

だがクロノの目は、クロノの目だけが、そこにはあった。

仰向けで顔だけ横にするリリイの視線の先には、枕元に転がる一つの小瓶。

元々は肉体回復用のポーションが入っていたその瓶は、今も透明な液体に満ちているが、その中には一個の眼球があった。

漆黒の瞳を持つ眼球、それはクロノが失った左目である。

リリイは使徒との戦いから目覚めた後、隙を見て転がっていたクロノの左目を密かに回収していたのだった。

回復効果を持つポーションに入れておいたお陰か、矢に射抜かれた眼球は再生している。

だがこれを再びクロノの左目に戻すには、視神経を上手く接続しなおさなければならぬので、どの道リリイには行使できないほど高度な治癒魔法が必要となってくる。

故に、今はリリイの事を黙って見つめ続ける、彼女にとって都合のよい最高の玩具コレクションでしかない。

「ごめん……ごめん、なさい……」

もう何度口にしたか分からない謝罪の言葉だが、ここにはいないクロノ本人には一言たりとも届くことは勿論ない。

それでもクロノの眼とベッドに残る彼の匂いに包まれて、何度も何度も謝る練習を経たリリイは、ほんの僅かばかり落ち着きが戻ってくる。

あるいは、すでに涙が枯れてしまっただけなのかもしれないが。

「ごめんなさい……リリイのコト……キライにならないで」

大人の意識はとっくに手放し、子供の意識へと逃避している。

しかし以前クロノへ説明したように、少女リリイと幼女リリイは別人格では無い、ただ思考能力や精神年齢が変化するだけで、正真正銘一個の人格である。

子供の意識に切り替えたからと言って、クロノから拒絶の意思を向けられた記憶を失うわけではないし、熱く燃え盛る恋心も変化する事は無い。

むしろ、最初にクロノの事を好きになった時は子供の状態であった、大人の思考で容姿、性格、能力、など諸々を値踏みして打算的に好きになったわけではないのだ。

純粋な好意のみを一心にクロノへ寄せる幼いリリイの心は、普通の子供だったら耐えられないほど不安に揺らいでいる。

いや、ここは寧ろ普通の子供であつたほうが幸いだっただろう、いくら好きな相手に少しばかり拒絶されたからといって、そこまで思い悩むことは無いのだから。

だが、すでにして‘普通’では無いリリイは、今もこうして漠然とした不安と恐怖に駆られて小さな胸が張り裂けんばかりに苛まれている。

そうして、解放されることの無い苦痛の時間がまた幾許か過ぎると、コンコンと木の扉を叩く音が耳に届き、リリイは少しだけ意識を現実の世界へと向けた。

「リリイさん」

どうやら来客はフィオナらしい、すでに聞きなれた声でそう判断する。

だが、今のリリイに返事をする気力などないし、する気も無かつ

た。

「リリイさん、クロノさんが帰ってきましたよ」

再び己の内に意識が沈みそうになったが、その言葉を聞いてリリイは硬直した。

「ク、クロノ……」

途端に思考が回り始める。

クロノに会いたい、一瞬でその欲望が頭の中に満ちてゆくが、同時に拒絶されたという紛れも無い事実によって、リリイがベッドから飛び起きる動きを制御した。

「一緒に夕食を食べましょう」

葛藤するリリイだが、結局フィオナに対して何ら返事は出来ていないので、ドアの向こうからは淡々とした誘いの言葉が一方的に飛んで来るのみ。

「クロノさんは、リリイさんの事を怒ってないですよ、だから安心して出てきてください」

その言葉に、リリイの心に一筋の光が差し込む。

だが、これまで散々思い悩んできた想像がこの甘美な言葉を否定する、嘘だと疑ってしまう。

「リリイさん？ 入りますよ？」

あまりに反応の無いリリイに対して、痺れを切らしたのかフィオナが扉を開く。

フィオナにとって、リリイが鍵をかけることにすら気が回らないことが幸いだった。

「寝てるんですか？」

止める間も無く部屋へ踏み込んできたフィオナに、リリイは慌ててクロノの目玉入りポジションを枕の下に隠すくらいのことしかできなかった。

「うーっ！」

枕へうつ伏せに押し掛かり、いきなり部屋へ入ったフィオナに抗議の声をあげる。

「起きてるじゃないですか。

ほら、クロノさんが待ってますよ、行きましょう」

「うー、やあー！」

小さな足と羽根をバタつかせて反抗するリリィ。

この期に及んでまだクロノと会うのを恐れているようだと、空気が読めないことに定評のあるフィオナでも理解できるほど解り易い反応だった。

「本当にクロノさんはリリィさんのことを怒ってないですよ、むしろ、心配しています、リリィさんが顔を見せてくれないとクロノさんは悲しんでしまいますよ」

「うう……ホントお？」

枕にうずめていた顔を上げて、チラリとフィオナへ向ける。

その目は散々に泣き腫らした所為で赤くなってしまっていた。

「ホントですよ、だから笑顔でクロノさんを迎えてあげましょう」

笑顔で言えれば百点満天な台詞だったが、フィオナはやはり眠そうな顔である。

しかしながら、リリィの心を動かすのには十分な効果があったようだ。

「……うん」

リリィは意を決して起き上がる。

胸のうちには不安と期待が入り混じり、緊張状態にあるのか動きが少しぎこちなかった。

「では行きましょう、あ、その前に顔を洗った方が良いですね」

この赤くなった目元をクロノに見せるわけにはいかないと、珍しく気の利いた判断を下したフィオナは、リリィの小さな手を引きながら、部屋を後にした。

俺は今現在『猫の尻尾亭』の一階食堂の一角にて、山よりも高く

海よりも深く、という大げさな形容詞がついてしまうほど反省中だ。

「クロノ……おかえりなさい」

と、酷く元気の無い様子で出迎えてくれたリリイの目は、ほんの僅かだが赤みが差している。

もしかしくなくても、泣いていたに違い無い。

そしてその原因は紛れも無くここ数日どん底の精神状態だった俺にあるだろう。

口では表向き「心配しないでくれ」だとか「大丈夫」だとか「すまない」だとか、氣遣っていたつもりだったが、所詮ソレは、つもりで有り、リリイには何も届いていなかった。

当たり前だ、リリイは強力な精神感應能力テレパシーを持っている、上辺だけの言葉で誤魔化すことなどできない。

その結果がコレだ、リリイを泣かせてしまうほど心配をかけてしまった。

涙こそ流していないだろうが、フィオナにも同じように心配を、いやむしろ沈んだ俺と泣いたリリイの板ばさみで気苦労を強いたに違い無い。

「二人には心配をかけてしまった、本当に済まない」
今の俺はただ頭を下げることしか出来ない。

それでもこうして二人に謝れるのは、ある程度心の整理をつけることが出来たからであり、半日前の俺と比べればよほど幸せな状態だ。

「いえ、クロノさんが元気になったようで何よりです」

本当に全く気にしていませんよと言う様な、いつもと変わらぬ無表情のフィオナに安堵感を覚える。

「クロノーうー！」

俺の胸元にしがみついて離れないリリイの頭を撫でながら、

「ホントにごめんなリリイ、俺はもう大丈夫だから心配しないでくれ」

この心優しい妖精に、今度こそ気持ちを籠めた言葉で謝意を伝え

た。

そうしてリリィと心温まる触れ合いを続けていると、この場で最も冷静であろうフィオナから、ズバリ本題を切り出された。

「それで、クロノさんは一体何があったんですか？

その左目を見るに、ただ心の整理がついたというワケではないのでしょうか」

すでにして俺の左目には眼帯は装着されておらず、完全に視力の戻った本物の眼球が嵌っている。

俺の精神状態の回復と目の再生には、何らかの関連があると思うのは当然だろう。

そしてパーティーメンバーである二人に、俺が何時間か前の経験を黙秘する必要性は無い、包み隠さずありのまま身に起こったことを話そう。

まあ、俺も何が起こったのか正確なところは分からないのだが。

「――なるほど、加護、ですか」

大方の事情を説明し終わると、フィオナは頭ごなしに否定せず、むしろ納得のいったという反応が返ってきた。

「で、どう思う？ ミアというヤツは本当に神だと思うか？」

話していて思ったが、精神的に鬱な状態で、神を名乗る人物と出会い目が覚めたような思いで元気になる、というのは如何にも宗教臭い話である。

日本人的な感覚で言えば、心の弱さに漬け込まれて騙されていると思うところだろう。

「ミア・エルロード、という神の名前は聞いた事がありません。

私はそもそも共和国の出なので、パンドラの『黒き神々』については全く知りませんから」

俺もフィオナも精々覚えているのは、冒険者同盟のメンバーが実際に行使していた加護に関わる神の名前くらいである。

「それじゃありリィはどうだ？」

未だに俺の膝の上から頑として動こうとしない妖精さんへと聞い

てみる。

「ミア？ うーん、えーとね、うーん……」

ポクポクという擬音が聞こえてくるような唸り具合で思索に耽るリリイ。

だが真面目な話『黒き神々』に関してはリリイが最も知識を持っているはずだ。

何と言っても『妖精女王イリス』から力を授かった本物の加護持ちである、少なくとも加護がどういうモノであるのか体感的に知っているのは確実。

「あ！」

と声をあげたりリリイ、その瞬間に俺はチーンというSEが脳内に響き渡った。

「思い出したのか？」

「うん、ミア・エルロードは昔の魔王の名前なの！」

その答えを聞いて、なんだか益々胡散臭いなと思うが、よくよく考えてみれば『魔王』という単語に関して思い当たる話の一つだけあった。

「もしかして、古代にパンドラ大陸を統一したってヤツか？」

「うん！」

やはり、古の魔王、という伝説だ、そうか、その魔王の名がミア・エルロードというのか。

ダイダロスの竜王もその魔王エルロードに憧れて大陸統一の野心を燃やしていたという話を、イルズ村で異世界の常識を学ぶ為シオネ村長の家に通っていた頃に聞いた。

魔王伝説はパンドラに住む者なら知らない人はいない超有名なお話。

そもそも各地に存在する遺跡系のダンジョンは全て魔王が活躍した『古代』と分類される時代のモノ、実在のダンジョンと魔王の伝説はほぼセットになって登場するのでこれほど広く伝わっているのは当然と言えるだろう。

「かつてこの世界で何らかの偉業を成し遂げた者が神の座に就くと言われています、伝説の住人ならば、加護の一つも与える本物の神様になっていてもおかしい話ではありません」

それは俺も聞いた事のある説だ。

ヴァルカンの加護である『孤狼ヴォルフガンド』は巨大な狼のモンスターで、スーさんの加護である『影渡ハンゾーマ』は伝説的な暗殺者だったらしい。

神様は神様が生み出すのではなく、実在する人物なりモンスターなりが死した後に昇華した存在だという。

ならば、パンドラ史上唯一の大陸統一を成し遂げた人物であるなら、神にならないはずが無い。

「んー、でも、魔王の加護を持つてる人はいないんだよね？」

舌足らずなリリーの説明を聞くとところによると、魔王エルロードの加護を得るために歴史上何人もの人物が、例に漏れず竜王ガーヴィナルも挑戦したが、僅かな影響も効果も発生せず、完全な失敗に終わったらしい。

逆に考えてもし魔王の加護を得た者が存在するなら、その話は瞬く間にパンドラ中を駆け巡り、イルズのような田舎までも伝わるほどの一大ニュースとなっているはずだ。

ちなみに、リリーは生まれてから3回ほどそのニュースを耳にした事があるらしいが、全てガセであったとオチがついたと言う。

「何だか、ホントに胡散臭い話になってきたな」

ここで「じゃあ俺が史上初の魔王の加護持ちだぜ！」と舞い上がるほどバカにはなり切れない。

誰でも知っているほど有名な魔王の名、けれど誰も得られなかった加護、そんな凄そうなモノを俺が持ちえたと言うよりも、あの子が名を騙ったと考えるほうがよほど納得いく。

「ですが、本物の魔王で無かったとしても、クロノさんが何らかの加護を得たのは本当の話ですよ」

「いや、確かに左目は綺麗に治ったが――」

「その赤い目はクロノさんのモノでは無いでしょう？」

フィオナの指摘に違和感を覚える。

この目は確かに俺のモノじゃない、元々はあの子の左目だった。いや、そこまでは良い、おかしいのは‘赤い’というところだ。

「もしかして俺の左目って、赤くなってるのか？」

「なってますよ、それはもう真っ赤に染まっちゃってます」

確認しますか？　と言って三角帽子から女の子の嗜みである手鏡を渡される。

ぎこちなく礼をいいつつ、恐る恐る小さな鏡を覗き込んでみると、
「な、なんじゃコリゃあ!？」

そこには、真紅の瞳を持つ俺がいた。

違和感無く俺の左目として機能しているのだから、当然この右目と同じく黒くなっていると思っていたが、本当にミアが持っていた赤眼をそのまま移し替えたようになっていた。

「カッコいいですよクロノさん」

「クロノカッコいい!」

額から一筋の冷や汗を流しながら、俺は黒と赤のオッドアイとなつてしまった自分の顔としばらくにらめっこする。

これはマジですか、あのイカれたマスク共だって俺のルックスまでは手を加えなかったと言うのに、まさかここに来て思わぬイメチェンをする事になるとは……

「うん、まあ、目は見えるからいいよな」

そうだ、大事なのは結果である、ここまでしてもらって文句を言うなど、ミアが神様でなくともバチがあたるというものだ。

「そうですよ、魔王かどうかは分かりませんが、その子に感謝するべきでしょう。」

それに話を聞いた限りでは、その内ちゃんと加護の正体なりが分かるような感じですよね」

フィオナの言うとおり、これは今すぐ真相を解明できるモノでは無い。

聞けば、パンドラの黒き神々を祭る神殿で儀式をすることで、加護を得たかどうか、どの神による加護なのか、ということが分かったと同時に、この上ない確実な証明になるのだとリリイが教えてくれた。

ただ、それ相応の強さの加護を得ていないと、はっきり判別することができず、料金だけとられて儀式失敗ということもあるらしい、なかなか汚い商売をする、宗教関係はやはりどこもこんなものなのだろうか。

ともかく、自他共に魔王エルロードの加護を得た、と証明するには神殿の儀式を確実に成功させるだけの強い加護の力を身につけてからだ。

さし当たってミアの言う‘試練’が何なのか、そしてソレを乗り越えたと本当に加護が得られるのか、それを確かめなければどうにもならない。

ここは目が見えるようになった事と、加護を授かる可能性が出た事の、大きな二つのメリットを喜んでおこう。

「とりあえず、加護を授かる試練が何なのか全く分からないから、無為に探すよりは予定通り冒険者として活動していこうと思う」

俺が復活(?)したので、いよいよ本格的にスパーダでどう生活していくかを話し合わなければならぬ。

「うん、みんなでクエスト行く!」

「そういえば、三人でクエストを受けるのは初めてですよね」
色々あったからな。

今でも完全に吹っ切れたワケじゃない、忘れたワケでもない、ただ、俺のやるべきコトに打ち込めるだけの気力を取り戻した、それだけのこと。

これからも今朝のような悪夢にうなされる日々は続くかもしれない、けど、リリイを泣かせるような真似は決してしない。

「俺も『エレメントマスター』として冒険者生活送るのは楽しみだ、けど――」

大丈夫だ、俺はまだ、前に進んでいける。

大丈夫だ、俺にはまだ、共に歩む仲間が残っている。

「俺は強くなりたい、だから実力向上になるような、キツイクエストを受けようと思う、どうだ、付き合ってくれるか？」

「うん、リリイはクロノとずっと一緒だよ！」

「はい、私も一緒について行きますよ」

わざわざ問いかける必要も無いほど、快諾する二人。

「使徒を倒せるくらい強くなりたい、そう思ってる」

「大丈夫、リリイも一緒に頑張るの！」

「そうですね、このパーティなら使徒を倒せるくらい強くなれると思います」

心強い言葉をありがとう。

これで何の気兼ねもなく、これからの冒険者生活における方針が打ち立てられる。

「よし、じゃあ一緒にレベルアップ、頑張ろうぜ」

今度だ、今度会ったその時こそ、従える何万の狂信者諸共、必ずこの手で使徒を殺してやる。

第162話 クロノの左目（後書き）

リリイはクロノの目玉入りポーション（観賞用）を手に入れた！
リリイはクロノを見つめている。

クロノはオッドアイキャラにクラスチェンジした！ クロノの中
二レベルが上がった！

さて、次回で第10章最終回です。『エレメントマスター』の本
格的な冒険は次章からになります。

第163話 勇者への神託

シンクレア共和国の政治・経済・宗教・全ての中心地である聖都エリシオン。

白き神の威光を象徴するかのように壮麗な純白の威容を誇る十字教会の総本山『聖エリシオン大聖堂』、その深部に位置するとある一室にて、十字教における二人の最高権力者が密会していた。

大聖堂の外観に反して、染み一つ無い白塗りの清潔な壁面に囲まれただけの部屋はしかし、あらゆる物理的、魔法的手段を用いて機密性を保持する造りとなっている。

この最重要人物である二人が秘密裏に会するには、これ以上ないほど適切な場所であろう。

「こうして二人きりで席に着くのは、実に久しいですな」

部屋と同じくシンプル、だが重厚な造りの肘掛付きの椅子に腰をかけているのは、年齢を感じさせる深い皺をその白い細面に刻み、柔和な笑みを浮かべる老人。

彼こそ、この億を遥かに超える十字教徒達の頂点に君臨する『教皇』アレクサンドロス11世である。

「突然の来訪、どうかお許しを教皇陛下」

堅く冷たい印象を抱かせる低い声を発するのは、引き締まった体躯に2メートルに届かんばかりの高い上背を誇る青年。

巨躯を誇りながらもシャープさを感じさせる輪郭に、凛々しく引き結ばれた口元に高い鼻と、その彫の深い顔立ちは男性的な美しさと逞しさを兼ね備えた理想的な造りである。

そんな中でも特に目を惹くのが、左右で色合いの異なる瞳だろう。透き通るような白銀の髪は男としてはやや長く、前髪は目元を隠さんばかりに覆われているものの、凄まじい存在感を彼のオッドアイは主張していた。

左の瞳は暗き闇夜を連想させる黒、右の瞳は晴れ渡る天空を想起

させる蒼。

左右色違いの瞳を持つ人間は数いれども、この昼と夜を表す様な色の組み合わせを持つ者は、彼以外にはいない。

そんな二つと無き容貌を持つ青年を前に、アレクサンドロス教皇は如何にも可笑しそうに口を開いた。

「今は誰の目を気にする事もあるまい、そんな他人行儀な口調は止してくれないか」

その台詞を耳にした青年は、教皇を前にあるべき礼儀など月まで吹っ飛んでしまったかのように、対面の席へどっかりと腰をおろした。

「そうだなアレックス、お前に敬語で話すなど未だに慣れん」

それまで人形のように厳つい表情を崩さなかった青年は、俄かに微笑を浮かべまるで十年來の親友へ話しかけるかのように親しげな口調で話すのだった。

「はっはっは、これでも教皇に就任して二十余年、いくらなんでも認めてくれても良いだろう」

青年から愛称で呼びかけられた教皇は、信徒向けの穏やかな顔から、どこか子供じみた雰囲気が滲む笑みへと表情の質を変えた。

「もうそんなに経つのか、俺は未だに教皇といえばクロスレイの糞婆が高笑いしている面しか思い浮かばんぞ」

すでに亡くなった先代教皇の名を久しぶりに聞いたアレクサンドロス教皇、もといアレックスは苦笑いを浮かべると共に、時の流れの早さというものを改めて実感するのだった。

「それを言うなら、私の方も『白の勇者』と名乗りを上げる君の姿しか思い浮かばんよ、アベル」

「勘弁してくれ、若気の至りというヤツだ……」
痛恨の表情を浮かべる青年、彼こそ十二人の使徒のまとめ役である第二使徒アベルその人だ。

ただでさえ普段から白いフードを深く被り滅多に素顔を露わにせず、冷静な態度を崩さない彼が、こんな豊かに表情を変化させるの

を見れば、使徒の半分以上は驚愕することだろう。

「勇者アベルの伝説は共和国どころかアーク中に知れ渡っている、今更隠すこともあるまい」

むしろその方が恥かしいのでは無いか、とアレックスが問えば、
「いや、俺の役目はもう終えた、後は若いヤツらに任せるさ」

老兵はただ去るのみ、と言わんばかりに返す。

だがしかし、と表情を普段浮かべる冷たいものへ変えたアベルは言葉を続けた。

「どうやら、まだそういうワケにはいかないようだ」

その言葉にアレックスも、真剣に顔を引き締めた。

「ほう、それが今日の本題か」

単刀直入に、何があったと問いかける、

「神託を授かった、魔王が生まれる、とな」

静かに答えたアベルの言葉に、アレックスは驚愕に目を見開いた。

「魔王だと？ 一体どういう事だ、そんな不吉な神託などこれまで聞いた事が無いぞ」

聞いた事が無い、という言葉は『魔王』という単語そのものにも当てはまる。

そもそも、魔、とは邪悪なものであるという意味合いを示す、だからこそパンドラ大陸に住まう人間以外の種族をまとめて、魔族、と蔑称で呼ぶ。

そんな侮蔑の意を含む、魔、という字を冠する王の存在など、人間中心のアーク大陸において、そもそも自ら名乗ろうとする者などいない。

故に『魔王』とは歴史に名が残る実在の人物では無く、神に選ばれた光の勇者が最後に打ち倒す御伽噺の中でしか語られることのない存在である。

「俺も詳しい事は分からない、だが真っ当に考えるならば――」

すでに、魔族、は存在している、ならば魔王とはその魔族を統べる人物に他ならない。

「しかし、パンドラ大陸は大小の国々が乱立し、我ら以外に統一できるような勢力は皆無なのだろう？」

教皇は勿論パンドラ大陸に訪れたことなど無いが、神が直々に征服を指示したこともあり、その情勢はよく耳にしている。

それを聞く限り、どうにもアーク大陸の古い歴史にあるような、群雄割拠の野蛮な戦国時代であるとは思えないのであった。

「いや、これから統一する者が現れるが故に、魔王が生まれる、ということか」

すぐ自問に自答したアレックスに、アベルは肯定の意を示す。

「この神託は今のところ俺しか受けていない」

「うむ、確かに前回の‘儀式’においてもそのような旨の神託は授けられなかった、私含め、他の司祭たちにもそのような神託を受けたことは聞いておらぬ」

神託はすでに、‘在ったもの’として話は進む。

アベルが嘘あるいは妄言を吐いている可能性は一切疑う余地などアレックスには、いや、共和国に住む人間なら誰しも持つことは出来ない。

何故なら、彼は使徒であるが故に、神の名を騙ることは決して許されないからだ。

「神は俺をご指名のようだ、相変わらずよく分からん要求をするものだが、やらないワケにはいかないだろう」

やれやれ、とでも言いたげな表情で小さな溜息を一つ吐く。

聖なる奇跡である神託を、よく分からん要求、などとは、十字教信徒では許される発言では無いが、人間より遥かに神に近い存在の使徒だからこそ、許される物言いであった。

「では、パンドラに行くというのか？」

「ダイダロス観光にうつつを抜かして未だに帰らない三馬鹿に説教してからな」

三馬鹿とは、本当にサリエルの見舞いに旅立って行った、第三、第十一、第十二使徒のことである。

もつとも、使徒の先達として教育的指導を施すには第三使徒ミカエルはとつくの昔に手遅れであることは、アベルが言わずともアレックスは理解していた。

そんな手のかかる使徒であっても、聖都エリシオン防衛の為にはいてもらわなければ困る。

彼らが戻る前に第二使徒アベルまでエリシオンを離れれば、残るのは第五使徒ヨハネスと、現れるかどうか分からない‘伝説’の第一使徒のみ。

すでに第四使徒ユダはまたひっそりと姿を消して何処かへ旅立った、彼を今すぐ呼び戻すのは不可能である。

故に、アベルは三人の使徒が帰ってくるまでエリシオンを安全保障上の理由から離れるに離れられないのだ。

だが、アベルが近いうちにエリシオンから魔族の支配するパンドラ大陸へ赴くという事実について、アレックスは如何にも面白いと言ふような顔で口を開いた。

「ふむ、そうか、勇者アベルの新たな伝説の幕開け、といったところか」

第二使徒アベルがエリシオンを離れるのは二十年ほど前に共和国内で起こった東の異教徒による大規模な侵攻以来である。

だが、アレックスにとっては誰が相手でも何処に行こうとも『白の勇者』アベルが敗北することなどありえないと絶大な信頼を寄せるが故に、半ば敵地であるパンドラ大陸行きが決まっても、こうして茶化すような台詞しか出てこなかった。

「冗談じゃない、適当に回って帰ってくるだけさ」

「それでは結局、魔王が誕生してしまうのではないかね？」

アベルは苦笑しながらも肯定する。

「一切の手がかりは無し、そもそも本当にパンドラ大陸にいるのかどうかも定かじゃない、恐らく見つけることは出来ないだろう」

闇に浮かぶ禍々しい城の玉座にて、暗黒の衣装に身を包んだ凶悪な容貌の大男が高笑いをあげて待ち構えている、そんな御伽噺に伝

わるようなあからさまな魔王など、いくらなんでもパンドラ大陸に存在しているとは思えがたい。

「神託とて絶対ではない、それはお前もよく分かっているだろう」

魔王はパンドラ大陸にいると予想し、そこへ赴いたからと言って、運命に導かれるが如く「貴様が魔王だな！」という台詞を吐ける様な奇跡の邂逅を果たせるとは、アベルの言葉通りアレックスも考えてはいない。

神託とは所詮、神の要望、成功が約束された運命では決して無い。信徒としてその実現には尽力するが、それを果たせるかどうかはまた別の問題、パンドラ侵略が断念されかけたように。

「恐らく、魔王は生まれるべくして生まれるのだろう。」

ダイダロス陥落により、パンドラ大陸諸国は十字軍を明確な敵として認識する、そんな状況ならば一致団結して攻勢に転ずる可能性は無きにしも非ず」

パンドラ大陸に入り乱れる国が一つにまとまる下地はある、それを考えれば魔王誕生は自然な流れとして納得がゆく。

「だがそうそう上手くは行かないだろう、パンドラにはどれだけの国がある？ どれだけの種族がいる？ それら全てを支配しようというのであれば、絶対的な力が無ければ不可能だ」

ただ一つ、我等が神の威光を除き、と付け加える。

「何であれ、魔王らしき者が現れてから対策を練るのが現実的だろう」

それでも俺はパンドラに行かねばならないが、とどこか面倒くさそうにアベルが言う。

「では、十字軍に魔王を探せ、あるいはその兆候を見つけよと通達しようか？」

「いや、現場が混乱する、それに信憑性が噂以下の報告ばかり届くことになるだろう、もう少し情報が確定するまで、せめて次の神託が下るまでは、俺一人が動くだけで十分だ」

もっとも、第二使徒自ら動くという事は万の軍勢が動くことと同

義ではあるのだが、そこはあえてアレックスも言うまい。

「あい分かった、ではそれとなくパンドラへ渡る手配をしておこう」
「何度も済まないな」

個人的な理由で三人もの使徒を秘密裏にパンドラ大陸に渡らせたが、まさか自分もその世話になるとは今日までアベルも予想しなかっただろう。

「話は以上だ、では、お互い職務に戻るとしよう、教皇聖下」

そうして、一応は使徒より上の位と位置づけられる教皇への礼儀として、先の退出をアベルは促す。

「うむ、久しぶりに言葉を交わせて実に楽しかった、昔を思い出させてもらったよ。」

それでは第二使徒アベル卿、よい旅を」

そう言い残し、教皇アレクサンドロス11世は純白の法衣を翻し、年齢を感じさせない堂々たる歩みで部屋を後にした。

見送ったアベルは立ち上がると、

「やはり、勇者アベルの伝説は魔王を討たねば終わらない、ということか」

そう、自分に言い聞かせるよう小さな呟きを漏らしたのだった。

第163話 勇者への神託（後書き）

アベルは黒歴史に苦しんでいる。

みなさん、第二使徒アベルのこと覚えているでしょうか。初登場は第44話『使徒の集い』なのですが、プロローグの加筆部分（クロノが白崎さんに騙されて文芸部室にのこのこやって来るくだり）にも、少しだけ因縁があったりします。

さて、これで魔王（？）と勇者が出揃った10章はこれで完結です。それでは、次章もお楽しみに！

第164話 サリエルの憂鬱

ダイダロス王城にはためく、白き神を象徴する十字の旗がこの地の支配者が誰であるかを主張している。

そして今、かつての支配者である竜王ガーヴィナル、彼の威光が死と共に完全に失墜してしまった事を、

「もう、下がってよいですよ」

この玉座に腰を下ろす白い少女の存在によって証明されていた。

「はい、失礼します、サリエル閣下」

白塗りでシンクレア共和国風に装いを変えた玉座に、背筋を伸ばしてちょこんと座る十字軍総司令官の第七使徒サリエルは、役目を終えて退室してゆくシスターを見送った。

彼女の傍らには、聖十字記章の封蝋が破られた空の封筒。

「驚きましたね、まさか『白の勇者』、第二使徒アベル卿までが超越しになるとは」

封筒の中身は、傍に控えるサリエルの副官であるリュクロム大司教の手にある。

二人は教皇アレクサンドロス11世より送られた手紙を読み、表情にこそ表れなかったが、内心ではその内容に驚愕の心持ちであった。

「アベル卿が何故ここへ来るのか、分かりますか？」

手紙にはアベルがパンドラ大陸を秘密裏に訪れる為、こちらで上手く応対して欲しいとの旨だけが書かれていた。

サリエルは自分と違って頭の回る副官ならば、この伏せられた来訪理由が文面から察することが出来るかもしれないと考え、率直に問うた。

「いえ、心当たりはないですね。」

あのアベル卿がエリシオンより動くほどの理由となれば、それ相応のものがあるはず、ただの気まぐれということは在り得ません」

誰かさんと違って、という皮肉が聞こえてくるような気がした。

ダイダロスの占領は各地で小さな抵抗が散発的に起こっているものの、すでにダイダロスの隅々まで十字軍の兵士は歩を進めており、全体としては順調そのもの。

征服状況としては何も問題が無い、それ以外に何かあるとすれば、精々が第十一使徒ミサの失踪事件である。

だがこれも先日、本人が帰還したことで解決、おおその事情も明らかとなっている。

ともかく、今頃は第十二使徒マリアベルの文句を聞ききつつ、第三使徒ミカエルの聖母のような微笑に見守られ、魔動戦艦ガルガンチュアに揺られて海の上だろう。

ちなみに、二次遭難を懸念された第三使徒ミカエルだが、運よくダイダロスの街中でウロついているところを拿捕され、騒ぎには発展しなかった。

こうした最近のダイダロス事情を踏まえても、リュクロムには言葉の通り、第二使徒アベルが動くほどの大きな問題が起こっているとは考えられなかった。

「そう、ですね」

サリエルも同意の言葉を発する。

彼女は戦闘以外の事柄、現在のような占領政策などに関しては完全にお飾りのトップでしか無いが、それでも最低限の情報は耳に入ってくる為、リュクロムの言うとおり特別に大きな問題が発生していないという話は納得がゆく。

「事情が伏せられている以上、こちらが余計な詮索をするべきではないでしょう」

「はい、教皇聖下とアベル卿の行う事は、神のご意思に沿うものに違いありません。

ここに書かれてある通り、来訪の際は上手く取り計らってください」

承知致しました、と熟練の老執事のような優雅な所作でリュクロ

ムはサリエルの言葉を承った。

手紙には、第二使徒アベルの訪問は完全な秘密扱いなので、正体を知るものは十字軍総司令官であるサリエルとその副官であるリュクロム大司教のみに限定せよとの指示がある。

アベルの表向きの身分は、教皇がパンドラ大陸の情勢を調べるため直々に派遣させた使者というもの、勿論使徒と名乗ることは無い。目的が教皇に報告するための調査であるため、使者に対しては十字軍が知る限りの情報を提供するよう、お願いがされていた。

「リュクロム大司教、少しの間、席を外してもらえませんか？」

ふいにかげられたサリエルの頼みに、リュクロムは穏やかな顔を崩さぬまま、だが一拍の間をおいてから応えた。

「それでは、お先に失礼致します、衛兵にも少し早めの昼休みだと伝えておきましょう」

特に理由を追求する事無く、ただ「人払いしろ」というサリエルの要求だけを素直に了承する。

例えばそれが不可解な指示であっても、使徒のやることであれば止めることなどできない、ただの‘人間’に出来ることは、口答えせず、勘繰らず、ただ大人しく言う事に従うのみ。

「ありがとうございます、午後の政務には通常通り戻ります」
恭しく一礼してから、リュクロムは玉座の間を後にした。

これより一時間弱の時間は、玉座の間にサリエル以外の人間が立ち入ることは無く、内部の様子を窺える者も皆無、完全な密室状態となる。

ただ一人、静寂の支配する玉座の間で、サリエルは小さく呟いた。
「もう、出てきてもよいですよ」

だが、虚空に掻き消えるだけのはずだったその声は、確かにある人物へと届いたのだった。

「いやあ、何かごめんね、扱い使わせちゃったみたいで」

誰もいないはずの玉座の間だが、一体何時からそこに居たのか、太い円柱の影から一人の少女が姿を現す。

金髪のツインテールに、薄手のシャツとミニスカートだが、簡素な革の胸当てとブーツの装備が彼女を一般人ではない事を示している。

一言で表すなら、その姿は新人冒険者。

数多の修羅場を潜り抜けた、歴戦の冒険者としての風格などまるで感じられない、あどけない少女の姿であるが、その正体は、

「パンドラ大陸へようこそ、第八使徒アイ」

自由に世界を生きる奔放な使徒が現れたことに対して、特に驚いた様子も無く、サリエルは歓迎の意を示した。

「相変わらずカワイイねサリエル先輩は！ でもようこそって言うなら笑顔を見せて欲しかったかな！」

その嫌味ともとられかねないアイの言葉に、サリエルは口元を少しピクピクさせていた。

怒っているのではない、笑おうとしていたのだ。

「ごめんなさい、サリエル先輩はありのままでいて」

全く報われなかったサリエルの涙ぐましい努力を見て、アイは反省したようだった。

「それで、どのような用でしょうか？」

今度こそ一切変化のない無表情へ戻ったサリエルは、久しぶりに出会った後輩に対して面白おかしい世間話などできるはずもなく、単刀直入に聞いた。

「アタシがここ（パンドラ）にいること、ミサを通して知っていると
思ったから——」

事実であった。

失踪したミサが不機嫌な顔でダイダロス王城へ帰ってきた時、彼女が何処に行き、何をしてきたのか、事のあらましは流石に聞いている。

そして勿論、思わぬ出会いであった第八使徒アイの名前も出たのだった。

「——ちゃんと挨拶しようと思って」

「そうですか」

そんな事のために、現在の十字軍の中枢である厳重な警備が敷かれたダイダロス王城、その最深部である玉座の間に潜入してきたのだ。

これがただの人が成し遂げたのなら驚くべき事態であるが、共和国の者なら‘使徒がやった’と言えば必ず納得するだろう。

特に姿をくramsすることが得意なアイならば、誰にも見つからずここまで忍び込むことは十分に可能だろうとサリエルは思っており、実際に目の前に現れたのだから、それは紛れも無い事実であった。

「あ、でもお願いもあるの、聞いてくれる？」

胸の前で手を合わせてウインクを飛ばすアイは、さながら父親におねだりする娘のようである。

「なんですか？」

その可愛らしいジェスチャーに心打たれることの無かったサリエルは、どこまでも素っ気無く対応する。

「冒険者ギルドのダイダロス支部、早く作って！」

そのお願いが如何なる意味を含むのか、さほど頭の回転のよくないサリエルでもすぐに察することが出来た。

アイはシンクレア共和国、ひいてはアーク大陸全土において、どこであってもまず間違いなく存在するだろう冒険者に成りすまして活動してきた。

それはココでも例外ではない、パンドラ大陸にも大規模な冒険者ギルドのネットワークが存在していることは、ヴァージニアに引きこもっていた頃からすでに知れ渡っていた情報である。

当然、この首都ダイダロスにも冒険者ギルドは存在している、だが、今は首都も地方も、ダイダロス冒険者ギルドは機能していない、理由は勿論、十字軍が占領しているからである。

これまで魔族が利用してきたギルドと、これから共和国の人間が利用するギルドは、同じ冒険者ギルドという名であっても、全く別の組織である。

すでに共和国の領土となったダイダロスにおいては、共和国のルールに則った冒険者ギルドが設立されるのだ。

少なくともアイがダイダロス領内で冒険者として活動していくには、共和国の冒険者ギルドが営業を開始してくれなければならないのである。

「分かりました」

果たして、サリエルは二つ返事でアイの要求を承った。

「ヤッター！ サリエル先輩大好きー！！」

両腕を広げて飛び掛ってくるアイを、甘んじて受け止めるサリエル。

「冒険者ギルドの……活動は、すぐにでも必要と……されるもの、ですから……」

カワイーカワイーとアイに頬を摺り寄せられながら、サリエルは健気に説明を続けていた。

冒険者という職業は、ただダンジョンに潜って宝探しをするだけの存在では無い。

このモンスターに溢れる世界にあって、現地で生活する人々を守る重要な存在なのだ。

モンスターの駆除や討伐は当然、軍隊の重要な仕事の一つであるが、彼らだけで完璧に対処することは不可能である。

一般の人々にとってみれば、積極的に人里近くのモンスターを駆除し、より身近なところで守ってくれるのは冒険者だ。

それだけでは無い、薬草の採取や、個人的な護衛、物品の宅配など、モンスターと戦闘が発生する可能性がある、一般人では危険な仕事を彼らは請け負ってくれる。

さらに言うなら、その仕事上モンスターの素材を入手することになる冒険者は、その多くを冒険者ギルド、商業ギルド、あるいは直接的に鍛冶工房や道具屋へと供給する。

いわば、モンスター素材の生産者、としての役割も担っているのだ。

そうした人々の生活になくはならない存在であるが故に、冒険者はアーク大陸でもパンドラ大陸でも必ず存在し、かつ多くの人間が従事するメジャーな職業足りえている。

ならば当然、ダイダロスにも早急に冒険者の活動開始が望まれるというコトは、サリエルの説明を聞かずとも理解できるだろう。

しかしながら、アイはサリエルの白くぷにぷにと柔らかいほっぺたの感触を堪能するのに夢中だという理由で、彼女の説明を全く聞いていないのだが。

「しばらくは、ダイダロスに滞在するのですか？」

アイの過剰なスキンシップ攻撃にイヤな顔一つせず、サリエルは淡々と問いかける。

「うん、ココが落ち着くまで冒険者やろうかなって。」

本当はパンドラの冒険者になりたいんだけど、ソレじゃあ世直しというアタシの唯一のお仕事でなくなっちゃうからね」

共和国内で有名なアイ、すなわち第八使徒の行動は、‘善行’として広く人々から支持されている。

軍でも手に余る強力なモンスターを颯爽と現れては退治し、権力の中枢近くまで根回しされて普通の方法では摘発不可能な役人や大商人やらを華麗に誅しているのだ、批判される余地などない。

だが、そうした行動をして人々を救うのは共和国、ひいては十字教が信仰されている地域のみ。

ようするに、十字教の信者以外は、‘助けない’ということだ。

アイは教会からほとんど独立して動いているが、十字教を信仰する多くの人々を助ける、その行動そのものは使徒として正しい働きだといえるだろう。

「貴女がいてくれるならば、ダイダロスは安心です」

「んふふーありがとねえー！」

嬉しいこと言ってくれるサリエルに対して勢いのままマウストゥーマウスでキスしようとするが、流石に敬虔な十字教徒としての性的な行為はNGなのか、やんわりと手のひらでアイの唇は抑えられた。

「一つ、聞きたいことがあります」

「んー、なあに？」

未だにサリエルの薄桃色の唇に未練があるのか、タコのようにチユーチューと口をとがらせるアイ。

「アルザスという村に立て籠もり、我が十字軍へ多大な損害を出した、悪魔’は、本当にクロノと名乗ったのですか？」

ミサの独断専行という一件もあり、アルザス村の攻防戦についてはサリエルも知るところとなっている。

順調なダイダロス占領の中で、千を越える莫大な数の死傷者を出すというあきらかな苦戦を強いたこの戦いは、彼女だけでなく十字軍全体に知れ渡っている。

この戦いばかりは、魔族の些細な、抵抗活動’と呼ぶことの出来ない、明らかな、戦’であった。

そのアルザス攻防戦の当事者であるアイに、十字軍総司令官であるところのサリエルが興味をもって話を聞こうというのは納得できる。

だが、『クロノ』という一人の男に関してのみ問いかけるというのは、実に解せない。

「あるえー、もしかしてサリエル先輩、クロノくんと知り合いだったりするう？」

アイは意地悪いニヤニヤ顔でサリエルに質問返しをした。

さながら好きな男子の名前を聞いただす少女の歓談に見えるが、その実態は下手すれば異端審問にかけられかねない際どい内容である。

「……」

サリエルは黙秘で応える、嘘をつけないが故に。

アイは自分の質問にイエスと答えたも同然の反応を示したサリエルに満足した様子で、最初の質問に回答する。

「お互いに名乗りあったからね、ただの噂や勘違いってコトは無いよ。」

黒髪黒目の珍しい容姿だし、おまけに黒ローブまで着て全身黒尽くめだったからかえって目立つし。

ああ、あと超カワイイ妖精の女の子と超キレーな魔女っ娘が一緒にいたよ」

どう、心当たりあるのかな？ というアイの言葉に、やはり黙秘でしか返答することのできないサリエルだが、

（クロノ・マオに、間違いない）

はつきりと確信した。

アルザス村で十字軍兵士を大量に殺害し、‘悪魔’と呼ばれ恐れられる黒い姿の魔術士は、紛れも無く自分が二度に渡って見逃した男であると。

「サリエル先輩が特定の個人に対して興味を向けるなんて、珍しいよね、っていうか、初めてじゃない？」

その指摘は実に鋭いものだった。

第七使徒サリエルという少女がどれほど周囲に対して無関心であるか、ある程度関わりを持ったことのある者ならば、知らないはずが無い。

ただ敵を倒し、教会から与えられる任務のみを遂行する、ある意味で使徒としては理想的な存在だが、そこにサリエル個人という人間性を見出すのは困難だ。

そんな彼女が、知っている男の名前と、十字軍に敵対した男の名前が一致するかどうか、念を押して確かめようとしたのだ。

ただそれだけの事だが、『クロノ』という存在がサリエルにとって特別なものであると察するに足る。

「ねーねー、もしかしてクロノくんのコト気になっちゃってたりする？　っていうか昔の男だったとか？」

キヤーと耳年増な少女らしい勝手な妄想で一人盛り上がるアイに、「そういうコトは、ありません」

サリエルは冷ややかに答えた。

彼女は人形、人間らしい感情どころか、生物としての生存本能す

らその心に宿していないのだ。

異性を好きになる、という如何にも少女らしい感情とは無縁であり、理解することなど出来ない。

「ふーん、そっか」

アイは、如何なる気配を察したのか、それ以上の追求をやめる。

「まあいいや、あ、コレはアタシの新しいギルドカードだから、何か、あったらギルドに依頼してよ」

そう言っ、サリエルに一枚のカードを手渡す。

そこにはアイというどこにでもある名前に射手というクラス名など必要最低限のパーソナルデータ、そして下から数えたほうが早い冒険者のランクだけが記載されていた。

パンドラ大陸では金属製のプレートがギルドカードだが、アーク大陸ではこのようなカード、それも大量に印刷したものを会おう者に配る名刺タイプのをギルドカードと呼んでいる。

「クロノくんのコト、何か分かったら教えてあげる、何と言ってもサリエル先輩には借りがあるからね、こういうトコで返していかないと」

「いえ、私は――」

「それじゃあね！ お仕事頑張っ、サリエル先輩！！」

そうして一方的に別れの言葉を投げつけて、堂々と部屋の扉から退出してゆくアイをサリエルは黙って見送ることしか出来なかった。

「……クロノ・マオ」

サリエルの呟きは、今度こそ誰の耳にも届くことは無かった。

（彼を逃がすべきでは無かった）

その胸の内に渦巻く思いは、紛れも無く後悔。

サリエルは使徒であり十字軍総司令官、その役目は敵を殺すことであって、敵に情けをかけることではない。

一軍を率いる将として、自軍の損害は最低限に留めなければならぬ義務がある。

そして、使徒としての仕事のみが存在理由であるサリエルにとっ

て、己の‘個人的な行動’によって自軍に余計な損失を強いてしまったのは、許されざる事態だ。

故に後悔、あの時ああするべきでは無かった、人なら誰でも一度はある、そんな苦悩をサリエルは抱いた。

（私の所為で余計な被害を出した）

サリエルにとって重要なのは、誰が死んだかではなく、誰かが死んでしまった、という事だ。

人が死んで悲しいのではなく、あくまで兵を無駄死にさせる事態を招いた己が許せない、許すわけにはいかないのだ。

逆に言えば、それ以上のものは何も無い。

サリエルにとって人の生死では無く、仕事の成否こそが問題であるのだ。

（ならば、私が始末をつけるのが望ましい）

そうして、サリエルは我等が十字軍を憎んでいるだろうクロノ・マオという男について、一つの決心をする。

（もし‘次の戦’で会ったなら――）

いや、それはifでは無い、あの男は必ずや戦場に現れるだろうと、半ば確信を持つ。

近い将来、訪れるだろうその時を思い、

「――私がこの手で殺す」

自分に言い聞かせるように、サリエルは決意の言葉を吐いた。

だが、彼女の胸中を支配するのは、己に仕事の‘ミス’を招いたクロノに対する怒りなどでは無い。

ただ、実験体達の心の救い、希望と思える男を、殺さなければならぬ事への苦悩。

そう、サリエルは第七使徒となってから、初めて‘憂鬱’な気分を覚えたのだった。

第164話 サリエルの憂鬱（後書き）

物凄く久しぶりにサリエルの出番でした。

，
というワケで第11章スタートです。果たして、サリエルの望む
次の戦，とは一体何時になることやら……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2627t/>

黒の魔王

2011年12月1日16時57分発行